

ジャン・パウル著『巨人』翻訳

パウル, ジャン

恒吉, 法海

九州大学大学院言語文化研究院 : 名誉教授 : ドイツ文学

<https://hdl.handle.net/2324/2195869>

出版情報 : ジャン・パウル 研究書・翻訳書, pp.1-565, 2019-01-28

バージョン :

権利関係 :

『巨人』

ジャン・パウル著 Titan (1800-03)

恒吉法海訳

恒吉法海・九州大学リポジトリ翻訳研究 13

2019年1月31日

(第一卷)

王座の
四人の美しく高貴な
姉妹の方々に^{*1}

*1 (訳注) この長編小説はプロイセンの王妃ルーゼとその三人の姉妹に捧げられた。特にシャルロッテ・フォン・ヒルトブルクハウゼン[長女]はジャン・パウルに好意的であった。この献呈の詩はすでに一七九七年に素案ができていた。

真実の夢

「アプロディテ、[以下三美神の]アグライア、エウプロシユネ、タレイアの四女神はかつて現世の薄明かりの方を見下ろして、永遠に快活な、しかい冷たいオリンポスに疲れて、我々の大地の雲の下界に憧れを抱いた。この下界では魂はもっと悩むが故にもっと愛し、魂はもっと鬱々としているけれども、もっと温かいのである。彼女達は、ポリヒュムニア[賛歌のミューズ]が秘かに、深く不安げな大地をさまよって、我々を勇気づけ昂揚させるときの神聖な音色が立ちのぼってくるのを耳にした。彼女達は自らの王座が寄る辺ない者達の溜め息から遠く隔たっていることを遺憾に思った。

そこで彼女達は、大地のヴェールをまとい、我々の姿に成り代わる決心をした。彼女達はオリンポスから下って来た。アモールや天使達や小さな精霊達が戯れながら彼女達の後を追ひ、五月の我々の小夜啼鳥が飛んで出迎えた。

— しかし彼女達が大地の最初の花々に触れ、ただ輝きとなって、何の影も投げかけなかったとき、神々と人間達の真面目な女王、つまり運命が永遠の王笏を持ち上げて、こう述べた。不死の者は大地で死すべき定めとなり、どの精神も一人の人間となるべし、と。

そこで彼女達は人間となり、姉妹となって、互いにルイーゼ、シャルロツテ、テレーゼ、フリーデリーケと名乗った。精霊や天使達は彼女達の子供と変わって、彼女達の母親としての腕の中に飛び込んだ。新たな愛に満ちて、母親としての、そして姉妹としての心は大きな抱擁の中で鼓動した。そして花と咲く春の白い旗がはためき、より人間的な王座を前にし、— 人生の[グラス]ハルモニカたる愛によって浄福に軟化して、お互いと、幸せな子供達とを目の当たりにし、愛と至福の余り黙っていたとき、秘かにポリヒュムニアが漂って通り過ぎ、彼女達に心が愛と歓喜とを告げ、与える折の音色を授けたとき^{*1}、...

— そのとき夢が終わって、実現されていた。夢は、いつもそうであるように、現実と覚醒に従って形成されていた。それ故にこの夢は四人の美しく高貴な姉妹の方々に捧げられることになって欲しいし、『巨人』の中でこの夢に類似しているすべても、捧げられることになって欲しいものである。

ジャン・パウル・Fr. リヒター

*1 (訳注) 特にシャルロツテ・フォン・ヒルトブルグハウゼンは歌声が美しかった。

第一ヨベル期

イーゾラ・ベッラへの渡航 — 『巨人』の最初の歓喜の日 — パスクイーノの偶像崇拜者 — 帝国不可侵性の称賛 — 青春の泡立ち — 甘美な流血 — 父親の認知 — グロテスクな遺書 — 詩や芸術に対するドイツの偏愛 — 死の神父 — 霊の行為[幕] — 血まみれの夢 — 空想のシーソー

第一周

ある春の宵、若いスペインのフォン・セサラ伯爵がショッペとディーアンを同伴して、セストへやって来た。翌朝マッジョーレ湖のボロメオ諸島の一つイーゾラ・ベッラ[美島]へ渡航するためであった。気位高く花と咲くこの若者は、旅と翌朝のことを考えて燃え上がっていた。そのときには、春のこの飾られた王座たる島を見、その島で二十年前から約束されていた一人の人物に会うことになっていた。この二重の熱気のため、絵画的この英雄は怒るようなミューズの神[ベルヴェデーレのアポロンと思われる]の形姿へと昂揚していた。イタリア・フランス人の目には、彼の美貌は、彼のやって来た狭小の北方の民の目に対してよりも、より大きな勝利を収めていた。ミラノでは多くの者がこう望んだのであった。彼は大理石製で、古代の石化した神々と共に、ファルネーゼ宮殿か、クレメンティーノ美術館か、ヴィラ・アルバーニにあればいいのに[ローマの三大古代収集室]、と。いやノヴァーラの司教は脇に刀を携えて¹、数時間前に、最後尾を騎行するショッペに、誰の一行か尋ねなかったであろうか。そしてショッペは唇の周りの皺の円周を戯けて四方形に[不可能事]にしながらか冗漫に答えなかっただろうか(この僧侶にヒントを与えるために)、「私のテレマコスです。私が師傅というところ。 — 私は彼を貨幣にする縁取り機、打印機で — 彼を磨く研磨機、扁平機 — 躰け役です」。

セサラの若々しく温かい形姿は、単に未来にのみ没入した目と、男らしく決然たる口許の真面目さと、若く新鮮の諸力の反抗的な決意を通じて更に高貴化されていた。彼はまだ月光の中の火鏡に見えた、あるいは余りに多彩な色彩を有する濃い宝石で、他の宝石のように、世間がまず凹面磨きで明るく改善することになる宝石のように見えた。

間近に来て島は、惑星が別の惑星をそうするように、ますます激しく彼を引きつけていた。彼の内面の動揺は、外部の静かさで募って行った。その上、生来のギリシア人で、芸術家であるディーアンが、彼はイーゾラ・ベッラ[島]、イーゾラ・マードレ[島]をよく周航し、描いて来たのであったが、炎のような絵画の自然のこの華麗な円錐形をより一層間近に彼の魂の目前に置いたのであった。ショッペはこの若者が明日初めて会うことになっている重要な人間のことをよく言及した。下の路地で深い眠りに陥った老人が運ばれて来て、沈む夕陽によって炎と生命とをがっしりした、彫りの深いその顔に投げかけられて、イタリアの風習で開けられた棺の中に収められている — 死体に他ならないその老人を

*1(訳注)、J.G.Keybler の『ドイツ、ボヘミア、ハンガリー、スイス、イタリア、ロートリンゲン[ロレーヌ]の最新の旅』(1740)参照。「ノヴァーラの司教はマッジョーレ湖に至る広大な土地の司法権を有していたので、騎行するとき刀を携えている」(第一巻、347頁)と記されているようである。

見たとき、彼は驚いて、二人の友に素早く尋ねた。「私の父もこのような顔だろうか」。

つまりかくも激しく動揺して、この若者をこの島に駆り立てていたものは次のような事情であった。イーゾラ・ベッラ[島]で彼は最初の現世の三年間を、後にスペインに渡った彼の[見かけ上の]妹と一緒に、そして後に亡くなった彼の母と一緒に、自然の高貴な花々の中に甘美に座して浪費し、夢見るように過ごしたのであった。 — この島は人生の朝の微睡みにとって、彼の少年時代にとって、ラファエロの一杯に絵を描かれた寝室に他ならなかった[ラファエロは絵のある部屋で育てられた]。しかし彼がそのことに関し、頭と心の中に有していたのは、その名を呼ばれたとき、心の中での痛々しく甘美な深い沸騰であり、頭の中では、ボロメオ家の家紋として島の最上段のテラスに立っている一角獣であった。

母の死後、父は彼をイタリアの花の大地から、 — 若干の土は主根に残ったままであったが、 — ドイツの帝国森林、つまりブルーメンビュールへ移した。 — それはドイツ人にはほとんど知られていないホーエンフリース侯国にあるもので、 — ここで父は彼を素朴な貴人の家で長いこと教育を受けさせた。あるいはもっと明確に、もっとアレゴリー的に言うと、父はここで教育学的園丁に長いこと如雨露や接ぎ木ナイフ、園芸鋏を彼の周りで使用させて、サゴ髓や棘の覆いで一杯の高く細い棕櫚の木が如雨露や鋏では届かなくなるまで任せた。

今や彼は島からの帰還の後、田舎の苗床から都市の樹皮末鉢、温室鉢に移され、宮庭庭園の足場に落ち着くことになっていた。一言で言うと、ペスティッツで、ホーエンフリースの大学町、首都のことで、これまではそれを見ることさえ父は彼に厳しく禁じていた。

そして明日彼はこの父親に — 初めて会うのである。 — 彼は憧れて燃え上がらずにはおれなかった。これまでの全生涯はこの共同の上陸への準備であったからで、彼の養父母や教師は、彼の人生の書の著者を立派に表紙頁に銅版画で描く銅版彫刻師の仲間であった。彼の父、ガスパール・ドゥ・セサラは、金羊毛皮の騎士で（スペインの騎士か、オーストリアの騎士かは私自身もっと正確に知りたいと願っている[1713年スペイン領ネーデルランドがオーストリアに帰属して以来、教団の分裂がある。第四巻始めで、オーストリアの騎士と判明]）、運命によって三方断裁風に輝くように磨かれた精神で、若い時には荒々しい諸力を有していて、その諸力の余地としては単に戦場や王国のみが広さとしてふさわしいもので、上品な生活の中では港の怪物蛸同様ほとんど動けないのであった。 — 彼はその諸力をすべての身分や悲劇、喜劇の客演を通じて、またすべての学問の営みや永遠の旅を通じて静めた。 — 彼は偉い人々や卑小な人々、そうした人々の宮廷と親しみ、しばしば編み込まれたが、しかしいつも自らの波を有する一つの奔流として世界の海を進んで行った。 —

そして今や、人生を巡る、つまり人生の喜びや諸力の体系を巡る陸の旅、海の旅をなした後、（殊に過去の猿真似と言える現在がいつも彼の後を追いかけてくるので）、自分の研究、つまり地理学的旅を続けているのであるが、しかしこれはいつも学問的目的のためで、実際まさにヨーロッパの戦場を旅しているのである。ちなみに彼は全く陰気であるということはなく、また喜ばしげであることは更に少なく、落ち着いていた。また自分同様に人間を憎んだり、愛したり、非難したり、称賛したりはほとんどしなかった。誰であれその流儀で評価して、鳩は鳩として、虎は虎として評価した。しばしば復讐と見えるものは、単に厳しく戦闘的な通り抜けで、このようにして決して逃げたり、恐れたりすることなく、単に前進して立っておれる一人の男が、雲雀の卵や穂先を踏み付けるのである。

私がここでウィストン^{*1}の彗星[衝突]図から、人類のためにこの彗星について切り取って来る片隅は十分に広いものと考えている。私は更に述べる前に次の点の了承を得たい。つまり私はドン・ガスパールのことを時に、金羊毛皮を付随させずに、騎士と名付けてもよろしいという点と、 — 第二に、読者の忘れっぽさに遠慮することなく、彼の息子のセサラに（この名前の許では老人は決して登場しないことになるが）アルバーノと呼ばれる洗礼名を展開するという点である。 —

今やドン・ガスパールはイタリアからスペインへ行くことになったので、ショップペを通じて我らのアルバーノあるいはセサラをブルーメンビュールからこちらへ案内させていた。何故こんなに遅くなってからなのか人々は分からない。若々しい枝の春の盛りを見たかったのであろうか。 — 若者に宮廷生活の百年続くカレンダーの百姓風規則を訓示したかったのであろうか。 — 自分達の息子が大人になって武器を担えるようになったときにのみ眼前に来させる古代ガリア人や現今の喜望峰住民の真似をしたかったのであろうか。そんなことなど望んでいなかったのであろうか。 — ただ私に分かることは、私が作品の序文で、かなりの度合いの偏差磁針を有するこの風変わりな男について、ヴィルケ風^{*2}磁針俯角図面を描き、刻印する仕事を請け負ったら、お人好しの阿呆と言えるであろうということである。 — 彼がその息子の父親なのであって、私が父親ではないのであり、何故息子が成人してから会おうとしたのか、彼の説明を聞くしかないのである。

二十三時になって（日没前の時間[イタリアでは二十四時を日没とした、古見訳]）、アルバーノが退屈な音の数を合計しようと思った時、彼はとても興奮していて、長い音階を登り切ることはできなかった。彼は湖の岸辺へと行かざるを得なかった。そこでは塔状の島々が海の神々のように立っていて、支配していた[セストからは島々は見えない]。ここで高貴なこの若者は、夕陽を一杯に受けた生氣ある顔で立っていて、心は高貴な動悸がして、姿の見えない父親に憧れた。この父親はこれまで彼を、地平線の霧の奥の太陽の力のように人生の日中を温かく明るく維持してきたのであった。この憧れは子供らしい愛ではなかった

— この愛は養父母に向けられていた。子供らしい愛は、長いこと世話になっていた心に対してのみ、つまりさながら最初の心嚢葉と共に冷たい夜や暑い日中に対して我々を守ってくれた心に対してのみ生ずるからである。 — 彼の愛はより高貴で、より稀なものであった。彼の魂には父親の像に巨大な影が投げかけられていて、その影はガスパールの冷淡さで何も失われなかった。ディーアンはその冷淡さをユーノ・ルドヴィージの崇高な顔の平静さと比較していた。温かい息子の方は、心の中でしばしば余りに大きな他人の温かさの傍らに現れる素早い冷たさと比較していた。火鏡がまさに比較的暑い日々により生氣なく輝くようなものである。いや彼は、それどころか、ひよっとしたら自分は人生の氷原で痛ましく凍り付いた父の心を自分の愛で溶かすことさえ期待していた。青年は、忠実な温かい心、少なくとも彼の心には逆らえないと解していた。

*1(訳注) イギリスの神学者、数学者の William Whiston(1667-1752)は1696年『地球の新しい理論』を発表した。ノアの洪水を彗星の衝突とした。

*2(訳注) J.Karl Wilcke(1757-96)は、1768年『磁針の俯角図の試み』を発表した。

この英雄は、田舎というカルトウジオ修道院で育ち、世間でよりも先の世[世界前]でむしろ生長していて、すべてに対しノアの洪水以前の巨大な尺度を当てていた。騎士の姿が見えないためにその偉大さが一部形成されていたし、このモーゼの覆いが騎士を隠してその光輝を倍加していた[出エジプト記、34,29-35]。 — そもそも我らの若者には、他の者達が畏怖するような法外な人間に対する奇妙な愛着があった。彼は偉大な人間に対する称賛を、自分に対する称賛であるかのように、好んで読んだ。民衆が尋常ならざる精神をまさにその故に劣等な精神と見なすとき、 — すべての稀な化石を悪魔の一部と見なすようなもので、 — 逆に彼の中ではいつも驚嘆の傍らに愛が見られるのであって、彼の胸はいつも同時に広く温かくなるのであった。勿論他人を偉大と見なすどの若者も、どの偉大な人間も、まさにその理由で自らを余りに偉大と見なすものである。 — しかしどの高貴な心の中にも、より高貴な心に対する、どの美しい心の中にも、より美しい心に対する、永遠の渇きが燃えているものである。その心は自らの理想を自分の外部で肉体的現前となって、その理想をより容易に目指すべく、神々しい肉体となって、あるいは肉体をまとして、出現しているのを見たいと思うものである。高貴な人間は単に高貴な人間の許でのみ成熟するからである、ダイヤモンドはただダイヤモンドの許でのみ輝くようにされるようなものである。 — これに対して、文学者や、小都市民、新聞配達人、あるいは新聞記者が偉大な頭脳を目にしたいとなると、そして偉大な頭脳に対して、三頭を有する不具者や — 同じく三つの帽子を被った[三重冠の]教皇を — あるいは剥製の鮫を — あるいは話す機械、バター製造機を目指しているとなると、そうするのは、偉大な男とか教皇、鮫、三頭人間、バター模型という温かい理想、自分の内的人間を活気付ける理想に対し衝動を有するからではなく、早朝にこう考えるからである。「そんな奴を見たらびっくりすることだろうな、夕方一杯ビールを飲むとき報告してやろう」と。 —

アルバーノは岸辺で輝く水面に動揺を高じさせながら、過去の少年時代の聖なる居場所、逝った母親、離れ離れになった妹の方を見やった。 — 遠くの小舟の方からは喜びの歌が漂ってきて、彼を陶然とさせた。 — 波が打ち寄せるたび、泡立って砕けると、より高い波が彼の胸の中で湧き上がった。 — 聖ボロメウスの巨大な像¹は、町中を見渡していて、崇高な者（彼の父親）を体現していて、この父が彼の心の中で起き上がって、花と咲くピラミッド、つまり島は父親の王座と化した。 — 火花を発する山並、氷山の連なりが彼の精神の周りにしっかり巻き付いて、彼を高い本性の許へ、高い考えの許へ引き上げた。 — —

最初の旅は、殊に自然が白い輝きと、オレンジの花々、カスターニエン[栗の木]の影だけを長い通りに投げかけるとき、若者に、成人男性の場合にはしばしば奪ってしまうものを贈るものである。 — つまり夢見がちな心、人生の氷の割れ目を越える飛翔、すべての人間の胸に対する大きく広げられた腕を贈るものである。

彼は戻って行き、友人達に勝ち誇る目をして、今夕のうちにも舟を出すように頼んだ。

*1 二十五エレの台座上のこの三十五エレの高さの像は、その像の頭部には十二人分の空間があるが、アローナ近郊に立っていて、まさに十もの段々に造られた庭園やテラスを有する向こう側のイーゾラ・ベッラ[ベッラ島]と同じ高さにある。カイスラーの『旅』等、第一巻。

ドン・ガスパールは明日ようやく島に来るのではあったけれども。彼はしばしば一週間後にしようと思っていたことを、翌日には計画し、結局一即座に実行した。ディーアンはこの性急な北風の神の頭を愛情一杯に叩いて、言った。「せわしい人だ。頭にも神々の使者の翼を有するが、下の方にも有するな」（足先を指しながら）「ちょっと冷静になり給え。真夜中に乗り込むことにしよう。曙光が天に輝くとき、上陸することになるう」。

一 ディーアンは立派に成育した寵児に対し、芸術家的注目を有していたばかりでなく、優しい注目も有していた。彼は侯国建築士として働いていたブルーメンビュールでしばしば造型的少年の友、青年の友であったからで、それに今この島の後、しばらく彼の両腕からローマの方へ去るからであった。この侯国建築士は、老人の場合なら叱責する同じ過剰な流露を青年の場合そうとは見なさなかつた。エジプトで氾濫はオランダとは違って氾濫とは見なされないようなもので、それに彼は個人ごと、年齢ごと、民族ごとに別の平均律を仮定し、聖なる人間の性情においてはどの弦をも切断せずに、ただ合わせるようにしていたので、かくて恐らくセサラは快活な辛抱強い教師の許に、その両法律板には「歓喜と節度」とのみ記されていて、まことに親密に寄り添っていたに違いなく、一 その法律板そのものに対してよりも親密に寄り添っていたに違いなかつた

現在と間近な未来と父親のイメージがこの伯爵の胸をはなはだ偉大さと不滅性を帯びて満たしていたので、誰かがその両者を獲得せずに自らを埋葬させることがあり得るとは理解できず、彼は店の亭主に対し、亭主が何かを運んで来るたびに、一殊に亭主はいつも歌っていて、ナポリ人やロシア人のように短調で歌っていたので、一気の毒に思った。この男は決して何ほどかの者にならなかつたからであり、ましてや不滅な者にならなかつたからである。この不滅な者の点は間違いである。というのはここで彼はその存続を得るからである。私は彼の名前をピッポと名付け、生气付けることにする（これはフィリップの短縮形である）。彼らがようやく出て、支払い、ピッポがこう述べてクレムニッツ金貨に接吻したとき、「右腕に子供を抱く聖なる乙女マリアは称えられてあれ」と、そのときアルバーノは一晩中イエスのような子供をあやして世話していた敬虔な娘にこの父親がそっくりなのを喜んだ。勿論ショッペはこう注解した。左腕では乙女マリアは子供をもっと軽く抱くことになろう、と¹。しかしこの善良な若者の錯誤は真理同様に一つの功績である。

満月の光線を浴びながら、彼らは小舟に乗り込み、反照する波の上を滑って行った。ショッペは若干のワインを持ち込んだ。「島では何も得られないからというよりは」と彼は言った、「舟が浸水したとき、瓶を空けさえすればいいからだ²。すると舟はまた浮くからというわけ」。

セサラは黙して、ますます深く、岸边と夜の薄明るくなっていく美しさに没入して行った。小夜啼鳥が春の凱旋門で熱くさえずった。彼の心は胸の中で鐘の下のメロンのように肥大した。彼は膨らんで行く果実の上でますます胸を高めて行った。突然、彼はそうしていると煌びやかな朝の百合の木と島の王冠とがイタリア製の絹の花のように、花糸と花糸

*1 古いクレムニッツ金貨は右腕に幼子イエスを有する。新しいより軽い金貨は左腕に有する。

*2 フランクリンは舟を上を浮かせるために、飲み干した容器を保存し、栓をするよう薦めた。

とが、花卉と花卉とが重なって行くのを目にしているように思われた。 — すると自然の宝角からの唯一の勢いのいい流れに対する昔からの喉の渇きに襲われた。彼は目を閉じて、ただ島の最上段のテラスで朝日を前にしたときのみ目を開けることにした。ショッペは、彼は眠っていると考えた。しかしギリシア人のディーアンはこの人為的盲目の陶酔を察知して微笑んだ。そして自ら大きな満ち足りないこの目に対して、幅広の黒いタフタの帯を結んでやった。これは女性的包帯、レースの仮面として奇妙に愛らしく、花と咲く、しかし男性的な顔と対照をなしていた。

さて二人は彼に対して口頭で、自分達に移って行く際の素晴らしい岸辺の飾りについて夜景画を描いてからかった。「何と樹ぐらい高く」（とディーアンはショッペに言った）「あそこのリザンツァ城とその山は聳えていることでしょう。ヘルクレスに似て、葡萄の群葉の十二重の帯と共に高みにあります」。 — 「伯爵は」（とショッペはディーアンに対してもっと小声で言った）「目の帯で大部損をしています。建築士殿、詩的に言って、アローナの町の微光が見えるではありませんか。町は何と美しく月のスペイン白墨を置いていることでしょう。広げられた月光の髪粉用化粧着の中で明日のために用意して、化粧しているように見えます。 — しかしこれは大したことなく、向こうには聖ポロメウスがもっと立派に見えますぞ。これは月を新しくできたばかりのナイトキャップとして着用しています。その巨人はドイツの国体の『ミクロメガス』[ヴォルテールの同名の小説、1752による、宇宙人]のように向こうに、同様に高く、同様に硬直して、同様に強張って立っていないかな」。 —

幸せなアルバーノは黙っていて、返事の代わりに愛の握手をした。 — 彼はただ現在だけを夢見ている、自分は待つことができ、見ないで済ませることができると示した。カーテンや夜半過ぎの夜のせいで間近なクリスマスの贈り物に気付かない子供の心のように彼は遊覧船の上で堅く帯をしたまま間近な天界へ向かって行った。ディーアンは、月光と補助のオーロラの二重の明かりで可能な限り、目を覆った夢想家のスケッチを習作ノートに収めた。 — 私、私の寵児が、どのように視神経を縛ったまま、同時に内的世界に向けられた夢の目と外的世界にそばだてられた注意との耳とを制御しているか、そのスケッチで確かめてみたいと願っているところである。それが描かれていると、どんなに素敵なことであろうか、 — それが体験されていると、どんなにもっと素敵なことであろうか。

夜の外套はますます薄くなり、ますます涼しくなった。 — 朝の風が生き生きと胸に吹き寄せた。 — 雲雀が小夜啼鳥の間に — そして歌っている船人達の中に混じってきた。 — そして彼はより明るくなった帯の背後で、岸辺の外の町で人々の群れが活気付き、山々の滝で交互に朝焼けが生じたり、霧が生じたりするのを見ていた友人達の早朝の話に聞き入っていた。 — とうとう切れ切れの朝焼けが遠くのカスターニエン[栗の木]の頂きにヘスペリスたちの園の林檎の花綵装飾としてかかってきた。今や彼らはイーゾラ・ベッラ[島]へ降り立った。

目隠しをされた夢想家は、自分と一緒に庭園の十のテラスを登って行くとき、傍らで歓喜の戦慄の吸入する溜め息と驚きのすべての速やかな祈りを耳にした。しかし彼はずっと目隠しを外さず、盲目のままテラスからテラスへと登り、オレンジの香りに包まれ、より高い、より自由な新鮮な風を受けて、月桂樹の小枝を周りに感じていた。 — そして彼

らがようやく一番上のテラスに登り切ったとき、その下では湖が六十エレの下で緑の波を寄せていたが、こうジョッペが言った。「今やその時だ」。 — しかしセサラは言った。「いや、まず太陽が昇ったとき」。そして朝の風が太陽を照らしながら小暗い枝の間を通じて上に投げ上げて、太陽が自由に梢の上に燃え出て、 — そしてディーアンが力強く目隠しを引き外して、こう言った。「周りを御覧」。 — 「神よ」と彼は、新しい天のすべてのドアが開け放たれて、自然のオリンポス山が自分の周りの千もの安んじている神々と共に立っているのを見て、浄福に驚いて叫んだ。何という世界か。アルプスの山々が前世の同胞の巨人達のように遠くの過去に結び付いたまま寄り添っていて、太陽に対し高く氷山の輝かしい楯と向かい合わせていた。 — 巨人達は森からなる青い帯を巻いていて、 — 麓には丘や葡萄畑が横たわっており、 — 葡萄のドームの間では朝の風が小滝に対し、水の琥珀織の綬に対するが如く戯れていた。 — それらの綬には湖の満杯の水面が山々から垂れ下がっていて、それらの綬は水面に舞って、カスターニエン[栗の木]の小森からなる葉形装飾が水面の枠を形成していた。...アルバーノはゆっくりと一回転して、高い所、低い所、太陽、そして花々を見つめた。すべての高みでは強力な自然の非常狼煙が燃え上がっていて、すべての深みではその反照が見られた。 — 創造的な一つの地震が心臓のように大地の下で動悸して、山々や海を競り上げた。 — それから彼が無限の母親の傍らに、波の下や雲の下を飛んで行く小さなうごめく子供達を見たとき、 — そして朝の風が遠くの舟をアルプスの間に追いやったとき、 — そしてイーゾラ・マードレ[マードレ島]が七つの庭園に向かい合って聳え、彼をその頂きからその島の頂へと水平に漂う飛行へと誘ったとき、 — そして雉がマードレ島から波間に身を投じたとき、彼は海燕のように翼を広げて、花と咲く高巣に立っていて、彼の両腕を朝の風が翼のように持ち上げた。そして彼は、テラスを越えて、雉のように後を追って落下し、自然の奔流の中で心臓を冷やしたいと憧れた[KeyBler によればマードレ島では湖が広すぎて雉が落下する可能性がある]と記されている]。

彼は見回すことなく、羞じらって、友人達の手を取って、何も話す必要がないようにするために、握りしめた。気位の高い宇宙が彼の偉大な胸を痛々しく広げ、それから浄福に満たした。そして今や彼が目を驚のように太陽へ広く確かに開けて、盲いて、光輝のために大地が覆われて、彼が孤独を感じ、地球が煙りと化し、太陽が単に隅で煌めく一つの穏やかな世界に化すると、彼の一杯となった精神全体は、雷雲のように四散し、燃え上がり、泣いた。そして純粋な青ざめた太陽から彼の母親が彼を見つめ、そして大地の炎と煙の中で、彼の父と彼の生涯が覆われて立っていた。 —

静かに彼はテラスを降りて行って、しばしば濡れた目の上を払った。すべての頂きや階段の上で跳ねる炎のような影を拭い去るためであった。 —

高貴な自然よ。我々が汝を見、愛するとき、我々は我々の人間をより一層温かく愛する、そして我々が人間達を悼み、あるいは忘れなければならないとき、汝は我々の許に留まって、濡れた目の前に緑なす夕焼けの山並のように安らっている。いや、理想の朝の露が灰色の冷たい田舎の雨へと色褪せてしまった魂の前で、 — それにこの人生の地下の通路上で人間達がただわずかにカタコンベの棒の上の干涸らびて曲がったミイラの如く出迎えることになる心の前で、 — それに貧しく見棄てられてしまって、どの人間ももはや喜ばしてくれそうにない目の前で、 — それにその不信仰と孤独な人間の欠けた胸のせい

で、永遠に不動の苦痛へと鎖でつなぎ止められてしまっている気位の高い神々の息子の前で、―― こうしたすべての者達の前で、汝は、爽やかな自然よ、汝の花々や山並、滝と共に、忠実に、慰めながら立ち止まっていて、そしてこの血を流す神々の息子は黙って冷たく苦痛の滴を両目から振り払う。そして両目を明るく遠く汝の火山や汝の春や汝の諸太陽[恒星]に向けるのである。――

第二周

私の愛する人間に対しては、一人の母親と――一人の妹――イーゾラ・ベッラ[島]での三年間の共同生活――そしてそれから二十年間経ってからの朝の一時間ほど願いとしてより美しいものを私は知らないことだろう。この時に彼はエデンの島に降り立って、この島のすべてを一度に、目と思い出と共に、享受しながら受け入れ、開いた魂の中に押し込んだ。――汝、幸せすぎるアルバーノよ、少年時代の薔薇の平土間にいて、――イタリアの深い青空の下、――花一杯の豊饒なレモンの林の中、――汝を母親の如く愛撫し、支える美しい自然の懐にいて、父親の如く遠方に立っている崇高な自然を目にして、――そして今日自分の父親を待っている心と共にいるのではないか。――

三人は今や漂う楽園をゆっくりとよろけながらさまよい歩いた。他の二人はしばしば経験済みのことであつたが、それでもアルバーノの酩酊に対する共感のせいで彼らの銀色の時代はまた一つの黄金の時代となつた。他人の歓喜を目にすると我々の歓喜の昔の印象が蘇ってくる。砕ける波や滝の下に住んでいる人々がより声高に話すように、昂揚した人生の海の崇高なざわめきは彼らすべてに、ショッペに対してさえも、より強力な言葉を与えた。ただショッペははなはだ荘重な言葉遣いはできず、少なくとも他の人間のように身振りはできなかった。

立派なイタリアに別れの接吻を投げざるを得なかつたショッペはなお歓喜の杯の周りに残っている最後の滴を保とうと思つていた。これはイタリア・ワインのように甘いもので、ドイツの酸[っぱい]素を欠いたドイツの燃素で一杯なのであつた。酸素で彼が解しているのは別離と感動であつた。「運命が」と彼は言つた、「何らかの退却命令射撃をするならば、誓つて、私は悠然と馬の向きを変え、口笛吹きながら退却しよう。巧みな手配師がその哀悼馬に騎乗しながら、上手い具合に慶祝馬という添え馬を準備できるよう欲しないならば、悪魔がその馬の中に（あるいはその上に）座っているに違いないのだ。私は私のアポロンの馬も駄馬も大いに別様に調教している」。

とりわけ彼らは今や行軍しながらこのタヒチ島を徴収した。この島のどの地区も、ペルシャの地区が皇帝に対してするように、別な楽しみを提供しなければならなかつた。――

「下のテラスは」（とショッペは言つた）「我々長子相続者に果物や小麦の十分の一税を、レモンやオレンジの香りで、差し出さなければなりません。――最上階のテラスは帝国税を眺望で払います。――その下のグロッタは、思うに、ユダヤ人保護税を波のざわめきで払い、――向こうの糸杉の森は皇妃嫁入支度税を涼しさで払います。――舟はそのライン川関税、ネッカー川関税を脱税することなく、姿を遠くの方に見せることで払います」。――

ショッペがこのような冗談の判じ絵語りでセサラの頭と心の動揺を静めようと思つていた

ことに気付くのは難しいことではない。というのは相変わらず、朝の歡喜の輝きが、この若者は比較的些細な事柄について屈託なく語っていたけれども、その顔から消えていなかったからである。彼の中では感動がことごとく長く震えていた、一 朝の感動は一日中震えていて、一 それは羊の首の鐘よりも警鐘の方がより長く余韻を伴うのと同じであった。それでもこのような余韻が彼の注意力や仕事や会話を妨げることはなかった。

正午に騎士はやって来ようと思っていた。それまで彼らはより静かに享受しながら、島の蜜の多い植物誌を通じて蜂の羽や吻と共にぶんぶんと戯れていた。彼らは子供達や芸術家や南の民のかの快活なとらわれのなさを有していた。これらの人々は単に各瞬間の蜜の貯蔵をつまみ食いするものである。それ故に彼らは寄せてくる波ごとに、レモンの木の樹牆ごとに、花の木の下の彫像ごとに、進んで行く反照ごとに、去って行く舟ごとに、温かい天の下、広く一杯の萼を広げる一つの花よりも多くを見いだしたのであり、我々のように冷たい我々の天の下、五月の霜のせいで花々が閉じてしまう目に遭う蜂とは異なるのである。一 いや島の人々は正しい。我々の最大のそして最長の錯誤というものは、我々が人生を、つまりその享受を、物質主義者が自我をそうするように、その関連性に求める点にある。あたかも、諸構成部分の全体、あるいは関係が、その個々の部分では有し得ないような何ものかを我々に与えることができるかのような按配である。一体我々の存在の天は、我々の上の青空のように、近くの微小な中では単に透明な無にすぎず、遠く離れて、大きくなって初めて青いエーテルとなるもので構成されているものだろうか。世紀は汝の歡喜の花々の種を単に各瞬間ごとの多孔性の播種機からのみ撒くのであろう。あるいはむしろ至福の永遠そのものが瞬間より他の取っ手は有しないのであろう。人生は七十年から成り立っているのではなく、七十年が吹き続ける一つの人生から成り立っているのである。人々はいつでも十分に生きてきたのであり、その気になったとき、死ねばいいのである。

第三周

ようやく楽しい三人が月桂樹の森の食堂に入って、ショッペがセストで糧秣船に積み込んだ食料と飲み物の捧げ物を前にし、腰を下ろそうとしたとき、小枝を分けて、上品な、繊細に単色の服を着た見知らぬ男がゆっくりと確固たる足取りでくつろいだ食卓の一行の許にやって来て、問いかけることなく早速セサラの方を向いて、ゆっくりとした小声で明確な発音のドイツ語で語りかけた。「セサラ伯爵にお詫びすべきことがあります」。

「父からのお詫びですか」と彼は素早く尋ねた。一 「済みません、私の皇子からのお詫びです」（と見知らぬ男は答えた）「皇子のために、病ながら起き上がった貴方の父上が涼しい朝方に旅立ちできなくなりまして、夕方頃到着なさるでしょう。一 しかし私は」（と彼は好意的微笑を浮かべ、軽くお辞儀をして付け加えた）「将来もっと貴方の許にいてという幸運の端緒を、伯爵殿、貴方に損失をお知らせするという事で、父親の騎士殿に犠牲を払っているわけです」。

一 ショッペは、繊細に話すことなく、繊細に察知して、早速こう述べた、一 彼はどんな人間に対しても感嘆しなかったからである。一 「それでは我々は教育学上の株主、同盟者というわけですか。ようこそ、灰色の同盟者殿」。

一 「初めまして」と灰色の服をまとった見知らぬ男は冷たく言った。

しかしショッペはこう察知していた。この見知らぬ男が将来セサラの家庭教師長となり、

ショッペは助教師となるであろう、と。私にはこう考えると理性的に思われる。電氣的に火花を発するショッペは、我々の導体や非導体で合成された若者を一杯に充電する猫の皮、狐の尾、ガラス板となり得たであろう。家庭教師長は導体として火花誘導となり得て、彼を繊細なフランクリン式避雷針で放電したであろう、と。

この男はフォン・アウグスティと言って、皇子の講師であって、上流社会に長く生活していた。彼は、この宮廷のタイプの人間全体がそうであるように、十年年老いて見えた。というのは彼は本当はやっと三十七歳であったからである。

我々皆が先に言及した皇子が誰であるか、書評家達やクサンティッペ達が知らないままに放置していたら、書評するクサンティッペ達の逆向きのインク瓶の液を浴びることになったろう[クサンティッペは夫のソクラテスと喧嘩をしたら最後に水をかけた]。彼はホーエンフリースの世継ぎの皇子で、その村のブルーメンビュールで伯爵は育ったのであり、今やその首都に移る予定になっていた。このホーエンフリースの皇太子は、多くの非常時貨幣や領土委任[フランス革命時の紙幣]を残すことになったイタリアからドイツへ埃を立てて喘ぎながら追い立てられるように戻って行った。ドイツで誓忠の貨幣を刻印するため、統治する父親が代々の墓地の階段を下って、後わずか数段で棺に収まることになっていたからである。

食事をしながら講師のアウグスティはこの好ましい一帯について正しい趣味をもって語った。激しい言葉は用いなかった。ボロメオの宮殿に見られる若干の嵐[テンペスタ*¹]よりはるかにこの一帯を鼻屑にしていた。それから — 騎士のことをもっとしばしば話題にするために — 宮廷人の人物評定に移り、ドイツ騎士団騎士、ドゥ・ブヴェロ氏が特に寵愛されていると告白し、 — というのは宮廷人や聖人の許では恩寵が一切であるからで、 — そして皇子ははなはだ神経を病んでいる等々を述べた。普通自らの自我を他人の自我に合わせて裁断する宮廷人は、宮廷に住んでいない者に対してその廷内のニュースを詳細に真面目にまとめるので、その新聞の読者は笑うか眠り込むことになる。宮廷人と『間違いと真実について』の本²はイエズス会総会長を神と — イエズス会士を人間と — 非イエズス会士を動物と呼んでいる。 — ショッペは顔に致命的な皺や渦巻き曲線を浮かべて聞いていた。彼は辛辣に宮廷を憎んでいた。青年のアルバーノはそれよりはるかにまじに考えることはなかった。彼は挑戦を好み、内的人間の指よりも、その人間の腕を用いて働き、取りかかって、人生の除雪機や馬鍬や播種機の前に軍馬や雷神の馬を繋ぎ、有能な補助馬、農耕馬の群れは好まなかったので、入念に熟慮して仕事に取りかかり、ヘルクレスの仕事よりはむしろラック塗りの作業や簡単な婦人の仕事をするような人々を格別好きになれなかった。それでも彼は自らについては一言も話さないアウグスティの好ましい自立心に安らっている謙虚さに対し、また彼の旅の知識に対し敬意を払わざるを得なかった。 —

セサラは — ちなみに、この周では彼のことをまだセ[C]サラとスペイン語の正書法

*1 Peter Molyn[Pieter de Molijn 1637-1701, Pieter Mulier の説もある]の絵のこと。彼はその立派な雷雨のせいで、単にテンペスタと呼ばれた。

*2(訳注) Marquis de Saint Martin[1743-1803]の1775年の本。

に倣って記すことにするが、しかし第四周からは、正書法には私はほとんど慣れていず、長い本の中で永遠に書き間違っているわけに行かないので、一セ[Z]サラと記されることになる。一セサラは講師に対し自分の父親のことをどんなに聞き取っても飽きなかった。講師は彼に騎士のローマでの最新の行動を語った。しかし非宗教的冷淡さを伴った語りではあったが、しかし青年の中では別の冷淡さとなるものであった。つまりドン・ガスパールは一人のドイツ人教皇大使と絵と絵とを賭けにして、ある一人のドイツ人を(アウグスティはその名を教えようとしなかった)、その者の人生は単にエピキュロスの厩舎での比較的長い倫理的糞月[二月]に過ぎなかったのであるが、この教皇大使が望む限りの期間、この男に会わずに二日間で改宗させてみせることにしたのであった。教皇大使は賭けて、ドイツ人をこっそりと移し変えた。二日するとこのドイツ人は閉じ籠もって、敬虔となり、青白く、物静かに、ベッドに伏せるようになり、行動では真のキリスト教徒に近くなった。この教皇大使は厄災を一週間見守って、それから速やかな変身を、つまり動物の姿にまた戻すキルケの杖[Odyssee,10.233ff.]を欲した。騎士はこのドイツ人を杖で触れて、このエピキュロスの豚は癒えてまた元に戻った。私はもっと説明の付かないこと、奇蹟とか苛酷さについては知らない。しかし講師はガスパールがどんな手当でこの急速な解消や雲、沈殿を強制したか説明できなかった。

さて、すでに長いこと奇妙なショッペの任命や協同作業に驚いていた講師は丁重な回り道をしてようやく、どうしてショッペが騎士と知り合いになったか尋ねた。「パスクイーノを通じてだ」(と彼は答えた)「騎士が丁度オルシーニ家宮殿の角に来たとき、一人の人間の周りに何人かのローマ人と我らの世継ぎの皇太子が立っているのを見たのだ。この人間はパスクイーノとマルフォリオの彫像に向かって[二つの彫像は別の場所にある]跪いてこう述べていたのだ、一跪いていたのは私だが、『[双子の]カストルとポルックスよ、何故汝等は教皇領から世俗世界に出てきて、異教徒の国の司教達として我がドイツを旅しないのか、あるいは二人の勤勉な助任司祭としてそうしないのか。汝等は公使館説教師として、試補として、帝国都市を巡ることができるのではないか、あるいは王座の両側に名誉の騎士として、対の紋章持ちとして立てるのではないか。一少なくとも汝を、パスクイーノよ、宮廷礼拝堂の宮廷説教師として、作法教師として召命するか、あるいは礼拝堂内の洗礼盤天使として命名の際に綱で吊せるのではないか。一いいかい、汝等双子は、いつか議会の広間で請願書達人として登場し、発言すべきではないだろうか。あるいは大学の建物で学位授与の際に命題集の師[Lombardus の渾名]として互いに反論できないだろうか。一パスクイーノよ、汝は、外交文書の会議や条約の際に少なくともただ暖炉頭飾りとして影絵となるほどまでも、デッラ・ポルタ¹によって修復されずに、せいぜい単に大学図書館での批判的編集者の胸像にしかねれないのであろうか。一一いや、元気な双子よ、私の傍らに立っているキージ[Chigi]がレディーの為の携帯ポケット版に汝を鑄造[コルク製]してくれさえすれば、私は汝を差し込んで、ドイツで初めてポケットから出すことだろう』と。一一しかし私はこれをこの島でもできるわけだ。一

*1 パスクイーノは周知のように毀損されている。一デッラ・ポルタが古代の彫像の偉大な修復者であった。[Guglielmo della Porta(1500頃-77)]。

ここで彼は嘲笑的芸術作品を撮りだした。というのは彼に耳を傾けていた有名な建築家、模型作者のキージが本当に模刻したからである。―― ショッペは更にこう語った。するとドン・ガスパールが真面目に彼に近寄って、スペイン語で、彼は誰かと尋ねた、と。

「私は」と彼は、これもスペイン語で答えた。「マルタ騎士団総長の本当の名目図書館司書であり、―― 所謂文法的犬、歯のある人文学者スキオピウス（ドイツ語ではショッペ）の子孫です。―― 私の洗礼名はペロ、ピエロ、ピエトロ（ペーター）です。しかし当地では多くの者が誤って、スキウピオ、あるいはスキオピオ（浪費）と呼んでいます」と。

ガスパールはどんな胸に対しても、最も異なる胸に対してさえも公平な深く見通す目を有していて、自分の似姿を求めることは最も少なかった。彼は、それ故、図書館司書を自分の家へ入れた。さてこの司書は単に肖像画描きで生活しているように見え、いずれにせよドイツへ帰ろうと思っていたので、期待して彼は、この豊かな、多くの目を有する厳しい精神にアルバーノの相手を託した。この相手役にはただ現在の協力者、アウグスティと一緒にすることになっていた。―― しかし図書館司書は前もって四つの事柄を要求した、伯爵についての描写、伯爵のシルエットで、この二つが与えられると、―― 更に第三、第四のことを要求した。「私は三つの身分で艶出しされ¹、光沢機で滑らかに磨かれてプレスされるべきでしょうか。―― 私は欲しない。どこへでも、天国であれ、地獄であれ、貴方のご息のお伴をしましょう。しかし高貴な家々の碎鋳機、洗鋳機、焙焼機、溶解機、精錬機にはお伴したくない」。これはいとも容易に認められた。いずれにせよこのためには父親という首領の第二帝国代理たるアウグスティが任命されていた。しかし第四の点に関しては彼らはほとんど瓦解した。不自由よりは無法を好み、あるいは放免されることを欲していたショッペは、帝国直属的でかつ豊饒な土壤で育って柵を好まず、偶発的な不定期の奉仕に満足し得るのみで、一つの報酬の固定を拒まざるを得なかった。「私はご息子に」と彼は言った、「臨時の説教はするでありませうが、週ごとの説教はしません。いやしばしば半年間全く説教壇に上がらないかもしれません」。騎士は、恩義を感じてばかりいるのは本意でないと思っていて、それで引き下がった。とうとうショッペが対案を考え出して、相手役を自発的贈り物として致しましょう、それ故騎士から時々重要な自発的贈り物を期待することに致しましょうと言った。ちなみに今や騎士にとってショッペは、馬車に乗り込む際に手助けするあれこれの宮廷トルコ人同様に好ましい者であった。彼の人物鑑定は冷たい死者の検視で、この鑑定の後ではもっと強く愛するとか、もっと強く憎むということはなかった。彼にとって騒がしい人生の大活劇では、監督であれ、主役、副役の恋人であれ、リア王達であれ、イフィゲーニエ達であれ、主人公達であれ、友人ではなく、また道化役達であれ、暴君達であれ、端役達であれ、敵ではなく、様々な役における、様々な俳優に他ならないのであった。―― ガスパールよ、君は正面栈敷にいるのであって、舞台に上がっていないというのか。君はハムレット同様に、大きな芝居の中で、より小さな芝居を眺めているのではないか。いやどの舞台も結局二重の人生を、模倣する人生と模倣された人生を前提としているのではないか。――

数杯のワインのせい、優美に振る舞う講師とのうんざりした隔たりのせい、ショッ

*1 つまり二つの木製のローラーと一つの金属製のローラーの間でプレスされることである。

伯爵には彼の言い草はすでに馴染みのものとなっていて、従ってより容易に上手く微笑むことができた。講師はまず習熟しなければならなかった。喜劇的俳優でさえ新たな聞き手にとってはまだ喜劇的俳優とはならないからである。しかしこうした気散じにもかかわらず、アルバーノの心の中には混乱した騒擾が生じ続けた。さながらやって来る時間の滝のざわめきのようなものであった。彼は月桂樹の小枝の揺らぐ継ぎ目を通して憧れながら外の輝く丘の方を眺めた。その時ディーアンが画家らしい言葉で言った。「あたかもすべての神々が千もの宝角を抱えて、マッジョーレ湖の周りの山々に立っていて、ワインと小滝を注いでいて、それで湖はただ歓喜の杯の如く豊饒に溢れ、泡立って落下しているようではありませんか」。 — ショッペは答えた。「パイナップルのように珍しい味の喜びは、パイナップルのように歯茎を傷付けるといふ欠点を有している」。 — 「思いますに」とアウグスティが言った、「人生の喜びについては余りに多く反省してはなりません。立派な詩の美点について余りに多く反省する必要はないようなものです。両者とも数え上げたり、解剖したりしない方が、一層良く享受できます」。 — 「私なら」とセサラは言った、「きっと誇りから数え上げたり解剖したりしよう。何が生じようと、私は耐えて、不幸な思いがしたら恥ずかしく思うことだろう。人生がオリーブのように苦い果実ならば、この両者とも強く圧縮してみればいい。最も甘い油が生ずることだろう」。 — ここで彼は立ち上がって、夕方まで島で一人つきりになることにした。彼は大目に見て欲しいと言ったが、口実は設けなかった。彼の高貴な名誉心の強い魂は、どんな些細な嘘もつけなかった。 — 家畜に対してすらもできなかった。彼はブルーメンビュールで毎日飼い鳩に餌をやって馴染ませていた。すると里親の娘がよく、一羽掴まえて欲しいと彼に頼んだ。しかし彼はいつも断った。動物の信頼に対してすらも欺きたくなかったからである。

ゆっくりと影を揺らせながら、自分の許で下に滑り落ちる陽光と共に月桂樹の間を彼が行き、夢の中でのように小枝を前に突き出した両手で穏やかにかき分けているのを、彼らが目で追っていたとき、ディーアンがこう発した。「何というジュピターの彫像か」。 — 「それに古代人は」とショッペが口を挿んだ、「その彫像には神がそれぞれ宿っているとまだ信じていたものです」。 — 「額と鼻根と胸の三重の幅が素晴らしい」（とディーアンは続けた）「オリンポス山でオリーブの木を植えるヘラクレスというところだ」。

— 「驚いたことに」（と講師は言った）「彼の顔をじっと見つめていると、私が望むものとそれに相反するものを読み取ることができました。冷淡さ — 温かさ — 無垢と穏やかさと — 最も容易に反抗と力とを」。 — ショッペは言い添えた。「彼自身にとっても戦闘的諸力のこのような会議を和平会議へと協同させることはもっと難しいことかもしれません」。 — 「このような力強い形姿には」（と人間的に感ずるディーアンは言った）「どんなに愛が美しく似合うことでしょうか、怒りはどんなに崇高に似合うことでしょうか」。 — 「それらは我々のような」（とショッペは答えた）「二人の傳育官とクセノフォンがその『キュロス教育』でキュロスに関して余り作り出せそうにない二つの絵画的美点です」。

第四周

セサラは単に三杯のワインを味わっただけであった。しかし彼の熱く濃い血の潮はそれ

で一層強く沸き上がった。日中はますますダフネ的デルフォイ的杜へと生長し、その杜のささやくような湿気を帯びた茂みの中へますます深く彼は迷い込んだ。 — 太陽は青空の中に白く輝く雪の球のように掛かっていた、 — 連なる冰山はその銀色の閃光を緑の野に投げ込み、 — 遠くの雲からは時折雷の音がして^{*1}、あたかも春が凱旋車に乗ってごろごろと離れた我らの許へやって来る按配で、 — 気候と日中の時の生の温かさは、二つの歓喜の（つまり思い出された歓喜と期待された歓喜の）聖なる炎はすべてのその諸力を孵化していた。今や彼は若い健やかさのかの熱気に襲われた。そのときにはいつも、あたかもどの肢体の中でも格別の心臓の鼓動がするかのようで — 血の巡る肺と心臓は重苦しく、一杯となり — 呼吸は熱くハルマツタンの風[ギニア沿岸の貿易風]のようで、 — 目はその独自の烈火の中で物憂く、 — 肢体は力の余り疲れてしまうのである。電氣的雲のこの過剰な中で彼は破壊への特別な衝動を感じた。しばしば彼はもっと若々しく、岩を頂上まで転がして行き、そこから落下させたり、 — 息切れするまで長くギャロップで走ったり、最も確実には、(カルダーノ^{*2} から聞き知っていたように)、ペンナイフで傷を付け、ちょっと出血さえさせることで切り抜けるのであった。 — 通常な人間は満喫した、すべての小枝が花と咲く肉体と精神の青春を得ることは稀であり、非凡なる人間は更にそれは稀なこととなる。しかしそれだけに一層一つの根は花園全体を一層煌びやかに担うことになる。

こうした充血と共にアルバーノは今や宮殿の背後にひっそりと南の方を向いて立っていた。そのとき少年時代の遊びが思い出された。

つまり彼はしばしば五月、垂れた緑の陳列室^{*3} 全体を載せている円柱のように太い林檎の木に、激しい風の際に登って、その分枝に身を置くのであった。さて百合蝶が戯れ、蜂や蚊がぶんぶんと言ひ、花々が霧のように咲き乱れる中で、この揺れる陽気な生け垣がブランコとなって、風を一杯に受けた梢が濃い緑の下に沈んだかと思うと、深い青空や陽光の前に出てくるとなると、彼の空想はこの木を巨大に伸長させるのであった。彼は一人っきりで宇宙に育っていった。さながら彼は無限の生命の木であるかのようで、彼の根は深淵に広がって、白い雲、赤い雲が花々のように、月が一つの果実のように彼の中で掛かっている、小さな星々が露のように煌めいた。アルバーノはその無限の梢の中で休んでいた。嵐は梢を日中から夜へ、夜から日中へと撓めた。 — —

彼は今や高い糸杉を見上げていた。ローマでは正午の眠りから南東の風が目覚めていて、途中レモンの木の梢を飛びながら、千もの小川や影で涼やかになって、今は糸杉の小枝を揺すっていた。彼はこの木によじ登って、少なくとも疲労を覚えようとした。しかし彼はローマの七つの丘の上に雷雲があるのを見たとき、何と世界は眼前に山々や島や森と共に広がっていたことか。さながら丘の中で七つの火山の中でのように働いていた古い精神がまだ暗闇の中から語りかけるかのようで、この火山は大地の前に何世紀もの間、炎の支柱

*1 人々は「春の射撃」とこれと呼んでいる。ペーター・ショッペはそれを十分崇高に翻訳している。春の電氣的ピストルの発火装置、と。

*2 (訳注) Geronimo Cardano(1501-76)、イタリアの哲学者、数学者。自伝[De Vita Propria]、14章参照。

*3 (訳注) 1721-24年に設立されたドレスデンの宝石収集室(Grünes Gewölbe)。

と共に、起き上がった雷雲と共に、立っていて、大地を灼熱の奔流と共に、灰の雲と共に、豊饒さで降り注いで、遂には大地そのものが砕け散ったのであった。氷河の鏡の壁は彼の父親のように砕けることはなく、天の温かさの前に立っていて、ただ輝くだけで、温かくなることも、柔らかくなることもなかった。 — 遠くの湖からはどこでも温かい丘がその水浴びから降りて来るかのように見え、人間達の小さな舟は遠方では座礁しているかのように停滞して見えた。 — 彼の周りの遠くからの風の中で過去の偉大な精神達が通り過ぎて行って、その目に見えぬ足音の中ではただ森だけが低頭するだけで、花床は余り屈むことはなかった。 — そのときアルバーノの中で見知らぬ過去が自らの未来となった。

— 憂愁の念ではなく、精神の中に住み、持ち上がるすべての偉大なものへの渴望が、そして未来の汚れた好餌への身震いが彼の目をまことに痛々しく凝縮させ、重たい滴がその目から落ちた。 — 彼は降りて行った。結局内部の目眩が体の目眩となったからである。田舎での教育と、自然の抑制された進行を尊重するディーアンのせいで、彼の諸力の蕾の園は、早期の曙光や急速な跳躍からは守られていた。しかし夕方の予期と旅のために、彼の人生の日中は今や余りに温かく、余りに活動的なものとなっていた。

偶然、夢見心地で、彼はオレンジの花の木の下に迷い込んだ。突然彼は、内奥の心の中の甘美な攪乱で心が重苦しく、広く、空虚になり、また一杯になったかのような気がした。彼はここで幼年時代にしばしば胸に吸い込んで、今やそれが過去の空想や思い出をすべて薄暗く、しかし強力に想起させている香りそのものであることに気付いていなかった。まさに香りこそは目や耳の使い古された特徴とは異なって、より稀にしか出現しないし、従ってより容易に、より激しく消え失せた感覚を更新するからである。しかし彼が、色とりどりの石や貝殻を編み込んで彩っている宮殿のアーチの所に来て、洞室の敷居の所まで波が戯れながら跳ねているのを見たとき、突然苔むした過去が浮かび上がってきた、 — 彼は自分の記憶を探った、 — 洞室の色鮮やかな石はさながら先史の銘に満ちて彼の記憶の前に横たわっていた。 — いやここに彼は何千回も母親と一緒にいたのであった。母親は彼に貝を見せ、波に近寄ることを禁じ、ある時、太陽が昇り、風に吹かれた湖とすべての小石が輝いたとき、彼は母親の膝の上で光りを浴びながら目覚めたのであった。

—

今やその場は神聖化され、そこで彼が圧倒的な憧憬に打ち負かされて、今日その美しい腕の傷を、騒ぎ、悩ます血潮に対し開示するに至ったことは許されるものではなかったか。

彼は引っ掻いた、しかし偶々深すぎた。そしてそのより軽やかに呼吸する本性の美しく涼やかな昂揚と共に、夕陽の中で彼の腕の赤い源泉を見つめ、そして難儀が片付いた後のようにより軽やかに — 冷静に — 静かに — 柔和になった。彼は消え去った母親のことを思い出した。彼女の愛は今や永遠に報われないままであった。 — いや彼はこの血を母親のために流したかったことであろう。 — 今や以前よりも熱く彼の胸の中で病気がちな父親に対する愛が溢れてきた。彼の心は言った。すぐに来てください、愛する父上、あなたを言いようもなく愛するつもりです、と。

太陽は湿気のある大地のところで冷えていた、 — 消えた雲の上で、わずかにぎざぎざの城壁冠が氷河の先端の黄金の層をなして輝いていた、そして自然の魔法のランタンはその画像をただより引き延ばされて、より生気ない形で投げかけていた。そのとき長身の形姿が赤い外套を広げてゆっくりとレモンの木々の周りを通って彼の方へやって来た。右

手で心臓の箇所を擦ると、小さな火花が発せられ、半ば持ち上げた左手で一つの蠟の仮面を砕いて塊となし、そして自らの胸を見つめていた。突然その形姿は宮殿の壁のところ凝固して化石化した姿勢となった。アルバーノは手を小さな傷口に押し付け、化石化したこの男の間近に行った。―― 何という形姿か。―― 乾いた痩せた顔から、半ば眼窩の下で燃え続けている目の間から気位高い勢いで軽愚する鼻が生じていた。―― 墮落の兆しを有する一人のケルビム[智天使]、蔑み、支配する一人の精神がそこに立っていた。何も愛することはできず、自らの心も、より高い心もほとんど愛することのできない精神で、人間どもを越え、不幸や、現世、―― 良心をも越えているかの恐ろしい者達の一人で、彼らにとっては、自分達がどのような人間の血を流すことになるか、他人の血か、自分達の血か、それはどうでもいいのである。――

それは、ドン・ガスパールであった。

鋼鉄と宝石からできた火花を発する勲章の頸飾で彼と分かった^{*1}。強直症、彼の昔からの病に彼は襲われていた。「父上」とアルバーノは驚いて、動けない形姿を抱擁した。しかしさながら冷たい死を心に抱き締めることになった。彼は一つの地獄の辛辣さを味わい、―― 硬直した唇に接吻し、もっと大きな声で叫んだ、―― 最後に腕を降ろして後ずさった、広げられた傷からは無感覚のまま血が滴った、―― 彼は荒々しく若々しい愛と悼みの余り歯ぎしりしながら、目に大きな氷の滴を湛えて、この黙した男を見つめて、心臓のところから彼の手を奪った。―― ここで目覚めながらガスパールは両目を開いて、言った。「ようこそ、我が息子よ」。―― するとその子供は父の胸に溢れ出る至福と愛と共に、沈み込み、泣き、黙した。「アルバーノ、おまえは血を流している」と穏やかに突き返しながらガスパールは言った。「包帯をするがいい」。―― 「血を流させてください、私はあなたが亡くなる時一緒に死にたいのです。父上、どんなに長くお会いすることに憧れていたことでしょう」とアルバーノは言った。今や自分の心臓の許で、より激しく鼓動しているのを感じた病んだ父親の心臓に更に深く震撼されていた。

「結構、しかし包帯をしなさい」と彼は言った。息子がそうして、素早く包帯をする間に、父親の目を飽きない愛を込めて見つめ、そしてその目がその指輪の宝石のように単に冷たい閃光を放ったとき、―― 朝日の今日の王冠であるカスターニエン[栗の木]の梢で秘かな月がその敬虔な目を静めるように開けた。そしてこの子供のときの母親と一緒に居住の地で心の燃えたアルバーノにとって、天から母親の精神が見つめていて、こう叫んでいるように思われた。「あなた方がお互いに愛し合わないと、私は泣きます」。彼の沸騰する心は砕けて、彼は穏やかに、月光の中で青ざめている父親に向かって言った。「私を愛してはいないのですか」―― 「アルバンよ」と父は答えた、「おまえにはどんなに答えても十分ではない、―― おまえは立派だ、―― 結構なことだ」。しかし大胆に父親の愛と競う愛の気位を持って、彼は仮面を有する手を固く握って、炎のような涙を見せながら騎士を見つめた。「息子よ」と疲れた父は答えた、「おまえには今日まだ多くの言う

*1(訳注) 少し先で分かるように、聖金曜日という祝日のために正装していると思われる。

べきことがある。しかし時間が余らない、明日私は旅するのだから、 — 動悸のせいでどれほど話せるか分からないのだ」。 — つまり感動した魂の先ほどの印は単に神経を病んだ動悸の印にすぎなかったわけだ。... 哀れな息子よ、この鋭い大気の前で汝の動揺した海はいかばかり凝固しなければならなかったことか。 — 氷のように冷たい金属の許で汝の手はいかばかり固着せざるを得ず、それから、傷を剥かれて離れざるを得なかったことか。 —

しかし善良な若者よ。傷口のせいで汝はさながら血と共に汝の真の半神、あるいは偽の半神の許に結び付けられることを — 半神というのはよく半人間よりは半獣と結合するものであるが、 — そして汝がかくも痛々しく愛することを、我々の中の誰が汝に非難できよう。いや何と温かい魂は愛の請願すら空しく発することができないことか、発しても冷却する毒に萎えさせられ、他の毒に当たった者達のように、その重々しい舌、重々しい心をもはや動かすことができないことか。 — しかし愛し続けるがいい、汝、温かい魂よ。春の花に似て、蛾[夜の蝶]に似て、華奢な愛は最後には固く凍った大地を突き破ってくるものだ、一つの心より他は何も求めない心はどれもいつかはその胸を見いだすものだ。 —

第五周

騎士は、石造の円柱の上の画廊に彼を引き上げた。画廊には至る所レモンの木々が香りと共に、小さな動揺する、月光で銀色に縁取られた影と共に迫って来ていた。彼は札入れから二つのメダルを取り出した。その一つは奇妙に若々しく見える女性の顔を模写していた。「息子ヨ、私ドモハモハヤ会ウコトハナイデショウ」と銘があった。「これはおまえの母親だ」（とガスパールは言って、それを彼に与えた）、 — 「そしてこれがおまえの妹」、そして二番目のメダルを渡した。その刻印は分かりがたい老化した形姿となっていて、その銘はこうだった。「オ兄サマ、私ドモハイツカ会ウコトデショウ」。さて彼は彼の話語り始めた、その語りは多くのいい加減な冊子で（一つのコンマはよく画廊の端の所であり、別のコンマは別の端の具合で）、小声で、早い歩行と遅い歩行の混在の中にあり、画廊を一緒に行く、他人の会話の視察官の耳には、もし誰か一人その中にいたとしたら、関連する三語も聞き取れなかったことだろう。「アルバン、いいかよく注意して」と彼は続けた、「今は空想に耽っていてはいけない。おまえは残念ながら、今日耳にすることになるロマン的なことに対して、余りにロマン的心情でいる。以前からセサラ伯爵夫人は祝祭的なことを愛していた。夫人がその死の数日前に私に託した委任からそのことは見て取れよう。まさに今日の聖金曜日[復活祭直前の金曜日]に伝えるよう私は約束しなければならなかったのだ」。

彼は話し始める前に更に、自分の強硬症と動悸とが憂わしいほどに昂進しているので、スペインへ急いで行って、自分の件と更には自分の被後見人である — フォン・ロメイロ伯爵令嬢 — の件を片付けなければならないと語った。アルバンは更に自分の愛しい長いこと別れている妹のことについて兄としての質問をした。父は、その妹は伯爵令嬢と共にスイスを訪ねるつもりであるから間もなく会えるであろうと彼に期待を抱かせた。

永遠に「彼はこう言った」と言いながら、煩わしい引用符[鷺鳥足]を付けて行ったら、

人々はどう思うか予期できないので、この委任を自ら語ることにしよう。いつか — (と騎士が言った) — 三人の見知らぬ男が、ある者は朝に、ある者は正午に、ある者は夕方に彼の許にやって来て、各人が彼に封印されたカードを渡して、そこには、アルバーノがその夜のうちに訪ねなければならない絵画陳列室の見られる町と家の名前のみが記載されていることだろう。陳列室では彼は絵画のすべての釘を触って押し、その中の一つを探し当て、それを押した後、壁に嵌め込まれた時打懐中時計が十二回打つようにしなければならない。ここで、絵の下に秘密の同じ壁紙のドアを見つけ、その背後に女性の像が開いたメモ帳と左手に三つの指輪、右手に一本の鉛筆を持って座っているのを見いだすことになる。中指の指輪を押すと、この像は内部の仕掛けが回転し、起き上がり、部屋に出てきて、この動き出す装置はある窓際で止まり、その鉛筆で隠された引き出しを印付ける。この引き出しの中には簡易望遠鏡とある棺の鍵の蠟製の模刻が収められている。この望遠鏡の接眼レンズでは、視覚的矯正により、今日受け取った妹のメダルの老化した線の混乱は、優しい若々しい形姿へと収まり、対物レンズでは母親の未熟な像は、より成熟して年取った特徴を取り戻すことになる。 — それから彼が薬指を押すと、早速黙した冷たい像は鉛筆でメモ帳の中に描き始めて、若干の言葉で棺のある箇所が記される。その鍵に関しては蠟製の模刻があるわけである。棺の中には黒い大理石の段があり、黒い聖書の形をしている。それを壊したら、その中に一つの核心を見いだすことになり、彼の全人生のクリスマス・ツリーとして育つものである。 — 段が棺の中になかったら、小指の最後の指輪を押すことになる。 — しかし彼の運命のこの木製のゲーリックの天気予報人形¹が何を始めるのか、騎士自身が予言することはできないのであった。 —

この奇妙な遺言からは容易に、時打懐中仕掛けや歯車仕掛けの半ばを、 — 今やロンドンでは単に二つの歯車から時計を造るように、覆いや指針の装置を傷付けないまま取り出すことができるであろうと私は確信している。

アルバンに対してこの遺言状の営為や送風機は、私の予期に反して、 — ほとんど何の効果もなかった。善良な母親に対するより優しい愛は別である。母親は、人生の奔流の下で、死の落下する灰鷹の飛んで行く像を目の当たりにして、ただ息子のことだけをかくも入念に心配していたのであった。彼の父に対しては、苦勞してかくも記憶して語ってくれたことに懇ろに感謝して語りながら、ほとんど注意しないまま、その確固たる鉄のような顔を見つめていた。月光の中、そして彼の空想の中で、騎士はロードス島の、現在の半ばを隠している巨像へと育って行った。この巨像と比べると、この遺言の回想はほとんど彼にとって卑小すぎるものに見えた。

これまでドン・ガスパールはただ真の世の紳士として語っていた。彼は自分の会話から (格別より親しい関係を見せずに) いつもある自我の、自分の自我であれ他人の自我であれ、どんな斟酌をもどんな世辞をも取り除いて、歴史的人物すら単に事柄の条件として言及して、 — それで二人のこのような非自我どもは、その厳しい冷淡さで、単に二人の語る論理、学問であるかのように見え、脈打つ心臓を有する人間とは見えなかった。さて父が次のように語ったとき、アルバーノの愛で傷付いた心臓に何と穏やかに、優しい音色

*1 Otto v. Guericke (1602-86)、中空のガラスの人形を作って、その水の中での浮沈で天気予報をした。

のように流れ込んだことか。 — より明るくより生温かい月と、彼の最初の前史の島のような薄明の子供の園と、彼の魂の中で音高く響き続け余韻を有する母親の声とが強力にその心臓を溶かしたのであった。「以上が伯爵夫人について言うべきことだ。私からはおまえのこれまでの人生に私がこれまで満足していると言うしかない」。 — 「父上、私の将来の戒めとして、教えと助言を頂きたいのですが」とこの熱中した人間は言って、より速くなった心臓の方に動いたガスパールの右手に対し、彼の左手でその病んだ箇所に触れ、激しく、その痙攣する心臓を押さえた。あたかもこの山を下って循環する人生の歯車を止めることができるかのような按配であった。 — 騎士は答えた、「私はおまえに更に言うべきことは何もない。菩提樹の町リンデンシュタット（ペスティッツ^{*1}）は今やおまえに開かれている。おまえの母がこの町を閉ざしてしまったのだ。間もなく侯爵になる皇太子と私の友人のフォン・フルレ大臣がおまえの味方となろう。彼らの知遇を得ることはおまえのためになると私は思う」。 —

鋭い眼差しのガスパールは、彼がこう続けたとき、このとき突然この青年の純な素直な形姿に不思議な動揺と熱い薔薇の色が走るのを見た。これはこの場では何をもっても証明できなかったもので、すぐに殺されたかのように過ぎ去ったものであった。「身分ある男にとっては学問とか文学は、他の者達にとっては最終目的であっても、単に手段にすぎず、気晴らしにすぎない。これに対するおまえの愛着がいかに大きくとも、結局は行動を、享受よりも、優先させることだ。人間を単に教えたり、あるいは楽しませたりすることに使命を感じてはならず、人間を扱ったり、支配したりすることに使命を感じることだ。

おまえが大臣の心を掴んで、かくて大臣の有する統治術や官房術の知識を得たら、結構なことであろう。というのは一つの国の概略、一つの宮廷の概略を得たら、おまえも達すべき、身に付けるべき、それぞれのより大きな国、宮廷の基本的特徴を得ることになるからだ。おまえがそれどころか侯爵にとって、宮廷にとって、好ましい者になることが私の望みだ。おまえには縁故が必要だというよりは、経験が必要なことから。ただ人間を通じて人間に打ち勝ち、人間を乗り越えることになる。本や長所を通じてではない。人間の心を得るには、自分の価値を並べる必要はない。人間の心を掴まなければならぬ、それからようやく自分の価値を見せるのだ。無分別ほど不幸なものはない。徳操を通じてよりも分別を通じて、人は恐るべきもの、幸福なものとなる。 — おまえはせいぜいおまえと似た人間どもを避けるべきで、殊に貴族のやからだ」。彼の嘲笑の腐刻するような昇承はここでは、彼が「貴族のやから」をアクセントを付けた皮肉な調子で言った点にはなく、予期に反して何の調子もなく言った点にあった。アルバーノの手は夙に彼の手の心臓のところから鋼の角張った勲章の頸飾りを滑って行き黄金の金属的に冷たい子羊[像]に落ち着いた。この青年は、すべての青年や隠者がそうであるように、宮廷や世慣れた紳士について厳しすぎる概念を抱いていて、彼らを紛れもないバジリスク[怪蛇]や竜と見なしていた。

— もっとも彼がただ自然科学者と共にバジリスクというものを単に翼のない蜥蜴と解し、竜を翼のある蜥蜴と解しているとしても私は許そうと思うが、それで彼はこれらを冷たい、ほとんどリンネが定義しているような致命的両生類に他ならないと思っているので

*1 リンデンシュタットはライブツィヒのドイツ語化とバーレントの注にある。

ある。 — 更に彼は（容易にプルタークは青年達の誘惑者となるように、彼は私同様青年達の伝記作者となり得たことであろうが）、我々の時代の糊口凌ぎ（Artolatrie パン稼ぎ）に対し、敬意よりも憤怒を抱いていた。この時代はいつも逆に神をパンに化体させようとするもので、彼はまた最良のパンの為の学問、パンの為の馬車、出世欲に対し、勇敢でない者すべてに対し、爆破砲材や戦闘機の代わりに何か目に見えない棒磁石、吸い上げポンプ、放血器を付着させ、それで何かを吸い上げる者すべてに対して、激していた。どの青年も官職を欲しない、どの乙女も結婚相手を欲しない美しい時代がある。それから両者ともお互い変わって、その上しばしばお互い奪い合うものである。

騎士が先の、きっと世の紳士の反撥は買わない命題を述べたとき、息子の心の中には神聖な友愛的な気位が生じてきた。 — 息子にとっては、上昇してくる守護霊によって、彼の心が、それどころか彼の体が、祈祷する聖人の霊のように、貪欲に這いつくばる時代の走路を越えて持ち上げられたかのように思われた。 — より偉大な時代の偉大な人間達はその凱旋門の下に歩み出て、自分達にもっと近寄るように合図した。 — 東側[東南の方]にはローマと月があって、彼の前にはアルプスの円周があり、偉大な過去が偉大な現在の傍らにあった。 — 彼は我々の中には利口さと分別よりももっと気高いものがあるという愛して誇り高い感情を抱いて、父親を抱いて言った。「父上、今日の一日全体、私の心は感動が高まり続けました、 — 動揺の余り話せず、何も考えられません、 — 父上、私はすべての人を訪ねます、 — 人間達を越えて行くつもりです、 — しかし目的という汚れた道は好みません、 — 私は世間の海の中で生きている者のように泳いで上昇するつもりです、溺死者のように腐敗して上昇はしません。 — いや父上、この胸が徳操や神、その心を失ったならば、運命はこの胸に墓石を投げて、砕くがいいのです」。

アルバーノがかくも温かく話したのは、騎士の力強い魂に対する言い難い尊敬の念を断念できなかったからである。彼はいつもかくも強力な人生の苦悩と長い間の死と、かくも偉大な、冷たく放出された炎の鋭い煙りとを思い浮かべて、彼の独自の生き生きした魂の動揺から父の魂の動揺を導き出したからであった。父の動揺は彼の意見によれば、単にゆっくりと黒々した冷たい人間達の広い基盤の上に、ダイヤモンドが燃え尽きた灰の鍛冶炉石炭の基盤の上でしか揮発した状態にならないように、砕けていたのであった。 —

人間達を稀にしか、単に穏やかにしか非難しないドン・ガスパールは — 愛からではなく、無関心から、 — この青年に辛抱強く答えた。「おまえの温かさは称賛に値する。時と共にすべて上手く行こう。 — 今は食べることにしよう」。 —

第六周

我々の島人達の食堂は不在のボロメオ家の豊かな宮殿内にあった。人々はこの美しい島に対しパリスの林檎や月桂樹を与えていた。アウグスティとガスパールはこの島に対する称賛状を軽い明快な文体で描いた。ただガスパールはもっと反・テーゼを含んでいた。アルバーノの胸は新しい世界で満たされ、彼の目は灰白く光り、彼の頬には喜ばしい血潮が見られた。建築士は皇太子の趣味と財力を称えた。皇太子はこの両者[趣味と財力]で、芸術的巨匠の方ではなかったが、傑作の方を国に持ち戻って、この皇太子の働きかけでまさ

にこのディーアンはイタリアに派遣され、皇太子のために古代の模造品を手に入れることになっていた。ショッペは言った。「ドイツ人は画家のアカデミー同様、画家の鉛毒を他の民同様有りたいものです。我々の梱の商標画も — アウクスブルクの我々の命題画も — 新聞紙上の我々の業績も、すべての戯曲作品の我々の章頭飾り模様も、これで我々はロンドンよりも早くシェークスピア由来の画廊を得ていますが、 — それに絞首台上の[逃亡犯人の比喩的]絞首人形も各人に知られており、どれほど手広く我々が行っているかまず示しています。 — しかしギリシア人もフランス・イタリア人も我々同様に描くことを私も認めたいと思います。すると我々は自然や貴族の持参金目当てに似て、添付の長所のない美[人]を単独に求めないという点で彼らを凌駕することになりましょう。ついでに焼いたり、売ったり、身に付けたり、結婚したりすることのない美[人]というものは、我々の許では単にその値打ち以上のもではありません。美[人]というものは我々の許では、長所の[織物の]耳、飾りであって、帝国議会では、菓子屋の合わせたテーブルではなく、会議用テーブルが帝国国体の本来の仕事テーブルというわけであるようなものである(とそう期待しています)。それ故我々の許では真の美や芸術は単に有益で利を生む事柄に置かれて、描かれ、刻印されます。例えば立派な聖母は単にファッション・ジャーナル¹で、 — 腐刻された画は単に煙草の葉のパッケージに — 浮き彫り宝石はパイプの火皿に — 彫り宝石は印章に — 木版画は割り符に — 花の絵は、人気はあれど、箱に求められます。 — 誠実なウオウウェルマン²の絵は、種馬の傍らの仕切りの間にあり、 — 皇太子の頭部の浮き彫り画は、ターラー貨幣かバイエルンのビールジョッキの蓋に、両者とも純な錫が欠けていず、 — 薔薇や百合の絵は、入れ墨をした女性に見られます。 — 同様にバーゼドの教育施設ではいつも美しい絵とラテン語とが結合しています。汎愛校³ではラテン語はより容易に絵の下で覚えられるからです。かくてヴァン・デア・カーベル[Adrian van der Kabel(1630-1705)]は、注文に応じて兎を描きましたが、射られたばかりの兎をモデルとして次々に食事と模写のために自ら依頼したものです。 — かくて画家のカルカー[Johannes von Calkar(1500頃-46)]は美しい靴下を描きましたが、いつも直接自分の脚に描いたものです」。 — —

騎士は微笑むことも、真似て語ることもなかったが、このようなことを機嫌良く聞いていた。彼にとっては天才的プリズムの中ですべての色彩が心地よいものであった。ただ建築士にとってはこれは十分にギリシア趣味に適うことではなかった。そして講師にとっては十分に宮廷趣味に適うことではなかった。講師はショッペが新たに息をして我らドイツをくさしたことに及ぶ間に、媚びるように旅立つディーアンの方に向き直って言った。「以前ローマは諸国から芸術作品だけを拉致したのですが、今では — 芸術家を拉致しま

*1(訳注) Bertuch と Kraus によって刊行された *Journal des Luxus und der Moden*。1786ff.

*2 立派なウオウウェルマンとは画家の言葉で立派に描かれた馬のことで、それを見ていると将来産まれる子馬の美しさが期待されるのである。[Philips Wouwerman(1619-68)、オランダの風景画家。馬の絵は人気があった]。

*3(訳注) 汎愛校(Philantropin)は、Joh. Bernh. Basedow(1723-90)、教育学者によってデッサウに設立された。

すな」。

ショッペは続けた。「同様に我々の彫像ものらくら者の無為の国民ではありません。これらは皆手仕事をしています。女像柱たるものは、家々を持ち上げ、天使たるものは洗礼盤を支え、異教徒の水の神々は噴水のところで働いています、そして女中達の桶に水を注いでいます」。――

伯爵は我々ドイツのために温かく、講師は明快に話した。騎士は、詩文の美しさに対するドイツ人の趣味とドイツ人の才能とが、他の美に対するこの双方の不足を償っており、その説明となる（気候故、統治形態故、貧しさ故等々）と述べた。騎士は天体望遠鏡に似ていた。これで見ると諸惑星はより大きく見え、諸恒星はより小さく見えるもので、彼は望遠鏡同様に諸恒星からは借り物の微光を取り除いて、それでいてそれらに本当のもっと大きな微光を返還することはなかった。彼はユダに対しては絞首索を断ち切ったが、しかしキリストの頭部には水をかけて聖人の後光を消してしまい、そもそも黒と明かりの一つの同権、同等性を作り出そうとしていた。

ショッペは黙ることがなかった。彼のヨーロッパに対する寛容令には、ドイツの諸圏が除外されていたのではないかと私は案ずる。彼はまた始めた。「私が有益なドイツ人の称賛のために申したわずかな事は、私に矛盾を引き寄せたように見えます。しかし聖なる帝国国体に小さな月桂冠を私が授けるとしても、そこで禿げている箇所気付くことの妨げとなつてはなりません。私はしばしばソクラテスやキリストに関し、彼らがハンブルクやウィーン、あるいはそれどころかブランデンブルクの町で講義をしたり、その博愛者達と高歌放吟したりとかしなかったことを称賛してきました。役所のせいで、仕事ができないのかと尋ねられていたことでしょう。両人がヴェッツラー[最高裁があった]に家族と一緒にいたならば、この家族は怠慢税¹を払わされていたことでしょう。――詩人に関しては、騎士殿、詩歌の対象が自分でなければ――この詩歌にほとんど関心を示さない幾多の帝国市民を私は承知していました。詩的自由は帝国直属[自由]に介入してることがあると承知していると思っていたのでしょ。きっといつでもきちんと、落ち着いて、熟慮して、ザクセン風法的期限で仕事にとりかかるこの市民にとって、詩的翼ははなはだ苦しめ、妨害となったのです。――かくてこれはそれほど説明のつかない悪しきものでしょうか。――立派な帝国都市民は、泣きたくなる時、ナプキンを前に掛けます。繻子のチョッキを濡らさないためです。弔意の手紙に滴らす涙を、すべて黒っぽい句読点のように留めます。獵師のように鹿の尻の斑点よりも美しい花を知らないとしても、何の不思議がありましょ。この都市民が詩的莖で、植物の莖²の場合同様に、穏やかな催吐刺激に襲われるとしても、...これが私どもドイツ人が中傷されるとき非難を回避する一つのやり方であろうかと少なくとも私見では思われます」。

第七周

*1 最高裁判所の占有者に対して、十分に働かなかったとき、保留される額はそう呼ばれた。

*2 吐根[トコン、催吐薬]は莖の種族である。

この奇妙な一日には何という奇妙な夜が続いたことか。 — 皆が、旅で眠くなって、休息へ向かった。ただアルバーノだけは、暑い満ちた一日が燃え残っていて、騎士に言った。今日の炎で一杯の自分の胸は冷たい星々やイタリアの春の花々の下でしか冷却や休息を見いだせない、と。彼は最上階のテラスで、レモンからなる花と咲く手摺付き欄干の傍らの一つの彫像に寄りかかっている、星空の下、目を素敵に閉ざして、それから更にもっと素敵に開くことにした。すでに彼はもっと若い青春時に、私同様、温かい国々のイタリア・フランス風屋根の上にいることを願ったものである。夢遊病者として目覚めるためではなく、睡眠者としてその上で目覚めたいのであった。

何と素晴らしく見開く目は、汝の上の永遠の花々に満ちた輝いた吊り庭園に落ちかかることだろう。汝のドイツの蒸し暑い羽根詰め寝床では、見開いた目の前には[起床用]ベッドの垂れた総しかなないのである。

セサラがより静まった魂と共にこのような波や山々や星々の間を行き来し、庭園と天と湖とがとうとう一つの薄暗い巨像へとまとまって漂ったとき、そして彼が憂愁の念を抱いて、自分の色褪せた母親、妹、自分の将来の予告された不可思議を考えていたとき、彼の背後で全く黒い装束の形姿が胸に模写された髑髏を着てよたよたと息を切らしながら登って来た。「死を想え」（とその形姿は言った）「おまえはアルバーノ・ドゥ・セサラか」 — 「そうだ」（とセサラは言った）「おまえは誰か」 — 「私は」（とその形姿は言った）「死の神父だ^{*1}」。私が震えているには、恐いからではなく、習慣で震えているのだ。

この男の肢体は恐ろしい具合に全体震動していて、耳に響くように思われた。セサラはしばしば退屈で大胆になっていて、一つの冒険を願っていた。今やこの冒険を目前にしていた。しかし用心して目で見守っていた。するとこの僧侶が「宵の明星を見上げるがいい。それが沈んだら教えてくれ、私の視力は弱いのだ」と言ったので、彼は上の方をただちらりと見やった。「まだ三つの星が」（と彼は言った）「宵の明星とアルプスの間にある」。

— 「宵の明星が沈んだら」（とその神父は続けた）「スペインのおまえの妹は昇天して、その後、妹がここでおまえに天から話しかけるのだ」。 — セサラは、戦慄の冷たい手の指で触れられた気がほとんどしなかった、それは単に部屋の中にはいず、臆した精神の周りにその山々や星々を番人として置いている若々しい自然の中にいたからであり、更にはまた広大で密な物体界は我々の間近で精霊界を抑圧し遮っているからでもあった。彼は憤激して尋ねた。「おまえは誰だ。おまえは何を知っているのだ。何をするつもりか」、そして僧侶の組み合わせた両手の方へ手を伸ばし、片方の手でその両手を握った。「おまえは私のことを知らない、息子よ」（とその死の神父は冷静に言った）「私はサフリ^{*2}のようなもので、おまえの妹のスペインからやって来た。私には大地の下の死者達が見え、死者達が出現し、語るときには、それが予知できるのだ。しかし私には大地の上に出現したときには見えず、その語りは聞こえない」。

ここで彼は若者を鋭く見つめた。若者の面影は突然より強張ってより当惑したものとな

*1 聖パウロ教団、あるいは死を想え教団からのもの。この教団は十七世紀フランスで消滅した。先の語りかけは彼らの通常の挨拶。

*2 スペインのサフリ達には、深い大地の中の死体や鉱脈等を見る視力が周知のように付与されている。

った。というのは女性の馴染みのある声のような声が、若者の頭上でゆっくりと語り始めたからである。「王冠を受け取りなさい、受けなさい。―― 私が助けます」。僧侶は尋ねた。「宵の明星はもう沈んだか。おまえに語りかけているか」。―― セサラは高みを見上げて、返事できなかつた。天からの声がまた、同じことを語った。僧侶はそれを察知して言った。「おまえの父もそのように高みからのおまえの母の声を聞いたのだ。ドイツにいたときにな。しかし父は私を長いこと束縛させていた、私が騙していると思ったのだ」。

―― 父という言葉のとき、セサラは父の霊への不信を知っていたので、この僧侶をテラスの下へ、強く自分の手でその両手を握って、引きずり下ろし、今どこでその声がするか聞こうとした。この老人は穏やかに微笑した。声がまた彼の上でして、こう語った。「美しいその女性を愛しなさい、愛しなさい。―― 私が助けます」。―― 岸边には、日中すでに目にした舟が停まっていた。多分どこかに潜んでいる声という邪推を若者から除きたいと思った僧侶は、このゴンドラに乗り込んで、付いて来るよう彼に合図した。若者は、自分の肉体的力と精神的力、自分の水泳術を信頼して、大胆に僧侶と一緒に島から離れて行った。しかし彼の内奥の繊維の中で何という戦慄に襲われたことか。彼の頭上でまた、「私があなたに見せる美しいその女性を愛しなさい、私が助けます」と叫ばれたからばかりでなく、彼はまたテラスの方向へ一人の女性の形姿がその心臓のところまで、深い波の間から長い栗毛の髪と黒い目と共に、輝くような白鳥の首筋で、極めて豊かな気候の色合いと力を有しながら、より高貴なアフロディテのように浮き上がるのを見たからである。しかし数秒するとこの女神はまた波の中に沈んで、上方で霊の声がささやき続けた。「私があなたに見せたその美しい女性を愛しなさい」。―― 僧侶はその光景の下、冷たく黙して祈っていて、何も見ず、何も聞いていなかった。最後に彼は言った。「おまえの誕生日の将来の昇天日におまえは、胸の中にはない一人の心臓の傍らに立つことになる。そしておまえの妹が天からおまえの花嫁の名を告げることだろう」。――

ポリープや花々に似て、より高次の要素の明かりを見ることはないが、しかし感じ取り求める我々の前で、つまり弱々しい流体のような形姿の前で、我々の人生の皆既日食の中、一つの閃光が、我々のより高次の太陽の前に掛かっているこの土質の塊を通じて走るとき、^{*1} この光線は、ただ形姿には耐えられるが、光りには耐えられない視神経をずたずたにする。―― 暑い驚愕で心と血の翼が活気付くのではなく、我々の思考や、新しい捉えがたい世界に対する冷たい凝固で温かい奔流が閉ざされ、人生は氷となる。――

その一杯に詰まった空想から容易に混沌も宇宙も飛び出してくるアルバーノは青ざめてしまった。しかし勇気よりは分別を失うかのように思われた。彼は性急に、ほとんど無意識に岸边へ漕いで行った。―― 彼は死の神父の顔を直視できなかつた。彼の放恣な、すべてを引き裂く空想は雲に似て、すべての形姿を余りに歪んだものに変形させ拡大した。

―― 僧侶が別れ際にこう言ったとき、ほとんど聞いていなかった。「ひょっとしたら次の聖金曜日にまた参上するかもしれない[翌年の昇天日に出現]」。―― 僧侶は自ずと進ん

*1 食のとき太陽は時に月の開口部を通じて閃光を発したという何人かの天文学者の話を暗示している。例えば Ulloa はかつて見たことがあると請け合っている。[Antonio Ulloa (1716-95)、スペインの地理学者、天文学者]。

で行く小舟に乗った（多分水面下で回転する車輪で進むのであろう）、そして直に小さな漁師島[Isola peschiere]の背後に、その中に消えて行った。

一分間アルバンは酩酊していた。あたかも庭園と空とすべてが離れて行く溶けた霧の塊であるかのように、何もないかのように、自分は生きていなかったかのように思われた。この亜硫酸性の煙りを一気に窒息する胸から吹き払ったのは図書館司書のショッペの息で、彼は陽気に寝室の窓から口笛を飛ばしたのであった。今や彼の生はまた温かくなって、大地が戻って来て、存在があることになった。暑さの余り眠れなかったショッペは降りて来て、十番目のテラスの上で眠ることにした。彼はセサラに激しい内的動揺を見てとったが、しかしそれには慣れていて、尋ねることはなかった。

第八周

理詰めではなく冗談で容易に我々の止まっている歯車装置の中の氷は溶けるものである。会話の後、この青年の中では、その印象は腹立たしい情感と楽しい情感の他には余り残っていなかった。腹立たしいのは自分がその僧侶の修道服を掴んで騎士のところまで僧侶を連れて行かなかったことで、楽しいのは、高貴な女性の形姿と、冒険に満ちた人生への展望そのものについてであった。それでも彼が目を閉ざすと、翼で一杯の怪物や、炎で一杯の諸惑星や、深い波打つ混沌が彼の魂の周りに生じた。

ようやく真夜中過ぎの涼しさの中、彼の疲れた感覚はより一層間近に引き寄せられ、散りながら微睡みの磁石の山へと導かれて行った。 — しかしこの静かな山の上では何という夢が次々とやって来たことか。「彼は」（と夢が現れた）「ヘクラ火山[アイスランドにある]の噴火口に横たわっていた。水柱が迫って来て、それが彼を持ち上げ、空中で熱い波の上に支えた。彼の上のエーテルの夜空高くには暗い雷雲が広がっていて、長い竜のようで、星座を飲み込んで膨れ上がっていた。その間近な下の方には、明るい小雲が、雷雲に引かれて掛かっていた。小雲の明るい霧を通じて、二つの薔薇の蕾か二つの唇かによる濃い赤が溢れ、更に一つのヴェールか一本のオリーブの枝による緑の帯、それに乳青色の真珠か勿忘草による指輪が溢れて、 — 遂にはこの赤色の上に少し薄く靄が掛かって、ただ見開かれた青色の目が無限に優しく、懇願するようにアルバーノを見下ろした。彼は霞が掛かった形姿に両手を差し出した。しかし水柱は余りに低すぎた。すると黒い雷雲は霰の粒を投げた。しかしそれは落下するとき、雪となり、それから露となり、最後の小雲の中で銀色の明かりとなった。緑のヴェールは靄の中で輝いて、波打った。するとアルバーノは叫んだ。私はすべての私の涙を流して、水柱を膨張させて、おまえ、美しい目に届くようにさせよう、と。 — そのとき青い目は憧れで湿って、愛する余り沈んできた。水柱は騒がしく生長し、雷雲は沈み、小雲を前に押し出した。しかし彼は小雲に触れることができなかった。すると彼は自分の血管を引き裂いて、叫んだ。私はもはや涙が出ない、愛する者よ、しかし私はおまえのためにすべての私の血を流して、おまえの心に届くようにしよう、と。血を流しながら水柱はより高く、より速く上昇して行った。 — 広大な青いエーテルは風が吹いて来て、雷雲は散り、すべての飲み込まれた星座が生き生きとした視線と共に外に出てきた。 — 舞っている自由な小雲は閃光を発しながら水柱の許へ漂い降りてきた。 — 青い目が間近でゆっくりと見開き、より素早く閉ざし、より深く

その光りの中へ隠れた。しかしその雲の中でかすかな溜め息が言った。私をあなたの心臓に引き入れ給え、と。 — すると彼は閃光を通じて両腕を絡ませ、霧を追い払い、月光から形成されたような白い形姿を灼熱で一杯の胸へ拉致した。 — しかし散って行く光の雪は熱い両腕から逃れて行った。 — 愛しい恋人は消えて、一つの涙となって、その温かい涙は彼の胸を通じて切迫し、彼の心臓の中へ沈み、その中で燃えた。そして彼の心臓は四方に散って、消えようとした」。...そのとき彼は両目を開けた。

しかし — 何というこの世ならぬ目覚めか。 — 白く、中身のない小雲が、雷雲の滴で汚されて、彼の上へ屈み込みながら、まだ天に掛かっていた。 — — — それは明るい、愛しそうに近く彼の上へ沈み込んできた月であった。彼は夢の中で出血していた。夢を見ながら、腕の傷に付けた包帯が腕の激しい動きでずれてしまったのであった。歓喜が霊による恐怖の夜の霜を溶解したのであった。神々しい臨終の中で、彼のかくも堅牢な現存在が、解放されて、動揺する夢のように舞い飛んでいた。 — 星空の天の中で彼は揺れながら母親の胸元にあるかのように漂っていて、すべての星々が月の中へ流入し、月の微光を拡大していた。 — 彼の心臓は、一つの温かい涙の中へ投げ入れられて、穏やかにその中で四散した。 — 彼の外部ではただ影となっていて、内部ではまばゆく光を放っていた。 — 地球の飛行は彼の自我の立ち上がった炎の前で吹き去っていて、炎を揺らすことはなかった。 — いや彼の霊魂は鋭い不動の音のしない鷹の翼と共に恍惚として静かに薄い生命の中を滑って行った。...

彼はあたかも死ぬかのように思われた。というのは遅くなって彼は左の出血した腕の上昇する熱に気付いたからで、この腕が彼を、夢から覚醒へと達した長い楽土の中へ導いていたのであった。彼は包帯をもっとしっかりと巻いた。

突然彼は包帯を巻きながら、自分の下で、ただばちゃばちゃというより音高い水面の音を聞いた。彼は欄干越しに覗いてみた。 — そして別れを告げないままの彼の父親がディーアンと一緒にいて、 — 別れはガスパールにとっては単に旅立ちという秋の瞬間のときの有害な秋の花に過ぎなかった、 — 彼の人生の花の冠からの落下した花の花弁のように、小夜啼鳥の白鳥の歌声の下、波の上を去って行くのを目にした。...良き若者よ、何としばしばこの夜は汝を惑わし、奪ったことか。 — 彼は両腕を兩人の方に広げた、

— 去って行く父親は彼にはまたより愛おしく見えた、 — 痛々しく彼は下の方へ叫んだ。「父上、私の方を振り向いてください、 — どうして黙って去られるのです。

— それにディーアンまで。 — 聞こえるのであれば、言葉をかけてください」。 —

ディーアンは彼に接吻を投げ寄せた。ガスパールは病んだ心臓に手を当てた。アルバーノは死の写しである強硬症を思い出した。そして波の上に傷付いた腕を差し出して、温かい生命を父親に対する神酒として注ぎたいところであった。そして後から声をかけた。「ご機嫌よう、ご機嫌よう」。 — 切ない思いで彼は巨大な像の冷たい石造りの肢体に自分の燃える血管を押し付けた。空しい憧憬の涙が彼の美しい顔の上を流れ落ちたとき、岸边と島の双方からさえずるイタリアの小夜啼鳥の温かい音色が、その穏やかな吸血鬼の舌で心の傷口を吸い上げた。 — いや花と咲く青年よ、いつか汝が愛されるならば、何と汝は愛することであろう。 — 彼は、温かい話をする人間を渴して求め、ショッペを起こして、二人の逃走を示した。しかしショッペが何らかの慰めを言っているとき、アルバーノはじっと舟の灰色の点を追って見つめていて、何も聞いていなかった。 —

第九周

両人は起床したまま、露を帯びた島を廻って爽快になった。日中の浮き彫り細工が滑らかな色彩を帯びて月光の消えつつある白墨のスケッチ画から出現する様を見て、彼らは元気よく目覚めた。アウグスティもやって来て、二人に半時間ほどのイーゾラ・マードレ[マードレ島]への航行を提案した。アルバーノは二人だけで行くよう、そして自分はここに残して、一人っきりで散歩させるように衷心から頼んだ。講師は今や夜の出来事の痕跡をより明確に目に留めた。――何と美しく夢と僧侶と睡眠不足と出血とはこの勇敢な大胆な形姿を優しげなものとし、すべての物音を和らげていたことか。今や力は単に月光の中の魔法的な滝となっていた。アウグスティはそれを頑固さと解し、ショッペと二人だけで行った。人は単にごくわずかな人間と一緒にのみ（訪問の軍勢なんかとは一緒でなく）、本来は単に二人っきりで、最も親密な最も類似した友達とのみ、恋人とのみ、散歩に行けるものであると承知している人間は極めて少ない。まことに私は宮廷の面前で侯爵夫人の誕生日に公然と愛の告白のために跪くことと同様に喜んで、――その違いはどこにもない以上――長い前衛と後衛の間に、醜陋した目を汝、私の恋人たる自然にしかと留めることだろう。

一人っきりのせいでアルバーノは何と幸せになったことか。彼の心と目は涙で一杯になっていた。涙を彼は恥じて隠していたが、しかし涙は彼自身の判決に対しても立派に彼を正当化し、称えるものであった。――つまり彼は炎のような強力な青年達に特有な奇妙な錯誤を有していて、自分は軟弱な心は有せず、感情に乏しく、動じがたいと思っていた。しかし今や脱力して詩人的軟弱な、かつて経験したことの無いような午前を有していて、かつて自分が愛したものすべてを泣きながら抱擁しようと思っていた。――ブルーメンビュールの自分の良き、離れた養父母を、いつも死がその花で飾られた犠牲の門を築くまさにその春の中にいた自分の病気の父親を、――過去の中に隠された自分の妹を抱擁しようと思っていた。妹の肖像画を彼は得て、その偽の声を昨夜聞き、その最期の時を夜のペテン師が間近で描いて見せたのであった。――夜の、まだ心の中に閉ざされたままの影絵芝居は、その謎のせいで、――それは誰か馴染みの人間のせいにはできず、――そして予告のせいで彼にとっと重苦しいものとなった。――予告は自分の誕生日に、――これは間近で、昇天日のことで、――自分の花嫁の名前を知るであろうというものであった。高笑いの日中は、確かに霊の場面から死者の色合いを奪ったが、しかし王冠や水中からの女神に対しては新鮮な輝きを与えた。

彼はこの約束の地のすべての聖なる箇所をよろめいて通って行った。――自分の子供時代の遺物と父親とを見いだした小暗いアーチの中へ入って行って、不安な気持ちで地面に落ちて潰されていた仮面を拾った。彼はレモンが陽光を浴びている画廊に登って、遠くの青空の中の高い糸杉の方やカスターニエン[栗の木]の方を見た。その青空には月が見開かれた母親の目のように現れていた。――彼は月桂樹の森の背後の階段状滝の間近に立った。その滝は彼が二十歳であったように、二十の階段をなしていて、彼は熱い頬にその霧雨を感じなかった。

さて彼は戻って高いテラスに登り、二人の友を出迎えようとした。外部世界の陽光が何

と屈折して魔術的に内部世界の聖なる薄暗い迷路の杜の中へ忍び込んで来たことか。――

昨日は燃え上がる太陽の球であった自然が、今は薄明かりで一杯の宵の明星となっていた。――世界と未来とが彼の周りに偉大に、それでいて間近に触れんばかりに横たわっていた。雨の前では氷の山々がより深い青空の中で一層間近に輝くようなものであった。

――彼は欄干に身を乗り出して、巨大な彫像を支えようとした。彼の目は湖へと下り、アルプスと天とに昇り、また下った。西国[Hesperien]からの好意的な風の下、軽く雲に覆われて、すべての波や葉がざわめいていた。――白い塔が岸辺の緑の中から煌めいて、風の中で鐘や小鳥が互いに音色を響かせていた。――父の行方の方を見たとき、彼は痛々しい憧れにとらわれた。いや放恣な春で一杯の、生温かいオレンジの夜や、ばらばらの巨大な山脈の四方に投げ出された部分で一杯のより温かいスペインの方を見たとき、美しい天を通過して飛んで行きたいという思いに駆られた。――最後に歓喜と夢想、別離はかの名付け難い憂愁の念に解消した、その念の中で、過度の歓喜は境界の痛みをまとった。我々の胸は満たされるよりも容易に溢れ出るからである。――

突然アルバーノは、あたかも愛の神聖さが自分の内部の神殿に地震を引き起こして、彼にその将来の出現を告知したかのような感動に襲われた。彼は傍らのインドの小木にその名前リアーネと記した名札を読んだのであった。彼は懇ろにそれを見つめて、絶えず言った。「愛しいリアーネ」。彼は小枝を折ろうとした。しかしそうしたら樹液が流れ出ると思ったので、彼は言った。「いやリアーネ、私のせいで泣くようなことになってはいけない」、そして中断した。彼の記憶ではこの植物は何らかの仕方である未知の大事な本性と縁があったからである。今や言いようもなく憧れながら、彼はドイツの神殿の門の方に、つまりアルプスの方に目を転じた。――ある春の小雲の中で、彼の夢の、雪のように白い天使が深く身を隠して、ただ黙してその中で漂っているかのように見えた。――あたかも遠くからのハルモニカの音色を聞いているかのように思われた。――彼は何かドイツ的なものを得るために、紙入れを取りだした。それには養父母の娘のラベッテが「私どものことを忘れないで」と刺繍してあった。彼は一人っきりであると感じ、今や陽気にマードレ島から漕いで戻ってくる二人の友のことを楽しみにしていた。

いやアルバーノよ、君のような精神にとって十年後にはこの日の朝はどのように思われることだろう。そのときにはきっと華美な若さの固い蕾はより広く、より柔らかく、より緩やかに花開いていることだろう。そのときには君のような魂の前では、現在は色褪せたものとなって、同時に二つの世界が、――時の土星における二つの輪というものが、

――つまり過去の時と将来の時とが一緒に花開いていることだろう。君は単に、明るく白い目標への短い未払いの行路を覗き見るばかりでなく、振り返って、曲がりくねった長く経過した行路をも眺めやっていることだろう。君は意志の千もの失敗と、精神の失敗とを合算して、心と脳の代償できない浪費を合算していることだろう。こう尋ねずに、君は大地で見えていることが出来ていることだろうか。私を通じて、私の背後の国が経験した具合に経験した 1004 もの震動^{*1} は、この国同様に私を豊かに結実させてくれたらどうか、

*1 カラブリア[イタリア南部]では(1785年の)四分の三の期間で1004もの地震があった。ミュンターの『紀行』等。[Fr.Münter:Nachrichten von Neapel und Sizilien. 1790. 実は二年と四分の三年のことらしい]。

と。 — すべての経験は、それが我々にとって我々の日々を代償とし、あるいは我々の諸力を、 — 我々の錯誤を代償とするからには、とても得難いものである以上、何故人間は朝ごとに、花の露の雫のたびごとに繁茂する自然を前にして、千もの空しく干涸らびた涙、つまりすでに流して、代償とした涙に関して、かくも貧しくなって赤面せざるを得ないのだろうか。 — 春からこの全能の自然は夏を引き出し、冬からは春を、火山からは森や山を、地獄からは一つの天を、この天からはより大きな天を引き出す。 — 我々愚かな子供は過去から何の未来も、我々を満たしてくれる未来を用意できない。 — 我々は何でも光るものを求めてベニハシガラスのようにつつき、燃える石炭を金貨として運び出して、それで家々を燃やしてしまう。 — 一つならず大きな美しい世界が胸の中で沈み、何も残さない。まさにより高貴な人間達の奔流は飛び損なって、何も結実しない。高い滝が飛び散って、すでに遠く大地の上に舞い散るようなものである。 —

アルバーノは二人の友人を償いの優しきで迎えた。しかしこの青年にとって日中の時が進むと、旅館の部屋を空にして、勘定を済ませ、ただ更に馬が来るまで数分荒れて空しい刈り田の中をあちこちしなければならない者のように寂しく不安な心持ちになった。落下する肉体のように、彼の激しい魂の中では新しい一秒ごとに決意がより速く、より強く動くことになった。彼は外面では穏やかに、しかし内面では激しく、二人の友に今日のうちにも自分と一緒に旅立つよう頼んだ。 — かくて彼は午後一緒に静かな少年時代の島から出発し、ミラノのカスターニエン[栗の木]の並木道を通して急いで自分の人生の新しい舞台、多くの謎の地下通路へと通じている落とし戸の所へ行くことにした。 —

『巨人』の就任プログラム

私は『巨人』をフラクセンフィンゲン[ジャン・パウルの『ヘスペルス』の中の侯国]の枢密公使館参事官、領主裁判長たるフォン・ハーフェンレッフアー氏に献呈する前に、真面目に次の許可を問い合わせた。

「貴方はこの物語[歴史]に対し、ロシアの宮廷が偉大なピョートル大帝についてのヴォルテールの創造史^{*1} に対して協力した以上に協力なされましたので、貴方は私の感謝に堪えない心に対し、貴方が創造なされたものを貴方に、ユダヤの神に対するが如く捧げ、呈上するという許可をお与えになることほど素敵なおことはなし得ないと存じます」。

しかし彼は即刻私に返事を寄越した。

「同じ理由から、貴方は、ゾンネンフェルス^{*2} がしたように、その作品を自らに献呈なさった方が良く、他の人達よりもより正しい意味で、作品の著者と庇護者とを同時に兼ねることができましょう。 — 私は(すでにフォン某氏とフォン某夫人のせいもあって)除外して頂きたい。そして私が貴方の作品に関して有するはなはだ機械的関与について、

*1(訳注) ヴォルテール著『ピョートル大帝治下のロシア史』(1759-63)。

*2(訳注) Freiherr v. Sonnenfels(1733-1817)、10巻本の全集を出したが、その際略歴を書いて「我が心に」と題した。

貴方が読者に漏らしたいと欲するような最小限必要な注釈に限定して頂きたい。しかし後生ですから、hic haec hoc hujus huic hunc hanc hoc hoc hac hoc。

フォン・ハーフェンレツファー」。

ラテン語の行[指示代名詞の格変化]は暗号で、読者には内緒ということである。一 就任プログラムに関してこの作品が要求すべきことは四つの名詞の説明と一つの場合説明である。

「ヨベル期」に関する最初の名詞説明は、この期の創始者、フランケ教区監督^{*1}の許ですでに得られるもので、監督はその期を彼によって発明された時代、あるいは152週の合計期間としており、その週のそれぞれは優に49の回帰する月[太陰]・太陽暦を有するものである。教区監督がヨベルの単語を前置しているのは、7年ごとに小さなヨベル年、閏年、赦免年、安息年、あるいは聖年が始まり、7年の7倍ごとに、つまり49年ごとに大きなヨベル年、閏年等々が始まったからで、この年には人々は何の借金も、播種も、労働も、隷属もなく暮らすのであった。見たところ十分に私はこのヨベルの名前を私の史的[物語的]章に応用しているようで、これらの章では仕事の男女は余暇や安息時間、赦免時間、聖時間、ヨベル時間で一杯の穏やかな周に導かれていて、その時には仕事の男女は何も播種したり、支払ったりする必要はなく、単に収穫し、休息しさえすればいいのである。というのは私だけが、書き物机に縛り付けられて、耕す夫役人として、自分の前や自分の許に播種機や信用借り、手錠を有する唯一の者であるからである。一 フランケの1ヨベル期が有する7448[152 × 49]の回帰する月・太陽暦は私の月・太陽暦にも存在するが、しかし単にドラマ的に存在するにすぎない。読者に対してどの章でもいつも多くの観念が、一 この観念はそもそも時の長さの単位にして容積の単位であって、一 私によってけしかけられることになろうからであり、その結果短い時間が読者にとって章の要求するほどの長さになってしまうのである。

私の第二の名詞の説明対象である「周」については一 今や何の説明も要しないであろう。

第三の名辞の説明は、私が各ヨベル期の添付冊子の中に綴じ込む「必須の草紙」についての記述のことである。必須の草紙というのは単に、純粹に同時の、私の主人公とは余り関連はないが、主人公とはそれだけに一層関連の深いそのような人々についての事実を取り上げているものである。必須の草紙でも、極めて些細な、単に火傷性水疱大の脱線による諷刺的出血が認められるというのではなく、至福の読者と講師とがその一族と共に自由に、啓発されて、まさに全く史[物語]上の人物間の長い巻全体の広大な宮城や馬場、風景を通じて、一 すべての頁上で、遊撃隊や、活動的騎士陪臣やユダヤ人界、迫って来る行軍、騎乗の群れ、上演中の芝居の一座に取り巻かれてさまようのである。一 見飽きることはないであろう。

しかし巻が終われば、一 これが最後の名辞の説明であるが、一 小巻が始まる。ここでは私がしたいことをするもので(ただ物語ではない)、この中で私はある花々の神

*1(訳注) Joh. Georg Francke d. J.(1705-84)、新教の神学者。Novum systema Chronologiae fundamentalis.1778.

酒や蜜の巣房から別の神酒や巣房へと次々にはなはだ至福の思いで、長い蜂の針と共に、飛び回って、単に私の脱線の個人的利点のために作られた支店的小巻をまことに都合良く私の「蜜月」と名付けることにする。ここで私は蜜を作るというよりは食するからで、運び入れる働き蜂としてではなく、巣脾を切り取る養蜂家として働いているからである。

一 これまで勿論私はこう信じていた。私の諷刺的彗星の運行に対しては、どの読者も、私の物語上の惑星体系の支障のない軌道とは即座に区別するであろう、と。そしてこう自問していた。「月刊誌である物語の統一がその物語の中断によって、そして別な論考が続くことで害を受けることがあるか。読者が、例えば『ホーレン』誌でチェッリーニ¹の自伝が中断され、全く別の論考が挿入されたとき、そのことで読者が苦情を言うだろうか」と。一 しかしどうなったか。

一七九五年ブリュッセルで医学協会が、会議で医学に関する発言以外の発言を自分に関して述べたら一クロネの罰金を払うよう社会的契約を協会内で決めたとすれば、周知のように七月九日の勅令²がすべての伝記作者に対して、我々はいつも本件に一この場合は物語に一留まるべきである、さもないと勝手に[読者と]語ることになることと発令されている。訓令の意味は、伝記作者が二十巻もの『一般世界史』[1736-63 刊、ロンドン]の中で、いやもっと長い物語、一例えばこの物語において一、二回考えたり、笑ったり、即ち脱線したら、被告人は批判的晒し台の上に、自らのパスクイーノ、あるいはマルフォリオとして立っているべきであるということ、一このことは私に対しては一度ならず執行されたものである。

しかし今、私はこの案件に別の形姿を与えることにする。まず第一に私はこの作品においては物語[歴史]と脱線とを厳しく分離し、一わずかな特例の場合は別で、一第二に私がこれまで以前の作品の中で得ていた自由勝手を時効にかけ強化して、今度の作品では一つの権利、一つの地役権となすことにする。読者は、ヨベル期で一杯の一つの巻が終わったら、蜜月で一杯の巻しか生じないと知っておれば、承服することであろう。私は以前初期の作品で乞食棒を持って読者の前に立ち、脱線を乞うたことを思い出すと赤面する。しかし一ここでこうしているように一借用を強要できたはずなのである。女性に対しては喜捨として、貢ぎ物のみならず、四半期分の税として、自由意志租税も要求して成功するようなものである。かくて国会での洗練された君主のみならず、すでに粗野なアラブ人もこれは行っていて、このアラブ人は通行人に現金の他に、現金の贈与証書も強請っているのである。

さて私は、フォン・ハーフェンレップファー枢密公使館参事官に話を移す。彼は私の約束した「案件説明」の対象である。

第四十五の犬の郵便日[『ヘスペルス』の章題]から、誰がフラクセンフィンゲンの支配者かきっと周知のことであろう、一つまり私の父上殿である。実際は私のめざましい身分の上昇は飛躍というよりはむしろ歩行であった。というのは私はすでに以前法律家で、それ故にすでに、まだ内包されている両法学[世俗法と教会法]のドクトルの蓄あるいは花

*1(訳注) 1796年、1797年にゲーテは Benvenuto Cellini の自伝の一部を翻訳し、『ホーレン』誌に掲載。

*2(訳注) Joh. Christoph v. Wöllner (1732-1800) によるプロイセンでの悪評高い宗教勅令、1788年7月9日。

序であったからであり、従って一廉の貴族であった。ドクトルの中には騎士となるすべての魚卵、卵黄が潜んでいたのである。それ故ドクトルもまた騎士同様に、まさに何かを通りかかるときは、[鞍か籠に乗って]略奪しながら即興で暮らしており、盗賊の館というよりは盗賊の部屋に住んでいた。従って昇進以来変わったことと言えば、居住の宮殿が変わったぐらいで、―― フラクセンフィンゲンの父の宮殿は現在私自身の宮殿である。

さて私は宮廷では罪の砂糖まぶしのパンを食べたくはないので、―― もっとも船乗りのパンよりはもっとのんびりと人は砂糖まぶしのパンやマンナの木[天国のパン]を求めるものであるが、―― 私は自分の船の資質を生かすために、宮殿の自宅で外務省関係の全フラクセンフィンゲンの部門を必要な解説局と共に率いている。しかしこれは言うは易く行うは難い。我々はウィーンに一人の代理人を有し、―― 五つの帝国都市で二人の弁理公使を有し、―― レーゲンスブルク国会の[マグデブルクとリュウベック代表の]横ベンチに一人の書記官を、―― 三人の州・官房職員とホーエンフリースから余り離れていないある著名な声望ある宮廷では一人の特命全権公使を有している。この公使はまさに上述のフォン・ハーフェンレツファー領主裁判長である。ハーフェンレツファー氏には私の父上殿でさえ全部揃った銀の食器セットを差し出したもので、我々はその贅沢の限りを彼には許している。フラクセンフィンゲンの使節がフラクセンフィンゲンの侯爵帽や小冠に対し、対外的に奢侈で通常よりも多くの名誉を与えることになれば、我々自身にとって利点となるからである。

私のような官職は冗談のためにあるのではない。すべての公使館書記や読書人界が私宛に封書で書いてくる。月並みな暗号と解説用暗号とが私の両手にあって、そのまま私にはこのがらくたが理解できる。私が知るものは、言い難いほどである。―― 私がニュースのすべての蚕の卵を伝記的に孵化し、養い育て、紡ぎだそうとしたら、私に使節団が郵便で固い紙袋に入れて送ってくれるものをそうしようとしたら、人間では読めるものではなく、馬で運び入れることのできない量となろう。(別の隠喩で言えば)、私の後検査官が私のためにエルベ川や、ザーレ川、あるいはドナウ川の上流から投げ下ろす伝記用建築木材は、私の部屋の中でうずたかく立っており、私が仮に私の伝記的阿呆船、仮装舞踏会場、魔法の城の美的建築物を、昼夜分かたず片付け、年がら年中、もはや踊りもせず、騎乗もせず、語りもせず、くしゃみもしないとしても、私が目にできないものには出来ないほどである。....

まことに私がしばしば私の作家的卵巣を多くの他人の魚卵と比較してみると、何故一人の男ばかり、時間や場所も欠けるせいで自分の分は与えることはできないのに、かくも大きな卵巣を得ることになるのか、他人ときたら一つの合気卵も有せず、提供できないというのに、というある種の不満を抱いて尋ねることになる。―― 私が私の公使館部門からの前哨を騎士物語作者達にその公式の報告と共に送ることができたら、この作者達は宮殿の代わりに廃墟と、回廊の代わりに地下の修道院通路と、肉体の代わりに幽霊と取り替えたいと思わないだろうか、今は前哨の公式の報告が欠けるせいで、売春婦を世慣れたレディに、秘密裁判官を司法裁判官に代理させなければならず、またいたずら者を小姓に、山城坊主を宮廷説教家に、盗賊貴族を賭け手に代理させなければならぬのである。

私はフォン・ハーフェンレツファー使節の話に戻ることにする。上述の声望ある宮廷でこの立派な殿方は座していて、私に対し、―― 彼の副業の支障にならずに、―― 毎月

毎月、彼の七名の公使館占い師、千里眼が把握できる限りの身上調書を私のホーエンフリースの主人公について仕上げてくるのである。 — どんない些細な瑣事も急報とするに十分目立つものである。まことに他の使節達とは全く異なる思考様式で、この他の者達は、後に世界史に割り込むような出来事に対して報告してくるのである。 — ハーフエンレップファーはどの袋小路、従者部屋、屋根裏部屋にも、どの煙突、農舎にもスパイのオペラグラスを有していて、これはしばしば私の主人公の一つの徳操を探し出すために、十もの罪を犯してしまうものである。勿論このような幸運の神の手仕事、馬車仕事では、誰も不思議と思わないだろうが、つまり幸運の女神自身が私に回してくれるこのような汲水車輪に接して、私自身の執筆の親指に添えられるこのような[効能のある]盗人の親指に接して、 — 色合い以外は何でも描くこのような主人公の影絵作家に接して、 — 要するに、諸事情あるいはモノゴルフィエ[Montgolfier]式諸気球の尋常ならざる協力に接して、勿論期待できるものは、気球に持ち上げられるこの男がその山の高みで或る作品をまとめて、後で下界に降ろすことになったとき、その作品は最後の審判の後、太陽上で、天王星上で、シリウス上で自由に翻訳される作品となる他に何があるだろうか。鷲ペンをそのために引き入れる幸運な鷲ペン削り器すらもが、そして誤植をしてしまう植字工でも、著者自身よりも得意に思う作品、それに対しては時の速やかな大鎌も、時の緩慢な歯も、 — 殊にこの歯列は要求に基づいて批判的やすりの歯ののこぎりで分断できるのであるから、 — 歯が立たない作品となる他に何があるだろうか。 — 著者がこのような長所に更に謙譲の長所まで添えたとすれば、これ以上著者は誰とも比較され得ないであろう。しかし残念ながらどの性情も自らを、クルージウス博士*1 が世界をそう見なしているように、最良の性情とは見なさなくても、それでもはなはだ結構なものを見なしているのである。

現『巨人』は更に別の長所を有していて、つまり私はまさに父親の宮廷に住んでいて、飾り挙げ、それ故ある種の罪の素描家としてまことに都合良くより間近により明るく眼前で観察しているのであり、そのうち少なくとも私には利己主義、放蕩、無為のモデルは残っているのである。というのは運命はこれらの海綿や苔をできるだけ広大に、上流階級の上方に播種したからである。これらはより低級な、より幅広い階級では、ばらまかれても、吸い尽くされてしまったであろうからである。これは、船ではペルシアから運ぶ阿魏[悪魔の糞]を常にマストの上段に掛けて、その臭いが船室の積み荷を汚さないようにしているのと同じ用心の範例であったように思われるものである。 — 更に私はここ宮廷の上辺にいて、すべての新しいファッションと、それが下々で単に煩わしいものとなる前に、いわんや称賛される前にすでに、私の周辺で観察して、それを軽蔑しているのである。例えば、女達が小さな襪を通じてそのふくらはぎを見せるという美しいパリのファッションは、 — これを彼女達がするのは、自分達は周知のように義足で行く殿方の一人ではないことを見せるため、 — このファッションは（ただ一人のレディーにかかっているのだから）明日か明後日にはきっと導入されるのである。しかし哀れなフラクセンフィンゲンの女達がこのファッションの真似をするのは全く別な理由からである。 — という

*1(訳注) Christian Aug. Crusius(1715-75)は1745年新教神学の Entwurf der notwendigen Vernunft-Wahrheiten を出版した。385-88 節参照。

のは我々殿方は何も欠けていないからで、一 彼女達は、自分達は人間であって、猿ではない（ましてや猿に劣ることはない）と証明したいからであって、これはカンペル¹や他の者達によるとただ人間だけがふくらはぎを有するからである。一 同じ証明が十年前には、単により高次の理由から用いられた。というのはハラー[Albrecht v.Haller(1708-77)]によれば、人間が猿と異なるのは尻を有する点だけであるというので、当時女性の宮廷女官達は、つまりめかしやの女達は、上々の夫人達の下で、自分達を区別しているこの種族の特性を人為[芸術]によって、一 所謂パリの尻[下着]によって、一 できるだけ拡大しようとしたのであり、この「最後のもの」のこのような「最後から二番目のもの」によって当時すでに二百歩離れたところからでも、世慣れたレディーをその雌猿から区別することは一つの冗談、一つの戯れであったのであるが、今これは自分達のビュフォン[Buffon(1707-88)]を暗記できる多くの女性達は辺鄙なところでしか着用しようとしな

同じような伝記的中傷者や馴れ合いの者を私は幾つかのドイツの都市で有し、一 私の父上殿がその支払いをし、一 大抵の都市で一人、しかしライプツィヒでは二人、ドレスデンでは三人、ベルリンでは六人、ウィーンでも六人、それぞれの街区で有している。勿論このような種類の仕掛けによって、これは下界の露地で生じていることすべてをベッドから覗ける望遠鏡にはなほだ似ているものであるが、一人の作家が、インク壺の背後で、薄暗く目に付かない家政を、一 二十マイル離れた小さな露地でなされているものを、

一 明るく覗き見ることが容易なものになっている。それ故私は毎週馬鹿馬鹿しい出来事に出会っていて、その床屋の他には誰も知らない、その人生行路は薄暗い袋小路にすぎない、落ち着いた物静かな男が、一 しかしこっそりこの男を私の使節、スパイの一人が伝記的凹面鏡と共に後を付けて、この凹面鏡がこの男の下着や歩幅を三十マイル離れた私の書齋に写し出すという次第になっている。一 申し上げると、私は次のような次第を経験するのであって、つまりこのような離れた男がたまたま書籍商の店のテーブルの前に進んで、そこのパン焼き窯からほかほかと出てきたばかりの私の作品の中で、その髪、ボタン、バックル、いぼが克明に 371 頁に写されているのを見て、フランスの岩石にインドの植物の刻印を見る具合であるようなものなのである。しかしこれは何程のものでもない。

かつてホーフの人々がそうであったように、私と一緒にの地に住んでいる人々はこれとは逆に幸いである。というのは私の側には使節を置いていないのである。

しかしまさにこの長所、私の物語は絵空事ではなく、急報から得ているという長所のために、私は他の者達が物語を飾り立て、ひねり出すであろうときの労苦よりも、もっとそれを謎めいたものにするために苦勞を有することになる。フリーメーソンの秘密や見えない教会や見えないロッジ[フリーメーソン支部]を格子掛けにし、覆い隠すときに劣らぬささやかな秘蹟で、これまで私の物語の真の名前の公開は阻止されているように見えたもので、それも大いなる僥倖があって、これまですべての発行所宛に送り込まれた、推測の一杯詰まった手紙箱のどれ一つとして秘密を嗅ぎ当てていなかったのである。（これはまことに世間のためになることである。というのは例えば『巨人』の第一巻の、最良の解説局で秘

*1(訳注) Petrus Camper(1722-89)。解剖学者。人間とオランウータンの違いについて述べた。

匿された名前を、誰かが謎解きしたら、私はインク壺をひっくり返して、何も出版しないようにするからである)。

私の許では名前は何の手がかりにもならない。私は私の主人公達に対する名親を極めて風変わりなやり方で強募しているからである。例えば私はよく夕方、自由の聖なる墓地への十字軍を行ったドイツ軍が位置交替や馬具付けを行っている際に、それらの幕営の露地へ写字帳を手を持って、行きつ戻りつし、倒れるや棺台に入る前に聖人の名前のように高らかに呼ばれた卑俗な者達の名前を拾い上げ、記入して、その名前をまた私の伝記作品の人々に分配するようにしなかったであろうか。それぞれの功績は一段と高く評価されなかったか。多くの卑俗な者が侯爵食卓列席可能、比武可能な貴族へと昇進し、典獄は司法大臣に、赤マント[クロアチア人]は深紅の枢機卿となったのではないか。しかもかつて全軍の中で一羽の雄鶏が、このこっそりと忍び歩く、二本足で動員された偵察者に対して鳴いたことがあるだろうか。

本当の物語を同時に語りながら粉飾したい著者達にとって、私はひょっとしたら全体的に一つのモデル、翼兵となれるかもしれない。私は他の物語[歴史]研究者よりも、物語をその物語の主人公自身にとってさえ分からなくさせるかのちょっとした無邪気な脱臼を研究してきて、模倣してきた。そしていかにして上手な君主の物語、反逆罪の議事録、聖人伝説、自伝を書かなければならないか承知していると思っている。ペーター・フォン・コルトーナ[Pietro da Cortona(1596-1669)](あるいはベレティノー)がフェルディナント・フォン・トスカナ公爵の前で、泣いている子供を笑う子供に描き変え、笑っている子供を泣いている子供に戻すときのささいな特徴ほどに決定的に強力な特徴はないのである。

ヴォルテールは一度ならず、一 何事にもそうであるように要求したものである。というのは彼は人類に一軍同様に行軍のすべての命令を三度与えたからで、自らと万事を倦むことなく繰り返したもので、一 歴史家はその歴史を芝居の原理に従って、ドラマの焦点に合わせて、語るべきとしている。しかし我々にレッシング、アリストテレス、ギリシアの手本が与えている第一等のドラマ的規則の一つは、芝居作家はその取り扱うどの物語[歴史]的出来事に対しても、詩的錯覚を増大させるすべてを貸与しなければならず、またその反対を避けなければならない、及び、作家は真理に美を犠牲にしてはならず、美に真理を犠牲にしなければならないというものである。ヴォルテールは周知のように、簡単な規則を与えたのみならず、難しい見本も与えたのであった、この世界劇場の偉大な劇場作家は、ペーター[ピョートル大帝]とカール[十二世]の歴史的慈善芝居では、自分がむしろ錯覚に成功していると確信が抱けるようなところでは、どこでも真理の側にはいなかったのである。そしてこれが本来、真の、歴史的長編小説に合致したロマン主義的物語[歴史]なのである。私ではなく、別な者達が、一 つまり領主裁判長や公使館書記官が、どれほど私が真の歴史[物語]を眩惑的に取り扱ったか判断を下せるのである。いつか私の主人公の真の歴史が表沙汰にほとんどならないのは不幸なことである。さもなければ私に対してひょっとしたら、識者が真理からの私の詩的逸脱を真理と付き合わせて、その後より容易に我々のそれぞれに、つまり真理と私に対して、その持ち分を与えるという正義に恵まれるかもしれないのである。しかしこの報酬のことはすべての国王付の歴史記述者、破廉恥な年代記述者は否応なく断念することになる。自分達の記述と同時に真の歴史[物語]が出現することはないからである。

馬車に閉じ込められた雷雨 — 秘かな山の[鉱夫の]音楽 — 愛で一杯の子供 — ウィーン出身のフォン・ファルテレ氏 — 拷問の夕食 — 砕けた心 — 髭のないヴェルター — 一射撃 — 和解

第十周

伯爵は若々しい諸力と展望の下、同伴者に囲まれて、明るく豊かなミラノを通過して飛ぶように戻って行った。ミラノではしばしば一つの土塊の上に穂先や葡萄、オリーブが共に緑色に茂っていた。すでにミラノ[ドイツ語では五月の国]という名前が彼に春を開示していた。彼は、私同様にすべての五月の生命、五月に咲く花々、こふきこがね、それどころか五月産バターに子供時代多くの魅力を感じていたし、子供時代そのものにも魅力を感じていた。その上彼は騎乗していた。鞍は彼にとって浄福者達の騎士の座であって、鞍保管室がレーゲンスブルク国会の伯爵席であるようなものであった。どの馬も彼のペガサスであった。島にいたときには、かの精神的肉体的に疲れた状態のときと同じで、魂はむしろ薄明るい牧人の世界に、熱く埃っぽい軍事学校やフェンシング教習所よりも赴きたいと欲して、自分の人生の間近な謎や闘争への展望は嫌なものに思えた。しかし今は旅や春の血潮で一杯の心となって、彼は若々しい両腕を一人の敵同様に一人の恋人の方へ、さながら二重の勝利を求めるとして差し出した。

島から遠く離れるにつれ、一層夜の現象の魔法の香煙は大地へ沈んだ。ただ一人の説明し難い香具師を赤裸々に残しただけであった。今ようやく彼は幽霊話を自分の同行者に打ち明けた。ショッペとアウグスティは思案に満ちた頭を振った。しかしそれぞれ別の思いであった。図書館司書は聴覚的視覚的欺瞞の物理的解明を求めた。講師は政治的解明を求めた。彼は墓掘りの場面のこの芝居監督が本来全体何を欲しているのかさっぱり理解できなかった。

図書館司書が唯一安堵した点は、アルバンがその誕生日に「胸のない心臓」に対して訪問することになるという点で、この訪問は — 単にそのまま放置しておきさえすれば、この予言者が一人の近視眼者、嘘つきと明らかになるはずであった。「何なら」(と彼は言った)「私に一人のエゼキエル[四大預言者の一人]が、私が彼を絞首台に運ぶことになろうといつか告げることがあれば、 — そんなことはしないで、情け容赦なく首をへし折る代わりに、その信用と頭とを台無しにしてやろう」。アルバーノは、彼の何も信じない父親に対しても、途中若干赤面しながらも、信じ難い話のことを書き送った。というのは彼はまだ余りに若く、余りに力と反抗心が旺盛で、自他の抑制を愛することができなかったからである。ただ軟弱な落文属昆虫や針鼠の輩のみが指で触れられると自らの内部で輪になり、反り返るのである。開放された頭の下では開放された心がよく見られる。

ようやく彼らは、明るい山々や陰の多い森を十分に、過ぎ去った日中や夜のように後にしたとき、その国々で満たされた騎行路の目的地の間近にやって来た。つまりホーエンプリース侯国はただわずか一侯国先にあることになった。この第二の侯国、第一の侯国のドアの隣国、壁の隣国は、もぎ取られて第一の侯国と一緒に容易に一つの国家へと入り得るものであったが、地理学に明るい読者は御存じのように、ハールハールと言った。講師は図書館司書に境界の紋章や境界石の傍らこう説明した。両宮廷はほとんど互いに不倶戴天

の敵と見なして、それは自分達が外交上の親戚であるからというよりは、――つまり侯爵達の間では従兄弟や叔父、兄弟は御者の許での義兄弟[御者]、古代ブランデンブルク人の許での父とか母以上の意味はないからで、――むしろ本当の親戚であって、互いに相続し合っていたからである、と。私が両宮廷の系統樹を、――彼らの毒の木、竜血樹である系統樹を、――それらのすべての紋章学的枝葉や徒長枝、地衣類を、読者のために植え付けようと思ったら、余りに多くのスペースを要することだろう。世継ぎ皇太子のルイーゼ、男系のホーエンフリースの最後の空っぽの筒の若枝、さし枝が干涸らびたら、ホーエンフリースの国と人民はハールハール侯国に遺贈されるであろうという結論を述べれば読者は納得されよう。ヴェネツィアのライオン頭部[密告投函口]の何という群れをハールハールは将来の世襲国に送っているか、学的新報や処方箋の他は何も飲み込まないことにはなっているのであるが、それに政治的機械工の何という悪漢の群れをボタニー湾[犯罪者植民地]に対するが如く放っていることか、時間がなくて全く言及できない。しかしハールハールは他面ではまた大層健気であって、ホーエンフリースの財政状態、商業、農業、織物業、種馬場の最高の繁栄の他は何も衷心から願っていないのであって、最高に憎み、呪っているものは、すべての公然たる浪費、――最大の肋間神経（つまり金）のこの神経衰弱であって、――これをすべての住民の最強の規範的妨害と見なしていた。「支配者は」（とハールハールの真に友愛的侯爵は言っている）「牧人の長官であって、国家の屠殺者ではない。支配者はそれどころか羊毛鋏さえも牧人の笛ほどにしぼしば手にすべきではない。他人の諸力や結婚生活に我らの従兄弟殿（ルイーゼ）は容喙してはならず、自らのそれに容喙すべきで、それは破壊してよろしい」。――

彼らがホーエンフリース国へ騎行してきたとき、ペスティッツへの脇道にあるブルーメンビュール¹へ、さながらアルバーノの子供部屋（イーゾラ・ベッラ[島]は揺り籠である）へ行くかの如く寄り道できたことであろうが、生憎アルバーノは町に対し熱く憧れており、第二の別離を、つまりいずれにせよ単に第一の別離の純然たる余韻を混乱させるにすぎない別離をはなはだ嫌って馬を進めて行ったのである。旅や、父親の語り、香具師の像、アカデミーの間近さで、我らの[巨大な]怪鳥ロークの翼は、――これは彼の年齢にしては長すぎるもので、舵を取る尾羽は短すぎるもので、――とても広げられていて、手狭なブルーメンビュールでは単に転倒してしまいかねないのであった。いやはや彼は国家や現世で何ものかになりたいのであった。高貴な身分の生活のかの嗜眠的砂漠に対して彼は致命的に反吐を覚えていて、その生活の悦楽の百合の阿片では眠く、酩酊してしまい、遂には二重の麻痺で倒れてしまうものである。

第一ヨベル期からは覚えていないことであろうが、――それに注に記されていたから[ジャン・パウル自身の勘違い]、――アルバンはペスティッツに行くことは許されていなかったのであり、それは騎士一人にだけ知られており、私には分からない十分な理由からのことであった[結末で父侯爵との顔の類似故とされる]。町のこの長い門の閉鎖は単に町への彼の憧れを更にかき立てるだけであった。――彼らは今や馬と共にある広い高台に立っていた。そこで彼らは西にペスティッツの教会の塔を眼前に身、そして振り返ると、――

*1 私はずでに述べた、彼は地方総裁のフォン・ヴェールフリッツの許で育てられた、と。

下に東のブルーメンビュールの塔を見た。どちらの塔からも彼らの許に正午の鐘が吹き込んできた。アルバーノは自分の未来と過去とが合わさって響くのを耳にした。彼は村を見下ろし、そして間近な山の上の方で可愛い赤い小さな家に目を留めた。それは消え去った日々の明るく描かれた骨壺のように輝いていた。彼は溜め息を付いた。彼は将来の人生の広大な建築現場に目を向けた。そして今や全速力で、菩提樹の町^{リンデンシュタット}の塔めがけて、人生行路の[勝利の]棕櫚を目指すように飛び込んで行った。――

しかし可愛い小家が赤い影の如く前方で揺れた。いや彼はこのアルプスの牧舎でかつて偶然に満ちた夢のような一日をすごしたのではないか。それもかの子供時代に、つまり魂が下の大地の水溜まりや壁を越えて掛かる空想の虹の橋の上を乾いた足で進んで行く時代に過ごしたのではないか。――我々は今やこの愛しい一日に、人生の子供らしい前夜祭に彼と一緒に戻り、早期の時を見聞することにしよう。この時は青春のこの牛飼い歌と共にアルプスの牧舎から美しく響いてくるものである。――

第十一周

それはつまりある素晴らしい聖ヤコブの日[7月25日]で、――同時に地方総裁ヴェールフリッツの誕生日で、しかし当時はまだ地方総裁ではなかったのであるが、――ヴェールフリッツは朝方馬車を用意させて、これに乗ってペスティッツの大臣の許へ行き、この国家の打穀機を、地方の交渉人として、できれば播種機に変えたいと思っていた。彼は頑強な男で、他の者達にとって演習日が長く思われるよりも、自分にとって休暇日が長く思われる男で、慰みごとほど退屈なものではなかった。「しかし夕方には」（と彼は考えた）「楽しい一日となるぞ。とにかくわしの誕生日だから」。――彼の誕生日の贈り物は、自分が一つの贈り物を、――するということであった。つまり彼はペスティッツから小さなアルバーノに自分の財布からエスターライン製作のピアノを持って来、――つましい財布であったが、――その上ドン・ガスパールの要請で一人の音楽教師を連れて来ようと思っていた。――

しかし何故このことを読者に前もってごく明確に説明しようとししないのか。――

つまりドン・ガスパールはアルバーノの「教育制度の監査」*1において、アルバーノの精神的超成果よりも肉体的健康さに重点が置かれることを欲していた。認識の木は生命の木に接ぎ木されるべきであった。健康を英知のために犠牲にする者は、大抵英知も犠牲にしてしまうものである。頭脳と心の役に立つのは生来の病弱さであって、生後の病弱さではない。それ故アルバーノはすべての学問の何巻もの百科辞典を本の革紐に屈んでまとめて引っ張るべきではなく、ただ文法を学ぶべきとなる。即ち村の少年の学校時間の後、当地の校長、――名前はヴェーマイヤー、へぼ学士という肩書でより馴染みがあったが、

*1(訳注) Joh. Heinr. Campe(1746-1818)、言語学者。彼の Revision des gesamten Schul- und Erziehungswesens、16巻本(1785-91)を当てこすっている。

一 彼がその素敵なシュトルーベ風徒然^{*1}、余暇^{*2}、閑暇^{*3}を次のことに見いだそうとしたのであった。つまり自分がアルバーノを教え、永遠に活動的な少年の、内的奔流に捉えられている水車の波の中へ、アルファベットのピンを打ち込み、言語円筒としたのであった。しかし勿論セサラは直に言語の鍵盤よりももっと難しいものを動かそうと欲した。かくて例えば言語円筒は本来の意味で音楽円筒となったのである。というのは彼は何時間にもわたって当地のオルガンで、対位法の格別の知識もなしに、(彼は譜面も鍵も知らなかったし、オルガンを弾くとき、吹き出すペダルの上に立ち続けていた)、恐ろしい不協和音を試みて、これに対してはどんなピッチーニ派の異名同音性転調[Enharmonika]も沈黙せざるを得ないもので、しかしそれだけに一層長く、深く、たまたま諧音に当たるとそれに没頭した。一 同様にこの果汁の多い魂は、さながら葉の芽、木の芽、蔓となって働きだし、あらゆる種類の絵画、音階、日時計、計画を形成し、養父の法学的岩の分野でも、例えばファブリ[ファーベル]の国家官房学^{*4}においてもこの魂は働いて、しばしば植物標本の植物のように、その渴した根を広げ、枯れた紙の外に出てくるのであった。何と彼は(子供時代八つ折り判から四つ折り判へ、四つ折り判から二つ折り判へ、二つ折り判からは世間大の大きな本に、一 これはまさに世間なのであるが、憧れるように)、今や予感された教義や教師に憧れたことか。一 しかしそれだけ一層結構なことだ。ただ空腹のみが消化し、ただ愛のみが実となり、ただ憧憬の溜め息のみが学問のオルフェウスの卵にとって活気付ける結実力となる。君達、飛行術の師よ、君達はこのことを考えていない。君達は子供達に飲み物を喉の渇きよりも先に与え、何人かの花愛好家のように、花々の裂けた茎に出来上がったラック色を塗り、その萼に余所の麝香を置き、ただ朝の陽光や肥土を与えようとしな。一 君達は若い魂に静かな時を恵まず、花と咲く葡萄の花粉の下、どんな葡萄園主の方策にも逆らって、鋏を入れ、肥料をやり、剪定して騒いでいる。一 子供達が時期尚早に、未熟な器官のまま真理や美の偉大な領国に君達によって追い立てられるとしたら、丁度我々皆が残念ながら暗い感覚のまま美しい自然に這い入ってしまい、自然に対して鈍感になっているそんな具合であるとしたら、君達は何でもってかの偉大な年月の償いをいつか子供達にできようか。この年月は、子供達が成長したときには、創造されたアダムのように、渴した率直な感覚と共に素晴らしい精神的宇宙の中で回転することができたならば、体験したであろうものである。一 それ故君達の生徒は実際とてもかの歩道に似ていて、これは春にはとりわけ緑なのであるが、しかし後には黄色く、踏み潰されて、花と咲く野の間を通っているのである。

ヴェールフリッツは、すでに馬車の踏み段で顔を若い伯爵に向けて、再度伯爵への監督の命令を新たにし、商人が郵便の貴重な商品箱に対して推奨するときのサイン[取り扱い注意]を伯爵に対ししっかりと行った。彼は炎と燃えるこの子供を自分の子供同様に愛し

*1(訳注) Daniel Georg Strube(1674-1775)は Nebenstunden というタイトルの法学論文集を出版した。

*2(訳注) Hieronymus Gundling(1671-1729)は Otia というタイトルの論文集を出版した。

*3(訳注) Rutgerus Ouwen は Noctes Haganæ というタイトルの本を出版した。

*4(訳注) Antonius Faber の Europäische Staats-Canzley の 142 巻本が考えられるが、Fabri(1755-1825)とのジャン・パウルの混同が考えられる。

ていた（彼は一人の子供しか有しなかったが、男の子ではなかった）。一 騎士は彼を信用していた。この信頼に応えるために、彼は、名誉が彼のすべての行動の重点、宇宙の軸であったので、例えば少年が首の骨を折ったら、躊躇なく自分の首を刎ねていたことだろう。一 アルバーノも夕方町からの新しい教師の前では明らかに立派に振る舞って欲しいのであった。

夫人のアルビーネ・フォン・ヴェールフリッツはすべてを厳粛に誓った。彼女は自分を福音史家のマルコとヨハネとに同等視できた。自分の激しい夫はこの両者の同等の動物、百獣の王たる獅子[マルコの同伴]と鷲[ヨハネの同伴]とをよく代弁していたからである。丁度他の多くの妻がその同伴の観点でルカ[同伴するのは雄牛]と、私の妻はマタイ¹と同等視するであろうようなものである。いずれにせよ彼女は夕方、歓喜の戯れの多彩な蜻蛉に満ちたささやかな家庭的祝典を思い描いていた。とても幸せなことにすでに数日前に辞令が届いていて、我々のヴェールフリッツは地方総裁に任命されていて、誕生日の祝いの贈り物として辞令は今日まで取っておかれていたのである。

しかしヴェールフリッツが館の庭園の背後に去ってしまうと、アルバーノは自分の計画を持ち出して、自分は祝日の一日をずっと向こうの静かな狩猟小屋で過ごしたいと述べた。一人っきりで遊ぶのが好きであったし、大人の客人が遊び仲間の子供よりも彼には好ましかったからである。女達はロドーリ神父に似ていて、彼は（ラムベルク²の日記によると）よろしいの一言を最も避けたのである。少なくとも女達はまず駄目と言ってからにする。養母は（将来は彼女と養妹のラベツテに言及するときには、厭わしい「養」を除くことにしたいが）躊躇せずに駄目と言った。この駄々っ子には否は通せないことは知っていたのであるが。一 それから彼女は地方総裁の意志というとても立派な警告書を借用して、彼によく考えるよう命じた。それから赤い頬の気のいいラベツテが兄に加勢して、何故か分からないまま一緒に頼んだ。一 それからアルビーネが断言した、少なくとも食事は山上に運ばれてくると期待してはいけない、と。一 それから彼は中庭から外に出て行った。...かくてすでに私はよく居合わせたものであるが、女性の肘や骨が、撥ね付けながら、次第に私の目の前で軟骨と化し、曲がって行く次第を目撃したものである。ただヴェールフリッツが居るときにのみアルビーネは長い拒絶の力を有していた。

第十二周

我らの主人公は、ヘルクレスが蛇を圧殺した子供っぽい時代から、蛇をチョッキの下で温めて、後にまたその首を刎ねるといふ神々の食卓[聖餐式]列席可能の時代に入って行った。歓呼しながら外で、一 彼の新しいアダムと古いアダムは翼を広げて、一 互いに飛びながら、何の停泊地も有しない青空の下を進んで行った。食事を気にすることがあったろうか。すべての子供が旅立つ前や旅立っている最中には翼の下に胃を有していない。蝶も羽根が生じてくると、胃が縮むようなものである。先に述べたアルプスの牧舎とか狩

*1 周知のようにこの福音史家には一人の天使が従っている。

*2(訳注) Maximilian Joseph, Graf von Lamberg の Tagebuch eines Weltmannes、1775 年翻訳本による。

獵小屋とは、退職した兵士の妻のための衛兵室を有する狩獵家屋に他ならず、下の階に射的場があり、上の階には避暑別室があつて、そこで老ヴェールフリッツは毎夏行楽や射的会を行いたいのと思つていたが、しかし一回もできないでいた。この哀れな男は仕事部屋で、他の者達なら食堂でそうするように、マストを下ろし、艤装を解く[くつろぐ]しかなかつたからである。というのは国家はその従者を犬のように十回も誘い出しては、単にまた十一回目にまた殴りつけるのであるけれども、そしてヴェールフリッツは国会のたびにすべての公務や貢献を呪つたのであるけれども、一 彼のような実直な男は国家の許ではいつでも、わずか石の[衣服の]襍しか残っていない古代の彫像の許で、補完すべき箇所を見いだすからで、一 彼がくつろぐために見いだす柔らかな寝椅子、ソファーは、更により高度な漕手席を措いてなかつたからである。今や彼はとりわけ、地方総裁になるために努めていた。

ドイツの宮廷は、私が次の少年の牧歌を紹介したら、自分達の子供のことを考えることだろう。私の黒い目の牧人は、アルプス牧舎の山城に突進して行き、兵士の妻から薄緑の避暑用小部屋のドアの鍵を受け取った。何ということか。すべての東側と西側の鎧戸と窓とが開けられて、東からの風が文書をめぐりながら、涼しく部屋の湿気を撫でて来て、一 外部に天と地が窓の周りに立ち並び、頷きながら覗き込んだとき、一 アルバーノが窓の下の東側に深く広い谷を、岩の多い、水の跳ねる小川と共に眺め、小川の上では、太陽が小石のように斜めに投げかけるすべての微光の円盤が山腹を駆け上がって行つたとき、一 そして彼が西の窓の前では丘と小森の背後に天のアーチと菩提樹リンデンシュタットの町の前の山を見、この山が大地の上に投げられた曲がった巨人のように眠っていたとき、一 更に彼が窓から窓に移って座り、「これはとてもきれいだ」と言つたとき、小部屋での彼の楽しさは最後には輝かしいものになって、彼は外に出て、その楽しさを外でもっと高めることにした。

平和の女神はここにその教会と教会用椅子とを有するように見えた。一 強健な兵士の妻は、高く茂つた小庭に早豌豆を植え、時折桜桃の木の中の盗み食いをする鳥達に土塊を投げて、また飽くことなく新たな亜麻と移植されたサラダ菜に水を注ぎ、小さな十歳の娘の許にいそいそと走って行つた。この少女は天然痘で盲いていて、ドアの敷居で編み物をしていて、ただ編み物の目を落としたとき、彼女を機械仕掛けの女神として呼ぶのであつた。アルバーノは可愛く開かれている谷の最も突き出たバルコニーに身を置いた。風が吹き寄せるたびに彼の心に、飛んでみたいという子供っぽい憧れが吹き付けられた。引張る大地の足枷から身を放ち、自由に拉致されてエーテルの中に身を投ずることは何という幸せか。一 かくも涼しく吹き抜ける大気浴の中で、上下にぼちゃぼちゃと、昼の最中に薄明の雲の中へ飛び、そして雲の下でさえずる雲雀の傍らを人知れず漂い、一 あるいは鷺を真似て飛び、飛びながら町々を単に装飾された段の蝟集の如く、長い奔流を単に灰色の、対の国々の間に引かれた緩い綱の如く、平野や丘を単に小さな色彩粒や色付き影に中へ這い込んだものとして見ることは、一 そして最後に塔の先端に落ちて、燃え上がる夕陽に向かい合つて、それから夕陽が沈むと飛び上がり、今一度夜の墓場の中で夕陽の明るくぼっかりと見続けている目を覗き込み、最後に地球がその上に転ずると、醜酷してすべての赤い雲の森の夕焼けの中へ舞い飛んで行くことは、[何という幸せか]。...

この肉体的翼が我々を精神的翼の如く引き上げるのはどこから生じているのか。どこか

ら我らのアルバーノは高みへのこの思わず知らずの憧憬を、このスレート屋根葺き職人の梭[シャトル]への、山の先端への、気球船への憧憬を、さながらこれらは深い大地の陣営からの起床用ベッドの総であるかの如く、得たのか。汝の、まだ蛹の殻で覆われた魂は、まだ目の視野を心の視野で混同し、外的昂揚を内的昂揚で混同し、物理的天体の中を理念的な天体に従って昇って行く。 — というのは偉大な思念の前で我々の頭や肉体を昂揚させ、胸腔を拡大する同じ力が、すでに偉大さへの薄暗い憧憬と共に肉体をも起立させるからで、蛹はプシュケの翼で膨らみ、いや魂が肉体を引き上げる同じ綱の許で肉体もやはり魂を持ち上げることができなければならないのである。 —

少なくともアルバーノは徒歩で山を下りながら飛んだ、薄緑の白樺の森林の中へ涼しげに流れている小川の中を徒渉するためであった。すでに何度か羅牌のすべての線や花卉[方向]を求めてのロビンソン・クルーソー的嗜好に彼は駆られていた。彼は好んで見知らぬ道をかかなりの距離、どんな具合になっているのか見るために歩いた。彼は小川の銀色のアリアドネの糸に従って、深く緑の迷宮の中へ入り込み、長い藪の奥のドアを開けて広い展望に達しようとした。 — それには達しなかった、 — 白樺は一層まばらになったり、一層密になったりし、小川は一層幅広くなった、 — 雲雀は彼の上、外の高い遠方で歌っているように見えた。 — しかし彼は意地を張った。極端が彼にとっては以前から磁性的極であった。 — 中間は単に零点であったようなものである。 — かくて彼にとって例えばバロメーターの最高点の他には最低点より好ましいものはなく、最も短い一日は最も長い一日同様に歓迎で、しかしその両者の後の日々は厭わしかった。

数時間、時空の中で進んだ後、ようやく彼はよりまばらな白樺の背後、小川のざわめきよりも一層強いざわめきの背後で自分の名前が二人の女性の声でしばしば小声で称えるように呼ばれるのを聞いた。今や彼は駆けて、肺と生命の冒険には頓着せずに、はあはあ言いながら、また戻った。 — 彼の名前が長いことその後また彼の周りで呼ばれた。大声となった、 — 彼の秘かな守護聖人の女性、アルプス牧舎の司令官夫人が彼のためにこの遭難号砲を山の麓で発したのであった。

彼は上の方にやって来た。大地の丸い卓が明るく、奇妙に和らげるかのように彼の渴した目の周りに横たわっていた。まことにこの渡り鳥は広大な別離のせいで疲労と共に胸の歌格子の背後で、自分の遠方の国々や時期を思い出して、それで憂愁の念に駆られたに違いない。それほどに赤い屋根で多彩な染みの付いた風景は彼の前でその白く輝く石や池を光の磁石や陽光の破片の如く並べていて、 — ^{リンデンシュタット} 菩提樹の町への長く灰色の車道が、町への眺望は避暑用小部屋に掛かっている、そこの二つの塔の先端は山脈の上へ芽生えていたのであるが、彼の前で遠方の旅人を、彼にとっては閉ざされた町の中へと運び上げていた。

— そして実際すべてが西の方へ飛んで行った。苗床の上を波打って進むくうくう言う鳩が飛びすぎ、軽やかに高い庭の上を移る雲の影が飛んで行った。...最も若い心が最も古い心の高鳴りを有するのであり、ただその深さを測る測鉛を有しない。 — 『学的ドイツ』^{*1} は、数周以来、私の主人公のこのアルプス牧舎の日に必要な品位を付与する偉大な宿命、運命に対して心構えをしていると私は気付いている。その運命をまず最初に知ら

*1(訳注) Joh. Georg Meusel(1743-1820)による人名辞典。

なければならぬ私は現在まだそれらについて何も知らない。少年時代から、 — いや
どんな年代からも、 — 我々の心にとって、他の心ならどの心でも忘れてしまうような
日々がしばしば不滅なものとして残っている。それでこの日はアルバーノの心から決して
消えることがなかった。時折子供の一日は突然意識がより明るく目覚めて永遠化される。
子供の中で、殊にセサラのような子供の中で、精神的目が胸の中での世界を求めて、子供
達がそう見え、我々がそう思うよりも早く、鋭く回転するものである。

今や館の塔の中で時計が鳴った。彼の間近な養母と、 — 拒まれた食事のことを思い
出させる愛しい間近な音色と、 — 両手にすでにパンの木の小枝、あるいは枯れた花苔
を持った盲目の少女の光景、 — それに今日は養父の誕生日であるという考え、 —
それに彼がよく突然一人っきりで首にすがりつく大事にされなかった母親に対する言い難
い愛、 — それに生来露を帯びている彼の心、これらのせいで彼は泣き始めた。しかし
強情張りはそれが故に家に帰らなかった。ただアルプス牧舎の女性は自発的に走って行き、
探している母親に逃亡の男の子のことを告げた。

彼はこの真昼の静かさの中で、小さな盲目のレーアから、その顔には天然痘の母音符号
で穏やかな優しい特色が読めるように走っていたが、若干の言葉を、あるいは彼女が豌豆
から鳩を、桜桃から雀を追い払わなければならないときの長い杖を、協力しながら貰おう
としていた。しかし彼女は黙って腕をしっかりと両目に押し付けて、高貴な若殿の前で内気
でいた。ようやく母親が放蕩息子に食事を持って来て、その上ラベツテはデザートワイン
で一杯の気付け香料瓶を持って来た。

アルビーネ・フォン・ヴェールフリッツは、国家とは違って、脅迫はせず、ただ約束だ
けを守る女達の一人であった。 — この女達はニュルンベルクの森林官に似ていて、彼
らはどんな些細な盗伐に対しても百フローリンの罰を課すのであるが、同じ時間のうちに
百クロイツァーに軽減するのであり*1、 — しかしその法律を、ソロモンが百年間にわ
たって有効としているように、そのより小さな国家の状況に従って百秒間有効としている
のである。

第十三周

食卓の皿を戻す間に生じたもっと重要な出来事について報ずるのでなければ、私はアル
バーノが大人のように肉を切り分けて、同居の者達と分け合い、アルバーノ自身に贈るこ
とのできる彼の思い出の饗宴からもっと語ることだろう。アルバーノは外に出て行った。
彼の内面の海全体がワインと午前中のことで燐光を發しながら輝いていた。そして青空が
一層激しく彼の周りで風を舞わせた。 — 彼は朝がとうの昔に過ぎ去ったかのような感
じを抱いていた。そして彼は朝のことを優しい気分で思い出していた。我々皆が青春時に
子供時代を、老年時に青春時代を、それどころか夕方には朝方を思い出すようなもので、
 — 自然の諸イメージが一層間近に迫って来て、カトリックの画像のようにその目を動
かせた。そのように現在は我々に単にイメージを視覚的歪像としてもたらし、我々の精神

*1 『或るドイツの会計局長官宛』、第一巻、276頁。

がようやく凸面鏡となって、それらの歪像を美しい人間的形姿に変える。何と甘美に夢様に沈潜して、東からの風を受けながら、両目を閉ざして、風景の物音、雄鶏や小鳥の鳴き声、牧人の笛の音をさながらより深く影となった魂の中に吸い込んだことか。そして彼がそれから山の岸辺で両目を再び開けたとき、下の谷には平和に草を食む白い子羊達が笛を吹く牧人の傍らにいて、上の天では輝く子羊のような雲[巻積雲]がそれらの上に横たわっていた。 —

しかし彼は一度敢行したくなって、小庭へ、 — 盲目の少女はいずれにせよ見えないので、 — 盲目となって手探りで歩き、両腕を公然と前に保ちながら、何にも突き当たらないようにした。 — 彼の胸に少女の胸が当たって、彼が目を開いて震えている少女を自分の間近に見いだしたとき、少女は脇に身をよじりながらどもって言った。「いやよ、いやよ」。 — 「ただ僕だよ」(と、この無邪気な少年は、彼女を掴まえながら言った)「何もしないよ」。 — 彼女が謙虚に恐る恐る身を任せたとき、彼は更に少しばかりしっかりと掴まえて、かがめた頭を甘美な気持ちで見下ろした。

衷心より彼は貧民のためのこの喜劇で驚いた少女に慰謝料と慈善金を払いたかったことであろう。しかし手許に何も持っていなかった。しかし幸い妹のラベツと、 — この包帯[リボン]製造人から彼は誤って、何人かの少女達はリボンに目がなく、リボンを手品師のように飲み込んで、再び出すことはない結論付けていて、 — それに自分の新たな弁髪リボンが思い浮かんだ。彼は喜んで長い絹の襷袢紐[リボン]を自分の頭から彼女の頭に巻き付けた。しかし愛らしい接近や、より繊細な内心のリボンの編み細工や、与えるという甘美さや、生来の過剰さの快活さのせいで、彼は彼女のエプロンにドレスデンの緑の陳列室[ドーム、宝石収集室]を注ぎたい気分になっていた。そのとき行商ユダヤ人が胃部の上により小さな絹製のドームを、背中には仕入れた髪の毛で一杯の袋を掛けて、ペスティッツへの通りを通って来た。ユダヤ人は呼びかけに応じたが、どんなに両親や小使い銭との交換を提示しても、何も貸そうとしなかった。立派な赤い頭巾リボンがあればレーアの盲目の目には傷口の赤い瀉血の包帯同様に似合ったことであろう。盲目の女性は目の見える女性同様に着飾ることが好きだからで、これは虚栄心が強くて、鏡の外部で他の人達の気に入るよりも鏡の中の自分の気に入りたいと思っている場合別の話となる。商人は喜んでリボンを彼女に触って貰い、こう言った。自分は村々で髪の毛を仕入れている、昨日は旅館の子供達が燃えている火口で編髪で一杯の自分の袋全体を短い毛に縮めてしまった。若殿様はその褐色の髪をうなじの所まで切らせて頂けるのであれば、リボンと更にヴェルツブルクの工場製の有用な革製の弁髪を早速差し上げましょう、と。 — どのようなことになったか。リボンはとても赤くて、 — レーアは期待で赤くなって、 — ユダヤ人は止めましょうと言った。 — いずれにせよお下げはこれまで二番目の背骨の如く、本物の最初の背骨の上に垂れていて、アルバンにとっては毎朝の退屈な編み込みのため自分の情熱の制動網、馬銜となっていた。 — 要するに哀れなこの筆られ兎はユダヤ人にフランク王朝の権標[メロヴィング家では長い滑らかな髪が王の印であった]を譲って、ヴェルツブルクの分け髪[弁髪]をわがものとするようになった。

そこで彼は彼女の手をまことにたつぷりと上下に振って、顔に愛する歓喜に満ちた楽園全体を浮かべて言った。「リボンはとても良く似合っているよ、盲目の嬢ちゃん」。今やこの不滅のパトロンは何と桜桃の木に登って、上の方でレーアのために生きた案山子とし

て、雀を桜桃から追い払い、また果実の神として幾つかの桜桃をロザリオ、花綵[果実の輪飾り]を彼女に投げ落としした。

いやはや。向こうのハート型桜桃の間で、効き目のあるベラドンナ[狼桜桃]が少年の頭に作用しているように見えた。地球が暗黒の中世を有していたように、しばしば少年は甲高い与太説教や茶番で一杯のかなり薄暗い中世の一日を有している。高い枝の上で生長する風景や山々や落ちかかる太陽や殊にペスティッツの塔の先端がとても天上的に輝きを放っていて、彼は今やより高いものとしては、 — 自分の横的的竿の他は考えられなくなっていた。的竿の上の驚の他は、より幸福な王座の驚を考えられなくなっていた。...

しかし今や私はすべての女性の読者の方々にお願いする。狩猟小屋に入って行くか、あるいは兵士の妻と一緒にそこから出て行くかして欲しい、と。兵士の妻は走り続けて、型破りのことを恵深い夫人に知らせるのである。というのは私の読者で次の次第に耐えられる女性は少ないからで、つまり我らの主人公、『巨人』の嫡男は、何人かの小作請負人の下僕によって、 — 彼らはその上アルビーネからもっと速やかに彼を連れ戻すよう再行軍の指示を受けていたのであるが、 — 的竿の鉤の下に嵌め込まれた横木の上に固定して貫き、自分の下半身は的竿に縛り付けて貫き、かくて空中に水平に横になり、次第に大きな弧を描いて持ち上げられ、広々とした天の中に置かれるようにしたのである。良くないことである。しかし下僕達は彼の強い目による依頼、彼の画家的な意志と勇気、提示された賠償と戴冠式記念貨幣に抵抗することができなかった。そしてその際彼はその驚の半分ほどの重さにすぎなかったのである。

幼い者よ、私は汝に好意を抱いている、汝の強情な、頭と心臓の間に築かれた大胆な首[命知らず]にもかかわらず。汝の怪物的な諸力のバロックの真珠[歪んだ真珠]は時が、緑の[ドレスデンのドーム]陳列室で、工芸家が物体の真珠をそうするように、きっと美しいフィギュアを作るために使い古すことだろう。 —

その架の上の我らの帝国の驚の帝国史は、へぼ学士と地方総裁とが偶然人の乗った的竿の所に来たとき山上で生じた出来事と共に同時に広まっているのであるが、第十四周に入れば、遅滞なく紹介されよう。

第十四周

遠くからは鳥の形姿と動きの納得ができなかった学士のヴェーマイヤーは登って来て、教え子の十字架上昇を見上げた。彼は最初大胆さに対する氷の戦慄という灌水浴に陥った。しかしすぐにそこから出て冷や汗の滴水浴に進み、この不安で、今にもこの弟子は落下してきて、オシリスのように二十六の破片に、あるいはメディチ家のヴィーナスのように三十の破片に砕かれかねないという思いに駆られた。「それも今」(と更に彼は考えた)「この若造が立派に話して、拙者が若干の名誉を感ずる次第になったら」。そこで彼はただ機械的に持ち上げた者達だけを叱責して、高みの監視人を叱りつけなかった。答えながら上から滑り落ちて来ないか心配であったからである。不安の渦にはまった学士を引き倒しような視覚上のこの馬車に、ようやく本物の馬車が追いかけてきたが、その馬車には将来の

— 地方総裁が座っていた。何ということか。 — いずれにせよ、総裁はいつでも大臣の許では苦いエキスの胆嚢全体を汲み上げていた。それは単にそこではもっと可愛い、

もっと静かな子供達だけを見いだしていたからであるが、 — この箇所には達しているに違いない百人もの父親同様に、 — 子供達はその父親同様に、実際よりももっと良く他人に見せかけているということを考慮していないのであり、またそもそも町の生活は村の生活の瘤状の厚い樹皮の代わりに滑らかな白い白樺の裏箔を与えるのであって、その子供達は結局、その両親や廷臣同様に、ただ栗に似て、外皮は滑らかであるが、内部は忌々しくがさつに感じられるものであるということを考慮していないのである。そんなわけできっと田舎のどんな繊細な男も、いつも少なくとも、十歳程度の皇太子や大臣に欺かれることであろう、 — たとえ、この男は彼らの父親達とはもっと簡単に対応できると仮定したも。

ヴェールフリッツは自分の養子がシュレックホルン[アルプスの山、恐怖の尖峰]に巣くっているのを見、その下に見上げているへぼ学士を見たとき、この教師が準備したと想像して、閉じ込められた馬車の中からその首へ雷雨と雷鳴で一杯の小さな天を声高く呪い始めた。迫害されたヴェーマイヤーも山上で声高く、シュレックホルンを見上げてがみがみ言い始めた。自分は職務を果たして、然るべく教育する打ち出し槌としての法の槌で教え子を鍛えていると総裁に見せるためであった。兵士の妻は[困惑して]手を揉んだ。 —

下僕達は十字架の撤去に取りかかった。 — 哀れな子供はナイフを取りだして下の方に叫んだ。「誰かが今、的竿を下ろしたら、すぐに切り裂いて、身を投げるぞ」と。彼はそうしかねなかった。 — 彼の生涯と私の『巨人』は早々と終わっていたことだろう。

— ただ単にかくも多くの人の前で父親から本当の侮辱、口頭の侮辱を受けるという恥辱は、 — 実際馬車にはそれどころか他人の紳士も座っていたのであり、自殺や地獄よりも情けないものとして嫌ったからである。しかし総裁は、自ら大胆不敵となって、それでいて子供の大胆不敵には我慢ならず、運を天に任せて、馬車の扉の鍵を持った従者を激しく呼び寄せた。彼は出て、上に行きたかった。彼は言いようもなく腹を立てていた。第一に彼は馬車の後部にエスターライン製のピアノを今日の喜びの日の贈り物として積み込んでいたからであり、 — アルバーノときたら、何故おまえの歓喜は居酒屋のバイオリン弾きの舞踏曲のように不協和音で終わるのか。 — 第二に、馬車の中でアルバーノのために磨かれた輝くような大臣の家から歌と踊りと音楽とフェンシングの教師を自分の横のクッションの上にデビュー役の観客として座らせていたからである。ゴットリーブは御者席から馬車の扉の前に跳んで来て、呪いながらすべてのポケットを探った。しかし馬車の鍵はどこにもなかった。監禁された総裁は動物の檻の中で体を振る豹のように動いた。彼の憤激は獵師が次々に射撃するライオンのように、第三者に跳びかかった。アルバンは落下せんと綱をあちこち切りつけていた。へぼ学士が最も良い按配であった。というのは彼は半分死んでいて、彼の酸っぱい不安の汗の流れた冷たい体の背後ではもはやほとんど外部世界のことは知らず、彼の自我は涼しい鉛の中の嗅ぎ煙草のようにしっかりと良く詰め込まれていたからである。

いや、私は一緒に的竿にいるかの如く、不安げな少年と共にもっと強く困っている。上品に曲がった鼻の彼の感動的に高貴な顔には西方のアウローラと羞恥とが朱を注いでいて、低い太陽が接吻するように、彼の両頬に懸かっていた。さながら薄暗い地球の最後の最高の薔薇に懸かっているかのようであった。彼は反抗的に見つめる目を愛しい太陽から、その陽の上に住む日中から、^{リンデンシュタット}菩提樹の町の側面でほの白く輝く、二つの町の塔の擬宝珠か

ら転じて、力強く描かれ、鋭く角の多い臉を、これをディーアンはラファエロの上昇する聖母[サン・シストの聖母]の幼子イエスの余りに英雄的な、感動的な臉と比べたものだが、心細く低い大地での鬱陶しい諍いの上に向けなければならなかった。

ゴットリーブはどんなに探しても馬車の鍵を見いだせなかった。というのは彼はそれをポケットの手の中に有していて、若殿を思いやって、若殿は従者全員が九柱戯場のように「大好き」であったので、取り出したくなかったからである。彼は錠前屋を呼び寄せることを提案した。しかし御者はむしろすぐに工場まで行くよう助言して勝った、一馬を叱りつけ、一説教壇にいる逮捕されたこの論難説教家を、積み込まれたエスターライン製のピアノと一緒に連れ去った。ゴットリーブが座る間に砲手が馬車の中から投げつけることのできたわずかなことは、彼が窓を突き破って、その射撃孔から、的竿の上の不運な鳥に、緊急の残りの射撃の若干をなお追加することであった。

今や学士はその勇氣と憤怒とをまた取り戻して、大胆にこのアブサロム[サムエル記下、18,6-15]の沈降捕縛を命じた。的竿の席の子供が彼の前に落ちかかってきたとき、彼は指の五本の門歯を五線引きペンのように頭皮に当てて、それで後頭部に五線を引き下ろした。髪の毛の曲がった線を戯れにそれで修正する意図でそうしたのであったが、自分の手をバイオリンの弓の毛留でする按配に適度に引き寄せたとき、驚いたことに私の主人公からヴェルツブルクの弁髪を、尾羽の如く引き抜くことになった。

ヴェーマイヤーは驚いて「巻尾」を見つめた。そして自らの些細な失敗へと注意をそらすことで、アルバーノはアルキビアデス[犬の尾を切って注目された]が、一ロバスピエールの尾[残党]の切断で注目を得たような具合になった。学士は今日老ヴェールフリッツの許で夕食を共にする必要があることを神に感謝した。そしてあつけにとられて、彼をまがいの弁髪と共に家に帰した。

第十五周

善良なアルビーネは一日中夫に対してすべての燃素を（彼の神経の硫酸ナフタはすぐに遠くから引火して怒りの炎となるので）遠ざけて、それで何事によっても別荘が歓喜の火事場が変わったりしないようにした。一いや夕方の上天的エルサレムの郊外としてラベッテは鋤夫からなる移動オーケストラを食堂の別室へ隠していた、一そしてアルバーノに対してはアルビーネはすでに伝令の服装を考案していて、彼に地方総裁の任命を渡すことにしていた。一しかしそれで妻が得たのは、入って来たヴェールフリッツの投げかけた炎に他ならなかった。彼は胃の中にラクダが有するようになお学士に散布するための冷たく長い水柱を保有していたのであった。一

アルビーネは、大方の女性のように、胆石による男性の投石死刑を五十ポンドの公差[公認誤差]、結婚生活では無料で済ませられる公差と考えて、いつものように最初陽気には認して、不機嫌のすべての涙を隠した。冷たく水を注ぐと男達とサラダ菜は硬化するからで、一それから正義を段階的に撤回し、一しかし非難はまず舌先で穏やかなものにした。子守女達が子供達の洗滌水を口の中で生温かくするようなもので、一そして最後に言った。子供はただ自分に任せなさい、と。

しかし見る間に老ヴェールフリッツは黙示録の竜へと、ジュヴォダンの獣[狼]、暴君へ

と膨張して行った。 — しかし実際は二本の小さな角を有する一匹の子羊にすぎないのである。 — 彼は夫役の人生の難儀な一年の誕生日にほっとする夕べを要求する権利があったのではないか。少なくとも自分の子供よりも強く愛する子供の許で、ピアノと教師とを積んで来た子供の許でその権利があったのではないか。それに彼は子供に、 — 自分自身は余りに大胆で、耐久力があるが、 — 自分を真似て、馬に乗ったり、嵐や豪雨や吹雪に身をさらすことのないよう百度も禁じていなかったらどうか。 — それに彼は教育学的鞭親方、大臣の許から帰ってきたのではないか。その教育施設は単により長い現実の脅迫であり、より短い劫罰であったのではないか。厳しい両親を目にするとより厳しくなり、これに対し穏やかな両親を目にするとより穏やかになるのではないか。

アルバーノはまずラベッテと出会った。手に自分の革製の後車軸を有して、父親の書齋への、つまり真の革命裁判所の統治懲戒を受けるための反抗的途上であった。しかし彼女は背後から彼を掴まえて、天使祝詞をかけた。「あなた、アブサロムね」。そして力尽くで彼を押さえ込み、しっかりと驚いて問いただしながら髪の大静脈を容赦なくきっちり結び付けて、 — そして父の怒りの突風を恐ろしい色合いで描き、 — また音楽的鉦山部門の風を滑稽な色合いで描いた。この部門は食堂、つまり行きつ戻りつしている総裁の競争路、獵場たる部屋で、休憩しながら平和の時を待っているところだと言い、接吻して彼を離しながら、こう言った。「腕白で、お気の毒」。

彼はピンとした髪で反抗心を強められながら、食堂へ行軍して行った。「失せろ」と火花を散らす突撃兵は言った。アルバーノは早速ドアから戻って行った。不当な怒りに怒りを覚えて、それ故不健康な怒りのことは余り悲しく思っていなかった。彼の良き父は激しく、誕生日のために用意されたテーブルの許で、行き来しながら、昔ながらの悪い癖で[不健康なことに]、自分の怒りの十分に燃え上がった石灰坑をワインで静めていたのである。

彼の後、数分経つと、音楽的アカデミー、鉦員達も不機嫌になり、ぶつぶつ言うコントラバス奏者へと変わって行った。味気ない小部屋にいて時間が退屈なものとなり、それ故、バスーン奏者やバイオリン奏者はこっそり調律して楽しもうと思った。いつも何という切れ切れの音が飛び交うのか合点が行かなかった総裁はそれを長いことメロディーの空耳と思っていたが、突然打弦楽器の鍛工場主がその音楽上のハンマーを弦を張った三和土へ落としてしまった。ヴェールフリッツはその瞬間ドアを開けて、音楽的巢窟と陰謀全体が武装して目の前で輪となって座り、待機しているのを見てとった。 — 彼は「小部屋で何の用があるのだ」とすばやく尋ねると、ちょっと心付けをした後、全員に鳴り物を弾かずにその革の飾り前掛けやパリの下着と共に去るよう命令した。

アルビーネは穏やかな顔で、破門された寵児を裁縫室へ来るよう合図して、そこで落ち着いて本当のことを問いただした。彼は嘘を付かないと知っていたからである。報告を聞いた後、彼女は彼の過ちのことは余り述べず、(これでは目の前の子供に、そこに居ない夫と比べて正当なことではなかったけれども、先には目の前の夫に、そこに居ない子供に比べて正当なことではなかったようなもので)、むしろその結果を述べた。 — 彼女は(彼のネックチーフを解いて、直し、若干のチョッキのボタンを閉めた)、どんなに自分の夫が二十四ものファスケス[権威の象徴]を有する一緒の第二の学校執政官の前で、つまり向こうで着替えをしている音楽教師、ダンス教師のフォン・ファルテルレ殿の前でアルバーノの心根を恥ずかしく思ったことか、 — ダンス教師がそれどころかドン・ガスパ

ールに手紙を書くかもしれないし、　—　どんなに自分の夫にとって今日の喜びの甘く描かれたゼリーの林檎全体が水の泡となってしまったことか、まさにこのような晴れの日夫が孤独に心を痛め、ひょっとしたら怒りにまかせて飲んで死んでしまうかもしれないと描いてみせた。女達は通常、ハープ奏者のように、ちょっとした踏み込みで真実の音色の全体[全音]を演奏しながら半分の音色[半音]に変えてしまうものである。　—　彼女は更に父親の夕方の雷雨を計算してみせた後、つまり彼がいつもその乗馬やロビンソンの旅のせいで自分の許に引き寄せ、その轟きは単にいつもその避雷針（彼女自身を）砕くのだと語った後、かの動揺した声で、骨張った喉からではなく、波打つ心臓から流れ出る声でこう言い添えた。「アルバン、いつかあなたの養母を思い出すことになるでしょう、でも遅すぎるかもしれない」、そしてまことに穏やかに泣いた。

これまで彼の中では流れがたい鉾と自分の心の溶け去った部分とが並んで沸き立っていた。そして温かい流出が胸の中でより高く、より熱くせり上がって来た。ただ顔だけは冷たく固いままであった。　—　というのはある種の人間はまさに溶け出るときに硬化の外観と状態を最も多く有するからで、雪が溶け去る直前に凍結するようなものである。　—　しかし今や余りに窮屈に結び付けられた弁髪を引っ張って、これは間近な突発の当惑した印であったが、そのヴェルツブルクの付録を自分に対する怒りの痙攣の中で引き千切ったのであった。それを目にする前に、アルビーネは総裁への任命状をこう言って彼に渡していた。「難しいことだけど、ただこれを持って行って、こう言うのよ。僕からの誕生日の贈り物、これからは心を入れ替えます、と」。　—　しかし彼の手が武装しているのを見ると、諦めた過去の深い余韻をこめて、びっくりして尋ねた。「アルバン」、そしてその痛みを誤解していた哀れな子供から、早速苦すぎる涙と共に向きを変えて言った。「一体これはまた何なの。何で今日は皆私の心を苦しめるの。さっさと行きなさい」。　—　「いや、こちらに来て」（と彼女は彼に呼びかけた）「詳しく話しなさい」。そして彼が無邪気に本当のことを話したとき、彼女の涙で圧倒された声はもはや非難することができず、ただこう言えただけであった。「贈り物を持って行きなさい」。それでも彼女の心づもりでは、夫に対して髪を短縮は彼女の意志に従ったからであり、上流の都会の子供達のファッションに従うものと称することにしていた。　—

アルバンは進んで行った。しかし難儀な途上一杯の涙腺と保っていた心とは弾けて、目から涙を流し続けながら、孤独な養父の前に近寄って行った。養父は疲れて思いに耽って頭を支えていた。子供は大きく封印された証書を前に突き出して渡し、ただこう言えただけであった。「贈り物」と。それ以上何も言えずに、熱い目からは雷雨の滴と共に火花が飛んだ。無邪気な子供よ、父親のボタンを外した胸にこっそりと身を置き、父親が右手で名誉の魔法の杯を手にして、それを飲んでいるとき、その左手では自分を撥ね付けられないようにするがいい。のけようとする手は遂にはただ弛緩して、重みもなくなり、おまへの濡れた炎の頬と懺悔で一杯の温かい目の上で脈打つようになることだろう。　—　それから老父はその勅書をもっとゆっくりと目を通そうとし、ほとんど最初の声を押しやることだろう。　—　それから老父は、おまえが言いようもなく性急に彼の手を、おまへの接吻するような顔に押し付けるとき、丁度目覚めたかのような振りをするだろう。そして目にほの白い輝きを浮かべて硝酸のように冷たくこう言うことだろう。「お母さん呼びなさい」、　—　それから彼は、おまえがおまへの白熱する、愛で痙攣する顔を、髪が

前に垂れたまま彼に対し持ち上げ、この髪が穏やかにおまえの桜桃の頬から元に戻るとき、去って行くこの寵児の後をかなり長いこと眺めて、その目から何かを拭き取って、それで思いのままに、証書の宛先を読めるようにすることだろう。...

アルバーノよ、私の言は当たっていたかい。 —

第十六周

どんな名誉の柱であれ、人々がその柱の上に乗せる一人の男の心を高めるもので、人生の靄の上に、困窮の霰雲の上に、うんざりの霜の霧の上に、 — 怒りの可燃性の大気の上に高めてくれる。私は歯ぎしりしている人狼には好意的書評という魔法の紙を提示するつもりである。 — すると人狼は尾っぽを回しながら私の前でへつらう子羊と化すことだろう。一人の妻がその短気な作家にいつでも批評的トランペット作品を名声の女神のトランペットで吹いてみせることができれば、彼は一人の天使に似、彼女は例の居酒屋のバイオリン弾きに似ることだろう。このバイオリン弾きは熊狩で熊公のザウルを舞踏曲でおとなしくさせるのである。

ヴェールフリッツは生まれ変わった熾天使としてアルビーネの所にやって来て、名誉を語った。いやそのエトナ火山の爆発の赦しを彼女に請うために、いつものように「司教は御免だな[nolo episcopari]」と言うことはなかったし、仕事の登攀し難い山脈が今や周りに控えているとも言わずに、 — 幸運の打ち出の宝角から手を当惑してこのように引き抜く代わりに、妻達にはより見慣れた、このような歓喜の処女らしい内気さの代わりに、彼は未亡人らしい率直さを見せて、アルビーネに言った。今朝の彼女の願いはすでに贈り物となった、と。 — そして尋ねた。一体どこに約束の夕食のご馳走と人々と、学士と音楽教師、学士はこの音楽教師に会い損ねたと思うが、それにラベツテと皆はどこに隠れているのか、と。 —

しかしアルビーネは、夙に前にアルバーノを通じて、学士に招待とすべての雷雨の沈静と新しい店員の到着を伝えさせていた。ヴェーマイヤーは、本来貴族のところでの食事は大嫌いであった。それは単に食卓で食べる俳優として会話や処世術や注意やすべての関節の姿勢やすべての食べ物の運送に大いに気を配らなければならず、ゆっくりできないために小さな物、 — 例えば酢漬け胡瓜、栗、蟹の尾を、 — ただ全体、何の味もなく飲み込むことになって、それで後に穀物飼料を、飲み込まれたヨナの如く、しばしば三日間自分の胃の獲物袋の中で持ち運ばなければならなかったからである。しかしこの度は喜んで食事の身支度をした。教育学上のライヴァルに興味があつて不機嫌であつたからであり、これは不安からであつた。つまり新しい小作請負人がひよつとしてアルバンの播種された土地での立派な冬穀を自分の育てた夏穀と称しかねないと思つていたのである。彼は自分の短縮された教育方法に、自分の教え子のすべての奇蹟的諸力の源を、即ち水の土壤に、そこで育つた植物の馥郁たる精神の源を見ていたのである。^{*1}

*1 というのはボイルがその試論の中で、はなきんぼうげや薄荷等は水中で育てると通常馥郁たる諸力を発展させると知つたからである。[Robert Boyle(1627-91) *Experimenta et observationes physicae*. 1691ff.]

二分割された[ヴェーマイヤーとファルテルレによって]寵児を自らの手で案内しながら、より大きな、より慎重な愛を抱いて彼は、三枚の襟カラーの植物性緑色のフリーズを着て、ラベットの小部屋の前に着いた。――「フォン・ファルテルレ様はここで」（と彼が入る際ラベットが言った、からかってではなく無遠慮で言ったのである）「先ほど犬が入ろうとしたとき、あなたかもしれないと仰有ったのです」。――「いいですか」（と冷たく真面目に見栄坊のフォン・ファルテルレは我らの農馬の隣で答えた）「犬がドアを引っ掻いたのです。――しかし大臣の許でもパリのすべての大邸宅でも誰もが、単に小部屋に入り、大きな部屋に入るつもりのないときには、指の爪で引っ掻くものです」。

――

この両同職者の隔たりは何と立派に絵画的であったことだろう。黄色の夏服の多彩な飛膜、あるいは背中エプロンをした教練教師は、さながら蝶の黄色の上翅を付けているかのようで、その濃い下翅は（彼がボタンを外すと）チョッキとなっていた。――しかしヴェーマイヤーは天幕屋がまと寄せたような大きな植物性緑色のフリーズに包まれて、腹と大腿は聖職候補生の黒いピロードの半喪の中で脈動しながら、これは全体喪の黒色になるまで身に着けるものである。――ファルテルレはズボンの平滑氷を鍍金として脚の周りに張っていて、ズボンに折り目ができるたびに、彼の顔に折り目が付いて、あたかも顔はズボンや裏地であるかのようであった。へぼ学士の太腿で彼の巻袴^{*1}の糸掛貝が上昇しているとすれば、――ファルテルレは婚礼靴で、へぼ学士はポンプ胴で、――ファルテルレは柔らかい粘液性の金色鯉として褰付き胸飾りの腹びれを付け、カフスの胸びれを付け、三本のおこじよの尾の垂れた三項式の小根、あるいは小弁髪¹の尾びれを付けて上に跳ねている。学士はその緑色のフリーズの中でただ緑色の小鱈あるいはおたまじゃくしのように見えた。――素晴らしい対照である、と私は繰り返すことにする。――

小鱈は鯉を食ってしまいましたかったことであろう。この金色の鯉は右腕でラベットを、左腕でアルバーノを抱えて案内して行った。しかし今やもっと面白くないことになった。アルバンはいつもの性急さでナプキンを開けて、これが今やさながらファルテルレの教授法の就任プログラム、試験問題となった。「ムッシュー、落ち付イテ」（と彼は初心者に言った）「他ノ人ヨリ先ニナプキンヲ開ケルコトハ、作法ニ反シマス」。数分後、アルバンは自分のスープを、――それは極細麺のブリタニア風であったが、吹いて冷まそうとした。「ムッシュー、良クアリマセン」（と教練教師は言った）「スープニ吹き付ケルコトハ」。すでに胸の鞆で極細麺のスプーンに風を送ろうと準備にかかっていたへぼ学士はびっくりして風で停止した。

その後詰め肉の白キャベツの爆弾が中心の太陽のようにテーブルクロスの上に落ちたとき、学士は熱い小牛の肉の詰め肉を大胆に飲み込んだ。手品師や駝鳥が赤く燃える石炭を飲み込むようなもので、息を外に吐き出すというよりは吸い込んでいた。

爆弾の後、オープン焼かわかますが来た。これは周知のように頭部と尾とを切って、腹は閉ざされており、のろじかの背肉の形に似ているものである。アルバンが自分の老教師にこれは何かと尋ねたとき、教師は答えた。「美味しいのろじかの背肉」。――「済ミ

*1 何人かの者はズボンの代わりに袴と言いたがる。

マセンが、ムッシュー」(と反駁者は言った) — 「コレハ、オープン焼カワカマスデス。シカシ、料理ノ名前ヲ尋ネルコトハ、無作法デス。 — モウ知ッテイル振りヲスルモノデス」。

二重猟銃のこの至近距離射撃は、学士の骨の髄まで射抜いたことは容易に見てとれる。オープン焼カワカマスの切り取られた頭の中に[キリスト拷問の道具に似ている]、武器庫の中でのように収まっている受難の道具は、彼の頭の中で更に働き続けた。大抵の学校教師のように、彼は極上の作法を、それを自分が教え、粗野極まる作法を攻める間は、有していると思っていた。 — 同様にお洒落もその限りではなはだ評価していた。 — しかし両方とも打ち負かされると、それを心から軽蔑せざるを得なかった。彼は静かに教練教師を両カトーやホメロスの英雄達に反するものと思って、彼はまた立ち直った。この英雄達は豚よりは上等には食べなかったのであり、彼はこのウィーン人のファルテルレを晒し柱に結び付け、そこで一方の手ではたつぷりぶん殴り、他方の手では彼の上で誹謗の鐘を鳴らすのであった。いや彼は、同僚を小さくするために、遠くの彗星上に身を置き、爆弾やオープン焼かわかますを見下ろし、自然のこの黄色の絹製の売れ残りが脳の残骸と共に滴虫類よりも大きくないのを見てとって、その向こうの惑星上で大いに嘲笑せざるを得なかった。それから彼は見棄てられた教え子が気の毒になって、また下降して来て、ファルテルレが介入する限り、毎日その分を彼から引き抜いてやろうとその途中で誓った。

アルバンの神経がこの木工旋盤上で平らに鉋かけされながらいかにびくついたか我々も間もなく十分に知ることになる。総裁にとって大きなダイヤモンドのこの教育学上のカット、切り子刻みは言いようもなく気に入った。もっともカットは(ジェフリズ^{*1}によれば)すべてのダイヤモンドからその重さの半分を取り去るものであるが、しかし彼自身はまだ全体の重さを有し、カット面よりも多くのカラットを有していた。ヴェールフリッツはさっぱり許してしまうために、 — そのことを今や彼は目指していて、少年にエスターライン製のピアノを持参したわけであるから、 — 少なくとも一言述べて、ちょっとした拷問を加えないわけに行かなかった。つまり彼は、 — アルバーノの秘かな出血の懺悔を知らないまま、 — 客人達に知らせたのであった、何と厳しく大臣はその子供達を教育していることか、いかに例えば子供達は食卓でのやむを得ない咳や笑いでも、落馬したり風で帽子をなくしたプロイセンの騎兵に似て、罰を受けるのであり、いかにその子供達はアルバーノと同じ年齢でありながら、全く大人と同じような作法を有することかと述べた。今日大臣の許では、逆に彼は養子の息子の知識のことで自慢したのであった。しかし多くの両親が他人の部屋では子供のための祭壇を築き上げ、自分の家ではその同じ子供にワインや蜂の如く硫黄でくすべるのである。

子供達が法外な要求を満たしたとき、大人が領主達のようにまさに二重の要求をして、かくて子供達が「過分ノ善行」によって成年の勉強時間から遊び時間を得るよりももっと多く失うようになるのであれば、そもそも悪魔にさらわれてしまうのがいいのである。偉大な哲学者達、例えばマルブランシュ[Nicole Malebranche(1638-1715)]に対しては、そして偉大な将軍達、例えばスキピオに対しては、彼らが偉大な征服を、真理の領域とか地理学上

*1(訳注) D. Jefferies:Abhandlung der Diamanten und Perlen usw. 翻訳本 1756.

の領域でなした後、子供部屋に腰を下ろして、まことに子供っぽいことをして、多くの嘘や人間を大地に沈めたその弓の緊張を穏やかに緩めることを許さないであろうか。聖ヨハネが温和しい山鶉と戯れるとき、弁解の口実としてこの比喻を何故子供達に与えていけないことがあるか。子供達もその前にまだ細い弓を折れ曲がるほどに引っ張った後では、子供になるのである。

しかし閑話休題。老ヴェールフリッツはラベッテに全く好意的に報告した。「今日はドン・セサラの被後見人のデ・ロメイロ伯爵令嬢に会った。まことに十二歳なのだが、しかし宮廷女官にしか見られないような作法を心得ている。騎士殿はこの被後見人の令嬢についてない喜びを感じておられる」と。これらがたがた言う言葉で、名誉心の強いこの少年の素直な神経は、恐水病者の場合のように、少年にとって騎士はこれまで人生の目標であり、永遠の願いであり、人々が彼を羨むときの[フリーメーソンの]恐怖の同志であったので、引っ掻き傷を受けた。 — しかし彼は静かに何の印も見せず座っていた。そして叫び声を上げる心臓を窒息させた。ヴェールフリッツはこの沈黙の歯ぎしりを知っていた。しかし彼は、アルバーノが自分の言葉を解しなかったかのような振りをした。

さてウィーン人のファルテルレも大臣家のヴァティカンのあらゆる隅、壁龕に照明弾を投げ始め、ただ、その家でのダンスの生徒、音楽の生徒、それに自分自身を最頂目に照らしだそうとした。大臣の娘は、十歳になるかならないうちに、すべての新しい言語と、ハルモニカを、アルバーノがまだ一度も聞いたことのないハルモニカを、それにコッツェルホ[Kotzeluch(1752-1818)]の四手のためのソナタを習得できて、小夜啼鳥のようにまだ茂らない小枝の上で歌うのではないか。それもオペラからの抜粋で、そのため華奢な彼女の小夜啼鳥の胸は傷んでしまい、それ故彼は去らざるを得なかったのではないか。 — いやその兄はまだそれ以上で、すべての貸し文庫の本を読み尽くし、殊に芝居作品は読み尽くし、その上素人劇場で演じているのではないか。そしてまさに今日の仮装舞踏会でこの時刻には、仮に自分が夢中になっている対象に出会ったら、その件を立派にやってみせているのではないか。ヴェーマイヤーにとって自分が驚みみずく、あるいは鳥蜘蛛として我らの宝石蜂鳥たるファルテルレの向かい側に座っていたのは不都合なことであった。これは蜂鳥を今にもむしり取って食いかねない状態であった。まことにファルテルレは悪意から何も言っているのではなかった。彼は誰も軽蔑したり、憎悪したりできなかった。彼の精神的目はその膨張した自我の奥底に据えられていて、膨張した自我を越えては何も覗き見ることができなかった。彼は誰も傷付けず、人々の周りを静かな蝶のように舞って、刺すようにぶんぶん言う虻のようなものではなく、血は吸わず、蜜を（即ち小さな称賛を）吸うのであった。 —

「フォン・ファルテルレ殿」（とヴェールフリッツはこの冷たい雷光をアルバーノに浴びせた後、すぐに、アルバーノをもはやちらりと冷たく盗み見しようともせず、言った）

「大臣のところの若殿は我らのアルバーノのように時的的竿の上に座ることがありますかな」。 — これは苦しんでいる子供のおまえにとって余りのことであった。「しません」とアルバーノは頑固に、死体のような親しみを込めて言った。これは死後の死を意味するもので、漂う色合いの視覚的雲を浮かべて、黙した痙攣の下、ぎしぎし言うクッション付椅子を離れて、ゆっくりと、指を握りしめて出て行った。

この哀れな若者は今日、アダム派の墮罪の赦しと見えるものの後、そして飾り立てた新

しい教師の姿を見た後、この教師のことを彼はすでに長いこと楽しみにしていて、その彫金された輝くような衣服はまさに子供には畏怖の念を引き起こすものであったが、自分の内面の最後の蛹の殻を脱ぎ捨てて、大いに決心していた。何らかの手が一時間前に彼の内部の人間を幼年時代の狭い眠たげな揺り籠から引き掠ってきて、一彼は突然温かい籠から飛び出し、一転倒予防帽子と長袖少女服を遠くへ投げ出し、一そこに広い成年の長い上衣[古代ローマのトーガ]が掛かっているのを見、その中へ入って行き、言った。私も一人の青年ではなかろうか、と。一

愛しい者よ、人間は、殊に薔薇の類の人間は、錯覚して容易に後悔を改善と、決意を行為と、花を果実と見なすものだ。ちょうど無花果の剥きだしの小枝で、単に花々の肉厚の被いにすぎない見たところ果実のようなものが芽生えるようなものである。

さて、彼の魂のすべての神経と根とが裸で厳しい大気の中に剥き出しに出ていたとき、一このように美しく新鮮な衝動の許、今や彼はしばしば恥ずかしい思いで踏み碎かれた。一彼の魂の中で名誉心が燃えた、一将来の年月にわたって、名誉心は記念柱の白い柱廊を通って行こうと欲した、一すでに町からの一人の単なる寄宿学校生が彼の名誉に飢え、知識に飢えた魂にとって一人の古典作家であった。一彼のことを騎士の許で総裁が嘆いたり、あのウィーン人が描き損なうことに彼は耐えられたであろうか。

一硬い涙が火花のように気位の高い傷付けられた魂からこぼれ出た。そして彼の内部世界の彗星の核を灼熱が砕いて鬱陶しい霧とした。要するに彼は夜ペスティッツへ駆けて行こうと、一彼の父の前へ飛び込んで、すべてを告げ、一それからまた、一言もそのことは言わずに家に帰る決意をした。村の外れで彼は夜の急使に出会った。この急使に彼はペスティッツへの道を尋ねたのであるが、この急使は帽子のないこの小さな巡礼者に驚いていた。

まず私と一緒にこの食卓仲間の残りを見てみることにしよう。まさにこの急使はウィーン人に悪い知らせを持って来ていたのであった。ロケロールという長いこと称賛されていた大臣の息子に関するニュースであった。

上述の騎士の被後見人、幼いフォン・ロメイロ伯爵令嬢は、とても美しかった。冷静な者達は彼女を一人の天使と呼び、温かい者達は一人の女神と呼んだ。ロケロールはベルギー人の静脈は有しなかった。この静脈の中では土星でのようにすべての湿気は固い凍った物体としてあるものである。有していたのはアフリカの動脈で、ここでは水星でのように溶けた金属が循環するのである。伯爵令嬢が彼の妹のところに居たとき、彼は上流の少年の大胆さで、彼の点火線の脈管で満たされた心を立派な火船として彼女の心に衝突させようと試みた。しかし彼女は彼の妹を防火壁として前に置いた。不幸なことに彼女は偶々『ヴェルター』のロッテの衣装を着て、今日の仮装舞踏会に来ていた。彼女の専制的魅力の煌びやかさは仮面の背後のただ暗く燃え上がる目によって飲み込まれ、見回されていた。彼は自分の内部の仮面も外部の仮面も取り払って、彼女に迫り、若干急いで、一彼女は旅立つ間近であったので、一それに若干確信して、一素人劇場で受けていて、一パントマイム的激しさで、一これでこの劇場ではいつも拍手する手の最も美しい小夜曲を得ていたが、一今はただ[この手に対し]色よい色よい返事を欲していた。ヴェルターのロッテは彼に対し気位高く巻き毛で一杯の派手な背中を向けた。彼は我を忘れて家に帰り、ヴェルターの服を着、ピストルを手を持って、戻って来た。それから彼は顔

の観相学的ハリケーンと共に彼女の前に歩み寄って、言った。 — 銃を見せながら、
— 彼女が見棄てるなら、ここ広間で死ぬ、と。彼女は彼を少しばかり高貴すぎるほどに見つめて、そして何をする気かと尋ねた。しかしヴェルターは、 — 半ばロッセの魅力に、ヴェルターの悩みに、そしてポンスに酩酊して、 — 五度か六度かの拒否の後（公の所作にはすでに慣れていて）仮装舞踏会全員の前で、銃を自分に向けて発射した。しかし幸い左の耳たぶだけを傷付けただけで、 — それで何もそこには掛けられなくなったのであるが、 — 側頭部をかすめたのであった。彼女は突然去って、早速旅立った。そして彼は血を流しながら倒れ、家に運ばれたのであった。 —

この話はファルテルレの凱旋門の多くの明かりを消して、 — ヴェーマイヤーの凱旋門の多くの明かりを点した。 — しかしこの話で突然同じように野蛮で大胆なアルバーノに対するアルビーネの不安がかき立てられた。彼女は奉公人部屋で彼のことを尋ねた。そして使者が帽子を被っていない少年のことを知らせて、手がかりを彼女に与えた。彼女自身いつものように過剰な不安に陥って、村の中を急いで駆けて行った。立派な守護霊が、 — つまり屋敷の犬のメラクが、 — この逃亡者の拮抗筋、遮断棒となっていた。つまりメラクと一緒に付いて行こうとしていたのであった。アルバンは館の中庭で、とても役立ち、時にそこで夜警人として吠える保護者にして海岸監視人のこの犬を、また家に戻そうと思っていた。メラクは自分の仕事に頑固であった。犬は根拠を欲した。つまり投げられる棒や石を要求した。 — しかし泣いている少年は、その熱い手は善良な家畜の冷たい鼻面でさわやかなものとなって、犬に邪険な言葉を投げかけられず、単に尾を振る犬の向きを変えるだけで、こっそり「行け」と言うだけであった。犬は再三振り返った。この転倒状態のとき、 — その間アルバーノのいずれにせよいつもブロッケン山上に立っている精神の中では、霧の中で巨人の形が迫って育ってくるのを見て、その涙と不当な言葉のそれぞれがますます深く燃え上がっていたが、 — 彼は罪のない母親に見いだされた。

「アルバーノ」と彼女は優しく装って言った、「この冷たい夜風の中にいたの」。ただ侮辱された魂に対するこの追跡と語りかけとで、涙であれ、胆汁であれ、流出を必要としていた彼の一杯の魂は、とても感動して、彼は張り詰めた心の痛風の発作で彼女の首に跳びかかり、そこで溶けて、泣きながら寄りかかった。彼は彼女の質問に対し、自分の固い決意を告白できず、ただ一層強く彼女の心に抱きついた。今や心配して、後悔している総裁もやって来た。彼は子供らしい態度に心が再び溶けて、言った。「変わったやつだ、そんなにひどいことを言ったかな」。そして戻りながら小さな手を握った。多分にアルバーノの怒りは流出した愛で汲み尽くされ、和解した名誉心で満ち足りていた。従順に、その上、 — 奇妙に見えるが — ヴェールフリッツに、アルビーネに対するよりもより大きな愛を抱いて彼は一緒に戻り、途中ただ優しく動揺して泣いた。

彼が部屋の中へ入ったとき、彼の顔は神々しくなっていた、少しばかり腫れていたけれども、涙が反抗心を押し流して、彼の心のすべての穏やかな美曲線が彼の顔に引かれていた。例えば雨が、太陽が照るときは現れない天上の花を、透明に震える糸の形で表すようなものであった。彼は気を付けて父の許に立って、一晩中その手を握っていた。アルビーネは二重の愛の中で、二重の幸福を味わっていた。召使い達の顔にさえ、家庭内の平和の第三の写しの虹による、収まった洪水の同盟の印による散った影が見られた。

一 まことに、私はよく次のような願いを抱いて、一 後でそこから一枚の絵を描いたものだが、一 世のすべての和解の場に居合わせられたらと願う。再来の愛ほどに深く我々を感動させるものはないからである。不滅も者も、重荷を負った、運命と咎とでしばしば遠くばらばらになった人間達が、石菖藻^{*1}のように、沼地から身を起こして、より美しい大気の中に上昇し、今やより自由な高みの中で自分達の心の間隙を克服して一緒になっている様を見たら、感動するに違いない。一 しかしまた不滅の者達も、我々が人生の重たい雷雨の中で互いに敵対する戦場で離れながら、二重の打撃の下、遠くの運命と、互いに結ぶべき近くの手によって致命的に衝突しているのを見たら、痛々しい思いがするに違いない。

第三ヨベル期

両園芸師の教育学的接ぎ木苗圃での方法 一 虚栄心の弁護状 一 友情の朝焼け 一 愛の明けの明星

第十七周

我々が両教室を開けると、午前中には生徒の二つの卵黄の卵の上にへぼ学士が座って孵化し、午後には教練教師がそうしているのを目撃することになる。巢を雄鳩が午前中に、雌鳩が午後を守るようなものである。

さて、ヴェーマイヤーは、自分の競争相手同様に上手く教え子の全く新しい教材と取り組もうと欲していた。しかし教え子にとって新しい教材は彼自身にとっても新しい教材であった。大方の年輩の学校教師同様に天文学についてはヨシュア記[10,12-13. 日よとどまれ、ギブオンの上に、月よとどまれ、アヤロンの谷に]に書かれているわずかなもの他には知らず、自然科学については自分の千切られたというよりは忘れ去られた冊子に書かれているわずかな迷妄の他には知らず、哲理についてはもっと成熟した教え子にふさわしいようなゴツェート風な哲理の他には知らず、別の専門知識については厳密に言うと、一 若干の歴史を除いて、何も知らなかった。時に彼の文芸的サハラ砂漠で、この砂漠に彼は果てのない悩ましい授業時間の螺子と金のない鉍化されたというよりは鉍滓化された人生の乞食行脚、不具行脚とで追放されていたのであるが、新しい教授法とか新しい発見を耳にすると（目にすることは決してなかった）、すぐその瞬間、これは自分自身のものであり、ただ少し変更されたものと気付くことになった。そして彼は誰にもその剽窃を隠さなかった。しかし私は衷心からすべての絹服の、髪粉をした、巻き毛の皇子傳育官にお願いするが、私の哀れな、運命の重く厚い大地で深く覆われたヴェーマイヤーの冥界的視覚と彼の背屈みとを余りに曲解せず、彼の八人の子供と、八時間の授業と、アンティパロス島[洞窟で有名]のその人生の洞窟でまもなく迎える五十の歳を数えて欲しいのである。それからこうした状況でこの男がまた明かりの許に出て来られるのか決めて欲しいのである。一

*1 この石菖藻の雌花は、水中の下でからまっていて、そこから花の芽を出して、大気中で花を咲かせる。雄花はそのとき短すぎる茎から離れて、その乾いた花粉と共に雌花の許に漂って達する。

しかし歴史[物語]については彼は、述べたように、若干のことを知っていた。この歴史を彼は教育学上の盗人の親指[魔力を有する]、フォルトゥナトゥス[民衆本の主人公]の願いの叶う帽子として採用した。彼はすでにかの叙事的描写のパラフレーズを用いて、これでどんな些細な市場町の歴史をもとても面白く、法螺を交えて語り（というのは立派な語り手は千もの卑小な、しかし必要な特色を絵空の他どこから採って来ようかということになるからで）、彼のアルバーノにヒューブナー[Joh.Hübner(1668-1737)]の聖書の物語を極めて感動的に語らなかつたらうか。そしてその際どちらがもっと泣いたか、教師だったか、生徒だったか。 —

さて彼は三つの歴史的[物語的]道を眼前に有していた。彼は最も惨めな世界の歴史で始まる、つまり国の歴史で始まる地理学的道を進むことができた。しかし単にせいぜい英国人やガリア人[フランス・北イタリア人]だけが、歴史を叙事的物語や地球の描写のように奥行きをもって始めることができるだけであろう。これに対し、ハールハールやパイロイトやメクレンブルクの領主の教父神学は空洞の歯に空の胡桃を噛み割るよう提供するもので、頭脳や心に対する核心がない。これでは歴史の小枝が繁茂することになって、そこでは誕生の偶然により若い木食い虫が廃せられて、この小枝が不当に一つの系統樹となるものではないか。例えばベルリンで辺境伯の家系を、あるいはホーフでホーエンツォレルン家の支配者の家系を尋ねることがあろうか。

第二の方法は編年の歴史、あるいは先導馬車的歴史である。これは世界の誕生日から始める。これはペタヴィウス[Denis Petau(1583-1652)]やラビ達によると十月二十二日*1 午前の世界で生じたもので、十月二十八日に進むと、これは若いアダムの最初の生意気盛り日、間抜け日、それから二十九日、つまり最初の日曜日、懺悔日、断食日を経て、更に進んで行き、遂には最初のアダムの息子の断食日、懺悔日となり、この息子はまさにこの件に耳を傾けなければならない。

この銀河は我らの学士にとっては、余りに長く、余りに荒涼として、余りに見慣れぬものであった。彼は先の二つの間の中間の水路を船出した。つまり歴史の豊かな両インドたるギリシアとローマへ至る水路であった。古代人は我々に文書よりも行為で働きかける、味覚よりもむしろ心に働きかける。過ぎ去った世紀は次々と彼らから二重の歴史を、倫理的強化の二つの秘蹟として、聖寵手段として受け取っている。彼らの文書は、これにはその石像の工芸品がどの世紀にも付着しているが、カンシュタイン[v.Canstein(1667-1719)]的聖書出版のすべての墮落に対する永遠の聖書工房である。しかしまあ或る夏の朝、何日か、この校長宅の側を通りかかって、外からどのような声でこの学士が内部で、プルタークからの家長的言い回しで、 — この世界史の伝記上のシェークスピアたる者から、 —

*1 それに先立つ美しい十月の日々、それに夏のシリウス日の休暇や四月、要するにその年の前の前部分が、上述の十月二十二日に、それにこの日自身が、後から創造されることになってしまった。そこで私は容易に先立つ時代への問いをやめてしまう。というのはある者が世界を別様に日付規定するならば、例えばリプシウス[Just Lipsius(1547-1606)]や教父達がしたように三月二十日からとするならば、私がおの人にその人自身の先の問いに対する釈明を求めたら、その人はいつも先立つ年という私の後付け創作に言及しなければならないからである。

諸国家の影世界ではなく、共同体の中での輝かしい天使達を、偉大な人間達の聖家族を引用しているか耳を傾けることにしよう。そして通り過ぎながら、教師が鑄造物陳列室のように少年の周りに集めている倫理的古代人に、その熱中した少年が寄せているときの輝かしい目を一瞥することにしよう。そのように英雄的過去の偉大な雷雨の雲がセサラの魂に、一つの山並に掛かるように掛かって、そこで静かな稲光と滴とを放つとき、そこでは山並全体が天上的炎に包まれ、その上で緑となり芽生えるすべてのものが、実を結び、元気を貰い、生長したのではなかったか。 — それから彼は、かくも美しい雲を得たら、低い現実の中を覗くことができたであろうか。いや教師も生徒同様に、ローマやアテネの広場での喧噪の中で、カトーやソクラテスに従って歩いていたとき、強壮な学士夫人が彼らの隣で料理したり、ベッドを整えたり、叱ったり、擦って洗ったりしていることには全く無頓着であったのではないか。八人の騒がしい子供達のことはその多さのせいで何も感じていなかった。というのは、一匹の血を吸う蚊がいたら、この上ない緊張を伴わずには部屋の中で我慢できないのであるが、一群れであれば容易に我慢できるからである。同様に、カナリアの孵化籠として営巣のために必要なもの、干し草、苔、獐鹿の毛、むしり取られたフランネル、指の長さのより糸といったものがその床に欠けていない教室では、兩人にとって古代の（地理学上のそれに歴史上の）世界の床で覆われていたのであり、この床は、[城壁外の]聖パウロ大聖堂の床に似て、切れ切れの銘で一杯の大理石の瓦礫[墓石]で出来ているのである。

第十八周

さて読者は、この生徒がウィーン人の研磨機に送られる午後、どのような具合に磨かれるのか興味津々であろう。私が更にこう追加すると読者はもっと興味津々となろう。つまりヴェーマイヤーは、他の学者同様分別と武骨さの点で象に似ていて、歴史では、ほとんど何も着ていない例えばディオゲネスとか、裸足で歩くカトーとか、あるいは哲学者達のように髭を剃っていない偉大な男を殊に好んでいた、 — 従って描いて見せたということである。いや彼は中部マルクに至って、フルードリヒ二世[晩年は服装を気にかけなかった]の衣服を取り寄せた。そしてこの衣服でパリのパジェス氏¹ほどの収穫を得て、そのシャツを高貴なサラディンのシャツ同様に扱って、同様の叫び声で[サラディンのモットーは、一枚の服、一頭の馬、唯一の神]竿に載せて見世物にし、第二のシャイナー[Christoph Scheiner (1575-1680)天文学者]として、フリードリヒの煙草による太陽の黒点について証する最良の図面を考案したのであった。それから彼はこれらの裸の粗野な巨像達を取りだして、すべてを一方の秤の上で均して、他方の秤にはファルテルレのような板張りの軽い像や近世の諸宮廷のニュルンベルク風滑らかな子供の庭園を投げ入れ、どちらに測定の指針は傾くか注意するよう学生に頼んだ。 — —

学士よ、私はここで全面的におまえの側に立つものではない。いずれにせよ、力強い若

*1(訳注) Journal des Luxus und der Moden.1787. Bd.2.S.129ff.によると、パジェスという名前の若者が、フリードリヒ二世の古着を蠟人形に着せて、見世物にしたそうである。

者達は儀礼的作法の裏箔は余りに容易に引き裂くもので、その上しばしば裏箔師、上級作法教師に対してもそうするものであるからである。弱い者達にとってはこの方法は良い。

さてアルバーノは教練教師の許に来たとき、先の授業の甲高い余韻の余り、一 ある種の深みのある子供達は若干の大きさの建物同様に、反響を有するが故に、一 ファルテルレが命ずることを単に弱々しく聞き取ることができただけであった。そしてただ数日歴史的感動を感じなかったときのみ、より卑小な授業により率直に応じたのであった。金鍍金された物が、金箔が落ちたときにはじめて銀鍍金されるようなものである。災難だったのは、彼がその夫役のダンスを、自身の夫役のダンス[仕事]に取りかかっていた総裁の書斎のまさに隣で行わなければならないことであった。しばしばヴェールフリッツは、アルバンが、惚れたパートナー女性のように、英国風ダンスで、ぼんやりして聞いていると、その中で命令しながら叫ぶのであった。「畜生め、すり足で」。同様に、この男は、音楽教師がステレオタイプのバスのように、アダージョ曲の下、ピアノ[弱く]へと永遠に警告して走り去ると、その中で考えられるかぎりのフォルティシモ[極めて強く]で叫ばなければならなかったという多くの場合を数え上げることができよう。「ピアノシモだ、よく聞け、ピアノシモだ」。一 何度か彼は自分の仕事から立ち上がって、フェンシングの授業で、第四の構えへどんなに説得しても無駄であったとき、ドアを開けて、憤激してウィーン人に言わなければならなかった。「何てことだ、貴殿は兎ではなからう、注意していないときは奴の皮を存分に叩いてやればいいのだ」。一 この後、丁重なフェンシング教師はただ小声で第四の構えへ促した。

それでも彼は大いに学んだ。このような早期には、おめかしもファルテルレのような作法も無視してしまうことはないもので、その上ファルテルレは、禁じられている首都で輝き教えていたという魔法的長所で威力を有していた。ただ甲高い足音と長靴とはこの教え子から奪えなかった。しかし両肩はすぐに水平となり、頭は垂直に置かれて、活動的体と共に震動する指はシュタールの開眼器で固定された。そもそも美丈夫の体のリベラルな魂を有する人間はすでにファルテルレの格子垣や鉄がなくても好ましく立ち、育つものである。その際彼にとって愛想のいい好意的ファルテルレは、子供らしい心が家や村のすべての人々に対して寄せるかの神聖な最初の人間愛に加えて、次の点でもすでに好ましかった。つまり一人のレディーがこのウィーン人を薬指の周りに、いや心では黄金の指輪の周りに、嵌めることができたからで、それにまた彼は金羊毛皮の騎士について、国王について話すように話し、嘘を言ったからで、それに彼はこの地球上で見られた最も愛想のいい奴であったからである。

私は私の伝記では、すべての登場人物に対する忍耐と多面的正義とを教示したいと思っているので、ここで私は寛容の手本を推進しなければならず、それでファルテルレについてこう言及することにする。つまり彼の哀れな細い魂自身は作法の石製の法律告知板[例えば十戒]の下、堂々たる身分の木製の軛の下で、発展する諸力を有しなかったのである。この哀れな奴は誰に危害を加えたか。レディーにすら加えなかった。このレディーのために、確かに彼は銅版画家に似て、いつも自分の自我の許、鏡の前に座って労していた。しかしこれは単に他の石膏像製作者達同様に、この工芸品で純然たる美を表現するため、美人達を誘惑するためではなかった。自分の人生の海水を、一 というのは彼は百万長者でも、世紀の最大の学者でもないからで、もっとも多くの貸本屋の許で読み耽ってはい

たが、一化粧水で真水にしようとして、その中で何時間も泳いだ。彼はほとんど何の酒にも溺れず、むさぼって食べることもなかった。彼は教皇主義者が外国語で祈るように、外国語で呪い、誓った。そして自分以外のほとんど誰にも世辞は言わなかった。

虚栄心の強い男や、それ以上に虚栄心の強い女は、余りに強く虚栄心の強い者達を憎む。この者達は意志よりも頭脳を病んでいるからである。私はここで喜んで思索的読者の方々すべてを引き合いに出せると思うが、まさにいつになく虚栄心に満ちて入場したとき、自我の中で深い良心の呵責や不協和音を、これははなはだ嘘を付いたときや、厳しすぎた時には感じられるものであるが、かつて感じたことがあると思わせるものかどうか尋ねたい。むしろパレード台上での自分の内部の人間のはなはだ好ましい動揺を感じたことだろう。それ故虚栄心の強い男は賭博者同様癒やしがたい。しかしまた次のせいでもある。つまり大方の罪は即興の説教、即興の詩であり、第三の戒律から第十の戒律まで含め、しばしば例外とされなければならない。一結婚生活とか安息日とか約束は任意の時に破られるものではない。一人は自分相手に中傷とかは、自分相手に九柱戯や決闘をすること同様にほとんどできないものである。一多くのかなりの悪徳は単に復活祭の市の日とか、一新年の日、一あるいはパレ・ロワイヤルとかヴァチカンでなされるもので、一多くの国王的、辺境伯的、侯爵的罪は生涯でただ一度だけで、一多くの罪は全く見られないもので、例えば聖なる精霊に対する罪は見られない。一一これに対し心の内部で称賛したり、花輪を被せたりは昼でも夜でも、夏でも冬でも、どこでも、説教壇であれ、[ウィーンの]プラーターであれ、將軍のテント内であれ、櫓の御者台上であれ、侯爵席であれ、ドイツ全体で、例えばヴァイマルでできよう。どうしてか。それにこれらの多年生のバルサムリンデンシユタツトの灌木は、内部の人間を絶えずいぶすもので、これらを引き抜いたり、切り離すべきものであろうか。

第十九周

これらの仕事や茨のすべてはアルバーノにとってまことに立派な鋭い地震の避雷針となった。彼の胸の中では、一人の人間の薄い胸腔を砕くのに必要なよりも多くの地下の雷雨物質が堆積したからである。さて彼はますます深く人生の荒々しい雷の日月に入ってしまった。ドン・セサラに会いたいという憧憬は、ローマの歴史の許でもっと燃え上がって行った。この歴史でカエサルリンデンシユタツトの巨大なイメージが彼の前で高く置かれ、その下にセサラという名前が書かれた。隠された菩提樹の町は彼の空想によって、七つの[ローマの]丘へ移され、ローマへと高められた。郵便のホルンの音は、彼の内奥でスイスの牛飼いの歌のように響いて、これが我々のすべての高みを長い山脈状に輝かしくエーテルの中で築き上げた。そして彼に出発への合図が吹奏され、大地のすべての都市が門を開けて、幅広い道路と共に彼の周りに横たわっていた。そして彼がかの時代、ある冷たく明るい夏の朝、ペスティッツへ行く連隊の横を、太鼓や笛の音が響く間、リズム良く同伴して行ったとき、彼の魂はヘンデル風な『アレクサンダーの饗宴』を行ったのであり、一魂は過去を聞き、一凱旋馬車の通行を聞き、一スパルタ軍の行進と彼らのフルートの音を聞き、一評判の女神の明るいトランペットの音を聞いた。一そして最後のトランペットの音の下でのように、彼の魂は、門を外された大地から、ただ輝かしい死者達の下、蘇ったのであ

った。そして彼らと共に更に進んで行った。 —

歴史が一人の高貴な青年をマラトンの平原に、カピトリヌスの丘に導くのであれば、彼は自分の横に一人の友人を、戦友を得たいと欲した。 — ただそれ以上は何も、戦いの女友達は欲しなかった。というのはヒロインはヒーローをはなはだ害するからである。強壯な若者には友情が愛よりも速やかに侵入してくる。友情は人生の早春での雲雀のように出現して、晩秋にようやく去って行く。愛は鶉のように温かい時にやって来て去る。アルバーノはすでにこの雲雀を目に見えぬまま頭上の大気の中でさえざるのを耳にした。彼は一人の友を、ブルーメンビュールではなく、菩提樹の町ではなく、どの地でもなく、ただ自分の — 胸の中で見いだした。しかしこの友を彼は — ロケロールと呼んだ。

この件はこうであった。私のような人々にとって、田舎生活は、そこで町の生活の丸薬を服用する蜜である。これに対しファルテルレは、辛い田舎の生活を、町の生活の銀鍍金化なしにはやり過ぎせない。週に三回彼はペスティッツへ行った。劇通として素人劇場の棧敷にいるか、この劇場そのものに俳優として登場した。その席に彼は自分の役目の台本を村へ持ち出して来て、— 喜劇の下稽古を信頼して、— 自分の役目を相手役なしに一人で本読みした。まだどの官吏も自分の役目を、共同して働く者達を見もしないで、記憶するようなものである。それ故我々の誰もが単に一つの精神力から成り立っていて、ロシアの狩りの曲のように、ただ一つの音色で笛を吹く術を心得ていて、その強さを休止させざるを得ないのである。このファルテルレの借りてきた舞台の断編に今やアルバンは恍惚として付き合った。ファルテルレは全てのドラマ的全地球をこの部分球体と交換することによってこの恍惚を直により高めようと試みた。

ウィーン人は彼に夙に自殺志願の野生児ロケロールを学習中の天才と、— 殊に自らは授業中の天才と、— 前もって称賛していた。今や彼はその証明を、この野生児がいつも上手に演ずると言い添えて、その偉大な配役から導いてきた。そもそも彼が大臣の子息をはなはだ貶めることがなく、この子息に劇場上での勝利を嫉妬するばかりでなく、エロスの勝利も嫉妬していたのは、彼の科ではなかった。というのは空想豊かなロケロールは十三歳のときの自己射撃で女性全体の礼砲を受け、心を得て、犠牲の祭壇の獣から司祭へと、素人劇場に隣接した恋人劇場の監督へと昇進していたのであって、一方内気で鈍なファルテルレはその死産の空想では、美女をメヌエットの後退ステップの他にはどんなステップにも誘えなかったし、自分の自我を措定[フィヒテ哲学]する代わりに、指を措定する[音楽の運指]他なかったのである。しかし虚栄心の強い男は、自らの称賛となる称賛を他人に拒むことができない。

いかにこうしたことすべてが一人の友人に対する我々の友の心を捉えるに違いなかったことか。この友を彼はあるときは、カール・モール[シラーの『群盗』]として、— あるときはハムレットとして、— クラヴィーゴ[ゲーテ作]として、— エグモント[ゲーテ作]として彼の魂の中を通って行くのを見た。— 先のヨベル期における周知の仮想舞踏会射撃に関しては、我らの経験の浅いヘルクレスは、カトーの輝く短剣で目が眩んで、かくも近いヘルクレス伝に対して、この射撃をその悲劇的十二の偉業の一つに数えざるを得なかった。— 領主裁判長のハーフェンレフアーはそれどころか、アルバーノは一度、夙に学校教師から同級生へと降格していたこのウィーン人と最も立派な死に方について論争して、催眠飲料に敬意を表した穏やかなファルテルレに対抗して、ロケロールの味

方をして、もっと強力な言葉を添えることまでしたと語っている。つまり「最も好ましいのは塔に登って、雷光を頭に受けることだ」と。 — この言葉で彼は古代人の高貴な感情を示していて、古代人は雷死を劫罰ではなく、神聖化と見なしていたのであった。その際体のことも若干関係していたかもしれない。彼の肘や髪はしばしば暗闇の中で電氣的炎を発したのであり、揺り籠にいるとき、彼の頭は何度か聖なる光輝を描いたのである。領主裁判長はこれを請け合っている。[『彗星』のモチーフの一つ] —

アルバーノは仕舞には彼の炎の心を、紙を手にとって、目に見えぬ友に宛てて書き、それをウィーン人に託する他冷却できなくなっていた。愛想の良さそのものであったファルテルレは、 — その際不実そのものであったが、 — ロケロールへの反感にもかかわらず、それらの手紙を心から喜んで携えて行き、「大臣家では家にいるも同然です」と言い、 — しかし気位の高いフルレ家の宮殿でも子息の許でもほとんど顔が利かなかったので、一通も届けず、単にそのたびに、新たなもっともな理由を述べて、何故ロケロールはその手紙に返事を書けなかったか告げた。ロケロールは余りに仕事に没頭していたか、 — あるいは病気の状態、 — あるいは社交の場であって、 — それでもいつもその手紙には喜んでいたというもので、 — そして我らの無邪気な若者はすべてを固く信じて、書き、期待し続けた。公使館参事官が、仮にそうできるのであれば、私に義務を感じて、アルバーノの愛する心の棕櫚の葉[勝利の象徴]の手紙を私に提供していたら、健気なことであったことだろう。それはこの本の文書室のためというよりは、単に私の手紙文庫のためであって、アルバーノの[撫子]花盛りの時期について綴じ合わせる私用詞華集のためになることであろう。 —

第二十周

突然我らのセサラは、詩人とか小夜啼鳥の歌声がより深く湿った魂の中へ浸透して行く年月に入り、別な人間となった。彼は同時により物静かに、より荒々しくなった。より穏やかに、より激しやすくなり、あるときなど打たれて叫んでいる一匹の犬めがけて野蛮に怒り狂って救助に駆け付けた。 — これまで彼の中で、エジプト風なシステム^{*1}に従って、つながって横たわっていた天と地、つまり理想と現実とは、互いに別々に働き始めた。天は純粹に高く輝きながら退いて行き、 — 内部世界の上に一つの太陽が上昇し、外部世界の上に一つの月が上昇した。しかし両世界、両半球は引き合って、一つの全世界となり、 — 彼の歩みはより緩慢となり、 — 彼の明るい目は夢想的になり、彼の競技者の体育はより稀なものとなり、 — 彼は今やすべての人間をより温かく愛し、より間近に感じなければならなくなった。彼はしばしば目を閉じたまま、震えながら養母の首筋にすがったり、野外で、旅立つ養父から、より寂しい、より熱い別れ方をした。 —

さてこのように純粹で鋭い目の前で、自然のイシスのヴェールは透明なものとなって、生き生きとした女神が魂のこもった面差しで下の彼の心の中を覗いた。あたかも自分の母親を見いだしたかのように、彼は今や自然を見いだした。 — 今ようやく彼は、春や月

*1(訳注) エジプト人は天は地の上に柱に支えられてあり、天と地は海に囲まれていると思っていた。

や朝焼けや星空の夜がいかなるものであるか分かった。...いや、我々皆がかつてそのことを知ったのであり、我々皆がかつて人生の朝焼けで彩られたのである。...何故我々皆が必ずしも人間的自然の最初の情動を神聖なものと、神々しい祭壇の長子と見なさないのだろうか。我らの最初の友情、我らの初恋、真理への我らの最初の志向、自然に対する我らの最初の感情ほどにより純粋なもの、より温かいものはないのである。アダムのように我々はまず不滅な者から死すべき者となるのである。エジプト人のように人間より先に神々によって支配されているのである。 — そして理想は現実より先に、幾つかの樹木では柔らかい花が、広く粗い葉より先に生ずるように駆けてくるのである、葉によって花の受粉、果実化が邪魔されないようにするためである。 —

しばしばアルバーノが自分の内的外的迷路から家に帰ってくると、つまり同時に酩酊し、渴して、 — 同時に閉ざされた感覚と研ぎ澄まされた感覚とで、夢見ながら、しかし明かりの消滅をより辛辣に感ずる睡眠者の如く帰ってくると、 — 勿論冷たい言葉の数滴の冷たい滴に接すると、それで十分に、熱い、流れと化した魂は見知らぬ冷たい物体でジグザグの塊へと解体するのであった。温かい鑄型があれば、その流出は愛らしい形姿へと完成したことであろうが。 —

このような状況下では勿論私が直に報告するであろうことに、誰も驚かないことだろう。ダンス教師、音楽教師、フェンシング教師のファルテルレは、彼のステップや運指法、突きを自慢してはいなかったが、しかしそれだけ一層彼の（帝国議会の）文学、 — というのはドイツ語の手紙における最新の月々の名前[フランス革命暦による名前]、クロプシュトックの正書法¹、それにラテン文字を我々の誰よりも早く自分の手紙に取り入れていたからで、 — ヴェールフリッツ家で、自分は他のウィーン人達より若干もっと文学が分かっていて、話題がどこにあるか知っていることを見せびらかそうと思っていたからである（彼は何も読まなかったし、政治的新聞や長編小説すら読まなかった、生きた本物の人間の方が彼には好ましかったから尚更のことであった）。 — それ故彼はラベッテとアルバーノのための長編小説や詩で一杯の二つのバッグなしには家に入ることがなかった。それに寄与したのは、彼の果てしない奉公熱心と教育におけるヴェーマイヤーとの同僚としての競争心と、黙り込んだ若者に対する彼の関心であった。彼はこの若者に対し、輝くような若々しい人生のルビーが² 贈っている甘美な夢想から、積義的夢の本、つまり詩人の作品で救いだそうと欲していた。今やロマン主義的一面のエーヴェルディング[Allart van Everdingen(1621-75)]の野原を刈り取って、一面の詩的なホイスム[Jan van Huysum(1682-1749)]の花縁を摘み取ったこの若者の転換を、ただ申し訳程度に述べることも、今私は先に約束した不思議の事情のせいでその時間を有しないし、その気もない。そのように座しながら、詩文の天が眼前に開けて、長編小説の約束の地がその前に広がったアルバーノは一つの地球に似ていた。その地球の許では幾つかの彗星が音立てて迫ってくるし、これらの彗星と一緒に燃えるのであるということ十分であらう。

しかしその先はどうであらうか。前もって言うておかなければならないが、このウィー

*1(訳注) Klopstock:Über die deutsche Rechtschreibung. 1778. 影響は少なかった。

*2 ルビーは快適な夢をもたらすと以前は信じられていた。

ン人は虚栄心の強い阿呆であった（少なくとも謙虚さの点に関してで、例えば彼の小さな足、文学、女性の許での幸運の点に関して）、そして殊に偉大な人々やレディー達との親密な絵を描いて、モデル達とのその連邦制度を推測させていた。この哀れな奴は勿論貧しくて、幾人かの作家同様、自分達は、 — 英知を請い求めて黄金を得たソロモンとは違って[列王記上 3.5-10、なおソロモンは英知も黄金も得た]、 — 黄金を請い求めて、ただ英知だけを得るという不幸を有していたと思っていた。要するにこのような理由から彼は、 — ついでに言うと、 — ヴェールフリッツ家で、自分は先の女子生徒、つまり大臣の娘の、 — リアーネの許で、この名は私がハーフェンレプファーの筆跡を正しく読んでおれば正しいと思うのであるが、とても良好な関係にあつて、自分は彼女に十分頻繁に会い、彼女の母の許で話しをしているという信用を広めたいと欲していたのである。その上これに関しては何一つ正しくないという事情が加わる。リアーネが住んでいる神殿を通る道は彼にはなかった。しかしそれだけに彼は総裁に遅れを取ることができなかった。総裁はよく彼女と会い、家ではますます熱心に彼女を称えていた。ただ粗野で罪のない、誰からもかつて教育を受けたことのないラベッテを叱るためであった。ウィーン人は勿論更に伯爵[アルバーノ]を、 — 彼には単にロケロールという友情島の岸辺を遠くから示すだけで、上陸地を示すことはなかったが、 — 妹リアーネを通じて、兄[ロケロール]から策略的に遠ざけようと思っていたのであった。（アルバーノに対し更に長く嘘を付いて、押し止めることはできないことだった）。というのは彼はアルバーノに長いこと描いて見せたからである、いかに有毒に数年前、衷心から愛している兄の退却射撃に対する夜の霜、死の霜で、その妹の華奢な白い心嚢葉は打撃を受けたことか、と。

しばしば彼は食事の間、冗漫な、ヴェールフリッツの副署を得たリアーネの音楽的絵画的進歩についての功績表を掲げて、見かけ上、彼のピアノの生徒、スケッチの生徒[アルバーノ]をもっと進歩させようとしていた。というのはそれが見かけ上でないのであれば、ラベッテの許でリアーネの魅力について、同様に長く祭壇画を貼り付ける必要はないであろうからである。ラベッテは党派心のない女性で、大臣の娘達とは競うことなく、単に牧師の娘達と競っていて、我々がホメロスの美人達についての称賛を聞くのを喜ぶように、ほとんど同じように喜んで町の美人達についての称賛を聞いたのであり、彼女の前では、単に女達の前で他の女達への称賛の歌で馬上に垂直に座ろうとする軽率な阿呆のみが、リアーネに対する自らの歌を歌い上げることができたのである。まことにラベッテのようなくも諦念した、嫉妬心のない魂の前では、 — 殊に彼女の顔の肌や両手や髪の毛は、極めて柔和ということはなく、少なくともファルテルレのそれよりは硬くて、 — どんなメダルを賭けても私にはできなかったことだろう。 — 彼はそれができたのであるが、 — つまり大臣による成果をより詳しく彩りを付けて語るということで、 — 大臣は教育による若年の尋常ならざるリアーネの美しさを現今の年時に導き入れるために然るべき手段を用いて、つまりつましい、ほとんどわずかな食事と、 — コルセット付けと、 — 温室へ閉じ込めて置くことでなしたのであり、その窓は穏やかな気候のこの花の前ではめったに開けることをしないというのであった。 — 更にそれ以上に彼ほどに描けないことと言えば、かくて彼女は一枚の華奢な、単にパステル画材で合成された絵となって、これは運命の一陣の風が吹き、気候の貿易風が生ずれば、ほとんど吹き払われかねないものであり、 — 彼女は実際単に石鹼のアルコール溶液でのみ体を洗えるのであ

り、単に最も柔らかなリンネルでのみ痛みもなく拭けるのであり、三個のすぐりの実を取るときには、指から出血せずにはおれないというのであった。

一 下の沼地の中で、山頂に立っている身分のある男の前では、秘かに「貴方の僕」と言わずには帽子を脱ぐことのできないこの平板なウィーン人は、それにまた上流の人々についてせいぜい単に打ち解けた調子、あるいは諷刺的調子で(自分のコネを示すため)語るだけで、決して真剣な批判的調子で語ることはない者であるが、勿論この者は、一それは彼の義務となっていて、一老フルレを一個の固く鋭い墓石であると呼び、その墓石の下では彼の妻同様優しい花が二本、妻に巻き付いた木蔦、つまりリアーネと共に曲がりくねって、抑圧されたまま明かりの下へ育ってきていると言うことはできなかった。フォン・ハーフェンレップァー氏はこの点で名誉なことに、一彼が公使館参事官であり、領主裁判長であることを考えると、一全く別な、より情感溢れる考察を行っていて、リアーネの生命の泉が押し進み、滴るに相違ないこのような状況の硬い地層は、この泉をより純粹にし、より明るいものにしてはいる、丁度すべての硬い層は水の濾過石であるようなものである、一そしてすべての彼女の魅力は確かに彼女の父親によって苦悩となっているが、しかしまたすべての彼女の苦悩は彼女の忍耐を通じて魅力となっている、と[との位置は不明]。一一

しかし立派なセサラよ、おまえがこうしたことすべてを毎日耳にしなければならず、一そしていずれにせよ教練教師が忘れずにこう描写するとき、つまり彼女は教師を決して聞き入れない表情でとか、ぐずぐずして侮辱することはなく、喜んで教師に紙のレッスン・マークとか最後にはレッスン料とか招待状を持って来たとき、一どんなに彼女は配慮して、穏やかに、丁重に従者達に接したか、母親に対するもっと熱い娘としての愛を目にしたことがなかったら、彼女の心は人間の愛がなしえる限り、これ以上はない温かいものであろうと考えてしまいかねないところであつたらうと描写するとき、一一立派なセサラよ、申し上げるが、おまえがこうしたことすべてをおまえの長編小説の傍ら耳にし、その上おまえのロケロールの妹について耳にするとき、一誰もが、半分でも実行可能ならば、喜んで友の妹とは同じ金色の蛹の中に閉じ籠もりたがるから、一更にその上、聖なる菩提樹リンデンシュタットの町の一人の娘、ドン・ガスパールが、古代のプロイセン人がその神々の杜の周りに掛けたように^{*1}、なお神秘的ヴェールを巡らしている町の一人の娘について耳にするとき、一それはなおもっと不吉なことに、まさにセサラよ、おまえが十六歳半という年を経て、耳にしていることなのだ。この年にはすでに情熱のモンスーン、春の風が血潮の上を渡っているときなのである。というのは勿論それ以前ならば、おまえに関して、多くの言語学者達の学術的花輪の中で、一つまり言語学者達の本によって、一折衷主義者達や、一上級ラビ達によって、一東方[三博士]とギリシア[七賢人]からの十賢人によって、一賢者達の日中の星の上述の賢人十人委員会によって点火さ

*1 アーノルトの『プロイセンの教会史』第一の書。[Dan.Heinr.Arnold(1706-75) Kurzgefaßte Kirchengeschichte des Königreichs Preußen.1769]

れたはなはだまぶしいエピクテトスのランプ^{*1}のせいで、こう推測されるのは難しいことであつたらうからである。即ちアモールがまだ開けずにポケットに有していたアモールのトリノ式小さな明かり^{*2}が、おまえの目に点っているかもしれない、と。 — しかし今となつては、愛しい者よ、今となつてはと私は申し上げる。 — まことに我々皆にとつて今のときほど気を悪くすることが少ないときはあるまい、二十一周になったら、彼は何をするか、我々が興味津々となつている二十周の今のときを措いてはあるまい。

第四ヨベル期

愛の高貴なスタイル — ゴータの懐中暦 — 塔の上での夢想 — 聖餐式と雷雨 — 楽土[エリュシオン]への夜の旅 — 新しい俳優と舞台と生徒時代の最後通牒

第二十一周

十六歳半のいかほどに多くの浄福のアダム達がまさに今その昼休み楽園の草の中に横たわつていて、自身の心の部分からその将来の大事な女弟子の創造を目にしていることだろう。 — しかし彼らは、最初のアダムのように、自分の傍らの建築現場では探さない。自分の居場所からはかなり離れた所に求める。空間が離れていると時間の隔たり同様輝かしく素晴らしいものとなるからである。それ故どの青年もこう信じて郵便馬車に座る。自分が登録[予約]している町の中に、自分の忌々しい町の中でよりも全く別の神々しい聖母が戸口に立っていることであろう、と。 — そして先の町の青年の方は、また到着してくる郵便馬車に自ら座つて、希望を抱いて自らの町へ向かつて行く。 —

しかしこれは私の計画すべてにとって、余りに粗野に生々しく響くもので、あたかも読者に生き生きした飛ぶような薔薇の香りの代わりに、単に凝固した重く厚い陶磁器の薔薇をもたらすかのように思われる。 — アルバーノよ、私はおまえの静かな、厚く覆われた心を開け広げて、我々皆がその中にリアーネの聖人画が、空中に漂うラファエロの聖母[サン・シストの聖母]が、しかし受難週の聖人像のようにヴェールの背後に掛かっているのを見ることにしよう。おまえはこのヴェールを震えながら取り払つて、おまえが祈祷書を、 — つまり長編小説を — 開いて、その中でおまえの聖女にふさわしい祈祷を捧げるとき、その像に祈念するのである。おまえや古代人のように、おまえの守護の女神の名前を秘することは^{*3}、私にとってさえ難しいことだ。 — 内部の精霊の出現については（というのは外的霊の出現は肉体的出現だから）見霊者は九日間は好んで黙していようが、 — そしておまえの徳操よりも千倍もより高いリアーネの徳操に対するおまえの内気な信仰にかかつては、そして他人の名誉心を慮るおまえの神聖な名誉心にかかつては、勿論、他の者達が、例えばウィーン人やヴェールフリッツが、何の赤面もせず高声に好意的に

*1(訳注) エピクテトスの遺品のランプを使用すれば賢くなると考えた阿呆がいたとルキアノスが伝えている。

*2(訳注) 大気に触れると自動発火するガラス管の燐光蠟燭。

*3(訳注) 古代ローマでは、敵も祈願することのないように、都市の守護神の名前は秘せられた。

彼女について話すことができたということは一つの謎に他ならない。おまえ自身が、他人の前で、リアーネについて大いに — 夢想することはほとんどできないのだから。まことにアルバーノは善良な人間である。 — 更に全くこのような純粋なエーテルの中で鉱化した明るいリアーネのような霊が、例えば復活したキリストに似て、鯉を食べたり、小骨を抜いたりできるとか、 — あるいは小さなサイズの長い木製干し草用熊手で赤い鉢の中のサラダの堆積をつつくことができ、 — あるいは駕籠で青い蝶よりも半ポンド以上重くなるとか、 — あるいは甲高く笑うことができるとかは（しかし友よ、彼女は実際これはしなかった）、こうしたことすべては、それにそもそも肉化した地上生活のすべての卑小な奉仕はこの翼の付いた青年にとっては一つの謎であったのであり、真にあり得ないことであり、その現実の一つの恒星の食に他ならなかった。隠し立てできないことであるが、彼がイタリア・フランスの岩に印付けられた天使の一对の足跡の方に驚くことは、大地でのリアーネの一对の足跡に驚くことよりも弱いのであり、彼は彼女の何らかの現世的痕跡、聖遺物のためならば、 — 単に一つの糸包み紙であれ、刺繍の花であれ、 — 聖なる釘の樽を含む聖なる十字架の棚全体と更に聖人のダブルの肉体[聖遺物は複数見られた!]を含む幾つかの使徒達の衣装棚に劣らないものを差し出したことであろう。

— かくて私はしばしば切望したものであるが、せめて一ポンドの月の土壌とか、太陽からの陽光の塵埃で一杯の袋を眼前のテーブルの上に有し、触れてみたかったものである。

— このような具合に我々重みのある大方の著者は、国外の読者の前に、類似の繊細なエーテル的な形成物として漂っているのであって、この著者達が単に一切れのハムとか一杯の三月醸造のビールを試みるとか、靴を一足履くことは信じ難いものである。あたかもレッシングの髭剃りナイフとか、 — シェークスピアの英国製の鞍とか、 — ルソーの熊皮の帽子とか、 — 詩篇頌読者のダビデの臍とか、 — ホメロスの袖とか、 — ゲレルトの弁髪のリボンとか、 — ラームラー[Ramler(1725-98)]のナイトキャップとか、 — 私の中では大した意味はないが、禿とかを、人々が読んだり、見たりしなければならぬとき、人々が驚くようなものであろう。

老地方総裁は、リアーネの聖人列聖のために、 — 乙女は、若者の両親が寄せる称賛ほどに若者の心を捉えるものを有しないので、 — 更にかなりの補給を加えて、田舎娘の、そして彼自身同様に高笑いをするラベツテをしばしばリアーネと比較し、彼の従順な妻を厳しい大臣夫人と秘かに比較した。彼はそれから、機会を設けて、その純然たる、命題の厳しい規則に従って、この対位法的母がリアーネのメロディー的な音色をハーモニー的に整え、特に粗放さや高笑いを消し去るようにしている次第を説明した。女性の魂は孔雀であって、その宝石的羽毛は清潔で真っ白な住まいに住むようにしなければならないものである。一方我々男性の魂は家鴨小屋でもきれいなままである。 — アルバーノは娘と母親とを単に対の形姿で思い描いた。そこでこの画家は天使を描いていて、つまり分別ある厳格な母親は長い雲の中に収まっていて、ただ頭部のみ見える天使であり、リアーネは神々しい子供で、華奢な翼と共に白い雲の周りを舞っているのである。 —

ただ若干のものを、それが — 絹製の色褪せた千切れた薔薇であれ、ペスティッツからのものを彼は衷心から願った。 — それでも恥じ入って、結局長く考えた末に、ウィーン人に請願できたものは、あからさまに火照った顔をしていたものの、一枚のレッスン・マークに他ならなかった。「どんなものか知らないものですから」と彼は言った。 —

ファルテルレはまだ一枚バッグに有していた。 — 数字 15 がリアーネの前年の年であるが、その上に記されていた。 — 彼女は数字をまことに上手に書くことができた。 — それはともかく若干のものであった。いや彼は総裁にむしろ大臣夫人の簡易文庫からの長編小説を依頼しなかつたらうか。娘がきっと読んだであろう本で、いや若干の読書の葉が残されているかもしれないものを。 — 実際、彼は依頼したのであった。しかしヴェールフリッツはまずすべての長編小説を有毒な手紙として忌々しく思い、嫌っていた。それに彼は数冊借りて来るのを五度以上忘れた。そしてようやくジャンリス夫人[Genlis 伯爵夫人(1746-1830)]のものを、ゴータの懐中暦と共にアルバーノのために持って来た。浄福な者のこれらの本は、これらに比すれば私自身の作品やアレクサンドリアの図書館や青色文庫^{*1}は、単に惨めな返品本にすぎないもので、 — 女性の本のすべての刻印を有していた。というのはそれらは女性の頭部のすべての装飾を有していたからで、つまり女性の頭部同様の指貫一杯の髪粉、 — 同様の絹製のリボンの端を有し、読書の際の境界線や思索メモを有し、 — 同様に芳香を（これはゼムラー[Semler(1725-91)、神学者、晩年は錬金術に凝った]も錬金術的芳香を自慢しているものであるが）、この芳香は女性の頭部が楽園の花から吸い込んでいるように見えるものであった。この極上の本の浄福な読者よ（私は伯爵アルバーノのことを言っているが）、君はこれ以上のものを欲するのか。

勿論欲する。私は実際もっと見つけた。つまりゴータの懐中暦の奥の方の最後の両羊皮紙に次の言葉を見いだした。「慈善コンサート、二月二十一日」、そして「慈善劇、十一月一日」。 — 私は秘密めいたものを狩り立てるときはよくこれらの羊皮紙上で最も重要な秘密を追い出したものである。「これは私の女生徒の筆跡だ」（とファルテルレは言った） — 「彼女は母親同様このようなことはめったに忘れない。大臣は母娘が普通貧民に沢山施すのが好きではないのだ」。 — — ここで彼女の筆跡の美しさへの言及に私を留めないで欲しい。 — いずれにせよ紙よりも羊皮紙や石盤にはもっと美しく書かれるものであり、まさに女性読者は、男性読者と違って、無学な者達よりもカリグラフィー[書法]を心得ているからで、リアーネのこの古版本[Inkunabel]のもたらす効果の方へ急ぎたいものである。彼女の晴れの日文字は愛する人間をただ内的明るい日曜日で覆い、その紙片は神聖さの点で、中世に天から大地へ落ちて来たという手紙に類似しているのである。今ようやく彼には、あたかも空飛ぶ天使が、その影のみがただ先駆けて大地を去ったのに、その翼をたたんで、影の飛行をアルバーノの居る所から遠くない所で終えているかのように思われたのである。彼はゴータの懐中暦を暗記した。

彼は、リアーネが自分よりもはるかに穏やかで善良であると信じていたので、そして彼には彼女が、すべての惑星の中で最小の離心率で太陽の周りを回るヘスペルス[金星]に思われ、そして自分は最大の離心率で回る遠方の天王星に思われたので、 — そして頬を赤く恥じて染めずには、いつか娘と母親の倫理的礼儀作法を前に、より卑小な作法で遅れを取るようになるとしか考えられなかつたので、彼は突如（誰も何故かは分からなかつたが）、より小声に、より穏やかに、より好意的に、自分の外見により注意深く、ウィーン人により従順になって、 — というのはリアーネもそうであったから、 — そしてヴ

*1 Die blaue Bibliothek aller Nationen. 12 卷。1790-1800.

エスヴィオ火山^{*1} 全体が一人の聖女のヴェールで制御された。北アメリカのインディアンは夢に現れる形姿を自分の守護霊として崇めるといふ。同様にしばしば若者にとって一つの美しい夢はその守護霊とならないだろうか。 —

第二十二周

私が今記述しようと思っている聖霊降臨祭は、アルバーノよ、使徒伝を除けば恐らく君の伝記の他では見られないものであろう。

彼はこれまでリアーネの病気の話については、髓から元気な炎の青年の耳で聞き逃してきたが、突然総裁がこう帰宅して知らせた。敬虔な大臣夫人は娘を最初の聖霊降臨祭の日に聖餐式を受けさせるつもりである、死が娘を、太陽が照らし出す前に摘み取らなければならない葍と見なしているかもしれないと案じてのことである、と。[普通は当時十二歳頃受ける]。今やアルバーノはすでに死が探しながら石の踝で薄赤色の葍を踏み付け、踏み潰す様を見た。するとこの舌のないフィロメロ^{*2} は、これまで黙していなければならなかったもので、彼に対し、プロクネに対するように、ただ苦難な生存の描かれた話を、つまりはただ羊皮紙だけを送って来たと思われたのであった。 — すべての愛する情感は、植物同様、人生の雷雨のような大気の許で一層速やかに高く成長する。アルバーノはその死で空洞にされた心の中で、同時に広大な深い悲痛と苦しい熱病の熱さを感じた。 — 彼が音楽的詩的空想にエスターライン製のピアノで耽っているとき、リアーネの声の夢想の中での音色と響く流涕と、彼女が演奏でき、彼が耳にしたことのなかったハルモニカとが、さながら彼女の白鳥の歌として、彼のハーモニーと一緒に混じり合った。しかしこれで十分ではなかった。彼はそれどころか秘かに悲劇を（君は優しい奴だ）書いて、その中ですべての彼の極めて優しい、極めて苦い感情を、潤んだ目で、別人の唇に移し、それを表現する際には、その感情を恐ろしい具合に焚き付けた。 — 誰もが、彼はこうして告げ口や、スパイヤ、偶然の露見を逃れようと欲していたと気付くことだろう。しかし全く独自の点に誰もが気付いているわけではない。つまり別人の名前でなら、深い痛みにより激しい言葉を与えることが許される、即ち自分の名前では多くの禁欲的古典古代の英雄を前にして恥じ入って、その度胸のない言葉を与えることが許されると彼は信じたのである。しかしそんなやり方では古典作家は何も始められなかったであろう。

静かな温かい熱中はこの覆ってくる熱いガラス鐘の下、更に大きく成長した。つまり彼は養父母に感動して、自分を最初の聖霊降臨祭の日に、 — 神聖な聖餐式を受けさせるようにして欲しいと願い出る次第となった。村の教会の建築の脆弱さのため、一年後には式は無理であろうと思われて、この点彼にとってリアーネの体の脆弱さのような具合になった。 — 哀れな、肉体や砂漠で分断された人間の魂にとって、互いに少なくとも同じ時に同じ事をしようという、同じ時に月を見、あるいは月を越えて上に祈りを捧げようと

*1 [シチリアの]カターニアでは聖アーガタのヴェールはエトナ火山の唯一の解毒剤である。

*2 (訳注) フィロメロは姉プロクネの夫テレウスに犯され、口封じに舌を切られたが、長衣にこのことを織り込んで姉に伝えた。[Ovid:Metamorphosen VI]

という（アディソン[Addison(1672-1719)、英国の作家]が語っているように）憧れが永遠に残っている。かくて、アルバーノよ、君の願い、君の目に見えないリアーネと共に同じ時間に、祭壇の段で跪き、それから内部の人間の戴冠の後、炎のように支配しながら起き上がるという願いは、人間的な、優しい願いなのである。彼は静かな国で、彼の魂の中の宗教の祭壇を高く、堅固に、気高い空想を抱くすべての人間がそうであるように、打ち立てていた。山々の上にはいつも神殿と礼拝堂があるものである。

しかし私はまず彼と一緒に教会の塔へ行ってから、聖霊降臨祭の教会へ同伴することにする。当時素敵な日曜の日々に、広大な天に重々しい太陽しか泳いでいないとき、塔の鐘の席まで登って、鐘の音のざわざわ言う波に覆われて、一人で下の大地を眺め、そして愛しい町の西側の境界の丘に目を転じたことほど何か酩酊するようなものがあろうか。――

それから鐘の響きの嵐がすべてを混和させて吹き上げ、そして池の宝石のような輝きや踊る春の花々の行楽地、白い道路沿いの赤い館、濃い緑の苗床の間にゆっくりと散在している教会の人々、豊かな沃野の周りの帯状の奔流、青い山々、朝の生贄のこの煙った祭壇、見える限りの一面に広がった光輝というものが彼の心を薄明かりで一杯に満たし、彼にとってすべてが薄暗い夢の風景のように見えたとき、そのとき彼の内部のコロッセウムは精神的古典古代の静かな神々の諸形式で一杯になって開き、空想の松明の輝き^{*1}はそれらの上を戯れて逍遙する魔術的生命として漂って行った。――そして彼が神々の許に一人の友と一人の恋人とが安らっているのを見て、彼が燃え上がり、震えたとき、...そのとき鐘が不安げに黙しながら揺れ止んだ。――彼は明るい春から暗い塔の中へ戻って行った。――彼は目を単に眼前の空虚な青い夜に目を据えた。そこには遠方の大地は時に吹き飛ばされた蝶や、十字を切って飛び過ぎて行く燕、波打って飛んで行く鳩の他には何も飛来させなかった。――エーテルの青いヴェール^{*2}は幾千にも折りたたまれて、遠方の覆われた神々の上に揺れていた。――いや、そのとき、そのとき心は見棄てられて叫ぶざるを得なかった。どこで僕は広大な空間の中で、短い人生の中で、自分が永遠に、衷心から愛する魂を見いだすのであろう、と。愛しい者よ、一人の心ほどより痛々しく、より長く求められるものがあろうか。人間は海の前、山々の上、ピラミッドや廃墟の前、不幸の前に立ち、身を起こすとき、人間は大いなる友情を求めて両腕を差し出すものである。

――人間を音楽や月や春、歓喜の涙が穏やかに心動かすとき、心は溶けて、人間は愛を欲する。――この両者[友情と愛]とを決して求めない者は、この両者を失った者より千倍貧しい。――

今や聖霊降臨祭の教会へ行くことにしよう。ここで彼の空想の深い奔流が彼の人生で初めて溢れ出して、彼の心を遠く拉致して、かくて新しい床の中でざわめくようにしたのであった。物理的雷雨がこの奔流に実際注いできた。すでに朝方雷雨の雲の黒い火薬庫が黙して暑い太陽の隣に居座っていて、太陽の許で熱を帯び、そしてただ時折、遠方の別の雲

*1 人々がコロッセウムやアンティークとを、――そしてその両者である氷河とを――一層魔術的になって輝くように見るとき用いる松明の暗示である。

*2 天の女王たるユーノには、古代人はいつも青いヴェールを掛けている。ハーゲドルン『絵画についての考察』[Hagedorn(1713-1780)、二巻本、1762. S.226]。

から礼拝のとき一つの雷が一つの炎の太鼓の音を響かせた。しかしアルバーノが祭壇の前に高揚し、神々しくなった心情と共に足を踏み入れ、彼がリアーネに対する自分の愛を単に彼女のための内的な祈りに仮装させて、彼女の今日の敬虔さと、信心深く、黒っぽい花嫁服の青白い形姿という一枚の絵に変装させ、穏やかにこう感じたとき、つまり今や自分の浄化され、聖化された魂はこの美しい魂により一層相応しいものとなったと感じたとき、嵐がそのすべての戯れる戦争機械、死者のオルガン^{*}と共に菩提樹^{リンデンシュタット}の町の方から襲来して、武装して、熱く教会の上方にやって来た。しかしアルバーノは、聖なる感激という意識の中で、驚くことはなく、すでに落下して行く雪崩の遠方の回転を耳にしたとき、ただリアーネのことを考え、菩提樹^{リンデンシュタット}の町への落雷のことを考えていた。そして今や太陽が彼の上の嵐の雲の火薬庫にその熱い閃光と共に点火して、千もの稲光や雷音に砕けたとき、そのとき雷死に対する古代人から育てられた彼の尊敬の念が恐ろしい推測を彼の心にもたらした、つまり今やリアーネは神々しい敬神の栄光の中で死んでしまったという推測であった。そのとき彼は実際今や稲妻の翼が雲の上から自分に落ちてくるだろうと思わざるを得なかった。そして祭壇の聖人達や天使達の周りに長い閃光が燃え上がり、震えるようなより強められた歌声と馴染みの鐘の警報の音と鳴り響くオルガンとが破裂する雷鳴と混じり合い、そして彼が耳を聳せんばかりの物音の中で、聞いたこともないハルモニカの音と想った高く繊細なオルガンの音を耳にしたとき、彼は神々しくなって凱旋車、雷車の中の彼のリアーネの隣に乗り込んだのであった。―― 人生の劇場の幕と舞台とが彼らの下で燃え落ちて―― 彼らは一緒になって輝きながら冷たく純なエーテルの中へ上昇し飛翔していった。...

しかし十二時の音がこの霊の出現と雷雨とを追い払った。―― アルバーノは一層青い、一層涼しい大気の下へ出て来た。―― 輝くような太陽が好意的にびっくりした大地に笑いかけていた。大地のすべての花々の目の中では明るい涙が震えていた。―― さて、アルバーノが午後なおも、リアーネの町を平和に雷が通り過ぎたと耳にしたとき、彼女の新たに保証された生命に対する信仰によって、安堵した空想の穏やかな燻し金によって、―― 帰依した胸の聖なる静寂によって、―― そして彼の魂の隅々からのより親密な愛によって、一つの夕焼けの魔術的アルカディアが生じて来た。―― 一人の人間がこれほど優しいアルカディアに足を踏み入れることはないものであった。――

第二十三周

親愛なるセサラよ、私が君の人生の牧人芝居のすべての幕を忠実に書き写しているのは、単に後世の読者への好意から生じているのではなく、君に対する本当の好意からも生じている。―― 君の晩年にはこのメロディー的芝居はさわやかな余韻を君にとって響かせることだろう。そして君は仕事の終わった夕方、ここの私の仕事ほど好んで読むものはないことだろう。

次の夜は周一つに値する。聖霊降臨祭の後、間もなく彼は哀れなリアーネの新たな病氣

*1 一度に多くの射撃を行う昔の機械。

について、週ごとに医学上の心配で、悩まされることになった。この病気は、あたかも彼が正しく予感していたかのように、聖餐式の日に始まったものであった。彼女は老侯爵の散歩の庭、住まいの庭であるリラルに、彼女の兄と共に暮らし、苦しんでいると、彼は耳にした。その兄が返事を寄越さない理由を今やウィーン人は一千一もたらしていた。リラルに対しては、ペスティッツの近くではあったが、彼の父は封鎖線を引いていなかった。―― リアーネの夜の明かりがひょっとしたら彼に漏れてくるかもしれないし、あるいはそれどころか彼女のハルモニカの音色を聞けるかもしれない。―― いや彼女の兄はなお散策しているかもしれない。―― いずれにせよ、六月の夜は明るく素晴らしい。

―― 要するに彼は出掛けた。

夜遅くで静かであった。明かりのない眠っている村から遠く離れても館での居間の時計のフルートの音色をペスティッツの山でも聞き取ることができたことであろう。自分の道が菩提樹リンデンシュタットの町の国道で一本道であることに彼は元気付けられた。目を西側の山に据えて見ると、星々は白い花々のように彼女に[リアーネに]降りかかって見えた。広い高台では、ヘルクレスの分かれ道で、右の支道が下りとなっていて、杜や沃野を通じて花と咲くリラルに向きを変えていた。

若々しく明るいイメージを一杯に、歓喜に酔って、イタリア風の夜の中を進むがいい。この夜は君の周りで微光を発し、香り、ヘスペリア[西の夕べの国]の上方であるかのように、温かい月からそう離れていない所に青い西空に金鍍金の宵の明星¹を掛けている、さながら愛する魂の住まいの上方に掛かっているかのようなのである。君と君の若々しい目にとって、星々は単に希望を投下するのみで、まだ思い出を投下することはない。君は赤い花の蕾で一杯の折り取られて固い林檎の小枝を手をしている。この蕾は、不幸な者達のように、開花すると青ざめるものである。しかし君はまだ我々のようには、このような比喻にはならない。

今や彼は火照って不安げにリラルの谷の溝に立っていた。しかしこのリラルを並木道の奇妙に丸い森がまだ隠していた。この森は中央部分で花咲く山へと生長していて、この山は広い向日葵や桜桃の花綵装飾、輝く白楊、薔薇の木で技巧的に組み込まれて、覆われ、囲まれていて、その山は月光の絵画的鬼火の前で果実や花々で一杯の、ただ一本の不気味な円錐形の木であるかのように見えた。アルバーノはその梢に、下方に広がる天、あるいはリラルを一望する天文台の如く、登ってみたいと思った。ようやくこの森のところで、[出入り口の]開放された木陰道を見つけた。

この木陰道は螺旋を描きながら、ますます深い夜の中へ彼を導いて行った。この夜からは月は見えず、単に黙した閃光が射し込むだけであった。この閃光によって雲のない温かい天が溢れていた。この山は魔法圏を葉から次第に小さい花々へと押し上げていて、――

二人の裸の子供が銀梅花[ミルテ]の下で両腕を互いに愛撫しながら傾け合った頭部に置いていた。それはアモールとプシュケの立像であった。薔薇蛾は小さな舌で花弁から蜜を吸い取っていて、蛍がさながら夕焼けの跳ねる火花の如く、薔薇の茂みの周りに黄金の糸のように飛んでいた。―― 彼は頂きと根の間を芳香のする階段の手摺に従って、天へ

*1 イタリアでは星々は銀色ではなく、金色に見える。

と登って行った。しかし小さな、彼と一緒に回って行く螺旋並木道は星々を深紅のハナダイコン[夜堇]で覆い、低い庭園をオレンジの梢で覆っていた。 — 最後に彼は自らのヤコブの梯子たる最上段に達して、全感覚と共に、覆いのない生き生きした天の中へ飛び出した。明るい山の頂が、単に花々の萼で多彩に縁取りされて、彼を受けとめ、彼を星々の下で揺すった。そして一つの白い祭壇が彼の隣で月光を受けて明るく輝いていた。 —

しかし見下ろし給え、青春で一杯の瑞々しい心の炎の若者よ、素晴らしく、果てしのない魔法のリラールを。[蝸牛山公園は良く見られた]。微かな音色が我々に描き出すような一つの薄明の第二世界が、開かれた朝の夢が、君の前に、高い凱旋門と共に、ささやく迷路と共に、至福の島々と共に広がっている。 — 沈んだ月の明るい雪の色がわずかに杜や凱旋門[アーチ]に、噴水の銀色のしぶきに、横たわっているだけで、すべての川や谷から湧き出る夜が天上の影世界の楽土の野の上に漂っている。この影世界では現世の記憶にとって未知の形姿が此岸のタヒチ島の岸边、牧人の国々、ダフネの杜、ポプラ島[ビエンヌ湖にある]のように出現しているものである。 — 珍しい明かりが暗い葉陰を通じて漏れてきて、すべてが魔術的に混乱している。 — かの高く開けられた門、あるいはアーチは、そして隙間のある杜、その背後の赤い輝き、白い子供は何を意味するのか。その子供はオレンジ百合とマリーゴールドの下に眠っていて、それらの萼からは優しい炎が玉となって滴っている^{*1}。さながら天使が余りに間近にその上を飛んで行ったかのようなのである。

— 閃光で白鳥が照らし出され、白鳥は明かりを帯びた霧の下、波の上で眠っている。閃光の炎は金色に燃え、深い木々へ飛び^{*2}、金魚が燃える背を水面で転回させる按配である。 — アルバーノよ、君の山の頂の周りですえ、向日葵の大きな目が炎のように君を見つめている。あたかも蛍の火花で点火されたもののようなのである。

「この明かりの国に」（とアルバーノは震えながら考えた）「私の未来の静かな天使が潜んでいる。そして天使が現れると、その国を神々しくするのだ。 — リアーネよ、君はどこに住んでいるのか。かの白い神殿だろうか。 — それとも薔薇の茂みの間の園亭だろうか。それとも向こうの緑色の牧歌的な四阿だろうか」。 — 愛がすでに痛みを喜びに変え、地上の影の[九柱戯の]ピンを星々のピンに起こすのであれば、まず歓喜はいかほど魅了されることだろう。 — アルバーノはこの外的内的光輝の中で、リアーネが病気であると考えることができなかった。彼は今やただ浄福な未来だけを考えて、憧れ、広い心で祭壇に跪いた。 — 彼は輝かしい庭園の方を見て、いつか彼女と一緒にこの楽園の島の一つ一つに足を踏み入れたら、どんな具合であろうと思い描いた。 — 聖なる自然が彼と彼女の手をこの祭壇上で重ねて置いたら、 — 彼が彼女にその途中人生のヘスペリア[タベの国]、初恋という牧人の国を描き、そして彼らの敬虔な歓呼、彼らの甘美な流涕を描いたら、そしてそれから最も優しい心の女性の目の方を振り向くことができない、その目が浄福の余り溢れ出ているとすでに承知しているから、できないとなったら、と思いついていった。 — 今や彼は月光の中、凱旋門の上を、二人の照らし出された形姿[老

*1 雷雨模様の大気の中では、オレンジ百合、マリーゴールド、向日葵、インド撫子等からは小さな炎が生ずる。

*2 多分鳥除けの金色の薄いものが舞っているのである。

侯爵とシュペーナー]が霊の如く歩むのを見た。しかし彼の燃える魂は描き続けた。そして彼は小夜啼鳥がこの樂園で啼いたら、自分が彼女の前で狂ったように愛してこう言うであろう様を考えていた。「リアーネよ、私はあなたを早くから胸に抱いていた。――かつて、あなたが病気であったときに向こうのあの山の上で」と。――

ここで彼はびっくりして正気に戻った。――自分は山の上にいるのであった、――しかし彼は病気のことを忘れていたのであった。――そこで彼は跪いて、両腕を冷たい岩の周りに置いて、自分がとても愛していて、きっとここで祈りもした女性のために祈った。彼は泣きながら暗然となって、頭を祭壇に沈めた。彼は蝸牛山の下の方で近寄って来る人間の足音を耳にした。臆病に、また喜びながら、自分の父親かもしれないと考えた。しかし彼は大胆に跪いていた。――とうとう花々の縁を越えて、一人の大きな背をかがめた老人が寄って来た。高貴なフォン・シュパンゲンベルク[Spangenberg(1704-92)]僧正に似ていて、その落ち着いた顔は永遠の愛で微笑んでいた。その顔には何の苦痛も見られず、どんな苦痛をも恐れていないように見えた。老人は黙って、喜んで、若者の両手を祈り続けるよう握りしめ、彼の隣で祈った。そしてよく祈祷で神々しくなるかの歓喜のせいで、年老いたこの形姿の上に後光が射した。――この和合とこの沈黙は珍しいものであった。わずかに地上から突き出ている月の残滓が、一層陰気に燃え上がった。最後にそれは沈んだ。そこで老人は立ち上がって、敬虔さの慣習から来る経過の簡略さを伴って、アルバーノの名前と居場所について尋ねた。返事の後、彼はただこう言った。「愛しい息子よ、途中全能の神に祈りなさい。雷雨が来る前に、眠りに就きなさい」*1。――

この声と形姿は、アルバーノの心から消え去ることのないものである。この老人の魂は、金環食のときの太陽のように、太陽を腐敗の地球で覆おうとする暗い物体を越えて、全ての縁が輝きながら聳え出て来るものである。――神経の先端まで深く震撼されて、アルバーノは立ち上がった。より大きな稲光で、今や魔術的庭園の隣の下の方に、第二の、陰気な、鬱蒼とした、恐ろしげな庭園が見えた。さながらエリュシオン[楽土]のタルタルス[冥府の底]であった。――彼は奇妙に入り交じる感情を抱いて別れた。――その中で未来と人間達が途中全く近くに立っているように見え、透明なカーテンの背後ですでに劇場の明かりとしてあちこち走るかのように見えた。――彼はこの点火された心の活動よりも、もっと難しい行為に憧れた。しかし彼は内面の野火を枕に寝かせつかせなければならなかった。そして夢が始まると高い所の雷が夜の神のように最初の轟きを交えてきた。

第二十四周

この未知の老人は長いことアルバーノの魂の中に立っていて、去ろうとしなかった。そもそも今、彼の人生の川床では、奔流の勢いを放つ湾曲が必要となっていた。運命は彼のような人間を形成するには、ただ状況の転換を必要とする。弱い者にはただ状況の存続が必要なだけである。というのはもっと長くそのまま経過すると、彼の神殿のシャンデリアは内部の地震のせいで、ますます揺れが大きくなり、遂にはその後もはや一本の蠟燭も燃

*1 (訳注) 注釈すべきではないかもしれないが、アルバーノと実父の老侯爵との出会いである。

え続けることができなくなつたであろうからである。何という帝国議会への苦情をすでにヴェールフリッツとハーフェンレッファーは一致してこう述べていることだろうか。つまりブルーメンビュールの気球船長のブランシャール^{*1}[アルバーノのこと]は、その気体静力学的シャボン玉に乗って上昇し、セサラは総裁の全専制を通じて、ほとんど乗船を止められそうになつた、と。何と神々しく、彼は、地上にその鉄輪や束縛命令を投棄し、それらのすべての市場の堆積物、国境樹、ヘルクレスの柱[ジブラルタル海峡]を垂直に飛び立ち、一つの星座としてその周りを回ることばかりでなく、魔術的なリラールや封鎖された菩提樹リンデンシュタットの町の上へも貪欲な目で漂い、一面の重い豊かな世界をも一瞥の操作で渴した心に持ち上げることを思い描いていなかったらうか。

しかし運命はこの急速な奔流の落下を挫いた。つまり幸いすでに長いことブルーメンビュールの教会は日々崩壊の危機にあつた。――私は聖霊降臨祭の雷がこの教会に落ちておればいいと思つたし、建設局に注進に及んでいたらいいと思つていた。――その時、更にもっと幸いなことに老侯爵の体調がすぐれなくなつた。今やこの教会は侯爵の代々の墓地となるわけで、この教会の代々の墓地とまたなるわけには行かなくなつたのであつた。

老侯爵夫人が大臣のフルレと共にこの村を通過するという出来事が生ずることになつた。両人は夙に支配者となつて国家の帝国代理、代理大使、王笏使用者となつていた。疲れた老侯爵は王冠の戯れ、重荷、光輝、重みを喜んで手放して、かの両後見人を王笏の世襲局に招じ入れていたからである。――要するに教会の古さが侯爵夫妻の年齢の次に決め手となつて祖廟のための新しい屋根や蓋を作ることになつた。

地方総裁も一緒に視察した。そして高貴な一行を自分の家に招待した。一行の中では特に侯国建築士のディーアンと芸術顧問官のフライシュゲルファーが工芸通として、若い侯爵令嬢が自然通として特筆されるべきものである。

哀れなダンス教師は、望遠鏡で一行の風の便りを得たとき、ステップで一杯の両足を温かい足浴に入れていたときであつた。このウィーン人が、悪魔が馬と共に有する唯一のもの、つまり足を学士と共に有し、これは優に 1.5 パリ・フィートの長さであつたこと、それ故彼の二重の根の枝は、靴という狭い温床礫の中で芽接ぎの目、つまり魚の目で一杯の実をつける節杖となつていたことは誰にとつても楽しいことではあるまい。今日彼はこのゴルディアスの結び目[難問]を足浴で砕き解きたいのであつた。しかしこのような訪問に際しては、――足を出すことは決してしなかつたけれども、――印象を良くするために、窮屈極まる子供シューズを履かざるを得なかつた。かくて、猿が重すぎる靴で捕まるように、人間は軽すぎる靴で捕まるものである。

これに対してアルバーノは[ギリシア悲劇用]高靴に立っていた。そもそもペスティッツから来る者は、誰もが、彼にとっては清祓された神聖な大地を靴底に有してゐた。ここで彼は村の若者のあの好意的敬虔の念で、年老いて、しかし赤い頬の、高貴な血筋の侯爵夫人の、歳月で上に曲がった顎と親しげな顔を見ていた。この顔は全体深い頭巾の茂みの中に、――ひょっとしたら多くを経た生命線を隠すために、――収まっていた。彼女はこの頭を微笑しつつ、比較しながら、兄と妹であろうと思つて、彼とラベッテの間であち

*1 Blanchard (1738-1809)、1786 年軽気球でドーヴァー海峡を越えた。

こち振り動かしていた。母親達はいつも母親達の許ではまず子供の方を見るからである。彼が知っていたら良かったのと思われるのは、目の前の小さな縮れ毛の侯爵令嬢はリアーネの女友達であったということで、彼女は、すでに彼の年齢ではあったが、決して典侍係のお墨付きではない好意的な活発さで、まだすべての者達を覗き込んでいて、ラベッテの手さえ手に取って、彼女から言いようもない愛想のいい、武骨な笑い顔を引き出したのであった。彼には大臣は恐ろしく思えた。体と魂の強い部分で一杯の男で、強引で、絞め殺すような情熱、しかしただ花の鎖に繋がれた情熱に満ち、この男からは、その頑丈な顔はまずは丁重に好意的な十二の愛の[占星術の]宮図が上書きされていたけれども、しかし神経的に繊細なリアーネがこのような男を父とし、指導者としているのは、格別納得されないようなものであった。この男の場合、人間が他の動物よりももっと多くを血の中に有するという鉄の部分、ゲッツ[フォン・ベルリッヒンゲン、義手]の場合のように手に投げられたりするのは、額と心臓とに投げられていたのである。

私はアルバーノにとって我慢ならなかった一行の唯一の部分についてはただちょっとだけ触れておく。芸術顧問官のフライシュデルファーで、彼はその顔を、古代人のドレープ[襪]のように、単純な高貴な大きな皺の中に収めていたのであった。つまり彼は何年も前に、我らの内気な幼い主人公を心窩の所まで描くためにモデルとして座って貰おうとしたのであった。その顔と広く、高い、シャツの襟飾りから輝き出るプラトンの胸[プラトンはその名を広い胸から得ているとされる]を写し描くためか、写し象るためか、どちらかは分からないが、そのためであった。しかし恥ずかしがった子供は、両手や両腕をばたつかせて、模写できたのは台座、胸部を欠いた素顔だけであった。 — これに対して私の前では、親愛なるモデルよ、君は今や何年にもわたって、モデルの三脚の上の柱頭聖者の如く、おとなしくして、私の鳥口に対して君の頭部と胸部とをその体積と共にさらしている、その配置は言うまでもないことである。 —

ひょっとしたら彼の高貴な形姿のお蔭であったかもしれないが、美しい体型の鼻筋の通った、立派な瘦身のギリシア人ディーアンが、その漆黒の髪と黒い鷲の目をして、どんな軽快な動作の際にも、ダンス教師や接見の部屋で見られるよりも品位のある一層高次の自由を見せて、炎のように彼の許に歩み寄って、瞬時のうちに緑なす土壌の上の、真珠養殖棚の上の、この若者の深い、しかし純なる海を見つめたのであった。アルバーノはその甲高すぎる激しい声と、その恭しいが、しかし鋭く見開いた眼差しと、その確固とした姿勢で、内的文化と過剰とを、外的田舎びた赤面と穏やかさとを優しく混和して表現していた。さながらまだチューリップの苗床へと切りそろえられたことのない百合の木[チューリップの木]、金箔の家具付きの田舎風のエルミタージュ、隠者の庵であった。 — 彼は隠者風の青春の欠点を有していた。しかし人間と冬大根とは、大きく育つようにと、広々と播種されなければならない。密集した人間や木々は、確かにもっとほっそりした幹の育ちをするが、風雪に強いことはなく、放任された者達のように豊かな樹冠や枝を有しない。

— 屈託のない心安さでこの建築士は火照っている若者に打ち明けた。「今からは毎週出会うことでしょう。自分は毎日、教会の建築を点検に来ますから」。 —

— ヴェールフリッツ家は今や高貴な一行が、最後の馬車の車輪が見えなくなるまで、見送って、喜びの余韻の残るラヴェンダー香水について三言、言いたがっていた。この香水は一行がすべての隅、すべての家具に振りかけていったものであった。足許を圧縮機で

ただ瘤の所まで煉獄にさらされていて、それから話し好きの侯爵令嬢が彼の[バレエ]五つの脚のポジションをととても良く覚えていて、有頂天に至ることになった教練教師に始まって、一 謙虚なラベッテ、自分に勝る令嬢を称賛するラベッテに至るまで、一 そして侯爵夫人の許で侯爵令嬢に対する温かい母性愛を見て好感を感じたアルビーネに至るまで、一 そして育ての息子の立派に合格した刀身検査、錨検査、それに上流社会のこの改宗した大陸の一般的実直さを思い出して喜んでいて総裁に至るまで、というのはこの男は、侯爵や大臣達が、その衣装室には入坑のために鉱山服を有しているように、総裁用服も、司法の毛皮服も、宗教局の羊の毛皮も、女性のオペラ用ドレスをも衣装部屋に有していることを知らなかったからで、一 要するにこうした人達から総裁に至るまで、喜ばしい余韻が生じて、セサラの中で、一 一種の危急号砲と共に止んだ。彼の名誉心は武器を取り、一 彼の青春の願望の軍旗は清祓され、解かれて天にはためいた。一 そしてミルテの花冠の上に輝かしく高く揺れる羽根飾りの重い兜を被せた。...

次の周は単に、このことをどう解すべきかただ書かれている。

第二十五周

私の意見も、両教育上の団体、ヴェーマイヤーとファルテルレの交誼的二重コーラスは、これまで我らのノルマン人を上手に教育してきたこと、二つの類似の教育頭目、女傳育官のイギリスと女家庭教師のフランスが現今の女生徒ドイツを最良の教科書で本当に教育してきた、かくて我々はまた我らの側として、ポーランド人を教えることができ、ポーランド人を我らの侯爵校の講壇から鞭をもって必要なだけ鞭打っているような具合であるというものである。一

しかし今や余りに多くがアルバーノの中で目覚めていた。彼は教えてくれる教師を見いだせないほどの溢れる力を感じていた、一 イタリアの地をさまよっている父は彼のことを等閑にしているように見えた、一 ミューズの地ペスティッツを（ここはその上一人のミューズ女神を更に有していた）、父は彼を不当に封鎖しているように見えた、一 彼はしばしばじっとしておれなかった、一 空想、心、血、名誉心が沸き上がってきた。このような場合、どの発酵している樽でもそうであるように（知識であれ仕事であれ）空隙ほど危険なものはない。

この樽をディーアンが満たした。

ディーアンは毎週、あたかも図面に従って、教会の槌叩き指示を、壁仕上げ同様しなければならぬかのように町からやって来た。ギリシア人を初めて見る若者は、最初全くそのことが信じられないもので、若者はギリシア人を古典的に神々しいと見なし、プルタークからの印刷全紙と思うものである。さて若者の心が私の心の如く燃えていて、その上そのギリシア人がディーアンのようにスパルタ人の子孫で、つまり、美的音楽学校の古典的二重コーラスの中で、即ちアテネとローマで教育された負けを知らない[ギリシア南部の]マイナ人であるならば、当然な如く、この熱狂した青年は毎日解体される教会の壁の塵埃、腐敗の雲の中に立ち、司令官が雲の柱の背後から現れ出るか待つものである。

果実よりも早くに滴や虫を振り落とさなければならなくなっている。

そして今や彼は大胆に彼に哲学の諸流派のすべての小部屋のドアを、即ちすべての三つの天を開けた。というのはこの青年時代には人はまだ世のすべての学的明かりの芯を石綿と見なすからである。バラモンが石綿をまとうようなものである。 — そして我らの精神世界の極地の氷作品は、現世の極地の作品のように、町や神殿を青空の柱の上にまだ思い描くのである。

さてアルバーノは何らかの偉大な観念について、不死性や神性について、燃え上がって読んだとき、それらについて記さなければならなかった。この建築士は、 — 私も同様であるが、 — こう信じていたからである。教育世界では記述に勝るものはない、読書や会話さえ及ばない、そして人間は三十年読書しても、その教養の収穫は、半年記述することに及ばないというものである。 — それ故劣等な著者でさえ、耐えて行けば、最後には幾ばくかのものとなり、書いて行くうちにシルダ[阿呆の町]からアブデラ[同]、そしてクラブ通り[三文文士]に上達するのである。

しかし何と白熱した時間が、それから、我々の寵児に恵まれたことだろうか。感激した青年がすべての脳室を照らし出して、この光輝の中で最初の論考を飛ばすとき、この高貴な祭典に比すれば、すべての中国式ランタンの祭典は何ほどのものであろう。

論考の敷居の前方でひょっとしたらアルバーノはまだ一步一步進んで、単に頭脳だけ使ったかもしれない。 — しかし上達し、心が翼と共に震え、彗星のように偉大な諸真理のただ微光を放つ星座の前を通り過ぎて行かなければならなくなったとき、 — 薔薇のように赤いフラミンゴに似てくることを抑えられたであろうか。このフラミンゴは太陽に向かって進みながら色を染めて飛翔する火災となり、二重の炎となって飛ぶように見えるのである。実技ということになってしまうと、実際、どの実技も他の実技同様に、 — どの実技においても彼は人間的天使で一杯のアルカディアを形成し播種したのである。これらの天使はそのために投げられたカロンの小舟で三分すると間近に漂って来る楽園に上陸できたのであり、 — どの実技の点でもすべての人間が聖人で、すべての聖人が浄福者で、すべての朝方が盛花で、すべての夕方が果実で、リアーネは健康で、彼はそこから大して離れていず、彼女の恋人なのであった。 — すべての諸民族が正午の高さでより明るく昇った。そして彼は自身の正午の高みで、山上の人間の如く、すべての善なるものをより間近に眺めた。 — いや、切り株や蛭に満ちた沼地の現在全体を彼は一蹴りして脇へ突き飛ばして、彼はただ沃野で一杯の緑の諸世界に取り囲まれていた。この諸世界は彼の頭の太陽球がエーテルの中へ投げ飛ばしたものであった。 — —

浄福な、浄福な時よ。汝はとうの昔に過ぎ去ってしまった。人間がその最初の詩と体系とを読み書く年月、精神がその最初の諸世界を創造し祝福する年月、人間が新鮮な朝の考えに満ちて真理の最初の星座がやって来るのを見る年月、この年月は永遠の光輝を帯びており、憧れる心の前に永遠に立っている。この心はその年月を享受したのであり、この心にとってその後の時は、単に朝の星座についての天文学的暦表と屈折表とを渡すだけで、これらは単に古くさい真理と若作りの嘘にすぎない。 — いや、当時彼は真理の牛乳によって生まれたての渇した子供のように飲み物を与えられ、大きく育った。後にはこれでは単に萎えた懷疑的消耗患者として癒やされるのみである。 — しかし勿論汝は再びやって来ることはない、真理に対する初恋の素晴らしい時代よ。そしてこの溜め息がまさに

汝の思い出をより温かくしてくれるはずのものである。たとえ汝が戻って来ても、それはきっとこちらの人生の深く低い採鉱の中で生ずることはないであろう。そこでは我々の曙光は含金黄鉄鉱の金の微光の中にあり、我々の太陽は鉱山の明かりの中にある。いや、そうではなく、死が我々を起こし、縦坑の棺の蓋を深い、薄黄色の労働者達から取り去り、我々が再び最初の間達のように、新しい満ちた大地の中に立って、新鮮な測りがたい天の下にいるとき、そのことは生じ得よう。 —

彼の心のこの黄金時代に、またルソーとシェークスピアを知ることになった。そのうちのルソーは世紀を越えて彼を持ち上げ、シェークスピアは人生を越えて持ち上げた。ここで私は、シェークスピアが彼の心の中でいかに強力に支配したか言うつもりはない。 —

生き生きとして諸性格[登場人物]の息遣いを通じてではなく、 — 現世的甲高い領国から沈黙の無限の領国への昂揚を通じて支配したのである。夜、頭を水の下に漬けると、我々の周りには恐るべき静寂が見られる。下界の同じような超現世的静寂にシェークスピアは我々を導く。

多くの学校教師がディーアンに関して非難する点は、彼が若者にあらゆる本を、読書の正確な秩序なしに手当たり次第に与えたということであろう。しかしアルバンは後年にこう尋ねた。「このような秩序というものは馬鹿げた次第ではなかろうか。 — そんな秩序が考えられるか。一体運命が新刊本とか体系とか教師とか外的出来事とか会話とかを整然と段階ごとに秩序付けて、かくて現在はただ記憶のために書き写すしか必要なくなって、その上秩序付けられることがあろうか。それぞれの頭脳が自らの秩序を必要としていて、形成するのではないか。 — 食事の順番が大事か、それとも消化が大事か」と。 —

第二十六周

ディーアンが村の石造りの神殿よりもより美しい神殿を高く築かせている間に、侯爵夫人が亡くなって、夫人の悲痛の臥所がこの石造りの神殿となることになった。このため二、三千の変更が生じた。従って夫人は差し当たりペスティッツの教会という宿に埋葬されなければならなくなった。ホーエンフリースの皇太子ルイージが、今やイタリアの国から侯爵席に戻って来るべきこと、戻って来なければならないことになった。この侯爵席には老いて、歳月に巻き込まれた侯爵が座っているというよりは小さく無言で臥していた。 —

もつとも侯爵席の背もたれの背後には大臣が立っていて、侯爵の人物像と声とを十分元気に模していた。 — アルバーノのこれまでの手紙すべてに対し黙殺していたドン・ガスパールが、アルバーノに強いワインに似て血管を沸き立たせる命令を指示した。「私がイタリアから帰る途次、そなたの誕生の地、イーゾラ・ベッラ[島]で会うことにしよう。迎えの者を寄越すことになる」。 — 一週間公使の身上書の手紙の封を切ったり、封印したりしたことがまだない読者でも、金羊毛皮騎士は自分の息子を若い侯爵と、彼らの最初のペスティッツでの関係を結び付け、混合させることを考えていると容易に気付くことだろう。 —

しかし私は世間をお願いしたいが、かくも長い航海の後、海に新世界の長い岸辺がようやく横たわっているのを目にする人間の極楽を測って頂きたいものである。今や人生は百もの方角で開示されたのではないか。 — 月桂冠が、 — 木蔦冠が、 — 花輪が、

— ミルテ冠が、 — 穂冠が、 —— こうしたすべての花綵がペスティッツの正門とその玄関に掛かっていた。兄上よ、妹君よ（私はロケロールとリアーネのことを言っているが）、何と憧れに満ちた人間が君達に憧れていたことか。何という夢見る無邪気な人間がそうしていたことか。ホメロスとソフォクレス、それに古代史とディーアンとルソー、

— 若者達のこの魔術師、 — それにシェークスピアとイギリスの週刊誌¹（この雑誌ではより高次の人間的詩が彼らの抽象的詩の中でよりも語りかけている）、こうしたものすべてが、この幸福な若者の中で、永遠の光を、比類のない純粹さを、すべてのタボルの山[キリスト変容の山]への翼を、最も美しく、最も難しい願望を残していた。彼は池のように最も近い岸辺の色を帯びる市民階級のフランス人達には似ていず、海のように無限の天の色を帯びる一層高次の人間達に似ていた。 —

そもそも今が彼の変化にとって最も成熟した最良の時点であった。ディーアンと彼の旅を通じて、彼の外見的人間さえもホテルの部屋の中で一層美しく発展していた。人間は磨かれると銃の弾のように一層先に進む。セサラの許では、いずれにせよ十分にダイヤモンドの先端が残っていた。凡人はそれに衝突し、自らを突くものである。尋常ならざる価値そのものは、尋常ならざる欠点であって、 — 高い塔はまさにそれ故曲がっているように見えるものである。セサラはまさに地方のユンカー圏の外部で、理念や言葉の迅速さを修得して行って、これは以前は単に熱狂していたときにのみ自在になったものである。というのは機知は、これは普通熱狂の敵であるが、彼の場合は単に熱狂の従者、子供にすぎなかったからである。彼は機知の初心者のように、すべての観念と戯れることはせず、観念に掴まれるか、あるいは全く触られないかであった。それ故かの黙した、ゆっくりした、さりげない彼の力の成熟が生じたのであり、彼はゆっくりと上昇する山脈に似ていた。これは急速に出現する山脈よりも多くの獲物を放つものである。大きな木々では種はより小さく、春には花が小さな灌木の許でよりも遅く咲くものである。 —

ガスパールの迎えの使者がやって来るそれ以前の時間は、留められていた青年にとっては永遠に思われ、村は牢獄であった。村は一つの修道院の農舎に縮んだ。覆われた、しかし蠟画で彼の脳裏に書き込まれて人生の計画は（すべてのこうした青年達の場合同様に）、以下のすべてに勝るものにしかならないし、それしかなかったというもので、 — 即ち、自らと一つの国を同時に幸せにし、壯麗化し、啓発するということ、 — 王座のいわばフリードリヒ二世たること、つまり罪人にとっては追放の光[破門を宣する]を有し、聾者や盲人、萎えた者達にとっては電氣的光を有し、昆虫にとっては俄雨、渴した花々にとっては滴、敵どもにとっては霰、すべてのもの、花卉や埃にとっては一つの引力、端にとっては一つの虹を有する一つの雷雨となるというものであった。 —— さて彼はフリードリヒ二世の後を継ぐことは許されなかったので、将来少なくとも大臣となろうと欲した。

— 殊にヴェールフリッツは、この副王笏、母なる王笏からの挿し木、挿し枝の丈から幾ばくかのことをなしていたからであり、 —— そして暇な折り、ついでに偉大な詩人、賢者になろうと思った。

伯爵よ、君が第二のフリードリヒ二世、唯一王となろうとするのであれば、私には結構

*1(訳注) アルバーノよりは、作者自身に影響を与えていると思われる。

なこととなろう。 — 私のこの本はそれで恩恵を受けよう。私自身はそのことで、稀に見る、クセノフォンとクルティウスとヴォルテールの合わさった歴史記述者たる幸せを得ることになる。

第二十七周

セサラはあの春の宵を忘れることはあるまい。その宵、外套を着たある通行人が、 — 少しばかりびっこを引いて、褐色の旅の化粧をして、これとは対照的に白い眼球が輝いていたが、 — 高い橋の横の浅い小川を徒渉して来るのを見たのであり、更にはこの通行人は、現在の乞食取締大尉が代理の協力者として玄関に立てかけておいた警備棒を手にとって、これを途中一人の不具者にこう言って渡したのであった。「ご老体、私はこの槍より小さなものは持っていない。誰かが貴殿に尋ねたら、ただこう言うが良かろう、自分は村で忌々しい乞食を見張っているのだが、目が十分に行き届かぬ」と。 — そう言いながらこの巡礼者は、校長の息子にハンカチを差し出して、三分間で涙を拭くようにさせた。

勿論これは我らの老名目図書館司書のショッペで、ドン・ガスパールがイーゾラ・ベッラ[島]への招待状と共に派遣した者であった。アルバーノの感動はとても大きく、ようやく数日後に、この諧謔的変わり者に若者らしく手こずることになったが、一方この変わり者は直にこの軽快な、熱く、物静かな野生児を正しく評価することになった。老地方総裁にとってはもっとひどいことに思われたのではないか。それはただ彼がドイツの帝国国体を、あたかも自分の中へ教区編入された帝国魂であるかのように高く評価していたからで、憲法に対するショッペの攻撃で愛国者的怒りに襲われたのである。「よいかな」（と彼は激昂して言った）「どこかうまく進捗しなくても、実直なドイツ人はそのことには静かに黙っていなければなりません。どうしようもない時には、殊にこんなとんでもない時代には」。

最も素晴らしかったのは、ルイージの要望で、同時に建築士も、ローマで古典古代の塑像をローマから取り寄せるために旅立たなければならなくなったことであった。

— さて、君達は進んで行くがいい。また戻って来て、ようやくペスティッツに入ることになるのだ。 — 勿論君は、立派な子供よ、(森の蜂と私は言うべきであろう)、田舎の蜜の木から都市のガラス製の養蜂舎への飛行を思っていたよりも深い痛みと共に経験することになろう。 — 老養父は別れを言わずに旅立つことさえしていないだろうか。ただ君との別れを避けるために。 — そして君の善良な母親は、あたかも怒った運命の女神パルカが、一人の息子を胸から引き裂くかのように、あたかも息子の華奢な、単に子供らしい慣習から紡がれた愛の絆は遠くの未来までは届かないかのように思われていることだろう。 — そして君の妹はマンサード屋根の下の部屋に、彼女の田舎風の、火攻めで荒れる心と共に閉じ籠もっていて、君には何も言えず、何も渡せず、自分がこれまで秘かに編んできた札入れ、絹製の文字で「私どものことを忘れないで」と記されたものを差し出すことだろう。 — 君の月桂冠を求める頭自身には、別れの凱旋門、虹が君がその下を通り過ぎるとき、重たい、重たい滴を落とすことだろう。(いや見送る目には、その滴はもっと長く掛かっている)、 — 君の老いて、実直な教師ヴェーマイヤーは、君

にその言葉と涙の最後の奔流を流して、こう言うことだろう（そして君の優しい心は微笑むことができないことだろう）。「自分は老いて、干涸らびた奴だ。そして目の前にあるのは穴（墓）だけだ。 — おまえはそれに引き換え、若く瑞々しい男だ。言葉と古典と立派な神の才能を一杯に有する。 — 勿論自分はおまえが有名な男になるのを体験することはなかろう、しかし自分の子供らは体験することだろう。こいつらをよろしくな、若殿」。 —

— 純な魂の君よ、見慣れた家を見るにつけ、大事な庭園や谷を見るにつけ、痛みはその折りたたみナイフを研いで、それで君の火照る華奢な心にこっそりと流れ出る傷を付けることだろう。 — そうだろう。君の親しくなった西や東の高台から（君の最も神聖な希望の[尼僧院]面会格子から）さえも、リアーネ自身からも君は別れると思っていることだろう。 — — —

しかし君の泣いている目を開放された青いイタリアに投げかけ、春の気分で乾かすがいい。 — 人生が始まる。 — 武装された青春の武闘訓練と快適な対戦の合図がなされることだろう。 — そしてオリンピアの競技の最中、君は素晴らしく高らかに、間近なコンサート会場やダンス会場で取り巻かれることだろう。

ここで私は何の空想をしているのか。 — 彼が夙に第一ヨベル期以来立ち去って、いやまた戻って来ていることさえ、我々皆にとって周知すぎることはないだろうか。そして彼はすでに第二ヨベル期以来、 — 今は第四ヨベル期を数えているが、 — 図書館司書と講師と共に馬上にペスティッツを前にして、次の[ヨベル期の]門のせいで入れないでいるのである。 —

第五ヨベル期

豪華な入場 — スフェックス博士 — 太鼓を叩く腐肉 — 命日の逆行 — 騎士の手紙 — ユリエンネ — 晩年の静かな聖金曜日 — 健康で内気な皇太子 — ロケロール — 視力喪失 — 涙に対するスフェックスの愛好 — 致命的饗宴 — 愛の悲痛[ドロロソ]

第二十八周

分かれ道を経て、リラールへはその右の方に行くのであるが、アルバーノは不安げに馬に拍車をかけながら、山を登って行き、とうとう明るい町が照明を付けられた聖ピエトロ寺院のドームのように彼の空想の春の夜の中に長く広く燃えている所まで来た。その町は巨人のように上半身を（山の町と呼ばれて）高台に置いていて、下半身を（谷の町）谷に差し込んでいた。正午であった。空には雲一つなかった。真昼には町は輝く全面的円盤としてあって、小さな村の方はようやく夕方にその上弦の光から満月の光の中へ移って行くのである。その町は立派に築城されていたが、リンプラー[Rimpler(1636-83)ウィーンの弾道学者]やヴォヴァン[Vauban(1633-1707)]の手によるものではなく、菩提樹からなる生きた柵杭によるものであった。上部では我らのアルバンに対して山の町の宮殿の長い壁が照らし出されていて、それらの北イタリア風の屋根の上の彫像は歓喜の道標、触れ役のように彼に対峙していた。 — すべての宮殿の上に避雷針の鉄の組み立てが、雷の王座として黄

金の王笏の先端と共に引かれていた。一 脇の下の方へ谷の町は小川の横に並木道の影の間に位置していて、露地に対し多彩な正面を向け、自然に対し白い背面を向けていた。

一 大工達が牧草地の上で、皮を剥がれた幹材の下で、鍛工場のように叩いていた。子供達は樹皮で鳴らしていた。一 織物職人は緑色の布を鳥毘のように陽に向けて広げていた。一 遠方から白い幌の荷馬車が国道をこちらへとやって来て、道の両側では毛を刈られた羊が豊かで明るい菩提樹の蕾の温かい影の下、草を食んでいた。一 こうしたすべての塊の上に正午の鐘の音が愛しく馴染みのある塔から（彼のより薄暗い時からのこの遺物、燈台）、さながら結び合わせ、生気付けるかのように漂ってきて、人間達を親しげに呼び寄せた。一一

私の主人公の熱くなった顔を眺め給え。この主人公は、実際どの長い窓からも、どのバルコニーからもリアーネが立っていかねない、開け放たれて、陽光の神殿の建ち並ぶ露地の中によろやく騎行してきているのであり、一 ここでイーゾラ・ベッラ[島]での詐術的、あるいは予言的謎が展開するに違いなく、一 彼のすぐ未来のすべての家の神々や家の運命の女神が潜んでいて、一 今や宮廷のモン・ブランとパルナツソスのアルプスが、両者とも彼が登攀するべく、彼の許にその裾野を隣接させているのである。一一 私ならば若干重苦しい気持ちになったことであろう。しかし若者の中では、殊に太陽のシャンデリアを前にして、照明の雨が落下して燃えた。青春の朝の風が吹くとき、内部の水銀柱は高くなるものである。たとえ、外部の天候は最良のものといえなくても。

我々の中で、大学へ移るとき、私の主人公ほどその馬でかくもさわやかな喧噪の中へ侵入したものは少ないかもしれない。煙突掃除人は上のその説教壇や黒い穴から下へ歌っており、新しい家の切妻屋根では棟梁が将来の火事の祓い清めの言葉を大いに述べていて、自らの燃え上がりを静めて、ガラス製の消火バケツを足場の遠くに投げつけていた。いや、我々は彼と共に、屋根の演説家に対して笑っている教区民達の間を通過して、花と咲くミュージズの息子達[大学生]の腕の列を通過して騎行して行った。アルバンはその間、炎の目を彼のロケロールを求めて、巡らせていた。そのとき我々は彼の将来の住処の前で新たな叫び声にぶつかった。

それは地方医スフェックス、彼の家主のせいであった。家主は彼に館の半分を（というのはドクトルは治療で財を得ているから）貸すのである。その家はまさに山の町あるいは宮廷のウェストミュンスターにあるからで、谷の町には学生達や商人達が住んでいるのである。背丈の低い小太りのスフェックス博士は、三人組が入って来たとき、背丈の高い人間の横に立っていた。この人間は石のベンチに座っていて、子供の太鼓に二本の木槌を持って構えていた。スフェックスの合図でこの背の高い男は太鼓に弱い連打を与えた。博士は悠然と彼に言った。「護摩灰[ゴマノハイ]め」。スフェックスは少しばかり物音を立てた騎乗者達に向きを変えたけれども、直に連打を続けさせて、言った。「無頼漢め」、一 しかし最後の打撃のときただ急いで挿入せざるを得なかった。「ならず者め」。

騎乗者達は降りた。博士は彼らを儀礼なしに、太鼓打ちに動くなという合図を手で与えた後、家の中に案内した。彼は彼らに四本から十二本の柵杭[家]を開けて、冷たく言った。「三腔[頭、胸、腹]に入られるがいい」。アルバーノは日中の温かい光輝から彼の赤いカーテンの部屋の涼しい深紅のエレボス[冥界]へ描かれる夢の絵画陳列室に入るがごとく、さながら人生の暗い鉦山のための銀精錬所に入って行った。彼はその中で彼の豊かな父の開

けられた手を、床の絨毯の絵柄から壁の雪花石膏の彫像に至るまで感じ取っていた。そして小部屋の中で彼の養父母からの贈り物として、すべての後からの送られて来た詩的哲学的習作集、静かな、旅によって遠く昔のこととなった青春時代からの優しい反映等に出会った。それらの撫子の植木鉢にはただコンコルディア[撫子属、和合の女神の響き]だけが花咲いていたが、今やフォイヤーフアクセ[撫子属、炎の茶番の響き]の種が蒔かれるのである。そのとき、夜の女神の外套ではないが、薄明の女神のヴェールが彼の目の上に投げかけられ、薄明の女神が遠近法の中で未来の諸形姿を、幾つかは武装し、幾つかは花輪を被さられて、つまり運命の女神と優美女神の一行を、これまでとても静かであった彼の心の許で仕事にとりかかるようにさせ、彼の心は優しく、穏やかなものとなった。―― 三分だけのことであった。まことに一人の若者は、殊にこの若者は、画家を喜ばせる海の嵐を、物理学者を喜ばせる活発な火山を、天文学者を喜ばせる彗星を、物理世界でも倫理世界でも同様に好むものである。

今やリアーネとは単に露地と日中とで隔てられていて、アルバーノは自分の夢想的恍惚の本音が漏れることをほとんど恐れていた。「手紙は来ていますか」と講師は市民階級のために端折った大胆な作法で尋ねた。「ヴァン・スヴィーテン、上へ持って来い」とスフェックスは一人の息子に言った¹。この息子は他の二人の息子、ブルーハーヴェとガレヌスという名の兄弟と共に、新しい借家人達の通信解読局をこれまでカーテンの陰で行っていたのであった。「我らの老侯は」（とスフェックスは突然、手紙と関係があるかのように言い添えた）。「やはり身罷りました。五日前からお陀仏です。私が夙に予言していたように」。―― 「老侯爵ですか」と驚いてアウグスティは尋ねた。「しかし何故まだ何も吊鐘の音や、黒く塗られた締め金や、涙壺や悲嘆を町で見ないのです」とショッペは尋ねた。

これを医官は説明した。つまり彼は侍医として老侯爵の臨終の時秒[60分の1秒単位]を十分大胆に予告していて、幸い当たったのであった。しかし後継者のルイーゼは死の不幸の一日後にペスティッツへ入ろうと思っていたし、高貴な者の死の通知は息子のために油を注がれていた照明全部を涙壺に注ぎだして、花と咲く凱旋門を喪章で覆いかねなかつたので、後継者が入場しないうちは、正確な予言を行ったスフェックスにとっては最大の痛手となることであったが、この件を公にさせないことにしたのであった。かのギリシア人[クセノフォン]が息子の死の知らせを受けた際、楽しい犠牲の終了後に葬儀を引き延ばしたようなものである、と。スフェックスは請け合った、すでに何年も前にやんごとなき亡き侯爵の白い歯² 故に肺結核の生誕の星位を仮定していて、そのときほど臨終の時を立派に当てたことはなかった。自分の予告をいつでも知らせた医師が、このような政治的隠匿を受けて、大いに稼げるものか、誰もが自ら判断して欲しいものである、と。―― 「しかし」（とショッペは答えた）、「亡き殿様方を、その亡き兵士同様にまだ存命者としてリストに載せるのは、これはほとんど致し方ないことですぞ。というのはお偉いさんの場合、

*1 (訳注) 息子達の名前は名医の名前。Gerard van Swieten(1700-72) マリア・テレジアの侍医。Herman Boerhaave(1668-1738)、生理学の確立者。Claudius Galenus 二世紀の名医。

*2 カンペル[Petrus Camper(1722-89)]によると、肺結核患者はとても白く美しい歯を有するそうである。

そもそも存命か証明するのは忌々しいほどに難しいことであると共に、死んでいるとしても、探し出すことは容易なことではないからであります。冷たい、動かない、腐敗しているとしても、ほとんど証明ではありません。しかしひょっとしたら王侯の臨終を、ペルシア人が王侯の墓を隠すように、次の点でも隠すのかもしれませんが。つまり哀れな領民に死と新しい忠誠の間の苦い期間をできるだけ短縮するためです。いや擬制によって王たるものは死なないのですから、そもそもその死を知ることになった分を、つまり王の死は同様に不死のヴォルテールの死、パリのジャーナリストが全く知らせるのを許さなかったヴォルテールとは同じでないことを、我々は神に感謝すべきであります」。

ヴァン・スヴィーテンとブルーハーヴェ、それにガレヌスは長いこと姿を消した後で一通の手紙を持って来た。アルバーノ宛のガスパールの封印のあるものだった。彼は手紙を、若者らしく、疑念を抱かず、封筒を一瞥することなく、引き裂いた。しかし講師は封筒を手にとって、郵便局員か紋章学者か国璽尚書のごとく習慣通りに封印の傷の検査のために回し見て、叙爵書の、つまり紋章の劣等な更新に対してかすかに頭を振った。「子供達が少し封印を傷付けたかな」とスフェックスが言った。「私の父も」（とアルバーノは読みながら、外見にまで及びそうな感動を抑えて言った、重たい思念の飛行は突然その感動の中へすべての内面的小枝を投じた）「侯爵の逝去をすでに知っています」。そこでアウグスティは更に強く頭を振った。というのは、先にスフェックスは手紙のことから突然侯爵の死に飛躍して行ったので、この飛躍はほとんどスフェックスの閲覧を前提とすることになったからである。読者はこのことから次の規則を引き出すとよい、つまり人々は自分の前であちこち飛ぶ二つの音色の隔たりに不審を感じ、そこから隠そうと思われている両者の間の主導音を推定しなければならないということである。

伯爵にとっては、ドクトルが家庭教師達にその部屋を指示したことは今やまことに結構なことであった。彼の今日すでに揺れている魂は今や手紙の内容で激しく震撼された。

第二十九周

スフェックスが図書館司書に部屋を開けたとき、この部屋はすでに（やはりイタリアから到着した）蝮の箱と、四分の三ツェントナーの亜麻と、色褪せた骨張り婦人スカートとドクトル夫人の三足の穴の開いた絹靴とで占拠され、それに紡車やカミレの貯蔵品もあった。医師の夫妻は、家庭教師の連れは一緒にいいと考えていた。しかしショッペはまことに上手に、より上品に扱われたアウグスティに若干の皮肉をほぼ込めて言った。「二人の人間がより力強く、より機知豊かに、より偉大になるにつれ、二人は一つ屋根の下では一層我慢できなくなります。果実を食って生きる昆虫どもは群れないようなものです（例えば榛の実のそれぞれにはただ一匹の甲虫がいます）他方、ただ葉を喰っている小さな昆虫どもは、例えばアブラムシはくっつき合って暮らしています」。 — セサラなら勿論その飽きない心に天佑で遣わされた愛しい友を、いつでもどのような状況や時であれ、戦友のように一緒に置いておきたかったことであろう。しかしショッペが正しい。友人や恋人や夫婦はすべてを共有すべきであろう。ただ — 部屋は共有すべきではない。肉体的現在の粗野な要請とか、些細な偶発事がランプの煤のごとく、愛の純粋な白い炎の周りに集まるものである。我々の叫び声が遠く離れるほど、木霊はもっと多音節になるように、我

々がもっと美しい木霊を欲する魂は、我々の魂の余りに間近にある必要はない。それ故肉体が遠ざかると共に魂はより間近になるのである。

ドクトルは彼の騒がしい子供達を一掃する奔流としてアウゲイアスの部屋[不潔な牛舎]へ去らせた。しかし彼はまた太鼓叩きの許へ行った。彼の話によれば、この太鼓叩きとは次のような事情にあった。スフェックスはすでに数年前、脂身の分泌と脂の細胞の直径に関して、ある論考の中で特別な推定を行っていたが、自分がそれについての解剖学的素描を銅版彫りさせることができないうちは、その論考を出版する気がなかった。この素描についてはそこに座っている太鼓叩きの解剖と洗出を待つ他ないのであった。この病気の、単純な、ぼんやりした人間、マルツという名前であるが、この人間と彼は一年前、若干の脂身の目がこの人間に見られたとき、彼が亡くなったら解剖を了承するという条件で賄うことにしたのであった。不幸なことにスフェックスはかなり前から、この腐肉は日々やせて行き、一匹のウナギからツノクサリヘビへと干涸らびて行くのを見ることになった。この男は何も吸い出すものを、思考も、動きも、情熱も、感受性も、酔も、その他の何ものも出さないで、彼はどうしていいか分からないのであった。

この腐肉は、太鼓を、 — この者は難聴であると共に頑固であり、何の理性も耳にしないが故に、何の理性も見せないで、 — 絶えずぶら下げていなければならなかった。太鼓に触れていると、その雇主、解剖助手が彼に対し非難する言葉をより良く聞き取るのであった*1。 — さてドクトルは下で彼を次のように叱責した。 — ショッペは窓から下を見て聞いていた。「おまえの亡き親父^{おやじ}さんは、亡くなるよりも、むしろ悪魔にさらわれてしまっていてやがれと思うぞ。おまえは嘆いて、兵士のハンカチみたいに縮むことだろう。それでもおまえが泣いて鼻を拭いても、親父さんは生き返ることはない。太鼓を打ったがまだ、禿鼠め。 — いいか、おまえはできるだけ太ると契約していることを忘れたのか、畜生め。使いものになるまで大事に養っているのに。 — おい、何とか言え、でくの坊」。マルツは太鼓のバチを股の下に落として、言った。「本当にあっしには愛想が付きましよう。脂に恵まれることはありますまい。 — このことではどちらもじっと身が細る思いです。 — 私の亡き親父^{おやじ}どののことはきれいさっぱり忘れています。いつあっしが思い出しても」。

第三十周

アルバーノの魂のすべての継ぎ目を震撼させた父親の手紙は翻訳すると次のようなものである。

「愛するアルバーノよ、カンパンの谷で、おまえの妹に関する段々激しく反復してくる仮死[脈停止]についての手紙を残念ながら受け取った。聖金曜日の日付で、すでにその死を確定的なことと前提してあった。私も覚悟している。それだけに予言者ぶっている島で

*1 Derham は(その『物理神学』1750[翻訳]で) 聾者は騒音の中で最も良く聞き取る、例えば難聴者は鐘の音の下で、聾の女将は下僕の太鼓の音の下で聞き取ると述べている。それ故、大抵耳の悪い侯爵や大臣達の前では、彼らが通過するとき、音楽やティンパニーや砲撃の音が鳴らされる。彼らが人民に一層容易に耳を傾けられるようにするためである。[William Derham(1657-1735)]

の香具師についてのおまへの知らせには一層驚いた。このような予言には何らかの関与が疑われるので、私はスペインでもっと探りを入れなければなるまい。この欺瞞者にはすでに心当たりがあるように思われる。おまへの誕生日には用心して、構えて、冷静大胆であって欲しい。できればその奇術師を捕まえることだ。しかしこの件を話して滑稽なことにならないように。 — ディーアンはローマにいて、大変立派に仕事をしている。 — 親愛なる老侯爵に対しては、進んで宮中喪に服するように。

アディオー[ご機嫌よう]。 G.de.C]

「大事な妹よ」と彼は心から溜め息をついて、彼女のメダルを取りだし、今や難しくなった高齢時の面影を泣きながら見つめ、反駁された銘、「イツカ会ウコトデショウ」を泣きながら読んだ。今、彼に対して人生が笑いながら大きく開いてくるとき、運命が妹をかくも窮屈に圧迫していることは、はるかにもっと悲しいことであった。いや自分のせいで彼女の消失が生じているのではないかという苛酷な考えも生じた。彼のことで島の恐ろしいサフリはひよっとしたら犠牲を要する奇術を行ったのかもしれないのだから。彼女が自分の虚弱な双子児の妹であるという事情さえ一つの痛みとなった。 — 闘いながら、今や諸感情が彼の精神の中で戦場にいるときのように対峙し合った。何という運命が私に向かって来るのか、と彼は考えた。「王冠を受け取りなさい」とかの声は言っていた。「どの冠か」と起き上がりながら彼の名声に飢えた精神は尋ねて、大胆に、王冠は月桂樹から、あるいは茨から、あるいは金属から成るのか調べた。 — 「美しいその女性を愛しなさい」とその声は言った。しかし「どの女性を」と彼は尋ねなかった。 — 死の神父たる男がその名前とその真実性とを恐るべく証しているように見えたので、告知の声が、昇天日と誕生日の夜、愛しい名前とは別の名前を告げることを彼はただ恐れていた。 —

三人の新参者が家財の整理を終えた後の夕方、この整理をしてもアルバーノの波打つ心は相変わらず菩提樹^{リンデンシュタット}の町の多重な魔法の光輝を減じさせることはなかったが、講師が伯爵を皇太子ルイージの許に案内して行った。ルイージは毎日半時間絵画陳列室で絵画の模写を行っていた。終わるまで両人に待つよう指示があった。私以外の者であればここで世間にこの陳列室のすべての見本料理の分別あるメニューを提示することだろう。しかし世間に十七の絵画を贈ることさえ好まない。それらの魅力的絵画の上にはかの絹製の小エプロンあるいはヴェールが掛かっている、このヴェールはパリならば一人のレディーが喜んで自分の魅力的箇所から取り除いて、かくてただ恥じらって芸術作品を隠そうとするものである。容易に考えられることであるが、絵画陳列室では母親の陳列室¹が我らのアルバンに思い浮かんだ。誰もいなかったら、どの釘も動かしたかったことだろう。

しかし侯爵令嬢のユリエンネがいた。彼女については彼は（我々皆も）まだブルーメンビュール以来よく知っていて、彼女も彼について知っていた。彼女は確かに若い魅力に溢れていたが、数日前から彼女に惚れ込んでいなかったら、なかなかこの若い魅力には気付かないものであった。それでその後は時が進むごとに彼女はより愛らしく思われて、そもそもアモールは優美女神の息子というよりは父親であるようなものである。アモールの矢

*1 その壁にはメモ帳を持った女性がいる。

筒は最良の宝飾箱、最も重要な化粧箱であり、アモールの目隠しは、私の知る限り最良のヴィーナスのハンカチであり、紅白粉用小片である。

彼女は丁度美しく老いた頭部の石膏像を描いていた。それは伯爵にとってさながら自分の思い出の古典陳列室から取って来たように見えたもので、彼の湧き立つ心はまことに愛しく向かって流れて行った。しかしその原像を思い出せなかった。 — ようやくユリエンネが、作法は構わずに、まことに善意に、仰ぎ見ながら言った。「アウグスティさん、私の父はリラルで亡くなったのです」。リラルという言葉で突然アルバーノの中で色褪せた思い出の像が鮮明になった。 — 全くこの青白い胸像のように例の老人が月光の中で見えたのであり、この老人はかの詩的な夏の夜、セサラの両手を山上で祈りのために合わせて、言ったのであった。「愛しい息子よ、雷雨が来る前に、眠りに就きなさい」。別な男ならまずこの胸像の名前を尋ねて、それからようやくあの夜の話打ち明けたことだろう。しかし伯爵はただ、会話の流れをちょっと待ってから、直にその話をした。アウグスティは、伯爵が自分の与り知らない原像との出会いの話を始めたとき、案じてその話を遮ろうとした。しかしユリエンネは構わないという合図をした。そして若者は誠実に関心を抱く女性にその素敵な出会いを感動して熱く語って、彼女の目が微笑と共に溢れ出たとき、更にそれ以上に感動し熱くなった。 — 「私の父だったのです、これが石膏像です」とユリエンネは泣きながら喜んで言った。アルバーノは自分の流儀で溜め息をつく胸と共に胸像の前で合掌して言った。「高貴な、衷心から愛しいお姿の方」、そして彼の大きな目は愛と悲しみの余り微光を放った。

この善良な女性の魂はかくも非宮廷的な関心の寄せ方に心を奪われて、全く自分の生来の熱情に身を任せた。女性の生活、宮廷の生活は確かに単に武器携帯の長めの罰にすぎず、

— 宮廷典侍長は、諾ばかり言う人[イエスマン]の例に従って、否ばかり言う人がいるように、真に否ばかり言う女性であり、 — 快活に踊るような自由の七色の記章はここでは引き千切られているか、あるいは宮廷喪の黒を帯びるものである。 — すべて女性的な林苑は不吉な林苑で、 — これ以上致命的なものを私は知らない。 — しかし縮れ毛のユリエンネは、全く無頓着に、甘いパンと日中の蒸留の水[酒][パンと水は牢獄のイメージ]の見られる永遠の牢獄を通じて、多分十二回脱獄し、自由な天に笑いかけ、いつも宮廷典侍長を辱めた（ — 自らや他人を辱めることは決してなかった）。彼女は今や伯爵に語った（神経質と活発さのせいでますます強く微笑し、ますます早く話した）、自分の愛しい、弱った、子供っぽいというよりは子供らしい父親が、その老いた唇と萎えた思考力は単にもつれた祈りしか上げられなかったけれども、一人の霜の白髪の神秘的宮廷説教家と一緒にリラルのベッドの部屋に閉じ籠もっていたこと（白髪になると、消える前に隠れたがるもので、鳥のように眠りのために暗い地を求めるものである）、 — そして自分とフォン・フルレ嬢（リアーネ）がこの半ば盲となった老人のために交替で祈りを読み上げ、さながら敬虔の夕べの鐘を疲れて寝惚けた人生の前に鳴らしていたことを語った。彼女は、この老人が墓所のこの前庭で、すべての愛しいものよりも長く生きていたこと、あるいはその者達を忘れてしまっていたこと、いつも彼女の母親のことを尋ね、その死をいつも新たに失念していたこと、老化した目のせいで日中をいつも夕方と考え、それ故すべて立ち去る者を、眠りに就こうとしている者と考えていたことを描いて見せた。

人生のこの晩年について余りに長く注目することは避けることにしよう。この時期には

人間はまた子供として墓場でのより長い揺り籠のために縮むのであり、人間は夕方眠る花々のように見分けがたくなるのであり、死の時よりも早くに互いに等しい者となるのである。

特に講師にとっては、すべての廷臣同様にこうした葬儀の話は好ましくなかった。それに彼女の嘆きのヨブの病を[話題の]転換で治したかった。そしてもっとリアーネの方に導いて行った。しかしまさに彼女がこの女友達の関与や犠牲を描き、リアーネが彼女と痛みとをさながら固く自らに抱き寄せたときの長い流涕の抱擁をまた思い出すと、力強い動脈で押し出されてきたかの暗く重い血の滴が再び心臓の中に戻って来て、彼女は描くことを、この話しを描くことも、頭部の像を描くことも止めてしまった。

この両女友達は互いに接吻を二つの紗を通して届いたことにしてしまうとか、髪型を少しも傷付けずに互いに嘆きを収める術を承知しているとか、その愛餐が年ごとに、聖餐式のパンが世紀ごとにそうなるように、より軽く、より薄く捏ねられるといった女友達ではなかった。彼女達は衷心から目や、唇や、心で、二人の良き天使のように愛し合っていた。以前喜びがその収穫祭の花輪を取って、その花輪を彼女達のために友情の結婚指輪としたとすれば、今や悲痛がその棘のベルトで同じことをした。 — 君達、良き魂よ。かくも純粋な輝くような魂の同盟が君達の友のアルバーノの心を同時に痛々しく広げ、浄福に高めるであろうことは、私には全く容易に察せられることである。軽気球が同時に激しく膨らんで上昇するようなものである。リアーネの侵入のためには、いずれにせよ彼の内部ですでに飾られた凱旋門が高く聳えていた。

しかしこの私の筆を知らない他の人なら、いや領主裁判長のハーフェンレップァー氏の報告のない私でも、話している伯爵を見ても、顔に何か分からない火照りと素早い言葉しか気付かなかったことであろう。

第三十一周

突然この描写と享受の中に王位継承者が、あるいはむしろ冷たくなった老人の余寒たる者、ルイージが登場して来た。人生の浪費者の永遠の不機嫌だけを表情に浮かべた海綿状の顔という平板な彫刻作品と共に、頭部の（知恵歯の先駆けとしての）若干成熟した白髪と共に、そしてたっぷり太った腹という不毛の過受胎と共に、極めて慇懃にアルバーノに向かって来た。その慇懃さにはすべての人間に対する平板な霜が見られた。彼は早速、空虚な素早いばらばらの質問の黻[ふすま]を周りに振りまき、いつも急いでいた。というのは彼は自分が生じさせる以上の退屈さを更にほとんど感じていたからである。そもそも、人生を短縮させる者にとってほど、人生が厭わしく長く感じられることはないようなものである。ルイージは地上を素早く、髪粉部屋を通り過ぎるように經由していて、この部屋でのように然るべく灰色となっていた。彼の外的内的人間の牛乳瓶は、それらは生クリーム瓶やクリーム瓶となるべきものなので、まさにそれ故に有毒瓶、受難杯へと変化していた。私は廊下での一連の描かれた侯爵の前を通り過ぎるたびに、いつも私の昔の考えを思い出し、全く確信を抱いて言ったものである。「いつか健康な支配者を王座に戴くことがせめて、スパルタ人や少し前のすべての民族のようにできさえすれば、立派な支配者を上に戴くことになり、万事上手く行くことだろう。しかしそういう時代ではないことを私は

承知している。外科医や医師は罰当たりなことに、苦しい時と同様に喜びの度合いとか、害のない箇所を正確に指摘はしても、単に苦しいときに助けてくれるだけで、喜びのときではない」と。 —

アルバーノは、こうした人間階級を前にして、そしてこの中で不慣れで、最初自分とルイージの間の溝を実際よりも浅いものと見ていた。ただ単に不快で、圧迫感が感じられたが、ある種の人々にとって、自ら知らないのに一匹の猫が部屋にいるときの感じのようなものである。絶えざる倫理的脱力化と繊細化とで我々の外面はすべて清掃され、調停されることだろう。 — それも、身体的虚弱化で発疹が収まり、より高貴な部分へと追放されるのと同じ法則に従ってであり、かくてまことに一人の天使と一人の悪魔とは結局心の中でしか区別されないことになる。 — アルバーノはすでにヴェールフリッツからこの後継者に対する反感を受け継いでいた。ヴェールフリッツは絶えず侯爵に対して地方の権利を戦っていて、そのことを耳にしていた。それだけに一層容易に彼の中で倫理的憤激が燃え上がった。ルイージが絵の方を向いて、最も猥褻な絵の中の幾つかからそのカーテン、あるいは尻当て革を引き払って、その芸術的内容について、趣味と知識とを交えて、論評したのであった。ティツィアーノの模写されたヴィーナス[ジョルジョーネの『眠れるヴィーナス』]、これは白い布の上にあったが、単に先駆けにすぎなかった。罪のない皇太子は陳列室での「絵入り旅」を画廊支配人、解剖学者の芸術家的冷静さで行い、自分の知識を豊かなものにするというよりは披露しようとしていたが、しかし経験の浅い若者は、すべてを豊で盲いた憤慨でもって受け入れた。この憤慨に関しては私は何をもってしても弁護し得ないもので、侯爵令嬢が居合わせるからとさえ言えないものだった。第一に令嬢はその魂をただ石膏の胸像とその模写の間に、作業しながら、置いていたのであり、第二に今日では女性用時計と扇子は（これらが趣味豊かなものであれば）、絵画を描かせているのであり、これらの絵に対してアルバーノはまた扇子が必要となろうからである。怒りと羞恥の二つの炎が彼の顔に火照る反射と共に差した。しかしこの頼りない反抗と対照をなしたのは、講師の練達さで、彼は冷静な、明快であると共に軽快な調子で、自立性を保って、純粹さを守っていた。「これらはすべて私の気に入りません」（と彼は無愛想に言った）「私ならテンペスタの嵐のたった一枚の絵とこれらを交換しましょう」。ルイージは彼の学校生徒らしい目と感情に微笑を浮かべた。彼らが二番目の絵画室に入ったとき、アルバーノは侯爵令嬢が立ち去るのを耳にした。この部屋は最も神聖ならざる絵の更なる千切れたカーテンで彼に迫って来たので、彼は格別の儀礼なしに別れて、今日講義の予定であった講師を連れずに戻って行った。

このときほど早くショッペが彼の脈打つ手を握ったことはなかった。羞恥した青年の様は羞恥した乙女の様より一層ほとんど優しい（それに一層稀である）。徳操の混じり合った怒りのせいで青年は女性的により穏やかに見え、乙女は男性的により強く見える。ショッペはポープやスウィフト、ボワローのように性の神聖さを衣服や言語のシニシズムと連合させる者で、すべての放蕩に対する最大の怒りの杯を空にして、諷刺的なペローナ[戦の女神]として、最良の自由な人々をも襲撃した。しかし今日はむしろ彼らを擁護して言った。「この輩全体、他人の赤い羞恥がとても好きで、破廉恥よりもむしろ羞恥と戦うものです。丁度（同じ理由で）盲人が緋色を好むようなものです。この輩は蛙と比べられましょう。蛙というのは貴重な[護符の]蛙石を（やつらの心を）他ならぬ赤い布に生むので

す」。 —

講師は、とても純潔で嗜みがあったけれども、公爵夫人の尻に対する頌詩をスカロン [Paul Scarron(1610-60)] が書くとすれば、ためらいなく手伝う者で、 — 自分が伯爵の逃走に関して対処しようとしたとき、伯爵アルバーノが若干赤らめて彼を攻撃してこう言ったとき、何のことかさっぱり分からなかった。「あの劣等な人間の父は板の上[棺]にいます。鉄面皮な板で見えない奴です。劣等な奴」。 — 勿論二人の美しい女性の心が物理的・心理的に間近にいるという思いと、その心に対する愛とで、伯爵は大方ルイージの芸術家的シニシズムに立腹していた。講師はただこう答えた。「伯爵は大臣の許でもどこでも同じことを耳にすることでしょう。その間違った神経の細やかさはきっと止むことでしょう」。 — 「聖人達は」(とショッペは尋ねた)「宮殿の中ではなく、ただ上に住んでいるのではないか」。即ちフルレの宮殿はその平屋根に石造りの使徒達の列を有していた。一隅にはマリア像が立っていて、それがただ屋根の間にスフェックスの家から眺められるのであった。

若いセサラよ。この大理石の聖母はいかに君の血潮を顔から追い払ってくれたことか。さながら君の更に美しい聖母の姉、あるいは君の聖母の守護の女神、家の女神であった。

— しかし彼は自分の魂のこの守護神棚への侵入、つまり父親への推薦状の提出を、黙して速めることはなかった。想いを見透かされることを恐れていた。この善良な男はすでに愛の異教徒の前庭で、かくも多くの間違いを起こしていた。どうして女性達の前庭で合格することになるのか、あるいは暗い至聖所で足を置くことになるのか。

第三十二周

宮廷は今や(悼みの余り話すことができずに)、亡きネストール[老智将]は身罷ったというお触れを出した。私はここで町の哀悼を新しい展望に対する町の喜びと共に脇に置くことにする。地方医のスフェックスは支配者の内臓を、 — 我々家臣は蝸牛やハゼに似てすべての内臓や胃腸と共に虫どもの食卓に供せられるのとは違って、 — 大きな獣のように取り出さなければならなかった。夕方この青ざめた故人はパレード棺台に休らっていた。 — 侯爵帽と王座の雷のすべての電気装置は同様に静かに冷たく支配者の横の床几に置かれていた。これらの死者のスイス人達は、 — この響きに私は驚いて、今私は「自由」がアルプスのパレード棺台にあって、スイス人が見張っているのを目に浮かべているが、 — 周知のように二人の行政局参事官と二人の財政局参事官等から成り立っている。一人の財政局参事官はロケロール大尉であった。ここでは単に挿話的に触れておくが、この若者は某所[パイロイト]の財政局参事官同様、ほとんど財政について理解していなかったが、しかしその中の戦争部門の参事官に昇進していた。つまりはこの若者の意志に反して老フルレのお蔭であった。このフルレは(本人自身はまさに感傷的人物ではなく)老侯爵に絶えず若い頃の思い出話をして元気付かせていた。この優しい気分の折には侯爵に望むものを願い出ることができたからである。何と厭わしく、下劣なことか。かくて哀れな侯爵は微笑むたびに、涙するたびに、喜びのイメージのたびに、どこかの宮廷の請願者は、それを見て、ドアの取っ手に取りかかって、自らのために何かを開けるのであり、あるいは傷付けるための刀の柄に取りかかるのである。侯爵が何か音を発すると、獵師や追

い出し獵人が鳥笛、呼笛に使うのである。

ユリエンネは夕方九時に宮廷で自分と同様に動悸し、自分のために動悸してくれる唯一の心、善良なリアーネを訪れた。リアーネは喜んで、片頭痛が始まっていたけれど、額を差し出して、ただ他人の痛みを感じ、静めようとした。余所の人々の目の前では単に冗談を言い、自分達の間では単に優しい陶酔的な赤心を語り合うこの女友達二人は、宗教的に厳格な大臣夫人の前でますます深くこの赤心に陥って行った。夫人はこの穏やかに追悼の涙にくれる時ほどに、ユリエンネの深い心を見いだしたことはなかった。アラセイトウは水が注がれたとき、香り始めるようなものである。痛みと戦っているときではなく、痛みが去るとき、形姿は美しくなる。それ故死者は形姿が神々しくなる。苦悩が冷たくなっているからである。娘達は陶酔的に一緒に窓辺に立っていた。彼女達の空想の増大する月光は外部の月光によって一杯のものとなった。彼女達は生涯を一緒に暮らし、一緒に引越して行くという尼僧の計画を立てた。二人はこの静かな感動のときにしばしば、あたかも身罷った魂の響く飛行が間近でなされるかのような驚きに見舞われた。 — (単に二、三匹の蠅が足や羽根で大臣夫人のハープから音を立てたのであった)。 — ユリエンネはまことに痛々しくリラルの亡き父親のことを思い出していた。

最後に彼女は魂の妹に対し、一緒に今日リラルへ行き、一人の遺児となった最後の悲痛な思いを分かち合い、和らげるよう頼んだ。リアーネは引き受けた。しかし大臣夫人の承諾を苦勞して得る必要があった。馬車の中で長いこと抱擁していた二人の穏やかな形姿がリラルの喪の部屋へ入って行く様が私の目に浮かぶ。より小さなユリエンネは目をぴくつかせて、顔色を変えながら、リアーネは片頭痛と悲しみとでより青白く、より穏やかになっていて、ユリエンネよりもすでに十二歳のときに成熟した背丈で勝っている^{*1}。

この世ならぬ者達のように二人は、ロケロールの隅々まで燃えている魂を照らし出した。一滴の涙の滴があれば、この煨焼炉に沸騰や荒廃をもたらしたことであろう。すでにこの夕方ずっと彼はこの去った精神の子供っぽい最後に対する臆した戦慄と共にこの老人を見つめていた。この精神はかつては今の彼の精神同様に活発なものであったのである。彼がじっと長く見ているほど、一層厚い煙りの雲が墓場の開いた噴火口から緑なす人生の中へ漂って来た。その中で雷の轟きが聞こえ、我々の心を握る鉄の手が暗く輝くのが見えた。

どの内心の汚点をも照らし出し、厳しく彼を脅して、彼の火山でもいつか、 — 灰になるよりも実のあるものは何もないであろうというようなこうした激しい夢想の最中に、喪の娘達が入って来た。娘達は途中単に冷たくなった形姿について泣いていたのであるが、今やもっと激しく、美化された形姿について泣くことになった。というのは死の手はその形姿から晩年の罨入り下線、突出してくる顎、情熱の火炎状母斑、多くの皺を刻まれた苦悩が消え去って、さながら亡骸には新鮮な静かな朝日の反映が描かれていて、朝日が今や衣装を脱した精神を取り巻いていた。しかしユリエンネにとって、眼窩の上の黒い琥珀織膏薬が、一突きを受けた際そこに貼られてて、傷の印となっていて、治癒のすべての印よりも強い印象を与えるものになっていた。彼女はリアーネの涙にだけ気付いて、次の言葉

*1 成長のこうした早期の完成について私は幾人かの傑出した女性達の許で気付いたものである。あたかもこうしたプシュケ達は羽化の後は成長しない蝶に似ているかのようなものである。

は聞いていなかった。「素敵に安らっていらっしゃる」。 — 「しかし何故安らっているのか」（と彼女の兄がかの内奥からつぶやく声で言って、彼女には彼の素人劇場以来馴染みの声であった。そして感動して彼女の手を握った。彼と彼女は互いに親しく愛し合っていたからで、今や彼の溶岩が薄い皮質を通じて吐き出された）。 — 「その理由はこうだ。心臓が彼の胸から切り取られて、その中で歓喜の[夏至祭の]炎の車輪も、涙の揚水水車ももはや回らないからだ」。 —

この死体解剖の僭主的想起は病身のリアーネにひどく作用した。彼女は目を、覆い隠された胸から外さなければならなかった。痛みで肺が痙攣して息苦しくなったからである。しかし荒々しい、自他を潰滅させるこの人間[ロケロール]は、強張った葬儀護衛兵の隣でこれまで黙っていたが、二重の破壊の中で続けた。「運命のこのキャッチボール、願望のこのイクシオンの火焰車[刑]がいかに痛々しく我々の中で回るか感じているかい。 — ただ心臓のない胸のみが安まるのだ」。 —

突然リアーネは死体を一層まじまじとじっと見つめた。氷のように冷たい刃が、死の利鎌のように、温かい脳の中を圧して、 — 葬儀の蠟燭が一層陰気に燃えて（彼女にはそう見えた）、 — それから部屋の隅に黒い雲が戯れ育つのを見た。 — それからその雲は飛び始めて、湧き上がる夜となって彼女の目の上にこぼれ出た。 — それからその厚い夜は深い根を病んだ目の中に下ろした。驚いた魂はこう言えただけであった。「お兄さま、目が見えません」。

ロケロールの驚いた痛みには殺害的悲劇に対する若干の美学的喜びが侵入してきたことが分かるのは、ただ苛酷な男性のみで、女性ではなかろう。ユリエンネは死者と、死者の痛みから離れて、リアーネに対する痛みと共にその首にすがって嘆いた。「リアーネ、リアーネ、まだ見えないの。 — 私を見て」。 — 人の心を乱し、自らの心を乱された兄は、妹に鋭い質問を続けた。妹の青ざめた頬にはただ幾つかの滴が冷たく苛酷な水として伝っていた。「死の天使が赤い翼でおまえの夜を飛び回っているのではなかろうな。おまえの心に黄色い山棟蛇[ヤマカガシ]を、おまえの神経組織に鯨[シャチ]を投じて、そこで互いに群れて、傷口に鋸の歯を当てているのではなかろうな。 — この苦しみは私には味があるもので、 — このような薊は、立派なモラリスト達によると、我々を引っ搔いて整え^{*1}、仕上げ加工するものだ。 — 痛ましくも盲いたか。私がまたおまえにひどいことをしたのかな」。 — 「いい加減にして」とユリエンネは言った、「穏やかになさい。リアーネを殺してしまうわ」。 — 「兄のせいではありません」（とリアーネは言った）「片頭痛ですでに前から震んでいました」。 —

二人の女友達の別れは二重の闇の中でなされた。その闇に私はその別れをすべての苦悩と共に置いておこう。 — それからリアーネは自分の小間使いにひょっとしたら夜のうちに治まるかもしれないから、眠る前、母親には黙っていて欲しいと頼んだ。しかし無駄なことであった。大臣夫人は、一日を自分の娘の胸元と唇の許で終える習慣であった。リアーネは案内されてやって来て、母親の胸を求めて誤り、この愛する花の間近で少しばかり穏やかに泣かずにはおれなかった。すべてが明るみに出され、白状されることになった。

*1 薊で布は毛羽立てられて、つまり引っ搔かれて、より良く整えられる。

一 母親はまずドクトルを呼びにやり、それから目を潤ませ、そっと腕を寄せて、抱き締められた娘から報告を聞き取った。スフェックスが来て、目を調べ、脈を計り、ただ神経の破産を告げた。

大臣は家の中ではどこにでも繊細な一耳の先導犬を有していて、教えられて、部屋に入って来て、スフェックスが居合わせたときに、遠くから歩み寄りながら、ただ短くこう言った。「マダム、オ宅ノル・カン（有名な俳優[Lekain, Henri Louis Cain(1728-78)]ハ立派ニ殺人犯ヲヤツテクレルデハナイカ」。

スフェックスが出て行くと、フルレは数兆ポンド砲と鶉（三ポンドの手榴弾）を夫人に放った。「これは」と彼は注釈した、「お宅の幻想的な教育の結果だ」（勿論息子への彼自身の教育も格別効果はなかった）、一「何故病気の馬鹿娘を行かせたのか」（彼自身宮廷的配慮から更に進んで許していたことであろうが。しかし男どもは、女性コック同様に好んで黒い羽根の鶏よりも白い羽根の鶏にナイフを入れたがるものである）。一「オ宅ハコノ夢想女ノ運命ヲ、我々ノ運命ヨリモ先ニ決定シタガッテイルヨウニ見エマスゾ¹」（彼女が黙っていたので、彼はますます辛辣になった）「盲目ニサセルコトト盲目デアルコトハ、オ宅ノ整形美容術ニ相応シイコトダ。愛ノ神ガソノモデルダ」。この甲高い苛酷さに襲われて、一殊に、ただ大臣は母親の願望に反して、まさにこの化粧術的リアーネの教育を自分の政治的願望のために選択して命じていただけなので、一母親は娘の胸元で濡れた目を隠し、拭かなければならなかった。夫達は、一最新の言語学者達も、自らを火打ち石と見なしていて、それらの光の発生は鋭い角から計算されるのである。我らの先祖はダイヤモンドの帯に、愛と夫とを煽る能力を認めていた。一私も実際まだ宝石にこの力を見ている。一ただこの小石に属する石は婚姻が結ばれた後では小石同様に冷たく固い。恐らくフルレの結婚の絆もこのような宝石的なものである。

しかし妻はただ言った。「大臣様、それは別。病気の娘をいたわってください」。

「ソレハ前モッテノオ宅ノ仕事デショウ」と嘲笑的に彼は言った。リアーネは間違った方角から感動的に誤って彼に語りかけ、兄のことを擁護して空しかった。一すべての人々をこのように永遠に、余りに多く証して擁護するのは、彼女の唯一の過ちであった。

一虚しいことであった。というのは辛い思いの娘に対する彼の同情は、辛い思いにさせる者達への憤怒にあったからである。リアーネに対する彼の愛は辛い思いにさせる者達への憎しみで単に示された。「黙れ、馬鹿娘。ル・カン氏は家の中へ入れてはならぬ、マダム、次の指示があるまではな」。

一私は老ほら吹き夫に対してはいたわってただこう言うしかない。「悪魔の許へ、せめてベッドへ行きやがれ」。

第三十三周

ドイツ人の読者は就任プログラムの際約束された「必須の草紙」を思い出されて、それはどこにあるのかと尋ねられることだろう。読者殿、先の周が最初の草紙なのです。「必

*1 彼はここで離婚のことを言っているのであって、これは両者の間では、ただリアーネを有したいという双方の願望故に引き延ばされたのであった。

須の草紙」とはいかなるものか、ひよっとしたらその中にはどこかの周同様に、何という題であろうと、多くの話が入っているかもしれないと先の周から察して欲しいものである。

伯爵は他の者達と一緒にドクトルの午餐に下りて行ったとき、まだリアーネの不幸については何も知らなかった。ドクトルは今日とてももてなしが良かった。彼はこの上なく激しい笑いに陥っていた。両手を脇に当てて、目はテーブルの上の香油小鉢の上に屈み込まれていた。彼は起き上がって、とても真面目であった。即ち生理学のライルの文書^{*1}の中で、フルクロワ[Fourcroy(1755-1809)]とヴォクラン[Vauquelin(1763-1829)]によると涙はスミレ液を緑色に変え、従ってアルカリ塩を含むということを知ったのであった。この命題と涙とを調べるために、彼は着席して、真剣に強く笑って、泣き、そして若干の滴を命題の塩分測定のために得ようとした。彼はもっと別な風に、感動によって感激したかったことであろう。しかし彼は自分の性分を知っていて、それでは何も生じないであろう、一滴も生じないであろうと知っていた。

彼は客人達を少しばかり放っておいた。 — 夫人もまだ見えなかった。 — マルツは長椅子に座っていた。 — 子供達は諷刺的顔つきであった。 — 要するに鉄面皮がその神殿[貞淑の神殿はあった]同様にこの家には住んでいた。 — 老人には嘲笑は効き目がなかった、彼は、他人に不快なことではなく、自分に不快なことをただ退けた。

ようやくスープの前菜、あるいは予報として薔薇色の頬の医師夫人が部屋の中へ、三、四本のエスプリ[蒼鷺の羽根飾り]、あるいは羽根飾りと共に揺すって入って来た。 — まだらの首のスカーフと — 赤い舞踏会服で、ワルツのせいで以前の色合いは褪せていた。 — それに透かしのある飾り扇子を持っていた。その気になれば、彼女の想いが想像できよう。というのはエスプリに関しては（というのはしばしばエスプリは、胎児の場合の脳のように、頭蓋の上にあって、そこで日を浴びるからで）女達と山鶉は頭に羽根飾りを付けていたら、食卓で最も良く供せられるであろう、と。 — それに扇子に関しては、こう思っていたからで、自分は朝の訪問から帰ったところである、と。（これについてはレディーは扇子なしで露地を歩いてはいけないこと、指物師が物指しを欠くようなものであるとまことに明確に前提としていた）、 — 残りに関しては、客人は伯爵であると知っていたからである。かくて彼女は、（大方の数に従えば）ガラガラ蛇に似て、まず頭部を片付けていたら美味しく頂ける名士夫人達の一人であるかのように見える。しかしもっと時間が経過してみれば、信じられることか分かることになるろう。

美しいセサラは彼女にとって、盲目で、聾で、啞で、臭いもなく、味覚[趣味]もなく、感情がなかった。しかしどんなに骨折っても、どんなに退屈であっても、幾多の女性の心の不興を — 買うことはない。ショッペはもっと容易に不興を買えた。スフェックスは彼本人としては、マルツの脂肪細胞から、一人の女性あるいは自分の妻の全細胞組織や花組織からよりも楽しみを得ていた。すべての仕事人同様、彼は女達を真の天使、神が敬虔なる者達（仕事男性達）の奉仕のために送った真の天使と見なしていた。

食事のコースが始まった。 — アウグスティは、繊細な食客で、大いに楽しみとしていて、単に上品な食器ばかりでなく、千切れたナプキンにも執着していた。このようなも

*1(訳注) Joh. Chri. Reil:Archiv für die Physiologie. 九巻。1796-1810.

のを彼はよく宮廷では胃の上に置いていた、倫理同様白いリンネルでは、膏薬よりも傷を受けたがるからである。 — それどころか、すでにいつものように惨めな食事の前哨、最初の会戦が、つまり最良の核心の通常の予言者、先駆けが登場した。もっとも私は百もの食卓で、立派な月刊誌とは違って、最良の作品がまず登場し、最も貧相なものが最後に登場する具合でないことを忌々しく思ったものである。 — 医師はすでに三人の少年達に言った。「ガレヌス、ブルハーヴェ、ヴァン・スヴィーテンよ。上品な座り方とは」。

— すると三人の医師[の名前]達は、早速三本の右手をチョッキのボタンの間に、三本の左手をチョッキのポケットに押し込んで、垂直に待った。 — すると立派な[スイスの薬草入り]緑色チーズがデザートに供された。スフェックスはチーズに対して、それをまさに薬用とっていて、嗜好を抱いたり、嫌悪感を抱いたりしていた。彼は一方ではこう述べた。指物師は眼前にあるものほど立派な膠を膠鍋に有しないことだろう、 — チーズは人間の中で同じように結び付ける、 — しかし自分本人としてはユンカー博士[Johann Junker(1679-1759)]と共に砒素のように外面的に利用することだろう、と。 — しかし他方ではこの緑色チーズは講師には毒であると告白した。「賭けてもいいが」(と彼は言った)「貴方は、貴方を診察したら、肺結核でありましょう。長い指、長い首で私には分かります。特にその白く美しい歯はカンペルによるといけない兆候です。これに対し私の妻のような歯を有する人間は大丈夫でしょう」。

アウグスティは微笑して、ただ医師夫人に、どの時間に大臣の許へ行くのが一番いいか尋ねた。

医師は午餐の脇食卓や先ほどの毒のある反省を諷刺的悪意からしたわけではなく、単に他人に対する無関心さから述べたのであった。他人に対しては、彼は、正直者同様に、行為の最中顧慮しなかった。頭にドクトル帽の自由な帽子を有していて、彼はその医学上の不可欠性故に多くのアカデミックな自由を得ていて、それで自分の四本の柱の間[家、縄張り]で、宮廷の多彩な鋭い柵杭の間でほど、自由に食べ活動することはなかった。私は尋ねるが、 — 彼はかつて、吟味試験にすら通らないようなぼろ貨幣をまず取りだして、グラスに入れ、ただ宮廷の面前でこのぼろ貨幣が黒く変わることを試さずには、一滴の甘いワインも唇にもたらさなかったのではないか。そして銀貨がそうしたならば、これはワインの過剰硫化が証明されたも同様で、医師がその件をなすべきであるとしたならば、まことに上手に甘言、腹黒、服毒、硫化を投与できたのではないだろうか。

偶然講師が大臣の許での今日の参上時間について問い合わせたことにアルバーノは感謝すべきであった。アルバーノは大臣の家で、あるいは盲目の女性の隣で、この痛々しい出来事について自ら知らずにすんだのであった。「従者を」(と医師夫人のザーラは答えた)「送ることもできますよ。従者が貴方等皆のために記帳できます。私は娘さんが気の毒でなりません」。 — そこで未知の出来事についての質問の嵐が生じた。「そうなんだ」と医師は不機嫌に始めた。しかし直に若干目の中に自分の水車のために涙が浮かぶのを見たし、 — そしてすべての医学上の科を自分から大尉ロケロールに転嫁しようとしたので、できるかぎり、情熱的細部に及んで、ほとんど感傷的に嘘を言った。彼はさりげない合図をして、感動した夫人に空の皿を涙壺として押しやり、何も無駄にしないようにした。空しく闘っている青年の陰鬱な目から最初の人生の痛みが若干の大きな雫を滴らせた。「治療は可能でしょうか」とアウグスティは大臣家族との縁のせいでとても案じて尋ねた。

「恐らく単なる神経発作でしょう」（とショッペは大胆に答えた）「それ以上のものではありません。ワァイト[Robert Whytt(1714-66)]は余りに酸を胃に有する女性は（心臓の場合はもっとひどいでしょうが）、すべてが霧がかかって見える、片頭痛が間近な娘も同様と語っています」。 — 単に情熱とアルカリ塩のせいで嘘をついていて、図書館司書が自分の秘かな意見と同じであることに腹を立てたスフェックスは、あたかもショッペが何も話さなかったかのように答えた。「肺結核の最もひどい段階では、講師殿、しばしば盲目となってしまいます。ここではその双方に手立てがありません。私はある種の神経性の周期的盲目に出会ったことがあります。 — ある女性の場合で^{*1}、この女性に対しては単に瀉血と焼いたコーヒー豆の蒸気とお湯の夕方の蒸気で治しました。 — これがまたこの神経病患者に験されましよう。義務感にかられた医師にとってはいつも母親と兄とが忌々しくてなりません」。

つまりリアーネの周期的病気の再発で、彼は激昂していた。名誉心や愛情や同情を侮辱されても医師は熱くなることはなかった。滑らかな氷の表面を彼は保っていた。しかし彼の治療の妨害となるとかっとなって我を忘れた。かくて我々は皆一気冷却ガラスであり、これはハンマーでもびくともしないが、しかし小さな先端が折れると、千もの破片に砕けてしまうのである。アキレスの場合それは踝で、スフェックスの場合は薬用医師の指輪指であり、私の場合は執筆指である。医師は今や自分の心臓をばらまいた、何人かは自らの胆嚢[怒り]と呼んでいるものである。彼はすべての悪魔にかけて誓った。自分は彼女のためにはどんな医師よりも努めた、 — 自分は前もって知っていた、単に美しい外見、祈り、読書、歌のための愚かな教育は禄でもない家政である、 — 自分は喜んでよくハルモニカの鐘や刺繍針^{*2}を砕いていたことであろう、 — 自分はよく母親に、容赦なく、リアーネの所謂魅力、情感性、明るい赤らんだ頬、ピロードのような柔らかい肌に十分注意を向けてきた、しかしそのことで悲しませるよりはほとんどもっと喜ばせているように見えた、 — 自分一人が面白いと思っているのは、この娘が数年前から最初の聖餐式以来重篤になったことで、これについては式を受けさせないよう試みたものだ、すでに四人目の女性患者の際、この聖なる式のとても悲しい結末を経験していたからだ、と。 — 大方が驚いたことに、私の伯爵は皆に反対して、ロケロールの肩を持った。いや、君の最初の春の嵐は今や幽閉されて君の胸の中で一つの逃げ道を用意する一つの友情の手もなく吹き荒れていた。そして君は君の血の滲む悲嘆を隠そうとした。 — 君は炎に満ちた一つの精神を、君の炎に対する炎に満ちた一つの目を求めていたのではないか。そしてむしろ雷の轟く地獄の神と、敬虔で血の気のない、油虫に似て下に穴を掘る天国の市民とよりも同盟を結びたかったのではないか。 — 無愛想に彼はドクトルに尋ねた。「どこに侯爵の心臓はあるのですか」。 — 「私は持っていない」とスフェックスは当惑して言っ

*1 ある神経衰弱病の女性は（これが当該女性であるか知らないが）、多くの宗教、空想、受難を有していて、彼女の言によれば、同じような具合にして盲目となり、同じ具合で治ったそうである。

*2 編物針や刺繍針等での敏感な指の神経を永遠にちくちくすることはひょっとしたらハルモニカ鐘の接触同様に刺激によって神経衰弱を引き起こすかもしれない。

た。「タルタルスにある^{*1}。 — 自分のプレパラートの下に心臓を置くことが許されたら、学問のためにはもっと有益であったことだろうが。大きくてな、とても独特なものだ」。彼はしばしば、 — 可能な場合、 — 鳥占者のように解剖しながら、あれこれの重要な部位を小さな皇子盗賊[1455年のザクセンの皇子誘拐は有名]、青年貴族盗賊としてこっそり脇に除けてしまい、 — 自分の研究のために、喜んで解剖のメス、蜜蜂巣房切りナイフで切り取る一つの蜜を得たことを思い出していた。

「それでは令嬢は、不幸な恋着とかそんなものを有しておられるのかな」とジョッペは尋ねた。「一つどころか」（とスフェックスは言った）「不具者や、 — 虚弱者、 — 孤児、 — 盲目のメトセラ[969歳まで生きたという]達、 — こうした者達を愛している。冗談や若殿達、これがもっと健康にしてくれるだろうと、よく老夫人には語っているのだが」。

しかしこの点、つまり陽気さの促進の点で、私は彼に同意する。 — 喜びは私が準備するであろう唯一の普遍的チンキ剤である。 — 喜びは（それにいつも）痙攣鎮静剤として、接合剤、収斂剤として作用する。 — 喜びの香油は火傷の香油であると同時に凍傷の香油である。 — 例えば春は一つの春の治療であり、田舎のピクニックは牡蠣治療であり、鉱泉の楽しみ[温泉ガイドのタイトル]は一マースの苦味泉であり、舞踏会は一つの運動であり、カーニバルは一つの医学的コースである。 — それ故浄福者達の居場所は同時に不死の者達の居場所でもある。 — —

「いや自分は」とドクトルは結んだ、「身分のある人々に対しては、結局高慢さを推奨したものだ。これは皆喜びの薬用的治癒力を有している。喜び同様に完全により強力に作用し、動悸を活気付け、繊維を強化し、毛穴を開け、長い血管の曲折の中を通じて血を巡らせる^{*2}。 — 自分のか弱き妻には、御覧の通りだが、以前は服装やドクトルの指輪を通じてこの薬剤を投与して、きちんと立てるよう助勢したものだ。 — しかし自分は一人の高貴な女性よりも六十人の卑俗な女性を治したい。 — 自分は家庭医として、いつか、確かなことに思えるが、美しいリアーネがこの世から去ったら、ただ自分の処方や医学上の憂慮が残念でならない」。 —

何ごととも聞き逃さないアルバーノがドクトルの許を退く際、アウグスティにした最初の質問は、医師夫人が記帳する従者といったのは、どういう意味かというものであった。彼はそれを説明した。つまりペスティッツではライブツィヒ同様、一人の人間が亡くなったり、あるいは他に不幸なことがあると、その家族は玄関の間に一全紙の白い紙とペンと一緒に置いておく慣習があるのである。より細やかな関与を抱き示す人々が一人の従者を送って、彼らの名前を従者が知る限り全紙に記すことができるようにするためである。 —

より細やかな関与のこうした商人的手形裏書は、つまり、そもそも現今では我々の心の遠隔通信といえる従者達によるこうした下降してくる代理システムは、両都市にとって大いなる苦痛と関与とをインクとペンによって甘美にして容易なものとしているのである。

*1 タルタルスはリラールのメランコリックな部分である。

*2 高慢さは血液の循環を狂気にまで速める。ちなみに高慢さの薬用的価値についての記述はすべてティソンの『神経概論』からのものである。[Simon-André Tissot(1728-97)スイスの医師]。

「何ということですか」 — (とアルバーノは言って、いつになく怒った。あたかも従者を彼の気持ちの金泥書きと代理人用に押し付けられたかのような按配である) — 「利己主義的香具師どもだ。記帳する従者達のペンで気持ちを表明するのか。 — 講師殿、これよりもっと温かく私なら悪魔自身にお悔やみを申し上げよう」。 —

何故この本心を隠した精神はかくも活発で甲高いのか。 — いや、すべてに彼は動揺していた。厄災のすべての夜の矢で追われたリアーネに対する嘆きが、鉄のように彼の率直な心に入って来たばかりでなく、自分の若い人生への運命の薄暗い介入に対する驚きも入って来た。 — 再度思い出すロケロールの「心臓のない胸」という表現は、馴染みがあるかのように響いた。ようやく彼にはその逆転が思い浮かんだ。島のスフィンクスの言葉、「胸の中にはない心臓」であった。 — かくてこの謎さえも解けて、どんな期待にも反して、恋人の予言を耳にすることになる土地もはっきりした。 — しかし何と考えられないことか、考えられないことか。 —

「彼女はリアーネと言うのか。この名前はどんな神によっても変えられてはならないだろう」と彼の最も内奥の魂は言った。 — というのは若い時にはまさに強壮な青年は、少女に関しては、魅力的病身と優しいたっぷりの情感、濡れた目を一層好むからで、 — 丁度そもそもアルバーノの年齢では目の満潮（後には干潮）が高すぎるほどに押し寄せるようなものである。もっともこの満潮はしばしば豊かすぎる注水のように最良の決意の種子をも消し去ってしまうのであるが。 — しかし青年は後に（結婚生活と家政に踏み込もうと思うので）湿った目よりも明るく鋭い目を、もっと冷たく健康な血を求めるものである。 —

アルバンは彼の内面の雲の炎を大抵ピアノの弦の放電鎖で鎮静させたので、 — 詩のヒッポクレネーの泉に行くことはより稀で、 — 自分の内的「どんちゃんセレナーデ」から無意識にピアノの編曲を行った。私は彼の空想を次のような私の空想に移す。最も優しい短調の音色で、失明がその長い痛みと共に経過して行った。そして音楽の反響ドームの中で彼はすべての小声のリアーネの溜め息を音高く聞いた。 — それからより苛酷な短調の音色で、老いた親切な男性、自分と一緒にかつて祈りを上げた男性のタルタルスにある墓場と心臓の許へ導かれた。するとその丑三つ時こっそりと一つの露のように物音が天から、リアーネと沈んできた。 — 歓喜の一つの雷鳴と共に彼は長調の音に陥って、彼は自らに尋ねた。「運命はこの敬虔な明るい魂をおまえの未完成な心に約束することができたのであろうか」。すると彼は、彼女は彼を見ることができないから、ひょっとしたら彼を愛してくれるかもしれないと自分に答えたので、 — というのは初恋は自惚れたものではないからで、 — そして彼は彼女が彼女の巨人族的兄によって案内されるのを見、そして自分が彼に与え、彼から欲求するつもりの高貴な友情を考えたので、それで彼の指は、昂揚する戦闘音楽となって、鍵の上を動いて行った。そして彼の二つの永遠の夢が生き生きと夜の中から白昼へと移り、兄と妹のペアが彼の若い心に同時に友人と女友達を与えるようなとき、彼の享受すべき天上的な時が眼前に鳴り響いた。 — ここで彼の内的嵐と外的嵐とは小さな音となって鳴り終わった。 — そして楽器の同等の音色の平均律は演奏者の平均律となった。...

しかし彼のような魂はより容易に、幸福よりも苦痛で満足させられる。あたかも現実がそこにあるかのように、彼は更に進んで行った。言いようもなく優しく、超現世的に彼は

リアーネの像がその苦難の萼の中で震えているのを見た。というのは茨の冠は容易にキリストの頭へと高貴化し、不当な傷の血は内部の人間の頬の赤みとなり、余りに苦しんだ魂は、容易に余りに愛されるからである。 — 華奢なリアーネは第二世界のフローラとして葬儀のヴェールにすでに包まれているように彼には思われた。丁度蜂の蛹の優しい部分が小さな胸の上に襞となって透明に見えるようなものである。 — かつて夢の中で彼の胸の上に散ってきた雪の白い形姿が明るい小雲をまた開けて、盲目に泣きながら、大地を見て、言った。「アルバーノ、私は死ぬことになりましょう、あなたに会う前に」。 — 「あなたがたとえ私と」と瀕死の心は彼の胸の中で言った、「会うことがなくても、私はあなたを愛しましょう。 — たとえあなたが直に逝くとしても、リアーネ、私は喜んで痛みを選び、あなたが天国に行くまで、あなたと一緒に行きましょう」。...天国と地獄は彼の前で同時にそのカーテンを開けていた。 — ただわずかな、同一の音色と、それに至高の中断された音色だけを彼はわずかに低く触れることができるだけであった。 — そしてとうとう両手が下に垂れて、 — 彼は泣き始めた。しかし余りに苛酷な痛みにはならなかった。丁度稲妻と雷を放った雷雲がただなおわずかな細く広い雨と共に大地の上にあるようなものである。

第六ヨベル期

読者の十の迫害 — リアーネの東の部屋 — 忍耐についての議論 — 画家的治療

第三十四周

公準や — 箴言 — 哲学的問題 — エラスムス風な格言集 — ロシュフコー [Laroche foucauld (1613-80)] やラ・ブルイエール [Labruyère (1645-96)]、ラーヴァーターの諸見解を、私は一週間のうちに、数多く、また私の伝記的小宴で六ヵ月して放ち、挿入食として供することができるよりも多く考え出せよう。かくて毎日より高く、私の印刷されていない原稿の宝籤貨幣鑄造儲けは、私が読者にその中から印刷された原稿の抜粋や利益をより多く恵むほどに、大きなものになって行く。このようにして私はこの世から忍び出て、この世では何も言わなかったことになる。ラーヴァーターはこの点もっと理性的であり、彼はすべての宝物で満ちた富籤の車輪そのものを原稿というタイトル^{*1}で学者達の間に回している。(丁度我々が逆に原稿を出版者達に郵便で印刷物というタイトルで出しているようなものである)。

しかし私は何故それをせず、少なくとも私の水の宝の、一つ乃至二、三のリンパ管を噴出、放出させないないことがあるか。 — 読者への十の迫害に、 — ただそう私の十の警句を名付けるが、読者が彼らの意見の殉教者に思え、私が力尽くで読者を改宗させる支配者に思えるからであるが、 — つまり十の迫害^{*2}に限定することにする。次の警句は、 — 先行の警句を第一の迫害と提案するならば、 — こうなる。

*1 (訳注) Joh. Kasper Lavater (1741-1801): Vermischte Gedanken; Manuskript für Freunde. 1774

*2 (訳注) Th. G. v. Hippel (1741-96): Kreuz- und Querzüge des Ritters A - Z. 1793. 28 節参照。

第二の迫害

我々の長所や愛好を徹底して磨き、篩いにかけるものは、その長所や愛好の他人の模倣に他ならない。一人の天才にとってその猿[真似]ほどより鋭い艶出し機、研磨盤は存在しない。一 更にもし我々の各人が、傍らに更に二重の自我、完全なアルキミムス^{*1}、留年生が、お世辞や脱帽、ダンス、会話、喧嘩、自慢等の際に駆け寄って来るのを見たら、誓って、我々の不協和音のこのような正確な反復作品は、私や他の人々から現在のそうである者とは全く違う人間を作り出すことであろう。我々が思慮や徳操のためになすべきであろう第一の最小の歩みは、我々が我々の肉体上の方法論を、例えば我々の歩行、着衣、方言、我々の誓い、表情、好きな料理等を、他人のすべての方法論よりましなものではなく、まさにそれと同じであると分かることが、まさにその第一歩であろう。侯爵達は、周りのすべての廷臣が自分達の自我の忠実な員外複写人、柱の鏡を集まって形成しており、このヘロット[古代スパルタの奴隷]の擬態で侯爵達を改善しようとしているという幸運を得ている。しかし侯爵達がこの良き意図を解するのは稀である。侯爵は、一 それにこのことは私や読者に対しても案じなければならぬであろうが、一 丁度区別不可能の原理のように真の似姿[双生児 Menaechmi]を信じないのではなく、倫理では鏡学同様にどの鏡や第二の虹もすべてを逆に写していると思ひ込むからである。

第三の迫害

人間にとっては褒めるよりも追従する方が、より容易で、より馴染みがある。

第四の迫害

我々の前の諸世紀では、人類は生長して来るように思われ、我々の後の諸世紀では枯れ、我々の世紀では立派に花咲くように思われる。それと同じで我々の頂きの雲のみが真っ直ぐに行くように思われ、我々の前面の雲は地平線から昇って来、我々の背後の別の雲は屈んで下へ去って行くように思われる。

第五の迫害

老年は陰鬱なものではない。老年では我々の喜びではなく、我々の希望が止むからである。

第六の迫害

女達の老年は男達の老年よりも陰鬱で孤独である。それ故女達の年齢、痛み、女性らしさを大事にし給え。一 そもそも人生はしばしば上向きの棘の付いた捕獲の木に似ている。この木の許で熊は容易に蜜の餌まで登って行くのであるが、しかし刺し傷だけを受けてまた滑り落ちるのである。

*1 遺体の後を行き、生前の死者の所作や本性を模倣する男をローマ人はこのように呼んだ。ペルシウス『諷刺』第三。[出典はスエトニウスらしい]。

第七の迫害

貧窮に同情を抱き給え、しかし百倍零落には同情を抱くべきである。零落ではなく、貧窮のみが民族や個人を改善するのである。

第八の迫害

愛は女性の繊細さを弱め、男性の繊細さを強める。

第九の迫害

二人の人間が素早い転回で頭をぶついたら、誰もが一杯心配して、ただ相手のみが痛みを有し、ただ自分のみが科があると思うものである。(ただ私は全く屈託なく謝罪する。まさに私は自分の「迫害」から、他人がどう考えるか承知しているからである)。是非とも、我々はこのことを、倫理的衝突の際、逆にしたくないものである。

読者への最後の迫害

欺かれ、覆われ、喪のヴェールから棺のヴェールへと生きている人間は、自分が征服すべきものより先には厄災はないと思い、征服の後、新たな状況が新たな征服をもたらすことを忘れてしまう。それ故、
— 丁度素早い船の前では水の丘が先行し、後には従う波の谷が付随するように、
— いつも我々の前では、我々が登攀を期する山が来て、我々の後では、我々が去り得たと思う一つの深みが残される。

かくて今や読者は耐えた十の迫害の後、物語の港に入って、私の登場人物達の不穏な人生によって、ここで平穏な人生を送れると期待することであろう。しかし読者にとって聖職者の腕や世俗的腕は個々の比喻や、
— 半頁に及ぶ頭痛、
— 木食い虫、
— 書評、
— 閨中説教、
— 梅雨時、
— あるいは、巻が終わるたびに生ずるハネムーンの月に対してすら役に立つものであろうか。

さて物語に戻ろう。夕方アルバーノとアウグスティは父親の推薦状を持って大臣の許へ行った。大臣の冷淡な霜と気位に対し、講師は途中、大臣の仕事ぶりと洞察とを称えて、上辺を飾ろうとした。動悸しながら伯爵は、自分の未来の天国の門、地獄の門のノッカーを握った。控えの間、
— このより高貴な従者の間、リンボ[孩所]には、
— まだ十分な人々が残っていた。フルレは控えの間を、決して空にならず、ラビ達によるとユダヤの神殿がそうであるように、跪いて祈る人々のために決して狭すぎではない一つの舞台と見なしていたからである。大臣夫人は病人として不在であった。ただ単に一人の病人の娘を看護したかったからである。大臣もいなかった、
— 作法は構わず、ただはなはだ大いに要求していたからで、
— 自分の仕事部屋にいた。これまで彼は頭を温かい王座の天蓋の下に入れていて、深く、禁じられた帝国林檎[権威の帝国地球儀]を囓っていた。それ故彼は喜んで犠牲にした(他人のためではなく、他人を犠牲にした)。そして自分に聖人像として、自らの肢体は動かさずに、奉納の肢体を掛けさせて、オポルトの聖フランシスコのように、自分が決して開封することのない感謝状や請願書を掛けさせた。

フルレはやって来て、
— そしていつも仕事外のときはそうであるように、
— ペ

ルシア人のように丁重であった。というのはアウグスティは彼の家庭の友であったからで、

— つまり大臣夫人がアウグスティの家庭の女友達であったからで、それにアルバーノとは衝突することを好まなかったからである。アルバーノの養父は地方の誓約で必要であったし、ドン・ガスパールは侯爵の許で重きをなし、この青年は青年に特有の上品な気位で命じていたからである。— ある種の高貴な気位があつて、その気位を通じて、謙虚さを通じてよりも、功績が一層明るく輝くものである。— フルレは将来に対して必ずしも快適この上ない役目を有していなかった。というのはハールハールの宮廷は金羊毛皮の騎士に頑固であること、騎士がハールハールの宮廷に対するのと同様であったからである^{*1}。しかしハールハールは疑いもなく（すべてのイタリアの外科医の報告によると）、それに数年後に（すべての医学的報告に従つて）ホーエンフリースの遺産あるいは王座の後継者となるのであつた。— さてその祭不都合なことに、キリストの如く未来を見ている大臣は、秘かにハールハールの被造物と言えたドイツ騎士団騎士フォン・ブヴェロと、短い現在の間、同時に忍び歩かなければならぬのであつた。

彼は伯爵を講師同様にはなはだ丁重に受け入れたと私は申し上げた。そして兩人に、自分は彼らとの交誼を願っている妻を紹介しなければならない、と言つた。彼はそのことを彼女に伝えさせた。しかし兩人を、返事を待たずに、彼女の部屋へ案内した。青年にとっては、あたかも神聖な静かな神殿の重たい扉が回るかのような気がした。— 私でさえ今は、部屋の間を彼らを通る際、一緒にとつても妙な気分で、あたかも一緒にその後を付いて行くかのようなとつても大きな不安に陥っている。壁紙が格子状の忍冬[すいかずら]の植え込みに染められている東の部屋に我々が入ったとき、ただ大臣夫人だけが座つていて、我々を愛想良く迎えた。表情と作法には確固とした冷静な姿勢が見られた。彼女の厳格に閉ざされた、そして余り表されない唇は物静かに、敬虔な心の賜物である一種の真面目さを黙して告げ、美人の飾りである一種の静かさを告げていた。— 丁度幾多の翼が単に、たたまれているとき、孔雀の眼状斑紋を放つようなもので、— そして眼は理性の好意で輝いていた。しかし瞼は苛酷な年月で深く、病んで穏やかな視線の上に被さつていた。いや、新婚の床の間にしばしば一本の刀が離すべく置かれたように、フルレは毎日、自分と彼女とを分離する[両刃ならぬ]三刃の剣を研いでいた。奇妙に彼女の顔の明るい晩夏の昼は、彼の顔の不純な混乱と対照をなしていた。もっとも彼は人々の前では、彼女に対する丁重さから皮肉の色を奪つて、憎しみを、他の者達が愛をそうするように、ただ二人っきりのときに押しやっているように見えた。

幸いこの胡桃の木は、これは愛と詩文の全ての撫子の花に不健康な霜の胡桃の木の影を投げかける者であつたが、直により一層似た客人達の間へ戻つて移植された。大臣夫人は愛想を最初振りまいた後、一層講師の方を向いた。講師の正確で、市民階級的拍子は、彼女の宗教的拍子に全く合つていた。特に彼はただリアーネについて尋ね、悲しみの意を述べたからであつた。彼女は、リアーネのこの部屋は、失明の夕方そのままにしてある、リアーネが癒えたとき、美しい思い出がそのまま残るように、あるいは治らなかつたとき、他

*1 ハールハールの宮廷は以前スペインの騎士に侯爵令嬢を断つていた。私にはこの重要な条項について十分な記録の提供が約束されている。

の者達に悲しい思い出がそのまま残るようにするためであると答えた。感動したアルバーノよ、どの不在でも神々しく感じられるのであれば、現在のかくも多くの痕跡のある不在は、まずもって何と神々しくするに違いないことか。私は、恋人の女性の他に、その女性の不在の居間ほどに素敵なものはないと告白するものである。

リアーネの仕事の卓の上にはスケッチのキリストの頭部が、開かれた『救世主』の隣にあった。 — 女友達の願が記入された緑色の散歩用扇子の隣にはたたまれた散歩用の紗が、 — 若干の開封された封筒が、 — フルレ家の小作請負人の代父依頼状が、 — 馬車や馬小屋や家の一連のラックを塗られた牧羊舎が、これらの小人的アルカディアで彼女はディーアンの子供達¹を喜ばせようと思っていたのであった、 — それにある女友達の昔の記念帳から千切られた頁が見られた。それは彼女によって水彩画の花の飾り縁が描かれ、それに優しい願いが添え書きされていたものであるが、その願いは運命によって彼女自身の人生から奪われたものであった。いや美しい心よ、私は何と喜んで御身の明るい前世のすべての些細な瓦礫の上に一覧表のようなものを草し、供したいことか。もっと詳しく領主裁判長がそのことを報じてくれたらいいのだが。 — しかし私と伯爵とを最も深く感動させたものは、張られた刺繍で、そこでは彼女の針が接ぎ木のナイフのように、かの陰鬱な日に、二つの蕾の薔薇を接ぎ木して、そこには茨しか欠けていなかったのであった。 — いやこの厄災は、この茨を御身の喜びの薔薇からただ長く取りだして、それから深く御身の胸を通じて心臓にまで突き刺したのであった。 —

アルバーノの人生の時で、彼の愛がこの時ほど神聖で華奢なものであったことは、あるいは彼の同情がかくも衷心からのものであったことはなかった。幸い大臣夫人は相変わらず窓から庭を見ていて、彼の感動に気付かなかった。最後に彼女はなおリアーネの残ったままのハルモニカを示した。すると彼の心は余りに一杯の、余りに眼に著きものとなって、彼は自分はまだ聞いたことがないと急いで述べて飛び上がり、その前に進み出た。彼は彼女の指がたびたび触れたものを触りたかったのであった。彼はこの祈りの鐘に、しばしば敬虔な考えのために彼女の手の下で震えたこの鐘に聖遺物の如く手を置いた。しかし何の音もしなかった。そこで講師は、すべての芸術の技芸同様に、初歩の通であって、三言で肝要なことを彼に教えてやった。今や彼は溜め息と闘いとで一杯の魂に、最初の三和音を吸い込んだ。これは懂れる胸のこの母国語の最初の嘆きの音節であり、 — つまり舌を有しないが故に、内的人間が手で振るこの啞者の鐘の音節である。 — そして彼の血管は荒々しく翼となって開き、彼を大地から上へ運び、最後の歓喜や受難な眺望よりももっと高い眺望へと連れて行った。というのは強い人間の中では大きな痛みや喜びは全ての生涯の道を一望する高台となるからである。 —

私は、多くの読者が、彼が今現実に犯した失敗をあり得ることと思うであろうか分らない。大臣夫人は会話で、まことに自然に、 — リアーネとロケロールのことで、 — こういう命題に至った、つまり子供達にとって忍耐の学校ほど必要な学校はない、子供時代は意志が折れるか、晩年には心が折れるかなのだから、と。いや、彼女と彼女の娘は、自ら一杯忍耐して、重たい運命の前に、更には武装した運命の前に跪いていた。もっとも

*1 ディーアンの家族はリラールに住んでいる。

母親は、傷よりは天をむしろ見ている敬虔な忍耐を抱いて、リアーネは新たな受難に昔からの病に臥して行く愛しい忍耐を抱いていた。それは女王が戴冠式の日に重い宝石の痛みや摩擦に身を任すようなもの、聖痕を甘美に眠って過ごし、より甘美に夢見ている子供のようなものであった。 — しかしセサラは、狼に似て、すでに鎖の音で逃げ、どんな鎖に対しても、軽い胸甲の鎖や騎士の鎖から始まり、働く海への航海を青年達に邪魔する重い港の鎖に至るまで立腹して攻撃する者で、殊に動揺で一杯のこの心の状態では、余りに大きな動揺となってこう言わざるを得なかった。「人間は防御するべきです、 — むしろ私は湧き立つ戦場で自由に働いて、すべての血管の血を流しましょう。一滴の血を拷問梯子に結ばれて流すよりも」と。 — 「忍耐も」（と大臣夫人は忍耐で一杯になって言った）「争い、勝ちます、でも心の中ですよ」。 — 「伯爵」（とアウグスティは言った、単にアリア¹を当てこすっているばかりではなかった）「女性達は相変わらず男性達に痛みはしないと云わなければならないのです」。

アルバーノの欠点を知らせるのに、今ほど良い機会はないのであるが、彼は自分の意見を述べる時に、自分がまさにその意見で、一つか二、三の自分の人生の天を賭け損じかねない時ほどに勝手に強く述べることはないのであった。もっと小さな危険の際にはもっと柔軟であり得たであろう。従って彼は、大臣夫人がその際自分の荒々しい息子の強壮でまた仮借ない手のことを痛々しい経験と共に考えていて、 — あるいはむしろまさに彼がそのことに気付いて、この将来の友のために喜んで刀鍛冶、楯持ちとなりたと思っていたので、 — それで彼は頑固に、若い男性的な意志のすべての鉄槌を学校教室から露地に投げて、際立った言葉で言った。「ゴート人達は、少年達が獅子のままであるように学校には行かせなかったのです。たとえ娘達は植える一日前には市民世界という牛乳の中へ浸さなければならないとしても、少年達は杏の如く石のような殻に入れ、大地に根付かせるべきです。少年達はその根と生長とでその石をきつと破って、それを後にすることになりましょうから」。繊細な率直さを有する講師は、 — 黄金のカットのクリスタルの容器で、 — アルバーノの激しさを小さく咎めて述べた。少なくとも両人がその証明をしたやり方で、その証明となっております。女性達は人物に関してもっと忍耐を必要とし、忍耐を証明しています、我々男性はむしろ事柄の方でそうしています、と。

大臣夫人は、自分の息子の方がその友人よりも話題になっていると思って、黙っていて、窓際に近寄って行った。戦闘の混乱の中で、夕方はその明るい満月を東の山へ回転させて、月光の注出が今やすべての側面から東側の部屋に面して広がっているすべての庭園を通じて流入し、その広い並木道と花の輪の中に留まっていた。その時、突然丸い小屋が、勢いよく、月光によって凱旋門へと点火された噴水で、そのイタリア風に格子付けられた屋根まで照らし出された。静かに感動して大臣夫人が言った。「あそこの噴水小屋には私のリアーネがいます。泉の蒸気を使っているのです。医師が大いに勧めています。神慮を願っています」。

しかし感動したセサラは、その鋭い目をもってしても、水平な月光の眩惑の最中、絡み

*1（訳注）アリア Arria はローマの策謀家カエキナ・パエトゥスの妻。夫が死刑判決を受けたとき、短剣で胸を突き刺して、夫に痛くないわと言って剣を渡した。

合った銀鉦脈、水脈の震える尼僧院面会格子の背後に、今や薄明の樂園から一人の見分けがたい形姿しか区別できなかつた。しかし泣いて燃え上がる一つの心にとっては十分であった。「私の青春の夢の天使のあなた」と彼は考えた。「あなたなのですか。千もの痛みと喜びと共にようこそと申し上げる。――天上の魂よ、あなたは苦しんでおいでか」。

――そして彼女がここの部屋にいたら、その苦しめられた喜ばしい形姿で、同情する彼の本性全体を砕いてしまうことだろうという考えに襲われた。今なら兄の抱擁を非難していたことだろう。兄の手で厄災は穏やかな目を長い夢へと押し閉ざしてしまつたのであつた。

最も不安な同情という息詰まる空気のせいで、彼は目を逸らし、向きを変え、目を、開かれたままの『救世主』に据えざるを得なかつた。目の滴りを彼は見せたくなかつた。しかし目は、自分は彼女の最後の読書の喜びを反復していると思ひ出して、一層熱く、濃くなつた。突然、窓の前で落下してくる鳥のように舞い降りてくる何か暗いものが彼の視線をまたリアーネに向けさせることになつた。彼女の上に輝きに満ちた小雲があつて、さながら引き上げられた、あるいは射し込んでくる後光で、――不死の者達がその上に、オシアン^{*1}の雲の上に住んでいて、妹が出現するかのように思われた。――そしてようやく彼女が動き、ゆっくりと噴水の小屋の中へ沈んで行つたとき、あたかも彼女の外皮は大地の中へ、彼女の静かな精神は雲の中へ入って行くかのように見えたのではないか。――

ここで彼に対しアウグスティが、母親は戻って来る病気の娘に病室まで付いて行かなければならないので、辞去の合図をして、彼は快くそれに従つた。彼の愛は今や一人つきりでも、再会の希望で満足した。若々しい愛と若々しい雛は、最初覆ってくれる温かさだけを必要とし、その後ようやく養分を必要とする。

しかし協力者、あるいは慰め手が立ち去りながら、若者の心耳に小声で言った。「明日、庭の自分から数歩離れた所で、彼女に会えるぞ」と。――それにこれはまことに容易なことである。彼は明日黄昏時にただ、夕方逍遙の女性が夕方の治療をするとき、並木道に赴き、葉陰から自由に魅惑的な顔を覗き、それからこの至福の教義全体を一つの段落として、一つの風、呼吸、瞬間として飲み込みさえすればいいのである。――何という展望か。

伯爵は講師に、長くは忙しい大臣の許で邪魔しないよう頼んだ。二人は大臣に再会したとき、大臣は文書の山の背後で、二人が居たことを若干（あるいは振りかもしれなかつたが）思い出して、心から二人が去ることを残念がった。――慰め手は夕方中、一晩中ささやき続けた。「明日だぞ、アルバーノ」。――

第三十五周

我々のアルバーノは、手品使いの夜によって或る面から、夢によって別な面に次々と投げ飛ばされて、――というのは間近な過去ではなく、間近な未来が我々の本当の幕の下

*1（訳注）Ossian はアイルランドの伝説の英雄。スコットランドの James MacPherson によって 1766-72 年に紹介された。

稽古で、つまり夢で我々を疲れさせるからで、一 朝になって至高の未来がまだ過ぎ去っていないと気付いて、どんなに彼は嬉しかったことか。人間の中には二つのとてもオイレンシュピーゲル的な願望¹が住んでいる。つまり私はしばしば衷心から願うのであるが、私にとっての真の喜びが、例えば一つの傑作、一回の行楽等が、ようやく終わって欲しいという願いであり、第二にまた衷心からの願いで、あれこれの快樂がまだ少しばかり残っていて欲しいという願いである。

夕方が最大の喜びと共にやって来て、セサラは一 ル・ジャンティー²が東インドへ行ったように、一 大臣の東側の公園を目指して、金星あるいはヴィーナスの星の通過を、ただししかし月面での通過を、観察するために赴いた。照らし出された宮殿の窓の前で、人々の間において、庭園の中へ行くことが許されるものか熟考した。しかし実際、彼が背を向けたところで、渴した心は彼をその前に留まっている聖職者階級の一团と外交団の中を通過して行くよう連れ戻していたことであろう。大胆に彼は繋がれた馬車の山の前を通過して騒がしい宮殿の中へ行き、鉄製の格子門を開け、急いで次の並木道へ入って行った。ここで彼は照らされる希望の松明踊りに伴われて、あちこち行ったが、しかし彼の目は一つの望遠鏡となり、彼の耳は一つの聴診器となっていた。並木道は先の方では斜めに庭園を横切って別な並木道へ、噴水小屋の間近に連なっていた。この並木道へ入って、彼は盲目の女性、あるいはむしろその案内の女性を避けようとした。

しかし何も生じなかった。勿論彼は月のようには、一 月の出現は望まれたが、一 三十分遅れたわけではなかった。ただ三十分早かっただけであった。月、この星は、これは賢人達を香煙一杯に祈祷へと導くものであるが、ようやくその広く長い銀色の葉を祭日の絨毯としてリアーネの東側の部屋に降り注がせた。宮殿の上の聖母はこの光線の神聖な輝き、尼僧のヴェールでまといわれていた。一 大臣夫人はすでに窓辺に立っていた。

一 自然は魔術的な夕べのラルゲットをますます低い音色で奏していた。一 そのときアルバーノはただ、より小さな、噴水小屋から、つまり彼の願望の悦楽の地から生ずる音色からできたラルゲットだけを、死に絶えるように春の日と和するかのようなラルゲットだけを聞き取った。しかし彼は誰が奏しているのか察することができなかった。それはロケロールのせいであったと分かったのかもしれない、単に彼は、私が後に語るであろうように、自分の音楽上の同胞の四月の慣習に従って、ピアノッシモから荒々しすぎるフォルティッシモへ飛躍したからである。父親によって放校処分を受けたこの兄は少なくとも噴水小屋で大事な妹に会い慰めて、自分の愛と後悔とを示すことができた。もっとも彼の激しい後悔は二番目の後悔が必要となって、単に結局は自分の間違いのより敬虔な反復に過ぎなかったのであるが。

アルバーノの空想は、どの世界も鋭く写し出される宇宙の網膜であり、彼の心は一つの天球の音楽が取り巻いているすべての天球の音楽の共鳴板であったけれども、夕方もラル

*1 (訳注) オイレンシュピーゲルは坂を下るときまた上がることになるのと泣き、坂を上るときまた下ることになると喜んだ。

*2 (訳注) Guillaume Le Gentil(1725-92)、フランスの天文学者。太陽面での金星通過観察に出掛け、失敗したことで有名。

ゲットもそれらの輝きや音色で高い波を、つまり彼の中で期待と不安とが（自然と芸術はこの両者を薄暗いものとしていて）投げかけた高い波を、突き抜けて行くことができなかつた。噴水の縁はオレンジの緑色の輪が編み込んでいて、オレンジの花は東洋の花言葉で希望を告げるものである。しかし彼が冷静で明敏な母親のことを考え、彼のひよつとしたら空しいかもしれない待機のことを考えると、希望がまことに次々と疾走した。噴水はまだ始まらず、一 彼は初秋のように緑色の[スペインの仕切り]屏風からなる幅広の[扇の]葉をますますむしり取って、より広くなった窓からリアーネを見たが、小石の道をやって来る気配はなかつた。（これは彼女が長いこと噴水小屋の兄の許に立っていたので、すでにあり得ないことであつた）。彼は彼女の出現に絶望していた。そのとき兄が突然、上述のフォルティシモを発して、すべての噴水が月の前で、銀箔からなるざわめく花輪を上上げた。アルバーノは見上げた。...

リアーネは向こうの月光の中きらきらする水の背後に立っていた。何という出現か。一 彼は自分の顔の側の植込みの小枝を払い取って、直接、息もせずに聖なる美しい形姿を見つめた。ギリシアの神々がこの世ならず松明の前に立って眺めるように[1798年ドレスデンで著者体験]、リアーネは月の前に、銀色の虹の周りに漂う反照で陰陽を付けられて、輝いていた。そして浄福の若者は、若々しい率直な聖母マリアの額が光線を受けているのを見た。その額には何の不機嫌も、何の緊張も波一つ投げかけていなかった。一 そして細く、華奢な、ほとんど弧を描かない眉毛の線を、一 そして完全な真珠に似て卵形の白い顔を、一 そして彼女の心臓の所の鈴蘭の上にある緩く巻かれた巻き毛を、一 白い服のように形姿を高めているように見える上品な優美女神の背丈を、一 それにその本性の理想的な物静かさを見た。一 彼女は物静かに腕の代わりにただ指だけを手すりに置いていて、さながらプシュケがただ肉体の百合の鐘の上を漂っていて、それは震えたり曲がったりすることは決してないかのようであつた。一 更に大きな青い目を見た。その目は、頭を少し傾げたとき、言い難いほどに美しく開かれ、夢に、そして遠くの、夕焼けの下、反照している平原に消えて行くかのように思われた。一

一 汝、幸せすぎる人間よ。一 君に唯一の目に見える女神が、美人が、かくも突然にその全能の力と共に、すべてのその天に伴われて出現したのだ。そしてこの女神は君に狂気を与える、一 その形姿を伴う現在は君には馴染みのないものとなり、一 過去は過ぎ去り、一 間近な音色が深い遠方から迫って来て、一 この世ならぬ出現が輝きと共に死すべき者の胸を一杯に満たし、圧倒する。一

いや、何故この高い純粋な天を通じて、低く冷たい雲がよぎるのが許されたのか。一

いや、何故君はこの天上的女性を、後でも先でもなく、この今見いだしたのか。一 何故この女性自身が君に自分の痛みを思い出させなければならなかつたのか。一

というのはリアーネは、一 その紗のかかった目には単に強力な明かりしか浸透できずに、一 自らのアウローラが少しばかり掛かっていた月を、頭を揺らしながら、間違つて求めていたのであつた。菩提樹の梢が月を覆っていると考えたからであつた。一 この揺れのせいで突然彼は彼女の不幸を千もの色合いで描くことになった。一つの痛みに急に彼の目は襲われて、涙と火花が目から迸つた。そして同情で彼の内心は声を上げた。「罪のない目よ、何故覆われてしまっているのか。何故この感謝の念の厚い敬虔な魂は、五月が、そしてすべての創造物が奪われたのか。一 彼女は愛の視線を母親に向けても、

女友達に向けても虚しい。神よ、彼女は自分がどこに立っているか分からない」。――

しかし月の覆いは直に脇に舞って行った。そして彼女は微光に快活に微笑みかけた。盲目のミルトンがその永遠の歌で太陽に[『失樂園』第三の歌]、現世の者が死後の最初の光輝に微笑みかけたようなものであった。

これまで、遠くの花々の間で、蛍の後を追いながら、部屋の音色に単に喜びの個別の鳥笛と後打音で答えていた一羽の小夜啼鳥がリアーネに近寄って飛んで来て、この有翼の小オルガンが突然フルートの音栓を外したので、リアーネは自分の盲目を忘れて見下ろし、アルバーノは彼女が彼に目を留めたかのように、びっくりして後ずさった。そのとき兄と小夜啼鳥の音色の下、彼女の青白い、白い竜田撫子に似て頬が軽く赤みを帯びている顔に感動の弱い花々の朱が差した。―― 瞼が輝かしい目の上で時々びくついた、―― そして最後にその輝きは一つの静かな涙となった、―― それは痛みの涙でも喜びの涙でもなかった。心の憧れがこぼれ出るかの穏やかな涙で、春に満ちすぎた枝がが傷もないのに泣くようなものである。――

―― 人間の中には、一人の粗野な盲目のキュクロプス[人間を食う一眼の巨人]が宿っていて、これはいつも我々の嵐のときに話し始めるもので、我々に粉碎を勧めるものである。今や恐ろしくセサラの中で胸の全体に目覚めた力が、つまり我々を深淵の上へコンドルの翼で連れて行く野生の精神が、発動し、このキュクロプスが彼の中で声高く叫んだ。「外へ駆けだし、―― 彼女の前に跪き、―― 彼女におまえの心全体を告げよ、―― 永遠におまえが失ってしまおうと何程のことか、この魂の一つの物音を聞き取りさえしたら、―― 彼女の足許の冷たい泉で自らを冷やし、自らを犠牲にすればいい」。―― まことに彼は噴水が戻って行く新鮮な水槽に憧れた。―― しかしこの穏やかな女性を前にしては、この苦しめられた敬虔な女性を前にしては。―― 「いや」と彼の中の善良な精神が言った、「また彼女の兄のように傷付けてはいけない。大切にし、黙っていて、敬うことだ。それが愛することだ」。

ここで彼は天国の広間に入るが如く照らし出された大地に出て、開放された陽の当たる道を進み、しかしこっそりと、噴水の前を通り過ぎた。彼が彼女の前を通り過ぎる時、彼女を半ば格子状に隠していた水滴のアーチが突然止まって、リアーネが深い天の青の中の霧の暈のない純な月のように、雲に覆われず、立っていた。第二世界からの輝かしい百合で^{*1}、それ自身が、これは間もなく第二世界へ逝くという印である。―― 徳操に満ちた彼の心は感動して、別の徳操の間近さを感じ取った。最も深い尊敬を全身に表して、そのことに気付かない静かな人物の側を通り過ぎた。

歩くたびに一つの天が落下して行き、そしてようやく自身の上の一つの天しか有しなくなったとき、彼はすっかり穏やかになって、より一層大胆ではなかったことを喜んだ。

―― 今や何と大地が輝いて、太陽の天が何と間近になって、何と彼の心は愛したことか。

―― いつか何年も経ってからも、恍惚のこの輝く薔薇の庭園がはるかに遠く君の背後にあるとき、君が振り返って、そちらを見たら、何と庭園は追憶の白い薔薇の一階席として

*1 内陣座席に置かれている百合は、その席に座ることになっている者の死を意味していると以前信じられていた。

穏やかに魔術的にほの白く輝くであろうことか。 —

第七ヨベル期

アルバーノの特性 — 政治の紐結び[避妊のまじない] — 賭けテーブルでのヘロストラトス*1 — 父親の是非もない無条件の命令 — 立派な社交 — フォン・ブヴェロ氏 — リアーネの精神と肉体の現在

第三十六周

—— フォン・ハーフェンレッファー領主裁判長がいなくて、ただ私の空想で書くのであれば、私はきっとこの話を続けて、世間にこれが本当のこととして報ずることだろう（そしてロマンチックなすべての執筆資料の山はその後破棄されることだろう）、つまりアルバーノは翌朝盲い、聾となって、包帯製造人アモールの幅広く眼前に結ばれた包帯の背後に座っていた。 — 彼はもはや、夕方の鐘のとき以外には五つ以上数えることができず、鐘の後、フルレ家の噴水小屋を魔法のように周回して、自分の背後にくねくね這って来る火事を呪文で祓おうとしている者の如くであり、 — 感傷的な鯨が公然と書店で泣き出す噴射の両穴から彼はかなりの量を跳ね上げた。 — ちなみに彼はもはや本を見つめることはなく、（自然の本の中の数全紙を除いて）そしてもはや誰も見つめなかった（一人の盲人を除いて）。 —— 「そしてエロチックな創傷熱のこの私の処方箋の中へ」（と私は私の嘘の結論で言うことだろう）「多分明らかに自然はその内密の印璽を押してくれることだろう」と。

自然はそんなことをしない、とハーフェンレッファーは言っている。真っ赤な嘘に他ならない。その件はむしろこうである。

セサラは、二度とフルレ家の庭園に忍び込むことはなかった。最初不審げなあるいは尋問するような目に出会ったときの刑事上の赤面を考えただけで気位の高い赤面に襲われた。

しかしこのようにして愛しい魂[女性]は、五月が見えなかったように、治療状態が彼には見えなかった。彼は静かに彼女の受難を数えて、悩み、彼女の治癒を懷疑して悩んだ。彼は、彼女が悲しみにくれているとき、自分の喜びを恥じ、そして春の享受とリラールの訪問を禁じた。いや、彼は実際承知していた、愛しい春と、彼女が多くの喜びと最後の傷を感受したリラールを通じて、自分の心が余りに放恣なものとなり、余りに一杯なものとなるであろう、と。

知識や価値を求めての彼の渴き、父親と両友人の許で名声の明かりの中に立つべく命じられている彼の誇り、これらのせいで彼は競争心に駆られた。すべての彼に特有の炎の勢いで、法学に身を投じ、講義室と書斎の間しかもはや通ることはなかった。この熱意の中に強制したのは、独自の完成化への衝動であった。すべての未完成のものは彼にとって身体的嫌悪であった。不完全な収集や、 — 中断された月刊誌、 — 停止した裁判、

*1（訳注）有名になりたくて神殿に火を放ったギリシア人。

— 読み終えられない図書館、 — 見習いとして、あるいは建築設計中に亡くなった人々、あるいは完結した思考体系なくして、あるいは職人として、織物屋徒弟として、靴屋下僕として死んだ人々、それどころか片手間になされるアウグスティのフルート演奏でさえ嫌悪であった。それはプシュケの翼のある馬に手綱をぴんと張るときや、それに拍車を掛けるときと同じ強さであった。すでに子供のとき彼はこの強さを、息を止めたり、傷む箇所を痛く押ししたりして、試したものであった。 — いやはや、比喩的に言って、彼はまたこの両者を行ったのであった。彼の中にはある強力な意志が宿っていて、これが単に衝動の従者に言うのであった、かく成れ、と。このような意志は、単に内部の犯罪者や、被去勢者、捕虜、あるいは子供達に命ずる禁欲主義ではなく、我々の脳の健康な野生人を躡け、制御するかの天才的に精力的な精神であり、スペインの支配者が他人に言うよりも、もっと王侯的に、王たる余が、と言う精神である。 —

— いや、勿論、 — 彼の温かい魂は他に仕様があっただろうか、 — しばしば真夜中、風通しのいい窓辺に立って、波を一杯浮かべて大臣家の宮殿の白い聖母、純な月が銀鍍金にしている聖母を見つめた。いや日中彼はよく記念帳に（たまたまそれは噴水とその背後の一人の形姿、それだけのものであったが）スケッチをした、 — あるいは『救世主』を読んだ、（勿論彼はすでに大臣夫人の許で読み始めた歌の箇所から先を読んだ）、

— あるいは神経の病について知識を深めた（研究の際、察せられないよう伏せていただろうか）、 — あるいは自分の指の炎を弦の上に走らせた、 — いや彼は薔薇が花の盛りであったら、薔薇だけを、茨と共にむしり取っていたことであろう。

この溜め息を付き、息苦しい魂は、自らを閉ざさざるを得なかった。彼はすでに案じていた。どんなタッチも文字の刻印となりかねない、ピアノは文字箱、すべての行為が暴露的に読み取られる言葉となりかねない、と。彼は黙していなければならなかったのである。若い初恋は商売人の恋のように（ザクセン選帝侯の商売人は例外であるが）言葉の道具を有せず、せいぜいポータブルのインク壺付きの羽根ペン[万年筆先駆け]を有するだけである。自分達の恋の告白を俳優のように反復する世慣れた人々のみが、 — 同じような理由から、俳優と同様にその恋を発表できるのである。しかし人生のより聖なるときには、最愛の魂の像は、談話室や控えの間にはなく、小暗く、静かな小礼拝堂に掛けられている。ただ恋人と共に恋人について語られる。いや彼は自分の天上の[市民の]女人について、他人が話題にすることさえ好まなかった。彼はしばしば（内面の香壇と共に）その部屋から抜け出した。そこでは彼女のために香煙よりももっと石炭のガスで一杯の吊り香炉が持ち運ばれるものである。

第三十七周

ペスティッツでは毎日ドイツ騎士団騎士ドゥ・ブヴェロ氏の帰還が待たれていた。彼はハールハールでルイーゼとハールハールの侯爵令嬢イザベラとの間の固く予定されていた結婚に最後の修正の手を加えたのであった。アウグスティは彼に好意的ではなく、ブヴェ

口は正直者^{*1} ではないとまで言っていた。そして次のようなことを、世慣れた紳士の柔らかな皮肉を交えて語った。

数年前ブヴェロは司教座聖堂参事会の論争でハールハール宮廷^{*2} によりローマ教皇の許へ派遣されていた。丁度ルイージもそのローマの租税[十五年周期]と共に侯爵達の通常のローマ詣でを行っていた時期であった。さて、ハールハールは、 — これは本来すでにホーエンフリースの侯爵帽には脱帽して対応し、その帽子を被るというすべての可能な医学上の展望を有していて、 — まさにそれ故に、ホーエンフリースの家系の消滅を冷たい目で眺めているかのような外観を呈したくないと欲していた。まさに嫡男のルイージは最初の数年、神経質な意味で英雄ではなかなかっただけに、尚更のことであった。いや、ハールハールの宮廷にとって、善良で細い直系の秋の花が出発したときよりは、別な風になって戻って来るといことが肝要にならざるを得なかった。まさにこのような理由からかのドイツ騎士団騎士に秘かに委託がなされ、満足な結果が得られるべく、娯楽の親方として侯爵のすべての苦楽に関して、 — 殊に娯楽の女将[売春婦]の許で、 — 差配し、監視するようにされた。その間この卒業予定の侯爵はすでに胎児並[生殖不能]のものと化していたのであるが、残念ながら生命の萌芽[跳ねる点]にまで磨かれ、退化させられることになった。殊に侯爵は悦楽の輪を通つての幾つかの山羊の跳ねやその他の跳ねのせいで、騎士の跳ね[慣習的領地占有式]はできなくなっていたからである。このドイツ騎士団騎士が侯爵の若返りにはなはだ迎合したことは考えられることである。いや彼はデーマール侯爵^{*3} の若返らせの奇術の真似ができたのかもしれない。この侯爵は一人の罪のないレディーを、その年齢に必要な以上に仙薬を効かせすぎて、過度に若返らせて、小さな子供に縮めてしまったのであった。 — 要するにこの十字架騎士団騎士のブヴェロの背後のこの十字軍によっていつか、 — よく十字軍によって行われるように、 — ホーエンフリースの侯爵席は然るべきときに、空位になるのであり、そしてハールハールがそこに座るのである。 —

私は余り白状したくないが、アルバーノは最初、 — その明察ははなはだ優れていたけれども、純潔も大いに優れていたもので、この事実をうまく飲み込めなかった。しかし彼がそれを了解すると、それは彼にとって薬学的マナ[神与の食物、下剤]となった、シヨッペにとってイスラエル人のマナとなったようなものである。「十字架騎士団騎士は」(とシヨッペは言った)「その十字架を無駄に有しているわけではない。 — それは彼にとってイタリアの家々での殴り書きされた十字架のようなもので、それには誰も小便をかけてはいけないのであります、ローマではどの控えの間でもそうしたくなるけれども」。 —

ほどなくして我々の三人の友は、馬車が騒がしく、お茶や賭けのために走る時刻に路地に出掛け、その前を後ろ向きになった席の駕籠が、誰かを中に座らせて過ぎ去って行った。

*1 正直者はより高い身分では殺人を、不正直者は嘘を完全に除外する。ある程度は例外であるが。

*2 この宮廷はカトリックであるが、国は新教である。この新教にホーエンフリースの宮廷も帰依している。

*3 ランベルク伯爵の『ある紳士の日記』参照。[Lamberg:Tagebuch eines Weltmannes。デーマール侯爵とは、Saint-Germain 伯爵のことで、山師]。

「おい、おい」（とショッペは叫んだ）「中にローマの実物のセフィシオが座っているぞ、私をいつか殴り倒すに違いない奴だ」。 — 「小声で、小声で」（とアウグスティが言った）。「あれはドイツ騎士団騎士です。セフィシオはそのアルカディア風名前^{*1}です」。

— 「そいつは一層嬉しいことだ。この赤鼻とはかつて存分に喧嘩したものだ」と彼は言って、向きを変え、腰に両手を当てて、駕籠に十歩ばかり付いて行き、鳥籠の中の鳥を一層良く見ようとしたが、中の鳥はカーテンをさっと引いた。アルバーノは急いで駆け付け、中にただ短剣のように鋭い視線と赤く輝く鼻の頭とを認めた。 —

ショッペは戻ってきて、ローマでの争いを語った。つまり彼はどんな罪人、破廉恥漢、極悪人に対しても、プロの賭博の元締め、賭博補佐人、いかさま師に対してほど激しく怒ることはなかった。彼は語った、自分はこの虫けらを大地から取り出す青虫棒を持っていたら、あるいはこれをひねり潰せる緋色[臙脂虫]製粉所を有していたら、喜んでそうすることだろう、と。「いやはや」（と彼はそれから叫んだ）「虫どもがびったり巻き付いた棒の上に私は足を伸ばして（それから痛風であろうと構わず）、本当に喜んで踏み付け、屑どもを押し出すことだろう」。 — 彼は自分ができることをした。彼は自らの旅の従者で[一人旅で]、全ヨーロッパを行き来するオサムシであったから、これらの賭博カルタのオトシブミ属、ハモグリバエを指の下に捕らえる喜びを本当によく有した。 — 奴らの似而非仲間となり、 — 奴らの策略を身に付け、 — 奴らのうごめく蛇穴に何らかの火車を投げ入れる喜びを有した。ライプツィヒで、誰が首謀者であったと知られているか、詳しくは知らされていないが、最近大市で紛いの警察が偽の捕吏を連れて遊び、ある賭場を台無しにしたことがあった。 — 少なくとも賭場の仲間どもはこの件に勘違いをしていた。奴らは翌日本当の警察に出頭して、若干の免除と不正な恩赦を願い出たのだから。しかし私はここで、この取締人の名前を呼ぶことができる。それはショッペだったのだ。

— 彼は分捕り品を大抵、賭博台の下に、新たな機雷として置いた。

セフィシオとは彼は別な風にカルタをした。彼はその賭場へ進み出て、数分見守って、最後に一枚のカルタを紋章のルイ金貨と共に置いた。それは勝った。彼はカルタの背後に一巻きの長いルイ金貨を見せた。ブヴェロはこの巻の分を払おうとしなかった。「自分は」（と彼は言った）「何も見なかった」と。 — 「何のために貴殿の賭博補佐人はあそこにいるのか」とショッペは言って、彼らが支払わないならばペテン師だと言った。人々は、もっと大きな損害を避けるためにその賭け金を彼に支払った。彼はその賭け金を冷たく受け取って、賭け手達にこう言って別れた。「諸君、貴方らは名うてのペテン師どもとぐるで賭けている。しかしただ私が見抜いているから、支払ったのだ」。相手方が強張って青白くなる間に、彼はゆっくりと肩幅の広い引き締まった体で、いつの間にかその節の多い棍棒と共に去って行った。 —

アウグスティは心から、 — 迫害のせいで、 — ブヴェロが図書館司書のことをもはや覚えていないことを願った。家で彼らは大臣からお茶と夕食への招待状を見いだした。「お嬢さん可哀想」（とアウグスティは言った）「このブヴェロのせいで半分盲のお嬢さ

*1 アルカディアのアカデミーに入る者は、アルカディア風名前を採用する。[このアカデミーは 1690 年スウェーデンの Christina によってローマで設立された]。

んは明日食卓に着かなければならない」。――しかし我らの若者はようやくまた彼女に会えるわけで、ただ春の一日だけがこの得難い女性と彼とを隔てているにすぎない。――アウグスティの言が正しいならば、ここで私の注解はこうなる。立派ないかさま師はいつも、――池の静寂者達の敬虔な鯉の腹の子を泳がすように動かすかわかますとなる、つまり冷たい子供達を突然元気にする隠れた痘瘡の膿である、と。

第三十八周

リアーネの目は治って行った。しかしただゆっくりとであった。自然は彼女を一気に陰鬱な牢獄から太陽の許に導こうとは欲しなかった。今彼女はようやく、哲学者達のように、形姿よりもむしろ光を認識することができた。それでも大臣は勅令を出して、彼女は明後日ハルモニカを演奏し、夕食に参加し、それどころかサラダを作り、その際盲目のことが分からないようにしなければならぬと決めた。彼は時に不可能事を命じ、それで不服従に出会って、罰として怒りを発することになった。ある種の人々は一日中前もってあることの未来のために立腹しまくっているものである、いつも顕微鏡の下で煮たっている尿鱗に似ているし、あるいは毎日火を発する加熱炉に似ている。

大臣夫人はこれに対して、穏やかな確固たる否を言った。ハルモニカについては、彼の名で医師に問い合わせたところ、厳しく禁じられました、残りのことは不可能です、と。ここで彼は、よくそうなるように、幾つかの点で抑えられなくなって、殊に医師に問い合わせた点で立腹した、――問い合わせてはいなかったのであるが。彼は十分に激昂して誓った。自分は自分の主義で行動するのであり、他人の主義はくそくらえである、と。

このたびのこの主義はドイツ騎士団騎士であった。つまり上述の逸話、――ブヴェロの旅の、世継ぎに対する配慮、――あるいはその際の意図は、両宮廷でよく集会や食卓で話題となっていて、ただ侯爵のルイーダにだけは隠されていた。というのは王座ではほとんど誰にとっても、王座に座っている者を除いて、秘密というものはないからである（王妃にとってもほとんどない）。丁度反響ドームでは離れた隅の人々がすべてを明らかに聞き取るのに、真ん中に立っている者のみが聞き取らないようなものである。従って、このドイツ騎士団騎士は、ホーエンフリースの組織では大きな門脈、肺動脈で、これでフルレも自らに灌漑しようと思っていた。フルレは現在と未来、つまり双方の主人に仕えなければならず、この主人のうちハールハールの主人がまもなく自分の主人となるかもしれないのであった。

ブヴェロはフルレに大臣を期しているばかりでなく、父親をも期していた。イタリアから美術室一式を後から送らせるような、美術の知識でまさに自分と侯爵とを長く縁結びしているような、彼のような男は、リアーネのような肉色の、それにローマ派からの聖母を、その上にキャンバスから離れて一杯に咲き匂う薔薇として動く女性を、ともかくこのような男はこのような女性を評価する術を心得ているに違いなかった。彼はこの薔薇との結婚を欲することはできなかった。彼はドイツ騎士団騎士であったからである。

彼はイタリアへの旅行以来、彼女と会っていなかった、――伯爵も彼女と会っていなかった、――大臣は両者に彼女を特別な白さと形姿の一個の数え珠として見せたがっていた。フルレは、――これは普通想像されるより多く見られたが、――虚栄心と気位

とを同等に多く有していた。非難に対する気位、称賛に対する虚栄心である。しかし私は今や比武帳に記入して、敵対、虚栄、所有欲の旗印の下の戦いにおける彼の奮闘、駆け足、槍の突きをほんの一部でも後世に伝えなければならないであろう。彼を狼同様叩きのめして追い払うことはほとんどできなかった。すべての武器が彼には即座に手に入って、彼はますます鋭い有毒な武器を手にした。古代の裁判上の男と女との決闘では、通常男は胃の所まで穴の中に入って、自分の強さを女性の強さまで引き下げて、そして女性は男性にヴェールの中に包まれた石で殴るのであった。しかしこの結婚生活の決闘では男は野外に立っているように見え、女性が大地の中に入っていて、しばしば単に石のないヴェールだけを有している。

— この戦闘に一人の輝かしい和平の天使が両者の間に入って来て、傷を受けとめた。つまりリアーネのことである。母親に対し陶醉的愛を、父親に対してはより強い性の男性に対する女性的敬意を有していて、この二人の諍いで大いに苦しんでいた娘は、母親の首にすがって、父親の要求を自分に許すよう頼んだ。— 誰にも気付かれないようすべてをきつとやって見せるつもり、上手に努め、前もって特に練習するつもり、— さもないと父は可哀想な兄にただもつと頑固になるだけであろうから、— ただ自分のせいで仲違いは自分にはとても辛い、ひょっとしたらハルモニカの演奏よりも応えるかもしれないから、と。

「分かっているでしょう」（と母親は言った、今は問い合わせていたからである）「昨日お医者さんがハルモニカに反対であると仰有ったことを。他のことならいいでしょう」。リアーネは喜んで彼女に接吻をした。人々は彼女を父親の許へ連れて行って、彼の前で自分が喜んで従うことを声に出せるようにしなければならなかった。「畜生、感謝しよう」（と彼は穏やかに言った）「おまえたちには手がかかる」。— 彼女は喜びが霧消して去った。しかし大きな痛みはなかった。彼女はそれにとくに慣れていた。

第三十九周

講師は大臣への家への途次なおアルバーノに、自分の主張や挙動の熱気を抑制するよう頼んだ。彼はアルバーノに家庭内の争議については、リアーネが治っているものと勘違いして、リアーネを当惑させない程度に、知らせた。彼らがくつろぎの部屋に入ったとき、すでに皆燃え上がっていた。

今や彼には誰も紹介されなかったのも、私がそうしなければならない。それは大臣の弟子達（少なくとも十二番目の弟子[使徒、ユダ]）であった。

最初に私は法学のフォン・ラントロック氏を紹介しよう、正義の神の立派な薬用秤で、スクルーペル[単位]で計り、間違った錘は置かれていないものの、同様にひどいもの、多くの汚れや、残物、錆が置かれているものである。隣のロンブルの卓には、フォン・ファイ、フレール、コープ氏やその夫人、滑らかで上品な人達で、キャビネットの鉤物のように見える側は磨かれているが、ただ隠れた底面は角張って、引っ搔くものである。

私と一緒に別の部屋の入口に入ると、ここで君、アルバーノに紹介しなければならないのは、若いのが、しかし太ったフォン・マイラー僧會議員で、自分の内部の人間を、厚く温かい外部の人間を着せて、覆うために、毎年ただ、ロシア人が靱皮靴のために菩提

樹の幹を切り離すほどの百姓を剥ぎ取ればいい、つまり百五十人剥ぎ取ればいいのである。

君が覗き込んでいる部屋を、私は君に、廷臣で一杯の蠅取りグラスとして紹介しよう。廷臣達は天上界に来るために子供となったばかりでなく[マタイの書、18.2-3]、周知のように蠅のように見える四週間の胎児とまでなったのである。彼らは、スウィフトが¹ 従者にただドアを閉めることだけを欲しているとすれば、その雇主に対してドアの開放だけを欲しているのである。

光栄なことに、そこで君に 一 賭けをしない男 一 上級宮廷説教家となることを欲している教会参事官のシェーペを紹介することになる。彼は神の言葉を人間の言葉の種子をメロンの種のように（そうすることでより早く心の中で育つようにするために）長く砂糖入りワインに入れておいて、種を心の中で腐らしてしまう者である。聖職者で、自分の生涯では、自分がいつも拒絶する両願、第四の願いと第五の願いしか有しなかった者である。[第四、パンを与え給え、第五、借金を赦し給え、マタイの書、6.9-13]。

一 しかし講師は君に窓の中で、すべての紳士、淑女を、冷静に小声で、パントマイムなしに名を教えることだろう。今や大臣自身が君を十字架を付けた賭の最中の紳士の許へ案内してくれる。彼は硝石入りの水を飲んでいて、渴いた口を絶えず舐めている。ブヴェロである。一 今や彼が君の前で立ち上がった。冷たい、しかし大胆な、鋭く磨かれた目を見つめるがいい、まなじりは開かれたブリキ鉢、あるいは仕掛けられた罨に見えるもので、一 赤い鼻と仮借ない、唇の欠けた口、その赤らんだ蟹の鉢は擦り切れて挟み付けるもので、一 更に反り上がった顎、全体の頑丈な確固たる姿を見つめるがいい。アルバーノを見て彼は驚かなかった。彼はすでにすべての人間を見ていた。どの人間であれ彼は気にかけていなかった。

大臣は内心混乱した若者に、夕食の際、自分の娘を紹介すると約束して、元気付けた。大臣は賭けを一回彼に申し出た。しかしアルバーノは余りに若者らしい調子で応えた。自分は賭はしない、と。一

今や彼は賭博台の露地を縫って行って、自分の欲するものを見ることができた。このような場合、社交の場で我慢できるものが誰もいないと、自分が最も嫌いな顔の前、あるいは側に位置して、その顔のすべての言葉やすべての変化をこっそり見て腹を立てるものである。アルバーノは少なくともある程度我慢ならないような、自分がその側に立って見たいような多くの顔に出会っていたことであろう。一 いや何故彼がある種の皮を剥がれた乾燥した滴虫類、線虫、凶々しい薄弱者を見続けたのか十分な理由を挙げるのはできないことであつたらう。この者は翼状眼鏡で昇るカルタの星座を観察していたし、一方アルバーノはその視神経の触角を二番目の部屋のカルタの色にまで伸ばすことができたのだから。一 ドイツ騎士団騎士がそこに居合わせたということではなければ、理由はなかったであろう。この騎士の前へ彼は立たなければならなかった。この騎士について大方のこと、最悪のことを彼は承知していた。いやこの騎士はショッペと遠い関係があつたし、リアーネとでさえ関係があつた。一一 忌々しい。ある種の顔の隣では魂の翼が曲がり、抜け落ちる。鷲の羽軸の隣では白鳥や鳩の羽毛が散るようなものである。アルバーノの大きな

*1 (訳注) Thomas Sheridan: Swifts Leben. Knigge 翻訳. 1795. S.407 参照。

胸のすべての無邪気な感情の中で、臭猫の尾を鳩小屋の中へ投げ入れられた鳩のように不穏な窮屈な気配がした。

私は隠しておけないことであるが、彼はこの男がなし、有しているものすべてに心の中で不平を言い、腹を立てた。 — この男は、好んでその先端がファラオ遊び[トランプ]のために繊細に削られ、その爪は更にもっと劣等な賭け[梅毒]のせいで若干剥脱した指を有し、あるいは好んで時に眉毛の毛髪越しに眺め、あるいは好んで（ただ一度だけ）蚊をすばやい唇の動きで蠅取り器のように潰し、 — あるいはあるときはドイツ語で、あるときはフランス語で、立派な社交で予期されることを語り、ただ劣等なことはドイツ語では言わなかった。傭兵[ランスクネ、トランプ遊び]とか小刀、パン付きビール[冷やしスープ]といったわずかなドイツ語は例外である。 — — — 要するに彼はいつもショッペの立派な格言を思い出した。「正直な人間は — 殴打をお見舞いするしか、元気になれない人間や時代が存在する」。決闘でもいい、と伯爵は言った。

しかし彼はここで一人の権威によって弁解される必要があるだろう。つまり現著者自身によって、 — 筆者はいつもは軟弱な温かい白鳥の皮なのであるが、いつも賭博の椅子の背後にいと完全な闘鶏となったのであり、退屈に眺めているほどに、より大きく引っ掻き、ごわごわした翼を広げるのであった。その理由はそもそも人々は、一緒に一つのことを行い、一つのことを欲する人間のみをますます結構なより我慢できる人と思うからである。

アルバーノは心から自分の戦友ショッペがいたらと願った。彼は確かにしばしばアウグスティのところへ行って、こぼした。しかしアウグスティはいつも宥めた。いや彼は教会参事官と話し込んで、アルバーノの若々しい未経験な魂に聞き耳を立てる人の機会がなくなるようにした。その後更に講師は三十分間、 — しばしば家庭の女友達が不在の折家庭の男友達がよくそうするように、 — 不在を選んだ。

伯爵はしばらくブヴェロの椅子の背後に立って、内部がグロテスクな像でラッカーを塗られた中国式鏡の中を覗き込んで、長く自分の位置を変えて、その鏡の中でセフィシオの顔が描かれた竜の隣に苛酷に、単なる比較として並ぶように試みた。 — こうしたことすべてがなされたが、しかしリアーネに対するますます高まる動悸で中断された。 — —

従者達が食堂へのドアを開けた。すると彼の心臓は痛くなるほどに鼓動して、彼のいずれにせよ若々しく花と咲く形姿は、喜ばしく恥ずかしげな赤みの薔薇で一杯に覆われた。

第四十周

せわしい息をして燃え上がりながら彼はどこかの老レディーと一緒に色々な移りゆく列に混じって入った。老レディーは自惚れて誤解し、突然彼の腕を所管の腕の留め金として掴んで、ただ彼からは — 返事を貰った。視線を飛ばしながら、彼は明るい、頭で一杯の、光で結晶化したかのような広間へ入って行った。彼が丁度返事をしたとき、彼は混雑の背後で、小声の言葉を聞き取った。「兄の声がしますね」。 — すぐに小声の反駁があった。「私の伯爵です」。 — 彼は振り向いた。 — 講師と母親の間に愛するリアーネが立っていた。恥ずかしげな、びっくりした、薄赤色の天使で、黒い絹の服を着ていた。服にはただ銀色のネックレスの輝かしい春の霜が掛かっている、ブロンドの髪には軽いリボンが見られた。母親が彼女を彼に紹介し、華奢な頬は一層赤く花咲いた。 — と

いうのは客人と兄との同じような声を混同したからであった。 — 彼女は何も見ることでできない美しい目を下に伏せた。アルバーノときたら、何と君の心臓は震えたことか。過去が現在となり、月光の夜が春の朝となり、この物静かな形姿は間近でどんな夢の中でよりも一層強力に作用したからである。 — 彼女は彼にとって余りに神聖で、彼女の前で見たところ治っているように見えると嘘を付くことなどできるものではなかったろう。彼はむしろ黙っていた。 — かくて彼女の人生で最も心温かい友人は初めてただ見えずに黙して彼女の許に来たのであった。

講師は間もなく彼女を二番目のシャンデリアの下の彼女の席に連れて行った。 — 彼女に向かい合って母親が座っていた（多分、必ずしもいつも顔を伏せているわけにいかない善良で気付かない娘が、顔を優しく上品に愛しい方に上げることが許されるようにするためであった）、 — ドイツ騎士団騎士は、馴染みの男性として、さっさと彼女の右手に、アウグスティは左手に座った。 — セサラは伯爵として、最も高貴なレディーの横、遠く離れた上席に着いた。

忌々しいことだ。 — 残念ながら私自身の場合もしょっちゅうだ。私が上の名誉席を要求すると、 — すると私から一マイル離れた所にその娘に気付く、しかし近視の者としてただ半分見えるだけで、一晩中何もできない、 — 遠慮なく下の彼女の許にランク付けして欲しい、 — 自慢たらしい男なんかでは私はないのだ、 — 何故地上では、天上と同じくまさに最大の惑星は最も遠く、その太陽から離れていなければならないのか。

私は今や読者を大臣の食卓へ導く。読者に大臣家の、所有欲に接種された華美や、その作法の平行定規の間で閉じ込められた祝賀披露ダンスとかその家系の紋章を見せるためではない。この紋章は、どの温かい皿でも、塩入れでも、氷や辛子と共に持ち運ばれていて、 — その花瓶やシャツ、枕屏風、犬の首輪、思考に十分にその紋章図柄が我々に見せつけられているものであり、 — そうではなく、今はただ読者には私の主人公を注目して欲しいのである。

彼はとても目立った。このような新参者については、首都では彼が御者にチップを渡す以前に、早くから性情や告知のすべての可能な明かりが点されていた。倫理的歩数計として十九人の出席者が彼に割り当てられていた。彼の本性の大胆さと位階とが、彼の場合世間知らずを償っていた。この世間知らずの点は、最も強い関心にしか関心を示さない点と、いつも一般的世界市民的な考察に落ち着くといった点に見られた。しかし見給え、 —

リアーネにも見えたらと思うが、 — 彼の健康な薔薇の輝きと新鮮な緑色とが世紀の黄色の病者達の間で、何と輝いていることか。この病者達からは青春のアフリカの岸辺の船のようにすべての結合剤の瀝青が流れ去っているのである。 — そして精神的健康さの頬の赤みは、優しい、いつも繰り返される赤面で（リアーネへの心配から）何と彼を飾っていることか、他方食卓の幾人かの世慣れた紳士は木綿に似て、赤面以外すべての色を容易に浮かべるのである。

彼は、訪問の健全さの秩序に反して、余りにリアーネの方を眺め、聞き耳を立てていた。彼女は、間違っって手を出すことを恐れて、より気高く赤くなりながら、少ししか食べなかったが、しかし屈託なく食べた。講師は軽く手を添えて、些細な間違いをさせないようにした。彼を感心させたのは、彼女がかくも情感的な、かくも容易に泣き出す心を、顔つき

と会話のかくも屈託ない快活さで覆っていたことであった。―― 若者よ、極めて優しい少女の場合、愛の痛みがないときには、それは覆いとか偽装ではなく、瞬間の享受なのであり、通常のアダマシさなのだ。―― 彼女はとても分別して（恐らくその前に学習した）馴染みの声の序列を察知していて、自分の返事を決して間違った方向に向けることはなかった。しかし彼女はしばしば自分の母親を潤んだ目で見上げて、それからもっと快活に微笑んだ。しかし偽るためではなく、真に心からの愛情故であった。――

彼女のサラダに関しては、それが混ぜられるのを目にした最良の最高の食卓列席有資格者の女性読者ならば、それからフォークで何回か召し上がることであろう。とても良く似合っていた。彼女はガラス製の青い天の半球の前で、より真面目に、より赤くなって、手袋を脱ぐと、―― 白い手としなやかな腕とで、青いガラスのボールと黒い絹服の間で、絹に皺をつけずに、野菜を加工して、―― 用心して酢や油の箇所を掴み、自分が練習していた通りの（それに講師のデジタル化された助言を得て、私には少なくともそう見える）量を注いだ。―― 誓って。ここでは作ることがサラダと言える。見栄っ張りの大臣は、絵画は理解しないのだが、絵画として役立つ事柄には明察を大いに有していた。

母親は葉っぱの混ぜ合わせに、ほとんど目を向けていないように見えた。―― 伯爵には今日大臣夫人はただ作法となって、敬虔な厳格さを有していないように見えた。しかし彼はまだ十分にかの明敏な女性達、つまり機知のない上品さ、炎のない感受性、冷たさのない明澄さを有する女性達のことを解していなかった。これらは蝸牛から触角を、優しさを、冷たさを、黙した歩行を借用し、信頼を得るというよりはむしろ信頼に値し、信頼を要求する女性達である。

さてセフィシオは炎の炉の中の三人の人間の中の一人の天使として入って来た[ダニエル書、3.19ff.]、しかし黒い天使としてであった。伯爵にとって彼女に対するセフィシオの座席の近接と語りかける言葉はすべていずれにせよ一つの磔刑であった。―― ただ彼女から彼の方へ視線を動かすことがすでに一つの苦痛で、これは私が次のような経験をするのとほとんど変わらない。つまり私がドレスデンで古代の神々のアンティークのオリンポスで一日過ごして、そこから出て行く際に太った僧侶達の食堂や、剥製の悪党の皮やホルマリン漬の胎児の群れで一杯の博物標本室に至るような場合である[1798年ジャン・パウルの体験]。―― しかしドイツ騎士団騎士が彼女の傍らで抒情的に燃え上がるとか、天上にいるとか、我を忘れるという具合ではなく、正気で、全く落ち着いていて、とても礼儀正しいということで彼は安心させられていた、―― というか、私の意見では単に欺かれていた。―― 伯爵よ、―― 農夫に聞くがいい、―― 灰鷹は輝くような白い鳩ほどによく襲いかかってくることはないのである。

ドイツ騎士団騎士は今やリラルの可愛い絵の嗅ぎ煙草入れを取りだして、それをどう思うかリアーネに尋ねた。自分にはこの煙草入れの感傷的部分が特に気に入っていると言った。

講師はびっくりして、煙草入れに屈み込んで、半盲の女性はその判断を参考にしていいような若干の判断を前もって述べた。しかし彼女はそれを二、三回光に斜めに、そして自分の目の前、間近に過らせた後、自ら判断を下すことができた。つまり半ば沈んだ夕陽を受けた子供が、凱旋門の下で花輪を高く上げているが、自分の感情では「とても可愛らしい」と。ここでは、―― 私は強力な空想力と率直な芸術センスを有する半ば盲いた夫人

[シャルロッテ・フォン・カルプと思われる]の許で、同じ場合に気付いているが、一 緊張とか芸術センスとか精神的目というものが肉眼に半ば加勢したのである。一 煙草入れは煙草同様に更に紹介され、芸術顧問官のフライシュデルファーの許まで行った。一 今や新しい侯爵の芸術愛好とその寵臣の芸術上の学識が彼に新たな王冠を被せることになって、一 彼はただ花の白さのみを咎めた。「春は」（と彼は言った）「そのうんざりする白さで空しい白黒となります。私はただ秋にリラールを訪ねました」。一 「私どもは小夜啼鳥の歌声も描きませんが、それでも聞こえます」とリアーネは快活に言った。彼は彼女の師で、今や絵画的技法の点で、彼女の父の師とさえなっていた。すべての彼女の知識、内的果実や花々の上には沈黙の薔薇[修道院の天井画]が描かれていた。そもそもそれには支配的父のせいで慣れていた。特に男性達の前ではそうで、男性達をいつも父親の複製と見て、臆して尊敬していた。一

その風景がアルバーノの許に来て、リラールの高貴な老人がとても魅惑的に見えたあの春の夜が縮小化されて自分の眼前にあるのを見たとき、一 彼は愛しい人が触れたものを触れたのであり、一 そして自分の魂の中ですべての諧音が震えたそのとき、再び悪魔が七度の不協和音を奏した。「侯爵は、殿下」（と大臣はドイツ騎士団騎士に語った）、「昨日密葬されました。一週間後にはもう公の葬儀です。急がなければなりません。宮中喪による休職は、昇天日の忠誠式が終わるまでは続きますので」。私は激しい質なので、永遠の式部官のフルレについて述べるができない。この者は太陽にランタン税を設定しかねなかったのであり、公園の橋やロバの橋[虎の巻]に橋架税を設定しかねなかったのである。しかしアルバーノは多くの内的側窓光、斜光で眩惑され、一 かの老人に対するリアーネの哀悼を思い出し、自分の誕生日や、胸のない心臓、世間の狂気を思い出して、フルレの前では穏やかな子羊の装いで出現し、この装いを保持しようとして計画していたけれども、できなかった。彼は（自分が思っていた以上に甲高い声で）彼の向かい側の人、教会参事官のシェーペに対して、大きすぎる若者の憤激を込めて（この憤激は兄の声に憧れているリアーネの傾聴によってより小さなものになることはなくて）多くのことに反論せざるを得なかった。一 人間達の永遠に死んだ騙し絵の生活に抗して、一 魂のない形姿の儀式張った嘲りに抗して、一 ただ愛を写し出すだけの愛のこの窮乏に抗して言わざるを得なかった。一一 いや、彼の心全体が彼の舌の上で燃え上がっていた。...

私が先に道化と呼んだ実直なシェーペは、彼に色々な表情で賛同した。一 しかし私は全くしない。友のアルバーノよ。君はまず学ばなければならない、つまり人間は儀式や流行、法に関しては、羊の群れに似て、全体、先導の羊にある棒の上を越させる限りは、棒の箇所に来たら、そこにもう棒は置いていなくても、なお用心に跳ぶものであるということ学ばなければならない。そして国家における大方の最高の跳躍を棒がなくても我々を行う。しかし市民生活をとても時宜に適って好むような若者は凡庸と言うべきであろう。確かに彼にしても我々皆にしても、我々自身が関与しているわけではないそれぞれの官職の欠点については辛辣に裁くものである。

一行は黙して傾聴していた。そして作法上ただ内心で驚いていた。リアーネの形姿には優しい真面目さが生じていた。

人々は立ち上がって、一 窮屈さは消え、一 彼の熱意も消えた。一 しかし、話して酔ったのか、愛する見守りで酔ったのか、訪問の垣根を若々しく跳躍してのことか

私には分からないが、一（処世作法の欠如故ではなかったが）、ともかく次の事実は否定できないことで、（それを直接告げるのが私も最良と思うが）、伯爵は、哀れな、彼の案内した老レディーを一ハーフェンレツファー自身何という名前の女性か知らないのであるが、一そのままにしておいて、無意識のうちにとと思うが、リアーネを案内したのであった。一リアーネときたら、いやはや。夢想していた女性の魔術的身近さについて、彼女の手の軽い置き方について、これはただ内的人間の腕が感知するもので、外的人間の腕が感知するものではないが、天国の道のこの短さについて、私は何と申し上げていか分からない。この道は少なくともフリードリヒ通りほどの長さがあった欲しかったものである。実際彼自身何も言わなかった。一彼はただ別れが生じなければならぬ嫌な禁止部屋だけを考えていた。彼は声を求めて震えていた。「貴方は多分」（リアーネは軽やかに率直に言った。彼女は親しげな声に、殊に熱のこもった弁舌の後、喜んで耳を傾けていた）「私どものリラルを訪問されたことでしょう」。一「実際ありません、でも貴女は」と彼は余りに混乱して言った。一「私と母とは好んでいつも春をここで過ごしています」。一

さて二人は別れの部屋に来た。残念ながら、何も見えない彼女と一緒に数秒立ち止まっていて、何か言おうとして真っ直ぐ見ていたが、母親が彼を促した。母親は夕方全体を通じて育まれた自分の愛のために、熱心に娘の心の許での別れの時を探っていた。一かくてすべてが過ぎて行き、二人は幻影のように消え去った。

しかしアルバーノは、素晴らしい夢を後にして、朝方ずっと浄福な気分でありながら、夢をもはや覚えていない人間のようにであった。一そしてリラルが彼の前に開けているのではないか。リアーネが果たしてリラルを見ることができるようになりさえすれば、彼はきっとリラルを見にゆくのではないか。

かつて彼がこれほど穏やかになったことはなかった。注意深い講師は、この温かい実り多い播種の時期に、若干の上等の種子を蒔いた。二人が一緒にまだ月光の夜を覗き込んでいたとき、彼は言った。アルバーノは今日ほとんど単に棘の多い、扱いにくい真理だけを述べた。これらは啓蒙するものではなく、単に苛立たせるものである、と。一別な時であれば、伯爵は彼にこう尋ねていたかもしれない。自分はフルレとブヴェロのようにすべきであったろうか。彼らは互いに寛大なテーゼと反テーゼを述べ合うこと、大学の答弁者と反論者の如くで、彼らは前もって互いに論理的傷と膏薬とを同じ長さに設定するものである、と。一しかし今日アルバーノは彼に対し、とても好意的であった。アウグスティは母親と娘に対してとても繊細に愛想良く配慮していた。一彼は誹謗することなく、取り繕わずに、多くの善なることを、性急にではなく述べた、彼の議論は静かに傾聴された、一彼はおべっかも言わず、侮辱もしなかった。従ってアルバーノは穏やかに答えた。「しかしアウグスティよ、苛立たせるのは眠り込ませるよりはましではないか。

一真理は、真理を有せず、真理を信じない人々に言うべきではなからうか。そうでない人々には言うべきではなからうか」。一「どんな真理も述べることはできます」と彼は言った、「しかし真理を述べるときの作法や気分のすべてを真理に数え入れることはできません」。

「そうか」とアルバーノは言って、上を見上げた。星空の下、守護聖女のように宮殿の大理石の聖母が穏やかに輝いていた。一彼は聖母の妹[リアーネ]のことを、一リ

ラルルのことを、 — そして春のことを、 — そして多くの夢のことを考えた。 —
— そして自分の心は永遠の愛で一杯で、自分はまだ友人もいないし、女友達もいないと考
えた。 —

第八ヨベル期

スフェックス博士の小さな接見 — リラルルへの小道 — 森の橋 — アルカディア
の朝 — カリトン — リアーネの手紙と感謝の賛美歌 — 庭園を通過の感傷旅行
— フルトの谷 — 理想の現実性について

第四十一周

私は昨夜明け方まで起きていた。ヨベル期の最後の言葉まで解読するために、他の解読
者に任せるわけにいかないからである。その魅力は確たるものであった。しかしハーフェ
ンレプファーの手による薄い葉の骨子はすでにかんりのことをなしたので、私とその葉脈
に植物性顔料や滑らかな緑色で仕上げる葉は、今やきっと不可思議をなしとげることだろ
うと私は期待している。

伯爵に関しては昨晚以来鬱々としたものであった。というのは彼が視た辛抱強い謙虚な
女性の姿が、偉大な行為の企図のように、彼の魂のすべての諸像の上に輝いたからである。
そして彼の夢の中や就眠前に彼女の優しい声が春の夜の小夜啼鳥となった。 — その際
彼は相変わらず彼女についての話に耳を傾け、とりわけ医師に聞き入った。医師は毎日目
の治療の更なる進歩について語り、最後にリラルルに向けてのリアーネの旅立ちを一層間
近なものとした。 — (一人の恋人について聞くことは、それがどんな些細なことであ
れ、恋人について考えることよりもはるかに強力に作用する)。 — 彼は更に、彼女の
兄が彼女の目を駄目にして以来、町全体から退去していたが、町には侯爵の葬儀の際に、
所謂慶祝馬に乗ってしか再登場する気はないと聞かされていた。 —— そしてこの楽園
の周りには、あるいはむしろ楽園の創造主の女性の周りには、高い庭園の壁が築かれてい
て、彼は壁の周りを行きながら、門を見いだせなかった。 ——

このこと以上に憎むべきものを私は知らない。しかしどの首都がこれと異なるであろう
か。私は長編小説を書くたびに (そうは見えないけれども)、私は首都とか首都での教会
祿資格者のヒロインを描くことほど慎重になることはないと言ってお誓い申し上げる。とい
うのは天の惑星の合朔の方が高貴な恋人達の合朔よりも容易になされるからである。彼氏
が一言彼女と二人っきりで宮廷とかお茶の席、あるいは彼女の家庭で交わそうとしたら、
その際宮廷や茶の一同、家族が立ち会うのである。彼氏が公園で彼女に出会おうとしたら、
彼女は中国の急使のように、二重になって旅する。人々は娘達には好んで良心を二重に、
自然がすべての重要な肢体を二重に与えているように、与えるもので、立派なワインには
二重の底があるようなものである。 — 彼氏が彼女に偶然少なくとも路地で出会おうと
したら、(この路地がドレスデンであるとしたら)、無愛想な従者がその後を彼女の抗ペ
スト酢[四盜賊酢、消毒剤]、牧師、女性後見人、名誉の騎士[弁護士]、ソクラテスの守護霊、
破産管財人、ペスト看護人として歩いて来る。 —— これに対して田舎では (これがす
べてである) 牧師の娘は、夕方が素敵というので牧師の畑の散歩に出掛ける。そして聖職

候補生は長靴を履きさえすればいいのである。 — まことに身分のある人々の許では(エロチックな)愛の外套は、最初ファウスト博士の外套であるかのように見えて、単にすべてを隠しているだけなのに、すべての上を飛んでいると誓うものである。しかし最後には鼻先に[アルプスの]シュレックホルンや、ピラトゥス山、ユングフラウが聳えている。

至福の主人公よ。金曜日に講師がやって来て、こう告げた。月曜日に至高の逝去者が — つまりその空の棺が — 埋葬され、ロケロルは慶祝馬に乗り、 — リアーネはほぼ完治している。というのは彼女は大臣夫人と一緒に明日リラルに行くからで、多分に、悲しい、喪の縁取りされた追悼の文や死者の思い出から逃れるためであろう、 — その後の昇天日が忠誠式と仮装舞踏会である、と。 —

至福の主人公よ、と私は繰り返す。というのは、これまで、君は花と咲くテンペの谷から干涸らびた高台の他何を得ていたかということになるからで、君はその高台に立って、その魔法を覗き込んでいたのであった。 —

第四十二周

五月の土曜日、七時には天のすべての靄は消えて、明るく去ってゆく太陽が素晴らしい日曜日を出迎えた。いよいよ見ていないリラル[夜間には見た]を訪ねようと思っていたアルバーノは、その前の夕方とても神聖に喜ばしい気分で、あたかも最初の聖餐の前の告解の夕べを祝っているかのようであった。 — 彼の眠りは、絶えざる歓喜と目覚めであって、どの夢の中でも陶然とした日曜日の朝が昇って来て、未来は現在のほの暗い前奏となった。 —

日曜日の朝、彼は出掛けようと思って、医師の半分ガラス製のドアの前を通りかかることになった。「伯爵殿、ちょっと」と医師は叫んだ。彼が入るとドクトルは言った、「すぐです、伯爵殿」と言って、彼は続いていた。 —— これまでホメロスから仕入れてきたように、将来の世紀、私から仕入れようと思っているスケッチ画家に、ドクトルの次の群れを一つの宝として供しよう。彼は左側に横になっていた。ガレヌスは小さな針金刷毛で父の背中を刷いていた。彼の横では広い櫛を持って、ブルーハーヴェが立っていて、櫛を絶えず垂直に(斜めではない)髪の中に通していた。刷毛と櫛ほどに自分を元気付け、通じを付けてくれるものはないと彼は常々言っていた。ベッドの前ではヴァン・スヴィーテンが厚い毛皮を着て立っていた。温かい天候のとき劣等な振る舞いをしたら罰としてこの毛皮を着なければならぬもので、それを着用して笑われると共に半ば煮立てられるのであった。

二人の少女が日曜日の晴れ着を着て、待っていて、田舎の牧師の娘の所、村の教会へ行くこうと考えていた。この娘達を彼はまず法のハンマーで、肢体から肢体へと叱責の打診をしていた。彼は自分の子供達を、ぼろを着たローマの被告人達の対蹠人として喜んでカフスや縋を付けさせて、特に他人の前で盛装させて晒し台にさらすのであった。伯爵はすでに長いこと赤い子供達のせいで開けられた窓に顔を向けていたのであったが、ラテン語でこう言わざるを得なかった。「自分が彼の子供であったら、とうに命を絶っていたことでしょう。晴れ着で叱責されるほど、恥ずかしいものを知らない」と。「それだけ一層効果があるのです」とスフェックスはドイツ語で言った。そして少女達に対してはただわずか

に次のことだけを補った。「おまえ達は対の鷺鳥だ。教会でもくだらぬがらくた話をがあがあしゃべることだろう。 — 牧師になぜ注目しないのだ。奴は阿呆だ。しかしおまえ達阿呆には十分上手に説教する。夕方わしに説教を全て話すのだぞ」。 —

「伯爵殿、ここに下剤があります。リラールに行かれるのであれば、建築士夫人のおちびさん達用にこれを渡してください。しかし悪く思わないで頂きたい」。 — 誓って、こう言うのはまさに、何に対しても悪く思わない人が最も頻繁である。伯爵は、 — 他そのときであれば軽蔑して背を向けていたことであろうが、 — 彼のリアーネの救助者の前で赤面しながら黙ってそれを収めた。それにそれは彼の愛するディーアンの子供達のためのものであったし、その夫人に彼は挨拶と報告を持参するつもりであった。

第四十三周

リラールは、多くの侯爵の庭園のように、ヒルシュフェルト [Hirschfeld (1742-92) 『造園技法』] からの破り取られた一頁、 — 死んだ風景の端役、紛いの公園、細密画の公園、 — 廃墟や荒地、森の庵からなるすでにどの宮廷でも展示され、使い古された見本料理といったものではなく、リラールは老侯爵のロマンチックな、時に香具師の空想による自然の戯れ、牧歌的な詩なのである。我々はやがて皆、主人公の後を付いて入って行くが、単にエリュシオン [樂園] に入るだけである。タルタルスは全く別様であって、リラールの第二部である。何ものにも勝って対照によるこの区別を私は称える。私は通常見られるカメレオンの庭園よりももっと立派な庭園に行きたいと前々からずっと欲していた。通常は中国やイタリア、別荘や納骨堂、隠者の庵、宮殿、貧乏と富とが（諸都市や所有者達の心の中に見られるように）一つの皿の上に盛られている。そして通常昼と夜とがアウローラなしに、中間色なしに、並置されている。これに対してリラールでは、エリュシオンはその喜ばしい名前が行楽キャンプ地と行楽の杜の結合とで正当なものとなっており、タルタルスはその陰気な名前がその孤独な覆われた驚愕とで正当なものとなっている。これはまさに私の心中の吐露である。 —

しかし今我々の若者はその夢と共にどこを行っているのか。 — まだリラールへのロマンチックな導きの通りであって、本来リラールの最初の庭園の道の途上である。彼は木陰道を行った。これは穏やかにまばらな木の庭園の丘と黄色の花咲く谷とを上下するもので、ライン川のようにあるときは木蔭で一杯の緑なす岩で圧迫されたり、あるときは小枝の背後を去って行く朗らかな岸辺の開けるものであった。今やジャスミンの灌木の下の白いベンチや白い別荘が一層しばしば見られるようになった。彼は近寄って行った。リラールの小夜啼鳥やカナリア^{*1} が、陸地を告げる鳥のようにすでにこちらに飛んで来ていた。朝の息吹が春の中を新鮮に感じられた。角張った葉はまだその軽やかなエーテル的滴を保持していた。一人の御者がその干し草用馬車の上に眠っていた。右や左に草を食んでいる動物が安全に滑らかな道を引いて行く馬車であった。アルバーノは静かな日曜日迫って来る仕事の関の声を聞くことはなく、塔の静かな鐘の音を聞いた。朝の鐘の音は未来の時を

*1 カナリアは冬生活のために丸ごと一部屋有するが、夏にはただ窓が外される。

告げる。夕方の鐘の音が過去の時を告げるようなものである。日中のこの黄金時代には彼の新鮮な胸にも一つの黄金時代が生じていた。 —

今や野生の草の空色の上で緋色の胸のフォーク状の尾の燕がぴくつき、その巣があることで我々の住まいを告げた。彼の通りが、破壊された古い、開け放たれた宮殿、太った厚い葉で鱗のように覆われた宮殿を歩いて行こうとしたとき、その宮殿の出入り口に赤い道案内の横木が白い文字で、「タルタルスを出てエリュシオンへ向かう道」と近くの森に対して突き出されていた。

彼の心は様々な日々のこの二重の接近で飛び上がった。大股で彼はエリュシオンの森へ進んで行った。森は広い溝で分断されているように見えた。しかし彼はやがて茂みから緑色の橋の前に来た。橋は溝を越えて大きな蛇の弧を描いて、大地の上ではなく、頂きに架かっていた。その橋を行くと檜の梢、樅、白楊、果実の木、菩提樹の枝の咲きこぼれる原野を歩いて行くことになった。それから橋は彼を野外の一角に運び上げ、リラルはすでに東から広大な先の尖った梢の苗越しに高い黄金の球の光輝を[ヴァイマルのベルヴェデーレ宮の擬宝珠を連想させる]彼に投げかけてきた。橋はまた彼と共に香り高い薄明の藪に沈み、彼の下と彼の隣ではカナリアやウタドリやアトリや小夜啼鳥が叫び、舞って、餌を与えられた雛が橋の下に隠されて眠っていた。最後に橋は一種のアーケードを抜けた後また明るみへ上がって行った。 — すでに白い祭壇の付いた緑なす山の円頂が見えてきたが、かつてそこで彼は若い時の夜、跪いたのであった。背後のもっと南側にタルタルスの覆いと隔壁が、つまり高く聳える木々の森が見えた。 — そして彼が更に進むにつれ、エリュシオンが更に見通せるようになってきた。 — 小木で一杯のイタリア風屋根の小さな家々の露地が視線に喜ばしげに微笑みかけてきて、低地や森や道や湖の緑色の世界地図から馴染みのものであった。 — 東側では五つの凱旋門が目に見え、遠く拡がり、緑色の海のように波打つ平原への道を解き放っていて、西側では五つの別の凱旋門が開示された国々や山々と共に対峙していた。 —

アルバーノがゆっくりと下に沈んで行く橋を下りて行くと、あるときは燃え上がる噴水が、あるときは赤い苗床が、あるときは新しい庭園が大きく展開されて出現した。歩かたびに楽園は造り変えられた。一杯に畏敬の念を抱いて、清められた大地に行くかのように、彼は老侯爵と敬虔なる神父^{*1}とディーアンとリアーネの聖なる大地へ足を踏み入れた。彼の荒々しい歩行は地震によって足をとられているかのように抑えられた。純然たる楽園はただリアーネの純粋な魂のためにできているように見えた。そして今ようやく、自分が性急に追って旅立ったことの上品さに関する臆した問いかけと、初めて癒えた彼女の目に接するという愛する者の恐れとが生じてきて、彼の喜ばしい胸を窮屈なものにした。

しかし彼の周りのすべてが何と祝典的で、何と生き生きとしていることか。森を通じて輝いている河川には白鳥が浮かび、茂みでは雉が鳴き、獐鹿が彼の背後で、彼の通り過ぎた森から興味深く覗いている。そして白色や黒色の鳩が門の下で忙しく動いており、夕方

*1 どこでも、名誉ある隠者、そこに住んでいる宮廷説教家のシュペーナーはそう呼ばれていた。彼は高貴な老いた敬虔なシュペーナーとは父方の筋で、縁戚であったばかりでなく、精神的筋でも縁戚であった。[Jakob Spener(1655-1705)、敬虔主義の創始者]。

の丘では横たわっている子羊の側で鳴きながら羊が掛かっている。雉鳩でさえ、愛の「切ない」[Languido]胸をどこかの隠れた谷で震わせている。彼は長く、高い灌木状の薔薇の野を通って行った。これは茂みから生い茂る草のベンチへ跳ねて、虫を空しく追いかけているウグイスや小夜啼鳥の居住地や植民都市のように見えるものであった。雲雀はもっと敬虔な動物のためのこの第二世界の彼方上を飛び、門の背後で苗床の中へ落下した。

善良な若者よ、絶えず酩酊するがいい。そして君が急いで向かっている少年のように君の花々を結び合わせ給え。 — つまりイタリア式屋根の上では、その屋根の胸の高さの手すりの前で、白楊が広い葡萄の葉で取り巻かれて揺れていて、その屋根を彼は春の夜、薔薇の植込みと見なしていたのであったが、頑丈な、前方へ屈み込んだ一人の少年が、タンポポの花輪を下ろして、短すぎる緑色の錨綱に絶えず新たな輪を差し込んでいた。「僕の名はポルクス」（と彼はアルバーノの穏やかな問いにさわやかに答えた）「でも僕の妹はヘレナ^{*1}」と言って、弟の方はエキオン」。 — 「おまえのお父さんは」 — 「父はここにはいません。遠く離れたローマです。お母さんのカリトンの所に入ってください。僕もすぐ行きます」。 — 今朝とこのような思いを除いて、どのようなもっと美しい日や所に、どのようなもっと美しい思いを抱いて、愛するディーアンの聖家族の許に彼は来られたであろうか。

彼は窓と緑色の鎧戸で一杯の明るい朗らかな家へ入って行った。彼が春の部屋に入ったとき、彼はカリトンを見た。十七歳[!?]の若い、華奢な、ほとんどまだ乙女のように見える女性で、乳首に小さなエキオンを抱えていて、病的に活発なヘレナに対し防御していた。ヘレナは椅子の上に立って、絶えず窓から多くの葉の付いた葡萄の蔓を引っ張ってきて、母の両目を覆おうとしていた。母は同時に立ち上がりながら、左手で邪魔な葉を千切らずにのけようとし、また乳飲み子をより深く守ろうとしたので、奇妙に混乱して、かがんだまま美しい青年の方に向かって来た。子供のように好意的で、情熱的で、しかし無限に内気で、それは彼の身分相応の服のせいではなく、彼が一人の男性で、とても高貴に見え、その上彼女のギリシア人の夫に似ていたからであった。彼は彼女に、彼女がひよっとしたらかくも立派なものは見たことがないかもしれないほどの魅惑的な愛を力強いその顔に浮かべて、自分の名前を告げ、自分の心が彼女の夫に対して保持している感謝と、夫についての情報と夫からの挨拶を告げた。何とこの臆した形姿に、黒い目から無垢の炎が燃え上がったことか。「それでは私の主人は」（と彼女は自分の夫を呼んだ）「とても元気で朗らかなのですね」。そして今や彼女は、子供のようにとらわれなく、ただ自分の夫についての長い聴取を始めた。

ポルクスはその長い花輪で跳びはねてきた。 — アルバンは戯れにポケットからドクトルの飲み物を取りだして言った。「これを服用しなさい」。 — 「お母さん、すぐ飲んだほうがいいの」と勇士は言った。ここで彼女は同様にとらわれなく、ドクトルの詳しい処方のことを尋ねて、長くなり、とうとう胸元の乳呑み児がむずかって、彼女は隣室の揺り籠の方へ行かざるを得なくなった。彼女は詫びを言って、子供を寝かさなければならない、自分は一時も油断のならないリアーネと散歩に行くのだから、と語った。

*1 彼らは双生児としてこれらの名前を有していた。

子供達は力強い顔が好きである。アルバンは子供と犬から同時に評価された。ただ彼は大人の机敷席があると、子供の遊び場で小さな跳ねる部隊とは決して躍動できなかった。

「僕は何でもできるよ」とポルクスは言った。 — 「読むこともできるわ、若様」と兄にヘレナは答えた。「でもドイツ語だけだろう。僕はラテン語の手紙を上手に読み上げられるよ、ねえ」、と彼女に幼い小男は答えて、読み物と読み上げ見本を求めて部屋の中を駆け回ったが、見つからなかった。「まあ、ちょっと待って」と彼は言って、階段を駆け上がって、 — リアーネの部屋に行き、リアーネの一通の手紙を持って来た。 —

第四十三周[前周と同じ番号、前周と統合可]

リアーネは普通上階の、立派な影となる部屋を自分用に確保していることをアルバーノは知らなかった。この部屋で彼女はしばしば、 — 殊に母親が町に残っていたとき、 — スケッチしたり、書いたり、読んだりした。子供らしいカリトンは、友情の愛の飲料に夢中になって、この美しく愛らしい女友達に自分の炎をどのように正しく示せるものか分からないでいた。何という部屋であったことか。 — このいつも開けられた部屋にはただ子供達だけがやって来て、リアーネの子供達に時折読むのを任せていた。それで今やポルクスが一人っきりの部屋から、彼女はこの日の朝書いた全紙を持って来ることができた。

アルバーノは取って来るまでの間、遠く離れた青春の友の居間で、友の静かな青白い娘の隣で座っていたとき、この娘はあるときは彼の方を見たり、あるときはまだ彼に馴染みのリアーネの東側の部屋にあった玩具の牧羊舎を見たりしていたが、 — そして朝の風が涼しい窓越しに素晴らしいざわめきをもたらしたとき、 — 殊に床の明るい部分に葡萄の葉とポプラの葉の中国風の影が混じって揺れたとき、 — そして最後にカリトンが乳呑み児を早めのより大きな声の子守歌を歌い聞かせ、彼にとってこの歌がその美しい青春の国への余韻の溜め息のように響いて来たとき、一杯になった彼の、朝の全体で刺激された心はとても奇特徴な風に思われて、 — 殊に揺れ動く影の戦いのせいで、 — ほとんど涕泣したい思いになった。その子供はますます真面目に彼の顔を覗き込んだ。

そのときポルクスが両四つ折りの紙を持って戻って来て、自ら本読みにかかった。すでに一頁目でアルバンの内面の歌にメロディーが作曲された。しかし彼にはどんな女性か書いたのかも、手紙の日付も察せられなかったが、あちこち飛んで読み進められて、後に推測された。紙片は以前のもの一つであって、 — インク吸い取り砂さえもその最近の執筆を証していなかった（というのはリアーネは余りに丁寧で、砂は使用しないからであった）、 — 更にすべての名前が別様であった。つまり紙片が宛てられていたユリエンネは、残念ながらダルジャンソン開封局[Marie René d'Argenson(1652-1721)、パリの警察長官]、即ち宮廷に住していて、変名を要求していたのである。それでユリエンネはエリーザと呼ばれ、ロケロールはカール、リアーネはユリエンネの小さなリンダと呼ばれていた。リンダは周知の通りフォン・ロメイロ伯爵令嬢の洗礼名であって、リンダと侯爵令嬢はかのロケロールの流血の舞踏会の日に永遠の心の同盟、文通の同盟を結んだのであった。 — リアーネは、その純な詩人的な目の前では、どのような高貴な女性も聖母マリア、ヒロインへと、不透明な宝石も透明な宝石へと明るく純化されるのであって、この高貴な伯爵令嬢を

さながら自分の兄の心と自分の女友達の心とで同時に愛していた。そしてこの穏やかな女性、自分のことを、その自分の価値は無自覚なまま、単に自分のエリーザの小さなリンダと呼んでいた。

華奢な草書体の筆記もアルバーノは知らなかった。ユリエンネはフランス語を文字に至るまで好んでいた。しかしリアーネの言葉はフランスの下書き記録には似ていず、イギリス人の浄書の完成した筆記に似ていた。

ここにようやく彼女の紙片がある。―― 優しい方よ、何と長く私は御身のさわやかな魂の最初の響きに憧れていたことか。――

日曜日の朝

「でも今日、エリーザ、私は心から喜んでいます。夕方霧がアウローラとして空に懸かっています。多分昨日のことはあなたに話すべきではないでしょう。とても胸を痛めていました。私の母親が、ただ私のためにこちらに来ていたのですが、ともかくそのせいで私には我慢して装っていたのですが、それで一層病が募ったのではないのでしょうか。――

それからあなたのお姿が、愛しい方、そしてすべてのあなたの苦しみと、苛酷な近さ¹、それに私どものこちらでの昨晚のこと、すべてのことが訴えるように私の不安な胸に迫って来ました。―― それに私どもが愛するカリトンの家の前に立ち止まって、彼女が私の母の手を嬉しげな涙で接吻したとき、私はとても気弱になって、私も別な涙を、嬉しげに誘う女性自身のために涙したのです。彼女自身このとき自分の大事な方がローマで病氣になって、没しているのではないか分からなかったのですから。――

でも今はあなたの小さなリンダの花園では、暗い灰色の霧はすっかり消え去っています。そして人生のすべての花々が眼前に純な高貴な色合いで輝いています。―― 真夜中過ぎに私の母親の片頭痛はほぼすべて取れて、今朝はまだ気持ちよさそうに微睡んでいました。私ときたらどうだったことでしょう。―― 五時過ぎにはもう私は庭に降りて、露と葉陰の間で燃える光輝にびっくりしました。―― 太陽がまず凱旋門の下に顔を出して、―― すべて湖が広大な炎となって煌めき、―― 輝く蒸気が後光のように、天と触れ合っては大地の縁に流れ込んでいました。―― 高貴な息吹と歌声とが朝の煌びやかさの中、流れて来ました。――

この開放された世界へ私は癒えて戻って来ていて、とても喜んでいました。私は絶えず叫び続けたかったのです。私はまた御身を、明るい太陽を得ている、御身達を、愛しい花々を、誇り高い山々を得ている、御身達は変わることなく、また私同様に、御身達香る木々よ、緑に萌えている、と。―― 果てしない浄福の中、私は、エリーザ、神々しくなったかのように、か弱く、しかし軽快に自由に漂っていました。私は圧迫する外皮を、―― そう思えたのです、―― 大地に置いて、ただ動悸する心臓を得ていました。そして歓喜の胸の中では温かい涙の泉が、さながら花々の上をこぼれるようにこぼれ出て、明るい花々を覆ったのです。――

『神様』と私は大いなる喜びの中で恐れて言いました、『あれは単なる眠りであったの

*1 ユリエンネの父の心臓のあるタルタルス。

かしら、じっとした母親の休息だったのかしら』と。そして私は、いつものように微笑してください、 — 更に進む前に、もう一度母親の許に上がって行かなければならなかったのです。私は息を殺してベッドの前へ忍び込み、耳を澄まして屈み込みました。すると母親はずっと優しく微睡んでいた目をゆっくりと開けて、私を疲れたように、でも愛を込めて見つめ、動くことなく、また目を閉じて、私にはただ手を差し込みました。

そこで私はまたとても幸せな気分で庭へ出るようになりました。でも私はいつも快活なカリトンに朝の挨拶をして、私に用事がある場合には祭壇^{アルター}¹への広い道の所にいるからと申しました。 — エリーザ、それからどうだったことでしょうか。何故私はあなたと手をつないでいなかったのかしら、何故私の妹思いのカールは、妹が幸せであることを見られなかったのでしょうか。 — 温かい雨の後では夕焼けや流れ出る陽光がすべての金緑色の丘から流れ出るように、私の内面全体に、私の過去に震える光輝がかかっている、至る所に明るい喜びの涙が見られました。甘く囁かれて私の心は死んでしまうかのように散って行き、すべてがかくも間近で愛らしく思われました。私はささやくようなポプラに返事をしたことでしょうか、私の熱い目に涼しげに吹いて来る春の風に感謝したかことでしょうか。太陽は母親のように温かく私の心の上に掛かってきていて、私ども皆を、冷たい花を、若い裸の雛を、強張った蝶を、そしてすべての生命を育てたのです。人間もそうでなくては、と私は思いました。そして私は砂の道を行き、哀れな小さな草や愛敬のある花の生命を慈しみました。これらは私どものように息をし、目覚めるものです。 — 白い渴した蝶や鳩を追い払うことをせずにいました。これらは並んで濡れた大地の前で飲もうと屈んでいました。 — 波を撫でたい気分でした。 — これらの創造物はまことに得難いもので、神の手になるものです。そしてまだ小さな形の心臓にもその血と憧れは巡っているもので、花卉の下の小さな胚斑にも太陽全体と小さな春が宿っているのです。

—

私は少し疲れて、最初の凱旋門の下で、祭壇^{アルター}へ登る前に、寄りかかって、村や木の庭や丘で一杯の微光を放つ風景の方を眺めていました。きらきらした露や村々の鐘、家畜の群れの組鐘、すべての上の小鳥の飛翔が私の心を休息と明かりで満たしました。いや、このように静かに、人知れず、快活に私のはかない生涯を送ろうと私は思いました。私の眼前で、秋のせいで破れた羽でも、また花々の周りを舞っている黄縁蛺蝶はそのように勧めていないでしょうか。冷たくなって硬い立像に張り付いていて、日中の花の許に舞い上がることのできない蛾[夜の蝶]はそのように警告を発していないでしょうか。 — 私は、それ故、私の母に決して背かないつもりです。 — 大切なエリーザ、小さなリンダが存命の限り、一緒にいてください。そして高貴な女友達²を直ぐに、私が会えて、心から愛することができるよう、呼び寄せてください。 —

私は緑色の影の山を登って行きました。でもやっこのことで、喜びのためにとっても疲れていたのです。 — エリーザ、私のことを思ってください。私はいつか大きな喜びのせいで死ぬかもしれません。あるいは大きな、大きすぎる悲しみのせいで死ぬかもしれません

*1 アルバーノが周知の春の夜に見いだしたかの山はそう呼ばれる。

*2 リンダ・デ・ロメイロ

ん。^{アルタール}祭壇までの葛折りは花粉の色で描かれていて、山の小枝越しに色付きの固定した虹ではなく、活発に輝く虹が弧を描いていました。何故私は今日かつてなかったほどに光輝の中に立っていたのでしょうか¹。そして朝の風が私を翼のように吹き寄せて、持ち上げたとき、そして私が一層深く青い空の中に潜って行ったとき、私は、今やエリュシオンにいるのだと言いました。 — そのときある声がかう言っているように思えました。これは現世のエリュシオンで、おまえはまだ別のエリュシオンにはふさわしくない、と。私は熱くまた決意を固めて、このように多くの欠点からは離れて、特に侮辱という性急な妄想からは縁を切ろうと思いました。他の人々にはこの妄想を隠しているのですが、そのことで私は人々を傷付けているのです。そこで私は祭壇^{アルタール}で祈って、永遠なる善意に感謝を述べ、無意識にひよっとしたら過ぎる程に泣きましたが、それでも目が痛むことはなかったのです。

最後に今日同封の感謝の詩を書きました。敬虔なる神父が承認してくださるならば、私はこれを詩に致します。

感謝の詩

かくてまた私は、すべてを愛される御身、御身の花と咲く世界を眺めていて、また自分が幸せであるからと泣いているのでしょうか。何故私は臆したのでしょうか。私が死者のように大地の下、暗闇の中へ行って、ただ遠くに私の上の愛しい人々や春を感じ取っていたとき、何故私の弱い心はこう恐れていたのでしょうか。もはや生命と明かりの開口部はない、と。 — 御身は暗闇の中でも私と一緒にいて、私を墓所から御身の春の中へと引き上げてくださったのですから。私の周りには御身の楽しげな子供達と明るい空とすべての私の微笑む愛しい人々がいました。 — 今や私はもっと堅く希望しましょう。弱った植物の過剰な花々は折り取ってください、他の花々がもっと一杯に成熟いたしますように。御身は御身の人間達を長い山から御身の天と御身の許へ導かれますが、人々は山際での人生の雷雨の中、雷に当たることはなく、ただ日陰を進むだけです、そしてただ私どもの目が濡れるだけです。 — でも私が御身の許に参り、死がまたその暗い雲を私の上に投げかけ、私をすべての愛しい人々から引き離して、より深い洞窟に導き、全能の方、御身が私をもう一度自由にして、御身の春へと、現世の素晴らしい春よりももっと素敵で春へと運び入れるとき、私の弱い心は御身の裁きの椅子の隣で今日ほどに喜ばしく鼓動するのでしょうか。そして人間の胸は御身のエーテルの春の中で呼吸することが許されることでしょうか。どうぞ、私がすでに御身の天の中を行くかのように、この現世の天の中で私を純粋なものとし、此岸での私の生活をお許してください」。 —

*

君達、友の方々よ。忍耐し純なる形姿の女性が、雷雲は単に自分に俄雨をもたらしただけで、霰を投げつけることはなかったと謙虚に喜んでるとき、君達にとってこの女性が人知れず好ましく、感動的に思われるとき、この女性はその友の感動した心をまずどれほ

*1 その理由は、彼女が治癒の後もまだ近視であったからである。近視の人は露を一層輝かしく見る。

ど震撼させるに違いなかったことか。一 彼は自分の本性の治癒を感じた。さながら徳操が、この形姿へと具体化して、天から、彼に清めようと微笑みかけるために降下して来て、それから輝きながら飛び去り、彼は夢中になって高められて後を追うかのように思われた。

彼は熱心に少年にこの紙片を返しに行くように迫った。彼女と自分とに、彼女はいつ現れるかも知れなかったので、気まずい出会いを避けるためであった。しかし、一 どのような代償を払っても、一 真実を言い、今日のうちにも自分が読んだことを告白する決意でいた。

少年は階段を駆け上がって行った。また降りて来て、長くドアの前に立っていて、一 リアーネを手に連れて入って来た。リアーネは白い服で、黒のヴェールをかけていた。彼女は少しばかり当惑して見回し、両手で好意的顔からヴェールを後ろに上げたとき、カリトンの子守歌を聞いた。彼女は彼が語るまで、彼のことが分からないでいた。彼の声を聞いて、彼女の美しい本性は夕立の後の照らし出された風景のように赤みを帯びた。光栄にも、彼の父親を存じ上げていますと彼女は言った。多分彼女はこの息子のことをユリエンネとアウグスティの描写でより良く、そしてより近い面について、知っていると思われた。それにきっと彼女の兄思いの心は、兄と似た彼の声で感動もしていたことであろう。というのは類似性、コピーの魅力とか、それどころか長所というものは、とても大きく、ある取るに足りない人物に似ているように見える者でさえ、我々にはただの叫び声の木霊のように、より好ましく思われるものである。それは単にこの場合、物真似の芸のように過去と不在とが、空想によって出現する現在となるからである。

母親の次第に小声になって行く子守歌は乳呑み児の深まって行く微睡みを告げていて、最後にディミヌエンド[漸次弱]が黙して、カリトンが目を輝かせて、リアーネの手の許に駆け寄って来た。快活で率直な友情が無垢の心の間で花開き、葡萄の木が近くのパプラに絡まるような具合であった。カリトンは彼女にアルバーノの語ったことを衷心からの関与を前提に話した。リアーネは注意深く集中して耳を傾けた。あたかも間近な話の源泉そのものを見つめているような感じであった。

第四十四周

ようやく庭園に旅立つことになった。ポルックスは残るのを嫌がったが、今日また馬の絵を描いてあげるというリアーネの約束で揺り籠の守護聖人役として残った。今やすべてを美しい若者に見せることができるようになった建築士夫人がこの上なく喜んだことに、アルバンはまだ自分は少ししかリールを見ていないと言った。彼の前を何と魅力的に親しい二人の友の形姿は並んで行ったことか。カリトンは、既婚であったが、ギリシア的にほっそりしていて、その少しばかり背の高いリアーネの百合の丈の隣を舞い続けていた。カリトンは、風景画家の区分によると、動いている自然であるように見え、リアーネは休息している自然であるように見えた。彼がまたリアーネの隣を行くと、リアーネの左手ではヘレナが行き、一 右手は母親であったが、一 彼女の優しく下向きの横顔は言いようもなく感動的に彼には思われ、口許には苦痛により印付けられた特徴が、回帰する日々の傷跡が見られた。美しいその娘が顔全体に陽光を受けて軽快な会話同様に屈託のない

幸多い快活さを見せていたので、まだ女生徒の汎愛校[Basedow(1723-90)設立]の学校のドアを叩いたことのなかったアルバーノはその涙の多い詩文との対比に当惑した。女性の涙が容易に流れるのであれば、もっと容易に女性の微笑はこぼれるであろう。そしてこの微笑は、涙よりもなおしばしば単に見せかけにすぎないのである。

彼は渴した心の憧れから小さな娘の手を握ろうとした。しかし少女は両手でリアーネの左手にすがりついていて、しかしすぐに離れて、三本のアイリスの花を取って来た。――

蝶々に似て、彼女達のようなもので、――そして母親に一本渡し、リアーネにはこう言って二本渡した。「あの方にも一本渡して」。リアーネはそれを好意的に見つめながら、かの聖なる乙女らしい眼差しで彼に渡した。つまり明るく、注意深い、しかし詮索的でない、贈与や要求を欠いた子供らしい関与を示す眼差しである。それでも今日彼女はこの神聖な目を何度か伏せた。しかし、――これで彼女はそう強いられたのであるが、――セサラの岩のような、しかし愛で優しくなった顔にはより強力な男性の、観相学的にふさわしいものが安らっていた。彼は内気な魂の人を百もの目で見つめているように見えた。そして彼の真実の両目はとても温かく、また同様に純粹に、エーテルの中の太陽の目のように燃え上がっていた。

アイリスの花は、ある者はその匂いを嗅ぎ分け、別な者は嗅がないという奇妙な点を有する。ただこの三位一体の人間達に萼はすぐに大きく開いて、長いこと彼らは同じ享受を共有していることに関して喜んだ。ヘレナは先に駆けて、低い茂みの背後に隠れた。彼女は子供用テーブルの傍らの子供用ベンチの上で微笑んで、大人達を待っていた。善良な老侯爵は至る所で子供達のために低い苔のベンチや小さな庭園用椅子や小卓や植木鉢の温室や同様のものをその両親達の休憩地に用意していた。というのは人間達のこうした爽やかな率直な花々を自分の心の間近に抱いていたからである。――「人々はよく」（とリアーネは言った）「族長達の時代とかアルカディアとかタヒチ島に暮らしてみたいと願うものです。子供達はいつでも同じですよ。――そう思いませんか、――まさしく子供達を見れば、どんな離れた時代でも、どんな離れた所でも、およそ許されるであろうことが何か分かります」。――彼も大方喜んでそうであろうと思った。しかし彼は問い続けた。どうして宮廷の死んだ海からかくも汚れないアフロディテが生まれて来るのだろうか、塩分のある海水からどうして純な露や雨が生ずるのであるのか、と。――話しながら彼女は時折とても優美な、――どう通奏低音化したらいいか分からないが、――「フム」と発した。これは宮廷のドナトゥス[Aelius Donatus、四世紀中頃の文法学者]違反であるが、言いようもない親切心を露呈するものである。しかし私がここにそのことを書き付けているのは、次の日曜日、すべての女性読者がこの魅力的な句読点を聞かせるような次第にするためではない。

「同じことが」（とアルバーノは好意的に答えた）「動物について言えます。あそこの白鳥は楽園の白鳥と同じです」。彼女はそれを彼の思っている通りに解した。しかしその理由は敬虔な神父、シュペーナー、彼女の師のせいであった。というのは立派な穏やかな動物がリラルーには一杯いることについてのアルバーノの問いに、彼女はこう答えたからである。「老侯爵はこれらの動物を本当に優しく愛していました。よく涙ぐむほどだったのです。敬虔な神父もそう考えていて、こう仰っています。動物は皆、神の命令で本能によってなっていて、幼い命に対する親の配慮を見ていると、あたかも全能の者がすべて

を自らなしているかのように思われる、と」。彼らは、今や長い、ポプラの木が揺れている湖面の上の半ば木陰道となった橋の上を登って行った。そこにはリアーネの似姿、つまり白鳥が湖水の丸い縁に眠っていて、弧を描く首を美しく背中に絡ませて、翼に頭を置いて、波よりは風に吹かれてかすかに回転していた。「無垢な魂が休んでいるようだ」とアルバーノは言って、リアーネのことを多分考えていた。しかしそう告白する勇気はなかった。「そして目覚めたようだわ」と感動してリアーネは、この白い拡大された鳩が頭をゆっくりと翼から持ち上げたとき、付け加えた。というのは彼女は今日の母親の目覚めを思い出したからであった。 —

カリトンは、すべて跳ねる点で合成されているかのように、いつもリアーネに問いかけながら振り向いた。「あちらに行こうかしら、あそこの中の方かしら、それともここから出ますか。 — 私の主人がいたらと思います。あの人はすべて知っています」。 — 彼女はすべての泉や花の周りに彼を案内したがっていて、若者の顔を女友達の顔のごとく愛して覗き込んだ。 — リアーネは橋の交差点で彼女に言った。「向こうの輝く黄金の球のあるフルートの谷がひよっとしたら最も美しいかもしれない、殊に音楽の友の方には。母親にハーブが届けられるとき、そこで私がいるか探されることになります」と。彼女は母親にハーブと一緒に帰ると約束していたのであった。彼女は南の方へのすべての坂を避けた、そこではタルタルスが高いカーテンの背後に迫っていたのであった。

リアーネは今や絵画と音楽の論争について、この論争についてのヘルダー^{*1}の魅力的な公の報告について話した。彼女は、素描家ではあるけれども、女性的な抒情的な心にふさわしく、全体、音楽の方に味方した。アルバーノは、立派なピアノ弾きではあるけれども、むしろ色彩に味方した。「この立派な風景は」（とアルバーノは言った）「実際一つの絵画です。すべての人間的形姿もそうです」。 — 「私は盲目だったら」（とカリトンは素朴に言った）「美しいリアーネを見られないわね」。 — 彼女は答えた。「私の師の芸術顧問官のフライシュデルファーも絵画を音楽の上に置いています。でも音楽の場合には、ただ声高な過去を、あるいはただ声高な未来を聞いているように思われます。音楽には何か聖なるものがあって、音楽は善なるものしか描けません^{*2}、他の芸術とは違って」。 —

まことに彼女自身が倫理的教会音楽、オルガンでの天使の声であった。純粋なアルバーノは彼女の隣で更にもっと華奢な純粋さの必然性と実在とを感じ取っていた。一人の男性はこの魂を、つまりその分別はほとんどもっと繊細な感覚であったこの魂を、それと知らずに傷付けてしまいかねない、窓ガラスが、目に見えないが故に純然たる透明性でしばしば壊されてしまうようなものであると彼には思われた。彼はいつも一歩分だけ先に進んでいたもので、振り返って見ると、花と咲くリラールばかりでなく、リアーネの全身も突然輝いて、魂の中へ新たに形成された。 — 彼女を自分の心に抱き寄せることが今や彼の憧れではなく、しばしば苦しんできたこの人物をどんな炎からも救い出し、彼女のために剣でその敵に襲いかかること、彼女を人生の深く冷たい地獄の河を通じて力強く運んで行

*1(訳注) Herder: Ob Malerei oder Tonkunst eine größere Wirkung gewähre? 1783.

*2 テキストのない純然たる音楽は何ら非倫理的なことを表現できないというこの命題は、私によってもっと調査され、仕上げられるに値する。

くこと、―― このことが彼の人生を照らし出すことになったであろう。

第四十五周

彼らはすでに、フルートの谷の高い、上部に跳ね上がる噴水の幾つかの濡れた光線が高く漂うのを見た。そのときリアーネはカリトンの予期に反して、兩人と一緒に道のない檜の森へ入って行くよう頼んだ。―― その際彼女は彼をととても満足して率直に見つめて、誤解されるかもしれないというあの女性らしい不信を浮かべていなかった。陰気な森の中には荒々しい岩が立っていて、「友のセサラに」という銘があった。先の侯爵夫人がこの思い出の高いもの[アルプス]をアルバーノの父のために置かせたのであった。―― 感動し、震撼して、目に痛みを感じながら、息子はその前に立って、そこにガスパールの胸であるかのように寄り添って、腕を鋭い石の上の方に押し付け、内心から動揺して叫んだ。「善良な父上」。―― 彼の青春全体、―― イーゾラ・ベッラ[島]、―― そして未来が一気に朝全体のことで狼狽した心に襲ってきて、その心は切迫してくる涙を長く抑えていることができなかった。カリトンは真面目になって、リアーネは微笑み続けた、しかし祈っている天使のようであった。―― 美しい方よ、何としばしば私はこの章で私の感動した心を制御しなければならなかったことか、君達に語りかけ、話に割って入りたい心を。しかし私はその心をまた制御することにしよう。

彼らは黙って日中の中へ戻って来た。しかしアルバーノの波は急速に落ちることはなく、大きな輪となって広がった。彼がこの天上的な谷、願望のこの休息の地、夢が自由に、眠ることなしに徘徊できる地に来たとき、彼の目はまだ乾いていなかった。カリトンは、―― 真面目さではるかにより忙しい思いで、―― リアーネに、自分がそうすべきか目で問いかけた後、―― つまりある種の機械装置の作動開始のことで、―― 前もって駆けて行った。彼らは退いて行く花と咲くヴェールの中を進んだ。―― そして今やアルバーノは眼前にスペインの魅惑的な、香りと影とで編み込まれた魔術的谷という青春の夢が生き生きと大地の上に出現しているのを目にした。山腹にはオレンジの通路が花咲いていて、より高いテラスにその下段を差し込んでおり、―― その小枝に大きな花々を咲かせている全てが、菩提樹から葡萄の木、林檎の木に至るまで、下の小川から吸い上げていたり、あるいは二つの長い山々の間を登って行ったり、花冠を付けたりしていた。この山々は木々の花々と共に低地の草の花々を取り囲み、互いに曲線を描いて、一つの無限の谷を約束していた。山腹に斜めに置かれた噴水は、小川に木々を越えて、銀色の虹を交互に架けていて、―― 東側では「黄金の球」が太陽の横で燃えて、太陽の沈む夕陽の視線の最後の反映をなしていた。「高貴な老人よ、感謝に堪えません」とアルバーノは絶えず繰り返した。リアーネは彼と一緒に西側の山を行き、垂れかかってくる弧の下の花咲きこぼれるベンチまで行った。そこでは谷の最初の曲がり目と二番目の曲がり目、北の上の方に高い唐檜が、その背後には教会の塔の先端が、下には桜草の草原が眺められた。一方カリトンは向かいの東側の山のミューズの像の背後にいて、―― というのは九人のミューズが緑のテンペの谷から輝いていて、―― 分銅を回して、バネを押しているように見えた。「私の兄は」（と小声でリアーネは沈黙を破って、女友達から取り上げた編物を続けていた）「とても貴方に会いたがっています」。今やアルバーノの神聖な諸力と共に目覚めた魂は、

彼女と全く対等であると感じ、当惑していず、そして彼は言った。「すでに子供時代から貴女のカールを兄弟のように愛していました。私にはまだ友がいません」。二人の感動した魂は、名前のカールは例の手紙からのものと気付いていなかった。

突然個別のフルートの音が上の山々で、木陰道から飛翔してきた。――ますます多くの音色が加わった。――音色は美しく混乱して舞い飛んだ。――最後に強力に四方八方からフルートのコーラスが天使のように昇って来て、天へ向かった。――その音色は、何と春は甘美なものか、何と歓喜は泣き、何と我々の心は憧れるものか奏で尽くし、青い春の上方へ消えて行った。――小夜啼鳥が涼しい花々から明るい梢へ飛んで行き、喜ばしげに五月の凱旋歌を叫んでいた。――そして朝の風が高く微光を発する虹をあちこち揺らして、虹を遠く花々の中へ散らした。――

リアーネは手仕事を膝に下ろした。彼女は、頭をミュージズのように前に垂らして、彼女独特の風に、視線を夢想的な遠方に固定して、視線を上げた。彼女の青い目は微光を発した。青い雲のないエーテルが生温かい夏の夜稲光りしながらこぼれ出るようであった。――しかし青年の精神は動揺の中で、嵐のときの海のように、燃え上がった。彼女は黒いヴェールを、――きっと太陽と大気ばかりに対するのではなくて――引き下げた。アルバーノは、彼の動揺した形姿の上の内的世界と共に、――崇高に自分自身とは対照的に――連れられて来たヘレナの巻き毛と戯れていて、彼女の内気な小さな顔を大きな涙を浮かべて見ていた。ヘレナの顔は彼のことを解さないでいた。

今や母親が沈黙の中へ走り寄って来て、彼にお気に召したかともことに好意的に尋ねた。彼は別のことで恍惚となっていて、音色の賛辞を放った。このギリシア人女性は、自分がしばしば聞いてきた音色を、あたかも初めてであるかのように、自らますます強く称えて、一緒に聞き入った。

――ハープを持った一人の少女が谷の入口の茂みを通じて覗き込んでいて、リアーネは合図を認め、起き上がった。彼女がヴェールを上げて、別れようとしたとき、高邁な青年は告白を思い付いた。「私は今日、貴女の手紙を読みました。何ということでしょう。今そのことを言わなければなりません」、と彼は言った。彼女はヴェールをもっと高くずらすことはせず、震える声で言った。「お読みになったはずはありません。私の部屋にはいらっしやらなかったのですから」、そしてカリトンを見つめた。彼は、全部読んだわけではないが、かなり読んだと答え、簡潔な言葉でリアーネには予期できないような穏やかな話を語った。「ポルックスのいたずら」とカリトンは絶えず言った。――「知らなかったのです、お許してください」とアルバーノは言った。彼女は一テルティエ[六十分の一秒]濃い色のヴェールを後ろに上げて、真っ赤になり、視線を落として言った、――ひょっとしたらより悪しき予期が外れて嬉しい和解の気持ちからかもしれなかったが、――「ただ女友達宛の手紙だったのです。――お願いしたら、多分二度と読まれることはないでしょう」。――そしてヴェールを落としながら、目を穏やかに許すように開けて、ゆっくりと自分の愛しい者達と一緒に、彼から別れて行った。

御身、聖なる魂よ、私の若者を愛し給え。――御身はこの炎の心の初恋、若者の人生の薄明の早朝の明けの明星ではなかろうか。御身、この善良な、純粋な、華奢な女性よ。人間のこの初恋、人生の春の音色の中での小夜啼鳥は、いづれにせよいつも、我々が迷うが故に、はなはだ苛酷に運命から扱われ、いつも殺害され、埋葬される。しかしともかく

二人の良き魂が、白い花の人生の五月に、 — 胸に甘美な春の涙を湛えながら、 — 青春全体の輝かしい蕾や希望と共に、そして最初の汚れなき憧れと共に、人生並びに年月の長子と共に、心の中の恋の勿忘草と共に、 — このように近い人物達が出会いを許されて、互いに信頼して、歓喜の月に現世の時代のすべての冬の歳月の期間の同盟を誓い、どの心も相手の心にこう言えるならば、何と素敵なことか、つまり自分が迷ってしまわないうちに、この最も神聖な人生のときに、御身を見いだしたこと、私は死んでも構わない、御身ほどにかくも愛の対象となった人を有しないこと、このことを祝して欲しい、と。

— リアーネよ、セサラよ、かくも幸せに君達の美しい魂もならなければならない。 —

若者は今しばらく自分の周りで活動し続ける玄妙な世界の中に留まっていた。その世界の音色と噴水とが人気のない鉱山での水や機械の如くざわめいていた。しかし仕舞に谷の人気のない噴水と微光の中に何か強力なものが見られ、彼は一人っきりでその中に取り残されていた。急いで彼はより間近な道を歩き、水脈に包まれ、木陰道のカーテンの中を進み、再びリールの野外の朝の大地へ出て来た。何と奇妙に、何と遠く、何とすべてが変わっていたことか。彼の大きく広げられた内的世界に外的世界が一杯の奔流となって侵入してきた。彼自身が変わっていた。彼は檜の木で暗い父親の岩の似姿の許へ踏み込むことはできなかった。彼が梢の中に立っている橋の上に来たとき、広い銀白色の庭園の道に穏やかな一行がゆっくりと進んで行くのを見た。そして彼はリアーネを祝福した。彼女は今やその動揺した心に母親の心を押し抱くことができるのであった。 — 小さな娘はしばしば踊りながら回転し、ひょっとしたら彼を見たかもしれないが、しかし誰も振り向くことはなかった。後から運ばれるハーブを通じて、東風が吹き抜けて、刺激を受けた弦から音色が風奏琴のように自ずと更に奏せられた。若者はその去って行く反響を、国々の上を急ぐ白鳥からの音のように憂愁の念を抱いて聴き入った。彼の背後では空虚な谷がひっそりと愛のフルートの牧人の歌声で語り続けていて、吹かれる余韻の音色が暗く疲れて、彼の許に届いた。しかし彼は祭壇の山へ戻って行った。彼が明るい一帯を眺めて、更に遠くの白い人影が進むのを見たとき、彼は自分のすべての美しい魂が泣き出すのを許した。

— そしてここで彼の若い人生の最も豊かな一日を閉じることにしよう。

— しかし君達良き人々よ、良き心を抱いていても、まだどの心にも巡り会えず、愛する者をただ自らの内で抱くだけで、自らの許で抱くことのない人々よ、私はこのすべての至福の絵を、ギリシア人達のように、さながら横たえられて眠っている君達の往時、それの大理石の石棺から模写しているのではないだろうか。私は、君達の魂が葬った、崩れ去った人々の真似を、君達の前で演ずるアルキミムスなのではないだろうか。そして、君、時が過去の代わりにまず未来を与えた年若くおぼつかない君は、いつか私に言わないだろうか。私は、幾人かの至福の人々の姿を、君がそれらを礼拝しかねないと案じて、聖体のようにそれらを君の目から隠しておくべきであった、と。そして君は付け加えないだろうか。自分はこの不死鳥の画像がなければ、もっとたやすい願いごとを養い、多くの願いごとを達成しただろうに、と。 — そうであるならば、私は何という苦痛を君達すべてに与えたことだろう。 — しかし私にもまた苦痛を与えたのだ。というのは、どうして私が君達の誰よりももっと幸福であり得ただろうかとなるからである。 —

従って君達の結論はこうだろう。君達は素晴らしい日々を、それがその後の思い出の中でか、それ以前の期待の中で、輝くとき以上に素晴らしく体験することはできないので、

むしろ君達はその両者の欠けた日を欲することにしよう、と。また時間という楕円のドームの中のもっぱら両端においてだけ、音楽の微かな天球の諧調が聞こえ、現在という中央においては何も聞こえないのであるから、君達はむしろ中央にしがみついて聞き耳を立てたがり、過去と未来とを傾聴したり、近付けようとは全然したがらない。 — もっとも人間は誰も、過去と未来の両者を体験できない、というのは、この両者は我々の心のおよそ異なる詩体、『イリアス』と『オデュッセイア』、ミルトンの『失樂園』と『樂園回復』だからである。そして君達はもっぱら動物的な現在の中で、盲で、聾のまま巣を作るのである。 —

誓って。むしろ君達は、理想という最も良質の強い毒を、私に服用させてくれ給え。私が、自分の瞬間を寝て過ごさないで、夢を見て過ごし、それからそれがもとで死去してしまうために。 — しかしまさに死去することが私の間違いであろう。というのは詩的夢を覚醒の中でも^{*1} 保とうとする者は、夜の夢を実現する北アメリカ人よりも馬鹿げているからである。この者はクレオパトラのように露のような真珠の煌めきを清涼飲料として、空想の虹を、持ち堪える、雨水の上の飛び梁として使うつもりでいるのである。 — いや、神よ、御身はいつか我々に、我々の現世の理想を体現し、二重化し、満足させる一つの現実を与えられるであろうし、与えることができよう。 — 御身がすでに、内部が外部となり、理想が現実となる瞬間で、我々を魅了する現世の愛で証明なさったような具合に、 — いやそうになったら、 — 否、彼岸の「そうになったら」に、現在の小さな「今」は声を有しない。しかし私は申し上げるが、この地で詩作が生となり、我々の牧歌的世界が一つの牧歌、各々の夢が一つの白日となっても、このことは我々の希望をただ高めるばかりで、決して満足させることはないであろう、より高い現実はまだより高い詩文を、より高い思い出と希望とを生むことだろう、 — アルカディアにおれば我々はユートピアに憧れることだろう、そしてどの太陽の許にいても、深い星空が遠のいていくのを見るだろう、そして我々は — ここに居るのと同様に溜め息をつくだろう。 —

第九ヨベル期

宮廷喪の楽しみ — 埋葬 — ロケロール — ロケロール宛の手紙 — 水中の七つの最期の言葉 — 忠誠式 — 仮装舞踏会 — 人形仮装舞踏会 — 大気中の頭部、タルタルス、霊の声、友人、カタコンベ、そして和合した人間

*1 いや私の本の情景は多分実際体験された情景であって、これ以上の情景を体験することは望めないであろうと、私に対し非難される筋合いはない。というのは空想を描写することで、現実には新たな魅力を得るからである。これはこの魅力でどんな別な退却した現在をも思い出が玄妙に微光を発するようさせるものである。私はここで『巨人』で行動する人物自身の感受性を引き合いに出そう。その人は私の本の中で、 — 仮にその本に出会っていたら、 — 自分自身の情景であるその描かれた情景で、現実の魔術には見られないより高次の魔術を見いだすのではないか、そのより高次の魅力は、勿論、 — 全く不当なことに、 — その人物が自らの生を、 — 体験することを願うようにさせかねないものである、と。

第四十六周

生成中の愛は最も静かである。この春の中の影の多い花々は、別の春の花々のように、陽光を避ける。アルバーノは深く日曜日の夢想に閉じ籠もって、できるだけ現実の緑色の居住の葉を自分の蜘蛛の巣に取り込んだ。つまり月曜日のことで、侯爵の埋葬パレードの際、自分の女友達の兄が姿を現すことになっていた。

第三の、しかし最大の侯爵の棺が休眠の地に埋葬されることになるこの葬儀が、いよいよ始まり、すでに二つの先の棺が老侯爵と共に埋葬される前夜祭が威儀を正してなされていた。丁度例えば徳操者達はある世紀の最初に埋葬され、ようやく世紀の最後にその空疎な名前やケースや小牛革綴じが埋葬されるようなものである。至高の浄福者の予行埋葬、手本埋葬のときには、その上老敬虔な神父シュペーナー、彼の最後の友が、一緒に祖廟に降りて行って、摩滅した歯車装置の木製と錫製のケースを開けさせて、愛しい永眠者の静かな胸になお侯爵の青春の肖像画と自分自身の肖像画とを色彩面を下にして置き、語ることも泣くこともなかった。そして宮廷は友情のこの朝の贈り物、夕べの贈り物を大いに徳とした。

自分達が長く語らなければならないことはすべてその人々にとって巨大に膨張するものである。 — すべてのペスティッツの社交界は葬儀の一同となり、葬儀式部官で一杯になった。 — 直近の将来の準備はすべて葬儀の準備となり、言葉はすべて葬儀の祈り、あるいは色褪せた男への碑銘となった。 — スフェックスは侍医として弔意と葬送への自分の関与を楽しみにしていた。 — 講師は入質した冬服の代わりに、宮廷喪服をすでに試着し、確認していた。 — 宮廷式部官は一時の休みもなく、墓所を開けるけれども閉めることのない最後の審判の日が、彼にとって間違っただけでやって来たのかもしれない。 — 冷淡なルイーダが快くすべてを任せられたフルレ大臣はすべての古式侯爵風華美の愛好者として、そして現行の華美の召集指揮者として、至高の浄福者同様に天国にいた。 — 女達は高貴な浄福者としてベッドから昇っていた。これらの熱心な衣服描写家にとってはスカートやスカート裾支持者の長い連鎖は夫達にとって馬の繋がれた徒党同様に多分重要なことだったからである。

アルバーノは窓際でリアーネの兄を今か今かと待っていた。そしてますます熱くこの姿を現さない男を好きになっていた。両翼のように友情と愛とは彼の中で互いに結び付いて生じ活動した。喪の糸巻き、 — つまり空の棺はタルタルスに置かれていて、次第に糸巻きから解かれて、今や黒い喪のリボンも間もなく山の町まで張られた。すでに行列の到着の一時間半前に女性達の群れの硝石は壁や窓に結晶化していた。ドクトル夫人のザーラは子供達と蠶の腐肉と共にショップの部屋に上がってきた。ショップの部屋の二番目のドアは開いたままで、アルバーノの部屋に通じていて、夫人は愛らしい目で中の伯爵に言った。「この上だとすべて良く見えますでしょう。お許してくださいね」。 — 「一緒にいなさいね、伯爵様の邪魔をしないことよ」と彼女は子供達に振り向いて言って、伯爵の部屋へ入ろうとした。その敷居でアルバーノのところから来たショップに彼女は掴まり、止められた。

つまりザーラは、自分の魅力で他人を夢中にさせるよりも自ら夢中にさせられるかの普通の女性の一人であった。 — 彼女は単に自分の顔を安楽椅子の上に置き、その顔を点

火させ、焦げさせ、燃えさせて、彼女の方としては（顔という自分の怠け者のハインツ^{*1}を信頼して）、静かに冷静に他のことを、単純な証言か意地悪な中傷をなすのであった。それからアッティラが諸民族の神の鞭であったように、女達の衣服の鞭であった後は、彼女は見上げて、周りの男性達の煙草の火口の中での自分の顔による火災の損害を検分するのであった。特に豊かで美しい伯爵に彼女は目を付けていた、— アモールの目隠しの下で。彼女の頭は善良な「観相学的断編」[Lavater 著]で一杯であった。大抵の観相学者は残念ながら人間全体の中でただ顔しか研究しないというラーヴァーターの非難は、彼女の純然たる観相学的センスに皆目当たらない。

ショッペは奴隷買人[遣り手]の女性の場合、歩行は兵士強奪であり、白リンネルは狩猟服であり、ショールは鳥網、首は間近な狐のための白鳥の首であると容易に察知して、両部屋の敷居のところで彼女の手を掴んで、彼女に尋ねた。「貴女も皆の国中の喜びに関心がおありで、私同様宮廷喪を願っているのですか。貴女の日からそのようなことが読めます、侯国医師夫人」。— 「どんな関心ですか」と全く愚弄されて医師夫人は言った。

— 「廷臣の楽しみに対してです。廷臣はいずれにせよ、めったに喜びの跳躍をしないという点でオランウータン同様猿とは異なっています。少なくとも廷臣は若いピアニスト達同様にどんなに悲しい曲も、どんなに陽気な曲も、動ずることなく交互に叩き終えてしまいます。宮廷では喪を洩いもので台無しにしさえしなければ結構なのです。— 貴女は、愛しい者達が黒い喜びの服を無駄に着用してしまうことをお望みですか。この服を着て、レウクトラの戦い[紀元前 371 年テーベのエパミノンドスがスパルタを破った]で生き残った者達の子孫のように新しい侯爵の歓声に向かって行くのですぞ。どうですか」。— 不幸なことに彼女は嘲笑的に答えた。「黒はこの国では喪の色です、ショッペ殿」。— 「黒がですか、ドクトル夫人」（驚いて彼は後ろに跳ね返った）「黒ですぞ。— 黒は旅の色、花嫁の色、盛装の色、そしてローマでは王侯の子供の色で、スペインでは廷臣はモロッコのユダヤ人^{*2}のように黒服で現れることが帝国法なのです。

奥方、ペスタロッチ^{*3}は、— しかしマルツよ、おぬしは私の言うことが分かるか」とショッペは話を回し、太鼓を有していて、抑えられた葬儀の太鼓の若干を聞き取るために、こっそりと行列の間、太鼓を叩こうと思っていたこの人間が太鼓のバチを取るよう元気付け、会話の理解を促そうとした。— 「マルツよ」と彼は一層甲高く言った。「ペスタロッチの見解は全く結構なものだ。つまり我々の時代の偉いさん達は顔や服装、姿勢、偶像崇拜、迷信、香具師への愛好の点で日々アジア人に近付いているというものだ。—

偉いさん達は、喜びに対して黒色を、悲しみに対して白色を着用する中国人から、神殿や庭園、ポンチ絵ばかりでなく、まさにこの喜びの黒色も借用しているというのはペスタロッチの見方を証するものだ」。

子供達の中では、— この子供達の中で教育を受けていない者達のみがまだ無作法で

*1 あるいは化学的炉のアタノールのことで、これは掻き立てなくても長い時間働き続ける。

*2 Lemprièreによる。[W. Lemprière: Reise von Gibraltar über Tanger usw. nach Tarudant und Marokko. Zimmermann 翻訳。1793]

*3(訳注) Joh. Heinr. Pestalozzi (1746-1827): Lienhart und Gertrud. 教育小説。4巻 (1781-87) Bd.4. 23 節。

はなかったが、一 ブールハーヴェとガレヌスとヴァン・スヴィーテンは大方、そこに居合わせる者達の切り嵌め細工やスケッチで傑出して、彼らは指でそのバターパンに彫り込んでいたのであった。ガレヌスは母親についての諷刺作品を、こう言いながら示した。「御覧、ママはとても長い鼻を[小馬鹿に]しているよ」。

同じようなものを[小馬鹿に]していた図書館司書は、彼女が入ろうとしたとき、彼女が納得するまでは入れないと請け合って、彼女を押し止めた。葬儀のパレードの柱はタルタルスから一エーカーも出ていないだろうから、時間は十分にある、と。彼は続けた。「真の悲しみは、これに対し、いいですか、いつも怒り同様多彩なものにするか、あるいは驚愕のように白くします。例えば亡き教皇の者どもは董色に悼みます。フランス国王もそうです。その妻は栗色で悼み、ヴェネツィアの市参事会は総督の死を赤色で悼みます。一

しかし貴女も私同様支配者に対する喪は納得できないことでしょう。大司祭やユダヤ人の王^{*1}には喪は禁じられています。何故我々は主人よりも召使いにむしろ許そうとおもうのでしょうか。一 よろしいかな、高価な国喪を許すような領主は、明らかに廃された私的喪を目覚めさせるに違いないのではないのでしょうか。自分の追放で、キケロがその追放でしたように^{*2}二万人を喪服に包み込むのであれば、自分の最後の行為が、オバン法[国王による外国人財産没収権]となり、一つの略奪となる点、あるいは普通は従者や貧者に衣服を遺贈する臨終の床が、彼らから衣服を奪うことになる点に、領主は責任を負えるものではないでしょうか。いや、奥方、こうしたことは少なくとも領主にはふさわしくありません。領主はそれどころかその死によってしばしば、マルツィオン^{*3}がキリストの地獄巡りで主張したように、カインとかアブサロムとか何人かの旧約聖書の劫罰者達を地獄から新しい治世の天国へ連れて来ます。

貴女はまだ降伏なさらなくて、腐肉は私を家畜のように見つめています。しかしこうお考えください。鬘師や織物師はしばしば王座の頭目に、自分達の製品を使って欲しいと頼みます。売れるようにするためです。一 世継ぎの皇子、皇太子は、前任者を退かせる、つまり埋葬する最初の喜ばしい忠誠式の日、統治の日、すぐに墨色の黒服を着用します。黒い羊毛はほとんど役立たず、余り売れないからです。このようなサンプルが突然宮廷国家全体を、家畜やティンパニーや説教壇さえも黒く覆います。一 よろしいかな、後一言言わせてください。まことにまだ合唱の生徒達しか来ていません。まさにそれ故、侯爵の死骸は、容易に葬儀進行の喜び全体を妨害しかねないので、前もって片付けられ、ただ空の箱だけが運ばれて来るのです。行列がアングレーズ^{*4}[英国風ダンス]より他の考えを抱

*1 『ミシュナー』三、サンヘドリン第二章。[タルムードの Mischnah、当地での裁判の記録]

*2 キケロ『ローマ市民への帰国感謝演説』第三章。[この箇所は本来、私がまだローマにいたときには元老院と二万人の人々が喪服を着たが、私がローマを去ってからは、たった一人(キケロの兄弟)だけ哀れな喪服姿になってくれた]。

*3 彼の党派はキリストの地獄巡りによって地獄からすべての悪人を生じさせたが、しかしアブラハムやエーノッホ、預言者等は生じさせていない。テルトゥリアヌスの『マルツィオン[Marcion]反駁』、[J. G. Pertsch: Versuch einer Kirchenhistorie, 2. Jahrhundert. (1737). S.334. からの引用らしい]。

*4 黒色はそう呼ばれる。

かないようにするためです。…親しい方、最後の言葉です。厩舎の一団、小姓の一団の許で何を御覧になりますか。 — 構いませんとも。突然多くの人々や侯爵達がその子供達[領民]の許で、かくも楽しげであるのを見ることは私にも嬉しいものです」。

しかし彼は行列が一層長くなって行くのを見るにつれ、つまり空の、模様のあるキューブセロス[コリントの王、幼時母親によって箱に隠されて神託の難を逃れた]の箱を家系の墓所に収めるときのこの緩い曲芸師の綱たる行列を見るにつれ、彼の嘲笑は一層怒ったものになった。

— 黒い鎖のすべての喪章を付けた部分に仮定を応用した。 — 人々が新しい治世の仮面舞踏会をこのゆっくりとしたメヌエットのステップで開き、結婚式のワルツと忠誠式の祖父踊りにふさわしく振る舞っていることを称えた。 — 彼は言った、喜びの日には自らや動物には好んですべてを軽やかなものとするので、それ故ユダヤ人は安息日には自らやその家畜には何も担わせず、鶏にすらもぼろ切れを付着させることはしないと、それで儀式の馬車やパレードの棺、哀悼馬には何も乗っていないのは結構なことだ、いや喪の外套の裾さえも小姓達によって、四つの経帷子の角が四人のがっしりした手の殿方によって運ばれているのはよろしいと述べた。 — ただ彼は、だらしのない兵隊が陽気に銃を逆さまに握っていて、まさに最高位の人々、ルイージ、フルレ、ブヴェロが、速やかな葬儀の酒宴から突然野外に出て、よろめきながら両側を支えられて行かなければならなくなっていることを非難した。 — —

第四十七周

アルバーノの中ではショッペの中とは異なる精神が語っていた。しかし両者は直に出会った。伯爵にとって、紗の夜の形姿、静かな喪の旗、葬儀の行進、忍び足の病者の歩行は、現世の死体安置所の鐘の音を広く奏した。殊に彼の花と咲く目の前で初めてこの葬儀の調べがなされたからそう思われた。しかしすべてのことよりももっと甲高く彼の前で何かが、

— ほとんど推測されない何かが人生の別れを叫んだ。経帷子で窒息した太鼓の音であった。弱い音に抑えられた太鼓は彼にとってすべての地上のカタコンベから漏れてきた反響であった。彼は我々の心の黙して絞殺された嘆きを耳にした。彼はより高い本性が上の方で我々の人生の三時間の涙まじりの喜劇を見下ろしているのを見た。この喜劇では第一幕の赤ん坊が第五幕では記念祭の老人となって疲れるのであり、それから生長しては屈んで、落ちて来るカーテンの前で消えるのである。

我々が春に、夏のときよりもむしろ死や秋や冬のことを考えるように、そのように最も炎のような最も力強い青年もその若い季節に、大人の男性がそのより間近な季節に思い描くよりも、一層頻繁に、一層明瞭に暗い落葉の季節を思い描くものである。というのはどちらの春においても、理想の翼は大きく広げられ、ただ未来にのみ空間を有するからである。しかし青年の前に死は花と咲くギリシア的形姿で現れ、疲れた中年の人間の前にはゴシック的形姿で現れる。

喜劇的諧謔で通常ショッペは始めて、悲劇的諧謔で終わった。そのように今や空の葬儀の棺も、馬の喪章も、馬の紋章の飾りも、無器用なドイツ式儀式に対する侯爵の軽蔑も、すべての心の空虚な偽装も、こうしたもの一切が、彼をある高みに連れ去った。多くの人々を眺めると、彼はいつも一気にこの高みに駆り立てられて、その高みから彼は何とも形

容し難い昂揚と憤激、笑い出したい悲愁の気持ちを抱いて、人類の永遠の、あらがえず、取るに足りず、様々な目的と歓喜とで迷わされて麻痺した重苦しい狂気と、 — それにまた自分自身の狂気とを眺めるのであった。

突然黒い鎖を突き破って、一人の多彩な輝かしい騎士、ロケロールがパレードの慶祝馬に乗って現れ、我々二人の人間を震撼させたが、それ以上の人に及ぶことはなかった。青白い崩壊した顔が、長い内面の炎によって硝子化され、すべての青春の薔薇を失って、突出した黒い眉毛の下の両眼の金剛石坑からきらめきを発しながら、悲劇的な快活さで馬を走らせてきた。その快活さの脈管線は情熱の若皺の下で倍加していた。何という精根尽きた生命にあふれた人間であろう。 — ただ廷臣とか彼の父親のみがこの悲劇的喜びへの誘いを新しい治世への媚びるような喜びへと貶めることができるものであろう。しかしアルバーノは彼をすべて自分の心の中へ引き入れて、内的感動で青ざめて、こう言った。「いや、彼はこうでなければならない。 — ショッペよ、彼はきっと我らの友となることだろう、この引き裂かれた若者は。 — この高貴な者は何と痛々しく、この真面目さ、戴冠、墓場、それに一切のことを笑っていることか。彼はかつて死んでもいるのだ」。 —

「その点騎士の言は正しい」（とショッペは目をぴくつかせながら言って、すばやくアルバーノの手とそれから自分自身の頭を軽く打った）「私には頭蓋骨が狭いボンソワール[明かり消し]に、死が私に被せた明かり消しに」思える。 — 我々は可愛い、銀で覆われた人形で、電氣的踊りにかかっている、火花で飛び跳ねて、幸いにも私はまだ動いている。...あそこに我らの善良な講師も忍び歩いている、長い喪章を引いている」。 — 勿論アウグスティの市民的に真面目な気分はとても図書館司書の人間的に真面目な気分と好対照をなしていた。

突然ショッペは感動にうんざりして言った。「仮装のための何という仮装舞踏会か。ぼろ紙のためのぼろ三昧だ。一人の人間を静かにその穴に投げ込み、そこに誰も呼ばないことだ。葬儀屋が永眠者をベッドへ運ぶとき、警鐘も鳴らさないし、近隣に触れ回らないロンドンやパリに倣ったらいい」。 — 「いや、いや」（とセサラは悼みに力を一杯に込めて言った）「聖なる死者達に無関心な人を私は称えない。その人は生きている人々にも無関心だ。 — いや私は、愛しい人をまだ偲ぶことができさえすれば、喜んで流涕し続けて、心を引き裂こう」。

何と間近に見て彼の心は動かされたことだろう。棺の棺がその前を通り過ぎることになったある天水桶では青銅の馬上に模写された老侯爵がいて、自らの下を鞍のない哀悼馬と騎乗者のいる慶祝馬とが通り過ぎるのを見ていた。一人の聾啞者が玄関の前で、物乞いの鐘の音を鳴らしていた。その音を彼は埋葬される者同様聞き取ることはないのであった。

— 忘れられた侯爵はその臣下達の一人よりももっと孤独に人知れず埋葬されたのではなかったか。 — セサラよ、人間は骨壺に入ろうが、ピラミッドに入ろうが、何と容易に忘れ去られることか。何と人々は我々の不滅の自我を、それがただ楽屋に入り、演者達の下で騒ぐことがなくなりさえすれば、一人の俳優のように不在と見なすことか、そのことが君の心にのしかかって来た。 —

しかし白髪の隠者シュペーナーは、このより深い隠者の沈んだ胸の上に二重の青春を置かなかっただろうか。壮麗さの凍てつく時間に誠実なユリエンネは弔鐘のすべての音色を自分の涙で数え上げなかつただろうか。彼女は、哀れな、病いのせいでただ儀式は免れた

が、悼みから免れることのなかった娘で、今や数えて最後から二番目の縁者を、ひよっとしたら最後の縁者を失ったのであった。彼女の兄はほとんど縁者とは言えないのだから。

ー リアーネはそのエリュシオンで悼みの余波を、自分に間近な、タルタルスの高い木々の背後で行われる余波を察知しているのではないだろうか。彼女が何かを察知したら、何と彼女は衷心から悼むことだろう。ー

ー こうしたこと一切を高貴な若者はその魂の中で聞き取った。そして彼は熱く心の友情に憧れた。ー 彼にとっては、あたかも永遠から山の大气、生命の大气が吹き落ちて来るかのような、あたかも生命の小道から死者の塵を追い払うかのような、彼方で精霊が松明を逆さにして、冷たい胸の上に置き、不滅の生命を消し去るのではなく、不滅の愛を点火するかのような気がした。

彼は今や仕様がなく、野外に出掛けて、春の舞い飛ぶ物音の中、弱くくぐもって戻って行く葬儀の行進の中、次の言葉をリアーネの兄宛に書かざるを得なかった。この手紙の中で彼は若者らしく自分の友になって欲しいと言ったのである。

カール宛

「見知らぬ方よ。我らにとって死者の海の中、そして涙の中、人間の凱旋記念柱や王座やその橋架が壊れたように見える今この時、自由に一人の真実の心が御身に尋ねます。

ー 御身の心も誠実に喜んで答えて欲しいものです。

見知らぬ方、御身は人間の最も長い祈りを聞き取ったことがありますか。つまり御身に友がいますか。御身の願いや神経や日々は、その友と一緒にレバノンの四本のヒマラヤ杉のように一緒に育っていますか。これらの杉は周りに驚しか寄せ付けないものです。御身は二つの心、四本の腕を有し、戦いの世界において不死のように二回生きていますか。

ー それとも孤独に凍って、黙した細い氷河の先端に立っていて、御身が創造物のアルプスを見せてやることのできる人間を一人も有していないのではないですか。そして天は広く御身から弧を描き、御身の下では峡谷が弧を描いているのではないですか。ー 誕生日が来ても、御身の手を握り、御身の目を見て、もっと堅固に一緒にいようと言ってくれる人がいないのではないですか。ー

見知らぬ方よ、御身に友がいなくても、御身は一人の友にふさわしいのではないですか。ー 春が輝き、すべての春の蜜の萼が開き、春の純な天とその樂園のすべての百もの門が開いても、御身は私同様に痛々しく見上げ、神に自分の心のために一つの心を祈ったのではないですか。ー いや夕方太陽が一つの山のように沈み、その炎が大地から去り、わずかにその赤い煙りが銀色の星々の許に引かれるたびに、御身は先の世から友情の同志化された影が、つまり戦場で一つの星座の星のように一緒に没した影が、巨人として血の色をした雲の中を移ろうのを見たのでは、そして何と彼らは不滅に愛し合っていたことかと考えたのではないですか。そして私のように一人つきりであったのでは。ー そして孤独な方よ、人間の精神が、暑い国々でのように、働き、旅する夜に、その冷たい恒星が連なり、姿を見せ、それでもエーテルのすべての広大な像の中に何の愛しい誠実な像もなく、無窮が御身を痛々しく引き上げるとき、そして御身は冷たい大地の上で、御身の心はただ御身の胸の許でしか鼓動しないと感ずるとき、愛しい方よ、御身はそのとき衷心から泣くのではないですか。

一 カールよ、私はしばしば誕生日に生長して行く年月を、つまり時の幅広い翼の中の羽毛を数え上げました。そして青春のざわめきを考えました。そして遠く手を一人の友人に差し出したものです。この友は、私の前で岸辺での人生の四季が花々や葉や果実と共に移ろい、長い奔流に乗って人類が千もの揺り籠や棺の中で流れ去って行くときに、我らの生まれたカロンの小舟の中で、私の許に留まり続けてくれるであろう方です。

いや多彩な岸辺が流れ去るのではなく、人間とその奔流が流れ去るのです。岸の庭園での四季は永遠に花咲き、落花します、ただ我々は一度庭園の前をざわめき過ぎて行き、戻ることはないのです。

しかし友よ、一緒に行きましょう。御身が死の手品のこの時に、青ざめた侯爵が青春の像を胸に抱いているのを見て、秘かにタルタルスで侯爵のことを悼んでいる白髪の友のことを思うならば、御身の心は溶け出して、胸の中の穏やかな温かい炎となって流れ出て、小声でこう言うことでしょうか。私は愛し、それから死に、それから愛することにしよう。いや、全能の方よ、私に私と同じように憧れる魂を見せて欲しい、と。

御身がかく言い、かくの如き人ならば、私の心の許に来て欲しい。私は御身の如きものです。私の手を握り、その手が枯れるまで、その手を握っていて欲しい。私は今日御身の姿を拝見しました。そしてその姿に人生の傷を見ました。私の許に来てください。私は御身の傍らで血を流し、闘うつもりです。私は御身をすでに以前から求め、愛していました。二つの奔流のように和合し、一緒に生長し、担い、干涸らびたいと思います。溶鉱炉の銀のように燃える明かりとなって一緒に流れ、純な微光の傍らにすべての鉱滓を追い出したいと思います。だから人間が鬼火だと言ってもはや怒って高笑いしないことです。鬼火に似て我々は時の篠突く嵐の中で燃え続け、飛び続けます。一 時が過ぎ去ったら、そのときには我々は今日のように再会し、また春となることでしょうか。

アルバーノ・ドゥ・セサラ」

第四十八周

何と素晴らしく、一 内的人間にとって、高齢の外的人間の場合のようにすべての動脈が軟骨へと硬化し、すべての脈管が曲がらない土塊のようにならないうちに、そして倫理的な心臓が体の心臓のように一分間にほとんど六十回打たなくなっていくうちに、また老いた内気な阿呆が感動のたびに一片の自分の本性、即ち冷たく乾いて維持し、見守っている本性、あたかも濡れた木苺の葉がいつも硬い面を乾いたままにしているかのような本性を保持するようになる以前に、何と素晴らしく、と私は申し上げる、これに敵対して、このスパイの時期以前に、一人の若者が、殊にアルバーノのような者が、その軌道を踏み出すことか、何と自由に、大胆に、喜ばしく。そしてすぐに大胆に友人や敵を探し、間近に接近することか、友人のために、あるいは敵に抗して闘うために。一

こう考えてアルバーノの炎の手紙は許されるべきであろう。他日彼はロケロールから次のような手紙を受け取った。

「私は貴兄と変わらない。昇天祭の夕べ、仮装の許、貴兄を訪ねることにしよう。

カール」。

伯爵の顔に、この努めての延期に対して、侮辱の赤みが射した。自分だったら、一と彼は感じた、一胸襟をこのように開いた後では五日間[月曜日から木曜日までの三日間]という味気ない暫時なしに、二重の意味の忠誠式、仮装舞踏会なしに、早速友人の許に出掛けて、友人となっていたことだろう、と。しかし今や彼は誓った。これ以上迎合はしなくて、ただ彼を待つことにする、と。一それでも直に動揺した怒りは舞い飛んで、長く求めていた寵児の最初の手紙に対して、次第に穏やかな言い繕いを認めって行った。一いや例えばカールは、この忠誠式の騒音の中では最初の認知という聖なる時を混ぜ入れたくないのかもしれない、一あるいは最初の自殺的仮装舞踏会のせいでどんな舞踏会も新しい第二の人生の熱狂的時期となっているのであろう、一あるいは彼はそれどころかアルバーノの誕生日を知っているのかもしれない、一あるいは結局この燃えるような男は独自の道を進み、あるいは飛ぶのであろう、と。

しかしこの手紙で、伯爵は自分の手紙を、一ショッペに対する罪と非難することになった。彼は友情の中で友情に憧れることを罪と見なした。しかし美しい魂よ、君は間違っている。友情には段階があって、この段階は神の王座の許、すべての精霊を通じて無限の精神にまで昇って行くものだ。ただ愛だけは飽和になって、いつも同じ愛で、真理のように三つの比較の段階がない。ただ一人の生命が愛の心を満たす。アルバーノとショッペも彼らの観念の互いの輪廻や彼らの反抗と高貴さの近い類縁性のために、自分達が互いに示し合うよりもはるかに好意を抱いていた。一というのはショッペはそもそも何も示さなかったので、彼に対してはただ唇に指を当てて、しかしことによるとそれだけ一層強く愛を抱くことができたのであるかもしれないからである。アルバーノは熱く燃える凹面鏡で、これはその対象を間近に有し、それを垂直に背後に写すのであるが、ショッペは対象を遠くに有し、それを逆さまに空中に投げ出す凹面鏡である。

彼の誕生日と忠誠式当日の前の夕方、アルバーノは一人窓辺に立っていて、自分の過去を考量した。一というのは最後の日は最初の日よりも厳かであるからである。十二月三十一日には私は三百六十五日とその運命を概算する。一月一日には私は何も考えない。未来全体は透明であって、五分で終わってしまうかもしれないからである。彼は自分の二十年目の[十九歳の]時が終わろうとしている時の晩鐘の音が鳴り、晩課が彼の中で始まったとき、自分の倫理的本性の長軸線^{*1}の長さを測り、春雨かあるいは霰の粒の一杯に掛かった高々とした明日の一日を見上げた。未だかつて彼はこの日ほどにかくも柔和に愛しい人間の群れを一望したり、あるいは未来の開け放たれた門を通じて覗いたことはなかった。

しかしこの素晴らしい時をマルツが妨げた。彼はびっこの旦那が河の中に飛び込んだという知らせを持って入って来た。屋根裏の窓から戻って来る村の葬列の一行が、ショッペが飛び込んだ岸辺に集まっているのが見えた。恐ろしく乱暴に、一というのはアルバーノの中で怒りは驚きと痛みの隣人であったからで、一のんびりとした地方医を救助に強引に連れ出して、しかも厳しい脅迫の言葉も添えていた。というのはスフェックスは馬車を待とうと言い、遅すぎる救助準備の場合も有り得ると説明し、そもそもひよっとし

*1 近日点から遠日点まで伸びる線のことを人々はそう呼んでいる。

たら、図書館司書を解剖台に学問上のドクトルのご馳走として搬送する期待を抱けるかもしれないと述べたからである。

若者は彼と一緒に走り出た、一 穀物畑を通過して、一 涙を流しながら、一 呪いながら、一 握りしめた拳と広げた拳をもって、一 暗い人の輪に近づくにつれ、ますます目に目眩を感じ、彼の心は燃えた。とうとう二人は図書館司書を目にするばかりでなく、一 聞き取ることもできるようになった。無傷のまま彼は彼らに縮れ毛の頭を葦からよじって向けて、葬列に向かって演説していたので、時折熱く水生植物の上に毛深い腕を振り上げていた。

勿論次のような次第であった。

彼の連鎖式は、彼の存命の限り、かくなるものであった。「自分は逆子[尻から生まれた]ではなく、顔から生まれたのであり、従って頭と鼻は高く、上に反っている¹⁾。そうせざるを得ないからである。一 自分は健康より他により純粋な自由を知らない、一 すべての病気は魂を歪曲してしまう。地球はただそれ故に、つまり地球は打撲家[クヴェチュハウス]²⁾であるが故に、一般的な枷[獄]屋であり、[パリの la Salpêtrière] 牢獄である、一

牡蠣療法、蝸牛療法、蝮療法を必要とする者は、自ら粘液性の、くねくねした、くつつきやすい蝮、牡蠣、蝸牛であり、それ故永遠に自由な未開人は、病弱者を殺したのであり、強壮なスパルタ人は病人には官職を与えず、いわんや王冠を与えることはなかった。一

殊に強壮さは必要であり、我々の低級な時代には資格のある奴らを叩きのめすために必要である。自分の知る限り、若干の内容のある拳は、市民がなし得る最良の名誉毀損の告訴であり、誹謗対応であるからである」と。一

それ故彼は夏と冬、冷たい水で沐浴をしたし、まさにそれ故、すべての点で禁欲的であった。

さて彼は厭わしい五月の天候の際に、ただ自分の灰色の軽騎兵の外套を着て、一 家ではナイトガウンになるのであるが、一 それに履きつぶした靴で河へ出掛けた。家で彼は前もってきちんと脱いでいて、岸边ではすぐに用意が整うようにしていた。彼が素早い足取りで川辺に行き、最後にはすべてを投げ返して、中に飛び込むのを見た葬列の一同は、この人間は溺死を欲していると信じざるを得ず、皆して沐浴の地に駆け付けて、彼を止めようとした。「溺れてはならんぞ」と葬儀の黒づくめは遠くから叫んだ。彼は黒づくめを近寄らせて、もっと近くでその件の話をしようとした。「私はもう水の中にもいるけれども、まだ正気なのだ。親愛なるケルステン達よ、カール大帝の時代にはクリスチャンはそう呼ばれていたからだが、耳を貸しておくれ。私は哀れな代物で、これまで何で暮らしてきたか、ほとんど思い出せない。全くの赤貧だ。私がただ世の中で始めたことは、何の祝福も受けず、前後に進む蟹歩行という具合。私はウィーンで鴨の糞の可愛い店を構想した、しかし何の成果もなかった、鴨が足りなかったのだ。一 私は別の端を掴んで、カールスバートでは偉い殿方のために、いつもはどんなガラクタや椅子の上にも一枚の絵を置くお歴々に便所用の可愛い銅版画を商って、単なる印刷紙の代わりに何か気の利いたも

*1 まず顔から世に生まれた子供は後に頭を前方に傾げることができない。『家庭の母』第五巻。

*2 コペンハーゲンでは傷病兵病院はそう呼ばれる。

のを利用するようにしたものだが、このセットはすべて売れ残った。作風が余りに苛烈で、十分に理想主義的でなかったからだ。 — ロンドンでは前もって演説を（私は学者の端くれだから）、絞首刑が待っているけれども、それでも何かを言いたい輩のために仕上げたものだ。私はその演説を最も裕福な議会弁士や書籍商の悪漢自身に申し出たのであるが、しかしほとんどその演説を自ら使いかねないところだった。 — 私は反吐で生計を立てようと思ったことがある^{*1}。 — しかしその為には元手が必要だ。 — あるときはさる伯爵の連隊で譜面台の仕事をしようとしたことがある。監視パレードの際、誰もが肩に音楽の紙片を掛けて、他の者がその紙を見て演奏するのは馬鹿げて見えるから。私はわずかな金と引き換えに、すべての楽譜をまとめて、譜面を持って彼らの前に立とうと思った。しかし陸軍中尉が（彼は同時に統治と官房の職にあったが）、吹奏者が吹くとき笑い出すであろうと思ったのだ。大事なケルステン達よ、私は以前からそんな具合だ。しかし私の大事な外套を踏み付けないでくれ。不幸なことに私は、溶かした封蠟で嫁入り支度をしたウィーン女性^{*2}、名前は *Praenumerantia Elementaria Philanthropia*^{*3} [前払い・基本・博愛女史] という女性と結婚生活に入った。 — 諸君はこの名前はドイツ語で何ということか分からないだろう。 — 全くの地獄の箒という女で、私を追い獵の鹿のようにここ葦の中へ追いやったのだ。ケルステン達よ、私が我々の情けない状態をすっかり話したら、水中で物笑いになることだろう。要するに私の博愛女史は結婚生活前は生まれたての針鼠の棘のように柔らかかったのであるが、しかし結婚生活に入ると、落葉して、冬の木々のように烏や悪魔の巣が次々に見つかったのだ。彼女はいつも長いことかかって着用しては、また脱がざるを得なくなるのだ。 — 私か子供達に失敗が見つかる、まだ少しばかり叱り続けるもので、丁度嘔吐剤やすべてのものが出し尽くされているのに、吐き続けるようなものなのだ。 — 彼女が私に恵むものはわずかで、私が排膿孔を得たならば、私に新鮮な豆をあてがって、私は毎日それを中に入れなければならない仕儀となったことであろう。 — 要するに我々二人は反対を欲していて、愛の連結ボルトは引き抜かれていた。私が前の車輪で水中に飛び込んでしまったら、私の前払い女史は家の中にいて後の車輪を掴まえているのだ。 — お分かりであろう、女性方、それ故私は自棄になっているのだ。 —

— いずれにせよ、労咳殿^{*4} は私の喉を襲ったことだろう。 — よく見て見給え。ある男が学者であって、それ故フィヒテからのお御存じのように、人類の雇用された監督官、教官、傳育官として遍歴する者が、自分の妻の前で河に飛び込み、自分の監視職、家庭教師職を放棄するならば、何故諸姉の夫が、私とは学識の点では全く比較にならないとしても、諸姉がそのような、残念ながら外見上そう見える前払い女史、基本女史、博愛女史で

*1 ダーウィンの『ズーノミア』第一巻、529頁では、観客の前で反吐する者が紹介されている。パリでは胃の中に空気を呑み込んで、そうする別の者がいた。

*2 ウィーンではある施設は、古い封蠟から新たな封蠟を作り、その収穫で貧民は嫁入り支度をする。

*3 バーゼドーはかくも無趣味に前払いで出版される『基本的作品』[1774]の記念のために、ある娘の洗礼名を付けさせた。シュリヒテグロル[Schlichtegroll]の『ドイツ人故人履歴』[1790-93]第2分冊。111頁。

*4 そのように若干の地域で、肺結核は呼ばれる。

あるならば、そのような次第に至るのか推論できよう。――しかし」(突然彼は結論付けた、アルバーノと医師の姿を見たからである)「立ち去るがよかろう。私は溺死するつもりだ」。――

「いや、愛しいショッペよ」とアルバーノは言った、――ショッペは状況に赤面した。――「巫山戯ているのだな」と去って行く葬列の一行が言った。――「何という子供騙しだ」とスフェックスは、アルバーノの先ほどの性急さと解剖学的失望に怒りを後から覚えて尋ねた。そしてアルバーノの憤怒を語って腹いせとした。ショッペは高貴な若者が衷心より彼を愛していることを知った。彼は恥じて何も言おうとしなかったが、彼をすぐに(彼の黙した思考の中でも奇妙な表現によれば)自分の胸腔に招き入れ、その中に愛に満ちた荒々しい心臓全体がぶら下がっているのを彼に見せようと自分に誓った。

第四十九周

昇天祭、忠誠式、それに誕生日が祝われる青空の日は、すでにペスティッツの上に朝焼けの去った後、生じていた。――二頭の馬が、すでに四頭の馬の先駆けであった。低い御者席は最高の御者席の先駆けで、――田舎貴族はすでに快適でない調髪をして貰って宿の部屋の降り、黒雷鳥の交尾に最適な天候なのに出来ずに、気分を害していた。都市貴族はまだ髪粉をしないまま一日のことを、真の真面目さなしに話していた。――宮廷の測微計¹、つまり式部官は、すべての彼の給養係に取り巻かれていた。――宮廷の子午線通過計器²、つまり廷臣は、単に午後にのみ夫役のある彼らの半日の祭日の代わりに、平日勤務と言えるものを有して、すでに洗面台に立っていた。――忠誠式説教家のシェーペは、余りに度々説教していたので、自分の演説のほとんどすべてを信じていて、発表の間近さのためほとんど感動に至っていた。――夕方のためのドミノ[仮装用外衣]はユダヤ人の許以外ではもはや手に入らないようになっていた。――その時一人の男がドクトルの玄関の前で降りて、彼は皆の中で忠誠式のことを最も誠実に最も温かく考えていた。総裁のヴェールフリッツのことである。腕の抱擁の中にいたのは、一人の息子と一人の父親で、炎のような若者と炎のような男であった。アルバーノはヴェールフリッツにとってもはや昔のアルバーノではなく、更にいつもよりもっと温かいように思えた。彼は彼の呼ぶ「自分の女達」から誕生日のためのお祝いの手紙と贈り物を携えていた。彼自身は誕生日のことは余り気にならず、あるいは忘れていた。アルバーノはただ目覚めた後、この日を少しばかり祝っただけであった。これらの祭日はむしろ女性の本分にふさわしいもので、彼女達は時と共に愛しながら、与えながら、戯れるものである。

名目図書館司書はクロスター村という名前の村へ出掛けていた。この村では村長が家族と一緒に古くからの仕来りで、一族を従えた侯爵を模倣し、代理人として近隣諸圏の忠誠式を行わなければならないのであった。この忠誠式にはまだ抵抗はない、しかし他の忠誠

*1 測微計というのは望遠鏡の中に引かれた繊細な糸で出来ていて、これが最小の距離の測定に役立つのである。

*2 子午線通過計器あるいは南中計は、星がその運行の中で最高点に達する時を観測する。

式は自分の内臓に余りに致命的に堪えるとショッペは言っていた。 今日の一日で眩惑され、騎士階級への役職演説で先の方に位置づけられている総裁はショッペに嘔み付いていた。「官房と宮廷は」と彼は言った、「勿論以前から変わりません。よろしいかな、侯爵達は善意で、自ら吸い尽くされています。それでいて吸い尽くしているように見えるのです」。 — 「それは例えば」とショッペは答えた、「死体の吸血鬼が、吸っているように見えながら、単に自ら血を与えているようなものですな。これは私もまたそうしていて、私は支配者達に他人の罪の他に、他人の功績や勝利、犠牲をも全て与えております。この点で彼らはペリカンで、これらは子供達のために[別な]血を流すのですが、この血は遠くからは彼ら自身の血であるように見えるものです」。 —

皆が出掛けた。ショッペは田舎に、ヴェールフリッツは行列と共に教会へ行った。アルバーノは忠誠式広間の観客席へ行った。彼は侯爵の長裾の模様に縫い込まれなくなかった。襟飾りとしてすら嫌であった。直に豪華な喧噪が広間に戻って来た。 — 騎士階級、聖職者、諸都市が誓いの舞台に登った。 — 宮殿の中庭では立錫の余地もなく、一本の針は大地に落下できても、誰もそれを拾い上げることができなかった。誰もがバルコニーを見上げて、誓う以前に呪っていた。 — 侯爵は離れていず、 — 王座は、この学位を得た華麗な侯爵席は、すでに開けられていて、フライシュデルファーがその席を美しい神話学的紋章学的蛇腹飾りと外堡とで飾り付けていた。 —

伯爵の向かい側では女官達が花咲いていて、その中に一本の薔薇と一本の百合、つまりユリエンネとリアーネがいた。 — 人々が目を、霜の硬直した冬の一帯から青い、風の吹く天へと上げ、天が我らの春の夕べを見つめ、その夕べに軽い夏の雲が移り、虹が見えたとき、彼は宮廷の輝くような雪の明かりを越えて、春の愛しい優美女神の方を見つめた。その女神の周りには思い出が花のように掛かっている、今や彼女はかくも遠くに、かくも別々に、宮廷の重々しい飾りの中にかくも閉じ込められていた。ただ女友達が間近にいるせいで、彼女はけばけばしい現在とこっそりと融合し、和解していた。

さて立派な公の演説が始まった。最も長い演説を老大臣がして、最も短い演説をヴェールフリッツがした。侯爵は、溶け去ることなく、その十二月の顔に、温かい称賛の演説が触れて通り過ぎて行くがままにしていた。看過し難い無関心である。というのは大臣の称賛にしる、他の廷臣達の称賛にしる、後世の彼にとってまだ参考になるからである。ベーコンによれば、従者は主人のことを最も良く知っているが故に、従者の与える称賛ほど有効なものはないそうだからである。

それから上席秘書官のハイダーシャイトがルイーージの系図を読み上げた。そして空洞の系統樹をその乾いた木や最後の色褪せた緑の小枝に至るまで照らし出した。 — 目を伏せて、ユリエンネはこれを人々の万歳の中、聞いていて、アルバーノは、他の思いも去来しながらも、彼女の目を見ていて、君主も苛酷なものと聞き入っていたが、いつか、つまり速やかに、この逝去した人間がそのすべての系統の名前を祖廟に追って入るであろうときの葬儀の絵を思い描かないわけに行かなかった。彼は紋章が逆に彫られ、楯が逆に掛けられ、兜を砕き、棺の後から投げ入れられるシャベルの音を聞いた。...陰鬱な考えである。柔和な妹は、たった一人っきりになったら、きっと泣くことになるであろう。

最後に順番は、決して最初とはならない者達にも回ってきた。もっとも彼らはこのような儀式を心から尊重している唯一の者達である。ハイダーシャイトはバルコニーに出て、

渦巻く甲高い人々に、指先と親指を広げさせて、誓いを模して言わせた。このいつも眩惑される民は万歳の歓声を上げた。 — 眩惑された目にはより良い治世の確信と、未知の君主への愛が輝いていた。 — いずれにせよ群衆を見ると熱くなる伯爵は、ジョッペは陰鬱になるのであったが、同胞愛と行為への欲求で夢中になって燃え上がった。彼は侯爵達が全能の者としてその高みで支配するのを見、花と咲く風景と賢明に支配された国の快活な諸都市が広がっているのを見た。 — 彼は思い浮かべた、自分が侯爵であれば、王笏の先端から打ち出る花火によって、結合した百万の心の中で、一気に活動的に感動的に輝くことができよう、今はしがなく苦勞して数人の間近な心を点しているのであるが、と。

— 彼は自分の王座を朝日の中の一つの山として見た。その山は溶岩の代わりに船の浮かぶ奔流を国々の中へ注いでいて、嵐を砕き、その麓では収穫と祭りとがざわめくのである。 — 彼はいかに遠くまでかくも高い所から光を撒き散らすことができるようになるか、考えてみた。さながら月のようなもので、日中太陽の光を妨げることはないが、その遠くの明かりをその高みから夜に投げ寄越すのである。 — そしていかに彼は自由を、単に擁護する代わりに、創造し、教育しようと思うことか、自己支配者*1を形成するために、支配者たらんと欲しているか考えてみた。「しかし何故自分は支配者ではないのだろうか」と彼は悲しげに言った。

高貴な若者よ、君の騎士領には臣下がないのかね。 — しかし同様により小さめの領主は、公爵領を全く別様に支配しようと思うもので、より高位の侯爵は王国についてそう思い、至高の侯爵は宇宙の王制についてそう思うものである。

しかし丸一日の奇妙に落ち着かない日に荒々しい青年の眺望が彼の前であちこちに揺れた。自分が今日出会うことになる昔の霊の声が彼の中で暗い呼びかけ、「王冠を受けなさい」を繰り返した。 — ヴェールフリッツは夕方赤い顔をして炎のような忠誠式饗宴から戻って行った。アルバーノは彼から感動した別れを行った。さながら人生の引き潮、風ぎからの、子供らしい青春からの別れであった。というのは彼は今日人生の波に一層深く進むからである。ジョッペは戻って来た。そして彼をその覗き箱の穴の前に立たせて、クロスター村での代理忠誠式を滑稽な像に描いて見せようとした。しかしこれらの像はより高貴な像とは余りに対照的で、余り成功しなかった。

夜アルバーノは美しく真面目な性格仮面を着用した、テンペル騎士団騎士の仮面であった。 — 喜劇的仮面を着けるには彼の形姿とそれにほとんど彼の志操は偉大すぎた。 — この騎士団騎士の仮面は騎士団全体が殺害されたというこの経帷子で更に一層厳かなものとなった。彼は今一度タルタルスの戦慄的歩行と侯爵の心臓の埋葬場所とを、夜、道に迷う恐れから、思い描いて見た後、十時に高鳴る胸と共に出掛けた。この胸は空想の夜の仮面と友情と愛とすべての未来とで一致して刺激されていた。

第五十周

アルバーノは初めて仮装舞踏会というあべこべの人形芝居世界へ、踊る死者の世界へ踏

*1 Autarchen。というのは独裁君主とか単独支配者は自己支配者とは語源的に異なるからである。

み込むかのように進んで行った。黒い形姿達、 — 切れ目のある仮面、 — その奥で夜の中からのように覗いている他人の目、この目はかの棺の中の塵となったサルタンの許でただ一つ存命の如く残っているもので、 — すべての身分の混合と猿真似、 — 鳴り響く踊りの退出と槍の輪投げ、それに仮面の許での彼自身の隠居、こうしたことのため、彼は彼のシェークスピア的気分と共に奇術や影絵、変身で一杯の魔法の島、霊の島に移された[『テンペスト』]。いやこれは断頭台だ、おまえのリアーネの兄がその若い命を喪服のように引き裂いた断頭台だと彼はまず考えた。そして不安げに辺りを見回した、あたかもロケロールがまた自殺しかねないと恐れているかのようであった。

仮面の中で彼はロケロールと推測できそうな仮面を見いだせなかった。 — よく見られる配役のこの無内容の仲間、つまり飛脚とか肉屋、モール人、祖先達等々、これらの中にアルバーノの愛しい友が隠れているはずはなかった。孤独に、きよろきよろしながら彼はアングレーズの列の背後をあちこち歩いた。向かい側にレースの仮面の輪状の暗闇の中で光っている十の[五人の]目以上の目が、 — というのは女達は率直さ故に仮面を好まず、好んで自らを示すからで、 — 力強くしなやかな対格の形姿を追っていた。この形姿は大胆な兜と羽根飾りを着けて、十字架のある白い外套と胸の甲の輝きとで英雄時代の一人の騎士を表しているように見えた。

最後に一人の仮面を着けたレディーが、仮面を着けていないレディー達の間でしゃべっていたが、大股の足取りで彼に向かって来て、大胆に踊りのために彼の手を握った。彼はこの要請の大胆さと返事の選択に極めて当惑した。まさに勇敢さは慇懃さと好んで娶わされているもので、ダマスコ刃が硬度の他になお永遠の香り高い匂いを有するようなものである。 — しかしこのレディーは単に彼の名前を手 — v.C.ですかと書いた。そして然りという答えの後、この魅力的な女性は小声で言った。「もうお忘れですか。教練教師のフォン・ファルテルレを」。アルバーノはその配役への嫌悪にもかかわらず、青春の同志を見つけて、真の喜びを示した。彼は大佐[ここ以外は大尉]ロケロールの仮面はどれか尋ねた。ファルテルレは、彼はまだ来ていないと答えた。

さて、 — 飛脚とか肉屋とかファルテルレ等々はこの仮装舞踏会の春のユキノハナにすぎなかったもので、 — 早速より良い花々、堇や勿忘草、桜草が登場し、入って来た。このような勿忘草として私は入場してくる、前と後ろの僂儂の、集光レンズのように凸面の男を考えている。この男は背面の出っ張りを開けては、瘤から菓子振りまき、前の出っ張りを開けてはソーセージを生み出していた。しかしハーフェンレフターは、この発明はすでにかつてウィーンの仮装舞踏会で見られたと書いている。それからドイツ、 — カルタの一行がやって来た。彼らは自ら混じり合い、賭をし、めくった。素敵な無神論の象徴で、無神論を汚すことなく、調子よく表現している象徴である。 — フォン・アウグスティ氏も登場した。しかし簡素な服とドミノを着ていた。彼は(伯爵には合点が行かなかったが)すぐに踊り手の北極星となってダンス教室の支配的なデカルトの渦となった[『哲学原理』Ⅲ.19]。

喜びの何という惨めな黒い軍用パンと施しのパンとでこれらの人々は暮らしていることか、 — とアルバーノは考えた。彼には一日中彼の夢想が、つまりジュピターのこの鳩[Odyssee, XII, 62]が神々のパンを運んでくるのであった。 — 彼らの空想と言葉は何と不毛で色褪せていることか、下界の暗い氷河の割れ目の中のまことの人生だ(と更に彼は考

えた)。というのは彼は誰もが自分同様に緊張して燃えるように話し、感じなければならぬと思っていたからである。

そのときびっこの男が大きなガラス箱を腹の上に抱えてやって来た。 — 勿論容易に図書館司書が見てとれた。彼は — 余りに遅くドミノを求めたためか、あるいは支払いたくなかったためか、 — 喪の外套貸衣装屋から何か黒服を調達していて、肩から脛骨までおぞましい仮面が嵌められていて、その仮面を色々に指さして、大抵対照的仮面で活動している人々に、例えば長い鼻の仮面には短い鼻の仮面を申し出ている。彼は急テンポのアングレーズの開始を待っていた。その譜面は丁度彼の箱の玩具の円筒に張られていた。それから彼も始めた。彼はその中に立派な、ベステルマイヤーによって鉋をかけられた人形の仮装舞踏会を有していて、今やその小さな仮面どもを大きな仮面どもと一緒に急テンポで踊らせた。彼の目指すのは両仮装舞踏会の比較解剖で、その平行論は陰鬱であった。その際彼は更に添え物で飾っていた。 — 小さな啞達が箱の中でその小鐘を振っていた。

— かなり生長した子供が生命のない小人形の揺り籠を揺すって、これでその戯けた子供は更に遊んでいた。ある機械工が言語機械に取りかかっている、その機械で単なる機械仕掛けで人形の生命をどの程度模倣できるか世間に示そうとしていた。 — 生きた白い鼠^{*1}が、小さな鎖に繋がれて跳び、それを千切ったならばクラブの多くの者を倒しかねないところであった。 — 生きたまま閉じ込められた椋鳥が、小さな本物の最初のギリシアの喜劇^{*2}、悪徳の学校^{*3}というわけで、ダンスの一行に舌の一撃を全く自由にお見舞いして、何も遠慮していなかった。 — 鏡の壁が箱の生きた場面を見間違ふほどに模して、誰もが像を本物の人形と思った。 — —

アルバーノに対してこの喜劇的悲劇的短剣の刃は、十分垂直に切りつけてきた。いずれにせよ、大きな舞踏会の跳ねる蠟人形陳列室は人形の孤独を倍加して、四つの顔で二つの自我を分離するように見えたからである。しかしショッペは更に進んだ。

ガラスの扉の中には、ファラオ[賭博トランプ]台もあって、その横では一人の小男が、仮装した賭博元締めを黒い紙に切り取ったものであるが、ドイツ騎士団騎士に似ていた。この描写を彼は賭博場に運んで行った。 — そこでは元締めの仮面が — 確かなことにセフィシオであろうが、 — 彼のことを耳にし、見るに違いなかった。元締めは彼を何度か問いただすように見つめた。同じことを、瀕死の者の仮面を付けた黒装束の仮装の者が行った。この仮面はヒポクラテス的な顔^{*4}を表現していた。アルバーノはその仮面の方を熱く燃えるように見た。ロケロールであるかもしれないと思われたからで、ロケロールの背丈と松明の眼差しをしていた。青白い仮面は沢山負けて、絶えず損失を倍加させていた。その際その仮面は羽茎から法外なシャンパンを飲んで、講師がこれに加わった。ショッペは寄って来る人々の目の前で更に戯れていた。青白い仮面はびくともせず厳しく伯爵

*1 彼はこれで「破壊についての私の幻視」の中のその恐るべき白い形姿を暗示しているのであろうか。[『カツェンベルガーの湯治旅行』1809年所収、初出1796年]。

*2(訳注) アリストファネスやクラティノスによる古代アテネの喜劇は公の生活の人物を諷刺した。

*3(訳注) Sheridan の The School of Scandal、1777年、を当てこすっている。

*4 瀕死の者の形姿はそう呼ばれる。

を見つめていた。ショッペはブヴェロの前で自身の仮面を取り去った。 — しかしその下には下敷きの仮面があった。 — 彼はこれを引き抜いた。 — 下敷きの仮面の下敷きの仮面が現れた。 — 五乗となるまで彼はこれを続けた。 — とうとう彼自身の瘤状の顔が出現した、しかし金箔が張られていた。そしてブヴェロの対してほとんど恐ろしげに輝き、微笑みながら歪めていた。

青白い仮面はたじろいだように見え、大股で舞踏会場へ急いで去った。荒々しく極めて荒い踊りの中へ身を投じた。このこともアルバーノの推測を肯っていたし、大きな彼には王冠のように見える反抗的帽子もそうであった。彼は男性の服装では専ら、毛皮、外套、帽子を評価していたからである。

次第に幾つかの指が彼の手に v.C.の文字を書いて、彼は構わず頷いた。時は彼を幾重ものドラマで取り巻き、いつも彼は劇場のカーテンの間に立っていた。落ち着かない頭と心とで彼が弓張窓の中に入って、直に自分の夜歩きのために月光が見られるか見ようとしたとき、市場の上を通過して松明の間を重々しい葬儀の馬車が通るのを見た。騎士領主をその祖廟へ運ぶところだった。遠慮なく夜警人が忍び進む死者に丑三つ時と我々にとって大事な誕生の時の始まりを告げた。いかに苛酷で、堅固で、解きがたい死が、その氷河の風と共にかくも鋭く人生の温かい場面の中を進み、死が吹き払うすべてを死の背後で硬直させ、雪のように白くさせるか彼の実感した心はそう彼に語らざるを得なかったのではないか。

— 彼は冷たくなった若い妹のことを考えざるを得なかったのではないか。タルタルスで今やその声が彼を待っていたのだ。 — そしてショッペがその人形の茶番と共に彼の許にやって来て、アルバーノが彼に路地を示し、ショッペがこう言ったとき、「結構、友のハイン[死神]はその狙撃馬車に座っていて、静かにこちらを覗いている。この友はあたかもこう言っているようだ、結構、踊り続け給え、私は戻って来て、君達をも即刻その場で連れて行こう、と」。 — 息苦しい面頬の下で、いかに彼は窮屈な思いがしたに違いなかったことか。 — この瞬間青白い仮面が他人と共に窓際にやって来た。 — 彼は火照る顔を冷却のために開けた。 — 素早くワインを飲んだことと、それ以上に彼の空想のせいで、世界の燃え上がるような表面が見えた。 — その仮面は彼を間近で得体の知れない暗い目の輝きで見つめた。彼は仕舞に耐えられなくなった。その輝きは憎しみによってか、愛によってか、どちらで点火されたものか分からなかったからである。丁度太陽の黒点が窪みに似て見えたり、山脈に似て見えたりするようなものであった。

十一時が過ぎた。彼は突然熱い視線と、騒がしい群れを離れて、胸のない心臓の許へ出掛けた。

第五十一周

彼が門の所で彼の剣を待っていたとき、新しい仮面のグループが（大方は生命のないものの代弁者で、例えば靴であったり、鬘台等であったりした）町にやって来た。彼らは不思議そうに見知らぬ白い背の高い騎士を覗いていた。彼は剣を受け取ったが、しかし従者は受けなかった。ちなみに彼の性格はどんな危険の際でも、離れた陰気なカタコンベの通路の訪問とか、この訪問を他人があらかじめ知っていて、危ない目に遭いかねない時でも、今の選択しかあり得ないのであった。いや彼は父の前で恥ずかしい思いをするよりは

殺害される方を好んだことであろう。

偉大な夜がその星々からの聖なる輝きと共に君の前に構えていたとき、何と高く君の精神は高揚したことか。上方の天へ轟く稲光に似ていた。――天の下には何の不安もない、ただ大地の下にあるのみである。広い影がエリュシオンへの道に行く彼に掛かってきた。日曜日には露の雫と蝶が彩りを添えていたのであった。遠方では大地から炎のぎざぎざが育ち進んで行った。低い通りに行く松明をかざした葬儀の馬車であった。宮殿の廃墟を通じてタルタルスに通ずる分かれ道に彼が来たとき、彼は魔法の森の方を見回した。その螺旋状の橋の上で人生と喜びの歌に彼は出会ったのであった。すべてがその中では黙して、ただ一羽の長い灰色の猛鳥が（多分紙の風であろうが）その上であちこち回っていた。

彼は古い宮殿を通過して、鋸で切り落とされた木の庭園へ、さながら木の墓地へ来た。それから木の皮を剥がれた五月柱で一杯の色褪せた森へ来た。五月柱は皆、散ったりボンと青白い旗とでエリュシオンと対照的に見えた。――多くの喜びの日々の干涸らびた行楽の杜であった。幾つかの風車が長い影の腕と共にその間にあって、絶えず掴みかかり、消え失せようとしていた。

性急にアルバーノは覆いで影となった階段を駆け下りて、古い戦場にやって来た、――黒い壁の暗い砂漠で、間にただ白い石膏の頭部があって、地面から立っていて、沈んで行くか、蘇るかのように思われた。――盲門と盲窓とで一杯の一つの塔が中央にあって、孤独な時計がその中で独り言を語っていて、あちこち進む鉄の棒で、時の絶えず流れ去る波を分割しようとしていた。――時計は十一時四十五分を告げた。そして森の奥でその反響が寝言のようにつぶやいて、今一度小声で消え去って行く人間達に飛び去る時間を語った。道は永遠の円を描いて、門もなく墓地の壁の周りを走っていた。アルバーノは、情報によれば、足下がざわめき揺れるある箇所をその壁の許で探さなければならないのであった。

とうとう彼は自分と一緒に沈む石に突き当たり、その時壁の一断面が倒れた。木の塊で密な森が、それらの幹は茂みとなって絡み合っていて、月の光をすべて遮断していた。彼が門の下で見回すと、影の階段の上に青白い頭部が戦場の胸像のように掛かっていて、肉体なしに沈んで行った。出血した死人達が目覚めて、彼の後を追いかけてくるように見えた。――恐怖の冷たい硝酸銀が彼の心を縮ませた。彼は立ち止まっていた。――死者の頭部は最後の段の上に動かずに浮いていた。

突然彼の心は再び温かい血を吸い込み、剣を取りだして不格好な森の方を向いた。自分の命が武装した死の傍らを通ることになるからであった。緑なす諸塔の暗闇の中、彼は地下の川のざわめきと大地の揺れに従って進んだ。不幸なことに彼がまた見回すと、死者の頭部はまだ彼の背後に立っていた、しかし空中に高く、ある巨人の胴体の上にあった。――この上ない戦慄がずっと目を押し潰して、一つの恐怖の像を彼に描かせた。彼は二度反響する森の中で叫んだ。「誰だ」。しかし今や突然二番目の頭部が最初の頭部の傍らに立っているかのように見えたとき、彼の手は死者の世界の門の氷のように冷たい錠に凍えてくっつき、その手を離して出血した。

彼は逃げ、ますます密な小枝の中を通過してようやく開けた庭園に転がり出て、月の光を浴びた。――ここで、いやここで、聖なる不滅の天と北方の豊かな星々が再び微光を放つのを見たとき、つまり決して上昇下降のない北極星、とかげ座[フリードリヒの榮譽座]、

大熊座、竜座、小熊座、カシオペア座を、永遠の精霊の明るく目配せする目で見ると、
ように穏やかに彼を見つめている星々を見たとき、精神は自らに尋ねた。「誰が私に手を
かけよう。私は精霊達の下の一つの精神だ」。そして不死の勇気がまた温かい胸の中で鼓動
した。 —

しかし何と奇妙な庭園か。^{まんねんろう}迷迭香や^{いちい}ヘンルーダ[芸香]、水松で一杯の大小の花のない苗
床が庭園を細切れにしていた。 — 円形の枝垂白樺が葬列のように垂れて黙した場所を
取り囲んでいた。庭園の下では埋葬された小川がつぶやいていて、 — 中央には白い祭
壇があり、その傍らに一人の人間が横たわっていた。

アルバーノはその平服と、眠る者が休む台としている職人の荷物で気丈になって、ただ
その男に接近して行き、祭壇の黄金の銘を読んだ。「私の最後の生贄を受け取り給え、全
能の方よ」。 — 侯爵の心臓がここ祭壇の中で灰となる筈であった。

こうした強張った場面の後、彼の魂はここで人間的言葉を見だし、人間的眠りと神へ
の思いを見だして涙に至るほど和らいでいた。しかし彼が感動して眠っている男を見つ
めていたとき、突然彼の耳に、イーゾラ・ベツラ[島]で聞いた妹の声が小声でささやいた。
「リンダ・デ・ロメイロを与えましょう」。「何ということだ」と彼は叫んで、周りを探
した。 — 彼の周りには何もなかった。彼は祭壇の端に立った。 — 「リンダ・デ・
ロメイロを与えましょう」と再び言った。 — 浮いている死者の頭部が彼の横で語って
いるという恐ろしい考えに彼は襲われた。 — 彼は目覚めないぐっすり眠っている男を
引っ張り、 — そしてその声が三度目に語ったとき、もっと強引に引っ張って叫んだ。

「どうした」 — (と寝惚けた男は言った)、「ちょっと。 — 何の用だ、何の御
用ですか」、そして不承不承あくびをしながら起きた。しかしむき出しの剣を見て再び跪
いて言った。「御慈悲を、何でも差し上げます」。 —

「セサラ」と森の中で叫び声がした。「セサラ、どこにいるのだ」、そして彼は自身の
声を聞いた。しかしまた大胆に返事した。「祭壇のところだ」。 — 手に白い仮面を持
って、黒い形姿が飛び出て来て、月光の中、剣を持ったアルバーノの前で立ち止まった。
アルバーノはようやく自分が長いこと求めていたリアーネの兄だと分かった。 — 彼は
剣を投げ棄て、彼に向かって行った。 — ロケロルは黙して、青白く、顔に崇高な静け
さを湛えて彼の前に立っていた。 — アルバーノは間近で立ち止まって感動して言った。
「私を探していたのかい、カール」。 — ロケロルは黙って頷いた。そして目に涙をた
めて、腕を広げた。すると浄福な人間はすべての愛の炎と涙と共に長いこと愛していた者
の許に駆け寄って、絶えず言った。「やっと会えた、やっと会えた」。そしてますます激
しく彼は彼を自分の未来の支柱のように抱えて、涙を流した。今や閉じ込められていた愛
が哀れな心の長い年月と多くの抑制された泉を一気に放出していいことになったからであ
る。 — ロケロルはただ震えながら片方の腕でこっそりと彼を抱き寄せて言った。しか
し急いてはいなかった。「私は瀕死の者だ。これが私の顔だ」(彼は黄色の死者の仮面を
上に掲げた)、「しかし私にはアルバーノがいる。私はアルバーノの許で死のう」。

彼らは荒々しく抱擁した。 — 人生の精髓、愛が創造的に彼らに浸透した。 — 流
れて行く地下の川の上の土壌は一層激しく揺れた。 — 星空の天は震える星々の白い魔
法の香煙と共に魔術的熾きの周りを漂った。

君達、幸福な者達よ。 —

第五十二周

何人かの人間は結ばれて生まれてくる。彼らの最初の出会いは単に二番目の出会いに過ぎない。彼らはそれから余りに長く別れていた者達として未来を互いに持参するだけでなく、過去も持参する。 — 過去をこの幸せな者達は互いに性急に要求した。ロケロルは、ここまでどのようにして来たかというアルバーノの問いに熱く答えた。「自分は彼の後を夕方ずっと追いかけていた。 — 窓際の彼を、壮麗な葬列が通り過ぎる間、憧れで細る思いで眺めていて、ほとんど抱擁しかねない状態であった。 — 自分はすでに先ほど、彼のすぐ側に立っていた。『誰だ』という彼の問いにすぐ仮面を外したのだ」と。 —

今やまたアルバーノの垂れた腕が幽霊の恐怖の薄い影絵で強張った。このとき二頭の巨人は単に間近の形姿の距離による光学的拡大の錯覚で大きくなったにすぎない。そして死者の頭部は階段ではその胴体が見えなかったが、暗がりの覆いのせい、黒い服のせいであったのだと気付いたからである。祭壇での苛酷な霊の場面でさえ、生き生きした愛の豊かな収穫で、今やより制御できるものに見えた。

ロケロルは彼に、どんな苦悩、あるいは喜びのせいで、真夜中こちらのヘルンフト派の墓地へ来ることになったのか、どこへ剣を持った人間を送ったのか尋ねた。アルバーノはここにヘルンフト派が休らっているとは知らなかったし、同様に多分使用を恐れてなされた剣の窃盗のことも気付いていなかった。彼は終えた。「私の亡き妹が祭壇で私と語ろうとした。彼女が話したのだ」と。しかしそれ以上その話題に触れることを恐れた。すると突然ロケロルの顔色が変わった。 — 彼は彼をじっと見つめて、宣誓と説明とを求めた。 — こう言いながら彼は空中を眺めた、あたかも空中から視線で顔をしかめたいかのようで、それでもアルバーノを見つめて、単調に言った。「亡き妹、亡き妹、また話し給え」。 — しかしただ死者の川が彼らの下で語り続けただけで、更に語るものはなかった。しかし彼は祭壇の前で跪いて、大胆に、しかし唇を震わせて言った。「霊の門よ、開くがいい。そして汝の透明な世界を見せよ、汝ら透明な者達を私は恐れない。汝らが出現すれば、私も汝らの一人となって、一緒に行き、出現しよう」。 — 「友よ、止め給え」とアルバーノは頼んだ、神への恐れからではなく、愛からであった。というのは偶然とか、矢のように飛び過ぎる夜鳥のせいで、彼らは恐怖して殺されかねなかったからである。 — この恐怖も彼らとほど遠からぬ所に立っていた。というのは枝垂白樺の照らし出された側に一人の威厳のある白い老いた形姿が歩み出て来たからである。しかしロケロルが、ワインと空想で正気を失い、瀕死の仮面を空中に投げて、心臓の墓に対してこう言ったとき、「この顔を受けるがいい、老人よ、汝が顔を有しないのであれば、この仮面を付けて私を見つめよ」、そのときアルバーノは彼を引き留めた。 — 白い形姿は頭を垂れて、両手を組み、小枝の中に戻って行った。 — 戦場の丸い塔が時を告げ、夢想的な一帯がその時を口ごもって模した。

「私の温かい胸元に来給え、激しい人よ。 — まさに私の誕生日、私の生誕の時刻に君を得ることが許されたことは素敵だ」。 — この声で突然絶えず変化するこの人間は溶けて、濡れた喜びの目をして、彼を抱擁して言った。「 — 我々が死ぬ時まで一緒だ。不動心の君よ、私を見つめないでおくれ、私はとても動揺して、屈折して見えるから。

「— 人生の波の中で人間は屈折し、旋回する、水中の棒が震えるようなものだ。しかし自我は棒のようにしっかり立っている。君の後を付いて、タルタルスの別の地へ行くことにしよう。しかし話も続けておくれ」。

この話を打ち明けることは内面の至聖なものを、あるいは更に棺を日中の光にさらすようなものであった。しかし君達は、アルバーノが一分間ためらったと思うだろうか。それとも君達自身ならばどうか。— 我々は皆、我々が知っていて見せる以上に、より良き友、より打ち明けた、より温かい友である。渴した愛が永遠に要求するような正しい精神が、君達に出会いさえすれば、純粹に、偉大に、明るく、優しく、温かく出会いさえすれば、君達はその精神にすべてを与え、法外にその精神を愛することだろう。その精神は間違いないのであるから。アルバーノはこの未知の男に自分のすべての心が同じ音色で答える最初の人間を、自分の内気な感情が逃げ去ることのない最初の目を、そして一つの魂を見いだしていた。その魂の最初の涙の前では彼のすべての未来の人生から花々が、熱い国々の乾いた砂漠から雨期のときのように咲き出すのであった。— それ故愛は彼の強力な精神にただ一つの海の同じような広大な動きを与えるにすぎなかった、他方もっと年長のもっと長い修練の友は滝のある奔流であった。

カールは彼を所謂カタコンベへ案内した。イーゾラ・ベッラ[島]での幽霊の話に耳を傾けながら、しかし先の出来事で草臥れて、恐怖は失われていた。開いたまま朽ちた縦坑で一杯の荒涼たる炭化した谷が灰色の月の光を浴びていた。森から彼らの足下で死者の川が忍び出て来ていて、石造りの階段から跳ねながらカタコンベの中へ注いでいた。両人はその隣の階段を川に従って行った。入口には額飾りとして古い時計の文字盤があったが、かつて雷がその文字盤の一時の箇所を打ち落としていた。「一時か」（とアルバーノは言った）「不思議だ。丁度我らの次の時間ではないか」。

何と冒険的にカタコンベは続いていたことか。長い死者の川は暗がりの中、深くざわめいて行き、時折月光が縦坑の穴から注いでいる銀色の蒸気の下で閃光を発していた。—

不動の動物、馬や犬や鳥が暗い岸辺に水を飲みながら立っていた、— つまりその剥製の外皮で、— わずかな名前と部分の細い、時間によって磨かれた墓石が舗石で、— 或るもっと明るい壁龕ではここに一人の尼僧が閉じ込められていたことが読み取れた。— 別な壁龕では金箔の肋骨と太腿の生き埋めになった鋳夫の鋳化した骸骨が立っていた。— あちこちに銃殺された人間の[標的用]黒い紙の心臓と哀れな罪人達の花束が集められていて、赦免囚に触れさせて死んだことにする鞭や水中での鱗の火口の付いたガラス製の胸像、洗礼の子供のチョッキやその他の子供服、玩具、侏儒の骸骨があった。

——

ロケロルの釈明の言葉で、ロケロルの人生の道はいつも祖廟に落ち込み、墓塚に登るものであったが、その人生がますます透明に、けばけばしく打ち出されたとき、セサラは彼の流儀で突然、頭を振り、胸を突き出して、砂を踏み散らし、呪いながら（驚いたときや大いに感動したとき、よくそうしたのであるが）次のような言葉を発した。「何てことだ。

— 君は私や自分の胸を砕いてしまう。それではいけない。一緒になったではないか。私は君の温かい生きた手を握っている。我らの中では不死の炎が燃えていないかい。これらの骸骨は燃え尽きた石炭だ。それ以上のものではない。骸骨を砕いた天上の炎はまた別の燃える材木に移って、燃え続けるのだ。— いや」（と彼はほっとしたように言い添

えて、小川に歩み出て、縦坑の開口部から豊かな月を見上げた。月は天から降り注いでいて、彼の大きな目は一杯に光り輝いた。「いや、一つの天と一つの不死が存在する。――我々は人生の暗い洞穴にいるわけではない。――我々は御身同様、輝かしい世界同様、エーテルの中を進むのだ」。

「君は立派な奴だ」（とカールは言った、彼の魂は色々な魂から成り立っていた）、「君をもっと楽しい所に連れて行こう」。――彼らが八歩進んだか進まないうちに、彼らの背後が暗くなり、上方に投げ出された剣が垂直に切っ先を水中の砂の中に突き刺した。「上には何という悪魔野郎がいるのだ」と激昂したロケロールが叫んだ。しかしアルバーノは自分の間近で鋭い腕を打ち合わせた臨終の鉄の乙女に対して穏やかになっていた。彼らは一層温かく抱擁して、静かに不安げに小声の物音と墓塚の方に向かって行った。彼らは墓塚に腰を降ろした。墓塚は、苦悩のカタコンベとは垂直な角を形成している通路と向かい合わせになっていて、その通路は緑の苔が連なっていて、その長さは朽ちた木材の点在する火花でそれと知れた。通路は開けられた門へと消失していて、――その先にはエリュシオンの眺望があった。エリュシオンに関しては、ただ若干の白楊の白い梢が分かるだけであった。遠方では天の真夜中の春の赤色が花咲いていて、二つの星がその上で煌めいていた。しかし門には格子があつて、手に風奏琴を持った一つの骸骨が見張っていた。その骸骨は今一陣の風が洞窟に吹き寄せたとき、弱い短調の音色に取りかかっているように見えた。

「ここで語り給え」（とカールは素敵な所で、アルバーノの剣の殺戮の投げ込みで一層好奇心を募らせて言った）。「今日のことをすべて」。アルバーノは実直に妹の声の言葉、「リンド・デ・ロメイロを与えましょう」を彼に報告した。彼は自分の内面のざわめきの中で、カールが実際まさにこの女性のために少年時、死のうとした逸話を考えていなかった。「ロメイロ嬢か」（とロケロールは激した）、「落ち着け、――この女か、――運命という戯れの死刑執行人よ。何故彼女なのか、それに今日なのか。アルバーノよ、私はこの女のために幼い時、死のうとしたのだ」（と彼は泣きながら続けて、彼の胸元に沈んだ）、「その後私の心は順調でなくなった。彼女を失ったのだから。――彼女を受け入れるがいい、君は純な精神だから。――海上で君の前に出現した立派な形姿、そのような外見を彼女はしている。あるいは今もっと綺麗かもしれない。――アルバーノよ」。――この高貴な人間は展開と運命とにびっくりして言った。「いや、いや、カールよ、君は全体に関して全く思い違いをしている」。

突然、すべての星座が鳴り響き、メロディー的精霊のコーラスが目に見えず、門から侵入して来るように思われた。アルバーノは当惑した。「何でもない、放っておけ」（とカールは言った）「骸骨ではない。敬虔な神父がフルートの谷を通っているのだ。そして自分が祈るので、今フルートの音を引き出しているのだ。――しかし私が思い違いをしているとはどういう訳だ」。――「どういう訳だって」とアルバーノは繰り返して、日曜日の朝を全能的に反復しているこの余韻の魔法圏の中で、考えられず、話せられずにいた。星々の許で白楊があちこち揺れて、天の周りには薔薇色の雲が重なっていて、エリュシオン全体がその中を漂う音色と共に、楽園で流された涙と共に、そして永遠にその中に留まる聖なる形姿と共に率直に過ぎ去って行かなかつたらうか。――彼は彼女の兄の手を今や固く握った。愛と友情、人生軌道の楕円の中のこの二つの焦点にかくも間近に

彼は接していた。 — 性急に彼はこう言って兄を抱き締めた。「神かけて、君の名付けた女性は私には何の関係もない、 — そんな関係にはならない」。

「しかしアルバーノよ、君は彼女を知らないのだろうか」とカールは大いに厳しすぎるほどに問いただしながら言った。というのは彼の傍らの高貴な若者は余りに内気で、余りに堅固で、恋人の縁者に、 — 他人ならはるかにもっと容易であったろうが、 — 自分の願望の神聖なものを打ち明けることができなかつたからである。「私を苦しめないでおくれ」（と彼は敏感になって答えた。しかしより穏やかに付け加えた）。「まずはそのことを信じて欲しい。我が兄弟よ」。 — カールは彼同様めつたに折れることがなく、それでも詰問の調子を呑み込みながら心から愛して、こう言った。「誓って、そうすることにしよう。それも喜んで。 — このような心を得なくても済ませられる心というのは、まことに愛されており、神々しく幸せな心に違いない」。 — アルバーノはそのような心を知っているか。 — ただ黙って彼は薔薇で一杯の炎の頬をリアーネの兄に寄せかけた。恥じらって追求を避けていた。ただフルートの谷の消失して行く呼び声が溜め息のように彼の胸に集まって来て、日曜日の朝がどのようにに終わり、リアーネがどのようにに去り、彼がどのようにに彼女の後を、祭壇から濡れた暗い眼差しで追ったか、彼に度々思い出させたとき、彼の目は崩れた。心が崩れたわけではなかつたが、そして激しく、しかし黙って、彼の最初の友人の許で泣いた。 —

それから彼らは黙した魂と共に家に帰り、思案げに未来の長い消失して行く道を覗き込んだ。そして彼らは別れた時、自分達が本当に心から愛していること、つまりまことに痛々しく愛していることを感じたことであろう。 —

その翌朝、敬虔な神父はある震撼で臥せっていた。この震撼は悲しいというよりはむしろ浄福なものであった。というのは彼はこう言ったからである。自分は夜、自分の友、亡き侯爵がタルタルスを白い服を着て歩いているのを見た、と。 —

(第一巻の終わり)

(第二卷)

第十ヨベル期

ロケロルの悪魔の弁護士[カトリックの列聖で反対論を述べる者] ー 友情の祭日

第五十三周

子供時代に対してではなく、青年時代に対して、我々が青年時代から罪もなく、子供時代からのように抜け出すのであれば、我々は最も憧れて振り返ることだろう。青年時代は我々の人生の祭日で、その日にはすべての路地が響きや飾りに満ちて、すべての家の周りに黄金の壁紙が掛かり、実在や芸術、徳操が我々をまだ穏やかな女神として愛撫しながら誘う。これらの女神は晩年には我々を厳しい男神として命令して呼びつけるものである。

ー この時代には友情はまだ快活な開放されたギリシアの神殿に住んでいて、後年のように狭いゴシック式の礼拝堂には住んでいない。

立派に豊かに今やアルバーノの周りでは人生が微光を発し、島々や船で覆われた。彼は友情と青春で一杯の胸全体を有して、イーゾラ・ベッラ[島]ではある彫像の許、つまり父親の許で跳ね返った愛の衝動を、今や束縛もなく楽しげに一人の人間に対し、青春の夢が描くような自分には完全なものに見える一人の人間に対し、噴出させた。彼は一日もカールを離せなかった。ー カールは彼の魂を覆い、彼の生活全体を(ただリアーネの名前だけは一層深く彼の心の中へ沈んで行ったが)、覆った。ー 古代人の許の友情のすべての手本を彼は模倣して更新しようと思ひ、愛する男のためにすべてをなし、受難しようと思った。ー 彼の実存は今や二重のコーラスとなり、すべての幸運を二つの心で飲み、彼の生活を純粋なエーテルの中の二重の天が閉じ込めた。

翌日彼が友となった堅固な男の姿に接したとき、その姿は幽霊界の夜の活劇作品からの残滓であって、夜の消えた星々から出て来た一つの青白い月のようであった。彼がその姿を、炎のエトナ火山の煙柱が日中には灰色に昇るように、はなはだ禿げ上がって、青白いと思ったとき、ー さながら以前の自殺者が目の前に立っているように見えた。より自由に、しかしそれだけにより温かく彼はこの孤独な者に自分の手を差し出した。この者は人生を越えた後、ただわずかに自分の墓場に、遠方の島に住むが如く住んでいた。他の者達はまさにそれ故自分の手を引っ込めた。美しく堅固な人生を引き裂いた自殺未遂者はその死の時から、一人の未知の不気味な精神として戻って来ていて、この精神を我々はもはや信頼できない。この精神は束縛されずに、どの瞬間にも投げ出した賭けをまた人間形姿で行いかねないからである。

それ故アルバーノは大尉の混沌とした人生の中に、ただ荷造りをして出て行くある本性の無秩序のみを見ることになった。彼が初めてロケロルの夏用の部屋に入ったとき、勿論彼はそこに従者の更衣室、劇場の楽屋、将校のテントを同時に眼前にすることになった。食卓には本の混乱した諸民族が、戦場の如くに置かれていたし、シラーの劇作品の上には仮面舞踏会のヒポクラテスの顔があり、宮中暦の上にはピストルがあった。ー 本棚には白墨からなる球状石鹸の隣に剣帯があり、チョコレートのかき混ぜ器や空の燭台、ポマードの容器、[パイプに火を付ける]紙繕り、濡れたハンカチ、干涸らびたカップがあり、止

まった大型時計のガラスのケース、洗面台や書き物机がむき出しにあって、この書き物机の上には驚いたことに吸い取り紙やインク用撒き砂は見られないのである。 — 髪粉用外套が長椅子にもたれかかっている、長いネッカチーフが暖炉に乗っていた。壁の鹿の角は二つの羽根飾り帽子を左右の耳の上に生やしていた。 — 手紙や名刺は蝶のように窓のカーテンに差し込まれていた。私はここで小紙片の手紙を書けないであろうし、ましてや一周を書くことはできないであろう。

しかし陽光のように明るく自由に舞う時代があって、そのときには旅行準備のできた落ち着きのなさ、テントの撤去、遊牧民の自由を告げる一切を喜んで眺め、感謝して旅行馬車で暮らし、その中で執筆し、眠るのではないだろうか。そしてこれらの年月にはまさにこのような学生部屋を天才の精神的学生財産と見なし、すべての混沌を生命に満ちた滴虫類の混沌と見なすのではないだろうか。人々は私の主人公にこのような錯誤の時代を許し給え。しかし彼の本性の中には何か高貴なものがあって、称賛者から模倣者への移行は押し止められた。

過ぎ去った余寒の冬の後、突然緑の大地の表面が[草や木の]花々へと高く舞い上がるように、友情と空想の温かい大気の中で突然アルバーノの本性が過剰に花と咲き、緑にあふれた。カールは心のすべての状態を有し、知っていた。彼はその状態を、戯れながら、自他の中に創り上げ、彼は第二のザーネラント[スイスにある]と言えて、そこにフランスから、ノヴァヤ・ゼムリヤ[カラ島]に至るすべての気候を隠して、それ故誰もがそこに自分の気候を見いだした。彼は他者に対しては一切であり、自分に対しては無であった。彼はどの性格にも身を投ずることができた、もっともそれ故単にただ最も快適な性格を遂行することを時に思い付いたのであった。宮廷生活、小都市生活、市民生活の帯革、馬の鞅、尻が^{むながい}い、鞍帯革が尻に彼のブケファロス[アレクサンダーの愛馬]を爆裂させていた。そして伯爵が毎日講師の言葉遣いの手綱に立腹していたとき、講師は何でも正しく言う者で、Knaster と言わず Kanaster[安煙草]と、Juchten と言わずに Juften[ロシア革]と言ひ、fufzig と言わずに funfzig[五十]と言ひ、barbieren (この R は私自身愚かな音に聞こえるのであるが) と言うもので、これに対しロケロールはほら吹き屋的自由演説家に近い自由思想家で、独自の表現で語り、例を同じく挙げれば、「腹蔵なく[肝臓も口もなく]」と語るものであった。伯爵は自分にとってうんざりするほどに、ある種の叙事詩的、本から身に着けた語り方の品位が張り付いていた。人々が講師のように、高貴な出自の躰け正しい市民として育て、品行正しく、上品な服をまとって、幾つかの分野での結構な、かなりの知識を有し、気晴らしに好みのターフェルワインを飲み、立派な画家や他の巨匠に対する趣味を有するならば、そしてより高い地位に昇進しては、ただ単にそこから更に高い地位に昇進するのであれば、その場合に出現するような哀れな禿げ頭の人生を、彼らはしばしば一緒に考え合っ、呪い合った。こうしたことすべてに従えば、散髪して洗顔して棺桶に収まることになり、かくて巨大な物質世界がそのペスティッツ人を崇高な霊界に手渡すことになる。 — いやむしろ痛みの黒い山脈を平板な人生に投げ入れて、せめて何か展望が、何か偉大なものが生ずるようにするがいいとアルバーノは言った。 —

しかしロケロールは、アルバーノにそう見えていた男ではなかった。 — 友情は愛同様にその錯覚を有する。 — しばしば彼が、貞淑な少女の頬と気位が高い男性の額を有する愛に酔った高邁なアルバーノを、彼のふらつく魂にかくも信頼を寄せ、その心にかくも

広く開示していて、その抱く空想には彼でさえその神聖さを嫉妬するアルバーノを、長く眺めていると、高貴な若者の錯覚に彼は感動して痛みを覚え、彼の心は切迫してきて、彼に涙ながらにこう言いたくなった。アルバーノよ、私は君に値しない、と。しかしそう言うと、彼を失うことになるというも彼は付け加えた。というのは彼は一人の男性の倫理的な正統派信仰と決然さを恐れていたからである。一人の男性は、一人の少女のように、戯れて怒らせ、またその心を得るといふわけには行かないのであった。

しかし彼がそれを敢行する、兩人にとって重要な日が来た。彼はただ空想で抵抗していただけであったので、どうして空想に抵抗し得たであろうか。 — 私は半ば彼に不当なことをしている。彼の口を開かせたより良い天使の声を聞き給え。

ロケロールは世紀の申し子であり、犠牲者である。我々の時代の高貴な若者達がかくも早期にかくも豊かに喜びの薔薇で覆われ、薬味生産の島人のように嗅覚を失い、ただ薔薇のみをシバリス[南イタリアの町、古代ギリシア領]の枕として下に敷き、薔薇のシロップを飲み、薔薇の香油で体を洗い、茨以外それで何の刺激も受けなくなっているように、大方の若者が、 — しばしば同一の若者であるが、 — 彼らの博愛主義者の教師から最初の認識の果実をたっぷりと授かって、かくて彼らは直にただ蜜のように濃い抽出物を欲し、次にその林檎ワインと梨酒を欲し、遂にはそのブランディーで身を滅ぼしてしまう。その上彼がロケロールのように、その人生を、歩くたびに炎が生ずるナフタの地面に変えてしまう空想を有するならば、学問が投げ込まれる炎とその消尽は一層大きなものとなる。人生のこうした消失者にとってはもはや新しい喜びはないし、新しい真理もない。古い真理を全体的に新鮮に有することはない。高慢さと、人生の反吐と、不信仰と、矛盾に満ちた乾いた未来が彼らの周りに広がっている。ただわずかに空想の翼のみが彼らの死体の許癒癒するのみである。

哀れなカールよ。 — 君は更にそれ以上のことをしていた。単に真理ばかりでなく、感受性も彼は先取りしていた。人類のすべての立派な状態、愛や友情や自然が心を高めるときのすべての感動、こうしたことすべてを彼は、人生の中でよりも先に詩の中で、人間としてよりも先に俳優や劇場付き作家として、現実の風雨の当たる側でよりも先に空想の陽の当たる側で体験していた。それ故それらがようやく生き生きとして彼の胸の中に出現したとき、彼は思慮深くそれらを将来の思い出の氷窟のために把握し、支配し、殺害し、立派に剥製にすることができた。後年であれば、ひょっとしたら彼を鍛えていたかもしれないリンダ・デ・ロメイロに対する不幸な愛はかくも早期に彼の心のすべての血管を開き、自分自身の血の中でその心を温浴させた。彼は良き気散じや情事、悪しき気散じや情事に没頭し、後からまた紙の上や劇場で、自分が後悔したりあるいは祝福したりするすべてを表現した。どの描写も彼を一層深く虚ろなものにして行った。丁度惑星を投げ出した太陽には墓穴が残ったようなものであった。彼の心は聖なる感受性を放置できなかつた。しかしその感受性は新たな美食三昧で、せいぜい強壯剤（トニック）であった。まさにその高みから道は最も不浄で急傾斜の沼地に通じていた。ドラマ作家の中では天使のように清らかな状態と汚れた状態が併存し、続いているように、彼の人生の中でもそうであった。彼は[南米の]スリナムでのように豚にパイナップルを与えて育てた。ちょっと昔の巨人達のように彼は活力の翼と這って行く蛇の足を有していた。

このように大きな、空の真ん中に広げられた織物の中へ飛び込んで行く女性の魂は不幸

である。その女性の魂が毒を浴びずに、飛び抜けて、ただ蜂の羽だけを汚すならば、その魂は幸せである。しかしこの全能の空想、この流入する愛、この軟弱さと強壮さ、この征服する思慮は、どの女性のプシュケをも蜘蛛の網で、そのプシュケが最初の糸から逃れないならば、絡め取ってしまうことだろう。 — 哀れな娘達よ、君達をその爪で拉致して行くこのようなコンドル達に関し、君達に警告できればいいのだがと私は切に願う。我々の日々の天にはこうした驚が一杯いる。これらは君達を愛してはいない。しかし愛していると信じている。これらの驚はムハンマドの天国の浄福者のように失われた愛の腕の代わりにただ空想の翼だけを有している。これらは大きな奔流に似て、単に岸辺で温かいだけで、中央では冷たいのである。

あるときは愛の陶醉者として、あるときは愛の放蕩児として、彼はますます速くエーテルと泥土の間の交替を済ませて行き、遂にはこの両者を混ぜ入れた。彼の花々は理想のラックを塗られた花の支柱棒を昇って行ったが、棒はしかし色落ちして大地に腐って行った。驚き給え。しかしそのことを信じ給え。彼は時にわざと罪や受難に転落して、その下の方で後悔と謙譲の傷を受けながら、立ち直りの誓いを一層深く己に刻むのであった。例えば（ダーウィン[Erasmus Darwin (1731-1802)]やシデナム[Thomas Sydenham (1624-89)]）医師達が、強壯剤（キナ皮や銅、阿片）は、その前に衰弱剤（瀉血、催吐剤等）を先に処方されていたら、もっと力強く作用すると主張しているようなものである。

ひょっとしたら外的状況で彼は若干救われたかもしれない。清貧の誓いをしていたら他の二つ[従順の誓いと貞潔の誓い]はより容易になっていたかもしれない。彼が黒人として売られていたら、彼の精神は自由な白人となり、作業部屋におれば、それは彼にとって煉獄となっていたことだろう。それ故最初のキリスト教徒達は憑かれた者達にいつも仕事を、例えば教会の掃除^{*1}等を与えたのであった。しかし無為の将校生活は彼を単に一層虚栄家に、一層大胆に育てるだけであった。

彼がアルバーノの胸元に来たとき、彼の胸中にはそのような状態であった。 — 愛を美食三昧に追いかけてながら、しかしそれは単に愛と戯れるため、 — 真実でない心を抱いていて、その心の感情は真の密な本性というよりはむしろ抒情的な詩であり、 — 真実であること、いやほとんど偽りであることもできずに、それはどの真理も詩的描写へと変じ、その描写はまたすべての真理へと変ずるからで、 — 舞台や悲劇用の写字台で感受性の真の言葉に当たる方が人生の中で当たるよりも容易にできる質で、ボワローのように単に踊り手を模することはできるが、踊りはできずに、 — 汲み尽くされて内実のない人生に対して無関心で、蔑みながら大胆で、その人生の中ではすべての堅固なもの、不可欠なもの、心や喜びや真理が溶けて漂っており、 — 何も尊重しないが故に、人間の尊敬するすべてのことに挑戦し、すべてを犠牲にするならず者の力を有し、いつも自分の鉄のような守護聖人、つまり死の方を見渡して、 — 自分の決心には臆病で、自分の錯誤の点でさえ定まらずに、 — しかし極上の倫理性の調律槌のみを奪われており、音叉の方は奪われていず、情熱の吹きすさぶ最中、思慮の明るい光の中に立っているの

*1 シモニス、『キリスト教の古代についての講義』Samuel Mursinna 出版。143 頁。[Halle. 1769. Johann Simonis (1698-1768)]

ある。丁度恐水病者が自分の狂気を知っており、それを警告するようなものであったのである。――

ただ一人の立派な天使のみが他の天使達と一緒に逃げ去っていなかった、つまり友情である。愛に対しては彼のかくもしばしば膨張し縮小した心は上昇し難いものがあった。しかし友情の方はまだ浪費していなかった。彼はこれまで自分の妹を友達のように愛し、兄弟的に、はばかりことなく、慈しむように愛してきた。今や彼にアルバーノが輝かしく武装して向かって来た。――

最初彼はアルバーノとも自分に対するのと同様、仮面舞踏会とタルタルスで嘘を付いて戯れていた。直に彼は、この田舎の若者が自分の輝きの前で間違っただけで眩惑されて、彼を見ていることに気付いた。しかし彼はその錯誤を奪うよりも、真実のものとするを欲した。人間達や、――それに彼は、――アモンの神の神殿の隣にある太陽の泉^{*1}に似ていて、この泉は朝方にはただ冷たく、正午には生温かく、夕方には温かく、真夜中には熱くなるのである。一日の時間に彼はとても依存していた。――頑丈で健康なアルバーノはほとんど影響は受けず、それ故彼は、偉大な男というものは一日中起床から就寝まで偉大で、紋章家が鷲の翼をいつも広げさせているようなものであると思っていた。――かくてロケロルは朝方はめったにアルバーノの所には行かず、大抵夕方行った。前もって瓶から注ぎ込まれたワインの酒精分で彼の諸力や感情の燭台が燃え上がったときに行ったのである。――

しかし君達は手本の薬効、――称賛の治癒力、魂を強化する敬意を御存じか。「みっともないことになるぞ」（とロケロルは言った）「彼はとても信じやすく、率直で、愚直ではないか。――いや世間全体に嘘を付いても、彼の魂にだけは嘘を付きたくない」。このような質の者は人類の殲滅に対して、一人の男への忠誠で償おうとするものである。人類は一つの星座で、この中で一つの星が像の過半を描くのである。

この時から衷心からの告解と贖罪の決意が固まった。そしてアルバーノは、彼の前では人生はまだ腐敗の粥に砕けていず、確固と鋭く、有機的に解体するもので、カールのように何ごとにも上手くかみ合わず、すべてがただ空気のように漂って来ると嘆くことはない者で、彼はロケロルの病んだ願いに青春を再びもたらす筈となって、純粋な青年の不屈の感覚と友情の危険と共に、ロケロルはアルバーノに対し、実り多い後悔の約束を、自ら余りに頻りに破ってしまった約束を守るべく努力しようと欲した。

彼がすべてを語る日の、彼の一日を追って見ることにしよう。

第五十四周

あるときアルバーノはすでに午前中大尉の許にやって来た。この時ロケロルはいつもの彼の言葉によればまだ「燭台の針の上の昨日から燃え落ちた蠟燭の燃えさし」なのであった。しかし今日彼はピアノと写字台の許で交互にぶんぶんとして働いて、干涸らびた滴虫類のようにすでに早朝から、ワインを十分に嗜んだので、つまり沢山飲んだので、活発な昔か

*1（訳注）リビア砂漠の Siwa のオアシスにある。Herodot (IV,181)、Plinius (『博物誌』 II .228) 参照。

らの男となっていた。歓喜で一杯になって彼は、歓迎する友に向かって行った。アルバーノは彼にファルテルレから愛の子供っぽい紙片を（　—　というのはこの教練教師はそれらを火に投ずる勇気を有しなかったからで）、つまりブルーメンビュールから未知の心に宛てて記した紙片を持参して来ていた。カールは、彼がすでに、　—　到着以前にそうした状態であったのでなければ、それで涙を流すほどに感動したことだろう。伯爵はそこに、　—　一日中、　—　留まってすべてを等閑にしなければならなかった。　—　それは彼の最初の無秩序な一日であった。　—　いつもはとても頑固な、日々の修練という長い習慣に従っている若者が、何の船も浮かんでいない短い海の風ぎに対して、一つの罪に対するかのように逆らったというのは滑稽なことであった。

しかしそれは天上的であった。家に一杯の客人があって、そして彼が、　—　その気になりさえすれば、かつて自分を有頂天にさせた遠い日の子供の一日がまたやって来た。会話は、我々を持ち上げ豊かにするすべてと共に戯れ、贈り物をしてくれた。すべての諸力が束縛を放たれ、酩酊した踊りであった。天才的人間は他の者達が平日を有するように、多くの祭日を有するもので、それ故天才的人間はつまらない閏日や、怠け者の閏日にはほとんど耐えられず、このような青春の日々には殊に耐えられない。　—　カールが彼に対し、シェークスピアやゲーテ、クリンガー[Klinger(1752-1831)]、シラーから悲劇的雷雨を紹介し、人生を巨大に詩的な拡大鏡に映して眺めたとき、彼の内部のすべての眠っている巨人が起立して、彼の父親と彼の未来がやって来て、彼の友人そのものが新たにかの輝かしい空想の子供時代から取り出されてきたかのように、立ち上がることになった。子供時代、彼はカールをこのような配役で前もって夢見ていたのであり、この内部の英雄の行軍の中では、空に浮かぶ雲や市場を行進して行く衛兵部隊さえも折り畳められることになった。この友人は彼には余りに偉大に映じた。彼はすべての青年同様に、まだ俳優や詩人達のことを信じており、彼らは鉱員の如く、自分達がその中で働いているときの金属をいつも体中に有すると信じていたからである。何としばしば両人は青年の隠喩で「人生は一つの夢である」と言って、その言葉でただ一層喜び、目覚めたことか。老人はそのことを別様に言う。カールが好んで案内した黒い死の門は、青年の目の前ではガラスのドアとなって、その背後に遅れて来た心の明るい黄金時代が果てしのない沃野として広がっていた。

娘達は、私が告白すると、　—　彼女達の会話は、個別の、事実的な、余り陶酔的でないものであって、　—　このような楽園の庭園の代わりに愛らしいオランダ風庭園を買い求める。蟹の鋏やレディー用鋏で上手に剪定され、(午後の)日々、コーヒー盆や紅茶盆の上に若干の悪しき陰口の細い黒い盆[ブラックリスト]や、二、三人の新しい着席のショールや、遺言書や結婚証明書と共に通り過ぎる一人の立派な体格の人間や、最後に家政的報告の希望が給仕される黒い時間で過ごされるのである。　—　若者達に話を戻すことにしよう。

夕方頃大尉は赤い紙切れを貰った。「結構なことです」と渡す女性に彼は言って、頷いた。「奥方、何も起きませんよ」(と彼は、アルバーノの方を向きながら言った)、　—　「兄弟、人妻にだけは用心。一度戯れに彼女らの赤い化粧紙にばくついたら、すぐさま背

中に釣り針が掛けられることになる^{*1}。七つの釣り針が私の背中だけでも、御覧の通り貼り付いている」。無邪気な子供のアルバーノよ。七人の人妻との友情を一度に主張することを彼は何か倫理的に偉大なことと見なしたのであり、カールの場合のようになれば喜んだことであろう。彼は女友達が、ローマ人のように、ヴィクトリアの（つまり我々男性の）翼を好んで切り取って、神々しい者が飛び去らないようにすることを悪しきことと思うことができなかった。

素敵ない日では、日没ほど美しいものはない。伯爵は夕焼けを見に、馬で出掛け、高台で太陽を眺めることを提案した。彼らは通りを駆けて行った。カールは美しい鼻の前や、大きな対の目の前や、透明な額の巻き毛の前で大きな斜めに被った帽子を脱いだ。彼らは菩提樹の並木道を飛んで行った。そこは散歩中の座っている女達の多彩な壁板で華麗に飾られていた。大柄の、炎のように見通す女が赤いショールと黄色のドレスを着用して、女達の花壇を通過して、花の女神のように高く歩んで来た。あの赤い紙片の起草者であった。しかし彼女は自分の友人よりも美しい伯爵にもっと注意を向けていた。すべての壁や木々に夕焼けの薔薇の格子垣が花咲いていた。彼らはブルーメンビュールへ白い街道を音高く駆け上がった。―― 両側で春の金緑色の海が生きた波を寄せていた。―― 翼のある世界がその中では漕ぎ進んでいて、小鳥達は深く花々の中へ沈んで行った。―― 友人達の背後で太陽は燃え、彼らの前にはブルーメンビュールの高台が全く薔薇色の赤に染められていた。上の方で彼らは馬を太陽の方へ向けた。太陽は気位高く燃える町のドームや煙柱の背後で後方の明るい諸庭園の中で休んでいた。間近に大地が照らし出されて、太陽の周りにあった。アルバーノはリアーネの屋根の白い彫像が生き生きと花と咲く雲の下で赤く輝くのを見る事ができた。彼は自分の馬を相手の馬に近付けて、手をカールの肩に置いた。そのようにして彼らは黙って、愛らしい太陽が黄金の雲の王冠を外して、熱い額の周りの舞う花綵装飾と共に海に没して行く様を見守った。そして大地が黄昏れてきて、天が赤熱し、アルバーノが身を乗り出して、彼の友を燃える胸元へ引き寄せたとき、ブルーメンビュールの晩鐘が昇って来た。―― 「向こうの下の方では」とカールは穏やかな声で言って、向きを変えた。「君の平和なブルーメンビュールが、君の子供の日々の静かな墓地のように横たわっている。―― 子供達は何と幸せなことだろう」。―― 「我々もそうではないか」（と彼は嬉し涙と共に答えた）、「カールよ、私はよく夕方このような高台に立っていて、たまたまに私の子供っぽい両手を君の方に、世界の方に差し出したものだ。―― 今や私はすべてを得ている。まことに君の言う通りだ」。―― しかしカールは過ぎ去ったはるかな時代の耳許でのぞめきで、病んで、言葉に対して無感覚になっていて、言った。「魂は泣き終えたら、ただ揺り籠の歌だけが、木霊する揺り籠の歌だけが、魂を眠り込ませる」。

より静かになって、より緩慢に、彼らは馬で戻った。アルバーノは胸に愛と歓喜の新しい世界を有していた。青年は、―― まだ過去の負債者ではなく、現在の客人であって、―― 一日の長い歓声で甘美にくつろいで、明暗のある夢想に沈んで行った。さながら静かに恍惚として広げられた翼で浮いている高い空の猛鳥であった。

*1 蛙を赤い布きれで釣り上げるやり方の当てこすりである。

「一晩中、ラットーに留まることにしよう」とカールは町で言った。

第五十五周

彼らはラットーのイタリア風地下酒場に降りて行った。その家は最初、広大な自然を眺めた後の伯爵には、岩の絵が回転して来たかのように思われた。一 もっともどの階も建築学的重さの下にあったのであるが。一 しかしすぐに地下の牢獄という重い感情は忘れられた。このイタリア式墓所には馬車の甲高い物音が奇妙な具合に響いて来た。大尉はパンチ・ロイヤル[カクテル]を注文した。一一 彼がその立派な炎の勢いの中、いつも家で一杯の容器を消防施設、注入ホースとして験すならば、この本では『グランディソン』^{*1}の本のように余りにお茶が消費されるという非難を受けることは決してないであろう。

ショッペがイタリア風地下室に座っていた。彼は大尉を愛していなかった。彼の容赦ない目は、彼に二つの心から厭わしい欠点をかぎつけていたからである。「慢性的な虚栄心の潰瘍と感情における癒やしがたい美食と贅沢」であった。カールは嫌悪を跳ね返した。彼の熱狂の最も熱い波が早速名目図書館司書の顔前に氷の槍を突き立てた。ただ今日はそうしない。一 彼はたつぷりと王のポンスを飲んだ。一 そのことで、二、三杯飲むと、巨人のブリアレウス[五十の頭を有する]のすべての頭を通じて、あるいはレルネア沼地の大蛇の[九の]頭を通じて、燃え上がることになって、一 かくて彼は何でも話し、敬虔なことさえ話した。「誓って」（と彼は 一 汲み尽くすことでベテスダの池[病気を癒やす。ヨハネの書、5:4]で癒やされて、言った）、「より上等の者になることはつまらぬことだから、ちょっと額に何かを当てれば、憑きものの精神はまあその傷や罪から解放されることだろう」。一 「罪からだ」と 一 （とショッペは言った）、「より良い種の虱や真田虫どもは、勿論、私が冷たくなってしまえば、私の所から出て行くことだろう。しかし劣等な類いものは、私の内部の人間がきっと一緒に連れて行こう。忌々しい。向こうの現世の哀れな罪人どもの墓地全体が、突然殉教者やソクラテスで一杯の目に見えない教会として移行することになるとか、どの精神病院[Bedlam]もより高貴な明かりのための[フリーメーソン]支部になるとか、誰が貴殿に吹き込んでいるのか。一 私は今日、一人の女性が市場で五頭の子豚と一緒にいるのを見たとき、来世のことを考えた。女性はどの子豚の足にも一本の綱を付けて追い立てて行こうとしたのだが、子豚どもは電気の光線束のように別々に行ったのだ。今や我々のわずかな諸力や願望も同じようなもので、文明化された世紀のせいで五倍にもなっているが、これらは我々にとって、この女性にとっての群れと同じようなものだ。我々がいやはや十頭の子豚とかもっと新しい子豚を（第二世界はアメリカ同様に新しい対象とか願望をもたらすに違いないので）綱に結ぶとしたら、教区監督はどんな仕事ぶりになるだろうか。一 もっと大きな、とんでもない苦難や世襲の悪行、反対党を私は覚悟している」。一 しかしロケロールは赤く燃え上がっていた。彼はショッペや自分をやり過ぎして、まさに不死性を否認して、ショッペを茶化した。（彼は

*1(訳注) Samuel Richardson(1689-1761):The history of Charles Grandison. 1753.

言った)「個別の人間は一人では不死性をほとんど信じられないとしても構わない。しかし多くの人間が見えるし、同情を禁じ得ないし、同情に値すると自分は思う。それで第二世界は人間の陶片からなる陶片の山[ローマの Monte testaccio]であると信じている。人間は神に対しても、悪魔に対しても、すでに現世でそうであった以上に将来近付くことはできない。料理屋[宿屋]の看板のようにその裏面もその表面同様に描かれている。 — しかし我々は現在のためにも人為的将来を必要としている。我々が我々の泥土の上に静かになお漂っているとしても、我々は相変わらず詩的鱗や鰓を有する物静かな鯉のようにばたついているわけだ。それ故我々は将来の楽園の庭を立派に設置して、ただ神々のみが中に入るようにし、しかし侯爵の庭園のように犬は入らないようにしなければならない。つまらぬことだ。我々は我々に兵士の服に似た神々しい体を裁断してやることになる。つまりポケットやボタン穴が欠けているわけ。彼らは何の喜びを得られよう。 — 」。アルバンは彼をびっくりして見つめた。「アルバーノよ、私の言うことが分かるか。 — 丁度その逆なのだ」。空想にとっては万事がかくも容易であり、気まぐれな思い付きも容易である。

この時、彼は外から呼び出しがあった。彼は一枚の赤い紙片と共に戻って来た。彼は襟飾りを巻いた。 — これまでハムレット風にはだけていた。 — そしてアルバーノに一時間後に至急戻って来ると言った。敷居の所で、去ったものか今一度思慮して立ち上がった。それから階段を急いで駆け上がった。

アルバーノの中で、一日全体が降り注いだ喜びの杯に戯けた気分の輝かしい泡があふれた。何ということか。戯けた調子は感動同様に彼に愛らしく似合っていた。彼はしばしば長いこと、語らずに、いたずらっぽく微笑みながら歩き回った。よく言われるように眠る子供が、天使と戯れるとき微笑むようなものであった。

ロケロルはまた奇妙に激した目をして戻って来た。彼は荒々しく自分の心の中に突入していた。彼は劣等なことをして、絶望し、下の深みで跪いて友にその人生を打ち明けた。このかくも恣意的な人間は思わず知らず自らの空想の風車の翼に組み込まれていて、あるときは風ぎで束縛され、あるときは嵐で、自分が分け進んでいると思う嵐で、投げ飛ばされていた。彼は、炎を呑み込む人の例に倣えば、今や炎の酒を呑み込んで、ショッペの退散をせわしなく期待していた。ショッペはとうとう、アルバーノの頼みにもかかわらず、こう答えて去った。「時間を買ひ給えと、使徒[パウロのこと、エフェソ、5.16]は言っている。しかしこれは自らの人生をもっと長くし給えということだ。これが時間というもの。その為には時間の最良の商店、つまり薬局はこう要求している、パンチ・ロイヤルを飲んだ人間はベッドに就寝して、はなはだ汗をかくといい、と」。 —

今や何と変わったことか。 — セサラは喜んで彼の首にすがって、 — 青春の陶醉は愛のメロディーとなるもので、ダービシャーの洞穴^{*1}で雨は遠くではハーモニーとなるように、 — 伯爵の唇から甘美に、微睡眠の中で出血するように、すべての内面が、彼のすべての以前の人生が流れ出て、将来の人生のすべての計画が、最も気位の高い計画さえも、(ただ最も優しい[リアーネとの]計画は違って)、流れ出たので、 — そして彼は

*1(訳注)Karl Philipp Moritz:Reisen eines Deutschen in England im Jahre 1782.参照。Bd.2. S.218ff.

(ブリニョン[Antoinette Bourignon(1616-80)]によれば)無垢の状態のアダムのように、友人の目の前に、自らを水晶のように透明に置き、それは弱さからではなく、友人はかくあらねばならぬという昔からの衝動と信念からそうしたのであって、かくて不幸なロケロルの目の中に飾らぬ純粹さと、精力的で信頼した、何事においても揺らぐことのない性質に対する、また赤い頬のほとんど微笑を誘う素朴で高貴な真面目さに対する愛情一杯に溢れる賛嘆の明るい涙が生じて来たのであった。彼はこの喜びに酔った胸元で嗚咽し、アルバーノは優しくなった。アルバーノは自分が余りに優しくなく、自分の友人は優しすぎると考えたからである。

「出よう、出よう」とカールは言った。それは長いことアルバーノの願いであった。彼らが狭い地下室の階段で春の空の星々を縦坑の入口の上方で目にしたとき、一時が告げられた。熱い唇の上に吸入された夜は何と新鮮に湧き出て来たことか。一 町の須臾のテント露地の上に世界の円形建物は何と堅固にそのしっかりとした星々の列と共に構築されていたことか。アルバーノの炎の目は薄明の春の巨大な塊の許で、つまり夜の透明な外套の下で微睡んでいる朝の許で、何と活気付けられ、拡大されたことか。穏やかな西風、この朝の蝶は、すでに愛しい花々の周りを飛び、[木々の]花々から吸い、朝のために香りを運んでいた。寝惚けた雲雀が時折静かな天の中、喉に甲高い日中を告げて、舞い上がった。薄暗い沃野や灌木の上にはすでに露が下りていて、その宝石の海が太陽の前で輝く予定になっており、北側ではアウローラの緋色の吹き流しが風に運ばれて、東の方へ船出していた。一一 若者は崇高な考えに捉えられた。つまり今や同じ瞬間が何百万もの小さな生命と大きな生命を測っており、潜孔性青虫の歩みと太陽の飛行を測っている、この今、同じ時が虫と神と諸惑星から諸惑星にかけて、一 どこでも体験されているという考えであった。一 「神よ」と彼は叫んだ。「人が存在するとは何と素晴らしいことか」。

カールは彼の周りの快活な星座の許、ただ夜の鳥の垂れた重たい羽と共に貼り付いていた。「結構なことだ」と彼は言った、「君がそんな風で、君の胸のスフィンクスがまだ眠っているのは。君は私の欲することを知らない。私はスフィンクスをよく描写できる一人の惨めな男を知っていた。人間の胸腔には、と彼は言った、不気味なものが聖母[マドンナ]の顔を上げて、その四つ足と共に座っていて、しばらく周囲を見て微笑し、その人間もそうするのだ。一 突然その不気味なものは飛び上がり、胸に爪を立てて、胸をライオンの尾と硬い翼とで砕く、そしてかき混ぜ、迫り、荒れ狂い、そして切り裂かれた胸腔からは至る所出血する。一 突然またその不気味なものは出血しながら収まり、また美しい聖母[マドンナ]の顔と共に微笑し続ける、と。その惨めな男は全く血の気が失せて見えたものだ、その動物が彼を食い尽くし、その心を渴して舐めたのだから」。

「恐ろしい」(とアルバーノは言った)「しかし君のことすべてが分かったわけではない」。一一 今や月が昇り、暗く月の側面に掛かっていた雲の群れと一緒に、一陣の風を伴っていて、それで雲は星々の下に追われた。カールはもっと荒々しく続けた。「最初その惨めな男はまだ元気で、更にひどい痛みや喜びを、まことの罪や徳操を重ねて行った。しかしこの怪物がますます速やかに微笑み、引き裂き、この男はますます速やかに悦楽と苦痛、善と悪とを交替させて、冒瀆と汚泥像がその祈りに忍び込み、改宗することも冷酷になることもできなくなると、この男は荒涼たる出血の中で人生のなま温かい、灰色の、乾いた霧の塊の中に横たわり、生涯死に続けることになったのだ。一

何故泣いているのかい。この惨めな男を知っているのかい。「いや」とアルバーノは穏やかに言った。 — 「私のことだ」 — 「君が、 — 恐ろしいことを言う、君は違う」。 — 「いや、私のことだ。君がたとえ私を軽蔑しても、君は多分、...いや、罪のない男よ、話すのをよそう。御覧、今やスフィンクスがまた立ち上がっている。私と共に祈っておくれ、助けておくれ、私が罪を犯す必要がないように。ただ必要がないようにするために。私は飲まずにはおれない、誘惑せずにはおれない、偽善をせずにはおれない、 — 今偽善をしているのだ。 —」。セサラは硬直した目を、青ざめて乱れた顔を見つめ、愛して怒って、顔を両腕で抱擁し、感動してどもって言った。「それは全能の者にかけて、真実ではない。君はとても穏やかで、青ざめて、不幸で、無実だ」。 —

「薔薇の顔よ」（とカールは言った）「私は向こうのもの¹のように君には純粋で明るく見えよう。しかし月は私同様天に長い影を投げかけるものだ」。 — セサラは彼を放して、長いこと崇高に薄暗い、葬列のようにエリュシオンを取り巻いているタルタルスの方を見て、苦い涙を押し流した。涙は今や自分の傍らで自壊していると称す自分の最初の友を、その森で見いだしたのだという思い出の上に流れ出た。そのとき夜風が松食い虫にやられた樅の木を倒した。アルバーノは黙ってその倒れた木を指した。「いや、これが私だ」。

— 「カールよ、私は今日君を失ったのだろうか」と罪のない友は限りない苦痛を込めて言った。春の美しい星々がささやく火花のように彼の傷口へ落ちてきた。

この言葉を聞いてカールの張り詰めた心は忠実で善良な涙に溶け、聖なる精霊が彼の上に来て、純な魂を自分の魂で苦しめることのないよう、その信頼を奪うことのないよう、その魂に野蛮な自我とすべての利己心を黙って犠牲とするよう、彼に命じた。穏やかに彼は友人の心に寄り添って、魔術的にささやく言葉で、謙虚さに満ち、炎の比喻を交えずに彼は自分の心全体を語った。 — 自分の心は邪悪なものではなく、ただ不幸で弱いものであること、 — 自分はただ自分のことを余りに善意に考えている彼に対して、心から率直なだけであって、神に対するように向かわざるを得なかったのであること、死の時にかけて自分は彼のようになること、永遠に彼にすべてを告白すること、彼の許で自らを神聖なものにすることを誓うものであることを語った。 — 「いやただ愛されることが余りに少なかったのだ」と彼は結んだ。そしてアルバーノは、愛に酔い、白熱しているこの人間、この善良な人間は、自分の許で後悔の聖なる誇張を承知していて、この告白をかたの誇張と見なしたが、感激して法外な愛と共に昔の同盟に戻って来た。「君は温かい人間だ」（とカールは言った）、「何故人間はいつもバーナード山の死者達²のように、互いに胸元で抱き合って、凍ったまま強張った目と硬直した腕とで存在しているのであろう。 — 何故君はかくも遅くなって私の許に来たのか。私は別な風になっていたことだろう。何故あの女³はかくも早く現れたのか。 — 下の向こうの村の狭く低い教会の玄関で、私は彼女を初めて見た。彼女のせいで私の人生はミイラとなった。まことに今私は取り乱さず語っている。私が散歩に出掛けたとき、私の目の前を死体のように青白い青年

*1 月。

*2 無名の凍死者達が僧侶達によって埋葬されないまま、各人が他の胸元に接したまま一緒である。

*3 リンダ・デ・ロメイロ

が担架でタルタルスへ運ばれて行った。それは単に彫像に過ぎなかったが、しかしこれは私の未来の似姿だったのだ。邪悪な精霊が私に言った。そなたに見せる美女を愛しなさい、と。彼女は教会の人々に取り巻かれて、教会の玄関に立っていた。人々は彼女が両手で銀灰色のちょろちょろ舌を出す蛇を受け取って量っているときの大胆さに驚いていた。大胆な女神のように彼女はその堅固で平かな額と、黒い目と、薔薇のように花咲く顔を自然によって平板にされている毒蛇の頭に傾げていて、それをすぐ心臓の許に置いて戯れていた。私は少年であったけれども、『クレオパトラ』と言った。彼女もすでにそれを理解していて、静かに冷静に蛇から目を上げて、蛇を返して、向きを変えた。私の幼い胸に彼女は冷たく、生命をむさぼる蝮を投げつけたのだ。 — しかし今まことにそのことは過ぎ去ったことで、私は冷静に語っている。ただアルバーノよ、私の良き妹が保存していた私の血塗られた服を、かの夜以来、私が目にする時にのみ、私はもっと苦しみ、こう尋ねることになっている。哀れな、健気な少年よ、何故おまえは年を重ねたのだ、と。しかし申したように、全く過ぎ去ったことだ。君に対して、ただ君に対してのみ、より良き精霊はこう語るべきだ、そなたに見せる美女を愛しなさい、と」。

しかし今や思念の何という世界が突如アルバーノに飛んで来たことか。「彼はロメイロについての」（と彼は考えた）「以前からの邪推で苦しみ続けている。 — 心に対して心を打ち明けることにしよう。そして自分は彼の妹を永遠に愛していると彼、兄に告げることにしよう」。 — 彼の頬は白熱し、彼の心は燃え、司祭のように彼は友情の祭壇の前に最も美しい贈り物と共に、率直さと共に立っていた。「カールよ今なら」と彼は言った、「彼女は多分君に対して別な風に接することだろう。 — 私の父が彼女と一緒に旅していて、君は彼女と会うことだろう」。 — 彼は彼と一緒に更に早く手に手を取って、小暗い木の群れの許へ行き、その影の中で優しい赤くなった魂を打ち明けた。「私の大切な秘密を受け取り給え」（と彼は始めた） — 「でもそのことについては黙っていて欲しい、 — 私と一緒にいるときも語らないで欲しい、 — 私の最初の兄弟よ、私が君のこと同様に長く愛してきた人のことを察せられないのかな」。 — 小聲で、小聲で彼は付け加えた。「君の妹のことだ」、そして最初の言葉を接吻で言わせないようにして彼の口に触れた。

しかしカールは、恍惚と愛とで興奮して、春の始まりの大地のようで、抑えることができないでいた。彼は彼を抱き締めた。彼は彼を放して、また抱擁し、浄福の涙を流し、アルバーノの目を閉じさせて、新たな兄弟となって言った。「兄弟よ」。アルバーノは手で彼の唇のすべての他の音節を押さえ付けようとしたが無駄であった。彼は当惑した若者の前で、 — この若者は孤独で詩的な本の世界の許、現実の交際が教えるよりももっと高貴な優しさを得ていたが、 — リアーネのことを、いかに彼女が忍耐し、行動するか、いかに彼女が兄のことを思いやり、話題にし、彼の借金を減らすために金を出すことまでし、いかに彼女は彼のことを決して厳しく叱らず、ただ穏やかに頼むだけで、こうしたこと一切を人為的忍耐からではなく、熱い真の愛情からなしているか、いかにこうしたことがそれでも彼女のイメージの付け足しにもならないほどであるか、描写し始めた。彼はこの晩、彼に恵まれたよりも一層純粋な熱狂状態の中で、自分が自分の妹をすべての人々の中で、最も利己心がなく、詩的美食や恣意なしに、最も自由に愛することができていたが故に浄福であった。 — まことに自分がいつか純粋な聖なる愛から歓呼の声を上げて良

いということで意を強くして、これまでミロ^{*1}のように両手を、自分が引き裂こうと欲していた幸運と人生の木の中へ差し入れて閉じ込めていたのだが、またその両手を自由に開放して取りだした。彼は新鮮な生命の空気と勇気を吸入し、自分の内的完成の計画が今や新たな幸運と美しい意識とで穏やかにまとまった。 —

月が高く昇っていて、雲は追い払われていた。明けの明星が二人の人間にかくも明るく昇ったことはなかった。

第十一ヨベル期

刺繡枠 — アングレース[英国風舞踏] — [サボテンの]夜の女王 — 音楽的空想

第五十六周

喜んでロケロルは、自分の父が旅立っていると承知している最初の晩に、母親の許へ一緒に行くよう友人に依頼を持って来た。アルバーノは、最も古くからの秘密を打ち明けざるを得なかったかの炎の夜の中で、最初魔法をかけられたかのように赤くなった。というのはこれまで両人は、一緒に過ごした時間の中で、この聖なる事柄に再び触れることがなかったからである。ただ大尉だけが、リンダ、並びにすべての喪失について、容易に喜んで話すことができた。

リアーネは、自分の兄を、 — その最も優しい折々のこの支配的創造者を、 — いつも衷心から喜んで眺めていた。もっとも彼は大抵、来るたびに何かを得ようとしていた。喜んで彼女は、刺繡する母親に朗読してやった本を彼の手に渡した。彼女と母親は一日中、快活に、二人っきりで、刺繡と読書に交互に打ち込んで過ごしていた。大臣が旅立つと、彼女達は同時に、慌ただしい訪問のどんちゃん騒ぎから解放された。いかに感動してアルバーノは東側の部屋をまた再認識したのか。この部屋から彼は初めてこの大事な娘をただ遠方の盲人として噴水の弧の間に立っているのを見たのであった。善良なリアーネは、彼が自分の願望をカールに打ち明けた後、自分にはできないほどに屈託なく、彼を受け入れた。思いがけない臆病さと溢れ出る好意、静かさと炎、内気さと動作の優美さ、冗談を言う善意さと黙した知識の何という楽園的な混合が見られてたことか。これに対しては彼女にはヴェルギリウスの素晴らしい添え名[乙女らしい男性、Wieland:Agathon, V.7]、乙女らしい女性がふさわしい。女性的な殻付きアーモンド、大学の剛腕女性、[四分の二拍子の]速い踊り、平たい靴の早足行進の我らの時代ではこのヴェルギリウスの肩書きはそうそう生ずるものではない。ただ十年間だけ(数え十四歳から数えて)少女にはこの肩書きを与えられよう。後には少女はより技巧的になる。十三歳と十七歳とが同時に通常このような優しい人物の年である。

優しいリアーネよ、何故御身はかくも魅力的に屈託がなかったのか。それは御身が逃げ去るべきものが何かすらブリニョンのように知らなかったからであり、御身の神聖な罪のなさは、まだ最も懸け離れた意図をいかがわしく探ることも、迫って来る敵を大地に屈み

*1 (訳注) ギリシアのクロトンのミロ。木を倒そうとして木の裂け目に手を挟まれ、獣に食い殺された。

込んで聞き取ることも、すべてのコケットな宣言や準備も欠いていたからではないか。

一 男達は御身にとってはまだ支配的な父親や兄弟なのであった。それ故御身は男達にまだ気位高くではなく、好意的にその対の目を向けていたのだ。 一

この善意の眼差しと彼女の微笑とで、一 それがずっと続くとしばしば男性の顔では、乙女の顔の場合はそうでもないが、偽りの表題装飾画となるのであるが、一 彼女は我らの高貴な若者を見つめた。しかし彼一人だけをそう見つめたのではなかった。

彼女は刺繍枠の許に腰掛けていた。母親は伯爵をやがて一般的会話という涼しい世界の海へ乗船させた。この海では時にただその息子だけが緑の温かい島を追い求めるのであった。アルバーノはリアーネがモザイク状の花の絵を育てて行くのを見守っていた。小さな白い手は黒い繻子の素地の上に置かれ（フルレの胸部に誕生日花々が着用されることになっていて）、彼女の純な額は、巻き毛が透明にかかっている、前屈みになり、彼女の顔は、彼女が話したり、新たな色の絹を探するとき、目と頬に手仕事のより高い熱を帯びて活気ある表情となって起き上がった。カールは彼女に時折すばやく手を渡した。彼女は自分の手を快く差し出して、彼はその手を自分の両手の間に置き、その手を返して、内側の手を見て、両手でその手を握り、兄と妹は互いに愛を込めて微笑んだ。そのときアルバーノはいつも母親との会話から割り込んで来て、誠実に微笑んだ。しかし哀れな主人公よ。一 繊細な仕事の折りに、刺繍や細密画等の際に、無為に座っていること自体、ヘルクレス的[難しい]仕事である。しかしその上、二、三の嵐の折り、多くの帆で乗り切ってきた君の精神が、無為に、刺繍枠の傍らで錨を降ろして、紡ぐヘルクレス^{*1}のようなものではなく（それならば容易であろう）、ただ紡ぐのを見ている者となり、一 そしてそれも外は偉大な春とか日没であるというのに、その上言葉数の少ない母親の隣ときたら（そもそもどの母親の側でも、娘と立派な会話を導くというのは不可能事であって）、一一 これは難しいことである。

彼は刺繍された花模様を鋭く見下ろした。「とても心が痛むのは」一 と彼は言った、彼はいつでも哲学をし、地上でのすべての空しいものが痛々しく心を苦しめたからで、一 「世界でかくも沢山の千もの人為的飾りが、一つの目にも目撃されずに、享受されることなく、無益に創作されてきていることです。ここの緑の小さな葉が格別見つめられないとなるとまことに悲しく思われます」。苦勞しても不毛な享受されない植物についての同じ悲しみを抱いていて、彼はよく絨毯の葉飾りや、花柄の衣類、建築上の装飾に対して自分の目を寄せていた。

リアーネはそれを、ただ自分の父親への愛から余りに多く植え付けた過剰な裁縫の庭園への非難と見なすことができた。というのはフルレは人々がまだ衣服にモールを付ける時代に生まれていたから、好んで体にささやかな絹製の押し葉標本を止めていたからであるが、一 しかしただ微笑してこう言った。「でもこの小さな葉は悲しい運命からは逃れました。見つめられていますから」。

「無常とか空しさが何だというのか」（とロケロールは、丁度入って来た講師には全く無

*1（訳注）イフィトス殺害故にヘルクレスは、リュディアの女王オムファーレの許で奴隷として働かなければならず、結局女装して織物をした。

関心に言葉を述べた。そして母親の意見に全く無関心であった。母親は父親同様時折彼を従わせるには妹に頼むしかなかったのである。「何かがあれば十分だ。砂漠の上では小鳥が歌い、星々が移って行く。誰一人その壮麗さを見ない。まことに人間の内、外では、見られるよりも見られないまま過ぎ去って行く。自然は永遠の海から汲み出して、尽きることはない。我々も一つの自然で、汲み出し、注ぎ出すべきであって、必ずしも嘆いて、すべての俄雨や虹の灌漑上の有用さを検算すべきではあるまい。―― まあ刺繍を続け給え」と彼は皮肉に結んだ。

「侯爵令嬢が今日来られます」と講師は言った。この希望に喜んでリアーネは母親の手に接吻をした。彼女はよく打ち解けて刺繍からこの廷臣を見上げた。彼はとても馴染んでいるように見えたが、しかし洗練された男として、あたかも初めてそこに立っているかのように、尊敬されており、尊敬していた。

侯爵令嬢の知らせで大尉は魅力的な軽快な歓喜に陥った。彼にとって女性の配役が、フランス人にとってオペラのために必要であるように、社交のために必要であった。そしてそこに女性が一人いると、彼の講義の際の支えとなった。カントにとって欠けたボタンが支えとなったようなものである^{*1}。彼は妹を花々から引き離すために、鏡台の彫像の赤い紗を取って、それを小さな朝焼けのように、刺繍している百合の顔に投げかけた。―― その時ドアが開いて、ユリエンネが入って来た。―― リアーネはその朝焼けを持ち上げながら、小さな朝焼けの色を浮かべて出迎えた。―― アルバーノは彼女に対してそのヴェールを受け取るために機械的に手を差し出した。―― そして彼女はヴェールを渡し、大きな愛らしい眼差しを添えた。―― 彼の眼差しは何と酔って輝いたことか。

ユリエンネは次々と冗談を放った。大尉は花火師のように自分の花火にどんな形や色合いをも与えることができ、自分の冗談で彼女の加勢をした。彼の妹は、冗談の穏やかな西風達が戯れることができるような[言葉の]花々をさながら植え付けて行った。ユリエンネはほとんど然りに対しては否を、否に対しては然りを述べた。ただ大臣夫人に対してだけは彼女は真面目で、譲っていた。これは彼女の議論のアリーナ[闘技場]では砂粒の中にまだ金の粒があったということの印である。他方哲学者達にとってはアリーナは報酬であり、土台である、同時に戦場、三月練兵場[シャン・ド・マルス公園]、シャンゼリゼである。彼女は伯爵を、ただ侯爵令嬢のみが許され、そうする習慣である大胆さでじっと見つめた。そして彼がまた彼女の青い目を見ると、彼女は目を伏せることはなく、彼にブルーメンビュールへの自分の昔の訪問を思い出させて、彼の家族のことを尋ねた。彼は今や自分の内面のように炎となっていること、―― 称賛を喜んで行った。事柄ならいいが、―― 人物を性急に称賛したり、非難したりすることは最上の作法に反することである。彼が感謝の念で思い出して自分の妹ラベツテを描いているとき、ユリエンネは真面目に深く彼の目を覗き込んでいたが、急に立ち上がって、講師に彼が仮装舞踏会するとき先導したアングレーズの旋回について尋ねた。彼が最善を尽くして詳述したとき、彼女はさっぱり分からない、むしろ実演する方がいいと言った。

*1 彼はいつも講義しながらある学生の欠けたボタンの箇所を見つめていたと言われる。しかし学生がこの箇所にボタンを付けたとき、彼は混乱した。

ここで私のすべての女性読者は突然、二組のカップルの家庭舞踏会に導かれることになる。魂の姉妹が互いに一羽の鳩の二つの翼のように調和的に上下に飛ぶのを見守り給え。アルバーノはこう予期していた、ユリエンネは炎のような多くの揺れる舞いで、その女友達の静かな漂いとは異なるであろう、と。しかし兩人は波のように軽快に入り乱れて波立ち、どの動作も多すぎることはなく、速すぎることもなかった。

それ故私はよく、娘達は完全にそしていつも優美女神や季節の女神のように、一つまりただ女達同士で、我々殿方を交えずに踊って欲しいと願っている。男性的燕のジグザグと一緒に女性的波の線の現在の同盟は、衣装の点でも動きの点でも舞踏をかなり美化しているとは言えない。

リアーネは新たなエーテル的形姿となった。例えば一人の天使が天へ戻って飛ぶとき、その優しい現世の形姿を脱ぐようなものである。女性的美にとって舞踏場は、男性的美にとっての馬のようなもので、両者の上で互いの魅力は展開し、ただ騎乗者のみが踊り子に負けない。幸せなアルバーノよ。君はリアーネの差し出された手に対して、君の手ではほんの指先でも掴まえる勇気がないほどだった。君は十分に得ていた。ただこの好意的少女を見つめ給え。その目と唇は優美女神が笑いながら舞踏のために快活にしているもので、それでいて少しばかり青ざめているために、また感動的に見える娘だ。何と、かの気まぐれな、あるいは無器用な義理の姉妹達とは異なっていることだろう。この姉妹達は皺の多い、あるいは緊張した、半ばウティカのカトー[小カトー、ほとんど笑わなかったとされる]の顔をして、飛び跳ねたり、屈んだり、滑ったりするものだ。ユリエンネは喜ばしげに立ちこち進んで、誰の前で最も好んで舞っているのか、リアーネの前か、あるいはアルバーノの前か、言い難いものがある。

しかし過ぎ去った。ユリエンネはまた最初から始めようと欲した。一 リアーネは母親を見つめ、一 すぐに女友達にむしろ休憩を頼んだ。それは口実であった。女友達は好んで女友達と二人っきりになりたいものである。兩人は他人の前では単にヴェールを被った心を有したが、ヴェールを脱げる薄暗い木陰道に憧れるものである。リアーネはいつもせっかちな愛を有していて、その隣の魂、双生児の心と一緒に五月の庭、夕方の庭で誰からも見られない時を過ごしたかったのである。二人は優しい真面目さで一杯になって、変貌して戻って来た。美しい者達はひよっとしたら舞踏のときと同様に、内奥でも、静かなときでも、そう見える以上に似通っていたのかもしれない。

かくてこの若者の前で美しい星座の夕べが過ぎ去った。彼がこの花束をかくも固く抱き締め、掴んで、それから若干の棘を感じ取るほどであったとしても酌量し給え。彼の心は、その愛は他人の心の傍らで痛々しく育ったのであるが、この他人の心を、返事の一つの印も得ないまま、同時により高く、より遠いものと思わざるを得なかった。彼女の愛は人間愛であった、一 彼女の微笑はすべての善良な目に向けられていた、一 彼女はとても快活であった、一 リラールでは彼女は容易に感動して、一般的な考察に導かれていた。しかしここではそうではなかった。一 勿論彼女は荒々しく愛する兄の方を真に心寄せて見ていた。この兄はかの告白の夜以来、さながら樗の根をもってその寵児の許に絡みついていた。しかし兄に対する半ば盲目の愛は、その反照の惑わしの中で、兄の友人へも余光を残していた。一一 謙虚な若者はこうしたことすべてを自らに語った。しかし彼がたっぷりとした歓喜の中で享受したものは、彼の魂の兄弟のかくも上昇し、明るく、

優しい、変わらぬ愛であった。 ー

第五十七周

リアーネの静かな志操とセサラの未来について、憶測を述べることはやめよう。印刷する前にまた消し去ることはできるのであるが。私や他の者が、重要な事柄に関するハーフェンレプファーの公式な報告に対し前もって両手で蓋をして、どんな具合に進行したか単なる空想で展開しようとしたら、どういう次第になったか私は覚えている。 ー 使いものにならなかったのである。当然なことである。すでにそれ自体女達やスペインの家は多くのドアがあるが、窓は少ないのであり、その心の中に入り込む方が、覗き見るよりも易しい。その上娘ときたら。つまり夫人達は観相学的にも倫理的にも、より明確に、より大胆に展開し、描かれているので、私は二人の娘より十人の母親をむしろ推測し、それ故写すことを欲する。肉体上の肖像画家も同じように嘆いている。

夜を見守っていた者は、彼が夕方前もって自分の人生のヒロインについて抱いた疑念や心配を大方朝方頃までには払拭したと思うことだろう。アルバーノは春の朝、人生での両眼を凱旋車の中でのように開けた。そしてその前では生きのいい馬が足踏みして、彼はただ手綱を付けさえすれば良かった。

彼は友人と一緒にリアーネの許で数年後、つまり数日後、下馬した。大臣はまだ戻っていなかった。何とということか。何と新しく、花のように若々しく彼女の形姿は見え、それでいて彼女の振る舞いには変わりがなかったことか。彼は考えた、何故自分は、ただ彼女の動作を覚えることができるだけで、すべての彼女の面貌を覚えることができないのか、何故自分はこの顔を微細な微笑に至るまで古代の聖なる女性のように純粹に深く自分の脳に刻むことができないのか、かくて自分の前に永遠の現在として漂わせることができないのか、と。 ー これは、いいかい、こういうわけだ。美しく若い形姿はまさに記憶と絵筆にとって難しく、老いて険しい男性的形姿はその両方がもっと容易なのだ。 ー 再び喜びと溜め息を抱いて、彼は彼女を見つめることに没頭した。 ー 喜びと溜め息は間近の庭園のせいで一層大きくなった、そこには六月の夕方の輝きが見られた。 ー 彼の魂全体が夢中になって話すことを許されるほんの一分間が恵まれさえしたら、何としたことであろう。外では若々しい炎の春が庭園のアンティノウス[ハドリアヌス帝の寵児]のようにあって、日が射していて、月がすでに美しい六月の夜を待ち焦がれて、東の門の下に昇っていて、まだ元気の良い一日と、ためらう夕陽とに出くわしていた。 ー しかし母親はリアーネの伺い尋ねる視線に対し、日没の享受を断った。 ー 「天泣^{*1}は体に良くない」と。アルバーノは男性的血で一杯の心で、この子供の健康を気遣っての逆茂木をとっても些細なことと思った。

今日の楽園の門の閉鎖を告げる鐘が次の瞬間に鳴らされていたことであろうが、 ー 大尉と[サボテンの]夜の女王が待ったをかけた。

ロケロールはイタリア風屋根から降りて来て、庭師が、今晚十時に「夜の女王」が開花す

*1 Serein、日没の時間で、南方の国々ではこれを特に避ける。

ると言っていると告げ、自分は残る、「君も一緒だ」とアルバーノに言った。妹と兄に対する優しい思いやりという二重の境界に接することすべてに、彼は、愛しながら、賭けて、この友を喜ばせることにした。彼女は間近の開花にとても夢中になっていた。 — 彼女の魂は、蜂や露のように、花々に向けられていた。すでに彼女の友人、敬虔なるシュペナーが、神の王座のこれらの生きたアラベスク模様酔った目を向けていて、彼女を無限なものこれらの黙した、いつも眠っている子供達と親しませていた。しかしそれ以上に彼女の乙女らしい心と彼女の病がちな心が親しんでいた。君達は華奢な女性の魂に出会ったことがないのであろうか。運命がその花の時期に冷たい雲を投げかけて、今やルソーに似て[『孤独な散歩者の夢想』、第五章]、喜びの花とは別の花を求めている魂、谷や岩の上で疲れて、屈み込み、採集して忘れようとし、亡くなったポモナ[果実の女神]から若いフローラ[春の女神]へと逃げて行く魂に出会ったことがないのであろうか。ヘルメス[Tim. Hermes (1738-1821)]が少女達に撒こうとしている通奏低音やラテン語はここでは自然の広い多彩な絵文字、豊かな植物学に移っている。

リアーネに対する名付け難い優しさが小さな四人席の食卓の許のアルバーノの魂に生じた。 — 彼は今や彼女にもっと近付き、彼女の縁者であるかのように思われた。 — しかし彼女が母親を、母親が沈み込んでいるすべての真面目さから冗談を言って誘い出すとき、彼は縁者のこの女性のことが理解できなかった。 — 外では小夜啼鳥が人生を美しい自然に呼んでいた。彼ほど外に憧れている者はいなかった。

魂の目にとっては、空の青さは、肉体の目にとっての大地の緑で、つまり内面を強化するものである。セサラがようやく部屋の封鎖から、この精神的屋内拘留から解放されて、天を星々の自由界の下、彼がしばしば憧れて眺めていた魔術的彫像のオリンポス山へ出たとき、彼の強引に引き締められていた胸は柔軟に広げられた。いかに人生の星座がより明るい形式にまとめられ、いかに春と夜とが支配していたことか。

「気立てのいい親切な令嬢」へのただ感謝の愛着から苦心してこの「夜の女王」のこのような早期の開花を導いて来た老庭師は、すでに花々の外見上は観察者として、実際は最大の称賛を当てにしている、褐色の、ぎざぎざした、斑点のある、真面目な顔をして向こうに立っていた。称賛を、笑みを浮かべて、強要することはなかった。

リアーネは、花々の許に来る前に、庭師に感謝した。それから彼女は花々と彼の苦労を称えた。この老人はただ、一行の誰もがやはり驚嘆するまで待っていて、その後眠たげにこう確信して、ベッドへ向かった。リアーネは明日きっと彼のために配慮して、自分は満足するに違いない、と。

五つの白い、さながら褐色の葉で花冠を付けられたような萼できらきらしている外国風な神酒の香りが空想を誘った。より暑い大陸の春からの芳香は、彼らを辺鄙な夢想へ連れて行った。リアーネはこっそりと指で、瞼の上を滑るかのように、ただ小さな香りの花瓶の上を撫でて行き、萼に押し込まれている華奢な花糸で一杯の小さな庭に乱暴に触ることはなかった。「何と愛らしいことでしょう。何とまあ華奢なこと」(と彼女は子供のように楽しく言った)、 — 「五つの宵の明星のよう。 — 何故夜になってからなのかしら。これらの内気な花々は」。 — カールは一本を折り取りたいかのように見えた。「生かしておいて」(と彼女は頼んだ)、 — 「いずれにせよ明日は死んでいるのだから。

— カール、そんな具合に沢山枯れてしまいます」ともっと小声で付け加えた。「すべ

てが枯れる」と彼は無愛想に言った。しかし母親はそれをリアーネの意志に反して聞いていた。「そのような死への想いは」（と彼女は言った）「若い人には好ましくありません。翼が萎えてしまいます。 — 「そうになったら」（とリアーネは、少女らしく反転させて答えた）「残ることになるわ。クライスト^{*1}の逸話の鶴のように、一方の翼が折れて、それで残りの翼では温かい国へは飛んで行けなかったの」。

深い真面目さのこの快活な多彩なヴェールは我々の友にとって十分に透明ではなかった。しかし後にこの善良な娘は、心配している母親が望んでいる通りに見えるべく努めた。地上の麻醉性の前留め百合たる月は、 — それに星空の全体のまばゆいパンテオンも、 — 夜の明かりが漏れる町も、 — それに威厳のある高く黒い並木道も、 — 沃野や小川での牛乳のように青白い月光の銀色も、これで大地は一つの宵の明星へと閉じ籠もったのであるが、 — それに遠くの庭園での小夜啼鳥も、 — これらは心を有無を言わず感動させて、心は泣きながらその憧れを告白しようとしたのではなかったか。そして今星々の下で鼓動している最も柔らかな心は、ヴェールをすべて自分の上にかけることができたであろうか。 — ほとんどそうできた。彼女は母親の前では、涙を、それが育つ前に、いわば目で乾かすことに慣れていたのである。

彼女は次の瞬間、伯爵には奇妙に思われた。母親は息子と話していた。リアーネは、伯爵から離れて、聖母の白い像の隣で、半ば横を向いた顔、月光で少しばかり色褪せた顔をして、立っていて、夜を覗いていた。突然彼女はじっと見つめ、微笑んだ。あたかもエーテルの深淵に生きた生命が出現したかのようで、唇は話そうと欲した。これほどに崇高で感動的な地上の形姿に彼はまだ出会ったことがなかった。彼が掴んだ欄干はあちこち揺れた（しかし彼自身が動かしたものであった）。彼の魂全体が叫んだ。今日、私は今、この天上的女性を最高に、最も親密に愛している、と。そのように彼は最近も話したし、しばしば言うことになろう。人間は愛の無数の波に高度計を当てて、最も高く上がった波を示すことができようか。 — そのように人間は、いつも、どこに立っていようと、天の中心に立っていると思うものである。

嗚呼この瞬間彼はまた驚かされた。まさに「嗚呼」を待っていた。リアーネは母親の許へ行き、母親が愛しい者の手で小さな戦慄を感じたとき、母親は夜風を避けるよう彼女に迫った。そして自分と一緒にこの魔術的場から離れるまで、容赦しなかった。

男友達は残った。アルバーノの計算によれば、我々のより神聖な、卑俗な一日からは覆われている考えが、星々のように啓示されるこの率直な時に、明け方まで[イタリア風]屋根に残らなかったならば、勿論たいしたことと言えなかったであろう。両人はしばらく黙って行き来した。とうとう五つの花の香煙の祭壇が彼らを止まらせた。アルバーノはたまたま近くの彫像を両手で掴んで言った。「高いところでは何かを投げ落とすことになるものだ、 — しばしば自らをすらそうしたくなる。私は向こうの夜の赤らんだ色を見るたびに、その世界、はるか遠くの国々へ身を投じたくなる。 — それにこのようなオランジュリー[大温室]の花々の下に来るたびに。兄弟、君はどうかね。 — 天と地はかくも広く広がっている。何故精神はかくも縮こまっているのか」。 — 「私も同様だ」（と彼

*1（訳注）Ewald Christian von Kleist(1715-58):Der gelähmte Kranich.ここでは鶴は残らず、ただ遅れて着く。

は言った)「精神はそもそも頭の中に心の中でよりも多くの小部屋を有する」。しかしここで彼は繊細に察知しながら迂回路を経て、何故自分の妹がかくも速やかに下へ急いで行ったのかたまたま打ち明けるに至った。

「頑固なまでに」(と彼は言った)「母親に対して心遣いを示すのだ。 — 前は母親が、踊っているとき青ざめたのを見たことに気付くと、すぐに彼女は止めてしまった。

— ただ自分にだけ彼女は心の全部を見せ、その中のすべての血の滴りや、すべての罪のない涙を見せてくれる。 — 殊に将来の或る事を信じていて、これを母親には入念に隠しているのだ」。 — 「彼女は先ほど一人で微笑んでいた」(とアルバーノは言って、自分の目にカールの手を当てた)「あたかも向こうのヴェールの世界からの生命を見ているかのように」。「君も」(とカールは答えた)「見ていたのか。それから妹は唇を動かしたかい。 — 友よ、何に気をとられたのかは分からない。しかし妹が自分は来年死ぬと確信しているのは確かなことだ」。 — アルバーノはそれ以上更に話させなかった。彼の心は荒々しく鼓動した。そして言った。「兄弟よ、いつも私の友でいておくれ」。

彼らは降りて行った。リアーネの部屋に接する部屋で彼らは彼女のピアノが開けられているのを見た。まことに伯爵に欠けているものは、これであった。情熱に駆られると(単に頭が燃えているときでさえ)ペンよりは楽器を取るものである。ただ楽器でのみ詩的空想化よりも音楽的空想化がうまく行く。アルバーノは — 四十四もの転調があることに對し、音楽のミューズに感謝しながら、 — 今や音楽的炎の太鼓を叩いて、嵐のように静かな灰の中へ吹きすさび、音色の明るい火花の一軍を追い求める計画で、鍵盤に向かって腰を下ろした。 — 彼は果たしてそうして、十分に上手に行い、ますます上手に行った。しかし楽器が逆らった。それは女性の手のために造られていて、ただ女性的な音色で、一人の女友達と一緒の女友達として、リュートの嘆きで語ろうと欲していた。

カールは彼の演奏を聞いたことがなかった。そしてその充実ぶりに感嘆した。しかしその理由は、講師がいなかったからである。ある種の人間の前では、 — 講師もその一人であるが、 — 演奏する手が凍りつく。ただ対のブリキの手袋をして、あれこれ仕事する按配となる。第二に大勢の前での演奏は一人の前での演奏より易しい、一人の者は明確に魂の前に貼り付くが、大勢は溶け去ってしまうからである。その上に、幸せなアルバーノよ、君は誰が聞いているか知っていた。 — 希望の朝風が音色の中に舞い飛んだ、 — 荒々しい青春の生命が、たくましい肢体と甲高い足取りで、君の前をあちこちし、 — 月光は、現世の粗野な明かりで不浄になることはなく、響く部屋を神聖なものとした。

— リアーネの最近の歌声が君の前に漂っていた。侵入してくる月光で君はやがてそれを読むことができた。 — 母親に近い部屋の小夜啼鳥が、チューバで戦闘に呼ばれたかのように、君の音色と闘った。 —

リアーネは母親と一緒にようやく遅くなってから入って来た。激しい音色の騒ぎは兩人にとって何か硬いもの、苦痛なものがあつたからである。彼は兩人が下の窓際の側面に座るのを見た、リアーネは母親の手を握った。カールは大股で、彼の流儀であちこち動き、時折彼の側で立ち止まった。アルバーノは静かな魂のこの間近さの中でやがてハーモニック荒さから月のように明るい単純な箇所へ踏み出た。そこでは単にわずかな音色が優美女神のように容易に結び合つて、優しく揺れるのであつた。異名同音性の鬼火の人為的混乱は単にメロディー的優美女神の先駆けにすぎなかつた。ただこれらの女神のみがより優し

い魂達にはもたれかかって行くものである。彼にとって、自分は声高にリアーネと語っているかのような錯覚が生じた。音色が恋人達のように親密さと悦楽の前で、同じことを繰り返すのであれば、彼はリアーネのことを思っていて、彼女にどんなに君を愛していることか、いやどんなに君を愛していることか、告げていたのではなかったか。彼は彼女に、何をあなたは嘆いているのか、何をあなたは泣いているのか尋ねていなかったか。 — そして彼は彼女にこう言っていなかったか、この黙した心を見給え、そしてこの心から逃げないで欲しい、純な方よ、敬虔な方よ、私の恋人よ、と。

この善良な若者は、突然愛撫する友が彼の目の周りに、これまで人知れず暗がり愛の余り流涕していた目の周りに両手を置いたとき、赤面した。 — カールは激しく妹のところへ歩み寄って、彼女は自ら彼の手を取って、愛の言葉を語った。それからアルバーノは騒がしい荒々しい音に長く逃げ込んで、目が照らし出された別れのために乾くようにした。ゆっくりと彼は我らの心の揺り籠の揺れを収めさせて、柔らかに小声に結んで、少しばかり黙して、ゆっくりと立ち上がった。 — この若々しい黙した胸には、最も素晴らしい愛が祝福することのできる一切が息づいていた。

彼らは真面目に別れた。 — 誰も音色のことは話さなかった。 — リアーネは神々しく見えた。 — アルバーノには心のこの精霊の時に、すぐ直前に静まった目で、彼女の穏やかに青い目を長く見つめる勇氣はなかった。彼女はその感動した魂を、少女達がよくそうするように、ただ兄の許でのより熱い抱擁で表現した。 — 彼女は別れながらこの聖なる若者に視線と声調を隠すことができず、彼はそれを決して忘れなかった。 —

彼はしばしばこの夜、目を覚まして、何が彼の本性をかくも浄福に揺すのか分からなかった。 — 微睡眠の中で余韻を放つ音色と、夢の中でも彼を見つめている愛する目のせいであった。

第十二ヨベル期

フルレの誕生日と企画 — 号外 — ラベッテ — ハルモニカ — 夜 — 敬虔な神父 — 不思議な階段 — 霊の出現

第五十八周

幸せなアルバーノよ。大臣の誕生日に、何を大臣が言ったか聞いていたら、君は幸せではいらなかったことだろう。

すでにかなり以前から、フルレは憂わしい雷雨の兆候に満ちていて、どの瞬間にも、雷雨が轟きかねないと、 — 人々は案じざるを得なかった。つまり彼は威勢が良くなって、穏やかであったのである。かくて不活発な子供達でも、大いに威勢良くなると天然痘を発する恐れがある。彼は家長であり、暴君であったので、 — ギリシア人はこの両者に単に暴君 [Despot] と言ったものであるが、 — 結婚生活上の「嵐を呼ぶ男^{*1}」として、家

*1 Tempestarii とか「嵐を呼ぶ男」というのは中世では魔法使いで、暴風雨を起こすことができるのであった。人々は教会で彼らに対し、天候の祈禱を行った、あるいは彼らに対抗する別の魔法使いを用いた。

族にいつもの嵐や暴風雨をもたらすことであろうと予期された。一 結婚生活を単に曇らせる夫婦の雷雨素材に決して欠けることはない。結婚生活の別れのためにすら、どんなに些細なことで済むか考えればそうである。例えばユダヤ人の許では単に、妻が余りに甲高く叫ぶとか、食事が焦げるとか、妻の靴を夫の場所に置く等々で済むのである。その上に立派に雷を落とせる幾多のことがある。例えばリアーネで、彼女の許で、一 兄の不始末を、一 襲うことができた。兄は頑なに家から離れ、許しを請わなかったからである。誰でもいつでも同時に妻と娘と息子に怒ってられ、俄雨よりむしろ長雨となれるのである。一人の子供というのは家族全体を楽しい思いにさせるよりも、容易に苦い思いにさせる。

しかしフルレは「微笑む聖ヨハネ」[ダヴィンチ作のイメージ]であり続けた。いや、彼は、一 その確証はあるが、一 娘があるとき侯爵令嬢の首に別れの時すがったとき、彼女に目を光らせて、高貴な方との親密さはただ受け入れるものであり、応えてはならないのであり、高貴な方々が我を忘れるときに、まさに我を忘れてはならないと叱る代わりに、つまり彼女は彼が侯爵に対する最も温かい愛のときでも、作法に反するのを見たことがあるかと真面目に尋ねる代わりに、一 申し上げるが、このことをきつく激しく行う代わりに、ただ美辞を連ねてこう発するような次第に至らなかったであろうか。「いいかね、おまえはおまえの高貴な女友達に対して好意が過ぎるぞ。友好的関係はどういうものか、母親に尋ねるがいい、母親も知っている」と。

ただリアーネは、一 しばしばこの海の風に裏切られたけれども、一 家庭内の平和に言い知れぬ希望と喜びを一杯に感じて、この存続を信じた。殊に父親の誕生日、このオリンピック期、平準時、そのために家庭が多くを準備している日が間近であったので、信じていた。大臣は一年中この一日を窺っていた。誕生日を明らかに忘れてしまうのを忘れずに、誕生日に驚くようにするために、お祝いを言われるたびに、その日の朝、一 仕事のせいだと彼は言い、一 夕方、客人達がやって来ると、一 仕事のせいで晚餐はしないと行って、一 驚かせるのであった。彼は交互に作法の崇拜者となり、偶像破壊論者となり、まさに彼の微光にふさわしく、作法の与党であり野党であった。

リアーネは長いこと兄に迫って、兄が父親を何事かで喜ばせることを約束するようにした。兄はその為に家庭劇を作って、その中で自分とアルバーノとの告解の夜のすべてを挿入した。ただアルバーノは妹役に変わった。喜んでリアーネは誕生日のために更にこの役を覚えた。花の咲くチョッキも準備したのであるが。

大臣はこのチョッキと大尉と大尉のその晩の芝居の劇案内を思案に反して、一 快く受け入れた。いつもは何人かの父親のように、子供達が意に添うようにするたびに一層不平を言うのであったからである。彼はポーランド人^{*1}のように全く上機嫌で家族と踊り、鞭を毛皮の下に隠していた。彼が頭の中に入れていたものはただ次の疑問より何も劣等なものではなかった。つまり素人劇場を開くのは、「読書サロン」が最もいいか、それとも「家庭浴場サロン」がいいかというものであった。というのも両広間とも互いに別の部屋とは

*1 ポーランドの舞踏者はいつも毛皮の下に鞭を有している。踊り子が間違っ一緒に踊ったとき、鞭打って赦免されるためである。『上部シュレージエン月刊誌』、第一編、1788年、七月。

名前が全く異なっていたからである。

その当日となった。大臣がその気位故にアルバーノの気位を憎んでいたから、アルバーノの招待をカールは強引に得なければならなかったが、アルバーノは、残念ながら彼の魂の中に、最後にリアーネが彼を家に帰したときのその声調を有していた。彼の希望はこれまでこの声調で生きてきていた。仕方のないことである。溜め息の空虚な無はしばしば牧人の世界をもたらずか、蜻蛉の羽の上の冥府をもたらずかである。すべての重要なものは岩のように、子供の指で回せるような或る点に置かれている。

しかしその声調は消え失せていた。リアーネは、訪問客の間で、 — その人々の倫理的靈界嫌い^{*1} を全く知りもしないで、 — すべての祈るような情感には教会用扇を置くより他に術を知らなかったのである。

棧敷や平土間、三文ギャラリーはほぼ通常の劇時間には僧祿有資格者の祝賀者で飾られ、清められた。ドイツ騎士団騎士は周囲との鮮やかな対比で際立っていた。訪問の中隊について調査の際、ただ注釈され得ることは、この中隊や反可燃性の体系^{*2} においては、酸素[酸っぱい素材]が主要な役を演じていたということで、これは肺からというよりは心臓から分離されたものであったという点であろう。

カーテンが開かれて、ロケロールが許容と歓喜のかの晩のことを実際よりももっと熱く再演したとき、この夢想的猿真似がまず本当の現実と見えたとき、何と白熱して深く彼はそのことで友人の魂の中へ燃え移って行ったことか。(善良なアルバーノよ。自分自身の幽霊となり、自らの惑わしの自我、模倣の自我となるこの技法、自らの人生の豪華版となるこの技法は、君にはより大きな希望を抱かせない筈であったことだろう)。 — 伯爵は自身の周囲に見られる最も真面目な結社の中で適切とは言えない — 流涕に至らざるを得なかった。何故カールはかの晩のアルバーノの言葉を魔術的に感動したリアーネの口に移して、愛をかくも多くの魅力を通じて痛みに至るほど大きなものにしたのか。 —

ドイツ騎士団騎士でさえリアーネに、日輪の夕焼けを通じて赤面して泳いでいたこの白い白鳥に喝采という幾つかの甲高い、伯爵には厭わしい印を与えた。大臣は、これらすべてが自分の榮譽のために行われ、最後の幕の要点が全く特別なエピグラムの月桂冠を彼の頭頂に置かなければならないということで主に喜んでいた。

彼はその冠を得た。 — その子供のペアは居合わせたエアランゲン文芸新聞と文学報告によって好意的に批評され、王冠、高貴な殉教者の冠を授与された。 — ドイツ騎士団騎士は、戴冠と戴冠凱旋とを挙げる甲高い権利を有し、利用した。低級な人間だ。何故汝の甲虫の目は、感動と兄妹の愛がリアーネの頬を染めている神聖な薔薇の上を、囁りながら這って行くことが許されているのか。 — しかし何と更にもっと老父は元気になって、 — かくて最も年長のレディー達ともいちゃつくことになったことか、 — 騎士がリアーネに対するその関心を空想的にとか感傷的にとかではなく、静かに絶えず近付いて、訳知り顔の注意を向けて、冗談と視線と利口な語りかけとで、遂には何か決定的な

*1 Pneumatophobie

*2 (訳注) Antoine Laurent Lavoisier(1743-94)は、*Traité élémentaire de chimie* で、燃素[窒素]説の Georg Ernst Stahl(1660-1734)を論駁した。

ことを通じて、立派に白日のものとするのをこの老父が見ていた時のことである。 — つまりドイツ騎士団騎士は老父をある小部屋に連れて行き、両人は大いに活気付いて出て来たのであった。

孤独な、自身の心の中に沈み込んでいたリアーネは月桂樹の毒の木から逃れて元気付けてくれる母親の許へ行った。リアーネは日々の集会の嵐のような製粉工程の最中、小声と繊細な耳とを保持して、喧噪からは遠ざかり、ほとんど臆して離れていた。

この美しい魂は何かを察知することは稀であった、 — 美しい魂の察知は別であったが。 — 自分の似姿はいとも容易に察知したが、その反対は難しかった。ブヴェロの接近は彼女には男性的丁重さの通常の前へのステップ、側面へのステップに見えた。彼の騎士としての独身故に、彼のことすべてを解することができなかった。 — 無垢の百合の方が羞恥の薔薇よりも早く輝くのではないか。丁度緋色は最初ただ青白い色合いで、もっと後に太陽の光を受けてようやく赤く輝くようなものではないか。 — 彼女はこの晩母親の側にいた。母親の許で、いつもにない真面目さを感じ取っていたからである。 —

フルレが誕生日の小冠を、そこには花々よりも多くの棘や茎が差し込まれていたのであるが、あるいは茨の小冠を頭から下ろして、家族の許でのナイトキャップを被っていたとき、自分が一晩ずっと考えていた仕事にとりかかった。「小鳩よ」（と彼は娘に言って、バステューユからの立派な表現¹）を借用した）。 — 「小鳩よ、私とギユメット二人だけにさせておくれ」。 — 彼は今や独自のにやにや笑いで上の歯列をむき出しにして言った。自分は自分の希望では、彼女に何か快適なことを話さなければならない、と。「御承知の通り」（と彼は続けた）「ドイツ騎士団騎士には借りがあってな」。 — 彼は恩義のことを言っているのではなく、お金と配慮のことを言っていた。

— クウィンティウス家では、決して黄金を有しないことがとても称賛されることであると主張されている²。私は — 同じことが誓って言われる千もの他の家族を挙げずに、 — ただフルレ家を引用することにする。ある種の家族はアンチモニー同様に、この金属と全く何の化学的親近性をも、たとえそう欲しても、有しない。 — まことはフルレは欲していた。彼はとてもその利点に注目していた（何か別のことに注目してはいなかった）。彼は好んで（単に衝突する場合のみであるが）、良心と名誉を脇に置いた。しかし彼はただ大きな支出と大きな企画のために金を用いた。それは単に、金を吝嗇の最終目的としてではなく、ただ名誉心と活動の手段としてのみ求めていたからである。ブヴェロが侯爵のためにイタリアで購入した若干の絵画のためにすら、彼はまだブヴェロに手付金の借金があって、その金を官房から徴収していた。借金申し込みの文書で、彼は回覧状を通じての如く幅広い交際を行っていた。彼は喜んで結婚契約を借用状に書き換えて、大臣夫人と少なくとも、 — 財宝の最も親密な共同体を形成したかったことだろう。 —

— というのは目下の状況では離婚と破産とは互いに間近に接し合っていたからである。 — しかし申し上げたように、かなりの人間がどんな立派な爪にもかかわらず、 — ロ

*1 そのように施錠者は囚人のことを呼んでいた。

*2 アレッサンドロ・アレッサンドリ『楽しい日々、全六巻』[1523、その五巻より]。

一マの王の驚^{*1}のように、 — 何らその中に有していないのである。 —

彼は続けた、「この不安はひよっとしたら今止むかもしれない。これまで彼に注目していたかい」。 — 彼女は首を振った。「私は」（と彼は答えた）「すでに長く注目してきた、それも本当に嬉しくなる思いだ。私ハトテモ良イ鼻ヲ持ッテイタ。 — 彼はリアーネに本当に関心がある」。

大臣夫人はその経過が飲み込めず、驚きを隠して、分かるように話すよう頼んだ。滑稽に彼の表情には、すぐに腹を立てなければならないという予感と共に喜ばしげな外観が浮かんだ。彼は答えた。「何も気付かないのか。騎士は本気で思っている。彼は今娘と秘かに婚約したいと思っているのだ。三年後には彼は騎士団を抜ける。娘の幸せができあがっている。今回ハ少シ私ノ利ニ乗ッテ欲シイ。私ノ利ハ、貴女ノ利デアル」。 —

速やかに深く動揺させられた母親の心は泣いて、ほとんど隠しておれなかった。「フォン・フルレ殿」（と彼女は幾らか落ち着いて話した）「私は驚きを隠せません。年の差とか — 好みとか — 宗教^{*2}のこのような違いを考えますと」。 —

「それは騎士の問題で、我々の問題ではない」と彼は答え、彼女の憤慨した混乱に元気を貰って、天候の如くその冷たさの中でただ繊細で鋭い雪を投げつけ、霰を投げつけることはなかった。 — 「リアーネの心に関して、貴女にこの心を探って欲しいとお願いしているのだ」。 — 「あんな敬虔な心をですか。 — 中傷です」。 — 「仮にだ。敬虔な心ならば、それだけ一層父親の幸せに適うよう合わせてくれよう。とてつもない利己主義者でないのであれば。従順な娘に強制はしたくないからな」。 — 「コノ件ヲ進メナイデクダサイ。私ノ心ハ重苦シイ。娘の命に障りかねません。いずれにせよとても蒲柳の質ですから」。この言い方はいつでも彼の冷たい霰から怒りの炎を叩きだした。「ソレハ結構」（と彼は言った）「婚約しても変わらないだろう。畜生 — と言いたくなるころだった。 — 誰のせいかね。大尉も同じことではないか。最初私の子供達は大きい見込みがあった。それから何ものでもない。 — しかし奥方」（と素早く毒々しくまとめて、自分の唇と歯の代わりにただ眠っている愛玩犬の聴覚器官をきっちり押した）「貴女だけがリアーネに影響を与えて、一切を仕込み、再度仕込む術を心得ているわけだ。娘はひよっとしたらまだ私より貴女の言うことを聞くかもしれん。そうなると騎士に恥をさらすことにはならんだろう。 — これ以上利点を数え上げはしない」。彼の胸は怒りというコンドルの皮の下、ここで素敵に温められていた。

しかし高貴な夫人は今や憤然と立ち上がって、言った。「フォン・フルレ殿。これまで私のことは話しませんでした。 — 決して察知しようとか、承認しようとか、許そうとは思いません。その逆を行うつもりです。 — フォン・ブヴェロ氏はリアーネにふさわしくありません」。 —

大臣は話の間、何度か芯切り鋏で用もないのに、蠟の明かりの上で挟み切っていて、ただ炎の先だけを切り落としていた。今や怒りの固定空気[炭酸]は、彼の唇の薔薇色を青に塗り替えていた（化学の空気[炭酸塩か]が植物の薔薇をそうするように）。 — 「よろし

*1 両方の爪に何かを有する皇帝の驚と区別するためである。

*2 ブヴェロはカトリックであった。

い」 — (と彼は答えた) — 「私は旅立つことにする。貴女はこの件をよくよく考えられたらいい。しかし誓って言うが、私は他の組み合わせ[カップル]は考えていない、たとえその組み合わせが」(とこの際彼は夫人を皮肉に見つめた)「今の提案の組み合わせよりもっと声望があるものだとしても*1、 — 娘は聞き入れるか、 — あるいは苦しむかだ。 — 決めなされ。 — シカシ私ハ、父ト娘ニ対スル貴女ノ愛ヲ信ジテイル。貴女ハ私ドモヲ皆幸セニスルコトダロウ」。それから彼は去った。雷雨としてではなく、虹としてであったが、この虹の色は八番目の色、つまり黒色だけでできており、もっと詳しく言うと、眉毛からできていた。

数日、母親と — 娘に対して怒った後、彼はルイーージの代理人としてハールハールの侯爵令嬢の花嫁の許へ旅した。困惑した母親は自分の最も昔からの唯一の友、講師に、この悲しい秘密を打ち明けた。両人は今や友人関係という純粋な関係を互いに有していて、この関係はフランスでは女性に対するより高貴な敬意を通じて、より頻繁に見られるものである。朝の露ではなく、朝の霜と共に始まった大臣家の強制結婚の最初の数年、ひょっとしたら薄明の蝶たるアモールが、彼らの後を追って舞ったかもしれない。しかし後には子供達がこのスフィンクス[夜の蝶、蛾]を追い払った。母親としてはしばしばこの妻役を諦めることになった。それ故彼女は自分に特有の冷たく明晰な強さと共にアウグスティに対する関係におけるすべての曖昧なものをきっぱりと奪い取った。彼は自分の堅固さで彼女の堅固さをより容易にした。彼は女性への愛よりも、名誉心の場合に駕籠造り[ひじ鉄造り]に関してひじ鉄を食らうことほど恥と思うことはなかったのであり、ひじ鉄を食らうことは男性も女性同様に恥ずかしいと間違っ信じていたからである。

講師は、夫人は離婚の後でも、 — ただリアーネのために夫人は離婚を引き延ばしていたが、 — 再婚はしないであろう、娘に自由所有地たるクロスター村を残すためにしないであろうと予見できた。この村の保持のために彼女は二十一年間老大臣の爆破砲材、鎌戦車、攻城銃に耐えてきたのである。既成宗教に対する世俗的冷淡さの点だけが夫人とは異なるかくも堅固な優しい男性に対し、自分の大事な娘自身を黙って考えているかどうか、これは別の、もっと素敵な問題である。優しい感情と名誉心は共に、天才的愛よりもより堅固な幸せを愛しい娘に用意すると心から知っていたこのような母親と女友達にとっては、このような返礼の贈り物がふさわしいものであったろう。天才的愛とは、つまり飛ぶような熱意と飛ぶような冷淡さの激しい交替であり、電氣的火花のようにいつも二回砕くもの、飛び込んで来る際と離れ飛ぶ際に二回砕く激しい炎である。講師自身はかの問いを発しなかった。というのは彼は決して不誠実な、大胆な計画を立てることはなかったからである。彼の貧しさと、ある国でのこのような義父の許では、このような結婚計画ほどに大胆なものが考えられたであろうか。つまりある国とは、選帝侯国ザクセンのように、とても恵み深い法律(両親にとってだが)があつて、何年も経過した結婚生活ですら、両親の同意がなかった場合、また解消され得るのである。 —

濡れた目をして大臣夫人は、彼に、再び自分とリアーネに対し昇って来た新たな嵐の雲を示した。夫人は世間に対する彼の繊細な目を、彼の黙した唇を、そして仕事に対する有

*1 彼は貧しい講師との組み合わせを考えていた。

能な手を信頼できた。彼は、 — いつものように — こうしたことすべてを予見していたと言った。しかしブヴェロは自分の騎士十字架を、 — きっと所有欲から — 結婚指輪と取り替えることはないであろう、どのような意図をリアーネに対し実際抱いているとも、と夫人に説明した。彼は夫人に、夫人の傷付いた関係に対する配慮が及ぶ範囲で、ブヴェロの意に添うよう準備するとどの程度まさにリアーネの脆い生命のせいで、大臣はリアーネの生命が枯れる前に、その生命を刈り取るよう誘われることになりかねないと察知させた。というのはフルレは自分の虚栄心が傷付けられることよりも、速やかに名誉に対する不当な要求を呑み込むからであって、恐水病患者が流動的なものより、粗野な塊をより容易に呑み込むようなものである、と。しかしこうしたこと一切は大臣夫人には、中等階級出身の読者が思うかもしれないほどには、非倫理的で、厳しいものとは聞こえなかった。私はより高い階級出身のもっと理性的読者を引き合いに出そう。

アウグスティと大臣夫人は、大臣が不在の間何かをリアーネのためにしなければならぬと見てとって、両人は見事に計画で一致した。 — リアーネはこの素敵な季節田舎に行かなければならぬ、 — 彼女は未来の戦争に対して健康の準備をしなければならぬ、 — この誕生日のせいで回数が増えることになるであろう騎士の訪問を避けなければならぬ。 — 大臣はその土地に対してさえ何も反対できないようにする必要がある。

— これはどこだろうか。 — ただ総裁ヴェールフリッツの屋根の下で、彼はドイツ騎士団騎士が我慢ならないのである。総裁は彼の侯爵に対する有害な関係を知っているのだから。しかし勿論その前にブルーメンビュールの山よりも他の山々を登らなければならない。

読者自身今や、低い山を越えなければならない。この山は短い悲喜劇的号外である。

娘達の緑の市場について

次のことは確かなことである。とても美しくとても金持ちの娘の所有者は誰でも、さながらピットのように屋根の下に保管している。このピットは所有者自身には使えず、長い休息の後、ようやく一人の支配者に売らなければならないものである^{*1}。正確に商業的に話すと、娘達は本来取引の品ではない。 — というのは両親たる冒険貸借者^{*2}のことを誰も、口にしたいくないかの輸送交易の古着商の女達や露店や果実売りの女達と混同することはできないからであり、 — むしろ南の海で一儲けする株とか、それで土地が象徴的に渡される一つの土塊なのである。「私はただ風景だけを売っている、そしておまけに人物像を添える」とクロード・ロラン[風景画家]は、一人の父親の如く語った。 — そしてそれは容易にできた。他人を通じてそれらの人物像をその風景の中に描かせたからであ

*1 私は（例えば売却からそう思われるようには）首相のピットのことを言っているのではなく、ダイヤモンドのピットのことを言っている。このダイヤモンドは今のピットの父親がフランスの公爵領主に商ったもので、その破片の代価になお 12000 ドゥカーテンを得たのであった。[Thomas Pitt のこと。イギリスの首相 William Pitt(1759-1806)のこの曾祖父は 1717 年、自分の名にちなむダイヤモンドをオルレアン公爵に売った]。

*2 (訳注)Respondentia、冒険貸借：積荷が目的地に無事着いた場合に限り返済する契約での金銭貸借。

る。同様にただ騎士領だけが商取引契約、結婚契約に記され、その土地に座す花嫁はおまけとされる。同様により高くなると、一人の侯爵令嬢は、侯爵身分の新郎が果実のせいではなく、土地と領民の蜂の群れがそこに見られるというので、折り取って家に持ち帰る花と咲く小枝というわけである。

一人の父親が、 — 我々の大臣のように、 — 多く財産を有しないときは、子供達を、エジプト人が両親を（つまりそのミイラを）そうするように、請けもどすことのない担保、動産抵当、あるいは帝国抵当として置くことができよう。

今や、かつては単に他人の生産物のみを扱ってきた商人階級もこの取引分野を我がものとしている。しかしこの身分は、娘達の所まで階段を登らなくても、自分の下のドームに、利己的で罰当たりなこととなるに十分な余地を有しているように私には思える。ギニアでは単に貴族だけが商取引を許される。我々の許では貴族にはほとんどすべての取引が、娘達と自分の領地で育つ残りのわずかな物を除いて、取り上げられ、禁じられている。それ故貴族は後者の取引の自由を大事にしていて、高貴な者はここではこの優美な商業分枝に結束したハンザ同盟に見える。かくていわば高貴な身分は本来の意味でより高いスタンド[身分]と比較できるかもしれない。ローマではこのスタンドに売り物の人々は眺められるよう登らなければならなかったのである*1。

このような愛の商売ははなはだ妨げとなる、あるいはそれどころか愛を粉砕するものであると所謂多感な若い心から卑俗な反撥を受けよう。しかしまさにこのことほど愛にとって役立つものはない。というのは取引が結ばれて、帳簿人により（牧師により）主要台帳に記入されさえすれば、娘がその心を想い、大事にしてよろしいという時が始まるからである。つまり結婚後の素晴らしい時で、これは普通フランスやイタリアで、次第にドイツでも、女性の心が自由に男性達の群れの中から選び取ることのできるよりふさわしい時が容認されるのである。すると彼女の国は、ヴェネツィアのように、商業国から征服者の国となる。夫自身もその短い商売の仕事で、以前その愛の点で妨害をほとんど受けなかったように、後になって妨害をほとんど受けない。ただ今や、 — ニュルンベルクではユダヤ人に老婆が後を追ったように、 — 我らの夫には若い女が後を追うようになる。いやしばしば結婚した商売男自身が、家に入れた者に対して愛着を抱いて、 — これは尋常でない幸運であるが、 — モーゼス・メンデルスゾーン[Moses Mendelssohn(1729-86)]が腋に絹の商品の束を抱えながら、情感についての書簡[Briefe über die Empfindungen,1755]を考え出したように、より良き男達は商売をしながら、取引分枝への恋文を冥想し、乙女との取引を — メッシーナの商人が聖母に対して行うように*2、 — 商会として行う。しかし勿論愛と仕事とのこのような有益な結合は稀な鳥であって、余り要求されない。 — — — 先のことは、喜んで、 — 子供の幸せのために戯れる両親に対して書いたことである。今や彼らの戯れと私の戯れを真面目なものにしたいと思っている。まず私は、倫理的に自由な生命[娘達]に対して、恋情やそれどころか恋情の見せかけについて指示し、そして権力の行使によって、自由な全人生に対する有毒な王笏を差し出す君達の権利に関し

*1 プラウトゥス『Bacchides バッキス姉妹』、第4幕、第7場、17。

*2 新集『旅行記』第7部。

て問いただすことにする。君達の人生の十年の修行時代は、才能やその欠如同様、お互いの自由という点でほとんど違いを見いだせない。なぜ君達は娘達に生涯にわたる友情というものを同様に命じないのか。何故君達は二度目の結婚生活においても同じ権利を行使しないのか。しかし君達はどの権利も否認しない。例外は、子供がまだ選ぶ権利を有しない未成年の時代だけである。あるいは君達は自由への教育に対し、離別の際に、謝礼として自由の犠牲を要求するのではないか。一 君達は、自ら教育は受けずに、教育してしまったかのような振りをする。君達はただ、君達が君達の両親に対して支払うことのできない重大な相続した借金を、君達の子供達に対して片付けるだけである。そして私はこの点で単に一人の支払わなかった債権者を知っているにすぎない、つまり最初の人間である。そしてただ破産した負債者のみを知っているにすぎない、つまり最後の人間である。それとも君達は、子供を両親の白い黒人[奴隷]として安売りしていた野蛮な非倫理的なローマ人の偏見で、自分の身を守っているのだろうか。倫理的ではない生命に対する以前の許容された暴力は、その生命が次第に生長する中で気付かないうちに、倫理的生命に対する一つの暴力を忍び込ませるからである。

君達は愛情から子供達をその幸せに強制することが許されるのであれば、子供達は同じように感謝の念から君達を君達の幸福に強制することが許されよう。しかし子供達はその心全体をすべての心の夢想と共に捨て去らなければならない幸せとは何か。一 大抵は君達の幸せである。君達の光明、富貴、君達の敵対、友好を子供達は内奥の犠牲と共に償い、買わなければならない。君達は強制結婚への幸せに対する君達の静かな前提を声高に告白することが許されているのか、例えば結婚生活における愛の欠如は構わないことであるとか、死亡する可能性があるという希望とか、結婚生活購入者の天と結婚生活外の恋人に対するまさかの二重不貞の可能性について、告白することが許されているのか。君達は盗人とならないためには、罪の女達^{*1}を前提としなければならないだろう。

恋愛結婚はしばしば劣等に終わり、強制結婚はしばしば結構なものとして終わる、ヘルンフト派やゲルマン人、東洋人に見てとれるようなものであると私に言わないで欲しい。むしろ代わりにすべての野蛮な民衆とか時代を挙げて欲しい、つまり双方とも夫の方だけを勘定に入れて、妻の方は勘定に入れていないのだから、幸せな結婚生活とは幸せな夫しか意味していない民衆や時代のことである。誰も、女性の溜め息を聞いて数えるのに十分な近さに近付いていない。聞き取られなかった痛みは遂には言葉を失う。新しい傷が最も古い傷の出血を弱める。更に言うと、恋愛結婚の不運に関しては、まさにその拒絶と結婚した者達への君達の戦いがある原因である。一 更に言うと、どの強制結婚も大抵半ばは恋愛結婚である。最後に言うと、最良の結婚生活は中産階級にあり、そこではむしろ愛が結び付いており、最悪の結婚生活は上流階級にあり、そこでは打算が結び付いている。そしてこの上流階級で一人の侯爵がただ自分の心で選ぶと、侯爵はその心を得て、その心を失ったり、騙したりすることはなかった。一一

それでは一体、君達がしばしば最も美しく、繊細で、豊かで、しかし逆らう手を押し付

*1 私はむしろ娘達について語っている。娘達が最も通常の、最大の犠牲者であるからである。息子達は出血しないミサの犠牲である。

けて行く手はどのようなものか。通常は黒く、老いて、枯れた、貪欲な手である。というのは老いた、金持ちの、あるいは登り坂の自由思想家は余りに知識、飽食、自由を得ていて、最も立派な本性[娘達]を盗み取らないわけに行かないからである。完全さに劣る本性達[娘達]は単なる愛人達の手落ちる。しかし、自らの価値から見棄てられて、単に他人の権勢に守られて、自分の幸運を盗んできた幸運で支払って、庇護されていない魂が、愛し、涙をこらえられない魂から長く冷たい生活へ引きずられて来て、その腕の中へ冷たい剣の中への如く押し込まれて、その腕の中でほとんど目許は出血しながら青ざめてびくついているのを目にしている男とは、この男とは何と低級なものであろうか。一名誉の男はすでに赤くなって与えるものである。しかしこの男は赤くならず受け取る。より良いライオン、動物のライオンは雌を大事にする^{*1}。しかしこの奴隷商は強制された者から最後には自由意志という証言をもゆすり取る。

汝が不幸によって幸せにしようと思っている哀れな心の娘の母親よ、私の言うことを聞くがいい。汝の娘が迫って来る悲惨に対し、鍛えていると仮定しても、汝は人生の豊かな夢を娘にとって虚ろな眠りとなしていないか、その人生から娘の愛の淨福な島を奪い、そしてそこで花咲くものすべてを、そこに踏み入るときの美しい日々を、それらの日々が低く水平線上にその花咲く梢と共に横たわっているのを永遠に喜ばしげに見回すことを奪っているのではないか。母親よ、この喜ばしい時が汝の胸の中にあつたのであれば、娘からその時を奪ってはならない。その時が汝から残酷に奪われたのであれば、汝の最も辛い痛みを思い出して、その痛みを遺贈し続けてはならない。

更に、娘が娘の誘拐者を幸せにすると仮定しても、娘がその寵児に対して何であつたか考えてみるといい。牢獄のドアによって永遠に娘の許に閉ざされている典獄を喜ばせるしか娘は甲斐がないのであろうか、と。 — しかしこれほど結構なことは稀である。 —

汝は二重の不運を汝の魂に重ねることになるろう、つまり娘の長い苦痛と、後に拒絶を感じ非難する夫の冷淡さである。 — 汝は人間が最初の朝日の際に必要とする「時」に、つまり青春に、影を射したのだ。むしろ人生の他の日中の時をすべて悲しいものにさせる方がいい。 — それらは皆似通っている、三十代、四十代、五十代のときだ。 — ただ人生の日の出の時に雨を降らせてはならない。ただこの唯一の、決して戻らぬ、代え難い時を陰鬱にしてはならない。

しかし、汝が喜びや状況、幸せな結婚生活、希望、すべての子孫を汝の計画や命令のために犠牲とするばかりでなく、汝が強制する人物本人をも犠牲にするとすると^{*2}、如何な

*1 プリニウス『博物誌』Ⅷ、16。

*2 これは全く有り得ることである。Eduard Hill[1716-75]博士は、イギリスでは毎年八千人が不幸な恋愛のせいで、 — イギリス人女性が感動的に言っているように心が破れて、 — 亡くなっていると算出した。Beddoes[1760-1808]は、ヴェジタリアンの食事は、 — 女性はまさにこの食事を愛好するが、 — 肺病を育み、女性は肺病への傾向を有すると証明している。その上憧れの時期は、郷愁がすでに過たず示しているように、有害な巡回する鉛弾である憧れ故に、胸の病の種子が最も容易に発芽する青春に当たる。かなりの女性が結婚生活において、結婚生活以前にその刃を鋭くして与えてしまった死の天使の前での間違った考えの下で亡くなっている。

ることになるか。誰が汝のことを正当化でき、汝の涙を乾かすことができよう、もし最良の娘が、 — というのはこの最良の娘は傾聴し、沈黙し、死んでしまうこと、ラ・トラップ[La Trappe]の僧侶達はその修道院が燃え落ちたときのようなもので、誰一人沈黙の誓いを破らないようなものであるからで^{*1}、 — もし娘が、申し上げるが、半ばは陽を受けて、半ばは陰となって、外部へは花咲きながら、内部へは冷たく青ざめてしまうならば、娘が、その空虚な心の後を追って死にながら、遂には何も隠せなくなって、年中人生の出発時の最中に没落の青白さと痛みとを抱えて回るならば、 — そして汝が娘を破壊してしまって、汝の良心が子供殺害の汚名を隠しておけないが故に、汝が娘を慰めることを許されないのであれば、 — そして今や遂に疲れ果てた犠牲者が汝の涙の前に横たわっていて、闘っている人物[娘]がかくも不安げに、早期に、かくも疲れて、それでいて人生に飢え、許しながら、嘆きながら、涙と憧れに満ちた眼差しで痛々しく混乱して、諍いながら底なしの死の川に花と咲く肢体と共に沈むのであれば、岸辺の罪深い母親よ、娘をその中に突き落とした、汝、母親よ、誰が汝を慰めようとするであろうか。 — しかし私は罪のない母親を呼び寄せて、重々しい死を見せて尋ねることだろう。汝の子供もこのように果てていいか、と。

第五十九周

それはセサラにとってロマンチックな一日であった。外の天気すらそうであった。陽の光と雨の滴がまぶしく天の中で戯れた。彼はマドリッドから父親の手紙を受け取っていた。その手紙は、彼の妹の間近な死に対してとうとう確実なものという黒い封印を押しているもので、そこにはドン・ガスパールはデ・ロメイロ伯爵令嬢と共に、その後見役を今や止めることになるが、秋に（イタリアの春に）イタリアへ行くという知らせの他には、何ら快適なことは記されていないものであった。二つの音色が彼を愛の音階から引き裂いた。彼はいかに兄弟を、いかに姉妹を愛するものであるか知らなかった。彼女の死の夜とタルタルスの夜の一致に対し^{*2}、彼の心の神聖な像と願望へのこの介入全体に対し、彼の精神は怒り、接触して来る世界全体がいかに無力に彼の中のリアーネの像を排除しようとしていることか怒りを覚えていた。そしてまた、まさにこのリアーネ自身が自分の間近の死を信じていることに痛みを覚えていた。 —

そのとき思いがけない招待が、 — 大臣夫人[自身]から彼に対してあった。 — 陽の光と雨の滴とが彼の天の中でも戯れた。 — 彼は飛んで行った。控えの間には、六つの黙示録の封印を破った[黙示録、5. 小羊のこと]天使が立っていた、 — ラベッテであった。彼女は社交界を恐れて、彼に向かって来て、自分の方から、彼より先に彼を抱擁した。馴染みの実直な顔を彼は喜んで見つめた。涙と共に彼は兄という呼びかけの名前を聞いた、今日は一人の妹を失ったのであった。 —

彼女が出現した理由はこういうわけであった。総裁が最近大臣夫人の許に来たとき、夫

*1 フォルスターの『風景』第一巻。[Georg Forster(1754-1794) Ansichten vom Niederrhein usw.]。

*2 (訳注) アルバーノの妹は昇天日の夜ではなく、聖金曜日の夜亡くなったとされてきていた。

人は軽く手で隠して、彼の娘に「空しい都会生活を知って貰い、気分転換をするために」

一 自分の家を提供し、将来彼の家に自分の娘が訪ねられるよう計ったのであった。彼は言った、「喜んでおてんばを差し出しましょう」と。ブルーメンビュールでラベツテは「いや」と言い、それから「いいわ」と言い、それから「いや」、それから「いいわ」と返事し、母親と真夜中前にもう帝国大審院の検査と貨幣検査日とを万般にわたって、田舎の人間が都会で身に着けるもの万般にわたって済ませてしまって、村で荷造りをし、こちらから都会で 一 開けたのであった。

「こちらでは恐いの」（と彼女はアルバーノに言った）、「人々は皆賢すぎるし、私はとても鈍いから」。 一 彼は家族のクローバー[三人]の他に侯爵令嬢とリラルから幼いヘレナ、彼の感動した心にとっての思い出の日のこの美しいメダルを見いだした。ラベツテに対するリアーネの女性らしい親切は言いようもなく彼の心を捉えた。あたかも彼女をリアーネと一緒に分け合っているように思われた。この穏やかな女性は、偽りや気位を見せずに、優しく思いやって、当惑している相手役の娘を手助けしていた。ラベツテの顔では生来の高笑いをする雄弁な性質が、今や奇妙にも人為的黙した真面目さと対照をなしていた。カールは器用に打ち解けて、彼女をほぐすよりはむしろ編み直すよう仕向けていた。ただリアーネだけがすでに刺繍枠を用いて、彼女の魂と舌を自由に開放させていた。ラベツテは刺繍針で飾り文字や章始めの文字を描けなかったけれども、しかし立派な草書体を描いていた。

彼女は 一 顔を兄の顔に向けて、その顔から勇気を貰って、 一 危険な道中や転倒について明確な報告を行って、民衆がその災難を語る際のその習慣に従って、笑いながら語った。兄が彼女にとっては社交界そのものを犠牲にしての社交界、世界であった。彼にだけ彼女の温かさと弁舌は向けられていた。彼女は言った。自分は部屋から彼が「ピアノを弾くのを」見ることができる、と。リアーネは兩人を早速部屋に案内した。ラベツテの都会生活への要求に対し、如何に豊かに崇高に乙女らしい気遣いが準備されていたことか。チューリップから始まって、 一 これは花咲くものではなく、リアーネの手編みの籠のことで、もっともどのチューリップも春のための籠なのであるが、 一 ピアノに至るものである。勿論このピアノは現在のところ、中途のワルツのために七つのディスカント[最高音域]の鍵しか使えないのであるが。五つの多いとは言えない衣装ケース、 一 というのは彼女はこれで足りると思っていて、町の人に、田舎でもドレスは着られることを見せられると思っていたからである。 一 このケースではその馴染みの花柄の絵とブリキの帯のせいではさながら最初の人生の日々の古い版（インキュナブラ[1500年までの印刷本]）に思われた。そして今日昔の愛の時代のすべての痕跡が彼の心をさわやかにした。彼女は彼に自分の窓を探させた。その窓の一つからは図書館司書が一個の路地の石に揺るぎない視線を据えていて、石に絶えず唾を吐きかけようとしていた。

ここで兄の傍らで親密にリアーネは妹のラベツテに友情の言葉をより声高に言って、自分はどんなに喜ばせようと思っているか、どんなに善意に真実に尽くすつもりであるか請け合った。純粋な宗教的な姉妹的な愛の炎の中を邪推という黄色の目で覗いてはならない。この美しい魂は今まさにその豊かな炎をすべての姉妹の心のために砕いて、その愛が一つの太陽にまとまるようにしていることが君達には分からないのであろうか。丁度古代人によれば夜の分散された稲光が朝方一つの密な太陽にまとまるようなものである。 一 彼

女はいつでもすべての心に対する目であった。母親のように大きな者達にかまけて小さな娘を忘れることは決してなかった。 — 彼女は、 — 誰もこの些細な例を省いて欲しくないが、 — 小さなヘレナにドクトルの禁ずる一杯のコーヒーを注いだのであるが、半ば生クリームを一杯にしてであって、それでコーヒーは威力や欠点を削がれるのである。

性急な侯爵令嬢はすでに十回天の方を覗いていた。天を通じてあるときは光線が、あるときは雨脚が飛んで行ったが、 — 遂に雲の雪が溶けて、青空が広大に育って、ユリエンネは喜んだ若い人々を庭園へ拉致して行くことができ、大臣夫人は不機嫌であった。大臣夫人はリアーネを天泣や、五、六回の夕方の突風にさらし、十九分の一リーニエ[十分の一インチ]の高さの雨水を徒渉して行くことに渋っていた。夫人自身は残った。下では何とすべてが生まれたばかりのようであったことか、反照しながら、愛撫しながら。雲雀は遠くの田畑から音色のように昇って、近くの庭園の上でさえずっていた。 — すべての葉の中に星々が懸かっている、夜風は濡れた装身具を投げ、つまり木の花々のイヤリングを草の花々の中へ投げ入れ、蜂に甘い香りを送った。一年の牧歌たる春は、その穏やかな牧人の国を若々しい人々の間に分配した。アルバーノは妹の手を取っていたが、しかし家についての妹の報告には余り耳を傾けていなかった。リアーネは侯爵令嬢とはるか先を行っていて、打ち解けて開放的な空の許でさわやかな気分になっていた。

突然ユリエンネは彼女と冗談を言っていたが、立ち止まって、伯爵の許に近寄って来て、ドン・ガスパールの手紙のこと、ロメイロ伯爵令嬢についての知らせのことについて尋ねた。彼は顔を火照らして、今日の手紙の内容を知らせた。ユリエンネは観相学的にその微笑の中にほとんどからかいを浮かべていた。リンダの旅行の知らせに対して、彼女は答えた。「彼女らしいわ。何でも学びたいのよ。 — すべてを旅したいの。 — 賭けてもいいけど、彼女はモン・ブランに登るし、ヴェスヴィオ山にも行くことでしょう。リアーネと私は、だから、彼女のことを巨人族の女と呼んでいるの」。何と好意的にリアーネは聞いていたことか、目をまじまじとこの女友達に向けて。「貴方は彼女を御存じないの」と彼女はやるせない思いのこの男に尋ねた。彼は激しく頭を振った。ロケロールが後からやって来た。「お通りください、ムッシュー」と彼女は言って、空けて、彼を先へ促した。リアーネはとても真面目に振り返った。「彼女は、ここよ」とユリエンネは言って、小さな手の指輪を押して、ある肖像画の蓋を跳ね上げさせた。 — 善良な若者よ。それはかの魔法の夜、マジジョーレ湖から昇ってきた形姿そのものであった、君に精霊達から贈られたものであった。 — 「これとそっくりよ」と彼女は動揺した人間に向かって言った。「とても」と彼は混乱して答えた。彼女はこの矛盾を含む「とても」を詮索しなかった。しかしリアーネは彼を見つめた。「とても、 — [そっくりではなく] — 美しく大胆だ」(と彼は続けた)「しかし私は、大胆な女性が好きではない」。 — 「男の方々はそのようね」とユリエンネは答えた。「女性に敵対する力があるのを男の方々は好まない」。

彼らは今やカスターニエン[栗の木]の並木道を通して、聖なる地の前を通り過ぎた。そこでアルバーノは彼の希望の花嫁が初めて噴水の背後で輝き、苦しんでいるのを見たのであった。彼はここで、この不思議な状況の相互作業で不安げに興奮した魂と共に間近の静かな天使の前で跪きたかったことであろう。 — 優しいユリエンネは、感動した心を感じやる必要があると気付いていた。かなり音高い沈黙の後で、彼女は真面目な調子で言った。「穏やかな晩です。噴水小屋に行きましょう。 — 伯爵、リアーネはそこで治った

のです。噴水も出さなければなりません」。 — 「噴水だ」とアルバーノは言って、言
いようもなく感動してリアーネを見つめた。しかし彼女は、フルートの谷の噴水を言っ
ていると解した。ヘレナは彼らの背後で、待つように命じて、小さな両手を摘み取った露を
帯びた桜草で一杯にしてちょこちょここと寄って来て、すべてをリアーネに渡した。リア
ーネを恩典の照合者として、花々の施しを期待していた。「この少女もまだリールでの素
敵な日曜日のことを覚えているのだわ」とリアーネは言った。彼女は侯爵令嬢に二、三本
渡した。ヘレナは頷いた。リアーネが少女を見ると、少女はまた伯爵にもちょっと上げて、
と合図して頷いた。彼が受け取ると「もっとよ」と叫んだ。リアーネがもっと与えると、
更に「もっと」と叫んだ。 — 子供達がよく好みの誇張法で無限に至るようなものであ
る。

人々は緑の橋を渡って、可愛い部屋の中へやって来た。先のピアノの代わりに、音楽の
ミューズのガラス製の聖徒の家、つまりハルモニカがあった。大尉は中の壁紙の小さなド
アの背後で螺子を回した。すると外では一斉に止まっていた噴水が銀色の翼と共に天に跳
びだした。この雨の世界は、外の高みに達したとき、何と燃え上がったことか。

何故君は、私のアルバーノよ、まさにこの時間、必ずしも全面的に幸せではなかったの
か。 — 何故我々の同盟すべてを通じて痛みが突き刺し、何故心は、温められていると
き、その血管のように最も豊かに出血するのか。 — 彼らの上には静かな傷付いた天が
長く白い雲の包帯の中にあった、 — 夕陽はまだ宮殿の背後にあった、しかし宮殿の両
側には雲からなる夕陽の緋色の外套が広い襷をつけて天の上に漂っていた。 — そして
東側の方へ、ブルーメンビュールの山並の方へ振り返ってみると、緋色の生命の炎が上へ
昇っていった。そして黄金の鳥のように湿った小枝の間を抜けて、そして東側の窓辺で、
鬼火が跳ね、しかし噴水はなおその白い銀を黄金の中へ投げ入れていた。 — —

そのとき太陽が、赤く熱い胸と共に、黄金の環を雲の中へ引き入れながら、漂い出て来
た。そして弧を描く噴水が明るく燃え上がった。...ユリエンネはアルバーノを、その傍ら
で彼女はいつもさながら賠償するかのように残っていたが、自分の兄であるかのように[!]
愛想良く見つめていた。カールはリアーネに言った。「ほら、おまえの夕べの歌の出番だ」。

— 「喜んで致しましょう」と彼女は言った。というのは彼女は、自分の楽しみごとの
真面目な憂愁の念と共に離れて、下の一人っきりの部屋で、歓喜の念と目が黙していた
一切を、ハルモニカの鐘で声高に語る機会を得て、とても喜んでいたのである。

彼女は降りて行き、一日のレクイエムのメロディーが昇って来た。 — 響きの穏やか
な西風、ハルモニカが庭園の花々の上を風のように跳んで来た。 — そして音色は上昇
する水の薄い百合の上で揺れ、銀色の百合は上の方で喜びと太陽の前で、炎の花々となっ
て散った。 — そしてその上では母なる太陽が微笑みながら沃野の中で休み、大きく優
しく人間達を見つめていた。 — — アルバーノよ、君は静かな乙女が音色の月光の中、
逍遙するのを聞いたとき、君の心はその喜びと苦しみとを隠したままでいるように君の心
を制御できたか。エーテルの中で滴る音色が、乙女に乙女の生命の早期の消滅を告げて、
乙女から長く柔らかなメロディーが多く潰された日々の薔薇の香油として流れ去って行く
とき、君はそのことを思ったのではないか。アルバーノよ。 — 何と人間は戯れること
か。小さなヘレナは桜草を輝く水の血管の方へ投げて、噴水が桜草を一つ投げ上げるよう
にした。青年セサラは手すりから大きく身を乗り出して、手を斜めにして、水流が自分の

熱い顔と目とに跳ね当たるようにして、自らを冷やし、隠そうとした。 — この炎のヴェールは彼の妹によって奪われた。ラベツテは、この震える音色で身体的にさえかみ砕かれてしまう人間の一人であった。 — 丁度また大尉にとってハルモニカはほとんど感銘を与えなかったようなもので、彼はいつも他の人々が最も感動しているとき、最も感動が少ないのであった。 — この罪のない妹には甘美な痛みほど馴染みのない痛みはなかった。日曜日ごとの閑暇な孤独の中で感ずる苦く甘い憂愁を、彼女や他の者達は、単に厭わしいものとして難じてきていたのであった。今や彼女は突然赤面して、自分の丈夫な心が熱い渦によって捉えられ、回転させられ、燃え尽くされたのを感じた。それでなくても今日は兄と再会し、母親の許を去り、未知の人々の前で、不安に当惑したことで、それに夕焼けのブルーメンビュールの山を見たことでさえも、あれこれと彼女の心は動揺したのであった。新鮮な褐色の目と熟しすぎた豊かな唇は、掻き立てる痛みに対し、戦ったが空しく、熱い源泉が溢れ出て、頑丈な顎を持つ花と咲く顔は、赤面して涙で一杯であった。子供と思われないか、痛々しく恥じ入って、不安になり、殊に他の人々の感動はすべて目には見えないものであったので、燃える顔にハンカチを押し付けて、兄に向かって言った。「去らなくてはなりません。気分が悪いの、窒息しそうです」。 — そして穏やかなリアーネの許へ駆け下って行った。

そちらへ内気な痛みは運ぶがいい。リアーネは振り向いて、彼女が素早く激しく涙を拭くのを見た。彼女の目も涙で一杯であった。ラベツテはこれを見て、勇気を出して言った。「聞いてもらえません、 — わめきたくなります、 — ほんとに恥ずかしいわ」。 — 「あら」（とリアーネは叫んで、喜んで彼女の首に抱きついた）「恥ずかしいことはありませんよ、私の目を見て、 — 私の許に、悲しいときには、いらっしやい。あなたの心と一緒に泣きましょう、私の目より先にあなたの目を拭きたいわ」。 — 圧倒的魅惑がこの愛の音色、この愛の視線の中にはあった。リアーネは、ラベツテは人生の何らかの暗鬱な星のことで悲しんでいると勘違いをしていたからである。ラベツテがリアーネに対してしたほどに、臆した感謝の念が尊敬する心をかくも新鮮に、若々しく抱擁したことはなかった。

そのときアルバーノがやって来た。子守歌が止んで目覚めて、熱い頬からすべての冷たい滴、他の滴を拭うことなく、妹の後を追って来た。「ラベツテ、どうした」と彼は急いで尋ねた。リアーネは、まだ抱擁と感動の最中であって、素早く答えた。「良い妹さんです、私はお兄さんのように愛することにしましょう」。この甘美な言葉と、親密に感動した二人、自分の本性の炎のような嵐で彼は陶然として、抱き合っている二人を抱擁し、同胞化した心を互いに抱き締めたとき、リアーネが狼狽して頭を反らして、彼はびっくりし、真っ赤に燃え上がることになった。 — —

彼は逃げざるを得なかった。こうした取り乱した様で彼はリアーネの前や社交界の冷たい対鏡化の前に残ることはできなかった。しかし夜は日中同様に素晴らしいものになる筈であった。彼は、怒った眼差しのように見える生命の眼差しで、町から巨人族の女の許、つまり我々を同時に静めて高める自然の許へ急いだ。彼はむき出しの水車の車輪の側を、その車輪の周りには奔流が泡立って巻き付いていたが、過ぎて行った。 — 夕方の雲が休んでいる巨人のように広がっていて、アメリカの朝焼けの中で陽を受けていた。 — 嵐はその下へ進んで行き、炎の百手の巨人達が立ち上がった。 — 夜は銀河の凱旋門を

築き、巨人達は暗く移って行った。 — どの四大でも自然は海燕の如くざわめく翼を有していた。

アルバーノはほとんど気付かないまま、リラルの森の橋に横たわっていて、その下では風の流れがざわざわと抜けて行った。彼は、雲のように、彼の太陽[リアーネ]からの光を受けて燃えていた。 — 彼の内面の翼は、駝鳥の翼のように、棘で一杯で、舞い上がると傷付けた。 — ロマンチックな雲の一日、父の手紙、涙で一杯のリアーネの目、彼の大胆さ、彼の歓喜とそれについての彼の後悔、そして今や彼の周りのすべての側での崇高な夜の世界、こうしたもので彼の若い心はあちこち感動して引きずられて行った。

— 彼はその炎の頬で雨で濡れた梢に触れ、火照りは冷めず、音色を出しながら飛んで行く心、つまり小夜啼鳥の間近にいながら、その音色にほとんど聞き入っていなかった。

— 太陽のように心は青白い想念の中を行き、その軌道で星座を次々に消して行った。

— 地上と天上では、過去と未来の中では、アルバーノの前にはただ一人の形姿しか立っていなかった。「リアーネ」と彼の心は言った、「リアーネ」と全自然が言った。

彼は橋を下って行った。そして西側の凱旋門を登った。黄昏のリラルが彼の前に休らっていた。 — するとそこに彼は老いた「敬虔な神父」が門の手すりのところで微睡んでいるのを見た。しかしこの尊敬する形姿は、アルバーノが亡き侯爵の形姿から想像して描いていた形姿とは何と異なっていたことか。クエーカー教徒の[尖鋭]帽子から豊かにこぼれ出ている白い巻き毛、女性的で詩的に丸い額、鷲鼻、晩年になっても枯れていない若々しい唇、穏やかな顔の子供らしいもの、これらが晩年の黄昏の中で休らっていて、星々を眺めている一つの心を告げていた。聖なる眠りは何と孤独なことか。死の天使はこの人間を明るい世界から暗く高く築かれた隠者の庵に導いていた。その友人達は庵の外側にいて、中で隠者は独語する。その暗がりはずますます澄んで行って、宝石や沃野、春の日々全体が遂には微光を放つ。 — すべてが澄んで遠い。 — アルバーノは、人生とその謎を見つめる真摯な魂の眠りの前に立っていた。 — 人生の出入り口ばかりが幾重にもヴェールをかけられているのではない、その短い軌道そのものもヴェールがかけている。エジプトの神殿の周りのように、最大の神殿の周りにもスフィンクス達が横たわっている。あのスフィンクスの場合とは違って、ここでは死ぬ者だけが謎を解くのである。

—

老人は眠りの[尼僧院]面会格子の背後で、自分と一緒に青春の朝の沃野を進んで行った死者達と話していて、重たい唇で亡き侯爵とその妻とに語りかけていた。何と崇高に老いた顔の、長い人生で塗り重ねられたカーテンが、自分の背後で踊っている青春の牧人世界の前に掛かっていたことだろう。何と感動的に灰色の形姿は青春の王冠を戴いて、人生の冷たい夕方の霧の中をさまよい、それを朝の露と見なし、朝と太陽の方を見ていたことか。ただこの老人の巻き毛だけを青年は愛しく思いやって触れた。青年は、昇って来る月がその臉に触れて起こさないうちに、 — 見知らぬ者の姿でびっくりさせることのないよう

— 老人から立ち去ろうと思っていた。ただ彼はその前に恋人の師に間近の小さな月桂樹の枝を冠として贈ろうと思った。彼がその枝を取って戻って来ると、すでに月はその光を大きな臉の上に当てていた。老人は崇高な青年の前で臉を開けた。青年は月で神々しくなっていて、その顔の輝くような薔薇色の月と共に彼の前に冠を有する精霊のように立っていた。「ユストゥスよ」（と老人は叫んだ）「君なのか」。彼は若者を、丁度花と咲く頬と見

開かれた目と共に自分と一緒に夢の下界へ出かけた老侯爵と見なしていた。

しかし彼は直に夢の楽土[エリュシオン]から植物学上のエリュシオンに戻って来て、アルバーノの名前さえも承知していた。伯爵は率直な表情で、彼の両手を握って、自分がいかに長く心から彼のことを尊敬しているか語った。シュペーナーはわずかに、落ち着いて答えた。丁度地上ですべてのことをしばしば見てきた老人達の行うような具合であった。月光の輝きが、今やその長身の形姿に流れ落ちて来た。静かに見開かれた目が照らし出された。その目は見通すというよりは、すべて見通させるという目であった。面貌のほとんど冷たい静かさ、長い形姿の若々しい歩行、年月を頭上に一つの冠として、背の重荷としてではなく、果実としてよりはむしろ花として垂直に保って来た形姿、先の男性的炎の熱意と女性的優しさの奇妙な混合、こうしたことすべてがアルバーノの前にさながら東洋の預言者といった者と呼び起こしていた。青春のアルプスの山々の間をざわざわと下って来たこの広い奔流は、今や静かに平らかにその沃野を抜けて来ている。しかしその奔流に岩を投げ込むと、その奔流はまたざわざわと上昇するのである。

老人はその若々しい若者を見つめるほどに一層温かく見つめていた。我々の日々では青年達の青春は肉体的美しさであると同時に精神的美しさである。老人はこの美しい夜、自分の静かな庵へ同伴するよう彼を招待した。その庵は向こうの塔の先端の隣にあって、その先端は上の方でフルートの谷を覗き込んでいた。彼らが今やさまようこの奇妙な迷路では、リラルがアルバーノの前で混乱して一つの新世界となった。夜は飛んで行く銀色の雲のように薄明の美しいものがいつも別々の列をなしてごちゃごちゃと建立され、時に両者はげげしい色の花々や奇妙な香りの外国風な植物の間を抜けて行った。敬虔な神父は彼に彼の以前の生活や今の生活を興味深く問いただしていた。

彼らは大地の中のある暗い通路の前に来た。シュペーナーは友好的にアルバーノの右手を握って、言った。この通路は上の彼の山の住まいに通じている、と。しかし直にそれは下って行くように見えた。谷の奔流、ロザナ川がまだこの中へも響いて来た。しかしただ月光の個別の滴が散在する、小枝で覆われた鉦山の開口部を通じて漏れて来た。洞は更に下って行った。 — 更に遠くに谷の川の音がざわめいていた。 — しかし一羽の小夜啼鳥がますます近くで歌を歌っていた。 — アルバーノは落ち着いて黙っていた。至る所、彼らは光輝の狭い門の前を通り過ぎて行った。光輝はただ天の一つの星から投げ込まれているかのように見えた。 — 彼らは今や遠くの照らし出された魔術の木陰道の許に下って来た。明るい赤色の、毒々しく暗い花々と、小さなぎざぎざの縁の葉と大きな広い葉によってドームが形成されていて、混乱した白い光が、半ば侵入して来る光線で生き生きと撒かれ、半ば百合から単なる白い花粉として飛ばされて、目を陶然とした目眩へと引き入れた。 — セサラは眩惑されて足を踏み入れた。彼が右手の雨状の炎の方を視ると、シュペーナーの目が鋭く左手に据えられているのを見た。 — 彼が見つめていると、素早く一人の老人が、全く亡き侯爵に似た者^{*1}が、隣の洞に進んで行くのが見えた。 — 彼の手はびっくりしてびくついた。シュペーナーの手も同様であった。 — シュペーナー

*1 (訳注) この場面は後に明確な説明がない。アルバーノは凹面鏡で老人の姿にされ、故侯爵に似て見える。それ故シュペーナーもこの道を通って帰らぬよう、秘密が明かされぬよう助言している。

ーは更に急いで降りて行った。ー とうとう一つの青い星座の見える開口部が輝いた。

ー 彼らは外に出た。...

何ということか。新たな星々のドーム。ー 青白い太陽が星々の間を移って行き、星々はその後を戯れながら漂っていた。ー 下の方では微光と花々で一杯のうっとりとした大地が休息していた。大地の山々は輝きながら天のアーチの下で駆け上がっていて、シリウスの方へ屈み込んでいた。ー 未知の国を通して歓喜が夢のようにさまよい、人間は喜びの余りそのことを泣いた。

「これは何ですか、私は大地の中にいるのですか、大地の上にいるのですか」（とアルバーノは驚いて言って、混乱している目を生きた人間の顔へ向けた）ー 「私は一人の死者を見ました」。ー 先ほどよりもはるかに愛想良く老人は答えた。「これはリラールだ。我々の背後に私の庵がある」。彼は下降の機械的見せかけ[pons heteroclitus]のことを^{*1}説明した。「ここに私はすでに何千回も立って、心から神の仕事に喜びを感じたものだ。ー その形姿はどのように見えたかな、息子よ」。ー 「亡き侯爵のようでした」とアルバーノは言った。当惑して、しかしほとんど命ずるようにシュペーナーは小声で言った。「時期が来るまで私のように黙っていることだ。ー 侯爵ではなかった。ー おまえの運と多くの者達の運とがこれにかかっている。ー 今日はもはやこの通路を通ってはいけない」。ー

アルバーノは、奇妙な一日全体で半ば憤激して、言った。「分かりました。タルタルスを通して戻りましょう。しかし私をいつも追いかけてくる幽霊どもは何を意味しているのでしょうか」。ー 「おまえは」（と老人は言った、彼の額に愛しながら、元気付けながら、指を置いて）「周りにただ姿の見えない友人達を有している。ー いつでも神を信頼することだ。多くのキリスト教徒が言っている、神は間近にいるとか、遠くにいるとか、と、また、神の英知や神の善意はある世紀や別の世紀では全く別様に現れる、と。ー これは空しいペテンだ。ー 神は変わる事のない永遠の愛ではないか。神は我々を或る一時間のときも、別の一時間のときも、変わらずに愛し、祝福しているのではないか」。我々は日食を本来は地球食と名付けるべきであるように、単に人間のみが食し[暗くなり]、無限の者が食するのではない。しかし我々は、水中の太陽の食[暗黒化]を見守りながら、水が震えると、御覧、愛する太陽が戦っていると叫ぶ民衆に似ている。

アルバーノは老人の清潔に整えられた住まいのひっそりとした佇まいの中にただ重苦しい気持ちで入って行った。彼の火山の熱い灰の中では、すべてがより過剰に発芽し、緑に茂っていたからである。シュペーナーは自分の山の背から向こうの所謂「雷の庵^{*2}」を示して、夏はそこに住むよう勧めた。アルバーノはようやく別れて行った。しかし彼の動揺した心は一つの海であった。その中では朝日が輝きながらまだ半分だけ昇り、夕方に鉛色の雷雨が出現し、嵐の許で煌めいて膨張するのである。彼は低地から、見送っている老人

*1 イエナのヴァイゲルは「あべこべの橋」、人間が登ることで下って行くと思ってしまう階段を発明した。ブッシュ『発明便覧』第七巻。[Erhard Weigel(1625-90):Mathematische Kunstübungen, samt ihrem Anhang.1670. この書をブッシュは引用している。Busch:Versuch eines Handbuchs der Erfindungen 1792f.]

*2 その名前は、その高さと、稲妻によく襲われることから来ている。

を見上げた。しかしこの老人が沈んだり、上昇したりしても、今日彼はほとんど驚かなかったかもしれない。冷たい手が介入して来る自分の恋愛に対して、自分の命をかけて保証し、命を犠牲にするという決然とした勇気を出して、怒りを覚えながら、彼は夜の拡大鏡を通じて黒い巨人の群れに広がったタルタルスを何の恐怖心も抱かずに歩いて行った。このように 霊界は単に我々の内部の霊界の一部であって、自我は単に自我を恐れているに過ぎない。彼は、考えしか物音を立てない黙した夜の中、心の祭壇の前に立っていたので、彼に大胆な精神が数回助言した、老死者を呼び出して、塵で一杯の彼の心の許で声高に誓うがいい、と。 — しかし彼が美しい空を見上げたとき、彼の心は神聖化されていて、ただ心はこう祈ったのであった。「神よ、私にリアーネを与え給え」。 —

暗くなった。輝く、天の中へ弧を描く、新しい大地の山々と彼が見なしていた雲が、月に達して、陰鬱に覆ってしまったのであった。

第十三ヨベル期

ロケロルの愛 — 恋する男達に対するフィリップカ[デモステネスの Philipp von Mazedonien に対する演説にちなむ弾劾演説] — 絵画 — アルバーノ・アルバーニ — 和音的差し向かい — ブルーメンビュールへの旅

第六十周

ハルモニカがラベッテの心から引き出した滴から老魔術師たる運命は、他の魔術師が血からそうするように、ひょっとしたら陰鬱な形姿を準備するのかもしれない。というのはロケロルがそれを目撃していて、彼はこれまで長編小説よりは仕事にいそんでいた心の感情に関心を抱くことになったからである。今や彼は彼女にもっと関与して来た。彼は誓いの夜以来、自分の心をすべての品位ない鎖から引き抜いていた。勝利のこの自由の中で、彼は一層気位高く徘徊し、両腕をより軽快に、より憧憬を抱いて、高貴な愛へ差し出した。彼は今や自分の妹の許を絶えず訪れた。しかし彼はまだ自制していた。ラベッテは華奢な妹の側では彼にとって十分に美しくなかった。ヴァン・デア・ライス[Rachel Ruysch (1664-1750)]の薔薇の側のリボンの薔薇の按配であった。彼女自身素朴に言った、自分は白いリノン[極上のリンネル]を着た自分の村娘の色では、白いカップの中の褐色の紅茶のように見える、と。しかし彼女の健康な、まだ悲劇的滴で生氣なく腐食されていない目と新鮮な唇の許で生命は輝き、彼女の力強い顎と驚鼻は勇気と力とを予感させ、約束していた。そして彼女の率直な心は決然と激しく把握し、反撥した。彼は、彼女を — 験すことに決めた。タルムード*1 は、その品を買う気のないとき、その品の値段を尋ねることを禁じている。しかしロケロル連中はいつも値切って、更に進めて行く。この連中は、子供が蜂をそうするように、一つの魂を二つに裂いて、その蜜を、蜜蜂が集めようとしている蜜を食べてしまう。この連中は、するりと逃げる鰻の軽快さを有するばかりでなく、腕を巻き付けて碎いてしまう鰻の力をも有する。

*1 Basa Mezia c.4.m.10.[Mischnah, Baba Metzia. 第4章10]

彼は今や彼女の前で、彼の多彩な本性のすべてのまぶしい諸力を戯れさせた。一 自分が勝っているという感情故に、彼は自ら自由に美しく動き、屈託のない心はすべての面に開かれているように見えた。一 彼はとても自由に真面目さを冗談と、熱を輝きと、最も偉大なものを最も卑小なものと結び付け、力を穏やかさと結び付けた。一 不幸なラベッテよ、今や君は彼のものだ。彼は君を君の堅固な土台から猛鳥の翼で大気中に運び、それから君を投げ落とす。避雷針の許の植物のように君は君の諸力を豊かに彼の許で発展させ、上に緑色に茂って行く。しかし彼は稲妻を自らと君の花々に引き寄せ、君の葉を落とし、砕いてしまうことだろう。

ラベッテは、このような人間を考えたことがなかったし、いわんや見たことがなかった。彼は強引に彼女の健康な心の中へ侵入して来た。そして新たな世界が彼の後に付いて来た。大尉に対するリアーネの愛故に、ラベッテの愛は更に高く昇った。両人は自分達の兄について交互に好意的に話すことができた。善良なリアーネは、この女友達に難しいと思えるようなことを色々教えようとした。殊に神話学を教えようとしたが、これは神々のフランス語の発音で、彼女にとっては更にもっと使いものにならないものであった。本を通じてさえ、リアーネは彼女をまとめようとして、読書は彼女にとって一種の平日の礼拝となつて、この礼拝に彼女は真の敬虔さをもって臨み、その礼拝が終わると彼女はいつも喜んだ。こうした認識のすべての汲み水車を通じて、ロケロルの愛は流入し、回転し、汲み上げるのを助けた。一 今や何のきっかけもなしに彼女の顔全体にいかにも多くの赤面が生じたことか。笑いが、いつもは笑って快活になっていたのに、今や余りに多く現れ、単に溜め息を付こうという寄る辺ない心を示していた。

カールがかつて冗談で彼女の背後に忍び込み、彼女の目を手で覆って、兄と紛う声の調子で、穏やかに妹の名前[ラベッテ]を言ったとき、彼女の状況はそのようなものだった。彼女は類似の声を取り違えて、彼女は夢中になってその手を押し付けた。しかし彼女の目は熱く濡れていた。彼女は間違いに気付いて、彼女の顔の夕焼け、朝焼けを隠して、部屋から逃げ去った。このとき彼はそのことで彼を非難したリアーネの目をもっと近寄って見た。彼女の目も泣いていた。彼女は彼に最初妹としての感動の対象を隠そうと思っていた。しかし他人が否と言うと、以前からそれは彼にとって助け船、追い風で、彼を港に連れて行くのであった。リアーネはますます動揺して行つた。最後に彼女はこう語つた。ラベッテがアルバーノの青春時代の話をして、自分はロケロルの青春時代の話をしなげな得なくなつて、彼女に仮装舞踏会での瀕死の夜の話をする事になつて、彼の血の付いた服を見せることさえした、と。「すると彼女は」（とリアーネは言った）「あたかも自分があなたの妹であるかのように私と一緒に心から泣いたの。一 とても心の優しい方」。カールは両人が二つの沃野のように結び付いているのを見た、つまり両沃野に滴と共に立っている虹を通じて結ばれているのであった。彼は感謝の愛でリアーネを胸に抱き寄せた。「あなたは幸せですか」と何か悲しいことを予告する調子でリアーネは尋ねた。

彼女は自分の一杯の心を開いて、彼にすべてのことを話さなければならなかつた、一 未知の声がリンダ・デ・ロメイロを彼の友人に約束したタルタルスの夜のことすべてを彼女が聞き及んでいることを知って彼はびっくりした。誰から聞いたのか。一 彼女は頑なに黙っていた。彼は、それはただアウグスティであろう、彼一人が知っているのだから

らと安心した^{*1}。「天の心のリアーネよ、おまえは思うのかい」（と彼は言った）「私と私の心の兄弟とが奪い合って仲違いすることがあるとでも。有り得ない、有り得ない。――彼は猿真似の霊と猿真似の目的を呪っている。――彼は私を愛している。私の心は彼の心と一緒になれたら幸せであろう」。この最後の言葉の幾重にも感動的な意味は、彼をある神聖な憂愁の念に溶かして行った。

しかし彼女は敬虔からのように衷心から吐露しながら霊を引き受けて言った。「そんな風に霊の出現を言わないでください。幽霊はいると私は思います。ただ霊を恐れる必要はありません――」。しかし彼女はここで自分の経験についてのヴェールを固く手で押さえた。彼も夙に承知していた、彼女は、百合の手に青い血管を見ただけで傷のように臆する彼女のほとんど痙攣性の柔らかな感情にもかかわらず、死者達を前にしたときとか、空想の丑三つ時には思いがけず元気に見える、と。

今や彼の心を駆り立てて行く様々な種類の波の背後でラベッテは影が薄くなっていた。彼はただ自分のアルバーノに、講師の奇妙な暴露について告げる時だけを求めて燃えていた。

第六十一周

大尉が自分の友人に多分アウグスティと思われるその暴露について打ち明ける前に、アルバーノはほとんど全く教師のペアと不和に陥っていた。お互いの為に鼓動し、更に好んで戦う若者の心の輪の中では、いつも二人は離れがたく抱き合い、他人を犠牲にして一緒になるものである。

アルバーノは、カールが好きになれない者は誰であれ、大胆にその人から離れて行った。ショッペはいずれにせよ人々から長く愛されることは少なかった。全く自由な人間を我慢する人々は少ないからである。ガレー船の鎖で繋がれているとき、花輪ならばもっと良く持つと人々は考える。それ故ショッペはある人が「余りに窮屈な愛でもって固く彼を抱き締めて、あたかも腕が八十人頭部用の包帯を持っているかのように動かさない」となると、我慢できないのであった。彼のパントマイムの嘲った活気は、厳しい観察を見せかけて、大尉の心を、講師の余裕のある顔よりももっと冷え冷えとさせた。講師はまさにそれ故に万事をもっと鋭く静かな目の中に据えるのであった。

善良なショッペはアルバーノのような若者が決して許さない一つの欠点を有していた。つまり彼の言う「チョウザメの浮き袋[接合剤]による女々しい聖人像」に対する彼の不寛容である。心の穏やかな迷い、聖なる誇張で、これを通じて人間は、須臾の人生にもっと須臾の喜びを織り込むのである。あるときカールは舞台の上にいるかのように腰に手を当てて、頭を垂れて、あちこち歩き、たまたま語って、名目図書館司書が聞き取ることになった。「私は青春時代、人々から理解されることはまだ少なかった」。それ以上彼は何も言わなかった。しかし冗談で、一マンデル[15]の雀蜂、一ショック[60]の蟹、一カンネ[缶]の山蟻を突如図書館司書の肌に振りまいて、ざっと刺したり、抓ったり、噛んだりする作

*1（訳注）アウグスティからではなく、ユリエンネからと思われるが、作者の説明はない。

用を観察して見るといい、司書が先の言葉を聞くや、若干司書の中でぴくつき、膨れ上がり、激して来たものを思い描くことができよう。「大尉殿」（と彼は深呼吸しながら始めた）「私はこの錆び付いたがさつな大地で多くのことに耐えています。饑餓、一 ペスト、一 宮廷、一 結石、一 極地から極地にかけての阿呆ども、一 しかし貴方の言葉は私の両肩に余ります。大尉殿、貴方は、一 全く確かなことに、一 当然何事をも述べてよろしい、貴方は、仰せの通り、理解されないのですから。しかし天にかけ、悪魔にかけ。いや、私は三万人もの青年や少女が貸本文庫から貸本文庫にかけて皆胸を膨らませて、辺り構わず言い散らし、嘆いています。誰も自分達のことがかからない、祖父も、教父も、副校長も分かってくれない、と。包装紙のような日常の輩は、自身が分かっているのですから。しかし若者はその言葉で、単に少女のことを言っており、少女は若者のことを言っているのです。若者と少女達は互いに分かるのです。恋愛から私は馬鈴薯のように十四通りの料理を用意しましょう[『ヘスペルス』第二版序言参照]。恋愛から、ゲッティンゲンの熊^{*1} に対するように、その動物的毛をむしり取って御覧なさい。ブルーメンバッハ[Blumenbach(1752-1840)]にもそれが恋愛とは分からないことでしょう。

フォン・フルレ殿、私はただの低劣さからの魂のこの忌々しい昂揚をよくイギリスの馬の尾と比べたものです。この尾もいつも天に向かって立っていますが、ただその腱が断ち切られたからなのです。とても卑俗な輩が、自然の即興戯歌、トランペット小品の輩が、恋愛によってすべての人々を凌駕していると考え、豚の膀胱を取り付けられた飛んでいる猫^{*2} のようなものであると毎日聞かされ、毎日読まされると頭に来ませんか。

一 これらの輩が恋愛の兎の寝床、商業町へ、別世界へ、参上し、ブロッケン¹の山へ登るが如くであるとか、奴らが劇場の着衣室の中の、一 これはそれからその逆となるのですが、一 囿場で、一 結婚するまで、狼藉を働くというのを聞かされるとですよ。するとそれは過ぎてしまい、空想とか詩は、今ようやく役立つであろうのに、過去のものになってしまいます。奴らが詩集から逃げ去ること、死者から虱が逃げ去るようなものです。死者には毛が生え続けるのでありますが。第二世界に奴らはぞっとします。奴らが寡夫や未亡人となったら、情事は、豚の膀胱も、鷹狩りの囿[ペンの戯れ]も、第二世界というスペインの壁[屏風]もなくて、済ませます。一 このようなことは、大尉殿、頭に来ませんか。そして正義の者は、不当な者にかつとならざるを得ません、残念ながらお聞きの通りに」。一一

アルバンは決して軽率に許すことはなく、黙って、彼が不当に言ったように、愛の炎を諷刺的胆汁[痲癩]で消すような心から離れて行った。

アウグスティとの友情の鎖では全く一つの輪が次々と千切れることになった。伯爵は講師の中に卑小な精神を見いだした。これは彼にとって邪悪な精神より厭わしいものであった。一 立派な宮廷人の優美さ、一 一人っきりの時でさえ保たれる彼の作法、一 最も些細な秘事をも大きな秘事同様に保とうとする彼の性向、一 どんな行動の裏でも長い計画を立てようとする彼の性癖、一 宮廷や町での真の歴史的源泉を知ろうとす

*1(訳注) 馬の話で、アメリカ産河馬と称した逸話。Justinus Kerner: Bilderbuch aus meiner Knabenzeit.

*2(訳注) William Hogarth(1697-1764): First Stage of Cruelty. 参照。

る彼の真理への欲求、 — 哲学に対する彼の冷たさ、これらが、アルバーノが彼について張り詰めていた像をはなはだ乾燥させ、その像はしわくちゃになり、割れ目ができてしまった。このような違いが生ずると、教養ある人間の間では、公然たる諍いには至らない。しかし秘かに内部の人間に一つの武器が次々に生じて、遂には厳しく武装して構え、戦い始めることになる。

さてその上講師は大尉を心から厭わしく思っていた。大尉は大臣夫人に多くの不安な時間を用意し、リアーネにとって、それにアルバーノにとってすら、多くの金を要したからであり、講師には若者アルバーノを損なうように見えたからである。アルバーノのいつもは真っ直ぐに上昇して行く炎は、今や愛の障害によって四方八方に曲がって、はんだ付けの炎のようにより鋭く輝いた。しかしこの鋭さをアウグスティは友人ロケロールのせいにした。アルバーノは、彼が愛している人々には実際よりもより温かく、彼が我慢している人々には、より冷たく思われていて、彼の真面目さは容易に反抗心や気位と混同された。しかし講師は、自分へのアルバーノの愛がカールによって盗まれたと思っていた。

彼は、このジュピター神の天体に播種されている欠点の立派な地図を、伯爵にこっそり教えようと、上品にまた大胆に試みた。しかし彼はどんな地図をも引き裂いた。 — かの晩のカールの痛々しい告白は他人のすべての注進を消し去った。 — 友人に対しては全てをかばい、すべてを信頼しなければならないというアルバーノの立派な信仰はどんな影響をも排した。人間が友情と愛の祭壇のためにまだ欠点のない犠牲や司祭を求め、 — 眺めるそうした神聖な時があるものである。そしてたびたび欺かれた胸が、他人の胸許で、瞬間の愛の醜悪の最中に、疾患の冷たい隣接を予言する余りに苛酷な時があるものである。

アルバンがカールについての講師の非難の多くについて、例えばカールの野蛮さや無秩序について、アルバン自身が他人の非難の際に言われていると思うが故に、聞き入れない、丁度フランス人が（シクニス[Philip Thicknesse(1719-92)]によると）他人への称賛を身内の者達への称賛と思うようなものであるといつでも講師は気付いたので、講師は類似性の代わりに大尉の出来上がった非類似性、つまり彼の女性に対する軽薄さを攻撃した。 — しかしこれで彼は更に台無しにした。というのは愛においてカールは彼にとってより高次の炎の崇拜者であって、講師は単に、この炎の炭をただ黒くする者にすぎないと思われていたからである。アウグスティは愛についてはかなり上流世界の原則を育てていて、単に名誉心から、決して行為に愛を刻印することはなく、大地に近い愛の曇天だけを認めていた。しかし大尉は愛の第三の天、喜びの天について語った。そこでは単に聖人達のみが浄福者なのである。アウグスティは上流社会の慣習に従って、自分の行動よりもはるかに自由に語り、時折、あたかも或る — 鉱泉の広間で食しているかのようにあけすけに語った。カールは少女のように語った。アルバーノの処女のような耳は、 — これは容易に立派な客間では聞き漏らし、書斎ではしっかり聞いているものであるが、 — 次のような経験不足と重なって、つまりシニカルな弁舌はしばしば最も禁欲的な人間達の許で、例えば我々の茶番好きな先祖に見られ、禁欲的な弁舌は謙虚な蕩児に見られることを知らず、 — 両方のせいでこの純粋な人間は二重の錯誤に巻き込まれざるを得なかった。

かくて彼の中でアウグスティはますます多く海燕を狩り立てた。両人はしばしば完全な別離と要求の間近に立っていた。というのは講師は余りに名誉心を多く有していて、何ら

かのことに臆することがなかったからで、冷静な面持ちで、他の人々がかっとした面持ちでやるような具合に敢行したからである。

今やカールは彼の友人に、友情のあらゆる思いやりを見せてではあったが、かのタルタルスの夜のことにリアーネが承知していることを打ち明けるに及んだ。 — いつもは口の難い講師がしゃべってもっと近付くという利点を求めているに違いないと、アルバーノは結論付けた。そして嫉妬のヒキガエルが、これは目に見える出入り口はないのに生きた木の中に住み、育つのであるが、彼の温かい心の中で吸い付いた。返答のない愛はいずれにせよ極めて嫉妬深いものである、講師が、多くの歯車装置のかみ合っている幽霊場面の機械仕掛け監督ではないと誰が知ろう。こうしたことすべてがアルバーノの秘かな推論であった。公然と告訴することは彼の名誉心ができなかつた。しかし彼の温かい、いつも自らを語る心は、より温かい隣接を求めていた。この隣接は、彼が敬虔な神父に従って、リラルの雷の庵へ、 — 花々と頂上の許で、 — 引っ越すと見いだされることになった。自然の心にもっと間近に臥して、より美しく夢想し、癒えるためであった。

ただ一つの温かい太陽のように明るい箇所が、彼にとってカールの話の絵の中にあつた。つまりひょっとしたら伯爵令嬢に対する彼の関係についての誤解のせいで、兄はリアーネをこの誤解から救い出したのであるが、リアーネが彼に対して毎度同じように冷淡な振る舞いを見せてきたのかもしれないという希望であった。この太陽の箇所に、ラベツテが短い書き付けを寄越して、自分は土曜日、大臣が戻って来るので、両親の許に帰ると書いて来た。かの希望、 — この知らせ、 — 将来もっと状況に恵まれなくなることに、 — リラルへの自分の引っ越し、こうしたことすべてに導かれて、彼の中で二人っきりの瞬間をもぎ取って、その時にリアーネの前で、自分の魂のヴェールと彼女の魂のヴェールを投げ棄ててみようという計画が決定された。

第六十二周

アルバーノが大臣の家へ、ラベツテから別れるために、 — リアーネから別れるためと彼の中で震える声があったが、 — 来たときの日は奇妙に様々な偶然が交錯した。ラベツテは窓から自分の部屋へ来るよう彼に合図した。彼女は自分の服というイカロスの翼を折りたたんでいた。彼女の内面には屈服させる嵐が吹き荒れていた。カールが彼女の心の平衡を自分の温かさで崩して、それを報酬の言葉でまた元に戻すということをしなっていた。ラベツテは鳩のように高い有害な炎の周りを飛んでいた。鳩のように羽毛を焼かれて逃げ、またやって来て、遂にはその中に散ってしまうことのないようお願いしたいものである。 — 彼女は言った、昨日一群れの羊が町の中を追われて行くのを見たときから、家族の許に帰りたい思いが増している。土曜日にはリアーネと母親とが彼女の伴をして、教会の落成式と侯爵夫妻の埋葬に列席することになっている、と。彼は余りに早く急いで、今日庭でリアーネとの内密の瞬間を用意して欲しいと頼んだので、リアーネが彼女の許に残り、滞在するという素敵な知らせを聞き逃してしまった。

残念ながら彼は大臣夫人の許で、素晴らしい絵の持参者を見いだした。この者は自然同

様、彼の春の始まりばかりでなく、彼の秋の終わりにも有毒な花々^{*1}をもたらすもので、フォン・ブヴェロ氏であった。ディーアンがブヴェロにローマから四枚の天上的複製画を送っていた。これらの絵を彼は素っ気ない芸術家の口調で見せていた。ー リアーネはいつものようにまた伯爵を迎えた。例えばラファエロの『小椅子の聖母』が、その天から落ちて来たような女神アテネ像[守護聖像]の中にリアーネの華奢な魂は閉じ込められていて、彼女の最も神聖な秘密の国璽保管人であったのであろうか。すべてを忘れての芸術家の熱意が彼女にはとても向いていた。彼女の視神経は長く絵を描くことで、さながら優しい触角となっていて、これが密接に美しい形式の周りに連なっていた。ある種の女性の像は、ー 例えばこの像であるが、ー 彼女の魂全体を刺激した。つまり彼女は子供時代、長編小説のヒロインやいつでも人目につかない女達から輝かしい星座を自分の内部の天に描いて貰っていて、そういう女性の一人と出会うことに恐れと同時に憧れを感じていた。それ故彼女は自分の空想のこの巨大なニュンファイオン[古代ローマの華美な建物]から容易に眩惑されて、このような炎のような心の敬意を抱いて純なる女友達やロメイロ伯爵令嬢に向かって行った。ある種の絵はこれらの祭壇画を複製のように運び返すことになった。良き女性のリアーネはそうは思わなかったが、しかし多分彼女の男友達はこう思っていて、つまりこの愛して見下ろしている聖母マリアの目を単に生命を有して動くようにさせればいい、この唇に単に温かく声を発するようにさせればいい、ー と思っていて、そうなるリアーネを有するのであった。

ドイツ騎士団騎士は続けて、兄弟に一つの夢を物語っているラファエロのヨゼフと、王に一つの夢を説明している中年のヨゼフ[両作ともヴァチカンのラファエロ派作]、ラファエロの三作を言葉に翻訳し始めた。それも大層立派に、機械的なものとか天才的なものへの多くの洞察を有するばかりでなく、すべての人間的特徴や倫理的特徴についても明確な強調を伴ってなしたので、ー アルバーノは騎士のことを偽善者と見なし、リアーネはとても立派な人間と見なした。彼女はどの言葉も広く開けられた心で理解した。ブヴェロが予言者ヨゼフを、同時に子供らしく、執着せず、静かで、岩の如く堅固で、白熱して輝き、脅かすようであると描いたとき、その原物は彼女の側に立っていた。

ドイツ騎士団騎士は更にダヴィンチ作の『神殿の少年キリスト』^{*2}について、つまり一つの顔の中での少年と青年の義兄弟の契りや異腹同等相続契約について思い付いたことを立派に語って見せた。ー リアーネはその複製画を複製していた。しかし彼女と母親はそのことを謙虚に黙っていた。ー

しかし最後にフランチェスコ・アルバーニ[Albani(1578-1660)]の『エジプトへの逃避途上の休息』がこれまでの休息を妨げることになった。彼がこの絵画的夢想の夢占い師となって、ラベッテが聖母マリアの傍らで本を開けて座っているこの絵の聖ヨゼフを鋭く見ているとき、リアーネが不幸なことにこう発した。「美しいアルバーニ」。ー 「私はそうは思いません」(とラベッテが小声で言った)「兄はこの祈っているヨゼフよりもはるかに美しいわ」。ー 彼女はアルバーニとアルバーノを混同していた。ラベッテのすべて

*1 周知のように春の花々は湿気と影のせいで、大方いかがわしい花々である。秋の花々も同様。

*2(訳注)B. Luini 作 : Christus unter den Schriftgelehrten のこと。

の絵の陳列室は賛美歌の本の中であって、その歌を彼女は黄金色に輝く赤い服の聖人達で区分していたのであった。他の人々は何も理解できなかった。―― 彼らはアルバーノのことを単にセサラ伯爵としてのみ知っていた。―― しかしリアーネはラベッテに甘美に紅潮して、優しく罰する視線を送って、黙って辛抱しながら別な絵を一層間近に見つめていた。アルバーノの中で、―― 彼の中では強力極まる感情と最も優しい感情とがペアになっていて、木霊のように雷鳴は一層強く、音楽はより秘かに響くのであるが、―― 愛と同情と羞恥心とがこれほど熱く働いたことはなかった。彼はその少女の前で跪き、同時に黙っていたい気持ちであったことであろう。

ドイツ騎士団騎士は終わって、男性陣に勝利を誇る表情をして言った。「自分はまだラファエロと対抗できる何ものかを袋に有する。隣室まで御同行願いたい」と。途中彼は、かくも立派に自由に、かくも大胆な勇気をもってなされた作品は少ないと注解を付けた。部屋の中で金属製の小さなサチュロス像を開示した。このサチュロス像に拉致されたニンフが抗っていた。「素晴らしい」（とブヴェロは言って、一本の糸で群像を止めていて、鏽を触らないようにさせていた）「素晴らしい。私はこのサチュロス像をキリストの隣に置きます」。私の主人公が突然批評家によって徳操と悪徳とが、位階の論争もなしに、一つの円卓で対抗させられるのを見たとき、この主人公の驚きについて、ある程度理解を示す人は少ないことであろう。

軽蔑の炎の眼差しで彼は目をそむけて、講師が残っていることに驚いた。絵画というものは詩文同様に、単に子供時代にのみ神々や礼拝と関連していて、後にはそれらがより高く生長するにつて、この狭い教会墓地から歩み出なければならない、丁度チャペルが原初的には教会音楽用の教会であったのが、両者を分離させて、純粹音楽のみを得るに至ったのと同じであることを彼は知らなかったように見える。ブヴェロは純粹な形式への敬意をはなはだ有していたので、彼にとってはどんなに不潔な、不浄な素材ばかりでなく、どんなに敬虔な、敬神の素材も享受を妨げることがなかった。スレートに似て、白熱化と冷凍化の両試練に対して、自ら変わることなく彼は合格した。

アルバーノは窓越しに娘達が並木道を行くのを見て、妹に別れを告げるために下へ急いだ。それにもっと重要な用もあった。彼は周りで燃えている薔薇よりももっと朱を頬に帯びて、芝生のベンチにやって来た。そこではリアーネが妹の傍らで、赤い日傘の背後に半ば顔を閉じて、頭を傾げて休んでいた。―― 穏やかに夕方の収穫に沈み込み、―― 日傘から赤い日射しを浴びて、―― 白い服を着て、―― 優美な胸には細く黒い十字架を付けて、―― 一本の満開の薔薇を挿していた。彼女は我らの愛しい若者を全く屈託なく見つめ、彼女の声はとても親しく、妹のようで、すべてが純な憂いのない愛に満ちていた。彼女は彼に言った、自分は彼の青春の地と田舎の生活を楽しみにしている。ラベッテは自分をどこにでも案内してくれることだろう、―― 特に日曜日、自分の告解の神父シュペーナーが行う落成式の講話を楽しみにしている、と。この老人の偉大な胸を、友人の侯爵の納骨堂についての悲嘆の歌、勝利の歌がいかに偉大に感動させるものになるであろうかと描いて行くうちに彼女は炎となって語った。

ラベッテは自分が兄とリアーネとに与えようと思っている二人っきりの瞬間しか考えていなかった。彼女はリアーネに、自分にもう一度ハルモニカの演奏をしてくれるよう利口に頼んだ。アルバーノはこの申し出の際、ちょっとした―― 木の葉の束をむしり取った。

リアーネは、またあなたの快活さを台無しにするかもしれないと言いたげに、彼女を警告して見つめた。しかし彼女は主張し続けた。アルバーノには、噴水小屋に入る際、直近の過去と直近の未来について、軽い朱が浮かんできた。

リアーネは急いでハルモニカを開けた。しかし水、つまり鐘のコロフォニーウム[精製樹脂]が欠けていた。ラベッテは — 両人を二人っきりにするために、下で噴水の許で一杯分汲んで来ようとした。しかし伯爵は、策略を素早く利用することの男性的無器用さのせいで、丁重に彼女に先回りして、自ら水を持って来た。ようやく可愛く愛想のいいリアーネが溜め息を付きながら、華奢な両手を褐色の鐘の上に置いたかと思うと、ラベッテが言った。自分は下の並木道のところに行って、遠くからではどのような具合であるか、聞くことにしたい、と。余りに素早い、余りに大きな悦楽という、さながら痛々しい日差しに対し彼の心は開かれ、遠くから愛の凱旋車が駆けて来る物音を耳にし、彼はその車に飛び乗って、人生の中へ突入したい思いであった。信じやすいリアーネはこのラベッテの遠ざかりを、音色で甘美に涙し易い目に対する弁解のヴェールと解して、早速両手を鐘から離れた。しかしラベッテは、頼みながら、彼女に接吻し、彼女の手を自ら鐘の上に置いて、去った。「誠実な方」とリアーネは言った。しかし女友達のラベッテに対する邪気のない明るい信頼を見て、彼は感動し、「そうです」とは言えなかった。

豊饒な沃野で撫子や百合、チューリップの許、深く眠っている幸せな男が、ペルシアの平野の中、小夜啼鳥の最初の夕方のさえざりを耳にして、浄福に目を開けて、生温かい静かな世界、多彩な黄昏に見入り、その中を夕陽の何条かの黄金の糸が輝きながら流れ込むとき、その浄福な男は、魔術的な部屋の中の青年アルバーノに似ていると言えよう。 — ブラインド付きの窓からは屈折した光がこぼれ、緑色に震える影を蒔いていて、神殿の周りの杜のように神聖に黄昏れて、 — ただぶんぶんと言う小さな蜂が遠くの甲高い世界から沈黙の庵を通じてまた騒音の中へ飛んで行った。 — 若干の鋭い日差しが、眠っている者達の前の稲光のようにロマンチックに薔薇の傍らであちこち揺れていて、世界の騒がしい森の最中のこの夢想的な人工洞窟では、孤独は、一枚の鏡の影絵ですら妨害されることはなかった。 —

この魔術の中へ音色は小夜啼鳥のように彼女の両手から飛翔して来た。 — 音色はアルバーノに対し嵐のときのように、あるときはより明るく、あるときはより穏やかに吹き寄せて来た。 — 彼は彼女の前に祈るときのように手を組み合わせて、愛の千もの眼差しで、下を見ている形姿を見守った。 — あるとき彼女は関与の聖なる目をゆっくりと彼に対して上げて見つめたが、彼の目の太陽の視線から素早く伏せた。

さて大きな臉が動くことなく甘美な視線を閉ざして、眠りのように彼女に放心の外観を与えた。 — 彼女は、花の小さな鐘を垂らしている冬の大地の上の白い鈴蘭に見えた。

— 彼女は、彼女が作るというよりはむしろ聞いているハーモニーの敬虔さの中の瀕死の聖女であった。ただ赤い唇だけが、人生の炎のような反映として、急く天使を飾る最後の薔薇として見られた。彼は音楽のこの祈りを自分の言葉で妨げることができたであろうか。

音色と愛の磁氣的渦がますます密な円を描いて彼の心を捉えた。 — そしてハルモニカが弾かれ、暑い日差しに水をやるように彼の心が舐め尽くされたとき、 — そして情熱の閃光が彼の人生全体にわたって、未来の山脈と過去の洞窟が照らし出されたとき、そ

して彼の存在全体が一瞬間に凝固したとき、彼はリアーネの下を向いた目から数滴湧き出るのを見た。そして彼女は快活に見上げて、それらの滴を落とさせた。 — そのときアルバーノは音色から彼女の手を奪って、彼の憧れの心を砕くような調子で叫んだ。「リアーネよ」。 —

彼女は震え、赤面し、彼をじっと見つめ、自分が泣き続け、見つめ、もはや演奏を続けていないことに気付いていなかった。 — 「いけません、アルバーノ、いけません」と彼女は穏やかに言って、手を彼の手から引き抜き、顔を覆い、 — そして音色が止んでいることに驚き、 — 気を取り直して、音色をまたゆっくりと流れさせて、震える声で言った。「貴方は高貴な人間です。 — 貴方は私のカールと同じです、でも同じように激しい。 — 一つお許しください。 — 私は町をしばらく離れます」。...

その件についての彼の驚きは、彼女がその地を定めたとき、彼のブルーメンビュールを告げたとき、歓喜となった。彼女はやっと喜んでいる若者の前で言葉を続けた、 — 彼女の手はしばしば長いこと離すのを忘れて不協和音に置かれていた、 — 彼女の目はより湿ってきて、微光を發した、次のことしか更に言わなかったのであるが。「私の兄にとって、兄は貴方を言いようもなく、誰にもまして愛していますので、兄にとって一切の方でいてください。私の母は貴方の影響を認めています。 — 兄をどうか、 — 申し上げますが、 — 特に高額な賭けから引き離してください」。

混乱して承諾をほとんど誓えないでいたときに、ラベツテがほとんど不作法に強調して急報を知らせた。母親がやって来る、と。母親は多分ラベツテが一人っきりでいるのを見たのであろう。アルバーノは旅の無事を中途半端に述べて二人から離れ、急ぐ余り、訪問してくれるようにとのラベツテの依頼に承諾の返事を忘れてしまった。出会った母親は彼の熱情を兄としての別れのせいにした。

豊かな季節の中を急ぎながら、彼は豊かな未来、リアーネのどもりと顔の覆いのことを考えていた。美しい女性の魂は預言者の前のかの天使のように飛翔のためにはただ二つの翼を有し、覆いのためには四つの翼を要するのではなかろうか[イザヤ書、6.2]。 — 人生の海は高い波となったが、しかし至る所、その広大な平面では煌めいていた。そして舵から火花が滴った。

第六十三周

その翌朝は勿論天全体の夕焼けから陰気な曇りとなった。というのはリアーネは若者にとって長く密なヴェールを被って去ったからである。何らかの必要な秘密のせいで間近な心同士の間には冷たい修道院の壁が築かれるのであろう、 — このことは明白である。これまでは幾つかの偶然が、若干の花々を、それらは覆うようにリアーネが心の上に置いていたもので、町の一階部分では花々や葡萄で窓から覗かれないようにしている具合であったが、背後の最も暗い角の部分から押し曲げて除き、その角にはある胸像画の背面が掛けられ、その向きを変えるとひょっとしたら伯爵に似ていたのかもしれないのであった。しかしまだその画は顔を壁に向けている。 — しかし女性の心はしばしば大理石に似ている。巧みな石工は千もの打刻を加えるが、それでもパロス島の大理石は割れ目の線に従って裂けることはない。しかし突然大理石は巧みな石工が長いこと打ち続けたまさにその

形に従って割れるのである。

大臣夫人と女友達のペアがブルーメンビュールへ埋葬と落成式を見るために旅立とうと思っていた土曜日、大尉は来て、喜びで一杯であったばかりでなく、一 というのは彼はラベッテへの愛から喜んでリアーネのために翼ではなくても、鞘翅を作るのを手伝ったかったし、友人に対する三重の関心から飛行具を広げる加勢をしたかったからであるが、

一 伯爵に対する不安で一杯でもあった。...しかしミュージズの女神達よ、なぜ詩的世界ではすべての出来事がしばしば現実世界がそうであるほどに稀にしか幾重にも動機付けされないであろう。...

彼の不安は単に、彼の父親が、母親の旅立ちよりも早く帰着しかねないということであった。一 というのは彼は大臣のことを知っていたからである。大臣は彼の手紙によると月曜日、火曜日（遅くとも土曜日に）到着することを欲していた。しかしそうすると

一 フルレは好んで家族の者達を期待の大きな余地の中で泳がせたからで、一 もっと確かな脅威となり得て、彼は一 バーゼルの時計のようにいつも一時間希望よりも早すぎて鐘を鳴らし、自分の家の者達が何かまことに不都合なことに取りかかっているのを見つけに到着したから、一 今にも屋敷の中に乗り込んで来かねないのであった。彼が疾走してやって来ると、この日の午前、あるいは従者が娘を馬車に乗せ、母親がすでに座っているというこの瞬間にやって来ると、慣例からの千もの推論からして確実なことは、兩人はまた部屋に入らざるを得ないということ、一 彼はすべてのトランクや箱をまた荷解するように命じ、地方総裁の娘に彼女の一万もの依頼の後、一 もっとも二回目の依頼のときすでにそれは唇で凍り付くことであろうが、一 好意的に全く冗談めかした無関心さで、一人っきりの[密室教皇選挙の]枢機卿随員女性として閉めきった馬車で家に帰るようにさせたことであろうということであった。ある種の人間は、一 彼はその総指揮者であるが、一 家の者達が彼らに旅のルートや地図を告げていない何らかのアルカディアの庭園へのドアの錠を家の者達の鼻先で下ろして、このようなドアを法的に封鎖することを最も甘美な清涼剤としているのである。要するに行楽に対し、いずれにせよ、大方の両親は癩癩を起こす。フルレはある行楽を封鎖できたら、行楽から熱く威勢良く家に帰って来たかのような気分になるのであった。一

午後三時に我々の友人達はこの上ない青空の下、散歩した。一 万事はすでに片付いていて、カールは翌朝後を追ひ、アルバーノは皆が帰って来てから、月曜日に（彼の優しい配慮と他人の厳しい配慮とで決定されたが）ようやく後を追うことにしていた。一 青空のドーム全体に霧はなく、ただカールの不安だけが、つまり侯爵の死体の第二の場所のせいで、今日にも父親が戻ってくるかもしれないという不安だけが見られた。一一

突然彼は、あそこに戻って来るという呪いを発した。彼は虎斑の郵便馬車と更にそれ以上に長い先に繋がれた先導馬の点で察した。煉獄の人生の時ではないか。一 馬車は急速に街路を下りて来た。一 先導の馬はより長く全く不格好に伸びて行った。一 人々はいぶかしんだ。一 遂にその伸ばされた幅は一エーカーの長さになった。一 全く有り得ないことに見えた。一 そのときアルバーノの鷲の目は郵便馬車との間の革の結びを見つけれず、結局分かったのは、単に見知らぬ男が二頭の馬でたまたま馬車の前を騎行しているということであった。この瞬間彼らは幌の開いた凱旋車が女性の三位一体と共にゆっくりとブルーメンビュールの高台を上がって行くのを目にした。三本の日傘の

混じったチューリップ花壇が彼らに対し長いこと微光を残した。

第十四ヨベル期
アルバーノとリアーネ

第六十四周

我々の内部の世界では多くの優しい神聖な情感が渦巻いて飛ぶが、これらの情感は天使のように外的行為という肉体を借りることがない。この中には種子を有しない多くの豊かな充実した花々があり、かのすべての胎児の精霊や花々の香りを容易にその孩所^{リンボ}に保存している詩文というものが発明されているのは幸いなことである。親愛なるアルバーノよ、この詩文で私は君の立派に薫る日曜日をもとめて、この目に見えない香煙を世間のシュナイダー粘膜[Schneider(1614-1680)、ここでは網膜の意]のために固定することにする。 —

日曜日彼はリラールの雷の庵に引っ越した。講師は次のような希望で毅然としていた、つまり伯爵は新しい享受の花の平土間席を直に十字路のように平らで枯れたものへと踏み潰すことだろう、と。素敵な朝であった。 — 露で一面濡れていた、 — 新鮮な風がリラールから花と咲く穀類の上に吹いていた、 — 太陽が自分だけ涼しい天の中で燃えていた。ブルーメンビュールの街路では人間の群れが移っていて、誰も長いこと一人だけ歩くことはなかった。東の高台で彼は友人のカールが曲がった羽根飾りと共に太陽の方に向かって跳ねて行くのを見た。

リラールの大気はオレンジの香りを吐き出しながら吹き寄せてきて、かの最初の素晴らしい日曜日の燃える祭壇の石炭の上にあった灰を吹き飛ばしていた。彼は橋を下りて行き、朝早く着飾ったポルックスが羽の立った七面鳥を彼の方へ追いやって来た。老シュペーナーの奉仕の姉妹[フリーメーソンの奉仕の兄弟の転用]がすでに一時間カリトンの許で料理していて、ただ彼が通り過ぎるのを見守っていた。カリトンは祭日のように着飾って、小さな家から彼に向かって走り出て来た。この家は快活にすべての窓を空全体に開け放っていた。彼女は喜びで当惑しながら肝要なことをまず切り出した、つまり向こうの庵は万事綺麗に準備されている、彼は食事を上まで届けて欲しいか、と。彼女は会話の最中、ポルックスを伯爵の — 指から引き抜こうとしたが、しかし彼は少年を接吻のために持ち上げて、どの人の心をも魅了した。台所の炎の背後の老いた人の心をも魅了した。

彼が自分の庵の方へ西側の凱旋門を通過して出掛けたとき、彼は言いようもなく強力に甘美に感じた、穏やかな青春時代は神々や神殿、悦楽で一杯の我らのイタリア、ギリシアであり、 — これをしばしばゴート人は不格好な手で触り、空にしている、と。 —

彼の花と咲く軌道は遂に、シュペーナーと一緒に登った、降下階段、上昇階段に至った。

— 個別の日中の条光が湿った地底に燃えるように入ってきて、散在する小枝を熱く黄金色に色づけた。 — 彼の前で亡き侯爵が側面の洞窟を歩んで行った神秘的木陰道では、この洞窟は見つからず、単に空の壁龕を見つけただけであった。彼は上方に、大地の腰から出るように出た。彼の庵は丸く弧を描く山の尾根の上にあった。その下では周りの大地の象たる丘が、花々が立派に膨らんでいるリラールが、休らっていた。彼は自分の窓から自然の巨人達の臥所を眺めた。

しかし彼は今、窓の下枠に留まっているとか、感激させる風奏琴の傍らにいたりとか、目の牢獄たる本の中に留まっていることはできなかつた。奔流や森を通じ、山々を渡って行くことを新鮮な自然は欲していた。彼はそのことをなした。

人生の日常の日々の間には、一 それらの日々には自然の虹は我々にとって単に砕かれて、不格好な多彩な塊として地平線上に現れるものであるが、一 時に数日創造の日々があつて、そのときには自然は美しい形姿に丸まって、まとまり、いやそのときには自然が生き生きとしてきて、一つの魂のように我々に語りかけるものである。今日アルバーノはこの日を初めて有した。年月は去って行き、そんな一日をもたらさない。彼がそのような具合に山の尾根の両側面をさまよっているとき、北東の風がますます豊かに流れ込んで来た。一 風がないときは風景は強張って固く釘付けされた壁の掛布であつたが、一 この固定された国が流体の国に変わってうごめいた。間近の木々は鳩のように甘美に身震いしながらその沐浴の中で揺れた。しかし遠方では森が武装した里のように不動に立っていて、その頂きは槍のようであつた。一 荘厳に青空の中を銀色の小島たる雲が漂い、大地では影が巨大に奔流の上を、山々の上を歩んでいた。一 谷ではロザナ川が煌めき、檜の森に流れ込んでいた。一 彼は温かい谷に下りて行った。牧草地は泡立ち、その種子はその雲の小片の中で、大地に落ち着く前に戯れていた。一 白鳥は気持ち良さげに長い翼を広げ、対の鳩は愛の余り互いに餌を与え合っていた。至る所、苗床や小枝では熱い母鳥の胸と卵があつた。一 立派な青い花束のように高い草むらの中で休んでいる孔雀の首が色合いを変えていた。一 彼は節の多い枝で天を掴み、節の多い根で大地を掴んでいる檜の木の下へと歩んで行った。一 ロザナ川は一人っきりでざわめく森と語っていて、泡立ちながら岩々や苔むした岸辺に食い込んでいた。一 夜と夕べと日中とが互いに神秘的森の中で入れ替わつた。一 彼は川辺に行き、それに沿って村々で一杯の活気ある温かい平野部に出て来た。村々からは日曜日が響いて来て、穀物畑からは雲雀が飛び出し、山の麓では人間の小道が這い上がっていて、木々は生命ある者として動き、遠くの間人達は根付いているように見え、不気味な生命の木の深い樹皮の許で、ただの若枝となつていた。一一

青年の魂は聖なる炎の中へ投げ込まれ、アスベスト[石綿]のように、[熱せられた]魂を彼は、文字が消え、白紙の状態で取りだした。彼は自分があたかも何も知らないかのように、あたかも自分が一つの考えであるかのように思われた。そしてこのとき奇妙に新しいやり方で、これが世界だ、汝は世界にいるという感情に襲われた。一 彼は世界と一つの本性[生命]となつていた。一 すべてが一つの生命、雲、人間、木々であつた。一

彼は無数のポリープの腕で捉えられていて、同時にその腕によって飲み込まれ、それでいて無限の心の中で滴り続けているように感じられた。

酩酊して彼は自分の住まいの前に来た。その住まいから彼の方に小さなポルックスが山を下って向かって来て、彼に食事だと叫んだ。庵の中では、彼の言うことが、開いた窓際の風奏琴で発声された。子供が小さな拳でピアノを轟かせて、木々の間の小鳥が喜ばしげに唱和すると、世界霊が風奏の弦を通じて歓呼しながら、溜め息を付きながら、不規則にまた規則正しく、嵐と戯れながら、嵐は霊と戯れながら、声を發した。そしてアルバーノは、人生の奔流が国々の岸辺の間でざわめき、一 花々や檜の木の脈管の中を、一 そして心の中を、一 大地の周りを、雲を運びながら進んで行く様を感じた。一 そ

して永遠に轟く奔流を一人の神がヴェールの下で注ぎだしたのであった。――

アルバーノは無邪気な、前を踊って行く少年と一緒に微笑み続ける母親の許に行った。ここの四つの壁の間ですら、偉大な朝が膨張させた帆は、更に彼を押し進めた。彼は何も気付かず、彼には何も卑俗には見えず、何も遠いものと感じられず、人生の無限の海の波と滴が、その中を進む奔流や渦と分かちがたく流れて行った。カリトンの前に彼は輝く神のように立っていた。彼女は彼にヴェールを掛けるか、自分にヴェールを掛けるかしたかったことであろう。何らかの生誕の国の詰め物で不具にされていない人間性が、この喜びの圏の中でほどより純粋な形で区別されていることはなかった。この圏では子供らしさ、女らしさ、男らしさが、花々で取り巻かれて、互いに出会い、穏やかに理解し合っていた。

カリトンは絶えずリアーネのことを語った。単に遠方への愛からばかりでなく、近接の愛からでもあった。というのは彼女はかの率直な目で見ていたけれども、この目は見つめるといよりはむしろ静かに反射し、引き入れるというよりは入らせるように見えたもので、それでも彼女はやはり子供や乙女や、農民や、未開人のように、率直に真実で、同時に抜け目がなかったからである。彼女はアルバーノの愛を容易に察知していた。いつでも女達には何でも、憎しみでさえ、容易に隠せるが、その反対物はそうはいかないからである。彼女はリアーネを無限に称えた。特に比類のない善意を称えた。「自分の主人はこう言いました。彼女ほど多くの心を有する男は少ない。というのは彼女はしばしば何の恐れも抱かず夜、自分と一緒にタルタルスに行ったのだから」と。勿論このことは伯爵には説明が付かなかった。不思議なことは、愛しい頭部の聖なる後光である太陽は、人間の顔に和らげられても、太陽の像に神々しくされた愛する人の顔ほどには感銘を与えることが少ない。

彼女は、彼の喜びでますます熱く喜んで、彼をリアーネの部屋に案内しようと申し出た。簡素な小部屋で、―― 葡萄の葉で緑色に薄く染まっていて、―― フェヌロンとヘルダーの数冊の本、―― ガラスの花瓶の中の古い花々、―― 小さな中国製のカップ、―― ユリエネの肖像画とカロリーネという名の亡くなった若い女友達のもう一つの肖像画、―― イギリス製のプレスされた紙の付いた新しい筆記用具、―― これらを彼は見いだした。乙女の聖なる春の時間が彼の前を明るい雲のように溶けながら通り過ぎて行った。

彼にカリトンが鷲ペンを切るために持って来たとき、たまたま彼はペナイフに触れていた。「だって」（と彼女は言った）「私の主人が旅立ってから、切るのはとても面倒なのです」。というのは女性にとってペンを切るより、何でもペンで書く方が、―― 叙事的なことであれ、カント的なことであれ、容易なものであるからである。この場合、他の場合同様に、より強い性[男性]は弱い性[女性]を助けなければならない。

アルバーノは更に自分の師[ディーアン]の仕事部屋を見たいと願った。しかしこれを彼女は、―― 一時間以上一緒に食事してもっと勇敢になったわけではなかったが、自分の主人が禁じていると言ってきっぱり断った。彼は今一度頼んだ。しかし彼女はますます苦しげに微笑んで、好意的拒絶に留まっていた。

さて彼は魔術的庭園での朝の醜態を夢想した、庭園の川や小道では思い出の月光と反映が戯れていた。卑俗な地球の九百万平方マイルから何という幾つかの詩的国々が詩的心の中から生ずることであろうか。彼がかつて彼女が下へ消え去るのを見た祭壇の山から、彼

の許に、より自由なエーテルに舞い吹かれて、ブルーメンビュールの午後の鐘の音が届いてきた。彼の幼少の生活と向こうの現在の場面と、リアーネとが、彼に柔らかな心を与えた。そして彼はより薄暗くなった目をして神々しい田舎を眺めた。

夕方ブルーメンビュールから楽しげな教会参詣人がやって来て、落成式と葬儀とを強く称えた。彼はまだ敬虔な神父が向こうの山の尾根に立っているのを見た。彼が一日中リアーネを見ていて、彼女にひょっとしたらすべてを語ったかもしれない日の朝は、彼の生涯を煌びやかな虹の円で微光を発しながら彼を取り巻く朝の露で覆った。ベッドにいながらも、彼は喜びの余り、マッジョーレ湖での漕ぎ手の朝の歌を歌った。 — ブルーメンビュールの上の星座が彼のアルプスの庵の開いた窓の中を通じて、眠り込む目の許で輝いた。

— 明るい月と谷からのフルートの音色が再び彼を起こしたとき、眠りの灰の下で静かな歓喜がなおも白熱を発し続け、より大きな歓喜が目を再び閉じさせた。

第六十五周

さわやかな青空の朝の下、彼は今日、自分のいつも白い霧の中へ侵入して行く人生を明るく照らすという希望に満ちて、かの昔の道を歩いて行った。つまり彼が（第二十三周で）夜、山上でエリュシオンやリアーネを見るためにこちらに向かって来たときの道である。花と咲く小道全体が彼にとってはローマの大地で、そこから彼は過去の素敵な絵柄の花瓶を掘り出すのであった。村に近付くほど、それだけ一層神聖化された場所が広がった。彼は、小羊や羊飼いの少年が、草のようには、彼が離れている間に大きく育っていないのを不思議に思った。離れていた期間は彼自身にとって、自分の心の生長と自分の経験の多彩な変化とでより長いものに思われていたのであった。澄んだアルプスの水の朝の一杯のように、牧人のホルンの古くからの響きが彼の胸に染みて入った。しかし彼が総裁の騎乗する馬をぐるぐる駆け回らせて鞍降ろしをした窮屈な榛の木馬場や、館の中庭さえも、それどころか家庭的幸せの四つの壁や天井画さえも、大地と天上の中へ進んで育とうとしている彼の育成中の魂の根と梢にとって、狭すぎるものに思えた。彼はまだ、人々が人生のクラヴィコードから、足の踏み込みで、蓋を高く上げて、調和的な物音が四方に広がるようにする必要のある年頃であった。

館では何と贅沢に彼の心は人々の心で覆われ、最近の愛が昔からの愛で麻痺されたことであろうか。涙もろい母親のアルビーネから始まって、化石化した肢体を彼のためにより速やかに動かして手を差し出した老いた従者達に至るまでが、そのように彼を遇した。

— 彼はすべての彼の愛する人々を、 — リアーネを除いて、 — ヴェールフリッツの書齋で見いだした。ヴェールフリッツは「若い衆」と談話を好んでいて、いつもこう主張していたからである。朝食は自分の文書のテーブルに載せるといい、このテーブルは誰も見つめないラックされた仮面飾り付きの朝食用テーブルと同じようなものだから、と。アルバーノは、大臣夫人が一人の女神[リアーネ]の教会盗人そのものとなってしまって、昨日リアーネを戻したのではないかと不安に襲われていたが、 — 大尉が姿の見えないわけを素早く説明した。この良き女性は昨日自分の関与する心の動揺のせいで片頭痛に見舞われざるを得なかったのであった。彼女の愛する師のシュペーナーがその崇高な魂の静寂と共に、 — 目を、これはもはや現世のことについて泣くことはないが、友人の侯爵

夫妻に下ろして、一 頭は永遠の冷たい北極星の下に立ちながら、この頭は極のようにもはや星々の上昇や下降を見ることはなく、一 静かに、使徒のように両手を組み合わせて、熱狂して人々の心をほとんど涕泣したくなる感動へと誘って、それでいて人々の心をこの上ない痛みから崇高な慰めで引き戻して来て、目の代わりにただ心だけが泣くような具合にして、一 そして今や夫妻の棺と教会の祝福となり、一 かくて優しいリアーネの中では、この感動は苦難に似ざるを得なくなり、彼女の師が黙っていたことすべてが、彼女の心の中で言葉へと発せられたのであった。その上彼女は安静にしているという通常の治療を使用せず、すべての刺し傷を活発な喜びの背後に隠して、旅を続けている母親に苦痛を与えないようにした。自分には余りに大きすぎる痛みを与えたのであったけれども。

このように語られる間に、彼女自身が親しげに白い朝の服を着て、中国式の小さな薔薇の花束を付けて入って来た。一 少しばかり青ざめて、疲れていて、一 夢想的に優しく見上げながら、一 声はより小声で、一 薔薇色の頬は蕾の状態に収められて、一 子供のようにどの人の心にも微笑みかけて、一 汝、天の天使よ、誰が汝を愛し、汝に報いることが許されるのか。彼女は高貴な若者を見つめた。一一 彼女の静かな顔のすべての百合は、彼女の通常に反して、喜びの天上的朝焼けを浮かべていた、そしてそこには華奢な緋色が残っていた。

彼女は彼に率直に、何故昨日祝典に来なかったのかと尋ね、その折り、今日彼らは皆、敬虔な神父を訪ねることになる、そのためにこの小さな薔薇を結び付けていると打ち明けた。彼は喜んでこの行楽のコンサートの第四声部を引き受けた。何という立派な吊り庭がそのごく愛らしい花々と眺めと共に夕方の時のために築かれていることか。ただ一つの屋根が何と多くの幸せな者達を覆っていることか。

実直なラベッテは、静かな喜びでより敏捷になり、仕事熱心になり、飽きることなくリアーネの看護師、ロケロルのライオン番人となっていて、悦楽の母親らしい略図のすべてを、半分だけ大きくする娯楽の差配者となっていた。そして全身がとても幸せであった。ただまだ彼女の哀れな純な心はどの男性からも愛されていなかった。それ故に初恋の新鮮な諸力と共にその心は明るく、誠実にある強力な心を前にして白熱していた。この心は彼女の心の許に祝福しながら愛する神のように降臨したかのように見えるもので、天全体を引き連れてきたものである。一 ロケロルは、何と魅力的に仕事好きな活動性が、自分の領分と自分の仕事の余地の中で、客間では暗くその価値を覆い隠している重たく垂れ下がった葉を押しおけることか、見てとった。ロケロルが説得して、彼女の褐色の形姿のすべての白い装飾りを衣装箆筒に戻した後では、彼女はそれどころかより暗い色の可愛い家庭服でより美しくなった。彼がそのことを要求すると、この点では母親に相談するより先に聞き入れた。いや、彼は彼女に、気位の高い大臣夫人が彼女に贈った時計を實際身に着けるよう仕向けていた、慣れない装身具に熱く赤面しながらも。しかし彼は彼女と共に、さながら愛の彼の声高な承諾の祭壇へのまことに九十九折りの花の道を歩むつもりであった。一 沈黙の承諾を十分に彼は述べていた。一 彼は、自分がヴィーナスの貝殻の馬車に乗り込み、その前に鳩と灰鷹を馬代わりに繋げば、彼女がすぐに座り込むと承知していた。

何と立派に午前には黄金の鞘翅に乗って、透明な翼に乗って、過ぎて行ったことか。愛さ

れるアルバーノは家のすべての変貌に案内された。最も美しい変貌は彼の勉強部屋で、これをラベッテは自分の化粧と裁縫と勉強の部屋に変えていて、この部屋は昨日からまたリアーネの客人用兼読書用の小部屋となっていた。何と喜んで彼は西側の窓辺に向かったとか、ここで彼は何度も空想の水晶鏡の中で自分の姿を見せない父親と恋人とを超現世的に出現させたのであった。窓ガラスには彼の少年の手で多くのLとRの字が記されていた。リアーネはRは何を意味するか尋ねた。「ロケロール」と彼は言った。彼女はLの方は尋ねなかったからである。自分の恋人が自分の最初の緑色の人生の夢想的私室に何日かの花咲く日々を過ごすという思いが無限に甘美に彼の心の周りに流れ込んで来た。リアーネは彼に子供のように喜んで、自分がすべてを、つまり部屋を実直にラベッテと分けあって、二重家政、相部屋仲間となっていること、自分が宿の女将さん自身を客人としたことを語った。

私はしばしば少女達のその牧歌的な人生の断章における、美しく軽快な遊牧者[ノマド]の人生を嫉妬しながら賛嘆したものである。これらの放し飼い鳩は他人の家へ舞い飛び、裁縫し、笑い、その家の娘と共に、一、二ヵ月訪問して過ごす。そして人々はこの接ぎ枝を家族の枝と見なす。一 これに対し、我々籠の鳩は、移されることや馴染むことが難しく、大抵数日するとまた馬で戻って来る。我々は粗野な材質として家族の鑄造と溶け合うことがより難しく、また我々男性は、我々の仕事を娘達のように容易には、一 我々には仕事用具で一杯の馬車が後から付いて来なければならず、一 他人の仕事の中に織り込むことをせず、我々は多くを必要とし、多くを企むので、かくて我々の紛失物調査は立派に推測され、我々にとっては何の損失ももたらさないことになっている。

着衣という半ば永遠の後、一 恋人の間近では不在の一時間は遠方の一ヵ月よりも長く経過するからで、一 出発の用意のできた娘達が尼僧の黒い装身具と共に入って来た。何と魅力的にラベッテの濃い髪に薔薇が、白い首筋に暗い色のレースの縁が、その純な目の臆した輝きが、さっと染まる赤面が見られたことか。一 そしてリアーネときたら、一 私はこの聖女については語らない。善良な老総裁でさえ、この敬虔な顔がインド風な、金の箔糸のきらめくモスリンのただ簡素な尼僧風に置かれた白い頭部のヴェールの下で子供のように彼を見つめたとき、その心地よさにこう述べざるを得なかった。「尼僧のようだ、天使のようだ」。一 彼女は答えた。「私もかつてある女友達と一緒に尼僧となるつもりでした。でも今は彼女よりも後でヴェールを被る[尼僧となる]ことにします」と素晴らしい調子で添えた。

彼女は今日ラベッテに懇ろな陶酔を寄せていた、ひよっとしたら長患いの優しさ故か、ひよっとしたらアルバーノとその両親への愛故か、ひよっとしたらラベッテがその愛でとても善良で美しかったからか、彼女自身が心そのものでしかなかったからかもしれない。彼女は自分の女友達についての陶酔的表象という聖なる欠点に対し、以前はもっと高く駆られていた。一 この表象により高貴な娘達は容易に陥りやすいが、ただ主婦達はこれには執着しない。それで彼女は例えば女友達のカロリーネを、この女性にリアーネは長編小説のヒロインのように友情のロマンチックな場と美しい自然の中で出会ったのであるが、最初は裁縫針やアイロンや女性の耕地の他の用具に導いて行く両手で、この詩的聖なる後光を中断させずには全く考えることができなかつたものである。

最も心根の優しい共感の喜びを感じたい者は、楽しい子供達ではなく、楽しげな者達の

ことを喜んでいる両親を覗くべきであろう。青く丸い目のアルビーネは、 — その顔には時が幾多の人生の音色を三度奏して、しかしその中には継母的養母的の不協和音は見られなかったのであるが、これらの — カップルの許でほど、頻繁にあちこち見比べて、より多く祝福したことはなかった。というのは彼らはカップルに、母親によるこれらの二重星の光行差、摂動の星占いによるとなっていたからである。 — 父親は、自分の同僚達の敬意のダンスに「現今の若い衆の頭下げ、耳下げ[偽善、消沈]」を対置して、大尉を買っていた。大尉は自分の内的劇場の監督として、今日は陽気な若者の役目を割り振っていたからである。大尉は父親に粗放な文飾によってすら気に入られていた。この文飾は秘かな風で彼から放たれたものである。というのはどんな天才も粗放の方言辞典、平凡な詩を有しなければならぬので、それで彼は、 — 他の者が悪魔とか畜生と言うとき、 — 天才的な職人組合の挨拶「与太者」をその派生語「与太話」等々と共に有していたからである。しかしアルバーノはすべての女性の心をその落ち着きでもっと夢中にさせた、この落ち着きを持って彼は静かな晩夏のように自分の果実を落下させた。両親はこの優しい態度を都市生活のせいにした。あたかもカールはこの画家の学校にもっと長く通っているのではないかのようであった。いや愛は男性のイタリア派の学校である。より強力な、より高次の男性はまさにより高次の優しさを身に着けている。高い樹では果実が低い樹の許でよりももっと穏やかに、もっと甘美に丸くなるようなものである。男らしくない性格の許では穏やかさは魅力的でなく、男性的性格の許で魅力的になる。女性的でない性格の許では力は魅力的でなく、女性的な性格の許で魅力的になるようなものである。

善良な若者アルバーノよ。 — カールは自分の視線が燃え、光るとき、いつも残念ながらそのことを承知して、 — 一方かくも罪もなく君の目からは、そう自覚していない白熱する心が燃え出ている。君の晩年は花に満ちた青春の結実の穀物であって欲しいものである。馬車は、それがエリアの馬車となるか[火の馬車で天へ落ちた預言者]、パエトーンの馬車となるか[父の日輪の馬車を下手に御してゼウスに雷死の刑を受けた]、馬車で天に飛翔するか、天から落下するか、君には分からないまま駆けて行く。

第六十六周

馬車は村を四人の若者達と共に飛んで行った。 — 何と我らの青年にとって天と地の広大さは心地よかったことか。人生の表玄関、つまり青春は花と明かりで覆われている。彼らは山の麓的的竿、ある少年のアルカディアの指針竿の前を通り過ぎ、その少年の腕を子供のように寝惚けて高い天へ伸ばした揺り籠の前を通り過ぎ、 — かの黄金の朝、かくも広大なものと思われた、彼にとっては今や藪に沈んだ白樺の小森を通して、 — そして東側の開かれた凱旋門の前を通り過ぎた。その背後には多様なリラルの海がその魅力を波立たせていた。 — そして彼らはフルートの谷の山の壁の背後で馬車を送り返した。

彼らは素晴らしい天の下、素晴らしい大地の上を進んで行った。純粹に白く、太陽が白鳥のように青い湖を通じて浮かんでいた。 — 平野や村々は遠方の低い山脈により密に接していた。 — 穏やかな風が平原に緑色の穂先の波を漂わせていた。 — 丘では白い小雲の翼の下で影がしっかりと休んでいた。 — 高台の頂きの背後にライン川の船の

マストが荘重に去って行った。

アルバーノが恋人のかくも間近を歩んで行くと、彼のエデンの下で燃えている煉獄はますます深く大地の核に沈んで行った。落ち着きのなさや希望とで一杯になって彼は、炎の目をあるときは夏に、あるときは穏やかなヘスペルスの星に投じた、この星は彼の間近で春のエーテルの中から微光を発していた。善良な女性リアーネは今日いつもより静かで、真面目で、落ち着きがなかった。彼らがフルートの谷の周りの丘の尾根の許の至る所出入りできる小森を歩いて歩いていたとき、リアーネが突然伯爵に、フルートの音が聞こえると言った。自分にはただ遠くの雉鳩[男女の愛の象徴]の声だけが聞こえると彼が言ったか言わないうちに、彼女は突然、何か不思議なものに対するように集中して、一 彼女の目は空に定められて、一 微笑み、一 突然アルバーノの方を向いて、赤面した。彼女は彼に語りかけた。「正直に言いましょう。今私の中で音楽が聞こえます*1。一 今日は私の弱さと優しさを大目に見てください。昨日からなのです」。一 「私が貴女を[大目にですか]」と彼は激しく言った。というのは、病気のときには自分にはただ燃え上がる像しか押し寄せない彼は、さながらより高い世界から痛みするとき黄金の陽光のように微かな音色が、秘められて粗野な深みを通じて生ずる音色が達してくる人物への崇拜の念に駆られたからである。

しかしリアーネは、彼の熱気を逸らすかのように、自分の女友達のカロリーネに言及して言った。このような日々、殊にこの散歩ではいつも彼女が出現するものである、と。「最初は私が訪問していました」（とリアーネは言った）「彼女は私のリンダに似ていましたので。彼女は私よりほんの数週間しか年上ではなかったのですが、私の先生でした。彼女の敬虔な、厳格な、動じない性格と自らを喜んで黙って犠牲にする率直さは、私がそう言って良ければ、その母親の目にさえ尊敬に値するものに見えていました。とても優しい人でしたが、決して泣くところを見たことがありません。ただ母親をいつも快活にするためでした。私どもは一緒に暮らすために、共にヴェールを被る[尼僧になる]つもりでした。自分は年をとりたくない、と彼女は言っていました。短い生涯を陽気に、心配なく、それでも来世の準備をして過ごさなければならない、と。でも彼女自ら先に逝ったのです。その母親の病床での夜の看護とその死の悼みとで、逝ってしまいました。私どもと一緒に準備していた聖餐式を臨終のとき一人で受けたのです。一 そのときこの天使が私にこのヴェールを渡しました。いつか私も彼女に従うように、と。いや、善良なカロリーネです」。

一 彼女は隠さずに泣いて、感動してアルバーノの手を握った。「私はこのことを話し始めるべきではなかったようですね。一 あそこに私どもの友の方が来ておられます。陽気に振る舞いましょう」。一

彼らは今や、巫山戯るように周囲に漂う風景を見せたり隠したりする高い茂みを通り、フルートの谷を覗き込む塔の先端の間近に達した。この傍らに人気のない教会とシュペー

*1 こうした自動音響は、一 天候の変化の際に巨大なハーブでは触れもしないのに鳴り出すように、一 病弱な女性の片頭痛や他の病気のときに見られる。それ故臨終のときもそうである。例えばヤコブ・ベームでは、生はコンサートの時計のように、その終わりの時を、ハーモニーに包まれて告げられた。

ナーの住まいがあって、下の平野に村が広がっていた。シュペーナーは自分の教え子の女性に、
― 老人の癖で他の者達のことは構わず、
― 向かって行った。若い獐鹿がその後について来た。素敵な所である。小さな白い孔雀、
― 放し飼いの雉鳩、
― 蜂の花畑の最中の蜂の町、
― すべてが平穩な老人のことを物語っていた。今やこの老人に尊崇する大地が仕え、老人は大地には無関心に、ただ神の中で暮らしていた。彼は教会風の真面目さの期待に反して、男女の交互の並びに軽い冗談を言いながらやって来て、リアーネの額に祝福の指を置いた。リアーネは彼の孫のように見え、さながら人生の晩年の秋の二番咲きの木の花であった。彼女は娘のように小さな薔薇の花束を彼の胸に挿して、特に喜んで貰えるか注意を払った。彼女は全く快活に微笑んで、すべての彼女の涙は吹き飛んでいるかのように見えた。しかし彼女はまた照りだした陽の下の雨に濡れた木に似ていた。ごく微細な震動でもかつての雨が静かな葉から落ちるのである。

老人は若い人々の関心を喜んで、彼らと一緒に花と咲く騒がしい高台に留まっていた。この高台は広大な風景の間にあり、豊かなエリュシオンへ流れ込む山の尾根に君臨していた。彼に対しては、気球船に乗り込む人に対するように、地上の響きは地上の形姿ほどには届かないので、彼らは老人をいたわって、聞かせるよりもむしろ話させるようにした。

彼は直に、自分の心が息づいて暮らしていることについて、しかし特別な、半ば神学的、半ばフランス語的、ヴォルフ主義者の、詩的言葉で話した。幾人かの陶酔家の詩や哲学については字句的翻訳より実質的翻訳をすべきであろう。すべての覆いの下にいかほどの黄金の純な真理が輝いているか察するようにするためである。シュペーナーは私の翻訳ではこう言った。「自分がかつて、正しいことを見いだす以前には、すべての人間的友情や愛の点で苦しんだ。自分は、自分が熱く愛されたとき、自らに言ったものだった。自分は自分自身でさえ自らをそのように見なし、愛することはできない、と。同様に愛された者も、愛している者同様には、そのように自分について考えることができない、たとえその者が完全なもの、あるいは自己愛の者であっても。各人が他人を自らが自身を見なす具合に見なすとしたら、熱い愛は生じないであろう。しかしどの愛も無限の倫理を要求しており、すべての解消し難い、明確に認識された欠点が基で死んでいる。どの愛もその対象をすべての者の中から取りだし、すべての者の上に置き、際限のないお返しを要求している。何の利己心もない、分割もない、静止もない、終わりもない愛を要求している。これは神的な者に他ならず、須臾の罪深い、変転して行く人間ではない。それ故愛に病んだ心は、この愛やすべての愛そのものの与え手の中に、すべての善と美の充実の中に、利己心のない、際限のないすべての愛の中に沈んで行かなければならず、その中で砕け、息づかなければならない。浄福に縮小と拡大とを繰り返しながら。それから愛に病んだその心は世間を振り返り、至る所に神とその反照を見いだす。諸世間はその者の行為である。
― すべての敬虔な人間は一つの言葉であり、すべてを愛する者の一つの視線である。というのは神に対する愛は神的なものだからであり、心はすべての心の中で神のことを思っているからである」。

「しかし」 ― (とアルバーノは言った、アルバーノの新鮮なエネルギッシュな生命はすべての神秘的破滅に抗った) ― 「神はどのように私どもを愛するのです」。

「一人の父がその子供を愛する具合にだ、その子供が最良の子供だからではなく、その

子供が父を必要としているからだ^{*1}」。 — 「それではどこから」（と彼は更に尋ねた）
「一体人間の中の邪悪なもの、苦痛は来るのです」。 — 「悪魔からだ」と老人は言っ
て、絶えず神々しい喜びと共に自分の心の天を描き尽くした、いかにその心はいつもすべ
てに愛された、すべてを愛する者によって囲まれていることか、いかにその心はその者か
ら幸福や贈り物などを欲せず、（贈り物は現世的な愛の中でさえ望まないもので）、ただ
その者自身に対するますます高貴になる愛だけを欲するものか、いかにその心は、晩年の
夕方の霧がますます濃くその感覚の周りに移って来るとき、人生の黄昏の中でますます堅
固に目に見えない腕に抱かれていることを感ずることか、と。「私は間もなく神の許に行
く」と彼は人生によって冷却され、歳月の下で脆くなっている顔に愛の光輝を浮かべて言
った。人々は彼が死ぬのを見守ることに耐え得たことであろう。そのような具合にモンブ
ランは上昇する月の前に立っている。夜がその足下と胸を隠してしまう、しかし明るい頂
上は高く暗い天の中に、星々の下の一つの星として掛かっている。

リアーネは娘のように目と手を彼から離さず、すべての声を懂れて吸い込んでいた。彼
女の兄はアルバーノよりももっと喜んで聞いていた。しかし単にこの神秘的ヘロス[英雄]
を彼の模造という物真似の山アトス^{*2}に一層純粋に模写するためであった。ラベッテは教
会の中でのように、信心深い — あれこれ別な考え事をしながら彼を見つめていた。

彼は今や遠慮なく遠ざかって行った。自分の動物どもを世話するため、この動物ども
を彼はすべての恣意的なもの、例えば子供達同様に、神の手から直接来ているかのように、
愛していた。すべては神々しいもので、非倫理的なものしか現世的なものではない、と彼
は言っていた。彼は蜂に硫黄での処理をさせたり、花々を植木鉢の籠で枯れさせたりする
ことができず、こき使われ、傷付いた馬を見ておれず、肉屋の台の前はただ肢体を震わせ
て通り過ぎるのであった。

「華麗な山道での」（と友人のカールは言った）「立派な夕べを楽しむことにして、君
の雷の庵を眺め、すべての苦難の杯を谷に投げ下ろすことにしよう」。 — 今や湾曲し
た山並の何という魔術的な近隣を通過して、雷の庵へ向かって行ったことか。右手にはさな
がら自然の西洋があり、左手にはその東洋があった。 — 彼らの前には夕方の夢幻劇の
まばゆいリラルがあり、 — 輝かしいロザナ川の両腕の中にあって、 — 穂先の金
色が白楊の背後にあり、 — その上には天が、生命に酔って騒がしい者達[鳥]に満ちて
いた。 — 太陽神はその夕べ[西側]を越えて行き、少しばかり真夜中の方へ屈み込んで、
東側に黄金の頭を持ち上げていた。アルバーノはリアーネの聖なる手を取って先に進んで
行った。「何とすべてが綺麗なことか」（と彼は言った）「何とめくられた世界地図は長い
川や森と共にざわめいていることか、 — 何と東側の山々はしっかり休んで楽しんでい
ることか、 — 何と杜は輝く幹と共に丘を登っていることか、 — 煙りのたなびく谷
と冷たく輝く波に身を投じたいものだ。 — リアーネよ、何とすべてが綺麗なことか」。

*1 何らかの非利己的愛は永遠なものであったに違いない。永遠の真理があるように、永遠の愛も存在
しなければならない。

*2（訳注）ギリシアの彫刻家 Deinokrates はアトス山をアレクサンダー大王の巨大な像に変える案を有し
ていた。

— 「そして神はこの世界におわします」と彼女は言った。 — 「あなたの中に」と彼は言って、老人の言葉を思い出した。つまり愛は神のことであり、神は我々が敬う相手の心の中に住んでいるという言葉である。

今や彼にすでに大きな波が押し寄せて来て、雷の庵の風奏琴を鳴らした。彼の守護霊が彼の前をこう言って飛んで行った。庵の中でおまえの心のすべてを打ち明けよ、と。

昨日の夢想の小さな小屋の前で、彼の嵐の心は四散して、太陽と大地が野生の涙の前で揺れた。彼が彼女と一緒に夕陽の充実した薔薇の輝きの中を一人っきりで互いに語り合う音色の霊の騒ぎの中へ入ったとき、彼はリアーネの両手を掴み、荒々しく自分の胸に押し当てて、彼女の前に声もなく幻惑されて倒れかかった。 — 炎と涙が目と頬の上に飛び、

— 音色の旋風が彼の燃え上がる魂の中へ吹き込み、 — 無垢の穏やかな天使が泣きながら、震えながら、燃える太陽神の方へ屈み込み、 — そして一つの痛みが青ざめた蛇のように穏やかな顔の薔薇の中をうねり、 — アルバーノはどもって言った。「リアーネ、あなたを愛しているのだ —」。...

そのとき蛇は向きを変え、甘美な薔薇の形姿を掴み、覆った。「善良な方。あなたは不幸な方です、でも私に罪はありません」。彼女は崇高に後ずさって、素早く白いヴェールを自分の顔に下ろして、我を忘れて言った。「あなたは死者達を愛しているのですか。これが私の喪のヴェールです。来年このヴェールが私の顔に置かれます」。 — 「そうはならない」とアルバーノは言った。「カロリーネ、彼に答えてください」と彼女は言って、より気高い霊を見るかのように、じっと燃える太陽を見つめた。恐るべき瞬間であった。地震のとき海が波立ち、大気が恐ろしく静かに休まるように、彼の唇はヴェールを被った女性の傍らで黙っていて、心全体が一つの嵐であった。 — 弦の上を嘆息する霊界がさまよって過ぎ、最後の霊が鋭い叫び声を上げて終わった。 — 地上の美人が彼の前で歪み、夕方の雲の中に幅広い炎の旗が植え込まれていて、太陽の目は血を流しながら閉ざされた。 — —

突然リアーネは祈るように両手を組み合わせて、微笑み、赤面した。そして神々しい目からヴェールを持ち上げて、この変容した女性は、薔薇の反照で輝きながら、彼を優しく見つめ、 — 目を下ろし、 — また目を上げて、 — そして伏せた、 — ヴェールがまた落ちてきて、彼女は小声で言った。「私はあなたを愛することにしませう、アルバーノ。私があるあなたを不幸にしないのであれば」。 — 「私はあなたと一緒に死のう」と彼は言った。「それでいいかい」。 — — 今や聖なる霊が燃えるような星々の中を行く太陽神を覆うべき時であろう。 — —

彼の孤独とかくも多くの不思議についてのリアーネの解明はラベッテとカールの侵入で引き延ばされた。この両人は幸せというよりも感動しているように見えた。ラベッテは恋人の慰め多い間近さのために、ロケロールは奇妙な状況と迫って来る夕方のためにそう見えた。というのはある種の間近さには、一つの嵐が付いて来るからで、彼らは自分達の行う歩みを意志に反して速めなければならないのである。

アルバーノがまた自分の生涯の平和の天使と共に、感情のざわめきの最中に、それでも自分の女友達の声を聞くことになる恋人と共に、二人っきりで、黄昏の世界の中の薫るテンペの谷の間にある岩の堤防の上に進んで行ったとき、彼の人生は一羽の鷺のように、嵐の雲の中を通過して働いて来たかのように、そして黒い嵐が自分の翼の下で、更に進行して

行き、星空全体が明るく自分の頭の上で燃えているかのように思われた。リアーネは、乙女のように高貴に堅固に、彼が問いを発する前に返事を与えた。「貴方に私はある秘密を打ち明けなければなりません。これは誰にも、私の母にさえ、母に心配をかけかねないので、黙っていたことです。先ほど私の忘れ難いカロリーネについてお話ししました。私が彼女と一緒に受けようと思っていた私の聖餐式の日、私は夜、私の師の許から母親の許に戻って行きました。それも奇妙な長い洞窟を通過することで、そこは登って行くときは下って行くように思われる所です。私の小間使いの娘はランタンを持って先に行きました。凹面鏡があるロマンチックな木陰道の所で、私は降り注ぐ満月の方を向きました。人間を余りに酷く歪める乱暴な鏡を恐れてのことです。突然私は天上的なコンサートを耳にしました。その後よくまた病気の折りに聞くようになったものです。 — 私は亡き女友達のことを思い出し、 — 憧れを一杯に抱いて月を眺めました。 — そのとき私は向かい側に、無数の光線と共に彼女を見たのです。 — 彼女の美しい目には優しい眼差しが感じられましたが、しかし何か溶かすものがありました。華奢な、ほとんどそこだけが生氣のある口は赤い、しかし透明な果実に似ていて、すべての彼女の色合いは単に光であるように見えました。でもただ青い目と赤い口の点で、この天使はカロリーネに似ているように見えました。光で描くことができるのであれば、私はこの天使をスケッチできましょう。重篤な病気になったときのことで、するとよく彼女が出現し、何とも言えない甘美な声で、私を元気付けてくれました。 — それは普通の言葉というものではなくて、 — その後私はいつも穏やかな眠りに、甘美な死に陥るかのように陥りました。あるとき私は彼女に、 — むしろ内面の言葉で、 — 間もなく私は光の国の彼女の許に移るのではないかと尋ねました。彼女は答えました。今は死なない、少し後になる、と。そしてまことに明確に来年と、それに日時させも呼んだのですが、しかし私は忘れてしまいました。アルバーノ。ただもう少し言わせてください。私は間もなく癒えましたが、長い引きずる時が悲しかったのです。…」

「いけない」 — (とアルバーノは遮った、彼の感情は剣のように互いに打ち合った)

— 「貴女の危険な恐怖の像を尊重しますが、しかし憎みます。空想と病気は実体のない死の天使の素[両親]です。この死の天使が豊の稲光のように焦がしながら青春のすべての花々の上に飛んで来ます」。

彼女は感動して答えた。「善良な敬虔な精神のあなた。あなたは私を決して悲しい思いにさせず、いつも慰め、導き、快活に敬虔にしてくださいます。 — その天使は恐怖の像でしょうか、アルバーノ。 — まさにすべての恐怖の像、すべての霊への恐れから、その天使は私を守ってくれます。いつも私の周りにいるからです。この天使が単に夢の像なのであれば、何故決して私の夢の中には出現しないのでしょうか^{*1}。何故私の欲するときには、来ないのでしょうか。ただ大事な場合にのみ来ます。そのとき私はこの天使に尋ねます。そして喜んで従います。天使は今日私の許に、アルバーノ」(と彼女は小声で、内気に付け加えた)「すでに二回出現しました。途中、私が内面の音楽を聞いたときと、先ほ

*1 何故詩人はその明確な、しばしば観照された被造物[作中人物]がその夢の中で、日中のイメージの下に歩むのを見ることがないのか、ひょっとしたらこのせいであろう。

どの太陽が沈んだとき、雷の庵の中です。そして私に愛情深く答えてくれました」。

「天女のような方、天使は何と言いましたか」とアルバーノは無邪気に尋ねた。 — 「私は途中、ただ天使を見つめて、何も尋ねなかったのです」とこの子供のような女性は赤くなりながら答えた。そしてここで突如彼女の聖なる魂は自覚することなく、ヴェールなしで、彼の前に立っていた。というのは彼女は雷の庵で、目に見えないカロリーネから、彼女の恋愛に対する承諾を得ていたからである。かのカロリーネは彼女の被造物であって、この承諾は、彼女の — 靈感だったのである。然り、天女のような方よ。御身は鏡の前に、御身の形姿の上に乙女らしいヴェールを被って立っていた。そして御身の像がそのヴェールをこっそり持ち上げたとき、御身はまだヴェールを被っていると思っていたのだ。

かくも聖なる心に対するアルバーノの尊崇の念で、彼は一言も発しなかった。この心は神々しい者達をかくも明瞭に夢見たのであり、 — その黄金の花々は死への想いの上に、現世の花々が墓地で育つときのように、ますます高く生長したのであり、 — この心を彼と同時に目に見えない両手が二人の類似した夢の中へ引き入れたのであり^{*1}、 — この心に対しては、その聖なる錯誤に対して卑俗な真実を告げることは恥ずかしく思われたのである。 — 「あなたは天から来られた方です」 — （と彼は感激して言った、そして彼の喜びは、人間の心の渇きを癒やす、目の中で溶けた真珠となった） — 「だからあなたはまた向こうへ行こうとなさる」。 — 「私はあなたに、友の方」（と彼女は微笑んで泣きながら言って、彼の手を彼女の敬虔な心に押し当てた）「私の有するすべてのささやかな人生を、すべての時を最後の時まで捧げましょう。前もって私はあなたに、神様がなさるすべてに覚悟して頂きたいのです」。

彼らは敬虔な神父の小屋に入る前に、アルバーノは友人カールの手を握って、二人の妹達は一緒になった。男友達の方はしばらく黙ったまま前を行った。カールはアルバーノを見つめ、至福の平安を彼の顔に見いだした。アルバーノは、リアーネが溢れる心を妹ラベットの心に押し当てているのを見たとき、彼の中で率直さと歓喜は余りに強力なものとなって、彼は一言も言わずに、永遠の花嫁の愛しい兄の心にくずおれて、至福の涙からすべてを黙ってカールに察知させた。カールは彼の妹リアーネが彼の友からほとんど引き離すことのない愛の花嫁らしい視線から、それにリアーネがラベットの — あたかも二人は間もなく縁者となるかのように、あたかも兄自身が、兄はもはや長いこと彼女のことを小さなリングと呼ぶようになって、間もなくより美しく語りかけるであろうかのように、自分の心の許で兄の心の代わりに打ち明けている親密さから、そのことを察知したことであろう。敬虔な神父の許では歓喜の視線はほとんど紛れもないものであった。この視線をアルバーノは、さながら永遠の門の下に立っているかのように、諸惑星のように順次微光を発している天へ投げかけていた。彼は静かで、穏やかで、彼の心の中にはすべての心が住んでいた。一つの心を純粹に温かく愛するがいい、すると君は皆を後に愛することになろう。その天にいる心は回転して行く太陽のように、露から海に至るまで、その心が温めて見えず鏡の他は何も見ない。

しかしロケロルの心の中では早速、彼が天上的な幸せをかくも間近に見たとき、彼の過

*1 というのは彼と彼女の聖餐式の日、彼は雷雨による彼女の死を信じたからである。

去の物騒な精神が生じて、内部の人間の肢体を癲癩性的のように流血するほどに殴りかかった。 — 永遠に去って行く平安への死滅することのない溜め息が彼を再び苦しめた。彼の失敗、錯誤、それに罪なくして受難する時が、痛々しく前もって計算された。 — そこで彼は語った。(そしてどの人の心をも感動させた。しかし最も哀れなラベットの心を感動させた。この心を彼は自らの許に、熱くなって、抱き寄せた、丁度鷺が伝説によると鳩を抱き寄せるようなもので、そうすると鷺は鳩を引き裂くことはない)。 — つまり彼は高貴に人生の砂漠について、運命について、即ち人間をヴェスヴィオ火山のように火口へと燃やし尽くして、それからまた涼しい沃野をその中へ播種し、そして火口をまた炎で満たす運命について、空ろな人生の唯一の幸福について、愛について、そして運命がその風と共に花を擦るように¹ 吹き散らかして、かくて大地の緑の外皮を切断する傷について語った。 —

しかし彼はそう語りながら、花と咲くラベットを見つめ、この温かさを通じて、さながら自分の愛の堅固な花の蕾を強力に咲かせ、花卉を太陽の下で広げようとした。 — この混乱した者、憧れる者は今日も全く幸福とは言えなかった。彼は他人よりも自分を感動させようとしていた。

何と浄福に予感しながら彼らはまた夜のスフィンクスの前に進み出たことか。これは微笑みながら穏やかな星々の視線で彼らの前に横たわっていた。彼らは静かな、薄明かりの下界を通じて、軽やかに、自由に、足下に重たいくつついてくる大地を有さずに進んで行ったのではないか。そして広大なエリュシオンではただ温かいエーテルだけが舞っていたのではないか。目に見えないプシケ達はその翼で飛んでいたが故に。そしてフルートの谷からは老人がその音色を甘美な愛の矢として彼らに送り届けていた。膨張する心はその傷口で浄福に血を流すように、と。 — アルバーノとリアーネはある眺望の前へ来た。そこは広大な東側の風景が花咲く罌粟の畑の条光と共に、小暗い村々と共に穏やかな山脈の下で上方へ伸びていて、月が目覚めて、その衣装の輝きがすでに精神の輝きのように天を通じて条を引いていた。 — ここで彼らは、月を待ちながら、立ち止まっていた。アルバーノは彼女の手を握った。彼の人生のすべての山脈が白熱した朝焼けの中にあった。「リアーネ」(と彼は言った)「かくも無数の春が今や向こうの垂れかかっている諸惑星の上にある。しかしこの春が最も美しい」。 — 「本当に人生は好ましい。今日は私には愛しすぎます。 — アルバーノ」(と彼女は小声で付け加えた。彼女の顔全体が崇高な涙のない愛となった。そこで星々が彼女の花嫁ドレスを織り込み、刺繍した)。「神が私を呼び出すのであれば、神はいつも私をあなたの前に現れるようにして欲しいものです。丁度私にカロリーネが現れるように。あなたの素敵な生涯全体を通じて、私があなたの伴をして、あなたを慰めたり、警告したりすることができさえすれば、他の天は要りません」。

しかし彼が自分の愛の充実と死の妄想への腹立たしい痛みとを告げようと思ったとき、荒々しいカールがやって来た。彼はヴェスヴィオ火山のように溶岩の奔流と雨の奔流とを同時に信じやすいラベットの上に注ぎながら、彼女と自分の心をただ更に一杯にし、一層軽いものとはしていなかった。そのときカールは崇高化された人間達を見つめ、青い地平

*1 例えば冬あらせいとう。

線を見つめた。そこではすでに月がその微光を固いマストの先端と梢の間で放っていて、再び聖なる愛の光輝の中を覗いていた。――すると彼はもはや長く自制しておれず、彼の苦悩に満ちた心は神に対するように上昇して、永遠の決心に至った。彼はアルバーノとラベッテを抱擁して言った。「愛しいアルバーノ、――愛しいラベッテ、――私の不幸な心を支えておくれ」。――

ラベッテは同情して母親が子供をそうするように彼を抱き寄せて、熱く泣きながら彼女の魂のすべてを彼に捧げた。――アルバーノは驚きながら愛の同盟を包み込んだ。――リアーネは歓喜の渦で愛しい心の許に引き寄せられた。――聞かれることなくフルートの音が響き続けた。見られることなく星々の白い旗が上方で揺れた。――カールは愛の狂気じみた言葉と歓喜の中の死という荒々しい願望を語った。――アルバーノは震えながらリアーネの花の唇を、ヨハネがキリストを接吻したように接吻した。そして重たい銀河が[鉦脈の]占い棒のように下のこちらの彼の黄金の幸福の方に弧を描いた。――リアーネが溜め息を付いた。「お母様、あなたの子供達は何と幸せなのでしょう」。――月はすでに平和の白い天使のように青空の中へ飛んで行って、偉大な抱擁を神々しいものとした。しかし浄福な者達はそれに気付かなかった。滝のように轟然と豊かな人生が彼らを覆っていた。そして彼らは、フルートの音が黙して、すべての丘が輝いていることを知らなかった。

(第二巻の終わり)

(第三巻)

第十五ヨベル期

男と女

第六十七周

舞台を見て私は楽しい経験をしてきたが、それはつまり舞台上で早速カーテンが上がった後出現する苦痛に対しては、わずかな関心しか私は示さず、これに対して早速自らの音楽と共に音楽の背後で生ずる歓喜に対しては、最大の関心を示したということである。人間は歓喜が動機付けられ、弁解されるとき以上に、嘆きでは動機付けられ、弁解されることを欲している。それ故私は遠慮なく、三巻目では浄福で始めている。この浄福はいずれにせよ前述のカップルが過剰に準備したものである。

今この瞬間、喜ばしげな顔を天に上げて、天に更にもっと美しい天をその上に反射させたすべてのアダムの子孫の中で、最大の天を有する或る者、つまり最大の浄福者が存在していたに違いない。勿論、我らの短い歩行では平原となるこの地球上で、すべての耐えている者の中で、最大の不幸な或る者が存在していたに違いない。そしてこの哀れな者はすでに眠りに就いていて、その石だらけの路上にいて欲しくないものである。私は、アルバーノはかの最大の幸せ者ではなくて、―― それで自分の天の上に更に高い天を欲していることを願っていたけれども、―― しかし彼がかの最も神聖な夜の後の朝、最も豊かな夢についての現今の夢の中では、深く青春と自然と未来という三重の花々の中に立っていないが、狭い人間の胸が張り得る限りで、最も広大な天を自らの裡に有していたというのは多分に有り得る話である。

彼は自分の雷の小庵から、この小さな神殿、その壁にはその中で彼の目に見える者となった女神の微光がまだ見られたけれども、この神殿からリラルの新たに形成された山々と庭園とを眺めていた。彼にとってあたかも自分の白く赤く花咲く、山の頂と果実の頂とで飾られた未来を、裸の大地に築かれた一杯の楽園を、覗き込んでいるかのように思われた。彼は自分の凱旋車を襲いかねない喜びの盗賊達を自分の未来の中に探してみた。――

彼は盗賊達は皆、明らかに自分の両腕と武器に比すれば弱すぎると思った。彼はリアーネの両親と自らの父親とこれまでの大気中で活動して来ている霊の群れを、恋人への路上の途中に置いてみた。―― 彼の筋肉の中で、容易に彼女の許に立ち向かって行けて、彼女を仕事と腕力とで自分の人生の中へ引き受けるという過剰な力が輝いた。「いや」（と彼は言った）「私は全く幸せ者で、何ももはや必要としない、運命を必要としない。ただ私の心と彼女の心がありさえすればいい」。アルバーノよ、邪悪な守護霊がこの危険な考えを聞かなかったことにしてほしいものだ、この霊がこの考えをネメシス[復讐の女神]の許に持参することのないように。この荒々しく乱れた人生においては、何の歩みも、花と咲く遊歩道の歩みでさえ、全く安全というわけに行かない。そしてこの人工庭園の充実の最中に、君を見知らぬ毒の木が待ち受けていて、人生に冷たい毒を吐き出すのだ。―― それ故、人々がまだ謙虚であって、大きな歓喜の中で神に祈っていたかつての方がましであったのだ。というのは無限の者の傍らで、炎の目は伏せられて泣いていたけれども、しかただ感謝の念からであったのだから。

今や彼が暮らしていた美しい永遠には卑小なカレンダーの尺度は置かれるべきではなか

ろう。彼は毎夕、毎朝、彼女をその小村で見た。宵の明星として彼女は彼の夢の前に出現し、明けの明星として彼の日中の前に出現した。その間隙を二人は互いに自ら交わす手紙で埋めた。彼らが再会からほどなくして夕方別れ、北の天の下ではすでに薔薇の蕾の小枝が伸びて、それらは人間達の眠りの間に素早く東側へ生長して、千もの花咲く薔薇を天から、太陽と愛とが再び生ずる前に、垂らしたとき、 — そして彼の友人のカールが夜、彼の許に留まり、彼がどこから明かりが生じているのか、東[朝]からかそれとも月からかと時間を尋ねたとき、 — そしてまだ月と朝とは露の遊歩林の中で一緒に見えたので、彼が発見したとき、そして彼にとって数時間前に後にしたその道が全く新たな道に見え、不在が余りに長いものに思えたとき（アモールの矢は半ば月を示す秒針であり、半ば秒を示す月針であるからで、また恋人の間近では最小の不在でも、恋人の遠ざかりの大きな不在よりも長く感じられるからで） — そして彼が彼女を再び見いだしたとき、大地は、そこから光が発せられる太陽となり、彼の心はただ光だけの中に立っていた。そして春の朝に、春の朝を夢に見る人間、そして目覚めたとき春の朝をなお一層明るく自分の周りに見いだす人間のように、彼は彼女の前で、恋人についての淨福な青春の夢の後、両目を開けて、もはや最も美しい夢さえも求めなかった。

時折二人は、長い夏の日が余りに長くなると、離れた山々の上で出会った。そこで申し合わせに従って収穫を眺めた。時にラベッテが一人でリラルの兄の許に来て、リアーネについて幾ばくかのことを彼の耳に入れた。リアーネが本を読むと、彼はそれを後で読んだ。しばしば彼が最初に読み、彼女が最後に読んだ。最も美しい、最も無垢な魂が、互いに打ち明けるとき互いに見せ合うことのできる神々しいもの、もっと神聖なものにする神聖な心、もっと白熱するものにする白熱する心を、これを彼らは見せ合った。アルバーノはすべての生命に対し穏やかになった。より高次の美と青春の輝きが彼の顔を充たした。自然と彼の子供時代の美しい領域が、愛によって飾られた。愛がその領域によって飾られるのではなかった。彼は希望の青ざめたかすかな月の馬車から生き生きした歓喜のざわめく輝かしい日輪の馬車に乗り込んだ。木製の学問という舵の船上でさえ、今やバッカスの奇蹟の手によって[オヴィディウス、変身譚、Ⅲ.664ff.]生氣付けられ、マストとロープは葡萄の幹と葡萄とに変じた。 — 彼がフルレの家へ行くと、彼は寛容に満ちて入って行ったので、寛容を犠牲にすることなく、その家から戻ることになった。大臣は顔に快活な花咲く理念の満開を浮かべてハールハールから戻って来て、彼に歓喜の魅力的展望を、つまり町と国とが侯爵の間近な結婚式を挙げて、最も美しい花嫁を得るであろうという眺望を告げた。

こうしたことすべてに加えて、更に彼は友を有していなかったか。人はかくも喜びの炎の間近にいと、確かに人は人間を避けるものである。人間は容易に我々と素敵な温かさの間に割り込んで来るからである。 — しかし人は人間を求めもする。心からの友は我々の願望、幸福であって、この友は我々が眠って語る楽しい夢を、追い払うことなく、こっそりと先に進めるものである。カールは穏やかに友人の夢の中で戯れた。しかし彼はすでに妹に対する心からの愛からもそうしたことであろう。

実際かくも多くの青春 — 夏の天候 — 無垢 — 自由 — 素敵な一帯 — 高貴な愛と友情があれば、すでに下界のこの地上で、上の天で一つの天と名付けられるようなものに似た何ものかが合成されよう。一つの天国の地図、地図化されたエリュシオン・

アトラスというものは次のようなものに他ならないであろう。先端には散在する離宮や避暑別荘の付いた長い牧人の国、 — 中央には[デッサウのバーゼドーの]「汎愛校」付属の小森、 — 上に[アルプスの]牧場付きタボルの山々、 — 長い[ピレネー山地の]カンパンの谷、 — その上にはサン・ピエール島[ルソーに馴染みのビエンヌ湖の島]のある広大なエーゲ海、 — その向こうに新たな堅固な牧人の国の岸边、これはダフネの杜とアルキノオスの庭園[Odyssee, VII.112ff.]ですっかり覆われているもので、 — その背後にはまた広大に広がるアルカディア等々。

さてアルバーノが哲学と禁欲主義から自らの中で有しているすべてを、 — というのは、彼は雲から腕が彼に差し出すすべてを自身の腕の戦利品と見なしたからで、 — 応用して、哲学と禁欲主義とが与える尺度を、自分の歓喜から、哲学と禁欲主義によって、奪うことにした。節度は単に患者や小人のためにすぎない、と彼は言った。すべてのかの厭わしい、平等的平均率やメトロノームは、喜びの形成であれ、才能の形成であれ、世間より自らに益のあろうものであり、これに対しその反対物は自らよりは世間に益のあろうものである、と¹⁾。

彼は立派な原理を眼前に持って来た。人間は、自分がなそうと思う、あるいは享受しようと思うものに関して、自由で、限界がないのではなく、自分がなくて済まそうと思うものに関してそうなのである。人間はその気になれば、すべてをなくて済まそうと思えるのである、と。そもそも、と彼は言った、人は単にいつも恐れるべきか、決して恐れる必要はないかのどちらかである。というのはおまえの人生のテントは充填された機雷の上にあるのであって、周辺で時はおまえを狙ってむき出しの銃を構えているからだ。 — ただ千に一回当たるだけである。いずれにせよ私は臆病に屈んでいるよりもむしろ立ったまま倒れることにしよう。 — しかし、と彼は、その点に関しては弁解すらするためにこう結論付けた、 — 沈着さというものは外科医や女中よりも上等なものにはふさわしくないものだろうか、むしろ我らのミュージズや女神にふさわしいものではないか、と。というのは沈着さは、失われた財[善]をなくて済ませられるようにするから、善なのではなくて、沈着さそのものが一つの善なのであり、代替の善よりもより大きな善なのであるからである。最高の浄福な者でさえ沈着さを求めなければならない、外的な機会や天分が欠けていてもそうしなければならない。いや沈着さは応用されるより以前に所有されていると、そ

*1 どの部分的形成も勿論全体のためには結構なものである。しかし単に、その対立物の部分的形成がそれをより高次の方程式、総額の中で止揚して、かくてすべての個々の人間は単に一人の巨人の肢体となるにすぎない、つまりスウェーデンボルグ[Swedenborg(1688-1772)]風な巨人のようなものであるからにすぎない。しかしある個人の中で、別な個人の対照的な欠点の助けとなるような欠点が生ずる限り、

— かくて人類の道が低下と高尚化によって早速苦しめ反撥させる限り、 — すべての一面的充実
は単に時代による治療となり、時代の健康とは言えないということが分かる。つまりより高次の法則は確かにより緩慢な個人的な形成であるが、しかし調和的な形成に留まるものであること、また確かにより卑小な形成であるが、しかし全面的な、かくて後の時代ではより速やかな形成に留まるものであることが分かる。力学の中では力と時間とが交互に補完するように、 — 永遠は無限の力であることを我々はいつも失念する。

れだけ一層結構である。[先の千に一回当たるの注*1]

一部は、これらの錯覚や正当化は悲劇的なロケロールに対する正当防衛、防御であった。ロケロールはどんな喜びも、友人の喜びさえも、陰気な対立で目立たせようとしていた。また一部は、かの錯覚や正当化には、これまでその深さを測らずに痛みを身に投じた高貴な男、人生を通して泳ぐ自らの力を常に感じようと思っていた高貴な男ならば、自分の浄福や地獄の重心がずれて、自らの自我から他人の自我へ赴いたことに気付いたならば、必然的に陥るに相違なからうものである。「彼女が亡くなったらどうしよう」と彼は自分に尋ねた。この死に対するほど誰かの死を恐れることに彼は慣れていなかった。それ故空想のこの薊をまことに鋭く手に掴んで、それを押し潰した。結局、愛の純なる田舎の空気とアルカディアでの牧人の踊りは、リアーネの頬にますます多くの薔薇色をもたらしたので、彼の薊は生長することを止めた。

人生のすべての他の虻を、 — それらがリアーネの心の中を通り抜けできなくなりさえしたら、 — 彼は受け入れなかった。どんな犠牲を払っても、 — 一切を去り、欠き、怒り、試みることになろうとも、 — 彼はリアーネを購おうと思った。彼に対し、フルレ家とガスパール家の両家から脅威的に向かって来た恐怖や幽霊を彼は呼び寄せ、それを解体した。敵がいつか立ちはだかったら、私もその敵となると彼は考えた。

しばしば彼はタルタルスに立って、この浮き彫り細工の死の静物画の中に魂の静止を見いだした。現在は我々が現在の反照を写すよりも素早く我々の反照を写し出す。この点でも彼は穏やかな、広大な、人生を明るくする希望と、リアーネの死への信仰に対して彼の流す甘美な涙を得ていた。それは彼が有り得ると考えていたからではなく、その死の信仰は有り得ないと考えたからで、この思いは愛と喜びと治癒によって日々大きなものとなって行った。

ただ、それに対してはどんな武器も弾けてしまう一つの不幸が彼にとってはあった。しかしその可能性を罪深い考えのせいと彼は見なしていた。つまり彼とリアーネは科や時間、あるいは人間によって互いに愛することを止めてしまいかねないという考えであった。この点では、二人の心を信頼して、彼は大胆に未来に反抗した。温かい永遠を信頼して、自

*1 技師ボールによれば、文字通り小銃の千回に一度の射撃のみが当たるにすぎない。 — いつでもそのような具合である。死を恐れよとなれば、窓から落下する植木鉢や、青天の霹靂や、空気銃の発射、心臓ポリープ、狂犬、盗賊、すべての指の傷、毒薬トファの水、茸の食い道楽等々。要するに自然全体が、 — この絶えず働き続けて砕く、臙脂虫[洋紅]製造所が並ぶことになり、 — 無数の開かれた運命の女神パルカの鉄で君は取り巻かれることになる。そして君は、それでも — 人々は八十歳になるといふ — 慰めしか有しない。零落を恐れよとなれば、君は火災や水難、飢饉、戦火に襲われ、[フランスの Vendee] ヴァンデの泥棒[反革命]、貪欲な爪と罌を持った革命に襲われる。それでも金持ちの君に言うが、貧乏人は — 同じ猛鳥の下で這いずり回りながら、 — 結局は君同様に金持ちになる。それ故左右に横たわる危険という微睡みのライオンの群れの中を大胆に進んで泉の許へ行くことだ。ただその群れを勇敢に目覚めさせてはいけない。 — 勿論地獄の神が、何も恐れられないような個々人を地下に引きずり下ろす。しかしまた何も期待しないような個々人を上級の神は引き上げる。恐怖と希望はここでは、共同の夜の中、沈んで行く。

分の恍惚を表現するとき、誰がこう言わないであろうか。運命の女神パルカは我々の人生を断ち切ることができよう、しかし女神はやって来て、我々の愛の絆に対し鉄を開けられるなら開けて見るがいい、と。その翌日パルカはその者の前に立って、鉄を押し切った。

第六十八周

あるときロケロールが全く遅くなってやって来て、牧人の小屋での「宵の明星パーティー」にアルバーノと一緒に連れて行こうとした。ロケロールがラベツテと一緒に約束したパーティーであった。大尉は自分の愛と喜びの温かい源泉の周りに好んで全く選び抜かれた日時や状況の泉の枠縁を設定したがっていた。それができる場合には、彼は例えば彼の愛を、誕生日にとか、 — 皆既日食の下でとか、 — 閏日にとか、 — 冬の花咲く温室でとか、 — 氷上の櫓の椅子の背後でとか、 — 納骨堂の中で告白した。同様に彼は好んで他人と重要な場所や日時に、教会の椅子や、 — 春や冬の始まりの日に、 — 素人劇場の書き割りや、 — 火事場で、 — タルタルスの近くやフルートの谷で喧嘩した。しかしアルバーノは若すぎて、 — 他人が年取りすぎているような具合で、 — 自分の新鮮な感情をまず人為的な時や場所で味付けすることはできなかった。彼はむしろ自分の感情でこれらの日時をより美しくする方であった。

性急な喜びを抱いてアルバーノは喜びの思いがけない道を飛んで行った。昨日の夕べはとても豊かなものであって、 — 四つの楽園の川は天から一つの滝となって、彼の心の中へ落下していた、 — 今日の夕べはその心の飛沫を上げる渦の中へ飛び込むつもりであった。 — すでに夕べの天は美しく純粋であった。ヘスペルス[金星]は輝きを増しながら、その薄明かりの軌道を下に描いていた。

ラベツテは牧人小屋（狩猟小屋）の山の麓で待っていて、彼をこっそりと、予期していない女友達の許へ案内した。リアーネは窓辺でヘスペルスの許、目を輝かせて思いに耽っていて、一杯に花咲く秋の花々のことを考えていた。これらの花々は今や彼女の人生の中でかくも遅く、かくも間近に、最も長い夜の傍らで花咲いたものであった。彼女は今日幾多のことで悲しい思いであった。彼女はそもそもこれまで、自分の愛を楽しみ、大きくすることよりも、むしろ自分の愛に値し、それを正当化しようとし、自分の心よりも他人の心をもっと幸せにしようとしてきた。何と言いようもなく、彼女は彼のための行為に憧れていたことか、 — ただ犠牲だけが彼女の行為であった。 — そしてカールのためにはいつでもただ一杯の、 — 飲み物を準備すればいい自分の女友達のラベツテを本当に羨ましく思っていた。他に思い付かなくて、彼女は自分の奉仕の熱意をアルバーノの両親と妹に対するより大きな娘らしい愛と接近とで表現した。それどころか少し料理も学んだ。これは、他の大臣の娘達、サラダと紅茶しか作らない娘達ならば、大目に見て、自分達はリアーネの場合でも、別に変わずに、むしろ料理を一品多く作ることになろうと考えて許さなければならないことであろう。いや、彼女はラベツテを自分より徳操的であると考えた。ラベツテは広範囲に長時間もっと活動的であり得たからである。ラベツテはリアーネをもっと良い人と考えた。リアーネは彼女より好んで祈ったからである。彼女らは兄に関して同じ間違いを重ねていた。ラベツテにはカールが、リアーネにはアルバーノの方がより穏やかに思われた。両者はお互いの報告からそう推測したのであった。

女は愛する限り、ずっと愛し続ける。 — 男はその間にすべきことがある。 — リアーネはすべてを彼の絵とその額縁に変えた。この山、この小部屋、この彼にとってかつて危険であった的竿、これらが彼の確固たる絵のためのパステルとなった。彼女はいつも、彼は自分よりもっとより良いものにふさわしいと繰り返し考えた。というのは愛は謙虚さであるからである。結婚指輪は宝石では輝かない。自分の早逝は彼を悲しませるであろうと考え、彼女は感動した。そのとき彼女は更に、彼がかつて知らずに胸に抱き寄せた痘瘡で盲いた少女^{*1}に出会った。彼女は悲しみの機知の点で、この点でもこの盲人の娘に似ていると思った。かつて悼みのせいで目が蒙った同じような、単にもっとより短い夜[盲目]の点ばかりではなかった。

彼女の似姿、ヘスペルス同様に穏やかに、人生の夕べの地平線上に浮かんでいると、彼女の恋人アルバーノは彼女のことを思った。彼女は決して素早く自分の心からびっくりする現在に出て来て、対応することは出来なかった。彼女の言い回しは、向日葵の回転に似て、単にゆっくりとしたものであった。すべての情感が長く彼女の誠実な胸の中に残っていた。そもそもこの恋する若者にとって愛しい女性の対応が、別れの際に見られた最後のイメージに似ていると思われることは稀であった。女性の魂は、 — そう男性は欲するが、 — 最後の瞬間と全く同じ翼、激情、天を持ってまた次の瞬間にもざわめいて欲しいと思うものである。しかし以前からリアーネはその友を内気に、穏やかに、別れた時とは別な風に出迎えた。時折炎の精神にとっては、この優しい待機、臉のこのゆっくりした上昇は、ほとんど昔の冷たさへの転換と思われるのであった。

今日そのことはより熱い伯爵をいつもより強力に捉えた。お互いに馴染むように、そして微笑みかけ、触れ合うようにされているペアの余所の子供達のように、彼ら両人は友好的に、互いに当惑して立っていた。彼女は彼の妹ラベッテにこの山での彼の子供時代の冒険について語って貰ったと話した。恋人の女性はその男友達の話ほどに美しく豊かな話を知らない。「その頃すでに」（と彼は感動して言った）「あなたの山々の方を眺めていました。あなたの名前は黄金の銘のように私の青春全体に記されているのです。リアーネよ、あなたが私とまだ会っていないときに、私があなたを愛していたように、私のことを愛していましたか」。 —

「アルバーノ、それはきつとなかったことでしょう」（と彼女は答えた）「もっと後のことです」。しかし彼女は自分の盲目のことを思っていて、言った。彼は彼女にとって、彼が自分の父親の許で食事をしたかの夕べ、その目の黄昏状態の中で、昔の北方の王侯の息子、例えばオロ^{*2}のように思われた。自分は彼のことを父親や兄のように尊敬しながら

*1 『巨人』第一巻、80頁。[十三周、拙訳49頁]

*2 オラウス王の宮廷で王侯の息子オロは、農夫の衣服を着て、娘に対し盗賊から守ることを申し出た。当時眼差しの炎、形姿の高貴さは高い出自の証明と見なされていた。例えばズアンヒタは羊飼いの服の王レーグナーをその目と顔の美しさで察知したものである。王の娘は試すようにオロの炎の目を見て、ほとんど失神した。彼女は再び見ようとして、正気を失い、三度目で失神した。それ故神々しい若者は臉を降ろしたが、額とブロンドの毛髪とその身分が顕れた。ローゼンタールとカルクによる『ドイツ人とその祖国』参照。第一巻、166頁、167頁。

畏怖の念を抱いていたと話した。彼女の男性に対する高い敬意に、さもあらんと推察するに値する男性はほとんどいないし、ましてやその敬意のきっかけに値する男性は少ない。

「見えるようになった時には」とアルバーノは言った、「それは申した通りです」と彼女は素朴に答えた。「でもあなたは私の兄を愛していましたし」（と彼女は続けた）「あなたの妹さんに対してもとても好意的でしたので、私も勿論とても勇敢になって、今やあなたの二番目の妹というわけです。 — いずれにせよ、あなたは一人の妹を亡くされていて、 — アルバーノいいですか、私は全く取るに足りず、殊にあなたにとってはそうです。 — でも私には一つの慰めがあります」。 —

神聖さと冷淡さのこの混淆に混乱して、彼は彼女を単に激しく接吻することができたので、彼女を論駁することなく、すぐにこう尋ねざるを得なかった。「どんな慰めです」。

— 「あなたがいつかとても幸せになるであろうということです」と彼女は小声で言った。「リアーネ、もっとはっきりと」と彼は言った。彼女が自分の死と霊によるリンダの告知のことを言っていると理解できなかったからである。「一年後のことです」（と彼女は答えた）「予言に従って」。彼は彼女を黙って、荒々しく、推察しながら不安げに見つめた。彼女は泣きながら彼の胸元に倒れ、突然切迫していた内部の溜め息を放った。「そのときには私は亡くなっている」（と彼女は激しく言った）「浄福の思いで、あなたがリアーネへの愛で報われているのを見守ることになるのではないのでしょうか。きっとそうなりましょう」。 —

いずれにせよ、泣き、怒り、悩み、小躍りし、賛嘆するがいい、激した若者よ。しかし君はそれでもこの謙虚な魂を理解していない。 — 聖なる謙虚さである。人間ではなく、神によって創られている唯一の徳操である。御身は御身が隠しているものすべて、あるいは認識していないものすべてよりも気高い。御身、天上的な光線よ、地上的光同様に^{*1}、御身はすべての余所の色合いを示して、目に見えず、一つの色合いもなく天に漂っている。誰も御身の無知を教示によって冒瀆すべきではない。御身の小さな白い花々が落下したら、花々は戻ることはなく、それからはただ御身の果実の周りで、謙虚さがその葉を広げることになる。

痛々しくアルバーノの中でその心が矛盾に砕けた、さながら彼の心とリアーネの心に砕けた。彼女は純然たる愛と謙虚さに他ならず、彼女の才能の輝きは単に余所の付属品に過ぎなかった。白い大理石の神々の像が多彩な付属品を単に飾りとして有するようなものである。人は彼女を崇拜することしかできなかった。彼女が間違っただの途上であろうと人は崇拜しかできなかった。別な面では、彼女は優しい、変わりやすい感情の傍ら、確固たる意見と錯誤を有していて、彼の謙虚さは空しく彼女の謙讓さを攻め、彼の凝視は空しく彼女の霊の妄想を攻めた。この妄想の後を行く敵意ある結果が、明確に彼女の人生のすべての喜びの上に引かれるのを彼は見た。彼女が彼を愛するのは、単に彼女が何も憎まないからであり、彼女はいつも恋人というより妹であるという彼にとって永遠にぬぐえぬ疑念がまた武装して彼を襲ってきた。かくてここではすべてが入り乱れて、願望、義務、幸福、

*1 というのは人々が光と呼ぶものは、単により強力な白にすぎないからである。誰も夜、地球のそばをかすめて、太陽から満月へ落ちて行く光の流れを見ない。

場所が入り乱れて争った。両人は愛故に、互いに新しく未知であった。しかしリアーネは彼同様、察しなかった。何と二人の人間が、似通った人間が、互いに余所余所しく、不似合いなものになることか、単に一つの神性が両者の間に漂い、両者を照らす故に。

何かが彼の中で不調和なまま解消されずに残った。彼はそのことをはなはだ感じ、夏の夜は彼の有していた歓喜よりもより高い歓喜のために微光を発していたし、一 深くエーテルの中で震えている宵の明星が薔薇色の雲を通過して、その雲の下に埋葬されていた太陽の後を追っていた、一 実る穂の平野はざわめくことなく香りを放っていた、そして花の閉じた沃野は輝くことなく緑色となっていた、一 世間とすべての小夜啼鳥は眠り、生命は下界では静かな修道院の庭となっていて、ただ上方で星座だけが遠くの大地からの春の風を前にして銀色のエーテルの堅琴として震え、響いているように見えた。

自分の心を発声するために、彼はリアーネに翌朝再会しなければならなかった。ラベツテは果てしなく快活になってその友ロケロールと山からこちらにやって来た。両人とも冗談と高笑いの余りほとんど疲れているように見えた。というのはロケロールはすべてを、冗談でさえも、痛々しくなるほどに駆り立ててからである。ロケロールは今日の招待の目玉であった宵の明星を陽気な思い付きと当てこすりの温室、宗家へと変えていた。最初彼はもう明日は一緒に来ようとはしなかった。しかし最後に彼は同意した。ラベツテがこう請け合ったのである。「自分は立派な殿方のことを良く分かっています。でもお世話させてくださらなくては」。

朝焼けが始まったとき、アルバーノは彼と一緒にまたやって来た。しかし「領主の庭園」の庭の木戸がすでに開いていて、リアーネはすでに木陰道にいた。書類の冊子（とそう見えた）が彼女の膝の上であり、その側に彼女の組み合わされた両手があった。彼女は上方に祈るというよりはむしろ瞑想してまっすぐ見つめていた。しかし彼女は自分のアルバーノを穏やかにまた余所余所しく微笑んで受け入れた。丁度一人の人間が祈りの中入って来た客人に挨拶しながら微笑みかけ、更に祈り続けるような具合であった。伯爵はこれまでいつも抑制された出迎えに備えなければならなかった。素早く繰り返される一つの誤解で、これが見られるたびに、いつも最初のとくと同様に苛立たしく、新たなことに思われるのであった。彼は、最初の乙女らしい内気さよりは何かもっと堅牢なものが、一人の少女が愛のまぶしい太陽のためにいつも朝焼けの他に、更に一つの薄明を、そしてこの薄明のために更に一つの薄明を發明しようとするときの何か堅牢なものが、彼らの魂の炎の溶解を妨げているとまことに強く感じた。

彼は彼女に何を讀んでいるのか尋ねた。彼女は躊躇してつかえた。素早く閃いた考えが彼女の心を開けたように見えた。彼女は彼に本を与えて、言った。これはフランス語の原稿で、つまり手書きの祈りです、一 何年か前に自分の母親が起草したもので、一 これには自分の考えよりも感動させられる、と。しかし相変わらず優しく織り込まれた顔からは、彼女の心から去ろうとしていた一つの修道院的考えが見られた。一 アルバーノはこの心の賛美歌朗読者に何を非難できたであろうか、誰が歌姫に返事を与えられるであろうか。一 一人の祈る女性が、我々の両腕には届かない高い聖なる地に一人の不幸な女性のように立っているのである。一一 しかし大方の祈りは何と劣等なものに違いないものか、祈りは、一 早期には良い香りの木材からできているロザリオに似て、魅力を発揮するものであるが、一 後には、晩年には、単に染みとして、遺物やあるいは

觸體に似たものとして作用するからである。まさに觸體と共にロザリオは終わるものである。 —

彼の問いかけを待たずに、彼女は突然、祈りの際自分の妨げとなったものを言った。つまり祈りのこの箇所である。「神様、私ガ毎日真実デ誠実デアリマスヨウニ云々」。自分はこれまで自分の愛する母に自分の恋愛を黙っていたのであるから、と。彼女は付け加えた、母が間もなくやって来る、母親に秘めた心を打ち明けることにする、と。「だめだ」（と彼はほとんど怒って言った）「それはいけない。あなたの秘密は私の秘密でもあります」。 — 男達はしばしば詩文では優しく扱うことを、例えば女性的敬虔さや率直さを、散文では厳しく扱う。

さて彼ほど、両親の執筆の指や人差し指、小指が対の両手に介入してくることを憎む者はいなかった。彼は例えば大臣からの戦争や恋敵を恐れていたわけではない、 — 大臣に対してはむしろ両腕を開け、喜びの祝典を行うであろうと想定していた、 — そうではなく、彼の解放され、解放をもたらす大胆な精神にとって、次のような厭わしい考えほど痛々しく思われるものはなかったからである。つまり愛の祭壇の聖なる犠牲の炎の許に両親は何と汚れた泥炭を燃やすために用意することか、あるいは何という鍋を料理のために置くことになるか、と。 — そのときには何と容易に詩的両親でさえ、しばしば子供達と一緒に散文的あるいは法律的両親に、父親は行政局に、母親は会計局に変わるることか、

— 少なくともそのときには何と宮廷の空気は隷属的なものにするか[都市の空気は自由にする、古法]、単に詩的なエーテルのみが自由にするにすぎない、 — そして何という摂動が彼のヘスペルスに対して引力のある天体、老大臣から生ずることであろうか、この大臣は恋愛の際には、恋愛ほど無益なものはないと思っていたのであり、この大臣にとっては身分のための結婚生活用の最も神聖な情感が、牧師職用のヘブライ語に見えたのである、即ち奉仕より試験に役立つと見えたのである。 — かくも劣等な風に彼は自分の義理の父親について考えていた。これ以上劣等なことを知らなかったからである。

しかし善良な娘は母親のことを余所の男よりももっと高貴に考えていた。そして彼女の心は痛々しく沈黙に逆らった。彼女は入って来た兄に相談した。しかしこの兄は全くアルバーノの意見であった。「女達は」（と彼は、最良な気分とは言えずに、付け加えた）「愛の中で語るよりも、愛について語るのを好むものだ。男達はその逆」。 — 「いやです」（とリアーネはきっぱりと言った）「私の母親が私に尋ねたら、本当でないとは言えません」。 — 「何ですと」（とアルバーノは驚いて発した）「誰も望みませんよ」。というのは彼にとっても自由な真実が魂の高貴さの明らかな兜であったからである。ただ彼は真実を自尊心から発し、リアーネは真実を人間愛から発した。

ラベッテは茶の道具と瓶とを持ってやって来た、その中には大尉のために茶の真髓、根源の炎、あるいは神経のエーテル、つまりアラク酒があった。彼は朝、夕方になってようやくアラク酒を飲めるような相手の人々の許に行くことを好まなかった。ラベッテは昨日このような不作法に言及し、今日は満足させたのであった。 — 「自由な自我が」（と健康なアルバーノはしばしば彼に向かって言った）「どうして感覚や内臓の従者となるようか。我々はいずれにせよ十分に肉体の絆で窮屈に結ばれていないだろうか。君は鎖によって更に鎖を繋ごうとしている」。 — ロケロールはこれに対していつも同じ返事をした。「その逆だ。肉体によって私は自分をまさに肉体から解放している、例えばワインによっ

て血から解放している。君は肉体上の感覚の隷属から解放されずに、すべての君の意識や考えが、単に現世の大地に張り付いている肉体的奉公によってのみ貴族たり得ているのであれば、何故君はこれらの反乱分子、専制者を自らの従者として利用しないのか分からない。 — 何故私は肉体を単に劣等に自分に対し作用させ、同様に有利なように作用させてはいけないのか。 — アルバーノは自説を主張して、健康の静かな明かりは、阿片の隷属という罌粟油の炎よりも立派である。我々の精神が人間のチーム全員と共に悩む肉体的捕虜というのは個人的枷による海老責めの拘留よりも名誉あるものであろう、と。

しかし今日は酒精のある燻された紅茶もロケロールからある種の不快の念を洗い落とすことができなかった。彼は夜警でより青白くなっていた、一方伯爵はより熱くなっていた。ロケロールには「領主の庭園」が全く人の背丈の板張りの枠で囲まれていることがまことに気に入らなかった。板張りは、いかさま師の屋台のように何も招き入れないものであるというよりは、むしろビリヤードの眼帯が眼球に外を覗かせないものであり、自分の眺望の他には何の眺望も許さないものであった。同じようにこの遊園地は次の点でも彼の喝采を得られなかった。つまり彼らが座っていた木陰道の芝生のベンチはまだ刈り取られておらず、 — すべての花壇にただ煮込みの肉の周りの単なる植物が風に吹かれているばかりで、 — その臨終の吊り床[罌]には二、三のモグラの他には何ら熟したものは掛かっておらず、鈴の鳴る中央の穴の中へ九柱戯をするそのレーンでは、斜めの戻りの溝が九柱遊の球の返球をまた容易にしている、(投げないとしても)レーンの耕地を越えて運ぶよりも楽にしており、どこにも温室は見当たらず、例外はただ一度幸い庭園の扉が開いて、丁度手押し車で花と咲く温室箱がリラルールへ運ばれる時だけだと述べた。

大尉はこうした特徴をただ諷刺的に述べればよくて、すると見たところ笑っているラベッテは内的に傷付くのであった。 — 女性はその肉体的枝条への非難に、それが子供や服や菓子や家具であろうと^{*1}、耐えられないからである。 — かくて彼の高い山は次第にまた雲が取れて来て、ラベッテは更にもっとはなはだしく陽気になれた。

アルバーノはこの日の朝、さながら幼少時の早期のように、自分の子供時代のこの楽園の小庭にいて、秘かに喜んでいて。というのは初恋においては、シェークスピアの作品におけるように、その芝居の板張りの舞台は何も肝要なことではないからである。 — しかし昨日の冷却の後の今日の余寒は溶けそうになかった。朝の青空はますます明るくなる黄金の切片で充たされて行った。 — 庭園は小さな都市のように単に二つの門を、上の門と下の門を有するだけであったので、彼はアウローラのように朝の太陽のこの下の門を開けた。 — 光輝が蒸気を発する緑色の上にこぼれて来た。 — 下に流れて行くロザナ川は閃光を捉えて、それをこちら側に投げ返した。 — アルバーノは愛と浄福とで一

*1 このより温かい、より華奢な、より臆病な、常に称えられ、自分の意見よりは他人の意見の中で生きている女性は、非難に有毒に刺されてしまう、我々は単に血を流すだけであるが。その非難は丁度温かい国々や季節では傷付ける動物が有毒なものであり、寒い所では単に傷付けるだけであるようなものである。それ故女子学校の校長ならば、少年に対しては諷刺である一つの薬の服用は、 — 少年はいずれにせよその意見には抵抗すべきものであるが、 — それをその姉妹が受け取ると中傷となることに思いを致すべきであろう。

杯になって、別れた。

しかし愛は浄福よりも大きかった。

第六十九周

飛んで行く春よ（私は愛のことを呼んでいる、晩夏を飛んで行く夏[浮遊する蜘蛛の糸]と名付けるようなものである）、汝は自ら我々の上を矢のように早く過ぎ去って行く。何故作家もまた汝の上を急いで去って行くのか。 — 汝はドイツの花の時期に似ている、 — この時期は決して輝く一月の長さには満たない。 — 我々は一冬中年鑑や比喻の中でその素晴らしさを読まされ、それに憧れる。とうとうその時期が黒い枝に密に六日間掛かることになるが、その上冷たい五月の雨や、強い五月の嵐や、すべての半ば凍えた小夜啼鳥の沈黙の止まりの下、現れることになる。そしてようやく庭園の中に出て見ると、すでに小道は白く花が散っており、木はせいぜい緑で一杯である。すると春は過ぎ去っているわけで、我々はまた冬にメルヘンの始まりを心を高めて聞くことになる。「まさに美しい花盛りの時のことでした」。同様に私は左右の長いロマンチックな会議用テーブル、書斎用テーブルで、書見台のために執筆している著者を見受けるが、愛についての長い序言の後、愛が戦争のように宣告されるや、早速愛を終わりとしてしまうような著者がほとんどである。 — そして実際愛に至るための階段は、愛の中での階段よりも多い。すべての生成は、例えば、春とか青春、朝、学習は確固たる実在よりも多彩で幅広く分かれる。しかしこの実在がまた一つの生成とならないだろうか、ただより高い生成とならないだろうか。そして先の生成は一つの実在へと、ただより速やかな実在とならないだろうか。 —

アルバーノは、心が我々の神である飛翔して行く神々しい時代を、もっと美しく操作しようとした。その時代は飛び去ってしまうより、もっと上昇して欲しかった。彼は翌日他ならぬ自分に対して怒った。彼はこのような些細な、しかし窮屈に回りを縛る痛みを苛まれた。地震のときのような状態で苛まれたわけで、地震のときには目に見えない靄が巻き込まれて重たい足を囲むものである。自分は谷で雨に打たれるよりもむしろ山で打たれたいと彼は言った。空想力の人間は居合わせる恋人とよりも、容易に不在の恋人と和解するものである。

数日して彼はまたブルーメンビュールに行った、日没の直前であった。木陰道の夜を通じて、燃える赤色が見られた。彼の陰気な植込みの道は跳ね飛んで来る炎によって魔法をかけられた道に変じていた。彼は自分の照らされた現在を深く、将来の影の多い過去の中に投じてみた。数年後、と彼は考えた、おまえがまたやって来て、すべてが過去のものとなり、変わっていたら、 — 木々が生長し、 — 人々が消え去り、 — ただ山々と小川だけが残っていたら、 — そのときおまえは自分を浄福に称えることだろう、おまえがかつてこれらの道を通って、何度もこの最も美しい心の人の許へ旅することが許されたことを、そして両側にさえぎり、輝く自然がおまえの喜ばしげな魂と共に進んだことを、子供にとって月がどんな露地をも追いかけて来るように見える具合にだ。 — いつになくい歓喜が彼の本性全体を通じて、長く、幅の広い太陽の条光を投げかけ、彼の空想の最も遠くの花々が花咲き、すべての音色がより明るいエーテルの中を通じてやって来て、近付いた。彼の外部の花々もより一層強く香りを放ち、鐘の音はより間近に響いて来た。この

二つは雷雨を告げていた。

かくも内心喜んで、彼は、 — それもロケロールとは一緒になく、そもそもロケロールはますます訪れることが稀になっていて、 — 上の彼の子供時代の書斎の中の恋人の前に現れた。その部屋は今は彼女の客間となっており、彼の訪問の通常の遊び場となっていた。黒い縁飾りの付いた白い服を着て、美しい半喪のような具合に、彼女はスケッチ台に対して座っていた。より鋭い目を絵に向けていた。彼女は彼の胸元に飛び込んで来たが、しかしまたすぐに彼を絵の前に連れて行った、この絵に彼女の心は母親の腕の中にあるかのように寄り添っていた。彼女は語った、今日は侯爵令嬢と一緒に自分の母親がやって来て、母親は自分の快復しつつある顔色をととても喜んで、幸福な娘に対してとても優しく、と。「母親は」（と彼女は続けた）「私から少しスケッチして貰う必要があったのです。私は少しでも長く母親を見つめておれて、その際会話ができるわけですから。今その顔を仕上げていますが、でも全く上手く行きません」と。彼女は自分の空想を絵からも、ましてやその原像から引き離すことができなかつた。勿論娘の心の上には、 — あるいはそれどころか心の中では、母親の心より美しいメダルは掛けられないことだろう。しかしアルバーノは今日こう思った、その剣帯は余りに広い場を占有している、と。

彼女はただ自分の母親について語った。「悪いことをしたかもしれません」（と彼女は言った） — 「母親はとても優しく、あなたがよくいらっしゃるのか尋ねました。私はただハイと申して、それ以上言わなかつたのです。アルバーノ、私は母親に私の心をすべて率直に話したかつたのです」。

彼は答えた。母親は率直に尋ねているようには見えない。母親はひよっとしたら講師を通じてすべてを知っているのかもしれない、恋の純粋な飲み物はただ他人が割り込むと濁ってしまう、と。彼はアウグスティにはなほだ強く抗議した。しかしリアーネはアウグスティを同じように強く弁護した。二つのことを通じて真理の偽造貨幣、つまり邪推、彼女はすべてを愛するように彼のことを愛しているのであろう、彼女はすべての善なることにさながら生き生きと癒着しているのだからという邪推が、アルバーノの情感の中で、この情感はその上今日はとても温かく喜ばしげであつたのであるが、ますます強く刻印され、循環して行った。

彼女は何も予感せず、また沈黙に戻って行った。「それが良いことなら」（と彼女は言った）、「何故悲しいのでしょうか。それに、アルバーノ、私のカロリーネももう現れなくなりました。これは本当に良いことではありません」。 — この幽霊はいつもまさに外の雷雲のように彼にとっては鬱陶しく、陰気に生じてくるものであつた。自分では始末に負えない霊仕掛けによる自身の巫山戯に対する彼の昔からの怒りが、リアーネの視覚的自己錯覚に対する怒りへと移って行った。彼女が最初は崇高に墓所の修道院に対する衣装としていたカロリーネによって贈られたヴェール、この第二世界のための旅の紗は、このヘルクレスにとって、夙に燃えるようなネッソスの毒の血で浸された衣装[ヘルクレスは落命しそうになった]となっていた。それ故彼女はもはや彼の前でそれを着用することは許されなくなつていた。死の妄想が死の真実の種をまくという結論、こちらに迫って来る深い霊の中で一つの偶然が死の打撃となる火花を容易に誘うという結論が一つの喪のように彼の愛の祭典の中へ落下した。そのようにすべての、空想の見慣れぬ海の怪物は（この死の妄想同様に）単に空想の中でのみ（長編小説の中でのみ）願わしいもので、人生では願わし

くない、ただ一度空想の高みでは例外であるが。しかしその後は、このような流星は天の流星同様にまた我々の天から去って行かなければならない。

彼は今やとても真面目に、一 自殺的空想について、一 人生の義務について、一 彼女の治療という最も美しい印に対する頑なな眩惑について、この印として彼は視覚的にカロリーネが消えたことと彼女の顔色の良さとを数えているのであるが、これらについて語った。一 彼女は辛抱して聞いていた。しかしその愛にもかかわらず、彼には余り喜ばしい痕跡を残してくれない侯爵令嬢を通じて、今日リアーネの空想は、自分の自我とその墓場を遠く離れて、全く別の道を辿っていた。リアーネはただリンダの像の前に立っていた。リンダについてユリエンネは今日の午後、普段娘が娘について語るよりも、一 「とても良い娘よ」とどの娘もどの娘についても言うのであるが、もっとより鋭い輪郭を打ち明けていた。つまりリンダの男らしい勇氣、男の群れを軽視しているのにガスパールに対する温かい愛着、リンダの心変わりしない点、男性的知識に関するリンダの大胆な進歩、彼女の立派な、しばしば厳しい、修辞よりはむしろ実のある手紙、大部分語られた彼女のひょっとしたら間近かもしれない到着に関することが、リアーネの優しい心を強力に捉えた。「アルバーノはリンダを有しなければならない」といつもこの非利己的心情の娘リアーネは考えて、侯爵令嬢ユリエンネが屈服させる比較の意図を有していたとき、その意図に気付かず、その意図を満たしてしまうのであった。その際この善良な娘ははるかにより高次の運命を見いだしていた。一 例えば自分の兄はもはや自分の恋人で兄の友であるアルバーノの恋敵ではない筈だとか、一 自分自身が自分の力強いアルバーノを気位の高いロメイロ[リンダ]に紹介できようとか、どんなに抵抗しようとしてもすべての霊の予言は互いに介入して手を握り合うことだろうと思うのであった。一一 こうしたことすべてを今や彼女は伯爵に面と向かって言った。彼女はただ自分の痛みを隠すだけで、自分の希望は隠さなかったからである。

今や邪悪な精霊が彼の最も柔らかな人生の中へ何という歯ぎしりする痛みを噛み入れて来たことか。一 このような白熱した、分かつのではなく、分かたれない愛を自分は有している、しかし彼女はそうではない、と一 彼は思った。彼は自分の雷鳴のように突然高みへ燃え上がる本性を實際発揮しそうになった。喜ばしげな薔薇色をして小さな巻き髪の中の罪のない白い額、純粹な青い対の目の子供らしく澄んだ眼差し、すべての音楽的フォルティシモの際でも、他人の動きや笑いの中でのどんな激しさの際にでも、傷付いて動悸する心臓で赤面する優しい顔、それに軽率さに対する彼の蔑む憎悪、この軽率さで男性は自分の全権と男らしさとをより華奢の性[女性]を驚かすために乱用できるのであるが、こうしたものが守護霊のように彼を押し止めて。彼は感動のように聞こえるかの高貴な怒りの中でただこう言った。「リアーネよ、君は今日厳しい」。

「いや、とても優しいのに」と無邪気なこの女性は言った。両人はこれまで実際に、リラルから増大してくる陰気な雷雲を目の前にして立っていた。彼女は速やかに背を向けた、一 というのは暗い雲が彼女に向かって飛んで来るように見えた自分の失明の時から、雲をもはや長く見つめられなくなっていたからである。一 一面に輝くように生氣ある顔と魂の目をしたアルバーノの高い形姿が夕方の光を受けて明るく彼女の前に立っていた。彼女は、彼の許した戯れる手で反抗的額からの濃い色の毛髪をより穏やかに両側に出して、より滑らかに、寄せられた眉毛を撫でて、彼の目が太陽のように射し、彼の口が

真面目に閉ざされたとき、こう言った。「でも喜ばしげに、喜ばしげに、いつかこの美しいお顔は微笑んで欲しいものです」。彼は微笑んだ、しかし痛々しげであった。「そのときには私は今日よりももっと幸せでありましょう」と彼女は言って、驚いた。というのは一つの閃光が彼の真面目な顔の上をジグザグの山並の上を走るように過って、戦火に照らされた戦争の神の稲妻のようにそれを見せたからである。

彼は素早く別れた。止められはしなかった。雷雨に当たって涼むと言って、雷雨の中に出て行って、リアーネを、自分[彼女]は今日本当にただの純然たる愛から話したという喜びの中に残した。村の最後の家からラベツテが彼に向かって飛び出して来た。彼の顔には抑制されていた涙の雨の小川があった。「どうしたの、何で泣いているの」と彼女は叫んだ。「夢を見ているのではないか」と彼は叫んで、とりわけ雷雨の中へ飛び込んで行った。雷雨は突然、巨大なイカのように息苦しいほどに天全体に襲いかかっていた。彼は雨の中の閃光の下、まず次のような最良の証明をまとめていた。つまりリアーネは神聖な魅力、神々しい感覚、すべての徳操を有する、とりわけ一般的な人間愛、母親への愛、兄への愛、友人への愛を有する、 — しかし燃えるような唯一の愛を、少なくとも自分に対して、有していない、と。彼女は単に、 — と彼は推論を続けた、 — 現在によって全面的に捉えられ、満たされてしまう、私の現在によっても、小さなポルックスの腕の骨折という現在同様に捉えられる。この現在が彼女に天と地を覆ってしまうのだ。 — それ故彼女にとっては人生の没落は小さな星の没落同様容易なもので、すべての別れがそうなのだ。

— それ故にかくも長いこと愛を一杯に胸に抱きながら彼女の傍らで苦しんでいたわけだ。彼女は私の愛を見なかった、自分の胸に何の愛も見なかったからだ。 — 人間が、大地の卑俗な心の中で貧しくなりながら、最も高貴な心によっても結局は不幸になるしかないのであれば、これは辛いことだ。

雨は音を立てて葉叢を抜け、閃光は森を走り、嵐という荒々しい獵師はその無茶な獵を行った。これは一人の友が導く涼しい手として彼を喜ばせた。彼は洞窟を通らずに、外の山の尾根を辿って高い自分の雷の庵まで登って行ったので、彼は厚い灰色の雨の夜が緑色のリラルにのしかかっているのを見た。湾曲したタルタルスの上には閃光の下、照らし出された嵐が休んでいた。彼は小さな庵に入ると、叫び声でびっくりした。風に吹かれた風奏琴が上げたものであった。というのは風奏琴はかつて、夕陽に照らされて、彼の初恋をエーテル的に星々のように飾ったことがあるからで、その初恋にすべての音色で、受難の人生を越えて行くとき、伴奏してきたからであった。

第七十周

その翌朝は両雷雨とも静かな雲となっていた。 — かなりの痛みから単に錯覚だけが残っていた。我々は何と弱いものであることか。運命が我々を見せかけの処刑で鞭打つとき、剣でするのではないとき、我々は気絶して椅子から落ち、まだずっと先の死を人生の中に感ずる。 — すべての高熱を、精神的な高熱をも新しい、新鮮な朝は冷ましてくれる、丁度不安な夕べはそれらを白熱するように掻き立てるようなものである。我々のうち誰が夕方に、 — 苦情霊、祖霊、騷霊の本来のこの丑三つ時に、自らが紡ぎ出し、しかし他人の捕獲網と見なしてしまう糸の中にますます密に、もがきながら逃げながら、巻き込ま

れて行き、遂に朝方になって閉じ込めている者を眼前にして、それが自分であることに気付かなかった者があつたらうか。 —

アルバーノは昨日の戦場全体に半喪の青白い、善良な形姿しかもはや立っていないのを見た。この形姿は彼の方を無垢な少女の目で見回して、その形姿の方を彼は永遠に見つめるのであった。たとえこの人は一人の人間の花嫁というよりはむしろ神の花嫁として留まるとしても。彼は今勿論、現実の友人達に対する自分の要求がどんなに高いものであつたかいつもより強く感じた。彼は、いつもまさに自分の心のそのたびごとの形式に鑄造する夢想化された人物に、好みのまま最高の要求を競り上げることができるのであった。そしていかに自分の中では誰をも大目に見ない精神が支配しているか感じた。つまりこの精神はどの他人の精神にも自分の精神に従って翼を広げようと欲していること、それは模写された独自性の他には何の独自性も我慢できないからであると感じた。

彼はこれまで自分の好きな人物皆から抵抗を受けることが余りに少なかった。リアーネは余りに多かった。両方とも人間に害がある。精神的人間は身体的人間同様に、外的空気の抵抗がなければ、内的空気で膨張し、破裂してしまう。内的空気の抵抗がなければ、外的空気で押し潰されてしまう。内部の防衛と外部圧力の平衡のみが、人生とその像にとって素敵な余地を自由に保つ。 — 男達はいずれにせよ、 — 最良の男達のみが最良の男達の許で堅固で強力な自負を尊重するので、 — 女性達の許ではこの自負を我慢することが難しい、そして女性達には単に自分達の反映になってもらえばかりでなく、言葉も肯定のものを[女性達に]欲すると私は思う。

アルバーノは数日自発的に遠ざかって自ら罰することにした。自分の内部の日時計に影を差した不純な雲が去ってしまうのを待つことにした。自分が全く快活になり、良くなったら、また彼女の許に行き、二度と間違いをしないと、彼は言った。今彼は間違っている。見慣れない不気味な半音が一度、二人の人間のすべての調和の間に繰り返し割り込んできたら、その半音はますます敵対的に増大し、基調音を聞こえなくし、万事を終わらせてしまう。区別の音色がここでは女性的音色の強さの傍らで、男性的音色の強さとなっていた。しかし至高の愛でも最も容易に些細な違いで傷つくものである。そうなると人間が自らにこう言っても余り役に立たない。私は自らを変えるつもりだ、と。ただ最も美しい、傷付かない熱狂のときにのみ、人間はそう企てるものである。しかしほとんど企てに向かないまさに傷付いた熱狂のときに、その企ての実現を計るとなると、それは難しい。

伯爵は朝いつものように町の聴講室、談話室に行った。聴講室では学問の星々に従って、自分の道具と目とを固定させ、狙いを定めることは難しかった。彼は動揺で一杯のそのような海の上にいたからである。談話室では彼は講師をいつもより冷たいと思い、図書館司書をより温かいと思い、大家の人々をより自惚れていると思った。彼はロケロールの許に行った。ロケロールを彼は今日なお一層親密に愛し、扱った。あたかも侮辱された妹リアーネに対し償いをするかのようであった。カールは早速未来のカーテンを彼らしく悲劇的に素早く引き裂いて言った。「すべては露見している。 — 多分にそうだ」。船乗り達が恋人達のカリュプソの島を、 — これは公海上に自由に存在しているのだが、 — ようやく目に留めて、帆かけて向かって来るのを恋人達が目にすると、恋人達は不思議なことに不思議がるものである。彼らの楽園ほどに、何らかの楽園でかくも広くて低い格子垣を有していて、 — かくてどの通行人も覗くことができる — 楽園があろうか。 —

既に以前から、とロケロルは語った、ドクトルの子供達がいつもリラールの建築士夫人の許に何かを取りに来ていた。花や菓のグラス等々だ。きっとアウグスティの望遠鏡としてであって、一 アウグスティはまた自分の母親のオペラグラスであり、一 要するに、自分の父親が少なくとも昨日はギリシア女性[建築士夫人]の許に来たのであるが、しかし幸いラベットの自分宛（カール宛）の空の小包を見つけただけであった^{*1}。この小包を父は大臣傘下教会の自由[ガリア教会の自由の暗示]に従って開封し、また封をしたのだった、と。「何故幸いなのか」（とアルバーノは言った）「私は私の愛を世間の前で正当化し、光栄なものとするつもりだ」。一 「それは私に関することだ」（とロケロルは答えた）「父は私の最近の手紙を開封して以来、かつてないほど私に好意的だったから。今日の午後、父がブルーメンビュールに来たのは、多分妹のせいより私のせいだ」。

アルバーノは、町の人が自分の子供の国の地下に坑道を掘って、例えば点火して幸運の島を爆破しようとも恐れていなかった。一 彼は自分の価値と勇気とを、そしてリアーネにはリアーネの価値と勇気とを信用することが許されたのではないか。一 しかし今や自分がかくも無益に子供らしいリアーネに対し、子供らしい率直さの喜びと報いとを奪ってしまったことが悔やまれた。今や何と彼は最初の再会という償い、報いる瞬間に憧れたことか、翌朝を憧れたことか。

彼は友の許に、一つの慰めの許の如く留まって、夕焼けが雨雲に変じたとき、ようやく戻った。一 着いたとき、リアーネからすでに今日の一通の手紙が届いていた。

「立派なアルバーノ、何故来なかったのです。何と沢山申し上げるべきことがあったことでしょう。雲が荒れてあなたを雷で追いかけた金曜日、どんなにあなたのことで震えたことでしょう。あなたは私の痛みを余りに取り上げてくださいました。今では苦しみが見知らぬ難しいものとなっています。一晚中心配致しました。その上ようやく夜、あなたが虫の知らせの如く苦しげであったことを、よく雷の庵には雷が落ちることを思い出しました。何故その庵にいらっしゃるのです。私は飛び起きて、私のベッドの傍らで跪き、神様に祈りました。天候はすでに過ぎ去っていて、あなたは無事だったでしょうけれども。私の遅れた祈りをそっと笑ってください。でも私は神様に言いました。全能の方、私が祈るであろうことを御存じだったのですね、と。実際星々を見つめられて、安堵致しました。歓喜の屈折した光線が私の中で震えました。

でも朝ラベットがまた私を悲しい思いにさせました。ラベットはあなたが路上で泣いているのを見たそうです。ラベットの言うには、一 私が死のことを述べて、あなたを余りに悲しませるから、一 そういうことになると言うのですが、そうでしょうか。二度とその考えはお聞かせしません。ヴェールも仕舞い込みます。でも私はあなたのことを、私の兄に従ってこう考えていたのです。兄にとっては、本人自身が申すには、死の暗

*1 つまりいつもアルバーノ宛のリアーネの手紙がその中にはあったのである。ここでまた愛のハルモニカでは一人の兄は、妹のために、グラス・ハルモニカに行こうと欲する妹のために、キーボードとならなければならないという二つの例を見るべきであろう。それ故いつも交錯して、姉妹関係にあり、愛している対のカップルが存在すべきであろう。

さは一つの黄昏であって、その時には自分には形姿が一層愛らしく思える、と。 — 本
当に、私はとても浄福です。 — その上あなたも浄福なのですから、それに私は大した
ものではなくて、あなたの心にとっては小さな花一本というところなのに、私はあなたを
有するのですから。私の墓を私に許してください。山からのようにそれで私の谷により良
い実り多い大地が生ずることでしょう。アルバーノ、私どもの傍らのすべてが折れ、落ち、
消えたとき、それでも愛の絆と輝きが千切られず、固く流れ去る人生の上にあるとき、あ
たかもしばしば滝の所で跳びはね、流れ去って行く洪水の上の一つの虹を、微動だにせず
変わらずに浮いている様を私が感動して見守っていた具合であるというようなとき、何と
人々は愛し合っていることでしょう。 — 今にも小夜啼鳥が鳴いて欲しいと思います。
今なら鳥と一緒に歌えることでしょう。あなたの風奏琴、私のハルモニカを私は手に有し
たいと思います。私の父親が私どもの所に参りました。そして皆にかつてないほど陽気で
優しかったのです。ご覧なさい。父でさえ善良なのです。私の両親はきっと私どもの薔薇
祭に嵐を持ち込むことはないでしょう。それで私は、 — お許してください、 — 他人
の家では他人の訪問は受けないつもりであると、 — 他人の訪問を受けるのは作法に反
すると父が言いましたので、 — 愛想良く父に約束致しました。私は数日侯爵の結婚式
のために家へ帰らなければなりません。でもすぐにお目にかかります。お許してください。
私の父が穏やかに話すと、私の心はいやとは言えないのです。 — ご機嫌よう。私の立
派な方。 L.

追伸。間もなくあなたの山へ一枚の紙片が飛んで行きます。永遠に、喜びの中にいてく
ださいませ。神様、何故私はもっと強くなれないのでしょうか。そうなったら何という人間
達をあなたはその胸に抱き締めることになりましょう。

愛しいあなたへ」。

この一杯に花咲く愛は何と彼を恥じ入らせたことか。この愛は誤解を受けることさえ全
く弁えていず、自らの科より他の科は前提としていない。 — 今は自発的な遠ざかりの
後では命じられた遠ざかりが何と辛いものに思えたことか。 — 彼は今や彼女を楽園の
前の防御している天使として愛することができた、楽園の中の恵与する天使としてならば
何ともっと多く愛することができたことか。しかし男性にとっては、 — とこの若者は
感じた、女性の心の中で、殊にこの女性の心の中では、意図を本能から、観念を感情から
純粹に区別し、この暗い、一杯の天の許ですべての星々を数え、並べることは難しい、と。

— どの厳しさも、どのさえない蕾も、結局は花として花咲く。そしてその価値は春同
様に段階的に広がって行く。他方通常他の娘達からは、この娘達を訪れる旅人は早速最初
の別れの際、夕方にはすべての彼女達の魅力や技芸のささやかな完全な詞華集を受け取る
ものである。丁度ブロッケン山の旅行者が旅館で、山で採れた苔の種類の手渡された可愛
い花束を手渡されるようなものである。

彼女は今や両親の許と彼は思い、むりやり引っ張る少年としてではなく、声を合わせる
男性として運命の巨人に従うことにした。庭では降雨が見られた。すべての強い雷雨の播
種で、これはいつも戦争のように戦場を汚すものである。

約束の小紙片が届いた。「喜んでください。間もなく、もう間もなくお会いできます。

そして本当に浄福になれます。お許してください。 — 私の方が最も懂れています。 —
L.]。

今や彼は、かつて、 — つまり単に数日前であるが、 — 彼の前に神々しい現象のように過ぎ去った日々が、今やまた東に再来する星々として昇ることになった日々がいかなる日々であったか実感した。 — 何故まず失われた宝が鋭いダイヤモンドのように深く心を切り裂くのであろう。何故我々はまず涙を流してから、そのことを熱く痛いほどに愛するようになるのであろう。 —

アルバーノは過去と未来とを自分から投げ棄てて、リアーネから彼に約束された現在の中に、ただ全く純粹に、住むことにした。

第七十一周

青い空全体がぽっかりと開いて、大地が真珠と小枝で祭日のように飾られた日曜日の朝、アルバーノのドアをかすかな指でノックする者があった。女性の手の指に違いなかった。リアーネがかくも朝早くもう入って来た。ラベツテとカールが外で声高な挨拶を叫んだ。彼の歓呼する胸元には、美しい、歩くことで花咲く娘が、浄福の澄んだ目をして見られた。新鮮な露を帯びた薔薇の蕾であった。彼の最も美しい朝であった。彼はリアーネが愛していることを純粹に感じた。風奏琴が響いたとき、彼女は目を向け、赤面しながら最も美しい絆の夕べを思い出して、静かに聞き入り、目をまたアルバーノの方に向けて、目の涙を拭いた。 — しかし彼は自分の最近の錯覚について率直に話すことで、自ら浄化し、神聖なものとならずには、歓喜のこの神殿に足を踏み入れることができなかった。告白と許しの何と甘美な争いが見られたことか。リアーネは愛しながら驚き、最近彼のことを察していなかった、ただ自分の方が悪い、今からはきっとより良く話すようにしたいと告白した。自分が友に対してなした隠された痛みについて少しも満足しておれなかった。マホガニーの道具は、どんな気候でも折れないし、汚れることはないし、磨く必要がないように、この娘の心もそうだ、とアルバーノは感じた。いつでも、自分が彼女のことを察しないときでも、自らにこう言うことを誓った。彼女は正しい、と。

彼女は彼に今日現れたことの謎をかの友好的表情で解いて見せた。つまり善良な人間が何か甘美なことをするとき倍加する表情である。「自分は今日ペスティッツへ戻るので。 — でも遅くなって、夕方、お茶の時間の頃ようやく馬車が来るのです。自分達には丸一日が残されています。自分の父はリラルを経由してのこの迂回を約束破りと見なさないであろうと期待しています」と。愛する娘は無意識に一層大胆となるものである。

— その後、彼女は彼に対し自分の父の平和的意図についてまことに冷静に説明して、父が自らや他の者達を慣習に従わせるときの厳格さを、父が禁じたことや、自分を結婚式のために呼び戻したことの理由として挙げた。アルバーノは先の誓いをしたばかりで、誓いを守って、彼女は正しい、と言った。

大尉は赤い頬のラベツテと共に入って来た。ラベツテの目には喜びが輝いていた。部屋が小さいからといって、窮屈さや混乱で楽しさが一層減ずることはなかった。カールはいつもはヴェスヴィオ火山に似て、最初の朝の時間にはまだ雪が残っているのであるが、す

でに温かい頂と共に立っていた。彼は楽器の所に腰を降ろして、ハイドンの譜面の開かれたプレスティシモ[きわめて急速に]を、 — つまり歓呼する時のこの正しい夜回りの声を、 — 声高な現在の中に轟かせて、女達が感嘆したことに、最も難しいことをとても軽々と譜面から弾いて、弾き出すというよりは弾き入れて、多くを（例えば低音部を）絶えず自ら定めた。一方アルバーノはほとんど滑稽な誠実さで音楽と同様にすべての話に真実をまた与えて行った。この話はカールの口では自分の体験談となるのであった。朝はすべての魂と翼を与えてくれた。午後になると人間の翼はいつも結ばれてしまうのであるが、

— それ故、アウローラは有翼の馬と共に進むのであり、日中の神の馬には翼がない。

— 「しかし今や我々の七つの喜びの留をどのようにしたものだろう^{*1}」（とカールは尋ねた）「一日は庭園の広間同様ただ遊歩道が四方八方に眼前に広がっているのだから」。

— 「カールよ、どこで人間は愛しようと、構わないのではないか」とアルバーノは言った。 — 浄福なアルバーノよ、彼の心は更に一つの心しか要しなかったし、その為には公園も、オペラ・セリア[正歌劇]も、モーツァルトも、ラファエロも、月食も、月光さえも、朗読された長編小説も、模倣された長編小説も要しなかった。

「まず私はカリトンに会わなくては」とリアーネは言った。 — 「カリトンならば」（とリアーネの兄は早速言った）「我らの食事をゴシック式の神殿に運んで来ることができよう」。 — 彼はこの穏やかな一日を十二世紀風に食べたくて、不安げな多彩なガラスの光の許、角張って武骨な厚い道具の上で、上方は緑色の現在ながらさながら暗い大地の下にあって、花咲く顔で座っていたかだったのであった。というのは彼は、どんなに満たされた享受をも、更に外的コントラストで飾り立て、すべての陽気な現在を、彼らの刈り取る磨かれた利鎌の間近な照明や反照の中で大方享受したからである^{*2}。「滅相もない、あなた」とラベッテは言った。アルバーノは好意的ギリシア人女性[カリトン]とその笑っている子供達、間近な薔薇の野原の方がその為には一層良いものと思った。そしてリアーネと共に勝利した。葉の茂った庵の前に子供達が走り寄って来た。ヘレナは摘み取ったオレンジの花で一杯の小さなエプロンを身に着けていたが、枝を折ることを禁じられていたからである。それにポルックスは、折れた腕の最後の軽い包帯をしていたが、その手は今や右手で薔薇の花弁を膨らみをもたせて畳み、割る作業をせざる得なくなっていた。兩人ともこう報告した。「お母さんはまだ終わってなくて、まず僕らが着せられたのだ」と。しかしながらすでに楽しい神々の祭壇での司祭夫人の踊りのように、可愛く簡単にカリトンがリアーネに対し飛び込んで来て、素早く着用した服をただ軽く揺すって震わせて体に

*1（訳注）ニュルンベルクの彫刻家 Adam Krafft(1460頃-1509)はキリストの受難の留から七つのレリーフを表現した。

*2「このような性格は」（とその際ハーフェンレップファーは書いている）「コッツェブー[Kotzebue(1761-1819)]の諸長編小説には望ましいものであろう。このような性格はその性質上いつも状況の価値を、状況のたまたまの立地を通じて創造し、持ち上げようとするので、これらの長編小説はこの人間性を隠れ蓑にしながらか、全く自らの人間性に溺れることができるのであり、詩人の弱さを主人公の弱さと仮装できるからである」。思うにこのことは、伝記作者が長編小説作家達について判断できるかぎり、とても的確なことである。

合わせた。「こちらは」(とロケロールは、ラベッテからとても容易に頷く諾の返事を得た後、それは彼女が諾を求めるフランス語の依頼を理解しなかったからであるが、こう添えた)「昨日から私の妻ですー」、そして遠慮なく[貴女ではなく]「あなた、おまえ」と言う権利を享受した。彼女はこの権利を大臣の好意的話しかけ以来、乙女らしい予感でより好ましく受け入れたのであった。

リアーネは親しく正午の四人の客のことをカリトンに告げたので、このギリシア人女性の黒い目には喜びの閃光が煌めいて、イタリア風な大きな眉毛の弧のある小さな顔にはしっかりと微笑が浮かんだ。これは食事用意の当惑ではなく、単に言葉にならない喜びの表現に過ぎず、これは彼女の半円の白い歯列をただ一層大きく輝かせることになった。そこでカールは「奥さん、カリトンの手伝いをしてやりなさい」とまで言った。「勿論ね」とラベッテは喜んで答えた。彼女の心は両手以上には更に雄弁な唇を有さずに、両手にとって厳しい仕事が許されることは、愛する人の手で握られたかのように思われることであつたからである。ロケロールが彼女の前でその炎の奔流を音立てて述べたときには、しばしば彼女は自分の弁舌の下手な、どもりがちな喉がうとましく思われなかつたであろうか。今や彼はまた親密さを人工的な影のある区別で飾り立てたので、勿論こう主張した。カリトンは派遣の秘書であつていいが、ラベッテは単に署名の秘書として留まるように、と。リアーネも同じ女性として何か恋人のために作りたかつた。しかし彼女は身分のある娘として何も煮込みすることはできず、何か焼くだけであつたので、彼女は、ー 恋人は嫌がったが、恋人はその甘美な姿を、蝶のように、ただ自分の側の花々の下でのみ見ることを好んだから、恋人からしぶしぶ了承されて、全く遅くなって十分間、目と、稀な場合には三本の執筆の指で、雪球[ビスケット]を掴むことになった。これは最後に締めめのデザートとなる予定であつた。

キッチン舞踏会の女王として、カリトンほどに、より幅の広い天蓋とか、より美しく彫られた王笏とか林檎[帝国標章としての地球儀]、あるいはそれどころかもっと美しい侍女はいなかつたことだろう。皿や炎は全くそのせいで影が薄くなってしまった。

さて幸せなカップルは、ー 子供達と一緒に、ー 喜ばしい日中に、若々しい庭に出て行って、月を伴う惑星のように、あるときは間近に、あるときは離れて、あるときは反照され[衝に]、あるときは合流するように[合に]、同じ太陽の周りの天的な循環軌道を描いた。「行き当たりばつたりに」(とカールは港で言った)「船出して、出会うことになるか試してみよう」。ー アルバーノはリアーネと一緒に子供達の後を行つた。子供達はすでに薔薇の通路を通つて、小さな家々の側で跳ねながら行き、さえずる森にかかる橋の上にいる。心がかくも静かに浄福に鼓動する者は、見えない教会の中において、見える教会を求めないのであり、ー 自然の神殿全体が愛の神殿であり、至る所に祭壇や説教壇を見いだす。滑らかに下つて行く人生の奔流の中では人間は舵がなくても、浄福にその小舟に乗っていて、その小舟を操らない。

それから子供達は、母親の散策の折りの禁止を思い出して、橋のある高台を右手に、西の方に向きを変えた。ヘレナはただ回復期の患者の手を引く案内人として彼の手を握つたまま、まことに思いがけなく、荒々しく先に駆けた。アルバーノはこの小さなパイロットと盲導犬の後を喜んで付いて行つた。何ということか。彼らがこの立派な高台で見回して、豊かに広がる日中と、それらに向ける彼らの目の中を覗くと、何と自由に広く人生の橋の

アーチが弧を描いていて、諸船がその膨らんだ帆と誇り高いマストと共にその中を飛ぶように走っていたことか。 — 薔薇の木が凱旋門の上に伸びていて、子供達はそれに達して、薔薇をその梢から折り取って、他の者達の従順な道筋を工夫しながら、験しながら、四つの門を駆けて行き、五つ目の門から下の滑らかな、輝く湖を眺め、技芸が子供達のように戯れている「魔法の森」に降りて来た。

森の入口の所からカールとラベッテは出て来た。凱旋門を越えて、カリトンの許に戻るため、カールはワイン貯蔵庫に戻るため、 — 彼は手に空になった瓶を有していた、 — ラベッテは少しキッチンに持参するためであった。彼は翼の上にあるかのように淨福に歩み、言った。「人生は今日青空の中、大熊座へ進んでいる」。しかし彼は向きを変えて、彼らの前でプレアデス星団（雨の星座）を昇らせようとした。つまり所謂「逆の雨」で、これは単に五分間、本来はただ照明の際に上がるものである。彼は皆を、散在する木々の下で見られる白昼の微睡みの中にある光を通じて、不思議の森へ案内した。これらの木々の広く離れて立っている幹は単に長い枝を張っていたのであった。画家的軌道の焦点上で彼は皆に雨の戯れを期待させた。子供達は期待を抱いて、追って飛び跳ね、大人達の勇気に元気付けられて、大人達と一緒に二つの小さな丸い湖の間の印付けられた神々の座、子供達の座に、腰を降ろした。

カールが素早くジグザグに、水と力学の機械仕掛けのせいで、あちこち動く間に、 — 大方はヴェルサイユの迷宮[1775年壊された、現在 *Bosquet de la reine*]の交点に従った仕掛けであるが、 — 一同は至る所開放された魔法の森を飛び巡ることができた。 — 外部を流れすぎるロザナ川の強力な支流が花々の下に介入していて、重たく豊かな世界を運んでいた。 — あるときは川はしっかりとした鏡となり、あるときは巻き付いた、波打つ脈管となり、あるときは泉となり、あるときは花々の下の閃光となり、あるいは葉叢のヴェールの背後の黒い目となっていた。 — 狭い岸边、短い花壇、箱庭、丸い小島、小さな丘や岬がその間に見られ、それらはその多彩な花と咲く子供達を腕や膝に抱えていて、勿忘草の青い目や豊かなチューリップの頬、青ざめた頬の百合が、余所も者どもから離れて、兄弟姉妹のように一緒に戯れていた。しかし薔薇は皆の中を走っていた。今や人々はつぶやき、ざわめく音を耳にし、彼らの側の湖は波立った。樹皮を剥がされて、一つの島に杭打たれた五月柱の許で上の黄色の縦の針が滴り始めた。 — 岬の枝垂白樺から内部の雨が滑り落ちて来た。 — 彼らの向かい側の二つの湖から水の放射が飛び魚のように天に向かって跳んだ。 — 今や至る所で湧出した、そして泉の、この水の子供たる泉の列が、花々の子供のように戯れた。 — 小鳥のように放射が広い翼をもって月桂樹の垣根から舞い飛び、薔薇の茂みに落下した。 — 檜の木で一杯の或る丘では海蛇が這って昇った。 — 戦うようにすべての岸边の河口から包囲する弧線が頂上に届いた。 — 突然計略に乗せられた観客は虹に覆われていた。というのは湖からその水が彼らの頭上に高く放出されていて、滴の格子ごとに揺れる太陽が燃え上がって、砕けた宝石世界の中にいるようであったからである。 — 子供達はびっくりして叫び声を上げた。 — 狩り立てられた小鳥達が雨の中を交錯した。 — 蛾が下に投げ出された。 — 雉鳩が身震いをして、降水の中、大地に押し付けられた。 — 岸边と花壇は天からその花と咲く小さなものどもを守っていた。 — —

五分するとすべてが終わっていて、ただすべての花々と目に濡れた輝きが震え続け、波

の上では星々が震え続けた。子供達は奇術師のカールの後を追った。「外では終わった」（とアルバーノは言った）「しかし我らの中では終わらない。私は今日本当に静かに喜んでいる。あなたが私を愛しているからだし、世界全体も好意的だ。 — あなたも幸せですか、リアーネ」。 — 彼女は答えた、「もっと喜んでいきます。言うとなれば喜びの余り泣かなければならないところでしょう」。 — しかし彼女はすでに泣いていた。「御覧なさい、滴です」と彼が彼女を見つめたとき素朴に言って、そして虹で注入された彼の滴を穏やかに彼の頬から拭った。彼の口は彼女の神聖な、優しい目に触れたが、しかしもう一方の目が開けられたままであった。彼女の心と彼女の愛がその目から彼を見つめていた、かくも間近に彼女の神聖な魂が彼の許に漂って来たことはなかった。

数分後にはこの天に向けられた雨も終わった。彼らは中の開放された庭園を越えて、東側の部分、門に向かった。何と開放された世界の中、未来の岸辺がかくも明るく厚く高い緑色で横たわっていたことか。小夜啼鳥が岸辺の周りを飛んだ。 — 歓喜で男性達の心はより女性らしくなった。彼の一杯になった胸の声はただ小声でリアーネに語った。彼女の側面の方、天に傾げられた顔には、静かな敬虔な感謝の念が浮かんでいた。彼の炎の視線はただゆっくりと動き、美しい世界に休らっていた。彼は急いで通り過ぎることをせずに、ごく小さな岬の周りを歩いた。若い小夜啼鳥が餌を渡された嘴を小枝で研いでいて、陽気に身震いをした。老いた小夜啼鳥は短い子守歌を歌って、音色と共に新たな餌を求めた跳ねた。 — 至る所で、春の子供達とその両親が交互に飛び、叫んでいた。 — 小さな、白い孔雀が化粧せずに、小さな子供のように草の中を走った。 — 白鳥は浄福に、その波の間を、白い曲線の姿で目を下に潜らせて、流れて行った。浄福に輝かしい音色の蚊が、遠くの星のようにじっとしたまま風の中を遠くの花のような鐘の上に漂って行った。

— 舞う花々たる蝶や、くっついた蝶たる花々が、互いに求めて、覆い、その多彩な翼を翼の上に重ねた。 — そして蜂達は草の花々を、ただ木の花々と取り替え、自分達に対しては茨とならない薔薇を、ただ菩提樹と取り替えた。「リアーネ」（とアルバーノは言った）「今日はあなたのお蔭で何と全世界を愛していることでしょう。私は花々に接吻をし、一杯の木々を抱き締めたい。下の長い甲虫の邪魔をしたくない気分だ」。 — 「他の気分」（と彼女は答えた）「なれましょうか。人間は、母親を有してその愛を知っているのに、どうして動物の母親の心を傷付け引き裂くことができるのかと、よく私は考えました。でも私どもは、動物に対して、その徳操すらも許そうとしないと言っています」。 — 「彼の許へ行ってみよう」と彼は言った。

彼らは東側の門の外の山道を通って、フルートの谷の背後の上方にある老シュペーナーの正午で明るい庵に着いた。しかし彼が声高く読み、祈っているのを聞いて、むしろ遠く離れて行き、彼の聖なる天に彼らの影すら投げかけないことにした。

彼らは美しく静かなフルートの谷を眺めて、丁度中へ入ろうとした。すると上の彼らの許に一つのフルートの音が語りかけてきた。下には彼らの友がいるように見えた。フルートの音は長いこと一人っきりで寂しく嘆き続けて、その姉妹や泉が伴奏することはなかった。とうとうフルートの音の傍ら、臆して、震える歌声が緊張した様子で喘ぐように聞こえてきた。長い茂みの背後のラベツテの声であった。彼女は両人の魂の最深部まで感動させた。哀れなラベツテは頼りない声で懸命に恋人のために従順という謙虚な犠牲を払っていたのであった。「アルバーノ」（とリアーネは歓喜して、彼に絡みついて言った）「私の

兄が幸せで、あなたの妹さんのお蔭で落ち着いていることは何と素敵なことでしょう」。

一 「ロケロールは私の妹に値する」（と彼は感動して言った）「しかし二人の邪魔はしないで、先の道に戻ることにしよう」。というのはラベットの歌声はしばしば途切れたからで、臆したせい、一 接吻のせい、一 感動のせいには分からなかったのである。

彼らがまた東側の門を通過して入って来たとき、歌姫のラベットとカールが緑色の門から彼らに向かって来た。二人とも泣いていた。カールは、力強く生きた花壇を越えて来て、目をさまよわせながら、二人の手を自分の手で握って言った。「雨の世界での昼というわけで、夜とは違うようだ。兄弟、かくも親密に浄福であり、天球の音を耳にすると、このような音色はかつて、マルクス・アントニウス¹ からその守護神のヘルクレスが去って行く印に聞いたもののように思われる」。一 かくて喜びは、他の宝石同様に、力学的毒となるもので、これはただ遠くでは輝くものの、触れて飲み込まれると我々を切り裂くものである。しかしアルバーノは微笑みながら答えた。「今君は恐れているから、もう何も恐れることはないのだ。純粋に幸せではないのだから。しかし私は残念ながら何も恐れない」。一 「結構だね」（とカールは言った）「さて娘さん方、キッチンへ行き給え」。彼は所謂「夢の神殿」へ行った。しかしほどなくして禁じられたキッチンへ押し入った。

アルバーノはリアーネの春の小部屋を訪ねた。ここで彼は、リアーネがリラールを案内したときのかの輝かしい日曜日を思い出して頭に描いた。彼は過去を現在の中へ引き入れ、穏やかに微光を発するようにさせた。しかし現在が過去を圧倒して輝いた。外の庭では彼の天の純粋な柱が、彼の神殿の担い手である木々が立っていて輝いているように、彼には思われた。彼がここで自分の傍らで見るすべてがまた彼の幸せとなった。リアーネの本や絵や花々、そして彼女の華奢な手によるささやかなスケッチのすべてがそうであった。

とうとう円形建物の聖女自身が入って来て、一 この間近さと彼の赤面とに乙女らしく赤面しながら、一 彼を下の涼しい食堂へ案内した。そこは小さくて黄昏れていた。しかし心は、その天の為には多くの席を必要としないし、愛の星一つが昇りさえすれば、そこに多くの星々を必要としない。卓話としては、一 卓話があつて初めて食事は人間的なものとなるのであるが、一 そして冗談としては、一 つまり会話の極上の箸休め、粉砂糖として、一 子供達が自らのものを供した。殊に子供達は、禁じられた「おまえ[あなた]という言い方を貴方へと敬語にすることができずに、いつも「おまえ」と「貴方」とを一緒に遣ったからである。紅潮したカリトンは、ディーアンの手紙から、自分の身の上話から、ポルックスの腕の骨折についての処方箋から、抜粋を述べた。彼女は雪球[ビスケット]を褒めようとし、ラベットに対する冗談の結婚生活式「おまえ」を五幕物に広げようとする大尉の話にいたずらっぽく信用しながら聞き入っていて、必要な所では喜んで微笑してみせた。すべての魂の戯れの軸であるカールが大方喜ばしげに話を回転させていた。いつも多くの衛星の食がつきまどっているジュピター[木星]は、自分や人々が望むとき、大きな快活な輝きを見せることができた。アルバーノが先ほどのように自分の悲

*1(訳注)シェークスピア、『アントニーとクレオパトラ』IV.3. その出典はプルターク、アントニウス伝、第78章参照。

劇に乗って来ないと見ると、彼は喜劇のカーテンを上げた。善良なラベッテにとっては、彼の語りかけは彼の見守り同様のものではあった、もっとも彼女は彼の見守りに対してだけ応じて、「おまえ」にも「貴方」にも陥らないようにした。アルバーノは、両耳、両目とも一人の魂に対してのみ結ばれていて、唇では浄福な微笑より他に大したものを生じさせることができなかつた。機知よりも容易に賛歌が出来上がったであろうし、食卓での談話よりも食卓での祈りが容易であつたらう。

というのは彼のリアーナは今日余りに愛らしかつたからである。この甘美な娘はかくも満足して、勇気づけるように見回して、話し好きな、からかう女将役を戯れて演じていて、そのことを目にし、彼女の確固たる死への信仰を思い出す男性は、頭上に花を付けたこの墓場での踊りに、たとえこう気付いても、――あるいはむしろそれが故に、――つまり彼女はここで冗談を自ら冗談で行っている、それは単に、――自分の新しい倫理的葬儀次第に従つて、――自分の恋人との別れの刻々を、次の別れの時も、最後の別れの時も、甘美なものにするためだと気付いても、それだけに一層親密に感動させられたことであらう。しかしこれは気付くことが難しいことであつた。女性の魂の中ではどの見せかけも容易に真実となるからで、悲しい見せかけばかりでなく、楽しい見せかけもそうであつたからである。

この聖女が自ら浄福に語つたが故に、何と彼女の友が、そしてすべての善良な人々が喜んだことか。するとまた一層彼女もそうなつた。かくて、二つの鏡の間でのように、参加している者達の心の中での歓喜の輝きは、あちこちと多重に生成して、見通せないほどになつた。

第七十二周

出発の時がより速い車輪で転がって来た。喜びの星座が昇つて来たときよりも多く沈んだ。かくて人生の花と咲く葡萄の庭園も、いつも山状の昇りと下りの許で緑色に栄え、決して静かな平野では栄えない。二人の恋人は今や静寂を必要とし、進行を必要としなかつた。彼らは間近な通路、雷の庵への通路を通つて行つた。彼らは新しい国に行くかのように吹き抜ける夕方の大地の中へ入つて行つた。昼の最中、人間は一つの夢から次々に醒めて、絶えず忘れ、そして絶えず新たに見る。アルバーノの中では喜びの黄金の弦の輝きがまだ去つて行く太陽の下にあつた。彼は、これから何度も両親の許の彼女を訪問するであろうこと、両親はきっと好意的に遇して下さるであろうことを喜ばしげに彼女に告げた。リアーナはすべての彼の希望に対してまだ娘として、恋人として彼女の希望と共に描いて答えた。しかし今や彼女は、まだ冗談の花々の上に揺れていた先ほどの軽快な心を確固たる真面目さの上に休ませた。

人間の中で平安と充実が見られるとき、人間はもはや自分より他には何も享受しようとは思わない。どんな動きも、肉体的動きでさえも、一杯の神酒の杯をこぼしてしまう。―― 彼らは声高な活発な庭園から、静かな暗い雷の庵へ急いだ。しかし彼らが、窓の周りに明るく輝いて、遠ざかりながら伸びて掛かっている世間から隔絶されたかのように、小さな黄昏の中、二人っきりで並んで立つて見つめているとき、そしてアルバーノの魂が、夕方の太陽に酔つた山脈のように、明るく、温かく、確固として美しくなり、リアーナの

魂が、明るく澄んで、涼しく、隠れて流れ出る山脈の湧出する泉のように、ただ夕方の光線を受けて、薔薇色に赤く白熱したとき、――そしてこれらの無二の魂がまさに互いを広大な和していない大地の中に見いだしたとき、二人を強力な喜びが祈りのように戦慄させ、そして二人は胸元で抱き合っただけで崩れ、泣きながら燃え上がり、抱擁の中で大きく覗き合った。――そして風奏琴の許で素早く感激したコンサートホールの両開き戸が開き、鳴り響くハーモニーが吹き過ぎて、また素早く門が閉まった。

彼らは風の吹く東側の窓辺に腰を下ろした。窓の前にはブルーメンビュールの山々やリラルの丘や小道が、陽の光の中に横たわっていた。彼らの周りには夕方の影が落ちていて、すべてが静かで、エーテルの豎琴が小声で呼吸していた。彼らは互いに見つめ合っただけで、心の内奥まで、自分が互いに愛し合っただけで、操を守っていることを喜んだ。脱出したかのように彼らは、この山城で守られて、下のざわめく世間を眺めた。下の方では風が罌粟の炎やチューリップの炎をより幅広く吹き付けていて、重たく黄色の収穫物の中へ入っていた。――白楊は、永遠の五月の雪をまとう風情で、輝きをかき立てられて舞っていた。

――鳩の群れが音立てて青空の中へ吸い込まれて行った。――かなたには飛んで行く雲々の下に神の丸い神殿たる山々が順に並んで、あるときは夜を、あるときは昼をまとうていた。――そして敬虔な神父がその丘に一人立っていて、その獐鹿に柔らかな枝を与えていた。

「このような状態でいましょう」とアルバーノは言って、彼女の愛しい手を自分の両手で自分の胸に押し当てた。「こちらでもあちらでも」（と彼女は言った）、――「アルバーノ、私はよく願いました。あなたが同時に私の女友達であつたらいい、と。そうならあなたと一緒にあなたのことをお話しできましょうに。私が一人っきりのとき、どんなにあなたを愛しているか、誰もこの地上で知らないのです」。――「こちらでもあちらでもですか。――リアーネよ、私はあなたよりも幸せです。私だけが私どものこちらでの長い人生を信じているのですから」と彼は突然調子を変えて言った。

理由は何であれ、――人間はすべての未来や過去から切り離された純然たる現在の中で幸せを感じることに全く慣れていないという理由であれ、それは人間の内部の天は物理的の天と同様に、その上のまさに上や間近では暗い青色に見え、離れた地平線の周りでようやく輝くように見えるからであるが、あるいはとても華奢で超現世的な幸せというものがある、それは月光のようにどんな雲がかかっても余りに暗くならないもので、他方粗野な幸せは日中の光のようにどんなに広い雲であれ耐えられるという理由であれ、――

あるいはアルバーノは、いつも歓喜のときには自らの諸力をとても強く感じて、むしろ神々の食卓を倒す方が食卓に料理やマンナを少しばかり欠けて目にするよりも好ましく思われ、全面的に幸せでないのであるよりは、むしろ全面的に不幸でありたいと望む男達に余りに似ていたという理由であれ、――ともかく彼は臆病や隠蔽に借りがあることを欲しなかったし、それはできないことであつたのである。

それ故リアーネが彼に答える代わりに、ただ彼を抱擁して、黙っていたとき、それは彼女が一日中自分の約束に忠実であろうと欲して、素敵な日々の祭日の壁紙を喪の黒布で覆うことをしなかったからであるが、彼は見知らぬ精神に突き飛ばされたかのように、まさにこう言ったのである。「何も答えないのですか。――私はただ喜びを分かち合うべきで、苦しみを分かち合うべきではないのですか。――ヴェールを有しないのですか。私

を虚弱児のようにいたわるつもりですか。あなただけをあなたの死への想いが苦しめ続けるのですか。 — リアーネよ、私は痛みも有したい、あなたの痛みをすべて有したい、すべてを語ってください。 —

「本当に、ただ約束だけを守りたかったのです」（と彼女は言った）「それ以上のことではありません。でも何をお話ししたらいいのです」。 — 「あなたは一年後にはきつと亡くなると、迷信深い方よ、そう思っているのですか、 — 天上的な方よ」と彼は言った。

「神様の思し召しならばきつとそうなることでしょう」（と彼女は言った）「アルバーノ、あなたをかくも苦しめてしまう私の想いをどうしたらいいのでしょうか」。ここで彼女は自分の涙をもはや抑えられなかった。そして思い出の十字架像が美しいこの魂の中で活気付いて、激しく流血した。

「神様の意志ですか」（と彼は尋ねた） — 「同様に神様は今でもこの喜ばしい夏に冬でも氷の山でも投げ入れられましよう。 — 神様ですか」と彼は繰り返して、見上げ、跪き、祈った。「神様、すべてを愛される神様。...」

「あなたは死んではならない」と怒ったかのように彼女の方を向いた。自分の心の叫び声の余り、更に祈ることはできなくなって、両手で急いで自分の濡れた顔を拭き取った。

— そして彼はより穏やかに震えながら祈り続けた。「いやです、すべてを愛される神様。この美しく若い生命を壊さないでください。私どもを一緒にさせてください。長く敬虔に」。

彼女は思わず彼の傍らに跪いた。 — 今日は喜びや未知の内的勝利や、それどころか長い歩行とでより一層疲れる具合に、 — それだけにより一層激しい具合に騒がしい現実によって攻撃され、彼女は騒がしい空想によって甘やかされ、軟化していたからであるが、 — そして言いようもなくアルバーノの痛みで苦しみ、 — 彼女は話すことができず、素早く投げ込まれた重荷の下にあるかの如く、彼女の頭と首とは屈み込み、 — そして全生涯に重い雲が掛かったかの如く、彼女は床を見つめた。 — 捉える死の川が一本の腕[支流]で彼女の周りを音立てて囲み、彼女は見上げることなしに、尼僧姿の彼女のカロリーネがどこかに、長く生命の上に引きずられる白い、金色の斑点のあるヴェールをまとして動くのを見た。そして彼女は明確に、アルバーノが彼女の生命を嘆願するとき、その形姿がゆっくりあちこち震えて動くのを見た。

「祈るのを止めてください」（と慰めようもなく彼女は叫んだ）「厳しい霊の方。私の言葉を聞き入れ、ただこの方を幸せにしてください」と彼女は祈った。しかしもはや何も見えなくなった。彼女は苦悩で歪んだ顔を言いようもない愛を込めて彼の胸元に隠した。

ここで彼女の兄が、馬車が来たと上に叫んだ。彼女は分かったと素早く小さな返事を下に投げかけた。「お別れですか」とアルバーノは尋ねた。歓喜の炎の雨は今や陰気な灰の雨となって彼の素直な魂に落下した。 — それ故彼は自分の痛みを何らせき止めず、続けた。「これが見納めでしょうか」、そして閉ざされた瞼の背後で彼の善良な目が泣いた。

「違います、至善の神様にかけて、違います」と彼女は言って、立ち上がり、歩いて行った。「待ってください」と彼は言って、彼女は立ち止まり、彼をまた抱擁した。「でもここではお別れです」と彼女は頼んだ。「そうですか」と彼は言って、去って行くこの女性を長く指先に引き留めた。彼がこの静かな形姿の女性に降りかかってきた苦難を、つま

り無垢のこの白い翼が彼の断崖と山頂で血を一杯に出してぶつかっている苦難を見たとき、彼の痛みははなはだ増した。彼は自分の救いたる彼女と別れる前に、また彼女を自分の許に引き寄せた。彼は彼女がゆっくりと、陽の当たる山を、小枝の下で涙を拭きながら、下へ忍び足で下り、頭を午前中はただ陽気で花と咲いていて道を帰って行くのを見送った。しかし彼女の馬車が陽気な森を転がって去って行くとき、彼は見つめていなかった。彼は東側の窓辺に立っていて、彼の子供時代の山々が震えるのを見ていた。彼は自分の目を拭くことを忘れていたのである。

第十六ヨベル期

ある娘の悩み

第七十三周

先ほどのような雲はアルバーノにとっては落下してくる滴よりもむしろ沈降してくる塵から出来ていた。彼の人生はまだ温室であって、それ故陽の当たる側に面していた。毎日が遠くの美しい魂[リアーネ]のための新たな弁護文をもたらし、遂には弁護文は必要なくなった。しかし彼はまた毎日彼女の沈黙に対する免罪証も付与した。後には支払猶予令(モラトリアム)が出来上がった。とうとう彼女が相変わらず何も自分のことを知らせたり読ませたりしなくなったとき、彼は先の弁護文をまた点検し始めて、その中の幾多のものを消した。

同様に自分にとって、あるいは一枚の紙切れにとって彼女に至る階段を一つ見いだすことが難しかった。大尉さえ数日前からハールハールへ旅立っていた。疲れた両手で彼は重たい、飲み干された喜びの杯を握っていた。これは空のときが最も重いのである。一

このような場合、人間が自分の中を駆けさせる荒々しい假定、一 例えはこの件の場合はリアーネの病気とか、冷淡化、牢獄、旅立ちのようなもの、これらはその交替や価値の面で、彼が求め、廃する諸計画、例えは誘拐や、憎悪、決闘、絶望の計画の同様にはなはだ大きく荒々しく数多いものと何ら異ならないものであった。

厳しく堅牢な時は、その文字盤に指針を有さない。指針は運命の間近に、人間がその夢の間近に立っているように立っている。つまり彼は双方の形姿に気付かず、前もって準備できずにいた。彼はしばしば町へ行った。町のすべての露地は馬で調べられ、人々の歩みで調べられ、馬車で調べられていた。人々は立派な王座の台座のためのバルコニーを運び上げ、釘で打ち付けようとしていたからで、そのバルコニーから侯爵の花嫁が国の就任挨拶の際、最も遠くまで見通せられるようにするためであった。しかし彼が町で自分の嫁について聞いたのは、彼女がよく大臣と一緒に絵画の陳列室に行くというものだけであった。

そのことで二つの心配な假定、彼女の病気という假定と家庭不和という假定は、その棘が抜け落ちたように見えた。最良のことは、もっとも最も難しいことであったが、直接大臣の許に、ヴェスヴィオ火山の許に行くように、赴いて、最も美しい眺望を得ることであった。彼はこのヴェスヴィオ火山を訪れた。実際この火山はいつになく静かで緑色であった。彼は万般にわたって尋ね、直接結婚式に関する多くのことを聞き出した。大臣も、伯爵が賛嘆に値する[侯爵の]花嫁の歓迎に協力してくれるように、自分の希望や願望を隠さ

ないよう努めていた。

仕舞に伯爵も女性達についての自分の希望や願望を敢えて打ち明けざるを得なくなった。大臣ははなはだ快活に答えた。両人がまさに「立派なフォン・ヴェールフリッツ嬢」をブルーメンビュールに連れて帰っている、と。そして早速この「墮落していない天然」の賛辞に移った。アルバーノは直に帰ったが、しかしはるかにもっと楽しくなって帰った。帰路では若干の路地のランタンも燃えていた。

しかし朝、彼は一つのランタンもない片隅の小露地に陥った。つまりトナカイたるラベツテが、昨日ペスティッツへ来たように、リラルーへやって来たからである。 — というのは田舎の令嬢にとって、一マイル歩くことは、まさにドイツ舞踏と変わらないからである。 — 彼女は彼の前で、自分の心を心耳に至るまで、振り動かし、ぶちまけた。そこから生じたのはただ楽しいイメージ、若干の天国、完全な結婚式の日、対の義理の父母、一人の大尉夫人であった。「大臣家の方々は私にとっても丁重だったわ。 — 後では更にもっと私の両親に対して母親が丁重で、 — そして大尉のことを何度も話題にして称えたの。要するに勿論すべて承知しているのよ、立派な、愛しいお兄さん」と彼女は言った。

— しかしリアーネについては立派な兄に対して、彼女の健康証明の他には何ももたらさなかった。ラベツテの喜ばしい目は全く薄暗い方面には向いていなかった。「二人つきりになれなかったの、そのせいです」と彼女は付け加えて、また大尉の話となり、大尉を大臣は輿入れしてくる侯爵夫人のパレード特命委員としてハールハールの通りへ派遣したとのことであった。それでも彼女は彼に対しリラルーへ「照明の夜」、来るように指示した。そこに彼女とリアーネと両方の側の両親が居合わせることを取り決めたというのであった。善良なラベツテよ。君の褐色の厳しく染められた手に君が目にするようになる喜びの輝く指輪を、誰が君に恵まないであろうか。指輪の宝石が落ちることのないよう、願わない者があるか。 —

その後すぐにこの見棄てられた男の心の許に、過ぎし日の祭典の兄が、つまりカールが飛んで来た。彼はほとんどラベツテの陳述を繰り返した。彼女の歓喜は伴っていなかったけれども。彼は、 — 格別の感動なしに、 — こう言った。父親が本当に、幾部屋も通じて、投げキスをして、自分に同志の挨拶をしてくれて、自分を特別に顕彰し、標付けをし、好意的に仕事に使ってくれていること、 — こうしたことすべては単に、父がラベツテに対する愛と両親の静かな首肯を察知して以来のことだ。というのは確かに父親の許では心についての言葉は見られず、ラベツテの女系分采邑について語られるのだが、これは自分の心のロマンチックな変わりやすさのために、いつか最も貧しい娘を連れて来るかもしれないと信頼されていないからなのだ、と。

期待している胸にはもっと多くのことを持参できたら良かったのだがと溜め息を付きながら、カールは単に、リアーネは元気で物静かであるが、一時も一人つきりであることはないと言っただけであった。自分の率直な、豊かな幸福と他人の困窮との釣り合いのために、 — カールは、自分の魂の絆に対するその両親の祝福について、かくも簡単に素っ気なく逃げているのであろうとその美しく優しい理由を、 — アルバーノは察したように思った。今や彼は何とカールを愛したことであろう。もっとそれ以上に愛することができるのであれば、リアーネを自分の幸福から失うことになってすらも、彼を愛することだろう。単に自分とカールに、神聖な友情は、二番目の心を愛するためには、三番目の心を

欲するものではないと示すためにそうすることだろう。

沈黙のこの曇りは数週間続き、彼の最も素敵な高貴さの周りにますます暗くかかっていた。この罪のない男は暗がりの中、矛盾の圏内をさまよった。両親は彼との縁戚関係を打ち切っているのかもしれない、彼の方が彼らとの縁戚関係に応ずるよりは、その関係を忘れる必要があると思っているのだからとか、両親は二人の心を政治的無情さのために犠牲にしかねないとか、考えたりするたびに、何とこの若者は思いあぐねなければならなかったことであろうか。 — あるいは彼が敬虔なリアーネに対し両親の攻撃からの屈服の嫌疑を抱くとき、この嫌疑は更に過去からの推測で、つまり彼女は自分を多分に両腕よりはむしろ詩的に敬虔に、むしろ翼で抱擁していて、彼女はそもそも長い従順に慣れていて、犠牲と愛着とをほとんど区別できず、犠牲を愛着と考えかねないという推測で補強されたのであるが、 — あるいはあるとき、最も頻繁にこうした武器の先端を自身の胸に向けて、こう自問するとき、何故自分は友情に関してはかくも堅固な信頼を抱いているのに、愛に関してはかくも揺れる思いを抱いているのか自問するとき、そのときこの非難は、この善良な女性に彼がなしたすべての先の非難に対する二回目の非難となって行き、結局ただ、男達が友人達より女性達に対してむしろ行う改宗熱、改革熱に従って、この女性を自分の鑄型の中に溶かし込むのであった。男達は女達ほど荘園を上手に保持できない、男達は女達よりも改革をしたがるからとホルベルク¹が述べているように、彼はこうした改革熱のことを非難できたことであろう。同じ理由で男の恋人達はやはり、女達が男の恋人達をだめにするよりも、もっと女達をだめにする。

ただゆっくりとした未来の裁判所からより早く死刑宣告を取って来るために、あるいはより素敵な書面を取って来るために、彼はまた大臣の家に行った。彼は大臣からまた微笑でもって、母親からは真面目に歓迎された。そして — 彼の質問に対して、 — リアーネは不調ということであった。彼は、昔からの、今やもっと温かく接してくれるショッペに、ショッペはしばらく前から医師の外科用メスの傍ら、洗浄され解剖されるべき心臓の他は何も研究していなかったのであるが、大臣家への医師の訪問について短い質問をした。誰も医師の家から大臣の家にも更に訪問する者はいない、リアーネは全く元気にすべてのサークルに行っているからで、ただ講師だけはより頻繁に訪問している、と聞いて彼は大いに驚いた。

アルバーノは多分、ただ両親のメドゥーサ[髪が蛇で、目を見た者は石化する]の頭のみが彼に対するその最も優しい心を石化させ得ると納得したことであろう。しかしまさにこれをよく飲み込めなかった。彼は大胆に、自分は彼女から両親よりももっと愛されるべきと要求した「利己心からではない」（と彼は自身に言った）「私のためというよりは彼女のためなのだ」。愛する男は偉大な、言いようもない愛を欲する、 — 愛に関して彼は自分のことをいつも単にたまたまの価値のない対象にすぎないと思っていて、 — ただ自ら至高の愛を与えるためにそう欲しているのである。

いつもは遮光壁、暖炉壁の背後にすべての新たに上がる明かりを隠してしまう寡黙な講師さえも、頼まれもしないのに伯爵にニュースを知らせた。リアーネは嫁入りしてくる侯

*1 ホルベルク『倫理的論考』II 96.[III 37.][Ludwig v.Holberg(1684-1754)].

爵夫人の ― 相手役レディーといったものになる、と。アウグスティの願望や関係に対する昔からの彼の嫉妬深い嫌疑の念故に、彼はそれに何の返事もしなかった。

今や彼の精神は勇気を出して、自分にふさわしいこの方にまさしく手紙を書いた。そしてその兄に渡してくれるよう手紙を送った。兄はその翌日やって来た。しかしまだ返事を得ていないように見えた。いつもだったら最初の挨拶のときに彼に渡していたであろうからである。カールは自分が最近行っていたハールハールの宮廷に話を持って行って、 ― 言った。そこではどの神経も堅い靴を履いていて、どの心も鯨骨入りスカートを着ている、と。 ― そして更に、末っ子の、最も酷評されている侯爵令嬢、イドイーネを称えながら、 ― こう説明した。彼女はすべての長所の他に、例えば神聖さや、善意や、決然とした性格や、これは王座にあってすら自身の運命や生涯を求めるものであるが、更には愛らしさの他、これは誰をも好かない侯爵夫人たる花嫁さえもが自分の心に抱き寄せる愛らしさであって、その上更にリアーネと紛らわしいという類似性の長所を有している、と。

「それでリアーネは私の手紙を得ているのかい」とアルバーノは尋ねた。カールはまたその手紙を彼に手渡した。「誓って」（と彼は熱く、しかし曖昧に言った）「今は妹に渡すことはできなかった。 ― しかし兄弟、君はほんの一分間であれこう信じられるのかい、リアーネは永遠には自分のものでない、と」。 ― 「私は何も信じない」（とアルバーノは侮辱を感じて言って、その後手紙を文字のサイズの小紙片に千切った）。 ― 「せめて我々は」（と彼は感動した声で続けて言った）「いつものような我々でいよう、鉄のように固く、白熱のときの鉄のように柔軟でいよう」。 ― 感動した友は次のような慰めを口にした。「照明の時の夕べ^{*1}」を待ち給え。 ― そのとき妹は君と語る、 ― 妹は出演しなければならないのだ、何の役で誰のためか、君は驚くことだろうよ」。彼は黙って頷いた。彼は彼女の役目を容易にイドイーネとの類似性と女官と称されるものから推察した。しかしそれが彼の幸せの何と助けとなったか。

彼が自分の名誉心に反して送った紙片が戻って来たとき、この名誉心はまた強化された。今やアルバーノの流血する唇に熱い封印が押された。彼は今や自分に対し、自分の眼前に、今や自分の毒となったし、後によりやく、期待するに、薬となるであろう時しか有していなかった。彼の呼び覚まされた名誉心に対してそのそも制御できるものは何もなかった。彼は血が飛び出る処刑場を見上げることができた。しかし自らの軽視と他人の軽視という毒のように重い、致命的な痛みの下で、罪深い胸の上に、下に目を落とした混乱した顔が掛かっている晒し台を覗くことはできなかった。

カールは時折、長い、夜のような謎に対して若干の明かりを持って近寄って来た。しかしアルバーノは、その明かりをどんなに願っていても、反対のことをして彼を混乱させ、耳を傾けることさえせず、ましてや問いただすことをしなかった。かくて彼は固い、若々しい、棘のある薔薇の蕾の状態に留まっていた。これはただ時間のみが優しい薔薇に開花させられるものである。勝利は勝利を与える、 ― 敗北が敗北を与えるようなものである。彼は今や彼を攻囲している情感に対して、救援部隊というものではなくても、永遠

*1 侯爵の結婚式の際に行われる。

に食料供給されている山地要塞を、一 天文台に見いだした。十全たる、集中した魂でもって、彼は理論的天文学に打ち込み、日中を忘れ、実践的天文学に打ち込み、夜を忘れた。天文台は確かに町とブルーメンビュールの間の中間の山にあって、両方を明らかにしていた。しかし彼は目を単に星座にのみ向け、大地のかの薔薇のように赤い所には向けなかった。そこでは今、冷たい花の萼から、蜜の代わりに、単に水のみを吸い出すことができたかもしれないのであった。このように彼はリラルでの祭典の準備の期間、最も美しい魂の現在が祝福するか、あるいは破壊する定めゆっくりとした夕方に対して、覚悟して向かって行った。時折、彼の運命の遠方の遠隔通信に空しく目をやりながらであった。この通信は、平和的なのか、戦闘的なのか、定かならず、いつも揺れていた。

第七十四周

これまでの話の上申まとめの書類の封印を閲覧のために外すこと、一 あるいはこの話の盲窓を除き、本当の窓を開けること、一 あるいは隠された道や馬車を明らかにすること、一 あるいはとうとう本件全体を、一一 これらは隠喩だらけであるが、一 それに極めて似ていないものであるが、一 これらは記述しようと思っている長期待された解決を更に一層長く、よりうんざりするほどに引き延ばす役にしか立たないものである。むしろ、思うに、早速次のように述べれば、大臣の宮殿における戦争と平和の決算はより良く自由に明らかにされることだろう。

すでに上述したように、フォン・フルレ氏は顔に良い眺め[belle-vue]を浮かべ、こころに私の喜び[mon-plasir ドイツでは別荘名]を抱いて（この言い回しが洒落たものというよりは無理に探してきたものと見えないのであれば）、ハールハールから家に帰って来た。彼は自分の妻に率直に、自分をこれまで長く引き留め、魅了して来た件、一 将来の侯爵夫人のことを、自分に対して通常以上の愛着を抱いていたと語った。彼は彼女の豊かな分別に一杯の誇りに思う明かりを投げかけ、一 女性に対してそれ以上に称えるものは他になかった*1、一 同時に自分の妻の分別に対する弱い斜光の影を投げかけた。そしてその繊細な、継続される媚態が（彼の言うには）当方として推薦できるような人物、その好意には、自分はそれを隠すことをしないが、半分だけ応えることのできる人物を得られて、幸福に思った、と。その半分だけというのはローザン公爵²[Herzog von Lauzun(1633-1723)、ルイ十四世の寵臣]がまことにこう主張しているからで、つまり皇妃達の愛を保持するためにはその愛をただまことに厳しく短く抱くべきであるというわけだからである。老人の中では、よく我々が目にしているように、全く遅くなってから、一 老人達が九十歳になってからようやく生えてくる新しい歯に似ていなくもないが、一 星形勲章の下で恋人の心が芽生えてくるものである。しかし期待するよりも、願わしいことは、彼がその際格別に滑稽な男の役を演ずることであろう。というのは彼は丸一週間国家の舵を握って、舵取り台に座ってそれを動かしているか、あるいは仕事台に座ってそれを侯爵のために繊細

*1 エジプト人の許では魔術師は単に学者達であった。彼の許では女学者達が魔術師であった。

*2 デュクロ『ルイ十四世治世秘話』第一巻。[Duclos(1704-1772)]

に軽快に削っているかどちらかなので、土曜日にはとても疲れてしまい、ヴェルギリウスでも雷雨でも、 — たとえもはやヴェルギリウスのヘクサーメター[六歩格]の詩脚かモーゼの戒律[数]の歩みしか要しないとしても、 — ディドー[カルタゴの女王。『アエネイス』ではアエネアスに失恋]を嵐から守って次の洞穴へ案内するよう彼を説得できないであろうからである。彼はそういうことをしなかった。官能的愛から離れていたように、彼は感傷的な涙もろい愛から離れていた。殊に彼は感傷的愛は結局官能的愛に巻き込むと案じていたからで、その愛は短調のように、昇りながらのときよりも、全く別の音階を戻りながらのときに有するからである。この男性の皮肉なもの棘のあるものは、他の世慣れた紳士同様に、すべての結婚を、 — 魂の結婚であれ、 — 結局はとても難しいものとしてしまっていて、針鼠に対して針が自分達の結婚を難しくしている具合であった。従って将来侯爵夫人に対しては、単に冷たい、政治的な、コケットな、宮廷的な愛を、夫人自身が多分有する程度に、そして彼が必要とする程度に、貯蔵しておき、彼女を征服するというよりは、彼女によって征服する、まずは侯爵全体を征服することにした。私は世間の読者に期待するが、読者方はフルレの侯爵夫人への愛着の中に侯爵に対する侮辱を感じ取って欲しくない。というのは一度宮廷説教家が侯爵夫人に対して結婚の手を置きさえすれば、この執事はさながら孔雀の雌に切れ目を¹⁾入れたも同然であり、そうなるとこの雌は触れられないまま取り上げられて、他の所で食されていいのであるからである。

私は第二巻ですでに大臣夫人の心配、つまり大臣は、また（この巻に）やって来て、リアーネが家にいないと知ったら、やかましく言うであろうとという心配を知らせていた。しかし期待に反して彼は承諾した。村の空気浴という夫人の試みは、リアーネを宮廷の空気の蒸気浴に追いやるという彼の意図と良くかみ合った。彼は母親に言った、リアーネが今全く癒えているのは自分にとって不快なことではない、誓って、新しい侯爵夫人は彼女をその相手役レディーに選ぶであろうから、と。彼は自分の側に王笏や、小さな王笏を見たら、その両極性を自らのために試して、かくて何かを引き付けたり、反撥させたりせずには、三分間も放置しておくことができないのであった。かの有名な神学者のシュペーナー[Spener(1655-1705)]が、 — 我らのシュペーナーの先祖であるが、 — 自分の友人達のために何と日に三度神に祈ったように、同じような喜びを抱いて、我々は、廷臣が自らの神の許で、つまり侯爵の許で、毎日自分の友人達のために少しばかり頼み、何かを得たいと欲しているのを見いだすことになる。

大臣夫人は、彼のよく変わる計画に対して、決して計画段階では戦わず、実行に移すときようやく戦うのであったが、彼の最新の計画には容易に我慢した。少なくともブヴェロとの婚約という古い計画とは何の協力関係にあるようにも見えなかったからである。

ある晩、残念ながらあの致命的な不安げな講師が、 — 彼はフルダの歴史図[F.K.Fulda:Charte der Weltgeschichte.1782]にごく小さな名刺を貼り付けたのであるが、 — 夫人の前に郵便船で着岸して来て、夫人の二人の子供に関する国家情報、帝国情報を両腕の中に抱いて、 — それぞれの腕に子供一人ずつで、 — 上陸した。しかし何故私はこ

*1 周知のように丸ごと残っている鳥等に、切れ目が入られるのは、侯爵の食卓に上がったという印のためであり、かくてそれは再び上げられることはなく、他で食されることになるのである。

の男に襲いかかるのか。二重長編小説は、殊に野外で演じられたものは、普通の単純な長編小説より人目に付かないもので有り得たであろうか。

夫人の驚きは単に夫人の夫のもっと大きな驚きと比べられよう。夫はたまたま三番目の部屋で、一 マグデブルク出身のシュロップ作の、一 ブリキ製の耳を、一 奉公人達を盗聴するためにねじ込んでいて、今や多くのことを耳にしたのであった。しかしこの二重耳はアウグスティの小声の宮廷用唇からは単に個別の、長い、固有名詞、ロケロールとセサラといったものを、その夜間用の広い罨の目で拾い上げただけであった。小声の講師が出て行くと、彼は耳を手喜んで部屋に入って来て、夫人に報告についての報告を求めた。彼は自分の邪推を、一 これはどんなに親しく喜ばしい気分のときでもそのアルゴス[百眼の巨人]の耳や目を閉じさせることはなかったのであるが、一 あるいは自分の盗聴を、ほんの一音節でも、一紅潮でも糊塗したり、隠蔽したりすることは自分の品位にかかわることと信じていた。紛れもない厚かましさを美しい線が彼には、描かれていず、焼き入れられていた。大臣夫人は早速女性の武器、真実を言うという武器を、一 半分使用した。つまりヴェールフリッツ家に対するロケロールの立派に処遇された接近という快適な真実で、ヴェールフリッツ家の荘園と地方総裁職はまことに都合良く、義理の父に合っていたのである。しかしこの義理の父は妻の顔にこの喜ばしい通知状の周りの喪の縁取り[黒枠]を余りにはっきりと広く読み取ったので、彼の繊細なブリキ探査器も捉えた強く響くセサラの言葉を問いたださずにはおれなかったが、しかし無駄であった。というのは母親は敬虔な娘を余りに愛していて、この狼を彼女の楽園に入れて狩りをさせるわけに行かなかったからである。夫人は娘を楽園からもっと穏やかなやり方で神の声とか天使を使って追い出すことを願っていて、彼の質問を避けた。

しかしこの狼は今や自分で更に追いかけて行った。彼は腸閉塞となって、一 そうスフェックス博士に告げられ、一 この医師に素早い助力とそれに自分の借家人、伯爵についての若干の報告を求めた。いずれにせよスフェックス夫妻は威張った若者が嫌い、一 四人の子供を送って、どの意味でも捨て石の子[前線に捨て駒として送られる兵]として、町のどの噂も拾う四人の耳骨として送って、多くのことがブルーメンビュールやリラールから急報船で家にもたらされたのであった。一一 要するにこれらの耳骨は他人の耳骨に上手に介入して、フルレは数日したら、その百合の額でギリシア人女性の許に、自分が持って行こうと思っていると、息子宛の一通の手紙のことを問い合わせることができたのであった。

彼は一通の手紙を見だし、まことに喜んで開封したが、しかしその中にはアルバーノかりアーネの手になるものは見いだせなかった。しかしこのカップルに対するラベットの若干の愚かな暗示だけは別で、これらは大臣にとって、あたかも自分がその鋭い税関吏の探査針でリアーネの心臓に穴を開け、そこに戦時禁制品を見いだしたかのように思われるものであった。先の封蠟を長いことかかって下僕的に複製することをせず、彼は二番目の封蠟を手紙に押し、了解して去った。

ただ数分間、彼のやり方の正当化のために、次の私の文書に留まってから、我々皆が、彼の後を追いかけることにしよう。

国家の件での

二番目の封蠟のための保護状、鏢[切り札]

老フルレに大臣として、あるいは父親として、他人の手紙の審査権があるか、 — もっとも父親は大臣を、国父はすべての他の父親を、それに自分自身の父親を前提にしているけれども、 — このことは、まさに述べた挿入文を通ずることによってしか、決しようとは思わない。手紙の前に郵便馬をつなぐ国家は、これらの不正乗客というよりは姿を目に見えなくしている乗客を、より正確に、その閉ざされた封蠟の面頬の下で調べる権利を有しているように見える。国家が国家の敵どものために馬を用意していないか知するためである。国家は、絶えず引き付けている光磁石であるが、ただその件での光だけを欲していて、殊にそもそもすべての光に対する光を欲している。国家は封筒のないただ赤裸々な真実のみを欲している。その門を通して騎行して行くすべては、たとえ封筒の中に包まれていても、赤い口を開けて、何という名前で、何の用件かただ言うべきなのである。 —

下級の兵士は自分の手紙を前もって自分の将校に呈示しなければならないので、 — 城砦の守備兵はその手紙を司令官に、 — 僧侶はその手紙を修道院長に、 — アメリカの開拓民はその手紙をオランダ人に¹⁾、 — (手紙が彼について不平を述べていたら、手紙を燃やしてしまうために) 呈示しなければならないので、それで政治家は、今や国家を兵舎と見なしていようと、 — あるいは[牢獄のある]サンタンジェロと、 — あるいは[男性用と女性用の]二重修道院と、 — あるいは[オランダ人風に]ヨーロッパのヨーロッパ的所有地と見なしていようと、すべての手紙を、運送状や叙爵書や売買契約書や使徒書簡がそうであるように、公然と見てみる権利を誰も奪われてはならないであろう。唯一の欠点は、ただ政治家がそれらの手紙をピッチで閉ざされ封印される以前に得ていないということである。これは十分に非倫理的なことである。というのは政府はやむなく開封して封印をすること、 — 手紙を鞘から引きだして、またその中に収めることに追い込まれるからである。丁度料理人が苦勞して蝸牛をその殻から引きだして、焼き上がったらすぐに、またこの殻の中へ戻して食卓に出すようなものである。

この後のことが、もっと考えなければならない肝腎な点である。政府は遺言を開封する同じ理由で、どんなその先の先の意志をも、最後には最初の意志をも、その遺言[意志]の相続人より先に開封できなければならないということが、一般的に認められており、慣習であるとしても、 — また侯爵たる者は、はるかにより容易に従者の手紙を、侯爵の手紙や国使の手紙が[魔力のある]ホルト草の根の前で開けられる同じ解読局に(その控えの間、開封局に)投ずることができなければならないということも一般に認められているとしても、しかし手紙のコルク栓抜き、 — 共有封蠟、 — 代理封蠟、 — L.S.あるいは「封印の箇所」という疲れる模刻は何かともうんざりすることで、ほとんど厭わしいことである。それ故この不正には法的反復によって一つの正当性が付与されなければならない。

手紙はただ印紙の上に書かれるよう命じられることになれば、幾らか役に立つのではないかと私は希望する。その為に設立された閲覧課、印紙課はそうになったらすべてを読み通

*1 クロッケンブリングの『論文集』参照。

すことになろう。あるいは個人貨幣のための貨幣刻印としての印璽[封印]をもはや許さないことにできよう。そうなったら封蠟局が大きな権利で中に割って入って来て、今は故人の遺産に対して封をしているが、やがて存命者の遺産にもそうするようになるだろう。

あるいは、一 ひょっとしたら優先されるべきかもしれないが、一 手紙の検閲が始められなければならないであろう。印刷されない新聞、手書きニュース[十八世紀検閲故に盛んであった]、つまり書簡は、更に大きな秘密を抱えているが故に、印刷されている新聞が受けているよりももっと大きな検閲の自由を要求できないであろう。特にどの手紙も今や容易に回覧される回状となっているからである。発禁書簡のカタログ(index expurgandarum、発禁本目録の意)がそうなったら、文通相手にとってはいつも一つの合い言葉となるだろう。

あるいは郵便局長に、手紙の中で重要なこと、憂慮すべきことに出会ったら、そのことすべてを忠実に報告するよう宣誓させるといいだろう。手紙は発送前に、精神的秤に載せられて、区別されない封蠟というライブニッツ的原理に従って更に送るという希望と共にまた封印されるのである。

国家が、手紙を読みそして閉じるというこうした方法すべてを新奇で苛酷なものと思うならば、手紙を開封するという自らの方法を続けて構わないであろう。

*

笑いながらフルレは夫人の許に飛んで来て、誓った。自分に対する彼女の欺瞞は何ら新しいことではない、一 単にブヴェロ氏と自分に対抗しようとする彼女の現在の計画を自分は十分に把握している、一 それ故ラベツテがここに来て、娘が行かなければならなかったわけだ、一 しかし私は猫かぶり、祈りのシスター、あるいは何であれ、その女に自分は母親だけではなく、父親も有していることを見せてやりたい。一 「すぐにここに呼びなさい。私は娘をレディー見習い¹にしよう。しかし貴女や伯爵は付けずに」と女官の地位をほのめかして結んだ。

しかし大臣夫人は、一 彼の計画や影響力に対する手厳しい軽視に従って、一 この冷淡な男よりもどんな温かい男をももっと立腹させたであろうかの冷淡さで、彼にこう告げ始めた。自分は彼よりももっとリアーネと伯爵の恋愛が気に入らず、それと戦わなければならない、一 自分はただリアーネの率直な魂に対し、全幅の、普通は裏切られたことのない信頼を抱いていて、自分よりもリアーネの方を信じていたのであり、自分がアルバーノの愛着の幾多の印にもかかわらず、彼女をブルーメンビュールへ行かせたのであり、一 しかしここで夫に約束するが、ドイツ騎士団騎士に対するのと同じ熱意で伯爵にも反対するし、自分がリアーネを知っている限りでは、このことがこの上なく立派に簡単に成功を収めることをほぼ確信している、と。

*1 国王は以前身分ある未婚の少女を、レディー見習い[Damer]、あるいは女官に、その女性がヴェルサイユ宮廷に参上することが許される前に、しなければならなかった。[Madame de Genlis:Les mères rivales. 2.Bd. 29.Brief参照]。

勿論このことは大臣にとって思いがけないもので、一 信じられないことであった。殊に、先に黙っておられた後では信じられなかった。ただごく繊細な男性の魂のみが、女性の魂の中での自己錯覚と恣意的欺瞞、弱さとペテン、偶然と決意との融合する境界を区別できるのである。いずれにせよ大臣夫人はその正体を知るためには、まず最初愛さなければならない女性達の一人であったし、これは普通逆になるのである。彼は一面では喜んでその賛成と協力の表明を受け入れた、一 単にそのことを将来彼女に対する武器とするためであったが、一 しかし他面では彼女に隠しておけなかった、それではまた（と彼はいつも言っていた）子供達に対する自らの告白に従えば、邪推の欠如から失敗をしまっているのではないか、と。彼は、自分にその隙を見せた率直な魂に対しては、あたかも自分がその隙を自ら切り開いたかのように、この隙を通じて武装して侵入して行く慣習を保持していた。自分の前で許しを請うて跪く告解の子供を、より低く押さえ付けて、解決の鍵の代わりに、法律の槌を取り出すのであった。

私はここで、いつか劣等な翻訳から私のことを知ることになるスペイン人に対し、そしてひょっとしたら海賊版で原物を読むことになるかもしれないオーストリアの金羊毛皮の騎士団に対し、何故フルレ家では、教団の息子のこの接近、しばしばドイツ人の侯爵の王笏をエレ尺として身に付けることになるスペイン人の偉いさんの接近に関し、一 宮廷喪を表明させ、一 歓喜の祭典を表明させることがなかったのか、その理由を説明する責務がある。一 というのはどのスペイン人もこれまでこの点について不思議に思っていたに相違ないからである。

私はすべての国民に対し答えることにする。フルレ家では結合に対してはまず、一 別離の確実さだけを抱いていた。私に対し金羊毛皮の騎士達やスペイン人が反論していた同じ理由で、老ガスパール・ドゥ・セサラはどんなにしても自分のゴットハルト[アルプスの山]とユングフラウ[乙女の意、山]の間に橋を架けさせることができないからである。第二にまさにそれ故、大臣はこのロマンチックな愛に対し、自分がドイツ騎士団騎士に対し、その金と縁戚に対し抱いていたはるかに年を経た、より賢い愛を対置させることができたし、同様に金羊毛皮の騎士の昔からの恨みも対置させることができた。第三に大臣夫人は同じ諸理由の他に、一 ひょっとしたら講師に対する若干の理由の他に、一 更に全く決定的理由を有していた。その理由はこうで、つまり夫人は伯爵が我慢ならなかった。これは単に、夫人が彼と夫人の息子と、それどころか夫との間の苛酷な類似性を、気位の点、激昂の点、哀れな人妻達に対する天才肌の野蛮さの点、宗教的な謙虚さと信心の欠如の点で見だしていたばかりではない。夫人は彼が、一 好きになれなかったが故に、主にそれ故に我慢ならなかったのである。予定説の体系では何人かの人間はその後天国に値しようがそうでなかろうが、地獄へと判決が下されるように、ある女性は、自分がある人を一度そうと弾劾した憎しみを再び撤回することをしない。国や都市、神や歳月、人物の徳操が何とそれに反論しようとする勝手にどうぞなのである。

通常の家内戦争の和平条約で、夫婦間で、次のような秘密条項が決められた。伯爵は父親と総裁のせいでの上なく丁重に扱われ、傍らに押しやられる、一 リアーネは穏やかにヴェールフリッツ家から引き離される、一 婚約の全体的解消は、両親の介入なしに、ただ飛び跳ねる娘自らによって生じているように見えなければならない、一 そしてこのすべてが秘密である、と。フルレは、リアーネの以前の婚約者、ドイツ騎士団騎

士の前ではこの幕間全体が内密にされることを希望した。騎士は殊に今八月、家よりは湯治場の賭博台によくいたからである。

そのような状況であった。この冷たい、戦慄の峡谷山地の中に、好意的リアーネは、かの温かい生気の日曜日、浄福の開放されたリラルを去って、入って来たのである。喜びで浄化され聖化されて、―― というのはどの天も彼女にとっては浄化する煉獄となったからで、―― 高貴に母親の胸元にやって来た。自身の真面目さの余り、迎える他人の真面目さに気付いていなかった。庭園の一行についての彼女の軽い告白は、厳しい場面を、―― ほとんど舞台上の場面を開くことになった。というのは、別な風に始めようと思っていた母親は、早速雷車に乗って、女性の慎みを何故か忘れてしまっていることに対し、閃光を発し、雷を落とさざるを得なかったからである。しかし母親はこの雷車の馬を走行中に止めさせて、大臣がいつ何時来るかもしれないからで、リアーネに早速今日の庭園の一行のことは黙っているように命じた。そこで母親は母親たる者に対するリアーネのこれまでの黙した偽装に最も濃い影を投げかけた。というのは彼女はこの愛の播種の時期、花盛りの時期を、勝手にすでに田舎へ旅立つ前の日々に移していたからである。温かい魂はこのような無愛想が考えられることにどれほど驚いたことであろう。彼女は、出来る限り、母親を自らの話と愛の純な明るい真珠の小川へ引き上げて、我々が知っていることすべてを話したが、さほど満足させられなかった。まさに肝要なことを省いたからである。母親に対する思いやりから、出現するカロリーネのことを、最初は彼女の愛の偶像破壊者であったが、その後この愛の感動的ミュージ、花嫁付添人となったカロリーネのことを、話の中での将来の死亡診断書と共に、見えないままにしておかざるを得なかったからである。

彼女は母親の手を熱く握って、いかに自分がいつも母親にすべてのことを語ろうと思っていたか、ますます喜ばしげに請け合っていた。彼女は自分の率直な心だけを救い出せば良いと希望的に考えていた。しかし御身はもっと救い出す必要があった。御身の温かい心、御身の生き生きした心全体を救い出す必要があった。―― 母親は今や、娘を昔からの習慣で半ば信じながら、ただその件全体だけを、彼女の慎みのなさ、考えられないこと、狂気の沙汰を非難した。「いやです、お母さま」（とリアーネは将来のアルバーノのことを厳しく思い描きながら、ただ絶えず穏やかに言った）「あの方はそんなではありません、誓ってそんなではありません」。―― 同様に穏やかに彼女はドン・ガスパールの黒いタッチで記された拒否も見過ごしていた。彼女の信仰にとって地上は単にエーテルの中に掛かって花咲いている墓塚にすぎなかったからである。「でも」（と彼女は言った、自分の早逝を思い描きながら）「私どもの愛はそんなに重要なものではありません」。母親はこの言葉と穏やかな反抗全体を容易な勝利への前奏と解した。

今やアルバーノの義理の父[大臣]が入って来た。帯に戦のティンパニー、警鐘、火災用太鼓、ガラガラ蛇を巻いていて、それで声が届くようにしていた。―― まず彼は、―― 聞き耳を立てていても無駄だったので、―― 全く立腹して大臣夫人に尋ねた。どこへ彼女は自分の耳を隠したのか、―― （それはブリキ製の複製の耳のことだった。ここに、ヴェネツィアのライオンの頭部の中へのようにすべての従者や家族の秘密や訴えが集まるのであった）、―― 今その耳が少しばかり必要なのだ、殊に最新の「敬虔な娘のアヴァンチュール」以来必要なのだ、と。―― シャムの医師達は患者の治療を、もみほぐしと

呼ぶ患者を足で踏み付ける方法で始めるそうである。同じようなやり方でフルレは喜んで倫理的予備治療のためにもみほぐした。それ故上述の帯の中の言語機械を使って、明確に、急変する子供達について、 — 子供達の陰謀と策略について、 — 父親の背後での恋愛について説明した、 — (それでどの父親も一卷の愛の詩に先に散文の序言を付けて同伴して行けない)、 — そして多くのことを、すべて自分自身とその利益に関連する最も強力な政治的理由を挙げて補強し、 — 若干の呪いで締め括った。

リアーネは彼の言うことを静かに聞いていた。そしてこのような赤道では毎日見られる雷雨にすでに慣れていて、しばしば伏せていた目を彼に対して遺憾そうに、父親の不機嫌に対する優しい同情の念から上げることの他には何の動きもしないでいた。静かさの中で彼は最も声高になっていた。「マダム、準備なさるがいい」(と彼は言った)「娘は明日の午前中に伯爵に別れの手紙と共に伯爵から貰ったものを送って、軽い弁解として自分の新しい職務を告げることだ。 — おまえは支配する侯爵夫人の許での女官となるのだ。 — おまえのために私が尽力しているというのに、おまえはそれに値しない奴だったのだが」。 —

「それはあんまりです」とリアーネは叫んだ、心が砕かれて母親の許に倒れながら。父親はアルバーノとの別れのせいと思って、母親との別れのせいとは思っていなかった。そして何故かと怒って尋ねた。「お父さま、私は喜んで(と彼女は言って、ただ抱擁から顔だけを向けた)お母さまの許で死にます」。彼は笑った。しかし大臣夫人は彼が更に煽ろうと思っていた炎を自ら地獄の門へ送ることをやめて、彼に請け合った。「十分です。リアーネはきっと両親の言うことを聞くことでしょう。私自身がそのことを保証します」と。この立法家はより良い保証を求めて短祈祷を聞き取れるよう発してから説教壇から降りて、叫び返した。「明日自分の耳が戻らなくてはならない、どこの棚であろうと探して見せるぞ」と。

さて母親は黙した。そして娘が穏やかに自分の首にすがって泣くのを許した。二人にとってこうした魂の乾燥の後では、愛の飲み物はさわやかな薬であった。二人は互いに癒やされて、両腕から離れた。しかし二人とも全く違った希望を抱いていた。

第七十五周

苛酷な黒い朝であった。 — ただ外の大気の朝だけが濃い青で、菩提樹の茂みの蜂の飛行の他には何ら風もなく、物音もなかった。天のエーテルは舗石の路地の上高く舞って飛んでいるように見え、明るく開放的リラールの中で深くすべての梢や先端に沈んで行くように見え、孔雀の羽根のように小枝の中から青く変化して輝くように見えた。

リアーネは自分の書斎机の上に一枚の紙片を見つけた。大四つ折り判に折られていて、その中で心臓のように永遠に働く大臣がすでに早朝、自分が個々の行政参事官、官房参事官用に、実りのために必要な通り雨を文書から抽出する前に、身震いしている娘のために冷たい朝の豪雨をお見舞いしようとして試みているものであった。上述の勅令の手紙の中で、彼は一全紙半以上、自分が昨日述べたことについて説明していた。 — 即刻の別れのこと、 — そして六つの別れの理由を挙げていた。 — まずは金羊毛皮の騎士と自分との気まずい関係、 — 第二に彼女と伯爵の若さ、 — 第三に間近の女官の職、 —

第四に彼女は彼の娘であり、これが、彼女の父親がすべての彼のこれまでの犠牲に対して要求する最初の犠牲であること、 — 第五に彼女の兄の愛に対する彼の寛容な愛を見れば、自分がただ子供達の幸せのために生きており、案じていることが分かるもので、兄が見たところ改善されているのを手本にしたらいいのであり、 — 第六に、仮に彼女が反抗するのであれば、彼女を遠ざけ、罰し、矯正するために彼女を兄の許の要塞某々に送ることになる、泣いても、足下に伏しても、母親も地獄も自分を折れさせることはない、理性を取り戻すよう自分は彼女に三日間猶予する、と。 —

彼女は黙って濡れた目をしてこれまで慰めてくれた母親に重大な紙片を渡した。しかし慰めてくれていた母親は裁く母親となった。「どうするつもりですか」と大臣夫人は言った。 — 「苦しむことにします」（とリアーネは言った）「あの方が苦しまないように。どうして私があの方に罪なことができませんよう」。 — 母親は容易に改宗し易い昔からの本当の思い込み故か、あるいは偽装故か、かの「あの方」を父親と解して、こう尋ねた。

「私のことは構わないの」。リアーネは取り違えに赤面してこう言った。「あら、情けない私。私は幸せではありたくないのです。ただ誠実でありたいのです」。 — 彼女は昨夜、すべての自分の内部の天使達の不安な戦いの間、いかに祈りながら過ごして泣いたことか。かくも罪のない、天の聖なる女友達に祝福された愛、 — 早逝でかくも短縮された誠実、 — かくも堅固で、高く、豊かに実った頂と共に天に向かって生長して行く青年、この青年は霊の声がしてすら、取るに足りない自分リアーネに対する子供時代からの誠実な愛に対して、恐れたり、別な方に誘惑されたりすることはなかったのであり、 —

この青年が彼の心に対する最初の最大の嘘を感じることになったときの永遠の不快、憤怒、 — 彼女の短い生涯という裁きと間近な分かれ道、この道では彼女は他の巡礼者達に石ではなく、花々を投げるつもりであった、 — こうしたことすべてが、彼女の一方の手を取って、彼女を母親から連れ去って行った。母親は彼女の背にこう呼びかけていた。「何と恩知らずに、私から離れて行くのです。私は長いことあなたのために我慢し、果たしてきたというのに」。するとリアーネはまた愛の温かく暗い薔薇の谷から一つの人生の乾いた平板な大地に戻って来た。そこでは高いものは自分の最後の塚しかなかった。何と請うように彼女は星々を見上げたことか、星々が彼女のカロリーネの目として動き、どのように自分は犠牲者となったらいいのか、恋人のためにかそれとも両親のためにか、それを教えてくれるのではないかと思っ、見上げたことか。しかし星々は確固たる天に好意的に、冷たく静かに動かずにいた。

しかし朝日がまた彼女の心に光を射したとき、心は期待して、アルバーノのために今日はまことに多くの悩みに耐えよう、いや初めて、最初の悩みに耐えようという決意で、新たに強められて鼓動した。カロリーネは、自分が不誠実になるに違いないそんな愛を肯定できたであろうか、と彼女は考えた。 —

彼女が朝の挨拶と共に母親の唇から離れると、すぐに母親は、昨日よりも一層真剣に、この堅固な心の根を、昨日の花起こし器をもっと長く使用して、心の見知らぬ土壌から引き抜こうと試みた。母親は、アルバーノとロケロールの比較解剖を始めて、同じような声から同じような腰に至るまでますます辛辣になって行き、とうとうリアーネは娘らしい機知で突然尋ねた。「でも何故お兄さんはラベッテを愛しているのですか」。 — 「何て比較でしょう」（と母親は言った）「あなたはラベッテよりましでしょう」。 — 「ラベッ

テは私よりもはるかに沢山できます」と彼女は全く正直に言った。 — 「野生児のセサラと喧嘩したことはなかったの」と母親は尋ねた。 — 「ありません、私が間違っていたときを除いては」と彼女は無邪気に言った。

母親は、容易な花々に見られる根よりも、より深い、より強力な根を引き抜かなければならないと、ますます明確に悟ってびっくりすることになった。静かな緑色のミルテ[花嫁が被る]を壊すために、母親はすべての母親らしい引力、引き上げ機を一点に集中させた。母親は彼女にドイツ騎士団騎士との大臣の腹黒い婚約計画を、それについての自分のこれまで黙っていた戦争と溜め息とを、これまで押し返していた自分の抵抗を、そして彼女を兄の許での要塞捕虜にして、かくて多分ブヴェロ氏に要塞攻囲兵として任せる最新の父親の戦略を打ち明けた。 —

無器用な倫理の黄金時代からの若干の読者、遺族のためにここで若干の注釈が置かれ、印刷されることになろう。より高貴な身分の者達の中では最も身近な縁者や最も繊細な関係について、特殊な冷淡な、何ら容赦しない、しばしば残酷な腹立たしい率直さがあるのはなだ根付いていて、それでより美しい魂達も、 — この母親もその一人であるが、 — そのことについて別な風を知ることはないし、別な風にしないのである。

「お母さま、有り難う」とリアーネは感動して叫んだ。しかしこれはブヴェロのガラガラ蛇や蛇の息、あるいは彼女の心への殺人的跳躍を考えてのことではなく、彼女は自分の婚約のことは、すべての無実の者が処刑台での自分の死をそう考えるように冷淡に考えていたのであり、 — そうではなく、母親の涙、母親の愛の泉の長い庇付けを考えてのことであった。これらの涙はこれまで育むように深く彼女の花々の下に流れてきていたのであった。彼女は感謝してこの救助の両腕の中に身を投じた。両腕は彼女を抱き締めなかった。大臣夫人は素早く湧き返る波や寄せ波で優しく緩やかに洗われはしなかったからである。

この抱擁の中へ大臣が介入し、あるいは割り込んできた。「おい」と彼は素早く言った。「私の耳は、マダム」（と彼は続けた）「召使い達の許では皆目見つからなかった。このことを言いに来たのだ」。というのは彼は今日、法律告知のシナイの山に登って、その麓に集まっている従者達に雷を落として、自分の耳のことを尋ねていたからで、「こう思わざるをえないのだ」（と彼は従者達に言った）「おまえらが十分な理由があって盗んだのだ、と」。それから彼は風の強い天候の際の台所の蒸気のように降雹として耳を求め、個別の従者の部屋や片隅を探し回ったのであった。 — 「でおまえは」と彼は半ば喜んでリアーネに言った。彼女は彼の拳に接吻した。彼は拳を、教皇が足をそうするように、いつでも采邑保有者、唇保有者として、口の代理人、枢機卿使節として接吻に対して送るのであった。

「言うことを聞きませんよ」と厳しい夫人が言った。「それでは貴女に少し似ている」と彼は言った。この疑い深い男は抱擁を自分と自分のブヴェロに対する陰謀のように見なしていた。そこで彼の氷のヘクラ火山[アイスランドにある]は破裂し、燃え上がり、流れて来た。 — あるときは娘に対し、あるときは夫人に対し、 — 娘はつまらぬ奴だ、と彼は言った、ただ大尉だけが少し見込みがある、幸い自分が一人で育てたのだから、 —

たとえ自分のブリキの耳が隠されても、自分は何でも察知し、聞いているのだ、見たところ（と彼は開封された彼の朝の賛美歌を示して）それでは両陣営で密談があったようだ

な、しかし仮に自分が罰しなければ、自分に罰が当たることだろう、...「娘よ、いい加減返事をくれ」と彼は頼んだ。

「お父さま」 — (とリアーネは言った、ブヴェロへの親睦と母親に対する虐待以来、彼女の心はもっと意を強くして、しかしこの心は憎むことができず、単に軽蔑することができるのみであった) — 「お母さまが私に今日と昨日すべてをお話してくださいました。でも私は伯爵に対し義務がございます」。両親がいつもは彼女に期待しないか、見た覚えのない、もっと大胆な活発さが上げられた目許で輝いていた。「生きている限り、せめてその間はあの方に誠実でいたいと思います」と彼女は言った。「チョットシタモノダ」と大臣は、大胆さに驚いて答えた。

リアーネは今ようやく自分が漏らした言葉を聞き取ることになった。そこで彼女は、過去と自分の母親とを正当化するために、老父親に対し自分の見霊や夢の透視を話して感動させ改心させるという立派な滑稽な決意を固めた。彼女は父親に二人つきりでの話し合いを請い、 — それがかろうじて許されると、 — 母親には内緒という神聖な約束をしてくれるよう請うた。この愛してくれる母親に、自分の吊鐘の鳴り終わり間近な歯車時計の回転音を聞かせることを恐れたからである。老いた父親はただ喜劇的な顔をして、 — その際彼は、憤激した冷淡さの中で笑おうとしている者のように見えたが、十分に約束すると誓うことができたのであった。彼が思い出す限り、彼は言葉を守ったことはなく、単にしばしば言葉が彼を守ってくれただけであったからである。このような人間にあっては言葉と行為とは劇場の雷と稲妻に似ていて、これは二つとも、普通天では同時に結び付いているのであるが、舞台では別々の隅から、別々の裏方によって発生させられるのである。しかしリアーネは彼が固い約束の率直な表情を、 — 描かれた窓の表情を浮かべるまでは収まらなかった。その後、拳に接吻し、自分の霊の話をし始めた。

真面目さを保ち続け、筋肉をぴくとも動かさずに、彼は途方もないことに耳を傾けていた。それから彼は、一言も言わずに彼女の手を取って、彼女を母親の前に連れ戻した。彼は母親に娘を、母親の立派な娘教育に対する称賛の賛美歌、感謝の賛美歌と共に渡した。「自分のカールに対する息子教育は少なくともこれほどまでの威力は収めていない」と彼は付け加えた。その証明として彼は母親に率直に、 — リアーネのすべての痛みを冷血に消化しながら、桶屋が糸杉の小枝を樽の箍に加工するようにしながら、 — 自分が黙っていることを約束したばかりのわずかなことを知らせた。彼はいつも自分を投げ棄てるか、あるいは他人を投げ棄てるか、大抵はその両方であったからである。リアーネは真っ赤になって、熱くなりながら、目を伏せて座っていて、神に対し父親に対する子供の愛を棄てさせないように祈った。

更に同情する方々の目が、新たな時の開始で苦しめられてはなるまい。この時には彼の皮肉の氷が割られて、荒れ狂う奔流となり、この奔流にはその上怒りの母親の涙が、大事な娘に対して、その娘の最後の眠りへの救いのない熱に浮かされた夢想癖に対して、流れていたのである。目的と危険とがほとんど夫婦を二度目の結婚に導いた。滑らかな氷となると、人々は腕を組んで進むものである。「何もリラールへは送らなかったのか」と父は尋ねた。 — 「お父さまの許しがなければ致しません」と彼女は言った。しかし自分の手紙のことを言っていて、アルバーノの手紙のことではなかった。 — 彼は誤解を利用して、言った。「おまえはそれらの手紙を有しているだろう」。 — 「私は何でも喜ん

で致しますし、やめます」(と彼女は言った)「でも伯爵の同意が得られなければ、不誠実に思われるでしょうから。私は誠実であるとあの方にお誓いしているのです」。この穏やかな堅牢さ、この優しい花で覆われたペトロの岩に父親が最も厳しくぶつかって来た。その上、仮にリアーネに伯爵に対し問いかけを許したら、自らの願望で気位の高い恋人アルバーノが敵対する者になるということは一面では有り得ないことであり、それに承諾されるにせよ拒絶されるにせよ、こうした変更を請願することは他面ではそもそもとても侮辱的なことであり、当惑した大臣夫人は気位高く立ち上がって、再び尋ねた。「それが私どもに対するあなたの最後の言葉ですか、リアーネ」。 — そしてリアーネが泣きながらこう答えたとき、「他に仕様が無いのです。神様お許しください」、立腹して大臣の方を向いて言った。「どうぞご随意になさってください。私に科はありません」。 — 「全く科が無いとは言えないが、まあいいだろう」(と彼は言った)「おまえは明日からこの部屋から出てはいかん。悔い改めて、我々の目にもっと立派に見えるようにならないかぎり」と彼は出て行きながらリアーネに、二発の目の礼砲を投げかけながら、告げた。その中には私の測定では、普通に人間が与えながら受け取るか、受けながら帯びることができるよりもはるかに多くの反射炉の熱の悪霊が、 — 腐食し、侵食する薬剤が、 — 脳穿孔虫、心臓穿孔虫が約束されていた。

哀れな娘よ。御身の最後の八月はとても苛酷なもので、何ら収穫の月ではない。 — 御身は御身の小さな棺が置かれる時を見通している。その棺では残酷な天使が、美しい、棺の周りを回るまだ新鮮な愛の花々の絵を消し去るのだ。その棺が全く白いまま、御身の魂のように、あるいは御身の最後の形姿のように薔薇のように白く運び込まれるようにするために。

この母親によるその修道院室の荒地への追放は、彼女にとって同様に恐ろしいことであったが、ただ今日初めて三回も体験した母親の怒り、もっともいわれのない怒りほどには恐ろしいものではなかった。彼女にとっては、あたかも温かい太陽の後に更にその上地平線下へ、明るい夕焼けも沈んで行ったような具合に思われ、世界は暗く冷たくなってしまった。彼女はこのまだ残されていた一日の全体を母親の許で過ごした。しかしただ返事のみをし、好意的に見つめ、何でも喜んで敏捷に行って、 — すべての流れ出る露の滴を速やかに小さな指で目の隅から、あたかも塵であるかのようにかき出したので、夜になれば十分に泣けると考えたからであるが、 — とても乾いた目をしていた。こうしたことすべては、心労の母親に新たな苦勞をかけないようにするためであった。しかし母親は、容易に母親達がそうするように、この臆して愛している静かさを頑固さの始まりと取り違えた。そしてリアーネが慰めという罪のない意図でカロリーネの絵をリラルから取り寄せようと欲したとき、この罪のない振る舞いも頑なさで見なされて、両親の頑なな振る舞いで罰せられ、答えられた。つまり[手紙の]送付の許可であった。ただ大臣夫人は彼女にフランス語での祈りの返還を求めた。あたかも彼女は、自分の今の心にこの祈りを添えることが値しないかのようにであった。人間はどのようにしたらいいか分からずに罰したり苦しめようとするときほどに、卑小になることはない。

教師の椅子上にあらうと侯爵の椅子上にあらうと、あるいは両親のようにその両方の椅子上にあらうと、支配する者は誰でも、その椅子の足下にいる者に対して、その者が従順さを一度やめてしまうと、先ほどの従順さをその罪の緩和と捉えず、拡大と捉えるので、

大臣夫人もその以前から従順であった子供にそのように対処した。母親は、エーテルのように、灰も、煙りも、石炭もなく燃える彼女の純粋な愛を、それだけ一層憎み、その愛を有害な炎、あるいは炎の有害と見なした。殊に自分自身の愛はこれまで、ほとんど上品な暖炉絵以上のものでは決してなかったからである。

リアーネは最後に、余りに重く痛めつけられて、壁紙の向こう側には快活な一日、素晴らしい天が花咲いていたので、イタリア式屋根に登った。彼女は、人々が満足して小さな行楽地から、地球が大きな行楽地であるからであるが、馬車で戻って来たり、騎乗して帰って来たりするのを見た。リラルの灌木の小道では散歩者達が浄福にゆっくりと家の方へ歩いていた。一 路地では音高く祭典の足場や侯爵の花嫁のためのパレードの馬車が作られていて、出来上がった車輪が試しに回されていた。一 至る所で未熟な音楽の練習がなされていて、花嫁の前へ生長して奏されることになっていた。しかしリアーネが自分を見つめ、こちらでは自分の人生が一人っきりで暗い衣装の中に立っているのを見、一 向こう側に恋人の空の家を目にし、一 こちらでもまた自分にとっては空になってしまった自分の家を見、一 この箇所でも、まだ[サボテンの]夜の女王の凋花よりも、もっと美しいもっと稀な凋花を思い出していると、一 何ということか、この冷たい孤独ときたら、彼女の心は今日初めて心を欠いて生きていたのであった。というのは彼女の兄、自分の短い喜びの歌のこの合唱者は派遣されており、ユリエンネはしばらく前から知らせのないまま姿を見せずにいたからであるが、一 いや、彼女は、明るく白く、その高い宵の明星と共に一層低く傾いて行く美しい太陽の日没を見ることができず、この輝かしい高所から去ったのであった。他人の喜びは、その姉妹の喜びを見いだせない人気ない暗い胸の中では死んでしまうのであり、その胸の中で幽霊となってしまう。かくて美しい緑、この春の色彩は、それが一つの雲を描くと、長い湿気の予兆でしかない。

彼女がやがて一日の解放の地、寝室に入ったとき、外の天では稲妻が走った。何故今なのか、苛酷な運命よ。一 しかしここ、夜の静物画の前では、人生が夜のヴェールで覆われて、より秘かに音色を出すとき、一 このとき、重苦しい一日が絞り取った彼女のすべての涙は流出してよろしいことになる。あたかも最も長い眠りに就くかのように枕の上で、この出血した頭は、その涙を叱るように数えている胸元でよりも、より穏やかに休むことになる。頭は恋しい人達に対してではなく、ただ恋しい人達を求めて泣いた。

いつものように彼女は母親の祈りを開こうとした。しかしその祈りは取り上げられてしまったことを彼女は驚いて思い出した。そこで彼女は熱く泣きながら、神を見上げ、一人で破れた心から神に一つの祈りを用意した。ただ天使のみがその言葉と涙を数えた。

第七十六周

父親は部屋への幽閉を、彼女の拒絶に対する罰の印としていた。強い痛みを伴って、彼女はこの沈黙の拒絶を語っていて、自発的に部屋に留まり、母親への朝の接吻を断念していた。彼女は夜、しばしば助言をくれるカロリーネの亡き像を燃える思いで見つめていた、しかし何の原像も、熱に浮かされた像も出現しなかった。そのことから彼女はこう結論を出していた、かつて私の愛に承諾を与えた神々しい霊は、私の被造物というよりももっと高貴なものであったことに、これ以上疑念を抱けないのではないか、そうでなければ、そ

の像に対してまた霊を造れるに違いないのだから、と。

彼女はアルバーノの花と咲く書簡を書見台に有して、それを開けて、自分の島からより温かい時の遠くへ去った東洋を覗き込もうとした。しかしまたそれを閉めた。彼女は秘かに楽しもうとすることを恥じた。彼女の母親が悲しんでいて、母親は彼女のように楽しい日々から陰気な日々に移ったわけですらなかったからである。

フルレは彼女を長いこと一人っきりにさせておかず、間もなく呼び寄せた。しかし彼女を尋問したり、無罪放免としたりするためではなく、一 この呼び寄せのためには勿論、生地そのままの額と頬が必要で、その繊維の網は羞恥のトルコ赤で染められることはほとんどないのであるが、一 つまり彼女を彼の絵画解説者として召喚するためで、彼女を侯爵の絵画陳列室へ同道させ、彼女からこれらの（彼にとっての）表紙銅版画の説明を、この私設啞学校で上手く模倣して学び、侯爵夫人が視察したらすぐに啞よりは何かましなことを絵画の美の許で、絵画愛好の侯爵夫人の許で、表現できるよう準備するためであった。リアーネは描かれた一つ一つについて、然るべき称賛と非難とを、大家の名前と共に、彼の真面目な脳の中へ刻印して行かなければならなかった。いかに喜んで、完全に彼女はこの美学教育を彼女のぶつぶつ言う絵画の徒弟に対して施したことか。この徒弟は授業料としてたった一回の感謝の表情も浮かべなかったのである。一

正午に娘は憧れの母親が食事の従者達の下、とても真面目で悲しげであるのを見た。彼女は母親の口に接吻する勇氣はなく、ただ手に接吻をして、愛の溢れる目をただおずおずと少しばかり向けた。午餐は葬儀の食事のように見えた。ただ老父親だけは、この者は戦場であっても、自分の結婚式のメヌエットを踊り、自分の誕生日祝いをしかねなかった者であり、機嫌が良く、食欲があり、機知を飛ばした。家庭不和があれば、通常彼は「家庭的に」食事をし、噛み付くような卓話で元気になった。卑俗な人々が冬や饑餓のときに、より強力な食欲を示すようなものである。諍いはすでにそれ自体強壯化し、熱くする。物理学者達が、何かを鞭打つこと、ただそのことだけで、電気を生じさせることができるようなものである¹。

一日中牢屋の番をしなければならない哀れなリアーネが、丁度今日に限って、いつもそこから呼び出されたのは滑稽なことであり、また痛々しいことであった。今回はまた馬車に乗って、そこから悲しい心と微笑を浮かべた顔を全く明るい諸宮殿の前で対照的に示すことになった。彼女は両親と一緒に侯爵令嬢の許に出かけて、悲しい道中で、彼女を羨望していた人々が現実幸せであったのと同様に幸せそうに見えなければならなかった。このように王座の近くで生まれた人の心はいつも単にカーテンの背後でのみ出血しており、カーテンが上がるとただ笑うのである。丁度まさにこうした高貴な人々は普通単に秘密裡に処刑されたようなものである。自分の結婚について滑稽な具合に声高な侯爵、一 賭博台か海賊船甲板から戻って来たブヴェロ、今やリアーネが最新の情報以来単に身震いをして我慢していたこのブヴェロ、一 それに侯爵令嬢本人、令嬢はこれまでの彼女との疎遠を祭典のための様々な準備のせいと弁解して、突然全く見慣れぬ具合に愛や男達に

*1 ベゼケがそれを見いだした。『根源の炎について』、1786年参照。[Melchior Gottlieb Besecke (1746-1802)]。

ついて嘲っていたが、 — こうしたすべての人々や偶然は、ただリアーネのような人にとってのみ、つまりかくも察することが少なく、かくも多く悩み、かくも喜んで耐える人にとってのみ、とても耐えられないものとは見えなかったのである。

こうした諸関係の鉄のような不変性、このような永遠の山の雪の堅牢さほど耐え難いものがあるか。痛みの大きさではなく、不確かさ、迷宮のミノタウロスや迷宮の冷たい地下、隅の岩、溝ではなく、その出口の長い夜や渦巻きが、その中で我々の胸を縮こまらせる。それ故肉体的病気の際でさえも、見慣れぬ新奇な病気が、それを最後目にしたとき、我々の予測を越える場合、繰り返される病気よりも脅威的に難しいものに思えるのである。繰り返される病気は、近隣の境界の敵として我々にいつも襲いかかり、我々は準備できるのである。

かくて楽しげなラベツテが昔からの喜びと新しい希望を胸一杯に抱いて家に入って来たとき、啞のリアーネは雲の中にいた。ラベツテは神聖な、引き掠られた人の妹であり、輝かしい日々の一緒の享受者であった。ラベツテは恭しく受け入れられ、いつも儀仗兵たる大臣夫人に付き添われていた。ラベツテは伯爵の使節であると共に、夫人の息子の選んだ嫁である可能性があったからである。策略家のラベツテはリアーネと二人っきりになる数刻をブルームンビュールへのリアーネの同道を大胆に願い出て得ようと試みた。同道は果たして許されたが、母親の同道も添えられた。リアーネはブルームンビュールへの道を、沈んだ日々のまだ花咲く墓地を越えて行った。何という涙の奔流が、まだ幸せなラベツテから別れたとき、彼女の胸の中に競り上がって来たことか。 —

ラベツテは知らずして家に夕食用の最大の諍いの林檎を一つ残していた。大臣がかつて林檎採取器で果物皿に取り寄せたものの中で最大のものの一つであった。それ故彼はまた「家庭的に」夕食を摂った。つまりラベツテはリラルでの日曜日の出会いについて間抜けに言及したのであった。「それについては」（とフルレは全く友好的に言った）「おまえは、我々に一言も漏らさなかったな、娘よ」。 — 「すぐにお母さまには」と彼女は早まって言った。「おまえの楽しみには私も加わりたいものだ」と彼は憤怒を延ばして、言った。全く上機嫌で、多くの涙と、その後で浮かび流れさせる伐採された花付きの小枝のこの筏師見習いは夕食の卓に着いていた。まず彼は従者と家族に補聴用耳について尋ねていた。その後で彼はフランス語に移って、 — もっとも皿替え給仕人はその大まかな翻訳、行間の注釈たるものを彼の表情に見いだしていたが、 — こう報告した。高貴な伯爵が見えて、母親と娘のことを尋ねていた、と。「おまえ達二人を要求するのはもっともなことだ」（と好んで温かい食事を冷やすこの倫理的氷河は続けた）、 — 「おまえ達はいつも黙っている、今日また耳にしたように、二人して私に対して黙っている。それでどうしておまえ達の言うことを信用しろと言うのか」。彼は自分が言うのではない嘘をすべて心から憎んでいた。それで自分のことを本気で倫理的で、非利己主義的で、穏やかであると思っていたが、それは単にこうしたことすべてを他人に仮借なく要求していたからである。中傷の豊かな刺草と共に、 — 植物の刺草も冷たく石ころの土壌で最も立派に育つのであるが、 — 彼はそのすべての開閉するウミザリガニの鋏を、我々が小川のザリガニを刺草の中で捕らえるように、備え付けて、そしてまず鋏の間に自分の優しい子供を挿んだ。その子供の穏やかな恭順の微笑を彼は軽蔑と悪意と解した。 — この穏やかな女性がどうして父の名前を称するようになったか説明するには、昔からの仮定を採用

する他にはないであろう。つまり子供達は妊娠している母親が空しく憧れた者に最も似てくるというもので、この場合は穏やかな夫であったという仮定である。――それから彼は、もっと激しく、母親を攻撃して、自分の不信で母親と娘の仲を裂こうとした。いや、ひょっとしたら娘に対し、母親の苦しみを通じて、子供らしい犠牲と決心に至るよう苦しめようとしたのかもしれない。全く勝手に彼は、――というのは利己主義者は大抵利己主義者にぶつかるからで、愛とリアーネは単に愛にぶつかり、自己愛にはぶつからないようなもので、――自分の周りと自分の傍らの利己主義に宣戦布告をし、いかに自分が兩人を利己主義の女達として（古代の異教徒がキリスト教徒を無神論者としていたように）心の中で叱りつけているか隠そうとしなかった。

大臣夫人は、大臣と魂の結婚生活を過ごすことほど少ないことはなくて慣れていて、――ヴォルテールが友情を定義しているようなもので[『哲学辞典』友情の項]、――単にリアーネにこう言った。「誰のせいで私はこんな目に遭うのですか」。――「私には分かりません」と彼女は従順に言った。そして彼は兩人を最も深い苦しみの中で放ち、その後で自分の仕事のことを考えた。

この全員の苦しみは、この苦しみをより軽減することになったはずのもので、更に大きなものになった。大臣は、自分が毎日怒りの中でも女達の趣味を、――自分の外観に関して、助言を活用しなければならないことに腹を立てていた。彼は結婚式のときに、――自分の愛人のために、――真の極楽鳥、見栄坊、美しい尻のヴィーナス[Kallipygos]でありたいと願っていた。以前から彼は政治家と宮廷人の二役を好んでいて、気位と虚栄心を一緒に購入し、一人の癒着したディオゲネス[無欲の犬儒主義者]兼アリスティッポス[快樂主義者]でありたいと欲していた。――しかしここに若干見られるのは虚栄心ではなく、整頓好きや厳格さという男性的悪霊が彼から離れようとしないのであった。彼は従者が宮廷服に埃を少し残したままにしたときの服用ブラシ[鞭]を、自ら従者の制服にかけることができた。もっと危険であったのは、――彼は二つの鏡の間に、整髪用鏡と暖炉用衝立の大きな鏡の間に座っているというのに、自らの羊毛[毛髪]に埃[髪粉]を正しくのせようとするときであった。彼は自分の子供達の着付けのときに、最も満足することがなかった。――さて今リアーネはスケッチ画家として彼に新しいコートの正しい色を提案しなければならなかった。――香袋や匂い袋を彼は詰めさせ、これでポケットを詰めさせた。

――そして窓に麝香草の鉢を置かせた、葉の匂いを嗅ぐために（これは自分の指に期待していた）利用したいからではなく、この葉を擦って指に塗りつけるために利用したいのであった。――拳のための特製ポマードや更にまたこの拳のための（これが恋文の筆を執ろうとするとき用に）イギリス製のプレスされた化粧紙や他の小物は、嗅ぎ煙草ほどの注意は払われなかった。この嗅ぎ煙草は彼が用意したが、これは鼻のためではなく、唇を赤くするための唇用であった。実際多くの陽気な輩の前では彼は全く滑稽に見えたかもしれない。この輩がこっそりと彼が自分のメモ帳から毛抜きを取りだして、この毛抜きで自分の眉毛から、人生という鞍が馬の鞍の如く毛を白く変えていたときに、白い毛を抜く様を見ていたら、そう見えたかもしれない。ただ大臣本人は、自分が鏡の前で微笑の上品な作法で、微笑し続けていたとき、真剣な様に見えたことであろう。――その最良の作法を彼は確定させた。――あるいは、ソファーに身を投げるときのより軽快な投げ方の練習をするとき、――何としばしば彼は身を投げなければならなかったことか。――そ

れにそもそも自分で試すときには真剣に見えたことであろう。

母親にとって幸いにも善良な講師がやって来た。この昔からの友の手から、彼女はしばしば、天国への梯子ではなくても、坑内用梯子を得て、それで深みから上がるようになった。希望を抱いて彼女は今や彼に自分の悩みをすべて打ち明けた。彼はリアーネと二人つきりでその部屋で話すという条件で若干の手助けを約束した。彼はリアーネの許へ行き、優しく彼女の状況についての自分の知識を説明した。

この子供らしい娘は、薫る彼女の愛のハナダイコン[夜堇]に射し込んで来た鋭い日中の光線に対していかに赤面したことか。しかし幼少の頃からの彼女の友は、穏やかにこの打ちのめされた心に語りかけた。 — そして彼女と彼女の友アルバーノに対する同等の愛について、 — 父親の気質について、 — 遵守すべき規則の必要性について語り、 — こう言った。最も良いのは、伯爵を厳しく避けるという両親の願望に、自分が伯爵の父親から、この父親に自分は息子の同伴者として夙に最新の状況について、報告し、問い合わせなければならぬことになっているので、これに対する承諾か拒否を得るまで、ただその間だけ従うと彼女が自分に対し神聖に誓うことである、と。それが拒否ならば、 — しかしこれを隠すことはないが、 — アルバーノがその謎を解かなければならぬだろうし、それが承諾ならば、自分自らが彼女の両親の二番目の承諾を求めて尽力しよう。同時に自分が問い合わせることに関しては、両親に断固黙っていることを彼女が約束してくれなければならない。問い合わせでひょっとしたら両親は面目を失うかもしれないのだから、と。こう言って彼は更に深く彼女の信頼を得て行った。

彼女は震えながら、どれほど長く返事はかかるのかと尋ねた。「結婚式の後せいぜい、六日か、八日、十一日だ」と彼は計算しながら答えた。「分かった、アウグスティ。私も皆苦しんでいるのです」と彼女は言って、親しく、胸の中では泣きながらこう付け加えた。「あの方はお元気でしょうか」。 — 「彼は勉強に励んでいます」と彼は答えた。

かくて彼は、二つの秘密を抱えて、差し当たりは暫定の別離を肯いながら、母親の許へ戻った。しかし母親は講師に親しげな視線という報酬を払っただけであった。しかし彼は、 — 彼のカルトゥジオ修道院の作法[沈黙行]に従って、自分の介入に関して大臣に対するごく好意的な沈黙しか求めなかった。大臣はこの件での彼の貢献を実際よりも過大に見なしかねないからであった。

大臣には一週間の改善と断念とが告げられた。彼は、 — 夫人に対する不信を留保しながらも、 — 更に敵地へ自分の武器で侵入しようと思った。それに新しい期日とリアーネの牢からの解放は、自分の娘を結婚式の祭典に花と咲く元気な姿で輝く雌孔雀として自分の恋人[侯爵夫人]の許へ自分の許から披露する点で好ましく思われた。

ロケロールは今やこの恋人[侯爵夫人]の所から戻って来た。そして家庭内の二、三の雲を美しく、明るい朝焼けで一杯に輝かせた。彼は父親に侯爵夫人からの報告と挨拶をもたらした。リアーネにはかの愛しい声の木霊をもたらした。この声はかつて彼女の天に対してこう言ったのであった、天となれ、と。不一致の時の不協和音の中での最後のメロディーであった。彼は容易に、 — 万事いかなるものか察した。 — というのは自分を等閑にしている母親からはほとんど聞いておらず、娘からは何も聞いていなかったからである。彼が娘リアーネ宛のアルバーノの手紙を黄昏に彼女の仕事袋に押し込もうとして、そして彼女が愛の嘆息と共に「だめです、私の約束に反します。 — もう少し先になれば、カ

ール」と言ったとき、彼は「荒々しい怒りと共に自分の妹が空いたカロンの小舟ですべての苦しみタルタルスに出発する」のを、彼の陳述によれば見たのであった。好意的で追従する大臣は、一 彼はその証拠に大尉に価値ある鞍を贈って、一 ラベットの訪問を伝え、婚約やそのような件に関してほめかした。カールは大胆に言った。自分は自分の愛する妹が幸せを予見できない間は、自分の幸せをすべて先送りにする、と。老いた父親をもっとまたリアーネに肩入れするようにさせるために、彼は結婚式の祭典用にロマンチックな余興を思い付いていた。すでに彼女の間近に立っていたのに、フルレには予感できないものであった。つまりイドイーネ（花嫁の妹）はリアーネに驚くほど似ていたのである。侯爵夫人[花嫁]は彼女を言いようもなく愛していた。しかしたまにしか会っていなかった。イドイーネはその強力な、かつて王侯との結婚を拒否した性格のせいで、丁重に宮廷から追放されて、自分自らが造営し、支配する村に住んでいたからである。ロケロルはそこで父親に詩的な質問を呈示したのであった。リアーネは「照明の夜」、数分間、全くこの美しい錯覚にふさわしい「夢の神殿」の中で侯爵夫人とその愛する妹の反照となって喜ばせることができるのではないかと。

大臣は侯爵夫人に対する愛でより大胆になったのか、あるいはリアーネを女官として輝かしく紹介するという願望でより斟酌したのか、要するに彼はこの考えに理解を示した。彼が息子との間で交わした単独講和に対し何かがこの和平のパイプに煙草を差し出したとすれば、それはこの配役表であった。彼は早速侯爵と侯爵夫人の許に行き、その許しと夫人の参加を願い出た。一 その両方を得た後、彼はそのオレステスたるブヴェロの許へ行った、言った。「トテモ変ワッタ考エヲ思イツイタ。行き過ぎカモシレナイ。シカシ侯爵ハ承認サレタ等々」。一 そして最後にリアーネの許に行った。リアーネのことも忘れないようにするためであった。

大尉はすでに以前から彼女を説得しようとしていた。母親は自尊心からこうした物真似には反対であった。このような代理はリアーネには余りに大きな不遜に思えた。しかし結局彼女は折れた。ただ侯爵夫人の姉妹としての愛は、あたかも自分は類似の愛を自分の心の中に育てていないかのように、とても偉大で、到達し難いものに思えたからである。このように彼女はいつも自分ではなく、鏡像の方を美しいと思った。丁度天文学者がその赤い輝きと夜の影を伴う同じ夕方を、天文学者が月でその夕方に遭遇したときの方が、地上でそれに出会うときよりも、より魔術的で、より崇高であると思うようなものである。ひょっとしたら更に全く薄暗い甘美さがあつたのかもしれない、つまり侯爵の花嫁に対するリアーネの愛には、義理の娘的な甘美さがあつたのかもしれない、この花嫁はかつて騎士ガスパールの花嫁となるはずであったからである。女達は縁戚を我々男性よりも尊重する、それ故彼女らが先祖を誇るとき、我々の誇りよりもいつも数世代古く遡るのである。

かくて彼女はその圧迫された心を輝かしい祭典の軽快な戯れのために準備した。この祭典はこれから先の周が、さながら新しいヨベル期の新年祝賀として紹介することになる。

第十七ヨベル期

侯爵の結婚の脅威 一 リラールの照明

第七十七周

何という国中の喜びが今や、ある国境の紋章から次の紋章へと次々と一週間歓呼されたことか。というのはその間、国の喪は休止されて、一 鐘々は墓場より何かより良いもののために鳴らされ、一 再び音楽がすべての時計仕掛け、遊興人に許され、一 すべての劇場が、一つでもあるとしたら、開かれたからである。あるいはいつも遊んでいる宮廷は閉ざされ、一 上々の人々は一週間、黒い縁取りなしに、行き、命令することができた。活気付ける幕間の後、つまりオーケストラやポンス酒、菓子を楽しんだ後、またより上機嫌になって涕泣や悲しみの劇に赴くようになされたのである。

侯爵は退屈な王妃歓迎の馬車旅の朝、ブヴェロとアルバーノと共に国境を越えて行った。この三人は皆、国中で唯一自立した、祭典に興味のない人々であった。哀れなルイーダよ。私はすでに『巨人』の第一巻で、明瞭にこう言っていた。今日新床の儀に入る新郎の侯爵は単に領主[国父]となれるだけで、一家の父親となれるのではない、と。彼の侯爵の天蓋の下では、最初の[最後の]チェス盤の列でもできるように、すべてを再生させ得るもので、将校[歩以外の駒]であれ、チェスの女王であれ再生できるのであるが、王そのものは再生され得ないのである。一 この状況が祭典を滑稽なものに見せかねないので、一 幾多の彼を笑いものにしていく古からの諸家系に対し、一 これはしばしば自ら紋章学的意味と医学的意味の二つになるのであるが、一 恥じ入らせるためにただ数ダースの皇子達を結婚式の祭壇に集めて紹介できたら、望ましいことであろう、カラブリア[ナポリ]、ウェールズ[イギリス]、アストゥリアス[スペイン]、ドフィネ[フランス]で一 全ヨーロッパが彼にとっては一つの家系で、一 残しておいた皇子達、要するに多くの借方相続人の国々において、即ち女相続人達において残しておいた皇子達のことで、余所の男系相続人の遺産ではなく、この皇子達を紹介できれば、彼はより一層満足して今日の賀詞を覗き込むことができるであろう。すでに数ダースのこの賀詞実現者が傍らに立って聞き入るのであるから。しかしエクセター侯爵夫人は三千ポンド払って、ロンドンのエクセター侯爵のベッドを王座に変えることができるように、侯爵の花嫁もベッドを王座にしなければならない。しかしロンドンでのように後からベッドが王座に変わることはないのである。

それ故私は今日の喜びの舞踏場では彼を新郎としてではなく、常に、一 王冠を被った頭を除いて王冠と言うように、一 ただ新郎服として取り立てて、紹介することしよう、彼を滑稽なものにしないためである。一 アルバーノは胸に一杯怒りと、軽蔑、遺憾の念を抱いて、黒い国家運営の犠牲の獣の傍らを行き、ルイーダがドイツ騎士団騎士、彼の家系小木のこの借用された斧、この根上げ機を踵蹴りで何故遠くへ蹴飛ばさないのかただ理解できなかつた。善良な若者よ。侯爵たる者は自分の愛する人間から離れる方が、自分がまことに長く憎んでいる者から離れるよりも易しいのだ。その恐怖の方がその愛よりも強いからだ。一

この寛大な、決して狭小ではなく、気宇壮大な若者は、今日厳かな、痛々しい気分の中で、すべての悲劇的なもの、高貴なもの、高貴でないものを実際よりも大きなものに思っていた。彼は確かにただ燃えるような目と快活な顔をしていた。余りに若く、羞恥心があって、個人的な痛みを派手に見せられなかつたからである。高い気象境界に向けられた目の下では、今日境界ではその暗い雲が散って行くか、あるいは自分の許に下って来るか

あったが、滴が光っていた。自分が地獄同様に、また天国同様に、覗き込んでいた今日の夕方が、今やその両者の混乱した中間物として、かくも間近に、そして苛酷に自分の側に立っていた。 — 近い感情の群れが彼に随伴して、彼の — 父とこの侯爵の（彼の意見によれば不幸な）花嫁の許に向かって行った。

ホーエンフリースの向こう側の四分の一マイルすでに彼女の — ギボン[手長猿]が先に進んでいた、その長い腕ですべての自然科学者には馴染みのあるもので、 — 政治家には馴染みのないものであるが、 — この腕は周知のようにこのモルッカ諸島の所有者、猿が有するものである。「私のギボンはどこ」と侯爵夫人はいつも尋ねた（仮に、イギリスの同名の者[Edward Gibbon(1737-94)]、キリスト教徒に対する長い爪と短い文の歴史学者を手にしていたとしても、そうであった）、というのは自分の手長猿を欲したからである。

ようやく彼女が疾駆して来た、 — 羽根飾りを付け、 — 乗馬服で、 — 極上のイギリス産馬に乗って、 — 偉大な威儀のある姿で、この人は近親者の一杯いる宮廷のお供には構わず、むしろ立ち上がる馬の首、白鳥の首の背後に見える青い朝の太陽の方を眺めたいと思っていた。彼女は新郎服に礼儀正しい挨拶と接吻をしたが、感動もしていず、偽装もしていず、当惑もしていずに、まことに自由で率直、快活で、はるかに自分の系統的不釣り合いの滑稽さを越え出ている。いやどんなやむを得ない、あるいは命じられた不釣り合いも越え出ている。彼女の普通に美しく造型された、 — 美しく描かれているという以上に造型された、 — 顔の中ではただ鼻だけがそうではなく、角張って彫られており、統治の日常生活のために軟骨よりも多く骨を対置させていた。女性にあっては、秀でた不規則な鼻は、例えば深い根の切り込みや凸面あるいは凹面の曲線やボタン部分の多面体等々は男性の場合よりもはるかに多く才能を示している。そしていつもその美[貌]を若干天才の部分のために犠牲にせざるを得ず、 — 私自身が会った数人の美女は除くが、 — もっともその後他の天分をその美のために犠牲にするほどではない、丁度我々男性が皆残念ながらそうしてきたような具合ではない。

伯爵は侯爵によって彼女に紹介された。しかし彼女は彼のことが、 — 彼女は彼のことを聞いていて、彼の父とは長いこと会っていたのであったが、 — 分かっている、むしろ新郎服と似ていると思った。この服にとって、この花と咲く類似性は追従に他ならなかったものであり、 — そうなるはずであった。類似性は彼女が今兩人に対して抱いているに違いない素敵な関心を如実に示していた。一つの類似性に至るためにはいつも対の人間が必要だからである。

彼女は、彼女と彼女の宮廷によって一つの花の籠[肘鉄]を貰った金羊毛皮の騎士について何の当惑もせず、その息子と話し、その父親の芸術についての知識を褒めた。「芸術は」（と彼女は言った）「結局すべての国々を平等に快適にします。芸術がそこにありさえすれば、それ以上何も考えません。ドレスデンの屋内画廊で私は本当に、楽しいイタリアにいるようだと思います。いや、イタリアに行ったら、そこにあるすべてのせいでイタリアさえも忘れてしまうことでしょう」。 — アルバーノは答えた。「私もいつか芸術の葡萄汁の中で酔って、火照ることと思います。しかし今のところは私にとってはただ美しい花と咲く葡萄畑です。その持つ力を、まだ実感していませんが、確かに予感しています」。侯爵夫人ははなはだ彼の注目を得ることになって、彼は彼女に、侯爵が数歩先の窓際にペスティッツのお供の押し寄せる波を見たとき、彼女の身分のドイツ式儀式の際、

それは彼女の芸術感覚にとってどのように思われるか尋ねた。「まあ」（と彼女は容易に言った）「私どもの身分ほど多くの儀式を有しない下の階級がありましようか。至る所、司祭や弁護士だらけではありませんか。また帝国都市民の結婚式を御覧なさい。ドイツ人はこの点では他のどの民よりも良いわけでも悪いわけでもありません。古い民であれ、新しい民であれ、野蛮な民であれ、洗練された民であれ。ルイ十四世を思い出してください。人間はとにかくこんなものです。でも勿論だからといって人間を尊敬しているわけではありません」。

侯爵は今や入国の時を思い出させた。侯爵夫人は入国の着付けのために、アルバーノが彼女の言葉から、あるいは我々が彼女の鼻の軟骨から、 — これらは精神的翼の骨に見えたのであるが、 — 予期していたよりも多くの化粧のための小間使いや小箱を呼び集めた。急いで人々はその身分と価値の尊崇というよりはもっと臆した気持ちから彼女に従って、何人かの、時折化粧部屋から出て行く人は、消沈した表情を浮かべていた。

ようやく彼女がまた現れた。しかしはるかにもっと美しかった。男勝りの女性には、我々が思うよりももっと女らしさに見えるのに違いない。この女性は女性的化粧で得るところがあるからで、とても女らしい男性の場合、化粧ではただ損をすることになる。「身分は」（と彼女はアルバーノに言った、意見をはなはだ率直に公開しながらで、この意見の率直さは容易に情感の面では同様にはなはだ秘匿するものである）、「大いなる魂にあってはしばしば性別よりも、その魂を抑圧したり制限したりすることは少ないものです」。彼女が自らを大いなる魂と呼んだことは、伯爵を驚かせたに違いない。彼は今、秀でた女性が自らをまさに褒める、秀でた男性がそうするよりもはるかに多く自賛する最初の例を眼前にしたからである。 — 他の男なら[ジャン・パウル]、無数の例を知っているだろうが。

人々は出発した。境界の橋の所で、これは両侯国の分離と結合記号の印刷屋のハイフンのようなものであるが、ホーエンフリースの半ばの人々が馬車と馬に乗って止まっていた。村の喜劇役者達を乗せていて、傾いた不具の馬車がまた四番目の車輪の上に持ち上げられていて、彼らが両手にしている神話的道具が積み込まれないうちは先に進めなかったからである。しかし侯爵夫人が強引に橋の上を行くと、突然乗客や荷造り人がミューズやミューズの神々、愛の神々、可愛い結婚の神[Hymen]に変わって、劇場的祭服や装置の中で、取り巻かれた花嫁を詩的川の中に沈めた。乙女を奪う結婚の神に対する他の神々の戦を演じながらであった。この件を詩化したミューズの息子は自らミューズの父として共演していた。大臣によるこの自らの発明はハールハールによってもホーエンフリースによっても好意的に受け入れられたと私は申し上げても許されよう。

フルレは着飾って髪粉を付けて、あたかも喪の燭台の間のパレード用棺台に寝ている具合に、彼女の前に国の代弁者として入って来て、新郎服と共に彼女の結婚に対する喜ばしい関与を証したいと述べた。侯爵夫人は上品な女性用鉄ですべての祭典の嘘を短く刈り取った。

フルレは他の馬車の中でも、幾つかのあちこちから指示されたトランペット奏者やティンパニー奏者を乗せた馬車も連れて来ていた。それに半ば冗談でショッペも乗っていたが、彼は、彼が言うには、人々が何かを大勢でやっているときほど、人間が滑稽に見えることはないという理由で、よく人々の大きな行列から去ることなく乗り込むのであった。祭り

に機知[塩]を添えるために、彼は馬車の中で次のような仮定を述べた。つまり人々がこうしたことすべてを行うのは、単に花嫁が自分の出身地に戻る事が最も良いことになるようにするためで、そうすると花嫁は紛らわしい舞台上の結婚生活の手間が省かれるし、国からは新しい宮廷国家が省かれることになるからである。彼女の耳には、一と彼は推察した、周辺の丘へ撃ち込まれた大砲が彼のトランペット奏者の雷車と共に一緒になって、三人の郵便局長が十五人の御者と一緒に関に合せて吹き込んだとき、彼らは無駄にその立派なホルンと肺葉と共に乗り込んでいたわけではなくて、一彼女の耳にはとてもからかわれて響き、それで彼女はこのような歓迎で撤退させられることになるはずで、それ故その上、空の国の馬車もがたがた走るよう一緒に送られているのである、丁度アンズバッハでは農民が鹿をただ恐ろしい叫び声で、銃も犬も使わずに国から追い出したようなものである^{*1}、と。船が霧の中ではランタンや太鼓を使うように、国家も照明や射撃で離れていたいのである、と。

「しかし彼女は、私が見るに、先に進んで行く」、一と彼は途中で言った。彼は時折、自らティンパニーの対の撥を両手に有益に取りだしていた、一「それでは我々皆が従わなければならないであろう。ひょっとしたらもう耳はいかれているかもしれない。ただ妃の目だけがまだ残っているのであろう」。この希望の点ではすべての役人達のみだらの制服や宮廷の従者のお仕着せの羽根案山子は彼を大いに喜ばせるものであった。一

「今や更に」と彼は嬉しげに予言した、「花瓶や口笛の金ぴかの凱旋門があつて、妃はまさにそこを通り抜けなければならない。桜の木から雀を追い出すには金色のブリキや塩水用甕を使わないだろうか」。一

「おやおや」（と妃が通り抜けたとき彼は考えた）「かのゴート族の暴君[アッティラ]が教皇[レオー一世]の請願行列に出迎えられて、神聖なローマへの略奪の侵攻を退却に変更させたのであれば、きっと次のことも成功するぞ。妃を郊外では孤児達が孤児院の院長と共に乞うように出迎えるのだ、一それから学校長が小姓達と共に、一それからギムナジウムと大学が、一これはまだ前哨の小競り合いにすぎない。一一門は歩兵で占拠され、市場は全体防御の市民で、一中央教会は聖職者で、市役所は参事会で見張られている。一皆が、妃が向きを変えないと、少し離れて夜警隊として監視合唱隊として妃の後を付いて行く用意があるぞ。一そして宮殿の門には七組の新郎新婦が、七つの請願、悔悛詩篇として待機していて、妃に、繻子の不倫娘罰石の上に置かれた破門の頌詩^{*2}を、小生自身の作の、六月十九日付けの勅令[マグナ・カルタ、1215年]を運んで行かないだろうか、その効果は全く分からぬままに」。一

*1 ヘスの『通過飛行』の第4部、156頁では、人類のこの真の雄叫びはすさまじく響いている。今ではこれをより良い善政の政府が[食用とならない]獣肉税で静めている。[J.L.v.Heß: Durchflüge durch Deutschland, die Niederlande und Frankreich. 7Bde., 1793ff.]

*2 彼にとっては、このような結婚の詩を、全く世のありきたりの新年祝賀作者の韻や昂揚や、感嘆符、呼びかけと共に贈ることは衷心からの楽しみごとであった。諷刺的であるが純粋な意図という意識が全く、個々の誇大過ぎる、あるいは余りに奴隸的卑しい言い回しというどんな非難に対しても彼の心を宥めていた。

「結構」と彼は、行列全体が、宮殿の窓際にいる貴頭のために、もっと良く見えるようにと再度宮殿の中庭を歩いて行ったとき、言った。 — 「倍の服用ということになる」。それどころか上の方で、 — 盛装であったので、 — 人々が長く互いに姿を隠して、黙っていて、ようやく侯爵が勝利者として、しかし疲れて、宮廷の騎士によって下の礼拝堂に案内されて、公然と敵の退却に感謝を述べたとき、ショッペの希望はいささかも減少することはなかった。いやすぐその後、花嫁も追って来て、しかし侍従達に腕を押さえられ、それどころか長裾のところは女官達によって後ろに引かれていたとき、図書館司書は容易に何の心配もしていなかった。

アルバーノの動揺した、湧き立つ魂は、混乱した宮廷世界を実際よりももっと野蛮に不細工に写し出していた。彼は侯爵の従兄弟達が、将来の王座や王椅子の継承者でさえ、従兄弟のルイーダに、健康、結婚、将来への賀詞を述べるのを聞いていた。彼らは友のブヴェロを通じて、生きた継承の毒を通じて、 — ルイーダからこれら三つのことを奪い取らせていて、まさに彼に対して彼らの冷血な縁者の妃を自分達の間近な王位継承の王座の見張りとして送り込むことができたのであった。アルバーノはすべての宮廷のペスティッツ人達の同じ婚約の歌を聞いていた。彼らは筋肉のように、縮もうとする特別な努力を表明していた。彼は、侯爵が、 — やがて脂肪過多症や水腫症で溺死するという予感を抱きながら、 — すべての嘘を容易に、冷たく、不幸を喜ぶ気持ちで聞き流しているのを見た。 — 侯爵達は、自分達が永遠に騙されるので、自ら嘘を付かなければならないのではないかと、いつも追従されるので、自ら追従するのを学ばなければならぬのではないかと、と彼は考えた。 — 彼自身は、一般的な嘘の国庫の中に、嘘の賀詞という最小の銅貨ですら投ずる気分にはなれなかった。

侯爵夫人は伯爵に、 — 機会があるたびに、ほとんどよく機会があつたが、二回の視線、あるいは二言を投げかけた。というのはこの花と咲く若者は、より容易に返答よりも木霊を聞かされる王座の岸辺の住民達の中でただ一人その力強い父親のことを思い出させたからである。大尉は何度か、 — 彼はすべての陶醉家達に似て、油虫やコオロギの如く温かさを愛して、光を嫌うので、そして単なる分別のすべての人間が彼には鬱陶しかったので、 — アルバーノにこう非難した。侯爵夫人は自分にはその冷たく機知的な分別が気に入らない、と。しかし伯爵は、 — 父親の恋人への敬意から、それに彼女の犠牲の司祭や屠殺者達に対する憎悪から、 — その最大の愛が沈んだが故にひよっとしたら今は憎まなければならないそういう人物がただ気の毒に思われただけであった。何と多くの女達が、以前は賛嘆されるよりは賛嘆することをより高次なことと思っていたのに、ただ対の両腕を見いだしたが、[愛の]心は見いださなかったが故に、力強く、知識豊かに、ほとんど偉大になったけれども、しかし不幸に、コケットに冷淡になったことか。それにその熱く犠牲的な魂は何の似姿にも出会わなかったが故に、女性の場合この似姿というのはまさに似ていないもので、つまりより高次の像なのであるが、それ故に何と先の次第になったことか。凍った花々の木は、そうすると秋に高く、広く、緑色に、新鮮に、鬱蒼とした葉と共に立っていることになる、しかし果実のない空虚な小枝と一緒にである。

ようやく人々は蒸し暑い食堂から野外のさわやかなリールの夕べの中へ出て来た。半ば怒りながら、半ば愛に酔って、アルバーノは運命の時に向かって行った。その時に多くの謎と自分の最も大事な謎が解かれるはずであった。ようやく糸を手迷路の洞窟から出

て来たとき、人間は眼前に何を見るだろうか。別な迷路への開いた入口だけで、ただそこで選ぶことだけが人間の願望である。

第七十八周

天がすべての星々の底まで透明となった最も素晴らしい夕方、侯爵は疲れた一団をリラルへ送って、自分の二つの不可視化、つまり照明とリアーネの配役とでより良く欺くことにした。実直なアルバーノにとって易しい心臓が何とより不安げに、より穏やかに鼓動したのか。彼が森の橋から待機している群衆の中へ馬車で下って行きながらこう考えていたときのことである。彼女もこの道を通ってリラルへ行ったのだ、いつも好きであったリラルへ、と。彼の理念の世界全体が夕方の雨となっていた、その一方の半分は夕陽の前で輝きながら震えており、もう片方の半分は灰色に消えていた。いや、リアーネの前では、彼女が今日ただひっそりと「夢の神殿」へ向かって、実在の愛された者ではないけれども、愛された者を演ずることになったとき、陽光もなく雨が降っていたのであった。

まだ明かりは点されていなかった。アルバーノは緑の深みの一つ一つの中に光の彼の天使を探して見つめた。侯爵本人さえも、侯爵はまだ突然の聖ピエトロ大寺院のドームの点灯[この照明は当時有名]を自分の合図で行うことを控えていたが、二重に驚かせるという宮廷では稀な楽しみごとを期待して見守っていた。侯爵夫人は大臣に嘘を付くとか返事するという手間を省かせていた。というのは夫人は全く将来の女官のリアーネのことを尋ねなかったからである。夫人はこの強い女性階級全体に似て、自分達女性に無関心であったが、それだけに一層選ばれた女性には愛着があった。アルバーノは慌ただしい暗がりの群衆の中に彼の養父母とラベッテを見いだした。しかし大地と魂のこの酩酊の中で、彼はただ、他の者達同様に、目を自ら閉ざされたカーテンに向けることができただけであった。そのカーテンの背後に彼は他の誰にもまして多くを見だし、多くを失うことになっていた。しかし青春の時には、黒いカーテンではなく、単に多彩なカーテンが掛かっているのであり、どのような苦しい目に遭おうとも、まだ希望はあるのである。

人々は光輝と音楽を待っていた。侯爵はようやくその花嫁を「夢の宮殿」へ連れて行った。カールは、今日はラベッテに対して夢中ではなく、目もくれず、燃え上がる伯爵と同道した。神殿の外部には、その魔術的な名前を推察させるにふさわしいものは何もなかった。ただ窓だけはこのパビリオンの屋根から床まで降りていて、枠や窓石の代わりに小枝や葉で縁取られていた。しかし侯爵夫人がガラスのドアを通して入ったとき、夫人にはこのパビリオンが消えたように見えた。そこは人気のない数本の木の幹で支えられた一つの野外、庭園のすべての眺望が交錯する野外に立っているように見えた。戯れの夢の中でのように不思議な具合にリラルの一带が入り乱れて、向かい合った一带が結合されていた。

一 雷の庵の山の隣に祭壇の山があつて、魔法の森のすぐ側に高く黒いタルタルスの木が並んでいた。一 遠くのものに近いものとが互いに絡まっていて、一 庭園の色彩の新鮮な虹と色褪せた二番手の虹とが次々と連なっていて、目覚めたとき夢の像の影がまだくっきりと閃光を発する現在の前を逃げ去るような具合であった。侯爵夫人がまだ夢想

的眩惑の仕掛けに見入っていたとき^{*1}、空中からのようにリアーネがガラスの側面のドアを通過して、イドイーネの好みの服でよろめきながら、入って来た。銀色の花を付けた白い服に、ヴェールを付けた飾りのない髪で、ヴェールは単に左側に止められ長く垂れていて、そして侯爵夫人が錯覚してイドイーネと叫んだとき、震えながら、ほとんど聞き取れない声で、「私ハ夢デシカアリマセン」とささやいた。 — 彼女はもっと言い、花を渡すことになっていた。しかし感動した侯爵夫人が「愛しい妹」と叫び続け、彼女を激しく両腕で抱擁したとき、彼女はすべてを忘れ、ただ相手の心の許で自分の心を泣き尽くした。相手の妹を求めての空しい憧れが切なかったからである。アルバーノは高揚させるこの情景の間近に立っていた。すべての傷口の包帯が彼の心から千切れ、その血がすべての傷口から温かく流れ出た。彼女とか何らかの形姿が、かくもエーテル的に美しく、天的に花咲いて、かくも謙虚であったことはなかった。

彼女が抱擁から目を上げたとき、目はアルバーノの青白い顔に据えられた。その顔は病気のせいではなく、感動のせいで青ざめていた。彼女はおののきながら戻り、再び侯爵夫人を抱擁した。青ざめた人間が彼女の感動した心を溢れる涙へと引き裂いた。しかし二人は互いに挨拶をしなかった。このように彼らの夕べは始まった。

錯覚と抱擁の間、侯爵の合図で庭園のすべての小枝や門が一つの輝かしい火災へと点火された。 — 魔法の森のすべての噴水仕掛けが黄金の翼と共にびっくりして高く舞い上がり、 — 逆向きの雨となって白や緑や金色や黒い世界が戯れ、噴水の輝きや炎の輝きが白雉や金鶏の如く、勢いよく乱れて飛んだ。 — そして燃え上がる楽園の輝きが「夢の神殿」を包んで、反映はその内部の緑の葉飾りの中へ金箔をかけながら収まっていった。

リアーネは尊重してくれる侯爵夫人の手に引かれて、沈んだ恥ずかしげな目をして明るい、活気ある太陽の町中へ、音楽と陽気な観客の雑踏の中へ出て来た。アルバーノには奔流のように流れ込む現在が迫って来た。対峙させられた人々を前にしての、対峙させられて混乱した配役、 — 夕べの歓喜の輝き、 — 彼の胸の中の夜の混乱、これらがこの夕べを通じての彼の堅固な足取りを困難なものにした。

侯爵夫人はやがて彼を更に彼女の渦の中に引き込んで行った。夫人はリアーネを自分から離さなかった。大臣は昔からの[女性に対する]丁重さでエロチックな奴隷を演じ、強張っていた。しかし彼は、侯爵夫人が侯爵の死後、信頼を決めることになるので、誰の目にもただ大臣達の慣習を踏襲しているように見えた。大臣達の精神は父親の侯爵と、侯爵の息子から、 — ソシテ息子カラ[filioque、聖霊をギリシア教会は父からのみとするのに対し、カトリック、新教は父と息子からとする] — 同時に発せられていて、二つの侯爵の椅子の間ではなく、その二つの椅子の上に腰掛けるものである。しかし彼女はリアーネを用いての彼の機械仕掛けで彼を一層誇り高く受け入れたように見えた。十分に大臣は娘の幸運で幸せであった。同様に彼の義理の息子たるブヴェロも娘の近くにいて十分に幸せであった。この悪漢のカップルは花々の中に深く没頭して味わっていた。アルバーノは、冷たい竜で

*1 二つの窓の間にはいつも一つの窓間鏡があって、窓からの眺望の許に鏡で反射された遠くの眺望を混ぜ入れていた。それぞれの鏡にただ一つの窓が対峙していた。その両方の間の間隙は葉飾りが隠し、覆っていた。

さえも、魂のオランウータンでさえも、この天使の魅力を薄暗く感じ取っているとしか察しなかった。

大臣夫人と講師は、容易に代わる代わるリアーネを、一 アルバーノのすべての言葉から守るよう監視の分担をしていた。侯爵夫人は輝く遊歩道を通って、濡れた閃光の中にある魔法の森を抜けて、結局雷の庵まで案内させ、燃え上がる庭園をすべての観点から自分の画家的視線の中に収めさせた。リアーネとアルバーノは彼女の伴をして、彼らの枯れて禿げたアルカディアのすべての通路を行き、彼らの砕けた心を黙ってしっかりとまとめていた。彼女は、両親に対する自分の約束を忠実に守って、彼に対して他の人同様に、より温かい視線や言葉の響きを与えることがなかったが、しかしより冷たい視線や響きを与えることもなかった。彼女の魂は苦しめることを欲せず、ただ苦しみ、従うことを欲したからである。彼は、一 そう思っていたが、一 すべての視線や言葉を穏やかなものにした。それにこの高貴な人間が冷たさの素振りや、それどころか王侯の王冠や心を求める夫人との不誠実で親しげな素振りやで仕返しをすることもなかった。

侯爵夫人は、彼にとって話が難しいものになり始めた。話はロマンチックなものから長編小説に移り、それから何故長編小説では結婚生活が描かれないのかという問題になった。「長編小説は」（と彼女は答えた）「アモールなしでは有り得ないからでは」。一 「結婚生活はどうなのですか」と不作法にアルバーノは尋ねた。「一人の友なしでは有り得ません」（と彼女は言った）「しかしアモールは一人の神であって、神ニシカ解ケナイ難題ガナケレバ、神ハ必要ナイノデス^{*1}」、一一 と付け加えた。彼女は詩人達のために^{*2} ラテン語を学んでいたのであった。

ブヴェロはその詩句をすべて述べて見せて、その意味を両義的なものにした。

「ソシテ四人目ノ男ハ、コノ件ニロヲ挿ム必要ハナイ^{*3}」。

誰もこの言葉を講師と侯爵夫人を除いて理解できなかった。「なぜあの家では」（と侯爵夫人は尋ねた）「明かりがないのです。誰が住んでいるのです」。彼女はシュペーナーの家のことを言っていた。リアーネはただこの言葉に返事をして、温かいイメージを次の言葉で結んだ。「あの方は永遠のために生きています」。一 「その方は何を書いているのですか」と侯爵夫人は誤解して尋ねた。リアーネはキリスト教的説明をしなければならず、信仰心のない夫人はこの説明に微笑した。それどころか永遠の眠りに対する賛否の論争が生じた。この論争は優に、彼らが雷の庵の周りを回るのに必要な時間を要した。侯爵夫人は始めた。「私どもは永遠の眠りに対し、もし日々の眠りがなければ、日々の眠りに対するのと同様に反対を称えることでしょう」。一 「しかしそれ以上にそれからの目覚めに反対を称えることになりましょう」とアルバーノは介入し、宗教的不穏さを省略した。

侯爵夫人は、亡き彼女の義父に対する長い服喪で彼女の目にとまったシュペーナーにま

*1（訳注）Horaz: de arte poetica. V. 319f. 次のブヴェロの言も同様。

*2（訳注）ベールントによれば、下書きでは「猥褻さのために」とあるそうである。

*3 つまり夫婦と友とが居合わせるとき。

た話を戻して問い合わせた。リアーネは、母親の賛同を確信して、弁舌と感動の一つの奔流に身を投じた、 — 自分の目に流れは禁止されていた、 — この奔流は彼女の師の崇高なイメージを描くためのものであった。このかくも優しく華奢な魂の崇高さはいかに彼女の友アルバーノを感動させたことか。このように青ざめた小さな月や宵の明星の中に、それらより大きな地球上よりも、より高い山脈が聳え立っているものである。 — 「彼女はかつては自分のためにも感動していた、しかし今はもはやそうではない」とアルバーノは自分に言って、すべての人々の背後に下がって行った。彼の魂はすでに長いこと痛みで一杯になっていて、今や侯爵夫人は彼の気に入らなくなっていたからである。

彼は一人っきりで立っていて、ざわめき、照り輝く歓喜の戦勝踊りを見守っていた。子供達は輝きを受けて、喧噪の中、明るい緑色の葉の中を走っていた。音色が、一つの花輪へと絡み合って、高くそのエーテルの中、声高な人々の上にとっかりと漂っていて、人々にその天上の歌を歌いかけていた。彼は自らにごちた、ただ私の中でだけ音色と明かりがあちこちと回転していて、他の人の中では何も回っていない、彼女の中では全く回っていない。彼女は皆のためにあの昔からの喜ばしい愛の心を持参しているのであって、私のためではない。彼女はこれまで苦しんではいなくて、癒えて花咲いている、と。しかし彼は実際彼の戦いも一滴の水を彼の青春の濃い赤色に注いだことがなかったことを考えていなかった。リアーネの中ではこのような戦いでの傷が、単に傷付けられたアフロディーテの像のように[Ilias. V.335ff.]、白い薔薇を赤い薔薇へと染めたのであった。

しかし彼はこのように多くの人の前では、一廉の男として留まり、決定とリアーネが一人っきりになるのを待つことに決めた。そこで彼はブルーメンビュールからの養父母の縁者と若干の分別ある言葉を交わした。 — 彼はラベツテに言った。「どうだい、気に入ったろう」。 — 彼は意図せずにハールハールからの何人かの見知らぬ顔の人を相手にしていた大尉を、何でもない問いかけでびっくりさせた。「何故君は私の妹をあんなに一人にしておくのか」。 —

しかし彼はリアーネの方を見やるたびに、彼女は今長いヴェールを着用して、ただ一人重たく厚い盛装の殻を着ていず、さながら一人の若く、呼吸し、優しい形姿として、石造りの着色された彫像どもの間を進んでいて、とても恥じ入って、恥じ入らせつつ、揺れる飾りピンのように輝いて、震えていて、しばしば彼の中で炎の塊が放たれ転がって行った。情熱は我々を、癩癩がしばしばその患者をそうするように、丁度人生の危険な箇所、岸辺や地の割れ目で投げ飛ばすものである。彼は頭を一本の木に少しばかり屈み込んで打ち付けた。そのときカールが喜びのワルツの中からやって来て、何故彼はそんなに怒っているのかと、びっくりして尋ねた。屈み込んでいると彼の引き締まった力強い顔に陰気な野蛮な影が射し込まれていたからである。「何でもない」と彼は言って、彼が顔を高く上げたとき、その顔は穏やかに輝いた。今や軽率なラベツテもやって来て、彼を歓喜の中へ引きずり込もうとして言った。「どうかしたの」。 — 「おまえときたら」と彼は答えて、とても怒って彼女を見つめた。

「暗い檜の木の森のガスパールの岩の所へ行くがいい」（と彼の心は叫んだ）「おまえの父は何事にも屈しなかった。彼の息子たることだ」。彼は輝く世界を通して、そちらへ向かって行った。しかし彼が暗闇の中で頭を岩に立てかけて、音色が巫山戯るように演奏されてきて、自分がとても高貴な魂を愛したことを考えたとき、何と、あたかも何かがか

う彼の中で言ったように思われた。「今やおまえはこの世で最初の痛みを有しているのだ」と。

地震のときにドアが跳んで、鐘が鳴るように、「最初の痛み」という考えで彼の魂は引き千切られて、苛酷な涙が湧き出てきた。しかし彼は自分の泣き声を聞いて不思議に思い、怒って顔の涙を冷たい苔で拭いた。

より軟弱になって、より硬化することなく、彼は魔術的な、微光を発する宝石が投げ込まれた国の中へまた入って行き、酩酊して迎えに跳ねてくる音色の下に来た。音色は魂を拉致し、持ち上げ、高みに置こうとしていた。魂が人生の広大な春を覗き込むようにと欲していた。ここで、この普段は浄福な大地の上で、自分の将来の日々が千切られて踏み潰された真珠の首飾りとなって横たわっているのを彼は見た。「我々は今晚浄福になるはずだったのに」と彼は考えて、明るい葉飾り庵の祭典の中を、金箔を張られた、しかし生きた葉飾りの中を、 — 夜風に揺られた緑色のあちこち揺れる反照の中を、 — そして流れる川の中で燃える茂みの野火の中を覗き見た。 — 弧を描く凱旋門の上には明かりが下に引きずられた大熊座のように立っていて、 — 彼の背後にはタルタルスの黒い修道院の壁があって、タルタルスは崇高にその梢の中にただ個々の明かりを示していた。 — そして向こうには静かな眠る山々が夜の中に、こちらには人間達の声高な人生があった。ランプの周りの蛾と戯れながら。

かくて我々の中では炎が自ずと一陣の風を起し、風は炎を更に一層高く追いやる。彼の側では音色が走っていて、彼が殺そうと思うすべての考えを彼に告げていた。人間が自分自身の姿に出会うように、彼はよく音色を前に、自分自身の声を聞いた。

その時リアーネが人混みから少し離れた所をアウグスティと歩いていた。「私は彼女と話そう、それで片付く」と彼は自らに言った。彼が彼女の側を戦いながら、奮闘しながら歩いていると、彼女がまた他の人々の聞き手の中に戻ろうとしているのに気付いた。「リアーネ、私が何かあなたにしたのかい」と彼は優しい心の魂の声で言った。講師が居合わせて勢力があることを苦々しく軽視していた。「今日だけは返事を求めないでください、伯爵様」と、振り返って彼女は言い、急いでアウグスティの腕を取った。しかし彼は、彼女がそうしたのには倒れないようにするためであったことに気付かなかった。ここで彼はアウグスティに炎の視線を投げかけ、侮辱されること、それから復讐されることを望んでいた。 — そして彼らの許を急いで黙って去った。 — 最も甘美な愛のワインを熱い光線が酔へと変えていて、 — 彼はそれと知らずに走って行き、「夢の神殿」の中へ入った。

彼はその中をあちこち歩いて、「私ハ夢デシカアリマセン」とつぶやいた。しかしやがて一緒に歩く鏡の自我達を嫌って、タルタルスの中に出ることになった。音色の後を追って来る永遠の春も、彼には今や、人生の耕された花壇の側で厭わしいものであった。

タルタルスでは恐怖のすべての仕掛けがとても卑小で滑稽なものに思われた。そのときカタコンベの通路からさほど離れていない所から彼の方にロケロールとラベツテが向かって来た。アルバーノが激しく彼らに向かって行き、同時の天国の思い出によってむしろ立腹し、自分の熱い廃墟の風で燃え上がって、大尉を掴んで、こう言ったとき、ロケロールの燃える顔は消え、ラベツテは自分の顔を後ろに向けた。「君は友達かね。 — 悪魔ではないか。 — 今日私にこの晩を指示したろう。この晩のことは、二度と、二度と話さない

でくれ」。 — 二人は狼狽して震え、顔色をなくした。アルバーノは青ざめて顔をそむけたことを、更に深く考えず、自分の受難に彼らに関与しているせいにした。何と混乱して、敵意のある夜であったことか。

彼はますます遠くをさまよった。彼は言いようもなく、音色を追って、舐めてくる喜びの炎に苦しめられた。 — 音色はより美しく温かい地帯の嘘つきの舞い飛びながら向かって来る熱帯の鳥のように彼には思われた。 — 「静かに胸の中で収まりさえすれば、すぐただベッドの中に入ることにしよう」。半マイル遠ざかっている、リラルの音色は相変わらず彼の後を追って来ていた。彼は怒って両耳を押さえて閉じた。しかしリラルはその中で演奏を続けた。 — そこで彼はただ自分の中だけで聞いていることに気付いた。しかし相変わらず、陽気な響きは『ドン・ジョヴァンニ』の中でのように、霊の悲鳴となって溶けなければならないかのように思われた。

彼が今や将来の日々から、彼の天の月を、すでに彼の子供っぽい心の上で、ブルーメンビュールの小道の上で照らしていた天の月を引き抜いたとき、恐ろしく鋭く将来の日々の並木道が彼に突き進んできた。彼の過去の花と咲く、飛び跳ねる精霊は、こっそりとただ手に歓喜の花輪を握って、彼の背後に忍び出て、彼の方は現前に行く未来の黒い天使と戦っていて、この未来の天使はざわめく森の中を通じて、 — 眠たげな村を通じて、 — 漏れて滴る谷を通じて、彼を引きずって行った。 — とうとうアルバーノは永遠の無数の星々の下の天の方を見て、吊り下げられている神の花々の庭園に向かって行った。「私は御身らに恥ずかしいとは思わない。この地球上で御身らの測りがたさを前に泣き、潰されているからといって。 — 御身らは皆彼方に離れ離れになっている。 — しかしどんなに大きな世界にあっても、すべての哀れな精神は足下にただわずかに小さな箇所を有するにすぎず、そこで幸せになったり、惨めになったりするだけだ。 — この晩が過ぎ去って、ベッドに入りさえすれば、明日はきっと私は一人の男となって確固たる者になっている」。

突然彼は何度かほとんど怒った苦情の声を耳にした。ようやく彼は小川の側に突き出された白い袖、あるいは両腕を見いだした。彼はその女性の形姿に近付いて行った。「私は残念ながら生来盲です」と彼女は言った。「私も照明の場に行って、迷ってしまったのです。 — いつもは道や小橋が分かって、向こうに私どもの村があり、牧羊犬の声が聞こえます。 — しかし川を越えて行く小橋が分からない」。[アルプスの]山の牧舎の生長したあの盲女であった。「まだあそこでは楽しかったかい」と彼は案内しながら尋ねた。「全部終わってしまった」と彼女は言った。ロザナ川の小橋の所で彼女は見栄を張って、更に案内して貰おうとしなかった。

彼は美しい、すでに朝の露を含んだ茂みを通して、リラルを前にした高台へ戻った。 — すべてが下の方では静かであった、 — わずかばかりの点在するランプがフルートの谷の中でちらちら光っていた。まだタルタルスでは対の明かりが死の虎の目のように輝いていた。 — 彼は下の空虚な国の方へ降りて、黙して平板な塚を越えて行き、 — 自分の暗い、下がるように上がって行く洞窟の通路を登って行った。 — そしてベッドへ入った。「明日だ」と彼は力強く言って、自分の堅固さのことを思っていた。 —

第十八ヨベル期

ガスパールの手紙 — ブルーメンビュールの教会 — 日食と魂の食

第七十九周

昨夜は敵対する見知らぬ精神が目の包帯の背後で人々を苛酷に互いにばらばらに対立させて追い立てたとすれば、その精神はその翌朝、自分が冷たい雲の上に立って、その戦場をきらきらする目で眺めたとき、自分の周囲に伏し倒れているすべての歓喜や収穫にほとんど微笑を浮かべたことであろう。

ブルーメンビュールではラベッテが一人っきりの片隅で、震える腕で強引に揉み手をし、石灰の壁に息を吹きかけて、赤い涙目を流し去ろうとしていた。 — リラルからは陰気にアルバーノがやって来て、人々の代わりに大地を見つめて、天文台で熱心に天を見つめ、友を求めていなかった。 — ロケロルは馬と騎士を集めて、国外で陽気な酩酊の夕べに取りかかっていた。 — アウグスティはスペインからの手紙に頭を振って、うんざりしながらも深く思案していた。 — リアーネは安楽椅子にもたれていて、両肩に降りかかってくる視線に砕かれていたが、そこでは無垢しか花咲いていなかった。 —

父親は赤く褐色になってあちこち歩き、彼女はただ弱い返事をして、時々組み合わせた両手を少し上げた。 — 雲の上の夜の精神の前では、人間の時は素早く、嘴と尾のない飛び去って行く対の翼として過ぎて行く。この精神は遠くの週を傍らに有しており、その時アルバーノは夜、天文台で目撃することになる、つまりブルーメンビュールの教会で祭壇の蠟燭が点され、リアーネがその中で両手を上げて跪き、一人の老人が自分の両手を彼女の快活な、輝かしい額に置き、その彼女の額は涙のない目で天に向けられるのを目撃することになるのである。

精神は月々の中をより深く覗き込み、喜びの余り自己回転して、人間達のすべての周囲に見られる居住地、行楽地についてにやりと笑う。しばしば精神はそのむき出しの地獄の歯の周りで高笑いする。ただ時折その歯を唇の下に隠して歯ざしりする。

精神はこのことも見ている、そう欲するから、 — 君達は冬のような幽霊から目を離し、温かい人々の許へ、堅固な現実へと降りて行き給え。ここでは飛んで行く時が、飛んで行く地球のように、休んだ根の上にあるように見え、単に永遠のみが太陽のようにやって来るように見えるものだ。

自分のすべての内部の人間を切断するよう見えるアルバーノの傷は、それを消し去ろうとする包帯で最も良く測定することができよう。慰めや自己欺瞞から我々の痛みは察せられる。朝方彼は痛みを語らせ、静かにその死体の叫び声の前で、死体として横たわっていた。それから彼は立ち上がって、自分にこう言った。「ただ二つのうち一つだけが考えられる。彼女はまだ私に誠実であって、ただ両親だけが彼女に強いているのである。 —

その場合両親をまた説得しなければならない。これは全く嘆きの対象とならない。 — あるいは彼女は私に対し何らかの弱さから、例えば怒っている愛しい両親に対する弱さからかは私に対し誠実でない。あるいは私に対する冷淡さからか、あるいは宗教心からか、錯覚からか等々のせいで、 — その場合私は」（と彼は続けて、両足をより深く、より堅固に大地の中に入れようとして、それでも抵抗に会わずにいた）「それ以上何もし

ないことしかできない。しくしく泣く乳呑み児とか、呻く虚弱児とかではなく、鉄のような意志の男でなければならず、――消え去った心に対し激しく泣いたり、私の青春のすべての畑や植物での深い死滅に対し、私の途方もない――痛みに対し、泣いてはならない」。このように彼は自らを麻痺させて、慰めの必要性を慰めの現存とした。

毎晩彼は町の郊外のブルーメンビュールの丘にある天文台を訪れた。彼は年老いた孤独な、痩せた、永遠に計算を続けている、妻子のない天文台職員に出会ったが、この職員はいつも子供のように親しげで、屈託がなく、戦争のニュースやファッション誌¹や詩文を全く気にしていないのであった。この職員は自分の楽しみごとに対しては、ボーデ[Bode (1747-1826)]とツァッハ[Zach (1754-1832)]の新報に対し支払う他は何も金を使わないのであった。この老いた目は儉約的な眉毛の下できらきら輝かせて天を覗き、彼が至高の現世の箇所について、黒く深い地球の上の明るい天について、――岸辺のない見通せない世界の海について、この海の中では空しく飛び越えようとする精神は疲れて沈むもので、この海の干満はただ無限の者のみが、その王座の許で見下ろしていると言いながら、そして死後の天体での希望について語るときには、彼の心は詩的に高揚するのであった。そして死後には今のように地球のかけらが天体を過ることはなく、天体は自らの周りに始まりもなく終わりもなく弧を描くのであると語った。

ソクラテスが気位の高いアルキビアデスに地図を通して[その自慢する所有地を示すようにさせて]、鼻をへし折ったのであれば、天体の地図が地球の地図そのものを消し去るとき、地上での我らの誇りや痛みはもっと赤面しなければならないであろう。アルバーノは自分の上の途方もない上昇する夜を見上げ、その中では昼や朝焼けが見られ移ろうのを見たとき、自分のことを考えることを恥じた。――彼はこう語って自らとその師を高めた、つまり今向こうの果てしない中では若い諸惑星の春や楽園が、轟く諸太陽が、そして燃え上がる諸地球が交錯して飛び混じっている、そして我々はこの下界に豊者のように崇高なハリケーンの下にいて、轟々たる雷雨が離れている我々には、夜の単なる静かな、白い静止している虹[銀河]のように見える、と。

アルバーノの大きな目は天を覗くたびに、地球をより明るい、より軽やかなものと思った。しかしとうとう夜が、敵意ある精神がすでに長いこと体験していた夜が、やって来た。すでに時ははなはだ更けていて、天は全く晴れていて、星雲はより高次の小市場町としてこちらに迫って来ていて、天は青いというよりはむしろ白く輝き、アルバーノは自分の傍らで、天と自分とを絶えざる祈りで一杯のその心で更に神聖なものにするであろう秘匿された恋人のことを考えていた。その時突然彼は下に沈んで行く天体望遠鏡を通じて、ブルーメンビュールの教会で明かりが点されているのを見、――侯爵の祖廟が開けられ、――リアーネが両手を上げて祭壇で跪き、――一人の老人が彼女の傍らにいて、さながら彼女を祝福しているのを目撃した。――恐ろしい具合に蠟燭の炎とリアーネの顔と両腕は底に落ちていた、天体望遠鏡はすべてを逆さまに写し出させるからである。

アルバーノは身震いしながら天文台職員に、そちらを覗くように頼んだ。この職員もその現象を見たが、しかし彼には無名の現象であった。「多分教会に誰かがいるのでしょうか」

*1(訳注) Bertuch と Kraus による : Journal des Luxus und der Moden. 1786ff.

と彼は無関心に言った。しかしアルバーノは駆け下りて行った。 — びっくりした天文台職員は明日の皆既日食への招待を彼に呼びかけることがほとんどできなかった。 — そして彼はブルーメンビュールめがけて走って行った。いかに彼の心臓は駆けることで、そして特に窪地の中で照らされた教会を見失ってしまい働き疲れたことか、これは分からないままである。この突進の中では彼自身にさえ分からなかったからである。とうとう彼は白い教会を目前にした、しかし教会の窓には何の明かりもなかった。彼は鉄の教会のドアを激しく叩いて、叫んだ。「開けてくれ」。彼は空の教会での反響のみを耳にして、それ以上何も聞こえてこなかった。

かくて彼は胸に嵐のような過去を抱いて、眠る夜の中を戻って行った。 — 地球は彼にとって一つの精霊の島となって、精霊の島は彼にとって地球となっていた。 — 彼の本性、神の彼の町は焼き尽きたと彼は感じた。

その町は朝方、まだ完全な白熱の中にあつて、講師が彼の許にやって来て、彼にリアーネの解し難い依頼を、つまり彼女が正午頃リラルで二人っきりで話しをしたいという依頼を持って来た。彼は今回はこの疑わしい使者に対して怒らず、大いに驚いて、承諾すると答えた。何という大胆な、冒険的な形で、我々の人生の雲は天に上昇することか、それが消え去る以前に。 —

第八十周

謎の住むリアーネの許に行くことにしよう。 — 「照明の夜」の翌朝、彼女は自分が両親に対して沈黙の約束を守ったときの残酷な緊張をまず追感していた。脱力する思いで彼女は沈み込んでいたが、また炎のような新たな誠実さも有していた。「何故」（と彼女は絶えず言っていた）「この高貴な青年は、私から一晩中痛々しい思いにさせられるという報いにあったのだろうか。 — 何度あの方は私の方を頼むように裁くように見つめられていたことか。 — あなたの頭を支えることが許されて欲しかった。苦しげに頭を固い唐檜にもたせかけていらした」。 — 彼女が苦しい真夜中最も悲痛な思いにさせられたのは、彼が黙って姿を消したことであった。何としばしば彼女は外側はランプで照らされた雷の庵を見上げたことか、その内部の窓辺はただ真っ暗なままであったのである。今や彼女は、何と彼女の魂の間近に彼の住んでいることか感じて、朝の間ずっと昨夜のことを泣いた。そして愛の光線がますます熱く彼女を刺していった、丁度、太陽がまさに雨上がりに覗き込むとき、凹面鏡は太陽をもっと強く我々の前に映し出すようなものである。母親は今日、犠牲的に約束を守った昨日のことで、信頼して愛を取り戻して、彼女に感謝していた。 — 父親は何も感謝していなかった。彼の場合ちょっと前のルター主義者のように善行で浄福になるのではなく、ただ善行に欠けるときにのみ、雷が落ちるのであった。 — しかしまさに今、両親は昨夜のことで諦念という最新の希望を汲み上げていたのに、娘はどの希望の一つにも媚びることができなかった。

何としばしば彼女はガスパールの手紙のことを考えたことか。 — 手紙が先端の毒で傷付けるべくスペインからはるばるやって来る印刷された矢であろうか、それとも今まで見たことのない恒星の親しげな明かりで、ようやくはるかな軌道を描いて我々の許に降りてくるのであろうか。 —

しかしアウグスティはすでに「照明の夜」の前にその手紙を得ていた。しかしその手紙を渡せない理由のみを見いだしていた。ここにその手紙がある。

「私は貴方の御心配をはなはだ評価せざるを得ませんが、その御心配を受け入れはしません。フォン・Fr嬢に対するアルバーノの愛は、この令嬢に私は夙に以前から所謂徳操におけるある種の練達性を認めて喜ばしく思っておりましたが、霊の機械仕掛けの影響に対して、また他の所での結び付きに対して、我々や彼を守ってくれるものとなりましょう。これらのものは彼の研究と彼の温かい血にとって、より憂慮すべきものに思えるものです。ただこのような青春の戯れにはその独自の歩みに任せなければならないものです。彼が彼女に執着するのであれば、この件はどう進展するか彼が見守ればいいのです。彼に対しこの喜びを何故更に短縮させなければならないのでしょうか。いずれにせよ貴方は、残念ながらこの美しい女性の病弱さを案じておられるのですから。晩秋には私は彼と会います。彼の力強い、健気な性質は多分切り抜ける術を承知していきましょう。フルレ家には私からよろしくとお伝えください。

G[ガスパール].d.C[セサラ].]

講師はこの手紙を製紙工場に投げ入れたかったことであろう。ここには「見せるためのもの」がほとんどなかったからである。確かにガスパールの、リアーネの病弱さに対する殺人的に研がれた皮肉は、彼がその手紙を彼女に見せても、この無邪気な平和の王妃にとっては、鞘の中に収まったままであろう。 — この手紙に塗り込まれている利己主義の北風も、これはアルバーノの喜ばしい人生航行にとっても最も恵み深い側面からの風となるから、愛するリアーネは感じないだろうし、注意を払わないだろう。 — しかしまさにそれ故に見せられない。というのは彼女はガスパールの秘められた拒絶を承諾と見なしかねず、友人の講師が彼女をその急峻な深淵から救いだそうと思っていた綱で、まさに致命的に混乱しかねないであろう。

しかしこの手紙は渡されなければならなかった。 — しかし彼は長く、臆した拒絶の後に渡した。この拒絶はさながら秘められた拒絶のヴェールを取り除く按配であった。彼女は恐る恐る読んで、殺人的皮肉の所で泣きながら微笑して、穏やかに言った。「その通りですね」。 — 講師はすでに半ば希望を目に浮かべていた。 — 「騎士が」（と彼女は言った）「そのようにお考えならば、私も更に遠慮する必要はないですね。いや立派なアルバーノ、私はあなたに誠実でいきましょう。私の生涯は短いのだから、その間は出来る限り長く、楽しく捧げることにしましょう」。

彼女はスペインからの矢のことで講師にとっても温かく喜んで感謝した。それでこの矢は、その黒く毒を塗られた先端で美しい心を突き刺すには十分に厳しくないという結果になった。彼女は講師をいたわって、自分の父親に対して自分の固い決意を表明する際には居合わせなくても良くて、せいぜいむしろ母親に対して表明する役を、自分と母親とをいたわって、引き受けて欲しいと頼んだ。彼は一つではなく、 — ただその双方に同意した。

穏やかなこの姿勢は静かに父親の前に進み出て、どんな閃光や雷にも動じずに、自分の釈明を最後まで述べた。つまり自分は自分の同意を得られなかった愛をひどく後悔しており、自分はどんな罰をも引き受け、すべてを犠牲にするつもりであり、ここと侯爵夫人の許では「父上様」の要求される通り何でもし、やめるつもりであるが、しかしもはや義務に反した離反の見せかけで罪のないフォン・セサラ伯爵を侮辱することは許されないこと

である、と。こう話されて、大臣は — これまでの従順な抑制からさわやかな期待を募らせていたのであるが、自らのタルペイアの岩[古代ローマで罪人達が落とされた]から投げ飛ばされて、下の大地に伸びて、次のような声を発するしかなかった。「愚か者、おまえはフォン・ブヴェロ殿と結婚するのだ。 — この方がおまえを明日描く、 — モデルとなりなさい」。彼は乱暴に彼女の手を引いて、恐ろしく長く三歩歩いて、大臣夫人の許へ行った。「この娘は」（と彼は言った）「自分の部屋から出てはならぬ。誰もこの娘の許へは私の義理の息子ブヴェロの他には入ってはならない。 — ブヴェロはこの愚か娘の細密画を描きたいのだ。 — 行きなさい、愚か者」と彼は我を忘れて言った。彼女には女性らしい狡猾さが全く欠けているため、実際政治家たる父にとって彼女の深く、鋭い目が見えづらくなっていたのである。真っ直ぐな人間と分別とは、真っ直ぐな並木道に似ていて、これは曲がった道を行く並木道より、ただその半分の長さに見えるものである。

講師は、夫婦の愉快的喧嘩の特別な愛好家とみられなくなかったので、すでに遠ざかっていた。夫婦の三十年戦争は、 — これには後数年欠けるのみであったが、 — 生命と補強を得た。老いた夫は顔にかのびくつく微笑を浮かべていたが、これは何人かの人間の許では、魚が噛み付いたことを告げるコルク材の震えに似ているものであった。彼は自分が、娘をも母親をも、 — 信用しないとしても不当なことがあるかと尋ねた、 — 彼は兩人に自分に対する党派的な協調をなすりつけていた。そして今や請け合った、このような証拠を見せられた後では、もっと厳しい措置を執らざるを得ないし、自分の目標に真っ直ぐに進まざるを得ない。ドイツ騎士団騎士がすでに二回自分に頼んでいるモデルの件を自分は始める、と。大臣夫人は細密画のようなブヴェロに対する過大な贈り物についてはリアーネを罰するために黙っていた。

優しい娘は、石造りの、迫って来る両彫像の間で圧迫され、潰されて、母親に述べた。自分はこのように長く男性の視線にさらされるのはとてもできない、少なくともフォン・ブヴェロ氏の視線には耐えられない、この視線はしばしば魂に突き刺さるものである、と。これに対し母親の名前で父親が、写字台に椅子を引いて来て、即刻ドイツ騎士団騎士を明日の絵の描写に招待して、返答とし恐喝とした。それからリアーネは一言で送り出され、この一言はこの優しい花からさえも短い憎しみの閃光を引き出すものであった。

帝国和平議定書が今や両夫婦の前に開かれていて、ただそれを口述筆記させる者だけが欠けていたが、その時大臣夫人は立ち上がってこう言った。「貴方には私に対してもっと敬意を払うよう学んで頂きます」。

彼女は馬車の用意をさせて、宮廷説教家のシュペーナーの許へ向かった。彼女は彼に対するリアーネの尊敬の念と、彼女の敬虔の心情に対する彼の絶大な力を知っていた。それどころか更に夫人自身にも彼は畏敬の念を与えていた。まだルター派の告解の神父がもっと間近にカトリックの告解の神父の許で支配していたかの早期の神学的時代から、彼はその性格の力と高邁さで牧人の杖を携えて来ていた。これは司教の杖とは単により良い木材という点で異なるだけであった。彼女は彼にリアーネの関係を二回、話さなければならなかった。炎のように怒ったこの老人は、愛というものが全く理解できなかったし、信ずることができなかったのであり、この愛はその上自分が知らないうちに、自分の老いた目の前で紡ぎ出されるとされるものであった。「令夫人は」（と彼はようやく答えた）「私に今日ようやくこの重大な出来事を話されるという過ちをなさっています。私でしたらいとも

容易にすべてを神の御加護で祝福された結末に導いていたことでしょう。しかし何も失われていません。令夫人は御令嬢を今夜のうちにも私の許に、ただ一人っきりで、貴女の同伴なしで、寄越してください。そうしなければなりません。その後のことは私が保証します」。

反対したり、憂慮したりしたら、単にこの老人の名誉心と憤怒に火を着けていたことであろう。一 名誉心と憤怒は彼の頭の毛の[白い]氷の許で働き続けていた。それ故彼女はすべてを信頼して、かの従順さで彼に承諾した。この従順さはリアーネにも引き継がれているものであった。

まことに希望を抱いてリアーネは立派な敬虔な神父の許への夜の旅の命令を受け入れた。彼女は単に自分の実直な小間使いと一緒に出発した。深く動揺した魂と共に彼女は告解の神父の前に現れた。彼女は彼に神に対するが如くに打ち明けた。彼は同じように決定した。シュペーナーの目とは別な、もっと誇りの少ない目にとって、この敬虔な、しかし覚悟した聖女の眺めは何というものであったろうか。この聖女の心は陽光のように砕ける 때가最も美しいのである。一

しかしここでこの話はヴェールの中に収まる。老人は小間使いに残っているように命じ、彼女だけを黙したブルーメンビュールへ連れて行った。彼は彼女に教会のドアを開けて、更に祭壇に一本の蠟燭を点火し、彼女の臆した目に陰気な暗がりは何も映し出さないようにして、両親ができなかったことを済ませた。

彼女が永遠にアルバーノを断念するように、彼がどのようにしてそのことを強いたか、このことは彼女が彼に誓った宣誓の大いなるスフィンクスによって監視され、秘匿されている。一 ただこの美しい魂を失うことになった遠くの人間が天文台で恒星から明るい教会の窓を覗いて、その背後にゆらゆらする現象を見いだしたのであったが、その現象は真実であって、彼の生涯を決定していることに気付いていなかった。

彼女は、輝いていた昔の日々の沃野と山々を冷静に越えて、また老人の住まいに戻って来た。老人は彼女を受け入れたときよりももっと大きな敬意を払って彼女を去らせた。夜の道、彼女は自分の小間使いに対して黙っていて、自らの裡に閉じ籠もっていた。両親はまだ彼女を待っていた。母親は不安げに夜と未来とを見つめていた。ようやく活気ある馬車が中庭へ入って来た。無実の処刑された女性がまた解剖者の前で生命を得て、その解剖者をより高次の裁判官として尊敬しながら、解放されて、喜んで話すが如くに、偉大に力強く彼女は両親の前に進み出た。神々の像の冷たい大理石のように彼女は青白く、涙もなく、冷たく、静かに立っていた。彼女はそのことを知らずに、欲してもいなかった、しかし彼女は高く、人生の上を、それどころか子供らしい愛の上を歩んでいた。一 彼女は母親をいつものように熱く接吻することはできなかった。一 彼女は臆せずに、がみがみ言う父親の前に立って、それから涙も、動揺も、赤面も見せずに、穏やかな声で言った。「私は今日、神様の前で私の愛を断念致しました。敬虔な神父が私を納得させてくださいました」。一 「で神父は私より胸中にもっと良い理由を持っていたのか」とフルレは言った。一 「はい」(と彼女は言った)「でも私は、すべてを時が明らかにするまでは黙っていると神殿で誓いました。一 そこで全能の方にかけて、ただお願い致しますが、あの方にあの方の手紙を個人的にお返しし、あの方の想い人であることを断念する、しかし移り気からではなく、義務からの断念であるとお伝えすることをお許しください。

これをお願いします、御両親様。それからは神様の御心のままで、もはや何に関しても不服従ということはありません」。

惨めな父親は、この勝利で思い上がって、この瀕死の女性の最後の依頼さえもなお辛いものにしようと思って、面会の意図について邪推を窺わせることさえした。しかし母親は、その美しい魂の中で最も美しい魂による感銘を受けて、その間に熱心に、軽蔑して割って入り、そのことを独自に承認した。リアーネも父親の否認にはほとんど注目していないように見えた。父親が去ると、母親はその静かな形姿を浄福に泣きながら抱き寄せた。しかしリアーネはいつものように愛情から容易に母親の許で泣くことはなかった。彼女の心が余りに崇高だったのかもしれないし、あるいは彼女の心は去ったときと同様ゆっくりと昔の状況に戻って来たのかもしれない。「有り難うね」（と母親は言った）「これからはおまえの人生をもっと楽しいものにするつもりだよ」。 — 「十分に楽しいものでした。私は死ぬ定めでした。だから愛さなければならなかったのです」、と彼女は言った。 — このように彼女は微笑しながら、激しく動悸する胸で、眠りの両腕に抱かれて行った。しかし夢の中で、自分が気絶して沈んでしまい、母親を失い、飛んで行く死から不安に抗って上昇し、それからまた生きていることを喜んで泣いているかのように彼女には思われた。その後彼女は目覚めて、楽しげな、夢から穏やかに放たれた滴が開いた目から流れ続けて、春風のように硬直した生命を和らげた。 —

御身ら我々の上の偉大な、あるいは浄福な精霊よ。人間がここの人生の哀れな雲の下でその幸福を投げ棄てる時、人間がその幸福を自分の心より卑小と見なすが故に棄てる時、そのとき人間は御身ら同様に浄福で偉大なのである。そして我々皆がより神聖な大地に値するのである。犠牲の光景は我々を高めるからで、貶めることはないからであり、我々が白熱した涙を流すのは、同情からではなく、衷心からの最も聖なる愛と喜びから流すからである。 —

第八十一周

今日この不幸な女性同様に食[盲目]になる定め太陽はその朝を温かく輝かしくもたらした。リアーネは自分の愛の埋葬の日に、昨日の強靭さは伴わずに、優しく疲れて目覚めたが、しかし平和な時の再来が見込まれて、より快活に目覚めたのであった。母親は、自らがすぐれなかったが、彼女をすでに早朝に抱き締めて、大事な娘の心臓の動悸を調べた。

— リアーネは愛らしく、憧れて、濡れた母親の目をまことに長く、濡れた目で見つめていて、黙っていた。「何を望んでいるのかい」と母親は尋ねた。 — 「お母さま、これからは私をもっと愛してください。私は一人っきりです」と彼女は言った。それから彼女は、母親の前でアルバーノの手紙をすべて、読まずにまとめた。アルバーノが彼女の兄に、自分の愛を頼んだ手紙は別であった。そして運命が私どもを扱うことは、哀れな両親がその子供達に対して行う扱いに似ていると母親に対して冗談を言った。両親は子供達に最初、明るい色彩の色の衣服を与えるが、これらはより容易に黒い服に着色され得るからである、と。

母親は次第に彼女の霊の空想を、彼女の若い、緑色の生命に吸い付いている死の苔のようなものであるとして、彼女から取り除こうとした。「おまえはどんなにおまえの」（と

夫人は言った)「天使が間違っているか分かるだろう。天使は今おまえが同意しないおまえの愛を認めたのだからね」。しかし彼女はこう答えた。「いいえ、敬虔な神父はこう言われました。天使は正しかった、と。でも神父は私に秘密を告げられたのです。愛のためにはすべてを棄てなければならぬと聖書は述べているそうです」。かくてこの哀れな生き物は極楽鳥について言われるように、まさに真っ直ぐに天に昇って行き、そして死んで落ちて来るのである。

彼女は母親にほとんど熱に浮かされたような快活さ、一年の最後の日のような陽光を見せていた。彼女は言った、自分は今母親と自分の以前の素敵な日々について自由に話すことが許されとても嬉しい、と。 — 彼女はアルバーノの白熱した偉大な心について描いて見せ、いかに彼が犠牲に値し、一緒に過ごした「真珠の時」に値するか語った。「根本的には」(と彼女は快活に話したが、しかし聞き手には涙が生ずる具合であった)「何も過ぎ去っていません。思い出は現在よりも長く続きます。私が何年も花々を保存しているようなものです。果実はそうはいきません」。いや、単に喜びの葡萄畑の花々の中でのみ醗酵するような優しい女性の魂が存在するものである。他の者達は葡萄畑の果実でようやく醗酵するのであるが。講師の紙片が、アルバーノは彼女をリラールで待っているという知らせと共に届いた。

今や面会の時が刻々と迫って来ると、彼女は次第に不安になっていった。「あの方を説得できさえすればいいのだけど」(と彼女は言った)「私は正直な娘として行動したのであると」。彼女は自分の東側の部屋を喪の馬車と取り替える前に、その部屋のすべてを、戻って来たときのスケッチのために整えた。自分はとても悪い夢を見た、正夢でなければいいのだが、と彼女は述べた。

彼女は手紙を入れた手仕事小籠を腕に持って、馬車に乗り込んだ。馬車は中の空気がむっとするので窓を開けなければならなかった。しかし彼女の精神はこのむっとする空気を吸い、自分が出会うすべての美しいものが、今日は麻痺させる毒の花となった。彼女はこわごわずっと母親の手を取って握りしめていた。どんな叫び声も、どんなに素早く過ぎ去る姿勢も、猛鳥のようにぎわめいて襲って来たからである。叫ぶ者がいると、その粗野な音色で彼女の神経を断った。彼女がようやくまたより穏やかに祈ったのは、一人の聖職者とその従者が、疲れた人々の夕べの聖水の病者見舞いの杯を持って通り過ぎたときであった。美しい道が彼女には長いものとなった。彼女はまことにしっかりと明確に恋人と話す定め砕けそうな心を長いこと保持しなければならず、力を消耗していった。

空は青かった。しかし天気は雲のないのに、暗くなり始めるのだということに両人は気付いていなかった。月がその闇と共に太陽に接近していたからである。母と娘が森の橋を越えて、すべての梢に飾られた過去のかつての花嫁衣装の掛かっている生き生きとしたリラールの中へ進んで行ったとき、リアーネは母親に言った。「後生だから、古い死者の廟には¹⁾行かないで」。 — 「でもどこへ行くの。あの人在那里を指定したのだから」と母親が言った。 — 「どこでもいいの、 — 『夢の神殿』でも、 — あの人はずでに私どもを見えています。向こうの門の上をあの方は歩いています」と彼女は言った。「全

*1 侯爵が亡くなり、彼女が盲目となった所である。

能の神の御加護がありますように。長いこと話してはだめよ」と母親は、娘と別れて神殿へ向かいながら泣きつつ言った。神殿の鏡でこの罪のない若者達の別れを覗くことにしたのであった。

アルバーノは上の通路の方へゆっくりとやって来た。彼は目から涙をきれいに拭い、心から嵐を去らせていた。何と彼はこれまで長いこと漂っている船乗りのように暗い雲海を覗き込んで、その霧の峰の間に堅固な緑の陸地の山の先端を見いだそうとしたことか。

一 自分が今日、かくも多くを、つまりすべてを失う定めであること、そこまでは彼のどんなに悲しい推論も及んでいなかった。いや彼はまだ平静を保っていて、上の方で小さな、踊りの真似をしているポルックスに、厳しいことを言わず、贈り物をして、追い返したのであった。

ようやく彼は唇を震わせながら、愛しい美しい形姿の前に立った。この女性は子供らしく、青ざめて、震えていて、手仕事の小籠を抱えて、少しばかり彼を見つめ、それから伏せた目でこらえていた。すると彼の心は溶けた。昔からの愛の洪水が高く音立てて、彼の人生に戻って来た。「リアーネよ」（と彼は極めて穏やかな調子で言った、彼の目は滴っていた）「あなたは私のリアーネですか。私はまだ昔のままです。あなたも心変わりしたわけではないでしょう」。一 しかし彼女は心変わりしていないとは言えなかった。彼女の生命の動脈が断ち切られた。そして血の代わりに涙が溢れてきた。彼の立派な形姿、彼の馴染みの兄の声が、また彼女の間近にあった。そして彼の手が再び彼女の手を握っていた。しかしすべては過去のものとなっていた。暑い日差しが彼女の以前の花と咲く庭園の生物の上に注がれて、その生物を物憂く照らし出していた。しかしその生物は彼女から遠く離れていた。「今は心強く」（と彼は続けた）「この奇妙な再会に対処しよう。一 ほんとに手短かに何故これまでこうも黙っていて、このように振る舞ったのか話しておくれ。

一 私には何も言うことはない、一 そうしたらすべて水に流そう」。一 彼は無意識に彼女の手を持ち上げた。しかしその手は押し下げられ、震えていた。「震えているのはあなたですか、それとも私」と彼は言った。「私です、アルバーノ」（と彼女は言った）「でも責められることはありません。私は誠実です。死ぬまで誠実でいます」。一

彼は分からず、彼女を見つめた。「貴方に対し、貴方に対し誠実なままです、でもすべて終わってしまった」と彼女は迷って、迷わせながら叫んだ。「だめです」一 （と彼女は命ずるように付け加えた、彼がたまたま一緒に「夢の神殿」の眺望から外れようとしたときであった）一 「だめです、私の母が私どもを見たがっているのです、向こうの『夢の宮殿』から」。

彼は母親の監視で赤くなった。彼の目は「貴方」という言葉で彼女の目に反応し、熱い視線は彼女の動揺した顔からその保持されている謎を引き出そうとしていた。窮すれば力が湧く。彼女は始めた。

「ここに」一 （と彼女はどもって、震えながら小籠をほとんど持ち上げることができずにいた）一 「私宛の貴方の手紙があります」。彼はそれらを穏やかに受け取った。「私は貴方を諦めました」（と彼女は続けた）「私の両親のせいではありません。両親は私どもの愛には反対でしたけれども、一 ある秘密があつて、それがただ貴方と貴方の幸せに関係しています。一 そのせいで私は貴方から別れ、すべての喜びを断念せざるを得なくなったのです」。一一 「貴女も貴女の手紙をお望みか」。一一 と彼は

言った。「私の両親が、――」と彼女は言った。「私に関する秘密が」――と彼は言った。――「宣誓の縛りがあるのです」――と彼女が言った。――「昨夜ブルーメンビュールの教会で司祭を前にして」――と彼は尋ねた。彼女は手を両目の上に置いて、ゆっくりと頷いた。

「何ということだ」（と彼は声高に泣きながら叫んだ）「人生も、喜びも、すべての誠実もそんなわけか。――何という戯言だ」（と彼は自分の手紙を見つめた）「永遠の誠実とか愛とか。地獄のような嘘つきに翻弄されているのは誰だ」。彼は手紙を放り投げた。リアーネは拾い上げようとした。彼は強くその上に踏み込んで、驚いている女性を辛辣に見つめた。――今や彼は嵐に陥って、汲み水車のように流水の中で汲みながら、自分のざわめく受難な胸中をさらけ出し、残酷に自分の愛、彼女の弱さ、彼女の冷淡さ、自分の苦痛、彼女の以前の誓い、そして自分の秘密に満ちた幸福、自分が実際欲していない幸福についての彼女の先ほどの偽証の誓いについて、果てしなく描いて行った。彼女が黙っているために彼はますます野蛮に荒れた。彼女の早く激しい息遣いを彼は聞いていなかった。

「おやめください。もうどうしようもないのです」と彼女は請うように答えた。「いや」（と彼は怒って言った）「変更を更に変更させようとは思わない。講師と牧師が更にこれを変更するだろうから」。今や彼は男らしい強情さと心の強直症に陥った。愛の奔流は岩の上に凍って角のある滝として掛かった。

「あなたがそんなに厳しいとは思いませんでした」と彼女は言って、見慣れぬ微笑を浮かべた。「もっと厳しくなるぞ」（と彼は言った）――「あなたの仕打ちを話そう」。――「やめてください、アルバーノ。――暗くなってきました。――母の許にすぐ行くことにします」と彼女は突然叫んだ。二匹の古い、黒い蜘蛛が、運命によって投下され、再び彼女の美しい目の上に立って、熱心に糸を紡ぎながら、ますます密に目を覆って行った。人生の黄金の条光の上にすでに灰色の黴が育っていた。

「日食だよ」と彼は言って、盲目を太陽の一部を鈍く輝かせている三日月のせいにした。彼は上の青空で月の塊が墓石の如く純粋な太陽に投げ込まれるのを見ていた。――本物の影でさえなく、衰弱した影が、不確かな、灰色の明かりの中で生きていた。――小鳥達が臆病に飛び交じって、――冷たい戦慄が正午の霊のように、小さな、鈍い光、陽光でも月光でもない光の中で戯れた。青年には人生が薄暗く、薄暗く横たわっていて、年月の長く、黒い大理石の柱廊の中を痛みが豹のように歩み寄って来て、過去の去って行く陽光の下で明るい斑点となった。

「これがまことに今日にはふさわしい」（と彼は続けた）「夕焼けのない速やかなこのような夜が。――リラールは今日覆われなければならない。――月を見上げて御覧、黒く太陽の上に転がって行った、いつもは月は我らの友であったが。――もっと暗くなるがいい、全くの夜に」。――

「アルバーノ、責めないで、私のせいではありません。目が見えないのです、――神殿はどこ、母はどこ」と彼女は嘆いて叫んだ。蜘蛛が涙で一杯の濡れた目を織り込み閉ざしてしまっていた。

「嫌だな、日食だよ」と彼は言って、盲目にさまよう不安げな顔を覗き込み、すべてを察した。しかし彼は泣くことができず、慰めることができなかった。最も残酷な痛みの黒い虎が彼の胸に張り付いて、彼はそれを運び続けていた。「違います、違います」（とリ

アーネは言った)「私は目が見えないのです、それに私のせいではありません」。

陽気な、贈り物を貰ったポルックスが乞食の啞を連れて来た。この乞食は啞用の鈴を鳴らして付いて来た。「この啞の人はただ何も言えないのだ」とポルックスは言った。アーネは叫んだ、「お母さま、お母さま、私の夢の通りです。葬儀の鐘が鳴っています」。

大臣夫人が飛び出て来た。「貴女の娘さんは」(とアルバーノは言った)「また目が見えなくなっています。父親と母親には神の罰が当たりましょう、罰当たり者は可哀想なものだ」。アーネは「どうしたのだ」と急いで歩み寄って来てシュペーナーが叫んだ。その前に一緒なのを目撃して、母親の許に来ていたのであった。「不幸な娘です。あなたの仕業でもありますよ」とアルバーノは答えた。

「ご機嫌よう、不幸なリアーネよ」と彼は言って、別れようとした。しかし立ったまま、盲目の目で泣いている虐げられた美しい顔をじっと見つめていた後、こう叫んだ。「恐ろしいことだ」、そして進んで行った。

長いこと彼は上の雷の庵で両腕を枕に目を開けたまま横たわっていた。そしてどこにいるか気付かないまま夢から醒めたかのように起き上がったとき、風景全体が快活な日中で照らし出されているのを見た。太陽は覆われることなく、温かく、純な青空の中で輝いていた。そして盲目の女性を乗せた、窓の閉ざされた馬車が、素早く森の橋の上を渡って行った。そしてアルバーノはまた両腕を枕に沈み込んだ。

第十九ヨベル期

ショッペの慰謝局 — アルカディア — ブヴェロの肖像画制作

第八十二周

さてアルバーノは愛も希望もなく生きていて、アーネは自分の人生の北極星が流星としてその死んだように静かな砂漠に落下して行くのを目撃し、アーネは自分の行動のすべてが今やサソリの針を突き出して、思い出のすべてが同じことで、彼はリアーネの手紙を送り返し、リラールを去り、ドクトルの家から、講師から、リアーネの縁者から、敬虔な神父から去り、アーネは自分の次第に青白くなって行く顔を単に本に向け、星々に向けるようになって、かくて利己的な痛みの他には何の高次の痛みを知らない人々は、こう信ずるに違いなかった。彼の胸はただ自分の希望と青春の愛の砕けた幻影の瓦礫で圧迫されているに過ぎない、と。しかし彼はもっと高貴な具合に不幸であり、慰めがなかった。彼が不幸であったのは、自分が初めて一人の人間を、最良の人間を不幸にした、アーネの恋人が盲目となったからである。アーネの心のこの深みに受難のすべての隣接した源泉が流れ込んで来た。彼の幸運の籤壺のごく小さな多彩な破片は、こう日々聞くたびに、さながら新たに砕かれることになった。つまりこの哀れな女性は、毎日治療する噴泉の前の小屋に立たされるけれども、相変わらず光明がないまま戻される、そして今や彼女は、この掠奪の大地では、今一度母親を目にする前に、ひょっとしたら死が両目を閉ざすことより他に更に恐れ、悲しむものはないかもしれない、と聞くたびに砕かれたのであった。

良心の傷が癒やされることはない。時はその翼で傷を弱めることはなく、その大鎌でた

だ開かれたままにしておくものである。アルバーノはリアーネの思いやっで欲しいという切なる嘆願を退けたのであった。するとかの日食のとき、自分が彼女の目を犠牲にしようとは欲せず、ただ彼女の心を犠牲にしようとしたことが、悔やまれてならなかった。結果の凹面鏡、拡大鏡の中で、運命は幾多の内部の軽い戯れの虫を、成長した、また武装した復讐の女神として、蛇として呈示するものである。何と多くの罪が夜の盗賊の如く、人知れず穏やかな表情をして我々の内部を通過して行くことか、これらの罪は、夢の中でのその姉妹のように、胸の循環の中から出て行くことはなく、馴染みのものを攻撃し、締め上げることになるからである。 — 美しい魂は容易に偶然の中に一つの罪を見いだす。ただかの苛酷な熱狂的理想主義者、現実主義者が、彼らの凱旋車の前には前もって傷や死体で一杯の馬車の山が通っているのであるが、つまり戦争の父親達が、 — これらはすべての歴史において侯爵達よりしばしば大臣達がそれであったのであるが、 — ただこれらのみが平然と大地のすべての火山に点火して、すべての溶岩の奔流を生じさせて、単に — 見込みを得るようにしたのであった。彼らは楽園の野に肥料をやって戦場とし、そこで恋人のために一本の薔薇の木をより赤く育てるようにする。

ドクトルの家に着いたときアルバーノがした最初のことは、遠くの谷の町へ出掛けて、いかがわいし講師にも会わず、更にはもっと、意地悪な医師のスフェックスから盲目の再発について毎日聞かされることのないようにすることであった。ただ誠実なショッペだけは一緒に行った。殊にショッペは自ら、合理的振る舞いで、スフェックス家では野党を形成する術を心得ていて、スフェックス家ではもはやショッペに我慢ならない状態であったからである。図書館司書の温かさは、講師の冷たさと共に、はなはだ伯爵に対し募ってきていた。 — 同じような理由からで、リラールへの大胆な脱出と情熱的な野蛮さは、彼をもっとアルバーノの側に近寄せていた。「私は最初こう思っていた」（とショッペは言った）「この若者は、この若者が学校に行くのを見たとき、ただ年を取るだけであろう、と。私はしばしば月の男を、月では周知のように、喉の渇きと大気圏がないために、何も酌するものがないのでありますが、この若者より立派な飲み手であると思っていた。しかしようやくこの若者は大股で駆けている。若者たる者は、老シュペーナーのように、すべてを俯瞰し、高みから描く必要はない。若者は最初初心者のように書斎やスケッチ部屋ですべての特徴を少し大きすぎるほどに描かなければならない。小さな特徴はそのうち生じてくるのだから。雷の馬というのはいるが、雷のロバや雷の羊はいない、こんなものを家庭教師や講師は育てたがり、放牧したがるものであるが。丁度玉突き場の採点係は煙草のパイプにむき出しの火を好まず、ただ蓋の下の炎を欲するようなものだ」。 —

今やアルバーノは一人っきりで本の下で暮らしていた。リアーネの兄がやって来ることは稀になり、彼に対し冷淡であった。いつも受難の女性の周りにこの兄はいたが、この女性について語ることはなかった。兄自身がかつてこの盲目の最初の贈り物を紡ぎ出していたので、殊に自分の妹に飾らない炎の愛を抱いていて、この織物を再度この女性に引きだしてきた男に対し、然るべく憎まざるを得ない、とそうアルバーノは思ったし、そのことを喜んで罰として耐えた。それだけ一層大尉はドイツ騎士団騎士へ惹かれて行った。今やこの騎士の許で彼は予期に反し信頼を得ていた。ここで、最も類似しない者達とも折り合える彼の能力とか傾向は、単にすべての心に対する冷たさではないのか、彼は、どの心をも有しないので、すべての心にただ旅しているのではないか、という疑念が生ずるが、

一 つまるところ疑念でもない[事実である]。

ラベッテも伯爵に、去って行く大尉について幾つかの苦情の手紙を書いてきた。ある手紙の中でこのようにさえ彼女は言っていた。「あなたにただお会いしたい、誰かの前で一度泣いてみたいの、もう長いこと笑うことを忘れてしまっているから」。善良なアルバーノはこの退避をも、さながら自分の悪魔の子の孫として、自分の罪の記録の中に記入した。

侯爵夫人は時折彼を孤独の中から誘い出すことができた。彼女はその美しい唇に小声の鳥笛[誘いの口笛]を吹いた。彼女は父親のせいで、悲しげな息子アルバーノに真の関心を示しているように見えた。アルバーノは痛みを見せてはいなかったが、喜びも見せていなかった。頭巾を被るよりも兜をむしろ被っている男性的女性は、病んだ頭の下に喜んで休息の枕を押し込み、無気力な頭の下に背もたれとして腕を与える。そして喜んで優しく慰め、しばしば余りに女性的女性よりも優しい。ほとんど毎日彼女は大臣の許の、自分の将来の女官、面貌上の妹を訪問して、それでその恋人のアルバーノにすべてを伝えることができた。夫人は、あたかも自分が盲目の女性に対するアルバーノの関係について何も知らないかのような振りをして、一すでに偽装が二人の人間に対する思いやりを一度に明らかにしている、とアルバーノは言ったが、一かくて侯爵夫人は彼に自由に、耐えている美しいリアーネのすべての病状報告を、そもそもリアーネに対する鑑定同様に与えることができた。威力ある女性の流儀に従って、夫人はリアーネに対するすべての正しく称えるべき点を、女性的些細な減点を付けずに述べて、ただ彼女の回復と将来の同伴を願っていた。

「私は非凡な女性に対しては何でも為になることを致します。平凡な女性に対しては何でも為にならないことを致します」と夫人は言って、彼に対し彼の父親がリアーネに対する夫人の計画について書いて寄越したか尋ねた。彼はそれを否認し、そのことを夫人に頼んだ。しかし夫人は、手紙が間もなく来るに違いないから、父親の手紙を読むよう彼に指示した。夫人はいつも空想の花を自分の人生に刺繍するリアーネの傾向だけを非難して、彼女のことを純粋なバロックの真珠と呼んだ。

しかしすべてのこうした会話からアルバーノはただ一層麻痺してショッペの許に戻って来た。彼はただ言葉の慰めと次のような死の判決だけを聞いていた。つまり、彼が被造物世界を奪ってしまったこの辛抱強い魂のリアーネは、相変わらず人生の最も深い洞穴の中に閉じ込められていて、その洞穴の傍らでは単に墓のより深い洞穴だけが明るく開かれたまま横たわっている、と。すべての穏やかな、和らげてくれる、学問とか人間によって彼に贈られた温かい空気は、かの冷たい洞穴の上を越えて行き、彼にとっては鋭い北風となった。彼が彼女を沈んで行く彼の両腕から美しい日々に、長く、永遠の楽園に解放しなければならなかったのであれば、そして彼女が酔って彼を忘れてしまったのであれば、彼もこのことを忘れることができたであろう。しかし彼が彼女を冷たい影の世界に突き落とし、彼女が痛みから彼のことを思い出さざるを得ないということ、一一ただこのことだけを彼はいつも思い出さなければならないのであった。

ショッペはこうしたすべての窮状に対する「膏薬」は(彼の美しい言葉遊びによれば)「舗石[石の膏薬]」の他に、つまり旅立ちの他には知らなかった。少なくとも、国外におれば状況の問い合わせとか返事に対する有毒な心配も終わってしまう、と彼は結論付けた。帰って来たら、多くの痛みが省略されているか、あるいはそれどころか片付いていると分

かろう、と。

アルバーノは彼の最後の友の言うことに従った。彼らはハールハール侯国へ旅だった。

第八十三周

ショッペは途中アルバーノに慰めの軽野戦病院を、一 痙攣鎮静剤を 一 シュトルーヴェ[Strube, 1798f.作]の『緊急養生便覧』を、一 心の消耗に対する散薬の狐の肺等々を処方してくれた、そして里程標石ごとに慰謝の弁を揮ったと考える人は、そう考える人は、ショッペに笑い飛ばされよう。

「どうしたものだろうか」（と彼は言った）「不幸が若者を手ひどくこね回すことになったとき。一 まずは痛みを、自分を今力づくで押さえ込んでいる痛みを、自ら力づくで押さえ込むことである。何も運ばない者は、何も耐えることを学ばない」。流涕に関しては、彼はストア主義者としてそれに対して敵視することが最も少なかった。彼はよく言っていた、エピクテトス、マルクス・アウレーリウス、カトー、それにもっと多くのこれらの氷よりは鉄でできた男どもは、喜んで体に対し痛みのこのような最後の香油を許したことだろう。ただ精神がその背後で濡れずに乾いたままでありさえしたら許したことだろう、と。「慰謝を願い、想定することは、それが本当に慰めのない情けないことだ。何故一度くらい痛みは何の薬も与えずに、純粹に耐え通すように仕向けないのだろう」と彼は言った。

しかし彼の見解と彼の生活は、彼が目指さなくても、伯爵には威力があった。伯爵はすべての偉大なものによってただ偉大にされた、他の者達は卑小にされたのであるが。ショッペはカトーたる者として廢墟の上に、勿論最大の廢墟であったが、座っていた。賢人がトルナードでさえほとんど動かすことのない赤道での晴雨計の管でなければならないとしたら、彼はそのような者であった。たまたま彼はある料理屋で、そこで見つけた『ハンブルク公平通信員』で伯爵の張り合わされた翼を開けてやった。ショッペはその中から二つの広大な戦闘を読み上げた。その戦闘では地震のときのように、家々ではなく、国々が沈没したのであり、その戦闘による傷や涙はただこの世の邪悪な精霊のみが知ることを欲することができるようなものであった。その後彼は、一 すべての世代の葬儀の行進に倣って、人類の放たれた噴火口に倣って、真面目な様を続けて、『知性新報』を読み上げた。そこではある者が未知の小さな墓に立って、普通弔意を表する世間にこう告知し、請け合っていた。「生後五週間の私どもの子供が見舞われた打撃は傷ましいものでありました」、一 とか、「かつてない痛切な悲しみの中で」、一 とか、「私どもの八十一歳の父の逝去に動揺して」等々。

ショッペは言った、自分がこれを述べることは正しいことだ、というのはどの窮状も、一般的な窮状でさえも、結局は単に一人の胸の中にのみあるのだから。自分自身が戦死した穀物の束で一杯の赤い血の戦場に横たわっていたら、できるものなら立ち上がって、周りの死者達に自分の銃創についての短い弔辞を読み上げることだろう。かくてガルヴァーニ[Galvani(1737-98)]はこう述べている、電氣的につながっている蛙は、雷が地上で反響するそのたびごとに、痙攣する、と。

彼は野外でもこの命題のままであった。彼はマティソン[Matthisson(1761-1831)、Briefe]が

旅行記の注釈として次のように告げていることを非難して引用した。つまり人々はスイスの現今のアヴェンシュで、即ちローマ人によって潰されたヘルヴェティアの首都アヴェンティクムの所々で、草のより薄い痕跡を見て、通りと市壁の略図を見いだすことができる。マティソンは述べているが、しかし明らかに過去の同じ立体図的な投影は至る所どこの野原でも見られるものである。 — どの山も洪水にあった先の世の岸辺であり、 — どの地もこの世では六千年前からのもので遺物であり、 — すべてが地球の墓地であり、 — 廃墟である、 — 特に地球そのものがそうである、と。「いやはや」（と彼は続けた）「そもそも過ぎ去っていないものがあるか、民族、 — 恒星、 — 女性の貞節、 — 最良の楽園、 — 多くの権利、 — すべての書評、 — 前半の永遠、 — それにまさに今はこれらについての私のつまらぬ記述。 — さても人生がこのように取るに足りぬ戯れにすぎないのであれば、人々はカルタの王よりは、むしろカルタの描き手になりたいと思うに違いない」。

アルバーノのような、 — 力強い、誇り高い人間は、 — 三十年戦争の許、 — 最後の審判の日々の許、 — 移動中の民族の許、 — 飛び散る諸恒星の許で、自らの着物を脱いで、自らや宇宙に、自分の胸の上で出血している千切れた血管を見せるようなことはほとんどしないであろう。

かくて兩人が夕方半ば開けた森の高台に登って、そこから眼下に素晴らしい栄光の国を目にしたとき、辺りは好天気で、異国風で、あたかもまだ地球全体が温かくて、いつも緑なす東洋の国であった時代から取り残されている按配であった。 — 木々や夕陽を前に見渡す限り、寄せ集められている山の角から果てしなく西側へ別れて行く一つの谷となっているように見えた。 — 太陽の前で幅の広い翼を巻き付かれた多彩な色の風車が、夕方の明かりや庭、羊、子供達を区別しようと思っっている目を混乱させていた。 — 両山腹には広い服の子供達が緑の帽子リボンを長くはためかせて、家畜番をしていた。 — 斑点のある酪農所が野原の緑の中、暗い小川に沿っていた。 — 高く積まれた干し草の馬車の上では結婚式の午餐に行くように着飾った農婦が乗っていて、傍らを農夫達が日曜日の晴れ着を着て歩いていた。 — 太陽は丸い植込みの櫛の木の柱列の背後に、これらのドイツの自由の木、神殿の支柱たる木の背後に来ていた。 — これらの木は神々しく、拡大されて、高く黄金の青空の中へ引き上げられて、揺れていた。 — 今や感動した二人の遍歴者は間近な影となったオランダ風な村を見下ろしていた。 — 可愛い、描かれた園亭から合成されたかのようで、中央に菩提樹が円を描いていて、遠からぬ所に一人の若く、花と咲く獵師がいて、あるいはアマゾンの女のような女性が、一方の手で小枝で一杯の帽子を取り、もう一方の手ではバルコニーの横木でバケツを井戸の上高く持ち上げさせていた。

「お尋ねするが」（とショッペは使者のブリキ標と背囊を持って彼らの後からやって来た公務の使者に尋ねた）「この村は何と言うのですか」。 — 「アルカディア」と彼は答えた。 — 「しかし何の詩的な白化粧も頂点化もなしに話せば、詩的な友の方よ、本来下のこの土地はどう書きますか」とショッペはまた尋ねた。うんざりして公務の使者は答えた。「アルカディアと言います。聞き取れませんか。 — 古い官房荘園で、我らの侯爵令嬢のイドーネ（イドイーネ）が経営しています。年がら年中、絶えずそうして、 — すべてをお望みのままにしています。他にもっと聞きたいですか」。 — 「お

宅もアルカディアの方ですか」。 — 「いや、ザウビューゲル[雌豚鑑]」とこの使者は声高に返事した、すでに五歩先に進んでいた。

自分の友が使者の話聞いて大いに動揺しているのを見た図書館司書は、ここよりもっと良い夜の宿があるかと喜ばしげに彼に尋ねた。五月の月の夜はここそのものが一番であろうが、と。しかし彼はアルバーノが煉獄に墜落しているのを見てびっくりした。良心と彼の愛とが煉獄の火を着けていた。突然リアーネがイドイーネと紛らわしく類似していると思い出したのであった。「いいかい[du での呼びかけ]」（と彼は言った、夕方の魔力の感動で一層激しく震え続けながら）「イドイーネはどの点がリアーネと違うかい。 — 彼女は見えるのだ」と彼は自ら付け加えた。「彼女はまだ私を見たことがないのだから。いや許して欲しい、動じない人よ。全くいつもとは違う具合になってしまった。 — 彼女は今死んでしまう、あるいは何らかの不幸が迫っている。火災の前の蒸気のようなものが私の魂の中で陰鬱に、長い雲となって昇って来る。戻る他ない」。

「よろしいかな」（とショッペは言った）「いつか、私が今考えていることをすべて貴方に語ろうと思うが、 — しかし今の所は貴方を大事にしよう」。これも何の効果もなく、彼は帰った。しかし丁度次の旅の日には、ショッペがかくも輝かしく磨いてくれた彼の受難の杯が濡れて黒く錆びることになった。彼らはようやく夕方に帰着した。その時には薄明かりや月光、蒸気、靄、赤みがかった雲の魔術的煙りが町を一層見知らぬものにしていた。アルバーノの驚の目は、この煙りを二つに切り裂いて、彼は — 駆けていた。盲目のリアーネが一人、高いイタリア式屋根の上で彫像に向かって行くのを、あるいは奈落に落ちるのを彼は目撃した。荒々しく一言も発せず、彼はより低い路地の間を走った、 — 建物で塞がれて宮殿を見失い、一層憤激して走った。 — 彼は彼女が舗石上に叩きつけられているのを目にすると思っていた、 — 彼は白い彫像を再び目にした、彼女は一つの彫像に絡みついていた、サボテンの「夜の女王」の老庭師が頭に帽子を被って彼女の前に立っていた。 — 彼がようやく丁度宮殿の下に着いたとき、上では見知らぬ小間使いの娘が彼女の側に立っていて、下では集まってきた女達が上を見上げていて、互いに尋ね合っていた。「一体どうしたの」。 — リアーネは（そう見えた）天を見上げていた、そこには単に幾つかの星が燃えていた。それから長いこと月を見上げていて、その後下の人々を見た。しかしすぐに彼女は彫像から離れた。庭師は中庭からやって来て、通り過ぎながら自分の問い合わせる妻に言った。「彼女は見えるのだ」。「今何と申された」（とアルバーノは言った）「上へお上がりなさい」と彼は答えて、さっさと歩いて行った。このときブヴェロが歩いて来た。 — アルバーノは手短なお辞儀と挨拶をして立ちほだかった。 — ブヴェロは彼を少しばかり見つめ、「失礼ながら、存じ上げません」と彼は荒々しく言って、急いで去った。

第八十四周

さて盲目のリアーネをもっと間近に眺めてみよう。

彼女が壊されて、母親に連れ戻された日から続いて行く彼女の日食の下で、彼女にとってはより涼しい、休まる生活が始まった。地球は変わってしまっていて、地球に対する彼女の義務は廃止されたように見えた。 — 青春の銀色の視線は、人間の視線同様に、今や盲

目となって、彼女の短い歓喜、この小さな五月の花は、すでに明けの明星の下で摘み取られた。 — 彼女の最初の恋人は、残念ながら、彼女の母親が予告していたように、彼女が思っていたほど敬虔で、優しくはなく、彼女の父親同様に、はなはだ男性的で、粗野、野蛮であった。 — 時と未来は消え失せ、そこからの未来の日々は彼女にとっては、単に描かれた記念の盲門で[記念の門、Jubelpforte は聖ピエトロ大寺院にあって記念の二十五年ごとに開けられる]、人間の手で開けられるものではなく、そこを通過してはもはやどこにも行けない門で、魂が肉体の物憂い引き裾のコートを大地に投げ棄てたとき、束縛のない魂で通り抜ける他ないものであった。

彼女の心は今や、 — アルバーノが男性の心にしがみついたように、 — それ以上に女性の心にしがみついた。この心はより優しく、情熱の高熱のないまま鼓動するものであった。羅針儀の針が螺旋状の百合として姿を見せるように、徳操は彼女にとって女性的美しさとして姿を見せた。

彼女の母親は、彼女の盲人の椅子から離れず、彼女に読んで聞かせ、フランス語の祈りさえも読んで聞かせ、彼女を慰めながら支えた。彼女は容易に慰められた。母親の苦しげな顔を見ることはなかったし、ただ平静な声を聞くだけであったからである。ユリエンネは初恋の埋葬以来、古い殻を投げ棄て、友の女性に対する新鮮な炎を心から放っていた。

「あなたに誠実な振る舞いをしていなかった」と彼女はあるとき言った。二人の女性は秘かに打ち明け合って、それから二人の魂は花の花弁のように一つの甘美な萼へとまとまった。侯爵夫人は真面目に学問について話し、母親の心さえも掴んだ。母親にとって男達の社交の中では学問は余り気に入らないものであった。夕方就寝前にはまだカロリーネが歓喜の天からのように彼女の影の世界へ舞い降りて来た。そして日々光輝と色彩を増して行ったが、しかしもはや語ることはなかった。リアーネは互いに見つめ合いながら、穏やかに微睡んだ。

時折ひょっとしたら自分の大事な形姿達、殊に母親をもはや目にすることはないのであるかという痛みに襲われた。すると、あたかも自らが目に見えなくなって、すでに一人っきりで第二世界への暗く深い通路を歩いていて、門の所で女友達が遠く背後から自分に対して呼びかけているかのように思われた。 — そこで彼女はあたかも死から蘇ったかのように優しく愛して、大いなる再会を楽しみにするのであった。シュペーナーは自分の教え子を毎日訪ねて来た。彼の強さと慰めとに満ちた男性的声は彼女の暗闇の中では晩禱の鐘の音で、遍歴者を陰鬱な森の中からまたより喜ばしい明かりの許へ案内するものであった。かくて彼女の聖なる心は更に神聖に高められた。そして痛みの暗い受難の花々は、生温かい目の夜の中、眠りながら、自らを閉ざして行った。罪人の受難は敬虔な者の受難とは何と異なることか。罪人の受難は月食で、このせいで黒い夜は一層野蛮に一層黒くなるものである。敬虔な者の受難は日食で、これは暑い日中を涼しくし、ロマンチックな影を投げかけ、小夜啼鳥がさえざり始めるようになるものである。

このようにしてリアーネは周りの見知らぬ溜め息の最中、周りの雷雨の中、静かな、癒やされて行く胸を保っていた。このようにしばしば優しく、白い雲は最初千切れ、追い立てられるが、嵐がまだ下の大地の上であって、すべてを動揺させ、引き裂いているとき、結局まとまってゆっくりと天の中を進むのである。しかし善良なリアーネよ、三十二ものすべての風は、それらが美しい日々をもたらそうと、追い払おうと、休息の風の風よりも

もっと長く続くのである。

第八十五周

大臣は、彼女がリラールから殺害された目で、家に戻って来たとき、自分の右目には地獄を、左目には煉獄を置くことになった。 — というのは今まで運命がかくもひどく自分を騙したことはなかったからである。つまりかくもひどくすべての彼の計画と眺望を破壊し、娘の女官の職、侯爵夫人の指でのこの前飾りの指輪を破壊し、結局彼の二重に織られた蜘蛛の網のすべての獲物を破壊した。

惨めにこの男は運命が散薬を置いたスプーンを前に、抗っていた。この散薬の上に彼の計画の飲み込まれたダイヤモンド[ミケランジェロの印章を飲み込んだ Stosch の逸話が思い出される]を吐き出す予定だったのである。彼は強力極まる説教を、 — そう彼はホラティウスがその諷刺を呼んだように、 — 「彼の女達」に発した。彼は戦争の神、地獄の神、動物、怪物、悪魔、一切であった。 — 彼は今や何でも試みることができた。 — しかし何の役に立ったか。 —

まさにドイツ騎士団騎士がこの倫理的気分のときに彼に出会った際、大いに役立った。この騎士は細密画を描く際の娘についての父親の約束をまた新たに取り上げ、要求することに何のためらいも見せなかった。ちなみに彼はすべてお見通しで、知らぬ振りをしていた。盲目の女性のモデルの情景に対し、彼は大尉から聞き出した注釈を基に、ロマンチックな展開を思い描いていた。リアーネの形姿に対する彼の美術愛好はこれまでほとんど損なわれていなかった。彼のゆっくりとした忍び足の接触は彼のマムシの冷淡さ、彼の世慣れた紳士風の力にふさわしいものであった。老父は、 — 彼は人生においても帝国新報同様にいつも六万から八万ターラー有する協力者を行動のために求めていて、 — 嫌うどころではなかった。一人の鷹匠、つまり悪魔によって、一つの止まり木に置かれたこの二羽の鷹は、互いに良く理解し合って、相性が良かった。ドイツ騎士団騎士はこう伝えた、彼女の細密画は、決してモデルとなろうとしないイドイーネと顕著に似ているため、侯爵夫人との幾多の冗談の役に立とう、いやそれ以上に、リアーネに対する自分の「情熱」のために不可欠であり、今や盲目だから知らないうちに描くことができよう、その絵の下には「美しい盲女」とかその類いのものを記すことにする、と。老大臣は、申したように、その考えをすべて是認した。イタリアの歌姫達が所謂母親をパスポートの代わりにその旅に連れて行くように、彼は自分を所謂父親と見なした。彼は考えた、いずれにせよこの娘ではもはや大して期待できない。これは埋蔵資本で、儲けが少ない。ドイツ騎士団騎士が代父として、子供に名前を提供するように、父たる私に提供する耳付き代父祝儀の小銭をポケットに入れることにしよう、と。

悪漢のダブルはその突進、流出を単に一つの熊手で妨害されていて、この熊手はかわかますの歯からその掠奪を阻止しかねないものであった。ニュルンベルク出身の老いた、口うるさい、しかし実直な侍女がこの熊手であった。この侍女はリアーネから離すことも、黙らせることもできないであろう女であった。ブヴェロなら勿論、従者に対するロベスピエール、死の天使であって、フルレの立場であれば、このニュルンベルクの女性に対し、数日前に、男の従僕によって若干の複雑骨折をお見舞いさせ、それから路上に投げ棄てさ

せていたことであろう。しかし大臣は、 — その心は柔らかくて、 — これができなかった。彼にできたすべてはただ次のことであつた。彼は侍女を自分の部屋に呼び寄せ、侍女にマグデブルク製の彼の耳を盗んだと非難し、 — どんな抗弁にも自分の今有している耳では聞く耳を持たず、 — しかし些細な無礼も聞き逃さず、 — ようやくこの盗人たる粗野な女を即刻お払い箱とせざるを得ないのであつた。新しい侍女としてのこの後任の女は誰であれ、金が物を言うとは彼は知っていた。

彼はその後侯爵夫人に自分と大臣夫人に対するお茶と晩餐への招待を願い出、 — 細密画の画家[ブヴェロ]を任命し、 — 新しい小間使いの娘に言い含め、 — すべてを正しく設定しようとした。

二匹の虎が、伝説によると、使徒パウルの墓のために穴を掘ったそうである[ジャン・パウルの勘違い、隠者パウルスのためにライオンがしたとされる]。かくてここでは我らの兩人が一人の聖女のために一つの穴を掘った、というのは — 一枚の絵しか描かれないのであれば、 — 何のためにこんな手間をかけるのか、他には考えられないからである。しかし父親にはほとんど弁護ができよう。第一に彼は明白にドイツ騎士団騎士に対し、侍女は自分の意見では部屋か隣の部屋で、患者のリアーネが何か欲しいようなものがある場合に備えて、待機できることになっていると述べたのであり、 — 第二にいつもは柔和なこの男は、大臣として法律と関わるようになって、ある種の砂利を仮定し、ある種の残酷さを前提としていたのである、この残酷さは目の帯の背後で、痛みを見ることなくアレオパゴス法院として判決を下す正義の女神[Themis]にとっては、すでにディドロ^{*1}が盲人達はより残酷であると主張しているだけに、より一層自然なことなのである。 — 第三に、大臣はこの子供を、以前はユダヤ人や魔女達がキリスト教徒をそうしていたとされるように、十字架にかけて、ユダヤ人や魔女達のようにその血で何か行おうとしても、その子供が亡くなったら、彼よりも深く自分の子供のことを悲しむ者は恐らく誰もいなかったと思われるのである。いずれにせよ両親やそもそも人間は、自分の間近にいる者達不幸には容易に耐えられるが、その喪失にはほとんど耐えられないのである。丁度我々はまだもっと身近にある髪の場合、それが焼けても、切断されても感じないが、しかし髪を抜かれると痛々しく感じられるようなものである。 — 第四にフルレは、自分の頭の中ではまあまあ無垢の色合いの考えが、塩化銀や立派なインクに似て、光にささされると、即刻黒く変ずるという不幸にいつも見舞われたのである。

他には — このような緩和を除けば、 — 彼の行動には、私が弁護できない幾多のことが多分収まっていたことであろう。

その夕刻となった。大臣夫人は夫婦揃って宮廷へ行った。 — 新しい小間使いの女はブヴェロによる花嫁付添人としてすでに三日前から必要な準備を、あるいは悪事を行っていた。 — 彼女は彼にアルバーノ宛のリアーネの手紙を容易に貸し与えることができた。母親は習慣的に見張りの目を目明と思っていたからで、彼はその手紙から話の特徴や色彩のタッチを取り出すことができ、かくて彼は劇場での出会いのとき、盲人リアーネの前で、彼女の主人公、つまりアルバーノの色合いを出すことができた。 — それにロケロ

*1 ディドロ『盲人についての書簡』[1749年の論、1782年ディドロは撤回している]。

ルと彼はしばしば十分に賭博して、ロケロールの声を、従ってアルバーノの声を意のままにしていたのである。

思うに、祝宴の夕べの前の彼の準備の日々は合理的になされていたことであろう。

小さな首都では早くにお茶が飲まれるので、彼は九月の細密画画家が然るべきものであるほどに、すでに早々と登場できた。彼がその物静かな形姿を安楽椅子の中に認めたとき、頬に色褪せた花の萼を浮かべて、しかしどの決意もより堅固に根付かせて、より冷たく命ずる聖女となっているのを見たとき、彼の中で彼女の手紙を読んで同時に吸入された憤怒と熱情とが交互に高まってきた。――ただこのような胸腔の中でのみ、同時に金属弦と腸弦とが、苛酷さと悦楽とが張られているのであって、悦楽と胆汁とのこのような結合が考えられるものとなっている。ブヴェロの過去全体と人生の物語の書は、――ヘロドトスの書が九人のミューズに捧げられなければならないように、――三人の運命の女神パルカに、各人に一冊捧げられなければならないことだろう。

彼はこっそりと窓の中へ入って、自らと絵の具箱を置き、急いで点描を始めた。その間リアーネは彼女のとても教養のある本好きな小間使いの娘にフェヌロンの『敬虔作品集』の第二巻から¹朗読をして貰っていた。セフィシオをこの大司教は全く感動させなかった、

――彼は例えば純な愛（神の純な愛について）について聞き取ったことを、応用によって不純な愛に変えて、神的なものによって悪魔的なものに燃え上がらせた。――ちなみにリアーネの特徴で感動的なものを、彼は自分の所に配置した。彼は今描かなければならなかったからである。彼の多彩な豹の目は、赤く鋭い虎の舌に似て、甘美な柔らかな顔の上を醜く舐めた。――「ユスタ、おやめなさい。読み上げが辛くなっています、息が短くなっています」と彼女はようやく言った。肖像画家の息遣いを聞いたからである。この華奢な小さな手と唇の接吻を、彼の燃える心の展開全体を、先に延ばすこと、つまり彼女の輪郭を彼の手の素早い点刻機械によって毒インクで白い象牙に点描されるのを見るまで延ばすことは、彼にとって犠牲ではなく、前もっての楽しみ、甘美なおやつであった。

ようやく彼は彼女を白地の上に多彩に描いた。「分かった、ユスタ」（と彼女は言った）「お祈りの鐘が鳴っている、何ももう見えないでしょう。今度は楽器の所へ連れて行って」。

――つまりハルモニカの許であった。彼女はそうした。ブヴェロはユスタに去るようにと合図した。――彼女はまたそうした。黄色の庭の盲蜘蛛は今や華奢な白い花めがけて行った。――この盲蜘蛛は彼女の夕べのコラールをにんまりと聞いていた。彼女の毀された目が祈りのために開けられると、まことに絵画的な案に思えて、この忠実な絵描き²は、かなうものなら、これを象牙の作品として具体化させたいと決意した。

「美しい女神よ」と彼は突然アルバーノの声を真似て、かの神聖な調子で叫んだ。この調子がかつてアルバーノがより楽しい時、より高貴にとぎれとぎれに発したものであった。彼女はびっくりして、しかし疑わしげにこの夜、耳をすまして聞いていた。この驚きは見晴らしの画家にとっては、――というのは彼女の顔が彼の見晴らしであったから、――全くもって気に入らないものではなかった。「雷の庵でのこのハルモニカを思い出して

*1 (訳注) Fénelon(1641-1715): Sur l'amour de Dieu. Oeuvres spirituelles. Bd.1. 1802

*2 [暗箱に対する]明箱

ください」。彼は噴水小屋と混同していた。 — 「貴方ですか、伯爵。 — ユスタ、どこにいるの」と彼女は不安げに叫んだ。「ユスタ、こちらに来てください」と彼はそれに真似して叫んだ。小間使いは彼の声と彼の — 目に従った。「お嬢様、何でしょう」と彼女は尋ねた。しかしこの時リアーネは、彼女に伯爵の入門と訪問状のことを尋ねる勇気がなかった。恋人とフランス語で話すことは、この小間使いが理解しているのでできなかった。それ故ウィーンでも革命時にはこの言語が禁じられたのである。この言語は確実に、 — 自由に従って、 — 貴族と従者の間のある種の平等性をベストのように広めるからである。

意地悪く、喜んで、ブヴェロは、今彼女は伯爵について有益な不審を、つまり自分の性格仮面に自由な余地を残す不審を明らかにしているように見えたので、この思案している女性にユスタに対する彼女の命令を思い出させた。彼女はユスタに明かりを持って来させなければならなかった。

「不誠実ナ方」（と彼はその後始めた）「私はあらゆる障害を乗り越えて、貴女の足許に身を投じて、貴女の許しを請うています。自惚レテイルカモ知りマセンガ、敢エテノコトデス」（と彼は続けた、彼女のせいでより激しくなっていた）「美シク残酷ナ方、ドウシテコノヨウナ仕打チナノデス。コノ動キハ。 — 私ハアナタノあるばんデ、マダアナタヲ愛シテイマス。 — ぶるーめんびゅーるヲ思イ出シテクダサイ。素敵ナ滞在デシタ。

— 恩知ラズノ方。モウ少シ、私ニ対シテ感謝シテ頂ケルモノト願ッテイマス。 — 約束ナサッタコトヲ思イ出シテクダサイ」（彼女から聞き出すために語った）「アナタノ神聖ナ胸ニ私ヲ抱キ締メテクダサッタトキニ」。...

純な魂は、自らを汚すことなく、不純な魂を映し出す。そして知らずして迫って来る苦しめるものを感じ取る。丁度鳩が、人々の話によれば、きれいな川で水を浴びて、そこに飛んで来る猛鳥の像を見て取るようなものである。短い息遣い、揺れる言葉の調子、すべての単語、説明し難い何ものかが彼女の魂の間近に恐ろしい幻影を、これはアルバーノではないという嫌疑を生じさせた。彼女は発した。「貴方はどなたです。貴方は伯爵ではありません。ユスタ、ユスタ」。 — 「それ以外に誰でしょう」（と彼は冷たく答えた）「私の名前を称することが許される者がいでしょうか。いや、私ハ当人デナケレバイイト思ッテイマス。希望ハ人生ノ月ダトアナタハ書イテクダサイマシタ。シカシ私ノ月ハ沈ンデシマッタ。シカシ私ハ月ヲ照ラシテケレル太陽ヲマダ崇メテイマス」。

ここで彼はこの食となった、一匹の竜と戦っている太陽の手を握った。 — すると彼の指の噛みきられた爪と、枯れた指と、彼の騎士団の十字架にさっと触れたことで、本当の名前を彼女は知ることになった。彼女は叫び声を上げて身を離し、どこかも分からず逃げ去って、また彼の手に陥った。彼は彼女の手を、激しく、瘦せて熱い唇に持ち上げた。

「いや私ですよ」（と彼は言った）「貴女の伯爵よりももっと貴女を愛しています、かの軽率な伯爵より」。

「貴方は盲目の娘に劣等で罰当たりな方です、 — 何をしたいのです。 — ユスタ。誰も助けてくれないの。 — 神様、目を見えるようにしてください」（と彼女は懇願して叫び、どこかも分からず連れ戻された）「ブヴェロ、ひどい方です」と彼女は叫んで、彼のいないところでじたばたした。彼は、火薬のように、舌先で冷ましながら、焦がしながら、打ち砕きながら、欲望に点火されると、若干の射程距離を彼女から取って、彼女の

興奮した花盛りの波立ちや屈服に画家の目を投じて、平静にかの穏やかな調子でこう言った、この穏やかさは海綿の腐食侵食性の乳汁に似ているものである。「静かになさってください。美しいかた、私はまだ静かにしています。何に助けを求めるのです」。

不安の蛇の息吹に酔って、この迷える娘は歌い始めた。しかしただ冒頭だけであった。「歓喜よ、素敵な神々の火花よ」、 — 「私はドイツの娘です」、 — 彼女は走り回ってまた歌った。「君知るや、レモンの」、 — 「あなた、ひどい人」。 — [オフエリアの模倣]

今やこれで気を良くした巨大な蛇はその冷たいとぐろを巻いて、舌先を震わせながら、高く身を置いて、発射し、巻き付こうとした。「私ノ心ハ」（とこの蛇は、いつも情熱に駆られるとフランス語を話して言った）「スベテノ感覺ヲ魅了スルコノ唇ニ飛ビツク」。

— 「お母さま」（と彼女は叫んだ） — 「カロリーネ、神様、見えるようにしてください。私に目をください」。 — するとすべてを愛する神はまた目を彼女に与えた。自然の苦悩、埋葬の声高な準備が、この仮死体にまた目を開けさせたのであった。

何と敏捷に、彼女は拷問部屋から逃れたことか。欺かれた猛獣は、盲目と混乱とを当てにし続けていた。しかし彼女が容易に階段をイタリア式屋根まで駆け上がって行くのを、ブヴェロは見ると、ただ駆け寄って来る小間使いの娘に彼女の後を追わせて、危害が及ばないようにした。そして今やこれまでの盲目を偽装と見なした。彼自身は部屋から細密画の下絵と取って来て、空腹の、傷を負った怪獣の如く、うんざりして、ゆっくりと家から出て行った。

第二十ヨベル期

ガスパールの手紙 — 別れ

第八十六周

「彼女はまた見えるようになっている」と翌日の朝、カールは喜びに酔って、伯爵に呼びかけた。最近のすべての冷たい諸関係には頓着していなかった。彼は全く昔のままであった。彼の憎しみは彼の愛よりもはかないものであった。憎しみは彼の場合、やがて解け去る氷の上にあって、愛はいつも航行して行く川の流れの上にあったからである。赤面してアルバーノは、誰が眼科医であったのか尋ねた。「良い意味での驚きだ」（と彼は言った） — 「ドイツ騎士団騎士のお蔭で、彼が彼女を描こうと思ったとき、約束で私の両親は居合わせなかったのであるが、 — あるいは本当に描いていたときか、 — ちょっと今混乱してよく分からないが、 — 突然彼女は他人の男性の声を耳にすることになって、それで驚愕と恐怖とで勿論電氣的ショックの如く作用したのだ」。大尉は下の海の底で、彼の奔流の海へやって来るすべての声をただ混乱して耳に入れたのであるが、それでも今回は正しく聞いていた。というのはリアーネは母親に、拷問の件を漏らさないよう頼み込んでいたからで、妹に対するロケロルの愛を敵対者との決闘で示すことになるそのきっかけを兄ロケロルに与えないようにしていたのであった。

アルバーノはこの薄暗い話についての多くの質問を自分の胸の中に収めていた。そしてこの会話を自分の旅の話で打ち切った。

数日して彼は、リアーネが母親と一緒に町を去り、ある年老いて孤独な貴族の未亡人の、ブルーメンビュールの先にある山の館に引っ越すという話を耳にした。純然たる田舎で、また光が彼女の人生に当たるようにし、母親の手で、黒ずんで行く娘の人生の色彩に新たな色彩を添える予定であった。いつもは老いた人間や老いた髪の毛のように、縮らせたり、形を整えることが難しい大臣は、運命の最近の深い落とし穴の中で全く意気消沈して、同じくその穴に陥ったリアーネを食い尽くさず、去るがままにさせた。話全体は観客の前では公園の壁のようにはなはだ覆われて、花々で囲まれていた。ただ講師だけがその話をすべて承知していた。しかし彼は黙っていた。彼は母親の名前でドイツ騎士団騎士から細密画の像を返すよう迫った。騎士はその像の代わりに、冷たく無駄な嘘を並べた。しかしアウグスティは母親と娘に頼まれて、自重し、一切の件に対する復讐にしようと思っていたこの要求を二人のために抑えた。

今や我らの友にとって、彼の良心が偶然の成果で宥められることになって以来、自分の空虚な人生に対する痛みが新たなものとなって、歴然たるものとなった。最も大事な人のことはもはやどうでもよくなった。彼の時はもはや調和的に詩文と愛の組鐘が鳴り出すことはなくなり、単調に日常の塔の時計で告げられた。それ故彼は男達の許に、友情の許に逃げ込んだ。さながら火事の瓦礫の傍らで、まだ緑色をして萌える木々の許へ行くようなものであった。女達の許を彼は避けた。女達は彼にとって、他人の子供達が、子供を失った母親にとってそうであるように、余りに痛々しいことを思い出させるからである。これに対して、ただすべての諸魂日[すべての魂の祝祭]、諸聖人の祝日を祝う、「一緒に愛の愛好者」は何と快活にまことに新生児のように行き交うことか、ようやく抱擁する心から幸せに自由になり、すべての女性の形姿をまた受け戻した財宝の見込みと共に数え上げることができるとき、何と快活なことか。すでにこの自由の感情が勇気を与えてくれて、その感情をまた味わうために、女性の心の捕虜になりたいと鼓舞してくれる。

アルバーノはロケロールとショッペの両手の許、男性的男達の祝祭へ駆け込んだ。 — この祝祭は歓喜の天球の木霊を陣太鼓の上で演奏しようとするものである。 — 薔薇祭の後は単に茨祭であった。享樂三昧で凌げる絶望があるものである。例えばアテネでの[ペリクレスも倒れた]ペストの時、 — あるいは最後の審判を予期する時、 — あるいはロベスピエールの戦闘のナイフを予期する時のようなものである。大尉はより深く、昔からの混乱と野蛮さに戻って行って、出来る限りこの罪のない若者を、所謂ミュージの息子達と一緒に彼の民衆祭に、彼の永続的な葡萄摘みに、彼の歓喜の募兵地に引き込んで行った。さながらこの友を少しばかり自分の許へ押し下げることがこの友のために必要であるかのようにであった。

アルバーノは、こうした酒神賛歌で彼の泣いている魂が全く歌い出したと思ひ込んだ。そして魂をただなお少しばかり揺すり続けた。しかし彼は認めようとは思わなかったが、彼の若々しい薔薇色の頬は額のように青白くなって、顔は切れた弦の下の鍵のように沈んで行った。彼が笑いながら彼の友の許や友の友の許に色褪せた顔をして座っていて、 — 目と鼻はより高い、より鋭い骨を浮かべて、 — より深い眼窩から燃え出る荒々しい目をしている時、それは感動的であると共に、苛酷なものであった。音楽を前にしては、殊にロケロールの音楽を前にしては、これは我々の船の情熱的な波や揺れが弱音器と雷との作曲家的に使い古された交替とで余りに生き生きと作用するものであり、彼の耳と心は消

耗性の海の精サイレンを避けるように避けた。傷の、折れた槍の破片が彼の本性全体の中で囁るようにかき回した。子供時代に、彼には天の薔薇色の雲がまさに山上にかかっている、手を伸ばせば届くように思われて、しかし山に登って見るとその素晴らしい雲は遠くの天の中へ去って行ったように、今や間近で掴もうと思っていた人生と精神の 아우ローラが、彼の手の上の向こうの青空の中に高く離れて立っていた。人間は苦勞して理想的愛のアルプスに到達する。山のアルプスからもそうであるように、そこからの下山は、
一 更に一層勞多く、更に一層危険である。

ある日カリトンが町へやって来た。ただ彼によりやく夫からの一通の手紙を渡すため、
一 というのはディーアンはすべての芸術家がそうであるように一通の手紙より一つの芸術作品を仕上げるのがより容易で、それをより好むからで、
一 その手紙には自分は間もなくアルバーノと会えるであろうから楽しみにしていると書いてあった。「それではまた彼は戻って来るのですか」と伯爵は尋ねた。彼女は暗い顔で叫んだ。「その通りなのです。
一 先の手紙によれば、まだ年限の間残るそうです」。
一 「何のことか分からない」とアルバーノは言った。

彼は同じ晩にヘルクラネウム[ヴェスヴィオ火山による古代遺構]の絵画の本の閲覧に、
一 この本はカリトンへの手紙と一緒に同じ郵便で来たものであるが、
一 侯爵夫人から招待を受けた。彼女はかの快活な愛の表情を浮かべて、彼を出迎えた。この表情は早速その果てしない感謝を心から引き出すであろうと期待される人の前で浮かべられるものである。彼女は最後に当惑して尋ねた。今日スペインからの手紙を受け取っていないのか、と。彼女は、郵便というものは何を措いてもまず侯爵家に丁重に急いでなされるということを忘れていた。しかし手紙は確実に彼の部屋に届いているであろうから、彼女は敢えて、すべてを明るみに出す時間の役割を省いて、こう手紙に書かれていると言った。「つまり自分は秋にローマへの小さな美術旅行をするのであり、これには彼女の伴を彼の父がして、その気があるなら彼は父の伴をすることになる。これが内緒のすべてである」と。
一 この内緒はまだ半分であった。その後彼女はすぐにこう付け加えたからである。自分は町で最良の女流スケッチ画家にこの旅の喜びを最も喜んで振り向きたい、この女性、
一 リアーネの病が癒えさえすれば、と。

いかに突然心の全体が喜びに照らし出されたことか、長く陰鬱な雨の日の後、ようやく夕方太陽が重たい水の下に黄金の開放された夕方の門のアーチをかけて、その中で純粋に輝きながら薔薇の植込みの中でのように反映する大地の前であって、大地により素晴らしい一日を予告し、それから温かい眼差しで開放された薔薇の植込みから消えて行くという時、そのような具合に我々のアルバーノには思われた。

素晴らしい一日はまだ来ていなかった。しかし素晴らしい夕べであった。彼はヘルクラネウムの絵画をその瓦礫の中に置いたままにし、感謝の念が許される範囲で急いで、父親の手紙の許へ帰った。父親はめったに手紙を寄越さないのであった。

その手紙は以下の通りであった。

「親愛なるアルバーノ。私の仕事と私の健康はようやく落ち着いてきて、私の計画、侯爵夫人と一緒に計画している私の計画、この秋にもローマへの小さな美術旅行をするという計画を快適に実現できそうであり、この旅におまえを招待し、十月に自ら迎えに行く段

取りである。残りの旅の一行はおまえの気にいらぬことはなからう。純然たる有能な美術通ばかりで、フォン・ブヴェロ氏、芸術顧問官フライシュデルファー、図書館司書のシヨッペ（彼が望むならば）からなるものである。残念ながらフォン・アウグスティ氏は講師として残らなければならない。おまえのローマでの師（ディーアン）は大変懂れておまえを待っている。私宛の便りによれば、おまえは立派な侯爵夫人の新しい女官、フォン・Fr.嬢と、この女性はとても上手なスケッチ画家として記憶にあるが、特別に昵懇な仲と聞いている。それで侯爵夫人が彼女をも同道すれば、おまえには楽しみであろう。殊に彼女には健康のための旅が、私同様に、必要だと私の耳に入っているのだから。――春には、いずれにせよ春はイタリアでは最良の季節ではなくて、おまえはまた勉学のためにドイツへ戻ることになる。――もっと打ち明けて話すことにしよう。私の被後見人のフォン・ロメイロ伯爵令嬢にペスティッツでのおまえの霊の話を隠さずに告げる人があった。令嬢は秋と冬、私の不在の間、女友達の侯爵令嬢ユリエンネの許で過ごすことになっており、その上私より早く到着することになっている。それで、伯爵令嬢がおまえとの面識を避けるとしても、驚くことのないようにして欲しい。令嬢の女性としての誇り、令嬢の個人的誇りが自分の名前の詐術的使用で傷付けられており、まさに手品師達に対し論駁の必要に迫られていると感じているのだ。実際、――仮にその手品にもっと真面目な目的があるのだとしても、――この目的のためにはこれほどひどい手段は考えられなかったことだろう。――おまえは名誉の命ずることを行うように。そして令嬢は私の被後見人ではあるが、厚かましく訪問することのないように留意して欲しい。すべては内密のことだ。ご機嫌よう。

G.v.C.[ガスパール・フォン・セサラ]。

これらの見込み、――父親の側にかくも長くおれるという高揚する見込み、――この深い灰からより自由な、より軽快な国の中を徒渉するという癒やされる見込み、――山の館での病んで苦しんでいる心がひよっとしたらレモンの森、月桂樹の森で歓喜と治癒とを再び見だし、多分また与えてくれるであろうという甘美な見込み、――こうした見込みは、人間の喜びに関して、牢獄のような宮廷にあってはとても美しい遊歩道であった。

やがてこの楽しい散歩で、やってくるリンダの像が、彼の邪魔をして、――しかし自分のせいではなく、彼の哀れな妹ラベツテと彼の友人ロケロルのせいであった。いかに禍々しくこの見知らぬ鬼火は、すべての互いに錯綜する諸状況の夜の戦いの中で跳ねるに違いないことか。いずれにせよロケロルは余りに激しく愛するラベツテを彼女の孤独な願望と共に一人つきりにさせているように見えた。彼女は毎週アルバーノ宛の封筒の中に、手紙の溜め息と涙とを送ってきていて、――以前はこれが逆であったのであるが、――これらの涙を彼はすべて、言及もせず、棄てられたラベツテのことも触れずに、冷たく隠していた。

アルバーノは――静かにリアーネとラベツテのことを考量しながら、――彼の性急すぎる友の不釣り合いな運命を嘆いていた。この友の日輪の馬にはただアマゾンの女とか巨人族の女のみが手綱を握れるのであって、立派な田舎娘にはできないもので、この友のプシュケの馬車、雷の馬車は単なる結婚生活の郵便馬車や子供用馬車には立派すぎるもの

であるように見えた。もしこの友が、ラベッテとの結婚の祭壇に跪きながら、たまたま顔を上げて、見守る女性達の中に彼の全青春時代のあの忘れ難い高貴な花嫁を見だし、声高に諦念の結婚の誓いをどもって言わなければならないとしたら、すべては致命的に紛糾することだろうと彼は考えた。

それ故彼は、この友に手紙の内容を打ち明けるのが許されるか疑念を抱いていたが、しかし長く迷っていたのではなかった。「私はこの友に」（と彼は言った）「隠して、欺くべきであろうか。彼を弱い者と仮定して、かの女性と共に生ずる諸状況の進捗を恐れていいものだろうか」。 —

カールが彼の許に来たとき、彼はまずカールに旅立ちを告げ、友の同道さえ頼んだ。自分の青春の友との最初の別れに動揺していた。大尉は、 — その心はいつも空想の共鳴板を鳴り出すためには必要としていて、 — 即刻別れのことで十分な情感を有して描くことができなかった。そこでアルバーノは彼に、 — 唇でそのことを告げることができず、 — 手紙全体を渡した。

読んでいる間にロケロルの顔全体が醜いものとなった、友人の目にさえそう見えた。 — それから彼はアルバーノに炎のような怒りの目を投げかけ、アルバーノはこれに思わず知らず、察せずに反応した。「そういうことか、すべてが分かったぞ」（とカールは言った） — 「そういう具合に解決されなければならなかったわけだ。明日まで待ってくれ」。彼のすべての筋肉が動いていて、すべての特徴が混乱し、すべてが動揺していた。丁度激しい雷雨のとき、小さな小雲が互いに渦巻くようなものであった。アルバーノは彼に尋ねて、止めようとした。「明日だ、明日だ」と彼は叫んで、駆けだして行った。

第八十七周

朝方アルバーノはロケロルから奇妙な手紙を貰った。これを理解するのはラベッテとの彼の関係についての若干の報告をまずしなければならない。

人が自分の友を本当に愛しているとき、その友の妹をほとんど大事にしないことほど難しいものはない。町の人々の心の魅力が解けた後、田舎の人々の心で魅了されることほど容易なことはない、 — ただその逆は除くが。すべての女性を愛する「一緒に愛の愛好者」にとって、その中の一人の女性に対する愛ほど自然なものはない。大尉が一度に以上の三つの場合であったことは証明する必要のないことである。彼は初めてラベッテにこう言ったからである。彼女は所謂彼の心を捉えている、と。彼女は勿論、このような毒の木の妖精をかくも間近で崇拝すべきではなかったであろう。その木の樹液では多くのアモールの矢が有毒化されるものである。しかし彼女や彼女の大方の姉妹は、男性的長所によって、その長所の男性的悪用に目眩ましをかけられてしまうのである。

最初は幾つかのことが上手く行った。アルバーノの妹とアルバーノの純粋な罪のなさが、この不自然な同盟に見知らぬ魔法の明かりを投げかけた。最も有利な点は、彼がその愛のコンサート・マスターとしてラベッテからは、 — 耳より他に多くをほとんど必要としなかったことである。愛することは彼の場合話すことで、行動を彼は単に我々の魂のスケッチと見なして、言葉の方をその色彩と見なしていたのである。二通りの愛がある。情感の愛と対象の愛である。 — 情感の愛はむしろ男性的愛で、これは愛自身の実在の

享受を欲する。相手の対象は、この愛にとっては単に顕微鏡での対象を載せる[客体の]、あるいはむしろ[主体の、主題の]スライド・ガラスであって、そこでこの愛は自分の自我を拡大させて眺めるのである。この愛はそれ故、その愛が燃素として投じられる炎が高く燃え上がり続けさえすれば、容易にその対象を取り替えさせるものである。この愛は行為よりも、これはいつも長く、退屈で、煩わしいもので、むしろ言葉で自らを享受する。言葉はこの愛を描き、同時に増やすのである。これに対し、対象の愛は対象の幸福の他には何も享受しないし、欲しない（大抵の女性の愛とか両親の愛はこのようなものである）、そして単に行動と犠牲とがこの愛に享受を与え、幸せにする。この愛は幸せにするために、愛する。情感の愛は、愛するために、ただ幸せにする。

ロケロールは長いこと情感の愛に身を捧げてきた。それ故彼は多くの言葉を遣わなければならなかった。そもそも彼の心はまず舌先と唇の移送を経て、まことに燃え上がり、飲むものとなるのであった。ラインの滝の許で、彼は最良の、つまり最も感動した気分にはなれなかったことであろう。これは単に滝を褒めるために、 — この川はすべての声を越えて轟いているので、 — 崇高な騒音の前では何も呈示できなかつたであろうからである。

愛の告白の後でのラベッテとの彼の長編小説は様々な章に分割されていた。

彼女の許での最初の章を彼は自分にとって甘美なものとしたが、それは彼女が彼にとって新鮮で、彼に耳を傾け、賛嘆しながら聞いてくれたからであった。彼はその章で素敵な自然について偉大な作品を彼女に対し描写し、それに対するより詳しい感動を混入し、その後で彼女に接吻した。かくて彼女は彼の唇を実際二つの形姿の中で、つまり語る形姿と行動する形姿の中で享受した。彼女からは彼は、申し上げたように、単に対の開けた耳のみを欲していた。この章では彼はまだ彼女との、 — 結婚の若干の可能性を考えていた。男性は容易に新しい愛の魅力を、その愛の価値と持続とで混同するものである。

彼は彼の第二章にかかって、その中で浄福に涙に溺れ、涙の中からその章を書こうとした。実際この目の喜びは、ほとんど最良の章よりも彼に真の喜びを許してくれた。彼が彼女の側に座って、飲んでいると、 — というのは亡き侯爵の心臓同様に彼は好んで自分の生きた心臓を杯の中に埋めたからで、 — そうして自分の人生を、殊に自分の死を描き始めた。そして前もって自分の受難と錯覚を、そして仮装舞踏会での自分の自殺、少年の死を、そしてリングダに対する失恋を描いた。誰が彼本人よりも涙へと感動させられたであろうか。 — ラベッテの他にはいなかった。彼女の目は — 彼女の父や兄によっては男達の涙に対して馴染むことが少なく、象の涙や、鹿の涙、鱈の涙同様珍しいことで、 — それだけに一層豊かに彼の悲しみと愛に対して溢れ出るようになった。しかし甘美な涙というよりは苦い涙であった。これがまた新しい油を彼の炎とランプに注いで、彼は遂にはゲーテの「魔法使いの魔法の弟子」の箒同様に、洪水を引き起こしながら、もはや止めることができなくなるのであった。詩的な性質の者達は同情する者を有している。司法同様にこれらの者達は拷問台の傍らに外科医を有し、外科医が折れた部分を即刻また治すのであり、いやそれどころか圧潰の箇所を前もって調節するのである。

男は自分のことで、歓喜の場合を除いて、泣くべきではなかろう。しかし詩人とか多くの空想を有するすべての人は魔法使いで、この者達は、 — まさに火刑にされた魔法達とは反対に、 — より容易に泣くのである。つまり哀れな魔法達を最悪の水裁判に置こ

うとして、粗野な外傷の不幸そのものより、むしろイメージを前に泣くのである。こんなものを信用するな。燈台草科の毒の木ではその葉から滴る雨粒は有毒なものになるのである。

しかし黙っておく必要のないことであるが、大尉はこの第二章の中で、この立派なそして優しいラベツテと本当に、――結婚するという決意を強めたのであった。「いいかい」（と彼は自らに言った）「全体女どもにあっては、あれこれの二、三の欠点は大したことではない。女どもに対し利子代わりの動物、現物給与の動物の如く欠点のないものを要求するというおまえの馬鹿げた男の望みはもう棄てていいだろう、な、おまえ」。――

今や彼は腰を下ろして、第三章のためにインクに浸して、ここで戯れた。聞いている心に対する彼の全能的唇の力ははなはだ彼を鼓舞して、彼はしばしば彼女が笑い転げて半ば死ぬほどに試みることになった。女達は愛しているとき弱さと熱情から最も容易に笑い草を摂取する。彼女達は喜劇的な台本作家をむしろ自分達の主人公と見なして、それで自分達の高笑いの罪のなさを証明する。しかしロケロールは笑う女性が一層好きになれなくなった。

彼の第四章において、――あるいは扇形[『見えないロジ』の章]、あるいは犬の郵便日[『ヘスペルス』の章]、あるいはメモ箱[『フィクスライン』の章]とか、私が他に（十分滑稽なことに）周代わりに分割しているように、――彼の第四ヨベル期においてと申し上げるが、事はいわば彼にとって一層厳しいものとなっていった。彼がいつも降りて、涙腺の歯車の間にかかっているタール鉢の蓋を開けて、葬儀の馬車としてタールを塗ることにラベツテはようやく慣れて、そして飽きてしまった。深い感動とか動揺は、日々彼にとって、酸っぱいものとなり、つまらぬものとなって行った。彼はますます長い、けばけばしい悲劇を呈示しなければならなくなった。そのとき彼は気づき始めた。田舎娘の舌先は必ずしも偉大な風景画家、魂の素描家、影絵作家ではなく、彼女はほとんど「まあ、あなた」としか言わない、と。それ故彼は第四章ではあまり訪問をしなかった。これはまた大いに役立ったが、しかししばらくの間であった。幸いなことにペスティッツからブルーメンビュールへ半マイルかかることは、ラベツテの美曲線や光輝のためには必要なことであった。町では同じ通りとかそれどころか同じ屋根の下であったら、近さの余り、彼は余りに冷たいままであったことであろう。

このような章からの最も自然な結果は、第五章、あるいは転換の章で、若干の炎をまだ非難と和解のますます速やかな交替の中で燃え上がらせて、それで両人は、電氣的物体が小さい物体に行うように、交互に引き付け合い、反撥し合うことになった。時に彼は何も飲まず、ただ彼女にがみがみ言った。時に彼はグラスを取り、彼女に言った、「私は悪魔で、あなたは天使だ」。彼の愛に最大の打撃を与えたのは、彼の父の賛成で、父は意外にもその愛を認めたのであった。大尉にとっては全く、いつか金婚式[本来の結婚式]を祝うことになったら、あたかも銀婚式[所謂金婚式]を行うかのような具合になるのであった。愛の女神に仕えていると、人は容易に白髪になるより禿げ頭となる。彼はすでに銀婚式の花嫁に対して倫理的に禿げ頭となっていた。幸い彼はリラールでの炎の日曜日^{*1}の直前、

*1 アルバーノが最後にリアーネと一緒に浄福であったときのことである。

あらゆる怠慢と罰当たりなことを進めていて、彼はその日曜日それらの罰当たりを呪うことができた。ただ怒りと罰当たりなことの後にのみ、彼はより容易に愛し、崇拝することができた。丁度這って行く跳ね甲虫が、背中を下にしているときにのみ、早く進むようなものである。かの日曜日次のことを忘れていて、少なくとも見逃している人は少ないであろう。つまりロケロルは朝ラベツテとフルートの谷に座っていたのであり、— ラベツテはそこで重苦しく、孤独に歌ったのであり、— 彼が溶けた様で、愛で高揚した友に向かって来たのであった。この谷での件は当然なことである。長い冷却の（冷淡のではない）感覚の後、— この戸外の大気のタヒチ島での日に、— 両手に有する多くのものの許で（女性の手と一本の瓶を持って）、— 彼女の心の許、向こうの太陽のようにかくも温かく、それでいて平静に、— 彼が鳴らせた孤独な孤児のフルートの音の側で、— このような日と天から何かを得たいという衷心からの願いの許、— そのとき彼はまことに、真の感動を引き寄せて、自分の過去についてぶちまけたいという思いに駆り立てられたのであった（彼は古代の言語に似ていて、これはヘルダーによると過去形の過多と現在形の欠如を有するものである^{*1}）、— いや自分の死について（これも過去の断片である）ぶちまけ、— それから天国の道を行くかの如く進んで行きたいのであった。勿論彼は遠くまでは行かなかった。彼は再び彼の聖ヤヌアリウスの血のように[ナポリの守護聖人でその記念日に死体から血を新たに流すとされる]流れ出るようにさせた。つまり彼の目から[涙]で、従ってまず自分自身の血を流させ、それから恍惚として、至上の天に投げ出されている魂に対して、得難いことを要求した。— この魂[ラベツテ]は投げ出されたハンカチの前で、被せられたハンカチの下のカナリアのように黙っていたので、— つまりか弱い歌を要求した。ラベツテは歌えなかった。彼女はそのことを言い、拒んだが、結局歌った。しかし彼女は空しく歌いながら、彼のこと、彼の荒々しい濡れた顔しか考えていなかった。

彼がその長編小説にもたらしたすべての中で最悪の章は恐らく第六章で、これを彼はリラールでの「照明の夜」に書き下ろした。最初彼は黙して、輝きのない見物人の女性ラベツテを一人つきりにさせておいて、自分は見知らぬ女神達で一杯のヴィーナスの馬車の後を追っかけて行き、飛び乗っていた。次第に喜びが次々に忍び込んで来て、毒蜘蛛に彼は噛み付かれ、これで病的狂躁が引き起こされた。節度は人生の真の強壯剤であるので、この力強い薬剤に対しては、ますます強力な服用の必要に駆られないようにするために、ほんの稀にしか逃避せず、この服用には全く慣れていなかった。とうとう彼の許で、中国の陶磁器^{*2}のように満たされることで諸形姿が浮かび上がって来た。彼はラベツテに同情し、愛して近寄って来て、彼女と一緒に信じ、彼女に対して優しく、あるいは善良であると思っていた。自分は単にすべての女性に対しそうであったからである。

彼は彼女を敵対する他人の目の軍勢から拉致して、彼女の許で接吻をしようと思った。接吻は禁じられ欠如するとまた蜜の味がするからであった。彼女は拒んだ、人目がない所

*1（訳注）Herder:Über den Ursprung der Sprache. 第一部、三章。

*2 中国人は以前陶磁器に魚や他の形姿を描くことができ、これは器を満たせば、そのときにのみ、目に見えるものであった。『教訓的書簡集』、第十二巻。

では疑惑が生ずるからである。そのとき彼は不幸なことにブルーメンビュール出身の盲目の女性を見つけて、ラベットの見かけ上の監視人のために呼び寄せて、ラベットを人中での誘惑から砂漠での誘惑へ連れ出すことができるようになった。いつにないほどに激しく愛しながら、彼女を抱き締めながら、―― 哀れな、この夜一人っきりにされていたラベットはすべての自らの喜びの再来で泣いていて、―― 彼は[行動の欠けた]天使ではなく、行動する天使のように、彼女に対して語りかけながら、知らず識らずのうちに彼女と一緒に静かなタルタルスに到着した。そこは一体が盲目で啞であった。

ラベットは盲目の女性を離さなかった。しかし彼らがカタコンベの通路に入って来たとき、そこはただ二人が通れるだけで、三人目は川の中を忍んで行かなければならず、盲目の女性は入口で留められた。余計な聞き手の女性に邪魔されたくなかったので、彼にはこれ幸いなことであった。そうなるも墓場の覗き箱の中で何を恐れることがあったろうか。

その中で彼は死について至る所で差し出されている人差し指に関して話した。「これらの指が示しているのは、人生はどのように愚かなものであれ、これ以上に愚かなものにせず、楽しめということだ」。彼は彼女と一緒に愛撫しながら腰を下ろした。―― 死の天使が廢墟で戯れている花と咲く子供の側に、目に見えないまま、座り、この子供の華奢な手に黒いサソリを置くような具合であった。―― そこは彼がアルバーノと一緒に、風奏琴を伴う骸骨に対峙して、この友のアルバーノが彼にリンダの断念を誓ったときの最初の同盟の夜、座っていたところであった。―― 彼の舌は彼の目同様に迸り出た。―― 彼は柔和であった、民衆の信仰によれば、悼む者達が追って死ぬ死体は柔和なものであるようなものであった。―― 彼はラベットの心に炎の花輪を投げた。しかし彼女は消すために彼のように言葉の奔流を有していなかった。―― 彼女は単に溜め息を付き、単に抱擁することができるだけであった。男達は最も容易に退屈さから善良な、しかし退屈な心の許で罪を犯す。―― より素早く、笑いと涙、死と冗談、愛と厚かましが交互に飛び交った。倫理的毒は舌を容易にすること、身体的毒が舌を難しくするようなものである。

―― 哀れなラベット。乙女の魂は熟した薔薇で、一つの花弁が抜かれると、容易にすべての対の花弁が追って落ちて行く。彼の荒々しい接吻は、最初の花弁を散らしてしまった。

―― すると次の花弁が沈んだ。―― 善良な守護霊が死の豎琴から敬虔な音色を吹き寄せ、カタコンベの冥府の川を怒ってざわめいても空しかった。―― 空しかった。―― 好んで拷問にかける、科のある者よりむしろ無垢の者を拷問にかける、最も黒い天使が、すでに天から愛の星を引き裂き、その星を殺害の炎として洞穴へ運び入れる。防ぎ術のないラベットの狭い哀れな人生の小庭は、そこではわずかなものしか育たないが、長い地雷の坑道の上にあって、その坑道はロケロールの広大な遊山のキャンプ地につながっていた。そして最も黒い天使がすでに坑道の火薬に点火していた。―― 食欲にむさぼるように点々と火花は進んで行く。まだ彼女の小庭は陽光で一杯であった。そして花々が揺れていた。

―― 火花は少しばかり黒い火薬をかじった、突然火花は途方もない炎の深淵を爆発させた。―― そして緑の小庭はよろめき、砕け、散って、黒い塊となって空中から全く離れた地に落ちた。―― 哀れな女性の人生は蒸気と塚となった。――

しかしロケロールの拡張され広大な根の絡まった遊山の公園は大地の揺れに対し、はるかにもっと力強く対抗した。―― 両人はそれから悄然として、―― というのは大尉にとって小さな植込みが投げ飛ばされたからで、―― 坑道から出て来た。しかし盲目の女性に

はもはや出会わなかった。彼女は探しながら去っていた。出会ったのは単にさまよっていたアルバーノで、アルバーノはこの夜失ったものは、一 喜びに過ぎなかったけれども、とても悲しみ、荒れていた。

この欺かれた女性とその同じ数百万人の女性を若干の言葉と共に穏やかな裁判官の前に連れて行くことにしよう。次のことだけをこの裁判官は考量するものではあるまい、つまり彼女は、香る喜びの春の花の花粉に麻痺して、乙女のヴェールで黙して窒息して、空想の嵐に屈服して、一 女性というものは自身の空想が稀にしか吹かず、志操堅固に慣れている程、他者の詩的な空想により容易に落ちやすいもので、一 乙女の人生全体の報酬を無にしてしまったということだけを考量するものではなく、次のことが判決を最も強く和らげてくれるであろう。つまり彼女は心に愛を抱いていたのである。何故男性はこのことを認めないのか。即ち愛している女性は愛の時には恋人のためにすべてを行いたいと思っていないのであり、女性は愛のためにはどんな力をも有し、愛に逆らうためにはわずかな力しか有しないのであり、女性は同じ魂を持って、同じ時に、自分の人生をも、自分の徳操同様に容易に差し出そうとするのである、と。そしてただ要求し奪う部分[男性]が劣等で、分別くさく、利己的である、と。

彼の盗賊小説の最後の章、あるいは第七章はとても短く、矛盾に満ちていた。三日目に彼は彼女を彼女の庭園に訪ねた。あたかも夫であるかのように懇ろで、分別があり、冷静で、控え目であった。彼女は苦悶に満ちていて、ただそれを半分だけ表現するのみであったが、彼女の健康に対する不安から彼は何度か再度来た。彼女が少しも病んでいなかったもので[草稿には妊娠していなかったとあるらしい]、彼は、一 去った。アルバーノに対しては上述の不安の間、謙虚であった。この不安の後でもいつもの通りであったが、しかし長くは続かなかった。というのは、彼は妹リアーネをひょっとしたらすべての人々の間で最も純粋に愛していたかもしれないが、リアーネがアルバーノの荒々しさのせいで、盲目となったとき、彼はまさに罪の類似性のせいで、アルバーノに対し真の憎しみを投げ、アルバーノの縁者すべてに対し同じようなことをしたからである。ラベッテは今や彼から一 手紙と謝罪と自分の野蛮な性質についての短い描写しか貰わなくなった。この性質というのは自由な余地がなければならないもので、他人に取り憑いては、この人を自分自身同様に鎖で砕いて抑圧しなければならないものだということであった。ラベッテの非難を彼は上手に取り除くことができた。この非難は単に言葉から成り立っていて、表情や涙の中にはなかったからである。それで仕舞には彼自身、自分は正しいと分かった。そしてこの倒れて行く滑らかな五月柱に打ち殺された五月の花ラベッテにとって残っていたのは、ほとんどただ最後の正しい言葉で、つまり黙した唇で、これは殺害者にまずこう告げることはしないものである。彼はその心を捉え、砕いてしまった、と。

第八十八周

ここにアルバーノ宛のロケロールの手紙がある。

「一度なされなければならないことだが、我々は互いにどのような本性であるか互いに理解しなければならない。それから必要ならば憎み合わなければならない。私は君の妹を不幸にし、君は私の妹を、それに私を不幸にしている。これは相殺されることである。君

は私の天使から次第に激しく姿を歪めて、私の死の天使となっている。私を絞め殺すがいい、しかし私も君を掴んでやる。

今私を見てみ給え、私は私の仮面を外す。私の顔は痙攣して動いている。服用した毒で生き残っている人々のようだ。私は毒で酔ってしまった。私は毒の球を、地球を飲み込んだ。勝手に言おう。私はもはや歓声を上げないし、何ももはや信じない、本当に立派に嘆くことすらない。空想の炎で空洞化され、炭化されているのが私の木だ。時折自我の内臓の虫どもが、つまり怒りや恍惚や愛や類似のものが、また這い回り、囓り、次々にむさぼり食って行くとしても、私は自我の高みからこれらを見守る。私はポリープのようにこれらを砕き、逆にし、それらの中に突っ込んで行く。それからまた見守ることを見守るようになる。そしてこれが無限に続くと、一体全体はどうなるか。他の者達が信仰の理想主義を有するとすれば、私は心の理想主義を有していることになる。自分の情感のすべてを劇場や紙上や大地の上で味わい尽くした者は誰もがそんな具合だ。これが何の役に立つか。

一 おまえが今死んだらと、私はよく自分に言うものだ、すべては、人生のすべての放射軸は瞬間からなる小さな点に縮むのである以上、消え去り、目に見えないものとなってしまふ。そうなったら自分には、自分が存在しなかったかのように思われる。しばしば私は私の周りの山々や河川や大地を眺めると、あたかもそれらはどの瞬間にも舞い散り、雲散霧消し、私も一緒に消えて行くかのように思われる。将来の人生は、一 現在の人生はほとんど生とは言えないので、一 それに将来の人生に付属している一切も、見守っている恍惚の中にある。殊にある恍惚、つまり愛の中にある。

君は容易にすべての君との差異を無気力と見なしているから、率直に君に話しておこう。ただ先に登って行き、ただもつと自らを捏ね回し、ただ頭を感情の熱い波からより高く持ち上げてみ給え。すると君はもはやそれらの中に散って行くことはなく、それらだけを湧き立たせることだろう。人間の中にはある冷たい、大胆な精神があつて、この精神は何とも関与せず、徳操さえも関係ない。というのはこの精神がまず徳操を選ぶのであつて、精神は徳操の創造者であり、被造物ではないからである。私はあるとき海で嵐を体験した。そのとき海全体は荒れて、角張り、泡立って騒ぎ、混乱していた。しかし上の方では静かな太陽が見守っていた。一 かくなり給え。心は嵐で、天は自我だ。

君は思うかい、長編小説作家や悲劇作家は、つまりすべてのこと、神性や人間性を千度も模倣し、猿真似をし尽くしてきたその中の天才達は、私とは別ものである、と。奴らを、一 世の紳士どもを 一 まだリアルに保ってきているのは、金銭欲、称賛欲なのだ。この食い尽くす胃液は動物的膠であり、優しい河川世界、小川の世界での跳ねる点[生命の原点]なのだ。一 猿どもは家畜の間では天才である。そしてこの天才達は、一 ポープがニュートンについて言ったように、単により高い本性を前にしているときばかりでなく、一 ここ下界でも猿なのだ、審美的模倣の点で、冷血の点で、意地の悪さや、他人の不幸を喜ぶ気持ち、欲望、一 陽気さの点で猿なのだ。

陽気さと欲望を私は保留している。どの人間にも分からない人生の本の中での退屈さに抗しては、二、三の陽気な箇所しかなく、この箇所は、私が読んでしまつたら、もはや考えないことにしている。瘡だらけの冷たい人生からただ逃れるために、私は茨の枝よりは、むしろ薔薇の萼を撒き散らしたい。喜びはすでに何か価値のあるものである。喜びは、人が重たい頭で無の中へ沈んでしまう前に、何かを追い出してくれる。

私はかような者であり、かような者であった。かような時、私は君に会い、君の君[相手]となろうと思った、 — しかしそうは行かない、私は引き返せないし、しかし君は前に進むからである。君はいつか私の自我となるのだから。 — かような時、私は君の妹を愛そうと思った。彼女のことは許しておくれ。ここでは純粋なワインを飲み給え。女達とはどれほど進めるか、私は最も良く承知している。 — どれほど彼女達の愛は幸せにし、奪うものであるか、 — どれほどどの愛も現実の炎に似て、はるかにより良く木材を育てるよりも燃やしてしまうものであるか、 — どれほどいつも悪魔が自ら持参するものをすべて奪うものであるか承知している。 — —

何故女性は人の欲する程度にだけ愛し、それ以上は愛さないという風にできないのか。どの女性一人できないのだろうか。 — 構わない。いつでも気の抜けた説教家は後で不快になるからとすべての無常の悦楽を我々に禁じようとしている。不快も無常なものではないか。 — ラベッテも、私が彼女に求めている願望と同じ理由で私とは意気投合していた。しかし満たしてくれることはなく一杯である他人の心と一緒にの場合、何という煉獄の時を徒渉して行くことになるか、知っているものがあるだろうか。その心の人の愛を人は仕舞には憎むようになるような場合であり、つまりその心の前で人は泣くけれども、その心と一緒に泣くことはなく、同じことについて泣くこともなく、愛を育てるべく変わってしまうことを案ずるが故に、その心に対してはどんな感動も露呈することを恐れるようになる場合であり、 — その心の人の怒りからはより大きな怒りを吸い出し、その心の人の愛からはより小さな怒りを吸い出すような場合である。それに全くもっていつもこの痛々しさの中へ快活な状況が、いつもはこの痛々しい状況から我々を守るべきなのに、ねじ込まれていて、いつも長いこと願われていた人生の神々の幸福が平板な外見と銅版画へと逆になり、心は胸と仮面へと逆になり、 — 実存の髓は鋭い骨へと逆になるのである。 — そしてどんなに冷たさを非難しても、単に沈黙へと繋がれて、拷問台に無垢のまま黙って結ばれてしまい、 — これがまさに終わりが無いのだ。 —

いやむしろ狂気が望ましい。これをエウメニス[復讐の女神の美称]同様に、愛の神殿から取って来るがいい。むしろまことに不幸が燃え上がって、希望もなく、声もなく、青ざめて、憤怒に至るまでの狂気が、かくも愛されずに愛するよりはいい。 — かつてこの地獄で燃えた者は、アルバーノよ、いつまでもこの地獄に進むものだ。これは新たな不幸だ。私は人生と死と傷と棘に前もって打ち勝っていないだろうか、きっと弱虫ではないのではないか。 — しかし私は多感なおしゃべり、 — あるいはピアノでの空想、 — あるいは朗読や歌手を抑制することができないのだ。たとえ痛みが自らすべての神々によって裏書きされた脅威を持ち出して来ても、つまり私の好きではない女性の聞き手が、その後すぐに私の恋人となり、それから私の愛人、地獄となりかねないと言われても抑制できないのだ。

ギリシア人はアモールと死に同じ形姿を与えた。美と松明である[翼のある小アモールが死の象徴として現れる。アモール同様松明を有するが、死の象徴として松明を逆さに有する]。私にとってはそれは殺害の松明である。しかし私は死を愛しており、それ故アモールを愛している。長いこと私にとって私の人生は悲劇的ミューズであった。喜んで私はミューズの短剣に胸を出そう。一つの傷はほとんど心を半分得ているようなものだ。 —

更に聞き給え。ラベッテは美しい性質を有し、その性質に従っている。しかし私の性質

は彼女にとって空の無常の形態と形姿を有する一つの雲にすぎない。彼女は私のことが分かっていない。理解ができるならば、彼女は私を最初に許すことだろう。私は多分彼女を虐待してしまった。あたかも私が一つの運命で、彼女は私であるかのように虐待してしまった。怒るがいい、しかし聞き給え。「照明の夜」、彼女の憧れと私の空しさが歓喜の炎の雨の中、互いをより一層温かく近付けた。 — 滑らかな甲冑を付けたような鈍く磨かれた宮廷人の顔の下で、彼女の率直な顔は舞台や宮廷で新鮮な子供のように美しく生き生きと花咲いていた。 — 我々はタルタルスに入り込んだ。 — 我々は、君がリンダを諦めると誓った所に座っていた。 — 私の感覚の中ではワインが燃え、彼女の感覚の中では心が燃えていた。 — しかし何故彼女は、人がとうとうと話しているとき、接吻より他の言葉を有せず、退屈から人を官能的にするのだろうか。 — そして彼女の言葉を話すように強いるのか。 — 空想と酩酊とが吹き込み、その襲来を見、期待している私の狂気のような大胆さが私を捉え、私を夢遊病者のように駆り立てた。 — しかしいつも何か私の中に明るく見ているものがあって、これが自ら狂気の罫を編み込み、私の上に投げかけ、その中に閉じ込めて私を導いて行くのだ。 — かくてかの夜、頭の周りに燃える網を被った私が出現し、死者の川は私につぶやくように流れ、骸骨が豎琴を握った。

— しかし欲望の炎の編物に巻き込まれ、格子囲いにされ、薄暗く、眩惑されていた。私は破滅も、天も、君のことも、かの夜のことも気にかけていなかった。私はすべてを互いに絡ませて、編み込んでいた。 — かくて君の妹の無垢は墓場へ沈み、私は真っ直ぐに王の棺の上に立っていて、一緒に沈んで行った。

私は何も失わなかったし、 — 私の中には何の無垢もないのだから、 — 私は何も得なかった。 — 私は官能を憎んでいる。 — 何人かの者が後悔と名付ける黒い影が魔法のランタンの去って行く多彩な快楽の像の背後へ広く後追いして行った。しかし黒いものは多彩なものより目立たないものであろうか。

君の哀れな妹を弾劾しないでおくれ。彼女は今、私よりも不幸だ。彼女は以前もっと幸福だったのだから。しかし彼女の魂は無垢のままだった。彼女の無垢はその心の中に堅い桃の殻の中の一つの芯のように保存されていた。芯そのものは育てて行く温かい大地の中でその甲冑を破って光の許へ緑の芽を出していたのだ。

私は後に彼女の許を訪れた。すべての彼女の魂の痛みは私へ移されて来た。彼女のためにどんな行為をも犠牲をも厭わないという気持ちに私は容易になった。しかしどんな情感にも達しなかった。君や私の父は、欲することを行うがいい。私はこの愚かな残り株の人生で、自由にはほとんど収穫できないこの人生で、結婚生活という窮屈な三十年の囲い地に追放されはしない。神かけて有り得ない。いやはや、哀れな恐喝された感覚の酩酊のために、私はこれまで、その甲斐もないのに、もっとその下で耐えてきたのだ。

私が昨日君の許で読んだ手紙のせいで、この決心をしたのではない。 — ラベツテにこの決心のことを尋ねるがいい、 — 君に対する私の率直さは恣意的犠牲にすぎない、二人の間の謎的なものは、私がいなくても一つの謎が残ったであろうから。そうではなく、私は君に誤解されたくないのだ。まさに君から、心の内部でほとんど反省せずに、軽率に不利に比較して、君が私の妹をリラルでまさに同じように、ただより精神的な腕で犠牲にし、妹の目と喜びを冥府に投げ込んだことに気付かないその君から、誤解されたくない。私は君を非難していない。運命は男を女の下級運命とする。情熱は詩的な自由で、この自

由は、倫理的自由で奪われる。君は私を善良すぎる者とは思わなかったことだろう。私は君がそう見なした者すべてに当てはまる。ただまだそれ以上の者なのだ。このそれ以上の者が君自身にはまだ欠けている。

彼女が^{*1} やって来ると知ってから、私の人生は何とより速やかに飛んで行くことか。しばしば重さと歯車とを演じ、人生の振子を自らの手で投げ棄てる運命は、私の振子を外して、すべての歯車が浄福な時に向かって束縛もなく回転して行く。彼女は私の初恋、私の最も純粋な愛だ。彼女の前で、私はすべての私の花咲く年月を引き裂いて、彼女の路上でその年月を花として投げ出した。彼女が来たら、彼女のために私はすべてを犠牲にし、すべてに挑戦し、すべてを取行する。空しい泡の愛、詐欺の愛のときに何事も恐れない者が、まさに正しい、生き生きとした太陽の愛の時に、臆したり、拒んだりすることがあろうか。

一 御身、天使よ、御身、死の天使よ。御身が私の不毛の平板な人生の中へ飛び込んで来た。御身はあちこちに逃れ、現れる。すべての私の小道や沃野に現れる。私が御身の足許に私の墓塚を掘り上げるまで、ただ待っているがいい、私を見下ろしながら待っているがいい。

アルバーノよ、私は未来が見え、未来に手を出している。私にはまことにはっきりと、長い、奔流全体に張られた網が見える、君を掴み、結び付け、絞め殺すことになる網だ。君の父と更に他の者達がその中に君達兩人を一緒に引きずり込んでいる。何故かは分からないが。一 だから彼女が今やって来るのだ、君の旅行は見せかけにすぎない。一 私の哀れな妹は間もなく打ち負かされる、つまり殺害される。殊に、そのためには彼女の霊への信仰を利用して、かの肉体のない声を使えば済むのだから、老侯爵の心臓の上で君の心に限界を指示したあの声のことだ。[腹話術師の叔父の可能性、拙訳 512 頁]。

未来には何という明かりが、薄暗い諸状況や茂みの中で、殺害の片隅で燃え上がっていることか。一 いずれにせよ、私は洞穴の中へ入って行く。私はこの無気力の、冷や汗の人生がまた一つの鼓動を、一つの情熱を得たことに、神に感謝している。ならば、あるいは今でも私に対して好きなように振る舞うがいい、私は確実に、隠れて、不実な行いをして来た者だ。今日でも明日でも決闘するがいい。君が私を叩きのめして、最も長い眠りに就かせてくれたら、私は嬉しく思うことだろう。人生という阿片はただ最初のうちだけ、元気にしてくれるが、その後は眠くてしかたない。死ぬことができれば、喜んでものではや愛そうとは思わない。それで言葉は要らないから、更に私を憎むか、愛し続け給え。しかしご機嫌よう。

君の敵、
あるいは君の友」。

第八十九周

「私の敵か」とアルバーノは叫んだ。第二の熱い痛みが天から彼の人生へ轟いて来た。そして再び稲妻が憤激して燃え上がった。ロケロールは先の友情の心臓のない胴体として、

*1 リンダのこと。

彼の足許に投げ出されていた。彼は最初の憎悪を感じた。官能的美食と精神的美食のこの毒の混淆、感覚的酵母と心の泡のこの発酵桶、 — 愛欲と殺害欲のこの協定、それも同一の無垢の心に対する協定、 — 心情に対するこの精神的自殺、これは単に悦楽的な、さまよいながら、交互に具体化して行く幽霊を残すにすぎないもので、この幽霊にはもはや何の信頼も置けず、勇敢な男ならずで憎み始めるもので、それはこの柔らかな毒の霧は掴むことも退治することもできないものであるからであるが、こうしたこと一切が伯爵には実際よりももっと黒々としたものに思えた。伯爵は習慣や空想による移行期や中間色もなしに、いきなり友情の先の明かりから、この夕方の薄明かりへと導かれたのであった。陵辱された妹のせいで彼の家族の誇りが受けた平板な傷の傍らに、深い有毒な傷が生じた。つまりロケロールがアルバーノを自分と、そしてリアーネの破壊をラベットの破壊と比べたという傷である。「ならず者め」と彼は歯ぎしりした。どんな些細な類似であれ、彼には中傷に思えた。

勿論ロケロールは彼に対し勘違いをしていて、自分の詩的な自己糾弾を余りに詩的裁判官に負担をかけていた。喧噪の中では思わず知らず声高に話すように、空想がその滝と共に彼の周りで音を立てているとき、自分が叫んでいること、どれほど強く叫んでいるか良く承知していなかった。彼は自分が描写するほどには、自身にしばしば腹黒さを見いだしていなかった。相手はそれどころか自分ほどには見いださないと仮定していた。それに彼は詩的な罪深い酩酊の中で仕舞には倫理的文字盤そのものを動かして、その文字盤は針と一緒に進んでしまっていたのであった。この混乱の中で、無垢はどこにあったのか、自分には分からなくなっていた。

自分の手紙での告解は、いつか口頭での告解よりも、片隅で跳ね返るときももっと敵対的になると予見していたならば、告解を別様にやっていたことだろう。

動揺の余りアルバーノはすぐに短い別れの手紙を、 — 決闘状は書けるものではなく、 — この始末の負えない男に宛てて書かず、大尉は自らやっては来ないと確信してためらっていると、 — そのとき大尉がやって来た。というのは大尉はためらいに耐えられなかったからである。肉体的傷、精神的傷を彼は舞台上の傷と受け取っていた。人々の心を得ることに余りに慣れていて、人々の心を失うことに余りに平気であった。 — アルバーノにとっては恐ろしい出会いであった。殺された寵児のただ立てられた長い棺に過ぎなかった。さてこの力強く骨張った顔の上に、以前は魂の砦であったのに、雑草の溝が曲がっていて、友情についてしばしば言及していたこの口は、ペスト癌で、信頼して近寄って来る善良なラベットの舌先サソリを隠す薔薇であったということ、このことを目にし、考えることは純粋な苦痛であった。 —

挨拶や感謝が聞き取れることはほとんどなかった。黙って彼らはあちこち歩き、隣り合って歩くことはなく、すれ違いながら歩いた。アルバーノは自分の怒りを抑制しようとした。言葉だけを発しようとした。私から去って、君のことは忘れたことにさせて欲しい、と。彼は兄の中にあるリアーネを大事にしようと思った。この兄はアルバーノのことを、リアーネを犠牲にする刀となったと非難したのであった。不当な非難は、続く将来、より良く我々を支えてくれるものである。我々はその非難が正当なものとなるようにはしたくないからである。「私が率直なのは、分かるだろう」 — （とロケロールは抑えて始めた、彼の沸騰は半ば滴り落ち、書き尽くされていたからである）、 — 「君も率直になって、

手紙に返事をおくれ」。 — 「私は君の友であったが、今やこれまでだ」とアルバーノは窒息して言った。 — 「君には何もしていないよ」とロケロルは答えた。

「何だって、余り多くしゃべらせないでおくれ」。 — (とアルバーノは言った)、「私の惨めな妹、 — 伯爵令嬢の到着は私のせいではない、 — 私の惨めな、非難された妹。 — 何ということだ、私を怒らせるな。 — 君のことはもはや尊敬していない、行き給え」。 —

「それでは決闘だ」と大尉は言った、半ば魂が酔い、半ばワインで酔っていた。「いや」(とアルバーノは言った。怒りの溜め息を付くためのように声高に吸い込んだ)、「君には何も神聖なものがない、命すらもそうだ」。死のこの教え子は自らの生命の日々、喜び、計画に対して、容易に他人の日々をも墓に投げ込むものだとそうアルバーノは言って、単に病気の、容易に他人の傷のせいで亡くなろうとしているリアーネのことを考えていた。愛が(友情ではなく)、和らげてくれる女性の如く、彼の激昂した魂の前を通り過ぎて行った。しかし敵は彼のことを誤解した。

「決闘しなくては」(と荒々しく大尉は嘲笑した)「惜しいが君の命を頂く」。

「何を聞いている。私の言っているのはより良い[リアーネの]命のことだ」(と彼は言った)、 — 「中傷家め。君の妹[リアーネ]に対しては、私の妹に対する君のようには、私は振る舞っていない。 — 私はリアーネを惨めな思いにさせようと思ったことはなかった。君とは違う、 — 私は決闘はしない。リアーネを思っただけのことだ。君のことではない」。 — しかし彼がリアーネを通じて平坦な国々へ導き、浅くしようと思っていた怒りの地獄の川は、魔法の手にかかったかのように膨れ上がった。彼女の犠牲についてのロケロルの嘘は一目瞭然であったからである。

「君は怖じ気づいている」と立腹してロケロルは言って、壁から二本の剣を取った。「私は君のことを尊敬していない、 — 決闘はしない」とアルバーノは言って、自らを抑えようとしながらも、彼と自らとを更に刺激していた。

そこへショッペが入って来た。「彼は怖じ気づいている」とロケロルは武器を手にして繰り返した。アルバーノは赤面しながら短い燃えるような言葉[ラベツテを陵辱した男、等]で話を告げた。「君達は私の前でちょっと決闘する必要があるぞ」と図書館司書はロケロルの詩的眩惑の心、詐術の心に対し昔からの憎悪を込めて叫んだ。アルバーノは冷たい鋼鉄を欲して、無意識にそれに手を伸ばした。闘いが始まった。アルバーノは攻撃しなかった、いつもより憤然として防御した。そして先の友が怒れる猿となって短剣を手に行っているのを見ているとき、最も素晴らしい日々の花咲く花壇から鋤き返されて、その傷と共に自ら踏み込んでいる友を見、そしてこの大尉が嵐を募らせて、自分に対し実りのない閃光を発しているとき、このとき彼はその憤激した顔にまた暗い地獄の影が映るのを目にするようになった。それはこの者が自らの下に抗うラベツテを締め上げたときその顔に生じ戯れたであろうものであった。かつてはその上で二人の魂が一緒に出会った顔と顔の引き上げ橋は、高く上げられて、大気中で引き千切られていた。より燃え上がってアルバーノは見つめ、より怒りに酔って絡まった友情の人狼を攻撃した。 — 突然彼は前足を飛ばすように、ロケロルの武器を飛ばした。その時ショッペは、対等ではない思いやりと撃剣とで激して、ラベツテの名前で復讐を呼び寄せようと思って、叫んだ。「妹だ、アルバーノ」。

—

しかしアルバーノはその声でカールの妹と理解した、 — そしてもう一方の剣を別な剣に続いて投げ出した。彼の目に炎の滴が浮かんでいた。そして彼の前の敵の顔を不格好に歪めて見ることになった。「アルバーノ」と怒りに疲れてロケロールが言った、和平の涙の虹を頼りにしていた。「アルバーノと言ったか」と彼は尋ねて、手を差し出した。「元気でな、しかし去るがいい。そもそも私に科はない、去るがいい」とアルバーノは答えた。彼は厳しく自分の上に最初の怒りの雷雨を感じていたが、この雷雨は、山々の間に沈んで、轟き続けていた。「悪魔の名にかけて、去ることだ。仕舞には私まで感染する」とショッペが口を挿んだ。「そのような名にかけてなら、喜んで去るとも」と大尉は言った。ショッペが居合わせると、いつも大尉の舌の筋肉は凍ってしまうのであった。そして黙って去った。しかしアルバーノはとうにもはや彼の姿を目にしていなかった。彼は他人の屈服に耐えられなかったからで、どの強力な魂もそうであるように、縮こまった人間を見ると、同時に自分自身が打ち負かされたように感じたからである。丁度偉大な王座では近くに従僕の印が見えてはならなかったようなものである^{*1}。

ショッペは今や、彼にロケロールについての自分のごく初期の予言を思い出させて、自分を偉大な預言者の四重奏と呼び始めた、 — ロケロールの治癒し難い口の腐敗、心の腐敗を咎め、 — ロケロールの芝居の堅牢さをローマの大理石、斑岩と比較し、これは外側は石の外皮をまとっているが、しかし内部は木であると言い^{*2}、 — ロケロールが内的に所領するものは、ドイツ騎士団の所領のように単にツング[舌]と呼ばれるものだと注解し始めた。そしてそもそもとても激しく空想によるすべての自己破壊に抗して、すべての詩的な世界嘲笑に抗して、説教を宣したので、アルバーノ以外の者であればこの熱意を一つの類似性の微かな感情に対する防御と解したことだろう。 — —

ショッペは、アルバーノが彼の言うことを信用して聞き入れ、怒り、笑い、答えるであろうとはなはだ期待していた。しかし彼はますます真面目に静かになって行った。 — 彼は実直な図書館司書を見つめて、 — 激しく、黙って彼の首筋に寄りかかって、 — 急いで重たい目を拭った。暗鬱な葬儀の日、友情の埋葬の日となり、晒され、孤児となった心は一人っきりで家路に付くのであり、友情の死者のベッドから死のフクロウが叫びながら創造物全体の上を飛んで行くのを見るのである。

アルバーノは最初まだ今日のうちにもブルーメンビュールへ行って、見棄てられた自分の妹を真理の霊廟へ案内しようと思っていた。しかし今や彼の心は十分に強くなく、妹への自分自身の言葉に耐えたり、法外な、慰め手のいない彼女の涙に耐えたりすることはできないのであった。

第二十一ヨベル期

愛の本読み — 幸福に対するフルレの恐れ — 欺かれた詐欺師 — 天文台の名誉

第九十周

*1 例えばドイツの皇帝の宮廷では、従僕のお仕着せは許されなかった。

*2 ローマでは建物は大理石と斑岩で出来ているように見えるが、しかし単にその上塗りだけである。

消滅した同盟以来、そしてガスパールの手紙以来、アルバーノの目は時間の最も美しい廃墟の方へ、――地球そのものを例外とするのであるが、――イタリアの方へ向けられた。そして彼の傷付けられた視線は、彼の人生のこの新しい表玄関へ固定させられた。この玄関が、自然と人間の創造し得る限りでの最も美しいもの、最も偉大なものの前へ彼を導くはずであった。何と炎の山々やローマの廃墟やその温かい、青く黄金色の天が、苦しむリアーネがそれらの前に案内され、敬虔な目がさわやかに高台を測るとき、かの光輝を解き放つに違いなかったことか。恋人と一緒にイタリアへ旅する人間は、まさに恋人かイタリアはその片方で十分なのだから、両方を倍増したことになる。アルバーノはこの浄福を期待した。リアーネの治癒について彼に述べられたすべての証言はこの治癒を約束していたからである。彼女に対して墓を見ていて、そこに弔鐘を流し込み、誰に対しても彼女は花卉と共に落ちると宣告していた唯一の男、スフェックス博士に、――彼はもはや会わなかった。しかし自分は、と彼は自らに言っていた、――一緒に旅しても、ずっと、ただ彼女の幸せだけを欲し、彼女の愛は全く望まない、と。そんなわけで彼は自分をその自己・鏡の中に見ていた。つまりただヴェールをかけて見えていた。かくて彼は少しもそうではなかったけれども、自分を苛酷すぎると見なしていた。かくて彼の美しい顔がすでに病んで、青ざめた色合いを帯びていたときに、自分を自分の心に対する勝利者で見なしていた。

現在はまだ薄暗く彼の上にかかっていた。しかしその両隣の時間、未来と過去とは光が溢れていた。何という旅か。すでにその途中で恋人とか、父親とか、友人とか、女友達とか、他の者達ならばまずそこを目指す名所旧跡に当たるのである。――

侯爵夫人がその女友達であった。夫人宛と彼宛にガスパールの手紙が来て以来、より長く、より間近な現在という希望が生じて以来、夫人は自身の周りのすべての雲を一層楽しげに圧倒して、ただ青空からその友に笑いかけ、照らしかけていた。彼女一人が宮廷ではこの荒々しい若者を穏やかに正しく解しているように見えた。この若者の気位の高い率直さはしばしば隠された宮廷の気位の高さ、殊に侯爵の率直な気位の高さに逆らっていたものである。彼女一人が、――美しい感受性ほど、サークルの中、サークルによっては、殊に宮廷のサークルによっては、殊に男性の感受性ほど推察されることが稀なものはないので、――静かに彼の感受性を窺い、丁寧に温め続けているように見えた。彼女一人が彼をかの厳格な、重要な敬意を抱いて尊重していた。この敬意はめったにしか人々が与えず、また理解できないものである。――正しく与えるには、いつもただ愛と情熱が必要となるからであり、彗星の明かりの許、戦闘の炎の許、歓喜の炎の許より他に、最良の手を読み取ることはできないからである。彼の本性のすべてを彼の許で、彼女は単に前提としていた。彼の長所は単に彼女の要求だったのであり、彼の保護状であった。彼女は彼の個人性を自分の手本ともしなかつたし、自分の反映ともしなかつた。兩人とも画家であり、絵画ではなかつた。彼は確かにしばしば、彼女は男性的に厳格であり、殊に命令権者として厳格であると聞いていたが、しかし女性的に残酷になるとは聞いていなかった。通常の子供の庭臣の虫どもにとって、この虫どもは虫どもの格闘では単に這いつくばることで高みに登るのであるが、彼女は無愛想で、苦しめるものであった。彼女は新参者として年長の子供達に最善のものを持参する新生児と期待されていたのであるが。日曜日、宮廷では、ベル

リンの舞台ではそうであるように、いつも精神的通俗劇が上演される時、彼女は、霊[オ
氣]を有するよりは[精]霊を見ている[幸運の]日曜日の者どもの中で、月曜日の者であって、
この者は原典とコピーとを区別できるような者を、 — 必ずしも高貴なものではなくて
も、 — 自分の自我の許で、また、 — 絵画陳列室でも区別できるような者を見いだ
したいと願っているのであった。それ故多くの紳士達が、更にそれ以上にレディー達が、
彼女に「さようなら」としか言う必要がなくなると神に感謝するのであった。

このようにして彼女は伯爵にとって日々一層自分の父親にふさわしい人に思われてき
た。春の温かい陽光の中へ入るように彼は初めて女性的友情の媚びるような魔法圏の中へ
入って行った。この友情はここでは愛にも二つの翼を注入された蜂蜜の蜜房から鑄造し形
成するのであった。しかしそれは彼の場合リアーネに対する愛であって、リアーネに対し
この女友達[侯爵夫人]は最も容易にイタリアへの翼を与えることができたのであった。彼
は、間もなく溢れる敬意の時が告げられ、その時には夫人に自分の以前の愛の高く壁を築
かれた修道院の庭を信頼して開示できようと感じた。というのは、単に王座の窮屈な範囲、
王座のすべてを明るみに出す高い位置のみが恵もうと欲するかぎりの夫人との親密な場を
夫人はしばしば彼に対して用意してくれたからである。しかし何か両人を妨げ、見張り、
攻めてきた。恋敵のような隣人の女性のように見えた。それは風変わりなユリエンネであ
った。彼女はいつも、可能とならば、自分の棧敷から侯爵夫人の舞台で進み出て、芝居を
混乱させた。頻りに彼女は彼の後を追って来た。何回か彼は彼女から招待を受け取ったが、
まさにその後侯爵夫人の招待が続くのであった。従って、先の手紙は、先に届く予定であ
ったように見えた。彼女は何を欲していたのか。 — 彼女は自分がしばしばその男性へ
の軽視と、その怒ったような、閃光のように素早い稲妻で憤慨させた一人の若者から例え
ば愛を欲していたのであろうか、ひょっとしたら単に彼が、 — 自分の恋人の、 —
大事な女友達に対して彼女の友好的な眼差しにいつも温かく返事をしてきたからに過ぎな
いのであろうか。 — それとも彼女は単に、尊敬する侯爵夫人に対する憎しみだけを彼
に対し欲していたのであろうか。それも嫉妬と通常の女性の象牙との類似性からそう欲し
ていたのであろうか。象牙の白い色は容易に黄色[嫉妬の色]となるもので、象牙は単に温
めることでまた美しい色になるのであるが。 —

これらの疑問はある晩答えられるというよりは、むしろ繰り返された。その晩彼とユリ
エンネは侯爵夫人の許にいたのであった。立派な朗読をしてゲーテの『タッソー』につい
て絵画展示を行うことになった。美術や芸術だけが侯爵夫人にとっては宮廷の傷、人生の
傷に対するパッサウの芸術[防弾技法]であった。そもそも彼女にとって世界は単に完全な
絵画陳列室、ペムブルック[Pembroke(1584-1650)ヴァン・ダイクのパトロン]の展示室、古代絵
画展示室にすぎなかった。 — 本読みの役は監督の侯爵夫人によってこう配分された。
彼女自身は侯爵令嬢[公女レオノーレ・フォン・エステ]の役で、 — ユリエンネは仲のいい
レオノーレ[レオノーレ・サンヴィターレ]、 — アルバーノは詩人タッソー、 — ある
若い類の侍従が公爵、 — フルレがアントニオの役であった。この最後のフルレは、
 — 彼は手品を芸術作品よりも優先させ、侯爵の官房をすべての芸術陳列室よりも優先さ
せる術を心得ていて、 — 心ならずも、侯爵夫人によってその為の鉦山服を着せられて、
ミュージズの鉦山への入坑準備ができていた。かくも毎日むしろ詩的ファッションに強制さ
れて、勿論彼はいつものように不具者に見えた。これは意図的に生来の緩く短いズボンや

頭飾り等々のものを備えてこの世に生まれてきて、カッセルの街路掃除夫の如くファッションの流行を弾劾するのである[カッセルでは掃除夫に華美な服を着せて奢侈禁止とした]。

アルバーノは外的内的熱を帯びて読んだ、読んでいる侯爵夫人に対してではなく、朗読された公女に対してで、彼の人生の許で白熱し続ける心の慣例に従ってそうであった。

一 侯爵夫人は自分の配役の配役を勿論とても良く読んだ。彼女の芸術家的心情が彼女に、
一 優しい心情を吹き込まなくても、一 ゲーテの『タッソー』では、一 このタッソーはイタリア人のタッソーに関係すること、天上的エルサレム[天国]が『開放されたエルサレム』[タッソー作]に関係する具合であるが、一 公女はほとんど侯爵令嬢[夫人]達の公女であると語っていた。ここでほど乙女座を通じてミューズの神が、太陽神[アポロン]が美しく登ったことはなかった。忍ぶ恋がかくも輝かしく明るみに出たことはなかった。

大臣はタッソーとアルバーノに文句を言う力強い散文家アントニオを騎乗のトランペット奏者が袖に固定された譜面を読むように上手に片付けた。実際彼はこのアントニオを全く分別があると思っていた。

侯爵令嬢[ユリエンネ]は一般的詩的コンサートの中でおよそ十五分の数回ほど声を合わせて[総奏して]読もうとしていたが、三部ほどあったゲーテの作品のこの美しい巻を突然勢いよく投げ出して、性急に言った。「つまらない役、私は嫌い」。全世界が黙った。侯爵夫人は意味ありげに彼女を見つめた。侯爵令嬢は侯爵夫人を更に意味ありげに見つめて、出て行き、戻って来なかった。一人の女官が落ち着いて読み続けた。

大方の出席者にとってこの幕間の劇は、本来最も興味深いものであった。彼らは劇を読みながらその出来事を更によく考えていた。令嬢は伯爵を愛していると夙に思っていた侯爵夫人は、自分の恋敵の無分別を喜んでいた。アルバーノは以前から自分への温かい目に気付いていたけれども、自分の本読みの役割の下位に対する不機嫌故の退席と解し、そもそも両女性の不仲故と解していた。というのはユリエンネが損なことをしてまで侯爵夫人を等閑にして、自分の意見を隠さなかったとき、侯爵夫人の意見も思わず知らず露呈されたからである。ある人が自分の憎しみを赤裸にする、二番目の人は三番目の人を前に自分自身の憎しみを隠しておけない。

アルバーノは家に戻ると、次の書き付けを自分の机に見いだした

「F[侯爵]夫人はあなたを誘っています。彼女はあなたを愛しています。次に見事に M [大臣]を退けて、自分の徳操を引き立たせ、あなたを感嘆させることでしょう。一 私はあなたを愛しています、しかし別な風に、そして永遠に。

私ドモハイツカ会ウ

コトデショウ。オ兄サマ」。

誰が書いたのか。一 この果たし状の入場券についてすら従者には見当が付かなかった。誰が書いたのか。一 ユリエンネ。少なくとも蓋然性のすべての道はその方へ合流していた。ただそうなる、彼の周りには不思議なことが立ち籠めていた。重要なのはフランス語の署名で、これはまさに父がイーゾラ・ベッラ[島]で与えた彼の妹の像の下に同じ

ように記されていたものであった^{*1}。しかし偶然も考えられた。彼は今や彼の銀樹、家系樹のこの新しい銀鉱脈をすべての自分史の試金石にかけてみた。彼の母とユリエンネの母は彼の父と一年間だけイタリアへ旅行していた。両人は尋常ならざる女達、女友達で、この兩人にとって彼の父は友人であった。彼の父の隠された過失の可能性が考えられた。同様に容易にユリエンネにもこの迷路の痕跡が指摘されたのかもしれない。そうなると更に彼女の妹としての愛から彼女のこれまでの全ての回り道へ明かりが投げられることになる。彼女のアルバーノへの愛のこもった関与、彼女の温かい眼差し、彼女の侯爵夫人との愛の競争、一彼の父親との彼女の文通、一伯爵に対するロメイロ嬢への肩入れ、この肩入れ故に彼女は侯爵夫人に対し熱く反対し、リアーネに対し冷たく反対しているように見え、一そして総ずるところ、彼に対する彼女の愛の風変わりさ、これは決して更に大きく更に明らかに発展することはないもので、こうしたすべての点から察せられるのは、彼女が彼を余りに長く無意識に眺めているとき、しばしば彼女の丸い頬に燃え出てくるものは、単に近しい妹の血にすぎないものである、というものであった。彼はこう歩みを進めた後、早速飛躍した。彼女一人が自分のリンダに肩入れをして、彼を幽霊の魔法の鏡で眩惑しようとしたと今や彼は推測をもしたのであった。

大臣に対する侯爵夫人の関係に関することは、彼にとってはどの言葉も嘘にすぎなかった。彼は他人から良い意見も、悪い意見同様にほとんど受け入れはしなかった。通常の間人は容易に良い意見を棄ててしまい、悪い意見に固執するものである。より軟弱者達は、容易に和解し、ほとんど仲違いしない。彼はそのどちらにも似ていなかった。これまで彼は大臣との侯爵夫人の友情を、彼と一緒に国内視察旅行等々を容易に彼女の男らしい賢明さと慎重さに由来するものと見ていた。この賢明さ故に、夫人の兄弟の将来の遺産の国に対して、監視と同時に開明さを欲していたのであろう。大臣は案内役と監視人との近い役割に同じように適していたので、大方は以上のようなことであろうと彼はなおも思い続けていた。

その翌週にある出来事が生じたが、これはこの薄暗い書き付けに、より大きな明かりを投げかけるように見えたものである。

第九十一周

この約束された出来事は、また少し前の出来事にその根を有していて、侯爵夫人と大臣との間で生じたものである。これを私はここで前もって語ることにする。

大臣は程なくして友人のブヴェロから、ブヴェロはその粘着性の啄木鳥の舌ですべての秘密の虫類をすべての脆い王座の隙間から舐め取ってきていて、侯爵夫人がフェニックスの灰燼として隠し持っているものすべての目録を見せて貰うことになった。ブヴェロは彼に教えた。彼女は冷たいが凸面に磨かれた氷のように、決して自らではなく、ただ他人を溶かそうと思っているのだ、彼女は甘いワインのように温かさで酸っぱくなくなってしまい、ただ冷たさでのみより甘くなるような珍しいコケットな女性の一人である、それ故彼女は

*1 『巨人』第一巻、39頁。[第五週の始め、拙訳21頁]

最悪の慣習の一つ、誰に対してもひどい仕打ちをするという慣習を有する、と。それは次のような慣習であった。彼女は一つの心を有しており、それを死んだ資本のように胸中に収めておきたくはなくて、利子を生み、循環するようにさせたかった。一 恋人はそれ故最初は日々次第に目覚めさせられ、より快活ななっていた。それから刻々とそうなるのであった。一 恋人はこの愛の庭の中のすべての木の道、洞穴の道、盗人の道、比較的短い小道をきちんと暗記していて、逢瀬の十五分間、植込みにいつ到着することになるか、自分の時打懐中時計で予告することを欲するようになった。一 恋人が彼女の許で文から視線へ、視線から手の接吻へ、それから口の接吻へ達して、その後彼女のエレの長さの、マイルの長さの髪というウィストン理論の[Whiston(1667-1752)]彗星の尾の中で、鳥畏の中でのように、しかしここでは畏は液果でもあるのであるが、はなはだ巻き込まれ、囚われ、ねじ曲げられて、何時に自分の時打懐中時計では時が告げられたか承知していたということが何を意味しているか、それは恋人にとって全く未知のことではなくて(滑稽なことであった)。一 しかしまさに、すべての雲が天から落ちたように見えたとき、恋人自身は雲と天からの双方からのように彼女の籠の中[肘鉄]に陥るのであった。一 これは悪しき点であった。一 実際、普通は何でも試みていた最古の家柄のドイツの皇子達が、非倫理的な、いや滑稽な具合に陥って、自分達はこれをどう考えたらいいかさっぱり分からないのであった。一 というのは侯爵夫人は公然とこのような無作法者達を不思議に思い、すべての世間に彼女の果たし状のコピーを渡し、すべての世間に彼女の七面鳥の赤み、気高さを示したからで、一 このような古い侯爵家の誘惑者を、あるいは誰であろうと、二度と彼女の誇り高い顔の前に来させなかったのである。

皇子達は(このような場合)、自分達の欲することを知っているのも、勿論彼らは、彼女は自分の欲していることを知らないと広めた。そしてしばしば皇子達の後、ようやく長く経ってから、同じ宮廷の年金給付の兄弟がやって来て、そしてその後准嫡の皇子がやって来た。それでも同じことだった。つまり彼女は天体的凹面鏡に似ていて、これは凹面鏡の近くにいるものを背後に大きく、起立した風に描くけれども、しかしそれが焦点に入ると、その姿を目に見えなくし、それから焦点を出ると、全く縮小化され、転倒された風に空中にかけるのである。彼女の愛は虚弱者の熱であって、この熱の場合、ダーウィン[Darwin(1731-1802)]やヴァイカルト[Weikard(1742-1803)]や、他のブラウン主義者[Brown(1735-88)医師]は、刺激剤で、例えばワインで、より長い脈拍を作り出すのであり、まさにこうしたことで治療を約束しているのである。このようにブヴェロは大臣に語った。一

しかし大臣にはこのことで言い難い寵愛が生じた。というのは皇子達の罪は全く彼のパンの為の学問には含まれていなかったからである。それ故彼女が彼の分別と彼の力強い観相学の間近さに賛同を示し、彼をハールハールでの彼女の最も内密な案件の大臣として召喚したとき、彼は厳かな気分になって、決して、彼女がたとえ善人そのものであろうと、彼女の一時寡夫[妻が旅行中]から、彼女の名譽を奪う者にはならないと誓ったのであった。最初彼はすべての前任者同様に、容易に単なる純粋な感情や議論と共に去った。まだ彼に対して要求されたことは、ただ時折、思わず愛にみちた優しさの秘密の視線を彼女に投げ寄越すことだけであった。彼も憧れなければならなかった。先述の視線を彼は投げ寄越した。憧れも彼は起こした。一 かくて彼は、このような愛の幸福にとって、まだ十分に幸せな状態であった。

しかしそれに留まっておれなくなった。彼女の前にアルバーノが現れると、純粋な大臣の棘バンドと毛織りのシャツは比較にならないほどより粗く、刺すようなものとなり、強力極まる要求が、つまり贈り物が倍増し、かくて哀れなヨゼフはより急速に彼女の名誉を襲い、そうして伯爵の好餌となるべく、その没落へ急がなければならなくなった。今や彼はすでにかなり進行した状態になっていて、彼は彼女の舞う髪を（彼にとっては有毒な毛虫糸を織って、結び目を付けるまでになっていた。 — 彼は自分のパイプから溜め息のシャボン玉を飛ばさなければならなかった。 — 彼は時々我を忘れなければならず、いやそれどころか（偽善者のならず者として追放されたくないのであれば）、半ば官能的にならなければならなかった。もっともまだ十分に上品なものであったが。しかし彼は悪魔自身によってさえ誘惑へと誘惑されることはなかった。ほんのちょっとした失敗でも大臣の地位から投げ落とされると考えて見さえすれば、恐ろしいことであった。それで彼は魅了されると同様、杭を打たれ、四つ裂きにされた。第三者にとっては、この兩人にとってではないが、 — この兩人は苦しんでいて、 — ひょっとしたらこう気付きのはちょっとした祝典であったろう。つまり兩人は（通俗すぎる比喻を使えば）、 — 対の内外から引き抜かれた絹の靴下に似ていて、それらを引き抜いてある距離を保っているとき¹、それらは互い同士エーテルを含んで膨らんでいるが、しかし互いに接触させるとすぐに平板に力なく一緒に落ちてしまう、と。

勿論長いことになる老政治家にとって、愛の神々の踊る小姓塾の前で、その年長者として先導して跳ね、キュプリスの息子[アモール]の凱旋車につながれて、 — 盛装用の鬘に花輪を被せ、 — 目にはヴォークリューズの泉[ペトラルカに称えられる]を、 — 胸腔には埋められたディドーの洞穴を[ディドーとアエネイアスは嵐に遭い洞穴に避難する]、 — ボタン穴には心に刺さった矢を、あるいは矢の許の心を有しながら、 — カピトリヌスの丘に向かって行き、そこでローマの慣習に従って犠牲を捧げるといよりは犠牲にされるというのは面倒なことである。 — 家で彼に届けられる政府の使者や官房の使者のブリキ箱のみが、チェスで引き分けの男を、チェスで王手詰めとなりたい男を、また元気に涼しく扇いでくれるのであった。

彼は彼女と一緒にカトゥルス[抒情詩人(紀元前 84-54)]を読んだ。彼女は彼と一緒に侯爵の陳列室からのより良い絵画を見た。彼女の芸術家的贈り物に対し、ラテン語の手紙で報いることが彼に許された。 — しかし彼は今までの彼であった。

女達は何かを決行しようとするとき、障害が再三繰り返されると、仕舞には盲目になり、野蛮になり、何でも行う。イタリアへの旅行が近付いてきた。相変わらず大臣は恋人に対する自分の敬意を手放そうとしなかった。 — もっともまさに旅立ちという彼女自身の動機故であって、それが近いということで、かくも短い炎ならば楽しく耐えられると彼は

*1 Symmer は次のように観察している。白と黒の靴下は、乾燥して冷たい天気のと看、内外に重ねて履かれ、外側は内側の先を掴んで、内側は外側の先を掴んで引っ張ると、反対の電気を帯び、白い靴下はプラスとなり、黒い靴下はマイナスとなる。離れていると靴下は互いに膨らんで求め合う。互いに触れ合わせると、平板に長くなって沈んでしまう。フィッシャーの『物理学辞典』、第一巻。

[なお大臣の場面は、ラクロの『危険な関係』、第八十五の手紙参照]。

勇気づけられていた。伯爵に対する彼女の激しさは、伯爵の平静さで募っていた。冷たさは強い愛を強めるからである。丁度物理的冷たさは強壯な者を更に力強くし、弱者を更に弱々しくするようなものである。一 フルレは老いた男として、一世紀であれ、目標まで、一回も不可欠な跳躍をせずに、這って進んで行くことができるように見えた。老人達は船同様により長く進むにつれ、ますますゆっくりと進むからである。それも同じ理由からで、両者は廃物、貝殻等々の沈殿でより無器用になってしまっているからである。一 一 要するに侯爵夫人は最後には何も聞かず、ただこういう具合になった。

侯爵は旅立って、侯爵夫人は田舎へ名親へと依頼された。彼女の館の一つの城代が、彼はすでに前年、大臣を依頼していたのであったが、臆面もなく、自らの子孫を腋に抱えて、この階段綱を伝って、更に登って来て、上の王座で、自分の赤子を、彼女の、侯爵夫人の両腕の中に置いたのであった。喜んで侯爵達は、一 薄い毛虫糸を伝って、一 (上に) 来させるように、また下々の方に降りてくる。彼らは善良で愚かな人民を評価しており、哀れな這いつくばる豆ども、小人の豆どもを、一 それは大したことはないと承知しているから、一 このようにして若干おだてて、いわば侯爵椅子の脚に結び付けたり、支柱とさせたりするのである。大臣は所謂「老名親」として無論招待されていた。秋の一日は明るい、澄んだ春であった。そして秋の夜は輝かしい満月の下にあった。宮廷はとても田舎を楽しみにする。つぶやくような泉やざわめく梢や家畜の鳴き声の酪農や農地請負人の牧歌を楽しみにする。一 宮廷、一 つまり宮廷人や女官や奉仕の侍従達や他の者達は、一 はなはだ下々の人々に憧れるのである。十二月の饑餓が獣どもを駆り立てるように、高貴な饑餓が王座の山脈から下の平坦な平地へと駆り立てる。彼らは退屈を逃れるのではなく、ただ別の退屈を求めるのである。彼らの退屈しのぎは、まさに彼らの退屈の短縮と変換にあるからである。

宮廷は人民への最初の憧れを癒やしてしまうと、人民とは十五分の半分ほど親しげな対話を交わすのであるが、すぐにまた正気に戻って、侯爵家の庭園で気散じをして、自然への憧れを短くない時間かけて満足させる。洗礼立会人[侯爵夫人]代わりの或る立会人女性が、侯爵夫人と子供の代わりにキリスト教の信仰を約束した。侯爵夫人自身は大臣を侍従のように側に寄せていた。老名親は自分が夫人の行列の旗を持ち運ばなければならないであろう忌々しく長い夜を見通していた。夕べの楽しみにコンサートがあり、コンサートを楽しむために賭けが用意されていた。そして賭けを楽しむために侯爵夫人はフルレと二人っきりになって、皆が楽器とカルタを楽しんでいる間、誰にも聞かれることなく彼と話をしていた。突然彼の胸にかかっていた二ポンドが、一 というのは解剖学者によると心臓はそれ以上の重さとはならないからで、一 ニツェントナー[50 キロ× 2]分重くなった。彼女がこう尋ねたからである。彼は確固たる者で、信用でき、彼女のために大胆なことを行うことができるか、と。彼は誓った、きっと彼女は侯爵夫人として彼の二ポンドからどんな犠牲をも、どんな尊敬をも期待してよろしいであろう、と。彼女は続けた。自分は今日彼に自分と侯爵について重要なことを打ち明ければならない。自分は阿呆どもが去ったら、彼と二人っきりで話したい。彼はただ庭の側から小さな階段を登って図書室のドアの所までいけばいい。このドアは開いている。詩人用本棚では左手の壁にスプリングがあって、それを押すと、部屋の壁紙張りのドアが開く、そこで自分を待っているように、と。

すぐに彼女は立ち上がった、承諾の返事を前提としながら。今や六十四ロートに当たる彼の心臓の二ポンドがどんな具合であったか、それを知るのは単に彼の不倶戴天の敵にのみ楽しいことであつたらう。碑銘のように長く、厚く、石造りの文字で彼の心にこう記入されたのであつた、つまり数時間したら、他の紳士どもが、普段は彼よりももっと罪深い輩が、静かに、美しい、宮殿の中庭は形成している従者の棟で鼻息を立てることが許されるときに、そのとき自分のような罪のない悪漢にとってやがて狼の時が、つまり逢瀬の時が告げられ、自分は花一杯の沃野で屠殺者の刀の下で跪かなければならない、と。しかし彼は、— 女性の厚かましき、侯爵の厚かましきへの自分の信仰が真実を告げるのに怒って、— あらゆる種類の静かな誓いをこうしたのであつた、自分が最大の聖人や賢人のような目に遭おうとも、それでも自分は兩人のように、例えば[純潔者の]老ゼノンや[アッシジの]フランシスコのように振る舞うことにしよう、と。

侯爵夫人はその晩ずっといつもより彼を求めることが少なかった。とうとう彼は宮廷全体から別れた、しかし宮廷のように絹の布団の下に忍びこむのではなく、冷たい植込みの下に忍び込むつもりであつた。彼は実際、自分に確信を抱いて、階段を上がり、— 図書室を開けて、— スプリングを見つけ、— 跳ねさせて、壁紙張りのドアを通過して、侯爵の— 寝室に入った。「それでは確かなことだ」— と彼は言って、好きなように自分の内部で呪い続けた、恋文の文鎮に全く長々と押し潰され伸びていた。左手の側の部屋で彼はすでに彼女と、脱衣係の侍女の声を聞いていた。右手の二番目の、しかし明かりの点された部屋のドアが開いた。彼はその部屋へ入るべきか、暗い所の明かりの遮られた所に留まるべきか、長いこと疑念に晒されていた。とうとう彼は夜の闇に紛れ込むことにした。

彼が待機し、彼女が脱衣する間、彼は自分の役割の本読み、あるいは喜劇の下稽古をしていた。今や彼は自分の心と一致して、非常事態の場合、— 仮にはなほだ言い寄られたら、— この場所は彼自身より彼女自身に対してむしろ不利であるだけに、だって誰もが、それ以外に彼がどうしてやって来るであろうかと尋ねるに違いないから、— このような諷刺かサチュロスかの選択にすぎなくなる非常事態の場合には、即刻、礼を尽くした— 牧神に変ずることにした。

急いで侯爵夫人が入って来た。しかし明るい部屋の方に入って来た。「もうお役御免よ」と彼女は侍女に振り返って言った。「トンダコト」（と彼女は寝室で長々と伸びた大臣を見て叫んだ）「ドナタデスカ、— ハンネ明かりを」、— 「マア」（と彼女は、彼と知って発し続けた、しかしハンネが解しないのでフランス語であつた）、— 「デモ、ムッシュー、— コレデハ体面ニカカワリマス。何トイウ誤解デショウ。部屋ヲマチガツテイマス。オ許シクダサイ、ムッシュー、私ハ女性ト地位ノ体面ヲ守ラナケレバナリマセン。ドウシテコノヨウナコトガ、—」。彼女はすべてを語った。ひよっとしたらドイツ人の立会人女性を眩惑するためかもしれなかったが、怒った調子であつた。老名親は、— これまでのすべての享受の後では、生きた甲虫を飲み込んで、それらが今や不安になった餌袋の中で命取りになりかねなくなっている雄鶏のような気分になっていたが、— 黙ってはいず、ドイツ語で答えた。壁紙張りのドアを開けて、彼女に命じられた通り、図書館から本を明るい部屋に置いて、丁度帰りかけようとしていたのだ、と。彼は早速壁紙張りのドアを通過して行った。しかし彼女は恐怖の余り、自制できず、朝には医師を呼び

寄せて、彼女のお供を戻した。フルレは、一 彼女の長編小説はスペインの長編小説に似ていると思った。フィッシャーの主張^{*1}によれば、その中で最良のものは詐欺師の長編小説であるということだった。一 しかし結局自分がどの長編小説に当たるか自らは分からなかった。

侍女は沈黙の請願を厳かに守らなければならなかった、彼女は出来る限り厳かに守った。しかしより厳しく守ることはなかった。朝には自らの家の戸口の前で降りる者は少なく、大方は他人の家の戸口の前で降りて、このニュースを侯爵夫人の禁令と共に知らせた。禁令は、この件を明るみに出すなということ、さもないと侯爵が知ることになるということなのであった。

かつて高貴なペスティッツが塊全体で幸せになったことがあったとすれば、それはこの朝であった。この一般的喜びに侍女も、つまり獵犬程度にしかフランス語を解したかもしれない侍女も欠けていなかった。

第九十二周

アルバーノは噂を聞いた。大臣は彼にとって冷たい魂の死体のようなものとして不潔に思われていた。今や彼は一層、苦しめる吸血の死者として大臣を憎んだ。これまで侯爵夫人に彼の心はなびいていた。彼女は彼にとって青い昼の空であって、その中では他人にとっては単に暑い太陽が輝くのみであるが、しかし彼はそこに友情の秘密と魂の深さから穏やかな星座を見いだしていた。しかし今や例の噂以来、この噂は、モーゼの側らの魔術師の如く[出エジプト記、9.8以下]、彼女の天に煤を投げるもので、彼女は新しい明かりの許で輝くことになった。すでに生来、つまり誇りから、どんな噂に対しても彼が抱く憎しみが、噂は支配し、支配され得ないからであるが、新たな炎を帯びて彼の中で作用した。彼は、まさにリアーネが夫人の不倶戴天の敵の娘、あるいは夫人の恋人の娘であるが故に、侯爵夫人はリアーネの競争相手の女性となるはずなので、自分の心にかけて、そのことで明らかになった心にかけて、自由に申し出て、まさに今、侯爵夫人に、リアーネの旅の同行、つまり彼の天に当たる同行を仲介してくれるよう率直に依頼する決心をした。

その翌朝侯爵が戻って来た、一 侯爵令嬢は早速馬車の用意をさせ、一 夕方頃には一台多い馬車と共に町に入って来た。スペインの伯爵令嬢ロメイロが宮殿に着いたという噂がすべての賭博台を駆け巡った。噂はポリープのようなものである。傷付けることと破壊とが噂を多重化する。ただ混じり合うと二つが一つになる。リンダの到着の噂はフルレの名誉毀損の噂を自らの裡に飲み込んだ。

しかしアルバーノときたら。一 新世界の発見のようにこの発見は彼の旧世界を裏返した。リンダ、この外国産の熱帯の鳥は、彼の間近な父に先立って飛んで来た。父は豊かな国のように彼の前で遠方から上昇して来た。一 多くの茨と花々を彼が見いだした大地はすぐに彼の背の背後にすべての影と日々と共に沈んで行った。一 ただリアーネだけは一緒に沈んではならない。彼の青春のこのミューズは彼と一緒に青春の国へ行かなければ

*1 (訳注) Chr. Aug. Fischer: Komische Romane der Spanier. 1891. 序文参照。

ればならない。心はこの通常の魔法によって、リンダの間近さから、リアーネへの克服し難い憧れが彼の中で目覚めたのであった。

侯爵夫人に彼女の以前の約束、リアーネの病んだ神経に南方の旅行という命の香油を注ぐ約束を思い出させ、侯爵夫人を通じて十分早めに、迫った瞬間ごとの出来事の混乱で何か駄目になってしまわないうちに、大臣夫人に同意させ、決定させるという決意を今や彼は固めた。大臣夫人はすべての宮廷人同様にきっと侯爵らからの願いや幸福の展望には逆らわないであろうと思ったのであった。

しかしリアーネが自身の科のせいで、あるいは他人の科のせいで残ることになったら、彼の計画と誓いは、どんな圧力にも、父親の圧力にすら屈せずに、永遠の花嫁の祖国から離れずに、彼女の病の修道院の前に根を下ろすことであった。彼女がそこからまた自由に快活に公の生活に復帰するか、暗くヴェールの中に閉じ込められて、死者達の暗い尼僧院のコーラスの中へ隠れてしまうかするまで根を下ろすことにした。また戻って来て、彼女を昔の時代のロマンチックな土壌の中に探すこと、彼女を廟墓の面会格子の背後以外では見いだせないこと、 — この考えには彼の心は耐えられなかった。

侯爵夫人が自ら彼に彼の依頼の機会を与えることになった。侯爵夫人は彼に天文台での天文学的パーティーに忠実な女官ハルターマンを通じて招待したのであった。「私はただ次のことを文字通り記すよう言われています」（とこの女官は書いている）「貴方も今日観察台へお出でください。私とハルトマンとがそちらへ出向きます」。このハルターマンは、余り魅力や才気ある筆遣いの見られない未婚女性であるが、多くの信仰の教義や早期の皺を有していて、侯爵夫人にすでに何年も前から絶えず付き従っていて、一切を黙っており、すべての夫人の「逢い引き」（ランデヴー）に配慮して、ただこう言っているのであった。私の侯爵夫人は黄金のように純粋です、私ほど夫人のことを存じ上げているのはほんのわずかです、と。

アルバーノの願いにとって、これより好都合な偶然は考えられなかった。彼は早々と愛らしい夜の最中、美しい天文台に立っていた。満月の数日後であった。その輝かしい世界はまだ大地の背後に隠されていた。しかしその光線の放たれた噴水はその開始がなされていた。すべての山の先端ですでに弱い明かりが微光を発して、この世ならぬ諸世界の遠くの朝がそこに落ちて来るかのようにであった。すべての谷を通じて、まだ夜の、光を嫌う黒い地球の獣が広がっていて、山々に対して反抗していた。リアーネの山の館は見えなかった。そして一つの惑星であるかのように単なる一つの明かりとなっていた。突然館の周りのすべての梢に秋の深紅が月によって銀色の露を帯びることになった。そして白い壁と庭園の白い通路の中に照らし出すように雨と降った。 — 最後に一つの見知らぬ青ざめた朝が、すべての植込みを通じて薄明となって、庭の中に見られた。さながら一つの高貴な、全く純粋な精神の優しい煌めきで、この精神はただ聖なる夜、深い大地に足を踏み出して、純粋で静かなリアーネだけを探すものであった。 —

アルバーノが見つめ、夢想し、憧れているとき、侯爵夫人がハルターマンと一緒に登って来た。

教授は夫人に対する尊敬の余り、ほとんど二つに折れてしまい、自分の直立不動に対し、恒星達が天文学的影響を及ぼすことを許さなかった。 — アルバーノと侯爵夫人は互いに温かく得した思いで再会していた。しかし侯爵夫人の最初の質問は、スペインの伯爵令

嬢に彼は会ったかというものであった。無関心に彼は言った。侯爵令嬢から彼女[リンダ]が到着してから招待を貰っている、しかしまだ行っていない、と。「私の義妹は、彼女[リンダ]を最高に賛嘆しています」（と侯爵夫人は続けた）「そうですね、少しその価値があります。彼女は威厳のある体格で、私より背が高く美しい。殊にその頭、その目、髪が美しい。絵画的に美しいというよりは、むしろ造型的に美しい、聖母に似ているというよりは、ユーノーやミネルヴァに似ています。しかし彼女には独自の癖があります。彼女は女達とは合わない、素朴な、ただ善良なだけの女を除いては。だからお付きの女官達は彼女のために命がけです。男達は彼女のことを悪く言っていて、こう言っています、彼女はいつか自分が一人の男の妻とか奴隷になったら、自分のことを軽蔑することだろう、と。でも彼女は男達を知識の件で求めています。侯爵に対して、必要もないのに、たとえ彼女が正しかったとしても、辛辣なことを言いました。侯爵はそのことを笑ってこう言っています。彼女はいずれにせよ何も愛していない、子供や愛玩犬すら愛していない、と。いつか貴方は彼女に会う必要があります。彼女は多読家で、ただ侯爵令嬢とだけ暮らしていて、あの化粧から判断するに、少なくとも私どもの宮廷では何ら征服する気はなさそうに見えます」。

アルバーノは、これらの特徴の多くは実際素晴らしいものでありましようと言って、短く打ち切った。会話の間、教授は熱心にすべてを正しく整え、固くネジを締めて、今や開始を待っていた。彼は明るく、夏のように生温かい夜について述べ、一月についての若干の案内を前もって述べて、六つの[三人の]目を最も注目すべき月の斑点へと導き、一 差し当たり上空の若干の影について輪郭を描き、一 ベルヌリ噴火口に導き（「私はシュレーター[Schroeter(1745-1816)1791年の本参照]の命名を使いますが」と彼は言った）、一 最大の山脈デルフェルと（「勿論三つの高い山から成り立っています」と彼は言った）、一 ヘッセン・カッセル方伯と（「しかしヘーヴェル[本名 Hewelcke(1611-87)]はホレブ山と名付けています」と彼は言った）、一 モンブランと一 そもそも環状の山脈とに触れ、戦略的にこう請け合って結論付けた、「勿論天文台にはまだかなり道具が欠けています」と。

ハルターマンは言いようもなく月のヘッセン・カッセル方伯に憧れて、望遠鏡を望んだ。「それは惑星の中の単に斑点ですよ」と侯爵夫人は言った。「それでは向こうのモンブランも無に等しいのですか」と彼女はがっかりして尋ねた。侯爵夫人は頷いて、天体望遠鏡を覗いた。魔術的月がレンズのすぐ側に一片の昼の世界としてあった。「月の美しい青ざめた光も、その全体の魔法も、間近では消え失せてしまいますね。未来が現在になったようなもの」と夫人は教授が驚いたことに言った。教授は天体からまさにまず間近で何かを得るのであった。夫人は彼に土星の輪を見たいと願った。「それは本来二つであります。妃殿下。しかし天文台では目下それを見るには道具が欠けております」と彼は言って、また前払いを狙っていた。

アルバーノは周辺の自分の人生の諸庭園が名残の春の温かい微光を受けて輝いているのを目にした。彼の内面が甘く痛々しく震えた。彼は彗星望遠鏡を取って、星座の許を舞い飛び、ブルーメンビュールや町、山々を覗いたが、ただ照らし出された隅室と小さな庭園を有する白い館には向けなかった。楽園のドアを前にしては、羞恥と愛の余り、心全体が引き返した。

このとき出発の合図で、ハルターマンは天文学者と一緒に先に下へ降りて行き、侯爵夫人に二人つきりだけの自由な瞬間が得られるようにした。アルバーノは夫人を前に、月光の中、高貴に立っていた。彼の目は輝き、彼の面貌は感動していた。夫人は彼の手を握って言った。「私どもは互いに誤解はしていませんよね、伯爵」。彼は夫人の手を握った。彼の目は涙が一杯に溢れてきた。「勿論、侯爵夫人」（と彼は穏やかに言った）「貴女は私に友情をお示ししています。この友情を信頼しないとすれば、私は友情に値しません。今私の率直な信頼の証をお見せしましょう。貴女はひよっとしたら私の幸福と喪失の話を御存じかもしれません。大臣を御存じですね。 — 「残念ながら」（と彼女は言った）「貴方の苛酷なお話も、高貴な方、私の耳に入っています」。

「いえ」（と彼は激しく答えた）「私は私の運命より苛酷だったのです。私は一人の罪のない心を苦しめてしまいました。従順な一人の娘を悲惨な、病気で盲目の者にしてしまったのです。 — 私は彼女を失ってしまいました」（彼は感動を募らせて話し続け、脇を向いて、リアーネの微光の下の高台の住まいを見ないようにした）「そのことは出来る限り、耐えています。しかし再び彼女を取り戻す秘かな策もないのです。 — 厳しい心の狭い母親の許の向こうの家で、犠牲の血を出し切ることがあってはいけません。喜びの蜜の滴があれば、貴女とイタリアの天があれば、彼女は治るかもしれません。 — 彼女は留まれば、死んでしまいます。私は見守るために残ることになります。 — 友の方、私の依頼は過ぎたものです」。

「叶えて差し上げましょう。明後日、私はその母親と娘の許に出かけて、娘が旅に加わるよう、私の権限の範囲で、決めましょう。しかしこれは、 — これも率直に言って、 — 単に貴方に対する純粋な友情の念からです。この令嬢は私にはその神秘主義が必ずしも心にじっくり来ないのです。貴方のように愛せません。この方は人間に対する一切をただ神への愛から行っています。これは好きになれません」。 —

「以前は私もそう思っていました。しかし神々しい女性は普通神より他に誰を愛しましょう」と彼は言った。自らと夜とに沈み込んで、侯爵夫人に対しては余りに誇張していた。 — 彼の微光を発する目は白い山の館に釘付けになっていて、春が月から下の、彼の目の輝く視線の方へあちこち吹き寄せていた。この美しい若者は泣いて、激しく侯爵夫人の手を握った。しかし彼はこの双方に気付いていなかった。彼女は彼の心を尊重して、それを止めなかった。

ようやく両人は高い階段を降りて来た。そこでは天文学者が喜んで待っていて、両人に述べた。率直に言って、天文学に対する彼らの愛着と敬意はとても嬉しいばかりでなく、勇気付けられる、と。

「明後日にはきっと致します」とこう言って侯爵夫人は別れて、思いに耽って、溢れている青年に慰めと夢とを与えた。

第二十二ヨベル期

ショッペの心 — 危険な霊との出会い

第九十三周

今やアルバーノはまた時計のイクシオンの火焰車[刑]に処せられることになった。侯爵夫人の外出と返事が突然、暗くて広い洞穴に明かりを点してくれることになった。その洞穴な中を彼は長く歩いて、その洞穴が恐ろしい形象や有毒な獣を閉じ込めることになるのか、それとも輝かしいアーチと冥界の支柱ホールと共に円蓋ができ、満たされるのか分からないでいた。リアーネの状態についてはこれまで二人の手が、アウグスティと大臣夫人の手がヴェールを固く被せてきていた。兩人ともご機嫌いかがですかという問いに答えたがらない人間であった。しかし天文学的夕べ以来、彼は侯爵夫人に今や全幅の信頼を置いていた。彼はこの夕べ、どのようにして一人の女性の友に、かつて一人の男の友に対してしたように、そしてそのとき以上に、自分の愛についてあれこれ語ることができたのか今となってはほとんど理解できなかつた。しかし男というものは、一人の男の前では自分の情感について語りたがらず、一人の女性の前で語りたがるものであり、女性は一人の女性を前に最も好んで語りたがるものである。しかし侯爵夫人は、考えられる最も上品な追従で、決然とした静かな注目、彼の心をつなぎとめた。言葉上の称賛に対しては彼は嫌い、泰然としていたが、行為上の称賛に対しては好意を寄せ、利子を付けた。

決定の知らせが来るまで混乱した時が経過した。夜に旅する人間のように、彼は色々な声を聞き、明かりを見た。それらが敵対する意味を持つのか、好意的意味を持つのか、朝でなければ分からないことであった。 — ラベツテは病に臥せっていて、疲れた心臓は出血していた。というのは彼がその心臓から、止血の短剣を、つまりカールの愛を引き抜いたのではなく、カール本人が彼よりも先に来ている、最も苦い涙の上に苦く甘い涙を流していたからである。

カールは彼と一度出会った。帽子を深々と被り、憤激で刺すような視線で、挨拶しなかつた。 — 至る所で、カールはリンダとユリエンネの二重の門を攻囲し、駆け寄って行くが空しく終わっていると彼は耳にした。このこととリアーネの病のせいで、この熱帯の未開人はさながら森から出て来た野生育ちの少年となっていた。現今の別離のときでも、

— この友の戦場で、 — カールがアルバーノに対し次のように想定しないこと、 — というのはこう想定しないから路地で憤激したのであろうから、 — つまりアルバーノは伯爵令嬢に会おうとはしないであろうと想定しないことを、アルバーノはこの人間の一つの傷と見なしていた。

図書館司書さえも数日前から一つの秘密を抱えているように見えた。しかしショッペは、ショッペの深みに次第に明かりが点されて、彼の喜劇的仮面の背後をアルバーノが覗き見て、その実直な目と愛敬のある口まで察するに至って以来、アルバーノの心にとっても間近に寄り添って来たのであった。殊にかくも多くの別れの後、寄って来た。というのは講師も人間の愛とか、それどころか背信の友の愛は求めないという彼の慣習に従って、彼とは別れていたからである。このことはこの若者を傷付けた、若者はこのことを心のうちでは認めただけでも。

つまりショッペは数日前から別な調子に移っていて、自らの売れ残り、晩夏となっていた。彼が惨めな干し草刈りの歌を半日簫笛で吹き鳴らすということで、それは始まった。残りの半日はそれを口頭で歌っていた。読んだり書いたりする代わりに、彼は町や部屋の中をあちこち歩いていた。彼がいつもは素早く片付けることすべて、つまり歩いたり、食べ物を嚙下したり、話したり、煙草を吸ったり、命令したり、起き上がったこと、

これらが、今や両足の間に穀竿の打棒が挟まって、立ち止まってしまった。彼のゆっくりした立ち上がり、彼の優しい、かすかな足取りは、以前の彼を知っている者達には、滑稽に思えたことであろう。彼の大きな、立派な狼狩猟犬は、この犬に彼は、自分がその犬とランゲ[Lange(1670-1744)]の『対話』、宗教局の対話を行うとき、日に十回その前足で首を抱いて貰って、その毛皮で覆われた胸を好んで自分の胸に抱き締めていたのであるが、はなはだ等閑にしてしまっていて、その犬は注意深くなり、どう考えていいか分からなくなっていたのである。いつもは殴られた犬の叫び声にほとんど耐えられなくて、保護者としてシヨッペは戸口のドアを開けて向かって行ったものだが、それは、人間を犬のように扱うのは構わないが、犬をそうしたらいけないと信じているからであった。 — 今や叫び声を聞いておれた、単にそれが耳に入っていないからであるように見えた。

いつもはよくアルバーノの許に来て、ただあちこち歩き続けて、一言も発しないのであったが、 — それはシヨッペが言うに、「まさに本当の友であることが分かるのは、友が自他に楽しい話をしようとするからではなく、ただ座ったままでいようとするからである」のであったが、 — 今やもっと寡黙になって、戯れる子供のように優しく、本を読んでいるアルバーノの肩によく触れて、アルバーノが振り向くところ言うのであった。「何でもない」。しかしアルバーノはその変化を問い詰めなかった。潮時を見て変化の理由を告げると知っていたからである。彼らの心は覆いのない鏡のように向かい合っていた。

そのように今や人生の暗い森がアルバーノの前に錯綜し、深く茂みに入って行く山道と共にあって、彼は未来の十字路に立っていて、精霊を待っていた。この精霊が敵意ある者としてか、あるいは善意の者としてか、彼にリアーネの決意をもたらす筈であった。ようやくその暗い森から一人の精霊が、しかし暗い精霊がやって来て、彼に侯爵夫人からの次の書き付けを渡した。

「親愛なる伯爵。いつも本当のことをお話しし、遠慮せずに申します。病の v.F 嬢は、旅ができるとか、旅で良くなるという状態ではもはやありません。衷心より同情致します。今日自らお慰め申し上げたく存じましたが、この知らせの後ではその機会は無理かと存じます
貴方の友の女より」。

若々しい朝焼けからの何という陰鬱な豪雨か。それではこれまで朝焼けが育てていた秘かな喜びは、恐ろしい打撃の先触れ、滝の前の穏やかな音色であったわけだ^{*1}。まさに彼の愛が、彼女の生命の中を通過した白熱の剣とならざるを得なかった。このことを彼は絶えず考えて、このことに彼は苦しめられた。しかし目が濡れることはなかった。良心の苦^{にがよもぎ}蓬は痛みさえも苦いものにする。

人間はもはや自分自身の友でもなくなると、まだ自分の友である自分の兄弟の許へ行く、穏やかに話しかけて貰い、また生気付けて貰うためである。 — アルバーノは自分のシヨッペの許へ行った。

彼はシヨッペに出会わなかった。しかし別な風に出会った。つまりシヨッペは「自分と

*1 ヴィルヘルムスヘーエ[カッセルの公園]では滝の前では長い音楽の音色が聞こえる。

世間」について日記を書いている、友人は、その気になったら、読みたいことを読んで良かったのである。ただその中で、 — それはあたかも誰も更に読まないかのように書かれていたので、 — 怒った扇の打擲、それも硬い端の方での打擲を受けて出て行くことになっても、我慢しなければならないことであった。「何故自分よりももっと君をいたわらなければならないのか」とショッペは言っていた。この「君」という関係に彼らは、いつからというわけではなく達していた。いつもはこの心の官庁体、この最も神聖な魂の両数を他人に対しては惜しんでいたのであるが。「というのは神に感謝することだからな」（とショッペは言った）「時に貴方と言えるような、いやそれどころか、人間や悪漢どもがそれを求めているとき、コンマを打ちながら、尊敬措く、能わざる、貴台と言えるような言語の中に住んでいることはな」。

アルバーノは日記が開けられているのを見だし、驚いて次の文を読んだ。

「聖アマンドゥスの日[10月26日]。周知のヘズス、あるいはハヌス^{*1}にとっては愚かな極めて珍しい日である。私は、この哀れな雷神が、背の高いプロセルピナ^{*2}の後を付いて行き、最後に彼女の顔を、その額を、その口を、その首を覗き込むに値するのか、ほとんど自信を持って言えない。何ということか。このような雷神がその場に残っておれたらどうか。 — 恋する忠実な羊飼ひ[Guarini作、Il Pastor fido.1585年]として、この雷神は幸いまた立ち上がって去って行った。地獄の女神よ。ヘズスの急進的改革女性よ、汝はこの雷神の天となった。雷神はいつか汝を手放せようか。

午後。羊飼ひは自らが狩り立てられる猟の家となっている。どこにいたらいいか分からない。今や路地のどこにでも住んでいて、自らの<天のジャンヌ・ダルク^{*3}>を眺めており、十分に悩んでいる。しかしヘズスよ、受難は茨[舌]で、その茨[舌]で愛の締め金は結び付けられるのではないか。 — 今日フライターク^{*4}[『ロビンソン・クルーソー』のフライデー]は侯爵夫人と天文台へ行った。 — 風は南東東からだ。 — 一時間で十三冊の月刊誌を読んだ。 — シュペーナーは人生を輝かしい拡大鏡の神の中で、ある者同様、神々しく、詩的に見ている。

聖ザビーネの日[10月27日]。よく見てみると、この羊飼ひの状態は良くない。彼は恋文の文鎮を用意しようとし、夜ベッドで髪粉をかけようとしている。この悪漢はかっとなって、温かい牛乳のように、すでに詩的な生クリームをかき立てている。天はこの者がその地獄の女神といつか理性的な対話をするような事態に陥らせないよう絶対にそうして欲しい。顔と顔を合わせ、息と息を合わせ、二つの魂が互いに混じり合ったらたまらない。

— まことにフリンス^{*5}が彼を拉致した。ヘズスは千年帝国を一気に飲み込むことだろう。ヘズスがこの神酒で余りに凶暴になり、私の手に負えなくなるのではないか心配である。

*1 両方とも古代ドイツの雷神の名前。しかし彼はこれで自分自身のことを指している。

*2 モロッス人[古代ギリシアのエピロスに住んだ]はすべての美しい女達をプロセルピナと呼んだ。

*3 シラーの「聖なる乙女、『オルレアン少女』」はそう呼ばれるべきであろう。[arc-en-ciel は虹の意]。

*4 彼のアルバーノ。

*5 ヴェンド族は死をそう呼んだ。

夕方。この羊飼いの事態はかくも進行していて、世紀の葡萄摘みの十年間の時代からのある著者を（その名を告げることを羊飼いは恥じている [Miller(1750-1814) Siegwart の著者]）、借りだしてきて、この著者が十四歳の時、自分に及ぼした効果に思いを寄せながら、この愚かな代物から感動を得たいと思っている。勿論今の歳では日中の夜警人のようにその代物にはむかつかうだけである。しかし彼は呼びかけを呼び返し、昔の感動について新たな感動を得ている。それで文法で cornu [角、単数は属格が corunus と変化するだけ] の変化は今の時に至るまで、私に微笑みかけてくる。黄金の少年時には何と容易に素早く全ての単数を覚えたとか思い出すからである。

聖シモン、聖ユダの日 [10 月 28 日]。美しい顔と偽のマックス金貨は一年の経過のうちに、二、三百人の悪漢を作り出すが、彼らはただ得たいか手放したいかの願望で異なるだけである。ヘズスはすでに数百万の恋敵と仲違いし、攻撃し合っている。ボタン製造人とレース細工人、あるいは黄銅細工師と真鍮細工師のように、近い職人は一緒にやって行けない。地獄の女神よ、汝がすべての男どもを憎むのは結構なことだ。これは羊飼いににとっては何ほどかのもので、傷への香油だ。 — スキオピウスとか両スカリジェル、力強い両シュレーゲル等々」。 —

ここで日記は別の事に移っている。古い肖像画で、これはショッペ自身がモデルとなっていて、これを彼は修整していた。ペスティッツの週刊新聞への広告として添え書きがその役目を告げていた。

「最後の署名者は、ネーデルランド派の肖像画家であるが、ペスティッツに腰を落ち着けており、どんな身分、性別にかかわらず、モデルとして座るすべての人を描く用意があると告げるものである。この者の腕の試しとして、この者の許でこの者の肖像画を御覧頂けよう。これはくしゃみをしている時の姿を描いたもので、これを同時にこの者本人と比べたらよろしい。 — 私は切り絵もする。

ペーター・ショッペ
一七七八号地」

多分これは地獄の女神に働きかけて、いつかくしゃみする画家のモデルとなって欲しいがためのものであろう。アルバーノは深い痛みの中でありながら驚かざるを得なかった。最初彼は自分の単純な性質上、ハヌスは自分のことだろうと思ったのであった。

このときショッペがやって来た。穏やかにまずアルバーノが言った。「私は君の日記も読んだ」。図書館司書は感嘆符の呪いと共に後ずさって、熱くなって窓から外を見た。「どうしたのだ、ショッペ」と彼の友は尋ねた。彼は振り返って、彼をじっと見つめ、言った。歯を磨く者のように、顔の肌をぐるぐるに動かしながら、バターパンにかぶりつく少年のように上唇を上げながら、「愛しているのだ」と。そして火と燃えて部屋をあちこち動き、まだこんな晩年になって、このようなことを自分で体験するはめになるうとは思わなかったと嘆いた。 — 「もう私の日記は読まないでおくれ」 — （と彼は続けた）「名前は聞かないでおくれ。どんな悪魔であれ、天使であれ、地獄の女神もその名前を知ってはならない。 — いつかひょっとしたら、私と彼女がアブラハムの膝に座って、私が彼女の膝に、...おや兄弟、君はととても沈んでいる」。

「楽しく愛の太陽の気の中を飛ぶがいいよ」（と彼の友は人間を単純に、静かに、そ

して謙虚にさせる良心の悲しみの中で言った)「私は君に決して尋ねないし、邪魔はしない。これを読んでおくれ」。彼は侯爵夫人の書き付けを渡した。そしてショッペが読む間に彼に向かって言った。「彼女が喜ばないのであれば、喜びはすべて呪われてしまえ。彼女が生きている間、あるいは死ぬまで、私はここに残る」。 — 「私もここに残る」とショッペは思わず知らず滑稽に言った。「真面目な話だ」とアルバーノは言った。「以前なら行けたのだが」(と彼は泣くように言った)「一昨日からはもうできない」。

しかしアルバーノはショッペが旅行の一行から外れることを結構と言った。両人は互いに友情の点でも最も得難い自由を有していた。家庭教師の同道は二人の許では話にならなかった。ショッペは多くの知識と作法を有する家庭教師のことを笑っていた、彼らがアルバーノを何ほどの者かにし、何ほどか教育していると想定するとき笑っていた。「世紀が教えるのであって」(と彼は言った)「一人の阿呆が教えるのではない。 — 百万の人間であって、一人の人間ではない。本来はせいぜい教育学的七星[プレアデス星団、昴]が照らし出すのであり、つまり人間の七つの年代のことで、それぞれの年代が次の年代に移って行く。 — 個人はととも人類に似ており、人類の革命や改善はヴルピウス[Vulpius (1762-1827)名手とは言えない]によるシカネーダーの『魔笛』の改作にすぎないものであろう。しかしこの馬鹿げた不協和音の作品の周りでもモーツァルトの諧音は漂うのであり、これを聞いていると父親や言語教師のことは忘れてしまうのである」と。

「我々罪人が何でこの辺でうろつき回ってぶつくさ言っているのか。ラットーへ行こう」とショッペは言った。アルバーノはとともその気にはなれなかった。彼は言った、その地下酒場は自分には何か不気味である、鬱陶しい予感で自分の胸が塞がれる、と。ショッペはその予感を、彼の胸の上にもまだある彼の崩壊した蜃気楼の梁のせいであり、今深淵の中を飛んでいるロケロルの思い出のせいであると説明した。ロケロルはかつて地下酒場で彼に乾杯をして、その後リラルで彼に告解したのである、と。アルバーノはようやく従った。しかしショッペに自分がアルカディアの高台で抱いた別な予感の侵入を思い出させた。

「我々両人は必ずしも最良の惚れた人物を演じてはいないが、しかし地下酒場へ行こう」とショッペは途中で言って、自分の寵児に対し冗談という全く通常になく厳しい拷問梯子を置いた。いつもは、彼自身が愛していないときには、愛についての優しい、思いやりのある真面目な沈黙を守ることができたのであるが、今やもはやできなかった。

第九十四周

地下酒場では馴染みの顔やそうでない顔の離合があった。アルバーノとショッペは互いにかのミューズの山の純な高台へ登って行った。そこでは物理的高台同様に、人生の大気圏がより軽快になっていて、エーテルがより間近に、より短い空気柱に達しているのである。男達は彼らのアララト山で、女達はそのテンペの谷で互いに慰め合うよりも、より容易に慰め合う。ショッペが、ポンス酒と愛の雷雨のような大気で、より熱くなってかなり長く彼の諧謔の閃光をジグザグに、硬化させながら天体を通じて放っていた後、突然見知らぬ男が、髑髏のように全く禿げ上がっていて、それどころか眉毛もないのに、枯れた頬と薔薇色の頬をして、テーブルに着き、そして堅い表情で、ショッペに言った。「今日から十五ヵ月の間に貴殿は狂気に陥るであろう、冗談屋殿」。

「何だと」とショッペは外面的には憤然として、しかし内面的には縮み上がって言った。アルバーノは蒼白となった。ショッペは気を取り直し、厭わしい形姿を鋭く、勇敢に見つめた。この形姿は枯れた、しかし薔薇色の肌を、鋭く高い顔の骨組みの上であちこち揺すっていたが、ショッペは言った。「貴殿が私を理解できるのであれば、預言者の死刑執行人、冗談屋殿、それに貴殿自身が狂っているのではないのであれば、私はこう付け加えることができます。狂気はほとんど恐れるに及ばない」と。これに続いて彼は、一 冷静に、自分の比喩の軍勢を燃え尽くし、捨て去って、こう証明した。「狂気は癲癩同様、その演者よりは観客に痛みを与えるものです。一 狂気は単により早い死、より長い夢、夢遊病の代わりに白昼夢遊病にすぎないからです。一 大抵狂気は全人生、徳操、英知が与えられないもの、つまり永続的な快適な観念^{*1}を与えます。一 たとえ狂気が、これは稀であります、苦痛の観念を鍛えるのであっても、これはそれでも人間のすべての身体的苦痛に対する甲冑となりましょう。一 自分はそれ故決してそれ自体、狂気を恐れませんが、夢をほとんど恐れないようなものです。しかし他人の場合、夢や狂気の中での語りにも我慢ならないし、それを目にするのも我慢なりません」と。「ある人間が」（とアルバーノは言った）「眠りながら我々に向かって、不在の者に対するが如く、語ったり、あるいは目覚めていながらただ自分と一人っきりで語っていると、不気味に思われます。私が自身一人っきりで自分の声を聞いても、同じことです」。

「私は哲学者ではない」と無関心に禿頭は言った。その完全な輝かしい禿げ具合は醜いというよりはむしろ恐ろしいものであった。ショッペは怒って尋ねた。「貴殿は誰か。誰ガ、何ガ、何処デ、何デ、何故、如何ニシテ、何時」。一 「何時ッテ。一 十五ヵ月後に私はまたやって来る。一 誰ガッテ。一 何ものでもない。神は誰かを不幸にしなければならないとき、ただ私を必要とするのだ」と禿頭は言って、一杯のグラスと、共に飲む許しを求めた。アルバーノはそれを喜んで許しながら、尋ねる調子で言った。「今着いたばかりですか」。「丁度グラン・サン・ベルナル峠から」と禿頭は言った。しかし一言ごとに醜くなった。彼の老いた薔薇色の顔に痙攣性の歪みのジグザグが見られたからで、いつも或る人間が次々と生ずるように見えた。彼はちょっと外出した。ショッペは全く我を忘れて言った。「私はますます奴さんに対しては恐ろしい、飛び跳ねる熱病のときの像のように、腹が立ってならない。後生だから縁を切りたい。一 奴さんを絞め殺すべく、邪悪な拳を奴さんめがけて伸ばしたい、そんな気分にならいつも襲われる。苔むした不倶戴天の敵のように、奴さんはますます馴染みに思われる」。

アルバーノは穏やかに答えた。「私の予感の通りだ。一 しかし予感に従わなかったのだから、結末も見届けなければならない」。彼の勇敢な気質、彼のロマンチックなこれまでの話と状況とが、かくも冒険的な展望から彼をたじろがせなかった。

「しかし何故」（とショッペは戻って来た禿頭に尋ねた）「貴殿はそんなに色々な顔つきになるのです。結構なことには思えませんが」。一 「それは」（と彼は言った）「毒のせいだ。十年前に盛られたのだ。一 アクア・トファナ[潜行性毒]は、大量に摂取し

*1 あるイギリス人は精神病院での固定観念の中で、下々の者である観念は少ないと述べた。大抵そこに住んでいるのは、神々や国王達や教皇達や学者達である。

たらどんなに歪めるか御存じかな。 — ナポリで私は十六歳の美しい娘に、すでに数年前からそれを商っていた娘に、飲ませて見たところ、私の前で死んでしまった。毒を盛ることほど罰当たりなことはないだろう」。 — 「恐ろしい」とアルバーノは叫んだ。この男に対する衷心からの嫌悪に駆られていた。ショッペの憤激はしっかり収まっていた。

このとき哀れな瘦せた指物師の妻がリキュールを取りに入ってきた。彼女は目を、恥じらって弱々しく伏せ、半ば閉じていた。彼女は見回す勇気がなかった。町中の人がかう知っていたからである。つまり彼女は夜ベッドから起きて路地に駆られる衝動を有していて、自分の目の前で葬列の前奏というか幻影を見守ることになり、その葬列は数日後この路地を實際通ることになる、と。彼女を禿頭は目にしたかと思うと、禿頭は自分の顔を覆った。

「我々の中で唯一罪のない者がいる」（と彼は、全く蒼白になり、落ち着きなく言った）

— 「ここのこの若者だ」、そして彼はアルバーノを指した。そのとき上の方を六頭の馬に引かれた馬車が音高く通り過ぎた。ショッペは飛び上がって、二回素早く思いに耽っているアルバーノに尋ねた。「一緒に行くか」。アルバーノが否と言うと怒って向きを変え、禿頭のすぐ前に進み出て、荒っぽく言った。「犬野郎」、 — そして背を向けて出て行った。禿頭の青白いままの肌には何の表情も生ぜず、ただ手が少しばかり動いた。あたかも近くに手を差し出せば短剣があるかの如くであった。しかし彼は彼の方に例の視線を送っていた。ナポリの少女が死ぬのを見届けていた視線である。

アルバーノはこの視線に立腹して言った。「いいですか、あの男は全く実直な誠実な力強い人間です。しかし貴方は自ら自分に対し立腹するよう仕向けました。彼を無罪放免しなければなりません」。 — 穏やかな媚びるような声で彼は答えた。「彼のことを今日初めて知っているわけではない。彼も私のことは知っている」。 — アルバーノは、グラン・サン・ベルナルとはスイスの山の事かと尋ねた。「その通り」（と彼は答えた）

「私は毎年そちらへ旅して、一晩私の妹と過ごすのだ」。 — 「ただ僧侶のみがいますと聞いています」とアルバーノは言った。 — 「妹は修道院礼拝堂に凍死した者達と一緒に立っているのだ¹⁾」（と彼は答えた）「妹の前に一晩中いて、妹を見つめ、時祷を歌うのだ」。

アルバーノは聞いている間に奇妙な変化を感じていた。 — 彼はそれを単にポンス酒が利いてきたのであろうと思った。 — それは酩酊よりは高揚であって、彼の内部世界に飛ぶような炎が湧き起こって来て、赤い色合いがその最も遠く離れた境で迷い出していた。今やすっかり禿頭と一緒に一つの大地に立っているかのように、そしてこの邪悪な精霊と戦うことができるかのように思われた。「私も一人妹を有していました」（とアルバーノは言った） — 「死んだ者を呼び出せますか。 — 「できない。しかし臨終の者はできる」と禿頭は言った。 — 「ほー」とアルバーノは震えながら言った。「誰と会いたいのか」と禿頭は聞いた。「まだ私の会ったことのない生きてきた妹です」と熱を帯びてアルバーノは言った。「それには」（と禿頭が言った）「少しばかり眠って貰うことになる。それにその妹はその最近の誕生日どこにいたか貴殿が知らない」と。 — 彼が妹と思っていたユリエンネは幸いなことにその誕生日リラルの宮殿にいたのであった。彼はそのことを告げた。「それでは私と一緒に来るがいい」と禿頭は言った。

*1 周知のように彼らは腐敗することなく一緒にもたれ合っている。

このときショッペの従者が仕込み杖と次のような書き付けを彼に持って来た。

「兄弟よ、兄弟よ。奴を信じてはならない。 — ここに武器がある。君は余りに大胆すぎるから。 — 気配を察知したら、すぐに突き刺すことだ。 — 色々な見知らぬ人々が今晚は君と君の居所を尋ねている。 — この獣の前ではどの命も危ないように思える、君の命も、彼女[リンダか]の命も、 — 用心して帰って来給え

ショッペ

奴を刺し殺し給え、頼む」。

*

「恐いのかい」と禿頭は尋ねた。「そのうち分かるだろう」とアルバーノは怒って言って、仕込み杖を手にとって、彼と一緒にいった。両人が地下酒場の小さな暗い控えの間を通って行くとき、アルバーノは炎の輪の中に自分の頭が囲まれているのを見た。 — 彼らは町を出て、野外に出た。禿頭が先を行っていった。空は星が明るかった。伯爵にとっては、あたかも地球と創造物の地下の水と炎が轟いているのを耳にしているかのように思われた。外ではほとんどブルーメンビュールへの道は分からなかった。突然禿頭は左手の野の方へ走っていった。痩せた指物師の妻がブルーメンビュールの通りで全く硬直して立っていて、目に見えず、通り過ぎて行くある葬列を没頭して見ていた。そして啞、つまり死が有する遠くの鐘を聞いていた。そのように見えた。

そこでアルバーノはより大胆に禿頭の後を追っていった。精霊への恐れで、人間への恐れはなくなるものである。両人は黙って並んでいった。遠くの深みでは、あたかも一人の人間が、進むことも動くこともなく、しっかりとゆっくりと空中に漂っているかのように見えた。禿頭の白い肌は絶えず痙攣して、目に見えない拳が次々と彼の顔の粘土から出て来て、取っ手を示した。あるときはその上に死の神父の顔がよぎった^{*1}。

突然アルバーノは自分の周りに鈍いつぶやきと雑踏の混乱した語りを耳にした。彼の周りには何もなかった。「貴殿は何も聞こえないのか」と彼は尋ねた。「一帯は静かだ」と禿頭は言った。しかし雑踏が食欲に熱くつぶやき、ささやき続けて、あたかも終わることなくまとまることがないように見えた。 — 大胆な若者は身震いした。影の世界の門が大地の中に広大に開けられて立っていた。夢想と影とが群れて出入りし、明るい生の間近へ飛んで来た。

両人はリラールの手前の木陰道へ入って来た。そこへ一人の少年が不格好な大きな頭をして二本の松葉杖を頼りに歩み出て来て、若者に頷きながら一本の薔薇を差し出した。アルバーノはそれを受け取った。しかし少年はそれを嗅いで欲しいと言いたげに絶えず頷いた。アルバーノはそうした。 — すると突然、人生の幕が下りて、底のない微睡みが彼を暗い深みに陥らせた。

彼が重苦しく目覚めたとき、彼は一人っきりで武器もなく、古い埃のたまったゴシック

*1 イーゾラ・ベッラ[島]で彼の前に出現した者である。[第七周、解明は拙訳 535 頁]。

式の部屋にいた。 — 弱い小さな明かりがただ影をばらまいていた。 — 彼は窓越しに見た、 — リラールであるように見えた。しかし風景全体に雪が積もっていて、空には白い雲がかかり、それでいて奇妙に星々が瞬いていた。これは何か、私は夢の仮装舞踏会にいるのかと彼は自問した。

そのとき壁紙が開いた、 — 顔を無数のヴェールで覆われた女性の形姿が入って来た、 — 少し立ち止まって、 — 彼の心臓の許に飛び込んで来た。「誰だい」と彼は尋ねた。彼女はより激しく彼を抱き締めて、ヴェール越しに泣いた。「私のことを知っているのかい」と彼は尋ねた。彼女は頷いた。「君は私の未知の妹か」と彼は尋ねた。彼女は頷き、しっかりとした妹の腕で、熱い愛の涙と性急な接吻と共に彼を固く抱いた。「どこに住んでいるのか言っておくれ」。彼女は頭を振った。「おまえは死んだのか、それとも夢か」。 — 彼女は頭を振った。 — 「おまえの名はユリエンネか」、 — 彼女は頭を振った。「おまえが本物であることの印をおくれ」。 — 彼女は近くのテーブルの上の半円の黄金の指輪を示した。「おまえのことが信じられるよう、おまえの顔を見せて欲しい」。 — 彼女は彼を窓から連れ去った。「妹よ、嘘でないのであれば、ヴェールを上げておくれ」、 — 彼女は伸ばした長い、覆われた腕で、彼の背後の何ものかを示した。彼は頼み続けて、彼女は激しくある方を指し示して、彼を自分から押しやった。とうとう彼は従って、横の方を向いた。 — そのとき彼は鏡を見たが、そこで彼女が素早くヴェールを取ると、その下には年老いた姿が写し出された。その像は彼の父がイーゾラ・ベツラ[島]で銘文と共に見せたものであった。しかし彼が振り返ると、自分の顔に温かい手と冷たい花とを感じ、彼の自我は再び眠りに陥った。

彼が目覚めると、彼は一人っきりであった。しかし彼の武器と共にあり、彼が最初眠り込んだ森の場所であった。空は青く、明るい像が微光を発していた。 — 大地は緑で、雪は消えていた。 — 半円の指輪を彼はもはや手にしていなかった。 — 彼の周りでは物音はせず、誰もいなかった。すべては夢の吹き流された雲の列だったのか、夢の魔法の煙りの中の短い渦や形成だったのか。

しかし生命、真実が彼の胸元ではとても生き生きと燃え上がっていた。妹の涙はまだ彼の目に残っていた。「それともこれは単に兄としての涙なのであろうか」と彼の混乱した精神は言って、彼は立ち上がり、明るい夜の中、家へ帰った。すべては静かで、あたかも生命はまだ眠り続けているかのようであった。 — 彼は自分に耳を傾け、生命を目覚めさせることを恐れた。 — 彼は自分の歩き続ける体を見つめた。いや、この密な、我々の周りに巻き付けられた[肉体の]ベッドは、我々にまさに人生の苦しみと喜びとをこっそりと渡してくれる。丁度、ベッドの掛け布団が我々の唇にかかっていると、我々は眠りながら襲いかかってくる山々の下で窒息するように思われ、掛け布団が厚すぎる羽毛で両足を押さえ付けると、張り付くような熱いブリキの上を進むように思われ、掛け布団が涼しく外れると、裸の乞食として凍えるように思われるように、そのようにこの大地は、つまりこの肉体はそこからその悩みと喜びの拡大された歴史[物語]を形成するのであって、いつか目覚めたら、ほんのわずかしか真実ではなかったことになるのである。

「おや、何故こんなに遅くなって帰って来るのだ。 — それに青ざめて」とショッペは尋ねた。彼はアルバーノの部屋で長く彼を待っていたのであった。「今日は何も尋ねな

いでおくれ」とアルバーノは言った。

第二十三ヨベル期

リアーネ

第九十五周

朝アルバーノの話を聞きながら、これほどショッペが呪いの声を発したことはなかった。殊にショッペは自分が残ってはず、禿頭に対し、この多くの幽霊の動作の弾み車に対し、その回転の最中、阻止しなかったことに対し呪った。彼は絶えず伯爵に頼み込んだ。是非とも次の出現の際には、――特にイタリアでは、――容赦なく禿頭の仮面を引き裂くよう、奴の命を吹き消すことになってもそうするよう頼み込んだ。その夜、この若者は余りにも強く動揺してしまっていた。それ故彼は語ることを好まず、短く触れた。彼の中ではすべての情感は、ロケロールの場合よりも、より真面目に、より圧倒的に生じていた。それで彼はロケロールほどその描写を喜ばず、それに臆していた。彼は自分の父が島で渡した小さな老いた妹の像を探した。夜の鏡像は何と的確な模写であったことか。一人の妹に対するこの高齢化の苦は、ただ単にその類似性を隠すためのもので、技法によって種蒔きされているものに相違なかった。ユリエンネという推測は、ヴェールの女性が否と言ったし、このような夜中の役目は考えられないことである以上、また諦めることになって、こうしたすべての理解し難い蜃気楼の高度の計算は、間近な彼の父の加勢によるものと押しやられた。

すべての彼の考えの上に禿鷹の輪を絶えず描いていたのは、ある遠くの薄暗い形姿、死の天使で、これが寄る辺ないリアーネに対し食欲に襲いかかろうとしていた。ブルーメンビュールの道での葬列予言女性の凝視が――殊に侯爵夫人の悲しい書き付けの後では、――今や薄暗い交錯した、彼の人生の道が追い込まれた木陰道の中で、舞い飛ぶ恐怖の像としてたぶらかし続けていた。

新しい、唯一の決心が、今や彼の魂の中で、路上の硬直した横木のように固定されて、それがいつも一つの方向だけを示していた。ブルーメンビュールの通りの方である。「おまえは彼女の許へ行かなくてはならない」――とその決意は言った、――「彼女をおまえの怒りとおまえの昔からの頑固さの思いの中で死なせてはならない、――彼女に再会して、許しを請わなければならない。それから、彼女の墓が開き、彼女を連れ去るまで泣くことだ」。――そのときには、と彼は自分に言った、この天使の臨終の王座の前で、私の頑固な、誇り高い、荒々しい心を砕くことにしよう。そしてすべてを、私がリラールでこの穏やかな魂を盲目にし、傷付けてしまったとき、投げかけたすべてを撤回することにしよう。彼女の愛の短い日々を余りに残念なものに思わないように導き、彼女の心が少しばかりの最後の喜びを抱いて私から別れるようにしよう。――このことを、神よ、我々に教示し給え、と。

ショッペは、自分と一緒に夜の不思議な出来事の派遣室を、多分ゴシック式の神殿でなされたに違いないその部屋を探し出そうと申し出たが、無駄であった。アルバーノは今日のうちにも青ざめた恋人の許に行きたかった。明らかにショッペはリラール訪問を主張し

続け、最後に、早まって命令調でこの訪問を要求した。 — しかし今やこれは台無しとなり、アルバーノの拒絶は頑なであった。「忌々しい、泣いている者は始末に負えない」とジョッペは言って、出て行った。

しかししばらくすると彼はまた戻って来た。 — ガスパールが郵便局の馬の継ぎ換えを要求しているガスパールからの書き付けを持っていて、ジョッペは父を迎えに行こうと自ら提案した。何と爽やかに父親の間近さの知らせは、アルバーノの重苦しい砂漠に吹き寄せて来たことか。 — それで彼は二度目の拒絶をした。長いこと欲し、諍い、刻々に過ぎて行くために、リアーネはますます陰鬱に彼女の雲に覆われてしまって、彼は不安げにイーゾラ・ベツラ[島]での、彼女についての夢を思い出した^{*1}。 — 仕舞に彼は由々しい引き離しに邪推を抱くようになった。

この点彼は間違っていなかった。ジョッペは自分が知ったときとは、全く別な関連に従って行動していたのであった。つまり講師のことで、講師は反逆的な、しかし自分はいつでも称賛を惜しまないこの若者について、昔からの賢明な実直さで、代理役のジョッペを通じて、遠方から監視を行っていて、ジョッペに対して畳々たる鉛のように重たい雲の塊を示したのであった。今やこの塊が高貴な若者の頭に向かって落ちかかっている、と。つまりリアーネの眼前に迫った死のことである。

以前両親との諍いは、リアーネの神経にとってさながら詩的苛酷さであり、まだ含鉄葡萄酒であって、これは後に諦念と秋の休息と敬虔さの優しい水の中で溶けるのであった。人間を船のように散らす温かい風というものがある。精神の蠟細工を溶かすある温かさがある。その上毎日敬虔な神父がやって来て、彼女の翼を広げた。そして彼女を地上の希望や地上の不安から解き放ち、彼女を神々しい王座の輝きの中へ導いた。 — 彼女は自分の終わった愛の美しい春の風をまた吹くようにさせたが、しかしより高次な所であり、それは薄い、穏やかなエーテルの西風、花々の香りであった。 — 彼女は、自分が死ぬこと、神を愛していることを今や同時に知っていた。彼女は太陽のようにすでに自分の天に静かに離れて立っていたが、しかし太陽のように従順に彼女の母の小さな一日の周りを回っているように見え、母親を穏やかに温めていた。 — 彼女の涙は溜め息のように甘美に流れ出て、夕焼けからの夕べの露のようであった。 — 浄福に波打ちながら快活な夢想に沈むかのように、彼女は死の川で、肉体の衣装を、長いことまとい、ゆっくりと着用して、漂いながら流れて行った。

ただ一つの地上的抵抗がこれまで甘美な落下を妨げていた。 — やって来るロメイロ嬢への熱い期待で、彼女の女友達ユリエンネの、自分とは衷心から仲の良いこの女友達への期待であった。ようやくこの女性が登場し、彼女の空想を激しく捉えた。というのは空想の翼がこの穏やかな、いつも変わらぬ白鳥の場合^{*2}、まさに強力すぎるものであったからである。この病身の女性は何とこの輝かしい女神の許で謙遜したことか。何と彼女はアルバーノに対する以前の愛に自分は値しないと思ったことか。 — かくてただ神の前でのみ謙虚であったシュペーナーは、彼女の先の人生からこの二つの宝石を、自分の今の神

*1 その夢では、彼が彼女を抱擁しようと思ったとき、彼女は雲の中に消えて行った。[第八周、30 頁]

*2 白鳥は翼の打撃で腕を砕くことができる。

々しい人生の中へ引き出すことを、つまり人々に対する昔からの謙虚さと、恋人に対する昔からの切ない配慮を引き出すことを、彼女に対し妨げることがほとんどできなかった。

ユリエンネが更にしばしば彼女に諫止したのかもしれない。というのは彼女はある晩、 — アルバーノがイタリアに旅すると聞いたとき、 — リンダの心に絡みついて、いつものように思いが溢れて、ただアルバーノだけが彼女にふさわしいと彼女に言ったのであった。リンダは不思議そうに答えた。自らを消すような愛を知らない、と。自分の場合、自分は死ぬであろう、と。「私はそうしていないかしら」とリアーネは言った。

ユリエンネはすぐその後リアーネに、当惑した高貴な伯爵令嬢に対しその点は許すように頼んだ。リアーネは侮辱されたと思わず、黙っていた。しかし自分の別れたアルバーノに今一度再会し、自分の以前からの誠実さと彼の間違いを証し、彼に臨終の心で新たな大きな心の女性を遺贈するという新たな願望に今や彼女は捉えられた。彼女は自分の聖なる魂のすべての最後の願望に関し、とても率直であった。母親とアウグスティはできる限り彼女の手を抑えて、このような再会という喜びがもたらすに違いないかくも有毒な黒い花を、病身の心に挿すことのないように努めた。しかし彼女は、ようやく来年に、 — カロリーネの予言に従って、 — 現世から旅立つのであるから、これは本年には何の害もないと請け合った。 — しかし人々はこの最後の目標をいつも引き延ばそうとした。ガスパールが伯爵を連れ出すことを期待していて、すべての希望が失われた緊急の場合にのみ、この致命的な希望を叶えるという計画であった。

そこで彼女は兄に自分の願いをぶつけた。しかし兄は半ば苦い虚栄心から、半ば妹に対する愛から、アルバーノのより冷たい面を描いて言った。彼は楽しい国へ旅して、彼女のことはすぐに諦める等々、と。いかにこの穏やかな魂はほとんど怒り心頭に発したことか。女性の明察で、このことからアルバーノとラベッテに対する愛の新たな破断と、滞在しているリンダに対する愛着の再来を見いだしたからである。彼女はすでに長いことラベッテの長い不在のことを調べてきていた。というのはこの哀れな女性ラベッテは、彼女の墮落以来、自分の無垢の埋葬以来、どんなに頼んでも命じても応じてくれなくなっていて、永遠の無垢の女友達の前に、棄てられた罪人の目をして現れることはなかったからである。そして今やそれは全く不可能なことになっていた。リンダの到着と訪問によって、彼女の飛んで行く夏[浮遊する蜘蛛]のごく小さな煌めく織物も踏み潰されて、苦惱で一杯のラベッテの口は息苦しくまとわれた喪のヴェールで窒息させられたからである。「お兄さん、お兄さん」（とリアーネは夢中になって言った）「私どもの哀れな両親は何という子供を持ったことかと思うことでしょう。私は両親の希望に応えられません。すべての希望はあなたにかかっています。どんなにお父さまは怒られることでしょう」と彼女は昔からの恐れと愛から付け加えた。兄は（ラベッテの投下、投棄について）真実を、この真実は今回武装した運命の女神パルカの姿を取るであろうので、リアーネから遠ざけることが正しいと思って、真実の代わりに兄としての愛を置いた。それ故彼はこれまで、伯爵令嬢と話すという唯一の機会を取り逃がしたのである。 — リアーネの病室に腰掛けておれば良かったのである。「おまえは死ぬに違いない」（と彼はあるとき夢中になって彼女に言った）「おまえの織物はとても華奢で、多くの獣の前足で引っかき回されて裂けてしまいそうだというのは結構なことだ。おまえが七十歳まで人間や男どもの下にいたらどんな目に遭ってしまうかしたるものじゃない」。彼も — 自分の経験から、 — 男性の痛みより女

性の痛みが多いと信じていた。天でも日食より月食が多いようなものである。

アルバーノが禿頭や、暗闇での芝居やヴェールを被った妹に会うことになった夜までは以上のような具合であった。この夜リアーネの生命の弦は次々に跳ねて、彼女は急速に変化し、早朝すでに彼女はシュペーナーの手で臨終の聖餐を受けた。講師は大臣夫人から朝の九時にはこの悲しい知らせを受け取った。それ故講師はとても熱心に、ショッペを通じて、若者を身罷る花嫁との出会いから遠ざけようとしたのであった。

後にガスパールの手紙が届いて、兩人はアルバーノを迎えに誘いだそうと思いつき、
一 父親に知らせて、父親を説得し、少なくとも数日アルバーノと一緒に間近な陥没[逝去]の地から離れて、息子がその地に踏み込む前に陥没が済むようにしようと思いついたのであった。

しかしこれはすでに話したように失敗に終わった。アルバーノはショッペにまさに何らかの不気味な出来事の予感を知らせた。ショッペが丁度返事をしようと思っていたとき、ブルーメンビュールからの咳き込んだ使者によって、返事の必要はなくなった。使者はシュペーナーからの次のような手紙を渡した。

「冠省

閣下に取り急ぎお知らせします。危篤のフォン・フルレ嬢は今日のうちにも貴台とお話しすることを熱望しています。これは令嬢が御自身の言葉で恐らくきっと（危篤の病人はいつも正確にその死を予告したがるだけに尚更のことで）今夜を越えることは難しく、この憂き世から永遠の荘厳の中へ旅立つであろうと述べておられるだけに貴方には急いで頂きたく存じます。当方と致しましては、キリスト教徒の閣下にまず御忠告するに及ばないと存じますが、この立派なキリストの花嫁の臨終の床で、主よ、私の死もこの正しき女性のような死であれかしと誰もが願うこの方の床で、然るべくふさわしいものは、恐らく穏やかで、静かな敬虔な振る舞いと祈祷であり、残酷で世俗的な悲しみではないということです。

恐惶謹言

閣下へ

忠実なる宮廷説教家

ヨアヒム・シュペーナー

追伸。貴台が火急の馬車で来られない場合は、数行の御返事を頂きたく存じます」。

アルバーノは一言も言わなかった、
一 手紙を友に渡し、
一 こっそりとその手を握り、
一 帽子を取って、
一 ゆっくりと、涙のない目で路地に出て、山の館の方への道を行った。

第九十六周

身震いをして彼は、昨夜葬儀を幻視する女が立っていた外の所を通り過ぎて行った。彼女は喪服の人間達へと変わった自分の夢がゆっくりと山の通りから下って来るのを見ていたのであった。
一 静かな、温かい、青い晩夏の午後であった。
一 その年の夕焼け、赤く輝いている葉が、山から山へと続いていて、
一 死んだような沃野には有毒なイヌ

サフランが刈られることもなく群生していた。 — 蜘蛛の巣の張られた刈り田ではまだ浮遊する蜘蛛が見られ、綱や帆として幾筋かの糸を出して、それで晩夏は過ぎて行くのであった。 — 遠くの大気圏、大地圏は、静かで、空全体に雲がなかった。 — そして人間の魂は重く雲に覆われていた。

アルバーノの心は時の上に、断頭台の上の頭のように休らっていた。 — 広大な空の青さの中に彼はその中を飛んで行くリアーネしか見なかった。地上では彼女の横たわっている空の骸しか見なかった。

彼は、突然ブルーメンビュールの高台に白い山の館が向かい側に輝いているのを見て、戦いた。彼は駆け下りた。 — 厭わしく醜くなったブルーメンビュールの前を荒々しく通り過ぎ、外の深い峡谷の中、山の館へ通ずる道を登って行った。しかしこの道が二つの登りの谷に分かれていたとき、この痛みにヴェールをかけられた人間は迷って左の方へ行って、その谷の壁の間をますます急いで登り、長いこと急いだ後、高台に出て、微光を放つ喪の館を背後に見ることになった。そのとき彼には、あたかも広大に下に横たわっている風景が嵐の海のように波打つ田畑と浮かぶ山々とで乱れて揺れているかのように思われた。空は静かに明るくこの動揺を見下ろしていた。ただ下の西の地平線上に一つの長く暗い雲が眠っていた。

彼はまた山を駆け下りて、数分後には喪の家の小さな花壇に着いた。彼が急いで通って行くとき、上の館の窓辺に何人かの人間の背中が見えた。彼らが向きを変えたら（と彼は言った）、すぐに、人殺しがやって来ると噂が広がることだろう。このとき大臣夫人が窓辺に来たが、すぐ向きを変えた、彼に夫人は気付いたのであった。彼は重い気持ちで階段を上って行った。講師は感動して迎えに出て来て、彼に言った。「御自分は気を確認に持って。リアーネには優しく。お話しの間は良心のみが立会人となります」。そして黙した青年に静かな病室のドアを開けた。

痛みで胸塞ぎ、屈んで、彼はこっそりと入って行った。病人の椅子では白い服の形姿が、白く瘦けた頬をして、両手を組み合わせて、色々な野の花の花輪を被った頭を肘掛けにもたせかけていた。以前のままのリアーネであった。「ようこそ、アルバーノ」と彼女は弱い声で言った、しかし昔ながらの、昇って行く朝日の微笑で、彼にゆっくりと手を持ち上げて差し出した。重たい頭は上げられないでいた。彼は歩みを進めて、跪き、大事な手を握った。唇は黙して震えていた。「本当によろこそ、私のアルバーノ」と更に優しく繰り返した。最初の言葉を多分彼は聞き取れなかったと思っていたのであった。馴染みの声を再び聞いて、彼の心のすべての涙は一つの雨となって流れ出た。「あなたも、リアーネ」とより小声になって彼は詰まった。ゆっくりと彼女は自分の頭を別な、彼により間近な肘掛けの方に移した。そのとき彼女の疲れた青い目は、ほんの間近に彼の炎の濡れた目を見つめた。何と両人は自分達の顔が同じ長い痛みで色が褪せ、純化したことに気付いたことか。赤い頬で、満開となり、痛みを抱えて、リアーネはより高次の世界のための厳しい試練の冷たく見知らぬ死者の国へ向かっていた。そして色褪せ、痛みもなく彼女はまた戻って来て、現世的に花の散った顔にこの世ならぬ美しさを見せていた。 — アルバーノは彼女の前に立った、彼も青ざめ、高貴であったが、しかし彼はその若々しい、病んだ、痩せ細った顔に闘いと痛みとを取り戻して、目には生命の白熱が見られた。

「まあ、あなたは変わってしまった。アルバーノ」、 — と彼女は長く見つめていた

後、話し始めた。 — 「全く痩せ細って見えます。 — 病気なの、あなた」、 — と彼女は変わらぬ愛の心配を抱いて尋ねた。この心配は敬虔な神父も、人間を人生や愛に対して冷淡なものにしてから命を奪う最後の精霊も、彼女の心から奪うことができなかつたものである。 — 「いや、何ということ、 — いや、私は病気ではない」と彼は言って、思いやって内面の激情を抑えた。というのは自分の嘆きや、自分の愛、自分の死の願いを彼女の前で致命的叫び声で発したいところであつたからである。小夜啼鳥が激しくさえずって死へと梢から落下するやうなものである。

彼女の冷たくなつた目は、温かい思いで、長いこと彼の顔に言い表し難い愛を込めて、休らつていた。「ではまた私のことを愛しているの、アルバーノ。 — あなたはやはりリラールでは全く勘違いしていました。長く経つてからやっと私のアルバーノは悟ることでしょう、何故私が離れて行つたのか、あなたの幸せのためなのです。今日、私が身罷る今日、あなたに言います。私の心はずっとあなたに忠実であつた、と。 — 信じてください。 — 私の心は神の許にあります。本当のことを話しています。 — その為今日私のところにお出で願つたのです。 — あなたの将来の長い年月、あなたの最初の初恋を思い出されても、穏やかに何の後悔も、何の非難も感じなくていいのです。今日は、小さなリンダが死のことを語りますが、怒らないでください。 — かつての私の言い分は正しかつたとお分かりでしょう。 — あそこの紙片を取つて来てください」。 —

彼は従つた。それはリンダの高貴な頭部を描いたもので、彼女の震える手でのスケッチであつた。アルバーノはその紙片を見なかつた。「それを御自分に収めてください」と彼女は言い、彼はそうした。「あなたは率直でよろしい」（と彼女は言った）「あなたは彼女に値します。 — その名前は言いませんが、 — 私に対しあなたが誠実であつたことへの御礼です。彼女は私よりもっとあなたにふさわしい。彼女はあなた同様花咲いており、私のように患っていません。彼女を大事にしてくださいね。 — 彼女を愛して下さることが私の最後の願いです。 — 頑固な方ですね、激しくいやと言つて、私を悲しませるおつもりですか」。 —

「天上の方」 — （と彼は叫んだ、そして彼女を請うように見つめて、彼女に詰まつたいやの返事の霊前の供物を捧げた）「あなたに返事はしません。 — 以前の時のことをお許してください」。 — というのは今ようやく彼はどんなに謙虚に、秘かに、それでいて親密に、この華奢な静かな魂が彼のことを愛していたか分かつたからである。この魂は今となつてもその壊れて行く体の中で全くリラールでの素敵な日々同様に語り、愛していた。丁度燃える塔の中の溶けて行く鐘がそれでも炎の中から時を告げるやうなものである。

「それではご機嫌よう、愛しい方」（と彼女は落ち着いて、涙も見せずに言つた。彼女の疲れた手は彼の手を握ろうとしていた）「素敵な国への旅の無事をお祈り致します。 — あなたの愛と誠実さに対し永遠の感謝を申し上げます。千もの楽しい時間に対し、向こうでようやくそれに報いたいと思つておりますが^{*1}、リラールでの美しい花々に対し、

*1 彼女は現世での人生を静かな遊びの人生、子供の人生と見なして、第二の人生をようやく活動的の人生と見なしていた。

感謝を、...私のカリトンの子供達が私に花輪を被せたもので^{*1}、... 私ハ夢デシカアリマセン。...アルバーノ、私は何を言いたかったのかしら。お別れです。私の兄を見棄てないでください。 — まあ、泣いていらっしゃる。あなたのためにもお祈りしましょう」。

—

臨終の者達は涙を見せない。人生の雷雨は冷たい大気と共に終わる。臨終の者達はいかにそのラ行音の舌が、広く引き裂かれた心臓の者達に切り込んで行くか知らない。この穏やかな魂はいかに自分が刀を次々とアルバーノに突き刺して行くか知らずにいた。アルバーノは今や自分が、永遠の岸边という春の風が、春の息吹がすでに迎えに来ているこの聖なる女性にとって、もはや何者でもなく、もはや何も与えられず、卑下を奪うことすらできないと感じていた。

彼女は言い終えると、花輪を被った頭を夢中になって上げて、彼の手から自分の手を抜き、声高に熱心に祈った。「神よ、私の祈りを聞き届け給え。そしてかの方が御身の荘厳さの中へ入るまで、かの方を幸せにし給え。かの方が迷い、揺れるとき、かの方を赦し給え。そしてかの方の前に私を出現させ、語りかけさせ給え。 — しかし御身にのみ、全能の方よ、私の現世での楽しい静かな人生に対する称賛と感謝は捧げられんことを。私に向こうでの休息の後、私が働ける素敵な朝を恵み給え。...死の眠りから早く私を目覚めさせ給え。...私を起こして。...お母さま、朝焼けが^{*2}すでに木々に見られます」。 —

そのとき母親が部屋に他の人々と一緒に駆け寄って来た。死の眠りに酔った視線と乱れた語りは今や冷たい眠りが開いた目と共にやって来ることを告げていた。「私の前に出現しておくれ、あなたは神の許にいるのだから」とアルバーノは意味もなく叫んだ。アウグスティは彼を連れ去ろうとしたが、無駄であった。答えず、動かず、彼は根が生えたかのように固く立っていた。リアーネはますます青ざめて、死が天の白い花嫁の服で彼女に化粧を施した。彼の涙を流す目は止み、苦悩は氷結し、苦痛の広く重い氷が彼の胸を満たした。

リアーネの視線は微動もせず、穏やかに曇った夕方の空の明るい箇所、天が開き、太陽を見せることを期待し、探るかのように向けられていた。皆に構わずに彼女の兄が、嘆きながら突入して来た。「神の許へは行くな。おまえにはもう会えなくなるではないか。

— 私を見ておくれ。私を祝福し、清め、おまえの安らぎを私におくれ、妹よ」。 —

彼女は静かに明るく開けてくる太陽の前の雲に見入っていた。「彼女は君を私と思っている」（とアルバーノはカールに対し彼らの似た声のせいで言った）「そして君には安らぎを与えていない」。 — 「私の声を盗むな」とカールは怒って言った。 — 「静かな思いにさせなさい」と母親は言った。母親の屈み込んだ目からただ小さな滴る涙が娘の花輪の上に震え落ちた。娘の疲れて、空の方を眺めている頭を母親は、両手で、自らを支えにして、抱いていた。

突然、太陽が臉のように雲を開いて、明るく覗き込んだとき、この静かな形姿は身震い

*1 ここと先の方で彼女は混乱して語っているが、しかし草の花々の冠はカリトンの子供達が作ったものであると承知している。

*2 彼女は秋の葉[紅葉]を見ている。

をした。臨終の者達は二重に見えるという。彼女は二つの太陽を見て、母親にすがりついて、叫んだ。「お母さま、何とその目は大きく、炎のようなものなのでしょう」。 — 彼女は天に死が立っているのを見たのであった。「私に喪のヴェールをかけて」（と彼女は不安げに頼んだ）、 — 「ヴェールをお願い」。彼女の兄はヴェールに手を伸ばし、それで混乱している目と花々と巻き毛を覆った。太陽も思いやるかのように再び雲を引き寄せていた。

「全能の神のことを考えなさい」と敬虔な神父が彼女に叫んだ。「神のことを考えています」と小声でヴェールの女性は答えた。第二世界のアウローラが黒々と人々の前に立っていて、人々は皆震えた。アルバーノとロケロールはお互いに感動し、手を握った。ロケロールは憎しみから、アルバーノは苦悩からで、金属が軋むような具合であった。部屋は、死が平等にする不似合いな、敵対する人々で一杯であった。側面にアルバーノは見知らぬ忍び込んで来たいやな形姿を見た。それは彼の見分けがたい父親で、その大きな、陰鬱な目は鋭く、厳しく息子に据えられていた。 — 二番目の部屋からは二人の背の高いヴェールを被った女性の形姿が三番目の形姿[リアーネ]を見つめていて、他の人の顔を見ていず、誰もその二人の顔を見ていなかった。

リアーネはヴェールを被ったまま指で戯れていた。部屋は夕方になっていて、閃光と雷鳴の間に静寂が見られた。「全能の神のことを考えなさい」とシュペーナーは叫んだ。 — 彼女は答えなかった。 — 彼は更に語った。「我らの泉と我らの海を考えなさい。神のみが今暗闇の中で汝の支えだ。汝の手から地球と人々が消えて行く。生命のすべての明かりが消えて行くそのときに」。 — 突然彼女は語り始めた。そして全く喜ばしげに小声で、素早く次々と、眠っている人間が語るように語り、ますます恍惚として、素早く語った。「カロリーネ、 — こちら、こちら、カロリーネ、 — これが私の手です、 — 何とあなたは綺麗なのでしょう」。 — 彼女の初恋を清め、彼女の人生に従って来た目に見えない天使が、昇る月のように全ての暗い臨終の上に再び微光を発した。そしてその輝きは小さな五月の夜を別世界の大きいなる春の朝でこっそりと溶かした。

さて天のヴェールを被ったこの尼僧は母親の許で全く静かになった。 — 死の天使がその犠牲者の許に目に見えず、怒って立っていた。 — 大きな翼を持って不安の死のフクロウが人間の目の上に止まっていて、黒い嘴で胸の中を啄んだ。静寂の中でフクロウしか聞こえなかった。 — 騎士のメランコリックな目が陰気にその深い眼窩の中で静かな花嫁と静かな息子の間を行き来した。ガスパールと死の天使は互いに暗く見つめ合っていた。 —

そのときリアーネのハープが静寂の中へ長く一つの明るい、高い音色で響いた。彼女の生命の許で紡いでいた運命の女神は合図を知っていて、止まり、立ち上がって、鉞を持ったその女神の姉妹がやって来た。リアーネの指は戯れるのを止めた。そしてヴェールの下で静かになり、動かなくなった。

「おまえの頭は重く冷たい、娘よ」と嘆く母親が言った。「ヴェールを除けて」と兄が叫んだ。兄がヴェールを下げると、リアーネは満ち足りて安らっていて、微笑を浮かべていたが、しかし亡くなっていた。 — 青い目が天へ見開かれていた。 — 神々しい口はまだ愛の息を含んでいた。 — 乙女らしい百合の額は、より深く垂れ下がって来た花輪で囲まれていた。 — より高い世界の月光によって青白く神々しくこの見慣れぬ形姿

はなっていて、この形姿は偉大に小さな生命達の中からその高貴な死者達の中に進んで行ったのである。

そのとき黄金の太陽が雲間から溢れ、涙を通じて来て、花と咲く夕べの光で、その夕方の雲の青春の薔薇の香油で、色褪せたこの天の娘の上に降り注ぎ、神々しい顔はまた若々しく花咲いた。天ではすべての雲が、彼女が雲をぬって進むとき、彼女の翼に触れて、長くて赤い花々へと変じた。――そして高い、大地の上の膨張した霧の紗を通じて、千もの薔薇がきらきら光っていて、それらは雲の軌道の上に点在して育っていた。その軌道の上を乙女は大地から永遠の者の許へ行ったのであった。

しかしアルバーノは、残されたアルバーノは、涙も目も言葉もなく、痛みの皆の嘆き声の下、神聖な神々しい部屋の薔薇色の赤い夕方の炎の中、静かな形姿の側の地上的喧噪のただ中であつた。深い過去の中、痛みは彼にメドゥーサ[蛇神の女怪、一瞥で人は化石化する]の頭を示していた。そしてすでに彼の心がそれで化石化していたとき、彼はまだその頭を見つめていた。彼は絶えずその暗い頭部がこう口ごもるのを耳にした。「この死んだ女性は、リラルで何と辛く、厳しいアルバーノのことで泣いたことか」と。――彼女の兄はその拷問台で彼に多くの残酷な言葉をかけた。彼はその言葉を聞いていなかった。もっと残酷なゴルゴンの頭部に聞き入っていたからである。

「息子よ」（とガスパール・セサラは真面目に叫んだ）「息子よ、おまえは私が分からないのか」。重苦しい葬儀の心を通じて、生命の声が彼に対し煌めいた。彼は周りを見、父親を見つけて、びっくりして体を整え、彼の胸に跳びかかって、ただ「父上」と叫び、絶えず「父上」と続けた。――彼は叫び続け、彼を激しく敵のように抱き込みながら言った、「父上、これがリアーネです」。――抱擁は更に激しくなった、愛からではなく、苦悩からであった。――「アルバーノ、気を確かに。私の許へ来い」と騎士は言った。「そうしましょう。彼女は亡くなってしまったのです、父上」と彼は窒息して言った。そして今や彼の苦痛は父親の許で、山脈の許の雲のように、一つの絶えざる涙となった。――涙は流れ続けて、あたかも内奥の魂がすべての開いた血管から流れ出たいかのようにあつた。――しかし流涕は苦悩を、豪雨が戦場をそうするように、ただ掻き立てるだけで、彼は一層慰めを得られず、性急になって、鈍く先の言葉を繰り返すことになった。

「アルバーノよ」（とガスパールはしばらくしてから、より強い声で言った）「私と一緒に行くか」。――「そうします、父上」と彼は言って、彼に従った。出血している子供がその傷と共に母親に従って行くようなものであつた。――「明日お話ししようと思います」とアルバーノは馬車の中で言って、父の手を取った。大きく見開かれた目は、腫れて、盲いたまま、温かい夕陽に、すでに山脈に休らっている夕陽に据えられていた。――彼は微笑んで、青白く、小声で穏やかな流涕のままであつた。――そして太陽が沈んで、自分が町に着いたことに気付かないでいた。

「明日です、父上」と彼は力なく言って、騎士に頼んだ。そして閉じ籠もった。彼の周りでは物音一つしなかつた。

第二十四ヨベル期

高熱 ― 治癒

第九十七周

長いことアルバーノは隣室で黙ったままであった。父親は静かな治癒に任せていた。シヨッペは彼を慰めながら見つめたり、耳を傾けたりするために、彼を辛抱強く待っていた。とうとう彼らは部屋の中で彼が激しく祈るのを耳にした。「リアーネよ、出現しておくれ、私に安らぎを給え」。その後すぐに彼は鎖を外された巨人の如く、力強く勝手に出て来た。顔にはすべての血の薔薇色があり、一 目には閃光を煌めかせて、急ぎ足で出て来た。「シヨッペよ」（と彼は言った）「一緒に天文台へ行こう。空には明るい高い星が一つ懸かっている。それに彼女は埋葬される。それを知らなければならぬ、シヨッペ」。

この高貴な魂は高熱の強力な手に屈していた。彼はシヨッペと出て行こうとしたとき、騎士は彼を見つめていた。「また硬直症にならないでください、父上」と彼は言って、ただこっそりと抱擁して、自分が欲していたことを忘れていた。

シヨッペはスフェックス博士を連れて来た。アルバーノはまた自分の部屋に行き、その中で頭を垂れて、両手を組み合わせて、ゆっくりとあちこち歩き、慰めるように自らに語りかけた。「また鐘が鳴り止むまで、待つことだ」。スフェックスがやって来て、見て、一 言った。「単純な熱の発作だ」。しかしどんなに強制しても、就寝のためとか、ただの瀉血のためにさえも、彼は脱衣しそうになかった。「何故って」（と彼は恥ずかしげに言った）「いつ彼女が現れて、安らぎを与えてくれるのか分からないのだから。一 いやだ、いやだ」。医師は全く涼やかな雪の天[冷やして安静]を処方して、この火山が雪で一杯になるようにした。しかしこの冷却と霜の導入もこの野蛮人は拒んだ。しかし騎士が彼に特有の雷の声と憤怒の目とで叱りつけて、この憤怒は気位の高い胸のいつに変わらぬ、しかし隠された怒りの炎を露わにするもので、「アルバーノ、そうしろ」と言ったとき、この病人は正気となり、従って、言った。「父上、あなたを愛しています」。

一晩中、その番人と医師には忠実なシヨッペがなっていたが、この狂気の肉体はその熱い役割を演じ続けて、この青年はあちこち動き回り、鐘が鳴り止むたびに、祈りながら跪くことになった。「リアーネよ、出現しておくれ。私に安らぎを給え」。いつもは合図に乏しいシヨッペが、何としばしば長い抱擁をして、彼を押さえ付け、せめてこの徘徊者に短い休息を与えようとした。朝方医師にとってこの鉄のような白熱した性情の者の力は理解し難いものがあつた。熱や苦痛、歩行でも屈していず、すべての処方された冷却の処置は蒸発して何の効果も見られなかった。一 その結果は恐ろしいものに思えた。アルバーノは相変わらず自殺放火人のままで、一時間ごとに鐘が鳴るたびに、跪いて、天上的出現を希い、見つめていたのである。

しかし父親は彼を人類のようにその固有の諸力に任せていた。彼は言った、自分はこのような稀な弱体化していない青春の力を見るのは好きで、何も恐れていない、と。その上彼は滞りなくすべてをイタリア旅行のためにまとめさせた。彼は宮廷を、つまりすべての人を訪れた。宮廷は、人間達に対し要求し、否認する習慣があることを承知している人にとって、ガスパールでさえも宮廷に話しかけると、すべての世間に対するこの一般的な愛想は、傷付けられた名誉心の痛みを感じさせた。彼はまず侯爵を訪ねた。騎士はイタリアで静かに、愛の毒入り祭餅をその有毒な杯と共に侯爵が受けるのを見守っていたけれども、侯爵はいつも騎士に親しく慣れていた。騎士は侯爵と一緒に増えた新しい美術作品を

視察した。両人は鋭く自由にこれらについての評価を比べ合って、互いに足りないものについて協定を交わした。

その後彼は旅の同行者の侯爵夫人の許へ行った。侯爵夫人に対しては彼の消耗性の誇りは、以前の恋愛の一花粉すらも残していなかった。しかし侯爵夫人は彼の叙事的魂の滑らかな冷たい鏡の中で、その中ではすべての人物が純粹に把握され、自由に動いていたが、彼女の力強い個人性故に主要人物として前景にあった。彼は精神の自由、統一、それに厚かましきさえも、病弱な信心振り、他人の諸力への追従や、自分自身との懺悔に満ちた葛藤よりもはるかに上に置いていたので、侯爵夫人はそれどころかその舌先のシニシズムで彼にとっては「それなりに好ましく得難い」のであった。彼女は大いに熱を込めて彼の息子の状態と旅の同行について尋ねた。彼は昔ながらの平静さで、最良の希望を与えた。

侯爵令嬢のユリエンネとは会えなかった。自分の青春時代の忠実な遊び友達が敵意ある粗野な腕で花咲く岸辺から死の川へ拉致され、この哀れな女性が沈んでしまうのを目にせざるを得なかったこと、このことで彼女はひどく落ち込んでいて、犠牲の後追いをしたいところであった。彼女は昨日、二人のヴェールを被った女性達と一緒に出掛けられなかった。

今やガスパールはヴェールを被った女性の一人の方、ロメイロ伯爵令嬢の許に急いだ。そこで彼はもう一人の方に出会った。 — 侯爵令嬢イドイーネである。イドイーネはすべての手紙の中で自分の顔と魂の瓜二つの姉妹について多く読みながら、自らアルカディアからリアーネの許へ旅して来て、その美しい類似性を調べて見る気にならざるを得なかった。しかし彼女がヴェールを被って、重篤の家に着いたとき、すでに自分の類似の女性[リアーネ]は砕ける目の上に自分のヴェールをかけていた。そしてヴェールが開けられると、イドイーネは自らが亡くなっているのを見、時間の深い鏡の中で、自らの死の像を見た。彼女は自らさながら神の前にいるかのように黙っていた。しかし彼女の心、彼女の生命全体が、動揺していた。

類似性はとても明らかであったので、ユリエンネは意気消沈した母親の前に姿を現さないように彼女に頼んだ。イドイーネは確かにもっと背が高く、もっと鋭い体形で、その花盛りの時にリアーネほど薔薇色の度合いは少なかった。しかしリアーネがイドイーネの側らに出現した最後の青ざめた時には、この青ざめた形姿はより背が高く、顔はより高貴になって、花咲く乙女らしい覆いとその鋭い輪郭から奪われたのであった。

イドイーネは騎士とは余り話さなかった。そして自分の女友達のリンダが普通に子供らしい愛を込めて、彼のほとんど父親らしい愛に対し語って止まない様を見守っていた。彼は二人の乙女に、尊重し、温かい、優しい倫理性を伴って対応していた。この倫理性はある者の目には(例えば侯爵の目には)奇妙に映っていたに違いなかった。その人の目には、しばしば、彼が虫食い状の脆くなった心を、 — 半ば神の教会に、半ば悪魔の礼拝堂に教区編入された心を、 — つまり臆病な、軟弱な、多感な罪人達、内面的に底なしの空想化、例えばロケロールどもを破廉恥な語りのゆっくりした螺旋な中で好んでますます深く、ますます楽しげに劣等さの中心部へとねじ込んでしまいがちなときの皮肉な無慈悲さの目撃者となるのであった。侯爵はしばしばこう考えた。「彼はまさしく私のように考えている」と。しかしガスパールは彼に関しても同じようにそうしていたのである。

ふらふらして青ざめたユリエンネも、彼に会うためにとうとう忍び出て来た。できるだ

け、彼女のためにその女友達の開けられた墓のことは避けられた。しかし彼女自身がその女友達の病気の恋人[アルバーノ]のことを適宜尋ねた。騎士は、一 彼は大抵の重要な返事には独自の何でもない慣用句の書を、殊に弁舌の氷の花を用意していて、次のような次第であったのであるが、つまり「まあ何とかなるでしょう」とか「様子を見ましょう」とか「大丈夫でしょう」と言うのであったが、最後の修辭を用いて、こう答えた。「大丈夫でしょう」。

彼が家に帰ってみると、何も良くなっていなくて、厄災の満潮は高く上がっていた。青年は臥せっていて、ベッドに着衣のまま、一 出掛けることはもはやできず、一 燃え上がっていて、一 とりとめもなく話し、一 それでも鐘が鳴るたびに、高く閉ざされた天に前からの願いを叫ぶのであった。これまで彼の力強い、堅固な脳は、少なくともリアーネとは関係しない一切に対して、理性をしっかりと保つ術を心得ていた。しかし次第に全体が塊が高熱の発酵へと移行していた。彼の父があるとき、彼が跪き、死んだ女性の出現を願ったとき、父の人柄のすべての嵐と雷と共に武装して現れても、無駄であった。「安らぎを給え」とアルバーノは穏やかに祈り続けて、その際穏やかに父の顔を見ていた。

ショッペは今や重要な秘密を抱えた表情で、父親と二人つきりになって言った。自分は間違いのない方策を知っている、と。ガスパールは好奇心を示した。「侯爵令嬢のイドイーネが」（と彼は言った）「詰まらぬ子供っぽいことは何も気にせず、大胆に、時の鐘が鳴り、彼が跪いたら、彼の前に亡き精霊として出現し、命にかかわる安らぎを与えてやらなければなりません」。一 すべての推測に逆らって、騎士は不機嫌に言った。「それは無作法だ」。説得にかかったショッペは、彼を日の当たる側に移そうとしたが無駄であった。一 更に他人の意図の振りをして、ただ更に冬の側に追い込むことになった。彼を穏やかな温かさへ導くことはただ彼本人にしかできないことであった。一 結局ガスパールは彼の慣習に従って、彼の性格の永遠の氷の基盤の上に、上述の慣用句の流水を漂わせることになって、ショッペは気位高く、怒って黙ることになった。その上旅立ちの準備は続けられ、あたかも父は、息子を高熱の火事から燃えたまま連れだし、昔の愛のサークルから狂気のように拉致するつもりであるかのように見えた。ショッペは、こちらに留まる自分の計画を彼に打ち明けた。彼は、自分はそれに何ら反対しないと言った。

さてショッペは自身の引掻かれた顔に、このいつもは自分が擁護する性格の厳しい北風を感じて、「カルダーノが背の高い痩せたスペイン人を信用するなど言っているのは正しい^{*1}」と言った。

アルバーノは病気で、それ故絶望状態ではなかった。彼は狂気というレテの川から現在に対する薄暗い麻痺を汲みだしていた。ただ彼が跪くたびに、奔流の中に彼の砕かれた形姿と雲に覆われた天が映し出された。一 彼は貧民達が彼女の名前を呼んで、感謝して、眠りに就いている慈善の女性のことを悼んでいることについて何も知らなかった。この人

*1 この箇所はカルダーノ『息子達への処方』第十六章ではこうである。「赤い髪のロンバルディア人、黒髪のドイツ人、片目のエトルリア人[トスカナ人]、びっこのヴェネツィア人、背の高い痩せたスペイン人、髭のある女、カールした髪の男、そもそもギリシア人を信用するな」。

々の嘆きの前で今や彼女の表情の験のある弦楽器演奏は聾で啞のままなのであった。 —
彼は彼女の兄の荒れ狂いについても、彼女の父親の声高な（聴覚的に構成された）悼みについても、凝固した鈍い苦悩に包み込まれた母親についても何も知らなかった。 —
彼は、青ざめたカリス[優美女神]が彼女の戴冠室で、或る晩、明かりの間に、この地上で最後に出現することになる、冠を被って、化粧され、微睡んで出現することになる、という事を知らされていなかった。 — 彼にとっては確かに一時間ごとに一つの無限な希望が消えたのであるが、しかし一時間ごとにまた新たな希望が生まれたのであった。 —

「哀れな兄弟よ」（とショッペは次の日、高貴な怒りに駆られて言った）「君に誓おう、今日君の安らぎを得させてやる」。 — 青ざめた病人は彼を頼むように見つめた。「神かけて」とショッペは誓って、ほとんど泣いていた。

第九十八周

ショッペは、騎士のことを、 — 騎士はこの晩、半ば大臣の許で、半ばブルーメンビュールのヴェールフリッツの許でと振り分けていたが、 — 全く気にせず、まさに侯爵令嬢イドイーネの前に大いなる願いをもって進み出ようと計画していた。その前に講師を閉ざされた宮廷のドアの番人、あるいは出札係として、また彼の言葉の保証人として連れだそうと思っていた。 — しかしアウグスティは言いようもなく驚いた。彼は請け合った、それは不可能だ。侯爵令嬢に病気の若者、 — それどころか奇妙な精霊の役割云々... それに自身の父親がすでにそのことをそう見通している、と。ショッペはこれを聞いて跳ねる火薬樽と化して、宮廷や女達の礼儀の殺人的不合理について思い付く限りの呪詛や比喩を並べ、 — こう言った。この礼儀はとても美しく形成され、ギリシアの復讐の女神同様血まみれに苦しませるものだ。 — これは料理女が鷺鳥に対して、ただ出血後に首の傷を縛って閉じて、それで羽毛が汚れないようにするように、人間に対してそうするものだ。 — それでも自分はアウグスティ同様に立派な宮廷人で礼儀を心得ていると彼は両義的に結んだ。「この若者にとっても好意的な侯爵夫人にもこのことを申し出てはならないかな」。アウグスティは言った。「その件は変わりません」。 — 「ユリエンネも駄目か」。 — 「それも駄目です」と彼は言った。 — 「悪魔的悪魔も駄目かな」。 — 「その間に立派な天使がいます」（とアウグスティは言った）「その天使を請願人としてより礼儀正しく派遣することができます。フォン・セサラ金羊毛皮騎士に恩義のある方で、 — フォン・ロメイロ伯爵令嬢です」。 — 「とんでもない」とショッペは当惑して言った。

講師は、 — 決して自らの手は使わない人間達の一人で、すべてを第三の手、第六の手、最遠方の手を通じて、運指法に似た運手法に従って、行いたがる者で、 — 彼をリンダの許に案内する自分の用意と、この「厄介な案件」に効果のあるリンダの能力とを、熟考しているショッペにより詳細に説明した。

ショッペははなはだ右往左往して、 — 何度か激しく頭を振り、そして突然立ち止まり、 — 飛んで更に激しく頭を振り、 — 鋭く問う目をして講師を見つめ、 — 最後にしっかりと立って、 — 両腕を下げて、言った。「どんと来いだ。結構。彼女の前

に立とう。―― いやはや、何故貴殿の前でいわば滑稽な姿をさらさなければならないのか、丁度今に限って」。―― それでも丁重な講師は唇の微笑を単に目の微笑へと移しただけであった。―― ショッペの顔には自己克己者の温かさと素早さが窺われた。人々が卑俗な生活の騒音の中、難聴でありながら、それでもごく繊細な音楽的諧音に開かれているように^{*1}、ショッペの内的耳は一般的営みの民衆の物音には難聴でありながら、しかしより神聖な魂のすべての優しく小声のメロディーを渴して吸い込んだ。

講師は、―― 伯爵を、伯爵が講師に対するよりもはるかに衷心から愛していて、―― 早速図書館司書を嵐のように宮殿へ伴って行った。丁度今が正しく選ばれた宮廷の休暇時間、四時半から五時半であったからである。ショッペは言った、一緒にだぞ、と。宮殿でアウグスティは彼のことを知っている従者に、ショッペを鏡の間に案内するよう命じた。従者はそうした。そして明かりを後から持って来た。ショッペは黙して敏捷な鏡の中のオランウータンの自分の厭わしい供と一緒にゆらゆら進んで行った。自分の役目と行く末に思いを寄せていた。奇妙に彼はこれまでの自由という自分の若い、新鮮な感情に今当惑しているのを感じた、自由は彼がまさに中断していたもので、彼は自由を認め、保持し、見つめていて、その自由に向かって語った。少しばかり先に行くがいい、彼を救うことだ、それからまた戻って来るがいい、と。

彼自身の多重化には反吐が出た。「おまえらは私の邪魔をしなければならないのか、おまえら自我どもよ」と彼は言って、いかに自分が最も豊かで明るい瞬間と自分の存在の最も繊細な黄金の秤の前に立っていることか、いかにこの秤の上に一つの墓場と大いなる人生とがかかっていることか、いかに自分の自我は、周囲の模倣された鏡の自我ども同様に消えなければならないことか、そのことを考えていた。―― 突然、彼に向かって一つの喜びが飛んで来た。自分の決意の価値についてではなく、自分の決意の機会についての喜びであった。

とうとう間近のドアが開いて、最も近いドアが開いた。―― そこへまだ半ば後ろを見ていた頭部と共に偉大な形姿が入って来た。全身長く黒い絹の服に覆われていた。高い木陰道の梢の恍惚たる月のように絹の暗い雲の上に豊饒に花咲く、飾りのない頭部が生命に満ちて彼の前にあり、閃光に満ちた黒い目と、まぶしい顔に濃い薔薇を浮かべていて、褐色の豊かな巻き毛の下に雪の額が王座のようにあった。―― 彼女が彼を見つめたとき、ショッペには、自分の人生が陽光一杯の中にあるかのように思われ、自分が魂の女王の間近に立っているかのように不安な気になった。「フォン・アウグスティ殿から」（と彼女は真面目に始めた）「貴方は病気の友のために、一つの依頼を私に対し有しておられると伺っています。そのご依頼をはっきりと自由に仰有ってください。喜んで明確に率直に御返事申し上げます」。

すべての役割の記憶は彼の中で大地の底に沈んでしまい、消えてしまった。しかし目に見えず、彼の人生の側を飛んで行く偉大な守護霊が、炎の翼でもって彼の心の中へ落下して来て、彼は夢中になって答えた。「私ですな。―― 私のアルバーノが致命的の病気になるまで、―― 昨夜から高熱の中にあります、―― 彼は亡きリアーネ嬢を愛して

*1 例えば指揮者のナウマン[Naumann (1741-1801)晩年難聴]。

いました。 — 高熱という禿鷹の翼に縛られていて、あちこち引きずられて行きます。

— 彼は鐘が鳴り終わるたびに、跪き、祈るのです。空想の熱気に直に当てられて、ますます熱くなって祈るのです。私の前に出現しておくれ、安らぎを給えと。 — 彼は空想の循環する炎の高い火刑台に垂直に服を着たまま立っていて、求め、焼け、とても干涸らびてしまって、折れ曲がっていると察せられます。...」

「モウオ止メクダサイ」（と伯爵令嬢は言った、令嬢はヴィーナスの頭部を燦然と後ろに反らして、ゆっくりと振っていた）「恐ろしいことです。 — それで貴方のご依頼の向きは」。

「ただ侯爵令嬢イドイーネのみが」（と彼は我に返って言った）「その依頼を果たすことができ、彼の前に出現して、彼に安らぎを保証したら、彼を救い出せます。令嬢はとても亡き女性の類...コセ...^{*1}複製であり、幻日であるという噂ですから」。 — 「それが貴方のご依頼ですか」と伯爵令嬢は言った。「私の最大の依頼です」とショッペは言った。「貴方を遣わしたのは彼の父親ですか」と彼女は言った。「いや、私です」 — （と彼は言った）「父親の方は、私のはっきりと、自由に、明確に申し上げれば、そのことを欲していません」。 —

「貴方はくしゃみする自画像の画家ではありませんか」と彼女は尋ねた。彼はお辞儀をして言った。「全くその通りです」。彼女は彼に一時間後には決定が分かりましよう返事して、短い敬意を表する別れのお辞儀をした。 — そしてこの簡素な、高貴な形姿は、彼が酔って見送っている最中、彼の許を去った。彼は周りの子供っぽい鏡がこの唯一の女神に多くの模写の影を大胆に投げかけていることを不満に思った。

家に帰ると彼は確かに狂気の若者が、この若者の耳だけは現実の中で生き続けていて、六時の鐘の音のときまた跪くのを見ることになったが、しかし彼の希望は今や温かい天の下で花咲いていた。 — 一時間後に講師が現れて、意味深く楽しげな表情で言った。まことに上手く行っている。病気についての医師の判断を聞きに来た。それに従って決定される、と。

フォン・アウグスティ殿は宮廷人らしい詳細さでより明確な知らせを彼にもたらしした。伯爵令嬢は侯爵夫人の許へ飛んで行った。将来の旅の同行者[アルバーノ]に対する夫人の敬意を知っていたからで、彼女に言った。自分なら、イドイーネの場合、躊躇なくするであろう、と。 — 侯爵夫人はかなり熟考してから言った。この点に関してはただ妹だけが決定できよう、と。 — 両人は彼女の許に駆け付け、一切を述べた。イドイーネはびっくりして尋ねた。皆が自分をこのような空想的展開に巻き込もうと欲するほど、自分の類似性や、こちらへの自分の好意的旅が何かお役に立てるのかしら、と。 — この瞬間ユリエネが青ざめて入って来て、言った。自分はずでに朝からその知らせを受けている。この出現はかような立派な魂にとって義務である、と。 — そこでイドイーネが、自分と一切を勘案しながら、品位を持って答えた。自分がびっくりしているのは、尋常ではないとか、無作法だということではなく、本当ではなく、品位に値しないということなの。だって、自分は身罷った魂の聖なる名前で、平凡な類似性で、病人の若者を騙すことにな

*1 彼は類音、コセカントと言おうと思っていた。

るのだから、と。 — 伯爵令嬢は言った、自分はそれに返事の仕様はない。しかし自分の感情としてはそれに反対ではない、と。 — 皆が当惑して黙っていた。 — 良心的イドイーネは最も優しい心の中で動揺していた。一人の生命に関わるこの心は、このような決断の重みで震えて屈していた。 — とうとうリンダがその明察をもって言った。「でも元来、倫理的人間が騙されるのではなく、眠っている者、夢を見ている者が騙されることになります。この人の妄想や嘘が強められるのではなく、片付けられることになるのですから」。 — ユリエンネはイドイーネと一緒にあって、イドイーネがリンダ同様余り会っていない若者について、恐らくもっと詳しく知るよう語って聞かせていた。 — その後しばらくしてイドイーネが戻って来て、こう述べた。

「一人の人間の生命がそれに懸かっていると医師の証言が得られたら、私は自分の気持ちの整理を致しましょう。正しいことを」（と彼女は付け加えた）「まず知りさえしたら、私は喜んでそのようにし、また中止もしましょう。私が初めて行う真実でないことです」。

講師はショッペの許からドクトルの許へ急いだ。ドクトルから多くの言い回しの中で、まさに最もふさわしい証言を得るためであった。

ショッペは長いこと不安げに待っていた。 — 七時過ぎにアウグスティから一枚の書き付けが来た。「準備してください。丁度八時に例の人物が現れます」。 — 早速彼は、熱病の目をいたわるために病室に蠟燭の明かりではなく、乳白ガラスの魔術的掛けランプを点させた。

病気の若者に彼は[霊の]再来者の話を一層強力に焼き付けて、堅固な死の門の前に、長い炎の祈りを捧げて跪くように助言した。彼女の慈悲深い精霊がその門を開けて、その敷居で彼に触れて癒やしてくれるように、と。

八時直前に駕籠に乗って侯爵夫人とその妹がやって来た。ショッペ自身がこの復活したリアーネには身震いするほど感動させられた。目を輝かせ、口を閉ざしたまま彼はこの美しい姉妹を書き割りへ案内した。外のその舞台上で彼らはすでに若者が祈っているのを耳にした。しかしイドイーネの華奢な体は慣れない役で震えていた。彼女の真実の魂は自らを否認しなければならぬのであった。彼女はそのことに泣き、敬虔な美しい口は、黙した溜め息で一杯であった。しばしば姉は妹を抱擁して、勇気を与えてやらなければならなかった。

鐘が鳴った。 — 恐ろしく熱く狂気の若者は部屋の中で安らぎを請うていた。 — 一時の舌が命じ、 — イドイーネは神の祈りとして視線を送った。 — ショッペはゆっくりとドアを開けた。 —

中では美しい、魔術的な暗闇の中で花と咲く神々の息子が天に両腕と目を上げて、陰鬱な狂気の固い魔法圏の中、跪いて、ただなお叫んでいた。「安らぎを、安らぎを給え」。

— そのとき乙女は感激して神から遣わされたかのように入って行った。夢の神殿と棺台での故人のように白い服を着て、片方に長いヴェールを付け、しかし一層背が高く、薔薇色の具合は控え目で、目の青いエーテルの中ではより鋭く、より明るい星の光を帯びて、浄福者達の中のリアーネに一層似ていて、あたかも若返った春のように星から再来したかの如く崇高に、彼女は彼の前に進み出た。 — 彼の掴みかかるような炎の視線に彼女は驚いた。 — そして小声で、揺れながら、どもって彼女は言った。「アルバーノ、安らぎを得なさい」。 — 「リアーネかい」と彼の胸全体が呻いた。そして彼はうずくまり

ながら自分の泣いている目を覆った。「安らぎなさい」と彼女はより強く、より大胆に言った。彼の目に触れて、戸惑うことがもはやなくなったからである。彼女はこの世ならぬ精神が人々の許をまた去るかの如く抜け出た。

姉妹は静かに去った。高貴な思い出と現在の自覚で一杯であった。ショッペは彼がまだ跪きながら、しかし恍惚となって目をさまよわせているのを見いだした。熱帯の海で嵐の中、病になった船乗りに似て、長い眠りの後、ある静かな薔薇色の赤い夕方目を燃える太陽の日没の前に開けているのであった。 — そして揺れる波の軌道が太陽の中へ薔薇の花壇、炎の花壇として波立って、飛び散る雲が黙した炎の弾へと砕けていた。 — 遠くの船は高く夕焼けの中を漂い、波の上を遠く浮かんでいた。 — 若者はそのような具合であった。

「私は今や安らぎを得られた、善良なショッペよ」（と彼は穏やかに言った）「安らかに眠ることにしよう」。神々しく、しかし青ざめて彼は立ち上がって、ベッドに入った。数分後に、疲れて、長いこと暑い高熱の砂の中をさまよっていた心情は、微睡みという新鮮な、緑の芝のベンチに沈んで行った。

第二十五ヨベル期

夢 — 旅

第九十九周

遅く金羊毛皮騎士は着いた。ショッペは喜んで彼に眠っている顔を見せた。その薔薇の蕾みは湿った温かい夜、咲き始めるように見えた。騎士はそのことに上機嫌で、それ以上に遅く見回りに来たスフェックス博士は喜んでいた。博士は脈が十全であるばかりでなく、ゆっくりでもあり、更に安静過程にあることを見てとった。彼は同時にショードソン¹と幾つかの薬効ある例を挙げて、大きな精神苦痛は内面からの阿片を通じて、つまり嗜眠で大いに幸い取り除かれるであろうと述べた。

最後にショッペは父親にイドイーネによる治療方法の全体を知らせた。気位高くガスパーは答えた。「しかし貴方は私の意見も知っていたのであろう、図書館司書殿」。 —

「確かに、でも私の意見も御存じのはずで」、と当惑したショッペは怒って言った。しかし騎士は何ら譲歩せず、 — 全く自分の流儀に従って、自分の本当の自我に、たとえそれで利点があろうとも、ほんの些細な明かりを点されることも嫌って、 — この友に退去するよう冷たい合図を行った。

翌朝ショッペは自分の愛しい者がまだ眠りという魂の揺り籠の中にいるのを見いだした。何とこの若者は発芽し、花咲いていたことか。 — 何と束縛のない胸の息は今や自由な人間に似て、ただゆっくりと、しかし強く動いたことか。 — しかし若者をイタリ

*1（訳注）ジャン・パウルは「抜き書き」に Claus Chaudeson という御者が危機の際、よく睡魔に襲われた事例を書き残している。出典は Berlinische Sammlungen zur Beförderung der Arzneiwissenschaft usw. Bd.1. 5.Stück. 1769.

アへ運ぶはずのガスパールの荷造りされた馬車は、すでに朝繋がれて、鼻を鳴らし、蹄で掻く馬と共にドアの前に止まっていて、騎士は今か今かと目覚めと一乗車とを待っていた。

医師がやって来て、一峠を越えたことと脈を褒めて、一（自分が処方した）酒石クリームは生命のクリームであると付言し、一父親が出発のために息子を起こそうとすると面と向かって言った。「貴方ほど危険な点に余りに無知な者は、自分の臨床で見たことがない。ここではどんな目覚ましも殺人的であり、医師としてまことに明白に禁止申し上げる」と。

一時間ごとにショッペは父親に対して、より不機嫌になっていった。この豊饒な島に対する騎士の洗い落とすような流入、奔流を考えると、一アルバーノが熱さばかりでなく、岩のような頑固さも有していることを、彼は今や神に感謝していた。

名誉と技芸を愛好するスフェックスはアスクレピオス[名医、蛇杖を持つ]の蛇のように枕元を見張っていて、一層快活になって行った。ショッペは残って、どんな頑固さにも備えていた。一騎士は息子の名前でもどの人からも別離を告げて、優しい心根の者達を家に追い返した。というのは養母のアルビーネや他の者達は眠っている者との面会すら許されなかったからである。一彼にとって涙はうんざりする冷たい霧雨であったからである。

一侯爵夫人とそのお供はすでに希望の色とりどりの小旗と共に輝かしいイタリアへの途上にあつた。一

今や夕方が撤回し難い出発の時に決められた。殊に夜には逝去したリアーネが、人間達が再び開けることのない寝室へ運ばれる予定になっていたからである。

花と咲くエンデュミオン[眠れる美少年]にその目覚めた日中の先駆けの明けの明星としてすでに微笑と喜びの輝きが浮かんで来た。彼の魂は、夢の精神が開ける冥界の宝物の輝く洞窟の中を微笑んで歩いていた。一方目覚めの卑俗な目は、間近な、眠りで圍繞された精霊のエルドラドの前で盲いたまま立っていたのである。とうとう未知の過剰な歓喜がアルバーノの目を覚まさせた。一若者は早速力強く立ち上がった。一最初の正覚の恍惚と共に父親の胸に飛び込み、一最初の夢想的な酩酊の中で自分の背の後に過ぎ去った雷雨のことは覚えていないように見え、単に淨福な夢だけを覚えているように見え、一そして酔ったままこの夢を語った。

「私は白い小舟に乗って、暗い奔流の上を行きました。その奔流は滑らかな高い大理石の壁の間を流れていました。人気のない波につながれて、私は不安げに曲がりくねった岩に飛び、その中へは時折深く稲妻が光りました。突然その奔流は回り階段の周りをますます広く、ますます荒々しく流れ落ちて行きました。一すると私の周りに広く、平らな、灰色の国が横たわっていて、そこを太陽の三日月[利鎌]が厭わしい生気のない明かりで照らしていました。一私から遠く離れて、下方へと曲がりくねったレテの川があつて、自らの周りを這っていました。一見通し難い刈り田では無数のヴァルキューレ達^{*1}[戦の女神]が蜘蛛の糸を素早く張り巡らしながら、歌っていました。『生命の闘い、これらを

*1 ヴァルキューレ達は魅力的な乙女で、戦の前にこれらを織り、戦死しなければならない英雄達を定める。

私どもは織る』。それから彼女達は浮遊する蜘蛛の糸を次々と目に見えないまま天に波立たせました。

上では大きな惑星どもが移っていました。どの惑星にも一人の人間が住んでいて、両腕を請うように、やはり同じような惑星にいて懂れて眺めている別な者へ差し出していました。しかし諸惑星はこの隠者達と共に太陽の三日月の周りを回っていて、祈りは空しいものでした。私も懂れました。私の前では無限に遠くに広がった山脈があって、その雲から聳え立つ山の背全体は金色に華麗に微光を発していました。小舟は苦勞して、扁平の奔流の平らな、緩慢な砂地を進んで行きました。一 すると砂の国が来て、奔流は狭い溝の中を私の押し潰された小舟と共に押しで行きました。すると私の側らで、一つの鋤が何か長いものを掘り出しました。それが上がってくると、それを棺掛けが覆いました。そして黒い布はまた溶けて黒い海となりました。

その山脈は私の前にはるかにより間近に、しかしより長く、より高く聳えていて、その深紅の花々と共に高い星々を切断していて、花々の上では緑色の野火があちこち飛んでいました。個々の人々を乗せた諸惑星が山脈の上を越えて行き、再び戻って来ることはなく、心は彼方とこちら側へと懂れました。『私は行かなければならないし、行こうと思う』と私は漕ぎながら叫びました。私の後を怒った巨人が付いて来ました。巨人は波を一つの鋭い三日月[利鎌]で刈り取りました。私の上には小さな堅い雷雨があって、地球のその圧縮された大気の球からできていて、天の毒の球と呼ばれ絶えず音を立てて落下していました。

高い山脈の上では一つの花が私に好意的に呼びかけてきました。山脈は海へ薄暗くなりながら向かって行きました。しかし今や山脈はほとんど近くを飛び過ぎる諸惑星とぶつかるころでした。そして山脈の大きな炎の花は単に赤い蕾として深いエーテルの中へ蒔かれました。水は煮立てられ、一 巨人と毒球はますます憤激し、一 二つの長い雲が引き上げられた跳ね橋のように降りて来て、そこでは雨が波のように跳ねながら音立てて降っていました。一 水と私の小舟は昇って行きましたが、十分には昇らなかったのです。『こちらでは』(とその巨人が笑いながら言いました)『滝は上へ昇らない』と。

そこで私は私の死を考えて、小声である敬虔な名前を呼びました。一一 突然、天の中、高く、白い惑星がヴェールの下、漂って来て、唯一つの輝く涙が天から海の中へ沈みました。そして轟然と高く上がって、一 すべての波が鱗の羽根で舞って、私の小舟には広い翼が育って、白い惑星は私の上を行き、長い奔流が轟きながら頭に舟を乗せて、乾いた床から引き裂かれて、泉の上に立ち、天の中へ立ち、その側らには花々の山脈がありました。一 そして私の翼の小舟は軽快に緑の薔薇の輝きの中を、長い花々の香りの優しい音色の中を滑って、輝くような、見通し難い東洋の中へ行きました。

何という恍惚たる軽快で広大な楽園でしょう。夜の涙のない、明るい喜ばしい朝日が、薔薇の冠に囲まれて膨らみ、私の方を見やって、より高くは昇って行かなかったのです。朝の露で明るい沃野が上下に輝きました。『愛の歓喜の涙が下の方にある』(と上方でゆっくりと移って行く諸惑星の隠者達が歌いました)『そして我々もその涙を流すことにしよう』。私は岸边へ飛んで行きました。そこでは蜜が花咲き、別な岸边では葡萄が花咲いていました。私が行くと、私の後から波の上で跳ねながら私の飾られた小舟が、広い、帆として膨らまされた花々と共に付いてきました。一 私は高い花々の森の中へ行きました。そこでは正午と夜とが並んで住んでいて、そして花々の薄明かりで一杯の緑の谷の中

へ、青い昼が住んでいる明るい高台の方へ、進んで行き、再び花咲く小舟へ落下して飛び、そしてその小舟は深く波の稲光の中、宝石を越えてはるかに春の中、薔薇の太陽に流れて行きました。すべては東側へ移り、大気と波と蝶と翼を持った花々が、そして上の諸惑星が、移って行きました。そして巨人達が下へ歌いかけました。『我々は愛の国を、黄金の国を見下ろす。我々は愛の国へ、黄金の国へ降りる』と。

そのとき私は波の中に私の顔を眺めました。それは乙女のような顔で高貴な恍惚と愛とで一杯でした。そして小川が私と一緒にあるときは小麦の森の中を流れて行ったり、
— あるときは太陽が輝く蛍の背後に見える小さな香る夜の中を流れて行ったり — あるときは黄金の小夜啼鳥がさえずる薄明かりの中を流れて行ったりしました。
— あるときは太陽が歓喜の涙を虹として架けたりし、私はその中を舟で行き、私の背後では涙がまた露として燃えながら落ちました。私は太陽により一層近づきました。太陽はすでに穂の王冠の中にありました。『すでに正午だ』と私の上の隠者達は歌いました。

ゆっくりと、蜜の野の上の蜂のように、暗い青空の中を諸惑星は密集して、神々しい国の上を漂っていました。
— 山脈からは一つの銀河がこちらに弧を描いていて、銀河は太陽の中へ沈んで行きました。
— 明るい国々が回転して来て、
— 光の豎琴が、光線で張られて、炎の中で鳴り響きました。
— 三つの雷の三和音が国を揺さぶって、光輝と露からなる響く雷雨が薄明るく広大な楽園を満たしました。
— 雷雨は泣いている恍惚のように滴りました。
— 牧人の歌が純な大気の中を飛んで行き、更に雷雨からの薔薇の小雲が音色に合わせて踊りました。
— すると優しく間近な朝の太陽が青白い百合の冠から見つめていて、隠者達が上方で歌いました。『浄福よ、浄福よ、夕方が花咲く』。周りは静かに薄明となりました。太陽の許で周りの諸惑星は静かに止まって、その美しい巨人達と共に、人間的形姿に似て、しかしより高貴に、より神聖に、太陽を取り囲みました。地上では高貴な人間の形姿は、動物どもの暗い鎖の連鎖の中で下へ這って行くように、向こうではその形姿は神に遣わされて、純な、明るい、自由な神々に飛んで行きました。

— 諸惑星は太陽に触れて、その許で溶けました。
— しかし太陽も溶けて、愛の国へ落ちて流れて行きました。そして吹き抜ける光輝となりました。
— そのとき美しい神々と美しい女神達が互いに両腕を差し出して、愛の余り震えながら、触れ合いました。しかし波打つ弦のように彼らは歓喜に震えて、目から消えて行きました。そして彼らの実在は単に目に見えないメロディーとなり、音色が歌いました。『私は御身の許にいる、神も許にいる』と。
— そして他の音色が歌いました。『太陽は神であった』。
—

そのとき無数の歓喜の涙によって黄金の広野は微光を発しました。涙は目に見えない抱擁の下で落下したのでした。永遠は静かになって、大気は静まり、ただ溶けた太陽の吹き続ける薔薇の明かりのみが穏やかに濡れた花々を揺すっていました。

私は一人っきりで、周りを見回しました。孤独な心は死にながら一つの死を憧れました。そのとき銀河で白い惑星がヴェールと共にゆっくりと昇って行きました。
— 穏やかな月のようにその惑星は少しばかり微光を発して、それから天から神聖な国へ落下して来て、大地で砕け散り、ただ高いヴェールのみが残りました。
— それからヴェールはエーテルの中へ戻って、一人の崇高な、神々しい乙女が、他の女神達のように大きな乙女が地球上と天の中に立っていました。吹き抜ける太陽のすべての薔薇の輝きは、この乙女の許に集まって、夕焼けを帯びて燃えました。すべての目に見えない声が彼女に語りかけ、尋ね

ました。『人間達の父親は誰か、その母親、その兄弟、その姉妹、その恋人の男性、その恋人の女性、その友人は誰か』と。その乙女はしっかりと青い目を開けて、言いました。『それは神です』。 — その後彼女は高貴な輝きの中から優しく私を見つめて言いました。『あなたは私を知りませんね、アルバーノ。あなたはまだ生きているから』。 — 『見知らぬ乙女よ』（と私は言いました）『私は法外な愛の痛みと共にあなたの崇高な顔を見つめています。私はあなたを確かに知っていたのだが、 — あなたの名前を名乗ってください』。 — 『私がその名前を名乗ったら、あなたは目覚めます』と彼女は言いました。『名前を名乗ってください』と私は叫びました。 — 彼女は答えました。そして私は目覚めました。

第百周

「おまえは一夜目覚めたまま、行けるだろう」 — こう問いかけて父親は彼を急いで旅の支度のできた馬車に連れて行き、まだ温かい夢の中にいる彼を、その和らげられた記憶と共に拉致し、殊に青ざめた花嫁より先に連れだそうとした。花嫁はこの夜、同じ道を通って、人間の最後の遺産へと移されることになっていた。「馬車でおまえはすべてを耳にすることになろう」とガスパールは目的地についての息子の穏やかな質問に答えた。夢の輝かしい国にまだ明るく酔っていて、アルバーノは快く盲目に従っていた。彼はまだリアーネが高貴な神々の姿で、夕焼けの、歓喜の露を蒔かれた太陽の大地の上に立っているのを見ていて、輝きに満ちた彼の目は下の、地球の地下室の中の解放されて飛翔するプシケの投棄された狭い蛹の殻へは達していなかった。

ショップペは松明付き馬車まで、彼に付いて行った。しかしその目的地を知らせて彼の心を目覚めさせることのないよう、黙っていた。ショップペは愛しく美しい若者の手を、その握り返してくる手を熱く握って、「また会おう、兄弟」とだけ言った。その後で、支配的父親からの別れの視線には応えずに、温かく挨拶を送る友から感動して退去した。馬車は飛ぶように松明の煙りを後になびかせながら、澄んで高い星空の夜の中へ進んで行った。

新たに真面目に癒えた若者の前に、薄明の創造世界が広がっていた。まさに土星が昇って、時の神は穏やかな閃光を発する宝石として天の微光の魔法の帯の中に列んでいた。目を閉ざされたまま何も知らない若者は、彼の青春の[アルプスの]牧舎から下へ導かれ、彼の初恋の牧人の谷を過ぎ去って、芸術の偉大な永遠の星座に向かって、神々しい国に進んで行った。そこは、天の薄暗いエーテルは黄金であり、大地の高貴な廢墟は優美であり、そして夜は昼の明かりなのであった。一つの視線もブルーメンビュールの丘には向けられなかった。今まさにその丘から黒い馬車のお供が垂直に燃える葬儀の松明と共に移る影の世界のようにゆっくりと降りて来て、アルバーノと神とが宿っていたその静かな善良な心の亡き女性を没した傷と共に休息の穏やかな地へと導いて行った。松明の馬車は炎を上げて、イタリアへと山道を回転して行った。

涙もなく広くアルバーノの目は、微光を発して、絶えず進行する、時の汲み水車の許で休らっていた。その水車は永遠に東[朝]の星座を汲み上げては、西に注ぎ出すものであった。そして彼の子供らしい手は軽く父親の手を握っていた。

(第三巻の終わり)

(第四卷)

第二十六ヨベル期

旅 — 泉 — ローマ — フォルム・ロマヌス[大広場]

第百一周

夜の間、アルバーノの夢の像は星座と共に、微光を発し続けて、ようやく明るい朝の前にそれらの像は皆消えた。ガスパールは微笑んで、イタリアへの途上にあると彼は言った。意外にうろたえず、彼は自分の外出の知らせを受けとめた。彼は単にショッペはどこにいるかと尋ねた。一緒に来る気がなかったと聞くと、突然、菩提樹^{リンデンシュタット}の町が山々や谷を越えて、思い出され、彼の最後の友が市場に一人っきりで立っていて、自分自身と戯けた芝居にかかっている、悲しみに打ち勝とうと、愛しようとしている一つの大事な強い心を静めていた。アルバーノの魂から離せないこの友の許で、彼はジュピターの鎖の許で[Ilias.VIII.17ff.] そうするように、自分の過去の全ての舞台や世界を引き寄せた。全ての悲しみの地が彼の心に迫って来た。目に見えないまま諸都市や国々を通り過ぎて行った。痛みが我々の周りで駆り立てる波は我々と世界の高くあって、我々の船を、色々な船で一杯の港の中で孤独なものにする。身震いをして彼はすべての美しい乙女から離れた。乙女は一つの嘆きのように彼に逝った女性を思い出させた。永遠に覆いを外されて、リアーネの青白い顔が、
— イタリアでの死体のように*1、 — 墓場への無限な道を進んで行った。そしてただ仮面を付けた誰とも分からぬ形姿が、その後を生き生きと歩んでいた。人間とその痛みはそのようなものである。生きている者達が死者を乗せて引きずって行く船運び[曳き船の際死んだ者は一緒に曳かれた]とは違って、死者が生きている者達を引き連れて行くのであり、遠くその冷たい領国へ従えて行く。

「時」と共に次第に彼の痛みは募って行った。弱まることはなかった。彼の人生は彼にとって、月が地球の下にある一つの夜となった。そして月は次第に明かりの弓形が大きくなって戻って来るということを彼は信じていなかった。歓喜ではなく、単に行為のみが、
— 夜のこの遠く離れた星々のみが、 — 今や彼の目標となった。彼は、他人との会話の最中に、しばしば自分の中からこみ上げてくる涙を、父親が涙に関与しないが故に、父親の前では抑制するということを理不尽に思った。しかし彼は父親に自分の会話や決意の力によってなおも強い若者を呈示していた。自分がリアーネの死に関して、自分の科としていた非難だけは、イドイーネが与えてくれた安らぎの中へ解消していた。もっとも、今彼はその出現を単にリアーネについての高熱の白昼夢と思っていたのであるが。

彼の父親はイドイーネの登場についても、すべての不快な思い出同様に全て黙っていた。しかし彼は大いにイタリアについて、アルバーノがそこで得るであろう芸術上の獲得について語った。殊に間もなく追いつくことになる侯爵夫人や芸術顧問官、ドイツ騎士団騎士の先行の一行によるその獲得について語った。息子はとうとう父親に大胆な質問をして、

*1 死体は覆いなしに墓場まで進む。その供の者達は覆面をして従って行く。

自分は本当に更に一人の妹がいるのか尋ねて、禿頭との話を語った。「多分」（とガスパールは不快そうに冗談めかして言った）「私が知らない兄弟姉妹がなおいることは有り得るであろう。しかし私が承知しているのは、おまえの双子の姉妹セヴェリナは今年修道院で亡くなったということだ。おまえはその夜の話をどのように考えているのか」。 — 「ほとんど夢のようなものです」と彼は答えた。たまたまこのとき彼の手はポケットに入れて、驚いたことに妹が彼に贈った半円の指輪を見つけた。不可思議なものが彼の感覚に迫って来た。そしてかの戦慄の夜が素早く冷たく白昼に生じた。彼と父親は切断された指輪の両端を調べた。その両先端で切り取られた名前の列が途切れていた。「しかし何ら不思議なものは存在しない」と騎士は言った。「それでは何か自然なものがあるというのはどうして知っているのです」とアルバーノは言った。「奇蹟とか」（とガスパールは答えた）「精霊界は単に精神の中にのみある」。 — 「私どもは」（とアルバーノは続けた）「最も卑俗な視覚的技芸品の場合でも、空想の錯覚を感覚の誤魔化しに解消することよりも、何か別なものを楽しみにしなければなりません。さもないと、不思議なことは、解消前より解消後がもっと気に入るに違いないでしょうから。これが人間性質の大事な極点で、この上に永遠の極点の雲がかかっています。私どもの真実界、霊界の地図は、廢墟や村々を模写している地図[のように見える]石に当たります。この石は嘘です。しかし似ています。精神は永遠に肉体下に追放されており、精霊を欲しています」。 — 「大体私もそう考えている」とガスパールは言った。

しかしアルバーノは禿頭と妹についての父親の判断をもっと明確にするよう迫った。「何か別なことを言ってくれ」（と騎士は全くうんざりして言った）「私にとってそれはとても不快な会話だ。おまえの流儀で世界を考えろ。落ち着きなさい」。 — 「父上」とアルバーノは当惑して尋ねた。「いつか明確にそのことについて説明して頂けますか」。 — 「できるものならば」と短く言って、とても鋭い、刺すような視線で息子を見ていたので、息子は、その視線を矢のように避けて、頭を急いで馬車から外にかがめた。そしてそのとき初めて、父親は全く彼のことを考えていないことに気付いた。というのは父親は鋭く先の方向をなおも見続けていたからで、あたかもかつての硬直症に陥りそうな具合であったからである。

精霊界は精神の中に住んでいるというガスパールの言葉と彼の視線と、彼の硬直症への考えとで、アルバーノにとってそのとき静かにロマンチックな戦慄が生じてきた。下の奔流の岸边では人々が集まって来ていて、ある者がその群れから逃げるように、あるいは告知するように急いでいた。ある丘では一人の遠方の少年が身を伏せて、耳を大地に当て、彼らの進んで来る馬車の音を良く聞き取ろうとしていた。彼らが昼食を摂った村では、鐘が休むことなく鳴っていた。彼らの亭主は同時に粉屋でもあった。波と水車の音が家中に満ちていた。カナリアが更に喧騒の中、騒いでいた。

両世界、地上世界と精神的世界が互いに間近に触れ合って、地上の昼と天上の夜とが薄明の中で接触する瞬間があるものである。天上的輝きの雲の影が、大地の花々や収穫の上を通過して行くように、至る所で天が現実の卑俗な平面にその軽やかな影と反映とを投げかける。そのように今アルバーノは思った。指輪と、彼の冷淡な父親の熱を帯びた言葉が彼を稲妻のように眩惑していた。下の家の戸口で彼は一人の少女を見つけた。彼女はレモンのストックを自分の前に運んでいた。突然、不快に、鐘の音が止んだ。彼が鐘の塔を見

上げると、白い禿鷹が旗の上に止まっていた。やがて鐘を引く者本人が、何かを飲むためにやって来て、侍従に対する強力な呪い、しかし悪意の籠もったものではない呪いを発し始めて、三週間前から鐘を鳴らされていること、自分も先年はそうであったが、正式にはただ三日間だけ亡き娘を偲んで鳴らさなければならないのだから、そう願いたいと述べた。彼は粉屋に諭した。「レモンを買うことだ。立派なもので、果汁が多く、皮が薄い。――

自分と『牧師見習い^{*1}』は御令嬢の埋葬以来このレモンを良く知っている。――十四日したら自分は聖職者全員にこれを必要としている、花嫁の父だからな。――「こちらでの慣習なのですか」とアルバーノは尋ねた。

「つまりです、誰かが亡くなったら」（とその寺男はとても恭しく、好意的に言った）「牧師と拙者は一個レモンを貰います、それに死者もです。――しかし誰かが結婚しても、聖職者と花嫁も同じく貰います。これが私どもの慣習というわけです、恵み深い殿方」。

アルバーノはその家の間近の庭園へ行った。そこではむき出しの水車はその銀色の火花を飛ばして、放たれた水の輝きと音とで飲み込まれた感じになっていた。彼が微光を發して飛ぶ渦を見入っていると、死者と花嫁とが貰うレモンが動揺した精神の前に漂って来た。その感動は比喩に満ちていた。リアーネはいつか、レモンの国、低い小森の中に移って、そこは花々の雪色と果実の黄金色とが緑と青空の間で合奏するところで、元気に癒える予定であった。それが今や冷たい手にレモンを得ていて、元気になることはない、と彼は考えた。

彼は周りを見回して、見知らぬ世界にいたと思った。青空の中では一つの精霊のように目に見えない嵐が雲もなくざわめいていた。――長い丘の連なりが赤い果実と赤い葉とで動揺して煌めき、多彩な木々からは輝く林檎が投げ出され、嵐が梢から梢へと飛び、大地に下って来て、長い、波立った奔流の中をざわめいて下って行った。精霊達が地球の周りで戯れたり、地球上に出現しようと思っているかのように、とても奇妙に明るい一帯は動揺して、照らし出されているように見えた。アルバーノが無意識にある暗い木の森の所に来たとき、目に見えず、音もなくある純な明るい泉が大地の中から大地の上へ跳ね出していた。――外の嵐が静まり、ただ泉の音だけが聞こえてきた。――「聖女が間近にいる」（と彼の心は言った）「泉は聖女の像ではないか。聖女の永遠の涙の似姿ではないか。泉は聖女が住んでいる大地の中から上に出て来るのではないか」。突然彼は自分の手に、

――他人の手から貰ったかのように、――リンダの頭部のスケッチを見いだした。リアーネが瀕死の手で描き、与えたものであった。しかし彼の空想は強引にその像に、スケッチをした女性リアーネとの類似性を押し付け、彼はその紙片にリアーネの穏やかな顔を明確に見いだしていた。

彼はまた輝く世界に出て行った。「何と私は哀れなことか」（と彼は叫んだ）「私は彼女を黄金の雲の上に、夕陽の方から東へ移って行く雲の上に見る。私は彼女を谷の冷たい泉の中に、月の上に、花の上に見る。――私は至る所に彼女を見る。でも彼女はただ一つの所に休んでいる。何と哀れなことか」。――そして彼は天を見つめた。ただ一つの長い雲が天では先へと急いでいた。

*1 そのように例えばハンガリーでは助祭は呼ばれる。

第百二周

かくて日々は各町や風景と共に飛び過ぎて行った。そしてアルバーノの人生では詩の中のよう、世界が映し出された。力が次々に、彼の内部の屈した収穫全体が次第にまた起き上がってきて、緑色をして滴った。しかし同時にまた痛みの茨も強くなった。彼の目と精神とが世界と、そして知識のすべての獲物と共に満たされる間に、苦痛の邪悪な霊が廢墟に住み、心が一人つきりになったとき、迫って来て、心を捉えた。

彼はウィーンに寄って、ガスパールの何人かの高貴な友人達に紹介されざるを得なくなった。ガスパールは彼にこのとき初めて打ち明けた、自分は[スペインの]トゥソーネの騎士ではなく、オーストリアの金羊毛皮騎士である、と。「ここは」（とアルバーノは言った）「とても奇妙に馴染みの所に思えます。どうしてでしょう」。 — 「どこかの似た町のせいだ」（とガスパールは言った）。 — 「多く旅する者は、似たような町から似たような町へ行くことになる」。日々彼にとって父親は一層好ましく、一層分かりやすい者になった。しかし一層親しく、一層間近な者とはならなかった。ある温かい一日と打ち解けた会話の後、ガスパールとは、次の出会いの時、また親密さの控えの間に留まることになった。厳格な少女の許で、すべての五月の後に、溶けた五月の霜が新たに降り始めたようなものである。高齢になると愛に敬意を表する。しかし — 青春とは違って — 愛の験にほとんど敬意を表さない。しかしアルバーノは、自分の父親に対し、冬に対する夏を隠すことなく、全面的に、すべての差異も含めて、自分のことを明らかにしたという誇りを有していた。

毎日ガスパールは自分宛の手紙を郵便で受け取った。特にペスティッツからで、アルバーノは郵便のマークでそこからと分かった。彼には何の手紙も来なかったからである。彼はますます侯爵夫人に追い付きたいと願った。彼女は単に一日の旅程分先に進んでいただけであった。彼らはすでに冬の巨人達が、つまりスイスとティロルのアルプスが臥床にあるのを見た。これらの神々の息子達は、雪崩や滝や冬で武装して、神々と人間達が交互に模倣し合った神々しい国を見張っていた。何としばしばアルバーノは、夕方太陽が輝きながら雪で覆われたアルプスの高みと混じり合ったとき、痛々しく感動してこれらの王座の方を見やったことか。これらの王座を彼はかつて全く別様に、はるかにもっと黄金色に、とても希望しながら、信じながら、イーゾラ・ベツラ[島]から眺めたのであった。 — 「おまえの過去の高みも」、とそう彼は自分に言った、「やはり白く、太陽の明るい日中にありながら、もはや向こうではアルプ[ス]ホルンが鳴ることはない。そしておまえは深い谷にいる」と。

彼らは遅くなった葡萄摘みの民衆の祭りの前を通り過ぎることになった。騎士は万事にわたってワイン商の知識欲と葡萄園主の知識を交えて尋ねていた。彼は地上の至る所で知識のすべての小さな草や雑草を求めて、植物採集をした。アルバーノはこのことに驚いた。彼はこれまで、ガスパールはただ芸術というパリスの林檎、ヘスペリス達の黄金の林檎だけを求め、探していると思っていたのである。他のすべての果実や果肉やその種子は彼の身分では享受のためにも、播種のためにも利用できなかったからである。

彼らはティロル山脈の低地に沈んで行った。高台はすでに冬の堅固な白い経帷子に包ま

れていて、冬を通り抜けるのはただ背や前からの生き生きとした冷たい嵐だけであった。青春の穏やかな国へのアルバーノの憧れは、嵐とアルプスの間でますます高まって行った。ローマの像は、長いことかかってローマが近付いて来るにつれ、巨大な大きなものとなった。ガスパールは、秋の雨の雲より先に進むために旅に翼を付けて早めた。

ある暗い夜、彼らはさながら山脈を抜けるように進んで行った。彼らの同行者、アディジェ川に似ていた。この川は巨大な岩を拉致し、穏やかな平野へ崩れ込み、そこで穏やかに先へとよるめきながら進んで行くのである。太陽が現れ、 — イタリアが現れた。

雨が降った後であった。生温かい大気が糸杉の丘から谷を通して、桑の木の葡萄生け垣を通して舞って来た。そして橙の花々と果実の間に迫って来た。 — アディジェ川はとぐろを巻いた巨大な蛇のように多彩な風景の別荘やオリーブの森の許に休らっていて、虹を間に架けているように見えた。 — 生命はエーテルの中で戯れていた。 — ただ蝶だけが軽やかな青空の中に漂っていて、 — ただ喜びのヴィーナスの馬車だけが穏やかな丘の上を回転して行った。

アルバーノの一杯の魂は、さながら広い川床に注がれた。その川床は彼を穏やかな平野から華麗なローマへ導いて行った。 — 「我々が帰りの旅をするとき」（とガスパールは言った）「おまえの入場を思い出すことだ」。 — 彼らは大きな石造りの家々のある村に止まった。アルバーノは自分の周りに温かい戸外での生活、男達の帽子のない頭、裸の胸、輝く目を見つめ、 — 絹の毛のような大きな羊、 — 黒くて小さな元気な豚、黒い七面鳥を見つめていた。 — そのとき彼は突然上のバルコニーからドイツ語の挨拶と彼の名前を聞いた。

それは侯爵夫人であった。彼女の馬車が脇にあつて、ブヴェロとフライシュデルファーが彼女の許にいた。異郷では、それがどんなに美しい国であれ、もっと粗野な国からの兄や妹と再会することは、何と心が慰められることであろうか。さながら第二世界で、親戚の地上の息子と再会するようなものである。 — それに、それ以前はエッチという名前で荒々しい山脈の中を同伴して来たアディジェ川も、もっと美しい名前で平野部を従って来ていた。侯爵夫人は、何故かは分からなかったが、形姿と視線の点で、もっと穏やかに、もっと乙女らしくなったように見えた。彼は自分に以前の自らの間違いを非難した。しかし彼は後からの間違いを犯していた。彼女の強力に描かれた観相学の上にはウィーンの後で、イタリア風のより鋭い観相学が生じていたのであり、彼女が好んで着ていたけばけばしい色合いは、イタリア式色合いでもっとけばけばしくなっていたのである。異郷は仮装舞踏会場であり、湯治場であり、単に人間関係が支配的で、政治的關係は見られず、異国では少なくとも仲間外れではない。 — 皆が友好的に接触し合った。丁度見知らぬ手が山々を登るとき、求め合い、握り合うようなものである。何と尊敬してアルバーノは侯爵夫人を見つめたことか。というのは彼はこう考えたからである。「彼女は亡き女性を癒やしてくれる樂園と一緒に連れて来ようと欲したのだ。聖女は今朝幸せに思って、浄福の余り青い目で泣いたことだろう」。 — それから彼は涙した。しかし浄福の余りではなかった。そのように人生の花火は、普通の花火同様、いつも川辺で、川の上で、用意される。そして彼の中で誓いが厳かにリアーネの美しい髑髏の前でなされた。「私は本当にリアーネの女友達の友となろう」。 — 人間は人生の新たな役目を最も温かく、最も上手に演ずるものである。我々の就任演説の上では聖霊が温かく孵化しながら鳩の翼を広げて漂う

ものである。 — ただ後になると卵は冷たいままである。アルバーノはまだ男性の友情しか、友情に関して通じていず、女性との友情を上昇する星座のように崇拝して、女性との友情のために、男性との友情に対するが如く、愛のためよりもはるかに犠牲的諸力を、自分の温かい魂に保有していると思った。友情に関して男性は、愛に関して女性の如きものであり、 — そしてその逆でもある。 — つまり対象に対する情感よりももっと対象を求めている。

新しい一杯の帆と吹き流しとで、 — 飾られた歌声の船で、 — 都合のいい横風を受けて、 — 元気のいい旅は、町々や沃野を飛んで行った。

長い旅の馬行列の上に、美しい果実の花綵装飾として掛けられるものは、 — 先行する馬車にとって、後から来る二、三の馬車を措いてない。夜営の喜びと危険の何という共同体か。行軍ルートの何という話し合いか。後から行く、そして先に行くアヴァンチュールについての、つまりその報告についての何という喜びか。何と人は互いに愛することだろう。

ただブヴェロに対してアルバーノは堅い冷淡さを見せた。しかし騎士は友好的であった。アルバーノは人々の間でよりも、本の許で育っていて、本の中では意見の相違は容易に見過ごされるのに対し、人間の間ではこの相違が鋭く感じられることをしばしば不思議に思っていた。仕舞に父親があるとき尋ねた。「何故おまえはフォン・ブヴェロ氏に対し、そんなに他人行儀に振る舞うのか。正気の静かな憎しみほど腹立たしいものはない。かっとした憎しみははるかに腹立たしくないものだ」。 — 「私の作法では」（と彼は答えた）「人間の間での交誼の永遠の不誠実を避けて、憎むことなのです。単なるヒューマニズムから等しくない者を対等にし、ある人に対し何らかの意図のせいで好意的顔を見せること、誰かに対しそのことを即刻述べてはならない風に対処すること、このことは多分全く卑屈なことで、最も純粋な者を混乱させてしまいます」。 — 「自分の似姿しか愛そうとしない者は」（とガスパールは答えた）「自分以外には何も愛するものを有しない。フォン・ブヴェロは」（と彼は高笑いして付け加えた）「立派な接待の亭主で、旅の協力者だ」。

— アルバーノは、自分の尊敬する人間に対してさえ抵抗することのできる者であるが、父のことは何も気にかけず、ただそれだけに一層ドイツ騎士団騎士のことを軽蔑に値すると思った。

ブヴェロは全く争いと取引のために生まれていて、つまるところ騎士と侯爵夫人の雪の中に、両人とも、すべての長い旅の者同様に、はなはだ吝嗇であったのであるが、次のような次第で深い足跡を残していたのであった。即ちブヴェロはすべての宿の亭主やイタリア人に対し、勘定書を修正しながら監視していて、策略を用いて勝ち、そして然るべき時に全く粗野になるという術さえ心得ていたのであった。つまり彼は、亭主から向き直っては、侯爵夫人に対してまたフォントネル[Fontenelle(1657-1757)]やどこかのフランス人のように紳士然となるのであった。フランス人はこのような場合飲食するよりももっと長く計算し、悪態をつくのである。金羊毛皮騎士は、彼が告白したように、かつてこれほど安く旅したことはなくて、それ故彼に月桂冠を授けていたが、この樹はこちらではどこでも育つことになって、それで騎士は今までないほどに陽気に見えた。ただ息子にとっては、この冷たい、怒りっぽい粗野な人間は一つの火山で、泥や水を噴き出すものであった。戴冠している頭目とか、これもやはり頭目である古典作家よりも一マイル先に、あるいはそも

そも金を有しながらも、大事にしない人々よりも一マイル先に騎行していて、彼らのために日々ほんの数金貨分節約できるようにして見給え。この場合ほど両頭目が喜んだり、感謝するのを目にしたことはないことだろう。

どこでもアルバーノは降りて、偉大な廃墟や、落下した宝石の輝きの中へ入って行きたい思いであった。この宝石は世界征服者達がローマへの途次凱旋車から紛失してしまったものである。しかし騎士は、目と感激とを大事にして、ローマのために残しておくよう助言した。彼らがやっと荒涼たるカンパーニャに来て、これはローマの驚ども、つまりこの世界に散らされた海燕どもの巣の周りに一杯の溶岩の塊と共に広がっているのであるが、フラミア街道を進んで行ったとき、いかに彼の心臓は鼓動したことか。 — しかし彼とガスパールは奇妙に重苦しく感じた。 — むっとする硫黄の風の停滞した湖の中を渡って行くかのように思われたが、彼の父親はこの風をバッカーノの硫黄精錬所のせいにした[Volkmann 参照]。 — 彼は遠くの山々の雪を渴望した。 — 天は濃い青で、静かであった。 — 個別の高い雲が矢のように早く静かな砂漠を飛んで行った。 — 遠くで一人の男が掘り出した骨壺をまた中に収め、不安げに天を見上げながら、ロザリオで祈っていた。 — アルバーノは山脈の方を向いた。山脈へ夕陽が、刺すような輝きの中へ溶けたかのように、沈んで行った。 — 突然騎士は御者に止めさせた。御者は馬車の下ではまだ回転が続いていて、激しく両腕を天に上げて、叫んだ。「聖母様、地震だ」。しかしガスパールは太陽に酔った息子に触れて、示しながら言った。「ローマだ[Ecco Roma!]」。

— アルバーノが目を向けるとはるか遠方に聖ピエトロ大寺院のドームが陽光の中に見えた。大地が沈み大地がもう一度震動した。しかし彼の精神の中にはローマしかなかった。

第百三周

地震の後、三十分後、天は海の中に巻き込まれて、海を少しずつ奔流のように流し落とした。むき出しのカンパーニャと荒野を雨のコートが覆った。 — ガスパールは静かになり、 — 天は黒くなり、 — アルバーノの中では、自分は人類の断頭台兼王座に、冷たくなった英雄世界の心臓部に、永遠のローマに急いでいるという大いなる考えが孤独にあった。そして彼が、ミルヴィオ[モレ]橋で、今テヴェレ川を渡っていると聞いたとき、あたかも過去が死者達から蘇って、自分は「時」の逆流する奔流を航行しているかのように思われた。天からの奔流の下、彼は、かつてローマの丘からやって来て、七つの支流[腕]で世界を大地から持ち上げた古代の七つの丘からの奔流のざわめきを耳にした。

ようやく神の丘の町の広大な星座が夜の中に散って、乏しい明かりの町が上下に横たわっていて、鐘が（彼にとっては嵐の警鐘が）四時を告げた^{*1}。そして馬車が町の凱旋門、ポポロ門を転がって行ったとき、月がその黒い天を引き裂き、雲の割れ目から天の全体の光輝を下に注いだ。そのとき門のエジプトのオベリスクが夜の中に雲高く聳えていて、三本の通りが輝かしく分岐していた。かくておまえは（とアルバーノは長いコルソ通りを通過して第十区[十九世紀までローマは十四区に区分されていた]に入ったとき自らに言った）、本当

*1 十時。[日没時が二十四時]

に軍神の陣営にいるのだ、と。ここだ、ここで軍神は不気味な戦争の刀の柄を掴んで、その切っ先で三つの大陸に三つの傷をつけたのだ。 — 雨と輝きとが広大で幅広い通りに流れ込んで来た。 — 時折突然庭園の前を通り過ぎ、過去の広い町の砂漠、広場に入った。 — 馬車の回転は雨音の中では雷に似ていて、雷の日々はこの英雄の町にとってかつては神聖なものであったのであり、さながら雷鳴の天が雷鳴の地にとってそうであるようなものである。 — 小さな明かりを持った覆われた形姿が暗い通りの中を忍び歩いていて、 — しばしば長い宮殿が柱の列と共に月の炎の中に浮かび上がって、しばしば一本の灰色の孤独な柱が、しばしば個別の高い唐檜が、あるいは糸杉の背後に一つの彫像が照らし出された。あるときは、雨も月光もなくて、馬車は大きな家の隅を曲がって行ったが、その屋根には一人の花と咲く背の高い乙女が、手に見上げている子供を連れて、小さな手燭を白い彫像に向けたり、子供自身に向けたりして、かくて交互にその群れ全体を照らし出していた。高揚した気分の中にこの好意的連れは入って来て、彼には幾多の思い出が生じてきた。特に彼にとってはローマの子供が全く新たな、力強い観念に思われた。

彼らはどうとうディ・ラウリア侯爵の許で降りた。ガスパールの義父で、昔からの友であった。彼の宮殿の近くにカンポ・ヴァッチーノ[牛の放牧場、古代フォルム]があって、そのカピトリーノ[カピトリヌス]の丘の広い階段と三つの奇蹟の建物[元老院、コンセルヴァトリー宮、カピトリーノ博物館]の上には明るい月があった。遠くにコロッセウムが立っていた。ためらいながらアルバーノは照らし出された家の中へ入った。家の前に侯爵夫人の馬車があって、そして彼は目を世界のこの高台から転ずることがなかなかできなかった。この高台からかつては軽い言葉が雪片のように長く舞って、永遠に生長し、遂には余所の国で或る町を雪崩で押し潰したのであった。

侯爵夫人とその一行は、喜ばしげに新しい一行の到着を見ていた。ラウリア老侯爵は丁重に、控え目に、その孫を迎えた。彼の無数の従者達はヨーロッパのほとんどすべての言語をこもごも話していた。アルバーノは騎士に早速自分の師のディーアンのことを、このローマに移植されたギリシア人のことを尋ねた。しかしまさにこの最も人間的なことを、偉いさんはいつもそうであるように、ガスパールは考えていなかった。近くのディーアンの住まいに人が遣わされた。彼は家にいなかった。

人々は食事をした。侯爵は早速、自分のお気に入りの見本料理で、つまり政治的世の流れでもてなした。そしてフランス革命の最新の流れを告げた。新聞が彼にとっては永遠で、ニュースが古典古代であった。彼はヨーロッパのすべての新聞を取っていて、それ故どの新聞にもドイツ人の従者、ロシア人の、イギリス人の、ポーランド人の従者がいて、従者が彼にそれを翻訳していた。すべての人間や事柄に対する彼の諷刺的冷淡さにもかかわらず、政治的イタリア的熱意がより強力に見えた。この熱意で彼は騎士に対し、フランス人を擁護していたが、騎士は悠然とフランス人を軽視していて、彼の流儀で下手な言葉遊びまで交えながら、古代のローマ人にはフォルム[古代広場]を、近世のローマ人にはカンポ・ヴァッチーノ[牛の放牧場、古代広場]を、同様に古代ガリア人には軍神の広場[Champ du Marsでは革命時残忍なことがなされた]を、そして近世のガリア人には三月の広場[古代フランク人の三月議会]を与えた。

アルバーノは、フォルムのかくも間近では冗談ではなく、どの言葉もこの町では偉大でなければならないと思った。冷たいラウリア侯爵は温かくガリア人を擁護して語った。彼

は大臣のように、ただ人民を敬っていて、個々人を敬っているのではなかった。彼の意見は若者の気に入った。

そのとき侯爵夫人は流れをローマの高度な芸術に導いた。フライシュデルファーは巨像を部分に解剖して、それらを窮屈な秤で測った。ブヴェロは巨人を歴史的銅版画に描いた。侯爵夫人は大いに熱を込めて話したが、意味はなかった。ガスパールはすべての人を溶かし込んで、さながらコリントの合金[町の焼けたときできた]にして、すべての人を包括しながら、捉えられることはなかった。彼の冷静な、しかし強力に噴出する生命の泉の上で彼は世界を一つの球のように浮かべ戯れさせていた。

アルバーノは、すべての人に不満足で、彼の熱狂を、自分の周りの過去の冥界の神々に古代の流儀で犠牲に供しながら、つまり沈黙で守っていた。多分彼は話そうと思っていたし、話すことができたであろう。しかし別様に、頌歌で、人間全体と共に、上方に昇り、育って行くような奔流と共にそうしたことであろう。ますます懂れて、彼は窓際で純な雨空の後の青の月の方を、フォルムの個々の柱の方を見た。外で彼にとって最も偉大な世界が輝いていた。 — とうとう彼は怒って、懂れて立ち上がり、下の薄明の素晴らしい世界に忍び出て、フォルムの前に歩み寄った。しかし月の夜で、この装飾画家の夜のせいで、不格好な条光で細工され、彼にとって舞台がほとんど分からなかった。

何という荒涼たる広大な平野が、高く廢墟や庭園や神殿で囲まれて、倒壊した柱頭や、垂直で孤立した柱や、木々、それに黙した荒地で覆われていることか。「時」の排出された灰の甕からのかき回された瓦礫と、 — それに偉大な世界の破片が散乱している。彼は三本の神殿の柱*1の前を過ぎって行った。それは大地が胸のところまで引き下げていた。そして[皇帝]セプティミウス・セヴェルス[146-211]の広い凱旋門を通って行った。右手には神殿のない連結した柱が[Tempel des Kastor und Polluxの三本の柱]があつて、左手の或るキリスト教教会[San Lorenzo in Miranda]の許には古代の異教徒の神殿の深く「時」の沈殿物の中へ沈んだ柱の列があつて、最後にティトス[39-81]の凱旋門があり、そして彼の前には荒涼たる森の中央に噴水があつて、花崗岩の水盤に注がれていた。[噴水は十九世紀撤去]。

彼は、この平野を一望するために、この泉の許へ進んで行った。その平野からはかつて地上の雷の諸月々が育ったのであった。しかし暗く沈んだ諸地球の掛かっている燃え尽きた太陽の上に行くかのように、彼は歩いて行った。人間よ、人間の夢よ、と絶えず彼の周りでは声がした。彼は花崗岩の水盤の許に立って、コロッセウムの方を向いた。コロッセウムの山の背は高く月光の中にあつた。そして「時」の大鎌が切り込んだ深い割れ目を見せていた。 — ネロの「黄金の家」の千切れたアーチがその横に殺害的猪の牙のように鋭く立っていた[エスキリヌスの丘]。 — パラティヌス丘[十八世紀末 die Villa Farneseがあつた]が庭園一杯に緑色をしていた。そして砕けた神殿の屋根では木蔭の花咲く葬儀の花輪が囓っていて、沈んだ柱頭の周りにまだ元気のいいラナンキュラスが光っていた。 —

泉は饒舌に永遠にぶつぶつ言っていて、星々は不滅の光線を静かな戦場に投げかけてしっかり見守っていた。この戦場では「時」の冬が、春を連れて来ることもなく過ぎ去っていた。 — 熱い世界魂が上昇して行って、冷たい砕けた巨人が散らばっていた。かつて

*1 雷神ジュピターの柱。[Tempel des Vespasian]

は時代の奔流そのもので動いていた弾み車の巨大な輻[スポーク]は四散していた。その上月が、その光を、エッチングする銀の水の如くむき出しの柱の上に注いでいて、コロッセウムや神殿やすべてをそれら自身の影の中へ溶かそうとしていた。 —

そのときアルバーノは両腕を空中に突きだした。あたかもそれで奔流の支流[腕]のように捉えて、散ることができるかのようで、そしてこう叫んだ。「汝ら、大いなる影よ、汝らはかつてここで諍い、暮らしていた。汝らは天から見下ろしている。しかし軽蔑していて、悲しんではない。汝らの偉大な祖国が汝らの後を追って絶えたのだから。私が、汝らが偉大にした昔からの永遠に満ちたこの取るに足りない地上で、せめて汝らに値する行為をしていたのであれば、そうしたのであれば、私は甘美な思いになって、私には許されよう、私の心臓を一つの傷で切り開き、現世の血を神聖な大地と混ぜ入れ、墓場の世界から、汝ら永遠の者達、不滅な者達の許へ急ぐことが許されよう。しかし私はそれに値しない」。 —

この時突然ヴィア・サクラ通り[聖なる道]を、背の高い、深く外套に身を包んだ男が噴水の許にやって来て、見回さず帽子を投げて、そのピッチのように黒い、巻き毛の、ほとんど垂直な後頭部を泉の下に置いた。しかし上の方を向きながら、自分の諸イメージに沈み込んだアルバーノの横顔を認めると、滴りながら進み出て、 — 伯爵を見つめ、 — 驚き、 — 両腕を高く空中に投げ出して、 — 言った。「友か」、 — アルバーノは彼を見つめた。 — この見知らぬ男は言った、「アルバーノ」、 — 「ディーアンだ」とアルバーノは叫んだ。彼らは互いに激しく掴み合い、愛の余り泣いた。

ディーアンは全くわけが分からなかった。彼はイタリア語で言った。「あなたがここにいる筈はないのだが。年取って見えるぞ」。 — 彼は長いことドイツ語で話していると思っていたが、アルバーノがイタリア語で返事するのを聞いて、そのことに気付いた。両者とも単に質問だけをして、質問だけを貰った。アルバーノは建築士がただもっと褐色になっていると思ったが、目の閃光やすべての力は昔のままの輝きであった。三言で彼は旅のこと同行のことを語った。「ローマはどうかい」とディーアンは快活に尋ねた。「人生と同じ」(とアルバーノはととても真面目に答えた)「余りに軟弱にし、余りに苛酷にする。

— ここではまた全く何も分からない」(と彼は続けた)「あの柱は立派な平和の神殿のもの^{*1}のものなのかい」。 — 「いや違う」(とディーアンは言った)「コンコルディア神殿のものだ[サトゥルヌス神殿の八本の柱と思われる]。平和の神殿ではドームしか残っていない」。

— 「サトゥルヌス神殿はどこ」とアルバーノは尋ねた。「聖アドリアーノ教会に埋まっている^{*2}」とディーアンは言って、急いで付け加えた。「隣にアントニヌス神殿[ファウスティナ神殿]の十本の柱が立っている。 — 向こうにティトゥス帝の浴場[トラヤヌス帝の浴場]があって、 — 我々の背後にパラティヌス丘があり、等々だ。それでは話を聞かせておくれ」。

*1(訳注)マクセンティウス[あるいはコンスタンティヌス]のバシリカ。当時そのドームは平和の神殿のドームと思われていた。

*2(訳注)アドリアーノ教会は1937年壊されたが、サトゥルヌス神殿の中ではなく、ローマ教皇庁の会議室に建てられた。

彼らはフォルムをあちこち歩いた。ティトゥス帝とセヴェルス帝の凱旋門であった。アルバーノは 一 殊に子供時代よくこちらに案内してくれた教師の傍らで、 一 世界の上を流れた奔流のことでまだ胸一杯になっていて、すべてを覆う川はただゆっくりと沈んで行った。彼は続けて述べた。「今日自分がオベリスクを見たとき、月の秘かな華奢な輝きはこの巨人の都市には全く似合わないように思えた。むしろ太陽がその広大な旗の上に輝くのを見て見たかった。しかし今は月がアレクサンダーの傍らの本当の葬儀の松明だ。アレクサンダーは、単に触れられて散ってしまったのだ^{*1}。「そのような感情では芸術家は先に進めない」（とディーアンは言った）「永遠の美を芸術家は観照する、左右に観照する」。 一 「どこに」（とアルバーノは問い続けた）「あの昔のクルティウスの湖^{*2}はあるのか、 一 雄弁家の舞台は、 一 ホラティウスのポール^{*3}は、 一 ウェスタ女神の神殿は、 一 ウェヌスの神殿[Antoninus Pius による]や、すべてのかの孤立した柱の神殿はどこにあるのか」。 一 「そして大理石のフォルムそのものはどこにあるのか」（とディーアンは言った）「三十指尺深く足の下にあるのだよ」。 一 「どこにかの偉大で自由な民衆は、王達の元老院は、雄弁家達の声は、カピトリヌスの丘の行列はあるのか。破片の山の下に埋葬されている。ディーアンよ。ローマで一人の父親や一人の恋人を失った人間が、ただ一つの涙を流すことができようか。こちらに入って来て、『時』のこの戦場を前にし、民衆の納骨堂を覗き込んだら、狼狽して周りを見ることがあるか。 一 ディーアンよ、こちらでは人々は鉄の心を願う。運命は鉄の手を持っているのだから」。

ディーアンは、このような悲劇的な、さながら永遠の海の中へ掛かっている断崖に留まっていることほど嫌いなものはないディーアンは、絶えず冗談を言って、それから離れた。ギリシア人のように彼は悲劇に踊りを混ぜた。「友よ、かなりのものが残っている」（と彼は言った）「向こうのアドリアーノ教会では火の中に投じられた三人の男達の骨を見ることができるぞ[Volkmann の旅行記による]」。 一 「それはまさに」（とアルバーノは答えた）「剃られて奴隷となった僧侶達が古代の偉人達の高貴さの埋め合わせをするというのであれば、恐ろしい運命の芝居だ」。

「『時』の奔流は新しい車輪を回す」（とディーアンは言った）「あちらではラファエロが二回埋葬されている^{*4}。カリトンと子供達は何をしているかい」。 一 「皆花咲続けている」とアルバーノは言った、しかし悲しげな調子であった。「そうか」（とディーアンは全く父親の驚きを込めて叫んだ）「本当に」。 一 「本当だとも、ディーアン」と穏やかにアルバーノは言った。「それによく」（とディーアンは言った）「リアーネはカリト

*1（訳注）アウグストゥスは保存されていたアレクサンダー大王の遺体を見たと言われる。この遺体は最初触れられた際崩れたそうである。Lord Orrery: Bemerkungen über das Leben und die Schriften Swifts, in Briefen an seinen in Oxford studierenden Sohn Hamilton Boyle. 1751. 第13の手紙参照。

*2（訳注）有毒ガスを静めるためにクルティウスが犠牲者として飛び込んだ深淵。

*3（訳注）初期ローマ時代決闘に勝ったホラティウス兄弟がクリアティウス兄弟の武器を掛けたポール。

*4 体はパンテオンにある。頭部は聖ルカ教会にある。[聖ルカ・アカデミーに聖遺物として頭部は保存されていた。Volkmann Bd.2. S.549]

ンの許に来るか。あの優しい女性は何をしている」。 — 小声でアルバーノは答えた。「彼女は亡くなった」。 — 「何だって、亡くなった。 — 有り得ない。フルレの娘が、アルバーノ。あの黄金の薔薇が。話しておくれ」と彼は叫んだ。アルバーノは肯定して頷いた。 — 「あんなに良い娘が」（と彼は黒い目に涙を浮かべて嘆いた）「あんなに好意的で、あんなに愛らしくて、あんなに上手なスケッチ画家が。どうしてそんなことに。あの優しい娘を知らないことはないよな」。 — 「一春の間」（と素早くアルバーノは言った）。「ディーアンよ、今は父親の許に戻りたい。もう答えたくない」。 — 「構わないよ。 — しかし私はもっと詳しく知りたい」とディーアンは結んだ。かくて二人は黙って、瓦礫と柱のトルソを越えて急いで行った。二人とも相手の大きな感動に注意を向けていなかった。

第二十七ヨベル期

聖ピエトロ大寺院 — 円形建物[ロタンダ] — コロッセウム — ショッペ宛の手紙 — 戦争 — ガスパール — コルシカ人 — 侯爵夫人との葛藤 — 病気 — ガスパールの弟 — 聖ピエトロ大寺院のドームと別れ

第四百四週

ローマは被造物世界同様に一つの奇蹟全体であり、それが次第に新しい諸奇蹟に分解する、コロッセウムとかパンテオンとか聖ピエトロ大寺院とかラファエロ等々に分解する。

聖ピエトロ大寺院の参詣で、騎士は不滅なものへの素敵な巡回を始めた。侯爵夫人は芸術で男達の一団と結び付くことになった。アルバーノは他のどんな芸術作品よりも建築によってもっと心奪われたので、彼は神聖な心で遠くから、中にまた丘を抱く長いこの芸術の山脈を見ていた。 — かくて彼は平野部で、周りを馬車行列のように二つの途方もない柱廊が、彫像の群れを並べて走っているのを目にした。中央ではオベリスクが、そしてその左右に永遠の噴水が上がっていた。高い段の上からこの世界の誇り高い教会は、内部に諸教会を収めて、自らの上に天への一つの神殿を築きながら大地を見下ろしていた。 — しかし何と間近ではその柱や岩の壁は途方もなく高いものとなり、視線から逃れて行ったことか。

彼は、世界に祝福や呪詛、国王達や教皇達を与えるこの魔法の教会へ入って行った。 — 長くこの教会にいるほど、この教会は宇宙のようにますます拡大し、離れて行くと感じていた。黄色の大理石の神聖な貝を持った白い大理石の二人の子供を目指して彼らは行った。この子供達は近づくにつれ大きくなって、遂には巨人となった。最後に彼らは中央祭壇とその百もの永遠のランプの許に立った。 — 何というところか。 — その上にはドームの天蓋があって、四本の内部の塔の上に休らっていて、周りには諸教会の並ぶ四本のアーチを付けられた町がある。 — この神殿は歩くことで最も大きなものとなる。彼らが一本の柱に近寄ると、新たな柱が彼らの前にある。そして神聖な巨人達が真面目に見下ろしていた。 — ここでこの若者は長い時を経て、偉大な心が満たされた。「芸術の中で」（と彼は父親に向かって言った）「建築ほどに崇高なものによって魂が強力に捉えられることはありません。他の芸術ではいずれの場合も、巨人はその中にいて、魂の深

いところにいます。しかし建築ではこの巨人は外部にいて、魂のすぐ前にいます」。一
ディーアンは、彼にとってすべてのイメージが抽象的理念よりも明確であって、こう言
った。「アルバーノは完全に正しい」。一 フライシュデルファーは答えた。「崇高なも
のは建築でも単に頭の中にあります。というのは教会全体が何かもっと大きなものの中
にあるからで、つまりローマの中、天の下にあるからであって、その場合我々は何も感じな
いほどなのです」。それに彼はこう嘆いた。「崇高なものにとって小生の頭でのその場は
無数の渦巻き模様や記念碑で窮屈なものになっています。こんなものをこの神殿は自らと
共に小生の頭に押し込んで来ます」。ガスパールは、すべてを一つの大きな意味で受け取
って言った。「ともかく崇高なものは実際に存在するとなると、まさにその性質上周りの
すべての卑小な飾りを飲み込んで消化してしまうものだ」。彼はその証拠の大聖堂の塔と
自然そのものを挙げた。自然はその草や村々でより卑小なものとはなっていない、と。

侯爵夫人は多くの芸術通の者達の中で黙って享受していた。

ドームに登ることをガスパールは雨や雲のない日に延期して、世界の女王たるローマを
この正しい王座から眺めるよう勧めた。彼は代わりにとても熱心にパンテオンの訪問を提
案した。このパンテオンを聖ピエトロ大寺院の印象の後、すぐに見せたかったからである。
彼らはそこに向かった。このホールは何と簡素に偉大に開かれたことか。その額には八本
の黄金の柱があって、ホメロスのジュピターの頭のように荘重にその神殿はアーチを描い
ている。それはロタンダ、あるいはパンテオンである。「低級な者ども」（とアルバーノ
は叫んだ）「奴らが、我々に新たな神殿を与えようと欲している。古い神殿を瓦礫の中か
らもっと高く上げたなら、十分立派になったのに*1」。一 彼らは中へ入った。すると神
聖な、簡素な、自由な宇宙が、その上昇しようとする天の弧[虹]を描いてアーチとなっ
ていた。天球の音色の音楽堂、惑星の中の一つの惑星であった。一 そして上の方²では
明かりと天の眼窩が下の方に輝いていた。そして遠方の飛んで行く雲が、飛び過ぎながら、
高いそのアーチに触れるように見えた。そして彼らの周りには神殿を支えるもの、柱しか
立っていなかった。すべての神々の神殿は後の神々の卑小な祭壇を運び去り、隠していた。

ガスパールはアルバーノにその感想を尋ねた。アルバーノはより大きな聖ピエトロ大寺
院を最良にした。騎士はそれを承認して言った。「いつでも若者は、民衆に似て、崇高な
ものを、美しいものよりも、より良く感受し、より容易に思うものだ。若者の精神は強い
ものから美しいものへと成熟して行く、若者の肉体が美しいものから強いものへと成熟す
るようにな。しかし私自身はパンテオンを最良にする」。一 「近世人には」（と芸術
顧問官のフライシュデルファーは言った）「何か建てられましようかな。若干のベルニー
ニの小塔以外に[1626年側に建立、1833年撤去]」。一 「その代わり」（と傷付けられた侯
爵建築士のディーアンは言った。彼は芸術顧問官を軽蔑していた。この顧問官は美学的裁
判室で裁判官としてしか立派な人物たり得ず、決して展覧室で画家たり得なかったからで
ある）「我々近世人は異論なく批評の点ではより手厳しい、実践ではたとえ全員が格別に
貧しいとしても」。ブヴェロはこう述べた。「コリント式の柱ならもっと高くなりましょ

*1 パンテオンのホールは余りに低く見える。その段の一部を瓦礫が隠しているからである。

*2 屋根の開口部は直径二十七フィートである。

う」。芸術顧問官はこう言った。「自分はこの美しい半球に似たものとしては、はるかにより小さな半球、ヘルクラネウムで灰となって表現されて見つかったもの、つまり美しい避難の女性の胸からのものしか知らない[96.Brief aus Dypatys Lettres sur l'Italie.1791 参照]」と。騎士は笑った。アルバーノは不機嫌になって、侯爵夫人の許に寄った。

彼は夫人に両神殿についての彼女の意見を尋ねた。「こちらはソフォクレス、向こうはシェークスピアです。でもソフォクレスの方が私には分かりやすい」と彼女は答えて、新しい目をして新しい顔を見つめた。というのは天の天頂からのこの世ならぬ輝きが、一靄のかかった地平線からではなく、彼女にとってこの若者の美しい動揺した顔を神々しいものとしたからである。彼女はドームの後光が自分の形姿も引き立てると思っていた。彼が彼女にこう答えると、つまり「その通りです。しかしシェークスピアにはソフォクレスも含まれていますが、ソフォクレスにはシェークスピアはありません。一それで聖ピエトロ大寺院にはミケランジェロのロタンダが立っています」、そのとき突然高い雲が、エーテルから或る手で打たれたかのように二つに裂けて、隠れていた太陽が、古い天から移って行くヴィーナスの目[ヴィーナスとマルスのためにパンテオンは建てられたとされる]のように、かつてはやはりここにもあったのだが、高い深みから穏やかに覗き見た。一そのときある聖なる輝きが神殿を満たして、大地の斑岩で燃え上がった。そしてアルバーノは当惑し、恍惚となって周りを見回し、小声で言った。「何と今すべてがこの神聖な場所では、神々しいのでしょうか。ラファエロの精神が正午にその塚から出現し、その反映で触れられるものすべてが神的に輝いています」。侯爵夫人は彼を優しく見つめた。彼は軽く彼の手を彼女の手において、圧倒されたように言った。「ソフォクレス」。一

次の、月の明るい夕べ、ガスパールは松明を用意させた。コロッセウムのその巨大な円周をまず彼らの前で火で取り囲むためであった。ただ息子とだけ陰気に陰気な仕事を、古代の二人の精霊のように取りかかりたいと思っていた騎士に対して、更に侯爵夫人が加わってきた。高貴な若者と偉大な瞬間を、多分にそれどころか自分の心と彼の心を分かち合うという生々しい願望からであった。観念はそれが男性の精神を満たし高めるとき、男性の精神を愛から遠ざけ、人物を締め出すということを女性達はなかなか理解しない。他方女性にあってはすべての観念は容易に人間となるものである。一

彼らはヴィア・サクラ[通り]を通してフォルム[広場]を越えてコロッセウムへ行った。その高い、裂けた額は、月光の下、青白く下を眺めていた。彼らは四つの柱列となって上下に並んで建てられている灰色の岩の壁の前に立っていた。炎は上のアーケードのアーチまで達し、高く上の緑の藪を金色に染めた。深く大地の下にその美しい怪物はその足を埋め込んでいた。彼らは中に入って、岩の作品で一杯のこの山脈を観客の一つの座席から次の座席へと登って行った。ガスパールは、かつては男達が立っていた六番目の席、あるいは最上階の席まで登る勇氣はなかったが、しかしアルバーノと侯爵夫人は登った。そのときアルバーノは岩礁越しに下の焼け落ちた火山の丸い緑色の火口を覗き込んだ。これはかつて一度に九千もの動物を飲み込み、人間の血の犠牲で収まったものであった。一炎の輝きが断崖絶壁と木蔭や月桂樹の藪の中へ入って行った。月の大いなる影の下で、この影は逝った者達のように洞穴の中に留まっていた。一諸世紀と野蛮人の奔流が押し寄せて来た南の方には、個別の柱と取り壊されたアーケードが立っていた。一神殿と三

つの宮殿^{*1}をその巨人がその肢体で養い育てていた。そして今なおその巨人は生き生きとその傷と共に世界を眺めていた。 —

「何という民族か」（とアルバーノは言った）「ここで巨大な蛇は五回[五層、五階]キリスト教界にとぐるを巻いていた。 — 嘲笑のように下では月光が緑色のアリーナの上に掛かっている。ここにかつて太陽神の巨像が立っていた^{*2}。 — 北方の星^{*3}は窓越しに沈んで微光を発している。竜座と熊座とが互いに身をかがめている」。 — 侯爵夫人は答えた、「一万二千人の捕虜がこの劇場を建てたのであり、その上更に多くの血がここで流されたのです」。 — 「我々も建築の捕虜を有しています」（と彼は答えた）「しかし要塞のためです。それに血も流されています。汗と共にです。そう、私どもは現在を有していません。過去は現在なしに未来を生まなければならないのです」。

侯爵夫人は去った。月桂樹の枝と花と咲くニオイアラセイトウを手折るためであった。アルバーノは想いに耽った。 — 過去の秋の風が刈り株の上を越えて来た。 — この聖なる高みで彼は星座を、ローマの緑の山々を、微光を発する町を、ケスティウスのピラミッドを見た。しかしすべては過去のものとなった。そして十二の丘[ローマは実際は七つ以上の丘がある]に住んでいたのは、墓場同様に、古代の気高い精霊で、あたかもまだそれらの国王や裁判官であるかのように、厳しく時代を見ていた。

「この場と時の記念のためです」と侯爵夫人はやって来て、彼に月桂樹と花を渡した。

— 「汝、強力な者よ、コロッセウムといえど汝の植木鉢で、汝には何も大きすぎることもなければ、小さすぎることもない」と彼は言って、侯爵夫人を若干混乱させたが、やっと夫人は彼が自然のことを言っていることに気付いた。彼の本性全体が新たに痛々しく動揺し、遠くに遠ざかったかのように見えた。 — 彼は下の父親の方を見て、彼を探した。 — 彼は鋭く父を見つめて、激しく彼の手を握って、この晩はもはや何についても話さなかった。

第百五周

アルバーノは一つの世界のようにローマによって不思議に変化させられた。何週間かローマの廃墟と創造物の間に身を置いた後で、 — ラファエロの水晶のような魔法の杯から飲んだ後で、この杯の最初の飲みはただ静めるだけであるが、最後の飲みはイタリアの炎を全血管に導くものであって、 — ミケランジェロの山岳の流れをあるときは滝として、あるときはエーテルの鏡として見た後で、 — ギリシアの最後の最大の子孫の前でお辞儀をして清められた後で、つまり平静な快活な顔で不調和な世界を覗き込んでいる神々の前で、また時代の散文に対して、再三若返って来るこの低級な蛇ピュトン[パルナッソスの麓に住んでいてアポロンに殺された]について怒っているヴァチカンの太陽神[ベルヴェデー

*1 (訳注) Volkmann.Bd.2.S.183によると Farnese 宮、die Cancelleria、Venetia 宮がコロッセウムの石から造られた。

*2 (訳注) ネロのアポロン像は外のフォルム側にあった。

*3 北極星は他の北方の星座同様南方では一層低い。

レのアポロン]の前で清められた後で、 — 長く輝く過去の満月の前で立ち尽くしていた後で、突然彼の内的世界全体が覆われて来て、唯一つの雲となった。彼は孤独を求めて、 — 彼はスケッチを描き、音楽を奏することを止めて、 — もはやローマの素晴らしさについて語ることは少なくなった。 — 毎日の雨が止んだ夜、彼は一人で大地の大きな瓦礫、フォルム、コロッセウム、カピトリヌスの丘を訪ねた。 — 彼は一層激しくなり、社交を求めなくなり、一層鋭くなった。 — 深く沈み込んだ真面目さが、高貴な額に刻まれた。そして目を通して陰鬱な精神が燃え上がった。

ガスパールは気付かれないように彼の視線を若者のすべての内密な発展に対して追わせた。リアーネに対する単なる余韻の痛みのみが彼の状態であるようには見えなかった。北方の冬であれば、この傷は単に凍えていて、癒えて治ることはなかったであろう。しかしここ、神々が埋葬されている世界の神殿では、高貴な心は強化されて、より古い塚のために鼓動した。父親を口実にして息子を追いかけていた侯爵夫人に対しては、彼は老いて冷淡なラウリアや炎のディーアンよりも求めなかった。

この同じ時期、彼は痛々しく自分のショッペに憧れた。この胸元であれば、彼自身の胸の秘密は然るべき所と慰めを見いだせ得たろうと彼は考えた。今度の別れ以来、ずっと彼と一緒に暮らしてきて、より強固に兄弟となったかのように思われた。このように諸精神は見えない国と一緒に住み、溶けるものである。体が見える世界でまた互いに会ったら、心はより馴染み深くなって、再会する。彼の父親はペスティッツから多くの手紙を得たけれども、残念ながら山々を越えてこの友からの音信はなかった。この友を彼はある不思議な混乱した情熱の暗い状況の中に残したままであった。彼はその沈黙をショッペのせいにはしなかった。ショッペのすべての書簡に対する憎しみと怒りを彼は知っていた。しかし彼自身の心は沈黙を長引かせておれなかった。かくて彼はショッペ宛にこう書いた。

「我々は眠りながら互いに引き離された。ショッペよ。かの時は覆われたまま残っている。とてもはっきりと目覚めてまた再会したいものだ。貴兄については何も知らない。ラベッテが書いてくれなかったら、熱い焦燥を夏の我々の再会まで持ち運び、悩まなければならないことだろう。私については何と書こうか。私は内奥まで変わってしまった。一つの介入して来る巨大な手によって。太陽が国々の天頂に来たら、国々は皆、深い雲で身を隠す。そのように今や私も至高の太陽の下にあって、身を隠している。どうしてローマで、本当のローマで、一人の人間が、赤面して身を起こし、力と行為とを闘い取る代わりに、ただ享受し、芸術の炎の前で優しく溶けることができるものか、これは理解できない。描かれたローマ、詩作されたローマでは、この中では閑暇が贅を尽くすかもしれない。しかし本当のローマ、汝をオベリスクやコロッセウム、カピトリヌスの丘、凱旋門が絶えず眺めていて、避難するところ、古代の行為の歴史が一日中目に見えない嵐のように町をざわめき過ぎて、汝を押し、持ち上がる場所、そこでは誰が世界の素晴らしい動きの前へ、不甲斐なく見守ったまま寝ていることができよう。聖人達や英雄達や芸術家達の諸精神が生きた人間を追いかけてきて、怒って尋ねるのだ。汝は何か、と。 — 汝がどこかのドイツの画廊や古代の展示室から出て来るときとは、全く別な風になって、汝はラファエロのヴァチカンから出て来、カピトリヌスの丘を越えて下りて来ることになる。そこのすべての丘で、汝は古代の永遠の素晴らしさを目にする。すべてのローマの女性がその形姿と

誇りの点でまだその町に近い。テヴェレ川の向こうの野人はスパルタ人だ。ローマ人ではユダヤ人同様、鈍い者はほとんどいない。しかし汝はペスティッツではすでに単なる形姿のコントラストに対してほとんど我慢ならなくなるに違いない。冷静なディーアンでさえこう主張している。古代人の醜い仮面は、ドイツの路地で見かける顔に似て見え、古代人の牧羊神や動物の神々は、より高貴な宮廷人の顔に似て見える、と。アレクサンダーや哲学者達や、ローマの僭主の古代人の模写像は、神々の彼らの詩的彫像から鋭く、散文的に切り取られたものではあるが、現今の画家達の理想に似ている、と。

贅嘆を込めた目と両手を組み合わせて、巨人達の許に忍び寄り、それから卑小に枯れて彼らの足許で懂れることで十分であろうか。友よ。私はしばしば不機嫌な日々、自分達の懂れを楽しげな快活な創造物で静めることが許される芸術家や詩人達を、美しい劇[戯れ]で偉大な死者達を祝う詩人達、英雄時代のアルキミムス達[擬態俳優達]を、幸いなものと称えてきた。 — しかしこの贅沢な劇[戯れ]は単に避雷針の許の組鐘にすぎない。何かもっと高貴なものがある。行為は人生[生命]だ。その中で人間全体が活動し、すべての小枝と共に花咲く。 — 時代の漕ぎ手の席、休憩席での不安げな狭い卑小な行為について話しているのではない。まだ精神の戴冠の都市では一つの門が開いている。犠牲の門であり、ヤヌスの門[戦時の門]である。この地上で、一つの人生[生命]全体のすべての諸力、すべての犠牲、すべての徳操が一つの時間に押し詰められて、神々しい自由の中で、千ものその姉妹の諸力と犠牲とで合奏するところは、戦場より他に更にどこにあるか。どこに一体張り合う同盟のために、すべての諸力に対して、つまり瞬時の鋭い眼差しからすべての肉体的練達、鍛錬に至るまで、至高の高邁さと名誉から最も優しい涙に至るまで、肉体のすべての軽視から致命的傷に至るまで、すべての柵が取り払われるところがあるか。もっともまさにそれ故すべての神々の遊戯場はすべての復讐の女神達の仮装舞踏会にも開放されている。諸精神が、損失に対する利得という関係なしに、単に名誉と目的の力から、運命に対してこう請け負わせるところでは、つまり運命が諸精神の肉体から死体を選び出し、勝利の運を墓場から取り出すべく請け負わせるところでは、ただ戦争をより高く評価し給え。 — 二つの民族が戦闘の平野へ、より高度な精神の悲劇的舞台に進み出て、個人的憎しみなしに死の役割を交互に演ずる。 — 静かに黒く雷雨の雲は戦場に横たわっていて、 — 諸民族は雲の中へ入って行き、すべての彼らの雷が轟き、陽気にただそれだけが、死の松明だけが雲の上で燃える。 — 遂には明かりとなって、二つの凱旋門が建てられる、つまり死の門と勝利の門である。その軍は分割され、その両門を歩いて行く、しかし両門を通じて冠が添えられる。 — それが終わると、死者達と生者達が崇高に世界に立っている。彼らは生命に執着しなかったからである。 — しかし偉大な日が更に一層偉大になると、精神に対して人生を神聖なものにする最も貴重なものが生ずることになると、神は聖化された軍の前に一人のエパミノンドス、一人のカトー、一人のグスタフ・アドルフを置くことになる。 — そして自由は同時に旗であり、棕櫚の葉[勝利、平和の象徴]である。 — いや、そのとき戦闘の神と平和の女神の双方に同時に生きたり、あるいは死んだりする者は、浄福である。 —

私を語ることで不純なものにさせないで欲しい。しかしここでは私の小声の固い言葉を受け取って、次のことを貴兄の胸に収めて欲しい、つまり私は、ガリア[フランス]の自由戦役が多分始まったら、その中で、その戦役のために私の役割を全うするということだ。

何も私をこの決意から引き離せない、父親もできない。この決意は私の平静さ、実存のために必要だ。野心から私は決意していない。自分自身に対する名誉心からではあるが。すでに私は早期に永遠の家庭的幸福の平板な称賛を享受できなかった。これはきっと男達より女達にふさわしいことであろう。勿論すべて偉大なものを平静に受け入れ、世間を静かに一つの内的夢に溶かしてしまう貴兄の強さとか心情方法を有する者は多分誰もいないであろう。貴兄は夕方の雲を見やり、その後銀河を見やり、冷たく言う、集雲だ、と。しかし貴兄は余りに深く、この感情に、この冷たい墓に降りていないか。確かにこの感情の毒は至る所、そしてまさにローマで、この遠方の諸民族の、対立した諸世紀の墓地で、他のどこよりも甘美に食い尽くすものである。しかし貴兄は、無常について、不滅のものの介助なしに承知できようか。死は生の他にどこに住んでいよう。塵のように飛散させ、干上がらせるがよろしい。三つの不滅なものがあるのだから、一 貴兄は最初の不滅、現世を越える不滅は信じないだろうが。一 現世の下の不滅と（というのは宇宙は塵に飛散しようが、その塵はそうできないので）、一 その中で永遠に作用する不滅だ。これは、どの行為もはるかにきっと永遠の娘よりは永遠の母親となるであろうという不滅だ。宇宙と永遠とのこの同盟は蜻蛉の身に勇気を与える、つまりその飛行の瞬刻に花粉を更に運び、播種する勇気を与える。この花粉は次の世紀にはひょっとしたら棕櫚の森になるかもしれないものだ。

私は自分のことを父親に打ち明けるか、まだ迷っている。父親の新しいフランク族に対するこれまでの意見を鋭い真面目さと受け取るべきなのか、単に冗談の冷淡さと受け取るべきなのか、迷っているからである。この冗談の冷淡さで、彼はいつもはまさに彼の神性なもの、一 ホメロス、ラファエロ、シーザー、シェークスピアを、一 平民どもが真の高貴さにも偽の高貴さ同様に示す模倣の偶像崇拜に対する嫌悪から口にするのだ。一 私の立派な男らしいヴェールフリッツによろしく。そして倒されたバティューの新聞で知った日の同盟の祝典を彼に思い出させて欲しい。ご機嫌よう、共にあらんことを。

アルバーノ」。

この手紙を書いた夕べ、彼は父親と一緒にコロナ宮殿での談話会に出掛けた。一 ここで彼らは美術室や社交室の古代作品や絵画で一杯の黒い大理石の画廊が一つのフェンシング場に変まっているのに気付いた。ローマ人のすべての腕と舌がガリア[フランス]の革命の最新の展開についての動揺と戦闘の中にあつた。大方は賛同していた。それは当時、ほとんどすべてのヨーロッパが数日間、フランスの政治的詩的歴史からヨーロッパが学び取っていたことを、つまりフランスは一つの偉大な国家よりも容易に拡大された国家になり得るということを忘れてしまった日々であつた。騎士一人が彼の近隣の空虚な闘いよりもむしろ芸術作品に身を任せていた。ようやく彼は遠くから、アルバーノが、すべての当時の若者に似て、天の女王、つまり自由に、歓呼して付き従つたこと、永遠の自由民、永遠の奴隷と共に当時の平等性を目指していることを耳にした。そこで彼はもっと近付き、彼の流儀でこう述べた。「革命は何かとても偉大なものである。しかし自分は偉大な作品の許で、例えばコロッセウムとかオベリスクとか、一つの学問の花野、戦場、天文学や物理の頂点の許で、他の作品よりも称賛すべきことは多くないと思っている。というのは単に時間と空間における多数の者が、それを作っているからで、卑小な諸力のかかなりの量に

すぎない。しかし単に偉大な諸力に人は敬意を払うものである^{*1}。革命には自分は偉大な諸力よりも、多くの卑小な諸力を見ている。 — 自由は一日では失われることも、得られることも、少ない。弱い個人どもが醜悪の中ではまさにその反対になるように、ここでも多分群衆による群衆の醜悪が見られる」。 —

ブヴェロはそれにこう答えた。「全く私の意見も同じです」。アルバーノはただ父親にだけまことに明確に答えた。 — ドイツ騎士団騎士の方は彼が深く軽蔑していて、彼を全く高度な芸術作品の享受に値しないと思っていたからである。ブヴェロは芸術作品に対してセンスを有しなかったが、上品な趣味を有していた。 — そして言った。「父上、一万二千のユダヤ人はコロッセウムを建てましたが、発案したのではありません。しかしその理念はどこかの全く一人の人間の中にあつたものです。ヴェスパシアヌスの中に。そのようにいつでも卑小な諸力の集中的な方向に対して何らかの偉大な諸力が監督していなければなりません。神自身であろうとも。「そちらへ」（とガスパールは言った）「すべての神的なものが移される所へ、おまえはそれを移しなさい」。 — ブヴェロは微笑んだ。 — 「ガリアの醜悪は」（とアルバーノは激しく答えた）「まことに偶然な醜悪ではありません。人類と時とが同時に築いた一つの熱狂です。そうでなくして皆が関与するのでしょうか。彼らはひょっとしたら沈むかもしれません。しかしもっと高く飛ぶためです。血と戦争の紅海を通じて、人類は約束の地に向かって徒渉して行きます。人類の砂漠は長い。人類は傷だらけの、ただ血塗られた両腕をして羚羊獵師のようによじ登って行きます。

— 「羚羊獵師そのものは」（と騎士は言った）「アルプスから降りようとしたら、もっと血を流そう。しかしそのような希望は魅力的だ。その実現を願うことにしよう」。 — 「伯爵殿は」（とブヴェロは付け加えた）「とても上手に反乱を醜悪と名付けられた。その酔いを眠り尽くしたら、朝には多くが毀されていて、支払わなければなりません」。「醜悪です」（とアルバーノは言った）「熱狂の中で何という最良のことがなされたことでしょうか。冷淡さの中で何という劣等なことがなされたことでしょうか。いかがです、フォン・ブヴェロ殿。いや実際、類似の身体的霜同様、黒く盲目に傷付いたものにします^{*2}。例えばフランス悲劇のように、冷淡に、しかし残忍にします」。

「おまえは悲劇的なものに近付いておる、息子よ」（とガスパールは彼を遮って、ドイツ騎士団騎士を擁護した） — 「我々はフランス人からまことに多くの政治的聡明さを期待して良いだろう。殊に困窮時には。これは彼らの強みである。この点で彼らは女達に近い。彼らも女達同様に、元気な場合、はなはだ優しく、倫理的で、人間的であるか、または我を忘れている場合、やはり女達同様に残酷で粗野だ。 — 予言されることだが、

*1 電氣的なガルヴァーニ的、化学的、解剖学的経験の総体、システム、それに戦略、法典等々は我々を多分驚かせよう。しかし人類自身は数百万もの巨象の蟻どもによって集められた巨大な構築物によって更に偉大なものになるとは見えない。しかし一頭の象がある建築物を運ぶとき、ある個人が何らかの力を新しい段階や諸関係の中で示すとき、ニュートンが数学的観念を、ラファエロが造型的観照を、アリストテレス、レッシング、フィヒテが明察を、あるいは他の個人が善意を、堅固さを、機知等を示すとき、そのとき人類は得るものがあつて、人類の柵は広がる。

*2 グリーンランドでは厳しい冷たさが黒く盲目にする。

彼らは自由戦役では、それが勃発したら、勇敢さではどの党派にも引けを取らないことだろう。これには眩惑されよう。臆病な民ほど稀なものはないのだから。ローマの兵団は、まさに彼らが安くて、劣等で、奴隸的で、半分が解放奴隸であったときに、つまり三頭政治のときに、それ以前よりも勇敢に戦ったというのを見れば、戦時の勇敢さを適切に評価する術を学ぶことになる。取るに足りない殺人者のカティリーナのために仲間の市民どもは最後の一人まで戦って死んだのであり、単に奴隸のみが捕まったのだ。 —

この話はアルバーノの口に熱い封印を押した。まさに彼の心を父親が察知して、運命のように一つの熱狂を冷たいものにし、期待を嘘と処罰するという昔からの喜びを陰鬱なものにさえしているかのように思われた。侮辱され、自ら燃え尽きる精神は、今やガスパールとブヴェロの前で固く閉ざされていた。

しかし彼のディーアンには彼は翌朝すべてを打ち明けた。彼は、ディーアンが芸術家と若者との腕で同時に自由の旗を持ち振っていると承知していた。それ故彼は彼の前でこれまでの陰鬱さの暗い封蠟を開けた。彼は最愛の師に大きく育った計画を、つまりガリアの自由に敵対する聖ならざる戦いが、この戦いは今やそのピッチの冠をこの神の町のすべての路上にかざしているが、炎となって燃え上がったなら、自由の側に付いて進み、自由より先に戦死するという計画を告白した。「まことに貴方は大胆な人間だ」（とディーアンは言った） — 「私に子供と家族の枷がなかったら、神かけて、私も自ら出陣しよう。老公は、老人同様、多くを見てはいるが、聞く耳が悪い。老公には何も気付かれぬようにし、その捕吏長にも気付かれぬようにしよう」。芸術顧問官フライシュデルファーのことであった。この男を彼は芸術家の頑固さで永遠に嫌っていた。芸術顧問官は彼より下手に描くのに、批評は彼より上手だったからである。「ディーアンよ、貴方の言葉は上手い。確かに高齢になると、身体的倫理的にそれ自体遠視的になるが、他人に対して聞く耳を持たない」とアルバーノは言った。 — 「上手く語ったのかな、アルバーノ。しかし実際その通りだ」と彼は言った。自分の言葉に余り自信がなくて、その上手さを褒められてとても喜んでいた。

しばらくしてから騎士は、さながら封蠟越しに見通したかのように、若干の言葉を語った。若者のすべての側面を捉えた言葉であった。「何人かの」（と彼は言った）「大胆な性質の者がいる。彼らはまさに天才と才能の者の境界にいる者で、半ばは行動的な努力に、半ばは理想的な努力に傾注していて、 — その際燃えるような野心を有している。 —

彼らはすべての美しいもの、偉大なものを強力に感じていて、それをまた自らの裡から創造したいと欲している。しかしそれは単に弱々しい成果しかもたらさない。彼らは天才のように重心に従った一つの方向を有さず、自ら重心の中に立っていて、それで方向が互いに見失われる。あるときは詩人であったり、あるときは画家であったり、あるときは音楽家であったりする。大方は彼らは青年時代肉体的勇敢さを好む。ここでは力が最も端的に、最も容易に腕で語るからである。それ故彼らは早くから、自分達が目にするすべての偉大なもので恍惚となる。それを模倣しようと思うからである。しかし後には全くうんざりする。そうはできないからである。しかし彼らが悟るべきことは、まさに自分達は、その野心を早期に導く術を心得ていたら、多様で調和的な諸力という最も素敵な富籥を引き当てていたであろうということである。すべての美しいものの享受のためにも、彼らの本性の倫理的形成や思慮のためにも、彼らはまことに定められているように見える。全き人

間のために定められているように見える。例えば一廉の侯爵のあるべき姿のようなもので、侯爵は自分の全面的使命にとって全面的方向と知識とを有しなければならないからである」。

彼がこう述べたとき、彼らはまさにアヴェンティノー[アヴェンティヌス]の丘に立っていた。眼前にはケスティウスのピラミッドが、この異端者の墓地の碑銘があった。そこには多くの未完成の芸術家や若者が眠っていて、その間近に陶片の山（テスタッチョの山^{*1}）があって、それを見るとアルバーノはいいつも味気ない荒涼たる反吐の出る虚ろな感情を抱いて通り過ぎるのであった。自分の理念に対する父親の理念の衝突、異邦人の墓地と陶片の山の類似性のせいで、アルバーノは父親に対するよりも、自分に対してこう答えた。目に不快の溶けた鉄の滴を浮かべながら、「このような名前のない陶片の山が全体として諸民族の歴史だ。 — しかし長い人生の後ようやくこのような無名のまま行為もなく多数の中に埋葬されるよりも、むしろ即刻自殺したいものだ」。 —

自分自身との一致以来、彼はもっと幸せになった。熱心に彼は、自分の性質にふさわしく、今や自分の仕事に取りかかった。この性質というのは、種子のように、幹と根とを種子の先端から育てるように、思索と行為を育てるものであった。

彼は他のすべての衝動を投げ棄て、古代と近世の戦術を研究した。このためにディーアンが本と文庫を借りてきて提供した。名付け難い恍惚と高揚を抱いて、彼はまたローマ史の太陽の如き地図を、この燃え尽きた太陽の如き地そのものの上で駆け抜けたが、しばしばその歴史の発火が描かれているのを読んで、まさにその発火が行われた火口に立っているのであった。

ディーアンはその上ささやかな奉仕の自分の知識を授け、喜んで肉体的鍛錬の相手にもなったが、その前に彼は彼を優美女神が星座の如く高いエーテルの中に行くラファエロの芸術的天の下での礼拝へと引き上げた。というのはディーアンにあっては、肉体と魂は一つの鑄物で、最も優しい目の神経と最も強固な腕の筋肉とが一つの帯であったからである。最後に彼は、彼にとって一つの言葉は一つの行為よりもはるかに酸っぱいものであって、舌を動かすよりもむしろ体全体を動かすことを好んだので、伯爵に一人の雄弁的な戦友を、一人のコルシカの青年を、生命の純な髓から形成されたかのように生き生きとした青年を連れて来た。

両青年は、互いに名前する尋ね合うことなく、ロマンチックな自由の中でしばらくの間、愛し合い、練習し合った。彼らはフェンシングをし、読み、泳いだ。このコルシカ人はほとんどアルバーノの形姿、力、頭脳、度胸を崇拜し、自分の心全体を、自分がすべて把握しているわけではない或る心の中に注ぎ込んだ。多くの娘が他ならぬ愛のときにそうであるように、彼は他ならぬ戦争演習のときに魂とセンスを見せた。アルバーノの明るい黄金はガラスのようにその際自分の形姿を損なわずに、他人の形姿を気前良く映し出した。

あるときこのコルシカ人の熱意は一つの炎となって、自分自身の生命全体を友人に照らし出して示した。自分自身の唯一の目的と渇き、つまりフランス人を血祭りに上げる目的を示した。「この渇きを」（と彼は言った）「今度の戦争では癒やしてしまいたい」。アル

*1 ここへはセルヴィウス・トゥリウスの時以来、すべての陶片が投げ込まれた。

バーノが彼に似たものであったならば、戦う鹿のように角で致命的に戦い合っていたことであろう。というのはこの頑固で、強情なこのコルシカ人の勇敢さは、一 アルバーノの勇敢さがむしろ精神的勇敢さであるとすれば、むしろ感覚的勇敢さであって、一 反対を許さなかったからである。彼の階級同様に、彼は自分の語りに対しアルバーノのまことに強い同意を欲していた。しかしアルバーノは言った。「まさに戦争で偉大な点は、情熱的怒り抜きに、個人的敵対感情なしにすべてを行い、挑戦できるということで、弱虫は単にこうした感情のせいでできるだけだ。まことに戦闘では、一人の憎む男よりも一人の愛しい男を殺す方がより高貴なものだ。」一 「くだらぬキメラめ」（とコルシカ人は怒って言った）「何だって。おまえはフランス人を殺そうと思いつつ、愛そうと思いつつのか」。アルバーノの高潔さはすべての不安げな仮面を投げ棄てて言った。「一言で言うと、私はいつかガリア人のために共に戦うのだ。」一 「猫かぶりめ」（とコルシカ人は言った）「有り得ない。一 私と戦うのか」。一 「いや」（とアルバーノは答えた）「そのときは決して出会わないように神に願っている」。一 「私も神に切願しよう」（とコルシカ人は言った）「いつか銃剣を持っている時以外にはもはや出会わないように、と。達者でな」と彼は怒って彼から別れて二度と来なかった。

第百六周

他の父親達とは違ってガスパールはアルバーノに対し戦争についての最初の戦争以来まだ普段と変わることはなく、いやほとんど一層良くなった。すべての強固な個人性に対する昔からの敬意を持って、青年の息子がかくも顕著に夏の宮に入って、地上の上により温かくかつより高く昇って行くことを快活に受け入れていた。

彼はその次の証明を、ペスティッツへ戻る準備に次第に取りかかっているとき、一 別離の全く思いがけない願いを受け入れるということを示してくれた。つまりアルバーノは、今や木蔭のようにすべての花々や枝と共にますます強固に英雄時代の過去のすべての記念碑の周辺、その中に進んでいたのであるが、ナポリを見ることなくして、ローマから離れる気がなくなっていたのである。この彼の憧れに更にディーアンの自分の祖国のこの娘の国に対する熱狂が、天と地のこの国の栄光に対する、この建築士がローマの瓦礫に対してよりも優先するこの国のギリシア的瓦礫に対する熱狂が更に加わった。「ローマでは」（とディーアンは言った）「貴方は単に過去のみを有しています。これに対してナポリでは勇敢な現在があります。一 あちこちお供しましょう。そして一緒に帰宅しましょう。というのは本来貴方はまだ良く美しいものを理解なさっていないからです。自然と、英雄的なもの、その効果は理解なさっています。それでナポリがその地です」。騎士は承認した。一 アルバーノの快活化で旅の全目的はすでに達成されていたのであるが、一 躊躇なく第二の旅を、一ヵ月以上長くは滞在しないという条件で追加して承認した。

しかしこの時期に、彼の内的世界が調和的に和すことが許されたこの頃、彼が遠方では諧音と見なしていた敵意ある不協和音がますます近付いてきた。侯爵夫人との彼のはっきりしない関係から次第に不快な音が高まって来た。女性達とのすべてのはっきりしない関係は遂には厳しく決定的なものとなるからである。憎しみより愛に決まることは稀である。

侯爵夫人はこれまで一切のことをなし、耐えてきて、彼にとって分かりやすい存在より

なおそれ以前に、危険な存在になっていた。彼女は、できるだけ上手に、リアーネを模して、宗教的乙女らしい尼僧のヴェールを、自分の舞台用衣装戸棚から取り出してきた。もっとも、天才的男性は信心深いのであるが、天才的女性は大方信心深くないものであるけれども。彼女は彼に自分の一過去を打ち明けて、自分のために亡くなった、あるいは憧れてやつれた者達の話をした。女性的なやり方で、悔いているというよりは楽しげであった。ただ彼の父との関係は思いやって感動的喪のヴェールの背後で蘇生させ、そもそも騎士に対する尊敬の点で息子の真似をしたが、騎士を彼女は内心辛辣に憎んでいた。アルバーノが数時間現在のことを忘れて、過去と芸術の祭壇の炎をまじまじと見つめ、彼の世界の山上でその炎を、彼女の祭壇で燃えているわけではない炎を見せるときは、彼女は辛抱強くこの芸術の道に同伴して、ただ、機会があるときには、若干、一現在を展望できる箇所止まっていた。

彼は日々、推察することすらせずに、彼女のより温かい友となっていくた。ただ男たる者のみが、一女性はそんなことはないが、一他人からの愛を全く見過ごしてしまう。長く見過ごされた愛はそうなる、報われた愛になることは稀になるか、全く報われないことになる。アルバーノは余りに優しく、自分の父親の恋人や、他人の妻や、自分自身の恋人の女友達の中にこの不適切な願望を想定することができなかつた。それに彼は自分の価値にいつも小さな信頼を置くと同時に自分の権利に大きな信頼を置いていた。

彼女はより温かい志操に疑念を抱いていたが、絶望していなかつた。一人の女性は、別の女性が望みを抱いていない間、望みを抱くものである。アルバーノのカピトリヌスの丘やコロッセウムの夜の訪問は探る目にとって、いつも彼の高貴な性格にふさわしく思われていた。日々、彼女にとって、その堅固な若者はその新たな開花を通じ、その男らしい発展を通じて、好ましいものになっていった。時に彼女は強く希望を抱いた。彼の好意的な実直さと、自分には普通近くからも遠くからも説明できないかの英雄的な憂愁の念に籠絡されていた。自分の波の上でのこの自分には馴染みのない浮き沈みで、彼女の健康と彼女の性格は揺すぶられた。彼女は意志に反して、リアーネに一層似てきた。リアーネの鳩の羽毛で彼女は最初はただ白く飾るつもりだったのである。一輝かしい太陽の虹は月光の虹となった。一彼女はその強力な諸力で自分の先の自己の半ばを、化粧癖、技巧癖、媚態を投げ棄てた。ローマの女性が南方的な活発さで、しばしば通り過ぎる伯爵の背後でこう叫んだとき、「美しい若様」、激しく突かれた気がした。他人の心や苦しみとの彼女の以前の勝手な喜劇に対して、彼女は自らの喜劇で重い懲罰を受けた。しかしこのような暗い日々、まさに愛はもっと根を下ろした。木々を接ぎ木するのは曇りの日が最もいいようなものである。

アルバーノは彼女の変化に気付いた。彼女のいつもは力強い顔の魅力的な憂愁の念、彼女の静かな霧のこの反映は、彼女の幸せについて関心を寄せる質問へと彼を促した。彼女はいつも混乱して、混乱を誘う返事をした。一時にアルバーノの明察にさえも、アルバーノの偽装と悪意とを感じてしまい、彼を奇妙極まる錯誤へと導くことになった。

つまり、或る大地の影が、彼女の今の全生活に射し込んで、動いていないと大いに確信して、彼はこの惑星を探さなければならなかつた。一これは彼にとってガスパールとなった。父を彼女はまだ愛していると彼は思った。彼はこの推測を容易に彼女のすべての以前の会話や視線を通じて、導いてきた。それはとても自然なことで、以前は王座によつ

て隔てられていた者達が、今や自由な関係の素敵な国で、また共に憧れるということである。 — その上騎士は彼の仮借ないイロニーで、彼を求めるといふ彼女の見せかけに、また見せかけで、つまり真面目さで受け入れて、それ故いつも息子を享受する彼女のために自らを添え物として、春の中に名残の冬を移していたのであった。 — この二重の見せかけをアルバーノは二重の真実として呼び戻した。

そのとき突然運命が、彼の新たな推論の中へ踏み込んできた。 — 彼の父はシロッコ [アフリカから地中海への熱風] の風の下、ある衰弱性の春の高熱を発症する重篤な病に陥った。「特に気にすることはない」（とガスパールは彼に言った）「私の症状も私の発言も気にすることはない。私はこのような状態のとき気弱になって、後で恥ずかしく思うのだが、しかしどうしようもないのだ」。アルバーノはこの病んだ男の幾多の思いがけない心情の発作によって、ごく温かく愛するほどまでに動揺した。一つの神殿の廃墟が憂愁の念を起すほど感銘させるものであれば、一人の偉大な魂の廃墟が更にそれ以上の感銘を与えないことがあるか、と彼は考えた。地球そのもののように巨大な聖遺物で一杯の人間がいる。彼らの深い、すでに冷たくなった心の中には、より美しい時代の化石化した花模様がある。彼らは北方の石に似ていて、そこにはインドの花々の化石が残っているのである。

—

病は掘り進んで行った。ガスパールは自分自身には頓着していなかった。自分の最期ではなく、ただ自分の仕事を気にかけていた。義父のラウリアと彼は秘密の交渉をして、自分の生涯に黒い法廷の封蠟を封印のために押した。早飛脚が準備され、彼の死後すぐに、一通の手紙がリンダの許に届くよう手配されなければならなかった。彼の息子は、一通自ら開封して、一通の封印された手紙を侯爵夫人に手渡す手筈であった。とても厳しく命令的に彼は息子に振る舞って、彼の死後はすぐにペスティッツへ旅立つよう彼の前で誓いを求めた。というのはナポリを見たがっていて、こうした父の死を前提とした条件は辛いものに思えたアルバーノが誓いをためらったからで、そこでガスパールは言った。「他人の痛みをはなはだ嘆き、実直に共感することはまことに人間的に普通のことだ。しかし最低限のことがなされなければならないときには、ためらわず痛みを痛感することだ」。アルバーノは約束して誓った。そして子供の愛から泣くときは、もはやそれを父には見せなかった。

思いがけず、ガスパールのこの病の床に最も近い、最も早い縁者、彼の弟が現れた。この奇妙な人物が到着して、瀕死の者に語りかけ、二つの凝固したガラス製の目を、あたかも嵌め込まれたものであるかのように、話している相手から離して回しているとき、アルバーノは立ち会わせていた。 — 瀕死の兄に対してとても空想的で、冷然としていて、

— 顕著な顔の骨格に張り付いた顔の者、 — 二本足の灰色の人狼、まずは獸的な者から人間的な者になり立ての者であって、 — 死の天使に似て、殺戮の人間ながら、情熱はない。この人物がアルバーノに長い手を差し出したが、アルバーノは名付け難いものに反撥を覚えて、その手を握ることができなかった。この弟は、自分はペスティッツから来たと言って、 — そこからの二通の手紙を渡した。一通はガスパール宛のもので、一通は侯爵夫人宛のものであった。 — そして、自分の旅について若干語り始めた。それはとても鋭い知見の、空想的な、学のある、信じられないもので、しばしばまことに理解不能のものに思えた。一度アルバーノは言った。「それはとても有り得ません」。彼は更

に語りを初めて、更に信じ難いものにして、実際そうなのだと誓った。その後彼は立ち去った。彼の言うにはギリシアへで、瀕死の兄からとても冷淡な別れをした。

ガスパールは今やアルバーノに向かって言った。「自分の死後はこの変わり者を、彼が近寄って来たら、よくよく思量するか、あるいはむしろ避ける方が良い。彼は決して本当のことを言わないのだから、単に利己心もなく本当の嘘を本当に喜んで言っているに過ぎない。更に」（と彼は続けた）「ブヴェロの深く致命的なサソリの針を避けることだ。彼のいかさまの賭けを避けるように」と。アルバーノはこの語りかけの見解を不思議に思った（倫理的鋭さについて喜ばしく思った）、これまで父親の中ではブヴェロに対する全く別の志操に行き着くと思っていたからである。

翌日父親はすでにまた墓所から出て来て、階段に立っていた。早飛脚は廃され、
— すべての手紙は返却させられた。 — ラウリア侯爵は上機嫌であった。 — 「ただ他人の病気のお蔭で、私の病気は癒えた」と父親は言った。弟がペスティッツから持参した手紙の内容は、彼の昔からの友人、当地の侯爵は最期の時が速やかに迫っている、彼の水腫症を人々は単に肥満と解して、等閑にしてきたからであるというものであった。 — 「私は」（とガスパールは言った）「効験あらたかに震撼させられたせいで、友情の最期の時に間に合うほど十分に早く旅ができることを期待している」。彼は付け加えた、この旅でまたアルバーノはナポリへの旅をして良いことになる、と。

そのとき侯爵夫人が、彼女の夫の危篤と彼女の旅立ちを告げる手紙に狼狽してやって来た。 — ガスパールは息子に、二人っきりにさせるよう合図して対応した。彼らは長いこと二人っきりであった。ようやく侯爵夫人がまた表情を変えてやって来て、ほとんどどもりながら、彼に今日、正歌劇へお供してくれるよう頼んだ。彼女は動揺し、当惑していた。彼女の目は微光を発していて、面影は熱狂していた。父親も興奮しているように、しかしまた元気になっているように彼には見えた。

ここでこれまでの迷路の森全体を通じて、長い正午の光が射し込んで来た、つまり彼の父の証明された愛の推測である。この愛は今や侯爵夫人の結婚生活の縛りという解消の間近さと病症の軟化によって一層強力に勃発したものと思われる。それ故に侯爵夫人宛のガスパールの手紙があり、それ故にローマでの彼女と一緒に滞在があり、帰路等がある、と。

アルバーノは彼の強力な父親を、優しい志操のこうした発見の後ほどにもっと愛したことはなかった。今や侯爵夫人に対しては彼の心は友人から突然一人の息子に変わった。いずれにせよ人間的遺産の愛の五度当たりの籤では、彼はただ父親だけを当てていて（母親も、兄も妹も子供もいなかったの）、彼は新たに母親を当てて有頂天になっていた。敬意が行い、温かさが話し、希望が推察を許すもの、それに彼は同意した。

それは或る晩で、ローマではすでにまた春が冬の雲を通じて花を投げかけていた。劇場ではモーツァルトの『ティート帝の慈愛』がなされていた。自分の後を付いて来た祖国の歌は、異郷の地では何と人間を拉致することか。ローマの廢墟の上でまさにドイツの野原の上のように歌っている雲雀は、我々にその馴染みの歌で祖国からオリーブの枝を持って来る鳩である。 — これまでアルバーノは廢墟を越えてのアルプスの道の途次、目をただ厳格に将来の戦争の行路へ向けていて、神々しいリアーネのいる天に向けることは稀で、強引にすべての涙を雲散霧消させていた。しかし今や病気の父が彼女の骸が眠っている冥界のベッドのカーテンを引き上げた。さて突然音色の明るい奔流が、つまり彼の若々

しい国々を通過して、彼の樂園へ流れ込んでいた。奔流が、山々を越えて、昔ながらの波と共にざわめいて、彼の間近へ迫って来た。最初彼の精神は微睡眠の中で語りかける昔からの眠り込んだ時代に抵抗した。しかしとうとうリアーネ自身がかつて彼の前で演奏し歌った音色が、山脈の棺を越えて来て、黄金の日々の輝かしい絨毯として垂れかかってくる時、彼はこう考えた。何という時間を自分とリアーネはここで見いだしていたことだろうか、しかし見いだせなかった、と。すると黒い心痛が邪悪な掠奪する守護霊のように音階を駆け上がって、アルバーノは自分の驚くべき喪失が明るく天に懸かっているのを見た。そこで彼は目を侯爵夫人に向けずに、しかし音色の清らかさの中でその手を握った。かつて神々しい女性リアーネがこの手を握ってこの場に居合わず筈なのであった。遅れて彼は言った。「私は豊かなナポリにいても、私の唯一の女友達を憧れ、そしてその女友達の同伴を許される幸運な男性のことをうらやむことにしましょう」と。彼の別れのこの新しい知らせを聞いて、彼女は大いに動揺したが、彼の情熱的变化に更にそれ以上に動揺した。この変化は彼女が、自分の極めて心優しい希望に対する最も豊かな持参金と共に、自分の旅立ちと、それどころか自分の夫の差し迫った旅立ちとから引き出せるものであった。しかし彼女はより大きな動揺を、より小さな動揺の背後に隠した。両人はそれぞれ異なる喜びと錯誤を抱いて別れた。アルバーノは癒えて行く父親のせいでますます浄福になった。侯爵夫人はより温かくなっていく息子のせいでそうだった。彼らの生活は戦闘船から降りて、飛ぶように進む講和船に移った。それで両人はますますカーテンの許に近寄って来た。そこに描かれた絵を彼らは舞台と思っていたのであるが、それだけに開いたときに、一層驚くことになった。

第七百章

騎士の中では人生の干涸らびたベッドはまた彼の心の震撼によって豊かに溢れてきた。

一 まさに彼は健康な日々、山々に似て氷と苔で合成されていたので、病気の日々には、真の内的動揺がより容易に昔からの力と休息をまた取り戻すように見えた。彼は旅の準備をした。旅が最も良く、彼のわがままな肉体を構築し、建て増した。侯爵夫人は彼女の旅を日々延期した。アルバーノが彼女に、自分の全生涯の最も素晴らしい最後の言葉を、その途中で与えてくれることを固く炎のように期待していた。アルバーノの中では花咲く国イタリアで、一 スペイン[領]への憧れが目覚めていた、そしてナポリはその憧れを静めてくれると希望していた。春はすでにローマでは萌え出ている、ナポリでは花開いていた。一 夜には小夜啼鳥と人間が歌い尽くしていた。一 アーモンドの木々は至る所で花咲いていた。しかし三人は旅をお互いに待っているように見えた。侯爵夫人はその心から離れ急ぐことができたろうか、その心の上で折り取られた迷迭香の枝ローズマリーに似て、自らの実在が花開き根を下ろして、その枝の根は同時に芽生えつつある小麦の種子と共に大地に張り付いていたのである。一 アルバーノもその時を早めたくなかった。その時は同時に彼を父と女友達から遠くの大地の片隅に追いやるのであった。先の二人は名残の冬へ、彼は先駆けの春と後追いの春へ行くのであった。一 まさに今が最も可能性がない。彼の精神は戦争への決意で満ち足りていた。そして自らと和解していた。彼のポルティチ[エルコラノ]は彼の過去の火山灰に覆われたヘルクラネウムの上に建てられていた。

ペスティッツからの一通の手紙が決定した。 — 死に瀕した侯爵が侯爵夫人に手紙を寄越して、再会を願っていた。 — 手紙は、共同の土壌を、誰がその上に立っていようと爆破する炎となった。 — 三人の同盟者は、ある日に、ある朝旅立つ決意をした、ある朝焼けがその黄金を同時に三台の旅の馬車に投げかけるであろうことになった。

侯爵夫人は旅立ちの前夜、更に何事かを要求した。翌朝、聖ピエトロ大寺院へのアルバーノの同伴を求めたのである。彼女は朝焼けと朝の光輝に覆われているとき、ローマを今一度、決定する心の中に抱きたかったのである。アルバーノも喜んで、全生涯にとって永遠のワインとなって照らし出す炎の時の果汁を飲みたかったのである。活発な侯爵夫人が、 — イタリアで更により活発になって、 — 彼からの最も美しい言葉を長いこと待っていた後、とうとう怒って、彼がそれを発する筈の別れの時に乗り込んで来ていることを彼は察知していなかったのである。

ローマではまだ何人かが起きるよりも眠り込んでいる日の出前の早朝、彼は彼女を迎えに来た。ただ彼女の忠実なハルターマンだけが彼女の連れであった。目覚め続けていた夜のために、彼女はなお輝いていて、とても動揺しているように見えた。ローマはまだ眠っていた。時折、まさに自分達の夜を閉ざそうとしている馬車や家族に彼らは出会った。天は涼やかに青く、薄明の朝の上に、美しい夜の新鮮な息子の上にあった。

柱の上の聖人達のように聖ピエトロ大寺院の前の広大な広場は人気がなく黙した状態にあった。噴水が語りかけていた。まだ一つの星座がオベリスクの上で消えただけであった。

— 彼らは百五十段ある回り階段を登って教会の屋根に来て、家屋や柱、小さなドームやドアからなる露地を通り、四つのドアを抜けて、途方もないドームの中へ行った。 — 一つのドーム状の夜であった。 — 神殿は深みの下に、静かに家々や木々からなる広大な暗く人気のない谷のように休らっていて、神聖な深淵であった。そして彼らはドームの天のモザイク状の巨人の前を、多彩な幅広い雲の前を通り過ぎて行った。彼らが高い穹窿の中を登って行くと、ますます赤く窓辺のアウローラの黄金の泡が輝き、炎と夜とが穹窿の中で交互に漂った。

彼らはより高く急いだ。そして外を見ると、そのとき一つの生命の光線が一つの目からのように山の背後で世間の中へ閃いた。古いアルバノ丘陵の周囲には百もの輝く雲があって、その冷たい火口はまた炎の一日を生み出すかのようで、鷲が黄金色の、太陽の中へ浮かぶ翼と共にゆっくりと雲の上を飛んで行った。 — 突然太陽神が美しい山脈の上に立っていた。太陽神は天の中で起き上がって、夜の網を覆われていた地球から剥ぎ取った。するとオベリスクやコロッセウムやローマが丘から丘へと燃え上がって、孤独なカンパーニャ平原では多重にうねりくねった世界の黄金の巨大な蛇が、つまりテヴェル川が煌めいた。 — すべての雲が天の深みへと散って行き、黄金の光がトゥスクルム[別荘地]やティヴォリや葡萄畑の丘から多彩な平原へと、散在する別荘や小屋へと、レモンの森や檜の森の中へと走って行った。 — 西側の奥深くでは、熱い神がその地を訪れたとき、再び海が夕方の如くなって、光輝に満ち、絶えずこの神によって燃やされ、永遠の露となった。

朝の世界には下の方に、大いなる静かなローマが横たわっていた。生き生きした町ではなくて、十二の丘に置かれた古代の隠された英雄の霊達の人気ない不気味な魔法の庭園であった。 — 精霊達の人間のいない行楽地が、宮殿の間の緑の沃野や糸杉を通じて、幅の広い開放された階段や柱や橋を通じて、廃墟や高い噴水や福寿草の庭園や、緑の山々や

神々の神殿を通じて、訪問を知らせた。幅の広い通路は死滅していた。窓には格子があった。屋根では石像の死者達が見つめていた。 — ただ輝かしい噴水だけが活発であった。そして一羽の小夜啼鳥が、最後に死ぬかのように、溜め息を付いた。 —

「偉大なことです」（と最後にアルバーノは言った）「下のすべてが孤独で、誰も現在を見ていないということは。昔の英雄の霊達がこの空虚さの中で生き返って、昔のアーチや神殿を歩いて行き、上の柱で木蔭と戯れることができますよ」。

「この壮麗さに」（と侯爵夫人は答えた）「欠けているのは、このドームだけで、これはカピトリヌスの丘では見られましょう。でも私はこの地を忘れたくありません」。

「その他のすべては何でもありません」（と彼は言った）「いずれにせよ人生の平板な一帯は特徴もなく通り過ぎて行きます。幾多の長い過去から木霊は一つも返って来ません。広大な平野を遮る山がないからです。 — でもローマと貴女の傍らでのこの時は永遠に私どもの中で生き続けます」。

「アルバーノ」（と彼女は言った）「何故こんなに遅くなってから互いに出会わなければならなくて、かくも早く別れなければならぬのでしょうか。向こうにテヴェル川の傍らの貴方の道があります。海に呑み込まれないでくださいね」。

「向こうに明るい山を越えての貴女の道があります」と彼は言った。彼女は彼の手を取った。というのは彼の調子はとても感動していて、感動させるものであったからである。神々しく世界は濃い春の花々から明るいカピトリヌスの丘まで輝いていて、時禱の鐘が響いてきた。 — 一日の喜びの炎がすべての丘で燃え上がった。 — 人生はこの光景同様に広く高くなった。 — 彼の目は涙の許にあった。しかし鬱々した涙の下にではなく、水の下の世界の目のように陽を受けて輝き、乾いた世界が食い尽くす一層高い色彩を有する涙の下にあった。 — 彼は彼女の手を握りしめ、彼女は彼の手を握りしめた。 —

「侯爵夫人、友の方」（と彼は言った）「私はとても貴女のことを尊敬しています。 — この聖なる時間の後、私どもは別れます。 — 私はこの時に不滅の印を与え、私の父にある大胆な言葉を述べるつもりです。私と私の敬意を表し、多分幾多の謎を解くことになる言葉です」。

彼女は目を伏せて、ただ言った。「敢えてしてよろしいのですか」。「禁じないでください」（と彼は言った）「幾多の神々の幸せが臆した時間で失せてしまいます。尋常ならざる状況のときの他に、いつ人間は尋常ならざる行為をすべきでしょうか」。彼女は黙った。彼の愛の朝の声を期待していた。そして両人は高い地から手を握り続けて下へ降りて行った。アルバーノの本性は震える炎となった。侯爵夫人は何故彼がなおもこの春の調子を延ばすのか理解できなかった。彼は彼女のことを同様に察していなかった。女達と彼女達の半分に分割された言葉を読み取ることに慣れていなかった。これは絵の詩であって、半分は形姿で、ただ半分だけが言葉なのである。 — さながらあたかも一羽の鷺が朝の輝きから舞い降りて来て、掠奪の守護霊として翼をその朝の輝きの目の上に広げたかのように、彼は輝く朝で目が眩んでいて、彼は今、この別れの時、大胆なことをして、自分の父親と侯爵夫人の間に、一言述べて、仲人となる気でいた。この言葉は両人の間の愛の隔壁を取り除くであろうものである。彼の優しさは多くこのことに反対していた。しかしある重要な目標のためには、臆した配慮ほど彼の嫌うものはなかった。そして大胆さを男性にとっては勝利同様に大いに価値あるものと見なしていた。

侯爵夫人は、誤解しながらも、しかし不信感は抱かずに、彼に従って父親の家に行った。彼女は — 彼の期待よりも大胆に、 — ある期待を抱いていた。 — 彼はひょっとしたら騎士の前で、自分に対する愛を告白するのではないかと。彼らは父親が一人っきりでとても真面目な様でいるのを見た。アルバーノは彼の首もとにすがって、父親が肉体的愛の表現を嫌っているのを知っていたけれども、半ば窒息した願望の言葉を述べた。「父上、 — 母親です」。 — この子供らしい関係に彼のこれまでの関係は高まって清められていた。「何ということですか、伯爵」と侯爵夫人は叫んだ、アルバーノに狼狽し、怒っていた。 — 怒り心頭の騎士は、驚いてピストルを取って言った。「不幸な、 — 」。しかし三人の誰に彼はそのピストルを発射しようとしているのか分からないうちに、彼は強硬症に襲われて、とぐろを巻く蛇のように、殺害的状况に追い込まれた。「伯爵、正気ですか」と侯爵夫人は彼に対し侮蔑的に言った。化石化した敵に対しては無関心であった。「何ということですか」（とアルバーノは、父親の姿に動揺して言った）「私は多分誰のことも分かっていなかった」。「信じられない方ですね」（と彼女は言った）「ご機嫌よう。二度と貴方とはお会いしたくありません」。 — それから彼女は去った。

アルバーノは、自分自身がピストルの的ではなかったのかどうか構わずに、病人の父の許に留まった。父はまさに、化粧に取りかかっていた或る高貴な男性の死体の前で、強硬症に陥ったのであった。次第に生命はまた冬から立ち上がって来て、騎士は、強硬症の者はそうせざるを得ないように、「不幸な」という言葉で始まった語りかけを続けた。「女だ、誰の母親のことだ」。 — 彼は正気となって、目覚めて見回した。しかし素早く怒りの溶岩が再び彼の雪の中から流れ出て来た。「不幸な男だ、誰の話だ」。アルバーノは、真っ直ぐに純な魂のまま、多分侯爵が亡くなった場合、兩人に和解の希望が、母親を得るという幸福な希望が生じたのであると父に打ち明けた。

「いつも若い者達は、純粋な愛というものは、外に発して、誰かに向けずには、得られないと思い込んでいる」とガスパールは答えて、はなはだ高笑いを始め、「感傷的な誤解」をととても滑稽なものと思い始めた。しかしアルバーノはとても真面目に彼の誤解の根源について尋ねた。ガスパールはこう説明した。最近彼の病気のとき、侯爵の間近な逝去の最初の知らせの際に、侯爵夫人との厳しい戦いに陥った。侯爵夫人は侯爵の死の場合、支配権を、 — あるいは後見役を — 求めていた。すでに侯爵冠後継人の可能性故である。騎士は彼女に直接伝えた。この可能性はない、自分は新たな、彼女には知られていない証明で彼女に対し即座に攻撃することにする、と。彼は侯爵夫人に、その反対の明白な証拠（世継ぎの皇子）が自分に対置されても、その場合にさえ用意はあると理解させた。侯爵夫人は立腹して答えた。自分には彼が何故ハールハールの系統や世継ぎに対して、ホーエンフリースの系統に対してほど何の心配もせず、気にかけないのか、さっぱり分からない、と。彼女はほとんど泣きそうになった。というのは彼は容赦なく残酷な言葉を逆鉤の如く彼女の心に深く投げ込むことができたからである。彼は政治家たる断固たる決意を有していた。政治家は大きな猛鳥のように自分が強制できず、引きずり込むことのできない犠牲の獣を深みに追い込み、翼で叩いて、下の方で取り押さえてしまうのである。それは進行して行く氷河のように、進むに連れて、古い死骸を明らかにするような人生である。幸福な男が一人の個人の自分の愛を温めながら、人類全体の上に広げるように、人間嫌いは人類に対する自分の広大な冷淡さの焦点、霜点を一人の偉大な敵にのみ当てるのである。他

方前もってどんな些細な侮辱も個々人には大目に見られ、ただ総体としての人類のせいとされるのである。

従ってこれがかの秘密の談話で、その痕跡をアルバーノは憎しみよりは、より温かい情動として受け取ったのであった。「おまえが」（と今や騎士は率直に、刺すような厚かましきで、彼の感激を罰するために言った）「短く、はっきりしない語りかけで、『母親です』と言ったとき、私はおまえを父親と受け取らざるを得なかった。それで容易に残りは自分で解明できよう」。 — 「父上」（と彼は言った）「どの人に対しても不適切なことでした」、そして三つの熱い傷を受けて、運命の三叉に切り裂かれて別れた。別れの際ガスパールは、一ヵ月後の帰還の約束を守るようにと注意して、更に冗談で付け加えた。「向こうで化粧している或るドイツ騎士団騎士は、かつて速やかに改宗させるという冗談を行った素材の者だ^{*1}」。

一時間のうちにもアルバーノはディーアンと一緒に、照らし出されたローマから出て行った。高台と聖ピエトロ大寺院では、青空が下へと漂うように波打っていた。そして長い影がまだ花々の上では眠っていて、露の真珠で飾られていた。しかし浄福の朝は、苛酷な一日からはるかに去っていた。両人は門の前で人集りに遭った。人々は殺害された美しい者の周りに立っていて、殺人者に対して不快に言う代わりに、喜ばしげにこの姿について繰り返していた。「何テ美シイ人」。 — そしてアルバーノは、人々がよく自分の背後で「何テ美シイ人」とよく言っていたのを思い出した。 —

第二十八ヨベル期

ペスティッツからの手紙 — モーラ — ある僧の昇天 — ナポリ — イスキア
— 新しい神々の賜物

第百八周

我々の部屋の中に小さな明かりがあれば、全天に煌めく閃光の眩惑から我々を守ってくれる。そのように我々の中でもただ一つの照らし続ける理念と傾向が必要で、外界の素早い炎と明かりの転換で我々が麻痺することのないようにしなければならない。アルバーノが遠くに見るべき目標を、一つのオベリスクを彼の人生行路の中で眼前に有していなかったならば、何と長く最近の情景はその混乱した痛みと共に彼を困惑させたことであろうか。

— 今や彼は周りの点火されたオリーブの葉、月桂樹の葉に似ていた。それらの葉の炎は葉そのもののように立派な緑色であった。

ディーアンは、容易に軽快に速やかに痛みの観客から一人の共演者となるが故に他人の痛みを取り去ってくれるのであったが、すべての美しい形姿や、すべての廃墟、すべての小さな喜びへの炎のような関与を通じて、アルバーノと自らとをより快活にした。彼は旅行中陽気であるという素敵な稀な才能を有していて、すべての花を手折ったが、薊は手折らなかった。一方大方の旅人は帽子の下のナイトキャップと共に、駅から駅へと運行中あ

*1 『巨人』第一巻、28頁。[第三周、拙訳14頁]

くびしながら、新しい顔のたびにぶつぶつ言いながら、全極楽をリンボ[煉獄]の如く通過することになる。

水牛だけが栄えて、人間は滅する空虚なポンティーネの沼地では、ディーアンは一切切手紙入れをも探して、致命的に眠り込まずに、このペトロの後継漁師どもの教皇領の最後の魚の水の上を通過しようとした。そのとき新たな新ギリシア語の呪いと共にアルバーノ宛の一通の手紙に突き当たった。それはカリトンからの手紙の中へ混入していたもので、ローマでは旅立ちの忙しさに紛れて、渡すのを忘れていたものであった。しかし彼はやがてそのことを笑い飛ばして、この「悪魔の谷」で眠らないために何かを読むのは結構なことと判断したのであった。

それはラベッテからの次のような手紙であった。

「お兄さん、まだほんの少しでもブルーメンビュールの人達を覚えていらっしゃるかお尋ねしたいものです。だってきっとお達者で、立派なイタリアにいらして、あなたが私ども皆の心の中にいらっしゃるのは、ずっと御存じでしょうけど、どんなに私ども皆がお別れのとき涙を流したか、私も母も流したか、承知して欲しいものですよ。ある方^{*1}だけが今となつては以前とは別様にあなたのことを思っていることでしょう。この冬には一杯色々なことがありました。大臣夫人は御主人とは離別なさって、御自身の荘園に暮らしています。時に侯爵令嬢イドイーネ様のアルカディアにお出でです。私どもの侯爵は水腫症で重篤です。それで父は地方の仕事が若干増えると仰有っています。あなたのショッペは父にあなた宛の一通の手紙を預けて数ヵ月旅に出ていました。ショッペは最近私どもの所のあなたの部屋に滞在していて、ロメイロ伯爵令嬢を熱心に訪ねています。お気の毒だけど、好意からなのです。ヴェーマイヤー学士と当地の私どもは皆、ショッペはもうすぐ狂ってしまうと確信していて、彼もそう思っていて、仰有っています。自分はそれ故すでに家の片付けをしている、と。ロメイロ伯爵令嬢に関しては、侯爵令嬢^{*2}と旅立ちをなさいました。どちらへか誰一人知っていません。侯爵が彼女にあからさまな注意をお向けになったから、むしろスペインへ出発されたと人々は言っています。他の人々はギリシアだと言っています。でもあの方は私に請け合って、彼女はローマの後見人の許に発っていると言っています。このことは私より今やきっとあなたがもっと良く御存じでしょう。あの方は、彼女の心を掴むために、考えられる限りのことをしていました。手紙を通じてや、自らを通じてで、甲斐がなく、宮廷で話しかけても、好意ある視線の一つも貰えなかったのです。こうしたことすべてを（信じて貰えるでしょうか）本人の口から聞いたのです。この人はまたよく私の許に来て、心の丈を打ち明けられます。しかし私の心は固く閉ざされたままで、一滴の血もそこからは流れ出て来ません。その心はどんな具合で、どんなに泣いているか、神のみが御覧になっています。アルバーノ、健康な哀れな娘は、死んでしまう前には多くのことを耐えなければなりません。しばしば私の目はもはや乾いたままではおれなくなります。あの方の話のせいだと私はそのとき言います。一部は本当でもあります。でもあなたにはカードの裏面を見せます。決して、二度と私はあの方のものとはなりません。

*1 ロケロル

*2 ユリエンネ

私に対して実直に振る舞ったことはなく、全くならず者同然です。あの人もそれは承知しています。私は接吻も許しません。私は言っています、あの人を引き付けるためのコケツトな作法とそれを後生だから誤解しないで欲しい、と。善良な両親は私どもの交際をどうしたらいいか分からなくなっています。私は父がキレルのを恐れています。そうなったら辛い日々になります。私も哀れな病気の青ざめた心情の者を私から突き放し、燃える魂を煙りのように天へ蒸発させ、消耗させるべきでしょうか。ある宴会の時、彼女があの方のせいで侮辱を感じて戻られて、これは最近起きたのですが、私の許で荒れ狂いながらこう言うとき、「いいよ、いいよ、リンダ、いつか御身も私のことで目を濡らす目に遭わせてやろう」と言うとき、心が破裂しない者がいんでしょうか。この人が何か良くないことを考えていることは私にも分かります。私はそれを案じて、いたわっています。二人の兄妹が花盛りのとき没落すべきでしょうか。毎日、彼女は戻って来るという希望がなければ、夙にこの人は追って旅立っていたことでしょう。私は私の愛する心を私の胸から取り出して、彼女の胸に、別な心の代わりに、挿入できたらと思います。彼女が私の愛すべてと共にこの人のことを愛してくれるようにするためです。アルバーノ喜んでそうしたいのです。でも紙面がこの面では終わりです。お母さんが裏面に挨拶を書きたいとのこと。ご機嫌よう。心から

あなたの忠実な妹、ラベッテ。

私の最も大切な息子、お元気ですか。幸せですか。まだ敬虔な心で、健康ですか。まだ忠実な養父母のことを覚えていますか。このことを父親の名前でお尋ねし、お祈り致します。また自分の名前でもそうします。

忠実な母、アルビーネ v. W.

追伸。老教師のヴェーマイヤーも遠方の地の寵児によろしくとのこと。私どもは皆、帰還を楽しみにしています。

A.

追伸。お兄さん、私は更に追伸を書きます。ショッペはかの女性の人を描きました。それから一騒動です。でも委細は口頭で言います。侯爵令嬢イドイーネ様がこの冬はよく私どもの所に来られました。

R.]

手紙というのは、手紙が発生した場所に従って、手紙が渡される場所に従うよりも規定されるので、しばしば種として記されたものが、すでに芽生えつつあったり、長い道のりの後、根付いていたりすることが多く、逆にまた花が乾いた種子となっていたりする。どの紙面も二つの懸け離れた時間の二重の生誕であり、つまり記している時と読んでいる時の二重の生誕である。かくて今やアルバーノはこのより明るい天の下、より偉大な先史の土壌の上で、新しい発条に満ちた精神と共にあって、北方の冬の霧が移ろっているラベッテの手紙に影響され暗くされることは少なかった。実直なラベッテや穏やかなアルビーネは、ただ優しく見知らぬ山々や大気を越えて追い付き、彼の熱い額に涼しげな手を添えた。彼の昔からのショッペは昔からの品位で、彼の前に立っていた。そしてリアーネが再び高い青空の中を漂った。すさんだロケロールに彼は同情すら感じず、厳しく軽視した。リンダの剛直なセンスは、彼のセンスに適っていて、ローマの女性達の誇り高い視線や歩みのよ

うであった。今や彼はいつもより多くのことについてより快活に考え、いつかかのヒロインの魔法的な顔を覗き見たいとさえ願った。

フォンディではナポリ風な世界庭園が始まっていて、彼らはモーラ[今日の Formia]への途次、ますます密な[木の]花々や[草の]花々の中へ進んで行った。覚え書きの形式で、

一 ひょっとしたら父親宛に、もっと蓋然性が高いが、シヨッペ宛に書いたものが、
一 彼の幸福と魂とを表現している。それらは素早く飛び過ぎたエデンの若干の落ちたオレンジの花々を保存していた。ここにあるのがそれである。

「日没の直前に我々は昇天日にモーラに着いた。この地に馴染みのディーアンは長いこと目にしていなかった緑色の素晴らしい世界に私同様感銘を受けていた。私はいまだにナポリはもっと美しく花咲き、香っているという彼の言葉が信じられない。私は町へは全く行かなかった。太陽がすでに海にかかっていたからである。私の周りではレモンの森やジャスミンや水仙の沃野の花の香りが湧き出て来た。一 私の左手では青いアペニン山脈がその源泉を山から山へと投げている、右手では強力な海が強力な大地に迫っていた。そして大地は固い腕を伸ばして、輝かしい町^{*1}を支えていた。庭園を抱え込みながら、遠く波の群れの中へ入っていた。一 そして底知れない海の中へは高い島々が底知れない山々として^{*2}投げ込まれていた。一 深く南と東の方へは微光を放つ霧の国が介入していた、ソレントの岸辺で、海の周りの曲げられたジュピターの腕のようであった。そして遠くのナポリの背後には、ヴェスヴィオ火山が天に雲を抱いて月の下、立っていた。『跪き給え、至福の若者よ』(とディーアンが言った)『得難い広大さの前で』。神よ、何故真面目にそうしてならないことがある。誰が夕べの輝きの中、途方もない波の世界を眺めながら、つまりいかに向こうでは雨が遠方で静まり、ただ輝き、そして最後に青く黄金色に天と共に漂い、いかにこちらでは大地が優しく漂う炎をその長い国々と共に薔薇色の固い大地の影の中へ閉じ込めることか眺めながら、そして無限の生命の炎の雨を、すべての諸力の水中、天、地上での織って行く魔法圏を眺めながら、誰が無限の自然の精神の前で跪くことなしに、そしてこう言うことなしに在ることができようか、何と御身はかくも身近に在ることか、名付け難い方よ、と。ここではかの方は、間近に、また遠くに御座し、浄福と希望とが霧の岸辺から微光を発する。そしてまた山脈が海の中へ注ぎ込む間近の源泉からも、私の頭上の白い花々の中でも、微光を発する。この太陽は、燃えるような波に取り巻かれて、叫んでいないだろうか。そしてあちらの向こうの青空と火照る人間の国々、世界の中の諸世界、この遠方は心と、すべてのその誇り高い願望を吐き出すように叫んでいないだろうか。心はそれを創り出そうとし、遠方に手を延ばし、心の生命の花を天の至高の枝からもぎ取ろうと欲していないだろうか。しかしその心はその土壌で見回すと、そこでもまた花咲く一帯でのヴィーナスの帯が投げられていて、明るく緑色に高いミルテの木がその小さな薄暗いミルテの傍らにあって、オレンジが高く冷たい草の中で微光を放ち、上の方ではその花々の香りがし、小麦は広い葉と共にアーモンドと水仙の光沢の間を吹き

*1 ガエータ

*2 エポメオ山を有するイスキア島。ヴェスヴィオ火山[これほど高くはない]、カプリ等同様の高さ。

抜けていて、更には糸杉と棕櫚が誇り高くある。すべては花であり果実であり、春であり秋である。あちらに行こうか、こちらに行こうか、心はその幸福の中で尋ねる。

かくて私にとって太陽は波の下に沈んだ。 — 赤い岸边はその霧の下に逃れた。 —

世界は陸から陸へと、島から島へと消えて行った。 — 高台の最後の黄金の粉末が散った。 — 修道院の祈りの鐘は心を星々の彼方へ引き上げた。 —

私の心は何と楽しげで憧れていたことか。同時に一つの願いであり、一つの炎であった。私の内奥では感謝の祈りが、私がこの地上に存在したこと、存在していることに対して語り続けた。

私は決してこのことを忘れない。我々が人生を我々の願いに対して余りに小さいとして投げ棄てる時、我々の願いは人生に属していて、人生から生じていたのではないか。冠を戴く大地がこのような花々の岸边を、このような太陽の山脈を我々の周りに引き寄せるとき、大地はそのようにして不幸な者達を閉じ込めようとしているのであろうか。何故我々の心は我々の目よりも狭く、何故我々を一マイルの長さもない雲が押し潰すのか。雲自身が果てしのない星々の下にあるというのに。どの朝も春の始まりではないか。どの希望もそうではないか。最も濃い人生の柵といえども、ワインの成熟のために作られた葡萄棚以外のものであろうか。 — 人生はいつも弦[四分の一]に砕けるので、人生が最後の下弦となろうか。一杯に光を放つ満月が後に付いてくる最初の上弦とはならないだろうか。

— 神よ、と私は言った、翌朝輝く世界となる緑色の世界を通して戻って行ったとき、私に何らかの時の御身の永遠を許すときには、最も浄福な時の永遠の他には許すことなかれ、と。歓喜は永遠である。しかし痛みは永遠ではない、御身が痛みを創ったのではないから。

『友よ』とディーアンが途中で私に言った。私が内奥の動揺を上手く隠すことができなかつたからである、『イスキア島へ渡るときなどに、ナポリを振り返って見たら、どんな気分にならなんでしょうか。 — 貴方は北国生まれということが歴然としていますから』。 — 『それはだ』と私は言った、『どの人も自分の北方とか南方とか同様に持って生まれてくるものだ。その上外見上一方の者であるとかは — 大したことではない』。

*

モーラについての覚え書きは以上の通り。しかしある奇妙な出来事でこの覚え書きの最後の保証についてこの夜のうちに言葉通りのものへと仕向けられたように見えた。旅館の中庭には多くの船乗りや他の人々が集まっていて、皆一つの意見について激しく議論していた。大方が絶えず言っていた。「今日は昇天日だ。彼も奇蹟を行ってきた」。 —

「昇天日だと」とアルバーノは考えて、しばしばこの祭日と重なることが多い自分の誕生日を思い出した。ディーアンは登って来て、笑いながら説明した。下の人々はある僧侶の昇天、今晚のことと約束された昇天を待っているのだ。多くの者がこの僧侶のことをすでに一つの奇蹟を行ったが故に、つまり一人の死者をモーラ中の前で二時間話すようにさせたが故に、信じているのだ、と。群れは膨れ上がった。 — 人々を昇天の場へと導く筈の約束の人間は来なかった。 — 皆が信じないというよりは怒っていた。 — とうとう夜遅く仮面の者がやって来て、手の仕草で付いてくるように合図した。皆が付いて流れて行った。アルバーノも彼の友もそうした。純な月が新鮮に青い大気の中から新鮮に輝いていた。 — 帯の広大な庭園はその花々の中で眠っていた。しかしすべてが、微睡んでいる

花々も、目覚めている花々も香りを放っていた。

仮面の者は人々をキケロの家、あるいは塔の廢墟へ導いて、上方を示した。壁の上では一人の震える人間が立っていた。アルバーノはその顔がますます馴染みの者に思えてきた。とうとうその人間が語った。「私は死の神父だ、―― 生命の神父は私に恵み深くあらんことを。―― 私がどうなるか、私は知らない。―― おまえ達の中には（と彼は突然、外国の言葉、つまりスペイン語で付け加えた）「イーゾラ・ベッラ[島]で聖金曜日に出会って、一人の妹の死を告げた者がいる。その者はイスキア島へ旅するといひ、そこで妹に出会うだろう」。

動揺し、憤激してアルバーノはこれらの言葉を聞かなければならなかった。かの島での死の神父の形姿を彼は今やはっきりと廢墟の上で見た。聖金曜日に彼の前に現れるというこの死の神父の約束がまた彼の心に浮かんだ。彼は今や廢墟によじ登って、この僧侶を捕まえようとした。一人のモーラ人が叫んだ。異国語を聞いたからである。「この僧侶は悪魔と話している」。―― 昇天者はこれに反論する言葉を何も発しなかった。―― 彼はより激しく震えていた。しかし人々はその言葉を発した者を探して叫んだ。仮面を付けた者がそれだろう、どこにも見当たらないから、と。最後にその僧侶は震えながら頼んだ。静かにして欲しい、自分が消えても、自分のために祈って、自分の体を探さないで欲しい、と。アルバーノは今や、ディーアンには見えないうちに、僧侶の背中の間近にいた。そのとき薄暗い青空の中、高く鶉の群れが飛んで来た。僧侶は速やかに、よろめきながら、立ち上がって、―― 鳥を追い散らした。―― 薄暗くなった遠くの方で「祈り給え」と叫んだ、―― そして広大な大気の中に消えた。

民衆は叫び、歓呼の声を上げて、一部の者は祈った。多くの者が今や悪魔が戯れていると信じた。観客の中に一人の人間がいて、顔を大地に伏せていて、絶えず叫んでいた。「神よ私にお恵みを」と。しかし誰も彼に説明を求めなかった。ディーアンは秘かに少しばかり超常的なものを信じていて、言った。今自分の分別が静止している、と。しかしアルバーノは説明した。自分の人生のカーテンには一つの霊の陰謀がすでに長いこと閃き、懸かっている。しかしいつかきつとこのカーテンを幸い引き開けることになるろう。自分は早速ナポリからイスキア島へ渡ることを固く決意している、と。「まことに」（と彼は付け加えた）「不思議な空想とすべての偉大さのこの母国では、容易に運命の素敵な恵む奇蹟を信ずるものです、北方では幽霊の恐ろしい掠奪するような奇蹟を信ずるようなものです」。

ディーアンはイスキア島への最も早い訪問にも賛成であった。「そうでないと」（と彼は付け加えた）「アルバーノが手紙を預けたり、迎賓館に入ったり、あるいはポジリッポやヴェスヴィオに登ったりしたら、手に負えなくなるでしょうから」。

その翌日彼らはモーラから発った。―― 美しい海が途中見え隠れした。そして黄金の天だけは覆われることがなかった。ナポリの喜びの杯はすでに遠くからその香りと精神とで酔わせていた。アルバーノは酩酊した視線をカンパニアのフェリーチェやカプアの円形闘技場に、庭園で一杯の広大な庭園に、それどころか粗いアッピア街道に投げかけた。街道の古風な名前はより穏やかな気持ちにさせた。

しかし彼はイスキア島へ、海のこのアルカディアへ、一人の妹を見つけることになる不思議な地へ憧れていた。彼らは、アヴェルサには、―― 目覚めや輝かしい生命が一つの宵闇であるならば、殊にイタリアの土曜日の夜ならば、―― 宵闇より早くには到着でき

なかった。アルバーノは、夜の間もナポリへの旅を続けると主張した。ディーアンはまだその気はなかった。たまたま美しい、十四歳くらいの少女が郵便駅にいて、郵便馬車に乗り損ねて、悲しんでいて、今夜のうちにもナポリへ行き、聖なる日曜日まだ十分早くに、両親のいるイスキアへ渡る決意であった。「サンタ・アーガタから」（と彼女は言った）「私は来たの。でもただアーガタと言う名前、サンタではないわ」。 — 「大方この娘の昔からの洒落だろう」とディーアンは言ったが、今や — すべて美しい形には惚れ込みやすく、 — 自ら夜の旅行をする気になった。喜ばしく明るく他人の目の輝きを見ている黒い目の少女を連れて行けるようにするためであった。彼女はそれを陽気に受け入れ、自然科学者のように大いに打ち解けて、エポメオやヴェスヴィオについておしゃべりし、何事であれ、自分の年齢よりもはるかに分別ある思慮を示した。とうとう彼らは皆、明るい星空の下、美しい夜の中に飛び込んで行った。

第百九周

アルバーノは彼の旅の記述を次のように続けている。

「比類のない明るい夜だ。星々だけがすでに大地を照らしていて、銀河は銀色に輝いていた。ただ一本の、葡萄の花々で織り込まれた並木道が華美な町に通じていた。至る所で人々の声がした。あるときは間近な語り声が、あるときは遠くの歌声が聞こえた。月で明るい丘の上の黒いカスターニエン[栗の木]の森からは小夜啼鳥が互いに呼び交わしていた。我々が同行させることにした哀れな眠る少女は、その音色を夢の中にまで聞いていて、真似て歌い、それで目覚めると、混乱して、可愛く微笑しながら見回した。少女はまだ胸の中には音色と夢の全体を有していた。歌いながらある御者は、二輪の薄く軽快な馬車の上で轆に立ちながら陽気に過ぎ去って行った。 — 女達は涼しいうちにすでに花で一杯の大きな籠を町へ運んでいた。 — 遠方では我々の傍らで花の萼からなる楽園全体が香っていて、心と胸は同時に甘い大気の媚薬を吸い込んでいた。月は太陽のように明るく高い天に昇っていて、地平線は星々で黄金色に輝いていて。 — 雲のない空一面には東側だけがヴェスヴィオの陰気な噴煙の柱が立っていた。 —

夜更けの二時過ぎに我々は長い華美の町の中へ入り、町を通過して進んで行った。そこではまだ活気ある一日が花咲いていた。陽気な人々が町を満たして、 — バルコニーでは歌声が交わされ、 — 屋根の上ではランプの間に花々や木々が花咲いていて、時禱の小さな鐘は一日を増やし、月は温めるように見えた。ほんの時折一人の人間が柱廊の間でさながら昼寝のときのように眠っていた。 — ディーアンは、すべての状況を把握していて、南側、海側のある家の所で止めさせて、町の深くまで行き、昔からの知人達を通じて島への出発を訂正させて、丁度日の出のときに海からこちら側に立派な町をその湾やその長い岸边と共に最も豊かに把握できるようにした。かのイスキア島の娘は青いヴェールを被って、蚊に備え、黒い砂の岸边で眠った。

私は一人であちこち歩いた。私にとって夜もなかったし、家もなかった。海は眠っていて、大地は目覚めて輝いていた。私は素早い微光の中に（月はすでにポジリッポの方に沈んでいた）水の世界のこの神々しい境界の町で、宮殿の段々に連なるこの山脈の麓で、見上げて、高いサンテルモ城が白く、緑色の花束から輝くのを見た。二本の腕でこの大地は

美しい海を抱き締めていて、その右の腕、ポジリッポでは大地は輝く葡萄畑を遠く波の中へ運んでいて、左の腕では町々を支え、海の波や船を握りしめ、胸に抱き寄せていた。スフィンクスのように薄暗く水平線上にギザギザのカプリ島があつて、湾の門口を見張っていた。町の背後ではエーテルの中、火山が煙りを上げていて時に星々の間で火花が戯れた。

今や月がポジリッポの楡の背後に降りて来て、町は暗くなり、夜の騒音は消え、獵師達は下船して、松明を消し、岸辺で横になった。大地は眠り込んだように見えたが、海は目覚めているように見えた。ソレントの岸辺から一陣の風が静かな波をかき上げて、一より明るくソレントの小鎌は月と同時に朝から微光の照り返しを受けて、銀色の野のように輝いた。一 ヴェスヴィオの噴煙の柱は吹き払われ、炎の山から長く純な朝焼けが岸辺の上を見知らぬ世界の上の如く棚引いた。

それは薄明かりの朝で、青春の予感に満ちていた。風景や山や岸辺は木霊に似て、それらは遠ざかるほど更に一層魂にとって音節を語りかけてくるのではないか。一 何と若々しく私は世界と自分とを感じたことか。私の人生の朝全体がこの朝へと圧縮された。

私の友がやって来て、一 すべてが修正され、一 船乗りが着いて、一 アーガタは起こされて喜び、一 我々は乗り込んだ。そのとき朝焼けが山脈を染めた。そして朝の風に帆を膨らませて、小船は海の中へ飛び出て行った。

我々がまだポジリッポの岬の周りを船で迂回していたとき、ヴェスヴィオの火口は煌めく息子、つまり太陽をゆっくりと天に投げ、海と大地が燃え上がった。ナポリの地帯の半ばが、朝焼けの宮殿を抱え、その中央広場ははためく船で一杯で、山々から岸辺では上の方まで別荘が並んで、サンテルモの緑色の王座は誇り高く二つの山の間に、海の前に立っていた。

我々がポジリッポの周辺に来たとき、イスキア島のエポメオ山は遠方に海の巨人のように立っていた。森で囲まれて、禿げた白い頭部を晒していた。次第に果てしない平面の上に島々が次々に散在する村のように現れ、荒々しく迫って、岬が海の中へ進出して来た。今や干涸らびて個別のものとなった凝固した陸よりも、もっと強力に生き生きと水の世界が開けてきた。その諸力はすべてを、奔流や波から滴に至るまで、手につけ、同時に動くものである。一 全能にして、それでいて穏やかな要素よ。激しく御身は諸国に撃ち込み、諸国を呑み込む。そして御身の空ろにするポリープの腕を球全体にかけている。しかし御身は荒々しい奔流を制御し、それを砕いて波にし、御身は穏やかに御身の小さな子供達、島々と戯れる。そして軽いゴンドラから掛かる手の許で、御身は戯れ、御身の小さな波を送る。これらの波は我々の前で戯れ、それから我々を運び、それから我々の背後で戯れる。

我々がかつてブルトゥスとカトー[正しくはキケロ]がカエサルの死後庇護を求めた小さなニージタ島を通り過ぎたとき、一 かつて三人のローマ人[カエサル、ポンペイウス、クラッスス]が世界の分割を取り決めた魔術的なバーヤ[バイア]と魔法の城の前を、偉大なローマ人達の別荘が並ぶ岬全体の前を通り過ぎたとき、そして我々がクーマの山の方を、その背後のリテルヌムでスキピオ・アフリカヌスが暮らして死んだ山の方を見たとき、私は古代の偉人達の高貴な人生に捉えられて、私の友にこう言った。『何という人間達だったことか。プリニウスとかキケロを読んでも、彼らの一人があちらに別荘を有するとか、美しいナポリがあることをほとんど稀にしか知ることはなかった。一 自然の喜びの海

の最中から自然の月桂樹が育ち実をつけることは、ドイツやイギリスの氷の海から生ずることと同様、あるいはアラブの砂漠から生ずるのと同様である。 — 砂漠でも楽園でも彼らの強力な心臓は同じように動悸する。これらの世界の魂にとっては、住まいは世界を除いてはなかった。ただこのような魂にとってのみ情感がほとんど行為よりも価値のあるものであった。一人のローマ人ならば、ここで偉大に歓喜の余り涙を流すことができたのだ。ディーアンよ、言い給え、近世の人間は、彼らの廃墟の後、かくも遅く生きている代わりに何ができようか』。

青春と廃墟が、倒壊する過去と永遠の生命の充実とがミゼーノの海岸を、見通し難い岸辺全体を覆っていた。 — 死せる神々の砕けた灰の甕、メルクリウスやディアナの瓦礫の神殿[バーヤの二つの古代ロタンダ、古温泉]では楽しげで軽快な波が、そして永遠の太陽が戯れていた。 — 海の古代の人気ない橋柱、人気ない神殿の柱やアーチは豊饒の生命の輝きの中で真面目な言葉を語っていた。エリュシオンの野[バーコリにあったとされる]やアヴェルヌス湖や死海[ミゼーノの古代港]の古代の神聖な名前が岸辺にはまだ住んでいた。 — 岩や神殿の瓦礫が多彩な溶岩の上に重なって沈んでいた。 — すべてが花咲き、息づいており、娘と船乗り達は歌った。 — 山々と島々は若々しい炎の一日の中に偉大に立っていた。 — イルカが戯れながら我々の傍らを過ぎて行った。 — 歌う雲雀がエーテルの中、彼らの狭い島々を旋回しながら越えて行った。 — 水平線のすべての端から船が現れ出て、矢のように速く飛び過ぎて行った。私の前にあるのは世界の神々しい充実と混淆で、生命の騒がしい弦がヴェスヴィオとポジリッポの駒の上を越えてエポメオ山まで張られていた。

突然海を越えて青空の中を一回雷鳴がした。少女は私に尋ねた。『何故青ざめるの。ただヴェスヴィオのせいよ』。一人の神が私の間近にいたのであった。いや天と地と海とが三つの神性として私の前に出現した。 — 神々しい朝の嵐によって人生の夢の本がざわざわとめくられた。そして至る所で私は我々の夢とその解釈とを読んだ。 —

しばらくして我々は長い、北方を呑み込んでいる陸地に着いた。さながら唯一の山の麓で、すでに優しいイスキア島であった。私は浄福に酔って降りた。そしてまず最初に、自分はそこで妹を見いだすであろうという約束を思い出した」。

第百十周

動揺して、さながら巖かにアルバーノは涼しげな島に足を踏み入れた。あたかも風がいつもこう、「休憩の地」という言葉を吹き寄せているかのように彼には思われた。アーガタは両親の許に住むよう両人に頼んだ。両親の家は、郊外の小都市から離れていない岸部にあるとのことであった^{*1}。緑色の、家々で囲まれた岩を岸辺と小都市とに結んでいる橋を彼らが越えて行ったとき、彼女は喜んで東側の個別の家を指で示した。彼らがゆっくりと行き、海面に高い丸まった岩や家々の列が映し出されたとき、 — そして平たい屋根の上で、夕方の祭日のランプを整えている美しい女達が、互いに熱心に語り合いながら、

*1 イスキアのボルゴ

戻って来るアーガタに挨拶をしたり、尋ねたりしていたとき、 — そしてすべての顔色がとても快活で、すべての形姿がとても可愛らしくて、最も貧しい者すら絹の服を着ていたとき、 — 小さな少年達が小さなカスターニエン[栗の木]の梢を引き下ろしていたとき、 — そして島の老父たる高いエポメオ山が彼らの前ですっかり葡萄の葉と春の花とで飾られて立っていたとき、それらの甘美な緑からは単に幸せな山の住民の点在する白い別荘だけが見えていたのであるが、そのときアルバーノには、あたかも人生の重い荷が波の中に落ちたかのように、起き上がった胸が涼しい、エリュシオンから吹いて来るエーテルを吸い込んでいるかのように思われた。 — 向こうの海の上には熱い岸辺と共に先の嵐のような世界が横たわっていた。

アーガタは兩人をエポメオ山の東の山腹の両親の家へ案内した。そして早速甲高い陽気な歓迎の中、同様に声高く叫んだ。「二人の立派な殿方よ、家に入りたいのだって」。父親が早速言った。「ようこそ閣下。後から多くの湯治客が来ても、お部屋は用意させていただきます。どこにもこれ以上の宿はありませんよ。あっしは以前はファイアンス[フェンツァ]工房の轆轤師にすぎなかったのですが、八年前から葡萄園主となって、若干おもてなしできます。今回ほど十二月や三月^{*1}で上等な月がありましたかな。御用命を、閣下」。

— 突然アーガタが泣いた。母親が彼女に最も末の妹の葬儀を知らせたのであった。その葬礼のために、島の慣習に従って、今日は喜びの夕べへと準備されることになった。人々は互いに、死せる子供の無垢に対する永遠に浄福な証明のために幸せを祈念する習慣であったのである。老人がまずは本格的に話しに入ろうとしたとき、ディーアンがアルバーノに、自分が起こすまで、長い心身の動揺の後、微睡んで来るように頼んだ。アーガタは彼に涼しい部屋を指示して、彼は上がって行った。

ここ、涼しい海の西風の前では、うたた寝はすでに微睡みであって、余韻の夢はすでに眠りであった。彼の夢は自ら歌う絶えざる歌であった。朝は一本の薔薇で、昼は一本のチューリップ、夜は一本の百合である。そして夕方は再び朝である、と。

彼はとうとう長い眠りの中で夢見ることになった。 — 遅くなって、暗闇の中で、彼は楽園のアダムのように若々しくなって目を開けた。しかし彼は自分がどこにいるか分からなかった。 — 彼は遠くの甘美な音色を耳にした。 — 未知の花の香りが大気を漂って来た。 — 彼は外を見た。 — 暗い天は黄金の星々で炎の花々のように散りばめられていた。 — 大地では、海の上では、明かりの軍勢が漂っていた。 — そしてかなた遠方では明るい炎が天の中央にしっかり掛かっていた。見知らぬ夢が現実の舞台を一つの消え去った舞台と混乱させていた。アルバーノは夢を見続けながら、静かな人のいない家を通して、野外に、あたかも精霊の島の中に行くかのように出て行った。

ここで小夜啼鳥がまずその音色で彼を世界に導き入れた。彼はイスキアの名前を再度見て、岩の上の城と岸辺の町の長い屋根の露地が、燃えるランプで一杯になっているのを見た。 — 彼は照らし出された、人々の蝟集する音色の場所に赴き、歓喜の炎に全く包まれた礼拝堂を見いだした。壁龕の聖母とその子供に対して、喜びと敬虔さのお喋りの酩酊の中、小夜曲が演奏されていた。ここで彼は宿の人々をまた見いだした。人々は皆彼のこ

*1 彼は年に三回、十二月、三月、八月に採れる葡萄のことを言っている。

とを歓呼の中ですっかり忘れていたのであった。ディーアンは言った。「起こそうとは思ったのだ。夜と行事はまだ長く続く」と。

「祭典を共に祝おうとする神々しいヴェスヴィオを向こうで聞いたり見たりするがいいよ」とディーアンが叫んだ。彼は他のイスキア人同様に歓喜の波に深く沈んでいた。アルバーノは高く星空の中で活動している炎の方を見た。炎は神のように大きな雷鳴を自らの下に抱えていた。夜はミゼーノの岬を雲のように火山の傍らに起立させていた。その傍らでは千ものランプが近くのプローチダ島の王侯の宮殿で燃えていた。

岸边が夜の中に沈み込んでしまって、果てしなく暗く第二の夜として横たわっている海の方を見やると、時折流れ散る光輝がこちらに漂って来るのが見えた。その光輝は次第に一層幅広く、明るく流れて来た。遠くの松明も空中に見えて、その燃える明かりは長い火の溝を、微光を発する波の間に引いた。風は陸地から吹いて来るので、帆を畳んだ小船が近付いて来た。その小船には女性の形姿が見られた。その中のヴェスヴィオ火山の方を向いた女性は、王侯の大きさと、その赤い絹の服には松明の輝きが長く垂れかかっている、目を据えていた。彼女らが船を近付け、櫂の音の中で明るい海が両側で燃え上がると、海が陶然と炎を発して、周りに漂うものの、そのことを知らない女神が登場するかに思われた。皆がちょっと離れた所で、陸に降りた。そこでは約束の従者が、万事の用向きに待機しているように見えた。背の高い形姿の女性から、小柄な双眼柄付き眼鏡を付けた形姿の女性が短い別れをして、立派なお供と一緒に去った。赤い服の女性は顔に白いヴェールを被って、二人の乙女に付き従われて、真面目に、一人の侯爵令嬢に似て、アルバーノと音色の待ち受ける箇所に来て来た。

アルバーノは彼女の間近に立っていた。二つの大きな黒い目が、炎と包まれて、親密な真面目さで人生の上で安らいながら、ヴェール越しに輝いていた。ヴェールは誇り高い真っ直ぐな額と鼻とを察知させていた。この全体の形象には、彼にとって何か馴染みのもの、それでいて偉大なものがあつた。彼女は妖精の女王のように思われて、遠い昔、天上的な顔で彼の揺り籠の上で微笑しながら、賦与しながら覗き込んでいて、今やその精神が昔からの愛と共に再認識しているように思われた。彼は幽霊が名付けた名前を多分思い出していた。しかしこの現在は有り得ないように見えた。彼女は自分の目を機嫌良く、注意深く、二人の乙女の戯れに留めていた。乙女達は、可愛く絹の服を着て、金の縁飾りの絹の前掛けをしていて、三人目の乙女のタンブリンに優美に、羞じらって垂れた頭と伏せた目をして、踊っていた。二人の別な、この見知らぬ女性が連れて来た乙女達とアーガタはイタリア語の半端な声で、甘美に穏やかに楽しんで歌っていた。「すべては皆」（と一人の老いた男がこの見知らぬ女性に向かって言った）「実際聖母マリアと聖ニコラの榮譽のためになされている」。彼女はゆっくりと真面目に首肯の頷きをした。

その時突然月が昇った。ヴェスヴィオの犠牲の炎で囲まれて、向こうの天空に太陽神の気位の高い女神として、青ざめてはいず炎のようで、さながら山上の雷の上の雷の女神であつた。 — アルバーノは思わず叫んだ、「何と偉大な月だ」と。 — すぐにその見知らぬ女性はヴェールを後ろに上げて、馴染みの声であるかのようにその声の方を仔細ありげに振り向いた。彼女は見知らぬ若者を長いこと見つめると、ヴェスヴィオの上の月の方を向いた。

しかしアルバーノは一人の神に震撼させられ、一つの奇蹟に幻惑された。彼はここで、

リンダ・デ・ロメイロを見たのであった。彼女がヴェールを上げたとき、昇って来る一つの太陽から美と輝きとが溢れて来た。華奢な乙女らしい色合い、愛らしい線と青春の甘美な充実とが、神々の額の花々の王冠のように、聖なる真面目さの周りの柔らかな花々と共に、額と唇の上の、そして大きな目の黒い輝きの周りの強力な意志と共に、戯れていた。いかに彼女についてのイメージは異なっていて、この精神とこの人生とをかくも弱々しく語っていたことか。

この時は輝かしい形象を品位あるように取り囲んでいて、天と地は生命のすべての光線を交互に戯れさせていた。 — 愛に憧れて、星々は天の蝶のように海の中へ飛んで行った。 — 月はヴェスヴィオ火山の性急な大地の炎から離れ去って、その優しい光で楽しい世界、海と岸辺とを覆っていた。 — エポメオ山はその銀箔の森と共に、その頂上の隠者の庵と共に、高く夜の青空の中で漂っていた。 — その傍らでは歌い踊る人々がその祈りと、高く打ち上げられたその祭日の花火と共に息づいていた。 — そのときリンダは長いこと海を越えてヴェスヴィオ火山の方を見ていたが、彼の叫び声に答えるために、そして彼の方への素早い視線の転回を言い繕うために、自ら、静かなアルバーノに語りかけた。「私はヴェスヴィオ火山から来ました」（と彼女は言った）「しかしこの火山は近くでも遠くでも同じように崇高で、これはとても稀なことです」。 — 彼はこの声を本当に耳にしたが、それは全く見知らぬ風に、靈的に彼には響いた。とても動揺した声で彼は答えた。「しかしこの国ではすべてが偉大です。小さなものでさえ偉大なもののお蔭で、偉大です。 — この人々の小さな喜び、燃え尽きた火山^{*1}と燃える火山の間ここでは、 — すべてが一つで、それ故にまことに神々しいものです」。同時に引き付けられながら、離れて行きながら、彼のことを知らないまま、もっとも先に、ロケロールとの彼の声の類似にびっくりしながら、彼女は彼の単純な言葉を、よく熟慮して、気付いているよりも長いこと、この若者の実直な、反抗的で温かい目を見つめていた。そして何も答えず、ゆっくりと向きを変え、再び静かに遊びを見守った。

ディーアンは長いことこの美しい見知らぬ女性を見つめていたが、ようやく記憶の中でその名前を思い出し、身分に対する芸術家の半ば気位の高い、半ば当惑した表情で彼女に近付いて来た。彼女は彼のことを思い出さなかった。「ギリシア人のディーアンです」（とアルバーノは言った）「高貴な伯爵令嬢」。伯爵の認知に驚いた彼女は伯爵に言った。「貴方を存じ上げませんが」。 — 「私の父なら御存じでしょう」（とアルバーノは言った）「騎士のフォン・セサラです」。 — 「あら」とこのスペイン女性はびっくりして叫んだ。一本の百合となり、一本の薔薇となり、一つの炎となって、冷静さを保とうとして言った。「不思議なことですね。貴方の女性の友、ユリエンネ侯爵令嬢もこちらにいます」。

今や会話はよりスムーズに流れた。彼女は彼の父親について話して、被後見人として感謝の辞を述べた。「すべての卑俗なものを遠ざけている強力な性質の方です」と彼女は言った。高貴な風習に反して、早速人柄に関心を示して語った。息子は父親への称賛を聞いて幸せな気分になり、それを高めて楽しく予感しながら、彼の冷淡さをどう思うか尋ねた。

「冷淡ですって」 — （と彼女は活発に言った）「私はその言葉が本当に嫌いです」。

*1 イスキア島そのもの。

一度、稀なる人間が一つの意志全体を有していて、半端な意志を有せず、自らの力に安らっていて、甲殻類のように他の甲殻類にくっつき合っていないとき、冷淡と言われます。太陽も近くでは冷たくないのですか。 — 「死は冷たい」（とアルバーノはとても動揺して叫んだ。彼自身がしばしば愛を有するよりも力を有していると思っていたからである）「しかし崇高な冷淡さ、崇高な苦悩というものが有り得ましょう。鷲の爪で心臓を高めまで掠うもので、しかしそれを天の最中、太陽の前で引き裂くものです」。

彼女は彼を大きく見つめた。「貴方は女性のように話される」（と彼女は言った）「この女性は一人では愛の力なしには何も欲せず、何もしようとしません。でも愛らしいものでした」。 — ディーアンは、一般的考察は得意ではなく、単に個別の考察に有能で、ナポリの個別の芸術作品への問いかけで会話を中断させた。彼女はとても率直に自分の独自の見解を伝えた。かなり確定的な見解であったけれども。アルバーノはまず自分のスケッチ画家の友ショッペを思い出して彼のことを尋ねた。「私が旅立つとき」（と彼女は言った）「あの方はまだペスティッツにいました。このとても尋常ならざる方が何を欲しているか私には分からないのですけれども。 — 強力な人間ですが、混乱していて、明瞭ではありません。あの方はとても親しい貴方の友ですね」。 — 「私の昔のパトロン、アウグスティ講師は」（とディーアンは半ば冗談で尋ねた）「何をしていますか」。 — 彼女は手短に、ディーアンの打ち解けた質問にほとんど敏感になって答えた。「宮廷で元気になっています。 — 不当な判断がまことに」（と彼女は、アウグスティについて続けながら、アルバーノの方を向いた）「このような単純で、冷静で、首尾一貫したこの性質の方ほどに下されることは余りありません」。アルバーノは全面的に承諾を与えることはできなかった。しかし彼は最も縁遠い独自性に対しても、敬意を払う点に、自分の父親の生徒を認めていた。父親は植物をその滑らかな樹皮とか粗野な樹皮に従って評価するのではなく、開花に従って評価するのであった。他人の性格を描くやり方ほどに、それを描く人間の独自の性格を鋭く描くものはない。しかしその際のリンダの高貴な率直さ、これは教養ある女性にあっては、繊細さや覆いが力強い男達に欠けるように欠けるものであるが、この率直さがこの若者を最も強力に捉えた。そして彼は、自分が自分の大きな生来の率直さを彼女に対して倍加するの でなければ、罪を犯すことになると思った。

彼女は彼女の乙女達に出発を告げた。ディーアンは去って行った。「この乙女達は」（と彼女はアルバーノに言った）「そう見える以上に私には必要なのです」。つまり彼女は多くのスペイン女性に見られる目の疾患^{*1}を若干有していて、夜にはとても近視になると語った。彼は同伴の赦しを申し出て、それは許された。彼は彼女の目にするものの案内を申し出た。彼女はそれを断った。

歩きながら彼女はしばしば立ち止まって、ヴェスヴィオ火山の美しい炎の方を見た。「ヴェスヴィオは」（とアルバーノは言った）「自然のこの牧歌の中で悲劇的ミューズとして立っていて、戦争が時を持ち上げるように、すべてを持ち上げます」。 — 「戦争を信頼しているのですか」と彼女は言った。 — 「偉大な人間達か」（と彼は答えた）「あ

*1 夜盲症は熱い諸国ではよく見られる。最もひどい段階になると、夜には、明かりに対してすら盲目となり、朝方になってようやくまた見えるようになる。

るいは偉大な目的を一人の人間は眼前に有しなければなりません。さもないとその諸力は、磁石から磁力がなくなるように、人間が長いことその正しい世界の両極に向けられていないと、なくなってしまう」。 — 「その通りですね」（と彼女は言った） — 「ガリア[フランス]の戦争についてどう思いますか」。 — 彼はこの戦争が生ずることへの自分の願望と、それへの自らの参加を告白した。彼は、自分の将来をふいにすることになってさえ、彼女に対しては率直にしかなれなかった。「貴方ら男性達は幸せです」（と彼女は言った）「貴方らは人生の雪を通じて、掘り進めて行き、遂にはその下に緑色の苗床に行き当たります。それは女性にはできません。女というものは自然の愚かなものです。私は革命の二、三の頭目を尊敬しています。特に政治的力の怪物、ミラボーを尊敬しています。もっとも好きにはなれませんが」。

このように話しながら彼らはエポメオ山に登った。アーガタは幼時からの二人の遊び相手の同伴をして、大いに話し、多くの互いのニュースに対して聞き耳を立てていた。彼は今やその美しい令嬢の傍らを行き、時折その顔を、精神的力によって更に一層美くなるその顔を眺めると、いつもは逆に顔のせいで頭が得をするのであるが、そうではなくて、この顔は同時に花々であり、[木の]花であり、果実であって、それで彼は厳しくこの高貴な人物に対するこれまでの自分の振る舞いを裁いた。もっとも彼は彼女同様、優しさから、彼女の名前についてのこれまでの幽霊の劇や、今日の出会いの奇蹟についても黙っていた。静かに彼らは稀な夜と一帯の中を進んだ。突然彼女はある高台で立ち止まった。その周りには自然の結婚持参物が山の四方八方に積み重なっていた。彼らは光輝の中、周囲を見回した。天の白鳥たる月は、ヴェスヴィオ火山から離れて、高いエーテルの中に波打っていた。 — 地球の巨大な蛇たる海は極地から極地へと達するベッドの中にしっかり眠っていた。 — 岸边と岬は真夜中の夢のようにただ薄明の中にあっただ。 — 木の花々に満ちた溪谷が光からなるエーテル的な露から流れ出て来て、下の谷では熱い源泉の上に暗い煙りの柱が立っていて、上で輝きながら沸き立っていた。 — 至る所に照らし出された礼拝堂が高く横たわっていて、岸边の周りには低く暗い町々があった。 — 風は風で、薔薇の香りとミルテの香りだけが移ろって来た。 — 優しく生温かく青い夜が恍惚とした地球に流れ寄せて来て、温かい月の周りではエーテルが逸れて、月は愛に酔って、天の真ん中からますます大きく甘美な地上の春の中に降りて来た。 — ヴェスヴィオ火山は今や炎も雷鳴もなく、砂や雪かで白くなって東側に立っていた。 — より濃い青空の中で炎の星々の金の粒が広大に播種され散っていた。

それは人生がこの世ならぬ太陽の通過を得る稀な時であった。アルバーノとリンダは聖なる目で互いに会って、視線は再び穏やかに消え去った。彼らは世界を覗き、心を覗き、何も語らなかった。リンダは穏やかに向きを変えて、静かに進んで行った。

そのとき突然、後から付いて来るお喋りの少女達の一人が叫んだ。「多分地震が来るわ。私には良く分かる。お休みなさい」。 — それはアーガタだった。「地震を起こさせ給え」とアルバーノは言った。「あら、何故」とリンダは熱く、しかし小声で言った。 —

「無限の母親が欲し、与えるものはすべて今日私には子供のようによましい。死でさえもそうだ。 — 私どもは皆その不滅性の一員ではないでしょうか」と彼は言った。 —

「そうですね。人間は喜びのときそう感じ、信ずることが許されますが、ただ痛みのあるときには不滅性について話すべきではありません。魂が萎えているそのような時には人間は

不滅性に値しません」。

アルバーノの精神はここで侯爵の席から立ち上がって、高貴な縁戚の女性に挨拶して、言った。「不滅の方よ。他に誰かいらっしゃいますか」。彼女は静かに微笑んで、歩み続けた。彼の心は記述された石綿の紙であって、火に投じられ、燃えながら灰にはならず、先の人生のすべてが消失して、紙は炎のように、純粋に、リンダの手のために輝いた。

下にリンダとユリエンネの住まいがある最後の高台に彼らが達し、並んで別れのために立っていたとき、突然下の方で少女が叫んだ。「地震よ」。 — 空洞から一つの雷車が冥界の道の中を転がった。 — 幅広い閃光が翼を純な天の許、星々の下で、広げたり閉じたりした。 — 大地と星々とが震え、びっくりした鷺が高い夜の中を飛んだ。アルバーノはよろめくリンダの両手を握った。彼女の顔は月の前で大理石からなる青白い神々の彫像へと色褪せた。すでに過ぎ去っていた。ただ大地の二、三の星々がしっかりした天から海の中へなご放たれ、奇妙な雲が下の方で輪状に生じた。「私は臆病ではないかしら」と彼女は優しく言った。アルバーノは生き生きと快活に朝焼けの太陽神の如く、彼女の顔を覗き込んで、彼女の両手を握った。彼女は激しく引き離そうとした。「私に永遠に両手を与え給え」と彼は激しく言った。 — 「大胆な方ですね」（と彼女は混乱して言った）「あなたは誰ですか、 — 私を御存じですか。 — あなたが私のようなものであれば、ずっと真実のものであったことを誓って、言ってください」。 — アルバーノは天の方を見た。彼の人生は量られた。神が彼の間近にあった。彼は穏やかに断固として答えた。「リンダ、ずっと」。 — 「私も」と彼女は言って、恥ずかしげに美しいその頭を彼の胸に傾けた。しかしまたすぐに大きな潤った目で頭を持ち上げて、素早く言った。「今日はお別れです。明日早朝お出でください。さようなら、アディオ」。 —

少女達は登って来た。アルバーノは下がって行った。胸は生命の温かさと生命の輝きで満たされていた。 — 自然はより新鮮な香りと共に庭園から吹き寄せてきた。 — 海はまた下の方でざわめいた。そしてヴェスヴィオ火山ではアモールの松明が、喜びの炎が燃えていた。 — 夜の天を通じて、更に何羽かの鷺が太陽の方を目がけるかのように月の方へ飛んで行った。 — 天の穹窿には星々の黄金の梯子からなる天の梯子が掛かっていた。

かくも孤独に浄福の中を、愛の歓喜に溶けて、谷の香りの中へ、高台の輝きの中へ、夢想しながら漂って行ったとき、アルバーノは、渡り鳥が海を越えてアペニン山脈に向かってドイツの方へ、リアーネの暮らしていた地へ飛んで行くのを見た。「向こうの聖女よ」（と彼の心は叫んだ）「御身はこの幸せを欲していた。現れ出て、祝福し給え」。思いがけず彼はある礼拝堂の壁龕の前、聖母マリアの前に立っていた。月がその青白い彫像を神々しいものにした。聖処女は光輝の中活気付いて、リアーネにもっと似てきた。 — 彼は跪き、熱く神に感謝の祈りを、リアーネには涙を捧げた。彼は立ち上がったとき、夢の中で雉鳩[男女の愛の象徴]がくうくうと鳴き、小夜啼鳥が鳴いた。熱い噴泉が微光を発しながら蒸気を立て、彼は遠くの人々の楽しい歌声が上がってくるのを聞いた。

第二十九ヨベル期

ユリエンネ — 島 — 日没 — ナポリ — ヴェスヴィオ — リンダの手紙
— 諍い — 旅立ち

第百十一周

長い夜の後、新鮮な朝が吹き寄せた。朝アルバーノは太陽の前で、最も浄福な夢の宝を、月によって開けられた幸運の花を再び見いだすことになった。彼の生命は歓呼の声を上げた。彼は、明かりのワニスで覆われて輝く昨日の高台をまた登ることになったからである。一つの薔薇祭のためではなく、同時のすべての花祭り、収穫祭のために、ミルテ祭や百合祭のために、落ち穂拾いや花選び[詞華集]のために太陽が幸せな大地の上に昇り、孔雀のようにその引き裾の虹と共に一本の花の木へ飛び込んだとき、若い一日が彩り重く、庭を抱え込んで、反射光一杯に青い高みにまで達して、子供らしく世界に笑いかけた。 — アルバーノは今やその高台から下の魔法の城を眺めた。その城の中へ昨日かの強力な魔術的女性が消えて行ったのであった。

彼は下に達した。花で一杯の屋根で歌っている少女が、彼を待っていたように見えて、歌い続けながら、こちらへ挨拶を寄越して、自分の下の、彼が進むべき間近の部屋を示した。彼は中へ入った。そこは人気がなかった。 — 油紙の窓からは不思議な朝の光が溢れていた。 — 木製の部屋の天井にはヘルクラネウム[遺跡]からの画像が描かれていた。

— カンパニアの花瓶には黄色の蝶形花とミルテの花が生けられていて、甘い香りの圏を形成していた。奇妙な周囲に彼はますます窮屈に取り囲まれた。自分に馴染みがあると思える若干の像や用具すら目に入ったのである。とうとう彼は机の上に半円の指輪を見いだしてびっくりした。 — 彼は自分の半円の指輪を取りだした。それはかの幽霊の夜ゴシック式の部屋で妹と称する者から得たもので、偶然比較する場合に備えていつも携帯していたものである。彼は半円を互いに押してみた。 — 突然それらは一本のしっかりとした指輪にぴったり収まった。 — 何ということか、と彼は考えた。また人生に介入してくるものは何か。 —

すると急いでドアが開けられて、侯爵令嬢のユリエンネが微笑みながら、泣きながら入って来て、彼に飛び込みながら叫んだ。「私の兄上、私の兄上」。 — 「ユリエンネ」（と彼は真面目に、情愛を込めて言った）「結局本当に私の妹なのかい」。 — 「十分に長いこと妹なのです」と彼女は答えて、彼を優しく浄福に見つめて、微笑んで泣いた。それから彼女はまた彼を抱擁して、また彼を見つめて、言った。「素敵なアルバーノ兄さん。

— とても長いこと私は月のようにあなたの周りを回っていて、月のように更に冷たく、更に遠くにいなければならなかったのです。格別にあなたを愛そうと思えますし、しっかり振り返っても、またこれから将来も愛そうと愛そうと思えます」。 — 「全能の方よ」（とアルバーノは泣きながら発した、突然雲から差し出される腕で抱擁されたと思ったのであった）「御身は一切を今突然お与えになるのか」。 — 「あら」（とユリエンネは元気に叫んだ）「私も喜びの余り泣きたいところです。でも苦い一片の痛みも飲み込んでいます。兄上、ルイージが昨日ペスティッツから手紙で知らせているのです。急いで帰るように、さもないと再会できない、と。旅立ちのとき思ってもみなかったことです。それで一方の手で受け取るものを、他方の手では離すことになります」。アルバーノはそれについてには黙っていた。侯爵には何も関心を抱くことができなかつたからである。それだけに一層、最も初期の生命の日々の開放的風のオリエントの許での、この若い純な花の視線の

許での新鮮な明るい喜びには爽やかな気分させられた。この花はさながら彼の少年時代の明るく新鮮な泉から、泉の中で、生長し、戯れたものであった。

「しかし誓って。全体」(とアルバーノは始めた)「どういう次第なのか、説明して欲しい」。 — 「今や問いたくてならないでしょう」(と彼女は答えた) — 「公然たる肝要な点はわずかししか言えません。 — もっと問おうとして、秘密の書を覗きたくなることでしょうか、それは閉ざすしかなく、若干の嘘を呈示することになります。次の十月、恐らくはもっと早く、すべてが明らかになりましょう。何はともあれ、私の母はこの縁戚に関しては、本当に純潔で、神聖なままであったし、そうであるのです。全能の神にかけて」。 —

「何という謎か」(と彼は言った)「おまえは私の父の娘か。ルイージは私の兄弟か。私の亡き妹セヴェリーナはおまえの妹か」と彼は尋ねた。

ユリエンネ。十月にお尋ねください。

アルバーノ。何ということだ、妹よ。

ユリエンネ。兄上。メルキゼデク^{*1}の娘を信用してください。更に私は多分、禿頭の人間がリラルであなたに案内したあの現れ出た妹だったことでしょう。やむを得なかった。あなたが外国に逃げる前に、あなたを得なければならなかったのです。当時鏡に写っていた年齢は、御存じのようにただ技巧的鏡^{*2}のせいなのです。

アルバーノ。まことに私は当時、おまえの他には誰も考えなかった。ただどうして禿頭といった人間や死の神父といった者が生じているのか。 — これが不可解なことにモーラで予告したのだ。おまえに会うだろう、と。 —

ユリエンネ。有り得ないわ。 — 私の名前を言ったの。

アルバーノ。名前だけはなかった。ちなみにこの神父は高い確率で禿頭と同じ人間だ。神父はその際昇天した。

ユリエンネ。神父も別な者も天におればいい。この薄暗い同盟は私とかあなたに何か関係があるのかしら。この同盟はこれまでいつも間違った奇蹟を行いながら、珍しい本当の奇蹟で中断されたものだけ。当時リラルで私は無邪気に加わったのだけど、ひょっとしたら何か恐ろしいことを防いだのかもしれない。

アルバーノ。神かけて、問わずにはおれない。彼の目的は何か。その首謀者は、頭目は誰か。 —

ユリエンネ。多分伯爵令嬢の父親ね。だってまだ知られないまま、姿を現していないもの。あなたの父親が後見人だけど。落ち着いたら、びっくりなさい。そして私ども兩人にとってすでに喜ばしく展開している謎をそのままにしておき、十月の日々を待ちなさい。

アルバーノ。しかし一つだけ、妹よ、教えておくれ。高貴な伯爵令嬢に対する私やおまえの関係についての明確な言葉だ。これだけを頼む。

ユリエンネ。私の心も効き目がなかったのかしら。 — 素晴らしい女性よ。彼女も私

*1(訳注)「彼には父もなく、母もなく、系図もなく、また生涯の初めもなく、命の終わりもなく、神の子に似た者であって、永遠に祭司です」ヘブライ人への手紙、7.3. 他に創世記、14.18.参照。

*2 若い顔を年老いた顔にする変形の鏡がある。

も、あなたも上手くいくといい。あなたの愛の最初の言葉が、 — 神々がこの言葉をはっきりと置いたわけで、 — あなたに対する送り言葉への合図となる予定だったので、やっと恋人からあなたは妹を受け取ることが許されたのです。これらに関する香具師や幽霊は、これについては十月にはっきりしましょう。長いこと、嘘と偽証の間で、何を選びべきでしょう。私は単に、あなたがた両人がただ立場を決めるように、万事を行ったのです。その他のことは予知していました。何も成功せず、 — ただどうしようもない混乱だけで、 — すべては逆行して行きました。 — 私は大事な人々*1 が不幸な春に恐ろしい苦痛の種蒔きをして、希望に満ちて微笑むのを見ていました。そしてその不幸な両手を支えることができなかつたのです。 — 私は確かにすべての嘆きを予知していました」。 — 「あなた、向こうの敬虔な純な魂の方」と彼女は突然唇を震わせて、天を見上げて言った。 — 兄妹は穏やかに抱き合って、静かに無垢な犠牲者のことを静かに泣いた。

「いや」（とアルバーノはとても温かく言った）「彼女が私の許に留まってさえいてくれたら、地上に生きてさえいたら、どんな地獄の一味も我々を引き離すことはできなかつたのだが」。 — 「御覧、アルバーノ」（とユリエンネは言った、彼女のより喜ばしい生気をまた取り戻しながら、すべての小暗い窓を開けた）「朝の丘がきらびやかにゆらゆらしています。最後まで話しをさせてください。冬、丁度、最も嬉しいことに、あなたがナポリ行きを考えていると知つたの。リンダはすでに一度そこに行ったことがあって、彼女の母親もこちらの鉱泉に来たことがあるの。『私には』（と私は彼女に言ったわ）『イスキアの鉱泉はとても効きそう。一緒に旅行しましょう。ローマの陰気な後見人には構わず、訪ねないことにしましょう』と。リンダは簡単に承諾してくれた。勿論あなたのことは内緒。でも前もって十分に手紙の中やその他のときに語っていて、いつもあなたのことを法外に褒めたのよ。 — ソレデ私ドモハココニイルワケ。 — 昨日私はナポリで私の兄の悲しい手紙を受け取つた。あなたの到着については私はまだ何も知らなかつた。伯爵令嬢だけをあなたの音楽の祭りへ行かせて、重い気持ちで宿に急いだの。リンダは喜んで帰って来て、打ち明け、何でも話してくれた。 — そして私は彼女にすべて話したの。 — それでまあ」（と彼の首にすがりながら、付け加えた）「私どもはやっとエリュシオンに降りたわけで、腐つたカロンの小船で溺れることはなかつたわけです。 — でもヨーロッパ全体と、あなたのディーアンにとっても、私どもの縁戚関係についての内密の印璽が押されることになります。気をつけてください」。彼は更に若干質問をしなければならなかつた。彼女は常に利発に答えた。「十月、十月」と最後に突然、目覚めたように、叫んだ。「でもどうしてこんなに陽気に話せるのでしょうか」と、しかし説明しないで言った。

「それではこれまで通りに、あなたを伯爵令嬢の許に連れて行きましょう、でもより短い道で」と彼女は言って、彼の手を取り、外に案内し、リンダの住んでいる部屋のドアを開けて言った。「私の兄を紹介します」。赤面して二人に高貴な形姿の女性が向かって来て、一言も言わずに、愛しい女性を抱擁した。彼女の目がアルバーノをまた見たとき、当

*1 彼とリアーネ。

惑して、彼女は彼が接吻する手を引き抜こうとした。というのは昨日はただ薄明かりの中で彼の美しい目や高貴な額や愛の口をほとんど見ていなかったからである。そしてこの花と咲く人間は、二重の感動で生き生きとして、明るく、静かに、真面目に彼女の前に立っていた。高貴な正しい愛に満ちて。彼女の心は喜んで彼の心にくずおれたことだろう。少なくとも彼女は自分の手を彼の手にもたせて、この朝の多幸を祈った。「昨日の夕べに対する」間近な挨拶を彼は唇に乗せることができなかった。御礼を述べることも受けることも独自に恥じて臆する気持ちがあった。「やっと旅の一団に第三の男登場」（とユリエンネは言った） — 「あなたは数日したらすぐ旅立たなければなりませんよ、ペスティッツへ一緒に行かなくては、アルバーノ」。 — 「私もかい、妹よ」（と彼は言った）「一ヵ月は滞在しようと思っていた。数日の間にヴェスヴィオやヘルクラネウム、ナポリの訪問が詰め込まれることになる」。 — 彼は後に自ら、愛の美しい命令の下での甘美な従順さに驚くことになった。いつもはこう言う習慣だったのである。「私に命令せよと命令してみろ、私は従わない」。 — 「私は私の友の女性の同伴をします」（とリンダは言った）「ギリシアへは行きたかったけど、もう二度ほど間近なところまで来ているのだけだ」。 —

「今夜のうちにも飛び立とう」（と彼は言った）「私はただ目覚めていて、見て、暮らし、愛したい」。ユリエンネは早速彼の健康と彼の目的を妹らしく案じ始めた。 — 二人の兄の間で板挟みになって、彼女はできることなら、両人に同時に犠牲となりたかったことであろう。 — 「この方はイスキアをまだ楽しませてはいません」（と彼女は言った）「今日は楽しんで貰いましょう」。

アルバーノはこの新しい女性的愛に接しても、女性は最も美しい形姿の中の心であると感じた。彼の中では歓喜の歌が響いた。何という一日が、何という年月がおまえの前にはあることか。二重の愛の花々の幕に甘美にまどわれ、紡がれて、彼は生命と大地が香りと明かりで一杯であるのを見た。 — 青春の朝露の上に太陽が今や導かれて、薄暗い滴がすべての庭園を通じて、上下に輝いた。

彼はようやく自分の周りの地に視線を向けた。ニオベの群像、トリノの守護霊[眠るアモール]、アモールとプシュケが鑄造されて立っていた。ナポリの或る芸術家の陳列室から借り出されていた。 — 壁は珍しい絵画で飾られていた。その中には、 — くしゃみするショッペがあった。このショッペだけが北方での過去と共に激しく彼の軟化した心の中に迫って来た。彼は恋人にその気持ちを語った。「貴方は」（と彼女は言った）「芸術より友情を優先させていますね。その肖像画は私の収集の中で最低のものですから。でもモデルは多分大いに尊敬するに値します」。

彼女は陳列室に入って、自分自身の細密画を取って来た。これは彼女をトルコ式慣習に従って描いているもので、ヴェールを掛けられていて、ただ片目だけが覗いているものである。ヴェールの薄明かりの傍らで、いかに開けられた魂の目は生き生きと見つめ、的中していることか。何と彼女の力の炎が穏やかな外皮を破って燃え出していることか。リンダはこの素晴らしい画像の名手を名付け、まさにこのショッペであると言ったが、更に付け加えた。ここで名手は、他の作品では見られないほど党派的に力強く称えられている作品を、自ら好意へのお返しとして、称えざるを得ないと話した、と。彼女は彼の絵筆のこの違いを、彼自身がほぼ文字通り言ったというある理由から説明した。つまり自分は最も若

い頃、自分が会える限り、彼女の母親を長く愛してきたし、その後は誰も愛していない。彼女が母親に似ているから、愛を込めて描き、実際にいかほどかなそうと試みた、と。

「実直な昔からの人よ」とアルバーノは言って、とてもしばしば幸せであった目からの涙をほとんど防ぐことができなかった。しかし単に神聖な友情の痛みからであった。というのは今や彼の中を — 青天の霹靂のように — すべてを通じ、ショッペの日記やリンダの言葉、ラベッテの手紙を通じて、確実な推測、リンダがこの奇妙な人間が秘かに愛してきた人物であるという推測が生じたからである。鋭い痛みが彼の額を通じて速やかに、しかし深く切り込んできた。ただ彼の現今のより若い精神の新鮮さを通じて、新しく統合された力と威力とを通じて、そして一人の友は友に対して多分容易に恋人[恋された女性]は譲り、犠牲にできようが、恋している女性をそうすることはできないし、許されないという考えを通じて、彼は自らを克服した。

ユリエンネは言った。「兄上が二人のとても空想的な人達、こうしたショッペとロケロールの間において、 — 自らそのような者にならなかったのはただ奇蹟ですよ」。ちよつとの間戦争が生じた。リンダが言った。「ショッペは単に北方的気候と戦っている南方の性質の人にすぎません」。 — 「本来は人生そのものと戦っているのだろうが」とアルバーノは言った。ユリエンネは固執した。「私はいつでも人生の中で規則を愛しています。二人の許ではゆっくりできません。自らはくつろがず、彼らがくつろぐだけです」。彼女はまさにロケロールについて尋ねた。「かつては私の友でした。今はもはや語りたくない」とアルバーノは言った。彼の舌をリンダに対する破滅的寵児の拷問的愛とリアーネとのこの寵児の縁戚さえもが縛った。リンダは法外な弱虫という単なる判断で容易に、自分に対する彼の愛とか自分の嫌悪を格別考えずに、やり過ぎた。彼女は離れているとき、自分の内面では厭わしい者を誰でも容易に忘れたが、それは近くにいるとき激しく突き放す類いのものであった。

ユリエンネは小さな日帰りの旅、島巡りの準備をするために去った。アルバーノはディーアンにナポリへの工程ルートとして書き付けを送った。リンダはユリエンネについて言った。「深く確固と築かれた心情の方」。 — 「単に小さな香る花々の中に幹と枝を収めています」と彼は付け加えた。「そしてまさに本や会話では嫌いなもの、詩を、行動の中で本当になします。個性というものはすべての善なるものの根としていつでも大事にし、尊重すべきです。 — 貴方もとても良き方です」と彼女は穏やかな声で付け加えた。「まことに今はそんな状態です」（と彼は言った）「本当に愛していますから。ただ完成した人物のみを本当に、全く利己的でなく愛することができます」。 —

かくて太陽の像は、燃えるためには完成して丸く見えなければならない。「あるいは、そのようなものと見なされるものです」（と彼女は言った） — 「私は、あるがままの私です。別様ではほとんどありません。ただ一度人間が人生を通じて行く一つの意志を、刻々と、人ごとに変わるのではない一つの意志を持ちさえすれば、 — これが肝要です」。

— 「リンダ」（とアルバーノは叫んだ）「私は私の魂を聞くようです。 — 行為であるような言葉があります。貴女の言葉がそうです」。彼女が自分の魂について話すと、彼の魅了された精神の前では美しい形姿が消えた。黄金の弦が響き始めると消えるようなものである。過去によって傷付けられ、しばしば苛酷な力によって罰せられて、 — 今や人生が、世界が、国そのものが、彼をより大胆に、より明るく、より堅固に、より熱く

したけれども、 — この多声な魂の同音の風奏琴に彼はただ小声の息で吹き寄せた。しかしかにかに一人の男は彼女を魅了したに違いなかったことか、同様にかくも力強く、かくも優美に、 — 間近の諸恒星からの一つの穏やかな星座で、 — リラを持った美しい一人の軍神で、 — アウローラに満ちた一つの嵐の雲、 — かくも実直に考える一人の勇敢な熱い青年であった。しかし彼女はそれを言わなかった、ただ彼のように愛しただけであった。

彼は彼女の小さなテーブルの文庫にたまたま視線を投げかけた。「フランス人ばかりよ」と彼女は言った。彼はモンテーニュ、『ギュイヨン夫人の生涯』[Guyon(1646-1717)]、『社会契約論』、最後にスタール夫人の『情熱の影響について』[Madame de Staël(1766-1817)]を見いだした。[フォン・カルプ夫人の好みの諸本]。彼はスタール夫人を読んでいて、言った。愛について、党派について、虚栄心についての項目は大いに気に入ったこと、そもそも彼女のドイツ的あるいはスペイン的炎の心は気に入っているが、しかし彼女のフランス的空虚な哲学は気に入らず、最もその非倫理的自殺欲求は気に入らない、と。「あらあら」(とリンダは叫んだ)「人生そのものが長い自殺ではないかしら。 — アルバーノ、男性は皆若干術学者ですね。立派な男性は所謂倫理面で、貴方は特にそうです。 — カント的格率や、冗漫で広大な諸専門、原理を男性は皆有しなければなりません。 — 貴方らは皆生まれながらのドイツ人で、まことにドイツ的なドイツ人で、貴方もそう。友よ、その通りですか」と彼女は穏やかに言い添えた。あたかも肯定を欲しているかのように。

「違う」(とアルバーノは言った)「ともかく一人の人間が何かをまことに真剣に専らに行い、要求するとき、その人は空想家とか術学者と呼ばれるのだ」。 — 「あら永遠の読書人達ね」とユリエンネは、入って来ながら彼の手の中の本について発した。「この侯爵令嬢は序言とか注を読まなかったものよ」(とリンダは言った)「私はまだどれも飛ばしたことはないけど」。 — 序言や注を読む女性は重要な女性である。男性の場合はせいぜいその逆が真実であろう。 — 「旅立てるわ。準備完了」とユリエンネは言った。

第百十二周

何と外では — 彼らが祝祭的世界に来たとき、 — 大地の風の代わりに涼しい青空からの風が吹き下ろして来たことか。何と世界と日中と — 未来が輝いたことか。人生の杯の中で何と媚薬が、三人のそれぞれに二つの酔わせる薬からできたものが輝かしく泡立って来たことか。 —

彼らはエポメオ山頂への道を行った。しかし勝手な自由と、地上の他のどの地でも見られないような自然の交替の中にあった。月桂樹と桜桃の谷、薔薇と桜草の谷に同時に出会った。 — 涼しげな峡谷が、実ったオレンジや林檎で一杯になって、アロエや石榴石の熱い岩の横にあって、桜の木や林檎の木の梢では、上の方で葡萄やオレンジの花々が触れ合っていた。花と咲く割れ目からはのんびりした小夜啼鳥の声がし、溝からは無害の蛇の頭部が明るみに出て来ていた。 — 時に一つの修道院がレモンの小森の中にあり、時に葡萄園の側に白い家があった。あるときは赤いクローバの側にキャベツ畑があり、あるときは白い薔薇の花や水仙で一杯の小さな沃野が見られ、至る所に、歌いながら、踊りながら、語りながら通り過ぎる人間が見られた。交互に高台と庭園が陸地や海を見せたり、覆

ったりし、しばしば長いこと広大な遠くの海やその雲の岸辺が緑の枝越しに二番目の天のように微光を発していた。――

彼らは山頂の隠者の家にますます近付いて来た。生命の多彩な黄金の風切羽の上に揺すられた。彼らは互いに時折喜びの言葉を述べたが、話を伝えるためではなく、心が他に仕様がなかったからで、言葉は喜びの溜め息に他ならなかったからである。彼らはようやく地上の王座の上に立っていた、太陽から眺めるように、下を眺めた。彼らの周りには海が横たわっていて、水平線の青さの中に溶け込んでいた。――カプアからは低く白いアペニン山脈がヴェスヴィオを迂回してソレントの長い岸辺の上まで続いていた。――ポジリッポからは国々が海を追ってモーラやテッラチーナを越えるところまで来ていた。――

開かれた世界の表面には一切が、岬や岸辺の黄色い火口の縁や島々が周囲に見えた。これらは海の下の隠れた恐ろしい神[エポメオの下には巨人 Typhoeus が眠ると信じられていた]がその炎の世界か太陽へと押し出したものであった。――そして優しいイスキア島が、岸辺の小さな町やその小さな庭園や火口と共に大きな海の中の緑の船のように立っていて、無数の波の上に安らっていた。

すると下の方では地上の偉大なものは消えていた。ただ地球だけが偉大で、太陽もその天と共に偉大であった。「何と我々は幸せなのだろう」とアルバーノは言った。いや君達はそこで幸せであった。君達の後で誰が幸せな者となるであろうか。――生命の樹の上で揺すられながら、その樹をすでに彼の子供の目は早期に憧れて眺めたものだが、彼を高め、感動させるものをすべてを彼は語った。「その点に私は全能の方を認めます。その方は怒って、燃えながら、海の底から上がって来て、燃える国を植え付け、それから再び微笑みながらその子供達に花を分配します。人間もかくあれかしです。火山――それから花です」。――「それに引き換え」(とユリエンネは言った)「ドイツの五月のすべての冬の気晴らしとよしたら。これはちょっと小さめのスイスではないかしら、ただちょっと大きめのジュネーブの湖の中での」。――伯爵令嬢は自分のスペインのせいでこのような魅力にはより馴染んでいて、大方は静かにしていた。「人間は」(と彼女は言った)「山の精[Oreade]あるいは木の精[Hamadryade]あるいはその他の一つの神性で、森や谷に生気を吹き込みます。人間自身をまた一人の人間が生気付けます」。

隠者が現れて、言った。彼らが上に送った食事はとうに到着している、と。彼は自分の高台をついでに褒めた。「しばしば」(と彼は言って、ユリエンネを笑わせた)「私の山はヴェスヴィオのように煙りを出し、湯治客は上を見上げて若干恐れます。しかしそれは私がこの上で私のパンを焼くからです」。――彼らは影の野外に陣取った。彼らは再三可愛らしく縮小化された島を見下ろさずにはおれなかった。島は庭園の中に播種された庭園と共に、その秋と共に編み込まれた春と共に、一面に間近にあるもので、一つの大きな家庭庭園であった。そこでは人々は皆一緒に住み、国々が国々で混乱することはなく、蜂や雲雀は海の庭園を越えて飛び出ることはないのであった。開いた静かな花々に似て、三人の魂は側にあった。花粉は香り高くあちこち飛び、新しい花を生み出した。リンダはすっかり自分の大きく深い心に沈み込んだ。愛に不慣れで、愛を心の中で観照し、享受しようとしていた。しかしアルバーノの一言も聞き逃すことはなかった。その言葉は心の中の愛に属していたからである。穏やかさに包まれ、沈思していた。半ば瞼を伏せた大きな目をして、――彼女の流儀でいつも長く黙っていたり、長く語っていたりした。ダイヤモ

ンドが露の滴と同様に輝くように、ただ固い力を有して、太陽がなくても輝くように、彼女の心はどの女性的穏やかさと純粹さの点でも最も優しい心に似ていて、ただその心に強さの点で勝っていた。彼女が例えば、――次々と話すので、一つの世界から別の世界へ引き裂かれ、アルバーノのことを子供っぽく忘れた後で、――突然そして屈託なく喜んで、立派な手で若者の手へと戻って行くとき、ユリエンネはそれをうっとり眺めていた。若者にとっては彼女の握手はより懇ろな抱擁に劣るものではなかった。

彼らはアルバーノの宿に近道の帰路で下って行った。その宿は絶えずその葡萄の藪の中で彼らを見上げていた。彼らはもうすぐ別々になるのであった。――明日アルバーノは旅立つ。――自分はポルティチから手紙を寄越すことになるろう、使者が手紙を取りに来る、――「その使者は私にも手紙をもちますよ」と彼は言った。――「そうは行きません」とリンダは言った。アルバーノは頼んだ。「彼女はきっと気が変わって書きますよ」とユリエンネは言った。彼女は否認した。次第に影の溝が黒い溶岩の流れの傍ら、山を下って来た。そしてポプラの木の中で小夜啼鳥がすでにメロディーで黄昏を告げ始めていた。彼らはアルバーノの家の間近に来た。ディーアンが有頂天になって侯爵令嬢に駆け寄って来た。アルバーノは彼に、両女性に尋ねることをしないで、小船を用意して、夕べを楽しめるようにして欲しいと頼んだ。まさに歓喜の強力な提案に対して娘達はほとんど喜んで承諾を述べるものである。ディーアンは早速小船を手配した。彼は喜んで素早くどんな他人の喜びにも加わった。

彼らは皆乗り込んで、すべての陽光が波の苗床にますます濃く植え付ける諸向日葵の下を進んで行った。アルバーノは、――今の熱気の中で、温かい国の慣習に慣れて、つまり恋する若者が母親の前で語り、母親は若者について娘と語る国、愛がヴェールを被らずに、ただ憎しみと顔だけがヴェールを被る国、ミルテがどんな意味でも田畑の枠である国に慣れて、一瞬ディーアンの前であることを忘れ、リンダの手を握った。素早く彼女は彼の手を逃れた。腕は貸しても、指と指貫は断る娘の作法に従っていた。しかし拒絶したとき、穏やかに彼を見つめた。

彼らは東から北への航行でまた家々の岩の前を、岸辺の郊外の露地の前を通り過ぎた。皆が陽気で好意的であった。――お喋りしていない者は皆歌っていた。――屋根はリボンの織機が置かれていて、織り姫達が一緒に屋根から屋根に語り、歌っていた。ユリエンネはこの南方の結社から目をほとんど外せられなかった。彼らは更に海の沖へ進んで行き、太陽が一層海に間近になってきた。波と大気は互いに戯れ、波は風となり、大気は波打った。――天と海は一つの穹窿となった。その真ん中では、宇宙の一つの精霊のように、愛の軽い船が漂っていた。――世界の周辺は輝く岸辺や島で一杯の黄金の膨張した穂の花輪となった。――ゴンドラは歌いながら遠くまで飛んで行き、夜のための松明の準備をすでにしていた。――時折その背後で飛び魚が空中に弧を描いた。ディーアンはゴンドラに対し、馴染みの滑り込んで来る歌声を模して歌った。――向こうでは誇り高く、ゆっくりと大きな船が帆を掛けて、天に似て赤や青の兜の羽根飾りをひらひらさせて、勝者として港に入って来た。――至る所で生命の果汁が注ぎ出されて、ざわめきながら働いていた。――かくて一つの神的世界が人間の周りで戯れていた。「いやこのこの偉大な場所で」（とアルバーノは言った）「皆が場所を得ている所、楽園と溶岩からなる黒い冥府の岸辺が、――優しい海が、――ヴェスヴィオの灰色のゴルゴンの頭部が、

— 戯れる人間達が、— 花々と一切が場所を得ている所、— ここで、溶岩のように人々が白熱しなければならない所で、— 熱い溶岩に似て、その白熱のまま周辺の波の中に人々が埋葬されることは許されるのではなかろうか。この時間に何かで没し得ると承知しているのであれば、せめてその思い出の若干が、あるいはある心のための鼓動が埋葬されることは、— その方がいいのではないか。— 「ひよっとしたらね」とリンダは言った。— ユリエンネは優しい喜びを通じて自分の兄の離れた病床へと引き寄せられて、微笑んで言った。「向こうの美しい太陽のようにできないかしら。波の下へ行って、それでもまた再来することができないかしら。— 日没をまじまじと御覧なさい。この地球上のどこでも見られるものではないわ」。—

太陽はすでに、大きな黄金の楯に育って、天に支えられて、ポンツァ諸島の上に掛かっていた。そしてその青色を金箔化していた。— 岩の棘からなる白い王冠、カプリは白熱の中にあつた。ソレントの岸边からガエタの岸边までは世界の壁に薄明の黄金が添加されていた。— 地球はその車軸と共に戯れの波のように太陽の間近まで回転して行き、そこから光線と音色を放った。— 側面では海の上に秘かに夜の巨人の使者が、つまりエポメオ山の無限の影が横たわっていた。—

今や太陽がその海に触れた。そして黄金の閃光が濡れたエーテルの中を震えて散った。

— 太陽は千もの波の翼の上で揺れた。— 太陽は戦き、愛に燃え、愛に白熱して海上に掛かり、海は燃えながらすべての太陽の白熱を吸い込んだ。— 太陽が滅しようとしたそのとき、青ざめた女神の上に無限の光輝の覆いを海は投げかけた。— すると世界は静かになった。— 動揺する夕焼けが薔薇の油をすべての波に注いだ。— 聖なる没落の島々[西のポンツァ諸島]が神々しく立っていた。— 最も遠方の岸边が迫って来て、その恍惚の赤色を見せた。— すべての高台には薔薇の冠が懸かっていた。—

エポメオ山はエーテルの高みまで白熱していて、窪んだヴェスヴィオから育ってくる永遠の雲の木では頂上の所で最後の薄い光輝が徐々に消えて行った。

無言で人々は西側から岸边の方へ向きを変えた。船乗りはまた語り始めた。「どうか」（とリンダは女友達に小声で頼んだ）「あなたの兄上がずっと西の方を御覧になるようにして」。彼女は、すぐにその理由を察知はしなかったけれども、その依頼を叶えた。絶えずリンダは彼の美しく照らし出された顔を見ていた。「またあの方にお願ひして」（と彼女は二度目に言った）「ひどく薄暗くなって来ました。明かりがないと私の病んだ目には辛いわ」。それはなされなかった。すぐに岸边に着いたからである。彼らが大地に踏み込むと、至福の時の共鳴板として震えて余韻を残した。アルバーノは言葉もなく感動して、彼がまた間もなく別れることになる愛しい顔を見つめていた。「貴方にお手紙を書きましょう」と彼女は要求もされていないのに、先の脅しをととても感動的に撤回して言ったので、彼は、他人の目がなければ、感謝に酔って、彼女の手の上に、彼女の高貴な心に崩れ落ちていたことであろう。個々の瞬刻のすべての音色が三和音の音色となっていた調和的一日の別れと最後は難しいものとなった。今や早速ディーアンが別れた。「夕方の薔薇でさえも」（とユリエンネは言った）「棘なしでは有り得ないわ」。— 「中断となります、— いつでも最良のものは。家に帰りましょう」とリンダが言った。アルバーノは同伴を許すように請うた。「何故」とリンダは言った。— 小声で彼女は自分の目のせいを付け加えた。「貴方がほとんど見えないわ。— いらして、聞こえはするわ」。— 「変

わりやすい方ね」とユリエンネは言った。「私は変わるけど」（と彼女は言った）「この方は変わらない。 — アルバーノ、ただ礼拝堂まで。貴方は明日の朝船出でしょう」。

— 「それさえ違う。ひょっとしたら今日のうちにも」と彼は言った。

彼らがゆっくりと、ますますゆっくりと山を登って行き、小夜啼鳥が鳴き、ミルテの花が香り、生温かい大気が舞い、上方で第二世界全体がヴェールを付けた尼僧のように星座の銀色の格子越しに神聖に覗いていたとき、すべての心が忠実な愛で溢れて、兄と妹と恋人は交互に手を取り合った。

突然リンダが昨日の和解の場で立ち止まって、言った。「ここでこの方と別れましょう。ユリエンネ」。そして素早く彼の手から自分の手を引き抜いて、軽く彼の巻き毛と頬を、それから彼の目の上を撫でて、「どう」と一つの夢の中に迷い込んで尋ねた。「すぐに」（とユリエンネは言った）「でもイタリアの冬を、つまり月を[月明かりで雪景色に見える]、ただ家に帰るためにも、待たなければならぬわね」。そこで兄は優しい妹の心にくずおれた。妹はそうしてより長く兄が居合わせて、女友達にはより強力な明かりの下での再会を準備しようとしていたので、兄は涙ながらに叫んだ。「妹よ、何かお返しをし、おまえに感謝する前に、おまえは私のために尽くしてくれた。 — 私にすべてを、すべての幸せを、至高の至福を渡してくれた。言葉もない」。 — 「月が出たわ」（と彼女は叫んだ）「無事に旅してね。お別れです」。

銀色の昼のように月が山脈の上に出て来た。神々しい恋人リンダは恋人アルバーノの花と咲く顔を再び見た。彼は彼女の手を取って、言った。「ご機嫌よう、リンダ」。 — 彼らは互いに長い間見つめ合っていた。目は魂で一杯であった。彼らは互いにより余所余所しく、より高貴になった。 — そして彼は、それと知らずに、崇高な乙女を、浄福な精神が春の太陽をそうするように、自らの心に抱き寄せた。 — 彼は彼女の神聖な顔を自分の顔で触れた。二つの世界の朝焼けのように彼らの唇は融合した。リンダは目を閉ざして、おずおずと接吻した。ただ一つの生命と幸運とが二人の心と唇の間で、回転し輝いた。ユリエンネは軽く彼らの抱擁に自分の抱擁を重ねた。そしてひたすら幸運を願った。その後皆別れた。再び話しかけ、振り向くことはなかった。

第百十三周

アルバーノは今や彼の行動の中で支配している新しい性急さで、すでに涼しい明けの明星の許、幸せな大地から去った。彼は建築士のディーアンに自分の全ての幸運を語った。彼はディーアンがまだ愛に対しては青年のままであると知っていたからである。「素晴らしい」（とディーアンは答えた）「誰がイタリアを愛なしに脱出できましょう。少なくとも我々男性はできません。貴方の華麗なユーノが貴方に対して、他の人々に対するほどには誇り高くなければいいと祈念致します。すると多分神々の生活となりましょう」。

朝の大気の中、太陽と波に照らされて、彼は二つの天の間の青い鏡の海の上を滑るように漂って行った。彼の目は、オリンポスの山、つまりエポメオ山の方を振り返るとき、浄福であった。彼の目が再び上下に微光を発する岸辺に、大地の長い象眼された市場の方を見るとき、浄福であった。

彼らが浮かぶ宮殿、つまり船に乗って、常備の宮殿の許に着いたとき、人々は聖なる祭

典の酩酊の中にあった。彼はやむなく青い日中と海を神殿や、一 画廊や、一 五階の部屋で過ごした。その部屋には慣習で、何人かの偉い人達が住んでいて、その人達に彼は父親からの手紙を届けた。一 そしてもっと素敵なのは地下の暗い露地[grotta vecchia]で、そこは花と咲くポジリッポで穹窿を形成していた。

ただまず次に一人つきりになると恍惚たる心と話すことになるという見込みだけが、彼の絶えず現在から逸脱する精神を落ち着かせた。夕方、彼らはナポリを眺める最も美しい高台カマルドリ修道院[サン・マルティーノ修道院との混同と思われる]に登った。そこで彼は景色を愛でながら灰色の遠方のポジリッポの背後に高いエポメオ山が立っているのを見た。彼は長くじっとしてはいず、そのうち自分が探し求めたより濃く花咲く所で、リンダ宛に次のような手紙を書き始めた。

「ようやく、高貴な魂の方よ、御身に語る事ができ、御身の島をまた見ることが出来ます。もっとも単に水平線上の起き上がった夕焼けの夕べの雲としてであります。リンダよ、リンダ。御身を得て、得たとは。この二日間の神々の夢はなお冷たい今日の日まで続いているのでしょうか。御身は今は離れて、黙しておられる。一言の肯いも聞こえない。私はローマの聖ピエトロ大寺院で青い朝の天を見て、私の周りの生命が音を立てて、大風に取り囲まれるように膨張したとき、私は飛んで行く王侯の船に身を投じ、最も深い星座の許で、緑に榮える岸边を探さなければならないかのように、天を通じて小滝のように舞い落ち、石だらけの人生を通じて、迫りながら、壊しながら、運びながら、身を引き裂かなければならないかのように思われました。今やまたこうした気分であり、更にそれ以上に強く感じています。私は御身の許に飛んで行き、こう言いたいのです。『御身は我が名声であり、我が月桂冠であり、我が永遠である。しかし私は御身に値しなければならない。私は御身のためには、自らのためにする他何もすることはできない』と。古代では愛された若者は偉大でした。行為が彼らの優美女神で、甲冑は彼らの晴着でした。一 今日、私はバーヤ[バイア]湾や偉大なローマ人達の庭園や宮殿がまだ瓦礫や名前と共に横たわっている廢墟を見渡すとき、そして花々やオレンジの最中に古代の反抗的な巨人が、生温かい香りの風の中に、それで目覚めて、柔和にならずに、手に重たい、三つの大陸を動かした三叉の戟を持ちながら、強力な胸で北方の冬に、アフリカの白熱に、すべての傷に立ち向かいながら立っているのを見るとき、私の心全体が尋ねたものです。おまえもそうか、と。リンダよ、男とはこのような者以外で有り得ましようか。獅子は大地を越えて行き、鷲は天を通じて行きます。これらの王達の中の王は、その軌道を大地と天の中に同時に有すべきです。まだ私は何者でもなく、何も行っていません。しかしなおも人生が空虚な霧ならば、霧を登ったり、握ったり、砕いたりできましようか。御身が、御身ウラノスの一族よ、一人の男性を愛するならば、私はどの男にもたじろぐことはありません。しかし言葉はショッペが言うように、行動に比べれば、ヘラクレスの棍棒の鋸屑にすぎません。戦争と自由とが衝突することになったら、私は時代の嵐の中で御身に値するものになるつもりです。そして御身に行為と不滅の愛を捧げたいと思います。

この修道院の庭の神々しい高台に立っていて、比類のない緑の天界を下に見ています。太陽はすでに湾を越えていて、船の下にその薔薇の炎を投げかけ、宮殿や人間で一杯の岸边全体が赤く燃えています。一 私の下の長い拡張された通りでは祭典の雑踏の馬車が

すでに上がって来ており、屋根は着飾った人々で一杯で、音楽に満ちていて、バルコニーやゴンドラでは歌のための神々しい夜を期待しています。私はここで一人っきりですが、それでも幸せで、痛みもなく懂れています。しかしリンダよ、四日前の私が、御身をまだ知らずに、まだ得ていない私が、ここに立っていて、この夜を、 — 黄金の海を、 — 快活なポルティチを、太陽と海とが炎で洗っているこのポルティチを、 — 金緑色のミルテで包まれた立派なヴェスヴィオを、陽光で一杯の灰色の灰の頭部を有するヴェスヴィオを、 — そして私の背後の、庭園から昇り、庭園に雨と降る花粉からなる雲で一杯の緑の平原を、 — 喜ばしい諸力の織り込む魔法の圏全体を、この光と生命の中へ浮かぶ世界を眺めていたら、 — そのときはリンダよ、御身がいなければ、この温かい浄福の中を冷たい苦痛の痙攣が生じていて、黄金の夕べの光の中、思い出が喪の仮面と共に過ぎたことでしょう。

リンダよ、いかに御身は私の世界を浄化し、拡大してくださったことか。今や私はいつでも幸福です。御身は、苦勞して収穫の仕事をする人生の重く鋭い鋤を、軽快な尖筆と絵筆に変えてくださった。この筆は神々の形姿を創造するまで戯れるものであります。今日私はすべての神殿とすべての丘とを、御身によって金箔化したように、より楽しく見たのではなかったでしょうか。そしてすべての美が、それは彫像の許に、あるいは画布に、あるいは歌う唇に、あるいは山頂に花咲こうとも、より豊饒に誇示しつて薫っていたのではないのでしょうか。それから私は小さな花から、花と咲くリンダの許に飛び込んだのではないのでしょうか。 —

何と雲の背後では暗い力が支配していることでしょうか。封印された命令をその力は我々に与えます。我々がその命令を後に、他の地で開封するようにさせるためです。いや私は初めてイスキア島のエポメオ山で私の命令を開かなければならなかったのです。すると一瞬が人生の上を過ぎて、永遠を生みました。蝶は女神をもたらしたのです。

夕方が沈んで行きます。私は黙しなければなりません。御身の夕べがいかなるものか知りたいものです。私の生は今や二つの時、御身の時と私の時から成り立っています。私はもはや私一人だけでは生きて行けません。 — 今日の日は御身にとって豊かで穏やかに過ぎて欲しく、御身の夕べは私の夕べ同様であって欲しいものです。太陽はわずかになおヴェスヴィオを赤く染め、島々はゆっくりと暗い海の中で消光して行きます。私は御身と語ることはなく、大いなる夕べを眺めています。しかしローマの時とは全く別です。浄福に私は私の目をただ夕焼けの輝く喧騒の中の御身の消えて行く島に据えて、エポメオ山の頂が夜、風化してもじっと見続けることにしましょう。それから快活に私の下の明かりで取り囲まれた色彩の墓地の中を覗くことにしましょう。 — 楽しげな歌声が薄明の中を移って行くことでしょう。 — 星々が愛らしく微光を放ちましょう。 — 私は歌うことでしょう。『私は一人っきりで静かであるが、しかし言いようもなく浄福である。というのはリンダが私の心を占めているのだから。私はただ愛から涙する、私はリンダの心を思うから』と。そして酩酊して山の花々の香煙の中を通って下って行くことにしましょう。

—

*

彼はゆっくりとナポリの自分の友ディーアンの許に戻って来た。彼の出会ったすべての祭典の悦楽、歓喜の音楽堂全体、その中では七弦琴の響く車輪[ハーディ・ガーディ]が目眩

を起こすほどに回っていたが、彼には単に自分の余韻に見えた。しかし普通はまず人間の外的感覺的弦に自分の内的弦が横して響くものである。彼はただますます遠くを欲して、更に、 — 可能ならば、 — 今夜ヴェスヴィオへ出掛けようとしたであろう。彼にとっては今、単に日中の時があるだけであった。愛と五月と共により温かい気候が彼の諸力のすべての春を目覚めさせるように見え、風は彼自身にすらはっきり分かるほどに激しく吹いた。ただ恋人を前にしてのみ、まだ過去で傷付いていたが、単に西風で、花粉の花を大事にするのであった。

さて彼は翌日ヴェスヴィオに登ることを欲し、その翌朝、前もって火山で日の出を見た後に、ポルティチでディーアンを待とうと思った。

第百十四周

彼は自分の旅を恋人に描写した。

ヴェスヴィオ山上での隠者の小屋で

「何故人間は跪いて、世界に、山々に、海に、宇宙に祈らないのでしょうか。人間は存在していること、自分が途方もない世界や自らを考えていることは、何と精神を高揚させることでしょうか。リンダよ、私はまだ一杯朝で満ちています。それにまだ崇高な地獄の上に住んでいます。昨日の朝私は私のバルトロメオと一緒に豊かに溢れる庭園の道を通って快活なポルティチへ旅しました。ポルティチは巨人の麓にエトナの麓のカタナのように接しています。いつも同じ偉大な、途方もないものと快活なものとの、自然と人間との、永遠と瞬間との、この崇高な国を経過する叙事的ギリシア的融合です。 — 別荘と、永遠の死の松明に対峙する朗らかな平原、 — 古い神聖な神殿の柱の間を陽気な踊りが、卑俗な僧侶と漁師が、通って行きます。 — 山の烈火の塊が葡萄園の周りの塁壁として高くなっており、生きたポルティチの下には空ろな死せるヘルクラネウムがあります。 —

海では溶岩の岩礁が生長し、花々に黒い爆破砲材が投げ込まれています。登山は最初私の魂の爽快さでした。長い山は一杯の雲にとって一つの避雷針となっていました。夜遅く、永遠の登山で私どもは夕陽を享受することなく、灰の上の夕陽の赤い輝きの中、素早く徒渉しなければならず、ここ隠者の許に着きました。月はまだ昇っておらず、御身の島はまだ見えないままでした。しばしば部屋の床の下では雷が轟きました。そのとき突然隠者が私の老ショッペのことを思い出させてくれたのです。彼はあるときびっこの旅行者が狼狽り獵犬を連れて来てこう語ったと話してくれたのでした。ヴェスヴィオは絶えずごろごろ鳴る雷馬の馬小屋だ、と。これはすべての面からショッペに違いありません。

真夜中、リンダよ、月がアペニン山脈に昇って、天から恍惚たる長い銀の視線で眺め、私が御身のことを考えていたとき、私は立ち上がってこっそり外に出て、また御身が住んでいる所を見たのです、リンダよ。外は至る所静かで、私はさながら地球の天の軌道上で轟いている雷の音を聞く思いがしました。 — 私の周りの菩提樹の影はしっかりと緑の芝の上で眠っていました。 — ヴェスヴィオの煙りが純な大気の中に昇って行きました。

— 蒸気のかかった海の上では不思議に月が輝いていて、私は苦勞してようやく御身の島の孤独な山が、高く青空の中へ引き込まれて行くのを探し、見つけました。山の周りの星々の下で、銀色に花咲ながら、私の心にとって微光を発する神殿の尖塔でした。 —

『あそこに、タボルの山に、貴女が住み、微睡んでいる。エリュシオンの神々しい女性よ』と私は自分に言いました。 — 私の周りには諸世紀の灰が、棺の静寂があり、ただ時折かの山に墓塚を投げつかるようなごろごろと言う音がしました。 — 私は死の国にも不滅の国にもいたわけではなかったのです。 — 国々は雲となって、 — ナポリとポルティチは覆われて横たわっており、広大な天の青が私を取り囲んでいました。 — 高い夜風が火山の噴煙を押し曲げ、交互に照らし出しながら長い雲の中に純なエーテルを通じて導いて行きました。そこで私はイスキア島の方を見、天の方を見ました。リンダよ、率直に言います。聞いてください。私は御身を果てしもなく愛していた敬虔なりアーネに頼んだのです、今や御身の許に漂い、御身にかけて恵んだ幸運を御身に授け給え、と。 — — 突然山の雷鳴が全く静かになり、星々がより明るく輝きました。私は静寂と人生とで身震いし、私は小屋に戻りました。しかし長いこと御身が幸せになるであろうとただ考えて、恍惚として涙しました。

朝となりました。朝の薄暗い冬の中、私どもは炎の峡谷、煙りの門への旅を始めました。燃え尽きて、蒸気を発する町の中を行くかのように洞窟に次ぐ洞窟、山に次ぐ山を通り過ぎて、永遠に働く火薬製造所の震える大地の上を通過して火薬庫に向かって行きました。とうとう私はこの炎の風の食道を、また一つの山を有する大きな白熱する蒸気の谷を見いだしました。 — 火口の一つの風景、最後の審判の日の工場、 — 砕けた世界の破片、凍った破裂した地獄の川に満ちていて、 — 一つの時の途方もない陶片の山、 — しかし邪悪な霊のように無尽蔵で、不滅で、冷たい純な天の下、自ら十二の雷月を生んでいるのでした。

より深紅に突然蒸気が昇り、より荒々しく雷が轟き合い、より熱く重い地獄の雲が煙りを吐き出しました。 — 突然、朝風が入って来て、山から下に炎のカーテンを引きずって行きました。 — — すると明るい善意の太陽がアペニン山脈に昇っていて、ソマ山とオタヤノ山、ヴェスヴィオ山が平和の輝きの中で咲きました。そして世界はゆっくりと山脈、島々、岸边と共に太陽の方へ開けて行きました。創造の指輪が海の上に金色に私の前にありました。光線の魔法の杖が国々に触れるように、国々は生き生きと上昇して来ました。 — — そしてヴェスヴィオの昔からの国王の兄弟たるエトナが黄金の玉座の上に座っていて、その国と海とを眺めていました。 — — そして雪のように山々の明るい一日が海の中へ転がって来て、光輝に溶け、広大な幸せなカンパニア地方や暗いカスターニエン[栗の木]の谷へ流れ込みました。 — — そして大地は見通し難くなり、太陽は広大な光線の網の中、最も美しいエーテルの中の甘美に幽閉された世界を更に引きずって行きました。

リンダよ、そのとき見事に御身の島は広がっていて、誇り高く海の中に落下して来る朝焼けと共に休息していて、高く帆を上げた軍船のようで、 — — 一羽の鷺、雷神の鳥たる鷺が浄福な広大さの中へ飛んで来ました。あたかも私の心をその胸の中で御身のエポメオ山に届けるかのように。 — — 鷺の後を追いたいと私の精神は申しました。熱い大地は雷鳴を轟かせました。そして煙りが私を包みました。 — — 私は死にたい、そして鷺の後を追って、今やイスキア島にありたいと願って、...」。

*

ここで激しく高揚した魂は休止した。彼は山腹をポルティチの方へ降りて行った、あるいは滑って行った。前もって互いに確認していた家の中で、彼は自分の友に会えると思っ

ていた。しかし彼はディーアンもリンダからの期待していた手紙も見いださなかった。歩行と覚醒と白熱とで疲れて、彼は涼しい静かな部屋で一つの白昼夢に陥った。彼が目覚めたとき、イタリアの昼の真夜中が彼の周りであった。午睡時[Siesta]である、――すべてが暑い静かな明かりの中で休らっていた。――天には雲雀もなく、――彼の窓の隣の緑の日傘は、つまり唐檜は、不動に大地の中に立っていた。ただポプラだけが、その腕の中にあつた葡萄の新たな花だけを秘かに揺すっていた。――そして、梢から掛かっている木蔭が少しばかり揺れていた。――このような影の小枝は、彼がリアーネを待っていて、当時イタリアのことを考えていたとき、かつてリラルのカルトンの部屋で戯れていたものであつた。――ポルティチからナポリへの大きな平らな単純な庭が、村々や花の小森や別荘からなる波で洗われた庭園の織物が、彼の目を花々を越えて海の彼の樂園の方へと導いた。――憧れに満ちたこの孤独で静かな時間のせいで、無限に彼の美しい心は柔らかくなった。彼は中断していた手紙を次のように終えた。

ポルティチにて

「リンダよ、私はまた御身に一層間近になっています。しかし私どもの間の距離はここではこの静寂の中、とても遠くに思われます。リンダよ、私は御身を間近でも、遠くでも、痛みと共に愛しています。――まずは何という痛みと共に御身を失うことになりましょう。――何故私は御身の愛にかくも確信を抱けるのでしょうか。あるいはかくも確信を抱けないのでしょうか。小声で御身の心は私に語りかけます。小声の音楽や愛は、離れたそれに等しいものです。――離れた音楽や愛もまた小声のそれに等しい。私の横の雷神の崇高な柱の椅子が、私をととても感動させるとき、あるいは私が余りに生き生きと、一つの町が一つの棺である私の下の空ろな亡きヘルクラネウムのことを考えるとき、泣きながら重苦しい気持ちで海を越えて、御身の住んでいる静かな島を見つめています。――御身が私の心から汲み上げることがすぐではなくて、再会までの時間が長くなっては困ります。何故、御身の手紙の欠如は、突然より大きな痛みを、いや最大の痛みを魂の前にもたらすのでしょうか。何故私はこう考えるのでしょうか。私どもの額の最も深い痛みの線、人生の皺は、世界精神が引く途方もない設計図からの細かい線に過ぎず、どんな額や喜びをその幸運線が切断するか頓着していない、と。――この線がいつか私どもの愛を通じて生ずることになれば、――いや私の早まった痛みをお許してください。この人生において、驟雨と陽光とのこの交替において、この痛みは多分許されることでしょう。...」

*

ここで喜びが中断して、ディーアンが一人のイスキア人を連れて来た。彼はリンダから一通の手紙をもたらし、彼の手紙を持って行った。彼は急いで読み、自分の手紙に歓喜の涙の如く更に言葉を添えた。「明後日私は島へ行きます。一つの心に比べれば地球は何でしょう。御身は力強く、私の花咲く実存のすべてを天の中へ持ち上げてくださいます。それは崩れるとき、御身の上に崩れます。ご機嫌よう。私は熱い油も恐れなければ、プシュケの炎も恐れられません」。――ここにリンダの手紙がある。

＜私ども二人はとても静かに暮らしています。可愛い逃亡者が山々や宮殿を散策に出掛けて以来そうです。私どもはほとんどこの方について多すぎるほどに語り、その上お喋り

のアーガタを呼び寄せて、この方の旅について尋ねることさえしたのです。貴方のユーリエ[ユリエンネ]はリンダにとって祝福と援助に満ちています。まだかくも明瞭な、明確な、鋭く透視して、それでいて冷静な性質の方を見たことはありません。この方はただ与えながら愛し、愛する以上に与えています。彼女は確かにヴェヌス・ウラニアがその想い人に贈る痛みを察知していません。しかし彼女は生来の母親で、生来の妹です。私は時折彼女に尋ねます。何故あなたはすべての兄弟やすべての孤児を有しないのか、と。

地震以来私は少し病気がちです。私はひょっとしたら、愛すること、死ぬことに慣れていなかったのかもしれませんが。私は一冊の哲学の本を手にしてあります。一 詩人達は今は余りに激しく襲って来るものですから、一 そして夙に海を飛び越えたときでも、この本に従おうと思います。私は今立派な『ギュイヨン夫人の生涯』を読んであります。この女性はどのように愛するか知っています。一 神的なものに対するこの神々しい情熱、神へのこの自己没入、一つの大きな理念の中での永遠の生と存続、一 愛による生長する神聖化と、神聖化による生長する愛が見られます。私は本のことを忘れ、目を閉ざして、夢を見、泣き、そしてあなたを愛しています。アルバーノ、もっと早く来てください。今山々や廢墟で何を探そうとしているのですか。再会しないのですか。男性達はぼんやりしています。ただ女性達のみが愛します。神であれ、残念ながらあなた方男性であれ、愛します。ギュイヨン夫人や聖テレサ[Teresa de Jesús(1515-82)]や、若干散文的なブリニヨン[Bourignon(1616-80)]は神をどんな男性にも見られないほどに(聖なるフェヌロンは別にして)愛しました。男性は至高の存在に対しても、最も美しい存在に対するよりも良く付き合っているわけではありません。アルバーノ、あなたは私とは別な憧れを有しているのですか。あなたは地上で私以上のものを求めていますか。私よりもっと樂園の中で求めるものがありますか。そうであれば言ってください。私は愛を止め、死にましよう。まことに、あなたがあなたの妹を抱擁するとき、私は嫉妬してあなたの妹になりたくになります。そしてあなたの友のショッペ、あなたの父親、あなたの愛する一切のものでありたい。あなたが愛するのであれば、あなたの「自我」、あなたの「天」全体、自我の中のあなたの「おまえ」全体、汝の中のあなたの「自我」でありたいと思います。

私は貴方に私の自分史を幾つか話しましょう。長いこと私は静かに地球上を行きました。一 私は諸宮廷や諸国民、諸国を見て、大人の人間は単に「人々」に過ぎないことに気付きました。これが私に何の関係があったのでしょうか。何についてもこれは悪いと言うべきではなく、これは愚かだと言うべきです。一 そしてもはやそのことは考えません。私が愛さないもの、それは私にとって存在もしていません。そして長く憎悪したり、軽蔑したりする代わりに、私はそれを忘れてしまいました。私は気位が高いとか空想的であると叱られ、誰にも納得させることができなかつたのです。でも私は自分の内部を保持し、涵養してきました。理想は放棄されてはならず、さもないと人生の神聖な火は消え、神は復活することなく死んでしまうからです。私は男性達を見て来て、いつも男性達の違いは単にこうでしかないと思いました。一方の男達は繊細で、分別があり、優しいが、情熱もなく、情緒もない。他の男達はとても心情があり、熱烈であるが、愚かな粗野さを有している。しかし男達は皆、利己主義者である、と。確かに男達は、彼らの心が満ちて、減少に向かっていないとき、まさに満月のごくわずかの斑点を見せるものです。私の偉大な母親の教えの傍らに、貴方の偉大な父親の傍らに、立てる男性はいなかつたので

す。貴方のロケロールに対しては愛することも、憎むことも、敬することも、臆することもできませんでした。もっともほとんどこうしたことすべてにまとまりそうですけれども。

いつも旅していたことは多くの経験ともなりました。旅するとよく一層冷静になるものです。岸边に立っていて、偉大なローマ人があるときはバーヤに、あるときはドイツに、あるときはガリアに、あるときはローマにいたのであり、ローマ人にとって地球は一つの大都市となったことを考えると、ローマ人にとって人間が大衆となったことは容易に理解できます。旅は仕事で、これは私ども女にはいつも欠けているものです。男性はいつもすることがあって、魂を外部に送ります。女達は一日中家の自分の心の許にいなればなりません。スイスで私は（イドイーネ侯爵令嬢のように）小さな莊園を経営しました。日々達成する小さな目標を通じて、神の王座のように高みにある大きな目標について諦め、慰めが得られると承知しています。

そのとき私は丁度人生のこの風の周にモンタンヴェール[モンブランの北壁]の「氷の海」の所に来ました。絵のような山々や平野、峡谷には私はスペインで飽きるほど、スイスの氷の山々の許でも、見ていました。しかしこの高さの氷の海、孤独な太古の青緑色の海、赤い岩で囲まれた、嵐の中の活発な湧き立つ波に満ちた一つの広大な砂漠、これがある突然の死が、一つのメドゥーサの頭部が、人生の最中、凝固させたのです。一つの雷雨が、普段私には恐ろしく思われるのですが、当時炎を伴って山を昇って来ました。私はそれに気付かず、私の魂は石化した嵐の静寂に、一 氷の休息に没頭していました。私は驚いて、いつになく泣いて、山を降り、同じ週に私は遊びのような莊園の仕事を置いて、旅に出ました。

しかし私は天候のお祈りはせず、暗く冷たい存在の下の雨の谷に不平も言わず、暮らしていました。そして運命によってエポメオ山に導かれ、そこで神々は、運命が変わるように欲せられたのでした。

しかし今やそのままでなければなりません。稀有な者が稀有の者に対して、御身がそうだと述べたのであれば、二人はただ互いを通じて、互いのためにあるものです。明かり[ランプ]を持つプシュケ[Apulcius による]は、明かりがその巻き毛やその手や心を掴んで燃やしていて、一方そのプシュケが浄福に微睡むアモールを眺めているとき、そのことを感じないことでしょう。しかし明かりからの熱い滴り出た油の滴が、その神に触れ、神が目覚め、プシュケから怒って、永遠に、一 永遠に、一 飛び去るとしたら、一 哀れなプシュケ、一 溶けた氷の海で死んでも、プシュケの何の役に立ちましょう。一一

男性は失われた愛の痛みを感じたことはないのでしょうか。なお千倍もより苛酷に男性は一人の女性を苦しめていると知っていきましょうか。どの男性が忠実さを有していきましょうか。正しい忠実さ、徳操や感受性ではなく、炎そのものである忠実さを、実存の核心を永遠に活気付け、維持する炎を有していきましょうか。一

私は病気です、アルバーノ。そうでなければ何故こうした悲しい考えに至るのか分かりません。私は内奥ではとても静かです。私は単に弦をお見せし、気分はお見せしなかった。私どもは未来を見て働きかけ、眺めるべきではなく、間近の現在を見て、働きかけるべきでしょう。いつか時が、つまりあなたが私をもはや正しく愛さないという時がいつか生じても、一 私は後悔もしなければ、辛抱もしませんが、一 私は今よりも一層静かになり、一層強く、一層簡潔になることでしょう。恋しい男性のために死ぬか、一 この

男性を通じて死ぬかする他に何かあるでしょうか。

優しい方、すぐにお出でください。私どもの周りは素敵です。雨が降って、世界がすべて歓声を上げ、陽光の滴を見ていて、天からの飲み物[飲料用雨水]を収集しています。私はあなたのために茶碗や花瓶を急いで取り出しました。お出でください。あなたにオリーブの葉とミルテの小枝を差し上げましょう。頭には薔薇と堇を巻きましょう[シャルロッテ・フォン・カルプの諸手紙参照]。お出でください。他には気付かないうちに、何度もポジリッポの方を見ている始末です。 —

L.]

「追伸。恋敵もポジリッポの方を見て、再会を楽しみにしています。でも慌てないでください。愛しい人、さようなら。

J.]

*

アルバーノはこの性格の中に、彼が以前リアーネの生涯の際にいつも愛する者に対してなさざるを得なかったすべての要求の静かな正当化と実現とを見いだしていた。しかし彼は無邪気な自分の愛の中で、まさにこの人物には彼の手紙の中で記されている戦争と行為への憧れが気に入るはずがないということに気付かずにいた。

さて彼は墓地の地下の町を訪ねた。さながら火山のケスティウスのピラミッドの傍らにあるものである。ディーアンは彼と一緒にヘルクラネウムを骨董品の辞書として回り、古代人の家政全体を碾き方[描き方とも]に至るまでめくって見せた。しかしアルバーノは彼の友よりも一層、この現在の最中に住む過去に、静かな家々や夜の露地に、去って行く絶望の頻繁な痕跡に感動を覚えていた。「これらの人々は皆今やヴェスヴィオがなくても死んでいるも同然ではないだろうか」とディーアンは快活な国で快活に尋ねた。「私はむしろこう貴方に尋ねたい」（と彼は続けた）「建築士は、この芸術の陳列室、芸術の町から出て来て、貴方のドイツで、地上の最大の廢墟の後、貴方の侯爵の庭園のために、哀れなつまらぬ代物を指示することに大いなる喜びを抱けるものか、と」。彼らはある暗い玄関に陶器の仮面を見つけた。それは墓場に置くもので、その背後に明かりが目のようにあった。アルバーノはそれをまじまじと見つめ、言った。「我々は墓場の土製の閃光を発する仮面ではないか」。 — 「何てことを言う。厭わしい考えだ」とディーアンは言った。

更に長いこと外の生き生きした陽光の中、暗い想念が彼の後を追いかけてきた。輝かしいポルティチの側ではヴェスヴィオがその上に[火刑用]薪の山、死の天使として立っていた。彼は、美しいイスキア島はいつか地震の機雷で滅するというハミルトンの予言[典拠は確認されないらしい]を考えていた。リンダの手紙すらも自分の喪失の可能性をただ描いていて、彼の気分を重くした。

ナポリで彼は更に若干、珍しいものを目にした。それから翌朝、波のエデンの方へ船出した。

第百十五周

彼らが再び相まみえ、抱き合ったとき、どの幸福な心も予見していた以上に、より恍惚としていて、より結ばれていた。リンダは静かに穏やかに座っていて、美しい青年を見つ

め、彼と妹に語らせていた。妹はよく中断しては、二人に接吻していた。彼はリンダの手紙にとっても喜んだと語った。男達は女達よりもいつでも書かれたものを重要視する。リンダは無関心に語った。「何てことないわ。書かれて読まれたら、忘れてしまうべきね。貴方の手紙の中には時折やはり北方的偽ダイヤがあります」。 — 「伯爵令嬢は（とユリエンネは言った）「自分以外面と向かって誰も褒めないのよ」。リンダは若干上機嫌で嘲笑に耐えた。アルバーノは、自分の知らない点で、よく彼女の気に入ったり、気に入られなかったりしていたが、愛のために容易に大目に見た。友情の場合、侮辱された虚栄心が許されることはより難しい。

「でも確かに」（とユリエンネは突然陽気な振りをして真面目な話しを取り戻した）「フランスへのあなたの亡命計画は偽ダイヤです。あなたにそれが許されると思われませんか。ホーエンフリースの侯爵令嬢の妹が民主主義的戦役へのパスポートを兄に出すなんて。有り得ません。あなたを愛している人間なら全くできません」。 — アルバーノは微笑んだ。しかし仕舞には真面目になった。リンダは静かで、目を伏せた。「私に」（と彼は穏やかに半ば真面目に半ば冗談であるかのように言った）「地図でより良い行路を示してください」。 — 「邪悪な交通壕かな」（と彼女は戯れて言った）「それは良くありません」。今や彼女は貴族的、女性的、侯爵の色合いで、三色の色粘土で[フランス国旗の暗示]、すべての炎、噴煙、波の輪郭を描いた。革命のヌオヴォ山[1538年噴火で生じたバーヤ湾岸の新山]が地底から隆起したときの色合いである。そして付け加えた。「それよりは無為の伯爵がましよ」。 — 彼は赤くなった。以前から彼にとって男性的力に対する女性的束縛、愛して曲げて閉ざし花々にすること、愛の指輪を[奴隷の]ガレー船の輪へと不当に改鑄することは、とても恐ろしく厭わしいことであった。 — 「単に見本市の週であり、仮装舞踏会である一つの世界で、開市権や無礼講さえ有しないことは、ひどいことだ」とかつてシヨッペは言って、彼は忘れたことがなかった。彼の琴線に触れたからである。「妹よ、おまえは私の同胞[弟]でないか、あるいは私がおまえの同胞[姉]でないかだ」（と彼は言った）「そうでなければ、我々はもっと容易に理解し合えよう」。リンダの手が彼の手の中で戦き、彼女の目がゆっくりと彼の方へ上げられ、すぐに下げられた。 — ユリエンネは性別の非難で当惑しているように見えた。アルバーノは鉄の心臓で蠟製の心臓を潰した時期のことを思い出して、より明るく、冷静に言った。「ユリエンネ、おまえにいやとは言いたくない。おまえがそれを承諾と見なしさえしなければ」。 — 自分は矛盾を容易に未来の背後に隠すことができようと彼は思い付いた。ヨーロッパでは戦争はまだ確定していなかったのだから。しかし彼はそのことを十分に正直で誇り高くはないと思った。

— 「案じないで」とリンダが彼女に言った。「そうね」（とユリエンネは弾んで言った）「ただあれこれ考えることは許されるわね。 — 何とでも言えます」、そしてとても真面目に見えた。「更に二日ほど」（と彼女は付け加えて、真面目さから逃れようとした）「私どもはこの島に神々のように、いや女神達のように過ごせます。もっとも神の役はいつでもこなせるけど、ただ女神は無理。女神はもっと背が高くなければ。私は単に果てしない善意からの伯爵令嬢の裏箔にすぎません」。というのはユリエンネの形姿は堂々たるリンダの隣では生彩がなかったからである。

しかし愛しい人間達の戦いは和平条約が結ばれることなく、それ故武器を持ったままであった。ヴェスヴィオが熱い石を投げるように、人間も自分の中で非難を長く上げ、投げ、

交互に飲み込み、遂には運任せのましな方向へ縁を越えて追い出してしまふ。

アルバーノの中では多分に、大きな戦争に対する、戦争についての、小さな静いへのリンダの沈黙は何を意味するのかという問いかけが生じたことであろう。しかし彼はその問いかけを取り出さなかった。自分の決意の不変さを自覚して、彼は妹に対しより穏やかになった。妹はこのことで一度とても傷付くであろう、と彼は思った。かくて彼は人生の冷たさと温かさの交替で穏やかになった。宝石が急速に温められ冷やされると薬に変わるようなものである。

速やかに美しく最後の歓喜の日々は島を過ぎて行った。島は雨の後、ドイツの庭園のように緑色となっていた。優しく涼しい大気、 — ミルテやオレンジの香り、 — 温かい天の個別の輝く雲、 — 岸辺の魔法的煙り、 — 朝と夕べの黄金の太陽、 — そして愛と青春とがこの唯一の時を飾り、この時に王冠を授けた。高く花と咲く大地の上では愛の犠牲の炎が青い静かな天の中へ燃え上がった。二つの鏡が向かい合って立って、一方の鏡が他方の鏡を、自らと世界とを写し、他方の鏡がこれらのすべてを、この絵画も画家も写すように、アルバーノとリンダは向かい合って休らっていて、魂を魂の中へ引き込み描いていた。モンブランが素晴らしく静かなシェード湖のより青ざめた天の中へ自らを写して見せるように、アルバーノの全体の確固とした明るい精神はリンダの精神の中に写されて立っていた。彼女は言った。彼は実直な者であると同時に高貴な者であり、珍しいことに一つの意志全体を有している。ただ、しばしば男達がそうであるように、自分が愛するよりももっと多く愛そうと欲しており、それ故利己心の余り自らの静かな原罪に十分に気付いていない、と。この最後の非難[利己心]に対してほど彼が怒って、激して逆らうものはなかった。そしてこの非難を伯爵令嬢の他には誰にも許さなかった。彼はできるだけ強く反駁した。しかし彼女の意見は最良の取り消しでも仮死体にすぎず、次の時間にはまた生きて彼に向かってきた。

彼女を通じて、彼は彼女自身よりも自らのことをもっと詳しく知ることになった。彼は彼女のことをウラニアの一族と呼んだ。彼女が彼には天のように同時に間近で遠くに思えたからである。彼女はこの豊かな月桂冠に対しては何も異存はなかった。人間を神々しくし、その人間に対する愛を無限なものにする天上的な果てしのなさというものがある。かくて古代人は友情を夜とエレボス[冥界]の娘とさせたのである。アルバーノがリンダの広大で豊かな精神を見回すと、 — 彼女は、同時に自分の愛に生きながら、すべての他人の愛を守りながら、それでいてさながら知識欲に酔って、 — 同時に一人の子供、一人の男、一人の乙女であって、 — しばしば舌先では苛烈に大胆に言って、宗教や女らしさに賛否を言い、それでいてその双方に極めて優しい子供らしい愛を一杯に抱いていて、 — 恋人の前で熱く溶けながら、冷たく接触されると素早く凝固して、 — 何の虚栄心もない、それは彼女がいつも神々しい理念の王座の前に立っていて、人間は決して神の前では自惚れることはないからで、しかし自らにすべてを信頼していて、自らや他人と比較せずには、誰に対しても謙虚であったことはなく、 — 男性的な大胆な率直さに満ちて、有能さと策謀的世間知への敬意に満ちていて、 — それでいて利己心はなく、楽しい人々のことを子供らしく喜んで、人間に対する格別な心配も注意も払わずに、 — 願い事では変わりやすく、意志に関しては不屈で、 — しかし永遠に、精神界の太陽と月に対し、品位と愛に対し、自らの心と恋した心に対し、目を向け、命をかけている。

ー アルバーノはこうしたことすべてが眼前で戯れ、活動しているのを見ると、さながら単純な、それでいて果てしない海の上で、動揺しやすいが、それでいて全能な海の上で生きることになった。この海の境はただ境のない明快な天なのである。

三人の愛する者達の天には遂に旅の日の朝焼けが生じた。友の両女性によって、アルバーノは彼女達をナポリまで、家臣達が彼女らを待っているナポリまでただ同伴し、ーそれからローマで一度偶然に、ーそれからイーゾラ・ベッラ[島]でこれを最後に偶然に出会って良いと定められた。世間体への味気ない屈服で、これをしかしリンダはユリエンネ同様強く要求し、これに対してはアルバーノさえも、同じ魂の市民的青年よりもその生まれで身分的強制へと強化されていたのであるが、すべての関係の重いヴェールの下、容易に切ない承諾に至ったのであった。ユリエンネがより細かいすべての規則について決定を下した。彼女はすべての旅で伯爵令嬢の仕事の代理人であった。令嬢は、ユリエンネが言うには、自分の帽子を買うのに十分な頭を有していず、せっかちで、金のことを忘れ、夢想的であるということであった。妹はとても元気で、すっかり立ち直っていたが、しかしこう言った。島の三十五の熱い鉱泉であっても、自分の治療のためには、幸福の余り流した歓喜の涙の半分ほども役立たなかったことであろう、と。

旅立ちの朝、彼らの周りではすべてが奇妙に見えた。明るく温かい雲が銀色に滴った。

ー 太陽が二つの山の間を射し込んできた。ー 歓喜の島人達は雨の収穫の下、あるいは滴運びの下、新しい民謡を歌っていた。ー 一方彼らの友人達は彼らの歓喜の輪の波から引き抜かれることになった。アーガタは、自らを冷やすために一匹の蛇を手を持って、岸边に立っていた。アルバーノはその際、説明し難い苦痛を感じた。今やエポメオ山から雲の天が分かれた。そして輝く雲の切片がゆっくりと彼らの前をアペニン山脈の方、北の方へ移って行き、天の影が速やかに軽快に蠢動する波の先端を滑って行った。

「ずっと」（とアルバーノは、西の方へ戻って浮かぶ島の方を見つめながら言った）「御身の山の残らんことを。不幸な浄福者達の本から最も美しい頁を引き千切ることのなからんことを」。ー 「私ども皆が」（とリンダが言った）「いつかまた戻ってきて、この美しい大地を求めたら、どんな気分になりましょう」。ー そのとき高く弧を描く虹を彼らは見た。虹は半ば島の上に、半ば波の上に立っていて、波は虹をアーチ状の多彩な噴水のように岸边へ投げ出しているように見えた。「私どもは」（とユリエンネはうっとりとして言った）「平和のアーチを通して行きましょう」。この言葉と共に雨と色彩の王冠は消えてしまった。ただ太陽だけがその背後で輝いていた。

波の松明舞踏の中を船は進んだ。遠方が素晴らしく輝き、蒸気を発していた。「何故遠方はかくも力強く、魂を捉えるのだろうか。間近さと同じ色彩で描かれているというのに」とアルバーノは言った。「それがまさに問題です」とディーアンは言った。強力に海は岸边に怪物の如くローマへの彼らの道全体を越えて広がっていて、波の鱗を上げたり、下げたりしていた。アルバーノは言った。「ヴェスヴィオに立って、山脈や海を見ると、何と小さく偽って狭小な人間は大地のこの二つの巨大なものを小さな肢体に名付けて分割し、あたかも同じ海が地球全体を取り巻いているのでは足りないようにしている」と。

彼の友の女性達は、余りに親密に陰鬱に動揺していて、何も答えられなかった。他人の視線を気にして彼らは言葉を交わせず、ほとんど視線も自由にならなかった。アルバーノが時の戦場たる、男を永遠に捉え、持ち上げる廃墟の岸边をより間近に見たとき、ー

古代の神殿や境界石を、古い船のように陸地で朽ちているものを、 — こちらでは潰れた巨大な神殿を、向こうでは下の海底上での町の露地を*1、 — 昔の偉大さの神聖な記念柱や燈台が空虚に消滅して古い自然の永遠に若々しい美の隣にあるのを見たとき、彼は自らの無常性の近接を忘れて、リンダに言った。リンダの目を彼はそちらに向けさせたのであった。「ひょっとしたら、貴女が今考えていることを推察できるかもしれません。つまり二つの最大の時代、ギリシア時代とローマ時代の廃墟は我々に単に他人の無常性を思い出させるけれども、これに比べると別の廃墟は単に音楽に似て、自らの無常性を喚起すると、このことをひょっとしたら貴女は考えられたかもしれません」。 — 「私どもはここでは何も考えないわ」（とユリエンネは言った）「私どもが去らなければならないということを泣けば、それで十分よ」。 — 「本当に、侯爵令嬢の言う通りです」とリンダは言って、アルバーノと一切のことに不機嫌になって言い添えた。「人生とはガラス製の天国の門以上ではありません。この門は私どもに最も美しいもの、すべての幸運を見せてくれますが、しかし開いてはいません」。

余所目の周辺という偶然のせいで、彼らは冷淡な風を装って別れ、巫山戯た運命の慣習に従って、大いなる過去を小さな現在で閉じざるを得なくなっていた。

アルバーノは、彼の感覚でできる限り早く、自分の周りの崇高な世界を旅した。モーラに着いたとき、ガエタである仮面の付いた革製の服一式が遠く海の中に浮いているのが見つかった、昇天した僧侶の服であったに違いないもので、死体もなく空であったのだけが不可解なものに思われたという奇妙な知らせを彼は耳にした。 — モーラでは遂に美しいイスキア島が、この高い天の山が香りを放っていて、上昇する極は他の南方の星座の中で、この温かい星座をも、幸運の恒星と共に長く彼の上で微光を発していた星座をも、覆った。短い春の最後の星が沈んだ。

これが人生であり、これが幸運である。それは戯れる月のように上弦と下弦から成り立っていて、ゆっくりと増大し、ゆっくりと減少する。 — その希望の点でも、その恐怖の点でも。 — 短い閃光が最も内奥の歓喜の満月であり、須臾の不可視化は最も内奥の荒涼の新月である。 — そしていつも軽快な戯れは月のようにその循環を新たに始める。

第三十ヨベル期

ティヴォリ — 諍い — イーゾラ・ベッラ — 子供部屋 — 愛 — 旅立ち

第百十六周

アルバーノはまたラウリア侯爵の許に立ち寄った。侯爵はこれまで新しい出来事のはなはだしい奔流の中で泳いでいて、アルバーノの不在をほとんど承知しておらず、再会を不思議がっていた。その間にフランスに対するドイツの戦争が確定されていた[1792年]。この知らせを彼は自分の孫に喜ばしい期待を一杯抱いて知らせた。このような戦争は大いなる場面を展開するに違いない、と。アルバーノも長いこと彼と一緒にこの高い奔流に巻

*1 バーヤ近郊。[Volkmann 参照]。

き込まれていたが、この知らせは自分に対するよりも妹に対して別様に敗北的に作用するであろうと後から思うことであった。しかし政治的ラウリアと交わした会話の中での英雄的情熱は、妹の愛に対する軽快な勝利を演じて見せた。

この友の女性達に自分の到着を知らせようと思ったとき、侯爵から、彼女達が泊まっていたというアルティエリ侯爵夫人から聞いた話では、すでに両女性はティヴォリへ向かったという知らせを彼は聞いた。この幕間の旅の友好的意図を察知しながら、何と幸せに彼は、愛と春とで輝きを発するローマから旅して、そして快活に自分の人生が花と咲く未来の方を、自分が二つの心を一つの心に抱くことを望んでいるティヴォリの方同様に眺めていたことか。

彼がティヴォリの町に着いたとき、飛泉[小滝]の方[Villa Gregoriana]へ炎の娘達が去っているのを知った。人間がテンペの谷とかジュネーヴの湖の前をぼんやり夢を見て、天と地の水の像の前の岸边を通り過ぎるように、周囲の花と咲く原物が人間を囲み、燃やしているからであるが、同じように人々のいる風景の岩や丸いウエスタ[竈の女神]の神殿や流れ込み合う谷がローマから神殿まで滑っていて、これらの列が、一人の恋人の女性が生き生きとその中で花咲き、豊かな世界で一つの世界を圧迫している若者の心の前を単に夢の像として水の像として滑って行った。

彼は多様な景色の許、迷い込んで、最も美しい景色を見つけられずにいたが、短い、薄黄色の立派な服の人間が、しなびた顔をして彼を眺め、絹服の腕で飛泉[小滝]の方を指し示して、尋ねてもいないのに、こう言った。レディーをお探しなら、大きな飛泉の許にいる、と。

アルバーノは黙っていて、更に進み、二人を見つけ、背の高い方はリンダと分かった。とうとう三人の人間は互いに会い、見だし、抱擁し、立派な水の渦は歓喜へと散って行った。リンダは愛の優しい言葉を述べて、黙していると思っていた。というのは奔流からの美しい雷雨は蝶のように優しい音節を砕いたからである。彼らは互いに聞いていず、自分達の音声に憧れながら、五つの雷鳴[一つの大滝と四つの小滝]に囲まれて、愛と喜びで溢れる流涕の目をして並んで立っていた。聖なる地で、ここではすでに何千もの心が神聖に燃えて、浄福に泣き、人生は偉大であると言わざるを得ない所であった。上の太陽の中、快活に堅固に町が川の火口を越えて輝きを放っていた。一 気位高くウエスタの崩れた神殿が、アーモンドの花で飾られて、その岩から、神殿を崩す渦まで見下ろしていて、そして神殿の向かい側では渦巻くアニオ[アニエーネ]川が一気に、天と地で偉大なものをすべて、つまり虹、永遠の閃光と雷鳴と雨と霧と地震とを奏していた。

彼らは互いに進む合図をして、より静かな谷を探すことにした。そのとき兄とか妹とかリンダという言葉は何と楽園の新しい人間の音声のように響いたことか。ここで、彼らが新しい滝や稲妻、色彩で一杯の丘に登る前に、彼らは互いに彼らの旅や知らせを語り合おうとした。ユリエネは楽しい知らせを披露した。自分の兄、侯爵はまた治癒の見込みが生じていること、彼の断言によると亡き父を目覚めた中で見て、その父が彼により長い人生を約束して以来元気になっている、と。美しいリンダは、自分の恋人を長いこと探していて、とうとう見いだした覆われた女神のように楽園で花咲いていた。彼女はしばしば彼の手を取って、その手を自分の目や唇に押し付け、彼が彼女かユリエネと話しているとき、ほとんど聞き取れないぐらいにささやいていた。「愛しい方、一 優しい方」。

ー ー 帯については彼女は黙っていた。というのはどの一帯についても、彼女はそこを後にしてから初めて語ったからである。

ユリエンネは兄の回復をとっても喜んで、あらゆる冗談を始めて、ナポリから自分のルートヴィッヒ[ルイージ]に病気への無駄な特効薬を送ってしまい残念だと言い、最後にアルバーノに尋ねた。「カルディートという名前の若者を知らないですか。この人はあなたと面識があると言っているの」。ー 彼は知らないと言い、しかし小さながっしりした人間がこちらで自分のことを知っているように見え、飛泉[小滝]を指示したと語った。ユリエンネは憤慨して言った。きっとハールハールの皇子で、ルイージの死と王座を意地悪く望んでいる。彼はティヴォリのモーデナ公爵[Villa d'Esteの所有者]の家に住んでいて、きっと私ども皆のスパイとしてうろついているのだわ、と。自らこの厭わしい不協和音の後、また調子を戻すために、カルディートについての問を続けて、言った。「とても美しい頑丈なコルシカ人で（皇子は生きた奇形で）、あなたに本当に真剣に戦いを布告していた」。

「多分戦いとなろう」とアルバーノは言って、すべてを察知して、ー すべてを語った。カルディートは、彼が以前ガリア[フランス]との戦争のことで仲違いしたかのコルシカ人であった。「兄上、まだ本気なのですか」とユリエンネはアクセントを延ばして言った。「今は格別にそうだ」と彼は決然として言って、諍いを即座に排しようとした。激しくリンダは彼の手を目に押し付け、あたかも目をそれで覆おうとしているかのようにであった。「それではあなたの裁判を私と行いましょう。あなたが分別のある限り、そしてあなたの法的根拠を聞きましょう。しかしまず丘に登って、何か眺めることにしましょう」と妹は言った。

丘ではー 至る所奔流が傷付いた鷲のように大地に翼を広げている閃光の谷の緑の前に、ー 花の上に落下して光る三つの飛泉[小滝]を前にして、ー アルバーノは動揺し、感激して始めた。「私が有するのは、ただ一つの理由だ、妹よ。ー 私はまだ何者でもない、ー 私は詩人でもなければ、芸術家でもなく、哲学者でもない、無だ、つまり一人の伯爵だ。しかし私は多くの者への諸力を有する。何故それを言うてはならないのか。ー まことにダヴィンチが、あるいはクライトン[James Crichton(1560-80)神童]が一切の者であり、あるいはリシュリュー[Richelieu、文芸にも励んだ]が、彼は政治的王座を主張しているが、それでも詩人の王座に昇りたいのであれば、別な者はもっとささやかな願望を持って許されるのではないか。神かけて。本来一人の人間は一切のものでありたいと欲するものだ。他に仕様がな。そこに憧れ、目指す。そして内心の隠された心が泣いて血の滴を垂らす、それは人間の手では拭えないもので、単に必然性の高い鉄の柵のみが押し止めるものだ。ー 妹よ、リンダや、私はこの地上でまだ何をして来たというのだろうか。ー

「そんなことを聞くなんて、そんな問いは神様の前で十分だわ」とユリエンネは傷付きやすく誇り高いこの青年の謙虚さと、その怒ると感動しているように響く美しい声とに心動かされて言った。「言葉、言葉とは何だろう」（と彼は言った）「無論何かをしないうちに、ただそのことについて考え、言うことしかできないということは恥ずかしいことだ。哀れな人間には、他に仕様がなくて、行為以前にそれを言葉というみつともない蠟の中に流し込んで、立像のように型を取らざるをえないのだけれども。いや、リンダよ、ここでは至る所、我々の周りに、言葉や願望の代わりに、行為があるのではないだろうか。ー

私はそれに一本の腕も、一つの心も、一人の恋人も、諸力も他の者同様に有していないだろうか。腐って脆いスペインやドイツの伯爵人生と共にこの世を終えるべきなのだろうか。 — リンダよ、私の加勢をして欲しい。

「私は」（と彼女は高く木々の間からこちらに落下してくる大きな飛泉の方を鋭く見ながら言った）「多弁な者でも雄弁な者でもありませんし、貴方のことをすっかり分かっているわけでもありません。私はいつも言葉を理念や真理に翻訳しなければならず、それもいつも上手く行くわけでもありません。伯爵、貴方の言葉で私が考えることは何もありません。愛がそれだけで満足感を与えない人には、愛が充実感を与えることもありません。勿論私ども女性のように心と共にすべてを忘れて、人生を一つの理念の中に集中することは男性には決してできません。いや、何と人間は人間にとって取るに足りないものなのでしょう。人間のイメージの方が人間にはもっと大事で、すべての小さな未来の方がもっと大事なのです」。

「あなたも、ブルトウスか」とアルバーノは当惑して言った。「貴女は」（と彼は気を取り直して続けた）「イスキア島でのエリュシオンの人生が一人の男にとって永遠となって欲しいのですか。この者を青年として、浄福極まる安息の修道院へ送りたいのですか。単に老人としてなら有り得ましょう。青年を送ることは木の梢を暗い大地に植え付けるようなものです」。

「これはまたドイツ人ですね」（と彼女は言った）「いつもただまことに勤勉です。安息のナポリ人、アペニン山脈やピレネー山地、ガンジス河、タヒチ島の人々、享受と観照に満ちた人々、これらはこのスペイン人には一つの恐怖です。私は一人の人間がただ自分のために何ものかとなり、他人のためでなければ、それで十分と思います。何が偉大な行為なのか、私は存じません。私はただ偉大な人生を知っているだけです。偉大な行為に似たことはどんな犯罪者でもできますから」。 —

「まことに、それは本当だ」（と彼は言った）「あれこれのを通じて、自分自身にとって偉大と思えることや、自分の本性には稀なもので、関係ないと思え、それ故自分には属していないことを通じて、自分を証明しようとする人間ほど哀れなものはないでしょう。しかしその性質の者の子供は、自らには決して偉大には見えず、いつも単に小さいか、あるいは然るべきものです。 — これが別様だと、その性質の者には全く見知らぬ果実が枝に掛かることになります」。

「アルバーノ、その通りです。でも貴方はかつて半端な意志は決して有しなかったことでしょう。そうでしょう」とリンダは言った。「今はやはり有しない」と彼は穏やかに言った。人は決意が最も強烈なとき、最も穏やかである。彼は今や自らの言葉を、自らの炎にとって油となり風となるものを、 — しっかり節約し、避けるよう試みた。言葉は何の役にも立たず、むしろ他人の感情を吹き消す代わりに、焚き付けるものであるだけに尚更のことである。その際、彼はなお、自分がリンダをどんなに無垢であってもただ一つの言葉で炎へと追いやった度々の場合のことを覚えていた。彼らは立っていて、リンダが、彼の顔を黙って見ていた後、自分の一見落ち着いた哲学ぶりにもかかわらず、突然激しく彼の手を握ってこう叫んだとき、彼は向こうの神々しい陸地を覗いていた。「いえ、なりません、私の浄福にかけて、すべての聖人にかけて、 — 聖母にかけて、 — 全能の方にかけて、 — あなたはなりません。すべきではありません」。それに対しては男は

永遠に抑えがたく燃えて起き上がる一つの掠奪というものがある。たとえ愛から女神が行おうとも、女神がその代わりに樂園の一つの世界を与えようとも、そうした掠奪があり、それはその男の自由と自由な発展に対する掠奪である。いや、それが愛であり、しかし専制的愛で、同時に自由の訓練をしつつ自由を奪うものであるというそのことが、ただその男を更に憤慨させるものである。そして迷妄の霧から後には情熱の雷雨となる。 — リンダは繰り返した。「あなたはなりません」。彼は彼女の動揺し、輝く顔を見つめた。その顔の南方的激しさは怒りよりもむしろ熱狂に似ていた。そして断固と言った。「リンダよ、多分私は許されると思うし、欲すると思う」。 — 「だめです、私はだめと申しませぬ」と彼女は叫んだ。

「兄上」と妹は始めた。「妹よ」（と彼は叫んだ）「穏やかに話しておくれ。私は一人の男で、激しい欠点を有する」。大地と岩に対する水の崇高な戦いが、周りの輝く雨の星座の、渦巻きへの翼化のような入り乱れた飛沫が彼を引き入れ、 — 大きな飛泉が高い木々の間から、その驟雨を吐き出した。 — そして東側[西側]には遠くに海が暗い眠りに就いていた。そして日没の太陽が輝かしくその光輝の中に迫って来た。

「穏やかにきくと話すことにします」（と侯爵令嬢は言った。彼女は、リンダよりもはるかに傷付きやすく余韻があって、自分の約束通りの語調にしようと若干骨を折っていた）、 — 「これ以上は、私どもの争いは早すぎるという見解しか必要ありません。お願いですから、この諍いを十月まで中止することにしましょう。そしてこの諍いはそのときには別な風に終わると約束します」。 — 「そうしよう」とアルバーノは言った。リンダは穏やかにゆっくりと頷いて、予期に反して彼の手を両手で自分の心臓の所に置いて、彼を見つめた。大きな目からは涙が出ていた。いつもはその目は涙よりも炎がよく見られたものであった。この力強い性質の女性が憎しみも怒りもなくただ激しさを有しているという光景が彼の心を解かした。そして彼の発した炎の先の秘かな沈静化は無限に彼の心を爽やかにした。

妹は兩人によって軟化していた。最も心優しい愛の瞬刻がやがて三人の人間を一つの抱擁で包んだ。怒りの誇張法は人間にとって愛の誇張法ほどに真面目なものではない。怒りの誇張法はただ他人に信じて貰うためであるが、愛の誇張法はその人自身が信じている。語ったことで皆が快活になっていた。

いつもは過ぎゆく冷たい瞬刻が愛する者達に、冷たい夜が蜂達に対してするように、なおその花々を、蜜を取り出す花々を、閉ざしてしまうものであるが、ここでは嵐の後、透明な青い大気から天は、より純粋に、より静かになって、静寂は浄福となり、浄福は静寂となった。アルバーノの中を、素早くではあったが、恐怖の復讐の女神が過ぎ去った。この女神は逆向きの天体望遠鏡を有していて、これは人間に星々のない全く遠くの空の天を見せるものである。しかしリンダの中を過ぎ去ることはなかった。彼女は絶えず愛と希望の中で語り続けていて、彼女の熱い心には氷の箇所はなかった。それ故に彼は今や浄福で、力強い性質の女性を眺めて幸せであった。高く長い谷の連なりが、そこには葡萄とオリーブが花々の香りとなって流れていて、皆を偉大なローマへ導いて行った。しばらく若者は彼女達の伴を許された。最後に彼は長い別れのために、心と目を恋人達から引き離さなければならなかった。緑の谷を越えて、すでに力強い聖ピエトロ大寺院のドームがこちらに輝き、糸杉が、誇り高くただ糸杉だけに囲まれて、夕べの黄金を、小枝を動かすことなく、

小枝に運んでいた。皆が目を美しいローマに向けていた。しかし彼らの心はただイーゾラ・ベッラ[島]にあった。そこで彼らは互いに再会することを約束した。

第百十七周

イーゾラ・ベッラ[島]への途上、彼は激しいリンダとの戦闘的時間のこと、そしてこの戦の女神の性格のことを考えていた。彼は数日前に乗り越えて来た急峻な高みを考えて驚いた。リンダはとても確定的で、情熱とか破滅以外は何も知らないからである。しかしながら今や冷却の中で彼の自由に対する彼女の命令的な要求を一層苛酷なものと思っ、自らに強く言っていた。女性が男性的発展の神聖な領域を狭めたり、支配したりすることは許されない、と。他面では実際すべては愛であり、愛の過剰であった。 — そして彼がより長く旅をし、比較すると、それだけ一層、ただ彼女だけが大きな炎を投げかける彼の人生のその場は、孤独なもの、暗いものとなった。彼女は精神の中で、彼女の精神を静かに眺望しているうちに、以前の眼前のときよりもはるかにより明るく、より間近なものに思われた。眺望していると彼女は調和の中に落ち着き、眼前では個々の不協和音と共に解決のないものになるのであった。すべての諸性格に対する多面的公平さの彼女の力は、女性にあっては、とても稀でかつ偉大なものに思われた。殊に彼自身この力をむしろ彼女に対する敬意の中で、偉大な、風変わりな、詩的現象という、しかし皆には見られない、平板で劣等な現象ではない喜ばしい自由な把握の中で、感じ取っていたのである。

彼の中で同時に力強く生長して、愛と自由とが並列していた。穏やかになり、単に強いばかりではないという新しい決意、彼女に彼の自由への権利を、そして彼の愛する魂をまことに率直に呈示し、彼女にふさわしい高貴な人物となるという新しい決意を通じて、愛と自由とは同盟して和解した。私がまことに欲すれば、私はそうではないか、と彼は言った。

最高の人生の歓喜の中、自身と運命に和解して、あたかも自分は恋人をすでに見いだし、まず待っているのではないかのように、彼はイーゾラ・ベッラ[島]への旅を急いだ。今や幾多のものが彼の旅の途上より小さく立っていた。これらに彼はドイツの尺度ではなく、ローマの尺度を当てて、その前を彼は今や、彼の父親が予言したように、より速やかに過ぎて行った。

とうとう彼はイーゾラ・ベッラ[島]の人工的アルプスが波の中に立っているのを見た。そして喜んで彼の師と共に幼年時代の庭園に足を踏み入れた。そこに彼は多くを期待していて、心に新しいイタリアの生命の花々を抱いて、この約束の地から別れる予定であった。

彼は何日間か、女性の友を憧れながら、不安げに待っていた。快活な友のディーアンが絶えず彼の旅の速度を計算してみせてくれていたのではあるが。まことに穏やかな気分にいるという彼の決心はますます不必要なもの、ますます我知らずのものとなっていった。島そのものはすでに香りからの春と共に、アルプスからの遠くの花冠と共に魂を溶かしていた。前年には花々よりももっと葉が多い状態で島を見たのであった。そこは実際彼の幼年時代の島であった。 — 水辺の多くの場所で深い真夜中過ぎの人生の早期からの星々が微光を発してきていた。 — ここで彼は最初に自分の父親を見つけたのであり、最初に波の上にリンダの形姿を見たのである。 — ここで彼は彼女を最も長い別れの後、ま

た長めの別れのために、また見だし、失うことになるのである。 — ここで彼は北と南の間の門の中に立っているのである。島々に満ちた自由な香る国、人生の天国の梯子は、彼にとってエーテルの中へ退いて行く。彼は強制と人目とで一杯の冷たい国へ下って行く。

— 彼の愛は父により裁かれる、その愛は没落した友により襲撃される。「イスキア島の日々よ」（と彼は嘆息した）「ヴェスヴィオ山とティヴォリでの時よ、御身らは戻って来られるのか。御身らは再来でき、飽き足りない心は新たに溢れて、飲み干し、もう十分と言えるのであろうか」。

彼はディーアンに向かって、さながら自分と自分の果てしない憧れを詫びるかのように、しばしばカリトンとその子供達について言及し、どんな気持ちかと尋ねた。「そんなに沢山話さないでくれ」（と彼は彼の流儀で、察知し、露呈するよりも、むしろ感受しながら言った）「私どもはまだとんでもなく離れています。 — 旅がわけもなく台無しになります。 — 皆と会えたら、 — いや」。 — それから彼は黙って、若者を両腕に抱いて、接吻をしなかった。

ある青い新鮮な朝、アルバーノは、太陽がまだ天に昇る前に、高い花々の咲くテラスのピラミッドの上に立っていて、そこでかつて目覚めたとき父親が別れも言わずに去って行くのを目にしたのであるが、 — 感動して空虚な広大な湖を見下ろしていた。 — そして周りの氷の山々の頂を見、それらはすでに高く下ってくるアウローラの反照の中で花咲いていたが、 — 彼の傍らには過去しかなかった。彼は自分と自分の胸の中を見て、考えた。それ以来何と長く難しい時がこの胸の中を過ぎたことだろう、と。その胸の中では一つの世界全体が夢と変わった。そして心臓はまだこの中で新鮮にしっかりと鼓動している。 — 突然彼は湖の朝霧の中、一艘の船が漕ぎ進むのを見た。ゆっくりと緩慢に船は進んで来た。というのは彼はとても遠方からそれを見たからである。遂にそれは滑って、飛んで来た。帆が朝焼けの中で花開いた。そして緑の波は戯れる野火となった。かつてイスキア島でリンダの船の周りがそうであったように。 —

それはリンダと妹であった。彼女らは見上げて、合図して挨拶した。彼は素早く歓喜の中で叫んだ。「ディーアン、ディーアン」、そして何段もの階段を駆け下りて行った。広大な輝きに全く驚き、夢中になっていた。喜ばしい現象の下、彼は日の出を見ていなかったからで、太陽は恋人の女性の前で、美しい炎を、朝方の花をさながら水の道に撒いていたからである。

「また御身らかい、御身ら神々しい者達よ。語り給え、そして喜びの余り私が浄福となり、御身らを得るように、泣き給え。また昔ながらの本当の愛と共にやって来たのかい」と彼は雄弁に酩酊して語り続けた。長い夢想的な待機で、汲み尽くされていた。リンダは秘かな天使の悦楽と共に、愛らしい反照と共に、彼の愛の高く戯れる炎の中を覗いていた。妹は甘美な動揺の中、両人の顔の美しい穏やかさを享受していた。その穏やかさは、月光が山脈で魅了するように、その顔の力の許で魅了していた。両方の側から旅の様子が語られ始め、終わることがなかった。日中や島での規則が呈示されたが、どれも選ばれなかった。ユリエンネは、彼が約束を守って、彼は夕方には去らなければならないという自分の条件を、心の中の歓喜の炎に対するささやかな冷却として心に押し付けた。あたかも太陽は上昇するのではなく、すでに下降するかのようになり、悲しげに彼は好意的な明るい朝日に目を向けた。

さて彼らは素敵に迷って、島の中を行って。至る所で現在の傍らに静かな過去が花咲いた。薔薇の下に一本の勿忘草があった。跳ねる波の前のこちらのこの人工洞窟で彼はかつて妹のセヴェリーナと共に遊んだのであった。そしてこの島で彼に彼女の死が告げられたのであった。「しかしユーリエ[ユリエンネ]、おまえは私のセヴェリーナで、それ以上のものである」と彼は言った。「思うに」（彼女は穏やかに言った）「同じくらいね」。 — アーチから遠からぬ所で彼は初めて彼の父の顔の像を眺めた。「しかしいつあなたはあなたの父親に会えるのです、リンダ、語ってください」と彼は言った。彼女は赤面して言った。「運命が許せば、会えることになります」。 — 「それはいつ」。 — 「私は何も知りません」と彼女はためらって穏やかに言った。するとユリエンネが合図しながら彼に触れて、自分が操れる限りの多くのフランス語風ラテン語で、しかし思わず知らず言っているかのような無造作な調子で言った、「コレ以上、彼女ニ尋ネナイコト。父親ハ、彼女ノ結婚式ノ日ニ現レルト言ワレテイマス」。彼は驚いて彼女を見つめた。彼女はしばしば頷いた。「ユーリエは」（とリンダは微笑んで言った）「女性達のように、行動は策謀的で、語りは率直なの。私だったら、兄に対して自分をこんなにも長く隠しておけなかったことでしょう」。 — 「その代わり」（と彼女は答えた）「兄と妹は互いに成人となっていて、完全な者となっており、簡単に好きになれるわけ。他の姉妹だったら生長して来る兄弟の欠点をまずは何年も耐えなければならぬわ」。

今や彼らはレモンの花々の間の回廊にやって来た。そこでガスパールは息子に未来の多くのヴェールや仮面を掛けながら、覗かせたのであった。するとアルバーノは不機嫌に言った。「ここで私は多くの謎を告知されなければならなかった。 — 向こうでは」（と彼は、初めてリンダの像が波の上に出現した海の箇所のことを言った）「それどころか大事な形姿の猿真似がなされたのだ」。 — 「いやだわ」（とリンダは激しく言った）「何故その像は話しまでしたのかしら。そんなことひどいわ」。 — 「でもそれで誰も多くを失ったわけではないわ」（とユリエンネは冗談で言った）「例外は一對の心と私の匿名性ね」。 — 「私ども両人は返事できないのかしら、アルバーノ」とリンダは小声で言って、目を上げた。「できるとも」と彼は強く言った。というのはかの予兆がなかったら、彼らはもっと早く求め合い、見いだしていたであろうからである。

奇妙な、未来で織り込まれた過去をこのように見つめながら、彼らはボロメオ家の宮殿へ足を踏み入れた。宮殿はこの日幸い所有者達がいなかった。アルバーノは両人を、リンダの頼みで、自分がセヴェリーナと一緒に育った部屋に案内することになったからである。宮殿の守衛は、彼らは景色だけを求めていると思って、 — というのは子供部屋は六階にあったからで、屋上まで連れだそうとした。それは埃っぽい子供部屋であって、随分昔から閉ざされていると彼は請け合った。苦勞してその男は錆び付いた鍵で錆び付いた錠を開けた。彼らは埃だけの薄暗く空の高い部屋の中へ入って行った。そこには空の揺り籠、その土同様に干涸らびた中国式の薔薇の支え木のある植木鉢、子供用錫時計、古風な女性用玩具の台所用品、巻かれた輝かしいピアノの弦、一七七二年のドイツのカレンダー^{*1}、

*1（訳注） アルバーノは前年の1791年の昇天日[6月2日?]誕生日で、20歳になっており、現在はフランスとの戦役1792年であり、従って1771年生まれ。

単なる古典古代の頭部の多くの黒い封印、乾燥した攀援植物の小枝[Lianenzweig]や類似のものが失われて散乱していた。この人間は感動して、自分の人生の紡錘がほとんどまだむき出しで糸もなく経過した深い時を感動して覗き込んだ。というのは人間の端緒はその中央よりもその終焉に間近に接しているからで、我々の人生の船の出入りする岸边は暗い海にかかっているからである。アルバーノは周りを見ることによって、人間の生活、自身の緑色の、まだ冬の低い状態にある野原を見渡すことによって、そして地上から、いや彼の空想からさえも去った母と妹と一緒に暮らした所によって憂愁の念の刺激を受けた。 —

彼は錫時計を手にとって、言った。「時間を有せず、永遠性を有する時代にとって、齒車装置のない指針の時計よりましな時計があるか」。

リンダは、あるガラス箱から覆いを外して、その中の蠟の天使のような子供が明るい目に明かりを得たとき、びっくりした。「それは亡きセヴェリーナだ」とアルバーノは急いで行った、粗野な形容詞の「亡き」は、リンダが好まないものであった。ますます彼にとって薄暗い部屋は不気味に思われてきた。 — 太陽の条光が高い窓から奇妙に燃えて入って来た。 — 蘇って生気付けられた埃が彼の中で戯れた。 — 妹とリアーネの霊がどの瞬間にも地上の光を通じて閃光を発することができた。 — そして一層離れて人生の外の山々が立っていた。彼は花と咲くリンダを見つめた。そのときリンダは彼にとって突然別な風に思われた。見慣れぬ、超現世的で、あたかも霊達の下で出現していて、また現世から出て行くかのように思われた。彼女は彼を意味深く見つめてこう言った。「ここは不気味です。行きましょう」。 — 「いいかい」と彼はドイツ語の強い声で、内的驚きに答えつつ言って、彼女の手を握った。「一つの生きた心臓のように、引き裂かれようとするとき、一緒にいよう」。リンダは答えた。「これ以上おれませんが、ユリエンネ」。そして皆出た。

敷居の所で伯爵は、隣室を覗くことを思い付いた。彼はそこを開けて、縮み上がったが、こう叫んだ。「先に行くがいい」、そして入った。つまり彼は鏡の中に自分が二度模写されているのを見たのであった。部屋の中で彼は自分がある壁龕で、蠟製のフランス式軍服を着ている姿[本当の父親、侯爵の若き姿]、しかしすでに青年となっている姿を見た。そしてその隣には、ドアで隠されていたのであるが、これも青年としての彼の父親[ガスパール]を、古風な服を着て、しかしギリシアの神のように美しい姿を見いだした。温かい、ふくよかな、花のような顔は、まだ硬直した人生で冬を越しておらず、まだ愛するように花咲いていた。彼は深く過去の海の中へ墜落した。外の巨大な彫像と輝く山脈とが暗い波の中から起き上がって、滴る微光を発して立っていた。外で人々の声がした。彼はまた自分の顔を見た。しかし怒っていた。「二つは必要ない」と彼は言って、自分の顔を潰した。しかし彼にとってそれは自殺の如く、自分の自我の触診の如く思われた。父親の形姿を彼は見知らぬ監視のない所に置いておきたくはなかった。しかしそれは余りに神聖で、ごく小さいな接触もできなかった。

彼は戻った。しかし像のことは黙っていた。リンダの空想に大きな厭わしい翼を広げさせないためであった。緑色の、花咲く、輝かしい一日はやがて、過去の高みと墓場から落ちて来た冷たい影を飲み込んだ。「今度は」(とアルバーノはリンダに言った)「貴女はまさに私の子供部屋から出て来たわけですので、いつか貴女の子供部屋に案内して頂きたい」。 — 「私はまずあなたに冠を与えましょう。ふさわしい地にいますから」と彼女

は言って、月桂樹の森から、丁度明るい波と暗い波のその木の群れの中を彼らは通って行くところで、枝を折り、編んで冠とした。肉体的仕事で、この乙女は、より容易に音色と色彩と観念とを結び合わせて、子供らしさと素朴な如才なさとの特に感動的眺めを供していた。彼女は王冠を苦勞して編み込み、一度は月桂樹と、類似のアルプツスとを間違えて、更には花と咲くミルテの枝を一本差し込み、それで彼の巻き毛の髪を飾った。しかしとても真面目であった。「王冠はあなたに似合います。上の山頂の月桂樹はあなたがいつかきっと御自分で取ることでしょう」と彼女は言った。彼女は真面目さを装って戯れていると彼は思った。しかし彼女は冠を被った者を喜ばしげに試すように見つめ、母親のように微笑んで言った。「これでできあがり、まだ欲しいものがありますか。用意しましょう。アルバーノ。私は今この時、あなたに全く特別な新しい愛を感じています。私はあなたのために尽くしたい。苦しみたい。私の心は溢れる愛で動揺しています。私に接吻しないで。あなたにお話ししましょう」。女性が初めて恋人の所有地や幼年時代の地、その住まいに足を踏み入れるとき、その恋人をより熱く、より間近に愛する美しい女性らしさが、いつの間にか彼女の強い心を満たしていた。彼は彼女に接吻をせず、 — 彼女を見つめ、そして愛の歓喜で泣いた。 — 彼女は身を乗り出して、しかし快活に言った。「愛しい方、泣くのはとても辛いことです。私の子供時代について、お望みのことを語りましょう。私の最初の子供時代の地はほとんど記憶に残っていません。ひょっとしたらいつも旅をしていたからで、私は場所よりも人間の方を大事に思うからかもしれません。 — 最も長くいたヴァレンシアの地を除いてのことです。 — 早期の旅のお蔭で、多分旅好きになっているのでしょう。結局それが私の中に残っています。しかしあなた方はいつも、ドイツ人のように、あなた方が本来、世襲としているもの、あるいは作り出すものを、覚え込もうと思っています。私は私の母から他の誰からよりも、憎まれ、愛されました。今、私は母親のことが良く分かります。母は全く芸術のために、あるいは様々な芸術のために生まれていました。もっとも私は母は神々によって本来は舞台のために選ばれていたと思っています。この舞台の瞬間のとき母は一切のものであり、他のときには何ものでもなかったのです。 — 呪いと祈り、信仰と不信仰、憎しみと愛とがこの叙事的性質の女性の中では交互に現れました。 — 母は一つの世界を贈ることができたでしょうし、一つの世界を盗むこともできたことでしょう。 — 母は私をあるとき胸に抱き寄せて言いました。『おまえが私の娘でなければ、ただ愛する余り、おまえを盗むか殺すかすることだろう』と。 — これは私がこう言ったときのことです。『私はクレウサよりもメディアアが好き*1』と。 —

でも母は余りに首尾一貫していなくて、すっかり愛されることがなかったのです。私は姿の见えない父の方をはるかに愛していました。私は父は父なる神であると思っています。父はポルタ・セリ*2 に住んでいるに違いないと私は想像していました。何時間も私は

*1 (訳注) ギリシア神話では、妻と子供を棄て、王女クレウサを選んだ夫に復讐するため、メディアアはクレウサと自身の子供を殺害する。ジャン・パウルは『美学入門』でコルネイユの『メデ』の moi という科白を称賛している。

*2 ヴァレンシアのとても美しいカルトゥジオ修道院。

修道院の墓地の周りを歩いて、棕櫚越しに墓地の薔薇の方を憧れて眺めました。私はすべての生きとし生けるものに痛みを覚えるほどに愛着致しました。瀕死のカナリアのせいであるときは病気になりました。そしてカナリアのために葬儀のミサを行おうと思いました。神や霊達にも私は酔って憧れました。あるとき暗がり、砂糖から出した炎の中で、霊は閃光を発して過ぎて行きました。私は遊びをしたことがなく、早期に読書しました。私はとても真面目で、私の形姿は時期尚早に成長しましたので、早くから大人として扱われ、私もまたそれを望みました。私に対して十分に真面目だったのは、後見人の他にはなく、後見人が秘かな手で私の成長を見守っていました。本や馬車での旅で、私の最初の人生は過ぎました。男性の知識と自由を羨ましく思いました。でも男性は好きになれず、女性には更に好きになれなかったのです。私は気位が高いと見なされました。 — 早期には実際そうでした。 — そして空想的と見なされました。私は悪く取らずに、言いました。『皆様には皆様の流儀があり、私には私の流儀がある』と」。 — ディーアンとユリエンネとで語りは中断された。

第百十八周

アルバーノは自分の妹と最初に二人っきりになると、リンダの父親は丁度彼女の結婚式の日に現れるであろうという彼女のラテン語での知らせについて詳しく尋ねた。しかし彼女は、リンダの父親についてすべてを語るができるであろう彼自身の父親を持ち出した。 — そして「リンダを大事にするよう、それは彼女の優しさの面ばかりでなく、彼女特有の結婚嫌いの面でもいたわるよう」頼んだ。「リンダは女友達の結婚式祭壇での同伴すらできなかったのであり」（とユリエンネは付け加えた）「彼女はこの結婚式祭壇を女性の自由の刑場、最も美しく最も自由な愛の火刑台と呼んで、こう言ったのです。愛の英雄詩がそうなったらせいぜい結婚生活の牧歌になってしまう、と。勿論この原則の行き着く果てを彼女は承知していません」。 — 「おまえが彼女のことを信頼してくれるよう、私も希望する」とアルバーノは言って、この珍しい点を、彼の厳格な妹よりも別な風に、より高く導いて行った。彼女は素早く打ち切って、彼に侯爵夫人を避けるようにとのペスティッツまでの助言を更に添えた。侯爵夫人は内奥にまで冷淡で、偽りで、復讐心に燃え、利己的であると言った。「あの方はあなたに対して、何か、それも沢山計画しているわ。 — それに伯爵令嬢への憎しみが今は付け加わっている。 — リンダは彼女を鋭く把握しているけれども、自分が見渡し、予見しているすべての人を通じて、性急さ故に魅了され利用されているの」。アルバーノは侯爵夫人についての昔からの穏やかな判断に留まっていた。 — 彼はすべての天才的女性に対するユリエンネの倫理的厳格さをすでにリアーネについての彼女の誤判断から知っただけに、なおさらのことであつた。 — しかし侯爵夫人を避けるという軽い約束をした。その際理由、つまり彼に対する夫人の無残な愛のことは言わずにいた。恋文のこの公然たる開封を読み上げ、人々への拡声器を通じての愛についての女性の溜め息のこの男性的確保と呼び声ほどに、彼の優しい気持ちにとって、はなはだ粗野なものではなかつたのである。

皆がまた集まった。 — 湖とアルプスと花々の影が見える或る地に陣取った。 — 一日は輝きを減じ、美は夕方の美へと沈んで行った。 — 「この繊細な島では」（とデ

イーアンは言った)「すでに北方の本性が始まっています。私どもはやがて尖鋭な屋根の下の我が家にいることでしょう」。 — 「そうね」(とユリエンネは言った)「また清潔な人とかブロンド髪的女性、一つの影、そして二、三羽の小鳥の声を聞いたら¹、ようやくほっとしますよね」。 — 「ここでは私はティヴォリやイスキア島、ポジリッポのことを思い出さない」(とアルバーノは言った)「私は自分の子供時代とアルプスを思い出す。 — 向こうのマッジョーレ湖の岸边では、勿論この両棒砂糖の島は最良の姿には見えない。でもその代わりここでは棒砂糖の上で、岸边と湖とがそれだけ一層良く姿を現していて、そしてこの湖のアルプスに立つ者のためにこのアルプスはできている」。 — 「私にはすべてどうでもいいわ」(とリンダが言った)「ここではとても気分がいいから。美しい一帯の批評はやはり北方の性質ですね。その一帯をただ本から知っているだけです。その一帯を有するイタリア人はその一帯を健康同様に享受していて、欠けるときに自覚するに過ぎません。だから偉大な風景画家にすらなれないのです」。

「華美なイタリアを」(とディーアンは言った)「なおこの境界で歌い上げることにしよう、管理人の許にギターがあったら」。彼は行って、一本のギターを持って来た。そこで彼はイタリア語で即興演奏を始めた。「アポロンの中で地上の先の牧歌の地への、失われ隠されたダフネへのかつての愛がまた目覚めた。 — 彼は天から降りて、その双方を探した。 — ユピテルは彼にモムス[嘲笑の神]を、彼が戻って来るよう醜いものを見せる筈のモムスを添えた。 — 若い微笑の青年としてアポロンは島々を越え、神殿の廢墟の中を、永遠の花々の中を、未知の一人の子供を抱えた高貴な乙女の神々しい画像の前を、新しい調べの前を通り過ぎて、より美しい新しい大地の魔法の圏を越えて進んで行った。

— モムスは僧侶や海賊や、時によって朽ちた神殿を見せたが、甲斐はなかった。嘲笑して浴場の柱を神殿の柱と思わせたが甲斐はなかった。 — この神は高く冷たいオリンポスを見上げ、この温かい地、この大きな黄金の太陽、この明るく青い夜、この永遠に花咲く香り、この糸杉、このミルテの木々の森、月桂樹の森を見下ろして、言った。『ここはエリュシオンだ。冥府ではない、オリンポスでもない』と。 — するとモムスがヴェルギリウスの墓の月桂樹の枝を渡して言った²。『これが汝のダフネである』と。すると彼の偉大な[双子の]姉のダイアナが怒って、ダフネにあたかもピレネーの森から来たかのような形姿と衣装とを与えた。しかし彼は恋人を見分けて、彼女と一緒にオリンポスに戻った」。

— ディーアンがこれを歌って、歌を弦の音色と共に流すと、向こうの天の中に高く、氷からなる永遠の山脈が立っていて、その山々から泉や影が明るい湖へ舞って来て、夕べが燃えて恍惚として動いた。そこで静かなアルバーノが弦を握って、目を山脈の閃光の中へ落として、赤面して始めた。「歌人よ、留まり給え。戦場へ、殺しながら死にながらやって来た高い霊の許に、 — 人類の永遠の神殿を築いた高い霊の許に。 — 留まり給え、輝きながら確固と運命の槌の下に残る純なるダイヤモンドの許に。 — 留まり給え、古い時の許に、一つの大陸を担い、別な諸大陸を没落させたローマの海の許に。 — しかし逃げ給え、その頂上を自らの火口へ沈めた時代からは逃げ給え。 — 留まり給え、

*1 さえずる小鳥はイタリアでは稀である。食用に市場で売りに出されるからである。

*2 ディーアンはヴェルギリウスが好きではなかった。

歌人よ、その高みに、そして一つの戯れる人生の営みである世の庭園を見下ろし給え。

一 廃墟は岩となり、岩は廃墟となる。一 高い岬では花々が香り、下では海が喉を開けている。スキラを越えて、恐ろしい岩どもの臥床の間に美しい家々や露地が輝いている。

一 そしてこの神は国を越えて飛んで行き、岸辺の神殿の柱の上に子供を見、そして僧侶で一杯の神々の神殿を見、名もない廃墟で一杯の沼を見、花々とグロッタで一杯の岸辺を見、一 更に花咲くミルテや葡萄や、炎の山々や島々を見、一 そしてイスキア島を見て、...」。

しかし嵐のギターと声とは沈んで行き、彼の目は深く、天の中と人間生活の中へ入って行った。そして彼は遠ざかって行き、甲高い心を静めた。涼しい孤独の中、彼はいかに遠くへすでに太陽が飛び去っているか、より冷たく天の中をさながらアモールの翼と共に去っているか気付いた。一 彼は素早く戻って来た。夕焼けの中、彼の別れの時が鳴り終わった。

彼が戻って来たとき、リンダは一人っきりであった。一 というのはユリエンネがディーアンを絵画陳列室[テンペスタ]見物という口実で、恋人達から引き離していたからである。今日恋人達にはいずれにせよ至福の単に最も短い一日しか与えられていなかった。

一 そして恋人の女性は意味深く見つめていた。「ディーアンは元来より上手に歌いました」（と彼女は言った）「より叙事的でした。しかし貴方の抒情的本性も私は好きです」。彼女は彼をまた見、それから再度見、それから彼の目を見、それから彼を素早く抱擁した。何の声も突然の接吻を説明するものではなかった。「テラスへ行きましょう」と彼女は小声で言った。彼らは十段のテラスの素敵な高台を登った。高台は月桂樹の木やレモンの木、尖塔[ピラミッド]や巨大な彫像や、遠方の村々やアルプスで囲まれた眺望とで視線を満たして、かつてそこからアルバーノは自分の父が去って行くのを見たのであった。「アルバーノ、ますますあなたが好きになります」（とリンダは言った）「あなたは本当に愛することができる方だと思います。あなたの初恋を話してください。私も話しましたから」。一 「リンダよ」（と彼は言った）「欲張りだな。でも正直にすべてを話そう。彼女があなたを愛していたように、あなたは彼女を愛することだろう。一 ここにあなたの絵があります。瀕死の床で彼女が描いたもので、私に渡しました」。

彼は彼女に小さなスケッチを渡した。彼女の目は濡れた。その後彼は小声で、厳かに自分の初恋の絵を描き始めた。一 いかに自分が彼女をまだ見もしないうちに、人生の最初の曙光の中で尊敬し、求めていたか、一 いかに自分は彼女のことを思ったか、一

いかに彼女は幸せにしてくれて、自らは幸せにならなかったことか、一 いかに彼女は穏やかで、彼は荒々しく厳しかったことか、一 いかに彼は自らの心の性急さを彼女に要求したことか、一 いかに残酷に彼女の諦念を受け入れたことか、いかに彼女は彼のせいで没落したか描いた。リンダはいつもより泣いた。「いや酷いことをした、リンダよ」と彼は言った。「いいえ」（と彼女は言った）「私はあなた達双方のことを泣いているのです」。一 「私には大きな欠点がある」と彼は言った。「すべての欠点を許しましょう」（と彼女は言った）「あなたが愛することができさえすれば。でもその愛しい方も欠点があります。愛に対しての欠点が」。一 彼女は止めて、それから小声で尋ねた。

「アルバーノ、彼女はまだあなたの心の中にいますか」。一 「そうだ、リンダ」と彼は言った。「実直で誠実な方ですね」（と彼女は感激して叫び、彼女の頭を彼の胸に置い

て祈った)「聖なる神さま、御身の不死の者達にすべてを与えてください。ただ私には永遠にこの方の胸をください。この方が本当に愛されますように、まことに言いようもなく、愛されますように、そして私が消えてしまわないようにするために。あなた」(と彼女は突然ささやいて、起き上がった。彼を無限の愛と献身とで見つめながら)「私がリラールに住むことをお望みなら、ただお命じなさい」。

かくも自由で強力な精神のこのような女性らしい従順な恭順さを見て、彼は言葉を失った。 — 驚のように愛の炎が彼を掴み、彼を持ち上げた。 — 彼は彼女の花咲く顔の許で輝き、日没の太陽の婚礼の松明が大きな炎と共に両者の間に入って来た。「リンド」(と彼はようやく震えるような厳かな声で始めた)「私どもがいつか互いに離れて、別れることになるのであれば、 — リンドよ」(と彼はかろうじて涙と接吻の下、話し続けた)「私のせい、あるいは冷たい運命のせいで仮にそうなるのであれば、この瞬間一緒に湖に身を投じ、この愛の中で死ぬ方が、好ましいのではなからうか」。 — 陽光が、若者達や乙女達を神々の許に拉致するアウローラのように燃えて入って来た。人生の薄明が明るい朝焼けへと点じられた。「あなたがそうと分かっているのであれば」(とリンドが言った)「今私と死にましよう」。 —

そのとき二人はユリエンネの遠くの声で目覚めた。 — とうとう彼女自身がディーアンと一緒に別れにやって来た。二人は目覚めながら、太陽と愛とで眩惑されて、周りを見回した。すべてが変わっていた。 — 太陽は沈み、広い湖は霧の影で覆われ、世界は冷たくなっていた。ただ高い氷の山々のみが、まだ青空の中、薔薇色に赤く燃えていた。炎の同盟の時の記念柱のようであった。

アルバーノの魂の前にはまだ、人間を分かち運命が、冷たく覆われた岩の形姿が立っていて、そのヴェールもやはり石製で、誰も持ち上げることができないものであった。今や彼は引き裂いて、早速臆してためらうことなく、冬の中へ降りて行こうとした。「ヘスペルス[金星]が沈むまで、ゆっくりして」とリンドがささやいた。彼は残った。しかし二人はもはや言葉を有せず、ただ目で語った。先ほど天上的なヴィーナスの馬車を天の中で引いて来た不動の驚が、天で荒々しく舞った。宵の明星が没した。天の中央の半月は魔法の杖として、地上に光線を送っていて、地上を心の神聖な青ざめた世界に変えた。「あとただ大きな星が落ちるまで」 — と彼女は言って、彼を憧れて見つめた。彼はそうした。小夜啼鳥がさえずりながら銀色の枝の間で跳ねた。ただ人間のみが声のない天と愛を有していた。

「あとただ小さな星が落ちるまで」と彼女は頼んで、彼は従った。すでに言葉で感動していた。しかし彼女自身が決心して、言った。「いや、行きなさい」。 — 「そうすることにしよう、ディーアン」と彼は言った。ディーアンは愛をいたわって、テラスを先に降りて行った。激しく、長く、両兄妹は互いに心の許に抱き合っていて、快活な穏やかな再会を願っていた。リンドは彼にただ手だけを与えて、一言も言わなかった。夜の静かな空がその熱い太陽を覆うと、彼女の炎の心は隠れた。彼が行くと、彼女は、目で追わず、彼の妹を沸き立つ胸に引き寄せた。

光輝と夜と香りとは彼が下って行くテラスの天の梯子に撒かれた。こっそりと彼の船は、波の上に吹き付ける星々の雪や花々の雪の中を飛んで行った。 — 両島の小夜啼鳥と一緒に声を合わせた。 — 船人は小夜啼鳥に楽しげな歌を返した。 — オレンジの香り

が好意的な風で小船に吹き寄せられた来た。 — しかしアルバーノは心と顔を、泣きながら、沈んで行く尖塔[ピラミッド]の方へ向けていた。妹だけが一人高台で見送っていた。それから妹も消えて行った。 — 小夜啼鳥はなおも小声で呼び続けた。 — ようやくすべてが覆われた。 — 彼は青白く微光を放つ氷の山脈の方へ、彼の航行の燈台の方へ向くが如く向きを変えた。そしてこの日の天から今や彼に残されていたものは、聖なる星々が消えて、船をもはや導かなくなったとき、船が磁石に従うように、導いてくれる愛だけであった。

第百十九周

アルバーノとディーアンはドイツの野原を越えて、喜ばしげに幾多の大事な心の許に向かって飛んで行った。欺かれたのは、旅した国々の遠距離に対する自分達の — 恐れだけであった。彼らの背後の黒い溶岩砂と焼かれた大地の代わりに、今や明るく新鮮な緑が平野を覆い、眩惑された目を冷やしてくれた。緑の穂の沃野の波が、青緑色の海の波同様に陽気に波打っていた。より濃く、より長く、より高い森の中では新しい影が、さながら日中の前に臥す美しくささやかな夕べのように吹き寄せていた。イタリアの木々の黒い緑の後に、ドイツの諸庭園の明るく笑うような緑が戻って来た。新しい小鳥のコーラスが雲や森の中で揺れて、人間の心に挨拶をし、その心に軽快な罪のない喜びを授けた。

春から春へと幸せなアルバーノはその愛の夢と共に進んで行った。彼の背後では南の花々が落ちて行き、彼の前では北の花々が開花して行った。彼の旅の馬車は多彩な道を行き、長い庭園の花々の影の下を行った。

ようやく彼は菩提樹^{リンデンシュタツト}の町の前の、庭園を歩いて行く家の前に立った。前年もその町の前の高台に立っていて、未来の雲の並びを見ながら、その愛が何を形成するか、アウローラかそれとも夕方の雷雨か察知できないでいたのであった。何と多くの古い痛みが、今や雲の影のように昔の一带の上に、ブルーメンビュールの高台の上に、家々の上にかかっていたことか。彼はそのとき馴染みの、時に涙で印付けられた過去の道を一望したのであった。自分は今や、自分の父親に新しい幸福の知らせと共に向かっていると彼は考えた。 — 自分の背いた友に対して奪われた恋人と共に、 — 新旧の愛を抱いて、戻って来るショップペに対して向かっている、ショップペの心と運命は今や彼にとって不分明で同時に大事なものとなっていたが、 — それに奇妙な時と時間に対して向かっている、その時にはこれまで自分がその営為とざわめきをしばしば経験してきた地下水が一気に解明され、すべての曲折や源泉が白日の下にさらされることになるはずで、 — それに神聖な地に向かっていると考えた。つまりその地で彼は恋人を、この恋人は今やドイツの道、先の困難事の間近な所では、天と地でのすべての崇高なものが近接しているエポメオ山でよりも一層偉大に、一層手にし難く見えるのであるが、この恋人を大胆に心に引き寄せて、永遠に、私を愛してくれるかと再度尋ねることなく抱き寄せることが許されるのである、と考えた。

— そこで彼はヴェスヴィオ山で見いだしたあるイメージを思い出して¹⁾、ディーアンに言った。「人間の背後ではゆっくりとした流れが、その流れが人間に達するとその人間を熱く食い尽くし、砕いてしまう流れが働き、進んで来る。しかし人間はただ勇敢に前方を見て、しばしば後ろを振り返りさえすればいい。そうすると無事に脱出できる。愛しい友よ、そのように今私は私の新しく難しい状況の下で行うつもりだ。私が美しい一帯で時にそのことを忘れそうになったら、私に溶岩の方を見るように仕向けてくれ給え」。 —
「もっと良い、もっと幸先のいい言葉を語り給え」（とディーアンは言った）「有り難い、神々はきっと好意的です。 — 向こうの宮殿の山を父親殿が登って来られます。まだ見たことがないほどに陽気に幸せそうに見えます」。

第三十一ヨベル期

ペスティッツ — ショッペ — 結婚嫌い — アルカディア — イドイーネ — 錯綜

第二百十周

ガスパールは息子に対して最初の時間の通常の高貴な冷たさを有していた。手紙が始めのとき終わりのときよりも冷たいようなものである。この朝霜が溶けて、彼がより温かくなって初めてアルバーノは臆することなく、小心に赤面することもなく、感動した男らしさで、リンダと自分が永遠に結んだ契りのことを彼に打ち明け、第三の承諾を求めた。「それでは」（と騎士は答えた）「昔の魔術師は結局成功したわけだな。勿論若い魔法の女性の加勢があったからであろうが。おまえが全身全霊で、絶えず挑戦する件に関して、私がおまえの邪魔をしないということは、昨年からの同じような事例で承知していることであろう」。アルバーノは自分の初恋についての辛辣な言及に赤面した。しかし半年ばかりのことでかつて若い頃には話していたことを、男らしく沈黙する力を得ていた。ガスパールはいつもより今日は楽しげで、彼に対してより温かく、アルバーノのむっとした様子に気付くところ続けた。「それは結構なことだ。印璽彫刻師は紋章を最初蠟に、それから初めて宝石に刻むように、男性はその紋章を一つ以上の心に彫ろうとして、最後に一番硬い心を得るものだ。私の被後見人を選んだのは、劣等なことではないと私は告白しなければならない。喜んで保証の言葉を与えよう」。 —

アルバーノは、愛の甘美な結び目を更に一層固く結んでくれる手を握って、感謝に酔って言った。「私の妹とも会いました。侯爵令嬢で、しかし貴方に、最近質問した風に尋ねず、時に任せることにします」。 — 「嘲笑家め」（とガスパールは言って、彼を冷ますために、残酷な調子を採用しているように見えた。あたかも純な高貴な若者が、妹に言及して、幾重もの愛という嘲笑を彼に返そうと思ったと考えているかのようであった）「万

*1 幅広い溶岩の流れはかくも重々しくゆっくりと転がり降りて来る。そのため、触れるものすべてを飲み込み、窒息させ、砕いてしまうこの熱く輝く死の河よりも先に、人間は進むことができ、自らを破壊という危険にさらすことなく、この破壊を背後に眺めることができるのである。

事はこれまで私自身がそうしてきたように、心の奥底に仕舞って黙していることだ。宮廷ではそのことは隠していなさい。誓っておくれ」。

アルバーノは言った、すでにユリエンネにも誓った、と。しかし彼はガスパールの振る舞い全体から、自分の父親にもユリエンネの母親にも倫理的花冠を置けないような推論に追いやられた。

ガスパールは更に付け加えた。一人の男性にとって、空想的な女性達と、 — アルバーノがすでに自分の母親をそのような女性として承知しているように、 — それも一度に三人の女性と巻き込まれるのは災難である、と。そして彼に、自分の歩みをこれまで通りに勇敢にすべての謎を通じて進み、その謎を謎自身の解決に任せるように助言した。その後彼は三番目の空想的女性の見本として、伯爵令嬢は後見人にもかかわらず、更に存命の父親を有し、この父親は彼女の結婚式の日に現れるつもりであることをアルバーノがすでに承知しているか質問した。アルバーノはそれを肯定した。ガスパールは続けた。すでにこの理由だけで、 — リンダがその父親を、そして彼ら皆が最後に解明の落ち着きを見いだせるように、 — 正直なシュペーナーを通じて、自分は兩人を早期に内密に結び合わせる使命がある、と。

浄福な時間が浄福な年月に素早く間近に変身することにまことに驚きながら、アルバーノは、自分の巨人族の女性を妻としても、子供としても考えることができずに、 — 謙虚に、そしてリンダの結婚嫌いを、利己心なく顧慮して答えた。自分の封印された幸福の時については、リンダ自身が決定するしか許されないし、できない、と。

ガスパールは満足していた。「ただちょっと先延ばしだけを、おまえ達に関しては考えている」（と彼は言い添えた）「私の友人の侯爵が、またその終焉に近付いている。 — 幽霊の出現が及ぼした有望な効果が次第に薄れてきて、彼は毎日自分の最期の時を予告すると約束した空想物の再来を恐れているのだ。 — このような時にはおまえ達の祝賀はふさわしくない。 — 内密に言って、この哀れな病人は自らこの美しい花嫁に目を付けていた。 — その敗北は確かなものと引導を渡さないことが公平なことであろう。そのせいで私も旅を延期している」。

一人の人間が若々しい楽園に入って、すべての島が一気に、小夜啼鳥や、鷺や、フクロウや、極楽鳥や、禿鷹や、雲雀が自分を取り巻いているかのように、そのようにアルバーノはこれらの交錯する見解を通じて刺激され混乱していると感じ、こう気付いた。この点では自分自身の心とリンダの心の他には頼れないし、支えられない、と。

ガスパールは自分が唯一の女性の友と呼ぶ伯爵令嬢との再会を待ちかねているように見えた。「私は残念ながらローマで私の弟の言を信用できなかった」（と彼は付け加えた）「弟はナポリで二人の女性に出会ったと主張したのだ。 — ところで、弟はしばらく前ここを通過してスペインへ行った。ローマでは、ギリシアへ旅すると言っていたのであるが。 — これで分かる通り、弟はかなりの詩的悦楽と天分とを持って真っ赤な嘘を弄している」。

ガスパールは次のように述べて、とても温かく彼から別れた。「アルバーノ、私はおまえに満足している。青年の純粹さが大人へと移行していくならば、この上なく満足することになる。 — まだそれに出会ったことがない」。 — アルバーノは感動して誓いたくなった。「だから」（と彼は、軽い、誓いを払いのける手の動きをして、話し続けた）

「とてもおまえの幸福には喜んでおる。いいか、侯爵夫人が私に朝方早速おまえの恋愛のことを知らせたものだ。夫人には注意するように。夫人はおまえのことを途方もなく憎んでいるからな」。

格子の背後の新たな不思議な猛獣のように、初めて、正当な、武器を有しないとはいえ、憎しみが、苛酷に、戦慄すべく、一人の善良な心の前に登場してきた。アルバーノはこの悲しい知らせの確認も説明も求めなかった。というのは侯爵夫人の愛と錯覚、リンダに対する彼の以前の冷淡さについての夫人の知識、リンダ本人に対する夫人の静かな怒りというものは、それで強力極まる毒を煮詰めるのに十分な炎を有していたからである。

彼はまた父親の依頼で、彼にとっては無意味に低い所にあるスフェックス博士の許に住むことになった。ガスパールはまた病人の友の間近の宮殿に住んだ。騎士は彼を速やかに宮廷に紹介した。宮廷は旅での日焼け、より鋭い眼光、彼の偉大な形姿の完全な最終的成長に気付き、また気付かせた。侯爵夫人は彼を究めて軽快な上品な冷淡さで接見した。さながら単に純粹な、味のしない水に見えるアクア・トファナ[潜行性毒]であった。侯爵は病床で、うんざりした顔をして、ヘルクラネウムの素描を前に起きて座していた。そしてこれについてブヴェロの説明を受けていた。人生の後年の灰色の年月にまだ美しい喜びを描ける顔は、一つの美しい人生と美しい心を告げているように、聖人は病床でほど天上的に微笑むことはないのであり、罰当たりは病床でほど無残に微笑むことはない。アルバーノはその目を彼の妹の長患いの歪んだ兄から逸らした。

憧れて彼は過ぎた西の国[ヘスペリア]の方を振り返って、ようやく開いて、リンダと妹を楽園に出現させる予定の極楽の門の方を見た。「ルイージの病を口実に、両人がリラルの古い館に住んで、おまえがより人目につかないよう両人に出会えるよう私が手配したから、おまえには都合がいいだろう」（とガスパールは言っていた）。彼は大臣のフルレに出会い、講師が出迎えた。一 両人と共に苛酷な昔の思い出の薄暗い幾重もの影のお供が連れ立って来た。まだ彼は大尉のロケロールには会っていなかった。大尉は今や彼にとっては沈んだ春の一日の夕方の霧であった。

彼はできるだけ早く、彼の黙した心を、一 これは風のときの一つの風奏琴であったが、一 子供時代のブルーメンビュールへ運び、両親に当たる人々に挨拶し、最も間近な魂の隣人たるショッペの便りを読むことにした。今や彼はショッペとの約束の再会をかつてないほどに憧れていた。

第百二十一週

青い新鮮な夏の日に、アルバーノは彼の昔からのブルーメンビュールに出掛けた。丁度その聖ヤコービの日[七月二十五日]、[養]父の誕生日に出掛けていることに彼は気付いていなかった。かつてはこの日を子供時代自分の人生の奇妙な前奏で過ごしたものであった。周知の昔からの庭園や昔からの高台にはリラルの森へ至るまで至る所にまだ子供時代の若々しい微光の露が西の国[ヘスペリア]の太陽で干涸らびもせずにあった。多くの涙の滴も混じって花々の上にあった。しかし彼の新鮮な癒えて行く精神は、今や生温かい流体、この現在のレテの川へ柔らかく溶解することに逆らった。村では人々が蹄鉄を打っている馬に驚いた。これは馬具や一切のもので、ロケロールの慶祝馬と分かったからである。彼が

誕生日選び人[Tagewähler、日柄を選ぶ人、申命記、18.10] で一杯の甲高い父の部屋へ入ったとき、その祝典に一つの祝典を持ち込むことになった。彼は花と咲き、生長し、真っ直ぐに、決然たる眼差しと面影の一人の確固たる男性であった。ラベッテが叫び声を上げ、一ロケロルは「ハハー」と叫んだ。老教師のヴェーマイヤーは「神様仏様」。一彼の子供時代の天使たる両親は彼を変わることなく抱擁し、アルビーネの青い目からは明るい滴が流れた。

しかし彼の青春の傍らには見知らぬ青春が立っていた。ラベッテの顔は、先年の豊かな頬と花咲く唇が落下して、白い上のヴェールで覆われて、もつれていて、両目の代わりに灰色の涙を有していた。しかし彼女はとても微笑んだ。ロケロルの顔は自らのゴルゴンの頭部のように青白く苛酷に見えた、さながら墓石に彫られているようであった。美しい橋の軽やかなアーチなしにただ武骨な支柱が奔流の中に立っていた。アルビーネとラベッテはアルバーノの花々の幹をまじまじと見つめた。彼はイタリアの作物に見えた。一人のナポリ人で、湾の毎日の海水浴で強健になっていた。ロケロルは早速自分の役を演じて、アルバーノより楽に自分の本領を發揮した。彼は自分の人生の魔法の杖を二つに折り、二本の乞食棒として投げ寄越した者に対して、極上の丁重さで振る舞い、彼の頬に接吻して、最も軽快な、しばしばフランス語の語調で耐えて、フランス・イタリアの地の最新のニュースを引きだし、そしてまたかなりのニュースを、彼の申すに西の国[ヘスペリア]の尺度を持った一人の男性のために用意できるだけのものを自国から座輿に供した。更に彼は語った、「騎士の弟が滞在して、才能豊かな男で、殊に物真似が上手で、性格の極度の冷淡さにもかかわらず、奇妙に激しい空想の持ち主であるが、ひょっとしたら必ずしも十分に真実な者ではない」。一「私の悲劇の際には」（と彼は付け加えた）「黄金に値する者であろう。愛する兄弟よ。この際同じように招待もしておこう、『悲劇役者』と言うのだ。

一私が直に提供する、一ラベッテは知っている」。彼女は頷いた。アルバーノは白熱を帯びながら黙っていた。すべての配役の中で大尉にとっては、世の紳士役が最も純粹に似合っていた。冷たい見せかけは、温かさの見せかけよりも容易で真実味があるものである。アルバーノは気位の高い距離を保っていた。侮辱され、枯れたラベッテに対して、ロケロルは何事を通じても、彼女の心を得られなかった。荒廃した人生に満ちた彼の形姿で取りなしてもできなかった。アルバーノは何か永遠に混乱したものの、一つの塊に押し潰された蠟の翼を見いだした。アルバーノにとってここは窮屈で、明るい世界から突然、卑俗な湿った地下の洞窟へ這い入る者の気分がした。

大尉は立ち上がって、今一度『悲劇役者』への招待を思い出させて慶祝馬に飛び乗って去った。

彼の後では、誰もが当惑したかのように彼について黙っていた。女達は、アルバーノの輝かしい現在で少しばかり臆して、昔からの馴染みの過去に余り触れる勇気がなかったのであるが、養父のヴェールフリッツは、自分の意見や慣習に浸かったままで、まだカナリアや犬の昔からの叫び声に掴まっていて、少しも時を弁えず、養子の息子に対し自分の誕生日祝いへの親切な想起と選択とに懇ろな感謝を述べた。アルバーノの方はこの感謝をやむなく断って無駄だったのであるが、更に彼は以前の「おまえ」の語り方で、父親らしく語り続け、フランス人とフランス人の将来の勝利に喜びの声を上げ、今やより年を重ねた養子の息子にかつての年若い頃の息子に対するよりも多くの称賛の賞を承認し、かくて以

前と同様に彼に大きな満足感を与えようと期待していた。学士は遠くからその称賛を支持した。もっとも自分の生徒がナポリとかバーヤ、クマと発音すると、機会を捉えて、ネアペル、バヤエ、クマエと[ラテン語風に]発音することを止めることができなかった。アルバーノは皆に対して純粹で、真実で、人間的で、率直で、衷心からであった。彼の忘我の気位の中には虚栄心はなかった。

ラベッテはようやく巻き上げ機を見いだして、輝かしく親しい兄を客間から自分のあるいは彼の以前の部屋へ巻き上げ、彼の胸元で二人つきりになった。彼らが入ると、彼女は早速「アルバーノ、部屋をまだ覚えている」と言って、長いことためていた涙で果てしなく泣き始めた。アルバーノは彼女に自分の涙で彼のこれまでの長い同情を示したが、しかしそのことで過去の一切の痛々しいことを引き出すことになった。彼女自身が語るという薬剤を使用した、――自分は一切を承知していると彼は予防線を張ったのであるが、――そして彼女は、目を拭きながら、一切の事の次第を報告した。――「カールは大抵アルカディアの母親の許にいて、――大臣はまだ唯一の子供に対して昔ながらの暴君であって、以前にもまして一ヘラーの金も出してやらないこと、――いつも大きなかなりの借金をしているけれども、殊にリアーネが黙って片付けてくれなくなって以来そうで、――至る所で借金しているけれども、ただ彼女からは何も受けとらないこと、――

彼は相変わらず伯爵令嬢の他は何も求めず、知らないということ、――こうした一切のことからどういうことになるのか、神様が知るところだということ」を報告した。――

すべての質問に先立って彼女はこう付言した。「あの方は今すべてを承知しています、この女性とのあなたの生活を承知していて、――静かに陽気にしています。でも私はあの方のことを十分に分かっています。――いやはや」と嘆きを一杯にして彼女は溜め息を付いた。そしてすぐに同じ声で言い添えた。「私を見て、ね、いつもよりとても痩せているでしょう」。――「そうだね、可哀想に」と彼は言った。「あの方のために酔を沢山飲んでいるの、カールは柳腰が好きで、それに悲痛も効き目があるわ」と彼女は言った。

アルバーノはカールと彼女との結び付きのもっと近しい可能性で慰めようとした。他の結び付きは決定的に不可能であろうからで、そして彼女のためにどんな声かけでも強制手段でも取ると申し出た。――「彼は神と我々の前ではおまえの夫だ」と彼は言った。「そうは」(と彼女は赤面しながら答えた)「あの方はなりたくないのでしょう。つまり律儀な男には。私はあなたに書いたように、今は私だって誇りがあるから無理よ」。――倫理的誇りより更に彼を籠絡するものはなかった。「それでは彼を永久に追放してしまえ」と彼は言った。「でもね」(と彼女は不安げに言った)「あの方は御自分にどんなことをするか分からないわ。そうしたら私は自分を永久に責めることになるわ」。思わず知らず彼はこの愛の籠もった神聖な恐れを、侯爵夫人の苛酷さと比較せざるを得なかった。夫人は幾多の惚れた人生が彼女の脆い心とコケットな顔の犠牲となったことを楽しげに誇り高く話すことができたのであった。「どうするつもりかい」と彼は尋ねた。「私は泣くわ」(と彼女は言った)――「アルバン、あなたが聞いて助言を与えてくれて、それで十分よ。私はまた元気になった。でもまたあの方の友達になってください」。

彼は黙っていた。助言を求めるという口実の許、ただ聞く耳だけを要求する女性らしい無作法に少しばかり怒っていた。「これは何だい」(と彼は尋ねた、一枚の紙を見せながら)「これは全く私の筆跡だ、しかしこれは書いたことがないぞ」。――彼女はそれを

見つめて、言った。「カールはよく私の許で、筆跡の練習をするの」。彼は不思議に思い、言った。「いつでも物真似、模倣だ。しかし私が許すとおまえは思うのかい」。 — 彼女のいつもは本に乏しいナイト・テーブルの上の何冊かの旅行記が彼の目に留まった。「だって知りたかったの」（と彼女は言った）「あなたがあちらこちらでどんな具合なのか。それで長いものを読んだの」。「変わらない妹だね」と彼は言って、衷心から接吻した。彼女は最近の彼の状況について、更に多く、しつこく尋ねた。しかし彼は寡黙に、心が一杯になって、階下へ急いだ。 —

下で、地方総裁に対して発した最初の言葉は、「保管されているショッペの文書」についての依頼であった。ヴェールフリッツは借用書の鉄の小箱に保管されていた幅広の手紙を持って来て、望むらくは正しい手渡しであろうと言った。アルバーノは、きっとまだ人生で揺らいだことのない、あるいは汚したことのない愛しい者の手による皺の寄った貴重な痕跡を自分の手に有したとき、ほとんど涙を抑えられなかった。彼は開封しなかったの、人々は皆善意で、彼の友人のショッペのことを、どんなより高次の精神についても大胆に喜んで敢えて行う推測や見解に従って、彼のすべての行為や色合いを描写し始めた。あたかも行為や色合いは一筆や輪郭であるかのような按配であった。ヴェールフリッツとヴェーマイヤーは、彼がすでに狂気ではないとしても、狂気になるかもしれないと案じていた。学士は地方総裁がより細かな副次的証拠を述べるまでは、自分の主要な証拠を控えていた。

この館の屋根の下での彼の生活が、好意であれこれ明らかにされた。彼はこれまで、 — と報告は続いた、 — 何ら実質的なこと堅牢なことを目的としてこなかった、と。ヴェールフリッツは誓った。自分は彼が『文学新聞』を半丁折りに収まったまま読むのを目にした、それは勿論狂気というよりは精神の放心状態のせいであろう、彼がいつもどんなに熱心に『帝国新報』を、 — これを夫子自身帝国都市ドイツのドアの鍵と見なして、 — 手に取って、分別を持って扱ってきていることかと自分は知っているのだから、と。社交の中で図書館司書は自分の両手をこう言って眺めていた。「ここに或る者が肉体を有して座っていて、私はその中にいる、しかしこの或る者は誰か」と。 — 彼はほとんど働かなかつたし、重さのある本には、ヴェーマイヤー氏が知っているように、ほとんど取りかからない、めったに目にしたことがない。より容易な、百姓どもの全く劣等な本ばかりで、例えば夢占いの本全集とかである。 — 彼の最後の交際は、自分の狼用猟犬で、この犬と何時間もきちんと議論を行って、この犬が唸ると彼は真面目に主張したものだ。遠くの雷の音のようだ、と。 — 好んで彼は鏡の前に座って、自分との長い会話に陥ったものだ。時折彼は針穴写真機を覗いて、それからまた素早く一帯を見て、両者を比較し、全く非科学的に主張したものだ。カメラの動く映像は外部世界によって拡大されるが、しかし見紛うほどに猿真似される、と。「それでも」（と総裁は付け加えた）「抜け目ない奴でな。近隣の騎士領の私の知人達の様々な者が、彼に自画像を描いて貰ったのだ。安売りしていたから。しかし彼はいつも何かを顔に混入して、その観相学の顔が全く滑稽なもの、単純なものに見えたものだ。これを彼はお追従と称していた。勿論長いこと正直者は誰もモデルにならなくなった」。

「私にも許されるならば」（とヴェーマイヤーは始めた）「今、伯爵殿に図書館司書殿の一事実をお知らせしましょう。これは少なくとも私の意見で、幾多の他のもの同様驚く

べきものです。学校の住まいは、貴方もまだ多分御存じでしょうが、教会のすぐそばにあります」。その後長い語りの中で、こう語った。あるとき真夜中にオルガンが鳴りました。

一 自分が教会のドアに聞き耳を立てていると、ショッペがはっきりと主聖歌の中から短い一節を歌い、オルガンを弾くのを聞いたのです。一 その後ショッペは音高く聖歌隊席から下りて、説教壇に登って、自分自身に対する臨時の説教を始めたのです。「我が敬虔な聴衆にしてキリストの友よ」、一 冒頭で彼は人生以前の静かな、残念ながら速やかに去ってしまった幸福について触れました。勿論正統な説教に従ったものではなく、第二部はほとんど導入部の反復でして、一 その後、自分で一つの賛美歌を歌い、そしてヨブが実在しないことの喜びを示しているヨブの第三章、第二十六節を読み上げたのです。これはこう言うものです。「私は浄福ではなかったか、私は静かではなかったか、私は良き安静を得ていなかったか、それなのにこのような不穏が生じている」[静けさもやすらぎも失い、憩うこともできず、わたしはわななく]。一 彼は自らに説きました。一 一人のキリスト教徒の苦しみと喜びです。第一部では苦しみで、第二部は喜びでした。一

この後彼は、しかし戯けたやり方と言葉とで、しかしそれでも聖書の格言と共に、世界での困窮について短くまとめ、その中にとっても思いがけない奇妙な事柄、長い説教とか、両極、醜い顔、お世辞、賭博者達、世の愚かなことを教え上げたのです。一 その後第二部では慰めに移って、キリスト教徒の将来の喜びを記述したのです。これは彼が罰当たりに行ったのですが、将来の無の中への昇天とか死後の後の死の中にあるもので、自我からの永遠の解放なのです。一 そのとき彼は、それを聞くのはとても身の毛のよだつことだったのですが、下の教会の中の、侯爵の墓地の中の死者達に語りかけ、こう尋ねたのです。不平があるかね、と。「起き上がり」（と彼は言いました）「椅子に腰掛けて、目が濡れているなら、目を開き給え。しかし目は貴方らの埃よりも乾いている。何と無限の前世が静かに美しく自らの影の中に包まれて横たわっていることか。自らの灰のベッドに柔らかく置かれていて、一つの傷を受ける夢の肢体をもはや有しない。スウィフトよ、老スウィフトよ、御身はかつて晩年には正気を失っていて、誕生日のたびに、我々の収穫時の説教の神聖なテキストが取って来られるときの章のすべてを朗読したものだ。スウィフトよ、何と御身は今や満足して、全く回復して、御身の胸の憎しみは燃え尽きていることか。そして数え珠、つまり御身の自我は人生の熱い涙で遂にかみ砕かれて、崩れ落ち、涙のみが明るく残っている。一 そして御身は寺男の前で、私同様に説教したのだ」。[Orreryのスウィフトについての第三の書簡による]。一 ここでショッペは泣かれて、感動について、誰に対する感動か分かりませんが、謝罪されました。一 その後教訓に移られて、聞き手や説教者の改善を鋭く要求されました。ただの実直な正直さ、友人の忠実さ、誇り高い勇気を要求され、甘ったるさや、蛇の歩みや軟弱な淫らさに対する辛辣な憎しみを要求されました。一 最後に彼は神に対して、神は、彼がいつか健康とか分別、類似のものを失うはめになっても、一人の男らしく死なせ給えと依頼して敬虔な祈りを結びまして、突然教会のドアから出て行かれたのです。「彼はほとんど」（とヴェーマイヤーは付言した）「恐怖で私の分別を奪ってしまいました。突然私に怒ってこう発したのです。『見せかけの死体め。何故墓の周りに這っているのか』。私は色を失って、何もそれには答えずに、急いで家に帰りました。伯爵殿は何と仰せられます」。一

アルバーノは頭を激しく振った。言葉で説明せずに、顔に痛みの涙を浮かべていた。彼

はただ急いで皆から別れて、急ぐことの詫びを請うた。 — そして夕陽と自由とを求めて、この高貴な人間の手紙とその旅の意図を読んだ。彼はリラールへの古い道を選んで、彼の陽気なディーアンの陽気で南方的な胸元で、再び南方の快活さと習慣とを見いだそうと願った。というのは彼の心は一つの地震で圧迫され、持ち上げられたからで、それというのもこのショップの中には幾多の荒々しい徴候が、さながらこの星座の過剰な火花や閃光のように、一つの没落、最後の審判を告げているように見えたからである。この没落を彼は極めて痛ましいことに、この現世を燃やす愛の新しい星の上昇のせいにはせざるを得なかったのである。

第百二十二周

彼はショップの次の手紙を読んだ。

＜君の手紙は、親愛なる若者よ、私に確かに届いた。私は君の涙と炎とを称える。これらは互いに交互に支えるもので、消すものではない。何らかのものに、それに立派なものになり給え。ただ全てのものになることはない。君が極めて空虚な事柄の中で、人生というそのようなものの中で、 — 誰が人生を発明したのか知りたいものだが、 — 荒れ果てることなく耐えられるようにするためだ。ホメロスとかアレクサンダー[世界征服の後目標がなくなったと嘆いたとされる]のような人でも、全世界を征服し、支配したというのに、自分の人生が一人の花嫁から一人の妻となったが故に、しばしばうんざりする時間という不平を言わざるを得なくなるのだ。私がそれに対し柵をめぐらし、誰の上にも立つことなく、世界の何でも屋として上に座ることがないように決意しても、結局はいつの間にか高みに立っていることになる。それは単に私が長く眺めているうちに泡の島々や霧の巨人で一杯の地球圏全体がますます深く溶けて縮こまってしまったからだ。そして今や一人っきりで干涸らびたまま山の角から見下ろしている。世界反吐という血吸蛭に全く覆われたまま。

兄弟よ、しかし今年は事は別様になり、私は敏捷になった。それ故ここで君に二月に、長い、私には全く厭わしい手紙が書かれて、君に私の間近な繭作りと蛹化とが、いつどのようにしてかと語られることになる。というのは私が一度、輝かしい蛹になったら、私は単にもはや弱々しくしか動けず、姿を見せられなくなるであろうからである。

ドイツ人は明確に説明したら、もっと明確に説明しようと付け加えるものである。特に都合良く、幸先がいいのは、 — 皆と同様に私が評価していることだが、 — 丁度今年の終わりが私のこれまでの父親の財産の終わりに当たるということで、従ってアムステルダムが支払いを終えれば、私も倒れ、手にするものはもはや弱々しい手相術の予言だけで、体の中には胃の他には何も有しないということだ。私は早期の頃のように私の臍だけで生きられて、柔らかい床の上に寝ていることができたいと願っている。

どうしたらいいだろうか。立派な人間の方々に年々歳々贈り物をして貰うには、それが許されるほど、私は十分に人間の方々に敬意を払っていない。時に私が敬意を払うわずかな人も、また私に余りに敬意を払っていて、それを申し出ることが許されないであろう。ごく薄い黄金の小鎖に繋がれた一匹の蚤で私はあるべきで、私が逃げずに飛び乗るよう繋

いでいる殿方は、ちよくちよく私を腕に引っ張って行き、おい吸い給え、蚤公と言うのであろうか。 — 畜生め。私はこの軽蔑すべき地上で自由でありたい。 — この大きな奉公人部屋で、報酬も、命令も受けずに、 — 何の同情も家庭医も必要ないほど芯から健康でありたい。 — いや、ロメイロ伯爵令嬢の心を跪かせるという条件で私に落札するよう望まれたとしても、私はこの心を受け入れて、それに接吻をするだろうが、すぐその後で立ち上がり、彼女がこの件の要点をおさらいして、私の方を向く暇もないうちに（第二世界か新世界かのいずれかに） 走ることだろう。

勿論何かになること、 — そしてそのことで儲かること、 — そのことを（私に提案されたら）私は、格別自由と不平等とを失うことなく試みることができよう。実際私はここで三百六十の放射状の道が私の中心から走って行くのを見、どれを選ぶかほとんど分からず、かくてむしろ中心部を周辺へと平らにしたり、周辺を中心へと縮めたりして、ただ存続しようと試みるであろう。奉仕すること、これは連隊本部が言うように、勿論支配することに最も間近なことであろう。君自身は、君が書いているように、戦役に行きたいと思っている。（この手紙を確かに私は貰ったし、その中で君の嫌悪と嗜好とを結構で立派なものと思い、君のことはすべて分かった）。実際、大天使ミカエルが神聖な兵団を、世の卑俗な輩に対する幾つかの弱々しい七十人〔訳聖書〕の雷兵団〔legio fulminatrix、マルクス・アウレリウスの兵団で、雨乞いの奇蹟をなした〕を設立したら、大天使は平民の任務に対して巨大な戦いを布告して、四つか五つの大陸を、第六の小大陸で（一つの島には多くの広場があるであろうから）世界から締め出し、あるいは牢獄に入れ、すべての精神的下僕を肉体的下僕としてしまうことだろう。保証されるべきことだが、こうした幸運の場合に、私は最初に先頭の下に付いて、大砲を短いコメントを付けて持って行くことだろう。ヘンデルが最初に音楽に大砲を持ち込んでいるように〔ヘンデルではなく、Giuseppe Sarti (1729-1802)〕、ここでは逆に、最初に大砲に音楽を持ち込むのである、と。さて我々が皆引いてしまうと、聖なる国民軍がまた進軍して来るであろう。かくて地上に神の王座が生じよう。そして聖なる男達は両手に高い炎を持って駆け上がり、向こうで天体を支配すると言うよりは世界精神に犠牲を捧げようとするであろう。

それ故フランス人団体と共に、君は君が書いているように、自らの人物としては、将来一人の男に味方することになる。勿論私にとっては格別に二千五百万人の人々について考えることは難しい。それらのうち確かに立方根は自由に伸び、育っているが、幹や枝は数百年間奴隷の格子で干涸らび、乾燥してしまっている。革命前に静かな革命家でなかった者は、 — 例えばシャンフォール〔Sebastian Roch, Chamfort とも (1741-94)〕のように、私はかつてパリでその炎のように堅固な胸を私の胸に抱いて素敵な炎を生じさせたのであるが、あるいはモンテスキューのように、J.J.ルソーのように革命家でなかった者は、軟弱で自分の玄関先で大風呂敷を広げるべきではなかろう。自由はすべての神的なもの同様に学習され、修得されるものではなく、生来のものである。勿論フランスやドイツでは至る所に若い著者やミュージズの息子達が座っていて、彼らは自分達の速やかな自己内容について驚き、説明しているが、ただ自分達は以前は自由の感情を感じなかったことに忌々しく驚いていて、軟弱な悪漢どもで、自分達が若干の鯨の髭を肋骨に結ぶべく見つけたが故に、潮吹く鯨全体を自らと見なしているのである。 — いつでも私は亡き時代が与え得るような戦争の中で、確かに阿呆どもに対して戦うと思うことだろうが、しかし阿呆ど

ものためにも戦うと思うことだろう。

現今のシニカルで、素朴な、自由な自然人間ども、一 フランス人やドイツ人は、一 裸の名士連にほぼ似ていて、これらを私はプライセ川や、シュプレー川、ザーレ川で泳いでいるのを見たのであるが、一 彼らは申したように、とても裸で、白く、自然であり、野蛮人であるが、しかし文化の黒い弁髪が顕著に白い背中に付いているのである。時代の何人かの偉大な背の高い人間や父親達は、例えばルソー、ディドロ、シドニー [Algernon Sidney (1622-83)]、ファーガソン [Adam Ferguson (1723-1816)]、プラトンは履き古したズボンを脱いでいる。このズボンを彼らの弟子は模して、着用し、自らを、そのズボンは広く、長く、開放された状態であるので、それ故ズボンなし [サン・キュロット] と称している。

確かに私は剣の代わりにペルナイフを手にしていて、執筆するカエサルとして立ち上がり、世間を改善し、世間のために、世間を利用できよう。私がこの点に関し、ベルリンの「一般ドイツ文庫」氏と行った会話、静かにティアガルテンで散策しながら交わした会話は参考になろう。「誰もが、普通なら埋もれてしまう自分の知識で祖国に役立つのです」とドイツ文庫氏は言った。「一つの祖国にはまず若干の国が必要だ」と私は言った。「ここで話している拙者マルタ島の図書館司書は、真っ暗な嵐の下、海辺で世の明かりを見た [海辺で生まれた]。勿論私は知識を十分に有し、人はその知識を牛痘で一杯のグラスのように、理性的に考えて、それを接種するために、ただ有していると承知している。一 その生徒の方としてはまたそれを飲み込んで、単にそれを自らから与えている。そうして更に続いて行く。かくて明かりは『狐が死ぬば、皮が肝腎』の遊びでの燃え輝く木っ端のように手から手へと渡って行き、遂にはしかしその木っ端はある者の手の中で、一 私の手の中で、一 消え、そのままになるのだ」。

「気まぐれな言い草」(と一般文庫氏は言った)「このような気まぐれで貴方はただなお劣等な人間と上等な手本の勉学とを結び付けておられる。かくて貴方は阿呆どもを鞭打つ第二のラーベナー [Rabener (1717-71)] というわけだ。一 「よろしいかな」(と私は怒って答えた)「私は賢人達を優遇し、貴殿に最初の一撃をお見舞いしよう。賢人達は学び、洗われ、いつでも洞察し、結構な阿呆であって、私の家族です。一般的ドイツの獣医兼蹄鉄工のような一人の男は、ミューズの馬の脈拍を測りながら、私に自分の脈を測って貰えばいい、私は喜んで測ってやりましょう。しかし世間の残りはどうでしょうか。海の岸辺を取り払わずに、誰が世界の海の泡を取り出せましょう。すべての天才的人間は、プラトンからヘルダーに至るまで、声高に印刷されて、しばしば、学のある賤民や愚民 [小荷物包装所] によって読まれ、研究されながら、この者どもが皆目変わることがないというのは一つの嘆きであり、残念なことではないでしょうか。文庫殿、かの神殿の隣の批判的犬小屋で門番をしているすべての者どもを口笛で呼び寄せ、すべてのグレーハウンド [獵犬]、ブルドッグ、猪狩獵犬に尋ねるといいのです。彼らの魂の中では高められた胃より何か他のものが動いているか、詩的聖なる心の代わりに動いているか、と。盆地を見ると彼らはソーセージの釜を、醸造用釜を見、葉を見ると、カルタのシェレ [ダイヤ] を見、雷は彼らにとって、一 より大きな電氣的火花として、一 とても酸っぱい味がして、これを雷は後に三月ビールに注ぎ込むのです」。

「当てこすっているのですか」と彼は尋ねた。「勿論」(と私は言った) 一 「しかし更に、文庫殿、仮に我々兩人がとても幸せで、靴の踵で回転して、一息吹きかけて、す

すべての阿呆どもを鉦毒煙で手ひどく吹き払い、お陀仏にのしてしまうとしても、しかしどこに幸せが舞い込むのか分からないのです。私ども自身がまだ残っていて、互いに吹き付け合うということの他に。すべての隅に女どもが座っているのが見えるからで、女達は空になった世界を新たに孕むのです。 —

炎で一杯の輔人形殿[Püsterich]^{*1}」（と私は続けた）「しかしこのことを諷刺的手仕事のために呼び寄せ、刻印することができましようか。 — できません。真の気まぐれは私にはあります、ひょっとしたら他人の狂気も同じようにあるかもしれない。ひょっとしたら、

— しかし奇妙な冗談屋というものは、貴方の尋常ならざる文庫の中でさえ、ロンドンの山嵐男（息子）に似ているのではなからうか。これは動物商のブルックの許で、客人達を野生の家畜小屋や外国風の動物園に案内するという仕事をしていて、入口の所で、自分は人間と見なされていると自己紹介することで始めたのです。 — このことを冷静に前もって考えてください。まだ私は私のサチュロスの尾を結ばれないまま陽気に振っています。多分時折のブレーキに反していることでしょう。しかし一冊の本がそれに結ばれたら、ポーランドで牛の尾に揺り籠が結ばれるような具合になったら、その動物は読者の揺り籠を揺すって、陽気なことになるでしょう。しかし尾は従僕となってしまいます」。

「そのような比喻には」（と文庫氏は言った）「勿論教養世界はラーベナーによっても、ヴォルテールによっても慣れていないことでしょう。私自身が見るところでは、諷刺は貴方の専門ではないですな」。 — 「その通り」と私は答えて、我々は好意的に別れた。

— しかし兄弟よ、真面目に考えて、世紀が、また人生が、私のように生きている者どもによって台無しになっている一人の人間にとって、何が（見解の点においても願望の点においても）残っているだろうか。 — 一般的な気の抜けた偽善と、有毒極まる木材の輝かしい光沢とにうんざりしている人間にとって、 — ドイツ人の人生劇場の驚くべき卑俗さと、ドイツの劇場人生のより大きな卑俗性、 — どんな神父も乾かせず、確固たるものにできないコッツェブー的[Kotzebue(1761-1819)]破廉恥な、躰けのない軟弱さのポンティーネの沼、周辺の生き生きした虚栄心の傍らの殺害された誇りにうんざりして、かくて私は、ただ息抜きするために、何時間も子供達や家畜の遊びを見ているのであり、それは両方とも私に媚びることなく、自分達の仕事の他は何も考えず、何も好んでいないと確信が抱けるからであるが、それで申し上げたように、先の紙の最後の行で尋ねたように、かくも多くのことが鼻につく者にとって何が残っていようか。つまり専ら更に次の点が鼻につくもので、即ち改善は難しいが、劣化は全くもって難しくなく、それは最良の者達でさえ劣等極まる者達を何か勘違いさせて、かくて自らをも勘違いさせるからで、彼らは現在を秘かに呪いながら、駕籠かきしながら、二股かけながら、少なくとも金と名誉を求めて踊り、そのために喜んでより確かな平民どもに、ワイン樽として肉樽用に使われたがるからである。 — 申し上げるが、一人の男には何が残っていようか、今のように印刷で[白地に黒]で、黒から白は作らないけれども、しかし灰色を作る時代において、教理問答師のすべきことであるが、まさに「はい」か「いいえ」の質問を避ける時代において、暴君と奴隷を憎むことの他に、虐待と共に虐待を受けた者達に対する怒りの他に、何が残っ

*1 あるいは輔で、穴や炎や水で一杯の周知の古代ドイツの偶像である。

ていようか。人生の胸甲がこのような箇所でも薄く細工され、薄く磨かれている男は真面目に何の決意をしたらいいのだろうか。

当方としては、私が話題であれば、半ば冗談で、『帝国新報』でのちょっとした明確な照会に応ずる決心をした。これは君もひょっとしたら私と気付くことなく、すでにローマで読んだかもしれない。

関心の向きに[Allerhand、帝国新報 Reichsanzeiger の欄]

多分確実に、健康な分別と理性は(健全な精神ハ健全な身体ニ宿ル)、最上の、純粹な良心の後で、人生で評価されるべき財産の中で最も上位にあるものであろう。私が敢えてこの紙片の読者の許で前提とする一つの命題である。他にこの点で言われ得るものは(カント主義者[Kantner]についてもカント主義者に抗しても『カンペ[Campe(1746-1818)]はこうカント哲学主義者[Kantianer]の代わりにはなはだ正しく表記しているが』)、きっとここでは大衆的民衆誌上ではふさわしくないであろう。この文の署名者は、今や悲しい事態にあつて、ここでやむなくドイツ内外の医師達に問い合わせるもので、一 痛みと共に同情を与え給え、返事を送り給え、一 いつこの者は(まさにドイツの面前で明らかに)完全な狂気に陥るであろうかというものである。すでにその発端は明らかになっているのであるが。

高貴な人間の友にとって返事で大事なことは、「いつ」であつて、「狂気かどうか」ではない。ドイツ人の方々、ここに根拠を述べる。何人かはすでに照会から結論付けられようが、一 これは余り決定的なことではなく、このことを別にしても、一 次の事柄は由々しく、確実なことである。1) 筆者の多彩な文体そのもの、これはこの広告(極めて熟慮された間の中で作られたもの)よりも、はなはだ愛好されて没趣味な或る著者[ジャン・パウル本人]の類似な書き方から判然とする文体であつて、全く見慣れぬ比喻の多彩な過剰が頭部での間近な解体を、ガラスでの多彩な色彩の戯れ同様に、意味しているものである。一 2) 或る悪漢¹⁾の予言で、これを筆者は絶えず考えている。悪しき結果をもたらすに違いないものである。一 3) スウィフトへの筆者の愛と営為で、スウィフトの狂気は学者達にとって疎遠なものではない。一 4) 筆者の全くの忘れっぽさ。一 5) 夢想した事柄と体験した事柄との、及びその逆の、顕著で悪しき混同。一 6) 後で読み直すまで自分が書いていることを知らないという筆者の不幸。自分の目的に反してあるときは何かを除外したり、あるときは何かを添加したりするからで、これは残念ながら線を引き抹消された原稿が最も良く証していることである。一 7) 筆者のこれまでの全生涯、全思考、全冗談で、ここでは余りに冗長にすぎるものであろう。それに8) 筆者のとても無分別な夢である。さて、問題は、いつこのような状況下で(つまり熱も、恋情も付加しないとき)、完全な狂気(固定観念、躁病、暴行発作)が始まるかである。スウィフトの場合とても遅くになって、晩年で、その頃には彼はいずれにせよ、すでにそれ自体半ばおかしくなっていて、その後一切がただ顕著になった。かつてビュッシュ[Georg Büsch(1728-1800)]教授が、自分の視力減退は実害なく年々進行し得る、完全なる盲目

*1 筆者に十四ヵ月[本文では十五ヵ月]後の狂気を予言した禿頭のこと。[第九十四周、拙訳 343 頁]

化の期間は長い人生全体を越えて、ただ墓場にまで延長されることになろうからと計算したことを考えてみれば、私はこう仮定して良からう。私の劣化は段階的に引き延ばされ得て、棺桶そのものより他の精神病院独房[petites maisons]は必要ないであろう。それで私は前もってすべての他の正直な人間同様に結婚し、官職に就いて良からう、と。

私がこの紙面で目的としているのは、単にこの件でどこかの人間の友と（しかしこの人は哲学的医師であるべきで）連絡をとりたいということだけである。私の住所は『帝国新報』の発行所が承知している。もっと詳しいことを私はひよつとしたら、一人の妻を求めるときにこの新聞の紙面に肉体的に市民的に記載するかもしれない。ペスティッツにて、二月。

S - s、 L-d、 G -l、 S - e.[Siebenkäs シーベンケース、Löwenskiold レーヴェンシヨルド、Leibgeber ライプゲバー、Graul グラウル、Schoppe ショッペ]。

アルバーノよ、どの茂みに私の本気があるかは君には分からう。帝国新報、ショッペ新報には、私の本気であるばかりでなく、私の冗談でもあるこの件への八つの理由がある。禿頭が私に一年後の私の狂気の天狼星の開始を告げて以来、私はいつもこの恒星のオーロラを眼前にしている、それで結局私は盲目に、臆病になってしまった。それを白状しなければならない。兄弟よ、私は一月に八回の恐ろしい夢を次々に見た。一 新報の根拠の数に従って、自ら八番目の根拠の許、一 色々な夢で、夢の中で脳の野蛮な狩人が精神を通じて狩りをし、様々な世界、顔、山、手に満ちた激しい奔流が沸き立った。一 君を不安な思いにさせる気はない。一 これに比べるとダンテとダンテの頭は天国だ。

そこで私は臆病さにうんざりして、自分に言った。「おまえはこれまで長く生きてきて、どんなに豊かな積み荷も容易に水の中に投げ入れた。それどころか現世も、第二世界も、一切の中からおまえも、投げ入れ、名声や本や心から純粋に脱して、おまえ自身の他には何も有して来ずに、かくて球の上に自由に、裸で、冷たく立って、太陽を前にしている。突然おまえはいつの間にかただ狂った固定思想を前に狂った固定観念に屈み込んでいて、おまえの頭にこの観念は、熱の脈拍のたびに、拳で殴られるたびに、毒の穀粒のたびに、埋め込まれかねない。そして突然おまえの昔からの神々しい自由を贈り物にしている。ショッペよ、おまえをどう考えたらいいか分からない。宇宙でまだ何らかのことを恐れている者は、それが地獄であろうと、その者はまだ奴隷だ」と。

そこでこの男は奮起して言った。私は自分が恐れるようなものを有することにしよう。そしてショッペは幅広く高い霧に一層近寄った。すると見よ、それは（即刻寝てみたかったであろうが）、最も長い眠りの前の最も長い夢にすぎなかった。人々が狂気と名付けるものはそれ以上ではない。例えばしばらく冗談で精神病院へ行くと、多くの人の場合と同様、普通にすべてがその様相を呈するならば夢が得られよう。そこに私は次第に沈み込むことにしよう。つまり夢の中に、夢では未来に関しては剣の先は折れていて、過去に関しては錆びが拭われている。一 夢では人間は支障なく影の世界、その観念のバラタリア島[『ドン・キホーテ』より架空の島]の中で、一人っきりの支配の王朝であり、ジョン欠地王であり、人間は哲学者のように自分が考える一切を行う。一 夢の中では人間は自分の体を外界の波や砕け波から引き上げ、冷たさや暑さ、空腹、神経衰弱、肺病、水腫症、貧乏をもはや感知せず、精神は恐怖も、罪も、精神病院での迷妄も感知しない。一 夢の

中では年内の夜の三百六十五の夢が、ただ一つの夢へと、須臾の雲は一つの大きな輝きの夕焼けへと織り込まれる。――

すると何か邪悪なものが居座る。人間は自分の夢を、自分の立派な固定観念を、――
というのは最も残忍で、最も魅惑的な観念の一つの高い蟻塚が、人間の前にうごめくから
で、―― 分別をもってつまみ出したり横領したりすることができなければならない。さ
もないとまだ気が確かであるかのように、劣等な状態になるのである。そこで私はお気に
入りの好ましい固定観念を、私の都合のいい妄想を見だし、認知するよう時に準備し
なければならない。例えば瘋癲病院での最初の間人となれたら――あるいは第二のモー
モス[嘲笑の神]――あるいは第三のシュレーゲル――あるいは第四の優美女神――
あるいは第五のトランプの王――あるいは第六の賢い乙女――あるいは第七の世俗の
選帝侯――あるいはギリシアの第八の賢人――あるいは箱舟の第九の間人[箱舟にはノ
ア夫妻と三人の子供達夫妻の計八人]――あるいは第十のミューズ女神[ミューズは九人]――

あるいは第四十一のアカデミー会員[アカデミー・フランセーズは定員四十人]――あるいは
第七十一の翻訳家、あるいはそれどころか宇宙――あるいは何と世界霊そのものにな
れたら、勿論私の幸運が仕上がり、人生のサソリから針全体が引き抜かれる。しかしまだ
何という黄金の宝石風幸せが開け放たれていることか。私は恋人の女性の太陽の体が一日
中天を移るのを見て、見上げ、こう叫ぶとても恵まれた恋人たり得ないであろうか。私は
ただ御身の太陽の目のみを見る、しかし十分だ、と。――私は第二世界に対する不信仰
で一杯のまま第二世界へ出掛けて、喜びの余りどこに出たらいいか全く分からないでいる
一人の故人たり得ないであろうか。――私は再び、――というのはより短い夢と高齢
とは幼時化させるというから、遊びながら何も知らない無邪気な子供たり得ないだろうか。
つまりすべての人間達を自らの両親と見なし、人生の多彩な泡から集められた一つの涙の
滴を目の前に有して、その滴を再び笛で巧みに微光を発する色彩の小世界球体として膨ら
ませる子供たり得ないだろうか。

丁度真夜中である。私は今や教会へ行って、晩課を務めなければならない。

三週間後

注記

きっと私は君の旅以来今朝の一時頃まで忌々しく不幸であったに違いない。――二時
に私は決心して、今五時にペンを執って、六時に飲み干し、書き終えたら、旅の杖を握る
ことにした。この杖の先端は二ヵ月後にはピレネー山地に立つのだ。天よ、夙に何か棘の
あるものが、私が長いこと針鼠と見なしてきたものが、私の横になければならなかったの
であろうか。それは針で一杯の最良の玩具のゼンマイ筒で、それから私は最良のオルガン
閉口管[Flötengedackt]に劣らないものを(私は数時間前に回した)得られるもので、火中の
三人の男達の超絶技巧アリアのための偽りのない天球の音楽、回転音楽を――木製の生
きているようなヴォーカンソン[Vaucanson(1709-82)]のフルート奏者そのものを、――前
代未聞の件を得られるものであって、この機械は自らに対して破損を吹奏するのではなく、
何人かの悪漢どもに対して破損を吹奏するものであり、この悪漢は主に私が禿頭と呼ぶ者
である。

聞き給え、若者よ、君のことだ。私は君のために、世間が率直と呼ぶ者に今なりたいと
思う。つまり厚かましい者になりたい。というのはまことに私は私の心より尻の方を見せ

たいからで、その方が赤面が少ない。

若干あるとき若々しい時代があって、炎と薔薇に満ち、老ショッペもその当時十分に若かったものだ。 — その頃機敏な、利口な鳥は、容易にどこに兎がいるか、雌兎がいるか分かっている、その頃その男は周知の四大陸[ジャン・パウルはヨーロッパを失念するらしい]と平和に暮らしていて、あるいはまた同様に容易に雄牛のように角でどんな蠅にも襲いかかっている、 — その頃彼は、今は涼しい時代のシラキジであるが、まだ温かい金鶏[中国産雉]としてフランス・イタリア全土をあちこち歩き、あるいは飛び、あるいは[ミケランジェロ]ブオナローティのモーゼ像に座り、あるときはコロッセウムに、あるときはエトナ山に、あるときは聖ピエトロ大寺院に座して、喜びの余り鳴いたり、羽を広げたり、天に向かって昇ったりした。 —

つまりその同じ時代に、まだむしり取られていないこの海燕は一度ティヴォリで滝の中をあちこち揺れ動き、得も言えず浄福で、時折 — 突然 — 上の方で — ウェスタ[竈の女神]の神殿で、 — 初めて — ただ目にしたのは、 — ディ・ラウリア侯爵令嬢で、この人は後に、そう私は推測するが、一人の金羊毛皮の騎士によってその黄金の毛皮として連れ去られたものだ。このような女性を目にすること、 — 一羽の海燕からヴィーナスの[馬]車の鳩に変身すること、 — 連獣と手綱から身を離すこと、 — かの女神の前へ飛んで行くこと、 — 彼女をますます狭い圏に囲むこと、 — こうしたことすべては一つのことではなく、三つのことである。私はまず極楽鳥へと育って、色付いて、極楽に飛ばなければならなかった。つまり私は彼女の面前へと許されるために、絵画法を習得しなければならなかった。

私がようやく肖像画の絵筆と影絵の鋏の技法を習得し、ある朝その筆と鋏を持って侯爵令嬢と侯爵の前に現れたとき、私は侯爵本人を描き、影絵を切らなければならなかった。娘の方はすでに結婚をし、秘かに旅立っていた。というのは君の祖父は（他の者達のように自分達の行動を前もって言う代わりに）自分の行動をただ後から予告するからであり、口を開けるのは単に、 — 聞くためであるからである。

私はこの男を素早く切り取って、 — 荷をまとめ、 — 全世界に出た。 — ほぼ三年後に私はイーヴラ・ベッラの第十番目のテラスの上で、全く思いがけずセサラ伯爵夫人を前にしていた。 — 天国と地獄よ。君の母親は何という女性であったことか。彼女はどの男をも一度にその天国と地獄に投げ入れた。君の父親も投げ入れられたかは知らない。この文の筆者は、その最後の鳥類学的変身の中で彼女の前に立っていた。静かなほろほろ鳥[直訳では真珠雄鶏]としてであって（涙は真珠であるに違いない）、そして数週間後に彼女を模写した。

彼女には二人の子供があった。君と — 私はすでに当時鋭かった君の教養[形成]を明確に思い出している、 — 君の妹の所謂セヴェリーナだ。君の父はいなかった。しかし蠟の像があって、それに従って私は十八年後すぐに彼とローマで再認識できた。君の妹もまだ蠟で模写されていたが、ただ君の姿はなかった。遠くから君に似て見える蠟像を、これは君を成人として前もって描いたものだが、そこにいた君の父の弟が、君に対して、絶えざる君の将来の側兵として置いたもので、こう言っていた。君はここに前もって造型され、すでに大きくされている。瓶から樽に詰められたもので、君が生長するよう君を鼓舞しているのだ、と。人々は蠟人形が着ているのと同じような制服を君に着せなければなら

なかったのだが、 — どのような制服か私は知らない。 — 君は、君自身のこの「ミクロメガス」[ヴォルテール作]の周りを歩きながら、未来から現在へと大胆にこの男に挑戦した。今では君は自分になった者のことを承知している。そして多分また、それも正当に誇り高くこの少年を見下ろしていることだろう、以前この少年が大きな男を見上げていたように。私は君の叔父に、精神的伸展性のこの機械仕掛けを褒めようと思ったことはなかった。私はすべての蠟人形に対して厭わしい戦慄を覚えるものである。

この美しい島での私の唯一の目的は、彼女を描き終えたら、島とこの美しい島の女性から旅立つことであった。愚かな世紀よ、私がもっと汝から欲するものがあるか、と私は言った。彼女は喜んで私のモデルとなった。 — 王座に座すか如くで、 — 私は半ば雷雨の中、半ば虹の中に住んで彼女を写し、勿論その絵を、コピーしないまま、彼女に渡さなければならなかった。しかし若者よ、当時の私の名前を形成して、その絵の心臓の箇所に水彩絵の具の下に記して隠した若干の活字が、君にとって一つのテトラグラマトン[ヘブライ語で神を表す四文字]、十一の日曜日指定文字[Sonntagsbuchstaben]、君の实在に対する読書母(ヘブライ語の発音符代用文字)となり得よう。幸い私がスペインにやって着て、ヴァレンシアでその絵の許、私の文字の上の絵の具を洗い流し、その心臓の中にレーヴェンシヨルド[Löwenskiöld]と読むことができればの話しであるが。当時私はデンマーク語でそう称していた。

そうになったらリンダ・デ・ロメイロ伯爵令嬢は情け容赦もなく君の妹セヴェリーナということになる。この手紙の前に君が彼女に会ったりして、結婚することのないようただそれだけを祈っている。私が昨日聞いたところでは、彼女はイタリアへ旅立ったようだ。

というのは私がここでリンダ伯爵令嬢に初めて会ったとき、私はペスティッツの四角の広場にいて、あたかもイーゾラ・ベッラ[島]の上段のテラスに立っていて、アルプスを、君の母親を、私の青春を私からほとんど三歩も離れていないところで、見ている気がしたものだ。いやはや、あたかも遠くの深い所から「時間」の支柱鏡の中、突然君の覆われた母親の白い薔薇の像がすぐ鏡の許まで浮かび出て来て、その前に今や赤く花咲いて掛かっているかのように、リンダは私の前に立っていた。両者の神々しい類似性はとても顕著であった。アリウス派の[神とキリストとの]本性類似性なんてものではなく、全く正統派信仰[アタナシウス派]の本性等性がここでは信じられると、君が他にそれに必要な教会史を所有しているのであれば、君宛に書きたいところだ。

私はこの冬にはリンダも描いた。彼女が私に彼女の母親の性格について語ったことは、私が彼女にディ・ラウリア侯爵令嬢の性格について報告し得たであろうことと全く合致していた。

リンダの父、あるいはフォン・ロメイロ氏は決して現れようとしなかった、しかし私が聞いているところでは、まだ消えてしまったのではない。

リンダの母は、ローマ人女性であり、ディ・ラウリア侯爵の縁者であると称していた。

—

私が二度行って尋ねたスペインでは、どこにもセサラと称する女性の名は見当たらなかった。 —

蓋然性の百京もの蜘蛛の糸が紡ぎ出されて、迷宮のアリアドネの罟となっている。 — 新しい未知の妹がゴシック式の家でヴェールを付けたまま君に対して鏡の中で紹介され

ている。――

それも実直な禿頭によって、――これはキリストの頭としては巻き毛以上のものがほぼ欠けているけれども、これを私は秋に犬と呼んだのだが、――それが君に対し本当の鏡から写し出されているのだ。――

上述のアヌビスの頭[エジプトの冥界の神、犬の頭部を持つ]、あるいは禿頭は今や（天と悪魔とが最も良く何故かは承知していようが、しかし私は確信している）死の神父としてイーゾラ・ベッラ[島]に立っていて、侯爵の廟では職人の若者としていて[第五十一周]、どこでも待ち伏せして、君に君の妹を妻にさせようとしていた、――私が黙認する場合のことであるが。しかし私は今封印するや、スペインへ出発して、リンダの絵画陳列室へ行き、彼女の母親の例の像を探すことにする、――その像の場所と部屋ははっきりと教えて貰ったのだ。――そしてそれが私の像であれば、万事が私の言う通りで、雷が万事に落とされることになる。――

禿頭がすでに四分の五の証明だ、――彼は、すでに蜘蛛の大きさになるかならないかのとき、母親の胎内で邪悪さから小便をしたわずかな人間の一人だ。――

ひょっとしたら私は君の叔父に会うかもしれない。彼はこちらで彼が言うには、再び私と分かって、本当にヴァレンシアへ旅立ったのだ^{*1}。

天よ、もし上手く行って（しかし上手く行かない筈があろうか、私の舌は鉄であり、この紙は鉄の中に収まるのだから、実直なヴェールフリッツの許、彼の心は古代ドイツ人のものであり、正当にも乙女エウロパの中ではドイツは心臓を表しているのだから）、書いているように、もし上手く行って、忌まわしい秘密の麦藁のドアを燃やし、一切を引き裂き、破り、投げ棄て、盲門や犠牲の門を壊し、強烈な明かりが勇敢なリンダと勇敢な若者に投げかけられ、間近な禿頭を（ひょっとしたら更に誰かを）照らし出せたらいいのだが。こやつはまさに暗闇の中で二本のまばゆい芽接ぎ兼屠殺刀とでこの兄妹に斜めに切りつけようとしているものだ。――

これがいつか上手く行くと、つまり収穫月[八月]に上手く行くと、――というのはそのときにはまた私はペスティッツに戻って来て、その肖像画をバッグに入れて、――罪ある者達に自分と二人の無垢な者達の復讐を果敢になすであろうからで、そうなったら自分の頭を握ってこう言うことが許されることだろう。打倒、危ない、気をつける[頭を断て]と。このことはきっと、――ヴェルター如火薬のように肉体を愚かに駆逐するわけではなく[自殺ではなく]、単に、事情通が私の分別と呼んでいるものを、時折失うという計画のことであるので、――私の友人達は賛同してくれるに違いない。友人達はそれでも私を有しているからで（肉体は残っている）、一人の人間の夜景画という按配であるが、それに私はそれでも万事について皆と同様分別ある議論を行おうとするであろうし（ただ誰にも固定妄想は攻撃されたくないが）、倫理的な立派な冗談も（まことに真の薬味である）きっと忘れることなくばらまくであろうからで、それに国家は私を、昼も夜も怠りなく準備を整えているものと見なすであろうからで、国家に対し、かつて火事となったとき最も

*1 叔父はまたしても嘘を付いた。というのは彼は、この巻で承知しているように、まずローマへ行ったからである。そこで彼は騎士と侯爵夫人にペスティッツからの手紙を渡した。[第百六周、392頁]

良く消して救い出したベルリンの精神病院の例に倣って、役立ち、いざという時に備えようとしているのである。これは国家の官吏の暗い中間期が我々の明るい[発作の]中間期で埋められるべきときの話しであるが。

ご機嫌よう。私は出発する。世間は私に快活に笑いかけている。スペインで私は一編の青春を再び見いだすことになる。 — この手紙同様に。

シヨッペ。

ところで。禿頭とはどこでも出会うことがなかったかな。 — 毎日どんなに今励んで、奴を将来憤激にかられて倒すことのないよう、前もって真に恐れて嫌悪の念を抱くよう、その念を自らのものにするよう、努めているか語れないほどである。後で何らかの行為が先の理性的倫理的状態の後の果実として次々と勘定に入れられないようにするためである。

この手紙を処分し給え。

*

アルバーノが炎の目を手紙から上げたとき、彼はリラールの前の大きな弧を描いた凱旋門の下に立っていた。そして太陽は華麗にエリュシオンの背後に沈んで行った。「私をお忘れ」と小声で彼に旅の服のリンダが尋ねた。明るい愛と歓喜とで涙していた。 — そしてユリエンネが、兩人に注意を促しながら、フルートの谷の入口の茂みから出て来て、策謀的に見せかけて叫んだ。「リンダ、リンダ、フルートの音が聞こえないの」。 — そしてアルバーノは難しい手紙のことを忘れていた。

第二百二十三周

素早く百もの翼でざわめくコンサートのように、見棄てられ、友人のことを心配していた若者に対する昔からの愛と歓喜の素早い現在は美しい洪水の中に合流して行った。歓喜に直面して、彼はリンダを再びイスキア島で見たように見た。しかしまたリンダは彼を別なエリュシオンにいるかのように見た。彼女はこの庭園でより柔和に、より優しく、より熱くなって、彼の過去を考えていた。彼女は少しも自身の旅の話語る気はなかったし、聞きたい気もなかった。アルバーノはシヨッペによる自分の秘密をより強力な、しかし震える胸と共に考えていた。ただ父親にだけその胸を打ち明けようと燃えていた。絶えず彼は親戚関係の不可能性を考え、シヨッペは所謂妹を、真の妹、ユリエンネと混同していて、軽率であると考えていた。今晚のうちにも彼は父親に尋ねる気であった。

彼は彼女との結婚に対する父親の承諾を大きな喜びと共に彼女に伝えたが、最大の喜びと共にというわけではなかった。シヨッペの手紙の余韻があったからである。ユリエンネは今日彼が飛泉[小滝]の連なりの代わりにより小さな飛泉のみを示すことに気付いて、彼を陽気に策略的に問い詰めようとした。彼女は容易に彼と彼女の知り合い達の重要な行状全体を彼に返答させた。彼女は劇場のカーテンを織ったり、描いたり、更にはそこにプロンプター用の穴を開ける若干の傾向があった。彼女はイドイーネについての質問を始めた。

— イドイーネは彼が着くとすぐに町から退却して行ったのであった、 — そしてシヨッペについての質問で終えた。 — シヨッペの旅の目的について彼女は尋ねた。 —

しかしアルバーノはイドイーネに会っていなかったし、ショッペは自分一人にだけ打ち明けたと彼は語った。確固たる一つの美しい屈しない大理石条紋が彼の本性の中を走っていた。リンダの黒い目は率直な誠実なドイツ人の目で、ただ彼を愛するために彼を見つめていた。

フルートの谷から一行の残りが、講師等がやって来た。ユリエンネは相愛の兩人に別れるように仕向けて言った。「ここはイスキア島とは違います。私がないところで、あなた方はこの宮殿で会ってはなりません。私がいるときは、あなたの父上を通じていつでもあなたにお知らせすることにしましょう」。

彼が一人っきりでリラルに立って、ショッペとリンダのことで重い考えに耽って、乳母らしい時の優美な一帯や箇所を一望していたとき、突然彼には、薄明の中、エリュシオンが魅力的顔のように歪んで、彼と人生に対する一つの嘲笑のように変わったかのように思われた。 — 小さな意地悪な妖精達が小さな子供用卓に座っていて、あたかも穏やかな子供達のものであって、好んで人間や人間の欲望を見ているかのようにであった。 — 彼らは野蛮な狼の女性達として飛び上がり、花々の間を駆けて行った。 — 千もの手が花々の木の庭園を逆さにして、その黒い陰気な根の藪を天に梢のように起こしていた。 — 枝からはゴルゴンの頭部が目を光らせていて、上方の雷の庵では絶えず泣き、笑っていた。 — 勇敢で大きなタルタルスほど美しく穏やかなものはなかった。

しかしアルバーノは、それが父親の許に至る近道であったので、庭の中を厳しく怒って進み、白鳥の橋を渡り、夢の神殿の前、カリトンの小さな家の前、薔薇の植込みの前を通り過ぎ、森の橋を渡った。そして直に侯爵の宮殿の父親の許に着いて、父は丁度病気のレイージの許から戻って来たところであった。父は皮肉な表情で、この病人が新たに腫れてきていることを語った。ただ単に、二度目に死の印として現れると約束していた亡き父がその印を与え、その後自分を連れ去ることを恐れているからであった。そこでアルバーノは、何の導入部もなく、ショッペとショッペの状況についても言及せず、奇妙極まる近親関係の仮定を、例えば問い質すような長い質問も、単に短く素早い質問、「リンダは私の妹か」も、父親に対する敬意からせず、語った。父は彼の言うことを静かに聞き取った。「誰でも」（と父は怒って言った）「自分の人生の雨の隅を有していて、そこから劣悪な天候が後に生じて来る。私のそれは秘密主義に当たろう。誰からおまえはその最新のことを得たのか」。 — 「それに関しては義務から沈黙していなければなりません」と彼は答えた。「この場合」（とガスパールは言った）「全く沈黙していた方が良かったろう。ある秘密のごく一部でも漏らす者は、他の部分も意のままにならなくなる。私とその件に承知しているとのどの程度思っているのか」。 — 「私にどうして分かりましょう」とアルバーノは言った。「私が伯爵令嬢とのおまえの関係を許したことを考えたのか」と怒ったガスパールは言った。「私は黙っているべきだったのでしょうか。最後にすべての秘密から妹のユリエンネが生じて来なかったのでしょうか」。 — ここでガスパールは鋭く彼を見つめて尋ねた。「どれほど見かけ上はその反対に見えても、揺らぐことなく、誤ることなく、一人の人間の真面目な言葉をおまえは信用できるのか」。 — 「信用できます」とアルバーノは言った。「伯爵令嬢はおまえの妹ではない。私の言うことを信用しなさい」とガスパールは言った。 — 「父上、そう致します」（とアルバーノは全く喜んで言った）「そしてこの件についてはもう一言も話しません」。

しかしより落ち着いた老父は語り続けて言った。こうした新しい錯誤が生ずるようであれば、今や真面目にリンダの許で速やかな結婚への承諾を迫る必要がある。リンダの父親が、ひょっとしたらこれまでの秘密の奇蹟の仕掛人かもしれないが、結婚式の日に登場する次第になっているのだから、と。そこで今一度息子に、かの仮定に至った経緯について知りたいと述べた。しかし無駄であった。聖なる友情は潰されることも、棄てられることもなかった。彼の胸は、明るい結晶の周りの暗い岩のように強力に彼の率直な心の周りに閉じられていた。

かくて彼は沈黙する父親から温かく幸せに別れた。手紙を読む苛酷な時に、彼は単に人造の岩の部分に登っていたのであった。再び多彩な諸庭園が地平線上に現れていた。――

しかし彼のショッペの空しく労多い錯誤、憎しみと愛とで荒廃したショッペの精神、これは手紙の調子の中ですら屈しているように見えたのであるが、それに狂気の未来とが、遠くで弔鐘のように彼の美しい一帯に嘆くように過ぎて行って、幸せな心は一杯になり静かになった。

第二百二十四周

その後すぐアルバーノの善意の妹が、彼の幸運のオルゴール時計の許で、彼女はその番人であって、再び西の国的[ヘスペリア]時を告げ、戯れさせて、そこで全生涯が上、下に共鳴して行き、明るく晴れて、雲が晴れたときのスイスでのように、今や一気に高峰や、氷の山や、山頂の角が天から現れた。彼はリンダを再び見た。しかし新しい明かりの中で輝いていて、輝く夕焼けの前の薔薇のようであった。彼女の愛は柔らかで静かな炎であって、迷って刺すような火花の跳ねではなかった。彼は、確かな言葉遣いの父が司祭的結婚の依頼をすでに彼女に対してなし、それどころか彼女の肯定を得ていると推定した。ユリエネは彼に、翌日夕方六時に父親の部屋で彼と話したいと述べた。それで彼は一層確信を抱き、喜んだ。新たな、更に懇ろな崇拜する感情と共に彼はリンダから別れた。女神は一人の聖女となっていた。

彼が翌日父親の部屋にやって来たとき、彼はユリエネだけを見いだした。彼女は彼に短く接吻をしたかあるいは接吻をほとんどしないうちに、素早く自分の知らせを終えた。彼女の空き時間[不在]は、短い数分に限られていて、侯爵夫人が夫の病床から侯爵令嬢の部屋へやって来るまでの間であったからである。「彼女はあなたと結婚はしないのだから」(と彼女は小声で始めた)「あなたのお父上はとても熱心に、とても上品に、彼女との旅の後での最初の出会いのときに、ご子息の新たな幸福についての喜びを表現なさって、この幸運に対してははや持続という封印の他は願わしいものはないと述べられました。――
もっと上品な金銀の箔がちりばめられていたけど、もう私が言えない。―― それに対して彼女は自分の言葉で、私には言えないけど、答えたわ。自分とあなたの意志が本当の印璽であって、他の政治的印璽はすべて最も美しい人生に鎖や奴隷を押し付けるものだ、と」。――

厳しくアルバーノは明らかな拒絶によって傷付けられた。この拒絶はこれまで静かな、哲学の代弁としてのもので単に本質を欠いた影として漂っていたものであった。「それは正しくない。後でとは言えても、決してしないとは言えなかったはずだ」と彼は感情を害

して言った。 — 「落ち着きなさい、友よ」（とユリエンネは言った）「その後あなたのお父上も好意的に彼女の父親の条件付きの出現に触れて、こう言ったの。自分は彼女の幸福を自分の手からより近い者の手に引き渡すことを願わずにはいない、と。『人為的条件で一つの意志が強制されたり、否認されたりしてはなりません』と彼女は言ったの。あなたのお父上は冷静にこう付け加えました。自分はこの件ではあなた方二人のために最も素晴らしい人生設計を計画した。しかし他の場合、愛に対する自分の同意の受付は、ここに滞在している期間に限られている、当地の滞在は自分の友人の死で終わるわけだ、と。それから彼は悠然と去りました。男の人達が私ども女性を本当に立腹させたとき、よくやるようにね」。

「ヘスペリア[スペイン]よ、ヘスペリア」（とアルバーノは怒って叫んだ）「リンダは拒絶を倍加したのかい」。 — 「残念ながらそうね。でも兄上はどう」とユリエンネはびっくりして尋ねた。「私は構わない」（と彼は答えた）「最も美しく華奢な弦をこのように両親が触ることは不当なことではないか。弦の響きと震動を一度に殺しておいて、新たな響きをむしり取ろうとするのは。神々の贈り物を国家の関税に、一勝負の金に、そう一勝負の金に貶めることは。立派なリンダだ。我々はまた人々が愛の花々を干し草に刈り取る大地の上に立っている。 — 樂園なのに国境の棒の木しかない所だ。 — いや、自由な本性よ、私のせいで、自由な本性であることを止める必要はない」。 —

ユリエンネは数歩下がって、言った。「あなたをただ笑いたくなるわ」。そして笑って、真面目に付け加えた。「それでは彼女は、老いた父が出現すべき日をあなたのために定めるよう、あなたは願っているの」。「そんなことはない」と彼は言った。彼女は冷静に述べた。「いつも熱くなった男は、別な男の熱のことで苦情を言うものだ。アルバーノはすでに平静さの中で余りに厳しく他人の権利や自分の権利を主張している。このような人は情熱に駆られて、何事かを権利以上に要求するようになるもので、時計の中で正確に収まっていたピンが、熱くなって、そのサイズが大きくなり、時計を止めるようなものだ」と。今や彼女は彼に、「混乱全体」の整備を単に彼女の指先に委ねて、穏やかに静かにしているよう愛想良く頼んだ。もっと多くの人々が、例えば彼女の「義姉」が彼女の同盟に介入してくることをしないようにするためであった。アルバーノはそれを好意的に受けとめた。しかし真面目に策謀することのないよう頼んだ。自分はリンダに対して余りに正直すぎるから、早速文字謎のその言葉全体を彼女に告げることになるからであった。

彼女は打ち明けた。ただ計画しているのは明日の楽しい一日であって、つまりリンダと一緒にアルカディアの侯爵令嬢イドイーネを訪ねる計画で、自分はこの令嬢に対し訪問の他にもっと大きな借りが、殊に自分の心の半分の借りがあるのだ、と。「あなたは偶々私どもの後を騎乗して来て、私どもの牧歌生活の最中に出会って」（と彼女は付け加えた）「あなたのリンダをびっくりさせればいいのよ」。 — 彼ははっきりと否と言った。イドイーネがリアーネと似ていたからであり、 — 彼はリアーネが単に夢の神殿でイドイーネの振りをしたことだけを知っていて、イドイーネが彼の病床でリアーネを模したことは知らなかったけれども、 — それに大臣夫人が居合わせたから、苦い思い出と甘美な思い出の双方を恐れて逃げ出したわけである。ロケロールならばこのような場合、その双方を求めていたことであろう。ユリエンネは意地悪く反論した。「侯爵令嬢イドイーネのことは何も恐れなくていいのよ。彼女は、厭わしい新郎をただ避けるために、自分の一族に

誓わざるを得なかったのよ。決して自分の身分より下の者は選ばない、と。 — あなたの
場合でさえ、それを守っているの」。 — 彼はこの冗談にただ拒否の真面目な反復で
答えた。それではこう主張すると彼女は言った。彼は彼女ら兩人に少なくとも[帰り]道の
途中まで迎えに来て、彼女達を「皇子の庭園」で、 — 皇太子のルイージによって設立
され、侯爵の席に座ってからは忘れられた公園で、 — 待つように、と。これを彼はと
ても喜んで受け入れた。

彼女は別れながらなお冗談で尋ねた。「誰があなたに最近一人の妹を贈ったの」。彼は
言った。「私は私の父にもそのことは漏らさなかった」。 — 「兄上」（と彼女は穏やか
に言った）「それは、侯爵令嬢達を容易に伯爵令嬢達と見なす殿方で、すでに現にそう
であるよりも、次にはもっと気が触れるであろうと思っている殿方、 — あなたのショッ
ペね」、そして飛び去って行った。

第二百五周

その翌朝二人の女性の友はアルカディアに[馬車で]向かった。ユリエンネは、 — より
病の重い兄のせいで、一層気が重くなっていたが、 — 自分がその請け合いにもかか
わらず健康な兄アルバーノの幸せのために策略した計画への信頼のせいで奮い立って
いた。彼女はよく、他の者達が悲しみや感受性の黒い喪の扇子の背後に隠すように、観客に
は描かれた方を見せる笑いという快活な飾りの扇子の背後に、計画と共にその頭部を隠し
た。笑いながら、泣きながら、彼女はこれらの計画を進め、熟慮した。それで彼女はアル
バーノに、イドイーネと一緒に訪ねるという頼み事をしたが、単にそれは上辺で、彼はそ
れを断るという確信の下、行っていた。あるいは彼が来る場合には、それをイドイーネが
断るという確信の下であった。というのは、先の冬にイドイーネが訪問して以来彼女は承
知していたからである、つまりイドイーネは自分によって癒やされた美しい熱病の病人の
ことをしばしば会話で言及し、今や彼の到着から逃げ去って、彼の明るく愛している現在
の状況の上に、侯爵夫人からごく容易に知らされていたこの状況の上に、悲しい類似性で
一杯の過去からの集雲として掛かることのないようにしていることを承知していたのであ
る。ユリエンネはそれどころか、侯爵夫人がイドイーネをもっと長く滞在させようと思っ
ていて無駄であったこと、ひょっとしたらイドイーネで若者に思い出させ、恐怖させ、改
心させ、あるいはこの若者を罰するためであったかもしれないとまで知っていた。侯爵令
嬢イドイーネに対するユリエンネの愛は、アルバーノからのかの優しい逃亡でひょっとし
たらリンダに対する愛と同様に、まさにこの愛がその間になかったならば、温かいもの
となっていたことであろう。少なくともこの美しい逃亡のせいで彼女は侯爵令嬢イドイー
ネに計り知れない信頼を覚えていた。 — まさにこれは正当で無二の信頼であった。

旅の一日は実った穀物の野で一杯の、涼しさと露と悦楽で一杯の美しい収穫の朝であ
った。リンダは子供のようにイドイーネのことを楽しみにして、楽しげな調子でその理
由を述べた。「まずはあなたの兄上の命を救ったからでありますし、 — 自分の欲する
ことを知っていて、それを勇敢に持ち続けていて、自らを他の侯爵令嬢達のように王座の
犠牲として扱っていないからでありますし、 — 自分の知る限り、ネッケル夫人を除い
て、最もドイツ人らしいフランス女性だからです。 — いや私には彼女は美しい青春の

すべてと共に昔の女性達の一人に思えます。こういう女性達を私は以前から求めていました。この人達から何かを学ぶのは大事ですから。あなたをととても愛していて、私の方は愛され方は少ないと思います。尼僧と主婦とのこのように魅力的中間の方にとって、私は余りに世俗的に見えるのでしょうか。本当はそうでもないのだけど」。

両人は美しい魔法的村に着いた。 — そのときすでに可愛い子供達が落ち穂拾いに集まっていて、荷車が穀物束の収集人に向かっていたが、 — 午餐前の午後であった。イドイーネの兄は、ホーエンフリースの将来の後継侯爵で、 — ティヴォリでの小男であったが、 — 窓から覗き見していて、ユリエンネはほとんどこの旅を後悔した。イドイーネが彼女に向かって飛んで来て、彼女を心から胸に抱き締めた。ユリエンネがこの大きな青い目と、かつて自分の兄がととても浄福に痛々しく愛した形姿の神々しい面影のすべてを自分の眼前にしたとき、彼女には今や、自分が彼の妹となったからには、さながら彼の代理人女性がリアーネの代理人女性の愛を受け取っているかのように思われた。彼女は、リアーネの死以来、いつも最初に接するたびにそうであるように、心から泣かずにはおれなかった。

リンダは侯爵令嬢イドイーネからとても深く細やかに受け入れられたので、ユリエンネは驚いた。いつもは両人は冷たさと愛の交替の中で生きていたからである。フルレ大臣夫人もいた。悲しみでとても老いて、冷たく、静かで、丁重であって、時代と人々に対して冷淡で、(自分の娘の似姿の女性に対しては例外で)、殊にリンダに対して冷淡であった。リンダの大胆で、決然とした、哲学的調子は彼女にとっては非女性的で、女性の両唇の許でのトランペットであるように見えた。

ホーエンフリースの将来の後継皇子は幸い直ぐにこの不快な地から、ゴンドラの代わりに難破船の板に乗っているような地から、離れて行った。彼はユリエンネに、彼女の兄、彼の現今の前任者の状態について関心を持って尋ね、 — そして彼女とリンダが二人と彼のイタリア旅行を思い出させた後、彼はユリエンネの冷淡さのせいで、女性達の倫理的会話のせいで、 — すべての粗野なもの、利己心、僭越さが不協和音となる時、放蕩者達が女性達の許で感ずるある種の倫理的嵐の圧力のせいで、 — 彼がすぐにはすべてをそうと感じざるを得なかった一般的苦痛の偽善のせいで、 — とても気分を害して、うんざりして、容易に席を立て、そこに忍び込んだ唯一の狼同然のこの牧人の生活を切り上げた。放蕩者達は多くの高貴な女性達の許では、彼女達の多面的な鋭い観察に圧迫されて、長くはそれに耐えられない。もっとも一人の高貴な女性の許ではより容易に耐えられるのであるが、この女性を誘惑しようと期待するからである。彼にとって最も辛かったことは、彼女達皆を偽善者と解さざるを得なかったことである。彼は立派な女性を信じなかったので、立派な女性を知らなかった。彼女達の実の所を見るためには、彼女達を信じなければならぬからである。徳を知るためには、徳の練習をしなければならないようなもので、その逆ではない。

彼と共にこの楽園とエーテルから一つの黒雲が去って行くように見えた。大臣夫人は、丁度着いた彼女の息子ロケロールから一枚の挨拶状を得て、夫人も出て行き、 — ユリエンネは喜んだ。彼女は夫人に関し、リンダにとって改宗計画の小さな障害を見ていた。大臣夫人をリンダは一面的な、狭小な、不安げな、妥協しない性質と見なしていたからである。イドイーネは二人の乙女に、自分の小さな領国を一緒に旅してみるように頼んだ。彼

女らは純然たる広い村へ下りて行った。階段で快活の仕事好きの色々な顔に彼女らは出会った。宮殿の遠くの部屋から歌声が聞こえたり、吹奏が聞こえたりした。鳥では輝く羽毛が素早く滑らかに揺れ動くように、イドイーネの周りではすべての仕事が動いていた。彼女の経営的機械は武骨なぎいぎい鳴る塔の時計ではなく、戯れる人形時計で、これは音色の背後に時を、人形の背後に歯車を隠しているものである。

野原の庭園ではごく幼い子供達が乱暴に雑然と遊んでいた。ヘルンフートのオランダ的清潔さが村を一つの滑らかな明るい化粧塗屋台へと洗い、描いていた。井戸にはバケツが新しく輝いて掛かっていた。一 村の菩提樹の円形林の下に大地の床が綺麗に掃かれていた。一 至る所に清潔な、整った、美しい服と喜ばしい目が見られた。一 そしてイドイーネは他の人々の快活さの下、視線に真面目な仔細の色を浮かべていた。その視線で彼女は自分のアルカディアの花の一つ一つを調べていた。

彼女は女性の友人達を、様々な年齢の様々な日曜日のダンス広場を越えて、官吏の家の前を通り過ぎ、この家には大臣夫人が住んでいて、今はユリエンネが恐れたことにその息子[ロケロール]がいたのであるが、明るい飾り気のない教会に入って行った。やがて牧師と官吏が教会の中へやって来た。牧師と官吏にとってこの通過は一つの合図であって、そして彼女から委託を受けていた。兩人とも若く美しい男性で、広い額と少しばかり若者らしい誇りを有していた。一 一行が教会から出たとき、彼女は言った。こうした若い男達を通じて、自分はこの地を支配しており、自分自身は穏やかに指示している。ただ若い男達のみが、惰性的仕事振りに対する憎悪と勇気を有しており、熱心に信念を持って対処する、と。彼女は冗談めいて付言した。自分は女子の学校しか支配していない、この学校の方が他の学校より自分には大事だ、教育は習慣であって、この習慣を少年より少女は必要としているからで、少年に対しては世間がこの習慣を放置することがないのだ。自分には子守女の傾向がある、すでに娘のとき、しばしば妹達の許でその役をせざるを得なかったからだ、と。

彼女はその後、兩人を幾つかの小さな家に案内した。至る所で彼女達は白く整然とした部屋、窓辺の花や葡萄、美しい女達や子供達を見つけ、あるときはフルーツ、あるときはヴァイオリンに出会い、どこにも糸を紡ぐ子供はいなかった。すべての人に彼女は委託を与えていた。単なる散歩と見えるものは、仕事でもあった。彼女は、人々を通じての鋭い視察、彼女の一途な活動、一般的なことと特殊なことを同時に有し、結び付ける仕事の連結を示した。「勿論私は」（と彼女は言った）「私の周りにただ喜びと遊びを願っています。しかし仕事と真面目さがなければ世の最良のものも駄目になります。本当の遊びさえ、本当の真面目さがなければ可能ではありません」。一 リンダは、彼女が皆を音楽に、すべての人生の暗闇の中でのこの正しい月光に、慣れさせていることを称えた。「詩や芸術がなければ」（と彼女は付け加えた）「精神は地上的気候の中で苔むして、木質化してしまいます」。一 「音色がなければ私の精神は何となることでしょうか」とイドイーネは熱く言った。

リンダはこの快活なる国での市民の権利について尋ねた。「大方はそれをスイスの家族が得ていました」（とイドイーネが言った）「私が旅行中即刻その場で知り合った家族です。フランス人女性に倣って、すぐにスイス人を採用しています」。ユリエンネは答えた、「謎のことを仰有る」。イドイーネはこの謎を解いてみせた。そして彼女の後、ちょっと

の間フランスに行ったことのあるリンダは、ある種のより気高い作法の女性達の許では、クレビヨン[Crébillon(1707-77)]の作品には登場しそうにないが、繊細極まる倫理性の、ドイツでは見られない教養、ほとんど神聖さと言っていいものが見られると保証した。「ただ彼女達は」(とリンダは付け加えた)「倫理の面でも、芸術の面同様に、繊細な趣味という偏見を有していて、天才というよりは優しさを有していました」。 —

彼女達は村へ、外の最も美しい夕陽へ向かって行った。山々ではアルプホルンが呼びかけ合っていて、谷では陽気な老人達が軽い仕事に向かっていた。老人達に特別な愛情を込めて、イドイーネは挨拶した。老いた顔に見られる快活さほど美しいものはないのだから、それに田舎の人々の快活さはいつも安寧と敬虔な人生の印であると、と彼女は言った。

リンダは黄金の現在に彼女の心を打ち明けて言った。「こうしたことすべては詩の中ではどれほど喜ばしいことでしょう。でもそれが今や本当の現実に見られるとしても、それに反対する理由を知らない」。 —

「どうして貴女からは」(イドイーネが冗談で言った)「現実が奪われたのでしょうか。現実が何をしたのでしょうか。私は現実が好きです。現実以外のどこで貴女を見いだせましょうか」。 — 「私は」(とユリエンネは言った)「何か全く別なことを考えています。多くの意欲にもかかわらず、まだほとんど実行しなかったことを恥ずかしく思います。ここでは意欲から行為までが遠い」(と彼女は付言して、小さな指を心臓の上に置いて、手を頭の方へ空しく広げた)、「イドイーネ、教えて、どうしたら偉大なことを卑小なことと同時に考えられるの」。 — 「最大のことをまず考えたら」(と彼女は言った「つまり太陽を覗き込んだら、埃や蚊が最も良く見えるようになります。神は私どもすべての太陽です」)。

現世の太陽は今や低く、果てしない平原に、天の穏やかな薔薇色の許、彼女らに向かい合っていた。 — 遠くの風車が美しい深紅の輝きの中、広く回っていた。 — 山腹では子供達が草を食む家畜の傍らで歌っていた。その幼い兄弟姉妹が見守られて、遊んでいた。 — アルカディアではいつも太陽から別れるとき引かれる晩鐘が太陽と地球とをその音色で揺すった。 — 穏やかな小村は若々しいばかりでなく、子供らしく横たわっていて、彼女達の周りにその世界があった。 — この穏やかな国に嵐が侵入して来ることはない、重い氷の胸甲で冬が侵攻して来ることはない、ここには単に春風と薔薇の雲が寄せてくるばかりである、と人々は考えた。雨は春雨としてしか降らず、葉は花々の花弁としてしか落ちない、単に花々の花粉が昇るのみで、虹を支えているのは青と白の小花弁の勿忘草と五月の花のみである、と人々は考えた。 — 一帯と万物と人生はここでは単に絶えざる彼者誰時の薄明かりのように見え、とても新鮮で、新しく、白熱も光輝もない「予感と現在」に満ちていて、朝焼けの上の若干の星々と共にあった。

穂の束を手を持った子供達が穀物の束で一杯の他人の荷馬車に座っていて、誇り高く進んで来た。

イドイーネは、万事がこの晩を通じて新しいものであるかのように、衷心からの愛を抱いて、この二つのグループに寄り添っていた。「ただ農夫のみが幸せで」(と彼女は言った)「子供時代のすべてのアルカディア的状况の中で生きています。老人は、子供時代にも見て使用した用具や仕事しか周囲に見ません。最後には向こうのかの庭園に赴いて、眠りに就くこととなります」。彼女は山腹の墓地を示した。それは花壇と果実の樹の壁を

有する真の庭園であった。ユリエンネは感動して見上げた。彼女は黒い幕が震えているのを見た。その背後に彼女の病の兄が間もなく追いやられる筈であった。

透明な夕方の黄金の埃が庭園に吹き寄せられていた。 — 甲高い日中は弱められ、人生は穏やかになって、オリーブの枝とその花が静かな天からゆっくりと沈んで来た。 —

「あそこは、人間が」（とイドイーネは言った）「自らと他人と一緒に永遠の平和を結ぶ唯一の場所であると、私にあるフランス人の聖職者がとても美しく言われました」。

— 「そのようなキリスト教的カトリック的嘆かわしい考え方は」（とリンダは言った）「私は聖職者同様好きになれません。私どもは不死も破滅同様ほとんど体験できません」。

— 「そうは思わないわ」（とユリエンネは言った） — 「イドイーネ、不死はないとなったら、貴女はどうします」。 — 「私ハ愛スルコトデショウ」と彼女は小声でユリエンネに言った。

突然彼女達の前で遠方からかのように歌が歌われた。「喜び」 — それから後に「給え」 — 最後に「この生を^{*1}」。 — 「これは墓地からの木霊よ」とイドイーネは言って、帰るよう促そうとした。「木霊と月光と墓地を合わせたら」（と彼女は冗談めかして続けた）「女性の心には強烈すぎるかもしれませんね」。 — そう言って彼女は自分の目に触れて、ユリエンネに合図した。あたかも伯爵令嬢が単に目の霧の背後でのみ遠くの美しい夕べを見ていることが気の毒に思えているかのようであった。「歌声はとても馴染みのある声に聞こえるけど」とリンダが言った。「ロケロールよ、それ以外ないわ、行きましょう」とユリエンネは言った。しかしリンダは留まるよう頼んだ。イドイーネは丁重に同意した。

さて木霊は — 響きのこの月光は — 再び音色を發した。死者のコーラスからの死者の歌のようであった。あたかも和合した影達が地下でのその静かな週の中、その歌を模して歌っているかのようで、あたかも白い唇の上の死者のヴェールが動いて、最後の空洞から空洞の生が再び音色を發しているかのようであった。歌が止んで、アルプホルンが山上で始まった。再び音色の模倣が熱く伝わって来て、あたかも逝った者達がまだ塚の胸壁の背後で奏していて、余韻をまとっているかのようであった。すべての人間が胸の中に死者か臨終の者を有している。三人の乙女達もそうである。音色は過去の微光と共に舞い戻って来る衣服である、そして心を激しく搔き立てる。

彼女達は泣いていた。誰も悲しいのか嬉しいのか言えなかった。これまで節度を保っていてイドイーネは、リンダの手を握って、その手を穏やかに自分の心臓の所に置いて、またその手を下ろした。彼女達は黙って、一緒に向きを変えた。イドイーネはリンダを手で支えていた。死者達の木霊とアルプホルンの冥界の水が、遠ざかりつつ、彼女達の後をざわざわと付いて来た。イドイーネがその顔を、ただ大きな目の中の大きな滴を隠すために、絶えず濃いヴェールのリンダの方に向けている様子をユリエンネは見逃さなかった。彼女はそれでこう推論した。イドイーネは多くのことを知り、承知していて、自分がその美しく似ていることで楽しい生を戻してやった若者の花嫁を敬っている、と。

「これをどう考えたらいいのでしょうか」（とイドイーネは後で、村の近くで言った）「私

*1（訳注）1796年 Göttinger Musenalmanach 掲載の Martin Usteri 作の歌で、Nägeli 作曲。

どもは軟弱すぎる事が予見されますし、やはり献身してしまいますよね。だから女性を男性は弱いと名付けます。男性は未来に対してただ鍛錬して準備して行きます。私ども女性はまだ優しくなるだけです」。 — 「どうしたらいいの」(とユリエンネは言った)「川に飛び込んだり、山に登ったり、馬に乗ったり等々するの」。 — 「いいえ」(とイドイーネは言った)「私は百姓女を見ていて分かります。彼女達はどんなに筋肉労働をしても、他の女性達と同様神経を痛めます。 — もっと精神を私ども女は皆、鍛え求める必要があります。でもいつも単に指や目の訓練をし、動かせるだけで、心そのものは精神について何も知らないまま、心の望むことをし、夢見、泣き、血を流し、跳ねます。 — 少しばかり哲学することが女性には必要でしょう。でも私どもはすべての感情に縛られたまま身を委ねており、私どもが考えるとしても、単になお感情の役に立とうとするためです」。 —

彼女達は村に戻って来た。忙しい夕方の喧騒に満ちていて、子供達がイドイーネに向かって踊って来た。高台からはアルプホルンが響いて来て、家々からはフルートの音や歌声が聞こえた。イドイーネは快活に夕方の命令を行った。「でしょう」(と彼女は言った)「何もしなくなると容易に心が乱れます。仕事をしている心は水を回転させている容器です。静かにしていると、水は流れ出します」。

ユリエンネは、時と話題の舵を掴んで、自分の計画を遂行しようと何度か試みたが無駄であった。今、彼女はリンダの沈黙と感動と夢想とに気付いたので、長いこと待っていた都合のいい時が訪れたと思った。イドイーネが結婚生活について述べた若干の言葉が、リンダの根にとって柔らかな土壌となるような時のことである。イドイーネに対し、厭わしい侯爵の結婚生活に航行することへの彼女の勇敢な抵抗について、永遠の青春生活の利点について述べた軽快な称賛の言葉を通じて、ユリエンネは伯爵令嬢を誘導して、結婚生活に対する異端的彼女の憎悪を打ち明けさせ、こう言わせた。結婚生活は花を一つの鋭い鉄の輪でその棒に痛々しく結び付けるものであり、 — 自由のない義務からの愛は偽善と憎しみに他ならず、 — 所謂倫理に従った行動は、あたかもありあわせの論理に従って、考えようとしたり詩作しようとしたりするのと同じようなものであり、愛のエネルギーや意志や心は、倫理や論理よりも何か気高いものである、と。

このとき大臣夫人から小さな手紙が届いた。その中で今日の欠席を余りに悲しい別れのことと詫びていた。つまり彼女の息子[ロケロール]が、とても奇妙に、永遠の別れであるかのように彼女から離れて行ったというものであった。この知らせは多くの静かな想念をユリエンネとリンダの中に残したけれども、イドイーネはその知らせで、先の話題のせいで陥った活発な動揺を抑えることなく、美しい乙女を美しい若者に変えて、乙女にミネルヴァの兜を被せるような高貴な怒りと共に、高貴な敵手[リンダ]に、他人の激しさよりも一層他人の志操で刺激を受けるこの女性に、次のような論争を宣戦布告した。きっと単に「司祭達」に対する反撥が結婚生活に対する第二の反撥の原因であろう。 — 一体結婚生活の絆は永遠の愛とは別なものであろうか、すべての正当な愛は自らを永遠の愛と見なさないだろうか。 — いつかは死ぬと思う愛は、すでに死んでいるものであり、永遠に生きることを恐れる愛は、無駄な恐れをしているものである。 — 友人達でさえ祭壇で、ど

こかでは行われると言われているように¹⁾、結ばれるのであれば、自分らはせいぜいせめてもっとより神聖に互いに結ばれ、愛し合うべきであろう。 — 不幸な結婚生活同様に、多くの、もっと多いとは言えないけれども、不幸な恋愛沙汰が数えられる。 — 結婚生活なしには、 — 一人の母親とはなれても、一人の父親となれるものではない。 — 父親は母親と自らとを倫理[風習]で尊重しなければならない、と。「私は一人のドイツ人女性です」(と彼女は結んだ)「そして古代の騎士の女性達や私の先祖を高く尊敬しています。エリザベートのような女性[ゲッツの妻]とか、ゲッツ・フォン・ベルリッヒンゲンのような男性はその聖なる結婚生活の中で浄福です[実生活のゲーテに対する皮肉も]」。 —

突然彼女は自分の炎と奔流とにととても驚いて気付かされた。「私は実際」(と彼女は微笑んで付け加えた)「術学的説教師の未亡人となってしまいましたね。私はこの小村の最高のお上で、ほとんどどの小屋でも独身の幸せな反論が見られるものですから、ここでは他の意見を生じさせたくないことのせいでしょう」。

「娘達は」(とユリエンネは陽気に言った、リンダの真面目な様を見たからである)「いつも自分達の間では少しばかり愛と結婚生活について話します。互いに花嫁の冠から花を取り合います」。 —

「私は一本の花も奪うことはできないことでしょう」とイドイーネは誓った約束をほめかしながら言った。この約束は彼女が自分の情熱的な大胆さに邪推を抱く両親に対して、侯爵身分以下の者とは結婚しないと誓わざるを得なかったもので、これは彼女の鋭い志操と状況に従えば独身と同じことを意味するものであった。 — 「貴女の仰有ることも正しい」(とユリエンネは続けて、冗談を保とうとした)「結婚生活のない愛は、自ら進むマストに座っている渡り鳥に似ています。私は、留まりながら、巢を受け入れる可愛い緑色の根のある木を称えます」。 —

リンダは慣習に反して、その言に笑わなかった。一言も言わずに一人で、庭の中、月光の中へ降りて行った。

「伯爵令嬢は」(とイドイーネは女友達のユリエンネに言った。黙した真面目さの仔細を案じていた)「私どものことを誤解したのではないでしょうね」。 — 「いいえ」(とユリエンネは、話題がリンダに及ぼした上首尾の印象に喜ばしげな表情を浮かべて言った)「彼女は理解するという類い稀な才能を有していますし、それに理解されないというとても頻繁に生ずる不幸を有しています」。 — 「それはいつも一緒に生じますね」と彼女は言って、沈思し、ユリエンネを見つめて、最後に言った。「正直に言いますと、私は伯爵令嬢の関係について、私の姉を通じて承知していました。 — あなた、その方は令嬢にととても似合いの方ですか」。その問いかけの源泉について、ユリエンネは単に侯爵夫人の復讐心からの吹き込みと察し得た。

「全くお似合いです」と彼女は強く答えた。「貴女を信じましょう」とイドイーネは答えた。声は急いでいたが、しかし視線は落ち着いていた。彼女はアルバーノの妹をますます長く見つめて、 — 大きな青い目はより強く微光を発して、 — ミネルヴァの兜は

*1 モルラッカ人の許で、『モルラッカ人の風習』、イタリア語より。一七七五年。

乙女の頭部からは外されて、一 穏やかな顔は愛らしく、落ち着いて、明確に見えたが、神の前での祈りにふさわしくないほど、より強い動揺を浮かべていず、神々しい女性のように求めるものは少なく、それでいてますます天上的に輝いていた。一 ユリエンネの美しい心は沸き立った。彼女はリアーネが天から降りて来て、愛しい人を新しい胸元で祝福しているかのように、リアーネを再び見た。一 彼女は涙と共に言った。「あなた[du]は、彼にかつて安らぎを与えました」。一 イドイーネはびっくりした。一 明るい目から二つの涙が溢れた。一 強調して答えた。「与えました」に驚いて、激しく彼女は女友達を抱き締めて、一 言った。「私は貴女[Sie]をととても長いこと愛していました」、そしてそれ以上何も語らなかった。

素早く彼女は気を取り直して、一 ユリエンネにリンダの夜盲症を思い出させて、一 リンダの後を女友達として付いて行くよう頼んだ。自分が許されるならば、自分でその役を負いたいところであるが、と。ユリエンネは庭園の中へ急いだ。しかしイドイーネが「あなた」と呼ばれたことにそのお返しの「あなた」を言わなかったことを思い出した。イドイーネは女性的な「あなた」を避けた。親戚の前ではヴェールを取るオリエントの女性達とは違って、彼女は、そのフランス人女性のように、心を許し合うときでさえ、丁寧さの優しい掟を守っていた。

ユリエンネは自分の女友達のリンダが庭園の薄暗い植込みの中に静かに、目を深く伏せて、夢想に耽っているのを見いだした。リンダは激しく言った。「あの人は彼を愛している」（と彼女は痛みと炎と共に言った）「聞いて、ユリエンネ、あの人は彼を愛しているのよ」。一 ユリエンネはある真実の彼女の発言に対し、まさにイドイーネの両腕からこの真実と共に来たばかりであって、自分の驚きしか示せなかった。しかしリンダはそれをいぶかしさと捉えて、続けた。「神かけて。一 ずっと見ていたのだから。普通はこれほど活発に、真面目に、感動的に、柔和になることはないわ。一 私が見守っているときのあの人の内奥の動揺、一 ロケロールの声を聞いてのあの人の涙、彼の声はアルバーノの声に似ているのだから、一 それに長々しい炎の婚礼の説教、一 私に対する見透すような視線、一 あの人は彼を大変な素晴らしい瞬間に目にしたのでしょう。花と咲くあの人が泣きながら跪いて、神々しい頭を天に上げて、神々しい女性と安らぎの降臨を望んだのでしょう。一 彼にその双方を見せるために、敢えてして見せたのだから。それを忘れることができるかしら」。一

ユリエンネはようやく言葉を挿めた。「そうだとすると、イドイーネは高貴で、敬虔ではないかしら」。一 「私は何もあの人に反対も賛成もしない」（とリンダは答えた）

一 「でも彼があの人を見たら、彼があ敬虔な女性を今一度亡き女性に似ていると思ったら、初恋全体が戻ってきて、二番目の恋に打ち勝ったら。...神かけて、いやだ」（と彼女は誇り高く、強く付け加えた）「いやだ。我慢ならない。私は頼みたくないし、泣きたくないし、諦めたくない。戦って彼を勝ち取るわ。一 私も綺麗ではないかしら。私はもっと綺麗、私の精神は彼の精神のためにもっと大胆に創られている。あの人と与えられるもの、私はそれを三倍にして与えましょう。私は彼に私の幸福、私の存在、私の自由をも与えるつもり。私はあの人同様に結婚だってできるし、私はそうするつもり。...ユリエンネ、話して。でもあなたは冷たいドイツ人女性で、同じような敬神から、秘かにあの人に加勢をしたのでしょう。ユリエンネ、私は綺麗かしら。請け合ってよ。神々しい女性

に少しも似ていないのかしら。私は彼が丁度望むような風に見えさえすればいい。何故私は彼の初恋ではなく、彼のリアーネではなく、それに死ななかつたのかしら。 — ユリエンネ、何故黙っているの。 —

「まあ、話させてよ」とユリエンネは言ったが、必ずしもすべて本心とは言えなかった。彼女は当惑し、リンダの的確な真実と自らの意識で罰を受けていた。つまり自分は結婚生活に対するリンダの偏見を打破するために計画を立てたが、その手段はリンダによってまさに嫉妬の正当化として前払いを受けたという意識であり、自分はある岩の先端で、ある岩を動かして、落下させたが、その落下をもはや支配できないという意識であった。彼女は自分には見慣れぬ愛の性急さによって麻痺されていた、いや怒っていた。この性急さの前では、アルバーノがいつも誠実さの義務に従って行動するであろうという憎むべき慰めは発することさえ許されないものであった。 — 素敵に彼女は結婚承諾の幸いなる改宗に驚かされていた。月光と遠方の穏やかな山の音楽とで、ただより激しくなっていたリンダの許での成功に若干の覚束なさを感じながら、彼女は言葉を続けた。「結婚生活のあなたの決心を称えることで話の腰を折りたくなかったの。 — その他はすべての点であなたは間違っているわ。勿論あの方は今もっと真面目になっている。でもあの方は自分の似姿の臨終の床に立っていて、自分がリアーネとなって青ざめるのを見たのよ。 — それで許されることよ。彼に関しては、あなたにより早く会っていたら。...」

「マジジョーレ湖で早くに像を見たのでしょうか、でも似ていなかったと彼は言っているけど」。 —

「それでは白状するけど、乱暴な方ね」（とユリエンネは答えた）「あなたをびっくりさせるつもりはないけど、昨日彼と一緒に侯爵令嬢イドイーネの許へ旅するよう頼んだの、そしてとても似ているからと配慮して冷淡に素っ気なく断られたのよ。明日「皇子の庭園」で私どもを待っているのよ」。

打って変わって、 — 優しく、 — 神々しい眼をしてリンダは声を落として言った。「私の友のアルバーノは私をそんなに愛しているの。 — 私も、この純粋な方を愛しましょう。明日私は彼に言うつもりです。私の自由を奪って、永遠に私の許にいてください、と。祭壇からその後は、ユリエンネ、あなたと彼と私とで、ヴァレンシアへ、イーゾラ・ベツラ[島]へ、あるいは彼の行きたい所へ、行きましょう。そして一緒にいましょう。立派な月に音楽だわ。音色と光線とがとても子供らしく一緒に戯れている。 — 私を抱擁して、愛しい人、リンダの行儀が悪くて御免なさい」。 — ここで心の嵐は甘い流涕へ溶けて行った。このように国々では垂直な太陽の下、日々青空は雷や、嵐や、黒い雨となり、日々太陽はまた青く、黄金に沈む。

ユリエンネはただ答えた。「素敵だわ。上に行きましょう」、リンダほど素早く変化できずにいた。彼女が上の方で、静かな、明るい、何も求めないイドイーネと再会したとき、

— イドイーネは確固と、快活に行動する女性で、 — 不平もなく、希望もなく、 — ただ行為の穂先の冠を被りながら、決して花々の花嫁の冠は被らず、 — 王冠や花輪にまとまることのない多くの白い花々を足許にしている、 — その明るく純な魂は明るく純な音色に似ていて、その音色はその魅力を濡れて曇った大気の中を暗くならず、途切れることなく伝えるもので、それで彼女は、イドイーネが自分にはリンダよりも姉妹として近いと感じた。イドイーネは自分の上の自分の天の中の一つの理想兼星座と感じら

れたが、リンダは天の第二の半球の中で遠く、目に見えない所で輝く、見知らぬ一つの理想兼星座と感じられた。しかし彼女の中では、愛し続けるという女性的力が、どの女性の中でよりも強く、ほとんど憎しみの近くまで作用していて、それで彼女は昔からの女友達に忠実であった。イドイーネは月に似ている女性的魂の一人であった。青ざめて、鈍く月は、光輝と燃える雲が飾る華麗な夕方の天に昇らなければならず、大地ではどの一つの影も圧迫せずに、目に見えない光線と共に上がる。他方の明かりは色褪せ、そして月の明かりは影の中から増大し、遂にはこの世ならぬ輝きが大地の夜を包み、第二世界へと姿を変えさせ、すべての心がこの月を泣きながら愛し、小夜啼鳥がその光線の中で歌うのである。

一切が今や確定し、終わった。リンダは遠くに離れていて、ただ社交の作法の掟に従って、この掟を越えることはなかった。イドイーネは、変化を察知して、先の間近さからは穏やかに退いていた。薄暗い朝早くに彼女達は別れた。しかしユリエネは女友達に、自分らが別れるとき、イドイーネが濡れた目をして向きを変えたことを語らなかった。

第二百六周

アルバーノはリンダが不在の折り、ロケロールから今はただ遠くへ旅しないよう、数日したら自分の悲劇『悲劇役者』を見ることができるよう配慮して欲しいという依頼を受け取った。ガスパールは、リンダの結婚嫌いに気を悪くしていたが、リンダ宛の奇妙な葉書を渡した。それは彼女の、姿の見えない父親からただ次のように記されていた。

「私はおまえの恋愛を承認する。おまえがその恋愛に印璽を押すことを期待している。ようやく私の娘を抱擁することになるろう。

将来の父より」。

自分の願望と合致するかくも多くの他人の願望のお蔭で、今や彼の優しい名誉心からは、彼女に自分の人生での最も美しい祝典を依頼するときの、利己心と強要の疑いが消えていた。依頼するというこの決心を通じて、彼は自分の父親をととても満足させた。ガスパールは彼に秘密の戦争のニュースを伝えて、彼に冗談で言った。今ややがて、彼が彼の友人達、つまり新フランス人のために、戦いの加勢をする時になっている、と。アルバーノは言った、自分はそれどころか本気なのです、と。若者からそういうことを聞くのは好ましい、

一 とガスパールは言った。一 戦争は仕事力を高める、戦争の正義とか不正義とかは何ら問題となるものではなく、戦争を布告する他の者達の関心事だ、と。

アルバーノは自分の旅を思い出して喜び、希望で更に喜んだ。彼は今や次のような日を思い描く勇気を有していた。つまりリンダ、一人の女王が彼女の精神の輝かしい王冠に優しい花嫁の冠を合わせる日であり、一 この太陽が一つの月として昇る日であり、一

自分の父親によって愛されている一人の父親が、最高の祝典によって気高い祝典を中断させる日であり、一 いつか二人の人間が自分達にこう言える日である、今や我々は互いに永遠に愛する、と。一 かくも幸せな気分で、無限の愛と、太陽のように温かい魂と共に彼は皇子の庭園にやって来た。

いつでも彼は情熱的な自分の時間厳守に従って、余りに早くにやって来た。まだ二人の

— 旅立つ者、ロケロールと侯爵夫人の他にはいなかった。両人は今や度々、それも公と一緒にのところが見られていて、その見せかけには意図があるように思われた。ロケロールは彼を丁重に出迎えて、貰った書き付けのことを思い出させた。「ここが舞台なのだ」（と彼は言った）「次はここで芝居をする、大方の準備はすでに済ませた。特に今日行った。立派な侯爵夫人がこの場を私に許された」。 — 「貴方もいらっしゃいますか」と侯爵夫人はアルバーノに好意的に尋ねた。「私はすでに彼に約束しました」とアルバーノは言った。彼は自らの春の最中に二つの氷室からの風を受けることになった。フォン・ハルターマン嬢だけが彼に大きな決定的怒りを見せていた。「まずは私の妹の所に行きましようか」とロケロールは侯爵夫人に、夫人を連れ去りながら尋ねた。アルバーノは何のことか分からなかった。侯爵夫人は頷いた。彼らは彼から別れた。フォン・ハルターマン嬢は彼のことを忘れてるように見えた。彼らは上に去って、花咲く一帯全体から囲まれた山の上、小さな花園の隣で停止して、それから馬車で降りて行った。

愛しい娘達の天国の馬車[大熊座]がこの時、フランス風の「皇子の庭園」に入って来た。炎のようにアルバーノとリンダは互いに胸元で抱き合った。彼らは互いに今日今一度心を — さながら二度目に運命によって互いのために創られ、飾られたかのように、 — 新しい希望や世間を抱いて交換しようと思っていた。 — 一切が彼らの周りでは輝いていて、一切が新しく、稀で、落ち着いていて、全世界が高く舞う噴水で一杯の一つの庭園で、噴水は太陽の前で輝きに酔って、そのアーチを交互に投げかけていた。 — ユリエンネは彼を脇に導いて、リンダの美しい決心を告げようとした。しかし彼はまず彼女に自分の決心を知らせた。彼女は彼女の知らせで彼の心を強め、かみ合う幸運の歯車の稀有な営みに有頂天になった。

アルバーノが再び花嫁の許に来て、彼女が彼の許に来たとき、彼らは心の新しい温かさを感じた。 — 最後に黒く砕けてしまう燃え尽きる鈍い白熱の石炭の温かさではなく、ただ炎から静かな光線を出し、人々を温かく穏やかな春の一日で包み込むより高い太陽の温かさであった。アルバーノは延期せず、勿体を付けず、彼女に彼女の父親の葉書を渡して、読みながら震える声で言った。「あなたの父上は、私と一緒に私のために頼んでいらっしゃる」。 — リンダの涙が溢れて来た。 — 若者は震えた。 — ユリエンネは叫んだ。「リンダ、御覧。とてもあの人をあなたを愛している」。 — アルバーノは彼女を自分の心の許に引き寄せた。 — リンダがどもって言った。「私のを、私の自由をお引き受けください、そして私の許にいてください」。 — 「私の今際の時まで」と彼は言った。 — 「そして私の今際の時まで、そして戦争に行かないで」と彼女は彼に小声で言った。 — 彼は狼狽して強く彼女を胸元に抱き締めた。 — 「ねえ、約束して」と彼女は繰り返した。 —

「神々しい方よ、今はもっと素敵なことを考えよう」と彼は言った。 — 「ただ行かないだけ、アルバーノ」と彼女は続けた。 — 「すべては我々の愛で解決することだろう」と彼は言った。 — 「行かないで、ただ行かないとだけ言って」と彼女は頼んだ。

— 彼は黙っていた。 — 彼女は驚いた。「行かないのよね」と彼女はより強く言った。 — 「リンダよ、リンダ」と彼はどもった。 — 彼らは互いに両腕から離れた。

— 「私はできない」と彼は言った。「何てこと、了解し合いなさいよ」とユリエンネは言った。 — 「アルバーノ、話してください」とリンダは強く言った。 — 「私は

言えない」と彼は言った。

リンダは侮辱を感じて起き上がり、言った。「私にも誇りがあります。 — 私は行きます、ユリエンネ」。妹が頼み込んでも、驚いた女性、驚いた男性の心を溶かすことはできなかった。怒りは、その拡声器と聴診器を有して、一切を余りに強く語り、聞いた。

伯爵令嬢は去って、馬車の用意をさせた。「何て人達でしょう、頑固なアルバーノ」（とユリエンネは言った）「彼女の後を追って、宥めなさいよ」。しかし彼の名誉心の敏感なネムリグサにとって今はその葉が押し潰されていた。彼女の怒りという新しい突発、驟雨で、彼は震撼させられていた。彼は何も尋ねなかった。「あの庭園を見上げなさい」（と妹は我を忘れて言った）「向こうにあなたの最初の花嫁が埋葬されています。二番目の花嫁を大事になさい」。 — これはまさに逆効果であった。「リアーネは」（と彼は冷たく言った）「そんなことはしなかっただろう。伯爵令嬢のお伴をし給え」。 — 「男達ときたら」と彼女は叫んで、去った。

その後すぐに両人が馬車で行くのが見えた。次第に怒りの荒々しい軍が散った。しかし他に仕様がなかった、と彼は感じた。彼は彼女に対して、彼女は彼に対して、はなはだ新しい懇ろな気持ちで向かい合って来た。 — どちらも相手の気持ちを知らなかった。

— 把握し難い対照がそれ故二人をはなはだ憤慨させた。 — 彼はすでに他の人間の許でも依頼を憎んでいた。自分自身の許での依頼はいかばかり憎いものであったことか。自分のことを誤解した人間に対し、彼は訂正を指示することはできなかった。彼は今や自分の周りを見回した。喜びのすべての目も彩な噴水が突然沈んだ。風は荒涼たるもので、深みで水のざわめきが聞こえた。彼は馬で、リアーネの墓という庭園まで駈け上った。ただ花壇と、円形のベンチを有する一本の菩提樹を彼は目にしたが、しかし墓はなかった。ぼんやりと混乱して彼は覗き込み、輝く一帯に目を移した。鬱々として、 — 涙もなく、

— 愛の押し返されて来る流れの中で窒息した心を抱いて、 — 山の間の曲がった谷を行き、隠れている遠くの未来を覗きながら、彼は陰気に騎乗して家に帰った。ここで彼はショッペの次の手紙に出会った。これは先を急ぐ叔父が彼に渡したものであった。

「私の言う通りで、 — 先に話した肖像画が見つかった。 — 狩猟袋にそれを私は入れている。 — 数週間後、あるいは数日後に私は着く。 — 禿頭に会って、十分に叩きのめした。 — 私は何も異常ない。君の奇妙な叔父が長いこと私と一緒に旅した。

S.]。

第三十二ヨベル期

ロケロール

第二百二十七周

リンダはその翌日、一日中、恋人のことで、黙って魂の痛みを覚えながら過ごした。この恋人は彼女にとって、かつてリアーネが彼に対してそうであったように、彼女ほどには全面的生きた愛の炎の中で生きているようには見えなかった。 — 彼女は長いこと侯爵夫人によって包囲されていて、その後夫人によってユリエンネを行楽の旅へと奪われてし

まい、ユリエンネはただこう知らせて来ただけであった。アルバーノもこの日は遠出して、ショッペをより早く出迎えようとしている、と。 — 彼女は、女性の誇りはここでは沈黙や休息、それどころか忘却が似つかわしいという自分の原則に従って、静かに留まっていた。 — そのとき夕方、自分の奉公人に採用したブルーメンビュール出身のあの盲目の娘が次の手紙を持って来た。

「御身、私の想い人よ。またそうなって欲しい。私はまだ死にたいと思っている。しかし御身のためにで、戦場での人民のためにではない。昨日を許して、今日を幸せにして欲しい。私は出迎えの計画をまた放棄して、今日のうちにも御身の心の許に飛び込み、御身の天を汲み尽くし、私の天を満たすことにした。ユリエンネが戻って来るまでは待てない。私の心は御身へと燃え上がっている。明日はいずれにせよ「皇子の庭園」へ行かなければならない。そこでロケロールがとうとう『悲劇役者』を演ずることになっている。今晚来て欲しい。 — 我々の愛にかけて御身に懇願する。 — 八時に、晴れている場合、タルタルスの洞窟の中へ来るか、この死者の墓の飾りや冥府の室内装飾は御身にはきっと滑稽なものにすぎないだろうけど、あるいは曇りの場合、フルートの谷の外れに来るか、そのどちらかにして欲しい。

御身の盲目の少女と一緒に来さえすればいい。まさに我々の周りの諜報組織を御身は御存じだろう。御身の返事は期待していないし、求めない。八時になったら、私はエリュシオンの中を忍んで行き、女神はどこか、天国、太陽、浄福、御身はどこか見ることにする。

御身の

アルバーノ」。

天の稲妻を受けたかのように、彼女の全存在は溶けて、優しい浄福の白熱と化した。というのは彼女は筆跡から、この手紙はアルバーノからと信じたからである。 — このような速やかな改宗は彼の場合思いがけないものに見えたけれども、 — そしてロケロールによって書かれたものであったにもかかわらず。その氷のように冷たい腕を無垢とその天に差し出すこの引き掠る地獄の川の暗い源泉にまで遡って行くことにしよう。

ロケロールは冬の間、自分の放恣な願望のすべての失敗にもかかわらず、かなり幸福で善良なままであった。彼にとって増減する愛の明星はまだ地平線の下に沈まず、ただ集雲の中に隠れていた。しかしリンダがユリエンネと共に旅立つと、 — それも早速彼が推察し、早くに確認したように、イタリアへ旅立つと、新たな嵐が彼の人生の中を吹き抜けて、彼の最後の花々を散らし、長くたまった埃で暗いものにした。彼がアルバーノ自身に予告したように、網が奔流のアルバーノと伯爵令嬢の上に投げ込められ、兩人を密接に絡め取るのを見たからである。多くの素人芸と多神教の腐食する毒がまた熱く彼の心の血管の中を循環した。 — 彼は思う存分、野蛮な浪費、賭け、借金を重ね、幸運と人生を秤にかけ、 — 自分の鉄のような肉体を死へと投げ出したが、死はすぐには彼を砕いてくれなかった。 — そして贅沢な葬送の酔いの中、自分の殺害された人生と希望とを荒々しく悼んで、酩酊した。これは悦楽と絶望とがすでにしばしば地上で、戦場や大都会で一緒に手を結んできた一つの同盟である。

ただまだ何かが大尉を垂直に維持して来ていた。アルバーノはリンダからまだ離れたま

までであるという期待と、リンダが戻って来るといふ期待であった。そのとき侯爵夫人が戻って来た。冷たいアルバーノにまだ憎しみを新たにしたままで、夫人はアルバーノに騙された女と自らを見なしていた。ロケロルは容易に自分の父親に働きかけ、自分を夫人に一層近付けて行った。彼女の許でアルバーノと一切の情報が得られるであろうと期待したからである。彼はやがて似た声と以前の友情とで彼女の敵に対して重要なものとなった。そしてそれ以上に、ある女性にとって、まさにいつもその女性が願う通りの存在になるといふ彼の稀有な如才なさで、重要なものとなった。

夫人はすべての彼の以前の諸状況や願望を夙に熟知していたので、遠方の通信者がアルバーノについて彼の新たな恋の知らせを送ると、ロケロルに容易にその内容を教えた。夫人に対してロケロルが演ずべき温かい役割にもかかわらず、彼はそれでも夫人の前で憤激して青ざめたり、息を飲んだり、震えたり、硬直したりを繰り返した。「そうなのですか」と彼は小声で尋ねた。 — 夫人は彼に手紙を見せた。 — 「侯爵夫人」（と彼は怒って、夫人の手を自分の唇に押し当てて、続けて言った）「あなたの仰有る通りだ、すべてを許し給え」。

彼がアルバーノのことをいかに偉大に考えていたか、今ようやく世間での最も自然なことについての自分の驚きから察した。心は以前、憎しみの下、敬意を抱かざるを得なかった対象を、今や敬意を抱かずに憎まなければならなくなる時ほど、心がより辛辣に憎むことはない。同じ理由で、劣等な人間は、敬虔な人間よりも、他人の偽善をはるかにもっと深く、もっと利己的に憤慨するようなものである。ロケロルは今や、気位の高い友に対して、まことに敵対していいと思うに至った。彼はドイツの廢墟から、サソリで一杯のイタリヤの廢墟となった。侯爵夫人はサソリをまず本当に毒化させる暑い気候となった。夫人は、いかにアルバーノが長いこと夫人の心を掴もうとして、彼の深い地雷へ誘い出そうとして、ただそれを爆破させて、冷淡さと嘲笑とを楽しもうとしたか、いかに彼が大尉のことを無関心に、憎しみの対象とすらせず、話したかを彼に語った。

侯爵夫人は大尉に、王座への階段を一段ずつ段々に上がって来ることを許し、遂に彼は夫人自身という段しかもはや有しなくなった。夫人は最後の階段も、自分の仇を討つという条件で彼に委ねた。彼は、夫人と自分の仇を討つ、アルバーノは厳かにタルタルスで伯爵令嬢を自分[ロケロル]のために断念したのだから、と言った。かくて両人は自分達の本当の愛を復讐の仮面の下に隠しているように見えた、つまり侯爵夫人は大尉に対する自分の愛を、大尉はリンダに対する自分の愛を隠しているように見えた。

夫人は彼に一つの計画をますます濃密に眼前に持って来た。夫人は次のように述べて彼をはなはだ刺激したが、彼が見つめなかった計画であった。つまりアルバーノはこれまで考えられていた以上に大きな女性の寵児であり、寵児となるであろうこと、自分の敬虔で思慮深い妹イドイーネですら手紙で静かな問いかけとか他の徴候によれば、ほとんど二つのものを彼のせいではなくしてしまっている、即ち彼女が病床の彼に再び与えたもの、健康と安らぎを失っていること、伯爵令嬢がいつか背くのを見たり、実際に背いてしまうことを、彼は決して期待してはならないということを述べたのであった。

最後に夫人はゆっくりと恐ろしい言葉を発した。「ロケロル、貴方は彼の声をも有し、彼女は夕方目が見えない」と。 — 「何を仰有る[天国と地獄にかけて]」と彼は叫んだ。赤くなったり、青くなったりしながら、同時に天国と地獄に立っていて、それらの扉が彼の

前で開いたのであった。「よし」と彼は素早く言い添えたが、この白く泡立つ海の深みにまだ到達し得てはいなかった。侯爵夫人は彼を熱く抱擁した。彼は夫人を更に激しく抱擁した。「詩的な創作の中では」（と彼は言った）「あなたの考えは容易に思い浮かんだことだろう。しかし現実では策を弄しない」。 — 「御冗談を」と夫人は言った。早くから許されるかぎり彼はあなた[Du おまえ]と言った。彼は心のことを、特に女性の心を熟知していたからである。 — その後すぐに、彼らがまだより率直に向かい合っていたとき、夫人は言った。「彼女[リンダ]が貴方の許で無垢のままならば、貴方は誰をも侮辱したことになるし、誰の負けでもない。彼女が無垢でなくなるとしたら、彼女は無垢でなかったのか、あるいは騙されるという罰に値したかだわ」。 — 「いや、それは素晴らしい。 — それは結末直前の立派な悲劇役者にふさわしい」と彼は言って、しかしそれについて説明しようとはしなかった。

今や彼の営みの荒々しい圏に目標と中心点が置かれた。彼はアルバーノの女性宛手紙の大文字、小文字を解剖し、ただ一字一字を模倣しようとした。それ故アルバーノはラベットの許で自分の考えではない自分の筆跡を見いだしたのであった。彼はラベットのアルバーノのすべての些細な状況を問い質し、自分の役割を微細な点に至るまで仕上げようとした。同様に彼はすべてのイタリアの旅行記を読んで、リンダと共に、彼が見せかけのアルバーノとして彼女と一緒に西の国[ヘスペリア]の生活を享受したときのすべての美しい箇所について自由に話せるようにした。かくも胸の中に炎を抱いて、頭の中には冷たい氷の明かりを点して、一度すべての劇場的準備や錯綜を、以前は舞台のために用意したように、今は実人生のために用意し、分別を持って指揮することは、心をくすぐられることであった。

彼は彼を誇り高く扱うアルバーノが旅から戻って来るのを見た。 — 彼は花と咲く女神がリラルを歩くのを見た。 — 彼は侯爵夫人のスパイを通じて、彼らの関係について聞いた。高く彼の死海は重い波となって、犠牲者が天からその飛行中に落下するよう求めた。彼がリンダと行う計画であった悲劇の直後に、自らの悲劇を「皇子の庭園」で行う予定となった。この悲劇は時折行くと約束されて、延期されてきたものであった。二重の機械仕掛けの多くの歯車が同時にかみ合う時が生ずるまで、彼は長いこと待ち、見張っていなければならなかった。

遂にその時が生じて、彼はリンダ宛に先に知らせた手紙を書いた。すべてが計算され、実行され、偶然のすべての加勢が計画に織り込まれた。彼の悲劇は彼の知人達によって覚えられていたが、決して稽古したことはなかった。彼が言うには、共演者達自らが彼の役割に芝居の中でびっくりするはずであったからである。以前から有していた別れを告げる喜びは、 — ここでは感動は同時にその短さと強さとで生き生きとしたものになったので、 — 自分を愛してくれる多くの人々の許でなされた。ラベットから彼は激しく優しく別れたので、彼女はびっくりして彼に言った。「カール、何か悪いことをするのではないでしょうね」。 — 「今はすべて良くないのだよ」と彼は言った。

侯爵夫人を使って、翌日の悲劇のために、最も重要な観客達が求められた。宮廷を含め、ガスパールもユリエンネも出席であった。秘密が敷かれた。侯爵夫人にも彼の役割は隠されていた。宮廷に喜んで従おうと思っていた彼の父親だけは、彼が仕掛けた大きな怒りのせいで、員数から消された。彼は父親をこの茨の生垣で締め出す術しか知らなかったから

である。彼の母親とラベッテは、彼女達の幸運にかけて、彼の幸運にかけて、彼の芝居の観客とならないよう切願された。

偶然のある新しい風向きで、騎士の奇妙な弟がやって来て、彼の飛行機械を持ち上げることになった。この弟は彼の悲劇的仮面の鉄仮面^{*1} について、はなはだ喜ばしく聞いたので、自分は新しい不思議な共演者を彼のために添えたいと申し出たのであった。「すべては埋まっている」と詩人のロケロールは言った。「幕間にコーラスを入れて、一人の役者を配すべきです」とこのスペイン人は言った。ロケロールはその共演者の名前を尋ねた。スペイン人は彼を旅館に案内した。部屋の中ですでに動物の鈍い声が叫んだ。「もうまた戻ってきたのですか、旦那」。彼らがそこで見たのはただ黒い黒丸鴉あった。「この鳥を舞台に上げるといい。これがコーラスとなる。これに半ば歌のメツァ・ヴォーチェ[中くらいの声]で、二、三行言わせるのだ。効果抜群だぞ」とスペイン人は言った。

ロケロールは黒丸鴉の長い呪文に驚いた。スペイン人は彼にもっと長い科白を頼んだ。自分の耳の前でこの黒丸鴉に覚えさせるためであった。ロケロールは「人生には錯覚があれど、舞台にはない」と科白を与えた。スペイン人は最初ただ一語を模倣のために発声し、次にまた一語を発声し、それを三度繰り返して、指でこの鳥を勇気づけながら、「さあ行こう、お転婆」と言った。するとこの動物は鈍くどもって、この行全体を述べた。ロケロールはこの喜劇的動物の仮面に何か恐るべきものを見いだして、若干のコーラスの行を詩作し、この鳥に委ねるといふ提案を、ある独自の条件を付けて、受け入れた。 — つまりこのスペイン人に彼の甥アルバーノを前日の晩、何らかの口実を設けて、ペスティッツから遠ざけ、それから彼と一緒に皇子の庭園に現れて欲しいという条件であった。スペイン人は言った。「大尉殿、口実は要りません。本当のことなのです。私は彼と一緒に友人のショッペを迎えに旅することにしましょう。彼は明日の晩来るつもりです。ショッペも一緒に見ることにしましょう」。 —

アルバーノにとって、リンダに対する混乱した気分の中、そしてショッペに対する期待一杯の気分の中、愛しいこのショッペをより早く胸に抱くための小旅行の計画ほど、容易に受け入れられる計画はなかった。ユリエンネは病の侯爵の前で、侯爵夫人に頼まれた。途中の国境の宮殿の中で待ち受けているイドイーネの許へ一緒に同伴して、翌日皇子の庭園へ戻って来るようにとの依頼であった。彼女は断った。病気で動けない兄が、自分からも頼むという依頼を添えた。妹はその依頼を受け入れた。

さてロケロールがリンダと会おうと思っている夜のためにすべてが整えられた。 — かくて夜、罪のない小村の納屋で差し込まれた松明が燃え、 — 疲れて眠る住民達の周りで暴風が吹き、 — 炎の火の剣が四方八方、霧の中で輝き、その炎と共に掠奪し殺害する時が来たら、そこに駆け下りようと、盗賊達が山上の霧の中に立っていて、下を窺い、待機しているのである。

第二百八周

*1 (訳注) バスティューユの神秘的囚人の暗示。フランス国王の兄弟と見なされてきた。ヴォルテール『ルイ十四世の世紀』参照。ここではロケロールの役割が秘密のままであったこと。

リンダはその手紙を何度も読んだ。甘美な愛の余り、泣いた。そして ― 許すことを考えていなかった。すべての花々を屈させ、何の花も摘み取ることのない愛のこの微風を彼女はすでに長いこと願っていたのであった。今や突然心の霧状の風の後で、彼女の人生の庭の中を風が生き生きと新鮮に吹き寄せた。彼女は八時が待ちきれない思いであった。彼女は晴着を選ぶことで時間を費やそうとした。この晴着は結局、彼女が恋人に初めてイスキア島で会ったとき、身に着けていたヴェール、帽子、衣服その他すべてのものに落ち着いた。

彼女は楽園の花々、つまりオレンジの花々、かの時と指針を自分の動悸する心臓の許に挿して、定められた時間に合わせて、盲目の少女の腕をとって、庭の中を降りて行った。タルタルスに対する憎しみからと手紙に対して応ずる気持ちで、彼女はフルートの谷への道を進んだ。夜は彼女の目にとって暗闇で、盲目の少女が道案内人であった。

祭壇のある上のリラルの山に、楽園の女牆の邪悪な精神のようにロケロルは立っていて、鋭く庭園を見下ろし、リンダとその道を見いだそうとしていた。彼の慶祝馬は外国風な植物の下の深い茂みの中に結ばれていた。まだ憤激一杯に彼はディーアンとカリトンが子供達と一緒に庭園を進むのを見ていた。上の雷の庵では小さな明かりが点されていた。彼は邪魔になる者すべてを呪っていた。今日は非常の場合、自分の天国への侵入者をすべて殺害すると決心していたからである。とうとう彼はリンダの背の高い赤い形姿がフルートの谷に向かって行き、入口の茂み開け、その背後に消えて行くのを目にした。

彼は急いで長い蝸牛状の山を下って行った。毒を盛られた死体のように温かかった。自分の背後で、長い茂みの花輪の中を、何者かが追って来る音を耳にした。 ― 彼は激して、懐中ピストルの隣に有していた仕込み杖を引き抜いた。 ― ようやく彼は、邪悪な精神に似た、醜い形姿を見た。それは彼の後を追って駆けて来て、 ― 彼を掴んだ。 ― それは侯爵夫人の手長猿であった。 ― 彼は即刻突き刺して、付いて来られないようにした。

下の野外の庭園を彼はゆっくりと歩いて、何の嫌疑も受けないようにした。彼はこっそりと死神のように忍んで行った。これはある雲の雷車に乗って聞こえることなく大気の中、一人の乙女が寄りかかっている花の木の上に進むもので、胸の中へ殺人的稲妻を隠した。彼はフルートの谷の高い門の茂みを開けた。その中ではすべてが静かで、薄暗かった。ただ天の高みで奇妙な音を立てる嵐が吹いて、雲の群れを追い抜いていた。しかし地上はひそやかで、葉の一枚も動かなかった。「誰かいるの」と盲目のドア番の少女が尋ねた。「今晚は、娘さん」とロケロルは言って、その声の調子でアルバーノに見せかけた。

低い、もっと密に葉の茂った谷で、リンダは小声で子供時代からの古いスペインの歌を歌っていた。ようやく彼女の姿が認められた。 ― 巨大な蛇は甘い形姿に向かって、有毒な跳躍を行った。この形姿は千回巻き付かれた。

彼は彼女に無言で、 ― 息もつかず飛びかかって、 ― 彼の人生の雲がこぼれて、
― 白熱と苦痛と歓喜の涙が燃えながら流れ続けて、 ― 彼の愛の奔流はこれまで浅く流れ込んでいたけれど、すべての支流が轟然と合流し、一つの形姿を掴み、運んで行った。 ― 「泣かないで、私の良い方、私どもは再三愛し合うのですから」とリンダは言った。そして優しく美しい唇が彼に最初の衷心からの接吻を与えた。そのとき歓喜の炎

の車輪が彼と共に夢中に回転し、その上に括り付けられた頭部には高く炎の圈が吹き付けられた。彼が目を開けると見られてしまうという恐れから、そして悦楽の心から、彼は目を閉ざしていた。今や彼は両目を開けた。かくも自分の間近に、そして両腕の中に今や高貴な形姿、誇り高い花と咲く顔、湿った温かい愛の目を見た。「天上的な、あなた」（と彼は言った）「今この時、私を殺しておくれ。天国で死ぬようにするために。この後も生きていたいだろうか。 — 私の魂を私の涙に流し込んで、私の生をあなたの生に流し込むことができたなら、もう消えてもいい」。

「アルバーノ」（と彼女は言った）「何故あなたは今日とても変わって、とても悲しげで、優しいの」。 —

「私のことを」（と彼は言った）「むしろあなたの名前と呼んで欲しい。タヒチ島で恋人達が名前を交換するように。 — ひょっとしたら、ちょっと飲んだせいかもしれない。

— しかし昨日のことは後悔している。 — 私はあなたを新たに愛しているのだ。私の内面も愛してくれているのかい、リンダ」。

「可愛い人ね、今私はその内面を永遠に愛せないかしら。私はあなたの許にいるし、あなたは私の許よ」。

「私のことが分かっていないね。いつ人間は、まさに彼とか、まさにこの私とかが思われ、愛されると分かるというのだろう。ただ形姿だけが抱擁され、ただ外皮だけが抱かれる。誰がある私を自分に抱き締めるのだろう。 — 神かな」。 —

「そして私があなただをね」、 — とリンダ言った。

「リンダよ、私を私の墓の中でも愛し続けておくれ、人生の靱殻が吹き飛んで行ったときに、 — 私があなたに対する愛故にあなたを騙したとしても、私の地獄の中で私を愛し続けてくれるかい。 — 愛は愛のお詫びとなるのだろうか」。 —

「あなたが私を愛するならば、私はあなたを愛し続けます。あなたが毒の花だったら、私は蜂となって、その甘美な萼の中で死にます」。

花嫁は彼の首にすがった。彼は彼女に激しく抱きついた。 — そしてますます氷河に似てきた。これは温かくなると更に進み、溶けながら掠奪するものである。彼の周りで喜びが輝かしい、天上的な顔で走ったが、しかし両手に復讐の女神の仮面を見せた。

「あなたは愛から死のうとしてしている。私はすでに愛から死んでしまっている。いかに長く私がすでにあなたを愛してきたか、あなたは知らない」と彼は答えた。

「燃えている方」（と彼女は言った）「いつかイドイーネに会ったら、この夜のことを忘れないでね」。 — 「私の蘇った妹を目にするだけのことだ」と彼は言った。しかし本当のことを発したことにすぐに驚いた。「蘇った」（と彼はすぐに言い添えた）「ヘルクラネウムを見ても、実はその上の花と咲くポルティチに住んでいるわけだ。私とあなたはバーヤ湾で海中に沈んだアーチや門を見た。更に生き生きとした町の方へ船で進んで行った。 — ロケロールも多くの点で私に似ていて、あなたをととても、そして長く愛していて、リアーネ同様一度死んでもいる」。 —

「でもロケロールを私は愛したことがなかった。今はあなたの永遠の花嫁よ」。

「哀れな奴だ。しかし、思うに、私は正しくない。かつてタルタルスの洞窟で見たことのないあなたのことを前もって、この友人に対する愛から断念したのだから」。

「きっと違うわ。でも私どもはどうしてこの不気味な人のことを言っているの」と彼女

は接吻しながら言った。

「気味のいい人とむしろ言いたいね」と彼は答えた。憎しみの混じった愛に燃え、復讐と悦楽とに分裂して、今や彼女の未来全体に喪のヴェールを織ってやろうと決意していた。彼は犠牲者の周りに黒い鷲の翼を広げて、接吻をふせぎ、接吻を目覚めさせ、彼女の胸からオレンジの花々を引き抜き、投げ返した。「愛は生であり、死であり、天国であり、地獄である」（と彼は言った）「愛は殺害であり、白熱であり、死であり、痛みであり、悦楽である。 — カリグラはカエソニアを拷問させて、ただ何故自分はいかにも彼女を愛するのか知ろうとした。 — 私もそうすることができよう」。

「神々しいアルバーノ、もう過ぎるほど飲んではいけません。あなたは激しすぎます。あなたの眉毛はつり上がってさえますよ。 — どうしたの」。

「万事は一度にだ。雷雨の如く、白熱している、 — 私の天は稲妻で明るい、 — 冷たい霰を投げるぞ、 — 次々の破壊だ。花々には温かく雨が降り、 — 天と地は平和な静かなアーチが結んでいる」。

今や彼は天に嵐の雲が海燕のように星々の間、火星の怒った血のような目の隣に、すでに一層明るく飛んでいるのを見た。彼を迫りやり、暴露することになる月がやがて神の裁きの目を彼に投げかけるのであった。運命に対する嘲りで、彼は接吻する憤激と引き換えに、尼僧のヴェールと彼女の乙女らしい胸の高貴な輝きを引き裂いた。遠くに良心の燈台が、厚い雲に覆われて立っていた。リンダは彼の胸元で震えながら、輝きながら泣いた。

「私の善良な守護神でいて、アルバーノ」と彼女は言った。 — 「それにあなたの邪悪な守護神だ。しかしせめて一度カールと呼んでおくれ」と彼は怒りで一杯になって言った。「それではカールと呼びましょう。でも以前のアルバーノのままにいて、私の聖なるアルバーノ」と彼女は言った。

突然谷でフルートの音が響き始めた。敬虔な神父が夕方の祈りのために演奏させたものであった。戦場での音色のようにそれは殺害を呼び寄せていた。 — そしてリンダの幸運と人生の黄金の王座は輝きながら溶け落ち、彼女は沈み込んだ。そして彼女の無垢の白い花嫁のドレスは引き千切られ、灰となった。

「それでは私の死まであなたのものです」と涙の奔流と共に小声で彼女は言った。「ただ私の死までだ」と彼は言って、今は泣くようなフルートの音で優しくなって泣いた。山上の「黄金の球」ではすでに月が、武装した彗星のように、一つ目の巨人のように昇って来ていて、微光を発し、罪人をその楽園から追放しようとした。「月が昇るまで待って、あなたの顔を見たいから」と彼女は頼んだ。「いや、神々しいあなた、私の慶祝馬がもういないている。死の松明が私の手で燃え落ちた」と彼は悲劇的に小声で言った。嵐は天から地上へ移って来ていた。彼女は尋ねた。「嵐がひどく甲高い。何と言ったの、あなた」。

— 彼は荒々しく彼女の唇と胸に再び接吻した。彼は行くこともできず、留まることもできなかった。「明日は」（と彼は言った）『悲劇役者』を見に行かないことだ。頼むから。結末が余りに激しいものと聞いている」。

「私はいずれにせよそのようなものは嫌いです。もっと長く留まっていてください。明日はまた会えないのだから」。彼は彼女を自ら抱き寄せて、 — 彼女の目を自分の顔で覆った。 — 月のゴルゴンの頭はすでに東の方で昇っていた。 — 彼は彼女を離して、人生を放った。 — しかし愛のどもった言葉の一つ一つが短い時を囓り尽くした。嵐が

千切られた木々の中で働き、フルートの音色が蝶のように、無邪気な子供達のように、大きな羽根の下、忍び出て行った。ロケロルは、このような現在に麻痺して、こう言いそうになった。私を御覧、私はロケロルだ、と。しかし速やかに次のような考えが生じて来た。

「彼女はおまえからそうされるいわれはない。いや、人々が人間にすべてを許すとき、そのような時に初めて知って貰おう」。 — 今一度激しく彼は彼女を自らに抱き寄せた。月光がすでに両者を照らしていた。彼は愛と別離の千もの言葉を繰り返して、彼女を突き返し、素早く向きを変え、アルバーノの服のまま谷を歩いて行った。

「お休み、娘さん」と彼は言って、盲目の女性の側を通り過ぎた。リンダは再び先のように歌うことはなかった。星々が彼を見つめていた。嵐の風が彼に語りかけた。 — 喜びが彼の傍らを行って。しかし復讐の女神の仮面を今度は顔に浮かべていた。 — 天から一本の腕が降りて来て、地獄から一本の腕が伸びて来て、両腕が彼を掴んで、彼を引き裂こうとした。 — 「さてさて」（と彼は言った）「私は多分幸福であったのであろう。しかし私が彼女の忌々しいアルバーノであったならば、もっと幸せになり得たであろうに」。 — そして自分の慶祝馬に飛び乗って、夜のうちに皇子の庭園へ駆けて行った。

第百二十九周

アルバーノと彼の叔父は知らせて来たショッペを迎えに村から村へ進んで行った。叔父はその希望を地平線のように絶えず自分達の先の方へ延ばして行った。一度夕方伯爵はショッペの声を自分の間近で聞いたように思った。 — しかし甲斐はなかった。愛しい人間はまだ彼の胸元には来ずに、憧れながらアルバーノは天の雲が途中進んで来るのを見ていた。自分の大事な者がその雲の下、地上で向かっている筈であった。叔父は彼に長いこと、図書館司書がしばしば打ちのめされていた秘密の苦悶について語った。また狂気への端緒について語った。そのせいで叔父は早くから彼と別れたのであった。すべての人間の中で狂気の人間を殊に恐れているからと叔父は言った。ロメイロの肖像画については彼は何も知らないように見えた。アルバーノはうんざりして黙っていた。このスペイン人は我慢ならない人間の一人で、滑らかな確固たる顔をして、螺子で締めた兜をつけた魂と共に他人の矛盾を自らの矛盾なしに、木霊もなしに、鏡も変化もなしに、自らの周りに漂わせることができたからであり、この人間にとっては他人の語りは単に静かな露であって、それが落下しても石を穿つことはないからであった。その上ショッペの間近さについての叔父の新たな嘘に対する、一時間にわたって嘘つきが言うことすべてを信じないまま耳にしている自らの不甲斐なさに対するアルバーノの憤慨が加わった。

「ショッペは私の言葉にかけて、別の道を通ってすでに皇子の庭園へ来ていると思う」ととうとうスペイン人は全く元気よく言って、向きを変えることを提案した。彼は自分に従わない各人を鋭く悠長な氷の平原に押し付ける自らの厚顔な冷たい力を温かく享受していた。

彼らはただ馬車の並ぶ皇子の庭園の前に着いた。馬車からは今日の催事の観客が降りて来ていた。アルバーノはすでに観客の中に、彼の父と侯爵夫人、ユリエンネを見いだしていて、共演者の中にブヴェロや、彼の昔の教練教師のファルテルレや、赤いスカーフの黄色の服の商人の妻、この女性がかつてロケロルの心の中というよりは心の側にいたことの

ある者であったが、それにロケロール本人を見いだしていた。大尉は皆の見ている前で早速馴染みのアルバーノに近寄って来て、軽快さを装って、芝居は間もなく始まる、ただディーアンとその妻をまだ待っているところだ、と話した。ディーアンはいつでも容易に同意し易く、大抵は頼まれるとそうで、芸術のための頼みにはいやと言えないのであった。彼を通じてやがてカリトンも芝居に手伝わされた。しかし彼女はその作品では他ならぬ自分の夫に対する恋人役を演ずるといふ事情を汲んでやらなければならなかった。ロケロールはアルバーノと話をするとき、彼の顔にとって腫れた顔や凍えた顔同様に軽やかな微笑とか瞼を上げることが難しいものであった。内心ではある処罰し、屈服させる精神が彼の精神を樂しげで純粋な友の前で大地へと押し付けていた。この友の春から彼は明るい太陽を奪い取り、投げ棄てたのであって、この友に対して人生への永遠のペストの雲を掛けたのであった。

庭園でのお喋りの喧騒の中、妹のユリエンネに自分にとって長いこと隠れていたリンダに対する穏やかな言葉を三言話そうと願って空しい思いでいたとき、アルバーノはこの伯爵令嬢の馬車がリアーネの庭園の高台にやって来るのを見、泊まるのを見、そして彼女とディーアンとカリトンが降りるのを見た。

そこで彼は早速、姿を見せないでいた恋人の許へ飛んで行くことしか思い付かなかったが、多くの人々の目の前では容易にディーアンを憧れての飛行と装うことにした。そして今は愛に飢えて、人目を気にしなかった。「でも来てしまった」とリンダは言った。そして彼に向かって行った。優しい視線という柔らかな葡萄の巻きひげで彼の視線に絡ませてきた。 — とても憶して、とても愛らしく、 — そして羞恥の夕焼けが、夜の春の赤みのように、その天の周りに移って、無垢の白い月がその中央に懸かっていた。 — アルバーノはこの許しの春風で心が溶けて、彼女のこの改宗に対する甘美な喜びを、彼の勝利に対する自己中心的誇りと自己非難して、幸福の美しい混乱の中で甘美な驚きを、そして溶けた心を、ほとんど制御できずにいた。その心は彼女の前で嵐のように夜露へと散らうとしていた。彼は自分の目に真心を浮かべて、その真心を恋人に捧げた。カリトンの前では彼は自らを隠さなければならなかった。ディーアンとリンダに向かって、彼らが下降して行く太陽を見ていたとき、ただ「イスキア」という言葉を発した。

「勿論ここに、アナタージウスさん[ディーアンの名]」（とカリトンはディーアンに言った）「立派なリアーネ嬢が埋蔵されていますよね、庭園のどこなのか判然とはしないけれど、花々ばかりで何も見えないのだから。でも彼女がそれを決めたのよね」。 — 「とても悲しいことで、きれいな眺めだ」（とディーアンは言った）「でも止めよう、 — 逝きて帰らずだ、カリトン」。そして彼女を脇へ連れて行った。愛し合う者達を思いやつのことであった。何も聞き逃さず、見逃さないアルバーノにとって、そのことからの動揺は顕著であった。リンダも分かっていた。「あなたの悲痛を口になさるといいわ」（と彼女は言った）「私も彼女を愛しています」。 — 「私は生きている者達を思い出しています」（と彼は言った、気を取り直して、おずおずと、花の庭園は見ずに、陽光に酔った夕方の一帯を見ていた） — 「十分に地上では許し、察することができるのだろうか。 — リンダ、今日はどんなに私を許してくれていることか」。

「友の方」（と彼女は言った）「貴方が罪を犯しているのであれば、貴方は許しをお受けになるはずです。でもそれまでは静かになさってください」。彼は彼女を仔細ありげに

見つめた。「あなたはもうお許しになったのでは。そして私はまだなのではないですか。

— しかし私がこのところショッペを迎える途中、どんなに心からあなたの許で暮らし、神々しい過去を未来へと運んだことか、御存じであれば、— いやあなたにここで、この地ですべてをお話しできましようか」。— 幸い彼女は、— 他の女性同様に、言葉よりも、表情や、合図、行為に注意を払っていて、— 生身の耳よりも精神の耳でむしろ聞いていて、彼の言葉の間近で開けられた深淵の中へ入って行かなかった。かくて今や両人は、子供達のように、冷たい、雷の落ちた避雷針の傍らで戯れていた。この避雷針からはちょっと間近に近付いただけでも死の閃光の大鎌が生ずるのであった。

両人は雷雨の隣をゆらゆらと歩いて行った。太陽は小さな山と花の塚の隣をその炎と共に遠くの平原の中へ沈んで行った。低い「皇子の庭園」からは長い夕陽の光線の中を音色が舞い上がって来て、黄金の一带を神々しくした。— 音色は孤独な翼で、その心を求めては、その心の許で更に飛んで行った。— 愛し合う心は翼で一杯になった。— 光線は沈み、音色は昇った。— リンダとアルバーノの周りには庭園や山々や緑の谷からなる黄金の圏が横たわっていて、すべての花々が最後の黄金の下で豊かに揺れて、目の揺り籠、心の揺り籠となった。— 愛し合う者達は互いと大地とを感激して見つめ、輝かしい世界は彼らにとって単に彼らの心という魔法の鐘の中で生じて、両人自身はその中で輝きながら漂う像であった。

「リンダ、私はもっと穏やかになろうと思う」（と彼は言った）「聖なる女性にかけて私はそのことを誓う。その聖なる女性の庭に我々はいるわけだ」。— 「そうになってください、愛しい方、リラールではそうではなかったですからね」と彼女は言った。彼はそれをリアーネに対する嵐と解した。「その思い出はあなたの愛の中に隠してください」と彼は赤面して言った。彼女は彼を乙女らしく見つめた。彼女の内面は乙女のまま無垢なままであった。桃が赤くなって熱く太陽の方に向くけれども、葉の中では優しく白いままであるようなものである。彼女の目は彼の目から飲み、彼の目は彼女の目から飲んで、天は彼らの天と混じり合って、緋色の太陽が愛の目の温かい愛の露から微光を反射した。「あなたに今接吻を許されたらいいのだが」と彼が言った。「ほんとに」とリンダが言った。

「かくもかつて黄金色に太陽が海の上で沈んだ」と彼は言った。— 「その後最初の接吻でした」と彼女は言った。— 「これからはもっと度々会うことにしよう」と彼は言った。「勿論、それに日中にもっと長く、夜は哀れに目が駄目だから。すでに向こうでは私の目が沈んで行きます」と太陽が沈んだとき、彼女は言った。

それは善良な、穏やかな精神、あるいはリアーネの精神で、— これが人間をただ黄昏に夜へと導くもので、これが嘆きと歓喜の中へ和らげる涙を注がせるもので、これが愛の宵の明星の短い軌道上に雲が掛からないようにするものである。— この精神こそが、彼らの舌と耳とを恐ろしい物音から守ってくれたものである。この物音は突然黄金の夕方の圏を周囲に燃え上がる地獄へと引き裂きかねなかったものである。

「向こうから急いでやって来るのは誰」とリンダが言った。「私の敵だ」とアルバーノは言った。ロケロールは彼がいないのに気付き、リンダの到着を聞いたのであった。今の夕方、彼らの前で昨夜のことが明らかになるのを極度に恐れて、彼はディーアンを配役に、アルバーノを聞き役に連れて来るという口実の下、山を急いで登って来た。半ば人間、半ば獣のケンタウロスのように彼は、自分の全本性の混乱した鈍い戦闘と共に調和的な魂と

喜びの中に踏み込んで来た。しかし彼が彼らの許で歓喜の清祓を感知し、黒い覆いがまだ彼の殺害に被さったままであるのを見てとると、すぐに彼の中で嫉妬の憤怒の精神が起き上がって来た。「彼女は今や私の許嫁だ」と彼は自らに言った。混乱した後悔の日食は、不機嫌の雷雨で覆われた。リンダは、彼の声が似ていることで、怒りながら、内心戦慄を覚えていたが、彼の前にダイヤモンドのように、明るく、輝いて、硬く、切るように立っていた。しかしアルバーノは穏やかに、調和の余韻の中、この兄の妹の墓地の上に、若干混乱して立っていた。ロケロールの中でまた昨日の不純な邪推、つまりひょっとしたらアルバーノとリンダはもはや無垢ではないのかもしれないという邪推が忍び寄って来た。

怒って彼は今日リンダに、自分の悲劇と一緒に見るよう頼んだ。「貴方は私に」（と彼女はアルバーノに言った）「とても悲劇的に終わると仰有った。私はそんなのは好きではない」。 — 「彼はそのことは承知していない」とロケロールは言った。「そう知らない」とアルバーノは言った。 — 蛇のように彼は最初の間人間の楽園を見下ろしていた。彼らを即刻そこから追放することになる林檎を自分の認識の木から彼らに渡すことができることを喜んで自覚していた。「それに」（と彼女は言い添えた）「私は夕方、余り見えないか、全然見えないの」。ロケロールはそれについては初めての振りをして、彼女が彼のことを聞きさえすれば恋愛劇の主演として有り難いと冗談を言い、ディーアンに共に頼むよう頼んだ。生来の冷淡さではなく、習得された冷淡さが至高の欺瞞を良くするのであって、生来の冷淡さは単に見せかけるだけであるが、習得の冷淡さは実際に行うのである。その冷淡さは同時に炎のすべての道や手段を知っていて、利用するからであり、先の白熱の灰を通じて、滑らかな氷の上で自らを確立するからである。とうとうアルバーノが自ら彼女に、悲劇の楽しみに参加し、下の男女の友人達に彼女が居合わせるという美しく純粋な楽しみを恵んでやるよう勧めたので、撤回を訝しく思いながらも、彼女は受け入れた。

彼女はカリトンを自分の馬車に乗せた。男達は先に行った。途中でロケロールはディーアンに、作品ではアルバーノの役を演ずることになっていた彼に、こう言った。「私が第四幕でこう言ったら、つまり『精神的愛も官能的愛を目指していて、船乗りのように東に向かって行きながら、遂には日没の国々に着いてしまう』と言ったら[この科白は後の上演では見られない]、すぐに口を挿んで欲しい」。 — ディーアンは笑って言った。「口を挿もう。しかしイタリアではすぐに航行は、より南の方、より西の方になるのだが」。アルバーノはうんざりして黙った。そしてリンダをこの不確かな祭典へ赴くよう口添えしたことを後悔した。侯爵夫人は欺かれたリンダへ軽蔑の視線を素早く二、三投げかけた。リンダはそれに対して同じような視線で応じた。秀でた女達は秀でた女達との敵対的衝突のとき、最も女らしさを暴露する。

第百三十周

大方の観客は最初、芝居のためよりも、観客や役者のせいでやって来ていた。しかしやがて彼らは秘密や珍しい舞台そのものによって引き付けられた。舞台は「皇子の庭園」の所謂「微睡みの島」にあって、この島は花々や茂みや高い木々の野生の密集した混淆で覆われていた。その東側は広々とした自由な前景となっていて、そこで演じられることになっていたが、奥の緑の中の空の墓標の上に白いスフィンクスが置かれていた。書き割りは

薄暗い植込みの諸部分であった。平土間や棧敷は岸辺の向こう側で、岸辺は島とは余り大きくない船一艘ほどの幅の湖によって離されていた。両岸辺の二本の木に結ばれて、湖の中央部分にランタンの如く、黒丸鴉、あるいはコーラスの鳥籠が掛かっている、その鈍い声を観客に届けていた。「実際興味深いものだ」（と騎士は息子に向かって言った）「どこから彼が悲劇的なものを取って来るかだ」。 — 「始めるか」（とロケロールは言った。彼はこれまで黙って、落ち着かず、大地を、見回しながら、あちこち動いていた）「ただ私は普通に延長の許しを請わなければならない。私は第五幕で月に向かって話しかけるので、月の上昇が最後の場面と合うように、丁度そのように開始しさえすれば、本物の月を上手に利用できる次第であります」。

とうとう彼は青白くなりながら、彼の言うカロンの小舟に乗って、一人で向こうに渡った。それから残りの役者達も続々と舟で進んだ。皆が木々の背後に隠れた。さてこの島の葉で覆われた西の国々の中で、モーツァルトの『ドン・ジョヴァンニ』の永遠の序曲が目に見えない霊界のようにゆっくりと偉大に大気の中に生じて来た。

「お転婆」とその後、騎士の弟が黒丸鴉に叫んで、その際合図として拍手した。

「棺を開けよ」（と鈍く動物は始めた。オーケストラの個別の喪の音色の伴奏があった）「墓地の上で、そしてこれを最後に死者の胸[ヒオルト]とその乾いた臉を見せよ。それから棺を永遠に閉じよ」。

今やリーリア（カリトン）とカルロス（ディーアン）が登場して来た。まだ初恋の最初の時期の二人の愛し合う者達で、 — まだ悲しい涙の雨が黄金の朝の露に溢れていなかった。 — 彼らは互いに誠実である。今リーリアの兄のヒオルトが旅から帰って来て、自分の青春の友カルロスを妹の永遠の友として認めることを、彼女は彼と一緒に喜んだ。「ひょっとしたら兄も本当に幸せかもしれない」とリーリアは言った。「そうに違いない」（とカルロスは言った）「彼は幸せ以外不足はない」。時折両人は楽しげに見つめ合って黙っていた。それから島の隠された西の側から音色が響いて、黙した歓喜をエーテルの中に運んで、二人に漂いながら歓喜を神々しく示した。観客の間にディーアンとカリトンの、彼らの美しい現実の優しい、しかし南方的熱を帯びて織り込まれた模倣に対する甘美な関心が広がって行った。人々は二人のギリシア人を聞き、目にした。突然リーリアは花の茂みの背後に逃げた。彼女の敵サレラ、つまりカルロスの父親がやって来たからである。ブヴェロによって演じられていた。

サレラは息子に怒って、彼の花嫁アテナイオスの到着を告げた。カルロスはこの時、自分の早くからの恋の秘密を打ち明けて、未来全体に対して戦う姿を見せた。サレラは怒って叫んだ。「彼女が美しくなければ、おまえを強制し、罰することはなかろう。しかしおまえは彼女を見て、私に従うことになろう。それでもおまえを憎く思うことだろう」。カルロスは答えた。「父上、私はすでにリーリアを見ました」。 — サレラは怒って反復しながら退場した。カルロスは今やもっと激しくヒオルトの帰還を願った。兄の説得と同伴とで同時にもっと容易に一緒に妹と駆け落ちするためであった。ここで第一幕は終わった。

騎士の弟は黒丸鴉に叫んだ。「お転婆」、そして合図に足で床を擦った。

「現れ出でよ、青ざめた男よ」（と動物は言った）「時計は時を計る、悲しみの者よ、静かな島に乗り入れよ」。

ヒオルトが青白く化粧して、胸をはだけて登場し、墓標を見つめ、内奥の魂から言った。「ようやくだ」。音楽が舞曲を演奏した。「微睡みの島と言う通り、――我々の一日は眠りで終わる」と彼は言い添えた。このときカルロスがやって来た。「ヒオルト、君は死んだのか」と死者に驚いて叫んだ。「ただ青ざめているだけだ」と彼は言った。「どうして美しく多彩な地球からそのように戻って来たのか」とカルロスは言った。「疲れ果てた、カールよ。――希望は潰えて、――私の現在は過去によって廃嫡された。――感覚は落葉した。――美しい自然すらもはや好きではない。山々のような雲が本物の山々より私には好ましい。――私はこの人生で苦い雑草を本当に刈り取ってしまった。――それでも私はこの空の胸に一人の死の天使を、永遠に墓を掘り、執筆する死の天使を持ち運ばなければならない。どの文字も一つの傷だ。――助言は無用。彼らはそれを良心と呼ぶが。しかしこの眠りの島で少しばかり寝酒を飲もう、カール」。

ワインが運ばれた。彼は今や友人に自分の人生を語った。――自分の欠点を、この中には自分が今まさに続けている欠点、つまり飲酒も上げたが、――自己告白のときでさえ、再度生まれてくる自分の虚栄心を、――自分を砕けた船の引き寄せられた釘で一杯の磁石の山としている自分の女性達の征服を、――カルダーノ[『自伝』第十三章]のように友人達を侮辱し、自他の幸福を中断させ、すでに子供のとき説教家に口を挿んだように中断させる嗜癖を、あるいは極上の演奏のときピアノを壊し、熱中しているときに最も不埒なことを考える嗜癖を語った。

「以前はそれでもまだ二つの自我を有していた。約束し嘘を付く自我と、もう一つの自我を信ずる自我の二つだ。今ではこの両自我が互いに嘘を付き合っている」。カルロスが答えた。「恐ろしい。――しかし君の悲しみはそれ自身が救いであり、贈り物だ」。――「何の、何の」(と彼は答えた)「人間は悪を弾劾するよりも、人間がそれを犯した過去の状況を弾劾するものだ。人間はその悪を新鮮な状況のとき、また新たな甘美なものと思っ、愛し続けるものだ。――あそこに冷たく横たわっているもの、それが私の像だ」(と彼はスフィンクスを指さした)「それが生きて私の血の通う胸の中で動くのだ。

――私を助けておくれ、この引き裂く怪獣を引き出しておくれ。――

アルバーノは内奥の心の中で、彼と一緒にのかの告白の心優しい夜^{*1}の厚かましい反復に憤慨した。「彼は十分に厚かましい」(とガスパールは小声でアルバーノに言った)「彼は、聞いたところでは、本当に自分自身を演技するそうだから。しかし彼が自分をそう見ている点では、実際思っているよりも結構なことだ」。――「以前は」(とアルバーノは言った)「私もそう考えていました。しかし劣等な状態の観照は立派な状態でしょうか。治療し難い癌の病が自分の許で増大するのを見ているのは一層弱々しいことではないでしょうか。いずれにせよ至高のものを彼は失っています。無垢を失っています」。――「須臾の揺り籠の徳操だ。彼は明瞭な、大胆な反省を有している」とガスパールは言った。「単に心の軟弱な、名誉心のない、曖昧な、多面的疲弊を彼は有しているだけです。力について話しながら、どんなに薄い悦楽の毘も引き千切れないのです」とアルバーノは言った。

「カールよ」(とヒオルトは、優しく、アルバーノに答えるように言った)「いやまだ

*1 『巨人』、第二巻、273頁等。[第五十五周、拙訳175頁、更に父の誕生日劇、第五十八周]

手段はある。人生で新鮮な色合いが次々に失せて、―― 実在が無になっても、喜劇でも悲劇でもなくなって、単に生氣のない観劇となっても、人間にはまだ人間を受け入れる一つの天がある。愛だ。この天が閉まったら、永遠に呪われていることになる。カルロスよ、カルロスよ、私はまだ幸せになれよう。―― 私はアテナイスを見たからだ。―― しかし私はもっと不幸になるかもしれない。彼女は私を愛していないのだから。私の心の中にはこの煌びやかな、鋭く切り込むダイヤモンドがあって、動悸を打つたびに、このダイヤモンドの許で血を流すのだ」。―― 至る所で今やロケロルはリンダの像を共演させた。ここでカルロスは友人に、アテナイスは自分の父親から自分の花嫁に選ばれて、間もなくやって来ると知らせて最初激昂させた。しかし彼の妹リーリアが現れて、彼が素早く彼女の手を握って、「ただこの女性だけを愛している」と言って、ヒオルトを宥めた。―― 彼らは老サレラの側からの障害について語った。カルロスはこの老父を、太陽の下では耐えられない、何も建てられないような氷原と呼んだ。「カールよ、私の加勢をしておくれ」（とヒオルトは言った）「君が私に書いたことを思いだしておくれ。二つの奔流のように和合し、一緒に生長し、担い、干涸らびたいと思います*1、と」。―― そのように三人は交互に理解し合い、つながり合い、高めあった。皆が一つの目標、共同の幸福を有していた。―― カルロスは自分の父親に対する永遠の抵抗を誓った。ヒオルトは自分の妹を守ることを誓って叫んだ。「とうとう時の空の宝角が、これまで響きしかもたらさなかった宝角が、再び花々を吐き出す。―― 女達よ、何とほとんどの男達は卑俗で、日常の輩であることか。しかしほとんどすべての女達は新しい」。―― 微笑んでガスパールは言った。「その逆のことを女達は、我々男性達と自分達について言っている」。―― 楽しく平和裡に第二幕は終わった。

「お転婆」とスペイン人は叫んで、右手を高く空中に突きだした。

「人間は」（と音色の中、黒い黒丸鴉は始めた）「短い、その幸福は更に短い。しかしもっと早く友人はその言葉と共に死ぬ」。――

第三幕がすぐに続いて、芸術的魔法の絶えざる継続で、―― この継続はすべての芝居、すべての読まれた芸術作品にあって然るべきものであるが、―― すべての散文的冷たい驚きを止揚した。湖上の黒丸鴉の不思議な語りに対する驚きをも止揚した。大柄の美しい誇り高い女性が現れた。―― アテナイス（商人の妻で、ロケロルの愛人によって演じられていた）は、かつての女友達のリーリア、自身「小さなアテナイス」と呼んでいたリーリアに対して希望を一杯に抱いていて、先の時代の夢を甘美に後追いで夢見ていた。リーリアは二重の涙と共に彼女の両腕の中に沈んで行った。アテナイスはその手に実際三つの天国と三つの地獄とを運んでいた。「あなたがまたいらしたのは何と素敵なことでしょう。―― 可哀想なお兄さん」とリーリアは小声で言った。「その名は言わないで」（と彼女は気位高く言った）「あの方は私のために死ねても、私はあの方のためには生きられません」。―― ここでカルロスがリーリアの所に飛び込んで来た。―― 飛びながら硬直し、―― 気を取り直し、リーリアに近付いた。リーリアは言った。「サレラ伯爵様、―― アテナイスです」。―― 彼は青ざめて、アテナイスは赤くなった。痛々しく窮屈

*1 ロケロル宛のアルバーノの手紙からのある箇所。『巨人』、第一巻、232頁。[拙訳 150頁]

な混乱に三人は巻き込まれた。蜜の滴がそれぞれ茨の垣から取って来られた。リーリアは慄然として自分の幸せと愛に対するアテナイスの突然の勝利をますます強く感じて行った。アテナイスが退出した。愛し合う両人は互いに長いこと震えて見つめ合った。「私の言う通りでしょう」とリーリアは尋ねた。「私のせいだろうか」とカルロスが言った。「いいえ」（と彼女は言った）「あなたは一人の人間ですもの。その上もっと悪いことに、一人の男ですから」。 — 「どうしたらいいのか」、カルロスは答えた。「あなたは」（と彼女は厳かに言った）「一年後ある高台の庭園に行って、見回し、その庭園に私を、 — その庭園に、 — 花壇の下に、 — 深く或る花壇の下に探すことになります。 — どれほど深いかは分かりません」。 — 彼女は狂ったように逃げ去って、歌った。「消え去った、消え去った、愛と命が」。

カルロスは数分間荒々しい目つきで大地に立っていて、鈍い声で言った。「神よ、御身のせいだ」、そして去った。 — そして友に出会った、友は性急に楽しげに叫んだ。「彼女がやって来た」。 — しかしカルロスは気位高く更に急いで、ただこう叫び返した。「今は会えない、ヒオルト」。ヒオルトの許に泣きながらリーリアがやって来て、彼を連れ出した。「いらっしやい」（と彼女は言った）「墓標は見ないことです。私ども二人は余りに不幸です」。

そこへ老サレラがアテナイスと登場した。 — 氷と炎の間で掴みそこなって、自らの冷たい貨幣を温かい貨幣と見なして、 — 男らしく彼女を称え、父親らしく息子を称えた。 — そしてあたかも芝居の中でのように[!]、息子本人が来たとき言った。「息子よ、ここにおまえに」（と彼は言った）「おまえの幸せを紹介する。おまえがその幸せに値するのであれば」。カルロスはリーリアの心を失っていた。 — 父親の願望、愛する美人の全権が彼の前に立っていた。彼の憧憬、この女神に対する残酷さの考え、そして遂にはその太陽の間近に立っていた彼の中の一つの世界が、双方の一つの誠実さに打ち勝った。 — 彼は彼女の前に跪いて、言った。「私が幸せになっても、私のせいではありません」。このカップルは一方の側を去った。サレラは別な側を行き、リーリアに出会った。リーリアの手を取って、サレラはこう言った。「貴女は我が家と息子の女友達として、アテナイスによる我が家と息子の最新の幸福にきっと衷心からの関心を寄せられよう」。

— このように第三幕は終わって、それでアルバーノは不当な、すべてを曲解する当てこすりを感じて、ロケロールにただ悲劇的剣のこの暗殺的振り回しについて釈明を求めようという結末への憤った願望に燃え、満たされた。「このパトロンは」（と笑いながらガスパールは言った）「私をも描き込もうとしているな。しかし私をもっと粗野な色合いにして欲しいと願っている」。

第四幕が始まる前に、スペイン人は左手を挙げた。黒い黒丸鴉は早速語った。「罪は罪を罰し、敵は敵を罰する。愛は制御がきかず、復讐も制御がきかない。 — 見給え、今や誰からも愛されない人間がやって来て、自らの傷と自らの怒りを披露する」。 — ヒオルトが立っていた。自分の頭を引きずり下ろした墓の前に立っているかのように、 — 果てしなく泣きながら、飲みながら、 — 音楽の穏やかな夕べの音色が散った人生と融合した。 — 「そういうわけか」（と彼は深い、痛みのある胸から叫んだ）「いい加

減投げ棄てよ。人生の二本の最後の薔薇を*1、 — それらの中には余りに多くの蜂と棘が差し込まれている。 — それら[愛と友情]はおまえの血を吸い、おまえに毒を与える。

— 何と私は愛したことか。向こうの全能の方よ、私は何と愛したことか。御身を愛したのではない。 — 今や私は空虚に、貧しく、冷たく立っている。何も、何も私には残っていない。たった一人の心も、私自身の心も残っていない。 — これはすでに墓の下にある。 — [ランプの]芯が私の人生から引き抜かれた。人生は暗く流れ去って行く。

— 汝ら人間よ、汝ら愚かな人間よ、何故汝らは、まだこの地上に愛があると信ずるのか。私を見給え。私は何の愛も有しない。 — 多分愛の一つの多彩な蜃気楼が、一つの虹が移って行き、我々揺らめく雲の下で、あたかも雲を結び付け、担っているかのように確固と掛かっているのであろう。 — たわけたこと。虹も雲であり、落下ばかりだ。

— 最初は多彩な喜びの雫が輝くが、次には黒い雫が音を立てる」。 —

彼は黙っていた。 — ゆっくりとあちこち歩いた、 — 真面目に内部の幽霊どもの出陣踊りや仮面踊りを見守って、 — 立ち止まり、 — 黒い行為の影が彼の周りで交錯して戯れた。 — 当然彼は激した。ある考えの稲妻が彼の心の中へ差し込んだ。 —

彼は走り回り、叫んだ。「音色よ、鳴り響け。忌まわしい音色よ、鳴り響け」。 — そしてドン・ジョヴァンニからの、これまで彼の伴奏をしていた婚礼の音楽が、驚きの悲鳴を上げた。 — 「神々しい」と彼は言った。ただ個々の言葉が、ただ虎斑だけが、消えながら、側を通り過ぎて行く怪物の許に現れた。 — 「忌々しい。 — 薔薇のような生、花々のような生、 — それが今は、 — 私は自ら雪崩に巻き込まれ、転げ落ちよう。 — それから立派に私の微睡みの島で死ぬのだ」と彼は穏やかに疲れて結んだ。

「リーリアよ、私の頼みを聞いておくれ」と彼はやって来る妹に向かって叫んだ。「私の死の妨げとならない頼みなら何でもいいわ」と彼女は言った。彼は自分の頼みを述べた。彼女の女友達のアテナイスを今この夜こう言って島の「夜の植込み」に来るよう説得して欲しい、と。つまり彼女の新郎のカルロスがリーリアについて今日のうちにも二つの秘密を話したがっている、と。 — 「私は」（と彼は言い添えた）「カルロスと同じ声だし、彼女と一緒に自分の愛している心を語るのだ。それから彼女が私のことを愛したら、ヒオルトと名乗るのだ」。「それ本当の頼み事」と妹は尋ねた。「明日も生きていたいと本当に思うように本当のことだ」と彼は言った。「その頼みならすぐに実現するわ。アテナイスは丁度私を夜の植込みで待っているのだから。 — 私の後、七分後に来さえすればいいのよ」。彼女は行った。彼は彼女を見送り、自分と語った。「急げ、天国を予約しろ。美しい微睡みの島よ、新婚の部屋の寝場所であると同時に永遠の眠りのための寝場所だ。私と彼女の心の間には何と短い数分しかないことか」。 —

「汝はいるだろうな」と彼は言って、自分のピストルの方を見た。 — 「今や」（と彼は退出しながら厳かに叫んだ）「薄明かりの行為への時だ。その後では経帷子がその上に掛けられる」、そして素早く植込みの中へ行った。

スペイン人は川に小枝を投げた。黒い黒丸鴉は小声で言った。「幸福は静かである。死も静かである」。

*1 愛と友情

「この人間は」（とガスパールは言った）「芝居全体の中に何か本当に真剣なものを有する。本当に我々皆の前で自分を射殺しないか保証の限りではない」。 — 「有り得ません」（とアルバーノは驚いて言った）「そのような現実に至る力を彼は有しません」。しかし彼自身このような不安な可能性から本当に逃れることはできなかった。

惑乱して、性急に、髪を乱して、ヒオルトは戻って来て、小声で言った。「事はなされた、 — 私は浄福であって、 — 誰も私の後ではそうなれまい」。 — 「黄色の服の女性にかけて、 — 今この夜、私は何も保証しない」とガスパールは言った。アルバーノは赤面した。破廉恥な推測に恥じて、それ以上にロケロールの破廉恥に、芝居の中で聖なる恋人を陵辱し、誘惑するという破廉恥に、怒っていた。「音色よ、鳴り響け。しかし優しい、立派な音色よ、鳴り響け」と彼は叫んで、調和の西風を漂わせて、絶えず「葬送の酩酊」を、あるいはワインを飲んだ。両方とも騎士にとっては厭わしいものであった。騎士は飲酒を嫌い、音楽を避けていた。これらは双方とも軟弱にするからであった。

彼は芝地に横になって、ピストルを傍らに置いて、どもりながら言った。「かくて私は、私の燃え尽きた生の温かい灰の中にいる。 — やがて私の冷たい灰が加わる」。 — （彼は柄付き両眼鏡を目に押し当てて、きらきらとリンダの方に目を向けた）。「私は彼女を心臓の許に抱いた、神々しい美人を、私の永遠の愛を抱いた。私のチューリップは、今や夕方蜂の上で閉ざして、花の萼の中でその蜂が死ぬようにしているが[487頁のリンダ]、 — 私は私の夕べの薔薇の上に休らっていて、死ぬことになる。 — 優しいあの方をまだ浄福に見つめている。 — 私は後悔できない、 — 哀れなカルロスよ、ただ許しておくれ。私は科を血で帳消しにする、 — しかし懺悔の涙では帳消しにできないものだ。 — 永遠の岸辺で、時がこの岸辺で洗い消すものが再び付着することがあったら、私はあの世で悪いのであり、今と同様あの世の私を変えられない」。 —

この時町では、逃亡兵を知らせるために、大砲の射撃が行われた。彼はピストルを手を取った。「いや、そうだ。射撃は逃亡兵のことで。 — この現世からの逃亡兵も意味する。 — 東に鋭い利鎌^{*1}が昇って、生命を砕くならば。私は疲れた」。彼は東の空の方を見た。しかしすでに小さな雷を発している雷雨が月の門の上に覆い被さっていた。彼は苦々しく微笑んだ。

「運命は最後のこの小さな喜びも私には恵んでくれない。私はもはや月を見られない運命だ。 — さて多分私は月や雷雨より高い所に行くことになる。 — ただ死の私の愛しい観客や聴衆が雨のせいで追い散らされてしまう。よろしい、汝が空になったら、私も空になる」と彼は瓶を示した。

「荒々しい、厭わしい音色よ、深みから鳴り響け。 — 私の血塗られた花嫁服を持って来い。時が来た、去りゆく喜びは、長い、伸びゆく影を背後に投げかける」。アルバーノとユリエンネは凝固して、彼にもたらされた小さな服が、仮装舞踏会の時着ていた血の染みた服であることを知った。彼が少年のときリンダの前で自殺しようと思ったときのものであった。「それを私の冷たい胸に置いて貰おう」と彼はファルテルレから受け取ったとき言った。雷はますます間近になり、稲妻はますます輝かしくなった。雷雨の雲が次

*1 三日月のこと。

々に湧いてきた。彼はグラスを素早く何度も飲んだ。「私には何も危害は加えられない」
（と彼は言った）「木々の下にいるとはいえ、稲妻も格別大したことはない。 — この筒にはすべての閃光に対する一つの閃光が詰まっている。真の避雷針だ」。 — 天候の急速な変化で、彼は観客を考えて、目的へと追い込まれた。彼は自分の舞台準備に対する偶然の嘲笑に対して怒って興奮していた。

「この雷雨ほど楽しく、似つかわしいものは何もないな」（とガスパールは言った）「しかし語りと待機で彼はかなりご機嫌に見える」。他の観客はこの場面で痛々しい思いがしていたが、しかし誰も離れなかった。共演者には射撃を合図とするよう、それより早く来ないよう命じられていた。彼は言った。「死の蛇が間近でがらがら言う。 — 向こうの未来では死者が漂って来る」。 — 人々は彼が、ごちゃ混ぜに即興で、雷雨に苦しめられて話すのを聞いていた。彼はピストルを見つめた。「汝の眼差し。 — かくて人生の眼差しがなされて、再び瞼の下にいる。 — 一つの閃光、唯一の閃光が生ずれば、劇のカーテンは燃え上がる。私は観客が、霊が立っているのが見える。 — いややはり何も見えない。そして世界の広大なエーテルを永遠の重たい雲が満たす。 — このように私は永遠の死の海辺に立っている。かくも黒く、静かに、広大に、深く海は私の下に横たわっている。一歩進めば、私はその中で、永遠に沈む。 — 構わない。私は生前からその中を泳いでいたのだから。 — さてさて」（と彼は言った。雨がぼつりぼつりと降ってきた。そして彼は最後のグラスを飲んだ） — 「雨は哀れな冷たくなって逝く者を冷たくさせる。 — 良き仲間よ、今は何か穏やかなもの、美しいものを演じ給え」。 —

その後彼は銃の撃鉄を起こして、立ち上がり、泣きながら言った。「ご機嫌よう、素敵な苛酷な人生よ。 — まだ上から見下ろしている御身ら対の美しい星座よ、 — 御身らの許にもっと近付きたい。 — 御身、神聖な地球よ、御身は更にしばしば震えることだろう、しかし御身の中に眠る者は、もはや共に震えることはない。 — 私を愛してくれた御身ら立派な遠方の人々よ、そして私がかくも愛した間近な人々よ、私よりお達者で。私のことを余りに過酷に弾劾しないでおくれ。私は自ら処罰するのだから。神が間もなく私を裁く。 — ご機嫌よう。親愛なる私の侮辱された、しかしとても苛酷なアルバーノよ、そして御身、死の時まで熱く愛されたリンダよ、私を許しておくれ。そして私のことを泣いておくれ」。 —

「リアーネよ、まだ生きているなら、おまえの兄の最期の時を加勢して、私のために神に請うておくれ」。ここで彼は素早く銃を額に発射して、崩れ落ちた。砕けた頭から若干の血が流れ出た。彼は今一度息をして、それからもはや息をしなかった。

ブヴェロは役に従って飛び出て来て、役を始めた。「たった今、親愛なるヒオルトよ、我がカルロスは考えたのだ」。しかし死体を前に後ずさりして、どもって言った。「シカシ。 — 神様、彼ハ本当ニ自殺シテシマッタ。 — 畜生、死ンデイル。 — 誰ガ私ニ支払イヲシテクレルノカ」。 — リンダは気を失って、ユリエンネの胸元に沈んだ。ユリエンネはどもって言った。「罪人で、自殺者だわ」。 — 侯爵夫人は怒って叫んだ、「裏切り者」。 — アルバーノは大声を上げた。「カールよ、カールよ」、そして湖の中に飛び込み、泳いで渡った。 — 無残な形姿の上に身を投げて、泣きながら嘆いた。「私が知っていたのであれば。 — 兄も妹も死んでしまった。 — 私のせいだ。 — 私は不幸なままでおれば良かった。 — カールよ、カール、許しておくれ。 — 私は君

の敵ではなかったのだ。 — 偉大な神殿よ、何と情けなく壊されていることか」。 —

「もっと落ち着きなさい」（とガスパールは言った。 — 彼はようやく小舟に乗ってやって来て、解剖学的冷淡さと好奇心とで毀損のすべてに耐えていた）。 — 「彼には連隊の借金があって、新しい統治での調査を恐れていたのだ。 — 今はそれでも彼に敬意を払おう。彼は自分の性格を本当に遂行したのだから」。

アルバーノは起き上がって、苦悩に麻痺して言った。「誰がそのことを話したのだ。 — 情けないブヴェロ殿、貴殿は借金だけを言っている」。 — 「伯爵殿」とブヴェロはむっとして言った。「私が言ったのだ」とガスパールは息子に言った。 — 「ディーアンよ」（とアルバーノは叫んで、手をディーアンの方へ差し出した。ディーアンは泣いているカリトン自ら泣きながら支えていた）、「こちらに来ておくれ。包帯を試みよう。助かるかもしれない」。

自分の岸边に留まっていた狼狽した侯爵夫人の許に、芸術顧問官のフライシュデルファーはこう言って近寄り、気を逸らそうとした。「芸術という単なる側面から考えますと、この状況を効果的に借用できようかという問題が生じましょう。天才的なハムレットの場合と同様に、芝居の中に一つの芝居を織り込んで、中の芝居の中で、見せかけの死を本当の死としなければなりません。勿論そうなるも単に見せかけの見せかけで、現実の芝居の中の戯れの現実性ということになりましょう。何千倍もの素晴らしい反省です。 —

しかし今雨が激しい」。 — 侯爵夫人にハルターマンから何かが耳打ちされた。 — 彼女は激昂し、両腕と声を上げた。「人非人、人殺し。 — 哀れな、無実のギボンが、 — 何という怪物でしょう」。 — 猿の殺害を彼女は聞いて、身も世もなく別れた。

突然深い青空の中に、雲のない月が懸かった。誰もが月に気付いたが、しかしその前の雨のことはフライシュデルファー以外には誰も気付かなかった。アルバーノは今や、亡き目と、白い硬直した唇をまじまじと見た。「いや、動くことはない」と彼は言った。するとロケロールの胸と鉄の唇からかのように響いてきた。「静かにし給え、私は裁かれる」。そして早速黒丸鴉が最後の幕の結末のコーラスとして始めた。「哀れなこの者は今やしっかり休む、棺を覆ってよろしい」。 —

ガスパールは彼の弟をとても真面目に見つめた。「神かけて」（と弟は答えた）「彼の台本にはそう書かれているのです」。

星座全体が晴れ上がった。一行は家に帰った。アルバーノとディーアンはカリトンと一緒に死体の側に残っていた。

第三十三ヨベル期

アルバーノとリンダ — ショッペと肖像画 — 蠟人形陳列室 — 決闘 — 精神病院 — ライプゲバー

第百三十一周

アルバーノはその翌日閉じ籠もって、激しく泣き、懺悔しようと思っていて、愛の陽光によって爽やかな気分になろうとはしなかった。しかし夕方自分の机の上に次のような見知らぬ筆跡の手紙を見いだした。

「伯爵殿、ここにお知らせしますが、金曜の夜、貴方が旅なさっていたとき、故 R.フォン・フルレ大尉は貴方の配役をロメイロ伯爵令嬢の許で、全幕を通じてフルートの谷で演じられました。貴方は恋敵達故に、自らには別の声を、伯爵令嬢には夜の目を用意なさる必要があります。もっともこのようにしてよく貴方のことで欺かれることは、伯爵令嬢にとっては、全く不快なことではないかもしれません。ご機嫌よう。将来はもう少しより謙虚にお過ごしください」。

彼は、二本の巨人の手が強引に花と咲く青春の肢体から突然取り出して高く掲げた骸骨を、青ざめて見つめた。しかし苦痛の炎が素早くまた放出され、周囲の嘆きを照らし出した。痛々しい力と出血する両腕とで、彼の精神は、この岩のように重い考えを、自分の人生の墓石をあちこち投げ返して、この考えが墓穴に収まるか吟味した。ー ロケロールの芝居と結末と人生の全体の中にこの嘆かわしい考えはとてもふさわしく合致した。ー しかしまたリンダの性格と、彼女と一緒にリアーネの庭園で直近に過ごした神々しい瞬間とは合致しなかった。ー しかしまた彼女の素早い和解と個々の言葉とは合致した。ー そしてそれでもひょっとしたらこの有毒な手紙は単に復讐心の強い侯爵夫人の果実[結果]かもしれなかった。ロケロールの自殺と猿殺害についての夫人の怒りはディーアンが彼に語っていたのであった。

かくも痛々しく自分の傷の上をあちこちさまよっていて、今晚にもリンダがどこにしよう、リンダを訪ねようと決意したとき、彼は彼女から次のような短い手紙を貰った。

「今晚是非エリュシオンの私の所へお出でください。きっと陽気なことになるでしょう。今度はあなたが最近なさったように、私が招待します。美しい山々へ私を案内してください。ただあなただけが御覧になり享受できれば、私には十分でしょう。ユリエンネには用が少なくなりつつあります。あなたの父上は、今日聞いて考えて頂く提案での私どもの婚姻を迫っておられます。ー 是非お出かけください。ー 私の心の中には意地悪な悲劇に対する多くの鋭い涙が残っています。この涙を別な涙に変えてくださらなくてはなりません。恋しい方。

盲目の女」。

彼は「変えて」に笑ってしまった。「むしろ凍った涙だ」と彼は言った。熱い愛は彼にとっては傷に対する激しい接吻であった。彼はリラルへ行った。鈍く、急いで、邪悪な天候に対抗するかのように深く赤い外套をまとって、ー 自らと世界に対して盲いて、聾となって、ー 瀕死の人間のように、破滅して息を吐き終わるのか、神々しい世界に新しく生气付いて飛び込むのか、その瞬間を待っていた。

彼がリラルに足を踏み入れると、最近のように庭園は乱れていず、単に消失していた。彼は何人かの覆面をした人々の間近を通り過ぎた。彼らは墓を造っているように見えた。「不当なことだ」（とその中の一人が言った）「奴はどんな家畜も同様に皮剥場がふさわしい」。アルバーノが目をやると、覆われた死骸を見て、戦慄しながら、自殺者かもしれないと思ったが、二番目の墓掘り人がこう言うのを聞いた。「猿でも、ペーター、衣服で

上品に扱われると、幾多の人間よりももっと尊敬すべき者に見えるものだ。きちんと洗礼さえしてやれば、奴もまた死者達の中から蘇ると思うぞ」。 —

丁度ここに埋葬される侯爵夫人のギボンがかの雷雨の金曜日を彼の魂の前に引き寄せたとき、彼は夢の神殿から程遠からぬ所で、ある目に見える侍女の腕にすがっているリンダを見つけた。彼女は彼に、他人の前での彼女の流儀で、ただ軽く挨拶して、侍女に言った。「ユスタ、ここ夢の神殿にいて頂戴。私はここをあちこち歩くから」。

夢の神殿から見える所にこう限定することで、彼女は愛のすべての目に見える美しい印を締め出していた。アルバーノは彼女にすでに恋人と単に一緒にいることへの静かな満足を承知していたし、時折彼女の甘美な口の荒々しさも承知していた。彼が彼女を震えながら触れて、自分の間近で再会したとき、この女性はすべての神々しい過去の威力に満ちて迫って来た。しかし彼はためらわず地獄の質問をした。「リンダ、誰が金曜日の晩あなたの許にいたのかい」。 — 「誰もいないわ。いつ」と彼女は答えた。 — 「フルートの谷で」 — と彼はどもって言った。 — 「私の盲目の娘よ」と彼女は静かに答えた。

— 「他に誰が」と彼は尋ねた。 — 「あなたの調子で不安になるわ」（と彼女は言った） — 「ロケロールがかの夜猿を殺したのよ。あなたは出会わなかった」。 —

「恐ろしい殺害者だな。 — 私が出会ったって」（と彼は叫んだ）「私は一晩中旅していたのだ。あなたとはフルートの谷で会っていない」。 — 「すっかり話して、ねえ」（とリンダは叫んだ、両手で彼を激しく掴んでいた）「あなたは旅を取り消すと書いて来て、来たのではなかった」。 — 「何も、何もしていない」（と彼は言った）「真っ赤な嘘だ。亡き怪物のロケロールが私の声を利用して、 — あなたの目を利用して、そういうことなのだ。 — 残りを話しておくれ」。 — 「イエス様、マリア様」と彼女は叫んだ。雷に打たれて、その中に黒い雲は散って行った。 — そして両腕で木陰道の植込みの枝を掴んで、それを抱き締めて、請うかのように言った、「アルバーノ、あなたが私の許にきつといたのでしょうか」。

「違う、全能の方にかけて、違う。 — 残りを話しておくれ」と彼は言った。 — 「私から永遠に去ってください。私は彼の未亡人です」と彼女は厳かに言った。 — 「仕方ない」と彼は苛酷に言って、夢の神殿からユスタを呼んだ。

「あなたの痛み、私の痛みは生き続けることになる。あなたに二度と会うことはないだろう。あなたにはご機嫌ようと言うつもりだ。私には言葉をかけないでおくれ」と彼は言った。彼女は黙っていた。そして彼は去った。ユスタがやって来た。彼は彼女がまだ植込みで祈る声を聞いた。「神様、明日もこの闇をください。御身の日中の明かりをこの黒い未亡人に免じてください」。少女は彼女を起こして、彼女の手を取った。彼女は娘の腕にすがって、自分の夜盲症を喜びとした。

アルバーノは夜の中を行った。突然彼は上に運ばれたかのように険しい岩の先端に立っていて、下に泡立つ奔流が音を立てていた。彼は向きを変えて言った。「邪悪な守護霊よ、汝は間違っている。自分には反吐が出る。自殺は余りに容易で、猿殺害者にふさわしい。

— しかし何かより良いものがある。汝が私の伴をして欲しい」。

彼は道に迷った。 — 町への道を見いだすことができなかった。 — またリラールに戻っていると思って、出口を見いだせず、不安げにさまよって、とうとう疲れて微睡みの腕に引き込まれてしまった。彼が朝目覚めたとき、彼は「皇子の庭園」にいた。微睡み

の島が彼の前で風にそよぐ梢と共にあった。引き掠る奔流の上の険しい岩の先端は風景全体の中に見当たらなかった。

彼は天と日中と自分の心を見つめた。「いや、人生とか愛はそのようなものだ」（と彼は言った）「立派で、正当な花火だ。殊にリンダのような女性を多くの準備を経て得るべきとなれば。長いこと多彩で高い見本の足場や沢山の彫像、かなり小さな建物や柱や、不思議が見られて、すでに変装し、暴露しているものより更に多くが約束される。ー それからイスキア島での夜があつて、火花が飛び、様々な形状が千切れ、白く明るい宮殿やピラミッドが漂い、天には吊り下がった太陽の町が見られる。ー 夜風の中で、星々の間で、強引に活発な飛翔する世界が展開し、目と哀れな心を満たす。そして幸せな精神は、自ら天の地の間の一つの炎であつて、一緒に漂う。ーー 全く一瞬の間で、その後はまた夜と砂漠で、朝には足場が残っている。愚かに黒く」。ー

第百三十二周

「戦争だ」ー この言葉だけがアルバーノに平和[安らぎ]を与えた。学問と詩文はその花々をただ彼の深い傷の中に差し込んだ。彼はフランスへの旅の準備をした。ただあることのせいで出発が延期された。ショッペの不在で、彼はショッペをその謎と共に待機しなければならず、できれば一緒に掠って行きたいと思っていた。彼は一日中森の中に留まっていて、彼の父やユリエンネ、そしてすべての人々を避けた。リンダの不幸な夜が深く彼の胸の中に落とし込まれていた。そして彼一人だけが下を覗いていた。他人は誰もそうしていなかった。彼はリンダ自身がユリエンネに対して黙っていることを願っていた。ユリエンネは自分の敬虔な女性的修道院規則に従って、大目に見ることはなかったからである。彼の魂の中では今や最初の嫉妬の憤慨は、聖なる神殿が荒らされたままの欺かれたリンダに対する痛々しい同情に席を譲った。彼の心をどうしようもなく痛めたものは、屈辱の感情で、この感情と共に美しく気位の高いリンダは、彼の思うに、彼のことを考えているに違いなく、この感情を彼は今の、ロケロールに対する辛辣な軽蔑の際に一層強く想定することになった。「決して、彼女がたとえ私の妹であろうとも、我々が再会することは許されない。彼女が私の前で血を流す様を私は見ておれるが、屈服した彼女を見ることはできない」と彼は自らに言った。時折彼は厄災に対する冷たい憤怒に襲われた。この厄災はいつも素早い旋風と共に彼の抱擁の間に割り込んで来るもので、すべてを散らしてしまうものであった。ー あるときはリンダに対する怒りが湧いた。リンダはリアーネのように行動せずに、混同の錯誤を、愛にはすべてを許すという彼女の原則のせいで、自ら共に引き寄せることになったのであった。ー あるときは衷心からの同情が湧いた。彼女が何の精神的類似性もなしに混同することは有り得なかったであろうからで、良心の秘かな判決は彼にそう告げていたし、彼女一人が今や、自分が自らを彼に捧げようと思ったそのことの償いをしていたからである。

言いようもなく、彼は亡き誘惑者を憎んでいた。彼の行為のせいで彼の死は単に臆病な逃走となってしまったからである。悲劇のときその逃走が音高く知らされた哀れな逃亡兵は、捕らえられて彼の前を通り過ぎて行った。しかし悲劇の大尉は永遠に復讐から逃げ去っていた。数日してこの死者の書類が彼の前に出された。しかし彼はそれらに対し嫌悪感

で一杯になって、目を通さなかった。それらは正当化を含んでいると同時に追加の罪であった。ロケロールは歓喜の夜の後、朝方ずっと「皇子の庭園」で執筆して過ごし、思い出に彩色を施していた。この思い出のみが、自分がすでにその夜に人生の第五幕を演じ終わることのないよう自分を説得し、自分の報酬となったと彼は記していた。

講師はアルバーノが不在の間ユリエンネの短い手紙を渡していた。その中で彼女は姿を見せるよう頼んでいて、リラルから引っ越した先の宮廷での場所と時を指定していた。彼は行かなかった。彼の父は彼のことを何も構っていないように見えた。時折、あたかも遠くの勘の鋭い者達が彼を広範囲に見張っているような気がした。

あるとき夕方まだある森の丘の下にいるとき、上から歩み寄って来る狼を見つけた。一 狼は彼を見て、飛んで彼の許に降りて来て、ショッペの狼獾の犬と分かった。一 やがて上の方で友人自身が、一人の老人と共に木々の間から出て来て、一 彼を見つけ、その老人に素早く金を渡して、彼がその友人の許に上がるよりもゆっくりと彼の許に降りて来た。「おや、今晚は。アルバーノ」とショッペは昔ながらの冷たさで言った。書くときではなく、語る時この調子で、そして多くの皺を見せて微笑した。それでアルバーノには全く他人に見えた。アルバーノは激しく胸に抱き締めて、ショッペの好まない熱い言葉を熱い涙に変えた。それはまだ彼のリアーネが生きていて、愛していた春の朝からの昔の星であった。その星はかの旅の夜、ある墓の側で沈んだのであった。今やその星が上がった。そして彼はまた不幸であった。

ショッペは明らかに満足そうにアルバーノの成熟した姿を見ていた。そしてさながらアルバーノの微笑を発する翼を広げて見るようにした。「君は」（と彼は言った）「本当に良く育ち、色づきが良くなった。一 一本の太枝に、橙の木のように五月と八月を有している」。アルバーノはそのことを全く喜ばなかった。「兄弟、あなたのこれまでの生活を話してください」と彼は言った。一 「思うに、まず君の生活を話しておくれ。疲れて馬鹿になってしまった」とショッペは言って、腰を下ろし、獲物袋の締め金を外した。「後でね」（とアルバーノは言った）「あなたが必要とするものを、語っておくことにしましょう。一 私はあなたの手紙を得て、一 本当に例の女性を愛した。ある不幸のせいで別れてしまった。一 私に科はなく、彼女は偉大です。一 今日のところはこれで勘弁願いたい」。彼は友人達に痛みを訴えることはできなかった。今、ある恋人の女性の不幸をさらけ出すことは更にできないことであった。「もっと詳しく」（とショッペは言った）「言って欲しいが、私が君達の兄と妹の関係の証拠をスペインから持参して来ていて、広げて見せたら、新たな厄災になるかな」。一 「ならない」（とアルバーノは言った）「過去のことで、驚く必要はない」。一 「まだフランスへ行くのかい」とショッペは尋ねた。「あなたが一緒なら、明日にでも」とアルバーノは答えた。

「勿論君の従軍僧専属としてだな。一 君がローマから書き送っているように芸術精神の欠如からではなく、その過剰から君は兵士に加わるわけだ。ダンテも、カエサルも、セルヴァンテスも、ホラティスも立派な文を書く以前には従軍していたということを君が考えているとすれば、喜ばしいことだ。一 ただ学生どもはこれを逆にして、若干短いもの、立派なものを詩作して、その後で従軍している。一 私の旅の話になると、これはえらくかかることになる、つまり時間がかかる。君の巫山戯た叔父をバイヨンヌから一宿駅半離れたオンドルの宿で、一馬車の荷と共に掴まえた次第を話していけばな。私は彼

にこう告白した。自分はヴァレンシアへ行って、当地の絹靴下製造機を解剖し、アイスクリーム一滴とヴァレンシアのアーモンドで一杯のチョコッキのポケットを味わい、そして三千レアル[銀貨]でかなり上等の便覧を供している数少ない教授達^{*1}を歴訪したい、と。自分はきっと私より先に着くと彼は言った。我々はヴァレンシアで同じ旅館を予約した。私には彼が必要であったのだ。彼がいると極めて容易にロメイロの家に案内してくれるからな。しかし二週間無駄に彼を待つことになった。一 家の執事は、彼の影絵を五回切り取って、旅のこの画家に絵画陳列室を開けるよう頼み、伯爵令嬢の母親の像を探そうとしたのに、聞く耳を持たなかったのだ。

今や半ば、腹の大きな妊婦となって、この格好でスペインの王でさえ妊婦には拒まないことすべてを^{*2}、私の憧れのもののために要求しようと決意していた。イタリアでは請い求めるためには、腕に子供を抱くものだ。スペインではこの目に明らかなものすら必要ない。しかし幸い叔父がやって来た。絵画陳列室のドアが開けられた。私は模写に取りかかった。一 愚かな料理絵の模写だが、一 そして至る所、私の島での肖像画を探した。しかしどこにも見当たらなかった。一 (ここで彼は獲物袋から木製のケースを取りだして、自分の前に置き、話し続けた)、「結局 一 一枚の絵が床の上、壁に立てかけてあって、私には冬の側、裏側を見せているのに気付いた。一一 それが私の絵筆の子供で、この冷遇には参った。一 うんざりして、冷静に私はそれを仕舞った。一 そして料理絵を、臭猫を半分描いたところで、終わりにした。一一 御覧、その肖像画だ」。

彼はそのケースの蓋を外した。一 リンダが彼の友に精神と魅力の奔流と共に光り輝いてきた。ただ少し昔風の衣装に包まれていた。アルバーノは動揺の余りほとんど発することもできなかった。「これが私の父親の妻で、私の大切な母親なのですか。この絵が、あなたがイゾラ・ベッラ島でその女性を描いたときの絵であると確証がありますか」。

「まさにお見せしよう」(と彼は言って、心臓の箇所では絵の中の薔薇を擦った)、「薔薇の下に私の当時のパフォス[キプロス等にあるその杜はアフロディーテを祀る]の名前レーヴェンシヨルド[Löwenskiöld]が隠されていて、すぐに現れて来よう。私がすでに途中で引っ掻き出していたら、君達は、途中でまず描き入れたものと思ったであろうから」。一 本当に L と ö の字が薔薇の下に出現したとき、霊の手で書かれているかのようにアルバーノは驚いて後ずさりした。「これ以上は」(とショッペは言った)「掻き出さない。残りは令嬢に見せましょう」。アルバーノは今や彼の武骨な心の友に自分の心をさらけ出した。彼に対してはこう話して、反論することが許された。ユリエンネが自分の妹である、と。「そ

*1 それだけの額を各教授は、かなり上等の文法書ごとに、かなり上等の便覧ごとに、得ている。それぞれ各博士論文ごとに五十ドゥカーテン金貨等々である。テュクセンのブルゴワンの旅、二巻本の付録。[テュクセン、Tychoen(1758-1837)はブルゴワン、Bourgoing の『スペイン旅行』の翻訳(1790)に論考『スペイン文学の現状について』を付けた]。

*2 ある妊婦が例えば国王に会いたいと要求した。国王は彼女が満足するまで、バルコニーに長く出た。

れに対しては何の異存もない」とショッペは言った。 — そしてまたガスパールは自分とリンダの将来の結婚について了承したと反論した。「途方にくれる」（と彼は付け加えた）「彼女が彼の娘ならば、私は彼の息子ではない。 — 私は彼の神聖な誓いの言葉を嘘とすることはできない。 — 何という途方もない悪徳の沼を覗き込まなければならないことだろう」。 — 「その言葉と沼に関しては」（とショッペは全く冷静に話した）「余計なことに前もって君の父親とその件について話すことにし、また前もって伯爵令嬢と話すことにするけれども、大方の証明は次のようなことになろう。つまり禿頭が、これは彼が私自身に語ったことによれば、君の父親のミサの助手、花嫁介添人、熊使いであったそうだが、何ら立派な倫理の男ではなく、倫理的鞍を例外にすれば、その他の点では多くの点で立派ではあっても、そのような犬として、追い剥ぎとして行動するような時と世紀とを有していた。そして私の犬の方が彼に比べれば、月々の聖人となり、教会の神となっているということになろう。私はせめて彼の生命の明かりだけは吹き消さずにいるべきであったことだろう。この明かりは微光を発するよりも悪臭を放つものであったけれども」。

アルバーノは、彼にその行為に対する自分の戦慄を隠すことができなかった。「私は何も後悔していない、聞き給え」とショッペは言って、こう報告した。「すでにヴァレンシアで君の叔父は私にこう語ったのだ。自分はマドリッドでかくかくしかじかの男、 — 全く禿頭のような者に、 — 出会った。こ奴は全く狂人だけの蠟人形陳列室を持ち運び見せていた。しばしば陳列室全体が話しをし、こ奴自身がその中に蠟人形として座っていて、話すのを手助けしている、と。 — 君の迷信深い叔父はこ奴のために幽霊を求め、貸し与えていて、邪悪な恐ろしい事を造りだしていたのだ。

かつてある旅館の寝室で、私は私の部屋の隣から色々な声が入り乱れてつぶやき、こう話すのを聞いた。『ショッペも我々の所に来るぞ』と。私は起き上がった。別な部屋は閉まっていた。私は悪魔的なそれをまた聞いた、『ショッペも入って来るぞ』と。私の部屋には出窓があって、そこから私は近くの窓越しにつぶやきの部屋の中を、月明かりの下、見る事ができた。恐ろしいことに全ての蠟人形がその中に座っていて、声を出していた。蠟製の禿頭がその中にいた。しかし私は生きた禿頭を探していた。蠟の野郎どもは互いに固定観念のやり取りをしていて、私をその中に混入していた。 — 『あそこで我々の名誉会員が中を覗いているぞ』と蠟の禿が言った。 — 何ということだ、手短かに言わなければならないが、また私の心の中を血が騒いだ。 — 私は怒り、銃を取って来て、神に、大目に見る寛恕の心を請願した。不幸にして、私は背後の月の光の当たらない出窓の中で、蠟製の一人の神父と妊婦の隣に、動く黒い外套に気付いた。外套の中から生きた腹話術師、禿頭が覗いていた。『黒い腹話術師め』（と私は叫んだ）『後生だから、黙っておれ。私はおまえがその背後にいるのが見えるし、発射するぞ』と。 — 私はそれを腹話術と思ったのだ。

今やまず精神病院が本格的に始めて、そこが高笑いするのを耳にした。 — 私を中へ呼び寄せて、同僚とかクラブ員と私を呼んだ。 — 『座長』（と私は言った）『私は周知のように一人の人間で、おまえがはっきり見える』。 — 何の甲斐もなかった。蠟製の禿頭はそれどころかこう答えた。『向こうに同志ショッペが座っている』と。私は実際私もそこに象られているのを目にした。 — 『こちらにもいるぞ』と私は怒って叫び、フリーメーソンの親方目がけて発射した。奴は血を出して倒れた。

私はこのとき、ずらかった。 — 後で叔父には短時間不意に出会った。彼は狂人を恐れて、私自身がその中に加わるのを心配して、長くは私を引き留めようとしなかった。彼は私に、巡回の蠟人形の監督に出会わなかったか尋ねた。私は彼を余り信用できなかった。

— これは内緒に頼むぞ。 — 「あなたは、荒々しい誠実な人だ」（とアルバーノは、彼を抱き締めようと心から願って言った）「あなたは他人のために大いに尽くされ、自分のためにも大いに苦勞されている。私は今やあなたを放っておけない。私の以前の生命の島はすべての花々と共に深く海の下にある。私は無限の世界の海に身を投じなければならない。あなたの手を与え給え。一緒に泳ごう。明日フランスへ旅しよう」。 —

「明日だって」（とショッペは言った）「よろしい。それでは今晚伯爵令嬢の所へ行き、それからドン・セサラの許へ行こう」。 — 「令嬢に言い給え」（とアルバーノは頼んだ）「仮にそうだとしても、兄としても訪問はしない。冷淡さからではなく、私は彼女の偉大な心情を尊敬しているからだ、と言い給え。 — 神の御加護がありますように」。アルバーノは行こうとし、彼を一人で間近なリラルルへ歩いて行かせようとした。「いや、頼むから同伴しておくれ」（とショッペは性急に言った）「私は向こうの森の中で同伴料を実直に支払って、あの老公を首にした。 — 今や、一人で自分に向かい合うことになる」。 — 「何を言っているか分からない」（とアルバーノは言った）「何を恐れているのですか」。 — 「アルバーノ」（と彼は小声で、大事に言った。そして彼の以前の真っ直ぐな視線は臆して斜めを向いた。そして彼の微笑の口許に無数の大きな皺の輪が取り巻いていた）「自我殿が来るかもしれないのだ」。

びっくりして、それは誰かと尋ねながら、アルバーノは彼の顔を見た。「忌々しい」（とショッペは言った）「貴方らのことは全く良く分かる。貴方らは私のことを貴方ら自身の八分の一の理性も、私には認めず、狂っていると見なしている。狼よ、こちらへ来い。汝、獣がしばしば一人っきりの道や小道での、自我殿に対する私の保護者、悪魔払いの人であった。 — いいかい、フィヒテとか彼の総代理人、頭脳の従者たるシェリングを私ほど頻繁に冗談から読んで来た者には、仕舞にはそれが十分に真面目な結果になるのだ。自我は、自らと自我殿を、何人かの者が世界と呼んでいるかの残余と共に措定する。哲学者が、何かを、例えば一つの理念とか、自らを、自らから導き出すと、他に何か関心があれば、彼らは残りの宇宙も同様に導き出すものだ。奴らは全くかの酔っ払いの男と同じで、この男は自分の小便を噴水の中にかけるのであるが、一晩中その前に立ち続けることになった。止んだ音が聞こえないからで、従って、自分が引き続き耳にしているすべてを自分のせいにしてきたのだ。 — 自我は自らを考える。これは従って、客・主観であり、同時に両者の休息所なのだ。 — 畜生。経験的自我と絶対的自我とがあって、狂気のスウィフトがシェリダン[Sheridan(1678-1738)]とオックスフォード[Graf von Oxford(1661-1724)]しかし既出注のLord Orreryとの混同、第11の手紙]によれば、その死の直前に言った最後の言葉は、『私は私である』というものだった。 — 十分に哲学的なことだ。 —

「全体何か恐ろしいことを推論するのかい」とアルバーノは衷心から悲しくなって言った。「何にでも私は耐えられる」（とショッペは言った）「ただ自我殿、純粋な知的な自我殿、神々の神には耐えられない。 — 何としばしば私はすでに名前を変えてこなかっただろうか。私の名前の従兄弟、行為の従兄弟たるスキオピウスとか、あるいはショッペとかに、そして毎年別な名前であった。それでも明らかに純粋な自我殿は明らかに私の後を

付けて来る。これが最も良く見えるのは旅のときで、自分の脚を見つめ、脚が歩くのを見、聞き、そしてこう問うときだ。そこの下を一緒に行進しているのは誰だ、と。 — 永遠に彼は私と話をする。彼がいつか体と共に私から昇天するならば、私は弱々しくなって死者のように青ざめる最期の者というわけではなかろう。勿論犬は歯磨き粉を必要としない。しかし子供達には、似合って上手く行くよう化粧する必要があるだろう。私自身としては時代をかくかくと観察し、微笑している。私は何も言わないのだから。人々は人間を皿の上のナプキンのように極上の多種多様な形体に折って、ナイトキャップとかピラミッドとか鶉[イスカ]に仕上げている。畜生、アルバーノ、何にでもそうだろう。しかしその結果は、兄弟よ。 — 何ということだ。その結果はどうだ。私は何も言わない、忌々しい、私は少数の者同様に全く静かだ。 — しかし諸時代がやって来よう。その時には例えばある殿方が気付くのだ。人間と楽譜、楽譜と人間、短くて良くて悪くて、やがてその双方に関して、頭が上になったり、尾が上になったりする、つまり速やかになされるべきときにはな。これは比喩だ、私は良く承知している。良き若者よ、しかしパン屋は柔らかいクッキーを店の岩のようなクッキーや粘土製のクッキーを通じて知らせる。しかし人間どもはその最も硬い事柄を、その中に心が含まれるのであるが、柔らかな事柄を通じて、言葉がその中に含まれているのであるが、知らせるものだ。

この言葉の奔流に対して黙って、アルバーノは彼の手をとって、リラルのリンダの住まいの前まで案内した。この住まいは一切明かりがなく、黒かった。「向こうでは穏やかに話すことだよ、ショッペ。そして明日は更に出発しよう」と別れながらアルバーノは下の方でとても小声で話した。そして彼を暗い喪の宮殿へ一人で行かせた。 — 「何という現在か」とアルバーノは帰路、庭園を通るとき言った。

第百三十三周

翌日長いことアルバーノは自分の友人を待っていた。誰も現れなかった。誰一人彼のことを知らなかった。二日目の朝、伯爵令嬢は夜に、ガスパールは朝方旅立ったという噂が流れた。「ショッペが真実のことを話して、二人を追い立てたのであろう」と彼は見棄てられ、一人つきりになって自分に尋ねた。幾日かショッペを探して無駄であった。姿すら見かけられなかった。「ショッペよ、あなたもか」と彼は言って、自分に対する運命の酷薄さに身震いした。このように自分のことと、自分の人生の静かで暗い砂漠について考えていたとき、突然自分の人生が唐突に照らし出され、一つの太陽光線が流れ去った暗い時の水面全体に落下して来たかのように思われた。彼の中で声がした。「何があったというのだろうか。人間や — 夢 — 青い空 — 黒い夜 — 私に関係なく飛んで行き、私に関係なく飛び過ぎた。浮遊する[蜘蛛の糸の]夏のようなもので、人間の手では紡ぐことも固定することもできない。残ったものは何か。心全体についての広大な悲痛、 — しかし心も残っている、 — 勿論空しいものだが、確固としている。 — 揺らぐことなく — 熱い。 — 愛しい者達は失われている、しかし愛は残っている。花々は落ちたが、枝は残っている。 — 私はまだ欲し願っている。過去は私から未来を盗んだのではなかった。 — まだ私は抱くために腕を有し、剣に置くための手を有し、世界を見るために目を有している。 — — しかし没落したものは、再びやって来るだろうし、再び去

ることだろう。ただおまえに忠実に残るであろうものは、去られるもの、 — おまえのみだ。 — 自由は楽しい永遠である。奴隷にとっての不幸は牢獄での炎の熱情だ。 —
— いや、私は存在しようと思うし、所有したくはない。何とというか、音色の神聖な嵐はほんの埃一つ動かせるものだろうか。一方粗野な動かされた大気は灰の山を移すのではないか。ただ同じような音色や弦や心の住むところ、そこでそれらは穏やかに、目に見えずに、動かす。そのように響き続けるがいい。心の敬虔な弦の演奏よ。しかし粗野な重たい世界では、何も変えようと欲しないことだ。この世界はただ風の言うことのみを聞いて従い、音色には耳を傾けていないのだ」。

このとき彼を講師アウグスティが見だし、講師は口頭で侯爵令嬢ユリエンネの切なる願いをもたらし、自分講師と一緒にガスパールの部屋へ行くように言った。そこで彼女が彼にショッペについて極めて重要な言葉を述べることになるというものであった。彼は容易に同行した。彼のショッペの秘められた運命についてまず彼は彼女の許で解明を期待した。それに使者の大胆な選択から、哀れな妹にとっていかに彼の出現が大事であるか見てとれた。

ガスパールの部屋でアウグスティはすぐに彼から離れて、彼のことを知らせに行き、
— 彼を一人っきりにさせた。彼の生涯の中で今や長い雷が鳴った。雷は天から来るのか、奔流からか、あるいは単なる水車からか、彼はまだ知らなかった。ユリエンネは泣きながら駆け込んで来た。そして心が昂ぶって話せずにはいた。「あなたは去るの」と彼女は尋ねた。「そうだ」と彼は言って、もう少し落ち着くよう彼女に頼んだ。他人の性急さが容易に自分に移ることを知っていたからである。彼は怒ることなしにはチェスすら遊んだり、戦ったりすることができないのであった。彼女は更に激しく、ガスパールがまた戻って来るまでただ残るように彼に哀願した。「彼はまた来るのかい」とアルバーノは尋ねた。「来ないはずはないでしょう。でも身を崩した女性は来ない」と彼女は言った。「ユリエンネ」
(と彼は真面目に答えた)「彼女に対して運命のように酷薄な言い方は止めなさい。 — 私に言わせないでくれ。 — 「私は今すべての男達が憎い、あなたも憎い」(と彼女は言った) — 「それは詩的な情緒からのせいです。 — 実直な花嫁ならこれほど容易にこのような自殺者に眩惑されたことが有り得たでしょうか。どこにいます。 — でもあなたはすべてを承知ではないのですね。 — 「それを知って何になるかい」と彼は尋ねた。

彼女は、この問いかけに驚いて、返事せずに語り始めた。

アルバーノがショッペを見つけた日にユリエンネは、悲劇の晩以来会っていなかった女友達のリンダを再び訪ねようと思った。リラルのすべての部屋が日中に対して密にカーテンが掛けられていた。ユリエンネは彼女が暗闇の中に座っていて、伏せた、半ば開けた目で、外見上は非常に落ち着いているのを見いだした。ただ長い間隔の中で、小さな涙が漏れ出て来ていた。引き掠る奔流は彼女の人生の車輪の上を高く流れていて、車輪はその下に深く静かに止まっていた。「あなたなの、ユリエンネ」(と彼女は穏やかに言った)「暗闇は御免なさい。夜は私の目にとっては今は[救いの]緑色です。何かを見るのは辛いわ」。彼女の存在の婚礼の松明は消え失せていた。今は彼女は夜が続くことを欲していた。

ユリエンネは不審に思って不安な質問をした。彼女はそれに対して返事をしなかった。「あなたと私の兄の間に不幸なことがあるのですか」とユリエンネは尋ねた。ユリエンネ

の中では縁戚が友情よりもますます熱い心配事となっていた。「ただ騎士を待ちましょう」
(と彼女は答えた)「こちらにお出でくださるようお願い出ているのです」。

丁度彼が入って来た。彼女はこの短い夜に慣れてくれるよう頼んだ。若干の沈黙の後、彼女は気位高く椅子から立ち上がった。黒服の背の高い形姿は騎士の前で、この騎士を見ずに、その大きな目を天に上げた。彼女の誇り高い生は、今まで経帷子に包まれていたが、その布をはねのけて、死者の中から花と咲いて起き上がっていた。彼女は騎士に語りかけた。「尊敬するガスパール様、貴方は、私の父同様、この父親は私の結婚式の日私の前に現れるであろうと、約束なさいました。その日は過ぎてしまいました。――私は一人の未亡人です。現れて欲しいと願います」。

ここで騎士が彼女を遮った。「過ぎたですと。――それは結構。その者は一人の人間よりも何か気の利いたもの、倫理的なものかな。――そして彼の流儀に反して、怒って熱くなりながら嘲った。自分が長いこと信頼してきたアルバーノのことが話題になっていると思ったからである。

「貴方は誤解なさっています」(とリンダは言った)「私は亡き人のことを言っているのです」。ユリエンネの前を突然ロケロールの影が過った。侯爵夫人の遠くからの類似の言が彼のことを知らせていた。「全能の神様」(と彼女は叫んだ)「忌まわしい自殺者の芝居は本当なのですか」。――「彼は起きたことを演じたのです」(とリンダは静かに言った)、――「私どもは終わりです。私は旅立ちます。私は私の父親だけを要求します」。

――ここでガスパールは硬直症で石化した腕を、抜いた剣で武装しているかのように、伯爵令嬢に向けた。――暗闇はその姿をより黒々と、より荒々しくした。――しかし彼は死の氷をまた冷たい両手で折り取って、動いて、麻痺した舌でこう答えた。「何とこのことだ。父は来ておる。――父はすべてを、――そのままに、――受け入れることだろう。――彼は承知しているのか」。――「誰のことです」とリンダは尋ねた。

――「それで彼はどう結論付けた。いやはや、つまりアルバーノのことだ」。――ガスパールは情熱に駆られると、舌先のクロムウエルの鈍感さと行為のクロムウエルの抜け目なさを同時に有していた。それ故、どんな激情に対しても、愛の激情に対しても、(彼が言うように)「悪徳そのものよりも自分にははるかに厭わしい愚かさ同様に」不快に思い、遠ざけていた。――

「私は存じません」(とリンダは言った)――「私は私のために二度亡くなった死者一人に属しています。このことを私の父に教えてください。私はどうにもあの人の後を追って行きたかった。かの途方もない人の後を、深い領国の中にまで。私はここで冷たい意地悪な非難やキリスト教的不審の前に晒されていたくありません。人生に対する短剣がまだあるのですから。――しかし私は母親です。だから私は生きています」。――

「今晚のうちにも貴女にまたお会いしよう」とガスパールは落ち着いて言って、急いで去った。「思うに、ユリエンネ」(とリンダは言った)「もはや私どもはお互いに良くは、少なくとも至高の点に至るまでは了解し合えません。丁度以前に貴女の立派な姉上に関して意見が違って、貴女はあの人に媚態を、私はまさに取り澄ましを、偉大で非倫理的なものと思ったようなものです」。――「それは多分本当でしょう」(とユリエンネは冷たく言った)「貴女は本当に詩的で、私はまことに散文的、古風に敬虔です。私をその連隊の金庫同様に残酷に欺いているが故に、あるいは連隊同様に自らに対して天才的にかくも

多くの自由を許しているが故に、あるいは自分の死後も残りの俳優達に対してなお配役を残し、あるいは欺かれた女の私に手紙を残しているが故に、そんな途方もない人を愛するなんて。―― 「彼はそうしたのかい」とアルバーノは尋ねた。 「彼女はそれをそれどころか天才的なこととして称えたのです」（とユリエンネは答えた）―― 「そのような人を愛するとか、そのような人を愛するような人々を愛すること、そんな心は私にはありませんと私は言いました。それでは幾久しくご機嫌よう」。リンダは答えた。「どんな挨拶も御免です」、そして彼女に手を差し出した。その手を握らず、静かに黙っていて、彼女の夜を見ていた。彼女は失った女友達の軽い無気力な別れについてほとんど気付いていなかった。

この夜のうちにもリンダは、全く一人っきりで長く、騎士と話した後、松明のない馬車に乗り込み、ヴェールを被ったまま、全く孤独に旅立った。誰も彼女が泣いていたのか、そうでないのか、知らなかった。

アルバーノは自分の妹の言うことを聞き終えたとき、穏やかな動揺した声で言った。「過去と和解することだ。人間は過去を嵐にはできない。偉大な不幸な女性には、彼女自らが入って行った夜を許すがいい。―― 何のためにおまえは私に熱心に話しかけようとしたのかい。特におまえはショッペについて何かを知っていよう。その件を頼む」。―― 「話すけど」（と彼女は泣きながら不審がって言った）「でも兄上、あなたの落ち着きはまた新たな不幸のカーテンではないと誓ってください。―― あなた方男性はそんな具合だから。人々はあなた方を皆憎むべきです。私も憎んでいます」。―― 「何も悲しいことは計画していない。神かけてそうだ。おまえ達女は、まずおまえ達の地獄を涙で注ぎ消そうとし、溜め息で吐き消そうとして、次のことが分かっていない。つまりしばしば一時間の考えで、男には一つの棒、あるいは翼が与えられて、それで男は一気に地獄から持ち上げられるということだ。そうになると地獄は燃え続けても構わない」。―― 「それでは私に」（と彼女は泣き顔で滑稽に言った）「あなたの翼を見せてください」。―― 「つまり私は」（と彼は答えた）「人間を頼りにせず、私の中の、そして私の上の神を頼りにするということだ。見知らぬ木蔭は我々の周りを這って、我々の許を昇り、二番目の梢として我々の梢の隣に立つが、それはそのことで枯れてしまう。精霊は互いに並んで育つべきで、上下に重なって育つべきではない。我々は神のように不滅の者達として、無常の者達を愛すべきなのだ」。――

「結構ね」（と彼女は言った）「それであなたに落ち着きが得られさえすれば。あなたの哀れなショッペに関しては、罰として精神病院へ入れられたわ。でもまずはきちんと聞いてください。彼はあなたの二番目の妹という童話を、いずれにせよ多くのことで苛立っていたあなたの父上の許で並べ立てたの。この新たな分別の混乱は無視しておくこともできたのだけど、でもあなたの叔父が呼ばれて、この叔父が彼に面と向かって、ショッペは禿頭を殺したと言ったの。それで彼には誇り高く牢獄か、精神病院かの選択が許されることになって、彼は精神病院へ入ったの。落ち着いて、落ち着いて。最も重要なことを話します。私も彼のことは思っていて、彼はあなたの誠実な友と知っています。率直に話すと、リンダでさえ、旅立つ前に私宛の最後の手紙の中で、彼のことをよろしくと添えています。あなたのためにスペインへの馬鹿げた旅をただけではなく、あなたの治療もしたのです。ひょっとしたらあなたの命があるのは彼のお蔭かもしれません。私とかあるいは他の誰か

がまだあなたに伝えていないとしたら、不思議だけど」。

そこで彼女はイドイーネの穏やかで堅固な性格、彼女のアルカディア、自分がイドイーネの許で過ごし、彼女の明るい魂を覗き見た最近の日のことを話し始めた。それから彼女は、リアーネの棺の横での彼の熱病の床、哀悼の床、そして老ショッペの演説と奔走、そして彼の立派な勝利について語った。ショッペが神々しいリアーネを遂にイドイーネの姿で彼の目の前に出現させ、彼女が治療の言葉、「安らぎを得なさい」を発するように手配した、と。

今や彼が嵐となって、ユリエンネは安らぎの中にあつた。「だから」（と彼女は続けた）「あなたの友達のことを少しばかり気にかけることを私の義務と見なしているのです。哀れなあの方は科はないのに、――良心に苛まれて、自ら、自分が今いる所のせいで、まだ残っていた分別をすべて失いかねないのです。――全く科はないと私は申します。というのは、あなたの叔父は、この叔父を私はずっと憎んでいて、この叔父は最近まず、私の病の兄の前に幽霊として、殺害的に出現しようとして、失敗していたのですが、――これはリアーネの許でも、リアーネが体験したのであれば、その試みをしたかもしれないけれど、――この人間はですよ、――遠慮なく申し上げて良いと思いますが、すべては状況が変わって、転覆したのだから、――禿頭と同じ、まさに同一人物、それに腹話術師なのですから、――兄上」。

しかしアルバーノは彼女からとうに去っていた。

第三百三十四周

アルバーノは自分の友の復讐をするよりは、友を先に解放したかった。それ故彼はまずショッペの許に急ぎ、それから叔父の所に行こうと思った。しかし彼が叔父の明かりのついた部屋の側を通り過ぎたとき、突然の怒りに駆られて、彼は上に行かざるを得なかった、背の高い、痩せた叔父は激昂した若者に、黒丸鴉を手の上に乗せてゆっくりと出迎えた。アルバーノは彼に対し、遠慮なく彼の二重の役、つまりショッペに対する彼のもつてのほかの破壊とアルバーノ自身に対するまやかしを炎の目で非難して、返答と復讐とを要求した。「分かった、分かった」（とスペイン人は、自分のお転婆を撫でながら言った）「私はピストルを持っている、――時間がない、話している時間がない」。――「時間を設けて貰わなければならない」とアルバーノは言った。――「私には証人の父なる神、息子、精霊がない。まもなく十一時から十二時の間となる。ここには闇の者がいる」。――「何ということだ。何のためにその単純な悲劇的舞台装置が必要であろう。貴方がいつか人間となって」（とアルバーノは、慄然として彼の顔の肌を見ながら言った。その肌は全く喜ばしげにも、愛しているようにも見えなかった）「驚いたり、赤面したり、後悔したり、喜んだりすることはできないのか。――貴方がかつてラットーの地下酒場で禿頭として、あたかも彼の恐ろしい行為を知っているかのような振りをしたとき、貴方は私のショッペに関し、何を知っていたのか」。「誰も何かを知っている必要はない」（と彼は答えた）「人間に向かって、私はおまえの不埒な行為を知っていると言うと、その人間は省察して、一つの行為を見いだすものだ」。――「しかし彼が貴方に何をしたというのだ」とアルバーノは激して尋ねた。彼は平然と答えた。「彼は私にこう言ったのだ、犬野

郎と。 — 十一時だ、私はもはや私の言いたいことしか言わない」。

ここでスペイン人は二丁のピストルと一つの袋を持ってきて、ピストルは装填されていないことを示し、一丁のピストルに装填するよう頼んだ（彼は火薬と鉛を渡した）、しかしもう一丁のピストルにはそうしなかった。「袋の中に、二丁を袋の中に」（と彼は言った）「我々は籤にしよう」。大胆になるほど結構とアルバーノは考えた。スペイン人は両方を揺すって振り、アルバーノに選んだ印として一丁のピストルを足で踏むように頼んだ。そうなされた。「同時に発射しよう」（と叔父は言った）「三十分が鳴り終わったときに」。

— 「いや」（とアルバーノは言った）「最初の鐘の時に撃ち給え、私は二番目の時に撃つ」。 — 「結構」と叔父は答えた。

彼らは部屋の向かい合った片隅で対峙していた。 — 手にピストルを持って、十一時半を待っていた。スペイン人は黙って聞き耳を立てて、目を閉ざしていた。この閉ざされた胸像の顔を見ていたとき、このような人物に罪は犯せない、いわんや射殺はできないとアルバーノには思われた。突然五つの声が小声の部屋で交互につぶやいた。あたかも壁の哲学者達の胸像からのもので、死の神父、禿頭、黒丸鴉が、それにあたかも所謂闇の者であるかのような或る未知の声が、話しているように見えた。彼らは互いに話していた。「闇の者殿、私は真実を言わなかったかな。 — 私は五滴の涙を、しかし冷たい涙をもたらす。 — 私は葬儀の馬車の車輪を頭上に置いて運ぶ。 — 私は豹を繋いで連れて行く。

— 私は豹を放つ。 — 私は白い指で彼を指さす。 — 私は霧をもたらす。 — 私は最も冷たい霜をもたらす。 — 私は恐ろしいことをもたらす」。 —

ここで最初の鐘の音が鳴った。そしてスペイン人が発砲した。 — 二番目の鐘のときアルバーノが発砲した。 — 両者は傷を受けずに立っていた。火薬の煙りが辺りに立ち籠めた。しかし砕かれたものはどこにも見当たらなかった。あたかも弾は単に水銀で詰められたガラスの弾であったかのような按配であった。怒った軽蔑の念でアルバーノは、先の声のせいで、彼を見つめていた。「やむを得なかった」と叔父は言った。

突然講師が息せき切って入って来た。ユリエンネが、多分決闘が起こるので阻止するために講師を送ったのであった。「伯爵」（と彼はどもって言った）「何か起きたのですか」。

— 「この近くでの」（と叔父が答えた）「何かに違いない。煙りが入って来た。我々は丁度お休みと抱擁しようとしていたところだ」。彼は呼び鈴を鳴らして、従者に、こんなに遅くに発砲したのは誰か宿の主人に尋ねるよう命じた。アルバーノは驚いて、別れるときただこう言った。「構わない。しかし私が解放する狂気の者を恐れるがいい」。 —

「そうはなさらないでください」とスペイン人は言って、恐れているように見えた。

アウグスティは路地まで同伴して来て、二度と上がって行かないとただ誓わせた後、彼を行かせた。しかしアルバーノはなおこの遅い夜、嘆きと侮辱された心の住む家[病院]へと急いで行った。

第百三十五周

アルバーノが精神病院の管理人、若々しく滑らかな赤ら顔の小男に、すでに管理人が承知している彼の名前を知らせ、ショッペの解放の願いを彼に対する保証と共に知らせると、管理人ははなはだ満足げに彼に微笑みかけ、こう言った。「私は静かに数年前からこの病

院全体を観察しています。 — どんな些細な特徴をも私は将来の哲学的読者のために捉えています。それでショップペ殿にも真面目に対処しています。しかし、伯爵殿、私は彼に関し、狂気を約束するようなたった一つの特徴をも捉えることはできなかったのです。むしろ彼は狂気に関するすべての私の英語とドイツ語による作品を読んでいて、そして精神病院における治療処置について私と議論しています。彼は一人のフィヒテ主義者と申せましょう。(彼の自我からそう私は結論付けていいと思います) それにまた諧謔家でもありましょう。さてこの両者の片方だけでも狂気とは分かちがたいものであるとすれば、両者が一致しているとすれば、いかほどのことになりましょうか。我々の観察の一致に関し、とても喜んで貴方に彼の部屋への鍵をお渡しするものです。このことは御自身でお考えください。 — 「彼が阿呆でないとしたら」(と彼の妻が言った)「何故彼はすべての鏡を壊してしまうのかしら」。 — 「まさに阿呆でないからだ」(と管理人は答えた)「しかし彼が阿呆とすれば、おまえの夫は更にもっと大きな阿呆ということになる」。

ショップペの小さな部屋へのドアを開けるときほど、アルバーノはかつて一層重苦しい気持ちでドアを開けたことはなかった。「兄弟、あなたを迎えに来ました」と早速彼は叫んで、自らと彼とが赤面しなくて済むようにした。しかしこの老公の獅子をより間近に見たとき、彼はショップペがこの捕獲穴で全く変貌しているのに気付いた。温和しく這うように媚びるようになっていたのではなかったが、しかし二つに折れ、前足を砕かれて、大地に押し付けられていた。彼が正直に受け入れた殺人の告訴は、ガスパールの無慈悲な判決と一緒にあって、彼の誇り高い自由な胸を有毒な羞恥心で満たし、腐食していた。「ここでは元気になっているが、ただ具合が悪い」とショップペは生気のない目と抑揚のない声とで言った。アルバーノは涙を隠せなかった。彼はこの病人にまといついて、言った。「勇敢な方よ、あなたはかつて私が病気のとき、快復と治癒とをくださった。私はそのことを知らずに、感謝の言葉を述べていなかった。私と一緒にいこう。私はあなたが病気のとき、看護し、あなたを治し、慰めなければならぬ、できる限り、そうして、それから旅立とう」。

「君は、我がクリトンよ、[ソクラテスに逃げるよう勧めた]」(と彼は、自分の傷付いた誇りの香油で強壯にされて答えた)「私がソクラテスなんかではなくて、本当に我が『哲学者の塔』[torre del filosofo、エトナにある古い壁。エンペドクレスの観測所と見なされてきた]から出て行くと思うのかい。誓いの言葉は重い鎖なんだぞ」。 — 「すべてを私に話しておくれ。誰も大目に見ることはない。しかし私はその後で、新しい知らせをお話ししよう。これを聞くとすぐにあなたの鎖は溶けます」とアルバーノは言った。「そうか、 — しかしここはその地としては十分に結構な所だ。申したように、『哲学者の塔』の一つで、ヴォルテールの河岸、シェークスピア通りだ、他にどのように言おうとも、言うべきであろうとも。 — それに私はいつも夜一人の男か別の男かが私の横で語るのを聞いている。それで私は自我殿がやって来るのを恐れなかった。私は毎日五個のパンの小球を投げてな、それらが十字架を作ったら、それは — 好きなように考えていいが、 — 自我が私には出現しないことを意味しているのだ。 — しかしいつも一つの十字架を作っておる。私はこのこのアンティキュラ[ギリシアの地、狂気に効く薬草が採れる]で多くの妄想の像に關して安んじている。 — あれらの本を通じてもな。 — 御覧、狂気についての論文

そして私の名前をその画の中に埋め込んだ。 — その後、長く経って、最近秋に貴女自身と当地の市の広場で出会って、君[アルバーノ]の母親と瓜二つと思った。それほど彼女は彼女自身の母親と似ている、と。『私には分かりません』と彼女はここで誇りで熱くなって私の話に割り込んで来た、『貴方の秘密が私の秘密と如何なる関係になりますか』。

— 『つまり』(と私は真面目に言った)『貴女が私に明かりを持って来るよう呼び鈴を押すことをお許しになれば分かります。私はフォン・セサラ夫人とフォン・ロメイロ夫人の肖像画を、二人は一人の人物の名前であって、ここに持参しているからです』と。彼女は何も分からず、何も質問せず、私は呼び鈴を押すことにはならなかった。私は彼女に白状して、人々が一般に語りの反復と呼ぶレトリック的チェスの像でカバーする必要があるでしょうと言い、カバーした。しかしその中でまた君の名前に来ると彼女は言った。『多分全く縁の切れた関係と思いますが』と。 — 『いいえ』(と私は言った)『一つの永遠の回復された関係ですよ。衷心からの敬意という彼の挨拶も持参しています』と、 —

この挨拶に彼女はちんときたように思われた。さながら彼女に対してはこのような請け合いが必要と思われているかのようで、彼女はむしろ君のことを除外して欲しいと私に頼んだ。『何ということですか。彼は貴女の兄ですぞ。ここに私はヴァレンシアから貴女の母親の肖像画を盗んで来て、有しております。ただ明かりがないのです』

そこで明かりが要求された。炎が長身の立派な形姿を黄金色に包むと、私はまさに自分の許でこう言った。『彼女は兄同様、両人の系統樹を求めての長旅をする価値が十分にある。彼女にはその魅力が欠けるわけではないのだから』と。 — アルバーノよ、私が彼女の兄であれば、君はその栄光を有するのだが、私の血は、彼女がゴンドラを有するけれども、楽園の川を有しないのであれば、彼女のために舟を浮かべるよう流れ出るに相違なく、私は彼女を両手に乗せるだけでなく、バランス芸人のように鼻や口の上に乗せることだろう。愛しい人だ。彼女はその絵を見るなり、こう叫んだ。『母上、母上』、そして絶えず両目の上に手を持っていつては、今は以前よりもっと見えなくなっていると嘆いた。私はまた掻き取るのを始めて、ようやく彼女の目の前で私の名前全体レーヴェンショルド[Löwenskiold]を掘り出した。それどころか失念していた文が添えられていた。[彼は]とても愛している、と。

『画家はそういう名前だったのですか』(と彼女は尋ねた。『貴方なのですか。 — 貴方も彼女を愛していたのですか』。 — 『美人は一つの岩礁で』(と私は真面目に答えた)『その岩礁であれこれの男性が座礁しようとしませう。そこには真珠や牡蠣が一杯ありますから』。好意的に彼女は私に最も明確な反復の反復を願い出た。自分はずっと良く注意して聞きたい、聞くことや考えることが今では生きること同様に難しいものになっているから、と。アルバーノよ、貴方は私にもっと予備知識を教えて、彼女の許に寄越すべきであったろう。そんなわけで、私は半分混乱し、霧がかかって来た。そしてマッジョーレ湖の島[イーゾラ・ベッラ]の私の叙述の際に、彼女の目から何か濡れたものが飛びだして来たとき、私はその滴の中に沈んで、ほとんどその中で溺死し、そしてようやく後に体を擦って蘇生したものだ。私の話が終わると、彼女はゆっくりと立ち上がって、両手を組んで、あたかも感謝するかのように泣きながら祈った。『神様、神様、お蔭様です』。 — これは全く訳の分からないことであつたが。

アルバーノは、彼女が運命に対してショッペの報告が偶々遅れたことを感謝しているこ

とが十分に分かった。遅れたせいで、ロケロール[恋人]の短いけれども、しかし恐ろしい兄への変身がなくて済んだのであった。

「彼女はその後、この描かれた出生証明の画家、盗人、提供者に対する過分な感謝に移った。心が腕のように眠り込んでいて、動悸が難しく無感覚になっている者にとって、目覚めつつある肢体の循環はとても無器用に行われて、こう言ったものである。『兄上に対して』(と私は言った)『できるだけことは致します。陽の面[恋人]は従って月の面[妹]となります』。 — 彼女は君の父親の話に移って、父親はすぐに来るから、自分がこの謎を彼に提示すべきか、それとも私が提示すべきかと尋ねた。『あるいはむしろ双方ともでしょう』と私が答えたかと思うと、父親が荒々しく入って来た。

さて勿論ガスパールで、君と妹にとって生来の君の父親は毅然としている。 — 彼に対し子供らしい愛を君が抱いていることは悪いことではない。 — しかし私が君に向かってこう言おうと思うとき、つまり彼は熊でもなく、犀でもなく、人狼とか他の狼でもないと言おうとするとき、これはむしろ稀なる丁重な言い草だろう。彼は私に、私は彼に、今晚はと鼻を鳴らした。多くの間人はガラスに似ていて、割られない限り、滑らかで、磨かれていて、なまくらなものだが、割られると忌々しく切り裂くものとなって、どの破片も刺すものだ。その件が彼に提示され、持参された。肖像画が提示された。君が彼と遙かな遠縁であれば、私は関知したくないところだ。というのは彼の顔は憤怒の極光に覆われていて、その目からは私に対し黄色の雀蜂が飛び込んで来て、彼の雷雨の額には直線の電気の槍の如く浮き出て来たからだ。殊に二本の垂直な不幸な線が浮き出て来た。しかし申したように、君は私の知る限り、彼の息子だ。『友よ』(と彼は雷を落とした)『何の権利があつて画を盗んでいるのか』。 — 『そのことは』(と私は穏やかに答えた)『なかなか申し上げにくいことです。しかし不正な誤魔化しを黙認することはできないことです。私は介入しました』。 — 『伯爵令嬢よ』(と彼は湯気を立てて言った)『三分したらこの方の正体がお分かりになろう』、いや違う、違う、この方とは違う言い方をした。しかし私はいつかその代わり彼の胸を掴むことだろう、たとえ神の王座の至高な段階に我々が立っていて、輝きの中で戦うことになっても」。 — 「シヨッペ」とアルバーノは言った。「私を煽らないでくれ」とシヨッペは答えて、更に続けた。

「彼は呼び鈴を鳴らした。 — 一人の従者が一枚の通知を持って飛び込んで来た。 — 我々皆が黙っていた。 — 『伯爵令嬢、ただ一分だけ』(と彼は言った)『猶予をください』。 — 彼はその後彼女に若干のつまらぬ宮廷のニュースを知らせた。しかし彼女は黙って下を見つめていた。そのとき君の背の高い叔父が入って来た。その小さな頭で十六回頷いた。というのは彼はそれをお辞儀と見なしているからで、 — そして私は遠く離れていた。『弟よ、この方はヴァレンシアの奥地で何をしたかな』。 — 『殺害です、殺害』と彼は素早く言った。『どんな状況で』と君の父親は尋ねた。叔父は、禿頭に対する私のやむを得ない射撃の際の微細な状況を解し難いほど鋭く述べ始めたので、私は言った。『その通りだ』。 — そして自ら続けて、絶えずこう尋ねた。『その通りだろう』、 — そして彼は急いで頷いた、 — そして私の話が終わったとき、私はこう尋ねた。『しかしスペイン人殿、神かけて、どこからその知識を得ているのか』。 — 『私からだ』と、見知らぬ、鈍い声が答えた。全く禿頭のその声と同じようであった。

私の心は全く犬の鼻面のように冷たくなって、舌は石ころだらけになった。『有罪者と

して自白者として』(君の父親は始めた)『貴方は今や容易に貴方の運命を予言できよう』。

一 『勿論』(と叔父はつぶやいて、そのハンカチを広げたり、畳んだりして、絵画を握って、それを退けた)『予言、予言』。一 『それで』(と君の父親は続けた)『貴方はより詳しい取り調べがあるまで、殺害と盗みに対してふさわしい牢獄の代わりに、貴方の旅に対して応分の精神病院を、寛大な地を選ぼうと思うかは、貴方の自由だ。貴方が選ばないのであれば、私が選ぼう』。一 『精神病院です、精神病院』(と私は叫んだ)『皆と一緒にですから。私の名誉にかけて。一 しかし私は何も求めている、私の良心の洗濯物明細表には殺害は記されていない、一 貴方は身の証を立てるがよろしい。一 貴方の太陽の馬車、栄誉の馬車は、車輪の釘に至るまで汚れている。一 伯爵令嬢、是非すべてを立派に解明して貰い、絶えず私のことを思い出して、父親を得ることで。勿論学生達の領国の父に似ていますが、これは帽子の中の穴からなるものです』。一 『さっさと行け』(と君の父親は君の叔父に言った)『狂気が始まった』。するとこの兎は十八回跳んで敷居と階段から出て行った。私は自身の行軍規則、座法規則を守った。君の父親は更に舐めるような炎の眼差しを私の後姿に送った。私は目に毒を入れて、彼がそれでドアの下に崩れ落ちるのを見た」。一一

アルバーノは縮み上がって、その次第を尋ねた。そこでショッペは黙って、長いこと考えていて、悲しげに言った。「多分夢を見ていただけであろう。しかし今は夢を本当のことに混じ入れ、その逆のことをしている。私はむしろショッペが不憫でならない。一 彼は老人だからな、老人はオイレンシュピーゲルのように、山を下るとき泣くものだ」。

一 「友よ、あなたを慰めましょう」(とアルバーノは千々に乱れた胸で言った)「あなたの誠実な心から一つの錯覚を除きましょう。そうしたらきっと一緒に私と行くことでしょう。この禿頭は、この嘲笑家、香具師は、私の妹の神聖な言葉によれば、私の叔父と同一人物ということであり、腹話術師です」。

長いことショッペは、何も聞かなかったかのように、死んだかのように、立っていた。突然彼は若い花と咲く顔で、目をきらきらさせながら、崩れて跪き、どもって言った。「天よ、天よ、私を狂わせるがいい。一 それから先のことは私の領分だ。一一」。ここで彼は両手で邪悪な絞殺するような動きをして、元気になって言った。「君の後を付いて行こう」。

今や彼はそのことが本当にできた。先ほどはほとんど立っておれなかったのである。かくてアルバーノは不幸な興奮した友を自分の住まいに鬱々と連れて行った。

第百三十六周

アルバーノは今や、友情でできることすべてを応用して、この高貴な病人をまた内面的外面的に元気付けて、若返らせた。殊に彼は、すべての彼の弦が張られていて、騎士とその弟がリンダの前で引き倒した駒をまた立つようにした。つまり彼の誇り高い意識のことで、これは残酷な屈辱で惨めな様になっていたのであった。およそ純なる兄弟の敬意、神々しい遺物の聖なる崇拜が、傷付いた誇りを穏やかに温め、生気付けられるかぎり、素朴なアルバーノはそのことを試みた。しかしショッペ自身が言ったように、あのスペイン人、不幸の仕掛人であり、騎士の誘惑者であるスペイン人に仕返しをせずには、彼の背骨は決

してまた垂直になることはなく、彼の脊髄は曲がったままなのであった。ただ叔父とのアルバーノの決闘だけが、彼にとっては新鮮な水であった。彼には何度もその決闘が話されなければならなかった。彼の熱い願望は、このスペイン人との戦いが必要とするほどの元気を回復することで、それから狂人として、自分が強制しようと思っている叔父の瀕死の床で、すべての悪行とペテンの告白を吐き出させることであった。「そうなったら」（と彼はそのたびに微笑しながら付け加えた）「世界が丸かろうと、角張っていようと、私にはどうでもいいだろう。そしてフランスへ行くことが私の最初の一步だ」。

アルバーノは怒りのこのギリシアの[海戦の]火玉を、これが結局、屈辱で凍ってしまった肉体の強壯化の治療となるものであり、ますます深く自らの下で燃え続けるようにさせなければならなかった。消えるたびに火玉は育ってくるからであった。ただ、燃えたまま飛びだして、スペイン人を探し求める自由な一人っきりの瞬間が生じないよう、看視しなければならなかった。アルバーノは昼も夜も自分の寝椅子から、また別な理由もあって離れることがなかった。というのはショッペが一人っきりで、彼のモルディアンが眠っていると（彼は犬を決して起こさなかった。彼の言うにはこの犬は明らかに夢を見ていて、理想的世界に漂っていて、嗅ぎ回っているからで、現実世界の露地ではそれに関してはほとんど影の痕跡も嗅ぎつけられないからであった）、つまり彼がこの静かな犬と一人っきりであるとき（というのはこの犬が目覚めていたら、十分な社交となったからで）、そして彼の視線がたまたま自分の脚や両手に落ちると、冷たい恐怖が彼を襲って、彼には自らが出現して、自我殿が見えかねないのであった。鏡にはカーテンが掛けられなければならなかった。彼が自らを見ることのないようにするためであった。

彼の夜は眠りのないものであった。しかし夢がむき出しのまま大胆に彼の周りに動いていた。アルバーノは彼のために容易に自分の健康な夜を犠牲にした。しかし必ずしもこの友人のすべての夢を、普通は生きている者達の前を飛び去って沈んで行くこれらの幽霊をそこから追い払うことができなかった。これらの夢は部屋の隅の影に這い込み、見つめていた。 — あるとき真夜中頃アルバーノは外出して、また戻って来たとき、彼に出会ったが、彼はまさに一方の手で、もう一方の手を掴んで、こう言った。「おい、私は誰を掴んでいるのか」。 — 「善良なショッペよ」（とアルバーノは半ば怒って叫んだ）「このような底の見えない戯れをするとは。一本の指だってもう一方の指を掴まえられるだろうに」。 — 「勿論」と彼は答えた、「しかし聞き給え」（と彼は小声で言って、うづくまって頭をかがめ、右手の人差し指で鼻越しに高みを指した「君は私をショッペと呼んだが、 — 私はそういう名前ではない。しかし私は自分の名前を呼ぶことは許されない。私を長いこと探している自我殿が、それを聞いて、やって来るからな。 — 長い墓石がこの名前の上には横たわっているのだ。ショッペとかスキオピウスと私は多分名乗って良かったろう。私の多様な名前の同名の従兄弟や同名の父は（ベール^{*1}ではすべてが載っている）自らをあるときはこう、あるときはこうと自称しており、あるときはジュニペール・ダンコーヌ、あるときはデニウス、ヴァルガス、あるいはグロジッペ、あるいはクリクゼーダー、ソテロ、あるときはヘイである。 — この男がオスマン帝国の官房と恩恵によるま

*1(訳注) Pierre Bayle (1647-1706):Dictionnaire historique et critique、Scioppius の項参照。

だ現実のアテネの肩書上の侯爵であり、テーベの公爵であったことを私は全く忘れているように見えるに違いない。もしも私がマルタの図書館司書のままでありたいと思うならばな。実際普通旅館ではまだ多くの名前で立ち寄ったものだ。その名は後置する自我と立派に協奏し、先駆けるもので、例えばレーヴェンシェルド、ライプゲバー、グラウル、いずれにせよショッペ、モルディアン（私の犬に贈った名前である）、ザクラメンティーラー、そしてあるときはユルだ。 — 多くを私は全く忘れたかもしれない。 — 本当の名は」（と彼は内気にささやきながら言った）「一つのB、あるいはS - s^{*1}だ。 — 私に三番目の手をおくれ。 — 経帷子から名前が切り出されて、すでに私はその中で墓に横たわっていよう。『私は私だ』、これは確かに愛しい老スウィフトの最期の言葉であったが、スウィフトは普通その長い狂気の中でほとんど言わなかったものだ。 — 私の場合もそうであると敢えて言いたくはない。 — まあ、いい。無限の英知はすべてを創り上げた、狂気も多種創った。 — しかし神は、神自身が決して自らに私[自我]とすることのないようにして欲しい。思うに、宇宙が震えて四散しよう。神は三番目の手を見いださないのである」。

アルバーノはこのナンセンスの意味に驚愕した。 — ショッペは氷に見えた。 — それから彼は突然兄弟の胸に身を投げ出した。 — 二人はその件については何も言わなかった。 — そしてアルバーノは幸福なヘスペリア[西の国]についての快活な描写を始めた。

かくて彼は介護しながら、労りながら、愛撫しながら、辛抱強く、孤独に、ドイツからの逃亡に使う予定であった日々を病気の友と一緒に過ごした。そして一層彼のために尽くし、耐えるにつれて、一層激しく彼を愛した。彼は全く次のようなことを運命によって経験したくなかった。つまり理念に満ちたこのような世界がその大地の火災に近付き、実直さで一杯のこのような自由な心が最期の打撃に近づくような目に遭いたくなかった。ショッペはこの若者の心にそれどころか更にディーアンよりも大きな領国を有していた。というのは彼は人生をより自由に、より深く、より偉大に、より勇敢に解していたからである。ディーアンの生の掟が美であったとすれば、彼のは自由であった。そして彼は我々の太陽系の如く、ヘルクレスの星座に従っていた。

どんなに頼んでも彼はスフェックス博士の薬を服用しなかった。というのは彼の言うには、すでにある年老いた馴染みの臨床医、群医を懇意にしていたから、つまり「時」を頼りにしていたからである。彼はスフェックスに喜んで、処方箋を書かせ、それを持参することを許したし、それに愛想良く目を通し、その内容を議論し、「健康参事官であることは健康参事官を演ずるよりも容易である、スフェックスが自分の状態を把握しているのはよく分かる、自分を弱めるように処方しているからで、これは狂人の場合まず第一のことである」と述べた。しかし彼は言い添えた。「私は理性を欲していない。単に歩行と直立

*1 S - sというのはジーベンケース[Siebenkäs]である。『花の絵、果実の絵、茨の絵』から周知のことであるが、ショッペは以前ジーベンケースと称していた。 — それからその名前を顔まで自分にそっくりの友ライプゲバーに渡し、この友からその名前を借用した。 — そしてこの友は見せかけにジーベンケースという名の墓塚を建てさせたのである。

のための対の立派な大腿と打擲のための対の充実した腕を欲している。ちなみに自分には彼が疎ましい。彼が犬を解剖するから」と。アルバーノも結局こう仮定した。「ショッペが自分と一緒に連れ立って旅行する筋力を再び獲得しさえすれば、一人っきりの旅の時に陥りやすい狂気の夢は自ずと容易に散って行く」と。

いつも彼は最も医師を攻撃した。あるとき医師がこう言った。「私ではなく、貴方の第二の自我に従ってください」、そしてアルバーノを指さした。「畜生」（と彼は答えた）「私の第二の自我ですと、君達は自らそうなるが良からう。 — 私はそれには十分に恐れ入るね。 — しかしそこにいる者は、私はそう期待するが、ほとんど私の第六の、第二十の自我とか、そのような自我ではないことだろう。 —

しかしスフェックスの意見は次のままであった。つまり彼の強壯化する不眠は、これは彼の熱病時の像、殊に禿頭の、娘であり、母親であって、治療の邪魔となっていて、弱体化を強いなければならない、というものであった。あるとき自分の友アルバーノをよく訪れるディーアンがこのことを耳にしたとき、彼は尋ねた。何故スペイン人は彼のことを恐れて旅立った、例えばフランスへ旅立ったというニュースで彼を騙し、治そうとしないのか、と。アルバーノは答えた。「まことに私はそう言いたい。しかしできない。それでは同様に神や自分に嘘を言いたいと思えることになるだろう。 — 「自惚れです」（とディーアンは言った）「私が自ら言いましょう」。 — 「私もすぐにスペイン人にそのことを期待したけれど」とショッペは薬用の処方箋の嘘に対して答えた。ディーアンが去ったとき、彼はアルバーノに尋ねた。「今私はもっと冷静に、もっと凍って座っていないだろうか。それも禿頭がフランスに行ったからで、私はほとんど新たな人間だ。勿論私は嘘をついている。しかしディーアンの嘘の方がもっと早かった」。

ようやく医師は、まさに睡眠飲料を彼の飲み物に混入する決心をした。アルバーノはそれを許した。ショッペはそれを得た。数分間白熱化し、空想に耽っていた。とうとう眠りの霧が昇って来て、直に病人を覆った。

アルバーノはそこで長い時間の後、大地の緑と空の青とを再び求めて、リラルの彼のディーアンを訪問した。あれ以来何と多くが変わり、入り交じって、重なって転落したことか。幾つもの葉がまた蕾となったことか。人生の幾つもの泡が、これはかつて白く、優しく、軽やかに彼を喜ばせたものであるが、今や灰色の重々しい水として彼の胸を冷たくさせた。彼は自分の人生への勇気の他にはほとんどわずかなものしか有していなかった。ディーアンの許で、彼は新たな変化について、侯爵の迫ってきた死について、イドイーネの、喪の前の姉の許への間近な訪問について耳にした。彼の魂はいかに不思議に取り乱して、その冬の眠りから温かい陽光の中に、つまりリアーネのこの似姿が自分の人生の周りに掛けた陽光の中に、目を開けたことか。 — 幾多の静かな夜、ショッペの幽霊の臥所の隣で、彼にとってすでに、ユリエンネが初めてこの安らぎの天使の出現をヴェールなしに彼に教えて以来、先の時代と愛とが遠くの星々の一つの天のように再び昇っていた。そして眠りから脱した夢想の薄明かりの中で、彼は「時」の海の上で、遠くの、遠くの島を認めた。 — 自らの背後か前方かは分からなかったけれども。 — その島では白い、顔をそむけた形姿がリアーネに等しく、あるいはリアーネに似て漂い、余韻として歌っていた。 — 今や兄の命日月のすぐ後に、妹リアーネの命日月が続いていた。この世ならぬ女性が、第二世界の静かな鏡から、そして見通し難い遠方からまた現世の空気の流れの

中に出現して来て、そして変容の後、また具体化して此岸を歩くということが可能なのであろうか。

しかし友情はその痛みのための空間を必要とする。そしてこれらの雲の諸像は直に友情で塞がれた、あるいは倒された。彼はどんなに願っても、ショッペにかの治療の夜のことを描写して貰うとか、いや、イドイーネがリアーネの役をした夜の描写に耐えることさえ、できなかった。しかしこの形姿は、彼の前に立っていた厳しい「時」の骸骨における死者の指輪の唯一の生き生きと戯れる宝石であった。何という日々だったことか。墓塚が彼から巻き付いて奪うことをしなかったもの、これを大地は奪い去った。ガスパールは、以前天の純粋な王座の高貴な父親であったが、今や彼の空想にとっては、恐ろしい地獄の諸力や武器と共に下方に、深淵の王座に座っているように見えた。 —

それだけに一層穏やかに、彼がディーアンの家にいるときより、より静かな現在に、休らっている友人の思いに、リアーネがかつてイドイーネの役をした間近な夢の神殿に、恋人の似姿が間近であるという知らせに、彼は取り囲まれて漂うのであった。彼は彼の前への彼女の出現という甘美な苦い驚愕を思い描いた。というのは奔流の中に、垂れかかる花は、その絵姿ばかりでなく、その陰影をも投げかけるように、彼女はリアーネの美しい絵姿であると同時に陰影であるからであり、 — そして生きた女性の中に失われた女性と変容した[神々しい]女性とが同時に出現するであろうからである。

この夢想的な薄明かりと夕焼けの下、過去と未来が共に流れ出て来て、彼は家に戻った。夢想的赤みの上に白く鋭い閃光が走った。彼のショッペが強制的眠りの数分後に荒々しく発憤して、狂ったように飛びだして、誰もどこへ行ったか分からなかった。医師がやって来て、確定的に言った。彼は自ら水の中に飛び込んだか、誰構わず他人を投げ込んだかいずれかであり、荒々しく飛びだして、その上仕込み杖を携えていたぞ、と。

第三十四ヨベル期

ショッペの発見 — リアーネ — 十字架礼拝堂 — ショッペと自我殿と叔父

第百三十七周

ショッペは大きな仕込み杖を携えていたので、アルバーノは推測した。ショッペは死の天使としてスペイン人の許へ行った、と。彼は叔父の旅館へ急いだ。ある従者が彼に言った。太い杖を持った赤い外套の者がやって来て、主人との面会を望んだ。しかし彼は主人の命令で宮殿へと行かされた。一方主人の方は皇子の庭園へ出掛けた、強力な兄上を迎えるためであり、と。アルバーノは尋ねた、「強力な兄上とは誰か」と。 — 「御父上殿です」と従者は答えた。アルバーノは宮殿へと急いだ。ここでは侯爵の病床の周りでの混乱が続いていて、侯爵は間もなく病床を棺台と取り換えかねない状況であった。忙しげな従者達に彼は出会った。ある従者が、自分は赤い外套の者が大きな鏡の部屋に入って行くのを見たと言った。アルバーノは中に入って行った。そこは空であったが、しかし奇妙な痕跡で一杯であった。大きな鏡が大地にあって、その背後の壁紙の戸は開いたままで、開けられたメモ帳、歯車、女性の衣装が蠟製の古い頭部の周りに散らばっていた。彼は自分がかつて見た何ものかを見ているような気がした。しかしそれを名付けることはできな

った。突然彼は角の鏡の中に、深く彼の若々しい顔の背後に今一度、しかし年齢を重ねられている自分を覗き見た。蠟製の頭部に似ていた。彼が振り向くと、凸面鏡の円筒がさながら彼の時間を開示していて、彼はその深みの中に彼の高齢の時の姿を見た。

身震いをして彼はこの奇妙な部屋を去った。ユリエンネの侍女が彼と出会って、彼女は彼に、自分は赤い外套の「影絵切り」が手に望遠鏡を持って宮殿の中庭を越えて出て行くのを見たと言った。彼は急いで後を追った。すると門の所でアウグスティに出会ったが、彼は侯爵を今一度訪問するようにとの侯爵の依頼を伝えた。「今はできない。まず狂気のショッペと再び会わなければならない」と彼は答えた。彼の胸の中にはただ友人だけが住んでいた。それに彼は侯爵も単に彼と話をしたいだけの妹の仮面にすぎないと見なしていた。「私は彼をブルーメンビュールへの途上で見かけた」と講師は言った。彼はそこから飛び去った。門の所でアウグスティの知らせは守衛によって保証された。

ブルーメンビュールの通りで彼は宮廷説教家のシュペーナーの馬車と出会った。侯爵の許へ向かう馬車であった。アルバーノはショッペのことを尋ねた。シュペーナーは言った、自分はショッペと、ある病気の老告解の女性のために一軒の家の前に一時間ほど止まっていたとき、大いに話した。彼は元気で、とても理性的で、ただいつもより老けていて、控え目であるように見えた、と。その道を尋ねると、宮廷説教家は答えた。彼は町の方へ向かっていた、と。これは不可解なことに思えた。しかしシュペーナーの一行は緑の服の人がそうしたと言った。アルバーノは赤い外套と言ったが、皆とシュペーナーは緑色の外套と主張し続けた。

彼は再び自分自身の家へ戻った。ひょっとしたら自分自身をショッペは探していて、待っているのかもしれないと考えたのであった。ドクトルの農奴たる、痩せたマルツは、こう知らせた彼の許に飛びだして来た。フォン・アウグスティ殿が丁度彼を探していて、病気の旦那は新しい緑色の服で古い門から散歩へ出て行った、と。それは「皇子の庭園」への通りで、アルバーノの推測では、彼は、スペイン人と同じ道が告げられたので、きっとその道に向かったのであろうと思われた。外でその推測はファルテルレによって裏付けられた。ファルテルレは語った。自分は退出の際、彼に追い付いて、すぐこう尋ねた。「どこへ急いでおられる、図書館司書殿」と。それに対して彼は静かに立ったままでいて、彼を真面目に見つめて、こう返事をした。「貴方は誰ですか。勘違いでしょう」、そして去って行かれた、と。アルバーノは服を尋ねた。「緑の服です」とファルテルレは答えた。今や彼の道は決定された。暇な騎乗者はその上、叔父がそれ以前に同じ道を取っていたと言った。

夕方遅くアルバーノは「皇子の庭園」に着いた。彼は小さな庭園の館の中庭に何台かの馬車を見た。とうとう彼は父親の家の人々と出会って、彼らはこう言った。ショッペは静かで、陽気で、長いこと庭園をハールハール出身のフォン・ハーフェンレッフアー氏と一緒に散歩していて、彼と一緒に町の方へ行った、と。「一人の人間と一緒にいれば、その人がまた彼の守護霊、侍者となってくれよう」とアルバーノは考えた。彼をこれまで苦しめた冷たい雨は去っていた、天はまだ陰鬱な様ではあったけれども。彼はこの風景の中では単に暗い地平線に囲まれていた動揺した心と共に、すべての社交や陽気な館を避けた。遠ざかりながら、彼は敢えて悲しい視線を微睡みの島へ投げかけた、そこにはロケロルの墓塚が燃え落ちた火山のように、白いスフィンクスの横に見られた。「ようやく静かに制

御し難い弾み車が眠っている。時の奔流から持ち上げられて、ただ墓石と共に御身の人生のヤヌスの神殿は閉ざされた。御身、苦しめると共に苦しんだ精神よ」とアルバーノは同情を一杯に抱いて考えた。というのはかつてはこの故人をととても愛していたからである。向こうの一本の菩提樹のある庭園の山では彼の穏やかな妹が、この好意的な、愛らしい安らぎの天使が、人生の戦争の喧騒の最中、休らっていた。丁度彼が永遠の戦争であるように、彼女は永遠の平和であった。彼は上に登って行き、一人で上の天国の花嫁の許にいて、花々に清められた大地の上の花壇に足を踏み入れる決心をした。その花壇の下に彼女の花々の灰が嵐から守られて覆われているのであった。彼はただその計画を考えてみただけで、涙の奔流が痛みのように彼の両目から溢れて来た。というのはこれまでの夜の看護や心配のせいで、彼は夢想的に溶けていて、それに幾多の不幸が短い間に重なっていて、それで彼の美しく堅固な人生は端から次々に有毒な刺し傷や歯跡で埋葬されていたからである。

彼がまだ月のない、しかし星々の豊かな黄昏に、そこでは単に宵の明星だけが月の代わりとなっていて、さながら太陽のより小さめの鏡であったが、丘を登って行ったとき、「皇子の庭園」から数人の灰色の服の人々が激しく合図しているのを見た、あたかも彼の歩行を禁じたいかのように見えた。彼は構わず進んで行った。いや彼は自分の夜通しの看護で火照った、人生の衝撃で揺すぶられた脳髓が、これらの形姿を凹面鏡の如く舞わせているのではないかとすらも分からなかった。

ギリシアの屋根のない神殿の中へ入るように、彼は静かな尼僧の聖なる僧院の庭の中へ入って行った。そこでは菩提樹が声高に語っていて、静かな花々が子供のように、この憩いでいる女性の上で戯れ、傾いたり、揺れたりし合っていた。高く広く星々のアーチは、小さな大地の上に微光を発する凱旋門のように懸かっていた。聖なる地の上で、そこではリアーネの外皮は、つまり小さな明かりの小雲、薔薇の小雲は、この天使をもはや運べなくなったとき、沈んでしまったのであった。天使はエーテルの中へ進み、どんな雲ももはや必要としなくなったのであった。突然慄然としてアルバーノはリアーネの白い形姿が菩提樹に寄りかかっている、宵の明星と夕焼けに向いているのを目にした。長いこと彼は脇の方を向いたこの形姿の許で、リアーネがしばしば一人の聖女として無意識に彼の傍らに立っていたときの天上的に降下してくる顔の線を眺めていた。 — まだ彼は、一つの夢が、つまり人間の過去のプロテウスが天から空中の像を引き寄せてきて、それを演出していると考えていた。そして彼はそれが過ぎ去るのを待っていた。それは静かに黙って留まっていた。跪いて、変容と神聖さで溢れる広大で長い天国の開かれた門を前にしているかの如く、そして大地の谷間から引き裂かれて、彼は叫んだ。「霊よ、御身は神の許から来たのか、御身はリアーネか」、彼は自分は死ぬのではないかと思われた。

素早くその白い形姿は振り返って、その若者を見た。彼女はゆっくりと立ち上がって、言った。「私はイドイーネと言います。苛酷な錯覚は私のせいではありません。とても不幸な若者の方」。 — そこで彼は自分の目を覆った。重く冷たい現実の再来で素早く痛みを感じてのことであった。その後彼はその美しい乙女を再び見つめた。そして彼の全本性が死んだ女性との神々しい類似性を前にして震えた。このようにいつもリアーネの優しい口は愛するときや悲しむとき微笑むのであった。このように彼女の穏やかな目は開き、彼女の繊細な髪はまぶしく白い、愛らしい顔の周りに見られるのであった。そのように彼女の美しい情緒と人生のすべては率直に彼女の顔に描かれているのであった。 — ただ

イドイーネの方がより大きく、蘇った女性のように、その形姿はより誇り高く、背が高く、その色合いはより青白く、乙女らしい額はより思慮深かった。彼が彼女を黙って比較しながら見つめていたので、欺かれた不幸な若者への感動を抑えられずに、彼女は泣いた。彼も泣いた。

「私は貴女をも悲しませているのですか」と彼はこの上なく感動して言った。花の下に横たわっている乙女の言葉の調子で無邪気にイドイーネは言った。「私は自分がリアーネでないことをただ泣いているのです」。素早く彼女は言い添えた。「この場所はとても神聖です。でも人間は十分に神聖ではありません」。 — 彼は彼女の自己非難が理解できなかった。畏敬と率直さと感激とが彼を占有し、人生は輝いて、その狭く不安げな現実から、棺からのように起き上がって、天は高い星々と共に間近に沈んできた。両人は星々の下の中央に立っていた。「高貴な侯爵令嬢」（と彼は言った）「ここで私ども両人は詫びることはありません。 — この神聖な地は、第二世界のように、他人行儀を取り外します。

— イドイーネ、私は貴女が私にかつて安らぎを与えたことを承知しています。精神のこの覆われた外皮を前に、その精神の意味で貴女は語られたのですが、ここで貴女に感謝申し上げます」。

イドイーネは答えた。「貴方と面識がなかったので、私はそのことを行いました。それ故に消失して行く類似性の短い使用、あるいは誤用を敢えて行うことができたのです。私次第ということでしたら、貴方を、外見上の類似性というような些細な類似性^{リンデンシュタット}でかくも痛々しい思い出に耽らせることはなかったことでしょう。貴方はもはや菩提樹の町にはいらっしやらないと知らせがありました」。 — 彼女は今や去ろうと急いでいた。「数日したら」（と彼は答えた）「私も旅します。私は墓塚や砂漠での安らぎに抗して、戦争に慰めを求めています。それが私の人生を静めてくれます」。 — 「真面目な活動は、私の言葉を信じてください、結局いつも人生と和解するものです」とイドイーネは言った。しかし落ち着いた言葉は震える声で語られていた。というのは彼女の姉のお蔭で、彼の現在の灰色の雨の国全体を眼前にしていたからであり、彼女の心は人間に対する深い同情で満たされていたからである。

彼はここで彼女を鋭く見つめた。いつも語りながら大きな両目全体に垂れてくる彼女の尼僧の臉で、彼女は微睡んでいる聖女に似て見えていたが、 — 彼は彼女の最後の言葉を聞いて、アルカディアでの実り多い生活を思い出していた。アルカディアでは彼女の理念や夢の多彩な花粉が、単なる富の重く死んだ黄金の粉末とは違って、軽快に快活な生活の中で舞いながら、いつの間にか活気付け、最後には大地に確かな森や庭園を広げていたのである。 — 彼の中のすべてのものが彼女を愛し、叫んでいた。ただ彼女だけが、おまえの初恋のように、おまえの最後の恋であろう、と。 — そして彼の心全体が、傷で開かれて、静かな魂に開示されていた。しかしある真面目な、苛酷な精神がその心を再び閉ざした。「不幸な男よ、もはやどの女性も愛するなかれ。というのは暗い死の天使が、おまえの恋の背後を、剣を携えて行き、どんな薔薇の唇をおまえが接吻しようと、その天使はこの唇をその鋭い刃で触れ、あるいは毒の先端で触れる、そうして彼女は逝くか、出血することになる」。 —

彼はすでにこの剣の煌めきが長い暗闇の中で光るのを見た。というのはイドイーネは、決して自分の侯爵の身分以下の者とは愛の同盟のための手を差し出さないと誓っていたか

らである。かくて二人は別れて、隣り合って、一つの天の中に立っていた。一つの太陽と一つの月であって、地球によって別れていた。彼女は別れを急がせた。アルバーノは彼女の同伴をするのはふさわしくないと考えた。彼に退くように合図した灰色の服の人々は彼女の従者達であって、彼女を一人っきりにさせる役目であったのだと今推察したのであった。「より幸せにお過ごしください、伯爵様。いつか貴方にふさわしい程にお幸せな貴方と再会したいものだと思います」。雲から差し出されたような天上的な手の如き手と触れて、彼の中を、蘇った者達が軽快に微光を放つかの世界の神々しい炎が貫流した。そして高貴な、畏敬の念を与える形姿は彼の心を夢中にさせた。 — 彼は自分が自らの中で勝ち取り覆っていることを言うことができず、また別の冷たい変装した言葉も言えなかった。

— 彼は跪き、彼女の手を胸に押し、泣きながら星座の天を見上げて、ただこう言った。「至仁の天よ、安らぎを」。 — イドイーネは急いで向きを変えると、数歩急いだ足どりの後、ゆっくりと小さな丘を「皇子の庭園」へと降りて行った。

数分すると彼は彼女の馬車の松明が夜の中を飛んで行くのが見えた。夜彼女は敢えて好んで旅した。丘の周りは暗く、夕焼けと宵の明星は沈んでいて、地球は夜の煙と瓦礫と化して、地平線上には雲の喪の足場が築かれていた。しかしアルバーノの中には何か得体の知れない喜ばしいものが、明るい点が心の暗闇の中にあった。彼がその輝きの原子を見つめていると、それは拡大し、一つの光輝、一つの世界、一つの無限の太陽となった。今や彼はそれが分かった。それは黙して耐えることのできる正当な、無限な、神々しい愛であった。その愛は、利己的愛を知らず、ただ一つの幸福を知っているだけなのだから。

彼は自分の胸を隠していたこと、彼女には町で再会しないという自分の決心を喜んだ。「かくも静かに」（と彼は半ば祈りながら、半ば語りながら言った）「私は彼女を永遠に愛することにしよう。 — 彼女の平静、彼女の幸福、彼女の美しい努力は私には神聖なままであって欲しいし、彼女の形姿は彼女の天の姉妹の形姿のように隠されたまま、遠くにあって欲しい。 — しかし正義のための戦いが始まって、音色が旗の横で高く響き、心がより強く出血するために、より熱く鼓動するとき、そのときには御身の像が、イドイーネよ、私の天に先駆けて来て欲しい。私は御身のために戦う。そして喧騒の中、未知の死の天使が、胸に有毒に斬り付けるとき、私は、大地が消えるまで、萎えた心の中に御身をしっかりと抱いていることにしよう」。

彼はこの祈りの後、快活に乙女らしい心の墓地の方を見た。そして彼は、リアーネだけがそのことを知ってよく、彼女は彼のことを祝福するであろうと感じた。

第百三十八周

アルバーノは、自分の青春の破壊された太陽の神殿の個々の柱やアーチが散在している一帯で夜を過ごすことはできなかった。彼は悲しく夢想して町への道に向かった。途中で彼は馬上の地方総裁のヴェールフリッツに出会った。彼は彼を探していた。「息子殿よ」（と彼は言った）「おまえさんの親密な友、ショッペ殿から、極めて重要な品を手預かっているのだが、これを私はただおまえさん自身の手で渡さなければならず、これをここで急いで行こう。というのは何ともまあ暇がないからなのだ。侯爵が今晚驚きの余り身罷られた。誰かがこう言ったのだ、侯爵の父親が、この父親は死の印として二度目に出現する

と約束していたのだが、鏡の部屋に現れた、とな。しかし聞くところによるとそれは単に蠟製のものだったそうだ。これが渡さなければならない品で、第一に望遠鏡、これでおまえさんはおまえさんの描かれた母親と妹とを覗いて欲しいというのだ（私は努めてショッペ殿の独自の言い方を使用している）、第二は手紙の小包で、『ヴェールフリッツの許で育てられたアルバーノ宛』となっていて、これはまだ半分が砕かれた黒い大理石の段に収まっている。第三はおまえさんの肖像画だ」。肖像画は今の年齢のアルバーノを描いていた、とそう思われた、一 星の輝きで見られる限りのことで、一 しかし彼は自らモデルとなったことはなかったのである。黒い大理石の段と望遠鏡はイーゾラ・ベッラ[島]での彼の父親の予言を^{*1}彼の魂に思い出させた。彼に向かって絵画陳列室である女性の形姿が壁から出現し、黒い段がどこにあるか、その箇所を彼に描くであろう、その前に望遠鏡のある箇所を示してくれようというもので、その望遠鏡の接眼レンズでは彼の妹の老いた姿から若い姿を分かるように見せ、その対物レンズでは母親の若々しい姿から老いた姿を分かるように見せることだろうという話であった。

アルバーノはショッペについての不安げな質問と、この奇妙な積荷の発見のいきさつを尋ねた。「ショッペ殿は十分達者だ」（とヴェールフリッツは言った）「彼は今ある見知らぬ紳士とこの近くにいるに違いない」。アルバーノは彼の衣装について尋ねた。この衣装は驚いたことにまた緑色から赤色になった。ヴェールフリッツが、いかにしてショッペはかの珍しい品を取得するに至ったか不思議な話をし始めたとき、アルバーノはその品から父親の予言の解決を読み取って、期待の余り、その報告を中断させ、近くの十字架礼拝堂まで同伴するよう頼んだ。その教会の周りに幾つかのランタンが立っていた。彼はいつも両メダルを携帯していた。そして今や彼の母親の顔を対物レンズで見、また文書を読もうと熱望していた。

一番外のランタンの許に両人は留まって、アルバーノは老いた形姿のメダルを取りだした。その下にはこう記されていた。「オ兄さま、私ドモハイツカ会ウコトデショウ」と、そして彼はそれを接眼レンズで見た。その老いた顔は彼のユリエンネの若い顔となった。信頼し、性急に彼は若い像に老化させるレンズを当てた。その下には「息子ヨ、私ドモハモハヤ会ウコトハナイデショウ」と記されていた。一 ある好意的な、長い人生の中から微笑みかけてくる老いた顔が出現した。その原物を眺めたとき、それはある深く暗い記憶の中に横たわっていたが、しかし名付け難いものであった。しかしリンダの母親の特徴は何もなかった。

突然彼は馴染みの声を聞いた。「こちらだ、こちらだ。私の甥よ、御主人」。それはアルバーノの叔父で、黒い服を着た、哀悼しているショッペを連れて来ているように見えて、泣くように甥に語りかけた。「甥殿、私は本当のことを話す。ただ真実だけを永久に」。彼は笑っているように見えたが、しかし泣いていると思っていた。黒い服の男は近寄って来て、緑の服と分かったが、言った。「伯爵殿、一刻も錯覚なさらなさい。私どもの仲は共通の友の喪失で始まります」。一 「ショッペよ」（とアルバーノは動じて言った）「もう私のことが分からないのかい」。一 「今ショッペだったらと思います。

*1 『巨人』、第一巻、40 頁等。[第五周、拙訳 22 頁]

私はジーベンケースと言います」と緑の上着の男は答えて、嘆かわしげに両手を高く上げた。「彼は礼拝堂に横たわっている」（とスペイン人は言った）「私は首尾一貫するようすべてを正直に話すことにしよう。闇の者が来るとは思わない」。 — アルバーノは礼拝堂に一瞥を投じた。そして痛み的一声を上げて、彼は崩れ落ちた。

第百三十九周

ショッペの話はヴェールフリッツと叔父の陳述によると以下のような次第であった。彼は強制睡眠から熱くなって起き上がると、復讐の鼻息の荒い軍馬に乗って、叔父めがけて突進して行った。叔父の旅館で彼は従者の嘘で宮殿へ赴いた。ここで、彼は、病床の侯爵の周辺の混乱した騒ぎの中、誰にも咎められずに、いつの間にか鏡の部屋へ入って行った。そこはかつて彼が伯爵令嬢のリンダに狂った友人アルバーノのためにイドイーネの安らぎの言葉を依頼した所であった。年齢の長い年月を若い顔に刻み込み、時の苔や瓦礫をその顔に振りかけるその円筒の鏡が彼に自分の像を苔むしたもの、荒れたものにしたとき、彼は言った。「ほほ一、古い自我殿がどこか間近に潜んでいる」と、そして憤激して周りを見回した。

諸像の対鏡から彼は自我の民衆を眺めることになった。彼は一つの椅子に飛び乗って、長い鏡を外そうとした。彼がその鏡の釘を動かし、壁では一つの時計が十二回打った。ここで彼の友アルバーノが彼に打ち明けていたガスパールの予告と、アルバーノに対し謎の解決として処方されていたすべての規則が彼に思い浮かんだ。予告では確かに絵画陳列室が話題に上がっていた。しかし鏡の部屋もその一つであって、ただ壁の背後でより流動的で、より奥まっていた。彼は（ガスパールによって与えられた規則に従って）鏡を取り外した。 — 鏡の大きさの壁紙のドアを見いだして開けて、 — その奥に木製の女性の形姿が左手に広げられたメモ帳を、右手に鉛筆を持って座っていた。 — 彼は（指図通りに）左の中指の指輪を押した。その形姿は、内部で回転しながら起き上がって、部屋の中へ歩み出て来て、 — 向かい側の壁の所で立ち止まった。そして手の鉛筆で一本の線を下に描いた。その背後の棚の中に望遠鏡と棺の鍵の蠟製の模造があった。 — その時彼は薬指を押した。すると指は鉛筆をメモ帳に置いて、こう記した。「息子よ、ブルーメンビュール教会の侯爵の地下納骨堂へ行って、エレオノーレ侯爵夫人の棺を開けなさい。そこに黒い段を見いだすだろう」。 —

そのようにして、それでも黒い段が棺の中に見つからなかったら、と騎士はアルバーノに語っていた。小指の第三番目の指輪を押すといい、その後何が起こるか、騎士自身も前もって知っていない、と。ショッペはブルーメンビュールの教会へ行く前に、この指を押してしまった。 — その像は立ち止まったままであったが、 — しかし内部では回転を初めて、 — 両腕が広がって、落下した。 — 歯車が回転して出て来て、 — 最後にその形姿全体が機械仕掛けの自殺で分解して、蠟製の老いた頭部が出現した。

この時、ショッペはそこを去って、ブルーメンビュールへ走って行き、地下納骨堂からこの夜景画のための明かりを取りに行った。まさに正午で教会と地下納骨堂は — ひよっとしたら新しい瀕死の洞窟の客人のため場所を用意していたからか、 — 開けられたままであった。まず蠟製の鍵を鉄の鍵に変えることをしないまま、彼は性急に作業用の鉄

で棺をこじ開けて、黒い段とアルバーノの肖像画を素早く取りだした。彼は茂みの背後で、その黒い段を壊した。しかし彼は上書きを読むと、それ以上調べなかった。彼はすべてを渡すためにアルバーノの家へ急いだ。兩人ともお互いに探し合っていたが無駄であった。しかし彼は実直なヴェールフリッツに出会って、ただこの人物一人を通じて、かくも重要な獲物を送り届けることにした。彼自身は今や不倶戴天の敵、スペイン人を追いかけて行った。どんなに強引なことをしても彼を怒りの猟から押し留めることはできなかった。

日没時にショッペはスペイン人が、彼の手の中へ走り込んで来るのが見えた、このスペイン人は「皇子の庭園」から、同じ似姿のジーベンケースから逃れて来たのであった。

— 彼はこの狂人の姿を見て、凝固して叫んだ。「何ということだ。貴方は私の背後にいるのか、私の前方にいるのか。貴方は赤色か、緑色か」と。 — そして脇の古い十字架礼拝堂へ転がり込んで、聖母に跪いて呼びかけた。ショッペはコンドルの翼を広げて、飛び込み、礼拝堂の前で翼を打ち合わせた。「スペイン人よ、向き直れ。汝を先の方から食べよう」と彼は言った。「神の聖母様、私を助け給え。 — 善良なる邪悪なる霊よ、私に加勢し給え。闇の者殿よ」と禿頭は祈った。 — 「悪漢よ、さっさと冗談抜きに転げ落ちよ」とショッペは言って、引き抜いた仕込み杖で空中に背後からその顔前で一つの馬蹄形を描いた。彼は惨めに跪いて向き直り、頭を力なく首から垂らした。ショッペは始めた。「汝を掴まえたぞ。不埒者め、私に跪いて懇願しても無意味だ。 — 私は正義の剣を有する。 — それに私は狂気だ、 — 数分後には、お互いに話し尽くしたら、この仕込み杖をお見舞いする。 — 私は固定観念の狂人なのだから」。 — 「旦那」（と禿頭は答えた）「貴方はとてもきつと物わかりが良く、分別があり、正気であります。後生です。殺害することは大きな死罪です」。 — ショッペは答えた。「私の分別については別の折でいい。私は汝をすでにその似姿で射殺している。私は死罪や良心の呵責を無益に抱いていたくない。本当に関与したい。汝、魂の絞首刑人よ、汝、心の穿頭器よ」。

「ショッペよ、ショッペよ」とこの時数回遠くからアルバーノの声がした。彼は素早く振り向いたが、何も見えなかった。「善良なるショッペよ」（とその声は続いた）「私の叔父を放しておくれ」。この時ショッペは燃え立って、短剣を刺すために持ち上げた。「汝、化石化した腹話術師よ。すぐに傷付いた馬の如く突き刺してやろうじゃないか。鼻先に地獄の忌まわしい殺害、殺人が目に見えないのか。汝のペストの馬車がすでに準備されており、死の詰め物をされた骸骨が私の肉の中に潜んでいて、今大鎌を上げるのが見えないのか。スペイン人よ、イエスにかけて告解することだ。私が突き刺し、刺し殺す前に、蠅野郎よ、告解することだ。さすれば、地獄の悪魔どもの前で、少し予防することになるぞ。さもなくんば向こうで全く破滅した男ということになるぞ」。

「神父はどこだ。私は告解しよう」とスペイン人は言った。

「ここに汝の絞首台の神父がいる、刈り跡を見るがいい」とショッペは言って、屈んで剃髪された頭から帽子を揺すって落とした。

「私の告解を聞き給え。 — しかし夜には闇の者殿は、私が真実を話すのを好まれない。 — 殿はきつとやって来て、私を連れ去る。神父よ、悪魔に対して私をいぶし給え。塩抜きにし給え」。

「継子の告解の息子よ。盗人よ。私はきつと汝を塩抜きにするであろうし、私は汝にとって十分に告解の神父、告解の父ではないか。犬よ、一切を言うがいい。私は汝を放免す

るし、それから汝を死ぬほど殴って、懺悔させよう。 — 白状するがいい、汝、悪魔の戴冠記念硬貨よ、汝は同時に禿頭であり、死の神父であり、ガスで一杯の像としてモータで天に昇った僧侶ではないか。そして腹話術仕掛けと蠟人形仕掛け、更に若干の悪戯をしたのではないか」。

「その通り、神父よ。腹話術仕掛け、蠟人形仕掛け、それに悪行だ。しかし邪悪なる霊がいつでも居合わせて、私はしばしば何も言わないのに、それでも話されて、形姿どもが走って行った」。 —

「モルディアンよ」（とショッペは言った、その言に怒っていた）「犬野郎にかかれ。

— まだ汝は嘘を付いている。楽園へ埋葬された汝、下水溝よ、偉大な運命の女神パルカの耳の中へ嘘を付いている。汝、擬態的なミイラよ、唇と舌のない汝の髑髏は動いてなお嘘を付くのか。神よ、御身の人間どもは何たる者か」。

「神父よ、嘘ではありません。しかし闇の者殿は、夜、嘘を欲せられる。私はこの殿と一つの同盟を築いた。 — 私は今晚この殿を見た、殿は貴方のように見え、緑色であった。 — マリア様よ、神父よ、私は真実を述べた。向こうから殿が緑色でやって来た。

— 神父よ、マリア様よ、そして殿は貴方の形姿をしていて、手に炎の目[柄付き眼鏡]を有していた。 —」。

「誰も私の形姿は」（とショッペは動揺して言った）「自我殿以外は有しない」。

「見回してくだされ。邪悪な精霊が私の許にやって来る。 — 許してくだされ、 — 刺してくだされ、 — 私は絶えたい」。 —

ショッペはようやく振り向いた。彼の形姿の歩み寄って来る鋳型がやって来た。 — 手にしていた炎の目[柄付き眼鏡]は顔に上がった。 — この自我の仮面は緑色の服であった。 — 「邪悪な精霊よ、私は耳許に告解をしている。汝は来られない、私は神聖なのだ」とスペイン人は叫んで、ショッペを掴んだ。彼を犬が吠えた。ショッペは緑色の形姿を見つめた。 — 短剣が彼の手から落ちた。「ショッペよ」（とその形姿は叫んだ）「私は君を探していた、私のことを覚えていないのかい」。

「十分長いこと覚えている。古い自我殿だ。 — その顔で私の顔に近付き給え。そしてこの愚かな実在を冷たくすることだ」とショッペは最後の男性的力を振り絞って叫んだ。「私はジーベンケースだよ」とその似姿は優しく言った。そして全く間近に歩み寄った。

— 「私もそうだ、私は私に等しい」と彼は更に小さな声で言った。しかしそれから圧倒された人間は崩れた。そしてこの浄化する嵐は一つの溜め息を付く、静かな微風となった。白くなって行く顔色で、痙攣しながら、自ら凝固した目を閉ざしながら、彼は崩れ落ちた。戯れる指はまだ犬を誘っているように見え、唇は尖って、何か嘲笑の言葉を発しようとしたが、何も言わなかった。 — 何も推察できなかった友人のジーベンケースは、泣きながら、冷たい、固く握りしめられた手を、自分の心の許、自分の口許に上げて、叫んだ。「兄弟、目を開けておくれ。ファドゥーツからの君の昔からの友が君の横に立っていて、死の苦しみの君を見ている。君に千ものご機嫌よう、ご機嫌ようを申し上げる」。

—

これは生に対してまだ開けられている耳を通じて散って行く心臓に、まだ昔の愛しい時代の甘美な音色と永遠の愛の快活な夢想を導くように思われた。 — 口は、小さな微笑を浮かべた。快樂と死とに同時に引き締められていた。 — 幅広い胸は今一度一杯にな

って楽しげな溜め息の準備をした。 — それは人生の最後の溜め息であった。微笑しながら故人は大地に留まっていた。

今や御身は現世で終えた。厳格で堅固な精神よ。そして御身の胸の最後の夕べの雷雨の中で、更に、一つの穏やかな、戯れる太陽が溢れて来て、それを薔薇と黄金とで満たした。はかない諸現世が形成されている地球とすべての地上的事柄は御身にとっては余りに卑小すぎるし、軽すぎるものであった。というのは人生よりも何か高貴なものを御身は人生の背後に求めていたのだから。御身の自我でもなく、死すべき定めのもでもなく、ある不滅の者でもなく、永遠の者、万物の最初の者、神を求めていた。 — 現世の仮象は御身にとっては、邪悪な仮象にしる、善良な仮象にしる、御身にはどうでもいいものであった。今や御身は本当の実在の中に休らっている。死は暗い心から鬱陶しい人生の雲全体を取り除いてしまった。そして永遠の光が、御身が長く求めていたものが、覆われることなく残っている。そして御身は、その光となって、再び炎の中に住んでいる。

第三十五ヨベル期

ジーベンケース — 叔父の告解 — アルバーノの母親の手紙 — 王冠の競争 — 物語の木霊と白鳥の歌

第四百十周

長いことアルバーノは孤独な暗い深淵にいたが、とうとう明かりが彼が転げ落ちることになった峡谷と緑の高台とを照らし出した。この友人のいつもは生命の色彩の男性的顔が白くなって、彼の前にあり、赤い外套はまだ死者の雪の色を高めていた。犬は頭を、あたかも胸を温めて守りたいかのように胸の上に置いていた。アルバーノがむき出しの短剣を見たとき、彼は周りの一円を見回して、冷たい叔父を前に、死者の生きた兄弟の像を前に、そして他殺か自殺かの最初の疑念を前に、身震いした。そして小聲で尋ねた。「どうして亡くなったのですか」。 — 「私のせいです」（とジーベンケースは言った）「私どもが似ているせいで、彼は自分自身を視たと思ったのです。こちらのこの方が請け合っていますように」。叔父は若干の要点を語った。アルバーノは彼から耳と目を転じた。しかし友の形姿の温かい反照の中へ彼は視線を落とした。この視線には友情の日中の明かりは沈んでしまっていた。ジーベンケースは自己を稀な男性的姿勢で主張しているように見えた。より年若い友のアルバーノも、自分がかくも多くを失い、今や自分の孤児の心を寄る辺ない子供のように人生の砂漠の中へさらけ出しているという自分の嘆きを隠していた。

ヴェールフリッツは、彼に町への旅のために馬を一頭更に準備すべきか、彼に尋ねた。「私にですか、私も町へ行かなければなりませんか」（とアルバーノは尋ねた）「いや、父上、私とショッペは今日皇子の庭園へ行きます」。彼は町の単なる黒い教会墓地の風景に驚いていた。この町はかつて彼にとって黄金の太陽の陽光と木陰道と、花の装飾で一杯の天国の門が花咲いていた所であった。愛の若い蜜蜂、友情の古いワイン、両方が運命によって墓地に注がれていた。

死者は「皇子の庭園」の新しい館に運ばれた。ただアルバーノとジーベンケースだけが死者に従って行った。彼らだけになったとき、アルバーノは初めて、彼の友のこの友が震

えて、よろめいていること、今までただその精神だけが肉体を支えていたことに気付いた。「さて我々兩人が」（とアルバーノは言った）「お互いに悲しみ合うことが許されましよう。ただ貴方だけを信じています。彼の最期はどんな風だったのですか」。ジーベンケースは彼の前で哀れなショッペの最期の表情、言葉を述べた。「数ヵ月の狂気が」（とアルバーノは言った）「一つの瞬刻[一分]となったのであれば、彼は簡単に亡くなったわけではないでしょう。 — かくも強固な人生を引き裂いた地獄の川はすさまじいものであったに違いありません」。 — ジーベンケースはショッペの狂気をなかなか信用して受け入れなかった。故人はしばしばその人生の素晴らしい瞬間でも同様に誤解されて来たからである。しかしアルバーノは彼をようやく納得させた。彼は更に、自分は帰郷の途次であったが、自分が故人とよく取り違えられることからこう推測するに至った。こちらに長く会っていなかったライブゲーバーが行き来しているに違いない、と。もっとも自分は最初の出会いと比較とをほとんど恐れなければならなかった、と語った。「というのは、伯爵殿」（と彼は言った）「歳月と仕事、殊に法律的工作、それに人生そのもののせいで、人間はますます墮落して行くもので、最初はエーテルから空気の中へ、それから空気の中から大地へと墮ちて行きます。彼は私と分かってくれるだろうか、と私は言いました。私はもはやかつての私ではなくなっています。そして多分観相学的類似性が唯一の最も確かな類似性として残っていたのかもしれませんが。しかしこの類似性も消えていました。故人はまだ十年前と同じように見えます。自由な魂だけが年を取らないのです。 — 伯爵殿、私は以前、あれこれの冗談を人生に対しても、死に対しても行う男でした。そして私は叫ぶことができたものです。いやはや、地獄の蓋が開いたなら、云々と。 — いや、ライブゲーバーよ、ライブゲーバーよ。『時』は優しい、小さな波を有している。しかし最後にはどんな角張った鋭い小石もその中で滑らかに、鈍くなるものだ」。 —

「彼の往時のどんな些細なことも教え上げてください」（とアルバーノは頼んだ）「彼の朝焼けの時からどんな露の滴も結構です。彼は漠たる昔の事には寡黙でした」。 —

「誰に対してもそうでした」（とこの未知の男は言った）。 — 「ともかく本当の、現場で集められた事実から証明しようと思えば、彼はヘムスターホイス [Hemsterhuis (1685-1766)] 同様にオランダ人で、ルヴァイヤン¹ の猿のように本来はケースという名前でした。それにジーベン[七]とかセブンという名を付けたのです。ジーベンケースというのが最初の名前ですから。アムステルダム銀行から彼の国家歳入を引き出していました。大晦日ごとに彼は前年の書類を焼いていました。どのようにして『ライブゲーバー哲学の鍵』が世に知られるようになったのか、私はまだ分かりません」。 — その後彼は彼らの最初の名前の交換を語った。その時ショッペは彼からライブゲーバーの名前を借用したのであった。それから先の貧民弁護士に対する彼の忠実な心の時間と行為とを語り、また彼らの二回目の名前の交換を語った。それからジーベンケースはその名前で埋葬させて、ライブゲーバーとして暮らし続けたのであるが、更にフォークトランドの村での彼らの永遠の別れについて語った。

ジーベンケースはここで話しながら、冷たい手を握りしめて、こう語った。「ショッペ

*1 (訳注) François Levaillant(1753-1824):Reisen in das Innere von Afrika. J.R.M. Forster 訳 1790 年参照。

よ、私は君とは神の許でまず会うであろうと思っていた」。そして泣きながら故人の上に屈み込んだ。アルバーノは涙を流し続けながら、もう一方の亡き手を取って、言った。「私どもは誠実な、純粋な、勇敢な両手を握っている」。 — 「誠実な、純粋な、勇敢な手です」とジーベンケースは繰り返して、ショッペ風な微笑を浮かべて言った。「彼の犬は見守っていて、そのことを今一度証しています」。しかし彼は感動で青白くなり、今や全く故人のように見えた。そして彼とアルバーノは沈み込んで冷たい顔に触れて、アルバーノは言った。「私の友でもいてください、存命の方。私どもは互いに愛し合えましょう。彼が我々を愛したのですから。 — 青白い方、御身の姿は、御身の昔からの友人に対する私の愛の封印であって欲しい」。

アルバーノは今や窓を開け放ち、夜、彼に東の墓と南の墓、その隣の空いた第三の墓を示して言った。「かくて私は人生について三回泣いたことになります」。 — ジーベンケースは彼の手を握って、ただこう言った。「運命の女神パルカと復讐の女神は手を取り合って人生の周りを行きます。優美女神やセイレーン達のように手を取り合って」。彼はこの稀な、美しい、炎のような若者を細やかな情愛を込めて見つめた。しかしアルバーノは、愛されていることを余り期待していず、ディーアンやロケロールのような炎の表情に慣れていて、自分がどれほどこのより静かな者の心を捉えたか分かっていなかった。

第四百十一周

朝方にはもっと多くの太陽と力がアルバーノの胸に戻って来た。彼は今や彼の人生の平板になった平原で、自ら山を隆起させなければならなかった。ただ自分の輝かしい日々のすべての比武の同志達が消えてしまったペスティッツを再び見ることは、唯一の者ディーアンを除いて、避けた。「ディーアンが胸に墓を抱くことになったら、去って行き、誰も別れの挨拶をしないことにしよう」と彼は言った。

すると厭わしい叔父が、魔法の杖一杯の馬車と友にやって来て、泣き顔で言った。自分はカルトゥジオ会修道院へ行って、すべての罪の贖罪をする。その前に甥に、言葉と共に馬車で、彼の望むことすべてを説明したい、と言った。「貴方のことは何も信じない」とアルバーノは言った。「今はすべての真実を語ることが許されている。思うに従兄弟殿、闇の者殿が私に何もしないからだ」（とスペイン人は答えた）、 — 「あの方は」（と彼はこっそりと臆した眼差しでジーベンケースを見て言い添えた）「従兄弟殿、闇の者殿ではないでしょうな」。アルバーノは何も知らうとせず、聞こうとしなかった。ジーベンケースは彼に、闇の者殿とは誰かと尋ねた。「それは無限の男で」（と彼は始めた）「とても黒く、暗いのだ。自分が岸辺で霧の前に立っていたとき、初めて海を越えて自分の前に歩んで来たのだ。 — 夜自分は彼がよく呼ぶのを耳にしてきた。時折自分は自分の腹話術を繰り返したものだ。 — 自分が日没後に多くの真実を語ると、脅迫を一杯手にして早速自分の前に出現したものだ。それ故自分は十字架礼拝堂の中で現在のこの御主人をとっても恐れたものだ。 — しかし今は、何の害もなく礼拝堂で改心して以来、一日中真実を語っている。カルトゥジオ会修道院では自分は更にもっとそうすると考えている」。

「僧院では普通まさに真実は住んでいません。それ故に、思うに沈黙の誓いが要求されているのです。沈黙は真実にとって、沈黙を破ることよりもいつも一層有益ですから」と

ジーベンケースは答えた。「おや異端だ、異端だ」とスペイン人は思わず怒って叫んだので、アルバーノはこの人間らしさを見て、突然この叔父の目下の真実らしさの保証を得ると同時に、その狭小な精神の幅の保証も得た。そこで初めて彼は叔父に、これまで速やかな不思議の花を促進するために使用してきた大地と種子について尋ねることになった。

彼はこの質問に対して一つの箱を運び上げさせた。「尋ねるがよろしい」と彼は言った。「マッジョーレ湖ではロメイロ嬢の形姿はどのようにして上がったのか」とアルバーノは言った。叔父は錠を開けて、一つの蠟人形を見せて言った。「ただ彼女の母親だった」。アルバーノは彼の沈んだ太陽のこの間近な幻日に対し、またショッペが彼に吹き込んだ近親の推測に対し、身震いした。「私は彼女と近親なのか」と彼は素早く尋ねた。叔父は狼狽して答えた。「多分違うだろう」。アルバーノはモーラの昇天する僧侶について尋ねた。「僧侶は上はガスが詰められていて、下は壁に私が立っていたのだ」と叔父が言った。アルバーノは更に知ろうとは思わなかった。箱には更に聴診器や拡声器が、仮面の顔が、青いガラス、これを通じて風景は雪が降っているように見えるもので、それに眠り薬の入った絹製の花等々があった。アルバーノはもはや何も見たくなかった。

「悪漢め。誰に雇われてこんなことをしたのか」とアルバーノは尋ねた。「強い兄上だ」（と叔父は言った。騎士のことを通常彼はこう呼んでいた）「兄上が生活費をくれたし、それに私を射殺しようとした。人々が上手く騙されると高笑いするからだ」。 — 「そのことは一言も言うな」（とアルバーノは痛々しく叫んだ。騎士に対する怒りは彼の血管のすべてに涙の炎と毒と共に噴出した）。「不幸な奴。何故そんな者になったのか」。 — 「そうかい、私は不幸かい」、と彼は氷のように冷たく尋ねた。彼は報告したが、 — しかし途切れ途切れで、混乱しており、これは彼がどんな言語であれ、自分の役目を話すときそうなるのであったが、しかし他人の名前で、例えば禿頭の名前で言うときは、上手に長く話せるのであった。 — 「自分は黒々とした灰色の目と青い目とを有し、成人してからは隠された禿頭と特別な記憶力を有し、それ故俳優となろうと思った。自分は何もすべきことがなかったからで、というのは決して惚れたことがなかったからだ。しかし自分は即興で演じない限り、上手く行かなかった。 — すべての奇形児の真似をすることができたジョーゼフ・クラーク [Joseph Clark (1696 年頃死亡)] と三役の人物で徘徊していたペテン師のプライス [James Price (1752-83) 水銀から金を造れると主張した] を自分はいつも目指していた。 — そのとき闇の者殿が夕方再び川を越えて岸辺の霧の中、自分の方へ向かって来た。そして腹の中からこうつぶやくのであった。『ペッポー、ペッポー*1、本当の言葉を飲み込め、私が別の言葉をきくと発声させよう』と。 — この時から自分は腹話術ができるようになった。 — 自分は腹話術で、死者や啞者、言語機械、鸚鵡、眠っている者、余所の人々を劇場で上手に話せるようにできた。しかし教会では誰もそうはできなかった。これができたら、自分は面白かったであろう。 — 自分は絶えざる木霊をしばしば岩の上で放ったので、それで人々は、いつ去るべきか全く分からないのであった。自分はまたかつて死者達で一杯の戦場全体を互いに話すようにさせ、すべての言語を操ってそうさせて、老将軍を驚かせた」と。

*1 Josephchen [ジョーゼフちゃん]

「それはどこだったのか」とジーベンケースは尋ねた。 — スペイン人は正気に戻って、答えた。「私には分からない。それは本当のことか。すべての人間が嘘を付くと聖書は語っている[詩篇、116.11]」。 — 「貴方の闇の者の精神同様」とアルバーノは言った。「ほとんど真実ではない」。 — 「いや、マリア様」と彼は決然と言った)、 — 「私が何かを予言すると、闇の者殿は、やはりそうなるようになされたのだ。それから私の前に現れて、言ったものだ。そうだろう、ペッポー、しかし真実は語るな。 — 夜、私が貴方の横をリラルへと行ったとき、闇の者殿は下の谷を人間として空中を通過して進んだものだ」。 — 「それは私も見た」とアルバーノは言った。「其奴は、動くことなく、漂って進んで行った」。 — 「それは単に」とジーベンケースは微笑して言った。「進行して行く小舟の中、両脚を隠して立っていた者にすぎなかったのであり、それ以上の者では有り得ない」。 — するとスペイン人は死者のこの似姿を戦慄と共に見つめた。この似姿を秘かに闇の者の精神そのものと見なして、アルバーノの耳につぶやいた。「ほら御覧、この方は承知している」、そして真実を詫びて、こう言った。「太陽はまだ沈んでいない」、そして人々の依頼を聞き入れずに、その依頼の力をかけて彼は知ることがなくて、苦しみも喜びもなく、急いで立ち去り、まだ日没前に近くのカルトウジオ修道院の中へ入ろうとした。すべてのいかさまの道具を彼は置いて行った。

「恐ろしい」人間です」とジーベンケースは言った。「彼が前に一度何ごとかについて喜ぼうと思ったとき、あたかも顔に痛みが走ったかのように見えました。 — 彼が細く痩せて立っていて、脇を見て、音節を飲み込むその様ときたら。 — きっと彼は表情を変えずに、怒りのためにすら変えずに、人を殺せることでしょう」。 — 「彼は、自分が視ているという闇の者の精神です。彼の言葉を引くことはやめてください」とアルバーノは言って、今や突然自らの精神の前に引き入れられた全く新しい世界へと急いだ。

第百四十二周

つまり彼は、これまで痛みの霧によって隠されていた文書、即ちショッペが侯爵の地下納骨堂から取って来た文書と、接眼レンズの許で見いだされた筈の母親の像のことを考えたのである。その像をその余所の男[ジーベンケース]に見せ、たまたま分かるのではないかと尋ねた。「よく分かります。国の賛美歌の本の銅版面が類似性を前提として良いとなれば、これは亡き侯爵夫人エレオノーレです。私は彼女自身に会ったことはありませんので」。

感動してアルバーノは砕かれた大理石の容器からの文書を取りだした。彼がエレオノーレの署名と次の文をフランス語で読んだとき、彼は更に感動した。

「私の息子よ。

今日私はあなたと長い時が経ってから、あなたの B. (ブルーメンビュール) で再会しました^{*1}。私の心は喜びと不安とで一杯です。あなたの美しいイメージが私の涙の目の前

*1 『巨人』の第一巻、128 頁。[第二十四周、拙訳 80 頁以降]

に漂って来ます。何故私はあなたを自分の周りに置いて、毎日眺めることを許されないのでしょうか。何と私は束縛され不安な思いなのでしょう。しかし以前から私は枷を自分用に造り上げ、他の人々に、私をそれで縛るよう頼みました。あなたの母親の口からあなた自身の話をお聞きなさい。その話は他人の口から聞くと一層好ましくなく、本当のこととは一層思われないことでしょう。

私は侯爵とは長いこと子供を授からない結婚生活を送っていました。これは Hh.(ハールハール) の私どもの従兄弟にとっては、継承の希望が得られて好ましく、ますます元気付けられることでした。後にあなたの兄 L.(ルイージ) がその希望を砕きました。これは私どもにとって恨みを買うことでした。C.(セサラ) 伯爵は若干の黒い策略の証拠を得ています。この策略はあなたの哀れな、いずれにせよ虚弱な兄の命にかかわることになりました。私どもがそのことを知ったとき、あなたの父は丁度私と一緒にローマにいました。『結局我々は負かされてしまうだろう』とあなたの父は言いました。ローマで私どもはディ・ラウリア侯爵と知り合いになりました。侯爵はその美しい娘を C.(セサラ) 伯爵に、伯爵が金羊毛皮騎士団の騎士になるまでは与えようとなさらなかったものです。侯爵は皇帝の宮廷で彼がこの騎士団に入れるよう尽力されました。

セサラ伯爵夫人はこのことで私にとっても恩義を感じていたに違いありません。意志ノ強い、内省的な女性で、ソノ誇張サレタ個性ハ、ソノ徳操ト悪徳ト女性ラシサデ貫カレタ方デス。私どもは互いに愛し合う術を学びました。彼女のロマンチックな精神は、殊にロマンチックな国では私の精神に伝わって来ました。それに加えて、私と彼女とが女性的陶醉のやむを得ない状態に陥った、つまり出産の希望という状態に同時に陥った事情があります。彼女はとても美しい、彼女にとっても似た少女、セヴェリーナを生みました。後にリンダと呼ばれた女性です。このとき私どもは、もし私が男児を生んだら交換するという珍しい契約を結んでいました。私は娘なら危険なく育てられたでしょうし、彼女の許で私の息子は危険なく生長できたことでしょう。私の許ではすでにあなたの兄は脅威に晒されていたのでしたから。それに彼女は、私の方が娘は上手に育てられようし、彼女の方が息子を育てられよう、彼女は自分の女性らしさには余り注意を払わないからと言ったのです。伯爵はそのことに喜んで満足されていました。ハールハールの宮廷が彼にそのちょっと前に、彼が求婚した長女の侯爵令嬢を、彼女はまだ幼いからという嘲った口実の許、拒絶していて、彼は侮辱された名誉心と傷付けられた虚栄心という復讐心から、というのは彼はとても美丈夫ですべての勝利に慣れていて、高慢な宮廷に対し、どんな手段、戦いをも選ぶ用意があったからなのです。ただ侯爵だけはそれを許さず、国外での教育等々に対しては全く曖昧なものであると不信を抱いていました。しかし私ども女はまさにそれ故一層深く私どものロマンチックな考えに織り込まれて行ったのです。

その二日後、私はあなたと、一 ユリエンネを同時に生みました。この豊かな偶然は想定外でした。ここで多くが全く別な風に転じ、それどころかもっと容易になりました。『私は私の娘を手許におき』(と私は伯爵夫人に言いました)『あなたはあなたの娘を手許におきなさい。アルバーノについては(そのような名になる予定ですが)侯爵に決めて貰います』。あなたの父は、確かに侯爵の息子として、しかし彼の目の許、実直な W.(ヴェールフリッツ) の所で育てられるように許可されました。しかし彼は事前の措置を講じられました。その立派な価値を私は当時友情の空想的酩酊の中、全部を考慮することでは

きなかったものです。今私は当時自分がとても勇気があったことにただ驚いています。あなたの出生の記録は三回作られたばかりではありません。 — 私と伯爵、宮廷説教家のシュペーナーがその所有者となりましたが、 — 後にあなたはヨーゼフ二世皇帝に私どもの侯爵の息子として紹介されました。私がいつかあなたの兄妹達に託す皇帝の善意の手紙一つだけで十分に効力があります。

伯爵は今自らこの秘密に活動的に関与していて、 — 自分の娘に対する愛故か、Hh.[ハールハール]宮廷への鋭い復讐の願望故か、 — この関与の報酬として、いつかあなたとリンダとがカップルとなって欲しいと要求なさいました。ここでまた伯爵夫人がその不思議好きと空想心とで介入して来て、『リンダはきっと心情が私に似るだろうから、今は容姿がそうだけど、力尽くで動かされることはなく、 — 心とか妖精世界の魔法とか不思議の魅力に惹かれ、溶かされ、結び付けられるかもしれない』と。私は彼女自身の言葉を覚えています。それから奇妙な不思議な計画が練られて、その範囲は伯爵が、大道芸人の弟を通じて請け負わせたその従属心で更に拡大されて、同時にその計画をより受け入れ易いものとしたのです。 — リンダは、あなたがこの文を読む以前に早くからあなたの前に出現し、その名前が呼ばれ、あなたの誕生が神秘的に告げられることになったのです。

— あなたの精神がすべてに適合して欲しいし、この難しい芝居がその開けられた頁の上であなたに利をもたらして欲しいものです。 — 私は不安です。不安なしでいられますか。 — 何という知らせをまさにイタリアから伯爵を通じて得たことでしょうか。それによると今や私のルートヴィヒ（ルイージ）に対する希望は一気に消えてしまいました。今や Hh（ハールハール）は邪悪な B.（ブヴェロ）を通じて、あなたが存命でなければ勝利を収めたいのです。あなたがこの有毒な影響を逃れて存命であることを私は喜ばなくてはなりません。 — いや、あたかも伯爵はあなたの兄の破壊を意図的に唯々諾々と生じさせたかのように見えます。それだけ一層強力にあなたの復活で驚かせるためです。それでもかの人を悪く言いたくはありません。宮廷で一人の母親は誰を信用し、誰に不信を抱いていいものでしょうか。どちらの危険がもっと大きいでしょうか。 —

三年間あなたは見せかけのためにイーゾラ・ベッラ[島]であなたの見せかけの双子の妹セヴェリーナと一緒に、侯爵の目の許ではあったけれども、過ぎさなければならず、一方私はユリエンネとドイツへ戻りました。しかしそれ以上は続かなかったのです、あなたの養母は意欲があったのだけれども。あなたはあなたの父親に余りに似てきたのです。この類似性故に私は多くの涙を流すことになりました。 — というのはそれ故あなたは決して B.[ブルーメンビュール]から P.（ペスティッツ）へ来ることは、侯爵がまだ若々しい面貌の間は許されず、 — 侯爵の青年時の姿の肖像画でさえ次第に取り外して、それらを誠実なシュペーナーに保存を頼まなければならなかったのであり、 — いやこの学識のある方は、若々しい顔を老いた顔にする凸面の鏡を外す必要がある、あなたが覗き込んだら、あなたが老侯爵として出現するだろうから、と私に語ったものです。私の善良で、敬虔な侯爵は老いの日々、何でも無自覚にお喋りするようになって、重要な秘密の確実な運命についてますます私が不安を感じていた頃、侯爵がかつて朝方まさにこう喜ばしげに話して私はびっくりしました、（幸いただシュペーナーと v.Fr.大臣の娘さん[リアーネ]、穏やかで敬虔な方ですが、その二人だけがいて）、『エレオノーレや、我々の愛する息子が昨夜、上の祭壇におった。息子はきっと敬虔な人間だ。跪いて、立派に祈っていた。私

はただこう言った、自分の正体を露わにしたくなかったからな。私の友よ、家に、家に帰りなさい、もう間近で雷が鳴っている』と^{*1}。様々な人が侯爵の庶出の息子についてすでに様々な噂をしてきたことを私は承知しています。

C.(セサラ)伯爵夫人は今や S.(セヴェリーナ)と一緒に V.(ヴァレンシア)へ旅立ちました。しかしその前に R.(ロメイロ)という名前を称し、娘には L.(リンダ)という名を与えました。ディ・ラウリア皇子は遺産の関係で、この戯れに同意して巻き込まれなければならなかったのです。この名前前の交換を通じて、今も続いているように、すべてが秘かに覆い隠されることになりました。九年後高貴な R.(ロメイロ)伯爵夫人は亡くなり、伯爵は後見人という権利の下、娘を一人で庇護し、相談に乗っています。

私は母親の死後すぐにこちらで彼女に会いました^{*2}。花がすっかりこの豊満な蕾から育ってきたら、彼女は満開の薔薇としてあなたの心に寄り添うことでしょう。私が伯爵夫人に余りに軽率に同意したこの霊の芝居が不幸なことなしに経過して行くことを願っています。 — 私が侯爵より先に臨終を迎えることになったら、更にあなたの妹とあなたの兄に秘密を打ち明けて、全く安心して目を閉ざさなければなりません。私はあなたを公に私の息子として両腕に迎え入れることを許されないまま果てることでしょう。逝ってしまう予感がますます募って来ます。大事な子供のあなたが無事でありますように。あなたの父親のように敬虔で誠実の人になってください。神様がすべての私どもの浅はかな知恵に最良の御配慮を示してくださいますように。

あなたの

忠実な母

エレオノーレ

追伸。更にとても大事な秘密は紙に記すことができず、臨終のとき口頭であなたの妹の心に伝えることになりましょう。御機嫌よう、御機嫌よう」。

第四百十三周

アルバーノは無言で長いこと立っていて、天を見上げて、紙を落とし、両手を組み合わせて、言った。「御身は平和を遣わされた。 — 私は戦争に行くなということだ。 — よろしい、それが私の運命だ」。生命の意欲、新しい諸力や計画、王座での喜び、王座では単に精神的緊張のみが必要とされ、戦場ではむしろ肉体的緊張が要求されるものであるが、そして新たな両親や諸関係のイメージ、それに過去に対する立腹、こうしたものが入り乱れて、彼の精神の中で吹き荒れた。彼は自分の先の全ての人生から訣別した。これまでの弔鐘の綱は引き千切られた。彼は冥府からエウルディケーを掠るために、オルフェウスのように辿って来た道を振り返って見ることを避けなければならなかった。彼は新しい友に全てを打ち明けた。というのは自分はこれから公然と、自由な公開の道で、自分の

*1 『巨人』、第一巻、126 頁。[第二十三周、拙訳 79 頁]

*2 『巨人』、第一巻。[第十六周、拙訳 58 頁、リンダ 12 歳]

これまで隠されてきた権利を求めて闘うからであり、早速町へ出発するからである、と彼は語った。語りながら、自分の極めて神聖な諸関係、諸権利に関しての長い敢行された芝居になお一層腹が立った。それにルイーゼを屈服させた敵に対する彼の諸力や武器への不信の念とこの兄自身に腹が立った。この兄はこれまで彼を苛酷な、非兄弟的な仮面の下、抱擁して来たのであった。「誠実な妹の方は何と別様だったことか」と彼は言った。「何故人々は」（と彼は続けた）「かくも多くの気位の高い苛酷な精神に対して、私の単なる――生誕の権利のために私にかくも多くの感謝の念を背負わせてきたのか。――何故人々は私の沈黙を同様に信頼して来なかったのか。――かくて私は向こうの哀れな亡き女性¹の事を誤解せざるを得なかった。彼女は私の明らかにされた身分のためにかの悪意ある夜、祭壇で彼女の美しい心を犠牲にしたのだから。かくて私は推測や計画で、幾多の正当な魂を傷付けなければならなかった。こうしたことすべてがなければ、どんなに私は罪を犯さずに済んだことか」。「落ち着いてください」（とジーベンケースは上品に叱責して言った）「敵の強さは抵抗へと打ち返され、敗北によって引き下がることになります。誰もいない戦場での勝利とはいかなるものになっていたことでしょうか」。

ジーベンケースは輝かしい身分と、情熱の炎を前にして、この情熱は単に卑俗な現象の中でのみ見られ、高貴な現象の中では馴染みのないものであったので、数歩引き下がっていた。アルバーノはこれを想定していなかったもので、これに気付いていなかった。できるだけ上手にジーベンケースは、――その内部の人間は友の墓で硬直してしまった肢体を次第にまた溶いていったので、――穏やかな冗談をまた取り戻して、この花輪の中へ激しい若者を閉じ込めて行った。「嬉しいのです」（と彼は言った）「私が貴方の生誕の日、戴冠の日に願いを述べる最初の者になるのですから、この願いはすべて唯一の願いとなるもので、つまり貴方は常に自分の洗礼名を主張して頂きたいというものです。――というのはアルバンは農民の周知の守護聖人だからです。――騎士がまことにその騎士団の創始者フィリップ[Philipp der Gute von Burgund(1396-1467)]のやり方で、つまり『炎ガ輝ク前ニ打ツ』やり方²で遇されたハールハールの皇子の他に、多分残念に思うのは、財務局の印の製造者のみで、今や新しいものを彫る必要はないのです。同じ系統が引き続き支配するのですから」。彼は更に軽く付け加えた。彼は重い森や雲を担っている岩のガスパールと会ったことがなかったからである。「彼がまさにデ・セサラと称している点は、わずかな金羊毛皮の騎士[トゥソーネの騎士]にしか見られない何とも奇妙な名前遊びに当たるものです。御承知のようにスペイン人は古代ローマ人の如くしばしばその名前を自分達の行為や出来事から得ています。かくて『面白草紙』[Pièces intéressantes]第一巻で世に周知のことですが、例えばオレンダイン[Orendayn, Marquis von La Pas(1682-1733)]は『平和』[la Pas]という名前を自らに認めました。一七二五年オーストリアとスペインの間の講和に彼が署名したからです。――三番目の名前『本当の移送』[Transport Réal]を称したのは、自分が皇太子をイタリアへ連れて行ったことを記憶し、銘記するためです。セサラは多分勿論むしろ偶

*1 彼はリアーネのことを言っている。リアーネに対しシュペーナーはアルバーノの生誕と使命を厳かに打ち明けて、ただ有毒な花々の下で育った一つの愛を断念するように強いたのであった。

*2 (訳注) 金羊毛皮騎士の正装は、赤マントと、毛皮や小羊の付いた鋼鉄と火打ち石の鎖。

然でしょう」。

アルバーノは自由なショッペとのこのような精神的類似性によってまず本当に心惹かれた。彼は彼に別れを告げて言った。「我々の友の友よ、一緒に仲間でいよう」。――「まことに、貴方の運命の決定に対する疑念それだけで」（とジーベンケースは答えた）「皇子殿、一緒にいようとするに十分でありましょう。私の心のみが決定してよいのでありさえすれば。しかし――」。アルバーノは怒ったように両肩をすくめたが、黙っていた。

「私がここに留まるのは」（とジーベンケースはより穏やかに続けた）「故人の上に塚が築かれるまでにしましょう。そうしたら故人の上に木製の黒い十字架を立てて、彼のすべての名前を書きましょう」。――「結構、そうしよう」（とアルバーノは言った）「しかし犬は私が引き取る。犬は私をもっと長く知っているから。私は若い人間で、まだ失われた年月は少ない。しかし失われた時に関してはとても年を経ている。私は時で昔の背の曲がっている幾多の者同様に、人間の喪失がいかなるものか理解している。いつも、死者達が再び生き生きとなって歩き、覗く鏡を墓に来るたびに見いだすのは奇妙なことだ。かくて私はリアーネの墓では彼女の生き生きした像と木霊を見いだしたものだ。私の老いて寝ているショッペを私は、御承知のように、私の手は通らないけれども或る鏡面の背後にも、立っていて、動くのを見いだすことになった。請け合うけれども、私の両親さえも私には映し出されている。私の父を円筒の鏡の中に見てとれるし、私の母は対物レンズで見てとれる。――人生のすべての星々が沈んで行く一つの夜の中に立っていると、その夜の中に堅固に立っていることしかすべきことはない。――しかし私の馴染みの諧謔家に更にさよならを言わなければならない」。

彼は遺体安置室に入って行った。黙って彼にジーベンケースは従った。――痛みの常にない気まぐれに当惑していた。涙のない目をしてアルバーノは白い布を真面目な顔から取り除いた。その顔の確固たる眉毛はもはや冗談のために引き寄せられることはなく、その顔は鉄のように、時もなく眠っていた。犬は冷たい人間に臆しているように見えた。アルバーノは鋭く、激しい、乾いた視線でこの死人の顔をすべての皺に至るまで、自分の脳に、石膏の中への如く、刻み込もうとしていた。殊に最も生氣ある模刻が、その友人が、去って行くと言ったのだから。それから重い手を、侯爵冠を被ることになる額へと持ち上げた。さながら額を手で祝福し、清めるためのようであった。最後に彼は顔の上に屈み込み、長く冷たい口の上に留まっていた。しかし彼が後に起き上がると、彼の両目と心全体とが泣いていて、彼は視ていた者に震えながら手を差し出して、言った。「それではあなたも御機嫌よう」。――「いや」（とジーベンケースは叫んだ）「私はそうはできない、私が去ったら、――ショッペよ、私は君のアルバーノの許へ留まる」。――

そのときヴェールフリッツとアウグスティがやって来て、快活な表情と言葉とで、三重の愛の流涕の祭典を遮った。

第四百十四周

老養父は彼のことを皇子と呼んだけれども、もはや「おまえ」を遣わなかった。しかし領民としての歓喜の中、彼は自分の家の育てたの子を情愛込めて心の許に抱き締めた。アウグスティは真面目な丁寧さと短い賀詞と共に彼に次のようなユリエンネの手紙を渡し

た。

「最愛の兄上。今ようやく本当に兄上と呼ぶことができます。私は一方の目に悲しみの涙を、もう一方の目に喜びの涙を浮かべています。あなたの出生のすべての雲が除かれて、ハールハールでも万事かなり上手く行っています。講師を派遣しますが、あなたにすべてをお話しするため、いつ時間がとれますでしょうか。フォン・ブヴェロ氏についても講師に話して貰いましょう。その赤い鼻、反った顎、自分の数少ない家来と多くの債権者に対する吝嗇な残忍さ、その粗野、軟弱さ、それに素っ気ない悪意というものを私ははなはだ憎んでいます。――しかし今や彼はあなたの出現で、結構に罰せられています。勿論万事が私のように混沌としていて、狼狽しています。ルートヴィッヒの遺言が今朝、その意志に従って開封されました。彼はあなたにあなたの権利をすべて譲りました。私はこの兄上については喪の最中怒りたくありません。彼は本当に自分の弟と妹に対して厳しくて、私に対してもとても厳しく当たりました。彼は自分の妻に至るまで、すべての女達を憎んでいたからで、妻の方は調子のいいときだけ、何か役に立つという方でした。芸術作品そのもののせいで彼は人間に対して全く無愛想に接してきました。しかし彼は安らぎの中に休息しています、この安らぎをほとんど見いだせなかったのです。今晚にも彼は病気の故と、ブルーメンビュールまでの長い道のりの故に、前もって埋葬されなければなりません。それで私は今や私どもの安置された両親の間近なあなたの養父母の許にいます。それ故迷うことなくお出でください。あなただけがこの悲しみの夜に私の慰めです。またあなたを心の許に抱かなければなりません。この心はあなたの許で動悸し、泣き、語ることを、それが許されさえすれば、欲しています。お出でください。これからは神様は、すべての舞踏会場で輪舞の準備ができていますので、冷淡な幽霊や恐ろしい仮面は侵入させないことでしょう。私は祈っています。ただあなたのために私はかくも喜んでいて、私は十分に泣いています。

ユーリエ」。

アルバーノは養父に、今晚は彼の家に行くという喜ばしい約束をすると、すぐに養父は立ち去って、家族に二重の訪問という喜びの準備をさせることにした。講師は情報を話すよう頼まれたが、ジーベンケースに配慮して話すことをためらっているように見えた。しかしアルバーノが自分と自分の新しい友に遠慮なくすべてを伝えるよう頼んだ。彼の話は、アルバーノに後に伝わった若干の挿話を含め、以下の通りであった。

ブヴェロは、――好奇心をそそられたアルバーノの質問で彼はこの人物から始めたが、――これまでハールハールの復讐を狙っている皇子と秘匿された関係にあったが、この皇子を通じて最長の安寧とそれどころか思いがけず結婚をするという確定的計算を行っていた。この皇子の言葉の上に、ドイツ騎士団騎士という独身と歳入とが同時に結合した十字勲章は依存していて、この皇子の妹、つまりイドイーネに対し、皇子自身を通じて、皇子は彼女の同様の誓い^{*1}の破棄という点でブヴェロに賛同していて、彼が素早く盗み描い

*1 決して自分の身分以下の者とは結婚しないという誓い。

たものと言いつつ張っていた細密画の彼女の像を、絵画陳列室の過半と共に、ローマのアルカディアたるセフィシオという彼の選択名への、そして彼女のアルカディアという名への多くのほめかしと共に渡すよう計っていたのであった。「コノ人間ト悪魔トノ違イ、ソナモノハアリモシナイ」と全くいつになく激しくアウグスティは言った。アルバーノは、何故かと尋ねなければならなかった。「全く違う像を、彼は侯爵令嬢の像と称したのです」と講師は言った。それではリアーネの像であったろうとアルバーノは推論し、容易にわずかの質問で、盲目の、ブヴェロという虎に追われたリアーネのかの悲しい話を聞き出したのであった。 —

「私は不幸な男だ」とアルバーノは半ば憤激し、半ば苦痛を感じて叫んだ。聖なる心が彼に対する短い純粋な寡黙な愛の代償としなければならなかったときの受難が彼の心を悲痛なものにした。リアーネが最初盲目となったのは、彼女が彼の父をとっても愛していたからであったし^{*1}、二度目にそうなったのは、彼女をその息子[アルバーノ]が誤解し、愛したからであった。しかし彼は自制して、そのことを話さなかった。過去は彼にとって蜂にとって反響がそうであるように有害であった。ジーベンケースはすべての計画の失敗によるブヴェロの処罰に対する自分の喜びを証した。

アルバーノは、ルイーゼもブヴェロの結婚生活の意図を支援するように見せかけてきたが、単にそれだけ一層高い所から墮ちるのを見るためであったという話を聞いた。「何という辛辣で冷淡で長期な他人の不幸を喜ぶ気持ちで」（とアルバーノは考えた）「私の兄は、自分の死が敵の宮廷とその支持者に用意するであろう落とし穴を期待して、すべての彼らの期待を見守っていたことか。侯爵夫人との結婚からその賀詞に至るまでのすべての彼らの措置を好意的に受け入れて来たことか。侯爵夫人と一切を憎んでいたというのに。それにどうして生涯にわたって私に対して沈黙の冷淡さを主張することができたのか」。

— しかしアルバーノは二つの間近な理由を考えていなかった。それは侯爵に対する彼自身の誇り高い振る舞いと、通常の侯爵らしい吝嗇で、これは世継ぎ以外の皇子への年金を嫌がるものなのである。

ガスパールのハールハールでの交渉は、講師が若干のユリエンネに命じられて省略した部分のみ外して述べたことによると、以下のようなことであった。

騎士は以前から、独自の悦楽と静寂さなどで、人間的諸関係の混乱を見守っていて、その混乱独自の解消と分裂とに任せていた。ここで彼はすべての他人の夢をますます活発なもの野蛮なものとして、仕舞に胸をつかんで、それらの夢のすべてを眠る者から拉致してしまうのであった。侯爵の花嫁による気位の高い拒絶に対する昔の怒りは静められた。彼は彼らに彼らの願望と工作の微光を発する凱旋門の下、アルバーノの出生の記録を、老侯爵の筆跡によるものから兄のルイーゼの筆跡によるものまで、彼らを勝利の門からまた退却させるだけの多くの武装した衛兵として呈示することができたからである。人々は同情して驚き、何事にも介入しなかった。アルバーノは国内にも帝国にも紹介されていなかった。ガスパールは平然とヨーゼフ二世による早期の認定をも追加した。しかしこれも規

*1 リアーネは、周知のように、自分の兄が老侯爵の許で、心臓のない胸について話したとき、病気になる、盲目となった。『巨人』、第一巻。156頁。[第三十二周、拙訳99頁]

則外、有効でないものと見なされた。それに対し、彼は決然と怒りを見せて、その怒りの閃光で彼はしばしば突然人間や状況を貫通せしめるもので、こう告白した。自分は即座にルイージの八歳時と、彼の旅の年月に対する宮廷の振る舞いをすべて、世の諸宮廷に暴露するつもりである、と。

ここで人々はびっくりして、午前の交渉を打ち切って、新たな午後の交渉の準備にかかった。この午後の交渉では、一 講師はこれについてはアルバーノに秘すように命じられていたが、一 遠くから両家間の持続的緊密な同盟への願望が示された。同盟ではイドイーネが解されていた。イドイーネのリアーネとの類似性、そのことによるイドイーネに対するアルバーノの愛は夙に逸話として知られていた。しかしガスパールの完全な報復という彼の計画全体にこの混入された罪のない天使はそぐわなかった。彼は一 その高く枝分かれした枝角で容易に世俗生活の混乱した低級の枝群の中を飛んで行く者で、一 自分の全権への制限に立腹して、すぐさま拒否して、人々は憤然と決裂して、フォン・ハーフェンレップァー氏が全権委任者として彼の同伴をし、ペスティッツで残りのことが交渉されるという丁重な警告がなされた。

かくて兩人が到着した。ハーフェンレップァーは、同様に上品で冷淡、かつ実直で、容易に真実のすべての諸関係を調べ上げた。ガスパールはユリエンネに、一 まだ自分の娘リンダに対する彼女の昔からの愛を妄想していて、一 余所の宮廷の願望を伝えた。しかし彼は彼女の打ち明けに狼狽した。それははなはだイドイーネに賛同するものであり、かつアルバーノに対する彼女のこれまでの内密の影響を語るものであった。その上彼女の状態の混乱した薄明かりの中で、彼にアルバーノに対する父親としての立替金を若干返すという善意の申し出で彼を立腹させた。「スペイン人は家政の帳簿に目を通さない、支払うだけだ」と彼は言って、むっとして永遠の別れを告げ、地上のすべての島々を旅して回るようになった。アルバーノに彼はもはや会おうとはしなかった。ショッペの教会荒し、墓荒しのせいで、アルバーノに自分は単にリンダの父親であって、彼の父親ではないと打ち明けて、自分の価値に対する大胆な疑念を罰し、謙虚な思いにさせるという楽しみが奪われてしまい、その偶発時に嫌気が差していたのであった。父親として彼が打ち明けたかの夜のうちにリンダがどこへ言ったのか、彼は皆に冷たく隠していた。

その後彼はやはり厳かに彼の以前の花嫁、侯爵の未亡人から別れた。「自分は彼女に最新の世継ぎについて知らせることを」（と彼は彼女に言った）「義務と見なしている。自分は若干自らこの件の進行に関与していたのだから」。彼女の視線がこのときほど誇り高く、有毒であったことはなかった。「貴方は」（と彼女は落ち着いて言った）「一つ以上の錯覚に導かれているように見えます。この件に、貴方がそもそもこの国に対して興味を抱いているように見えますように、興味がおありなのであれば、貴方にこう告げる喜びを私は有しております。私はこの国にひよっとして、領民の愛する亡き侯爵の息子によって、どのような変化の必要もないようにするという幸運を周知させるのにもはやためらっておれない、と。少なくとも時が決定をくだす前に、いかなる余所からの介入をも甘んじて受けてはならないものです」。ガスパールは、予期していたことに立腹して、これにただ無限に厚かましい言葉を述べた。一 彼は身分よりも性別をより容易に忘れ、傷付けてしまう能力があったからで、一 こう請け合って彼女から丁重な別れを告げた。つまり自分は必ずや、この普通なら喜ばしい知らせの証明を、自分がどこにしようとも受け取るこ

とになるであろう、そしてそのときには残念なことであるが、真実への愛から若干の奇妙な、一 司法上の書類を対抗して提出しなければならないであろう、これは流布させたくないものであるが、と。「貴方は本当の悪魔だ」と侯爵夫人は我を忘れて言った。「天使ニ向カッテデスカ。ソウデショウトモ」と彼は答えて、昔からの流儀で別れた。

アルバーノは、その心はこうした深みや地底のすべての中でむき出しの傷付いた根や繊維を有していて、何も語るができなかった。しかし彼の友のジーベンケースは早速表明した。「ガスパールはどの歩みの際にも、永遠に上品に揺らめき、ためらいながら、例えば自分の娘の結婚やその他の点で、生きたスペイン人以外の何ものでもありません。グンドリング[Gundling(1671-1729)]がその『余暇[オティア]』の第一部[スペイン人の気質について]で上手に描写している通りです」。アウグスティはこの率直さに驚いた。しかしこの率直さはショッペの粗い率直さよりも彼にはもっと好ましく、可愛いものに思えた。「私にとって最も珍しく思えることは」（とジーベンケースは付言した。彼は世界史を副専攻していたように見えた）「かくも重要な出自の長い秘匿が、秘密のかくも多くの関与者の間でなされていることでしょう。もっともヒューム[David Hume(1711-76)]からジェームズ一世治下の火薬の陰謀は一年半以上にわたって二十人以上の共犯者達によって隠されて来たということを私は承知していますが」。

数多く負傷し、自らによって浄化されて、アルバーノは、これらの物語の後、午後、分裂した領国に赴いた。しかし快活な聖なる大胆さを帯びていた。彼はすべての苛酷な人々が彼に争いを仕掛けようと思っているよりも、更に高次の目的や諸力を自覚していた。永遠に善なるものの明るい自由なエーテル圏から、彼は卑俗な実在の汚れた狭小な国に降りて来る気はなかった。一 金属の王笏が支配するものよりも高次の領国、つまり人間が治めるためにまず造り出す領国が彼の前に開かれた。一 小さな国ではそれにどんな小国であれ、何か偉大なものがあって、それは民の多さではなく、民の幸せであった。一 至高の正義が彼の決意であり、古くからの敵ども、殊に分別あるフルレを支援することであった。一 かくて彼は確信を抱いて、これまでの狭い、単に他人の手によって進められた乗り物から自由な大地に飛び降りた。そこで彼は独力で、他人の舵は使わずに動くことができ、空虚で干上がった水路の代わりに、しっかりとした花咲く陸地と目標とに對峙することになった。こうした慰めと共に、彼は亡きショッペと生きた友から別れた。

第四百十五周

黄昏に彼は山上に来た。そこで彼は町を、彼の諸力のサークル、舞台となる筈の町を一望することができた。しかしいつもとは違う別の目で一望した。一 今や彼はドイツの故郷に所属することになった。一 彼の周りの人々は彼の領国の縁者であった。一 彼がかつて兄の戴冠の際に、温かい光線について、つまりそれで侯爵たる者が星座として諸国を照らし出し結実させることのできる光線について、計画した予感上の諸理想が今や彼の手の中へ実現されるべく置かれていた。一 彼の敬虔な、領国の孫達によってまだ祝福されていた父親は、彼にその侯爵の義務の純なる黄道を示していた。一 ただ行為のみが人生に強さを与え、ただ節度のみが人生に魅力を与える。一 彼は彼の周りで墓場に散って沈んでいる人々のことを、確かに岩のように苛酷で不毛であるが、しかしまた

岩のように高い人々、運命によって犠牲にされた人々のことを考えた。彼らは無限の銀河と空想の虹とを彼らの手の弓として使おうと欲しながら、その上に一つの弦も引くことができなかつたのであつた。 — 「何故私は、私が尊敬しているかの者達同様に没しなかつたのか、私の中でも過剰のかの泡が沸き立っていなかつたのか、明澄さを覆わなかつたのか」。

運命は今や再び彼と共に反復の戯れを行つた。松明の馬車が「皇子の庭園」から脇へ下る道を去つて行つた。ゆっくりと兄の葬送の馬車が弔意の明かりと共にブルーメンビュールの山へと登つて行つた。「ゆっくりとした馬車は分かっている。速い馬車の方は誰だ」とアルバーノは講師に尋ねた。「フォン・セサラ殿が我々から去られました」と彼は答えた。アルバーノは黙っていた。しかし彼は騎士が彼に与えようと思つていた最後の痛みを感じた。彼は講師に切に頼んだ。自分を一人っきりにしてブルーメンビュールへの道を行かせて欲しい、ただ回り道をしたいから、と。

彼はタルタルスで胸のない父親の心臓の墓を訪ねようと思つた。彼が騒がしい郊外の町を通つて行くと、彼を一人の老人が長いこと見つめて、突然驚愕して逃げ去つて、自分と出会つた妻に向かつて叫んだ。「老侯が歩き回つておられる」。この男は若い頃、老侯爵の従者であつて、盲目となつていたが、しばらく前にまた治つていたのであつた。それ故似た息子を父親と見なしたのであつた。 — 町では王座交替の通常の民の喜びが見られた。ある家では子供の舞踏会が開かれ、別な家では格言芝居の一座が見られた。一方国喪ですべての舞踏会場とすべての舞台が閉ざされていた。ロケロールの部屋からは他人の陽気なミュージズの息子達[学生達]が眺めていた。スペイン人の旅館では一人の少年が黒丸鴉を糸に繋いでいた。何人かの人々が通りすがりにこう言うのが聞こえた。「誰がそんなことを想像できたろう」。 — 「勿論、当然なことだ」（と別な者が答えた）「当時俺も侯爵廟を塗つたものだ。この目でおまえさん同様にあの方を見たよ」。山の町の喪の宮殿では、あたかもより楽しい祭典でもあるかのように、すべての客の列が明るく照らし出されていた。大臣の家ではすべてが暗く、上の屋根の彫像の下では、一本の小さな明かりが忍び歩いていた。

「いや」（とアルバーノは考えた）「熟考する必要はない、何故私も没しなかつたのか、と。いや、十分に、十分に私から墓場へ落ちて行つた。 — 私は永久にすべての去つて行つた人々に憧れなければならない。 — 潜水夫のように死者達は下の方で共に泳いでいて、私の生命の船を支えたり、錨を運んだりしている」。外で彼は老いた死者透視の女がブルーメンビュールの道に立っているのを目にした。彼はかつて禿頭に同行していたとき、彼女に出会つたことがあつた。彼女が凝然として上の照らされた葬送の馬車を見送つていて、現実を覗いているのに、夢を見ていて、未来を見ていると信じていた。至る所、彼の路上では、ぴくつく蜘蛛の足が横たわつていた、これらは過去の潰されたタラントウラ[毒蜘蛛]から引き千切られたものであつた。一つの紗を通して、彼は人生が横たわつていてのを見ていた。もっともそれは黒い紗ではなく、緑色の紗であつた。

憧れて彼はタルタルスのヘルンフト派の墓地に着いた。過去がその幽霊と共に追つて来たので、タルタルスに慄然としながらではあつた。墓地の庭園では、花はなく、沈んで眠り込んだ枝垂白樺に囲まれていて、白い祭壇が父の心臓と黄金の銘文と共に微光を發していた。銘には「全能の方、私の最後の犠牲を受け取り給え」とあつた。石の胸の中に閉

じ込められた心臓を前に、この心臓は微動だにせず、一つの埃すら立てないもので、これを前に彼は子供らしい祈りを神に対して捧げ、自分は自分の両親を愛していたことであろうと感じ、両親の気高い目がまだ人生の深い谷に届くならば、彼らの気に入るようになりたいと誓った。彼は冷たい石を一つの胸のように抱き締めた。そして穏やかな足どりで去った。あたかも老人が彼の側を、彼自身の、彼にとっても良く似た形姿で歩いているかのようであった。

彼は自分の道から山を見上げた。そこは彼を父親が夕方聖霊降臨祭と聖餐の日に見つけたところで、過去のタボルの山の按配であった。そして白樺の小森を歩きながら、かつて二人の声が、彼の両親が彼の名前を呼んだその箇所のこと^{*1}を多分まだ覚えていたことであろう。このように神聖な過去に清められて、彼は自分の子供時代の小村に着いた。そして教会とヴェールフリッツの家が明かりに満たされているのを見た。もっとも教会は悲しい目的のために、ヴェールフリッツの家は客人の楽しい目的のために点されていたのであった。

第四百十六周

アルバーノは神々しさの中で、この中では天は彼にとって単に微光を発する大地の拡大鏡に過ぎず、過去は単に聖なる両親の祖国と母国に過ぎなかったが、この魂の光輝の中で、自分が足を踏み入れた養育の家が厳かで、一つの神殿となっており、すべての卑俗なものや重々しいものから浄化されており、あるいは単に舞台上で模して演じられていると感じた。彼の母親のアルビーネとラベッテは、より高貴な人間として、喜ばしい表情と共に彼の感動した心の許にやって来た。二人が素早く去ると、ユリエンネが階段を飛び降りて来て、兄を初めて公的に接吻した。快樂と悲痛の黙した混淆が見られた。彼女が彼を離れたとき、夜の教会の塔から鐘が、亡き兄が教会の中へ入る印を告げて鳴り響いた。すると彼女はまたアルバーノに戻って崩れ、果てしなく泣いた。彼女は彼と一緒に上がったが、向こうの養父の隣に誰がいるのか彼には語らなかった。古いフルート時計の音色が、そのかろうじての演奏は以前から稀な客人達のために供せられるものであったが、彼がドアを開けたとき、子供時代の日々の余韻と共に彼に向かって流れ出て来た。

彼の養父と語っていた女性らしい背の高い黒い形姿が側面に垂れたヴェールと共に、彼が入って来たとき、彼の方へ振り向いた。イドイーネであった。しかし旧来の魔法の輝きがまた彼の今日かくも感動した魂に襲って来た。あたかもリアーネが天から来たかのようで、不死の備えをし、この世ならぬ諸力をより誇り、より大胆になって、先の大地からはもはや善意と魅力以外の何も帯びていないかのようであった。兩人とも双方が驚きながらここに再会していた。ユリエンネは、一 自分のちょっとした隠し事と準備とを自覚していて、一 イドイーネの穏やかな顔に不満の赤い小さな雲が生ずるのを目にしていた。しかしそれは直に地平線の下に消えた。イドイーネは、妹が兄の葬儀の鐘が鳴るや涙を抑えられないでいるのに気付いたからで、彼女はユリエンネの手を求めながら、彼女に好意

*1 『巨人』、第一巻、78頁。[第十二周、両親ではなく、二人の女性の声、拙訳47頁]。

的に向かって行った。イドイーネは、厳格さ故に容易に気まぐれな立腹、この怒りの小さな戦争への傾向があつて、鋭く長い訓練を経て、この魂の幸せの極上の、しかし強力な毒から、自らを解放して、結局彼女は天に、大地の雨の圏や雲の圏のない純然たる明るい月として昇るのであった。アルバーノにとって地球は、過去と死者達で満たされ、エーテルの中を行く一つの空気の球となっていて、彼は星々の間で自由であると感じ、現世の不安を感じなかった。彼はイドイーネに、―― 彼女の家と彼の家の闘争的關係を意識しながらも、―― 神聖な勇気を抱いて近付いて行った。「最後の庭園での貴女の最後の願いは」（と彼は言った）「天によって聞き届けられました」。―― 乙女らしく決然たる感覚で彼女は原野を進んで行った。原野の中で、彼女は当惑することも傷付くこともないよう、あるときは花を、あるときは茨を折り取って行かなければならなかった。彼女は彼に答えた。「貴方が貴方の大切な妹を永久に見いだされたことを、心からお慶び申し上げます」。ヴェールフリッツは、彼女が真実を率直に、どんな家族的わだかまりにも抗して、語るときの大胆さを喜ぶと共にそれに感嘆していた。「かように人はいつも地上では多くを失わなければならず」（と彼女にアルバーノは答えた）「その後多くを得ます」、そして彼の妹の方を向いた。あたかもそうしてこの言葉に多義的意味を持たせたくないかのようであった。

吊鐘は更に続いた。地上的運命の奇妙な、喜びと悲しみの混淆は皆に厳かで自由な気分を与えていた。アルビーネとラベツテが上がって来た。葬儀の教会へ参詣するために厳かに黒い服であった。ユリエンネは二人の兄の間で揺れていた。同時に涙と炎に包まれて、彼女の心が、これほどロマンチックに動悸したことはなかった。彼女はどのように自分の兄のアルバーノを女友達のイドイーネが思っているか推察できた。イドイーネはいつもはもっとしっかりした声で話したからであり、イドイーネの甘美な混乱はその短い報告から最も容易に察せられた。リアーネの庭園でアルバーノと再会したときのことをこの率直な魂は彼女に報告していたのである。彼女の今日のちょっとした乙女らしい内気なおののきも、ここではどこでもこの青年の恋人であるリアーネの蘇りと見なされて当惑しなればならなかったからであるが、ユリエンネを更に迷わせることはなく、より確信を抱かせるものであった。

「ある夕べ」（とアルバーノはイドイーネに向かつて言った）「かつて貴女の美しいアルカディアを見下ろしたことがあります。しかし私はアルカディアにいたわけではありません」。「その名前は」（と彼女は答えて、再び明快な目を大地の方に向けて伏せた）「単なる冗談でもあります。本来それは一つのアルプスで、単に一つの谷に、アルプス山中の牧舎が幾つかあるだけなのです」。ユリエンネが黙って彼女の手を取り、彼女を連れ去ったとき、彼女はその大きな目を再び上げることはなかった。今や葬儀な鐘が悲しげな個々の震動と共に響いてきて、葬儀が始まることを知らせた。葬式への参加をユリエンネはその妹としての心に対し短縮化できないことであった。「教会に参りましょう」とイドイーネは一行に言った。「私どもも皆」とヴェールフリッツは素早く答えた。二人の娘がアルバーノの側を通り過ぎるとき、初めて彼はイドイーネに三つの小さな痘痕があるのに気付いた。さながら大地の痕跡、人生の痕跡で、彼女を一人の死すべき定め的女性としていた。彼は長く揺れるヴェールを付けた背の高い高貴な形姿を目で追った。その形姿は彼の妹の横で、リンダ同様に堂々としていて、ただリンダより華奢な体形に見え、その神聖な歩き

方は、神殿で神々の前を歩くことに慣れている一人の巫女を告げていた。

二人が姿を消すと、アルバーノの昔馴染みの者達が、殊に女性達が、それまでユリエンネが居合わせて絶えずアルバーノの系統樹を間近に保っていたのであるが、長く抑制していた情愛のすべての印と共に、彼の心に対する賀詞や歓喜や涙を一杯にして押し寄せて来た。「私の両親でいてください」とアルバーノは言った。「実直さがこの世では一番だ」と総裁が言った。 — 「私は母親のようにすべきことはしました」（とアルビーネは言った）「でも誰がこんなことを知ることができたことでしょうか」。 — ラベツテは何も言わなかった。彼女の喜びと愛は、彼女の記憶同様に大袈裟であった。「私の妹のラベツテは」（とアルバーノは言った）「私が初めてイタリアに行ったとき、財布に言葉を刺繍して贈ってくれました。『私どものことを忘れないで』と。 — この言葉はどんな運命になろうとあなた方皆に対して守りましょう」。ここで彼は、余りに恥じらって謙虚であるが故に言うことができなかったが、侯爵として自分の養父に対してなすことができそうなことを考えていた。このことの一つにまず養父から没収される男系の封土の返還があった。「それでは幾多のこれまでの心痛は、 — 」とアルビーネは始めた。「何の心か、何の痛みか」（とヴェールフリッツは言った）「今日は万事が正しく滑らかだ」。しかしラベツテは母親のことが良く分かっていた。

皆が喪の神殿への道に出掛けた。彼らは教会から歌声の音楽を耳にした。「何故かくも穏やかに安らうか」。若干離れた所では号角が樂しげな音色を出そうとしていた。ラベツテはアルバーノの手を握って、とても小さな声で言った。「私は気を取り直しました。すべてを経験したのだから」。彼女は不幸なロケロルに対して、彼が幾層もの幸せと自らとを自ら殺害した後、彼女のすべての愛を朽ちるべく墓に投げ棄てていた。 — 一つの涙も添えていなかった。彼女はイドイーネの善意に話を移した。彼女の類似性に触れ、「そのことを言及して父親はこの天使を今日真っ赤にさせた」と言い、ユリエンネをイドイーネは立派に慰めたとやった。ユリエンネはアルバーノが到着する前は泣き通していたのであった。アルビーネはむしろユリエンネをその兄妹愛故に褒めた。ラベツテはこれについては黙っていた。二人は妹として恋敵であった。ユリエンネもラベツテを自分の軽蔑しているロケロルの犠牲者として、自分の鋭く仮借ない体系に従って、とても冷たく見ていた。一方イドイーネは、人間に対するより大きな知識に基づいて、心や瞬時の女性らしい迷いに対する穏やかさを男性に対する厳しさを結び付ける術を心得ていて、ただ穏やかで正当であった。

彼らが喪のランプで一杯の教会へ入ったとき、アルバーノは明かりのない隅へ忍んで行って、邪魔をすることなく、邪魔もされないようにした。明るい祭壇には快活に、尊敬すべきシュペナーが銀色の巻き毛の、無帽の頭と共に立っていて、兄の長い棺が、祭壇の前に、明かりの列に囲まれて、あった。教会のドームは夜になっていて、諸形姿は暗闇の中へ消え、下では光線と濃い影と人々とが交錯していた。アルバーノは死の門のように代々の墓所の鉄製の格子の扉が開けられるのを見た。その中に彼の敬虔な両親は引き入れられていたのであった。あたかも今一度ショッペの荒々しい精神が歩んで来て、人間の最後の家へ侵入するかのようにならされた。兄は彼を余り動じさせなかった。しかし自分のために長いこと配慮して、自分が感謝の言葉を述べて来なかった静かな両親のすぐ側にいること、死の門の上の二階席に見かけた妹が絶えず涙を流していること、これらのこと

で、彼の心は激しく襲われて、その心から深い永遠の悲しみの音色が、涙を、さながら悲しみと愛の温かい血のように吸い込んだ。彼はイドイーネが半ば赤く、半ば白いチューダー・ローズを黒い絹服に付けて、妹の横に立っていて、幾多の比較する視線に対しヴェールを目の上に引き上げているのを見た。 — ここではこのような祭壇の明かりの隣でかつて追い込まれたリアーネが愛の断念を誓って、跪いていたのであった。 — 彼の輝かしい過去の、彼の高貴な人間達の星座全体が地平線の下に沈んでいて、その中のただ一つの明るい星がまだ微光を発して大地の上にあった、イドイーネであった。

その時彼の友のディーアンが若者を見つけて、急いでやって来た。余り配慮することなく、このギリシア人は彼を抱擁して言った。「良かった、良かった、素晴らしい変化だ。あそこに私のカリトンがいる。彼女も自分の言葉で挨拶したがつている*1」。 — しかしカリトンは絶えずイドイーネをその類似性故に見つめていた。「ディーアンよ、幾多の心と幸福の代償の上のことだ。あなたが残っていて幸いだ」とアルバーノは言った。 — その後彼はディーアンに教会の建築士として代々の墓地の状態について尋ねた。後で自分の両親の遺骨を開けさせて、少なくとも黙して感謝を込めて跪きたいと思っていたからである。「それについては」（とディーアンは当惑して答えた）「余り知らない。しかしむごい計画だ。何になろうか」。 —

音楽が終わった。シュペーナーは小声で彼の演説を始めた。彼はしかし自分の足許の侯爵については話さず、代々の納骨堂の自分の愛しい者達についても話さず、死を知らず、まず人間が自分の中で生み出す、正しい生命について話した。彼は言った、自分は老人であるが、死ぬことも生きることも願わない。すでにここで神の許に、ただ神を自分の裡に抱きさえすれば、存在し得るからである、と。 — そして我々は我々の神聖な願いが向日葵の如く悲嘆なく枯れて行くのを見ていることができなければならない。高い太陽が輝き続けるからであり、永遠に新しい太陽を引き付け、育てるからである。 — そして人間は永遠に対して準備をするというよりは、永遠を自らの裡で育てなければならない、これは静かで、純粋で、明るく、深く、一切のものである、と。

教会の幾多の人間の胸にとって、過去の演説で毒の先端が折り取られた。アルバーノの上昇して来る海に対してその演説は滑らかな油を注いだ。そして彼の人生の周りは平らに輝かしくなった。ユリエンネの涙は乾いて、快活な明かりで一杯になった。イドイーネの目は微光で満たされた。今日彼女の心は余りにしばしば動揺させられて、甘美な、敬虔な、高揚させる動揺で泣き出さないわけに行かなかったからである。あるときアルバーノが彼女を覗き込むと、彼女はこの世ならぬ輝きを帯びて、地球の背後で太陽が月に対してするように、リアーネが別世界から彼女の顔に光を投げかけ、地上の彼岸の神聖さでこの似姿を飾っているかのように思われた。

演説が終わると、アルバーノは静かに両女友達の許に行って、彼の妹の手を握り、暗い式典の終わりまで待つことのないよう頼んだ。彼女は慰められ、その気になった。彼らが教会から出ると、不思議な明るい月光が地上に、より気高い世界の甘美な朝の光のように広がっていた。ユリエンネは彼らに、壁の間に、つまり人々の目や言葉の牢獄の中に、喧

*1 つまりおめでとう。

騒の中に入って行く代わりに、むしろ先に明るい静かな一帯を眺めるように頼んだ。

皆が自分達の胸に快活な老人の神聖な世界を収めて、美しい自然の中に運び出した。

一 広大な天には小さな雲も小さな風も生ずることなく、星々のみが支配していて、地上の離れた地点は白い影の中へ消え、すべての山々が月の銀色の炎の中に立っていた。「貴方の快活な神聖なかの老人を私はとても愛しています」（とイドイーネはアルバーノに言った。そしてすでに何度かユリエンネの手を握っていた）

一 「何と気分がいいことでしょう。

一 人生も海の水と同じで、天に上昇しないうちは全くの真水とはならないものです」。

一 突然彼らの許に遠方の号角の音色が響いて来た。善意の農民がアルバーノの養育の家の前で挨拶代わりに吹いているものであった。「どうして」（とユリエンネは言った）「野外では、そして夜には、どんなに些細な音楽でも気に入ったもの、感動的なものになるのでしょうか」。

一 「ひょっとしたら私どもの内面がより明るく、より純粹に共鳴するからかもしれません」とイドイーネが言った。

一 「それに宇宙の天球の音楽の前では、人間的技芸も人間的素朴さも結局同等の大きさとなるからであろう」とアルバーノは付け加えた。「まさにそう思います。というのはそれは単に私どもの内部のみあるのですから」とイドイーネは言って、彼女の目の前で閉ざされた彼の目を、愛らしく率直に見た。あたかも今彼を、月が、太陽のこの穏やかな晩夏が、まぶしく照らし出しているかのような具合であった。

彼女は教会での式典以来よく彼の方を向いた。彼女の甘美な声はより震えたものとなったが、より関心のあるものとなっていた。リアーネとの類似に対する乙女らしい羞じらいは克服されたか忘れられたかのように見えた。最近の庭園でのかの夕べのような具合であった。彼女の中でシュペーナーの演説を聴いている最中、自分の実在が確固としたものになっていた。そして乙女の愛の許で、春の日のように一つの温かい夕方の雨によってすべての蕾が勢いよく花咲いた。今彼はこの澄んだ穏やかな目を雲のない純なる額の下で眺め、どの生に対しても上品な、無尽蔵の好意を発するこの口を眺めていると、この優しい百合には、朝焼けと朝の花々から昇って来たこの軽やかな香りには、人生を支配できる堅固な精神が宿っていること、それは優しい雲に、あるいは小さな小夜啼鳥の胸に高らかな一撃が宿っているようなものであるということがほとんど信じられない思いであった。

彼らは今や青春の思い出の常磐木によって覆われた明るい山の上に立っていた。そこでアルバーノはかつて未来の夢に微睡んでいたもので、二つの谷の影の海に挟まれた明るく高い島にいるような按配であった。彼の青春の日々の永遠の目標であった菩提樹リンデンシュタットの町リンデンシュタットの山々は、月光によって雪のようになっていて、星座がそれらの上で煌めきながら偉大に広がっていた。彼は今やイドイーネを見つめた。

一 この魂はいかに星々にふさわしいものか。

一 「世界が低俗な日々から浄化されて、

一 天がその最も神聖な最も遠方の恒星と共に地球を見つめるとき、

一 心と小夜啼鳥だけが語るとき、ただそのとき天に彼女の神聖な時が始まり、そのときに彼女の高貴な静かな精神は目撃され理解されることだろう、日中はただ彼女の魅力が理解されるのみだ」とアルバーノは考えた。

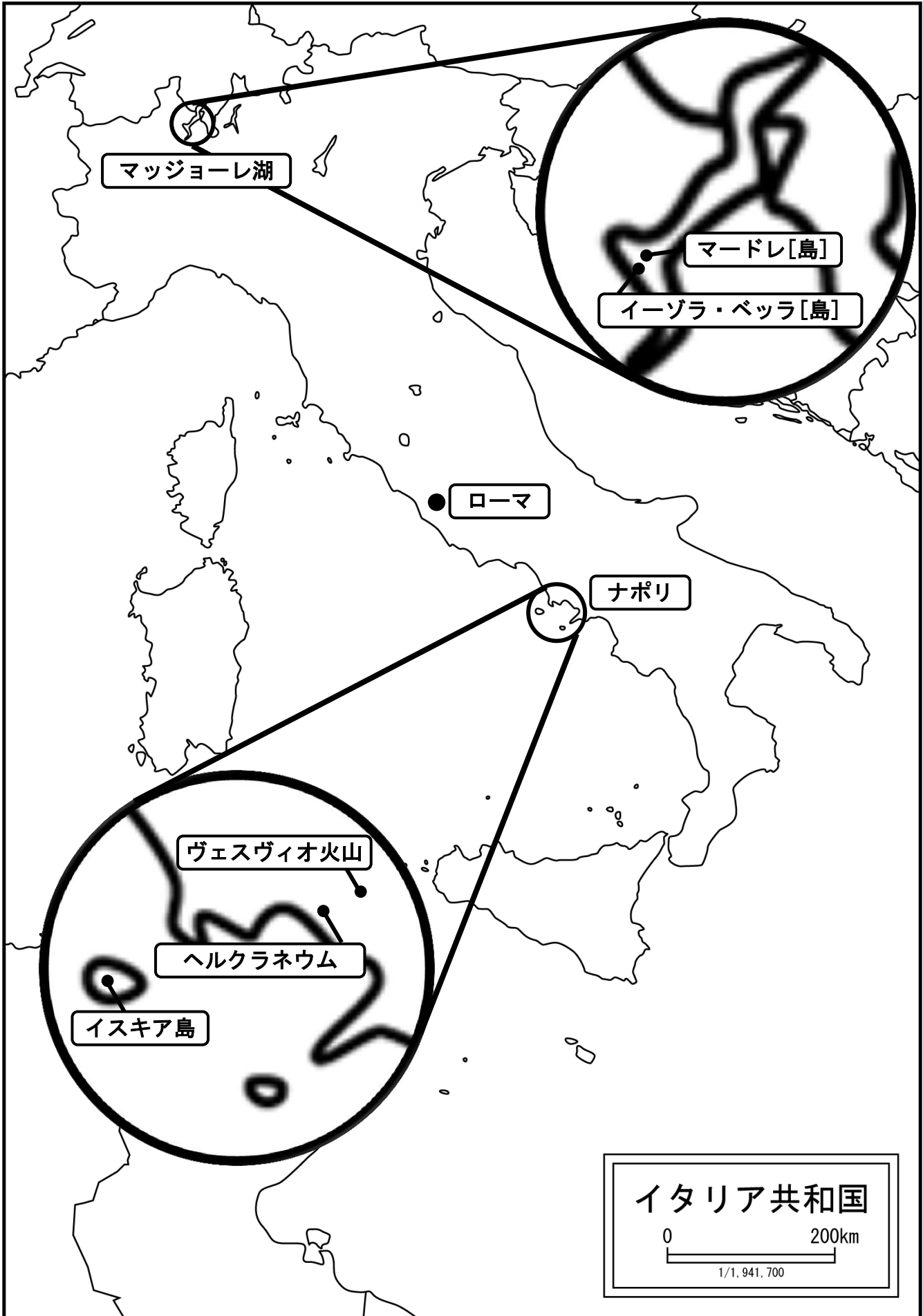
「何とたびたび、私のアルバーノ」（と妹は言った）「あなたはここであなたの過ぎた青春の年月にあなたの家族の山々を、あなたの隠された両親と兄妹の方を眺めたことでしょう。あなたはいつも善良な心を有していたのだから」。このときイドイーネは無意識に言いようもない愛を込めて、彼を見つめた。

一 そして彼の目は彼女の目を見つめた。

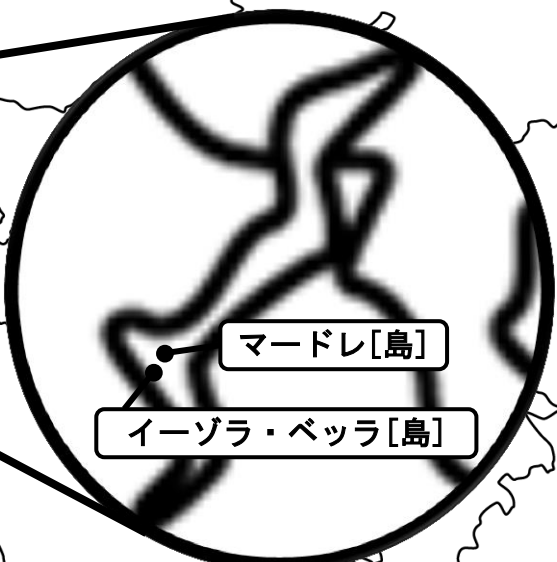
— 「イドイーネ」（と彼は言った。そして彼らの魂は互いを素早く明るくなる天を覗くように覗き込んで、彼は乙女の手を取った）「私はまだこの心を有しています。この心は不幸ですが、罪のないものです」。 — するとイドイーネは素早く、激しくユリエンネの胸に自らを隠して、ほとんど聞き取れない声で言った。「ユリエンネ、アルバーノが私のことをよく承知しているのであれば、私の妹になってください」。 —

「神聖な方、あなたのことは承知しています」とアルバーノは言って、妹と花嫁を一つの胸に抱き寄せた。 — そして皆がただ一つの喜びに酔った心となって泣いた。「御身ら、御両親」（と妹は祈った）「御身、神様。この兩人と私とを祝福し給え。変わることはないものでありますように」。そして彼女が天を見、愛し合う二人が最初の接吻という短く神聖なエリュシオンに住んでいたとき、無数の不滅の者達が、青く深い永遠から眺めていた。 — 遠方の音色と穏やかな光線とが互いに織り込み合っていた。 — 月の微睡みの帝国が鳴り響いた。 — 「美しい天を見上げて御覧なさい」（と喜びに酔った妹は愛し合う二人に呼びかけた）「永遠の平和の虹[銀河]が空に花咲いています。雷雨は過ぎ去り、世界は明るく緑色です。 — 目覚めてください、私の同胞^{ほらから}」。 —

(終わり)



マッジョーレ湖



マードレ[島]

イーゾラ・ベッラ[島]

ローマ

ナポリ



ヴェスヴィオ火山

ヘルクラネウム

イスキア島

イタリア共和国

0 200km

1/1,941,700

『巨人』はジャン・パウル（1763 - 1825）の代表作とされる。刊行は1800年から1803年にかけてであるが、準備期間は1792年12月31日から1802年12月6日とされる。日本ではすでに古見日嘉先生の訳で『巨人』として国書刊行会から1978年刊行されている。今から思えば、多分日本におけるドイツ文学の全盛期の頃の刊行であり、その後は学問の主流言語が英語となるにつれ、ドイツ文学はその内容にふさわしく小声の内緒の文学に落ちついて行った。客観的に見れば、凋落したのであろうが、この変化の激しい時代によく保った方であろう。私も一貫してジャン・パウルを翻訳研究してきたが、本にしても余り売れず、いつしか大学のリポジトリで公開することが唯一の生きがいになっていて、今回はめでたく長編小説『巨人』の公開である。

『巨人』を翻訳してまず感じたことは、ジャン・パウルにしては筋があり、割と面白いので、誰か漫画にして、『ベルサイユのばら』風にして、宝塚でも演じたら面白いことになりそうだ、『ドン・カルロス』を演出しているようだから、そのヒロインは同じシャルロッテ・フォン・カルプがモデルだから、気の利いた漫画家はいないものかという思いであった。

ネットでは何はともあれ、『巨人』の粗筋に対する要望が多いようなので、それを記すことにしよう。

イタリアのイーゾラ・ベッラ[島]（略図参照、恒吉泰行作製）で、若き伯爵アルバーノ・ドゥ・セサラ（1771年生まれ）は二十歳になるのを機に、父[実は仮の父]ガスパールに初めて面会することになっている。アルバーノは侯国建築士のディーアンと諧謔家の図書館司書ショッペ（『ジーベンケース』のライブゲーバー）と共にそこに赴き、父から、亡き母の、からくり機械の奥にしまわれた奇妙な遺書の存在について知らされる。その島でアルバーノは夜未来の恋人の姿を予見させる不思議な現象に出会う。その後アルバーノは講師アウグスティとショッペと共にホーエンフリース侯国の首都ペスティッツへ初見参する。それまでアルバーノは三歳のときまでイーゾラ・ベッラ[島]で育てられた後、侯国の東側の田舎ブルーメンビュールで地方総裁のヴェールフリッツの許でその娘のラベッテと共に牧歌的に育てられていたのであった。首都のペスティッツ（菩提樹の町）では幼時から憧れていた、大臣の子息ロケロールとその妹リアーネと親しくなる。リアーネは兄ロケロールが侯爵の葬儀の際無常を説く無情な言葉に傷付いて失明したことのある繊細な少女である。しかし宮中牧師のシュペーナーからアルバーノの素性が侯国の皇子であると知らされたリアーネはアルバーノへの思いを断念する。（アルバーノの亡き母とその亡きママ友と夫のガスパールは娘リンダとアルバーノの結婚を望んでいた）。一方ロケロールはアルバーノの義妹ラベッテを誘惑して棄てる。ロケロールは少年時仮装舞踏会でリンダに愛を迫って自殺未遂を起こしたことがあり、リンダの再登場を聞いて、ラベッテを棄てたのであった。このためにアルバーノとロケロールの友情は決裂する。リアーネは死の床にあって、今一度アルバーノとの別れを願う。彼女の死後、アルバーノは熱病に陥るが、ショッペがリンダに相談して、リアーネにそっくりの隣国ハールハールの侯爵令嬢イドイーネに、天使

のリアーネとして出現して貰い、その霊的出現でアルバーノを救う。父ガスパールはアルバーノをローマ旅行に連れ出す。ナポリ近郊のイスキア島で（略図参照）アルバーノは情熱的で自由思想家、黒い目の乙女リンダに出会う。昇天する僧がこの出会いを予告していたのであるが、アルバーノはリンダが幼少時イーゾラ・ベッラ[島]で三年間一緒に育てられた娘、ガスパールの実の娘であるとは知らない。実の双子の妹は侯爵令嬢ユリエンネであると知らされる。リンダはアルバーノを愛する。ホーエンフリースの現侯爵ルイーエの葬儀のためアルバーノらが帰国すると、そこではロケロールが『悲劇役者』という悲劇の上演を予告している。ロケロールは長いこと一方的にリンダを愛し続けていた。ロケロールは「アルバーノと声と同じで、リンダは夜盲症」という侯爵夫人イザベラのささやきを受け入れ、アルバーノの筆跡でリンダを誘い出し、夜陰にリンダを犯す。その翌日ロケロールはこの事件を舞台上で再現し、舞台上で本当にピストル自殺する。コーラスとして腹話術師の叔父による黒丸鴉の科白が入るものである。ロケロールの生涯は、子供の仮装舞踏会でリンダに対して愛を迫った「髭のないヴェルター事件」に始まり、田舎美人のラベッテに対する「詩と真実風事件」、最後の「ハムレット劇中劇事件」に至る一貫したロマン派の悲喜劇に彩られたものである。リンダは自分の錯覚をアルバーノに指摘され、ロケロールの未亡人として去る。時は 1792 年でアルバーノはフランス革命軍支援のために戦役に赴こうとしていた。ショッペはリンダの母親に恋したことがあり、アルバーノとリンダは兄妹ではないかと、一連の策謀の謎を解こうとする。半ば成功するのであるが、その途中精神病院に閉じ込められたりし、フィヒテ主義者として、自我追求の余り、親友の二重自我ジーベンケースに出会い、ショック死してしまう。アルバーノはショッペの見つけた亡き母の遺書の内容を知る。それによると、王位継承者のアルバーノを隣国の策謀から守るために、伯爵ガスパールの息子として育てることにしたというものである。ガスパールはその報酬として自分の娘リンダとアルバーノとの結婚を望んでおり、弟の奇術師[叔父]が兄の意向を汲んで、様々な不思議な予告をしていたのであった。ガスパールの夢は潰える。アルバーノはフランス援護の戦役は諦めて、小国の統治を引き受ける。花嫁は妹の侯爵令嬢ユリエンネの仲介による隣国ハールハールの侯爵令嬢イドイーネである。彼女は初恋のリアーネにそっくりで、しかし病的に彼岸を憧れる女性ではない。

翻訳して気付いたことは、1) そっくりさんの多いこと、2) 構成の対称性、3) 失明者、聾啞者の存在、4) 言葉の誤解の多さ、等々である。以下列举する。

1) そっくりさん

まず主人公アルバーノ、彼はとても美少年とされるが[拙訳、以下『巨人』訳の引用はすべてこの PDF 版、4 頁、398 頁等]、実は実の父親とそっくりで[202 頁注等]、そのため、侯国の首都ペスティッツへの侵入が禁じられているとされる[537 頁]。父親の若き肖像画は順次廃棄され、その葬儀では肖像画の絵は裏面を表にして収められている[144 頁]。またアルバーノ自身、イーゾラ・ベッラ[島]を訪れた際、父親の蠟人形を自分と錯覚して、処分している[442 頁、463 頁]。一時盲人となっていた侯爵の従者がアルバーノを亡き侯爵と見間違ふエピソードも披露されている[545 頁]。

アルバーノの母のママ友、リンダの母親もリンダに瓜二つとされる。そのためショッペ

のリンダの母娘に対する恋心が生じている[464 頁等]。

アルバーノとロケロールの声は同質とされ[123 頁、205 頁等]、これが後の誘惑の場面では利用される。

リアーネとイドイーネは瓜二つであり、まずイドイーネの姉イザベラの侯国への輿入れの際、リアーネはイドイーネの役を「夢の神殿」で行い、イザベラの婚礼に花を添える[284 頁]。リアーネの死後、アルバーノの高熱の懺悔を宥めるために、イドイーネはリアーネの幽霊役を演じ、アルバーノの良心を宥める[363 頁]。後に実際リアーネの墓塚に立っているイドイーネを、アルバーノは錯覚してリアーネとってしまう[524 頁]。

ショッペは元ライブグーバーとして、ジーベンケースと瓜二つで、これはジャン・パウルの世界ではお馴染みの二重自我のテーマである。「私は私に等しい」[530 頁]。

主人公アルバーノの小説の結論部分での感想は以下の通りである。「いつも、死者達が再び生き生きとなって歩き、覗く鏡を墓に来るたびに見いだすのは奇妙なことだ。かくて私はリアーネの墓では彼女の生き生きした像と木霊を見いだしたものだ。私の老いて寝ているショッペを私は、御承知のように、私の手は通らないけれども或る鏡面の背後にも、立っていて、動くのを見いだすことになった。請け合うけれども、私の両親さえも私には映し出されている。私の父を円筒の鏡の中に見てとれるし、私の母は対物レンズで見てとれる」[540 頁]。

ジャン・パウルはそもそも擬態の愛好者である。「というのは類似性、コピーの魅力とか、それどころか長所というものは、とても大きく、ある取るに足りない人物に似ているように見える者でさえ、我々にはただの叫び声の木霊のように、より好ましく思われるものである。それは単にこの場合、物真似の芸のように過去と不在とが、空想によって出現する現在となるからである」[137 頁]。これはアルキミムスを踏まえていて[107 頁]、彼の得意芸である。注釈を引くと、「いや私の本の情景は多分実際体験された情景であって、これ以上の情景を体験することは望めないであろうと、私に対し非難される筋合いはない。というのは空想を描写することで、現実には新たな魅力を得るからである。これはこの魅力でどんな別な退却した現在をも思い出が玄妙に微光を発するようにさせるものである。私はここで『巨人』で行動する人物自身の感受性を引き合いに出そう。その人は私の本の中で、一 仮にその本に出会っていたら、一 自分自身の情景であるその描かれた情景で、現実の魔術には見られないより高次の魔術を見いだすのではないか、そのより高次の魅力は、勿論、一 全く不当なことに、一 その人物が自らの生を、一 体験することを願うようにさせかねないものである、と」[143 頁]。アルキミムスについては、他に 385 頁に言及がある。またそっくりさんはプラウトゥスの *Menaechmi* で問題にされ、すでにジャン・パウルにとっては古代からの宿題でもある。「区別不可能な」*Menaechmi* については 107 頁、また「戦慄的」な問題として『美学入門』第二十八節を参照されたい。

ジャン・パウルは実体験よりも、執筆、体験の模写を優先させた作家である。「私は多くのことを描写してきた。しかし私はスイスを見ることなく、また海やその他のものを見ることなく、死ぬ。しかしいずれにせよ、永遠の海は見ることになる」と *Vita-Buch* の 1804 年の部分には記述されている。訳者は海辺に育ち、海の名が付いているので、この文は印象に残っているが、ジャン・パウルにしてみれば、イタリアに行かずにイタリアを描写することが、若干の誇りであったのかもしれない。ゲーテ、ヘルダーがイタリア詣

でをしている時代のことである。現代ならば、誰でもグーグル地図で風景の見物ができるから、紀行記も書かずに旅行しては、グーグル地図での旅行と余り径庭はないことになる。旅行していない人の文、海も知らない人の文を訳して、どこが面白いかということになるかもしれない。ジャン・パウルで面白いのは、一般的な旅行等の見聞の他に、描写している作家の息遣い、思いが直に感じられて、一緒にとにかく迷って生きている錯覚が生ずる点にある。絶えず無常迅速と称えながら、無常に対して不滅の模写を目指しているようなものである。主人公アルバーノが目標にするのは、描写ではなく、行為である。「行為は人生だ」[385 頁]。「しかし言葉はショッペが言うように、行動に比べれば、ヘラクレスの棍棒の鋸屑にすぎません」[423 頁]。それでジャン・パウルに馴染むと、その発言が容易に反対に理解されるという側面があって、訳者の賛成意見は容易に反対意見と、反対意見は賛成意見と見なされてきた苦い思い出がある。

鏡像、反射的模写ということは、作品の対称的、あるいは対照的構成方法を思わせる。

2) 対称性

a) 作品のタイトル等に関して

『巨人』Titan はアクセントが前の場合と後の場合では意味が微妙に違うらしい。太陽神の場合、ベーレントによると、第一音節にあり、反逆神の場合、第二音節で、ジャン・パウルは両義性を保っているそうである。「『巨人』は本来反・巨人の謂である」(ベーレント版八巻、序文X X VII)。論者によっては憂鬱の土星の惑星 Titan と関連付ける人もおり、私は根拠を知らないが、タイタニック号と関連付けた人も知っている。マーラーの『巨人』の初期の命名はジャン・パウルの影響であろう。

作中ではリンダのことをユリエンネが Titanide[巨人族の女、198 頁、他に 450 頁参照]と呼んでいるが、ベーレントの注[ベーレント版八巻、354 頁]によると、ジャン・パウルは 1798 年末、シャルロッテ・フォン・カルプを手紙の中でそう呼んでいるそうである。

主人公の名前アルバーノは潔白を暗示し、セサラは Caesar カエサルのアナグラムであろう。[65 頁、ベーレントの注釈等参照]。ジャン・パウルにしては気宇壮大である。

またベーレントの注釈によると、「銀河」が象徴的に作品構成の上で使用されている。リアーネからイドイーネへのバトンタッチである。「アルバーノは震えながらリアーネの花の唇を、ヨハネがキリストを接吻したように接吻した。そして重たい銀河が[鉍脈の]占い棒のように下のこちらの彼の黄金の幸福の方に弧を描いた」[第二巻の結末部分、229 頁]。<「美しい天を見上げて御覧なさい」(と喜びに酔った妹は愛し合う二人に呼びかけた)「永遠の平和の虹[銀河]が空に花咲いています。雷雨は過ぎ去り、世界は明るく緑色です」>[第四巻結末部分、551 頁]。一方リンダもショッペにとっては「天のジャンヌ・ダルク」[341 頁]であって、これは虹の響きがあり、更には銀河につながるものであろう。それにリンダはアルバーノとユリエンネと一緒にナポリ湾で白昼、虹を見ている[433 頁]。

主人公は追悼している。「彼らは無限の銀河と空想の虹とを彼らの手の弓として使おうと欲しながら、その上に一つの弦も引くことができなかつたのであつた」[545 頁]。

b) 性愛に関して

ジャン・パウルでは当時の市民の倫理を反映していて、夫婦生活以外のセックスの代償はほとんど死である。そのためロケロールはリンダ誘惑の代償として自殺を選んでいる。

しかし主人公のアルバーノに到達するためには、女性の側でも死を代償としていることが分かる。リアーネは死して、その代わりにリンダはロケロールで消され、リアーネの再生としてイドイーネが生じている。

盲目のリアーネに対するブヴェロの誘惑の場面は、ロケロールによるリンダ誘惑の陰画である。夜盲症のリンダの代わりに盲目のリアーネがいて、そのリアーネに対してブヴェロは細密画を描くという盗視を行っており、最後にはアルバーノの声を模して、リアーネに迫っている[308 頁等]。

侯爵夫人のイザベラはリアーネの父、大臣のフルレを誘惑して、ベッドに近寄せ、最後にそれは誤解と手玉に取っている[334 頁]。一方、侯爵夫人が純真になってアルバーノに近づくも、アルバーノの誤解によって、夫人はアルバーノの父、ガスパールへ導かれるという不本意な結末になっている[397 頁]。大臣フルレは騙された詐欺師というわけであるが、侯爵夫人も騙された詐欺師にされているわけである。ちなみに侯爵夫人の名前はイザベラであるが、アルバーノの生誕の地イーゾラ・ベッラ[島]との類似の響きで解釈する論者もいる。Volker Kohlheim : Literarische Onomastik und Psychoanalyse: Eine Fallstudie. またイーゾラ・ベッラ[島]はルソーの『告白』でも言及があり、イスキア島はアンナ・アマーリアの旅行地としてドイツでは有名ならしい。[ベーレントの序文参照八巻、XXIII、LXXIV]。

c) 自然現象に関して

アルバーノとリアーネは同じ日に聖餐式を受けるが、激しい雷雨に見舞われる[76 頁]。

リアーネがアルバーノを諦めて、手紙を返却する場面では、自然が呼応して、日食が生ずる。リアーネは同時に盲目となる[298 頁]。

アルバーノが初めてローマを見るとき、地震が生ずる[375 頁]。アルバーノが初めてイスキア島でリンダに出会うとき、ヴェスヴィオ火山によると見られる地震が生ずる[411 頁]。

ロケロール自殺の劇では、最後の自殺の場面で雷雨に見舞われる。その後は月明かりとなる[499 頁]。

南のイタリアと北のドイツの比較もよくなされている。

リンダの言葉。「美しい一帯の批評はやはり北方の性質ですね。その一帯をただ本から知っているだけです。その一帯を有するイタリア人はその一帯を健康同様に享受していて、欠けるときに自覚するに過ぎません。だから偉大な風景画家にすんなれないのです」[445 頁]

南のイタリアは「愛」の国。北のドイツは「勤勉」の国。

ディーアンの言。「誰がイタリアを愛なしに脱出できましょう」[422 頁]。

リンダの言。「これはまたドイツ人ですね。いつもただまことに勤勉です」[437 頁]

「さえずる小鳥はイタリアでは稀である。食用に市場で売りに出されるからである」[445 頁注]という注釈も面白い。ドイツでは小鳥の鳴き声が印象的だった気がする。

d) ヒロインの容姿に関して

リアーネは白い服が勝負服[137 頁、211 頁等]で、リンダは赤い服[408 頁等]が勝負服、どちらの女性も黒い絹の服の場合がある[リアーネ、123 頁、リンダ、361 頁]。イドイーネの好みの「白い服」[284 頁]を着て、リアーネは夢の神殿に現れる。リアーネ、イドイーネは青い目[114 頁、471 頁等]、リンダは黒い目[177 頁等]である。リアーネについては、白鳥[139 頁]、百合[155 頁]、白い鈴蘭[212 頁]の比喩がなされる。画ではラファエロの「小椅子の聖母」[210 頁]である。リアーネ臨終の場面では、ヴェールを被ったリンダとイドイーネが、先の展開は知らずに、見守っている[358 頁]。

侯爵ルイージは新郎服と揶揄され[278 頁]、侯爵夫人はローマの旅では「彼女が好んで着ていたけばけばしい色合いは、イタリア式色合いでもっとけばけばしくなっていたのである」[373 頁]。

結末でのショッペの赤い外套とジーベンケースの緑の外套も視覚的に対照的に描かれている[523 頁]。

e) 動物に関して

聖書の人物に関して、動物のシンボルをジャン・パウルは次のように論じている。キリスト教界では常識かもしれない。

「夫人のアルビーネ・フォン・ヴェールフリッツはすべてを厳粛に誓った。彼女は自分を福音史家のマルコとヨハネとに同等視できた。自分の激しい夫はこの両者の同等の動物、百獣の王たる獅子[マルコの同伴]と鷲[ヨハネの同伴]とをよく代弁していたからである。丁度他の多くの妻がその同伴の観点でルカ[同伴するのは雄牛]と、私の妻はマタイ[同伴するのは天使]と同等視するであろうようなものである」[45 頁]。

リンダは蛇を抱いた姿で、少女時代のイメージが紹介されている[177 頁]。またイスキア島の少女アーガタも冷やすためと称して蛇を手に持っている[433 頁]。クレオパトラのイメージがあるのであろうが[177 頁]、かなり不気味である。また蛇は普通に性愛をイメージさせるが、アルバーノの見る夢では、フロイト以前でありながら、フロイトを喜ばせるような夢の描写がある。「するとアルバーノは叫んだ。私はすべての私の涙を流して、水柱を膨張させて、おまえ、美しい目に届くようにさせよう、と」[29 頁]。

侯爵夫人のペットは手長猿のギボンである。これはロケロル誘惑の夜、ロケロルに殺されている。[279 頁、486 頁等]。

諧謔家のショッペは犬モルディアンと一緒にいる。これは旅の途次、自我殿がショッペの前に現れるのを防ぐ役目も持たされている[519 頁等]。

腹話術師の叔父は「黒丸鴉」を連れており、この鴉がロケロルの劇中劇を印象的なものになっている[485 頁]。

動物とは関係ないが、ロケロルは飲酒癖がある。<「肉体によって私は自分をまさに肉体から解放している、例えばワインによって血から解放している」>[238-9 頁]。劇中劇では本当に飲んでいる。<「よろしい、汝が空になったら、私も空になる」と彼は瓶を示した>[498 頁]。ちなみに、「騎士[ガスパール]は飲酒を嫌い、音楽を避けていた。これらは双方とも軟弱にするからであった」[同]。

f) 音楽に関して[絵画との対称性、ヘルダーの比較論、139 頁]

タルタルスには骸骨の手に風奏琴があるとされ、タルタルス全体かなり陰鬱な趣味である[164 頁]。アルバーノの一時住む雷の庵にも風奏琴がある[225 頁等]。ジャン・パウル自身ヴァイマルでは窓辺に風奏琴を有していたらしい[ベーレント版、八巻、379 頁の注]。フルートの谷のフルートも奏者はいない機械仕掛けなのであろう[140 頁]。リアーネの弾くグラス・ハルモニカは「1800 年ごろ流行したが、神経をいためる危険があるため、禁止された」と初めの部分の古見訳『巨人』の注釈にある[ジャン・パウル自身の注釈もある。103 頁の原注参照]。これも音楽史的に興味深い。

主人公アルバーノは養父の誕生日、エスターライン製のピアノを贈られている。義父にピアノシモだぞと怒鳴られながら、練習に励む[64 頁]。成長してから、アルバーノはリアーネの女性用ピアノで即興的に情熱的な演奏をする[185 頁]。ロケロールもピアノは達人である[248 頁等]。

ローマで主人公アルバーノが侯爵夫人と聞くオペラはモーツァルトの『ティート帝の慈愛』である[393 頁]。

ラベッテは無理にロケロールによって歌わされている。「哀れなラベッテは頼りない声で懸命に恋人のために従順という謙虚な犠牲を払っていたのであった」[251 頁]。他に船乗りの歌[9 頁、218 頁等、ゴンドラの歌 420 頁]、ディーアンとアルバーノのギターと歌[445 頁]。

ロケロールはイドイーネのアルカディアでアルプホルンと一緒に夕方歌を歌っている。「喜び、給え、この生を」という歌であり、そもそもアルカディアという名称が死を想わせる上に、この場面は「木霊と月光と墓地」の組み合わせである[473 頁]。「命短し、恋せよ乙女」か。

リンダはロケロールに誘惑される場面では、「小声で子供時代からの古いスペインの歌を歌っていた」[486 頁]。

ロケロールが劇中劇で引用するのは『ドン・ジョヴァンニ』の「永遠の序曲」である[493 頁、他に 288 頁、497 頁]。

またこれはサボテンであるが、「夜の女王」[182 頁等]と訳せる花の観賞がなされている。『魔笛』についての言及はある[343 頁]。

葬儀の教会の歌声、「何故かくも穏やかに安らうか」[548 頁]。

g) 絵画に関して

リアーネはスケッチの名手とされ[313 頁]、父大臣の絵画の素養に臨時講師となっている[273 頁等]。宮廷の絵画の趣味等が紹介されている。ラファエロ派の三作[210 頁]や、[いずれもドレスデンにある]ラファエロの「サン・シストの聖母」[52 頁]やジョルジョーネの『眠れるヴィーナス』等、イタリアが憧れの地であることが分かる。ヌードの絵にはカーテンがあったようである[96 頁]。若いアルバーノは性的な絵に反撥している[同]。侯爵夫人はこう言っている。「ドレスデンの屋内画廊で私は本当に、楽しいイタリアにいるようだと思いました」[279 頁]。当時発掘されたヘルクラネウムに関する画集も話題になっている[312 頁]。ベーレントの注によると *Gottlieb von Murr* の八巻本のフォリオ判が

1777-99 年出版されたいらしい。イーゾラ・ベッラ[島]には「テンペスタ」の絵がある[13 頁]。ブヴェロの細密画描きの場面も構成場面の一つとなっている[308 頁以降]。ショッペはライブゲーバー同様影絵切りが本職である[342、463 頁等]。彼はリンダの母親の絵を描いているし[同]、リンダの肖像画も描いている[464 頁等]。くしゃみする自画像はなかなか洒落た発想である[342、362、416 頁]。なおロケロールをヘルクラネウムで発見された装飾模様とロココの貝状装飾のロカイユと関連付けてその美学を論ずる論者もいる。これについてはリポジトリでの拙訳『翻訳・ジャン・パウル論考』の Pfothenauer 教授の論考を参照されたい。また風景画家のクロード・ロランに関して、ジャン・パウルではよく人物を描かない大家として援用されている[192 頁]。

「ディーアンはイタリアに派遣され、皇太子のために古代の模造品を手に入れることになっていた」[25 頁]。このディーアンは侯国建築士であり、建築面でもローマが先進国であったことが分かる。聖ピエトロ大寺院、パンテオン、コロッセウムの見物はやはり先進国らしいが、しかしコロッセウムが宮殿の石として利用されたとか[383 頁の訳注]、大方土砂に埋まってカンポ・ヴァッチーノ[牛の放牧場、古代フォルム]になっていたと聞く[376 頁]、歴史の停滞も思わざるを得ない。

3) 盲人、聾啞者

盲目の少女は最初、牧歌的なアルバーノの少年時代、遊び相手となっている[48 頁]。まずは盲目の経験のあるリアーネと会っている[235 頁]。この少女は、ロケロールがラベッテを誘惑する際、一緒に途中までラベッテに付き従っている[318 頁]。当時の慣習では女性は必ず連れ立っていなければならないからである。しかしロケロールがラベッテを犯す時には、はぐれている。この盲目の女性は帰る際、リアーネの態度に消沈しているアルバーノと出会っている。アルバーノに道を尋ねているのである[前の頁、288 頁]。

この盲目の少女は、ロケロールがリンダを誘惑する際も、リンダに従って来ている[486 頁]。しかし盲目のため、監視の役には立たない。この盲目の女性はアレゴリー的には「恋は盲目、アモールの目隠し[94 頁]」を意味しているのかもしれない。

リアーネがアルバーノに手紙を返す場面では、子供のポルックスが啞者を連れてきていて、この者の鐘の音を盲目のリアーネは葬礼の鐘の音と勘違いしている[299 頁]。なお啞用の小鐘については、[110、158、346 頁]参照。

4) 言葉の誤解、遊びも多い。

これは普通には「おやじギャグ」の範疇であろうが、ジャン・パウルの的には異名同音性の転調と言えるものかもしれない[44 頁、185 頁]。リアーネで作者は植物をまず思い出ししており[32 頁、442 頁]、「夜の女王」にはすでに触れた。手長猿の名前は歴史学者、ギボンである[279 頁]。医師スフェックスの子供の名前は有名な医師とされる Van Swieten, Boerhaave, Galenus である[99 頁]。作中人物も「アルカディア」の地名には戸惑っている[303 頁]。スフィンクスという蛾の言及もある[191 頁]。

ロケロールとアルバーノの決闘の際、ショッペの「妹だ、アルバーノ」[325 頁]という言葉、アルバーノはラベッテの意ではなく、リアーネの意味、カールの妹の意味に解して

いる。

リアーネは「あの方が苦しまないように」と母に言って、「あの方」を母は父親と解し、アルバーノとは解していない[268 頁]。 / アルバーノの「噴水だ」の言へのリアーネの勘違い[199 頁]。

アルバーノの「父上、 ー 母親です」[397 頁]の言葉は、期待していた侯爵夫人を激昂させる。

くリアーネが不幸なことにこう発した。「美しいアルバーニ」。 ー 「私はそうは思いません」（とラベツテが小声で言った）「兄はこの祈っているヨゼフよりもはるかに美しいわ」。 ー 彼女はアルバーニとアルバーノを混同していた>[210 頁]。

リンダがロケロールに騙された後、無邪気にアルバーノに言う。<「そうなってください、愛しい方、リラルではそうではなかったですからね」と彼女は言った。彼はそれをリアーネに対する嵐と解した>[491 頁]。

誤解を招く書き方。「あるとき夕方まだある森の丘の下にいるとき、上から歩み寄って来る狼を見つけた。 ー 狼は彼を見て、飛んで彼の許に降りて来て、ショッペの狼獾の犬と分かった」[504 頁]。 / 大臣の帰宅の馬車かと思われた馬車は錯覚と分かる[214 頁]。 / ロケロールのことを知らないリンダの手紙を読んだアルバーノの反応。<彼は「変えて」に笑ってしまった。「むしろ凍った涙だ」と彼は言った>[501 頁]。異様な笑いである。

手長猿とロケロールの混同。<「不当なことだ」（とその中の一人が言った）「奴はどんな家畜も同様に皮剥場がふさわしい」。アルバーノが目をやると、覆われた死骸を見て、戦慄しながら、自殺者かもしれないと思った>[501 頁]。

葬列をいつもは透視で予言する女性が描写されている。しかし彼女も錯覚に陥る。「外で彼は老いた死者透視の女がブルーメンビュールの道に立っているのを目にした。彼はかつて禿頭に同行していたとき、彼女に出会ったことがあった。彼女が凝然として上の照らされた葬送の馬車を見送っていて、現実を覗いているのに、夢を見ていて、未来を見ていると信じていた」[545 頁]。ショッペが精神病院長を狂っていると描写する手法も同じような転倒の手法であろう」[515 頁]。

ロケロールは劇中劇での科白の練習に黒丸鴉に告げている。「人生には錯覚があれど、舞台にはない」[485 頁]と。確かにリンダの錯覚によってリンダをロケロールに奪われるものの、結局主人公はリアーネとイドイーネを混同することによって病気から救われ、リンダが去ってからは、人生の伴侶も得て、夢の錯覚ではない現実の錯覚により、救われているわけである。現実が小説より奇なりというけれども、この小説も本となっていて、現実の一部となっているのであれば、この奇妙な小説よりも現実が奇妙であることは、理の当然

であろう。

5) ショッペについて

諧謔家ショッペの言説は翻訳の際、苦勞した。いずれも自由な魂を予感させるものである。部分的に紹介しておく。

「彼は野外でもこの命題のままであった。彼はマティソン[Matthisson(1761-1831)]が旅行記の注釈として次のように告げていることを非難して引用した。つまり人々はスイスの現今のアヴェンシュで、即ちローマ人によって潰されたヘルヴェティアの首都アヴェンティクムの所々で、草のより薄い痕跡を見て、通りと市壁の略図を見いだすことができるとマティソンは述べているが、しかし明らかに過去の同じ立体図的な投影は至る所この野原でも見られるものであろう。 — どの山も洪水にあった先の世の岸辺であり、 — どの地もこの世では六千年前からのもので遺物であり、 — すべてが地球の墓地であり、廢墟である、 — 特に地球そのものがそうである、と」[302-3頁]。

ショッペは自由な人間で、喪の黒色という思い込みを否認し、様々な黒色の意味を紹介している[146頁]。またアルバーノの教育掛りであるが、教育は世紀、人類が行うという立場であり、「百万の人間であって、一人の人間ではない」[343頁]、先入観の排除が彼の立場である。ローマへ彼は行かないが、古典古代へのコンプレックスがないことの表明かもしれない。しかしすでに訪ねてはいる[14頁]。どの地も地球と同じ歴史を有するという見解の表明は面白い。しかし同じ日本でも、奈良や京都辺りが埋蔵遺跡は多いような気がする。

6) 処世術と復讐の女神

『巨人』は、昔のドイツの侯爵の子息の話で、現代の日本人には余りインパクトはないかもしれないが、しかし自分の出生が不明という問題は、例えば日本の現代小説では、『火車』における戸籍すり替えに近いものでり、サスペンス感のあるものである。その上、恋人にまで、本人が取り違えられたら、存在の根が引き抜かれたも同然であろう。すでに抜かれる以前に予感の如くそのような感覚に主人公は襲われている。

「千もの手が花々の木の庭園を逆さにして、その黒い陰気な根の藪を天に梢のように起こしていた」[467頁]。

そもそもジャン・パウルは生まれたばかりの赤ん坊が、それでもすでに知恵を得ていて「ここはどこ、私は誰」と叫んでいるような作家であるが、それでも作家生活を送って、妻子を養っていくためには、世俗の理解を得なければならない。哲学と金のバランスを考えなければならない。世間知と「第二世界」、「復讐の女神」との折り合いが常に問題となる。具体的には232頁や233頁の注釈が参考になろう。

ともあれ、作者は「復讐の女神」を刺激しないようにしている。

「彼らはすべての神々の祭壇に犠牲を捧げるもので、真っ先に復讐の女神の祭壇に犠牲を捧げるものである」[83頁]。運命の女神に遠慮しつつの小説ということになる。「運命を必要としない」というのは危険な考えとされる[230頁]。

また作者は読者に安定感を与え、根付かせてもいる。

「一体我々の存在の天は、我々の上の青空のように、近くの微小な中では単に透明な無にすぎず、遠く離れて、大きくなって初めて青いエーテルとなるもので構成されているものだろうか。世紀は汝の歓喜の花々の種を単に各瞬間ごとの多孔性の播種機からのみ撒くのであろう。あるいはむしろ至福の永遠そのものが瞬間より他の取っ手は有しないのであろう。人生は七十年から成り立っているのではなく、七十年が吹き続ける一つの人生から成り立っているのである。人々はいつでも十分に生きてきたのであり、その気になったとき、死ねばいいのである」[12 頁]。

第二世界との折り合いがいいという幻想もときにはある。「人生の日常の日々の間には、
一 それらの日々には自然の虹は我々にとって単に砕かれて、不格好な多彩な塊として地平線上に現れるものであるが、
一 時に数日創造の日々があつて、そのときには自然は美しい形姿に丸まって、まとまり、いやそのときには自然が生き生きとしてきて、一つの魂のように我々に語りかけるものである。今日アルバーノはこの日を初めて有した」[216 頁]。他に「両世界、地上世界と精神的世界が互いに間近に触れ合つて、地上の昼と天上の夜とが薄明の中で接触する瞬間があるものである」[370 頁]。

<「真面目な活動は、私の言葉を信じてください、結局いつも人生と和解するものです」とイドイーネは言った>[525 頁]。

ジーベンケースの言。<「いや、ラープゲーバーよ、ライプゲーバーよ。『時』は優しい、小さな波を有している。しかし最後にはどんな角張った鋭い小石もその中で滑らかに、鈍くなるものだ」。
一>[532 頁]。

普通に、日常は如何なるものか。先は分からないということである。

<ようやく彼は菩提樹^{リンデンシユタツト}の町の前の、庭園を通つて行く家の前に立った。前年もその町の前の高台に立っていて、未来の雲の並びを見ながら、その愛が何を形成するか、アウローラかそれとも夕方の雷雨か察知できないでいたのであった>[448 頁]。

<これが人生であり、これが幸運である。それは戯れる月のように上弦と下弦から成り立っていて、ゆっくりと増大し、ゆっくりと減少する。
一 その希望の点でも、その恐怖の点でも。
一 短い閃光が最も内奥の歓喜の満月であり、須臾の不可視化は最も内奥の荒涼の新月である。
一 そしていつも軽快な戯れは月のようにその循環を新たに始める>[434 頁]。

以上は循環的、安定した謙虚な人生観であり、先は分からないという一定の安定した人生観である。しかし両義的な『巨人』である。この『巨人』では、登場人物が敢えて、反逆神となるわけである。彼らは運命、悲劇の顔を覗こうとしているように見える。事実ロケロールの場合、「復讐の女神の仮面」への言及がある[487 頁、489 頁]。ただ近世の小説で

はそう簡単には行かない。

「しかしシェークスピアにはソフォクレスも含まれていますが、ソフォクレスにはシェークスピアはありません」[382 頁]。これはアルバーノの言で聖ピエトロ大寺院とパンテオンを比較した言葉であるが、別に単純化して言えば、シェークスピアには悲劇と喜劇があるが、ソフォクレスには喜劇はない、ということにもなる。

しかし稀であるが、ソフォクレスのように運命を読み込んだような、古代風な、神託的調子が感じられる箇所がある。コメレルが読み込んでいる『巨人』の悲劇的調子なのかもしれない。勿論ロケロルの劇中劇における黒丸鴉のコーラスは明瞭に悲劇的である。次の文の後半部分は、ベーレントの注によるとその意図があまり明瞭でない叙事史的予期的叙述法[Prolepse]ということであるが、訳者には悲劇風なものに思える。

「ブルーメンビュールではラベツテが一人っきりの片隅で、震える腕で強引に揉み手をしていて、石灰の壁に息を吹きかけて、赤い涙目を流し去ろうとしていた。ー リラールからは陰気にアルバーノがやって来て、人々の代わりに大地を見つめて、天文台で熱心に天を見つめ、友を求めていなかった。ー ロケロルは馬と騎士を集めて、国外で陽気な酩酊の夕べに取りかかっていた。ー アウグスティはスペインからの手紙に頭を振って、うんざりしながらも深く思案していた。ー リアーネは安楽椅子にもたれていて、両肩に降りかかってくる視線に碎かれていたが、そこでは無垢しか花咲いていなかった。

ー 父親は赤く褐色になってあちこち歩き、彼女はただ弱い返事をして、時々組み合わせた両手を少し上げた。ー 雲の上の夜の精神の前では、人間の時は素早く、嘴と尾のない飛び去って行く対の翼として過ぎて行く。この精神は遠くの週を傍らに有しており、その時アルバーノは夜、天文台で目撃することになる、つまりブルーメンビュールの教会で祭壇の蠟燭が点され、リアーネがその中で両手を上げて跪き、一人の老人が自分の両手を彼女の快活な、輝かしい額に置き、その彼女の額は涙のない目で天に向けられるのを目撃することになるのである。

精神は月々の中をより深く覗き込み、喜びの余り自己回転して、人間達のすべての周囲に見られる居住地、行楽地についてにやりと笑う。しばしば精神はそのむき出しの地獄の歯の周りで高笑いする。ただ時折その歯を唇の下に隠して歯ざしりする」[289 頁]。

7) アルバーノの悟り

くユリエンネは言った。「兄上が二人のとても空想的な人達、こうしたショッペとロケロルの間にいて、ー 自らそのような者にならなかったのはただ奇蹟ですよ」>[417 頁]。極端を排し、中道を行くのが、仏教徒の道とすれば、主人公アルバーノは仏の道に適っているように見える。彼は結末で立派な言葉を述べている。<「人間を頼りにせず、私の中の、そして私の上の神を頼りにするということだ。見知らぬ木蔭は我々の周りを這って、我々の許を昇り、二番目の梢として我々の梢の隣に立つが、それはそのことで枯れてしまう。精霊は互いに並んで育つべきで、上下に重なって育つべきではない。我々は神のように不滅の者達として、無常の者達を愛すべきなのだ」。ー>[511 頁]

8) その他

翻訳に当たっては「ハンザー版」を基本とし、「ベーレント版」やオン・ライン上の Charles T. Brooks の英訳を参照しつつ、訳していった。その後、ワープロ化するとき、古見日嘉先生の訳を参照していった。大体ボールペン訳に 2018 年の 1 月から八ヵ月、ワープロ化に四ヵ月、校正に一ヵ月要した。紙の本にしたいという思いもなかったが、売れ行きや本の重さのことを考えると、特にすでに立派な古見日嘉訳が存在すること、更に検索の便利さ等を考えると、PDF-ファイルが最良という結論になった。この解説も瞬時の検索のお蔭である。イタリア旅行中や、ナポリの姉妹都市、わが古里のヴェスヴィオならぬ桜島への旅行中、スマホで写真でも撮りながら、この翻訳を数行でも読んで頂ければ、無上の喜びである。Projekt Gutenberg の利用者にとって、古典ならば無料で読めて当たり前であろう。(2019 年 1 月)

なおハンザー版ではジャン・パウルが参考にしたイタリア旅行記を注釈に上げている。研究者の利便性のために一応写しておく。訳注はほとんどハンザー版、ベーレント版を参考にしている。

J.G.Keyßler:Neueste Reisen durch Teutschland, Böhmen, Ungarn, die Schweiz, Italien und Lothringen. 2 Bde., Hannover. 1740.

J.J.Volkmann:Historisch-kritische Nachrichten von Italien, welche eine Beschreibung dieses Landes, der Sitten, Regierungsform, Handlung, des Zustandes der Wissenschaften und Besonderheit der Werke der Kunst enthalten. 3 Bde., Leipzig 1770/71.

Fr. Leop. Graf zu Stolberg:Reise in Deutschland, der Schweiz, Italien und Sizilien in den Jahren 1791 und 1792. 4 Bde. Königsberg und Leipzig.1794.

M. Fr. Münter:Nachrichten von Neapel und Sizilien, auf einer Reise in den Jahren 1785 und 1786 gesammelt.(Aus dem Dänischen übersetzt 1790)

H.A.O.Reichard:Handbuch für Reisende aus allen Ständen etc. 2. Aufl. Leipzig 1793.